

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (61)

南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

きた やま
北山遺跡 2

(阿久根市山下)

2025年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡西側から紫尾山地を望む

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道(阿久根川内道路)建設に伴って、令和2年度から令和5年度にかけて実施した阿久根市山下に所在する北山遺跡の発掘調査の記録です。

北山遺跡は、縄文時代早期から晩期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構や遺物が発見され、各時代の人々の活動の場として使われてきたことがわかりました。

縄文時代早期では、土坑・集石などを伴う生活の跡が土器・石器とともに発見されました。鹿児島県で多く出土する土器だけでなく、他地域の特徴をもつ土器も見られることから、当時から広いエリアとの交流が盛んであった様子がうかがえます。中世では、この地を治めていた阿久根氏に関連すると考えられる遺構・遺物が多く発見されました。海外との交流の様子もうかがえ、中世の人や物の活発な動きを検討する上で貴重な資料となりました。また、中世末から近世にかけて製鉄を行っていたと考えられる遺構・遺物が発見されています。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解いただくとともに、今後の研究の一助となれば幸いです。

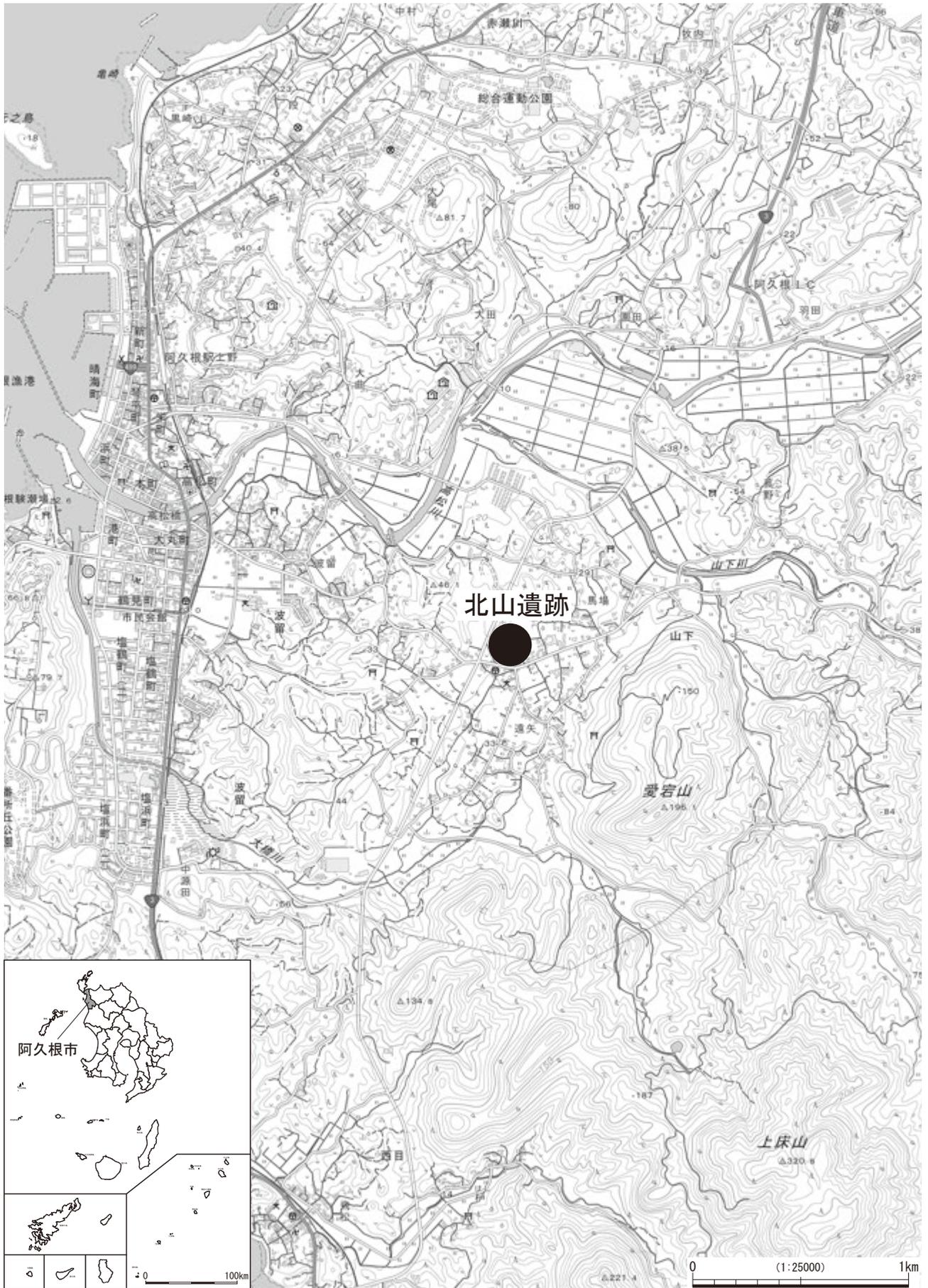
最後に、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、阿久根市教育委員会等の関係各機関並びに御指導をいただきました先生方、発掘作業、整理作業に従事された方々、遺跡の所在する阿久根市山下の皆様には厚く御礼を申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 寺原 徹

報告書抄録

ふりがな	きたやまいせき2							
書名	北山遺跡2							
副書名	南九州西回り自動車道(阿久根川内道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第61集							
編著者名	辻 明啓 山川 正樹 上床 真							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574							
発行年月	2025年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
	かごしまけん 鹿児島県 あくねし 阿久根市 やました 山下山 あざ 字 きたやま 北山	46206	206-34	32° 00' 39"	130° 12' 47"	分布調査 2017. 12. 11 試掘調査 2018. 7. 27 確認調査 2019. 12. 2~12. 25 2020. 9. 1~9. 28 2021. 5. 18~6. 11 本調査 2020. 10. 1~2021. 1. 27 2021. 5. 10~2021. 7. 28 2021. 10. 4~2022. 1. 28 2022. 5. 11~2023. 1. 27 2023. 9. 1~2023. 12. 27	3, 121 4, 481 11, 549 9, 327 2, 530	南九州西回り 自動車道 (阿久根川内道 路)建設に伴う 記録保存調査
きたやまいせき 北山遺跡	種別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
	散布地	縄文時代	集石5基 土坑1基 落とし穴2基		加葉山式、小牧3A、吉田式、別府原式、政所式、中原1類、中原2類、中原5類、壺ノ神B式、その他早期土器、春日式、阿高系(南福寺式含む)、西平式、その他後晩期土器 石鏃、スクレーパー、石錐、二次加工のある剥片、石核、打製石斧、磨製石斧、石皿、台石、砥石、石鏝、敲石、磨敲石、磨石、凹石、軽石製品、その他石製品		—	
		古墳時代	—		東原式土器(甕、壺、高坏)等		—	
		古代	—		土師器(甕・坏・埴等)、須恵器(壺・碗等)、黒色土器B類、越州窯系青磁、土鏝、土製品、文字資料(ヘラ書き・墨書)【ヘラ書き:土師器、墨書:須恵器】		—	
		中世	掘立柱建物跡12棟 竪穴建物跡1軒 土坑35基、炉跡3基 溝状遺構8条 礫集積4基(溝内) 石列4基(溝内)		土師器(坏・皿等)、中世須恵器(東幡系・産地不明等)、瓦質土器(摺鉢・火鉢・風炉等)、国産陶器(摺鉢・甕等)【備前・常滑等】、青磁(碗・皿・坏等)【龍泉窯系・同安窯系等】、白磁(碗・皿・合子等)【中国を基本として朝鮮も含む】、青花(碗・皿等)【景徳鎮窯・漳州窯等】、輸入陶器(壺・甕・瓶等)【中国南部・タイ産等】、滑石製石鏝、石鏝(石鍋転用)、茶臼、銭貨(洪武通宝)、火打石、天草砥石		—	
		近世	掘立柱建物跡1棟 土坑9基		陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前、古伊万里等)、金床石		—	
		鍛冶・ 製鉄関連遺構	製鉄炉4基、竪穴建物1棟 土坑13基、炉跡19基		陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前、古伊万里等)、鉄製品、鉄滓、羽口、炉壁等		—	
その他	土坑20基、炉跡7基 柱穴・ピット974基		天草砥石、打欠石、基石、硯、銅製品、古銭、鉄製品		—			
遺跡の概要	<p>北山遺跡は、阿久根市山下及び波留に位置し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30~37mの台地上に所在する。遺跡周辺は古代の英祢駅比定地のひとつと考えられ、東側に位置する愛宕山には、中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど、古代から中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。</p> <p>調査区では、縄文時代から近世までの遺構・遺物の検出・出土が確認された。特に中世から近世にかけては多く、阿久根地域における有力者の集落跡と推測される。</p>							



北山遺跡位置図 (1 : 25,000)

例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う北山遺跡の発掘調査報告書である。本書では令和2～5年度に本調査を実施した調査区の調査報告を行う。
- 2 北山遺跡は、鹿児島県阿久根市山下～波留に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という。）から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」）へ調査を委託し、令和2～5年度の4年間にわたり実施した。
- 4 発掘調査は令和2年度、令和3年度前期（5月～7月）に調査センターが直営で行い、令和3年度後期（10月～1月）は発掘調査支援業務を国際文化財株式会社へ委託して実施した。令和4～5年度は、調査センターが直営で調査を行った。
- 5 整理・報告書作成は、令和3～6年度に調査センター第一整理作業所で実施した。
- 6 掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表及び図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は、通し番号であり、本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡記号は「KY」である。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて座標北（G.N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 10 発掘調査における実測図作成および写真撮影は、主として調査担当者が行ったが、令和4年度は遺構実測の一部を調査センターの指揮・監督のもとで、株式会社イビソクおよび株式会社九州文化財研究所に委託した。また、空中写真撮影は令和2・3年度は株式会社ふじた、令和4年度は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 11 本書に係る遺構実測図・出土遺物の実測、トレースは、調査センター職員の指揮・監督のもと、調査センターの整理作業員が行い、陶磁器実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の写場において、辻明啓、西園勝彦が行った。
- 13 本報告に係る自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、株式会社加速器分析研究所、日鉄テクノロジー株式会社、株式会社古環境研究所、株式会社古環境研究センターに委託し、成果を第Ⅴ章に掲載した。
- 14 執筆担当は以下の通りである。

第Ⅰ～Ⅲ章	・ ・ ・ ・ ・	辻・山川
第Ⅳ章 第1節	・ ・ ・ ・ ・	山川
第2節	・ ・ ・ ・ ・	上床
第3節	・ ・ ・ ・ ・	上床
第4節	・ ・ ・ ・ ・	上床・辻
第5節	・ ・ ・ ・ ・	上床・辻
第6節	・ ・ ・ ・ ・	川口
第7節	・ ・ ・ ・ ・	上床・辻
第Ⅴ章	・ ・ ・ ・ ・	山川・上床
第Ⅵ章	・ ・ ・ ・ ・	川口・山川・辻
- 15 記載した土色や胎土の色は、『新版 標準土色帖』（1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。釉薬の色調については、『日本色研事業株式会社 新配色カード』（1996 一般財団法人日本色彩研究所監修）を参考にした。
- 16 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。

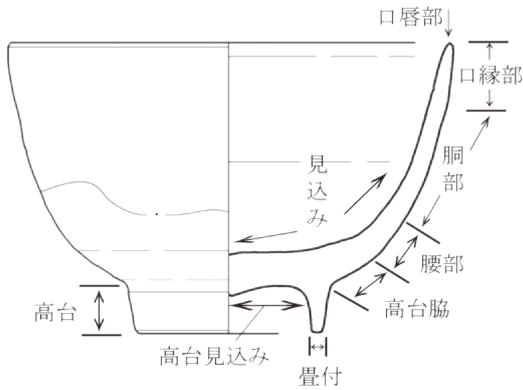
SK:	土坑	SS:	集石	SI:	堅穴建物跡	SB:	掘立柱建物跡	SD:	溝跡	SP:	ピット	SX:	その他
-----	----	-----	----	-----	-------	-----	--------	-----	----	-----	-----	-----	-----
- 17 遺構図の縮尺は、以下を基本とした。また、各図中にも縮尺を示した。

土坑・落とし穴:	1 / 40	集石:	1 / 20	堅穴建物跡:	1 / 40	掘立柱建物跡:	1 / 40～100
溝跡:	1 / 80～250	ピット:	1 / 40				
- 18 遺物の縮尺は、以下を基本とした。また各図中にも縮尺を示した。

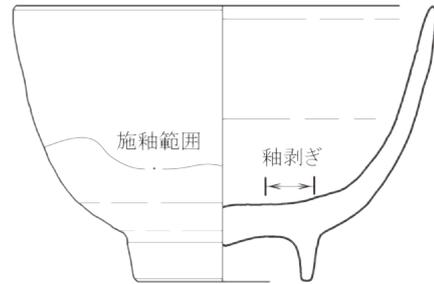
土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品:	1 / 2, 1 / 3
石器・鉄製品:	1 / 1, 1 / 2, 1 / 3, 1 / 4
- 19 観察表のうち、口径・底径が括弧書きのものは復元径、器高が括弧書きのものは残高である。
- 20 遺構番号については、調査時に付されたものから、報告書掲載順に付け替えた。
- 21 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

【陶磁器】本報告書の陶磁器の部位、表現については以下の通りとする。

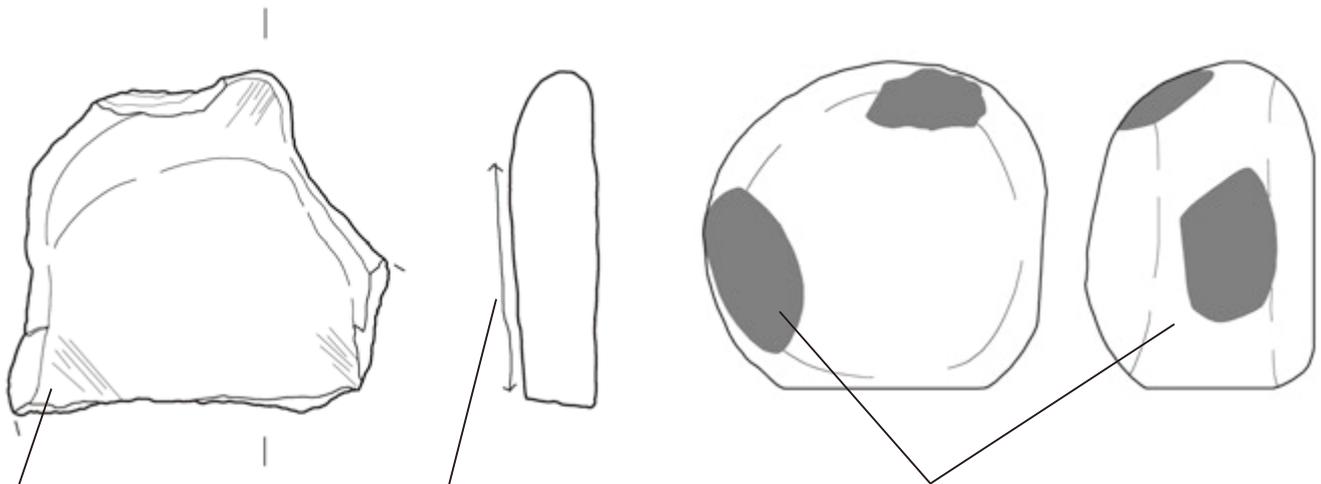


土器・陶磁器の各部位の名称



陶磁器の表現

【石器】本報告書の石器の磨面については、以下の①～③のように表現する。



①磨面の擦痕の方向が明確に確認できるもの

②広い磨面をもつが、擦痕が不明瞭なもの

③部分的に磨面をもつが、擦痕が不明瞭で、矢印で範囲を示しにくいもの

【観察表】各時代の観察表の層位の表記「マ」は、「遺構内の埋土」を示す。

(例) マ2 = 埋土2

本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

北山遺跡位置図

例言・凡例

第I章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	
1 分布調査	1
2 試掘調査	1
3 確認調査	1
4 本調査	4
第3節 発掘調査の経過	6
第4節 整理・報告書作成の経過	10

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	14
第2節 歴史的環境	14

第III章 発掘調査の方法と層序

第1節 調査の方法	20
1 発掘調査の方法	20
2 遺構の認定と検出方法	20
3 整理作業・報告書作成作業の方法	20
第2節 層序	20
第3節 新旧遺構対応表	27

第IV章 調査の成果

第1節 縄文時代の調査	
1 調査の概要	29
2 遺構	29
3 出土遺物	39
第2節 古墳時代の調査	
1 調査の概要	74
2 出土遺物	74
第3節 古代の調査	
1 調査の概要	76
2 遺構	76
3 出土遺物の分類	77
4 出土遺物	79
第4節 中世の調査	
1 調査の概要	104
2 出土遺物の分類	104
3 遺構	109
4 包含層出土遺物	176

第5節 近世の調査

1 調査の概要	226
2 遺物の分類	226
3 遺構	226
4 包含層出土遺物	236

第6節 製鉄関連遺構

1 製鉄遺構調査区(遺構・出土遺物)	256
2 炉跡遺構調査区(遺構・出土遺物)	279

第7節 その他

1 調査の概要	293
2 遺構	293
3 その他の遺物	314

第V章 自然科学分析等

第1節 北山遺跡の放射性炭素年代(AMS測定)	325
第2節 北山遺跡の放射性炭素年代(AMS測定)	326
第3節 放射性炭素年代測定	329
第4節 北山遺跡出土端家財の樹種同定	332
第5節 北山遺跡出土試料の自然科学分析 (年代測定・樹種同定・種実同定・テフラ分析)	333
第6節 北山遺跡の放射性炭素年代測定	340
第7節 北山遺跡出土炭化材の樹種同定	342
第8節 北山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物の調査	345
第9節 北山遺跡出土試料の自然科学分析	360
第10節 北山遺跡出土試料の自然科学分析 (植物珪酸体分析・リン・カルシウム分析)	363
第11節 北山遺跡におけるX線解析装置による 遺構内検出白色物質の分析	368

第VI章 総括

第1節 縄文時代	371
第2節 古墳時代	372
第3節 古代	372
第4節 中世	372
第5節 近世	374
第6節 製鉄関連遺構	374

写真図版

写真図版	376
------	-----

挿 図 目 次

第1図	北山遺跡トレンチ配置図	5	第40図	縄文時代の遺物⑳	68
第2図	発掘調査の進捗図	11	第41図	石器出土状況図	69
第3図	北山遺跡周辺遺跡位置図	16	第42図	古墳時代の遺物	75
第4図	北山遺跡周辺阿久根氏関連城跡位置図	17	第43図	土師器（高台・ヘラ切り底部）出土状況	76
第5図	南九州西回り自動車道関係遺跡位置図	19	第44図	古代の遺物①	78
第6図	土層断面図①～③	21	第45図	古代の遺物②	79
第7図	土層断面④・⑤	22	第46図	古代の遺物③	80
第8図	土層断面⑥・⑦	23	第47図	古代の遺物④	81
第9図	土層断面⑦～⑨	24	第48図	古代の遺物⑤	82
第10図	土層断面⑩・⑪	25	第49図	古代の遺物⑥	83
第11図	土層断面⑫・⑬	26	第50図	古代の遺物⑦	84
第12図	土層断面⑭	27	第51図	古代の遺物⑧	85
第13図	集石1～3号・出土遺物	31	第52図	古代の遺物⑨	86
第14図	集石4号・出土遺物	32	第53図	古代の遺物⑩	87
第15図	集石5号	33	第54図	古代の遺物⑪	88
第16図	土坑1号	34	第55図	古代の遺物⑫	89
第17図	土坑1号出土遺物	35	第56図	古代の遺物⑬	90
第18図	落とし穴1・2号	36	第57図	古代の遺物⑭	91
第19図	縄文時代の遺構配置図	37	第58図	古代の遺物⑮	92
第20図	縄文土器の出土状況図	38	第59図	古代の遺物⑯	93
第21図	縄文時代の遺物①	41	第60図	古代の遺物⑰	94
第22図	縄文時代の遺物②	42	第61図	古代の遺物⑱	95
第23図	縄文時代の遺物③	44	第62図	古代の遺物⑲	96
第24図	縄文時代の遺物④	46	第63図	古代の遺物⑳	97
第25図	縄文時代の遺物⑤	47	第64図	古代の遺物㉑	98
第26図	縄文時代の遺物⑥	49	第65図	中世の遺構配置図（43～66区）	107
第27図	縄文時代の遺物⑦	51	第66図	中世の遺構配置図（66～78区）	107
第28図	縄文時代の遺物⑧	52	第67図	掘立柱建物跡1号	108
第29図	縄文時代の遺物⑨	54	第68図	土坑2号	109
第30図	縄文時代の遺物⑩	55	第69図	中世遺構内の遺物①	110
第31図	縄文時代の遺物⑪	57	第70図	掘立柱建物跡2号	111
第32図	縄文時代の遺物⑫	58	第71図	土坑3号・中世遺構内の遺物②	112
第33図	縄文時代の遺物⑬	59	第72図	掘立柱建物跡3号	113
第34図	縄文時代の遺物⑭	61	第73図	掘立柱建物跡4号	114
第35図	縄文時代の遺物⑮	62	第74図	掘立柱建物跡5号	115
第36図	縄文時代の遺物⑯	63	第75図	掘立柱建物跡6号	116
第37図	縄文時代の遺物⑰	64	第76図	掘立柱建物跡7号・中世遺構内の遺物③	117
第38図	縄文時代の遺物⑱	65	第77図	掘立柱建物跡8号	118
第39図	縄文時代の遺物⑲	67	第78図	掘立柱建物跡9号	119

第79図	掘立柱建物跡10号	120	第121図	中世遺構内の遺物③⑩	166
第80図	掘立柱建物跡11号	121	第122図	溝状遺構4号平面図	168
第81図	中世遺構内の遺物④	122	第123図	溝状遺構4号断面1・2	169
第82図	掘立柱建物跡12号	123	第124図	溝状遺構4号集積3・4号	170
第83図	中世遺構内の遺物⑤	124	第125図	溝状遺構4号石列3・4	171
第84図	竪穴建物跡1号・中世遺構内の遺物⑥	125	第126図	中世遺構内の遺物③⑪	172
第85図	土坑4・5号・中世遺構内の遺物⑦	126	第127図	中世遺構内の遺物③⑫	173
第86図	土坑6～9号	127	第128図	中世遺構内の遺物③⑬	174
第87図	土坑10号・中世遺構内の遺物⑧	128	第129図	溝状遺構5号および断面	175
第88図	土坑11号・中世遺構内の遺物⑨	129	第130図	中世遺構内の遺物③⑭	176
第89図	土坑12・13号・中世遺構内の遺物⑩	130	第131図	溝状遺構6・7号および6号断面1	177
第90図	土坑14号	131	第132図	溝状遺構6号断面2および7号断面1・2	178
第91図	土坑15号・中世遺構内の遺物⑪	132	第133図	中世遺構内の遺物③⑮	179
第92図	土坑16・17号・中世遺構内の遺物⑫	133	第134図	中世遺構内の遺物③⑯	180
第93図	土坑18号・中世遺構内の遺物⑬	134	第135図	中世遺構内の遺物③⑰	181
第94図	土坑19号	135	第136図	溝状遺構8号および断面	182
第95図	中世遺構内の遺物⑭	136	第137図	中世遺構内の遺物③⑱	183
第96図	土坑20～24号	137	第138図	中世の遺物①	190
第97図	土坑25～27号・中世遺構内の遺物⑮	138	第139図	中世の遺物②	192
第98図	土坑28～32号・中世遺構内の遺物⑯	139	第140図	中世の遺物③	193
第99図	土坑33・34号・中世遺構内の遺物⑰	140	第141図	中世の遺物④	194
第100図	土坑35号・中世遺構内の遺物⑱	141	第142図	中世の遺物⑤	195
第101図	土坑36号・中世遺構内の遺物⑲	142	第143図	中世の遺物⑥	196
第102図	炉跡1～3号	143	第144図	中世の遺物⑦	197
第103図	溝状遺構1・2号溝(51～56区)	145	第145図	中世の遺物⑧	198
第104図	溝状遺構1・2号溝(56～61区)および集積1・2号	146	第146図	中世の遺物⑨	199
第105図	溝状遺構1号断面・集石1・2号	147	第147図	中世の遺物⑩	200
第106図	溝状遺構1号道跡(51～56区)および石列1	148	第148図	中世の遺物⑪	201
第107図	溝状遺構1号道跡(56～61区)・石列2	149	第149図	中世の遺物⑫	202
第108図	溝状遺構1号階段状出入口および分岐点	150	第150図	中世の遺物⑬	203
第109図	溝状遺構2号断面1～3	151	第151図	中世の遺物⑭	204
第110図	中世遺構内の遺物⑳	152	第152図	中世の遺物⑮	205
第111図	中世遺構内の遺物㉑	153	第153図	中世の遺物⑯	206
第112図	中世遺構内の遺物㉒	154	第154図	中世の遺物⑰	207
第113図	中世遺構内の遺物㉓	155	第155図	中世の遺物⑱	208
第114図	中世遺構内の遺物㉔	156	第156図	中世の遺物⑲	209
第115図	中世遺構内の遺物㉕	157	第157図	中世の遺物㉑	210
第116図	中世遺構内の遺物㉖	158	第158図	中世の遺物㉒	211
第117図	中世遺構内の遺物㉗	159	第159図	中世の遺物㉓	212
第118図	中世遺構内の遺物㉘	161	第160図	中世の遺物㉔	213
第119図	中世遺構内の遺物㉙	162	第161図	中世の遺物㉕	214
第120図	溝状遺構3号および断面1・2	164	第162図	中世の遺物㉖	215

第163図	中世の遺物②⑥	216	第205図	羽口 2	270
第164図	中世の遺物②⑦	217	第206図	炉壁 1	271
第165図	中世の遺物②⑧	218	第207図	炉壁 2	272
第166図	近世遺構配置図	227	第208図	炉外滓	275
第167図	掘立柱建物跡13号・近世遺構内の遺物①	229	第209図	炉底滓 A	276
第168図	土坑37・38号・近世遺構内の遺物②	230	第210図	炉底滓 B	277
第169図	土坑39・40号・近世遺構内の遺物③	231	第211図	炉内滓 C	277
第170図	土坑41・42号・近世遺構内の遺物④	232	第212図	炉内滓 D	277
第171図	土坑43・44号・近世遺構内の遺物⑤	233	第213図	炉内滓 E	277
第172図	土坑45号・近世遺構内の遺物⑥	234	第214図	炉内滓 F	278
第173図	近世の遺物①	236	第215図	炉内滓 G	278
第174図	近世の遺物②	238	第216図	鉄塊	278
第175図	近世の遺物③	239	第217図	炉跡遺構配置図	279
第176図	近世の遺物④	240	第218図	炉跡 7～10号配置図	280
第177図	近世の遺物⑤	242	第219図	炉跡 7号・出土遺物	280
第178図	近世の遺物⑥	243	第220図	炉跡 8・9号	281
第179図	近世の遺物⑦	244	第221図	炉跡10号	282
第180図	近世の遺物⑧	245	第222図	炉跡11・12号	283
第181図	近世の遺物⑨	246	第223図	炉跡13号・出土遺物	284
第182図	近世の遺物⑩	247	第224図	炉跡14号	285
第183図	近世の遺物⑪	248	第225図	北部炉跡群の位置	285
第184図	近世の遺物⑫	249	第226図	炉跡15・16・20・21号	286
第185図	近世の遺物⑬	250	第227図	炉跡15・16号出土遺物	287
第186図	製鉄関連遺構配置図	256	第228図	炉跡17・22号	288
第187図	製鉄遺構調査区配置図	256	第229図	炉跡18・19号・出土遺物	289
第188図	製鉄炉 1号・出土遺物	258	第230図	土坑58号・ピット実測図	290
第189図	製鉄炉 2号	259	第231図	ピット出土遺物 1	290
第190図	製鉄炉 3号	259	第232図	ピット出土遺物 2	291
第191図	土坑51～54号	260	第233図	土坑59～66号	294
第192図	土坑55・56号	261	第234図	土坑67～71号・出土遺物	295
第193図	製鉄炉 3号・土坑51-54-56号出土遺物	262	第235図	土坑72～77号・出土遺物	296
第194図	製鉄炉 4号・土坑全体配置図	263	第236図	炉跡23～28号	298
第195図	製鉄炉 4号	263	第237図	炉跡29・30号	299
第196図	土坑49・50号	264	第238図	ピット及び周辺遺構配置図 (43～53区)	302
第197図	製鉄炉 4号・土坑50号出土遺物	265	第239図	ピット及び周辺遺構配置図 (53～64区)	303
第198図	竪穴建物跡 2号	265	第240図	ピット及び周辺遺構配置図 (63～74区)	304
第199図	竪穴建物跡 2号出土遺物	266	第241図	ピット及び周辺遺構配置図 (67～76区)	305
第200図	土坑46～48・57号出土遺物	267	第242図	ピット拡大図① (D・E-49～51区)	306
第201図	炉跡 4～6号	267	第243図	ピット拡大図② (E・F-72～75区)	307
第202図	硬化面 2	268	第244図	ピット出土遺物①	308
第203図	硬化面 2 出土遺物	269	第245図	ピット出土遺物②	309
第204図	羽口 1	269	第246図	ピット出土遺物③	310

第247図	ピット出土遺物④	311	第251図	その他の遺物④	318
第248図	その他の遺物①	314	第252図	その他の遺物⑤	319
第249図	その他の遺物②	315	第253図	その他の遺物⑥	320
第250図	その他の遺物③	316	第254図	その他の遺物⑦	321

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	17	第32表	中世の陶磁器観察表(3)	223
第2表	阿久根IC～西目IC間の遺跡	18	第33表	中世の陶磁器観察表(4)	224
第3表	北山遺跡基本層序	27	第34表	中世の陶磁器観察表(5)	225
第4表	新旧遺構対応表	28	第35表	中世の石製品観察表	225
第5表	集石観察表	30	第36表	陶磁器の時期区分	226
第6表	縄文時代遺構内出土土器観察表	70	第37表	近世遺構内出土陶磁器観察表	235
第7表	縄文土器観察表(1)	70	第38表	近世遺構内出土石製品観察表	235
第8表	縄文土器観察表(2)	71	第39表	近世遺構内出土金属製品観察表(1)	235
第9表	縄文時代遺構内出土石器観察表	72	第40表	近世遺構内出土金属製品観察表(2)	235
第10表	石器観察表(1)(Ⅲ・Ⅳ層出土)	72	第41表	近世の遺物(1)	251
第11表	石器観察表(2)(Ⅰ・Ⅱ層出土)	72	第42表	近世の遺物(2)	252
第12表	石器観察表(3)(Ⅰ・Ⅱ層出土)	73	第43表	近世の遺物(3)	253
第13表	石器観察表(4)(縄文時代以外の遺構内出土)	73	第44表	近世の遺物(4)	254
第14表	古墳時代遺物観察表	74	第45表	近世の遺物(5)	255
第15表	古代土師器・須恵器・青磁観察表(1)	99	第46表	羽口観察表	270
第16表	古代土師器・須恵器・青磁観察表(2)	100	第47表	遺構内鉄滓出土一覧表	274
第17表	古代土師器・須恵器・青磁観察表(3)	101	第48表	炉壁・炉底観察表	274
第18表	古代土師器・須恵器・青磁観察表(4)	102	第49表	鉄滓観察表	278
第19表	古代土師器・須恵器・青磁観察表(5)	103	第50表	製鉄関連遺構内土師器・須恵器・瓦質土器観察表	292
第20表	古代土製品観察表	103	第51表	製鉄関連遺構内陶磁器観察表	292
第21表	古代焼塩土器・紡錘車等観察表	103	第52表	製鉄関連遺構内土製品観察表	292
第22表	中世遺構内出土遺物観察表(1)	183	第53表	ピット出土遺物一覧(1)	312
第23表	中世遺構内出土遺物観察表(2)	184	第54表	ピット出土遺物一覧(2)	313
第24表	中世遺構内出土遺物観察表(3)	185	第55表	その他の遺構内遺物観察表(1)	322
第25表	中世遺構内出土遺物観察表(4)	186	第56表	その他の遺構内遺物観察表(2)	323
第26表	中世遺構内出土遺物観察表(5)	187	第57表	その他の遺構内遺物観察表(3)	323
第27表	中世遺構内出土遺物観察表(6)	188	第58表	その他の遺構内遺物観察表(4)	323
第28表	中世の土師器・須恵器・瓦質土器観察表(1)	219	第59表	その他の遺物(石器・石製品)観察表	323
第29表	中世の土師器・須恵器・瓦質土器観察表(2)	220	第60表	その他の遺物(金属製品)観察表	324
第30表	中世の陶磁器観察表(1)	221	第61表	その他の遺物(土器)観察表	324
第31表	中世の陶磁器観察表(2)	222			

図版目次

図版 1	遺跡遠景		図版19	ピット完掘状況	393
図版 2	縄文時代の遺構①	376	図版20	製鉄関連遺構①	394
図版 3	縄文時代の遺構②	377	図版21	製鉄関連遺構②	395
図版 4	縄文時代の遺構③	378	図版22	製鉄関連遺構③	396
図版 5	中世の遺構①	379	図版23	製鉄関連遺構④	397
図版 6	中世の遺構②	380	図版24	縄文時代の遺物①	398
図版 7	中世の遺構③	381	図版25	縄文時代の遺物②	399
図版 8	中世の遺構④	382	図版26	縄文時代の遺物③	400
図版 9	中世の遺構⑤	383	図版27	縄文時代の遺物④	401
図版10	中世の遺構⑥	384	図版28	古代の遺物①	402
図版11	中世の遺構⑦	385	図版29	古代の遺物②	403
図版12	中世の遺構⑧	386	図版30	中世の遺物①	404
図版13	中世の遺構⑨	387	図版31	中世の遺物②	405
図版14	中世の遺構⑩	388	図版32	中世の遺物③	406
図版15	中世の遺構⑪	389	図版33	中世の遺物④	407
図版16	中世の遺構⑫	390	図版34	中世の遺物⑤	408
図版17	中世の遺構⑬	391	図版35	近世の遺物	409
図版18	中世の遺構⑭	392	図版36	金属製品・硯	410

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

県教委は、文化財の保存・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき、鹿児島国道事務所は、南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設の施工計画に基づき、事業区内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」という。）に照会した。

これを受けて県文化財課及び埋文センターが、平成29年度に事業予定地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、事業区内には周知の遺跡を含め10か所の遺物散布地の存在が判明した。

分布調査の結果をもとに、事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて、鹿児島国道事務所、県文化財課、埋文センターの三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に発掘調査を実施することとした。

これを受けて、遺跡の残存状況をより詳細に把握するため、県文化財課が平成30年7月27日（金）に試掘調査、埋文センターが令和元年12月2日（月）～25日（水）にかけて確認調査を行った。試掘調査及び確認調査は、文化庁の国庫補助を受けて県内遺跡発掘調査等事業として実施した。その結果、事業区域内13,190㎡の範囲に遺物包蔵地が存在することが判明した。

試掘調査・確認調査の結果を受けて、本調査は県教委から、調査センターへ委託することとなった。

本調査が必要と判断された表面積13,190㎡のうち、令和2年度は、表面積2,230㎡・延面積3,121㎡の調査を行った。調査期間は、令和2年10月1日（日）～3年1月27日（水）（実働66日間）であった。令和3年度前期は、表面積3,104㎡・延面積4,481㎡の調査を行った。調査期間は令和3年5月10日（月）～7月28日（水）（実働43日間）であった。また、後期は、調査センターが民間調査組織と支援業務委託を契約して、表面積7,721㎡・延面積11,549㎡の調査を行った。調査期間は令和3年10月4日（月）～4年1月28日（金）（実働63日間）であった。令和4年度は、表面積7,327㎡・延面積9,327㎡の調査を行った。調査期間は令和4年5月11日（水）～5年1月27日（金）（実働133日間）であった。令和5年度は、表面積2,530㎡・延面積2,530㎡の調査を行った。調査期間は令和5年9月1日（金）～12月27日（水）（実働74日）である。

第 2 節 調査の組織

1 分布調査

分布調査は、鹿児島国道事務所から県文化財課が南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）阿久根北～西目 I C 間の依頼を受け、平成29年12月11日（月）に実施した。調査体制は、次のとおりである。

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査者	鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事 平 美典 県立埋蔵文化財センター 調査課第一調査係長 中村 和美
立会者	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所 南九州西回り自動車道プロジェクト推進室 事業対策官 沼田 英昭 計画課 専門官 中藪 雅人 企画係長 岡元 侑己 技官 鶴丸 巧 技官 馬場ひなの
協力者	阿久根市教育委員会 生涯学習課 主事補 宮田 大之

2 試掘調査

試掘調査は、分布調査の結果を受けて、平成30年7月27日（金）に実施した。調査の結果、古墳時代から古代の遺跡が残存していることを確認した。調査体制は、次のとおりである。

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査者	鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事 平 美典
調査協力	阿久根市教育委員会 生涯学習課 主事補 宮田 大之

3 確認調査

遺跡の確認調査は、令和元年度から3年度にかけて、条件整備が整った範囲を対象に計30か所の確認トレンチを設定し順次実施した。トレンチの規模は、任意の大き

さで設定し、必要に応じて拡張を行った。調査は、表土を重機により剥いだ後、鋤簾等による人力掘削を基本として遺構・遺物の確認を行った。遺構については、各層の上面で検出を行った。

令和元年度

調査は、北山遺跡の西側約9,500㎡を対象に17か所の確認トレンチを設定し、令和元年12月2日（月）～12月25日（水）まで実施した。調査の結果、縄文時代早期・後期・晩期、古墳時代、古代、中世、近世の遺物が出土した。

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター
所長	前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長 野間口 誠
	南の縄文調査室長兼調査課長 中村 和美
	第二調査係長 三垣 恵一
調査担当	文化財主事 隈元 俊一
	文化財研究員 加世田 尊
調査事務	主 査 新穂 秀貴

確認調査の概要（第1図）

（4 トレンチ）

E-30・31区に、東西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、IV層を検出した。IV層では、土坑1基、ピット3基を検出した。遺物は成川式土器、青磁、東播系須恵器、染付、陶器、滑石、黒曜石剥片、チャート剥片が出土した。遺構を検出したため、IV層で掘削を終了した。

（5 トレンチ）

G・H-31区に、北東-南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、VIa層を検出した。VIa層上面を精査したが、遺構・遺物は発見されなかった。その後下層の掘削を行ったところ、明赤褐粘質土に砂質の土塊が混入するVIIa・b層が堆積していることを確認した。深度が深くなったため、VIIb層の途中で掘削を終了した。

（6 トレンチ）

F・G-38・39区に、北西-南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、VIIb層を検出した。I層で青磁片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。調査は、VIIb層で終了した。

（7 トレンチ）

H-28区に、北西-南東方向に設定した。表土を重機

で掘削したところ、IIb層を検出した。遺構は検出されなかった。遺物はIIb層で加栗山式土器、成川式土器、土師器、染付、III層で型式不明の土器が出土した。調査はIV層途中で終了した。

（8 トレンチ）

E-25区に、北東-南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、III層を検出した。III層で精査したが、遺構・遺物は確認できなかった。その後重機により下層確認トレンチを入れたが遺構・遺物はなく、IV～VIa層の堆積を確認して調査を終了した。

（9 トレンチ）

E-34区からH-35区にかけて、北西-南東方向に約31mのトレンチを設定した。表土を重機で掘削したところ、北西側ではVIa層が、南東側ではIIa層を検出した。その後人力でIIa・b層を掘削した。遺構はIIb層で焼土跡1基、III層上面で土坑2基、VIa層上面で土坑1基を検出した。遺物は縄文土器、成川式土器、須恵器、土師器、白磁、青磁、瓦質土器、土錘、鞆の羽口、染付、陶器、打製石鏃、磨石、鉄滓、黒曜石剥片、チャート剥片が出土した。調査はIII～VIa層上面で終了した。

（10 トレンチ）

G-24・25区に、北西-南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、VIa層を検出した。VIa層上面を精査したところ、土坑1基、ピット1基を検出した。遺物は成川式土器と思われる土器片と土師器が出土した。調査はVIIa層で終了した。

（11 トレンチ）

E-22区に、北西-南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところVIa層を検出した。南東方向へ拡張したところ、VIa層上面で土坑4基を検出した。遺物はI層で染付が出土したのみであった。調査はVIIa層で終了した。

（12 トレンチ）

F-18・19区に、北東-南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、IV層を検出した。遺構は土坑1基、ピット1基を検出した。遺物は縄文時代のものと思われる土器片が出土した。遺構部分を避けて重機を用いて下層確認を実施した結果、V～VIb層は堆積しておらず、VIIa層が露出した。VIIa層上面で調査を終了した。

（13 トレンチ）

G-32～34区に、北東-南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、南西側でVIa層、北東側でIIa層を検出した。遺構は検出されなかった。遺物はIIa層で染付が出土したのみである。IIb～IV層は堆積しておらず、VIa層上面で調査を終了した。

（19 トレンチ）

F-37区に、北西-南東方向に設定した。この地点はVIa層より上位の層が残存していないことが分かっている

たため、Ⅶ層以下の層の堆積状況を調査するために重機を用いて掘削した。Ⅶb層以下は10cm程度の粘質土が堆積し、その下は阿久根火砕流によると思われる溶結凝灰岩層を検出した。

遺構・遺物は確認できなかった。調査は溶結凝灰岩層で終了した。

(20トレンチ)

E・F-31区に、北西-南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、Ⅱa層を検出した。Ⅱa層を人力で掘削したがあまり残存しておらず、下位のⅡb~Ⅴ層は堆積していなかった。遺構は検出されず、遺物はⅠ層で染付、Ⅱa層で稜花皿が出土した。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

令和2年度

調査は、北山遺跡の北側約2,800㎡を対象に4か所のトレンチを設定し、令和2年9月1日(火)~9月28日(月)まで実施した。調査の結果、古代から中世の遺構・遺物を確認した。

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター
	所 長 前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長 野間口 誠
	南の縄文調査室長兼調査課長
	第一調査係長 中村 和美
調査担当	文化財主事 上浦 麻矢
	文化財主事 馬籠 亮道
調査事務	主 査 新穂 秀貴

確認調査の概要

(21トレンチ)

F-76区に、北東-南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、Ⅵa層を検出した。Ⅶa層まで人力で掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

(22トレンチ)

G-72・73区に、東-西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、Ⅱa層を検出した。人力で掘削を行い、近世のものと考えられる造成土と土坑や柱穴が発見された。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

(23トレンチ)

F-70区に、北西-南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、Ⅱa層を検出した。Ⅲ層でピット2基を確認し、遺物は中世から近世のものと思われる陶磁器等を確認した。

遺構の可能性を考慮し、調査はⅢ層上面で終了した。

(24トレンチ)

I-75区に、北東-南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ、Ⅱa層を検出した。人力で掘削を行い、近世のものと考えられる造成土、遺物は中世から近世のものと思われる陶磁器等を確認した。Ⅶb層上面で掘削を終了した。

令和3年度

調査は、北山遺跡の東側約12,000㎡を対象に9か所のトレンチを設定し、令和3年5月18日(火)~6月11日(金)まで実施した。調査の結果、縄文時代早期、古代から中世の遺物が出土した。

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター
	所 長 中原 一成
調査企画	次長兼総務課長 大口 浩嗣
	南の縄文調査室長兼調査課長 寺原 徹
	第一調査係長 三垣 恵一
調査担当	文化財主事 湯場崎 辰巳
	文化財主事 上浦 麻矢
調査事務	主 査 和田 賢

確認調査の概要

(25トレンチ)

D・E-65区に、北東-南西方向に設定した。表土下からⅤ層が検出され、縄文時代早期と考えられる土器や石器が出土した。また、Ⅵa層上面では、古代から中世と考えられる土坑・柱穴等を検出した。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

(26トレンチ)

F-65区に、北東-南西方向に設定した。表土下からⅤ層が検出され、縄文時代早期と考えられる土器や石器が出土した。また、Ⅵa層上面では、古代から中世と考えられる土坑・柱穴等を検出した。Ⅶb層上面で掘削を終了した。

(27トレンチ)

H-65区に、北東-南西方向に設定した。表土下からⅤ層が確認され、縄文時代早期と考えられる土器が出土した。また、Ⅵa層上面では、縄文時代早期と考えられる土坑を検出した。Ⅶb層上面で掘削を終了した。

(28トレンチ)

F-62区に、北東-南西方向に設定した。表土下から

VIa層が確認され、VIa層上面で古代から中世と考えられる柱穴や、縄文時代早期と考えられる土坑を検出した。遺物は出土しなかった。VIa層上面で掘削を終了した。

(29トレンチ)

H-62区に、北東-南西方向に設定した。表土下からV層が確認され、黒曜石のチップが出土した。また、VIa層上面では、縄文時代早期と考えられる土坑を検出した。VIb層上面で掘削を終了した。

(30トレンチ)

E・F-58・59区に、北東-南西方向に設定した。表土下からVIa層が確認され、VIa層上面では、古代から中世と考えられる土坑や柱穴を検出した。遺物は出土しなかった。VIa層上面で掘削を終了した。

(31トレンチ)

H-58区に、北東-南西方向に設定した。表土下からIIb層が確認され、近世と考えられる陶磁器や鉄滓が出土した。また、VIa層で古代から中世と考えられる土坑や柱穴を検出した。IIb層直下はVIa層で、III~V層は残存していなかった。VIa層上面で掘削を終了した。

(32トレンチ)

D-59区に、北西-南東方向に設定した。表土下からVII層が確認された。旧石器時代の可能性を考えたが、遺構・遺物は確認できなかった。VIIa層上面で掘削を終了した。

(33トレンチ)

D・E-60・61区に、北東-南西方向と北西-南東方向に設定した。表土下からVIa層が確認された。VIa層上面での、遺構・遺物は確認できなかった。VIb層上面で掘削を終了した。

4 本調査

確認調査の結果、本調査の範囲は、12トレンチ西側の市道から21・24トレンチ東側の集落道間までとした。市道部分は、深く削平されていたため、調査範囲に含めていない。調査対象表面積は約26,500㎡である。

令和2年度

令和2年度は、調査着手のための条件が整った範囲、表面積2,230㎡(延面積3,121㎡)の調査を実施した。調査期間は、令和2年10月1日(木)~3年1月27日(水)(実働66日間)である。

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 中原 一成

調査企画 総務課長兼総務係長 中島 治
調査課長 寺原 徹
調査第二係長 有馬 孝一
調査担当 文化財専門員 加世田 尊
文化財専門員 高吉 伸弥
調査事務主 事 上園 慶子

令和3年度

令和3年度は、条件が整った範囲の表面積3,104㎡(延面積4,481㎡)の本調査を実施した。調査期間は、令和3年5月10日(月)~3年7月28日(水)(実働43日)である。

(直営)

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 中村 和美
調査企画 総務課長兼総務係長 中島 治
調査課長 福永 修一
調査第二係長 有馬 孝一
調査担当 文化財専門員 加世田 尊
文化財専門員 肥後 弘章
文化財専門員 田上 俊一
文化財専門員 林田 真一
調査事務主 事 上園 慶子

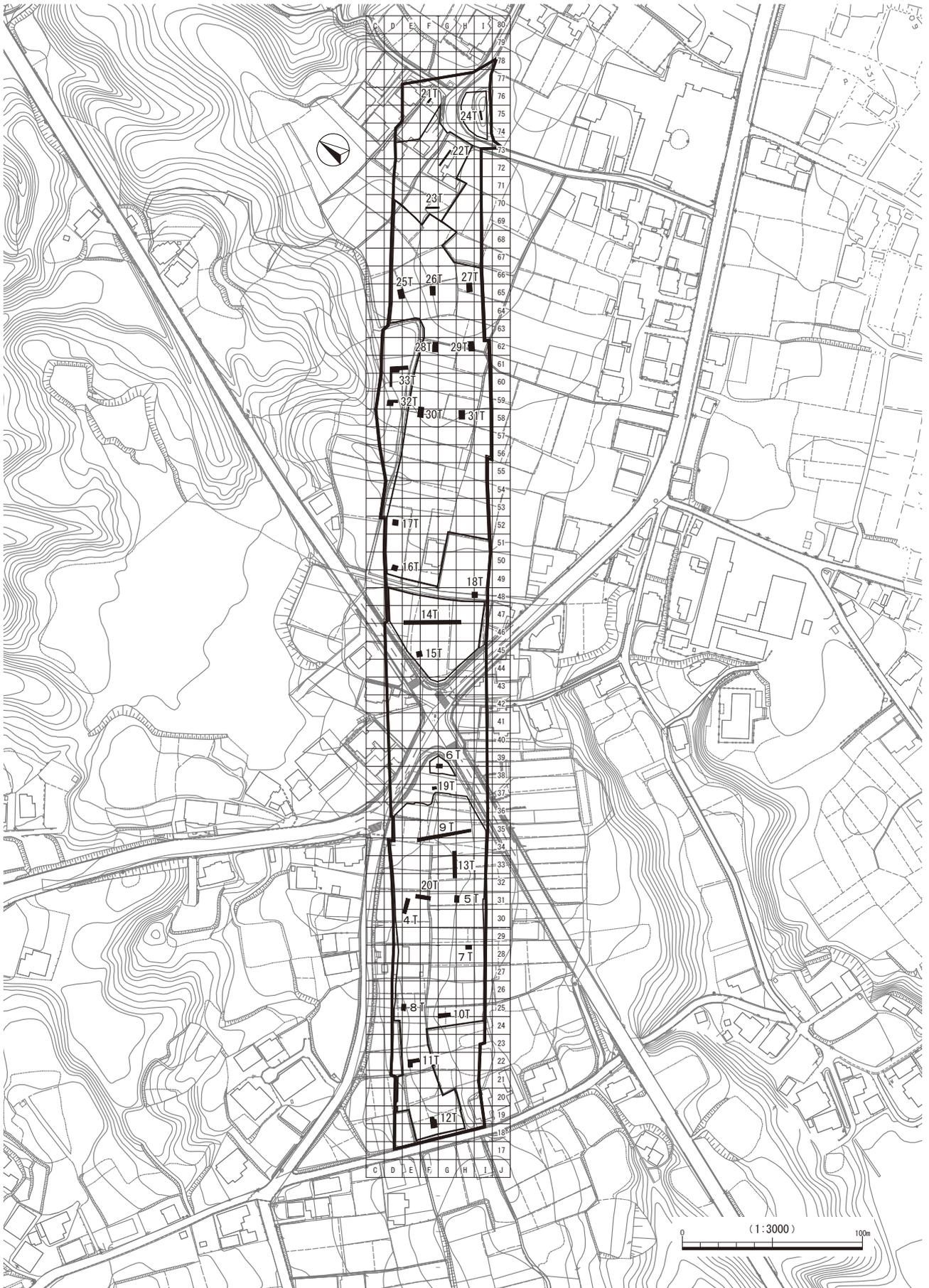
直営方式による調査に続き、条件が整った範囲の表面積7,721㎡(延面積11,549㎡)の本調査を、調査の進捗を図るため、民活方式による調査を実施した。調査期間は、令和3年10月4日(月)~4年1月28日(金)(実働63日間)である。

発掘調査の実施にあたり、調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、国際文化財株式会社へ本調査(記録保存調査)等の支援業務委託を実施した。

なお、調査センター職員2名が常駐し、調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

(民活：民間支援業務委託)

調査担当 文化財専門員 加世田 尊
文化財専門員 田上 俊一
調査事務主 事 上園 慶子
委託先 国際文化財株式会社
調査体制 国際文化財株式会社
主任技術者 飯田 英樹



第1図 北山遺跡トレンチ配置図

主任調査支援員	安村 健
調査支援員	宮田 慈
	四家 礼乃
	土岐 耕司
	(10月)
	駒井 沙紀
	長林 大
	(10月～)
委託期間	令和3年10月4日～令和4年3月11日
委託内容	記録保存調査 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
検査	中間検査 令和3年12月15日(水)
	完成検査 令和4年2月25日(金)
	(実地検査)
	令和4年3月1日(火)
	(成果物検査)

令和4年度

令和4年度は、条件が整った範囲の表面積7,327㎡(延面積9,327㎡)の本調査を実施した。調査期間は、令和4年5月11日(水)～5年1月27日(金)(実働133日)である。

事業主体	国土交通省
	九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団
	埋蔵文化財調査センター
	センター長 中村 和美
調査企画	総務課長兼総務係長 中島 治
	調査課長 三垣 恵一
	調査第二係長 川口 雅之
調査担当	文化財専門員 田上 俊一
	文化財専門員 藤崎 光洋
	(5月～10月)
	文化財専門員 松山 初音
	(11月～1月)
調査事務	事業推進員 市成 英加
	(5月～8月)
	事業推進員 今掛 美子
	(9月～1月)

令和5年度

令和5年度は、条件が整った範囲の表面積2,530㎡(延面積2,530㎡)の本調査を行い、終了した。調査期間は、令和5年9月1日(金)～5年12月27日(水)(実働74日)である。

事業主体	国土交通省
	九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団
	埋蔵文化財調査センター
	センター長 寺原 徹
調査企画	総務課長兼総務係長 脇田 清幸
	調査課長 三垣 恵一
	調査第三係長 上床 真
調査担当	文化財専門員 辻 明啓
	文化財専門員 山川 正樹
	(11月～12月)
	文化財調査員 野田 清志
調査事務	事業推進員 今掛 美子

第3節 発掘調査の経過

発掘調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

1 調査の過程(日誌抄 R4刊行済地点も含む)

令和2年度

9月

G～I-43～49区
表土剥ぎ(重機使用)

10月

G～I-43～46区
IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 土坑(SK1・2・4～6)調査, 写真撮影, 実測

21日 安全パトロール

監理業務 立神文化財主事(県文化財課)
監理業務 前迫所長(埋文センター)
監理業務 中村調査課長(埋文センター)
現地視察 中原センター長

11月

E・F-43～45区
表土剥ぎ(重機使用)
G～I-43～48区
IIa層掘り下げ, 掘立柱建物跡(SB1, 2)土坑(SK3, 5～10)不明遺構(SX1～3)調査, 写真撮影, 実測

監理業務 前迫所長(埋文センター)
監理業務 三垣第一調査係長(埋文センター)
現地調査 有馬係長

12月

D～F-46～48区
表土剥ぎ(重機使用), IIb層掘り下げ
G～I-47・48区

IIb層掘り下げ，掘立柱建物跡（SB1・2）土坑（SK12～14・16～26）不明遺構（SX1～5）調査，写真撮影，実測

5日 現地説明会

現地視察 中原センター長

現場指導 寺原調査課長 中島総務課長

現地調査 福永係長 有馬係長 黒川係長

22日 空中写真撮影

監理業務 中村調査課長（埋文センター）

現地調査 有馬係長

1月

D～G-47・48区

IIb層掘り下げ，土坑（SK12・30～48）不明遺構（SX1・3・6・10～25）調査，写真撮影，実測

監理業務 横手第二調査係長（埋文センター）

現地視察 中原センター長

現地調査 有馬係長

2月

埋め戻し

5日 調査終了

令和3年度（直営）

4月

E～H-17～25区

表土剥ぎ（重機使用）

5月

F-18・19区，E-20～25区，F～H-24・25区

表土剥ぎ（重機使用），IIa層掘り下げ，IIb層掘り下げ，土坑（SK52，53）掘り下げ

F・G-38・39区

表土剥ぎ（重機使用），IIa層掘り下げ，IIb層掘り下げ，遺構検出，地形測量，土層断面図作成，写真撮影，ピット実測，埋め戻し

25日 安全パトロール

監理業務 立神文化財主事（県文化財課）

現地調査 有馬係長

6月

D～F-19～25区，G・H-18～20区，G～I-24・25区

IIb層掘り下げ，III層掘り下げ

竪穴建物跡（SI1・2・3）溝状遺構（SD1・2）土坑（SK52・54・56・57）ピット（SP122～127）不明遺構（SX29）調査，先行トレンチ，写真撮影

H・I-74～76区（調査区3）

表土剥ぎ（重機使用），IIa層掘り下げ

現地視察 中村センター長

現場指導 福永調査課長

現地調査 有馬係長

7月

E～H-18・19区，D～H-19・20区，D～F-21～25区，G～I-24・25区

IIa層掘り下げ，III層掘り下げ，トレンチ拡張，調査区実測，セクションポイント実測

竪穴建物跡（SI3）土坑（SK60・68）ピット（SP）調査

H・I-74～76区（調査区3）

IIa層掘り下げ

土坑（SK61～67，70～75）ピット（SP）調査

6日 空中写真撮影

28日 埋め戻し

調査終了

監理業務 立神文化財主事

監理業務 西園第2調査係長（埋文センター）

現地視察 中村センター長

現場指導 福永調査課長

現地指導 中島総務課長

現地調査 有馬係長

鹿児島国道事務所来跡

令和3年度（民活）

10月

D～I-25～37区（調査区①）

表土剥ぎ（重機使用），IIa層掘り下げ，IIb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査

D～H-69～74区（調査区②）

表土剥ぎ（重機使用），IIa層掘り下げ，IIb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査

現地視察 中村センター長

現場指導 中島総務課長

現場指導 福永調査課長

現地調査 有馬係長

11月

D～G-25～30区

IIb層掘り下げ，遺構調査

G～I-31～34区

IIa層掘り下げ，IIb層掘り下げ，遺構調査

溝状遺構（SD5）ピット（SP）調査掘立柱建物跡（SB3～8）写真撮影

D～H-69～74区

IIb層掘り下げ

遺構検出，遺構調査，ピット調査，写真撮影

8日 安全パトロール

監理業務 横手係長（県文化財課）

監理業務 寺原調査課長（埋文センター）

現地視察 中村センター長

12月

D～G-25～30区

IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構調査, 写真撮影, 実測, 掘り下げ

G～I-31～34区

IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構調査, 写真撮影, 実測, 掘り下げ

D～H-69～74区

IIb層掘り下げ, 遺構検出, 遺構調査, 土坑 (SK1001～1019) 炉跡 (SL1001) ピット (SP) 調査, 写真撮影, 実測, 掘り下げ

4日 現地説明会

監理業務 立神文化財主事 (県文化財課)

現地視察 中村センター長

現場指導 福永調査課長 中島総務課長

現地調査 永濱係長 有馬係長 黒川係長

国土交通省来跡

1月

D～G-25～30区

III層掘り下げ, 遺構調査, 写真撮影, 地形測量, 埋め戻し

G～I-31～34区

III層掘り下げ, 遺構調査, 写真撮影, 地形測量, 埋め戻し

D～H-69～74区

III層掘り下げ, 遺構検出, 遺構調査, 写真撮影, 実測, 掘り下げ

14日 空中写真撮影

埋め戻し

調査終了

現地視察 中村センター長

現場指導 福永調査課長

現地調査 永濱係長 有馬係長 黒川係長

令和4年度

D～I-52～70区 (未買地を除く)

表土剥ぎ (重機使用)

5月

D～F-66～70区

IIa～V層, 表土剥ぎ後の精査, 遺構検出, 写真撮影, IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構調査
溝状遺構 (SD11・12) 土坑 (SK81・82) 調査

現地視察 中村センター長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

27日 安全パトロール

6月

D～F-63～70区

IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構調査, 写真撮影, 掘立柱建物跡 (SB16, 竪穴建物跡SI7) 溝状遺構 (SD11・12) 土坑 (SK81～84) ピット (SP) 調査

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

7月

D～F-56～66区

IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構検出, 遺構調査, 写真撮影, 集石 (SS2) 掘立柱建物跡 (SB16) 竪穴建物跡 (SI7) 溝状遺構 (SD11・12・13) 土坑 (SK81～84) ピット (SP) 調査

現地視察 中村センター長

現場指導 三垣調査課長

監理業務 黒川第1調査係長 (埋文センター)

現地調査 川口係長

8月

D～F-56～70区

IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構検出, 遺構調査, 写真撮影, 溝状遺構 (SD13・14) ピット (SP) 調査

D・E-48～51区

表土剥ぎ (重機使用)

24日 現地指導 佐藤 亜聖氏 (滋賀県立大学)

現地調査 川口係長

9月

D～G-59～70区

IIa層掘り下げ, IIb層掘り下げ, 遺構検出, 遺構調査, 写真撮影, 溝状遺構 (SD11・12) ピット (SP) 調査

E・F-49～59区

III・IV層掘り下げ

D・E-48～52区

表土剥ぎ (重機使用), IV層掘り下げ

1日 遺構実測委託開始 (イビソク)

現地視察 中村センター長

現地視察 中島総務課長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

10月

D～G-59～70区

II層掘り下げ, III層掘り下げ, 遺構検出, 遺構調査, 写真撮影, 集石 (SS2) 溝状遺構 (SD12・13) ピット (SP) 調査

E～G-49～54区

表土剥ぎ (重機使用), III層掘り下げ

D・E-62・63区

表土剥ぎ (重機使用)

現地視察 中村センター長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

11月

G～I-51～61区

Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，土坑(SK89)調査

G～I-52～61区

表土剥ぎ（重機使用），Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，炉跡（SL101～105）土坑（SK89・91・92）溝状遺構（SD17・18）調査

D・E-62・63区

溝状遺構（SD13）調査

E-26区（飛び地）

溝状遺構調査

現地視察 中村センター長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

12月

H・I-56～58区

表土剥ぎ（重機使用）Ⅱ層掘り下げ，

D～F-49～58区

近世遺構調査

溝状遺構（SD15）調査

G～I-51～61区

Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，炉跡（SL102～112）土坑（SK93～95）溝状遺構（SD17・18）ピット（SP）調査

E・F-49・50，56～59区

Ⅳ層掘り下げ

3日 現地説明会

7日 空中写真撮影

現地視察 中村センター長

現地視察 中島総務課長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

現地調査 平係長

1月

F-55区

表土剥ぎ（重機使用）

G～I-55～58区

Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，掘立柱建物跡（SB23・24）土坑（SK107）炉跡（SL102）溝状遺構（SD17・18）調査

埋め戻し

調査終了

現地視察 中村センター長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 川口係長

令和5年度

8月

調査開始準備，調査区環境整備

9月

G～I-59～62区

表土剥ぎ（重機使用）

H・I-59～62区

Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，集石（SS501・502）土坑（SK501）溝状遺構（SD18）ピット（SP）調査

現地視察 寺原センター長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 上床係長

10月

G～I-59～61区

Ⅲ・Ⅳ層調査，遺構調査，写真撮影，集石（SS502・504・505）土坑（SK502）溝状遺構（SD15）ピット（SP）調査

G～I-62区

Ⅲ・Ⅳ層調査，遺構調査，写真撮影，溝状遺構（SD15）

ピット（SP）調査

G～I-63・64区

表土剥ぎ，Ⅲ・Ⅳ層調査，ピット調査

現地調査 上床係長

現地調査 川口係長

11月

G～I-63～66区

Ⅲ・Ⅳ層調査，遺構調査，写真撮影，集石（SS502・506）土坑（SK501・503～506）溝状遺構（SD13・15）

ピット（SP）調査

現地確認 脇田総務課長

現場指導 三垣調査課長

現地調査 上床係長

現地調査 西園係長

12月

G～I-63～66区

遺構調査，写真撮影，土坑（SK505・506）溝状遺構（SD13・18・19）調査，地形コンタ図作成

監理業務 馬籠文化財主事（県文化財課）

現場指導 三垣調査課長

現地調査 上床係長

2 現地説明会について

北山遺跡では，調査成果の公表と文化財保護の意識向上を目的として，令和2年度から令和4年度にかけて現地説明会を開催した。

現地説明会の概要

令和2年度

開催日時：令和2年12月5日（土）13:00～15:30

参加者数：約130人



主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
(古墳から中世の土器・陶磁器・石鍋等)



主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
(古墳から中世の土器・土師器・陶磁器等)

令和3年度

開催日時：令和3年12月4日(土) 13:00～15:30
参加者数：約100人



主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
(古墳から中世の土器・土師器・陶磁器等)

令和4年度

開催日時：令和4年12月3日(土) 13:00～15:30
参加者数：約150人

第4節 整理・報告書作成の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、調査センターで実施した。

令和3年度は、出土遺物の水洗い、注記、遺物の仕分けなどの基礎的作業、及び遺構の図面チェック・配置図作成、原稿執筆等を実施した。

令和4年度は、注記、遺物の仕分けなどの基礎的作業、遺物の実測及び拓本、トレース、遺構のトレース、レイアウト、写真撮影、原稿執筆等の報告書作成業務及び遺物収納を実施した。

令和5年度は、注記、遺物の仕分けなどの基礎的作業、遺物の実測及び拓本、トレース、遺構のトレース、レイアウト、原稿執筆等を実施した。

整理・報告書作成作業に関する調査組織及び整理作業の経過は以下のとおりである。

令和3年度

調査組織

事業主体 国土交通省

九州地方整備局鹿児島国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

センター長

中村 和美

調査企画 総務課長兼総務係長

中島 治

調査課長

福永 修一

調査第二係長

有馬 孝一

調査担当 文化財専門員

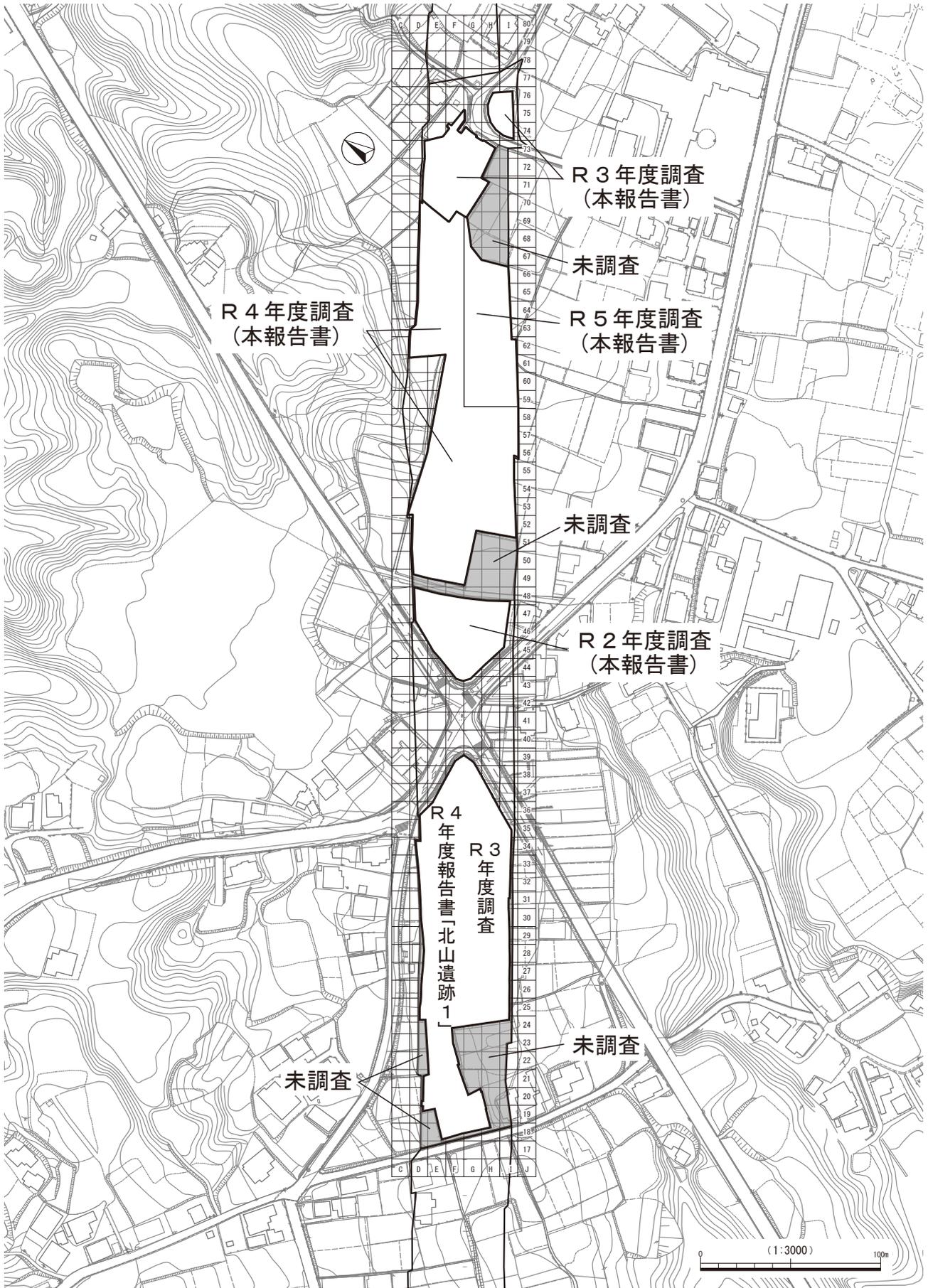
肥後 弘章

文化財専門員

小田 裕人

文化財調査員

池畑 耕一



第2図 発掘調査の進捗図

事務担当 主 事 上園 慶子
事業推進員 市成 英加

作業の経過

遺構・・・・・・図面チェック, 遺構配置図作成
遺物・・・・・・水洗い, 注記, 分類, 接合
土層断面・・・図面チェック
原稿執筆

報告書作成指導委員会 調査課長ほか8名

10月5日・11月4日・2月1日

報告書作成検討委員会 センター長ほか5名

10月13日・11月10日・2月9日

令和4年度

調査組織

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 中村 和美
調査企画 総務課長兼総務係長 中島 治
調査課長 三垣 恵一
調査第二係長 川口 雅之
調査担当 文化財専門員 肥後 弘章
事務担当 主 事 上園 慶子
事業推進員 市成 英加
〃 今掛 美子

作業の経過

令和4年度刊行「北山遺跡1」に伴う作業
遺構・・・・・・レイアウト, 遺構配置図作成
遺物・・・・・・注記, 分類実測, 拓本, 復元, トレース, トレースチェック, レイアウト, 遺物観察表作成
土層断面・・・図面チェック, トレースチェック, レイアウト
図版・・・・・・レイアウト(現場・遺物), 遺物写真撮影
原稿執筆・校正
遺物・写真・図面等の整理及び収納
自然科学分析委託・・・年代測定分析2件
整理指導 佐藤 亜聖氏(滋賀県立大学教授)
永山 修一氏(ラ・サール高等学校教諭)
報告書作成指導委員会 調査課長ほか8名
6月7日・8月3日・10月4日・11月9日・
11月21日
報告書作成検討委員会 センター長ほか5名
6月10日・8月8日・11月24日

令和5年度

調査組織

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 寺原 徹
調査企画 総務課長兼総務係長 脇田 清幸
調査課長 三垣 恵一
調査第三係長 上床 真
調査担当 文化財専門員 藤崎 光洋
〃 田上 俊一
〃 (4月～10月)
〃 山川 正樹
〃 (1月～3月)
文化財調査員 野田 清志
(4月～8月, 1～3月)
事務担当 主 事 上園 慶子
事業推進員 今掛 美子

作業の経過

遺構・・・・・・図面チェック
遺物・・・・・・注記, 分類実測, 拓本, 復元, トレース, トレースチェック, 遺物観察表作成
土層断面・・・図面チェック
自然科学分析委託・・・年代測定分析30件, 樹種同定関係
24点, 鉄関係76点
整理指導 佐藤 亜聖氏(滋賀県立大学教授)
續 伸一郎氏(堺市文化財課技術職員)
報告書作成指導委員会 調査課長ほか8名
6月13日・8月2日・10月4日・11月7日・
2月6日
報告書作成検討委員会 センター長ほか5名
6月10日・8月8日・10月6日・11月7日・
2月9日

令和6年度

調査組織

事業主体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 寺原 徹
調査企画 総務課長兼総務係長 脇田 清幸
調査課長 三垣 恵一
調査第三係長 上床 真

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

北山遺跡は、阿久根市山下・波留に位置し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地上に所在する。遺跡周辺の阿久根市山下は愛宕山山麓に台地状に広がり、北山遺跡はその台地の中心部にあたる。現在の地形はほぼ平坦で水平であるが、古い時代の地形には若干の起伏があり、全体として北から西へ緩く傾斜する。

遺跡の所在する阿久根市は、1889（明治22）年に町村制の施行により阿久根村として誕生し、1952（昭和27）年4月に阿久根市となった。その後、1955（昭和30）年には、隣接の三笠町と合併した。市域は東西約11km、南北約22kmで、面積は134.28km²、世帯数9,735世帯、人口18,538人である（令和5年12月末時点）。鹿児島県の北西部に位置し、東経130度12分、北緯32度1分の地域にある。市の境界は、北に日本三大潮流として名高い黒之瀬戸を隔てて長島町と相対し、東は出水市、南は薩摩川内市と接する。西は40kmに及ぶ屈曲に富んだ海岸線で東シナ海に面している。

市の南東部には、北薩地域最高峰1066mの紫尾山を含む標高400mの山々からなる出水山地・紫尾山系が連なる。北部には標高394mに達する笠山の山塊があり、山地の多い地形である。

東部の出水山地は、四万十層からなり、これらを源に高松川・折口川・尻無川・大川等、数本の川が東シナ海へと注ぐ。北部の山地は、中新世～更新世火山性堆積物からなり、両者の山地をつなぐようにして、阿久根平野と折多平野の二つの平野がある。いずれも沖積作用と隆起作用によって形成された平野で、本来は湿地状であった場所が多い。阿久根平野が、市の行政機関や商業地が集中する市街地であるのに対して、折多平野は、農業を中心とする市の穀倉地帯といえる。

一方、市の西部は、東シナ海に面し、約40kmに及ぶ海岸線は変化に富み、美しい自然の景観を生んでいる。特に牛之浜海岸は、県の名勝に指定され、海岸に露出する岩石は、緑色凝灰岩や泥岩、砂岩の層がいくつも複雑にからみあったメランジ堆積物として美しい文様が見られる。

また阿久根湾には島が点在し、特に県立公園に指定される阿久根大島は日本の水浴場55選等に指定されており、松林が繁茂し、野生のマガシカが住むなど、夏季は避暑地やマリンスポーツでにぎわいを見せてきた。沿岸は、漁業資源に富み、阿久根港・黒野浜港・倉津港などの天然の良港があり、漁港以外でも古来より外国との貿易港としても繁栄してきた。

気候は、黒潮の影響を受ける沿岸部は、温暖で降雨量

が多く、全体的に降霜も少なく、ハマジンチョウ、ヘゴ等の亜熱帯性の植物も越冬している。一方で出水山地の影響により、緯度の割に冬季の最低気温は低く、日照時間も少ない。

第2節 歴史的環境

阿久根市は、分布調査等により埋蔵文化財包蔵地として57箇所程が確認されている。特に、阿久根平野と折多平野周辺の台地及び丘陵に集中してみられる。

阿久根市の遺跡は旧石器時代から確認されている。旧石器時代は、折多平野最深部の微高地を中心に赤剥遺跡、日暗遺跡、陣之尾遺跡の3か所が確認され、細石刃や細石刃核等が出土している。

縄文時代になると、市内各所で縄文土器が確認される。旧石器時代と同様に平野周辺の微高地に遺跡が多くみられ、縄文前期の土器や磨石が発見されている波留貝塚や、縄文後期の土器や石鏃が発見されている宮脇遺跡、古里遺跡等、計31遺跡が確認されている。阿久根大島でも、曾畑式土器や阿高式土器が発見されており、縄文時代前期から中期にかけて海を利用した交通も注目される。弥生時代の遺跡は、脇本地区で弥生土器や夜臼式土器片が確認されているが、これまで調査例が少ない。

古墳時代になると、4世紀代の竪穴式石室をもつ鳥越古墳や、県指定史跡となっている6世紀後半の横穴式石室と地下式板石積墓（石棺墓）が隣接する脇本古墳群があり、県内でも有数の古墳築造地域として知られ、須恵器や土師器も多数確認されているが、大部分は未調査である。しかし、少なくともこの地域に住む一部族が、大和国家の支配体制に組み込まれた可能性を示す。

古代では、山下・波留地区を中心とした台地上に諏訪ノ前遺跡のほか10遺跡が確認されている。この地域は、出水郡に属し、延喜式に記載の宿駅である英祢駅の比定地の1つとされている。北部の脇本地区、黒之瀬戸は万葉集の伴旅人の歌にも詠まれるほどで、平安時代中頃まで大宰府と薩摩・大隅を結ぶ海上交通の要所であった。平安時代末期、平季基の末裔・神崎成兼が英祢姓（のちに莫祢と表記）を名乗り、英祢院の院司として、阿久根周辺の地を支配するようになった。その集落地とされた南方神社東側の角地区から多くの素焼きの椀や鉢が出土しており、古代から中世にかけて、阿久根の中心的地域であったとされる。

中世では、本遺跡も合わせて26遺跡が確認されている。市街地東方1.5kmに位置する愛宕山周辺に山城が築かれ、この中に通称・城山と呼ばれる莫祢城が含まれる。莫祢城は、三代莫祢成光の時（12世紀頃）に、戦略的価値

値低下のために波留地区（阿久根中学校周辺）の賀喜城から移り、その後、莫祢氏代々の居城となった山城である（「阿久根市誌」より）。その居所も山下馬場地区に移し、現在も山下小学校東側には莫祢氏初代から三代までの供養塔とされる五輪塔が残されている。莫祢城の山麓地区は、現在でも「麓」地区と呼ばれ、所々に石垣等が見られる。この麓付近は、中・近世を中心に多くの遺跡が、集中する地域となっている。

莫祢城以外にも莫祢氏やその一族による中之城跡、新城跡、大石城跡、小田城跡など複数の城址が山下・波留及び田代・鶴川内地区に点在する。天然の地形を利用した小規模な野城で、時期は中世初期（鎌倉時代）及び南北朝時代のもので大部分である。

また、本遺跡を含む出水郡は、15世紀後半から薩州島津氏の所領となり、この頃その家臣となった莫祢氏は阿久根氏と改め、地名も阿久根へと変化した。16世紀末には、薩州島津家は滅び、阿久根氏も各地に離散したとされ、豊臣秀吉の天領を経て、まもなく島津氏に与えられ島津本家の領有となった。

また、この時代の阿久根は、倭寇の根拠地の一つとされ、明国と関係を持ち、室町幕府の権威が失墜した応仁の乱以降には糸印貿易、薩州島津氏によるルソン貿易、またスペインやポルトガル、琉球など広く海外貿易の主要な港の役割を果たすようになっていた。ポルトガル船船長の墓とされる「とっぽどんの墓」や阿久根砲等は、それらに関連する資料であり、現在、阿久根市名産の阿久根文旦も明との密貿易船によってもたらされたものである。

近世では、関ヶ原の戦い後に徳川家康との間で和解した島津家久が、江戸幕府の統制下で薩摩藩主となった。藩内では外城制が敷かれ、出水地域には阿久根・高尾野・出水の三外城が置かれ、のちに野田・長島を加え、五か外城となった。外城（のちの郷）には藩主の代理者である地頭がおかれ、地域の警備・行政を委任され、地方行政の中心となっていった。外城の中心地は麓とよばれ、地頭の宿所である地頭仮屋が置かれた。阿久根では、初めは莫祢城下の山下地区に置かれたが、元禄年間に波留地区小牟田（現在の栄町）に移され、集落もそれに伴い波留・高松・栄町地区に移ったという。

阿久根は古くから海上交通の要所であったことを上述したが、近世に入ると、各藩と幕府との関係が密接になり、国内では江戸に通じる主要道や領内の通路や宿場なども陸上交通が整えられた。鹿児島城を基点に宮崎に出る東目筋や、薩摩半島から出水（出水筋）を経て九州西岸を北上する小倉筋などが整備された。それぞれが海路で大坂にまで通じており、その中で阿久根は、出水筋の主要な宿場の1つとされ、地頭仮屋に近い本町に、それ以前は山下地区がその中心であったという。

海上交通では明からの帰化人・河南源兵衛一家が藩御用商人として離島及び琉球方面との貿易を行うようになり、阿久根は琉球貿易や黒砂糖運搬の基地として栄えた。沖合の桑島周辺では鎖国中でも唐船との密貿易もさかんに行われていたという。

現在残る遺跡として、中之城跡からは、近世の肥前系磁器、薩摩焼等が出土しており、他に調査された遺跡としては脇本窯、楞巖寺（りょうごんじ）跡等がある。これらの遺跡は、ほとんどが分布調査によって把握され、複数の時代にわたって確認される場合が多い。

本遺跡は、昭和56（1981）年の広域営農団地農道整備事業（北薩オレンジロード建設）、平成8（1996）年の宅地造成に伴い、阿久根市教育委員会による本調査と確認調査が行われている。その際、縄文時代早期、古代、中世、近世の遺構、遺物が発見されている。

－引用・参考文献－

阿久根市

1974『阿久根市誌』阿久根市誌編纂委員会編

阿久根市教育委員会

1982『北山遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

1992『鳥越古墳群』埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

1997『鳥越古墳群 大蔵庵遺跡・北山遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

鹿児島県教育委員会

1997『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（VI）』埋蔵文化財調査報告書（72）

2012『陣之尾遺跡・陣之尾埜跡 上野畑遺跡・広段遺跡・北山田遺跡』発掘調査報告書（167）

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2014『中郡遺跡群』埋蔵文化財調査センター報告書（1）

2023『北山遺跡1』埋蔵文化財調査センター報告書（51）

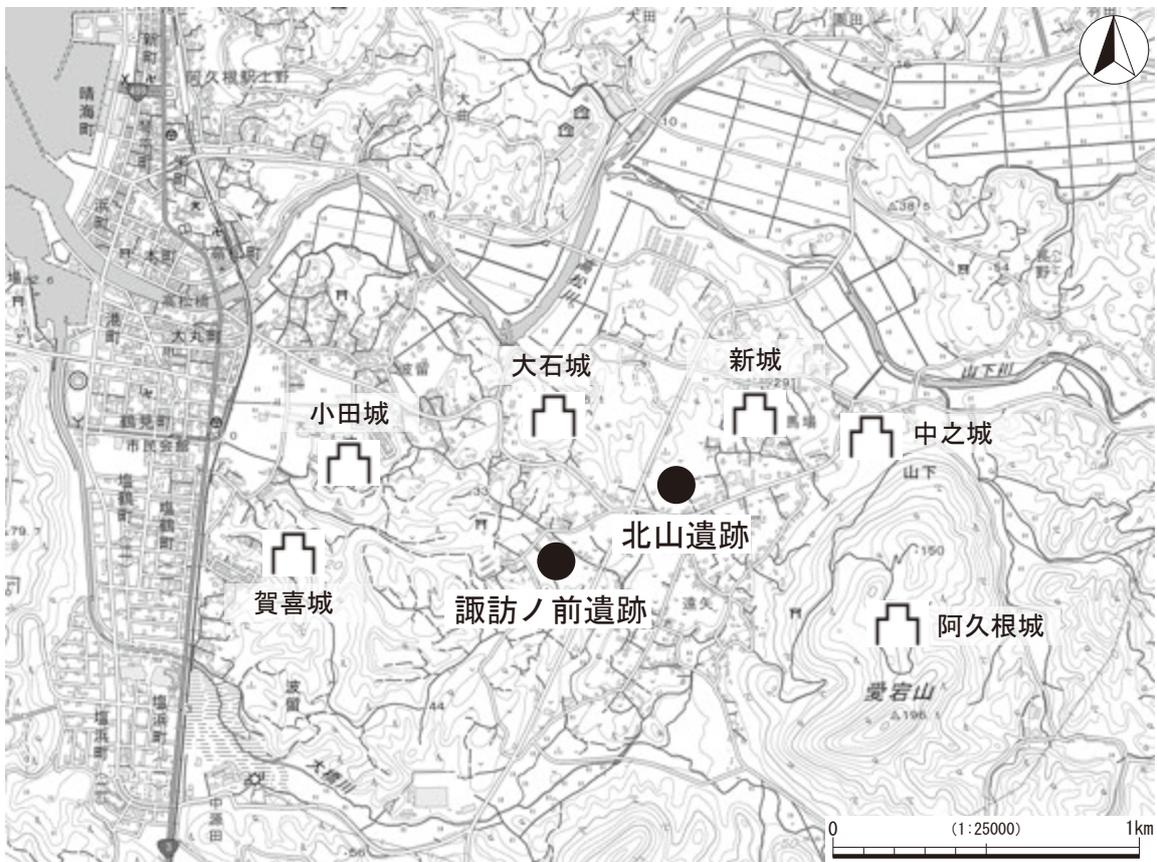
藤崎琢郎2024「鎌倉・室町時代における莫祢（阿久根）一族と阿久根・川内地方」薩摩川内郷土史研究会『千台』第52号



第3図 北山遺跡周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

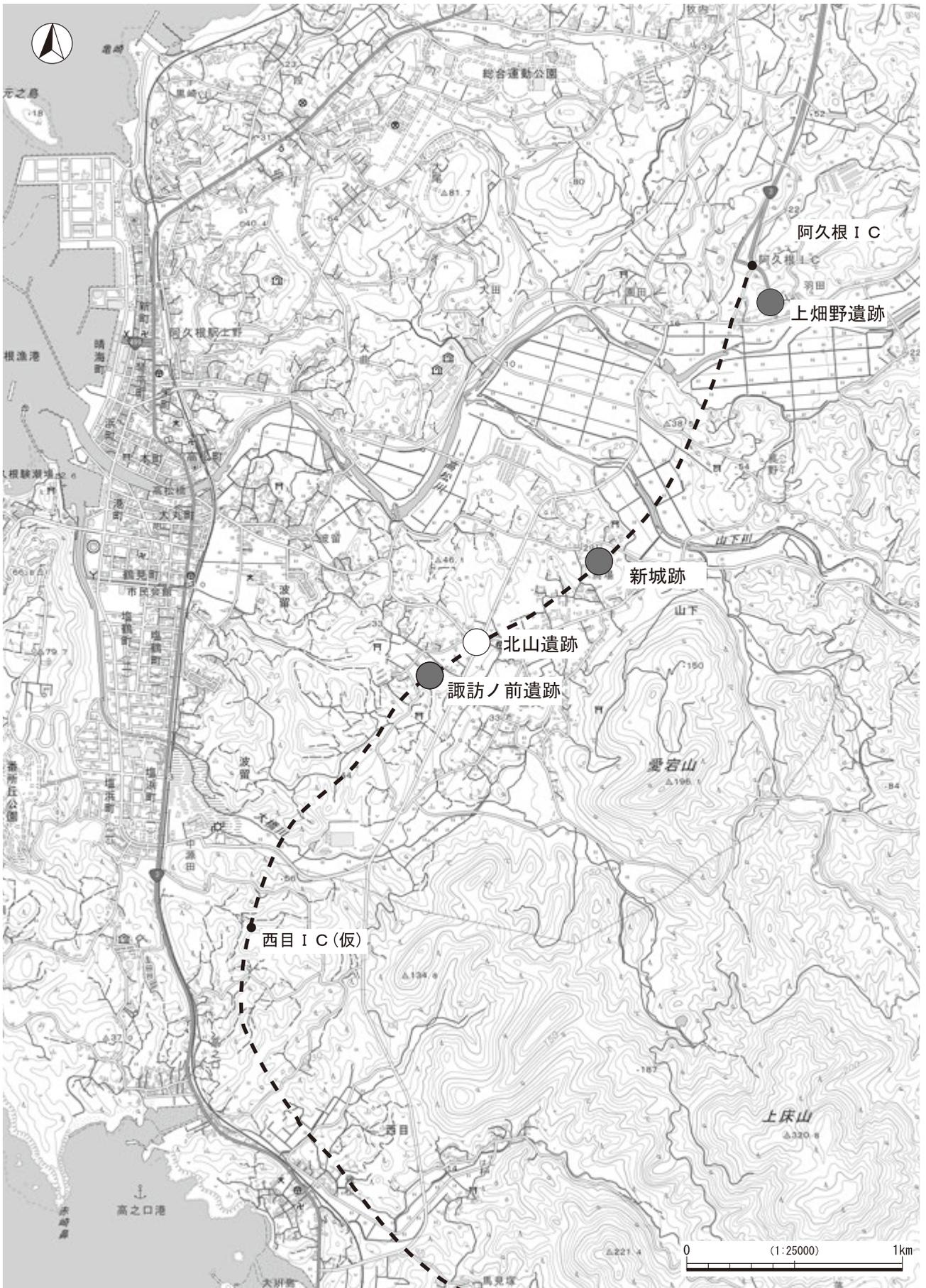
番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種別	主な時代	
1	206	34	北山	鹿児島県阿久根市山下字北山	散布地	中世
2	206	21	新城跡	鹿児島県阿久根市山下新城	城館跡	中世
3	206	38	諏訪ノ前	鹿児島県阿久根市波留字諏訪ノ前	散布地	古代, 中世
4	206	8	楞巖寺跡	鹿児島県阿久根市山下	社寺跡	中世, 中世室町
5	206	39	下谷	鹿児島県阿久根市山下字下谷	散布地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世
6	206	9	阿久根城跡	鹿児島県阿久根市山下峰	城館跡	中世
7	206	22	中之城跡	鹿児島県阿久根市山下	城館跡	中世
8	206	40	葎野	鹿児島県阿久根市鶴川内葎野	散布地	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世
9	206	43	奥	鹿児島県阿久根市山下	散布地	縄文時代
10	206	37	大蔵庵	鹿児島県阿久根市波留字大蔵庵	集落跡	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世
11	206	11	大石城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
12	206	57	上野畑	鹿児島県阿久根市鶴川内	散布地	縄文時代, 古墳時代, 古代, 中世, 近世
13	206	7	大曲窯跡	鹿児島県阿久根市高松町大曲	生産遺跡	
14	206	3	波留貝塚	鹿児島県阿久根市波留1591	貝塚	縄文時代
15	206	20	小田城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
16	206	15	賀喜城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
17	206	36	鳥越古墳群	鹿児島県阿久根市瀧字鳥越	地下式板石積石室 墳丘墓(石室のみ残存)	古墳時代



第4図 北山遺跡周辺阿久根氏関連城跡位置図

第2表 阿久根 IC～西目 IC (仮) 間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	調査面積 発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	上野畑	阿久根市鶴川内 散布地	調査面積 3900㎡	報告書刊行 2012 県立埋文センター 調査報告書 167	縄文時代 ～近世	竪穴状遺構1基 掘立柱建物跡2棟 炉状遺構2基 柱穴28基 土坑1基	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁 石鏃、削器、磨製石斧、磨石
			調査期間 2009.08.03～ 2009.10.28				
上野畑遺跡は、縄文時代晩期から近世の遺構である。掘立柱建物跡や炉状遺構は当該期の生活の一端を知る資料となった。							
2	新城	阿久根市山下 字新城	本調査 6708㎡ 1098㎡	報告書刊行 2025 (公財)埋文調査 センター 59	中世	掘立柱建物跡5棟 欄列2基 土坑3基 炉跡10基 ビット72基 虎口状遺構1基 土壘1基	土師器、中世須恵器、播鉢、国産陶器 (常滑焼、古瀬戸、備前焼等)、 輸入磁器(青磁、白磁、青花等)、輸入陶器(沖繩 Ⅲ類、V類壺、東南アジア系鉢)、瓦質土器、土錘、 台石、滑石製品、鉄製品、基石、羽口、木製品
			調査期間 2022.05.11～ 2023.1.27				
			2023.11.1～ 2023.11.24	近世以降	炉跡1基 集石1基	陶器(肥前系、薩摩焼等)、 磁器(染付等)、煙管	
新城跡は、阿久根市山下に位置し、高松川左岸の標高30～35mの台地上に所在する。東側に位置する愛宕山には、中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡がある。新城跡は、その西麓の台地上に点在する山城の一つであり、中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。発掘調査では、西台地で虎口(出入口)の可能性のある大型土坑と通路状遺構から成る虎口状遺構など中世の山城の特徴を持つ遺構が発見された。虎口状遺構は、防御施設と考えられる。他にも、中世の青磁、播鉢、鉄器、近世の陶磁器、石皿などの遺物も出土した。近隣の北山遺跡や諏訪ノ前遺跡の遺構や遺物と類似点が多く、阿久根の中世の様子をつかむうえで貴重な資料である。							
3	北山	阿久根市山下 字北山	本調査 3121㎡ 4481㎡ 11549㎡ 9327㎡ 2530㎡	報告書刊行 2023・2025 (公財)埋文調査 センター 51・61	縄文時代	集石5基 土坑1基 落とし穴2基	加栗山式、小牧3A、吉田式、別府原式、政所式、 中原1類、中原2類、中原5類、塞ノ神B式、そ の他早期土器、春日式、阿高系(南福寺式含む)、 西平式、その他後晩期土器 石鏃、スクレーパー、石錐、二次加工のある剥片、 石核、打製石斧、磨製石斧、石皿、台石、砥石、 石錘、敲石、磨敲石、磨石、凹石、軽石製品、そ の他石製品
					古墳時代	-	東原式土器(甕、壺、高坏等)等
			古代		-	土師器(甕・坏・埴等)、須恵器(壺・碗等)、黒色 土器B類、越州窯系青磁、土錘、土製品、文字 資料(ヘラ書き・墨書)【ヘラ書き：土師器、墨 書：須恵器】	
			中世		掘立柱建物跡12棟 竪穴建物跡1軒 土坑35基、炉跡3基 溝状遺構8条 礫集積4基(溝内) 石列4基(溝内)	土師器(坏・皿等)、中世須恵器(東播系・産地不 明等)、瓦質土器(播鉢・火鉢・風炉等)、国産陶 器(播鉢・甕等)【備前・常滑等】、青磁(碗、皿、 坏等)【龍泉窯系・同安窯系等】、白磁(碗・皿・ 合子等)【中国を基本として朝鮮も含む】、青花 (碗・皿等)【景德鎮窯・漳州窯等】、輸入陶器 (壺・甕・瓶等)【中国南部・タイ産等】、滑石製 石鍋、石鏃(石鍋転用)、茶臼、銭貨(洪武通宝)、 天草砥石、火打石	
			近世		掘立柱建物1棟 土坑9基	陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前、古伊万里等)、	
			鍛冶・ 製鉄関連遺 構		製鉄炉4基 竪穴建物1棟 土坑13基、炉跡19基	陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前・古伊万里 等)、鉄製品、鉄滓、羽口、炉壁等	
			その他		土坑20基 炉跡7基 柱穴・ビット974基	天草砥石、打欠石、基石、硯、 銅製品、古銭、鉄製品	
北山遺跡は、阿久根市山下及び波留に位置し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地上に所在する。遺跡周辺は、古代の英祢比定地のひとつと考えられ、東側に位置する愛宕山には、中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど、古代から中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。調査区では、縄文時代から近世までの遺構・遺物の検出・出土が確認された。特に中世から近世にかけては多く、阿久根地域における有力者の集落跡と推測される。							
4	諏訪ノ前	阿久根市波留 字諏訪ノ前	本調査 6646㎡	報告書刊行 2025	縄文時代	-	曾畑式・市来式・西平式・上加世田式・三万田式 土器 石鏃、磨敲石、石斧、石錘、石製品
					古墳時代	-	成川式土器(東原式・笹貫式)
			調査期間 2023.5.08～ 2024.1.26	(公財)埋文調査 センター 60	古代	埋甕	須恵器、土師器、紡錘車、土錘
					中世	掘立柱建物跡5棟 竪穴建物跡1軒 土坑19基 トイレ遺構6基 溝状遺構2条 礫集積遺構1箇所 ビット227基 炉跡21基 段状遺構1箇所(道跡 1条含む)	須恵器(瓦質・土師質含む)、土師器、中国磁器 (青花・青磁・白磁) 陶器(備前・常滑・国外)、土錘 砥石、滑石製品、水輪 懸仏本尊、洪武通宝、角釘、指貫
					近世～近代	-	陶器(薩摩焼・備前等)、磁器(肥前系・関西系)、 土製品、青磁獅子香炉脚部
時期不詳	-	土製品、金属製品					
諏訪ノ前遺跡は阿久根市波留に所在し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約35m～30mの斜面上に立地する。遺跡周辺の地域は古代の英祢比定地であったとされる比定地のひとつであること、阿久根氏の居城である阿久根城をはじめ居城跡が点在するなど、特に古代～中世にかけて歴史的に重要な役割を果たした地域であるといえる。今回の調査では、溝状遺構、炉跡、掘立柱建物跡、土坑などが検出された。その中でも、科学分析によって裏付けられたトイレ遺構は南九州で初めての例となり貴重な成果となった。遺物は、縄文～近代までの幅広い遺物が出土しているが、中心となるのは中世後半(14世紀～16世紀頃)の貿易陶磁器や、瓦質及び土師質の播鉢・火鉢である。特筆すべきは五輪塔の水輪や懸仏の本尊などの宗教的意味合いが強い遺物が出土していることであり、阿久根氏に加え、遺跡の北西側に位置する波留南方神社との関係も深いと考えられる遺跡である。							



第 5 図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図 (1 : 25,000)

第三章 発掘調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法等、整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

調査に先立ち、本遺跡の調査区割り（グリッド）の設定を行った。鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STA No.290」と「STA No.293」を結ぶ線を基準に、調査区内に10m間隔の区画（以下、グリッドという）を設定し、この延長戦を中心に北側から南側に向かってA・B・C・D・・・列、西側から東側に向かって1・2・3・4・・・列とする調査区割りを設定し、呼称することとした。調査着手のための条件が整った部分から、発掘調査を実施した。D～I-43～48区の調査を令和2年度、D～I-17～39区及びD～I-69～76区を令和3年度、D～F-49～51区及びD～I-52～58区、D～F-59～69区を令和4年度、G～I-59～69区を令和5年度に実施した。D-55～61区及びE-57～61区の一部については、すでに攪乱されていたため、調査範囲から除外した。令和6年段階で未調査の地点が複数箇所残存する（第2図参照）。

調査は、確認調査の結果に基づき、重機で表土を除去した後、遺物包含層については人力で掘り下げ（山鋏、鋤簾、ねじり鎌、移植ごて、手鋏等の発掘道具）を行った。出土した遺物については、必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後、実測が必要なものや現位置を記録し取り上げたものを除いて、層ごとに一括で取り上げた。さらに、遺物包含層の調査と並行して、下層確認用の先行トレンチを設定し、掘り下げを行った。検出遺構については、移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し、調査進捗に応じて、検出状況、半截状況、完掘状況等の写真撮影を行い、図化作業等の記録保存を行った。さらに、無遺物層の一部を重機及び人力で除去し、基盤層が無遺物層であることを確認し調査を終了した。

調査が終了した調査区については、重機及び人力による埋め戻しを行った。

2 遺構の認定と検出方法

北山遺跡は、中世以降の土地開発等の影響で、層の堆積状況が良好でない箇所もあり、遺構の精査は、主にⅢ～Ⅵ層上面で行った。また、遺構内外で異なる土の境界をたどり、平面的に遺構の輪郭（平面プラン）を確定していった。

その後、主軸を確認し、土層確認用のベルトを設定し、遺構の掘り下げを行った。その際、埋土の色や白色軽石等の混入状況、質、硬さなどの違いを比較し掘り下げた。

さらに、遺構を検出した層や埋土状況、遺構の形態、遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

整理作業は令和3～6年度に調査センターが実施し、令和6年度に本報告書を刊行した。令和4年度に『北山遺跡1』として、令和2～5年にかけて調査を行った地点の一部であるD～I-18～39区の調査終了部分の報告書を刊行している。

遺物は水洗い、注記、接合、復元、実測、トレース、写真撮影という一連の作業を行い、手トレースおよびデジタルトレースを行いまとめた。一部の陶磁器については、令和6年度に土器実測業務委託を行った。遺構内出土遺物のうち遺構の時期と同一と考えられる遺物については、遺構ごとに掲載した。遺構は各図面やトータルステーションデータを整理、統合しながらパソコンを使ったデジタルトレースでまとめていった。

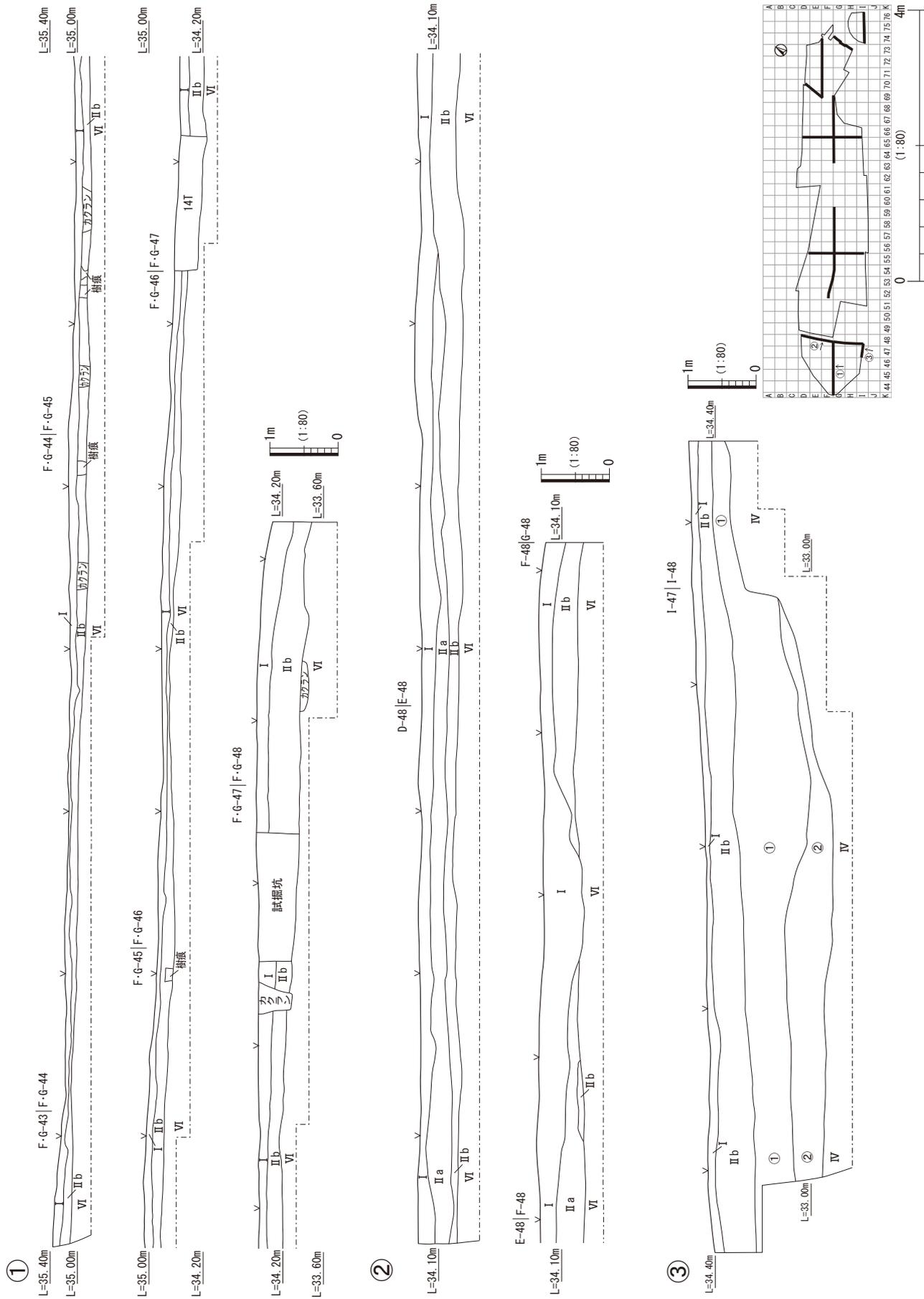
鉄製品などの保存処理が必要な遺物は、埋文センターの南の縄文調査室が保存処理を行った。

自然科学分析は、令和4～6年度にかけて年代測定、樹種同定、種実同定、テフラ分析、金属等分析業務を委託し行った。

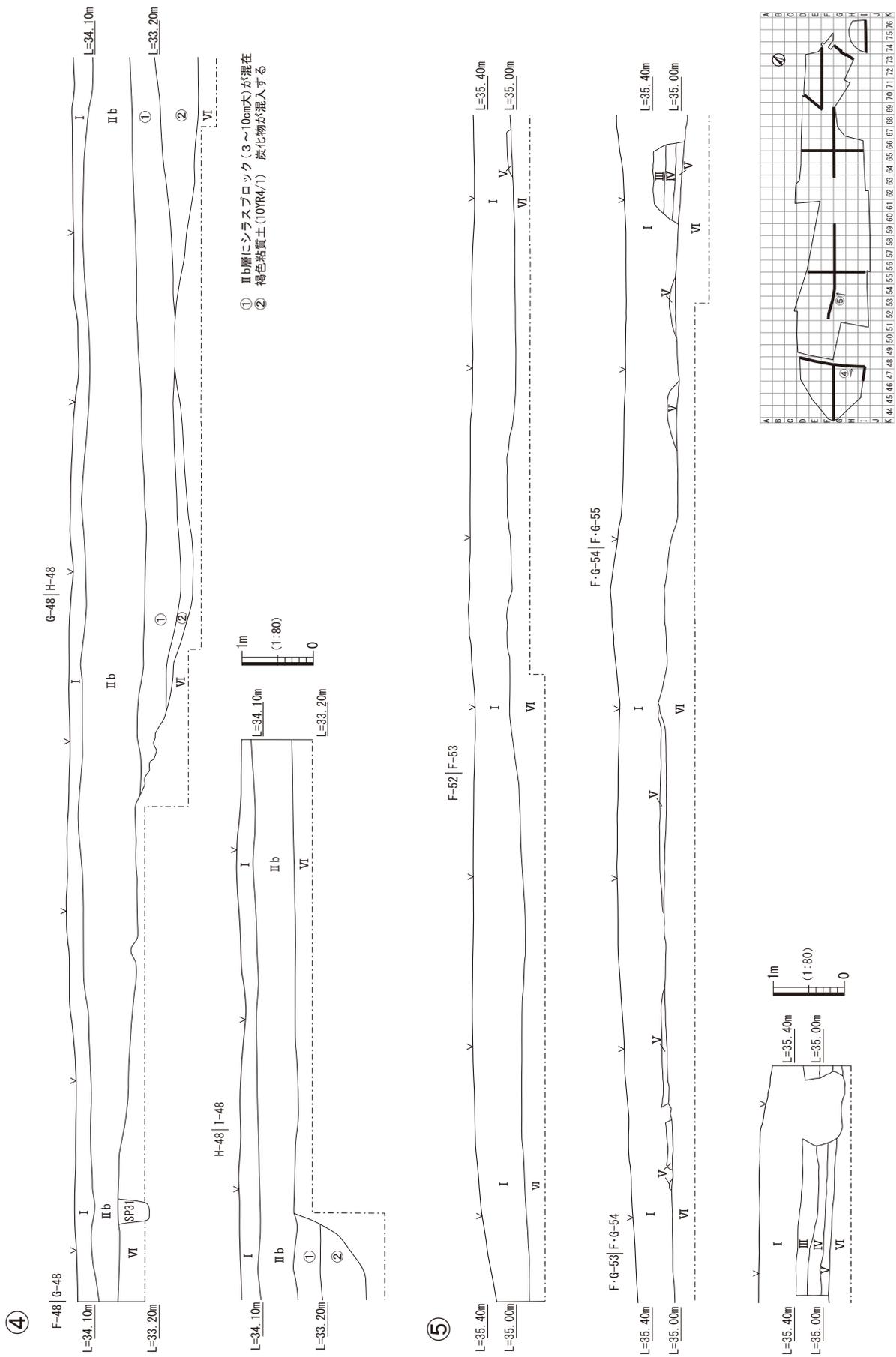
第2節 層序

本遺跡は、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地に位置する。遺跡周辺は、耕作地または住宅地として使用されている。遺跡内も農地転用や宅地造成に伴い、場所によっては土層の堆積状況が悪い。

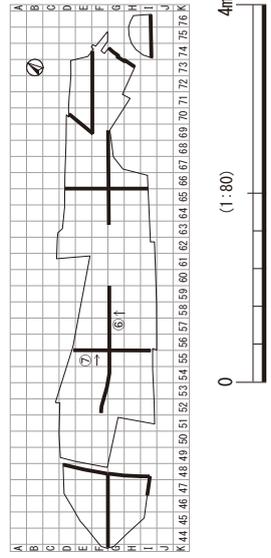
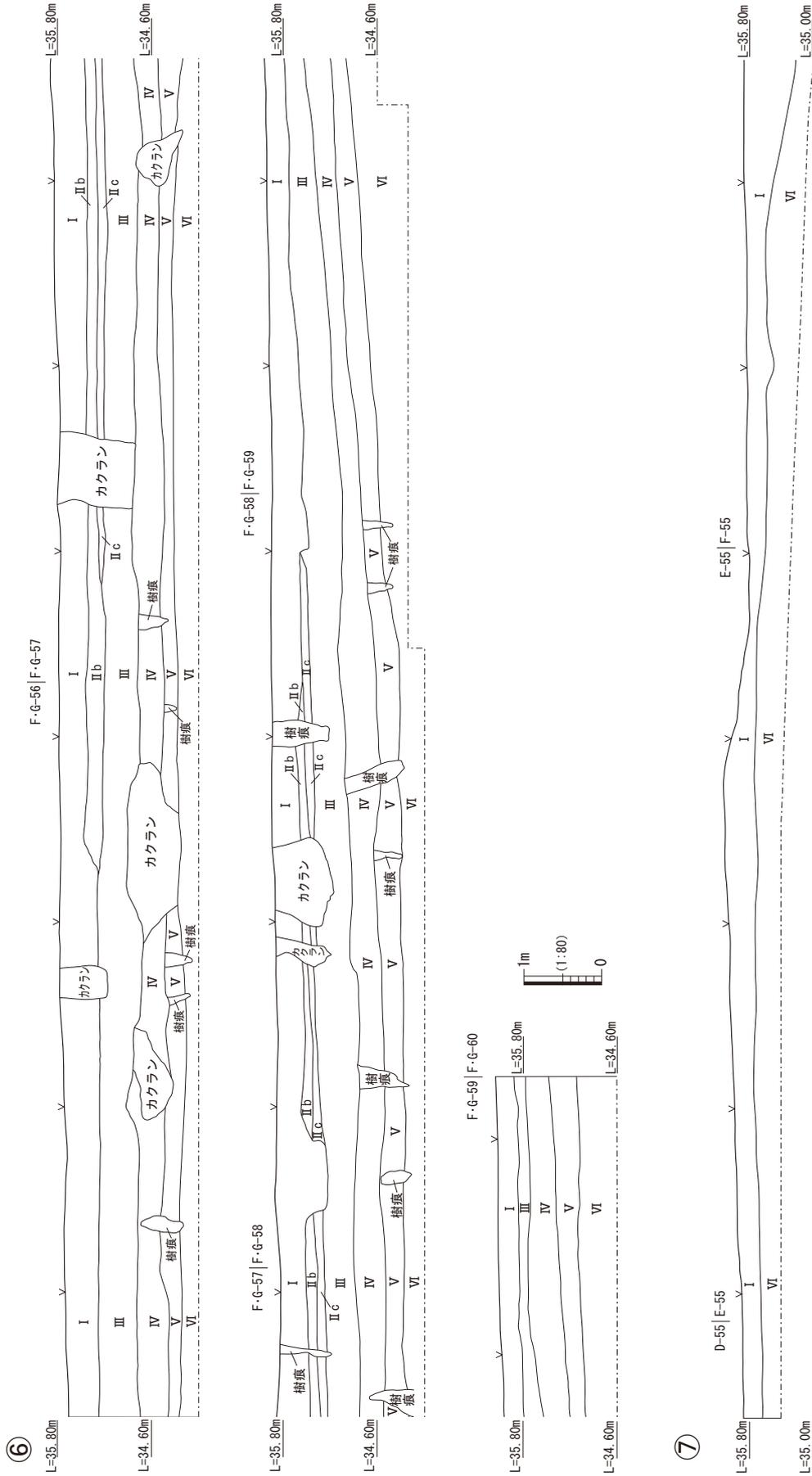
基本層序は、27ページの第3表のように整理した。表土（Ⅰ層）下のⅡa層は、残存状況が悪く調査区の西側を除いて残存状況は良好でなかった。また、Ⅱc層は、層が比較的良好に残っていた57・58区において確認できた。Ⅵ層の検出状況から、F・G-63～65区を頂点に、北・東側にはやや急に、南・西側には緩やかに傾斜する地形である。また、調査区内には小規模な谷が存在し、地点によって土層堆積状況の良好な場所も確認された。今回報告する地点では、「北山遺跡1」で報告したⅦ層（阿多鳥浜テフラ想定）は、確認できなかった。Ⅵ層（AT火山灰層）の堆積状況が良好であったためと考えられるが、Ⅵ層下に存在すると考えられるため、基本層序には掲載してある。



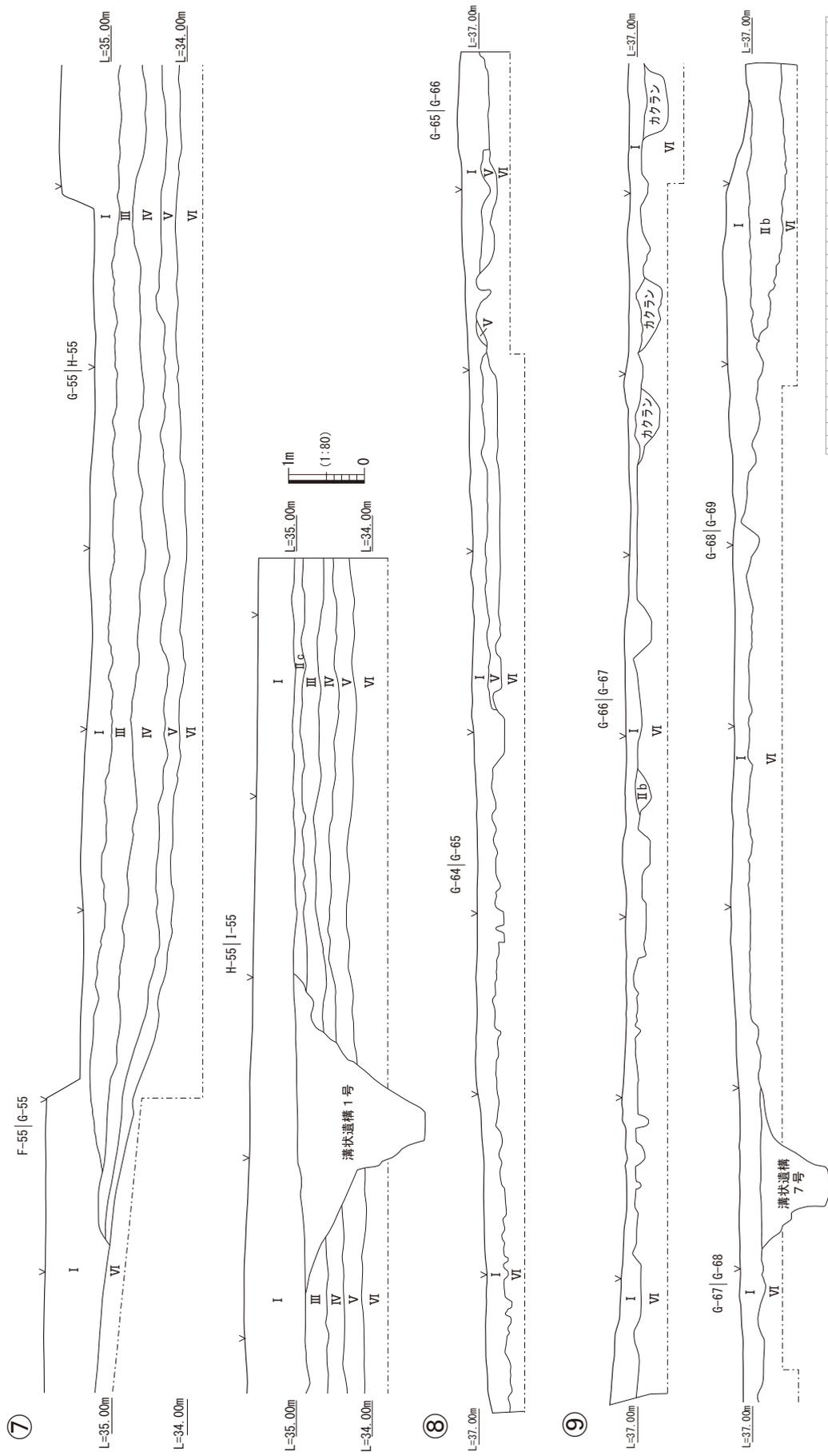
第6図 土層断面図①～③



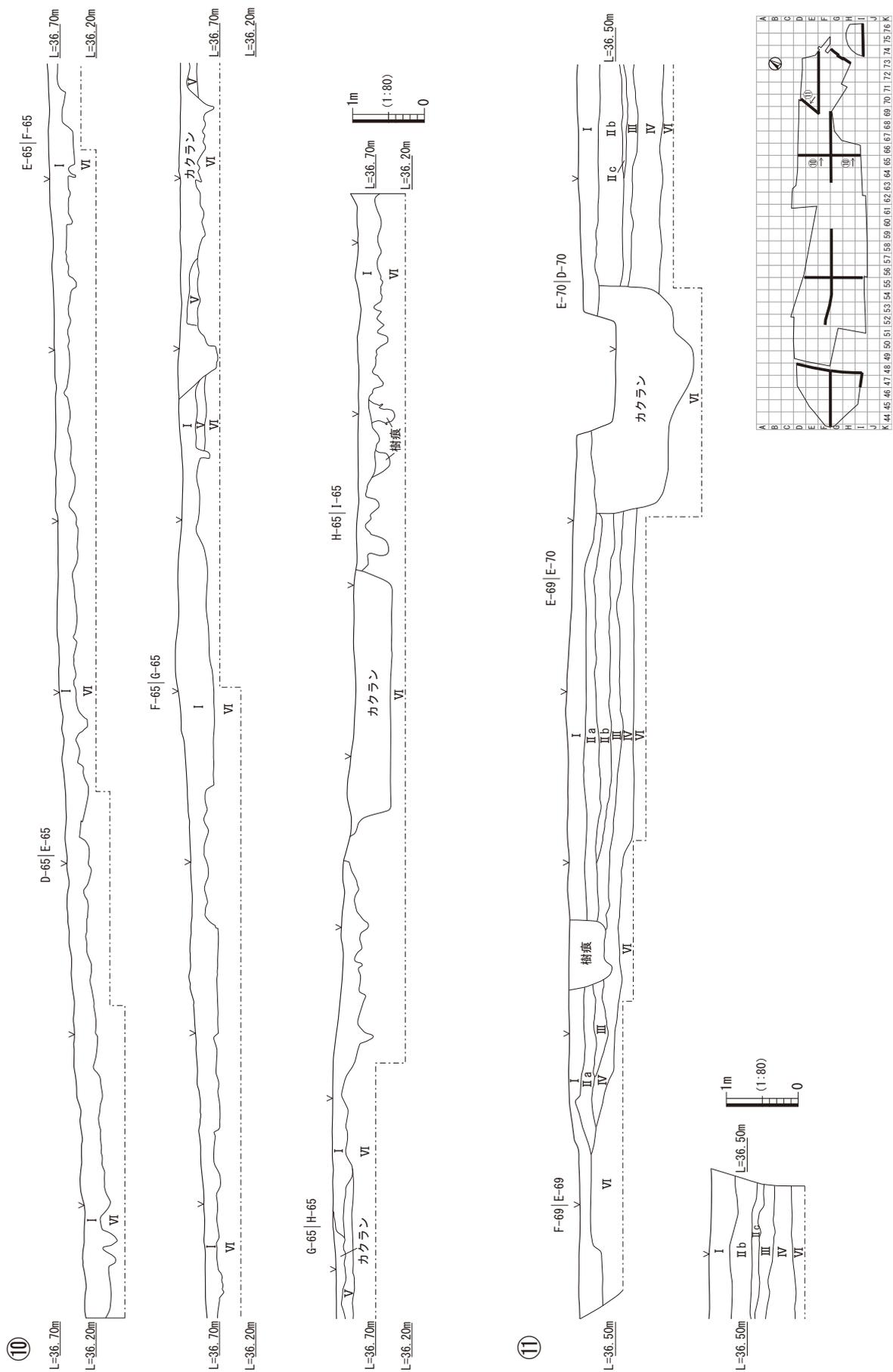
第7図 土層断面図④・⑤



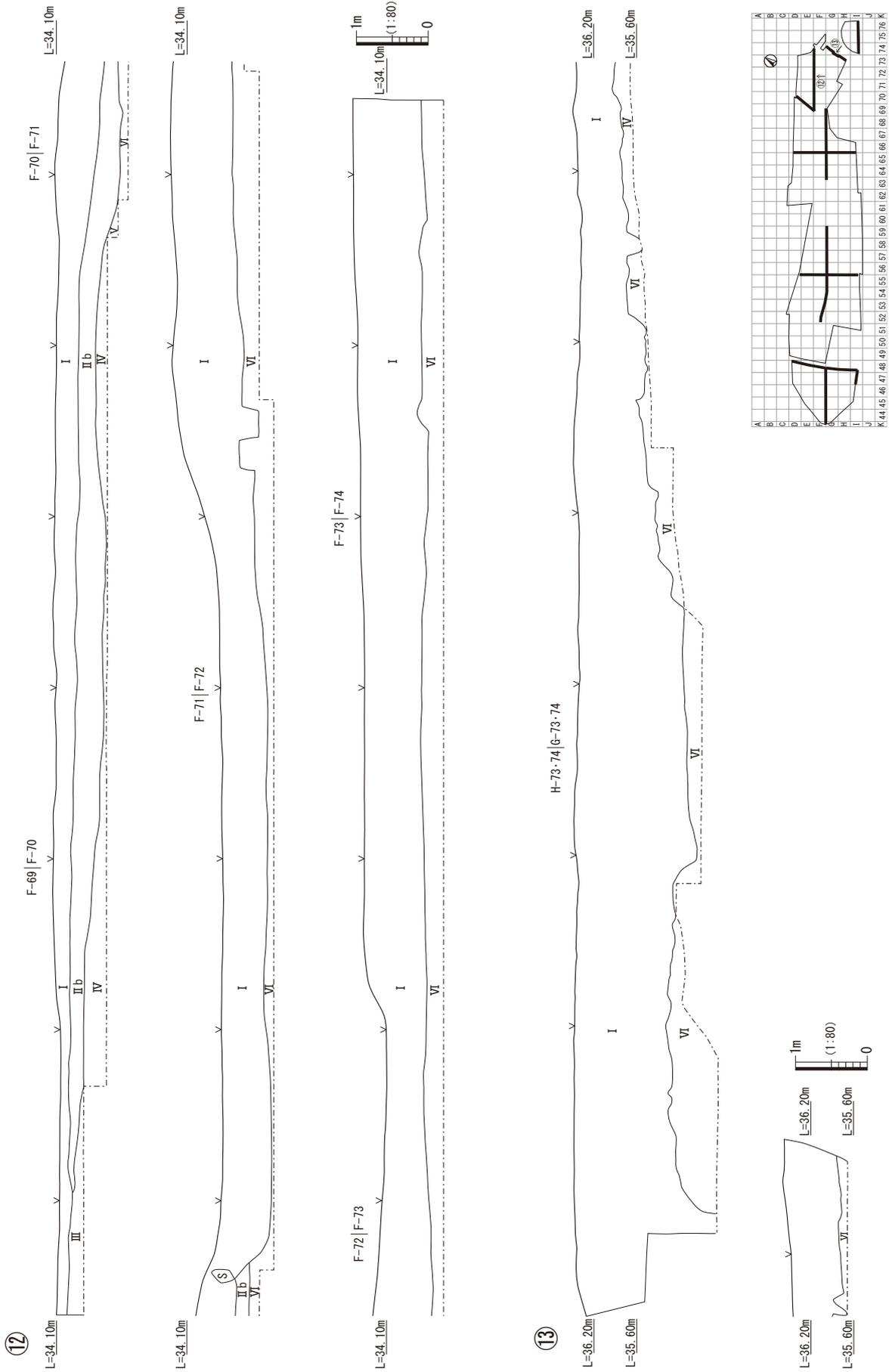
第8図 土層断面図⑥・⑦



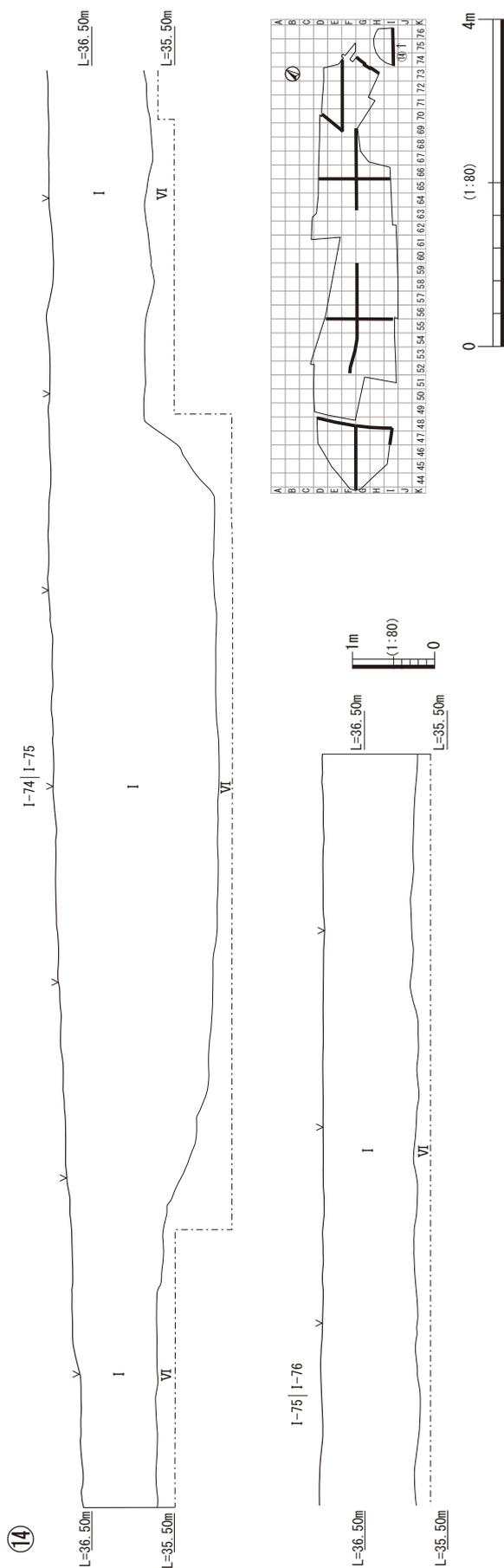
第9図 土層断面図⑦～⑨



第10図 土層断面図⑩・⑪



第11图 土層断面图⑫・⑬



第12図 土層断面図⑭

第3表 北山遺跡基本層序

I層	表土・耕作土である。 層厚：10cm～2m
IIa層	暗褐色土(7.5YR 3/4)で、白色軽石を含む。 近世の包含層である。 層厚：0～40cm
IIb層	暗褐色土(7.5YR 3/4)で、赤色小石を含む。 IIa層より硬質である。古墳から近世の包含層である。 層厚：0～80cm
IIc層	暗褐色土(10YR 3/3)で、白色軽石や赤色小石は含まない。粘性がある。層の残りがよい場所でわずかに検出できる。 層厚：0～15cm
III層	褐色土(7.5YR 3/4)で、粘性はやや低くからやや強い範囲である。縄文時代の包含層である。 層厚：0～40cm
IV層	黒褐色粘質土(7.5YR 3/2)で、1～3cm程度の黄色パミスを含む。 層厚：0～40cm
V層	褐色粘質土(7.5YR 4/6)で、1～3cm程度の黄色パミスを含む。 層厚：0～30cm
VI層	黄褐色砂質土(10YR 5/8)で、AT火山灰層である。
VII層	明赤褐色粘質土(5YR 5/8)で、2～5cm程度の小石を含む。阿多鳥浜テフラと考えられる。今回報告を行う調査区では確認できなかった。

第3節 新旧遺構対応表

調査が4年にわたっているため、調査時の遺構名は、重複が生じないように、年度ごとに継続した番号や桁数を変更し、新たに振り直している。報告書作成段階で第4表の通りピット以外の遺構は、名称変更を行った。番号の重複を避けるため、時代に関わらず同一の遺構に関しては、連番になるように番号を振った。

第4表 新旧遺構対応表

本調査 (旧名称)	報告書 (新名称)	本調査 (旧名称)	報告書 (新名称)	本調査 (旧名称)	報告書 (新名称)
SS501	集石1号	SK1003	土坑32号	SK45	土坑48号
SS505	集石2号	SK1004	土坑33号	SK46	土坑57号
SS504	集石3号	SK1013	土坑34号	SK49	炉跡6号
SS502	集石4号	SK1012	土坑35号	SK48	炉跡4号
SS 2	集石5号	SK1011	土坑36号	SK47	炉跡5号
SK505	土坑1号	SK23	炉跡1号	SX26	硬化面2
SK89	落とし穴1号	SK22	炉跡2号	SL101	炉跡7号
SK90	落とし穴2号	SL1001	炉跡3号	SL103	炉跡8号
SB 1	掘立柱建物跡1号	SD18	溝状遺構1号	SL107	炉跡9号
SX 3	土坑2号	SD18_集積1	集積1号	SL104	炉跡10号
SB 2	掘立柱建物跡2号	SD18_集積2	集積2号	SL102	炉跡11号
SX 2	土坑3号	石列1号	石列1号	SL110	炉跡12号
SB23	掘立柱建物跡3号	石列2号	石列2号	SL108	炉跡13号
SB24	掘立柱建物跡4号	階段状出入口	階段状出入口	SL109	炉跡14号
SB22	掘立柱建物跡5号	分岐点	分岐点	SL105	炉跡15号
SB19	掘立柱建物跡6号	SD17	溝状遺構2号	SL113	炉跡16号
SB17	掘立柱建物跡7号	SD15	溝状遺構3号	SL106_1	炉跡17号
SB20	掘立柱建物跡8号	SD13	溝状遺構4号	SL111	炉跡18号
SB21	掘立柱建物跡9号	集積1号	集積3号	SL112	炉跡19号
SB16	掘立柱建物跡10号	SD13内集積1号	集積4号	SK98	炉跡20号
SB25	掘立柱建物跡11号	石列3号	石列3号	SK92	土坑58号
SB26	掘立柱建物跡12号	石列4号	石列4号	SK101	炉跡21号
SI 7	竪穴建物跡1号	SD19	溝状遺構5号	SL106_2	炉跡22号
SK13	土坑4号	SD12	溝状遺構6号	SK104	土坑59号
SK12	土坑5号	SD11	溝状遺構7号	SK501	土坑60号
SK 5	土坑6号	SD1001	溝状遺構8号	SK1008	土坑61号
SK 6	土坑7号	SB27	掘立柱建物跡13号	SK1007	土坑62号
SK 3	土坑8号	SK24	土坑37号	SK1002	土坑63号
SK 7	土坑9号	SK31	土坑38号	SK1015	土坑64号
SK27	土坑10号	SK41	土坑39号	SK1019	土坑65号
SX 1	土坑11号	SK42	土坑40号	SK1014	土坑66号
SK26	土坑12号	SK50	土坑41号	SK1018	土坑67号
SK25	土坑13号	SK21	土坑42号	SK1006	土坑68号
SK18	土坑14号	SK36	土坑43号	SK1016	土坑69号
SK28	土坑15号	SK44	土坑44号	SK1009	土坑70号
SK 9・10	土坑16号	SK1001	土坑45号	SK1005	土坑71号
SX 4	土坑17号	SX23	製鉄炉1号	SK1017	土坑72号
SK 8	土坑18号	SX19	製鉄炉2号	SK1010	土坑73号
SX 5	土坑19号	SX22	製鉄炉3号	SK66	土坑74号
SK30	土坑20号	SX10	土坑51号	SK74	土坑75号
SK38	土坑21号	SX27	土坑52号	SK70	土坑76号
SK43	土坑22号	SX27内土坑	土坑53号	SK65	土坑77号
SK102	土坑23号	SX14	土坑54号	SL 1	炉跡23号
SK107	土坑24号	SX16	土坑55号	SL 2	炉跡24号
SK103	土坑25号	SX17	土坑56号	SL 3	炉跡25号
SK106	土坑26号	SX21	製鉄炉4号	SK502	炉跡26号
SK83	土坑27号	SX25	土坑49号	SL1002	炉跡27号
SK82	土坑28号	SX20	土坑50号	SL1004	炉跡28号
SK81	土坑29号	SX15	竪穴建物跡2号	SL1003	炉跡29号
SK85	土坑30号	SX 6	土坑46号	SK61	炉跡30号
SK84	土坑31号	SX 7	土坑47号		

第IV章 調査の成果

第1節 縄文時代の調査

1 調査の概要

本遺跡では、確認調査及び令和2～5年度の発掘調査の結果、縄文時代に該当する遺物包含層はⅢ・Ⅳ層であることを確認した。ただし、後世の攪乱の影響を受け、Ⅲ層からは古代・中世の遺物も含む。

調査区内は、後世の土地改良や耕地開発等の影響で削平を受け、特に調査区北側の広い全域ではⅢ層またはⅣ層まで削平され、西側の49～52区はⅥ層近くまで削平されており、一部を除くD・E区ではⅢ・Ⅳ層が確認されず、縄文時代の遺物の出土もほぼなかった。調査区南側のF～I-55～63区はⅢ層が、59～62区はⅣ層が比較的良好に残存しており、なかでも縄文時代の土器・石器の出土は、特にF～H区の南側エリアに多かった。

縄文時代の遺構としては、集石5基、土坑1基、落とし穴2基の計8つを確認した。その多くがG・H-61区周辺に集中しており、集石1基がE-65区で、落とし穴は少し西に離れたF・G-51・52区で検出した。遺構の具体的な内容は、次の項で報告する（第13～18図参照）。遺物については、縄文時代早期から晩期までの土器と石器が出土し、土器は早期のものが多くみられ、出土量は、調査面積に対して、種類は一定数あるものの削平の影響からか数量は少ない。石器は、石鏃や石錐などの剥片石器、磨製石斧、磨・敲石などの礫石器などがある。

出土区は前述の通り調査区南側に多く、土器については、時期ごとに、まとまった区域で出土する傾向が見られた。最も数が多い縄文時代早期中葉の土器は、H-60～62区とE-65区及びその隣接する区域に集中し、他では出土していない。これらのエリアはともに海拔36.0～36.4mの標高にあり、土坑や集石が検出されたエリアで、Ⅳ層の残存状態がよかったことが、出土が集中した理由と考えられる。このほか、H・I-45区周辺は縄文時代早期後葉の塞ノ神B式土器が、G・H-55・56区では縄文時代後期から晩期とみられる土器がある程度まわって出土する傾向が見られた。

石器については、土器と同じようにF～I区の調査区の南側にまばらに出土地域が広がり、G～I-52～56区での出土がやや多くなっている。なお、石器の掲載については、縄文時代の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層出土、その他の時代の包含層であるⅠ・Ⅱ層出土、縄文時代以外の遺構内出土の3つに分けて掲載した。また、時代が十分特定できていない凹石は、磨・敲石など縄文時代の石器形態に類似するものであることから、縄文時代の可能性のあるものとして、本節で掲載しているが、周辺の

遺跡の出土遺物との関連も踏まえて、石器の用途や製作時期などは、今後も検証が必要と考える。

2 遺構

ア 集石

①概要

北山遺跡で検出した集石は5基である。

この項では、報告を行うにあたって留意事項を述べる。集石遺構の分布をみると、集石5号がD-65区に位置するのを除き、他はF～H-60・61区とはほぼ同じエリアに集中している。また、集石はいずれもⅢ層下面～Ⅳ層上面で検出され、その隣接する区域のⅢ・Ⅳ層からは、縄文時代早期中葉の土器も集中して出土している。このような状況から、集石についても縄文時代早期中葉のものである可能性が高いと考える。前述したように本遺跡は削平を受け、Ⅲ・Ⅳ層が確認できるエリアは限られているため、本来はもう少し広範囲に縄文時代の遺構があった可能性も十分考えられる。

②形態分類

上野原遺跡（埋文センター2000）では、集石の形態的特徴から、次に示すように分類している。

- | |
|---|
| I類：構成礫が集中せず、掘込み部を確認できなかった集石 |
| II類：構成礫が集中するが、掘込み部を確認できなかった集石 |
| III類：構成礫が集中し、掘込み部が確認できるもので、底石や壁石などがない集石 |
| IV類：構成礫が集中し、掘込み部が確認でき、底石や壁石などの施設を伴う集石 |

本遺跡で検出した集石については、この類型に当てはめて分類した。しかし、構成礫は集中していないが、掘込み部が確認できるI類とIII類の中間にあたるものがあり、これについてはI+III類として記した。以下、集石1号～5号の詳細について報告する。なお、調査区内の西側の集石から順に1号～5号の番号を付けた。

集石1号・出土遺物（第13図 1）

集石1号は、G-60区の東西方向の緩斜面のⅣ層上面で検出した。礫は南北に約90cm、東西に約40cmの範囲に広がる。掘込みは、確認できなかった。

礫の数は9個で、径4cm～12cmの扁平礫、角礫、亜円礫で、石材は赤色砂岩と凝灰岩が混在し、平坦面にまばらに分布している。礫のうち、石器が1点あり、炭化物はなく、被熱の痕跡も見られなかった。

1は砥石または石皿の破片と考えられ、径約7cm、厚さ約2cmの板状の赤色砂岩である。表面は、ほぼ全面が丁寧に研磨されている。裏面は、中央から下部にかけて部分的に丁寧に研磨されている。下端部は欠損しており、砥石などとして使用された後に廃棄された可能性がある。

集石2号（第13図）

集石2号は、G-61区の東西方向の緩斜面のIV層上面で検出した。礫は東西に約200cm、南北に100cmの範囲で平坦に広がる。礫の数は18個で、約4～10cm前後の砂岩、凝灰岩が混在している。掘込みは確認できていない。炭化物はなく、被熱の痕跡も確認できない。集石ではなく、廃棄遺構の可能性もある。集石内の遺物は、土器の小片が2点出土した。厚さ約1.5cmの厚手で無文の土器であり、集石3号や土坑1号で出土した型式と同一と考えられる。なお、周辺の土器との接合を試みたが、接合に至っていない。

集石3号・出土遺物（第13図 2・3）

集石3号は、G・H-61区の東西方向の緩斜面のIII層で検出した。礫は南北に150cm、東西に40cmの範囲で平坦にまばらに広がる。掘込みは確認できていない。礫の数は13個で、径5～13cmの赤色砂岩と砂岩で構成される。その他、土器2点が出土したが、炭化物等はなく、被熱の痕跡も見られなかった。

集石内から出土した土器を図化した。2・3は、厚さ約1.5cmの厚手の胴部で、底部に近い部分と思われ、下端部はさらに厚手のつくりとなっており、外面は無文である。集石2号から出土した土器片や、H-61区の土坑1号から出土した完形の土器と酷似しており、底部は尖底形になるものと想定できる。土坑1号や集石2号から出土した土器との接合を試みたが、接合に至っていない。

集石4号・出土遺物（第14図 4）

集石4号は、H-61区の南北方向の緩斜面のIV層に近

いIII層下面で検出した。礫は、東西に約130cm、南北約90cmの範囲に広がる。掘込みをもち、深さは約50cmである。礫の数は323個で、土坑に礫を充填するように、径6～10cm前後の礫を5、6段ほど積み重ねて作られ、使用されていたと考えられる。礫数や形状等、本遺跡の他の平坦な集石とは様相が異なる。埋土は炭化物の影響からか黒色に近いIV層土を主体とし、3cm未満のV・VI層の小ブロックも少量混在する。III層土の混ざり込みは見られず、III層が堆積する以前に使用が終了したと考えられる。北に隣接するG-61区では、完形に近い縄文時代早期の土器が入った土坑1号が検出されているため、集石4号は同一時期の可能性が高いと考えられる。集石内の遺物は、土器1点、石器1点が出土し、炭化物の小片はないが、被熱の形跡がうかがえた。土器は約2cmの小片のため図化していないが、石器は図化した。

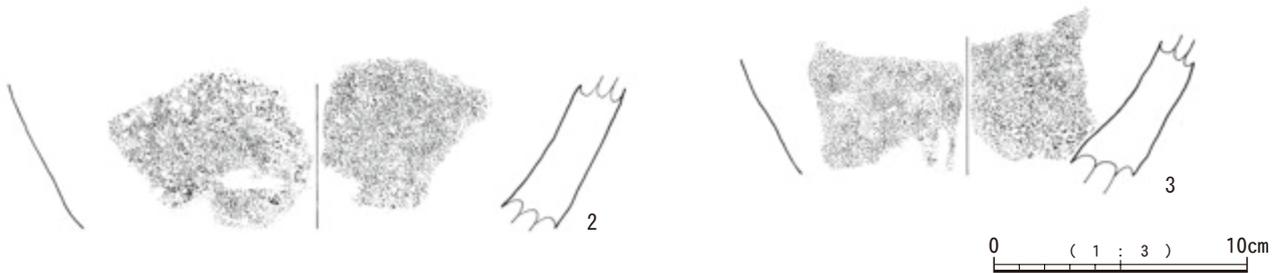
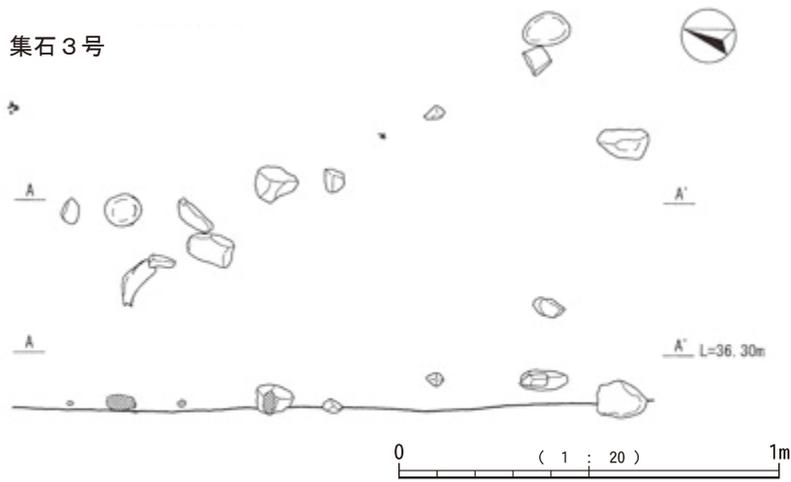
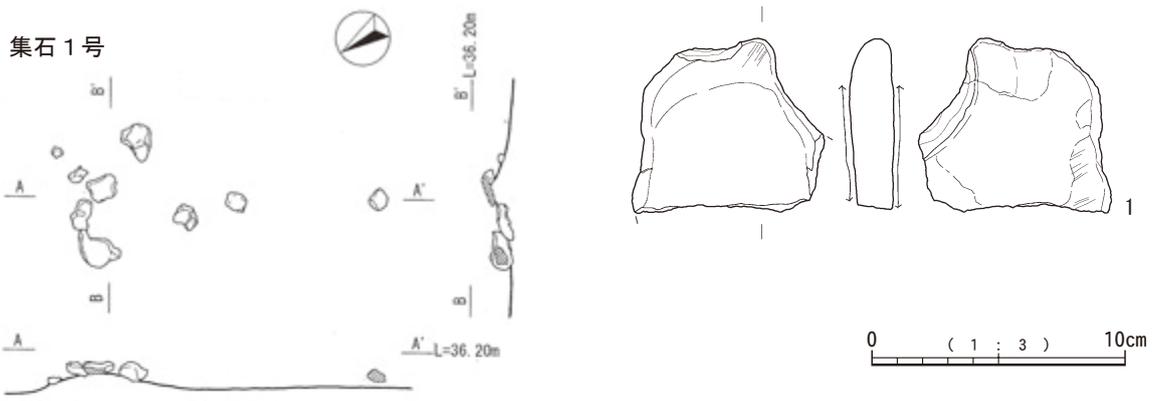
4は石皿で、凝灰岩の約8cmの立方体に近い厚手の形状で、表面の一部は磨面をもち、下半部は破損している。

集石5号（第15図）

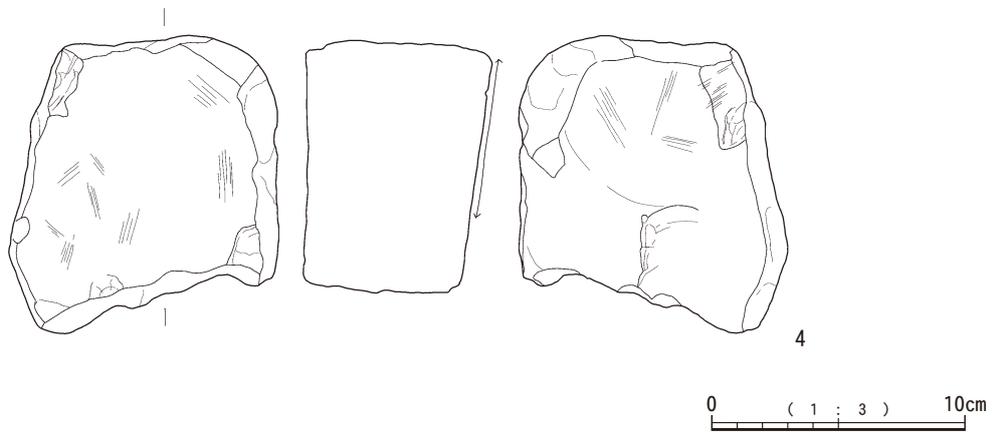
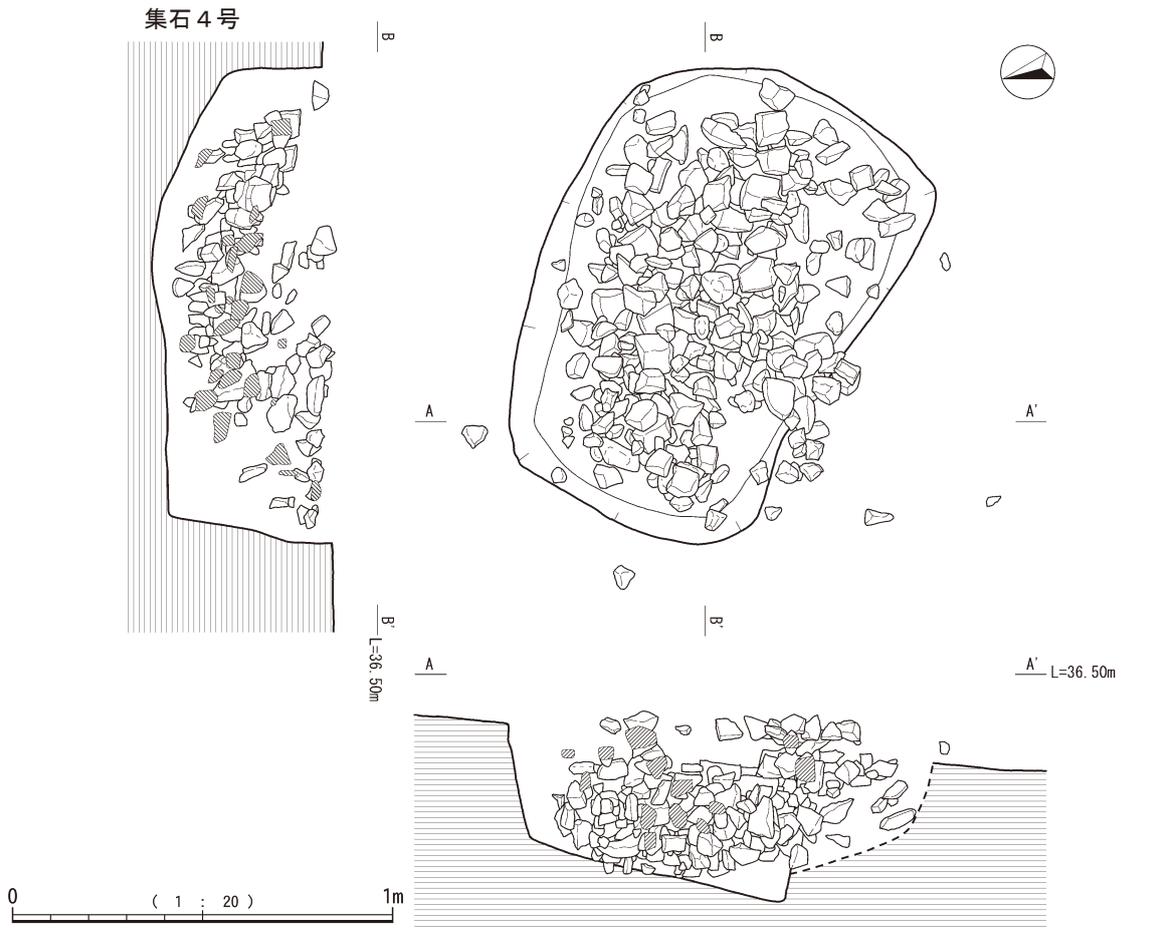
集石5号は、D-65区の東西方向の緩斜面のIII層下面ないしIV層上面で検出した。この周辺の区域はIII層上面までほぼ削平を受けていたが、集石の周辺だけが部分的にIII・IV層が残っていた。礫は南北に160cm、東西に80cmの範囲で広がる。南側に平坦に15個の礫がまばらに広がり、その下に礫の重なりはなかったが、北に数十cmずれた位置のIV層土の中から16個の礫がまとまって検出され、深さ約10～20cmの掘込みをもち、礫の数は計31個で、径3～17cmの砂岩、赤色砂岩、安山岩で、約9割は扁平礫、1割が重円礫である。赤色砂岩の一部は、被熱によるひび割れや炭化物付着が見られた。わずかに出土した5mm大の炭化物片は、科学分析の結果、近世のもので、上層から打ち込まれた竹杭と考えられ、本遺構とは無関係であった。他に集石内の遺物はなかった。

第5表 集石観察表

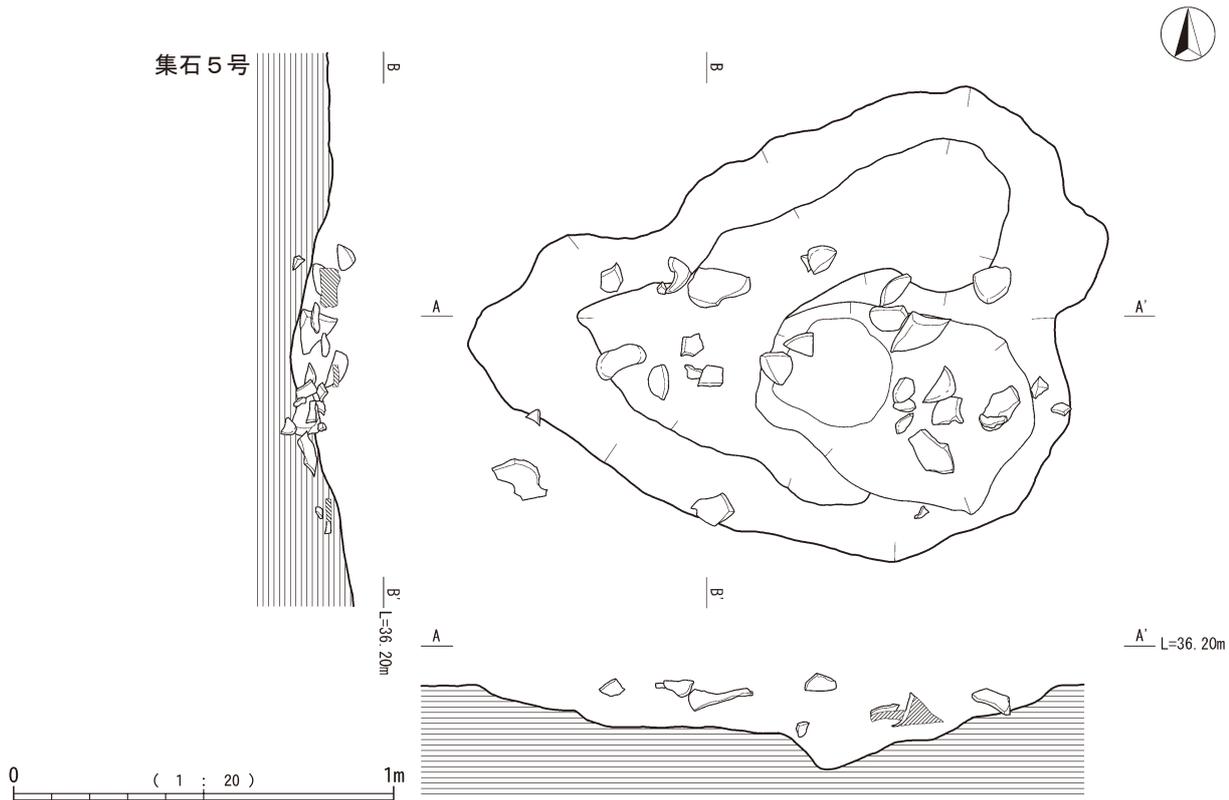
集石番号	検出区	検出層	規模 (cm)		総礫数	形態分類
			長軸	短軸		
集石1号	G-60	IV層	90	40	9	I類
集石2号	G-61	IV層	200	100	18	I類
集石3号	G・H-61	III層	150	40	13	I類
集石4号	H-61	III層下面	130	90	323	I + III類
集石5号	D-65	III・IV層上面	160	80	31	I + III類



第13図 集石 1～3号・出土遺物



第14図 集石 4号・出土遺物



第15図 集石5号

イ 土坑

土坑1号・出土遺物(第16図 5)

土坑1号は、G-61区の平坦面のIV層上面で検出した。径30cmほどの土器の破片が出土した。土器が埋まっていた北側から段階的に掘り下げたところで土坑のプランを確認し、連結土坑を想定して掘り下げを行ったが、最終的に長楕円形の土坑であると判断した。

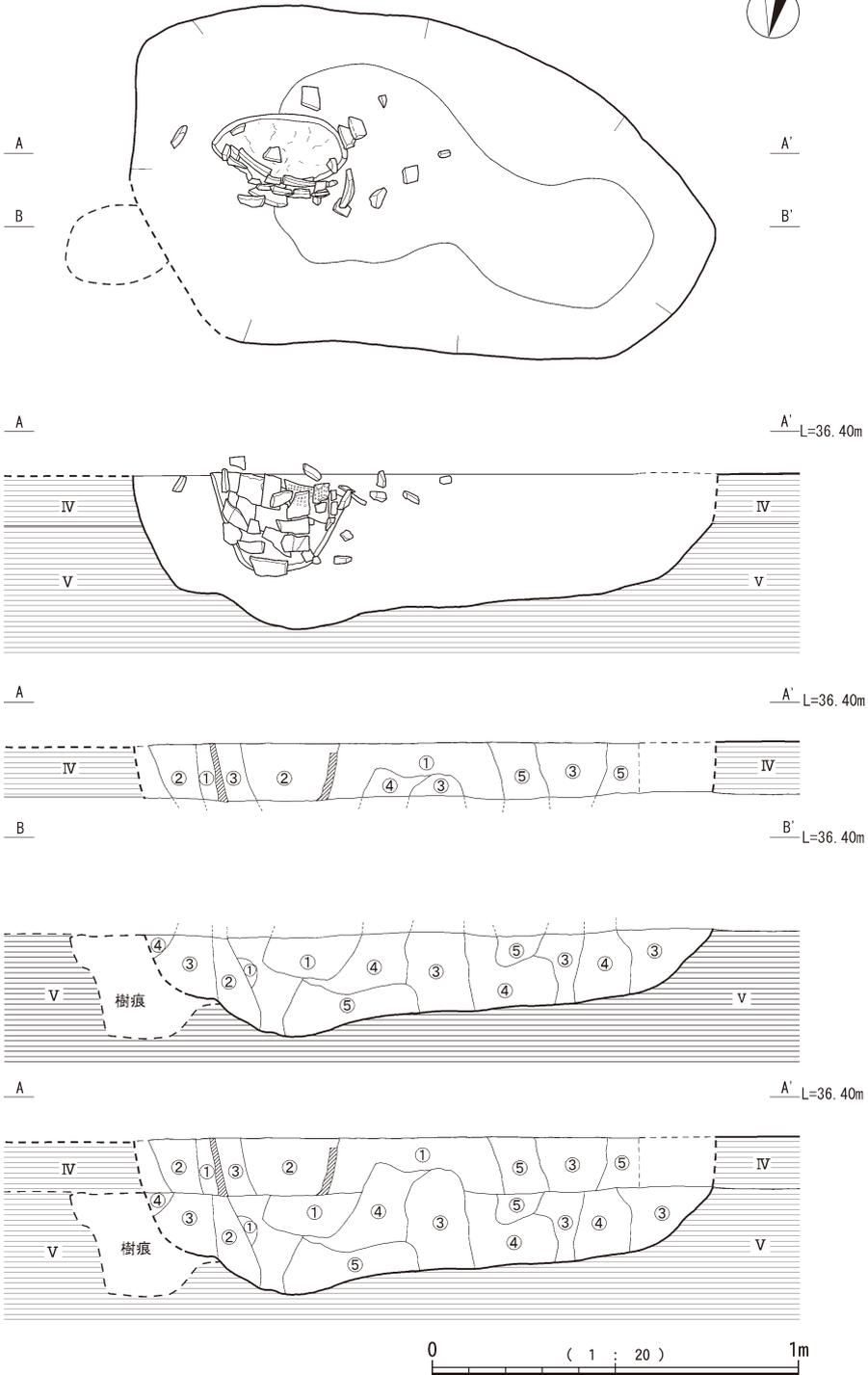
法量は、長軸約160cm、短軸90cm、深さ45cmである。ただし北側の上端は南側よりも15cm低い位置で検出したため、実際は短軸はもう少し長く、形状も隅丸方形であった可能性がある。埋土はブロック状に入り、IV層土とV層土の他、IV・V層の混ざった土がみられ、III層土はなかった。土層断面図については、上端から北側を約15cm掘り下げた時のもの(第16図B-B'間)で、さらにそこから下端までは土坑を半截したときのもの(第16図A-A'間)を組み合わせて掲載している。

土坑1号から出土した土器は、すべて同一個体と考えられる土器片で計35点である。土坑の中心より北側から出土した破片は押しつぶされた小片が多いが、南側は残存状態がよく、原形に近い形でまとまった状態で出土した。最終的に口縁部から底部まで全体の半分程度が出土し、器形の全体像が想定できる。接合により復元したものを図化したのが5である。

5は、器高約41.0cm、口縁部の直径は約31.0cmと比較的大型の砲弾形の深鉢形土器である。口縁部は直線的で、胴部から底部に向かってすぼまり、尖底になっている。底部内面も破損部があるが、尖底に近い形状である。器壁の厚みは1.5～2.0cmと非常に厚手で、内外面ともに非常に摩耗が激しいが、口縁部の外面には貝殻腹縁部による約3.5～4.0cmの従位の連続刺突文が施され、胴部以下は無文である。なお、次項で報告する包含層から出土した類似の土器と比較すると、5は口縁部上部がやや薄手のつくりで、口唇部に施文がみられない点が相違点であるが、器形や文様等の特徴から縄文時代早期の政所式土器に該当するものと考えられる。なお、集石2号・3号と、隣接エリアの包含層から出土した類似の土器からは、5と接合できる個体は確認できなかったが、同じ型式の政所式土器は、V類土器として、次項で報告する。なお、土坑内部から採取した埋土は、ウォーターセパレーションし、検出した炭化物の年度測定を実施したところ、 8930 ± 30 年BPという結果で、縄文時代早期中葉の遺構であることが確認された(第V章第10節参照)。

また、サイズ・形状から墓である可能性を考え、土坑内から採取した土壌資料の科学分析をおこなったが、遺体埋葬の影響があったと断定することはできなかった。

土坑 1 号



土坑 1 号埋土注記

- ① 暗褐色砂質土(7.5YR 4/2) しまり粘性弱い V層由来の土
- ② 極暗褐色粘質土(7.5YR 2/3) しまり粘性あり IV層由来の土
- ③ 極暗赤褐色粘質土(5YR 2/4) しまり粘性あり IV・V層の混じり土
- ④ 暗褐色粘質土(10YR 3/4) しまり粘性あり IV・V層の混じり土
- ⑤ 暗褐色粘質土(10YR 3/4) しまり粘性あり V層ブロック土が混じる

第16図 土坑 1 号



第17图 土坑1号出土遗物

ウ 落とし穴

落とし穴は2基が検出した。隣接する区で見つかり、集石などの他の縄文時代の遺構から100mほど西に離れた場所に位置する。規模はわずかに異なるものの、平面形、断面形はいずれも長方形を基本とし、複数の逆茂木痕をもつなど、つくりも酷似している。なお、落とし穴が検出された区域は、表土を除去すると明黄褐色のシラスが検出され、Ⅱ～Ⅴ層が削平により残っていない場所が多く、検出面がⅥ層となったが、本来の掘り込み面は検出面より数十cm上位にあり、もう少し深い落とし穴だったと考えられる。

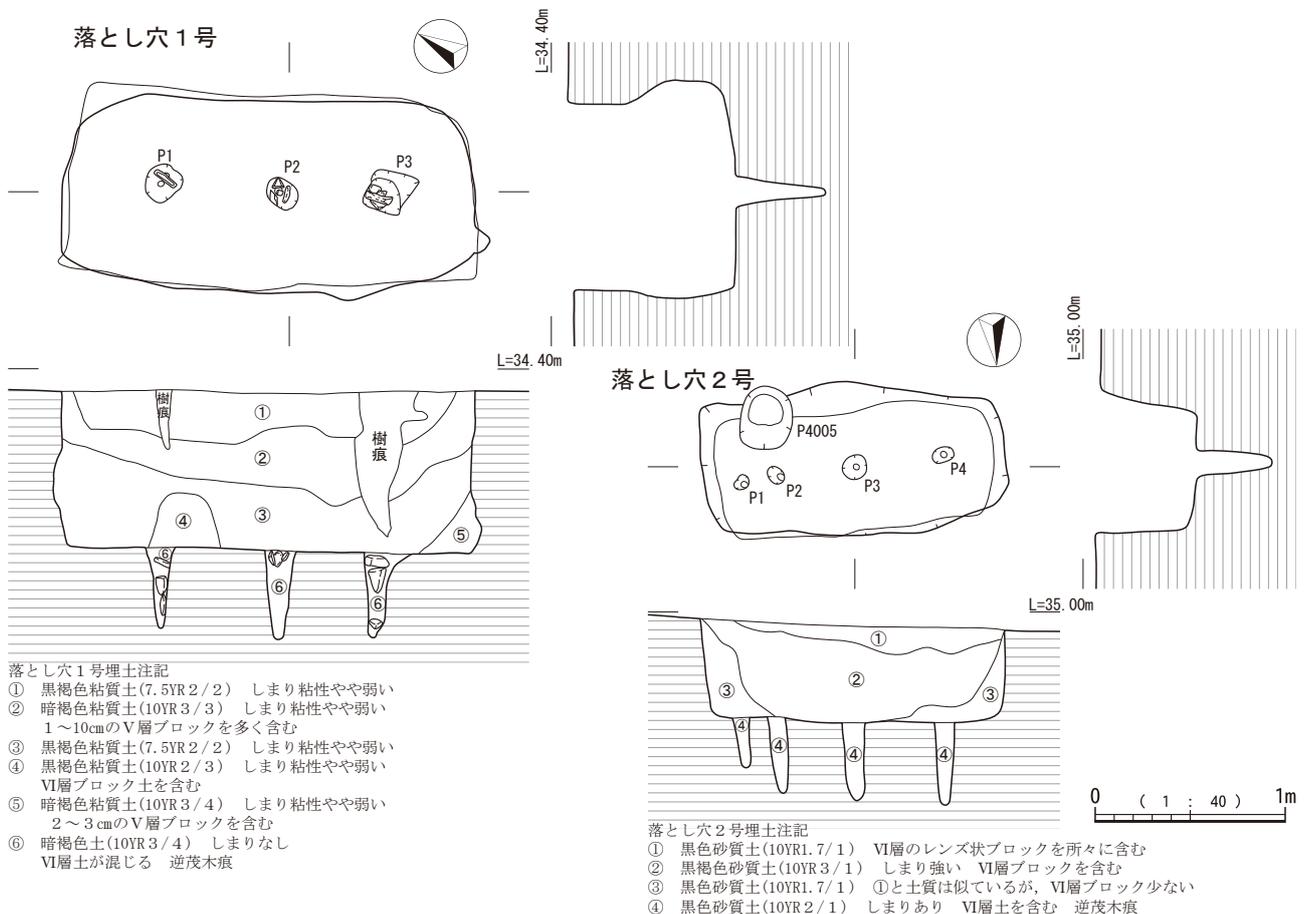
落とし穴1号（第18図）

F・G-51区の東西方向の緩斜面のⅥ層で検出した。落とし穴の本来の上部は削平により残っていない。平面形は隅丸長方形で、大きさは、長軸220cm×短軸100cm、検出面からの深さは85cmである。壁は垂直にたち、底面はほぼ平らである。完掘後、底面中央部に直線上にほぼ均等な間隔で並ぶ3つの小穴が検出され、すべての小穴の上部に、偏平礫が詰められた状態で検出された。それぞれ穴の中央部を空けて、壁に沿うように配置されており杭を固定する目的と考えられ、逆茂木痕であることが確認された。さらに底面を残して長軸方向に断ち割る

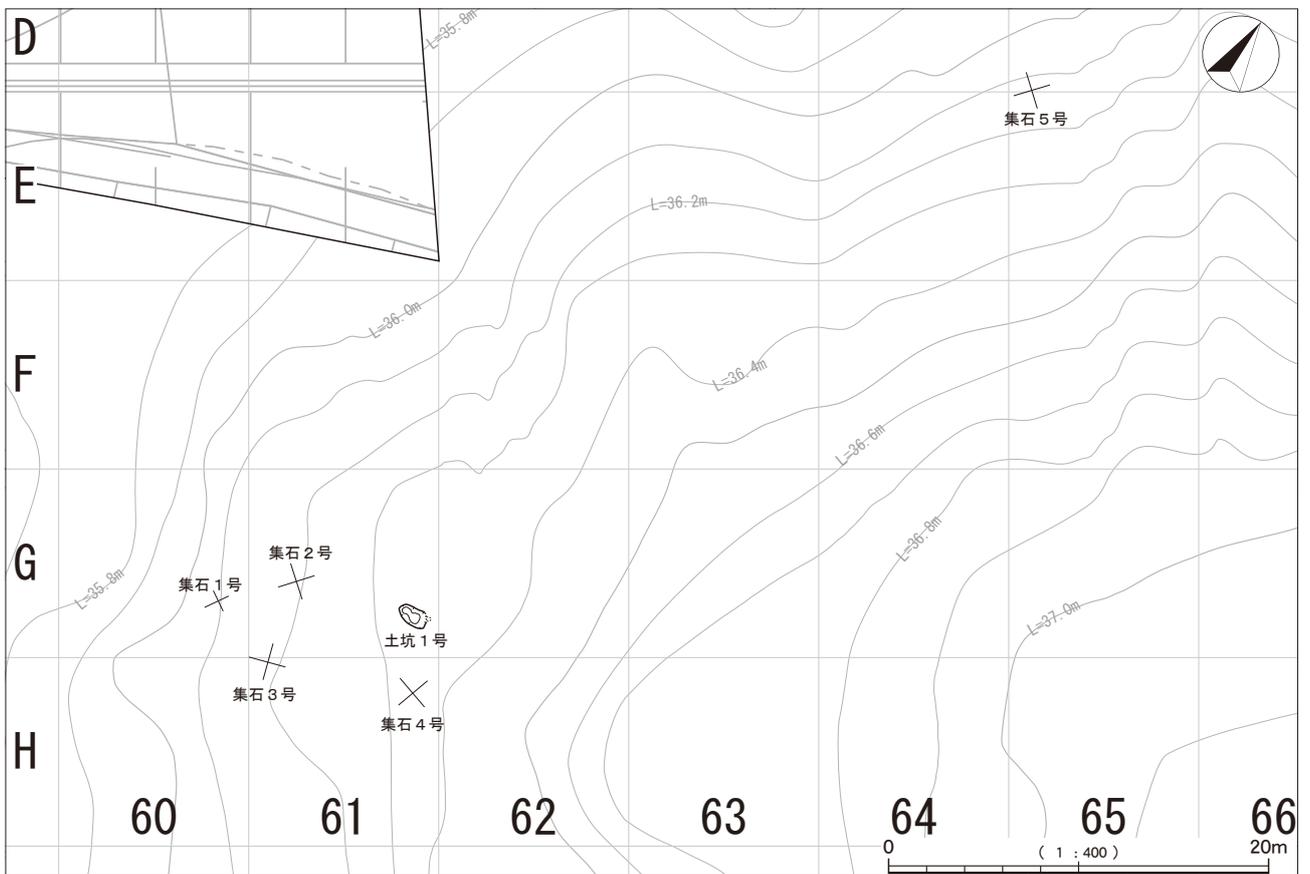
と、底面からの逆茂木痕の深さは約40～50cmあり、うち2つは穴の底近くにも偏平な礫が詰められていた。埋土はしまりが弱い粘質土で、上部から黒褐色土、Ⅴ層ブロックを多量に含む暗褐色土、黒褐色土の3つの層に大別され、レンズ状に堆積しているため自然堆積と考えられる。遺物は確認されなかった。

落とし穴2号（第18図）

F-52区の東西方向の緩斜面のⅥ層で検出し、落とし穴1号同様、上部はかなり削平を受けている。平面形は、ほぼ隅丸長方形で、大きさは長軸85cm×短軸45cm、検出面からの深さは55cmである。壁は垂直にたち、底面はほぼ平らになっている。完掘後に底面中央付近に5つの小穴が確認され、逆茂木痕検出のため、長軸方向に断ち割ったところ、底面中央部に直線上に4つの逆茂木痕が検出され、1つは樹根と判断した。底面からの逆茂木痕の深さは底面からP1が約26cm、P2～4が約40～45cmで、礫が中に入っているものはなかった（第18図参照）。埋土は黒色土を基本とし、壁面崩落土、2次シラスブロックを含むが、Ⅳ層土に類似していることから縄文時代の可能性が高いと考えられる。遺物は確認されなかった。



第18図 落とし穴1・2号



第19図 縄文時代の遺構配置図

	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
C																																
D																									▼1							
E		▲1				▲1							▲1 ●1					□1				◆2 ○2			▲1 ●1							
F	□1												▲1																			
G		●1	▲1										□2 ●1		□1			◇1 ※	◇1			●1										
H		▲2							▲1		▲1	□1				□1	▲2 ○2 ▽1 ◇1	◇2 ●2	◇2 ●2 ○1 ▽1 ◇1													◎1
I		▲2	▲1						▲1								▲1	▲1	◇1													

※ほぼ完形品が土坑1号から出土

※上図はグリッドごとに出土した土器の種類、数量を示す。
 (種類の土器を併合した資料は1でカウント)
 出土区が種類のグリッドにまたがって記録されている場合は、その
 中間地点、またはアルファベット・数字の小さいグリッドで記載する。

- (縄文時代早期前葉)
- △ I 類土器(加葉山式)
 - II 類土器(小牧3A)
- (縄文時代早期中葉)
- ▲ 皿類土器(吉田式)
 - ◆ IV 類土器(別府原式)
 - ◇ V 類土器(政所式) ※
 - VIa 類土器(中原式 1類)
 - VIb 類土器(" 2類)
 - ◎ VIc 類土器(" 5類)
 - ▽ VIIa 類土器(その他の縄文早期1)
 - ▼ VIIb 類土器(その他の縄文早期2)
- (縄文時代早期後葉)
- ▲ 皿類土器(塞ノ神B式)
- (縄文時代中期)
- ▲ Ⅹ類土器(春日式)
 - △ Ⅹ類土器(阿高系)
- (縄文時代後期)
- ▲ Ⅸ類土器(西平式)
- (縄文時代後晚期)
- Ⅸ類土器(その他縄文後晚期)
 - その他の底部

※未掲載の◇(V類土器)が上記以外にH・I-60~64で複数出土

第20図 縄文土器の出土状況図

3 出土遺物

(1) 土器

縄文土器は点数は少ないが、貝殻文を施した縄文時代早期の土器の割合が高く、縄文時代中期や後期・晩期と考えられる土器もわずかにみられた。最も出土数の多い縄文時代早期の土器の多くはⅢ・Ⅳ層からの出土である。しかし、調査区内は削平の影響を受けており、表土や他の時代の包含層、縄文時代以外の遺構内から出土した土器についても、重要と思われるものについては掲載の対象とし、計63点を図化した。

出土地点は、土器の時期ごとにある程度のもつまりがみられる。縄文時代早期中葉の土器（Ⅲ～Ⅵ類土器）は調査区の60区～68区、中でもH・I-60～62区に集中していた。この区域は、4つの集石と土坑を検出したF～H-60・61区に隣接する位置にあたり、北山遺跡の縄文時代早期中葉の状況を知る上で、有効な情報を得られる地点であると考えられる。また、数量は多くないが、縄文時代早期後葉のⅦ類土器は、H・I-45区周辺で多く出土しており、縄文時代後期・晩期のもと考えられるⅩ類土器は、G・H-55・56区周辺に集中して出土がみられるなど、時期ごとに分布が偏る傾向が認められた（第20図 縄文土器出土分布図 参照）。

また出土した縄文土器の多くは摩耗した小片で、完全復元できるものや、全体の器形をうかがうことができるものは少ないが、各土器片の器形や文様の特徴から分類を行い、時期が古いと思われる順に、以下のように分類した。

I 類土器…加栗山式土器

- ・器壁が直線的に立ちあがる角筒形。
- ・胴部の斜位・縦位の連続貝殻刺突文が「X」字状に交差する文様。

II 類土器…小牧3Aタイプ

- ・器壁が直線的に立ち上がる円筒形。
- ・胴部に縦位の貝殻刺突文が充填される

III 類土器…吉田式土器

- ・やや外斜し、直線的に立ち上がる円筒形。
- ・口縁部下にクサビ形の突起をもち、胴部は貝殻腹縁部による押引文をもつ。

IV 類土器…別府原式土器（新段階）

- ・わずかに外反する口縁部と直線的な胴部、ややすぼまる底部をもつ深鉢形。
- ・口縁部に斜位の貝殻条痕文や押し引き気味の貝殻刺突文をもち、胴部に浅く細い貝殻条痕文をもつ。

V 類土器…政所式土器

- ・直線的に立ち上がる口縁部、胴部から底部に向かってすぼまり、尖底の底部をもつ砲弾形。
- ・口縁部に縦位の貝殻刺突文をもち、胴部以下は無文

で、1.5cm以上の厚手の器壁をもつ。

VI 類土器…中原式土器

- ・厚手の器壁をもち、底部は平底となる砲弾形
- ・施文の違いから以下のa～cに分類

VIa 類土器…中原式土器第1類

- ・口縁部の狭い範囲にのみ貝殻刺突文をもち、胴部以下は無文。

VIb 類土器…中原式土器第2類

- ・口縁部から胴部上位の範囲に貝殻腹縁による連続刺突文をもつ

VIc 類土器…中原式土器第5類

- ・口縁部から胴部までの広い範囲に、貝殻腹縁による縦施文と横施文の条痕文をもつ。

VII 類土器…その他の縄文時代早期の土器

- ・Ⅰ～Ⅵ類に該当せず、口縁部に貝殻刺突文をもつ胴部以下は無文で、縄文時代早期と思われるもの。

VIIa 類土器

- ・細かい斜位の貝殻刺突文を1段だけもつもの

VIIb 類土器

- ・貝殻腹縁部による横位の刺突文を6～7段もつもの（石坂式土器に類似する文様がみられる）

VIII 類土器…塞ノ神B式土器

- ・ラップ状に開く口縁部の深鉢形
- ・器面全体に貝殻刺突文を連続して施文し、帯状の文様を構成し、工具による複数の沈線文をもつ。

IX 類土器…春日式土器

- ・口縁部が内湾しながら外に開くキャリパー形の深鉢形で底部は上げ底になっている
- ・器面には貝殻条痕文が施され、文様は沈線や隆帯の渦文や曲線文が施される。

X 類土器…阿高系土器

- ・内外面ともに強い赤味を帯びた赤褐色の器壁をもつ
- ・胴部は明瞭な太い沈線で描かれた幾何学的な文様かが施される。

XI 類土器…西平式土器

- ・「く」字形口縁をもち、口縁部は大きく外反し、上端部は波状をなす。胴部が張り出す深鉢形
- ・頸部外面に工具による横位の連続刺突文、横位の多重の沈線文が施される。

XII 類土器…その他の土器

- ・Ⅰ～Ⅺ類に該当しない、縄文時代後期から晩期にかけてのものと思定される詳細不明の小破片をまとめてその他の土器として掲載した。

なお、分類が困難な底部については、最後にまとめて掲載した。以下、図化した各類土器ごとの特徴について略述する。

I 類土器 (第21図 6)

I 類土器は、胴部の小片1点のみの出土である。6は、胴部の器壁が直線的に立ち上がり、角筒形と想定される。外面は、貝殻腹縁部による縦位及び斜位の明瞭な連続刺突文が、交差するように帯状に施される。内面はケズリによる調整が行われ、器壁の厚さは約0.7cmと薄手である。

II 類土器 (第21図 7)

II 類土器は、胴部の小片1点のみの出土である。7は、胴部の器壁が直線的で円筒形の器形と想定される。器面は灰褐色で、胴部外面には貝殻腹縁部の非常に明瞭な連続刺突文が約2mmごとに密に施されている。内面はナデによる調整が行われ、器壁の厚さは約0.7cmと薄手である。

III 類土器 (第21図 8～10)

III 類土器は、口縁部に近い胴部2点と、胴部1点が出土している。胴部は器壁が直線的に立ち上がり、円筒形または角筒形と想定され、8・9は胴部外面にクサビ形の貼付文をもち、周りに文様はみられない。内面はナデまたはケズリによる調整が施され、器壁の厚さは約0.6～0.8cmと薄手である。8は上部にクサビ形の貼付文が約1cm間隔で横並びに施され、その下部に摩耗が激しいものの横位の貝殻押引文が確認できる。9は摩耗が少ないシャープなクサビ形の貼付文が確認できるが、下部は欠損しており文様は確認できない。10は器壁が0.5cmと非常に薄手で、外面全体に貝殻腹縁部を刺突し、わずかに横に押し引いた文様が確認できる。

IV 類土器 (第21図 11～17)

IV 類土器は、口縁部2点、胴部4点、底部1点を図化した。口縁部はわずかに外反し、口唇部は平らである。胴部は直線的で、底部に向かってややすぼまる深鉢形と想定される。口縁部外面は、貝殻条痕文と刺突文の両方が施され、胴部ほぼ全面に斜位または横位の凹みが浅く、細かい貝殻条痕文をもち、内面はナデ調整で、器壁の厚さは約1.0～1.5cmとやや厚手である。11は口縁部で、斜位の貝殻条痕文を施し、さらに貝殻腹縁を用いた太い縦位の刺突文が約4cm幅で施されている。12は口縁部で斜位の貝殻条痕文があり、摩耗が激しいが縦位の太い刺突文がわずかに確認でき、内面は丁寧なナデ調整がなされている。13～16は胴部であり、15・16は外面の摩耗が激しいが、いずれにも外面全体に細くて浅い斜位の貝殻条痕文が施されていることが確認できる。17は平底の底部で、胴部から徐々に径が小さくなる円筒形に近い器形が想定される。器壁は約1.5cmと厚い。外面は摩耗が非常に激しいが斜位の条痕がわずかに確認できる。

V 類土器 (第22図 18～21)

V 類は口縁部と多くの胴部が出土し、器壁の厚さが1.5～2.0cmと極めて厚手の土器で、本遺跡で最も多くの破片が出土した土器の1つである。土坑1号から出土した土器も、同様の特徴をもつV 類土器の1つである。口縁部は直線的に立ち上がり、胴部から底部にかけて徐々にすぼまる。包含層内では底部の出土はないが、土坑1号の土器と類似していることから底部は尖底形であると考えられる。口縁部のみ貝殻腹縁部による連続刺突文が施され、胴部以下は無文である。内面は、丁寧なナデ調整が行われており、色調はすべて薄橙色である。17点の出土のうち、数量の多い胴部は文様がないことから小片を接合した胴部1点、口縁部3点の計4点を図化した。

18～20は、口縁部または口縁部近くの部位である。18は口唇部にやや大きめの横位の貝殻刺突文がみられ、口縁部外面には縦位のやや細かな連続刺突文が2段ほど施されている。19は口縁部の小片、20は口唇部が欠損し、やや摩耗している口縁部近くの小片であるが、どちらも同じような連続刺突文が施されている。なお、18・19は同一個体と思われる。21は、4つの小片を接合した胴部の破片である。器壁は2.0cmと非常に厚く、色調は浅黄橙～にぶい橙で、傾きや屈曲から大型の土器であることが想定される。胴部外面は無文で、内外面ともにナデによる調整がなされている。

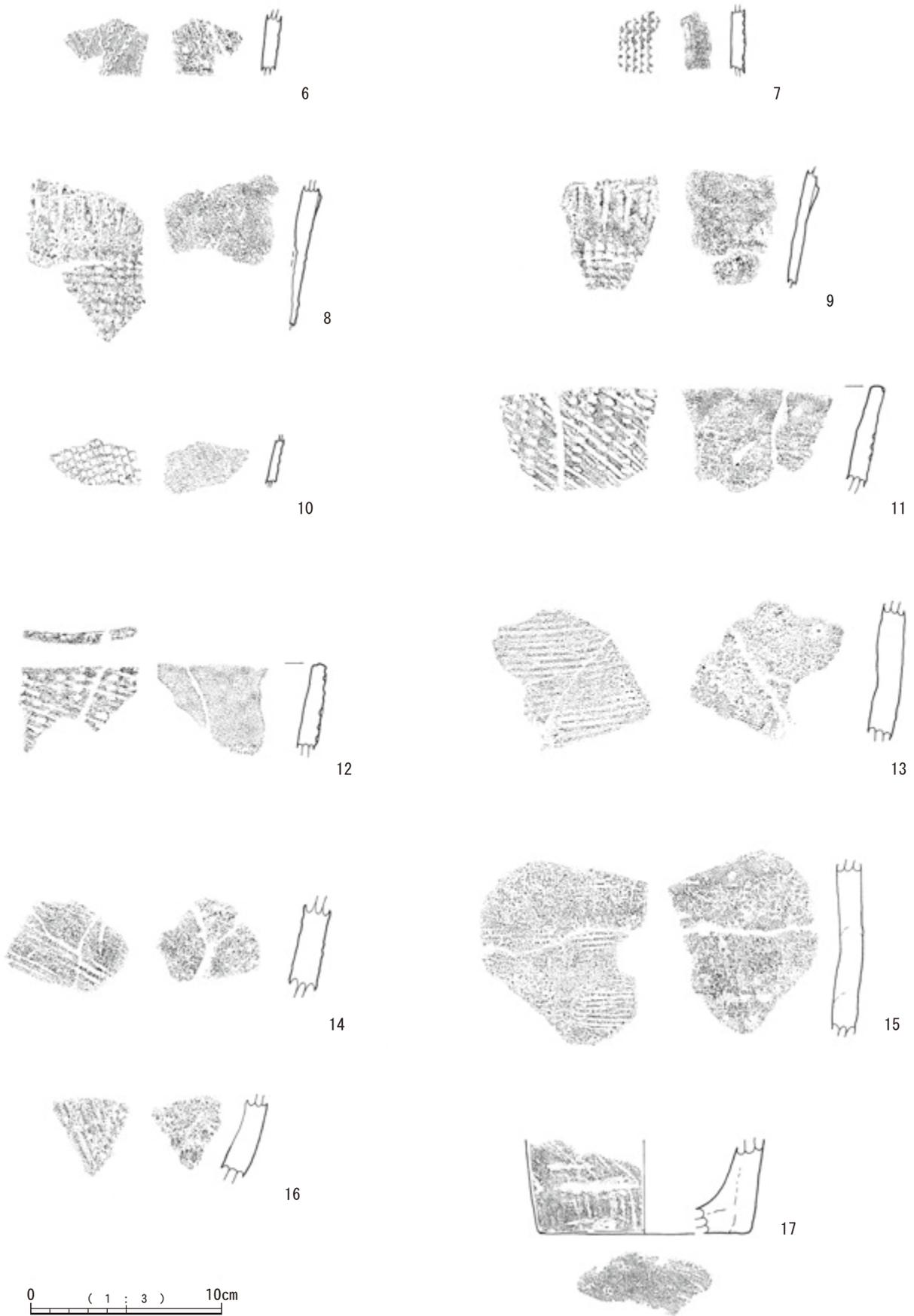
VI 類土器

VI 類土器は、V 類と並んで本遺跡の縄文土器で最も多く出土したものである。器壁は1.0～1.5cmと厚く、ほぼ直線的に立ち上がる口縁部には貝殻刺突文または条痕文が施され、胴部は、無文のものと貝殻条痕文や押引文を施したものに分かれる。胴部から底部にかけては小さくすぼまり、やや小さな平底の底部をもつ。いずれも中原式土器の特徴に類似するものと考え、各部位の文様の特徴により、次のa～c 類の3つに分類して掲載した。

- | |
|---|
| a 類：口唇部と口縁部上端のごく狭い部分にのみ貝殻腹縁刺突文があり、胴部以下は無文である。 |
| b 類：口縁部に斜位または縦位のやや押し引いたような貝殻刺突文が施される。 |
| c 類：口縁部に斜位の貝殻条痕文、胴部全面に縦位の貝殻条痕文と横位の貝殻を押し引文をもつ。 |

VIa 類土器 (第22図 22～29)

22は直行する口縁部で、口唇部～口縁上部のわずかな範囲に貝殻腹縁刺突文が連続してみられ、その下は無文である。23は、複数の小片を接合し、長軸15cmのやや大きめの胴部の破片で、底部に向かってすぼまるように湾曲する。外面全体が無文で、ナデ調整がなされ、器壁



第21図 縄文時代の遺物①



0 (1 : 3) 10cm

第22図 縄文時代の遺物②

の厚さは1.2cmとやや厚手である。24～28はいずれも底部または底部周辺の破片で、器壁の厚さは1.5cm以上と非常に厚手である。24・25は、内面の湾曲部に変化が確認できるため、底部近くの小片であることが確認できる。26は3つの小片を接合した胴部下部～底部の破片で、底部は平底である。胴部に比べ底部の径が小さくすぼまっている形状が確認できる。27も平底の底部の小片だが、小さくすぼまる形状が確認できる。28は溝状遺構4号から出土した底部で、厚手で無文のものだが、26・27と比べると底部から胴部に向かってやや外反しながら立ち上がる形状で、底面もやや小さい。29も厚手、無文、平底の底部であるが、底面は小さく、底部から胴部下部に向かって広く径が広がるような形状である。なお、22の口縁部は、口唇～口縁部に2段の貝殻連続刺突文をもつ中原式土器1類と明確に一致するとは言えないが、類似するものとして、VI a類に分類した。

VIb類土器（第23図 30～34）

30～34は、いずれも貝殻の連続刺突文が施された口縁部である。30は5つの小片が接合した、口縁部～胴部までの破片である。口唇部断面は丸みをもち、口縁部上部から貝殻腹縁～背面を用いたと考えられる横位の連続刺突文がみられる。縦1cmのスジ状の文様が横並びに3段施され、約4cmの範囲に文様がみられる。胴部は摩耗が激しいが、細く浅い条痕らしき痕がわずかに確認でき、IV類土器の可能性もある。31・32は同個体で、口縁部にやや斜めの縦位の貝殻刺突文がスジ状に2～5段施されており、30と類似している。31は、わずかに残る胴部外面は、摩耗により文様ははっきりと確認ができない。器壁の厚さはいずれも1.2mm程度とやや厚みがある。33は摩耗が激しい小片で、わずかに刺突文が確認でき、30～32に類似するものである。34は貝殻腹縁～背面を用いた横位の連続刺突文が3段施されている点で類似しているが、他と貝殻の種類が異なり刺突文1つ1つの幅が約3～5mmと太く、より力強い文様が施され、他のVIb類の文様とやや異なる。器壁の厚さが口縁部下は1.6mmと非常に厚い。胴部は欠損しているため、文様の確認はできないが、VIb類に該当するものとして分類した。

VIc類土器（第23図 35・36）

VIc類のうち、35は複数の小片を接合した縦長の胴部片で、器壁はやや直線的に立ち上がり、底部に向かってややすぼまる形状だが、円筒形に近い器形にもみてとれる。焼成が不十分で内外面ともに摩耗が非常に激しく、文様も明瞭ではないが、外面全体の広い範囲に縦位の貝殻条痕文を施し、その上から約1.5cmずつ横位の貝殻押引文を間隔を空けて施している。押引文と押引文の間には、クサビ形を模したような隆起部がみられるが、貼り

付けたものではない。胴部下部は特に摩耗が激しく、一部に縦位の条痕がみられる以外は、文様の確認はできない。この胴部全体に縦横に施文の痕跡がみられることから、本類に該当すると考えた。36は、口縁部の小片で、口縁は外反せず、ほぼ直線的に立ち上がる。外面は摩耗が激しいが、斜位の貝殻条痕文がほぼ全面に確認でき、内面は丁寧なナデ調整がなされている。器壁の厚さは1.1cmとやや厚手で、胴部がないため文様の確認はできないが、中原式土器5類または4類のいずれかに該当するものと思われ、VIc類に分類した。

VII類土器

VII類土器は口縁部3点を図化した。いずれも口縁部に貝殻腹縁部の連続刺突文をもつ縄文時代早期の土器であると考え、I～VI類土器の特徴に当てはまらず、その他の縄文時代早期の土器として分類した。口縁部外面の刺突文の特徴から、次のa・bに分類した。

- | |
|--|
| a類：口縁部に斜位の貝殻腹縁部の細かい連続刺突文施される。その下は無文である。 |
| b類：口縁部に横位の貝殻腹縁部による明瞭な刺突が複数段施される。その下は無文である。 |

VIIa類土器（第23図 37・38）

VIIa類土器は、口縁部2点で、37・38はいずれも口縁部上部から約2cmの範囲に斜位の貝殻腹縁部による細かな連続刺突文が施され、その下は無文であるが、胴部は接合していないため、詳細は不明である。器壁は0.6～1.0cmとやや薄手で、ナデ調整が行われている。

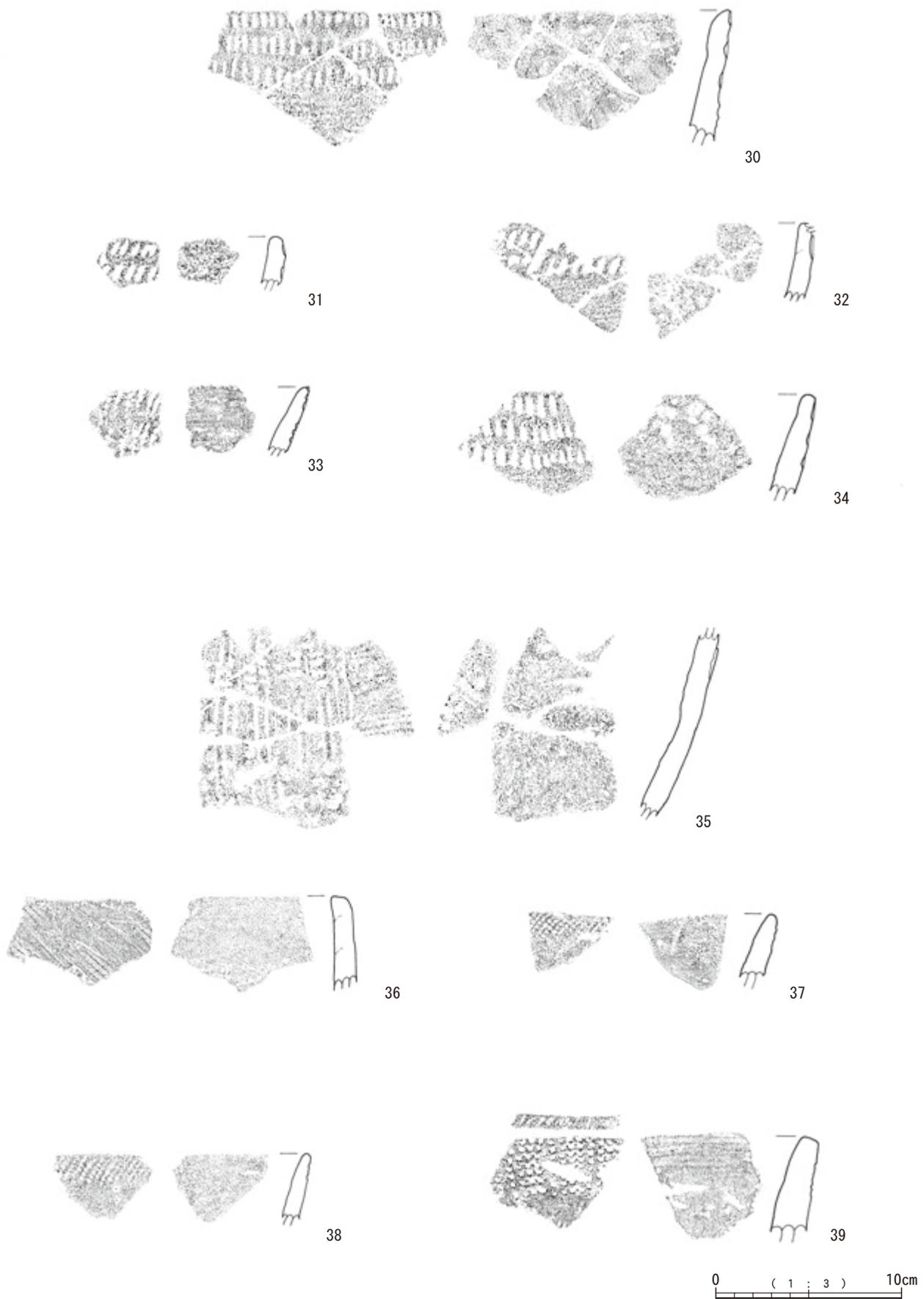
VIIb類土器（第23図 39）

VIIb類土器は、口縁部1点のみの出土である。39はやや外反する口縁部をもち、口唇部は平坦である。器壁は硬質で、赤味が強い。器壁の厚さは1.8cmと非常に厚手である。外面の上部約3cmの範囲には横位の貝殻腹縁刺突文が7、8段施され、その下は摩耗が激しいが無文であると考えられる。石坂式土器に類似する文様がみられるが、胴部以下に貝殻文が確認できず、その他の土器として分類した。

VIII類土器（第24図 40～45）

VIII類土器は、頸部からラッパ状に大きく開く口縁部をもつ深鉢形の土器で、頸部外面には貝殻腹縁刺突文が1条ずつ横位に施され、胴部には貝殻刺突文を連続で施した帯状の文様が確認でき、細かい数条の沈線もみられる。器壁の厚さは約0.8cmとやや薄手のものが多い。内面はナデまたはケズリによる調整が行われ、器壁の厚さは0.8cmとやや薄手である。

40は口縁部で、帯状の連続刺突文が2条確認できる。



第23図 縄文時代の遺物③

41は頸部下部で、外面に貝殻刺突文による帯状の文様を構成している。42～45は胴部の小片で、同様に刺突文による帯状の文様が確認できる。42は頸部に近い胴部と思われ、上部から中央部にかけて丸く張り出し、中央部から下部にかけてはすぼまっていく形状である。外面には連続貝殻縁刺突文による帯状の文様が斜めに2条施され、文様が途中で交差している。さらに、その下にヘラ状の工具等で引かれた、斜位の細い沈線文が多数施されている。43はゆるやかに内湾し、外面には帯状の連続貝殻縁刺突文が横向きに4段みられる。44は2つの破片を接合したもので、同様に斜位の帯状の連続刺突文と、その斜め下には細い多数の沈線文が斜めに引かれ、幅約4cmの無文地帯を挟んで、再び平行する斜位の多数の細い沈線文が施されている。沈線文の太さは一定ではなく、様々である。45は胴部の小片だが、同様に帯状の貝殻刺突文が2本、工具による複数の沈線が確認できる。こうした外面の連続貝殻刺突文による特徴的な帯状の文様から、本類に該当するものとして分類した。

IX類土器（第24図 46）

IX類土器は、底部1点のみの出土である。46は、外面に横位の貝殻条痕文が数条確認できる。内面は破損や摩耗が激しいが、斜位の条痕文らしき痕跡がわずかに残っている。底面は上げ底になっており、下面には内から外に向かう貝殻条痕文がみられる。

X類土器（第24図 47～49）

X類土器は、すべて小片で、器形の全体像は不明であるが、内外面ともに丁寧なナデ調整がなされ、赤味が強い赤褐色の器壁と太めの沈線文をもつ。

47は胴部でその上部はやや外反し、外面に浅い横位の沈線文を3～4条施している。48は口縁部で、外面に明瞭な太い沈線文がみられる。口縁部上端に沿うように1条の太い沈線、その下に三重の平行な斜位の直線的な沈線による菱形文と考えられる文様が施されている。49は上端と下端が破損し、側面には破損の跡がみられず、文様も確認できないため、浅鉢の把手の部分であると推測される。これらは、太めの沈線や赤みの強い器壁など阿高系土器に該当するものと考えられる。なお、49については縄文後期の南福寺式土器に該当するものと思われ、阿高系土器の1つとして本類に分類した。

XI類土器（第24図 50～55）

XI類土器は、口縁部は大きく外反し、上端部は「く」字形に屈曲し、波状をなす。頸部には、明確な稜がみられる。胴部は小片のみだが、頸部の形状から丸く張り出す深鉢形と想定される。頸部の外面には、「C」字状の刺突文と、多重の沈線文が施され、沈線の間には磨消縄

文が確認できるものもある。内外面ともに丁寧なミガキ調整がなされ、器壁の厚さは0.7～0.9cmと薄手で、色調は薄橙色である。

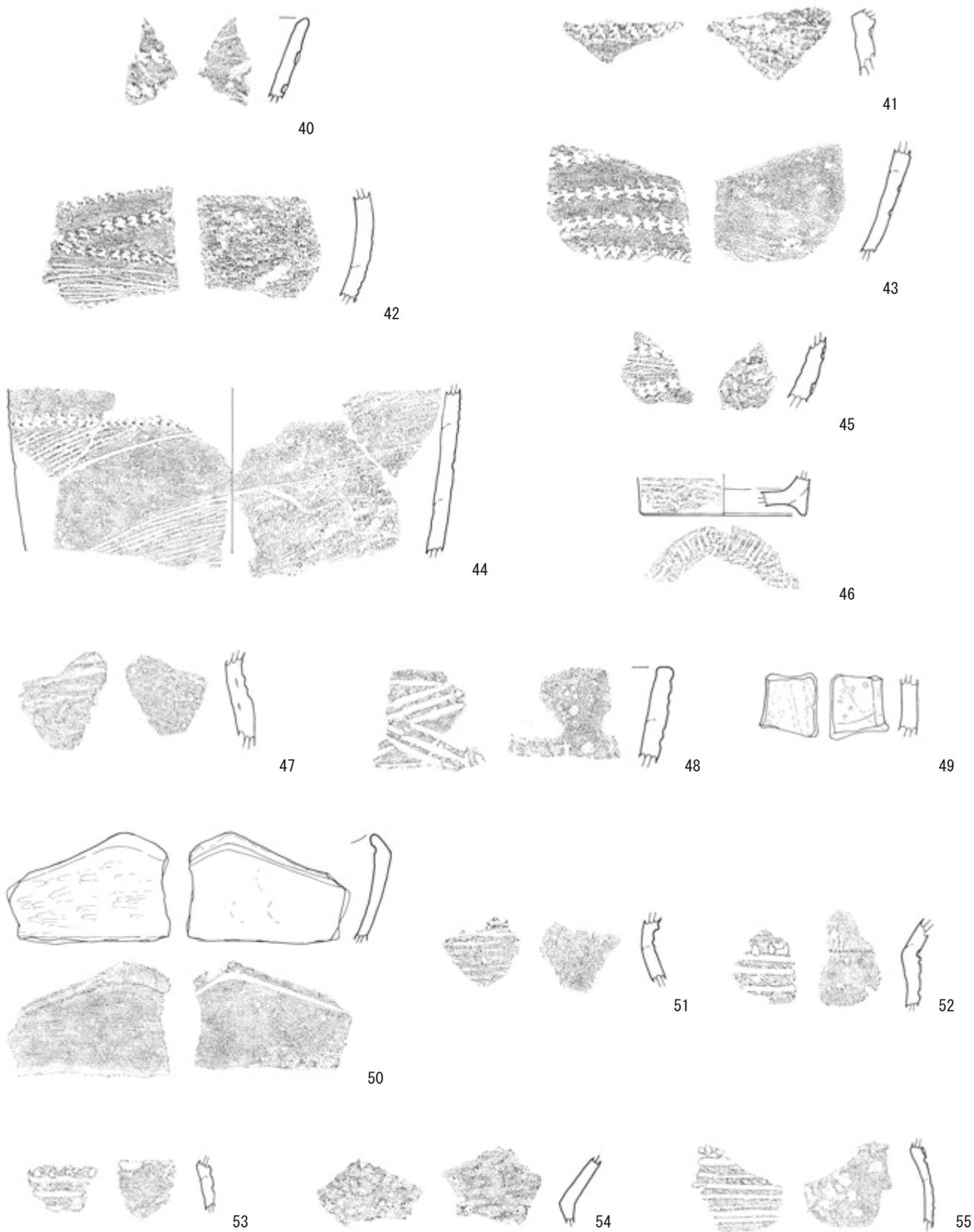
50は口縁部～頸部にかけての破片で、口縁部は「く」字形に屈曲し、波状をなす。外面は無文だが、内面には上端に沿って1条の沈線が施される。51～55は、頸部から胴部にかけての破片である。51・52は外反する口縁部が一部確認でき、51は摩耗が激しいが、頸部下の外面に横位の沈線がわずかに確認できる。52～54は頸部に「逆C」字形の刺突文が横並びに施され、その下に52・53は3条、55は7条の横位の沈線が確認できる。54は外面の摩耗が激しく、文様は確認できない。

XII類土器（第25図 56～64）

XII類土器は、詳細が不明の土器を一括して掲載した。多くは縄文時代の後期から晩期の土器と想定しているが、摩耗が激しく、小片も多いため、時期は不詳である。

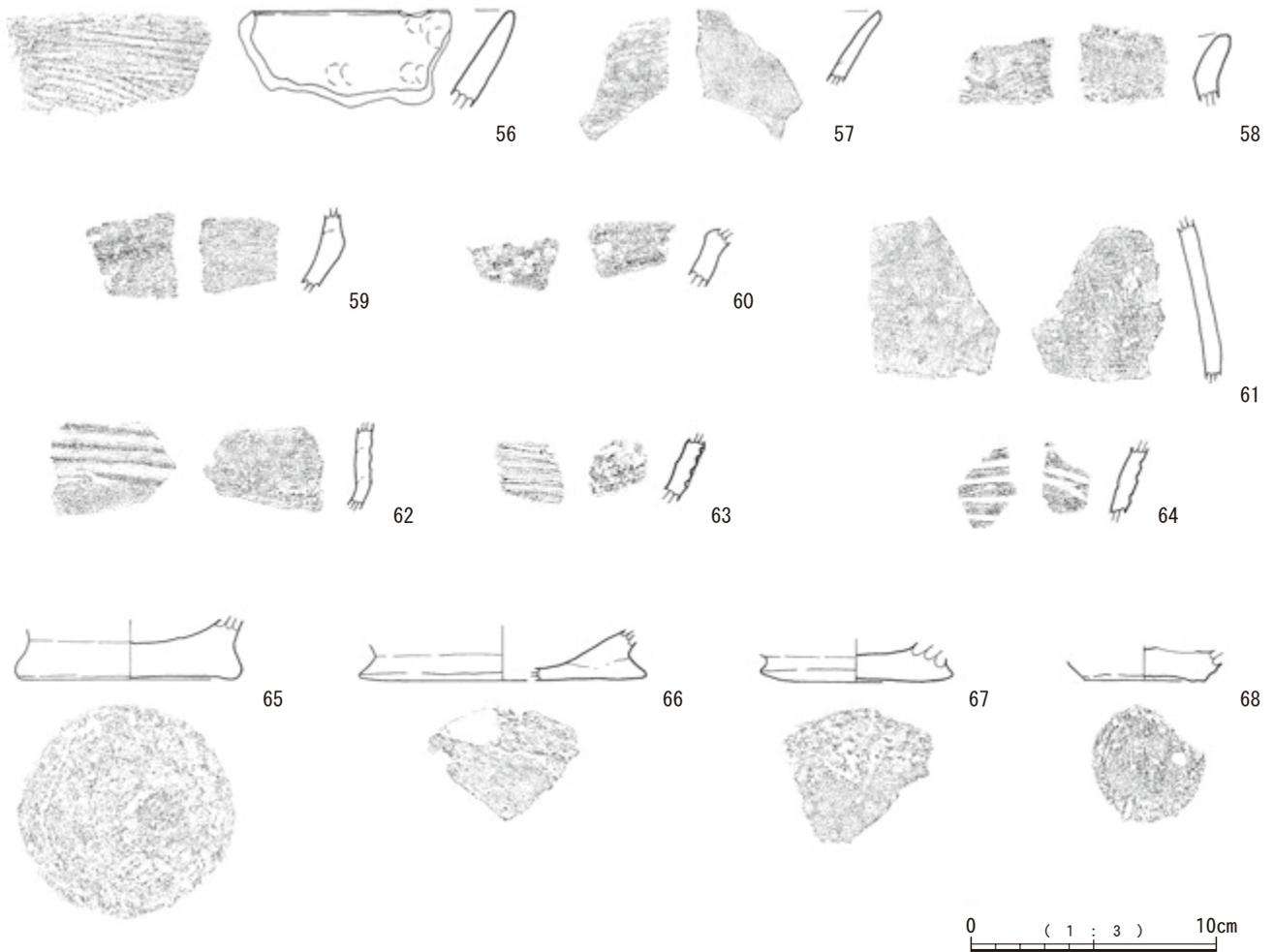
56～58は、口縁部の破片である。56は褐灰色の口縁部で、器壁の厚さは上端部が厚さ0.5cmと薄手で、下端部は1.0cmと下に向かって徐々に厚手になる。外面には斜位の沈線が不規則に施され、内面はケズリによる調整が施されている。57は口唇部をわずかに残す口縁部で、灰褐色である。厚さは0.6cmと薄手で、外面上部に3mm程度の短いスジ状の文様が3、4本確認できるが、ほぼ無文で、内面はミガキ調整である。58は口縁部から「く」字形に外側に向かって屈曲する頸部の小片と思われ、全体的に摩耗が激しく文様は確認できないが、無文であると思われる。59・60は頸部と思われる小片で、59は内側に向かって強く「く」字形に屈曲し、外面に文様は確認できず、内外面ともに丁寧なナデ調整がなされ、2mm程度の砂粒をやや多く含む。60も「く」字形に強く屈曲し、明瞭な稜がみられ、ラッパ状に開く口縁部をもつ器形であると想定されるが、摩耗が激しく欠損部も多い小片のため、詳細は不明である。61～64は胴部の小片である。61は、厚さは0.6～0.8mmと薄手で、灰褐色であり、無文である。62は黒褐色の胴部で、器壁は0.6cmと薄く、外面上部には横位の沈線が3～4条確認できる。強く内側に屈曲する明瞭な稜があり、底部につながっていく浅鉢形の器形と想定される。外面はミガキ調整がなされており、三万田式土器に類似する特徴をもつ。63は赤みが強い色調の胴部の小片で、器壁の厚さは0.8cmとやや薄手で、外面には横位の太さ3～4mmの明瞭な条痕が4、5条みられる。

64は厚さ0.7cmの小片であるが、外面には横位の条痕文が4条あり、色調も西平式土器と類似するが、内面にもやや斜めの横位の条痕が確認でき、その他の土器に分類した。



0 (1 : 3) 10cm

第24図 縄文時代の遺物④



第25図 縄文時代の遺物⑤

底部（第25図 65～68）

ここでは、土器底部の破片のみを一括して掲載するが、形状的には縄文時代後期から晩期のものであると想定している。

65は直径約9.0cmの底部全体の形状が残っているものであり、高さ1.5～2.5cmが残存する。端部が張り出し、内面はわずかに上げ底になるが、平坦な形状である。66は底部片で、高さ約1cm張り出した台状の平底から胴部が開く形状で、内底面は丸みを帯びる。67は、扁平でわずかに張り出し、内面も平坦に近い形状をもつ。

68は張り出しはなく、胴部からすぼまる器形であると想定され、直径は約4.8cmである。底面の中央部から直径約3.5cmの範囲は上げ底となっており、植物が付着した痕跡が確認できる。

(2) 石器

石器については、88点を図化した。掲載にあたっては、縄文時代の遺物包含層から出土したものだけでなく、形態的な特徴から類例があるものなど、縄文時代の石器の可能性が想定されるものを選別し、縄文時代の包含層と分けて、以下の3つに分類して掲載した。

- | |
|--|
| ・Ⅲ・Ⅳ層出土の石器（縄文時代の遺物包含層）
・Ⅰ・Ⅱ層出土の石器（古墳～近世の包含層と表土）
・縄文時代以外の遺構内からの出土 |
|--|

また、石器の主な出土地点については、土器と同様に調査区内の南側のE～I区が中心で、広くまばらに出土しており、調査区の中央から西側にかけての範囲にやや多い傾向がみられ、器種ごとにみても分布に偏りはそれほどみられない。(第41図)。

ア. Ⅲ・Ⅳ層出土の石器

Ⅲ・Ⅳ層は縄文時代の遺物包含層である。先述したように、調査区内は後世の開発の影響を受け、本遺跡のⅢ・Ⅳ層は削平されている範囲も多い。

Ⅲ・Ⅳ層からは、黒曜石を素材とする石器の割合が他の包含層と比べるとやや多く、器種別では、打製石鏃や石皿・台石の割合がやや高い。出土地点については、F～H-56～61区に比較的集中する傾向がみられる。

打製石鏃

剥片を素材とし、両側縁部の両面から押圧剥離を施した、小型で三角形状の石器を石鏃とし、欠損品も含めて報告する。なお、形態的な特徴から、下表のⅠ～Ⅲ類及び、a～c類の組み合わせで分類した（「天神段遺跡3」（調査センター 2018）の石鏃の分類を参考）。図化した石鏃は、いずれも無茎型である。

石鏃全体の形状
Ⅰ類：長身鏃（側縁部の長さが幅の約2倍ある細長い形状のもの）
Ⅱ類：二等辺三角形鏃
Ⅲ類：欠損品

脚部や挟りの形態
a類：脚部の挟りが浅いもの
b類：脚部が直線的に外側に開くもので、脚部の先端が尖っているもの
c類：脚部の挟りがU字形で、脚部の先端が平らなもの

※Ⅰ・Ⅱ層出土、遺構内出土の打製石鏃についても同じ分類を用い、以降はこの表を省略する。

Ⅰa類（第26図 69）

69は安山岩を素材とし、脚部の挟りが浅く、側縁部から脚部に向かって丸味を帯び、幅が細くなる帖地型（大久保型）である。尖頭部の先端は鋭く尖っている。

Ⅰb類（第26図 70）

70は針尾系の黒曜石を素材とし、脚部は外に大きく開き、幅が広く、長い。側縁部は直線的で、裏面左側の尖頭部の先端から側縁部に一部欠損がみられる。

Ⅱa類（第26図 71）

71は安山岩を素材とし、脚部の挟りが浅い形状である。中央部に厚みがあり、側縁部はわずかに湾曲する形状に加工されている。先端はわずかに破損している。

Ⅱc類（第26図 72・73）

72は日東系の黒曜石、73は安山岩を素材とし、脚部に「U」字状の挟りがみられ、やや厚みがある。2点とも形状は類似しているが、72は脚部が内側に向かって丸く加工されるのに対し、73は外側に向かって直線的に広がっている点が異なる。

二次加工のある剥片（第26図 74・75）

黒曜石を素材とし、二次加工を施した剥離痕のある小型の剥片及び剥片で、2点を図化した。

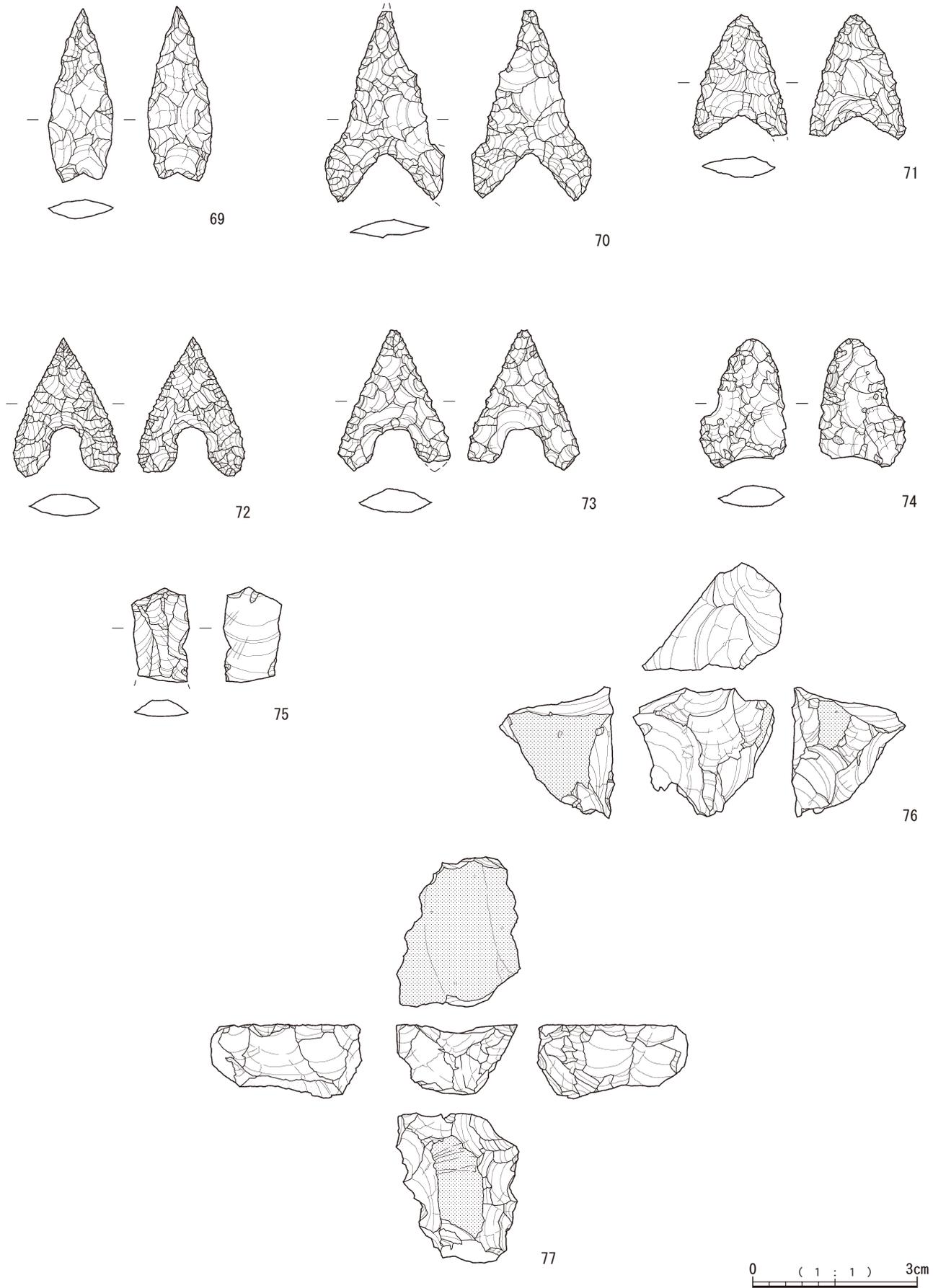
74は、不純物を多く含む日東系の黒曜石製で、両面ともに微細な押圧剥離による成形が行われており、側縁部にもわずかに調整剥離がみられる。石鏃の製作途中に、脚部にあたる部位が欠損し、廃棄された可能性がある。75は腰岳系の黒曜石を用いた、厚さ2mmの薄手で小型の剥片である。表面は縦方向からの剥離痕が複数みられるが、裏面は平坦な主要剥離面のみである。両縁は鋭い刃状になっているが、調整剥離の痕はみられない。

石核（第26図 76・77）

礫及び分割礫を素材とし、小型の剥片が剥出されたものを石核とし、2点を図化した。76は日東系の黒曜石製で、確認調査の第29トレンチ内のV層から出土した。右側面の一部と左側面から裏面は自然面が残っているが、正面・上面・右側面は多方向から複数回の剥離を行っている。77は光沢の少ない上牛鼻系の黒曜石で、正面・両側面いずれも剥片の剥離が繰り返され、上面は自然面が残る。側縁部はやや細かい剥離痕により刃部状になっていることから、石器として利用した可能性も考えられる。

磨製石斧（第27図 78・79）

素材となる礫に敲打調整を加えて形を整え、砥石で研磨加工された斧状の石器を磨製石斧とし、2点を図化し



第26図 縄文時代の遺物⑥

た。78はやや厚手の安山岩製で、下半部は研磨され、刃部の加工は丁寧で、欠損はみられない。上半部は敲打調整の跡が残り、上端部は破損している。79は砂岩を素材とした欠損品で、側縁部から刃部の中央付近のみが残っているが、非常に丁寧に研磨された鋭利な刃部がある。

敲打痕のある剥片（第27図 80）

こぶし大の中型の礫から剥出した剥片を素材とした1点を掲載した。80は砂岩製で、径約10cmの礫の剥片で、複数の敲打による剥離が確認でき、正面の上下及び左右側縁部にやや細かい剥離、裏面の左側縁部に大きめの剥離、下端部にも細かい剥離が認められる。用途は不明である。

敲石（叩石）（第27図 81・82）

礫を素材とし、全面もしくは部分的に敲打痕が見られ、磨面は不明瞭なものを敲石（叩石）とし、2点を図化した。81は灰色で多孔質の安山岩を素材とし、長さ11.5cmの棒状叩石である。上・下端部に使用痕がみられ、表面や右側面にはわずかに敲打痕が残る。82は被熱を受けたと考えられる赤色砂岩で、上下端部は欠損している、厚さ3～4cm程度の偏平な板状の礫である。表面と裏面の両面の中央部には敲打による凹みがみられ、凹石にも近い。

磨石（第27図 83・84）

礫を素材とし、全面もしくは部分的に明瞭な磨面を有し、敲打痕が不明瞭なものを磨石とし、2点を図化した。83は多孔質の安山岩を素材とし、やや偏平な円礫で、表・裏面のほぼ全面にやや粗い磨面をもつ。側面に使用痕はみられない。84は砂岩を素材とした肉厚の円礫で、正面2箇所、右側面、左側面、下面、裏面に各1箇所ずつ、部分的に楕円状に研磨され、計6面の磨面をもつ磨石である。磨面の多くが念入りに研磨され、滑らかでわずかに窪んだ面となっており、下面は平ら、裏面はやや粗い磨面となっており、砥石として利用された可能性も考えられる。

凹石

礫を素材とし、偏平な面をもち、原則として円形または楕円形に近い形状で、表・裏面の中央部の一面、または両面に敲打による凹みがあるものを凹石とした。凹みはあるが、板状の角礫など異なる形状の礫は別の器種としてここには含んでいない。なお、凹みの箇所や程度により、以下の4つの類型に分類し、掲載した。

凹みの形状による分類
I類：表面だけに凹みをもつもの
II類：表・裏面の両方に凹みをもつもの
III類：表・裏両面と側面にも凹みをもつもの
IV類：表・裏面の凹みが非常に浅いもの

※ I・II層出土、遺構内出土の凹石についても同じ分類を用い、以降はこの表を省略する。

なお、凹石の出土数は20個以上と本遺跡の中で最も出土点数が多い石器の1つである。磨敲石の一種として掲載したが、III・IV層からの出土は2点と少なく、他の時代の包含層や中世の遺構内からの出土の方が多いため、縄文時代以外の石器の可能性も否定できない。隣接する諏訪ノ前遺跡でも多数出土しているが、縄文土器の出土はごくわずかであること、いちき串木野市の柵城跡では類似の凹石が大量に出土したが、縄文時代以外の石器の可能性を示唆し、成川式土器を伴う住居跡から検出する例をあげている。こうしたことから、凹石の製作時期、用途等について再考する必要があるが、現段階では言及できない。

III類（第28図 85）

III類は表・裏両面に凹みをもつもので、1点を図化した。85は、偏平な安山岩の円礫を利用している。両面の中央部が、直径約3mm程敲打により凹んでいる。左右の側面にも敲打痕があり、特に右側面はほぼ平坦になるほど変形しており、磨石として使われた可能性もある。

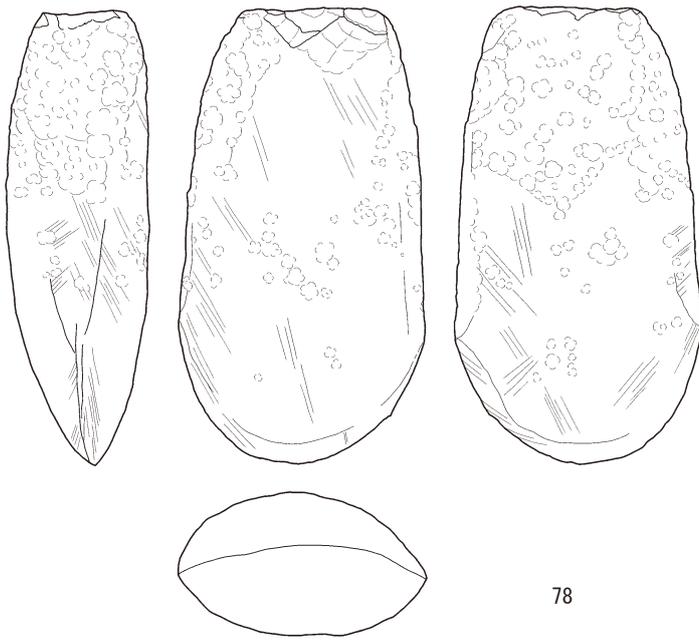
IV類（第28図 86）

IV類は、I～III類と比べ、敲打による凹みが非常に浅いもので、1点を図化した。86は、安山岩を素材とし、偏平な楕円形の礫を利用している。表・裏両面、両側面に敲打痕があり、上下端部に敲打痕はみられない。表・裏面の中央部付近は、硬い石材のためか、深さ1mm程度のごくわずかな凹みがみられる。

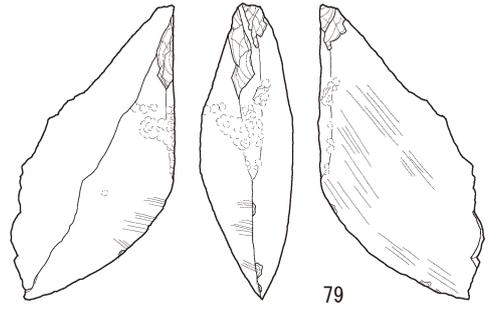
石皿・台石（第28・29図 87～93）

径10cm以上のやや偏平な角礫・円礫を利用し、磨面や、敲打・研磨による凹面を有するもので、食糧加工を目的としたものを石皿、食糧加工以外の目的で使用されたと考えられるものを台石とし、計7点を図化した。

87は、安山岩を素材とする偏平な板状の石皿で、一部が欠損している。表・裏面の中央部に縦長の楕円状にやや浅い凹みがみられ、左側面は破損しているが、右側面には磨面もみられる。88・89は欠損のない完形の石皿で、ともに厚さ約3cm程度の板状である。88は砂岩製の垂角礫を素材とし、表面全体が研磨され、表面の上部中央はわずかに凹んでいる。89は砂岩製の垂角礫を素材とし、表・裏面の全体が磨面だが、特に表面上部の中央～右側

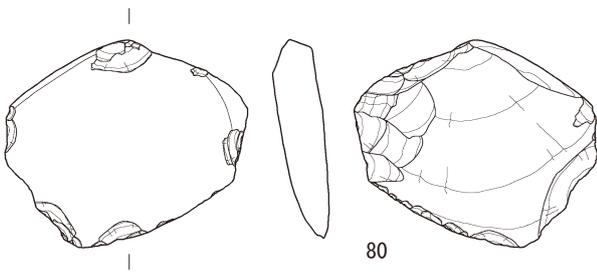


78



79

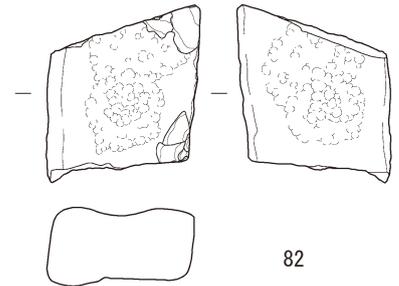
0 (1 : 2) 5cm



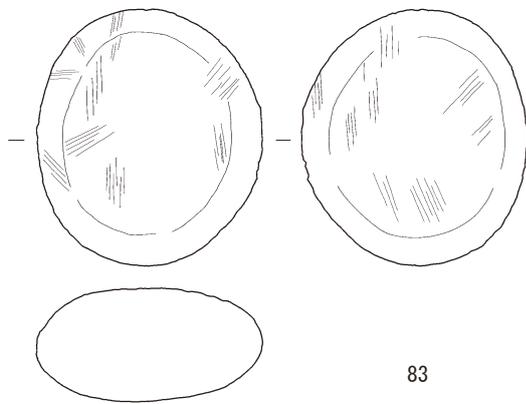
80



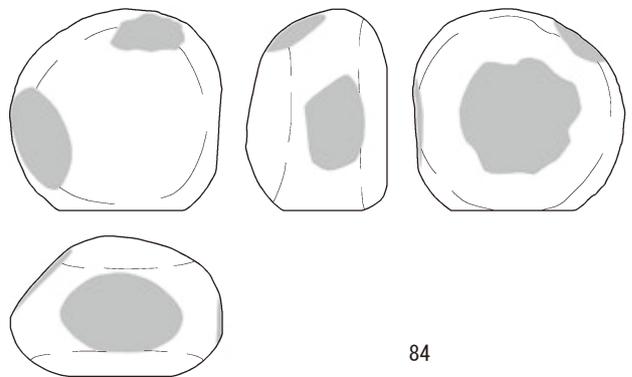
81



82



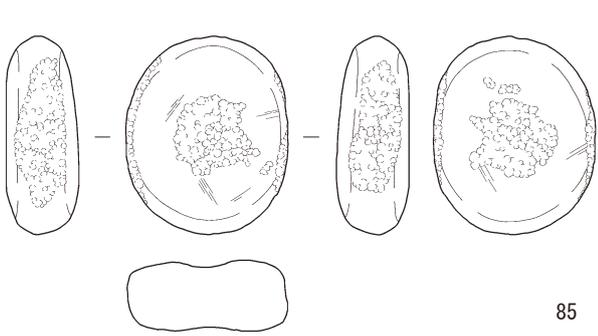
83



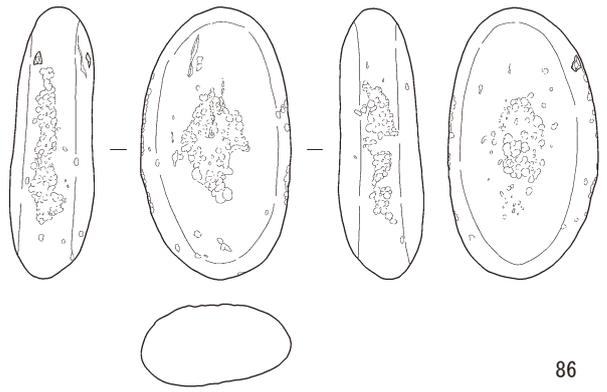
84

0 (1 : 3) 10cm

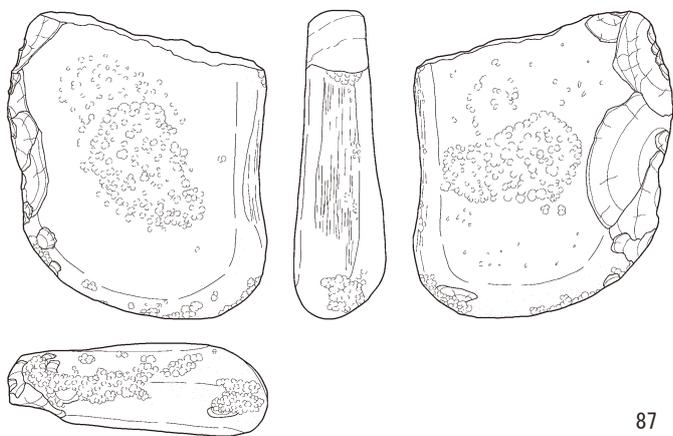
第27図 縄文時代の遺物⑦



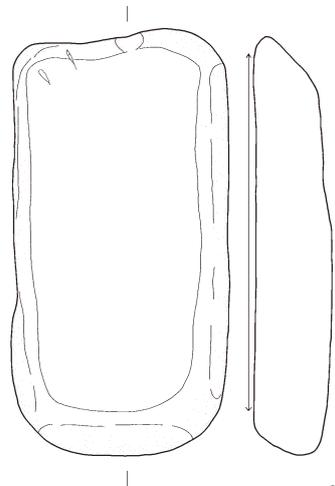
85



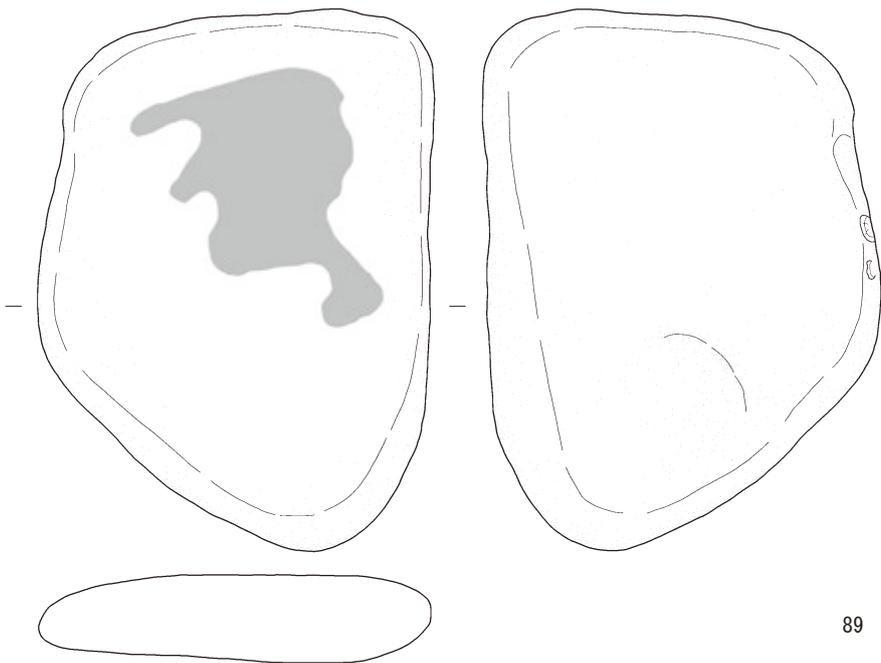
86



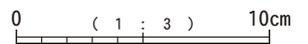
87



88



89



第28図 縄文時代の遺物⑧

にかけての範囲は非常に滑らかで丁寧に研磨されている。90は黒色の砂岩を素材とし、表面全体がざらつきが感じられないほど非常に丁寧に研磨されており、右側面や裏面は人工的に切断されたような直線的な断面になっている。91は長軸は約17cm、厚さは約4.5cmあり、側面と下端部は破損しているが、板状の偏平な角礫を素材とする、安山岩製の石皿である。表・裏面ともに平坦で、やや粗めに研磨されている。92は安山岩製の肉厚な円礫を素材とし、表・裏面には偏平な磨面がみられ、表面がやや丁寧に研磨され、石皿として利用されたと考えられる。93は白い不純物を多く含む砂岩を素材とし、長さ・幅約13cm、厚さ8cm、重量約3kgと大型の台石である。表面の広い範囲に摩耗した面がみられるが、全体的にざらつきの少ない石材で、自然面の可能性もある。左右の側面は部分的に欠損し、表面下部等には明赤褐色に変色した部分がみられる。

砥石（第29図 94）

素材となる礫の平坦面を利用し、明瞭な研磨の痕跡が認められるものを選別し、1点を図化した。なお、変性流紋岩製の砥石（天草砥石）については、縄文時代の可能性が低いと考え、別項で紹介する。

94は赤色砂岩製で、部分的に赤黒く変色しており被熱痕がうかがえる。側面はいずれも破損しているが、長さ・幅ともに10cm以上、厚み約2cmの偏平な形状で、表面全体が丁寧に研磨された滑らかで平坦な摩耗面となっている。右側面には幅5mm以内の細長いスジ状の穴が複数あいているが、その周りの平坦面は摩耗している。石材自体が、薄い層が節理状に重なり合っているため、側面の穴もこれに伴うものであると考えられる。その他に、磨面はみられない。裏面の一部には、炭化物が付着している。

石錘（第29図 95）

楕円形で薄い偏平の礫を素材とし、左右の両側縁部の一部を打ち欠いたものを石錘とし、1点を図化した。

Ⅲ層出土の1点のみで、他の層や遺構内からの出土はなかった。95は安山岩を素材とし、幅8.5cm、厚さ1.5cm程度の偏平な円礫で、表・裏面ともに長軸方向の両面からの打欠き部形成の剥離が施される。

イ I・II層出土の石器

I層（表土）及びII層（古墳から近世に該当）から出土した遺物で、縄文時代に製作された石器、または形態的に縄文時代の石器と想定されるものを抽出し、掲載した。出土地点は、F～H-45・46区やH・I-52・53区に多く、器種別では凹石が11個と、本遺跡で出土した凹石全体の50%以上を占める。

打製石鏃

打製石鏃の形態的な特徴による分類については、前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）を参照とされたい。

Ⅱa類（第30図 96・97）

96・97は、いずれも安山岩を素材とし、脚部の挟りが浅く、やや横幅が広い形状で、厚さは3mmと薄く、側縁部は鋸歯状になっている。96は尖頭部から脚部にかけて側縁部が湾曲し丸味を帯びながら脚部に向かって広がり、五角形鏃に近い形状となっている。脚部の片側が、欠損している。97は側縁部が直線に近く、わずかに湾曲しており、先端が欠損している。

Ⅲ類（第30図 98）

Ⅲ類は欠損した石鏃の一部と想定されるものである。98は日東系の黒曜石を素材とし、脚部を欠損し、尖頭部のみが残っている石鏃と思われる。先端や表面にも一部欠損がみられるが、細かい成形剥離を全面に施している。

石錐（第30図 99）

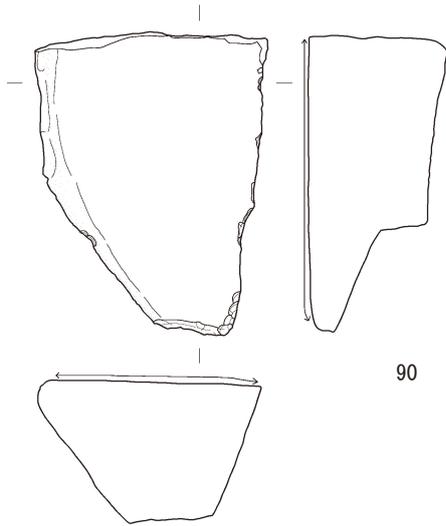
剥片の一端を鋭く尖らせて、錐状に加工したものを石錐として、1点を図化した。99は黒色のチャート素材としたやや肉厚な剥片で、長さ2cm程度のものである。表面は成形剥離を丁寧にいき、裏面は主要剥離面を残している。側縁から先端部には微細な加工を施し、錐部を作っている。錐部の使用痕は、明確に確認できない。

スクレイパー（第30図 100）

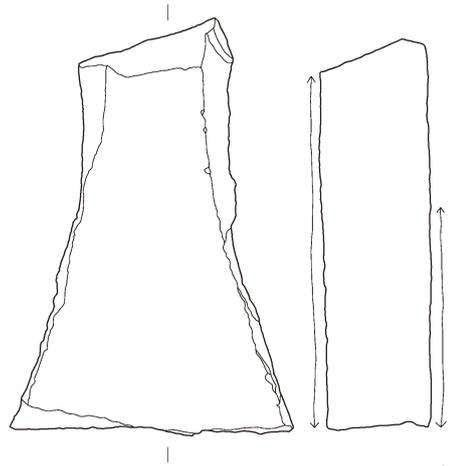
剥片の一端に二次調整を行い、刃部を形成したものをスクレイパーとし、1点を図化した。100は、長さ4.5cmの玉髓の剥片を素材とし、正面の左側面から下端部にかけての側縁部には細かい押圧剥離による調整を施して、刃部を形成している。小型のエンドスクレイパーであると考えられる。正面の左上縁部は、使用による欠損と思われる。裏面の先端部～左側面にも細かな調整剥離がみられる。

二次加工のある剥片（第30図 101・102）

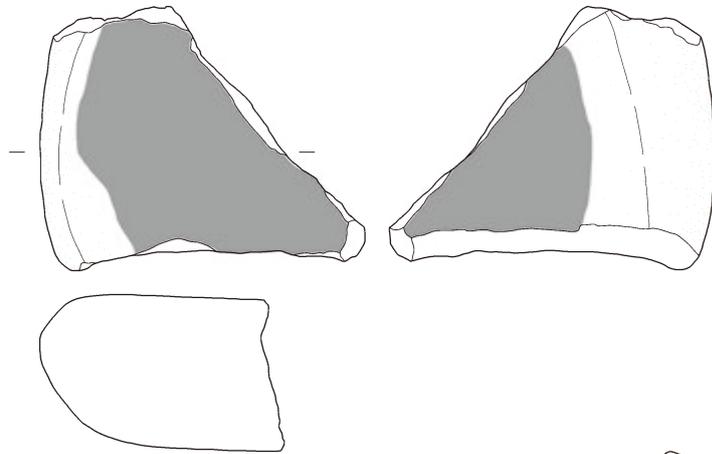
黒曜石の二次加工を施した剥離痕のある剥片で、2点を図化した。101は不純物を多く含む日東系の黒曜石を素材とし、表面に細かな剥離が連続的に施され、裏面は



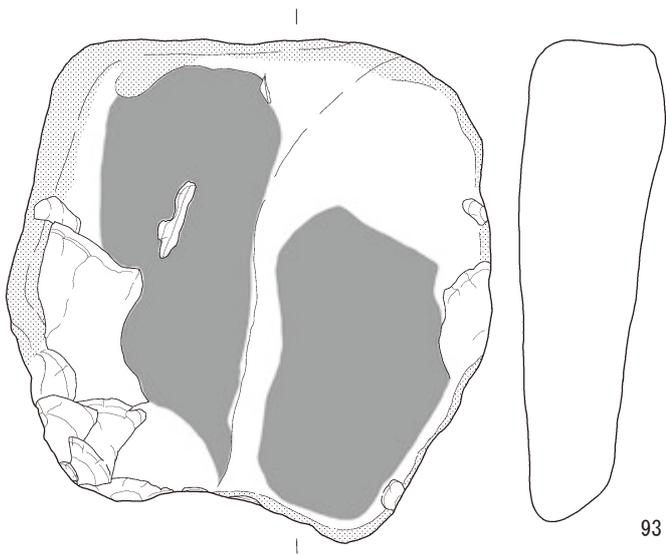
90



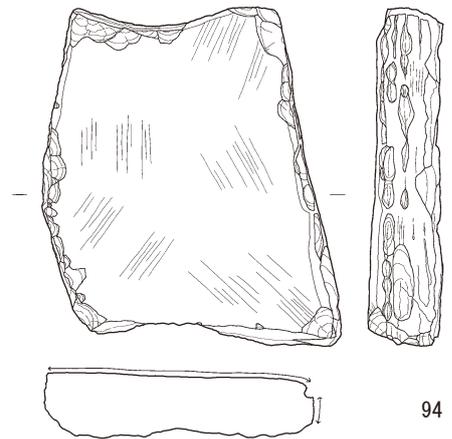
91



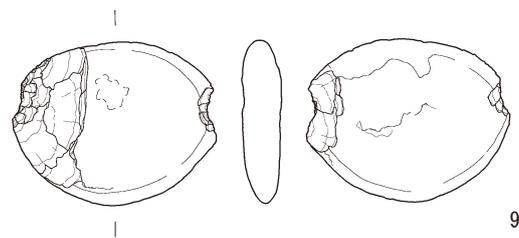
92



93



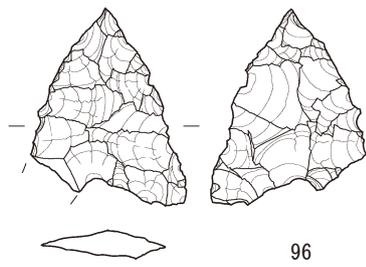
94



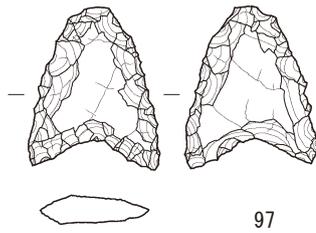
95

0 (1 : 3) 10cm

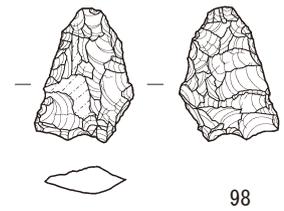
第29図 縄文時代の遺物⑨



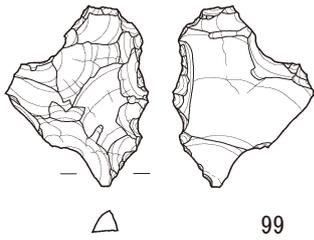
96



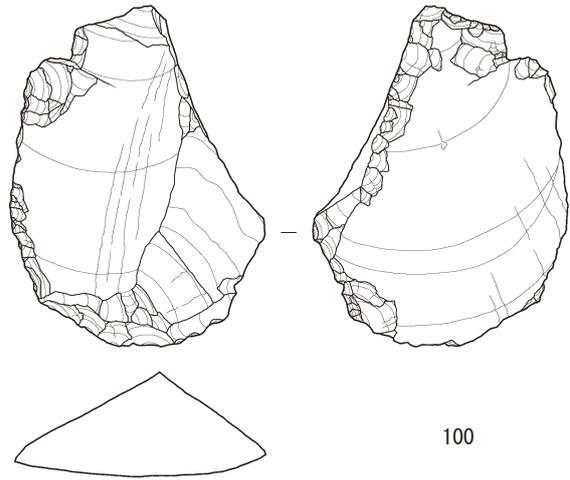
97



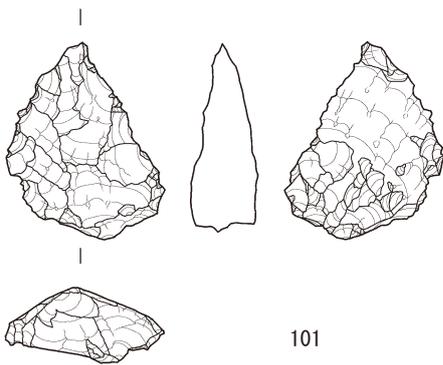
98



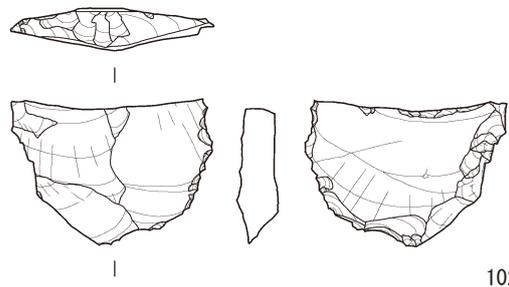
99



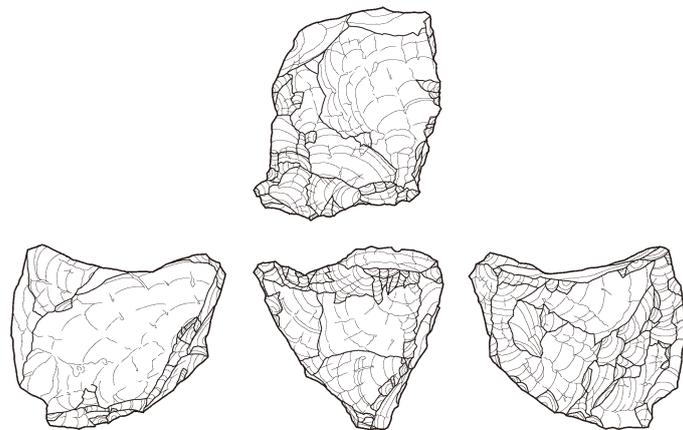
100



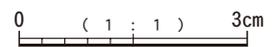
101



102



103



第30図 縄文時代の遺物⑩

部分的に細かな剥離がなされているが、上半部は主要剥離面も残っている。尖頭部をもち、側縁部は左右とも細かい調整剥離がなされている。石錐または鏃を意識した形状だが、側縁部左下が欠損しており、製作過程で廃棄された可能性がある。102は、腰岳系の黒曜石を素材とする。表面は大きな剥離の段階で終わっており、裏面はほぼ主要剥離面で、裏面の下端部は成形剥離がみられる。側縁部や上部には微細な二次加工がわずかにみられ、刃部状になっている。素材剥片の切断面には、複数の微細な剥離がみられる。

石核 (第30図 103)

小型の剥片を剥出したと考えられる、石核1点を図化した。103は、非常に多くの不純物を含む日東系の黒曜石で、正面には細かい剥離痕が多く、左側面・上面には比較的大きめの剥離痕がみられる。右側面の中央部には大きな半透明の不純物の脈が入りこみ、剥離が円滑に進まなかったことがみてとれる。

磨製石斧 (第31図 104・105)

素材となる礫に敲打調整、研磨加工した磨製石斧2点を図化した。104は淡い灰色のホルンフェルス素材とし、全面が丁寧に研磨されているが、両側面には敲打調整の跡が残る。刃部は使用痕とみられる欠損がみられるが鋭く研磨加工されている。105は頁岩を素材とし、上半部は破損しているが、全面が丁寧に研磨されており、側縁部には敲打調整の跡が見られ、刃部は非常に鋭く研磨加工され、欠損も少ない。

剥片 (第31図 106)

1点を掲載した。106は頁岩を素材とし、厚さ1cm程度で欠損部が多く、全体像は不明である。表面と裏面は大きな剥離が多く、表面の下部や裏面の先端部周辺や中央部は砥石で丁寧に研磨したような非常に滑らかな磨面をもつ。石斧の一部などの可能性も考えられる。

磨石 (第31図 107)

明瞭な磨面を有する磨石1点を図化した。107は安山岩を素材とし、直径約5cmで、球体に近い肉厚な円礫を利用している。部分的な細かな欠損もあるが、全面的に粗い磨面がみられるが、左側面のみ比較的使用され、なめらかな磨面となっている。

磨敲石 (第31図 108・109)

礫を素材とし、全面もしくは部分的に明瞭な磨面を有し、平坦面や側縁に敲打痕がみられるものを磨敲石として、2点を図化した。108・109はともに多孔質の安山岩を素材としている。108は、楕円形で肉厚の形状で、欠損

部には敲打による使用痕が残る。表・裏面と側面は磨面がみられ、裏面はわずかだが敲打による凹みも確認できる。109は欠損しているが棒状を呈する形状と考えられ、裏面は被熱により黒く変色している。表面中央部には敲打痕、上端部は敲打痕と磨面があり、繰り返し使用した痕跡がみられる。

凹石

礫の中央部を敲打し、明瞭な凹みをもつ凹石11点を図化した。凹石の分類については、前項(Ⅲ・Ⅳ層出土の石器)を参照とされたい。

I類 (第32図 110)

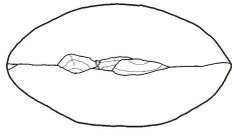
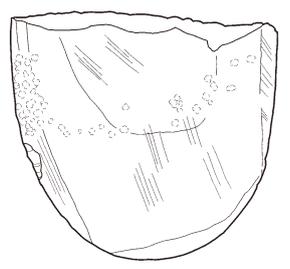
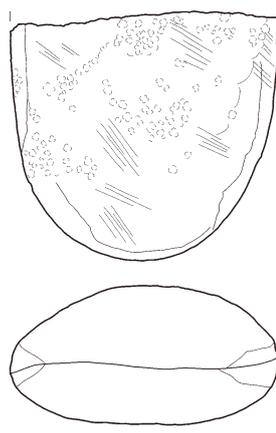
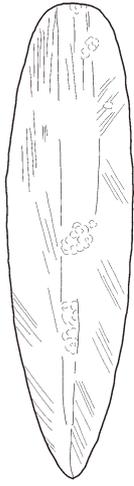
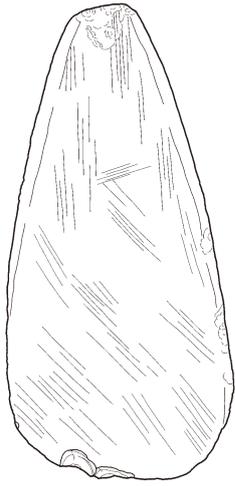
I類は表面にのみ凹みをもつもので、1点を図化した。110は安山岩を素材とし、楕円形で厚みのある形状だが、表面は偏平な面となっており、多くの敲打痕をもつ。裏面は不定形で敲打痕もほぼないが、部分的に磨面があり、磨敲石としての特徴をもつ。

II類 (第32図 111～114)

II類は表・裏両面に凹みをもつもので、4点を図化した。石材は111が砂岩、112～114は多孔質の安山岩を素材としている。111と113は、ともに楕円形で肉厚の球状で、特に111は重さ700g以上と最も重く、石材も硬質である。中央部の凹み以外に、側面全体にも敲打による使用痕がみられる。113は表・裏面の中央部の凹みはやや浅い。下面にも敲打痕があり、下端の欠損部は敲打により破損したものと考えられる。112・114は両面に偏平な面をもつ、やや平たい円礫である。112はやや赤味を帯びたやや肉厚の安山岩製で、両面に顕著な凹みが見られ、右側面も敲打により変形している。114は厚さ3.4cmとやや薄い円礫で、裏面は平坦でなく、節理や破損により凹凸がみられるが、表面と同様に中央部に敲打による凹みが確認できる。上部にも敲打痕がみられる。

III類 (第33図 115～119)

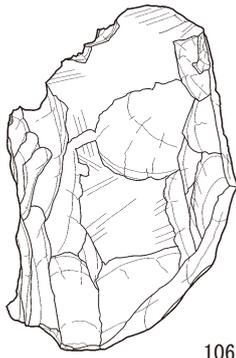
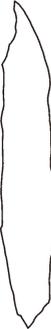
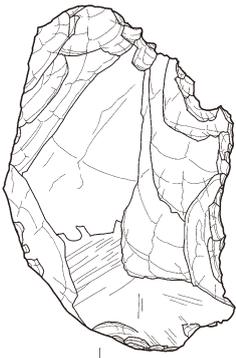
III類は表・裏両面に加え、側面にも顕著な凹みがみられるもので5点を図化した。石材は115～117、119は安山岩製で、118のみ凝灰岩である。形状は偏平な楕円形で、上端部や下端部にも凹みがあるものも多い。115は楕円形の偏平な形状で、左右の側面の上半部・下半部にそれぞれ敲打による凹みがあり、凹み以外の両面と上下面はほぼ磨面になっている。116は石鯨状の形状だが、敲打や研磨によって繰り返し使用されている。表・裏面、両側面と上下面、それ以外の箇所にも著しい凹みがみられ、側面の凹みは左右とも同じく、斜め方向に擦られた様子がうかがえる。117は楕円形の棒状で、やや偏平で赤味を帯びた安山岩製である。表・裏両面と左・右両側面にも顕著な凹みが見られ、下端部には敲打痕が確認でき、



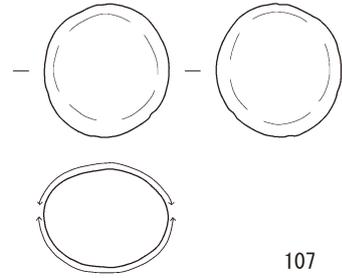
104

105

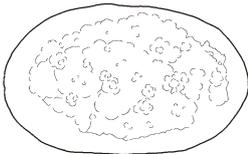
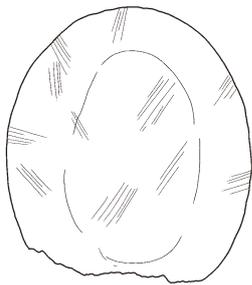
0 (1 : 2) 5cm



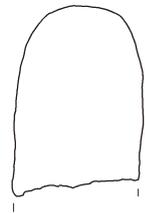
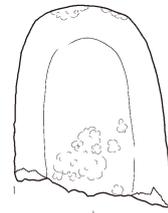
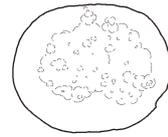
106



107



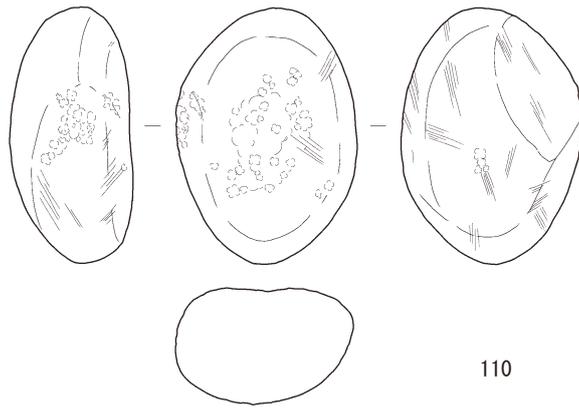
108



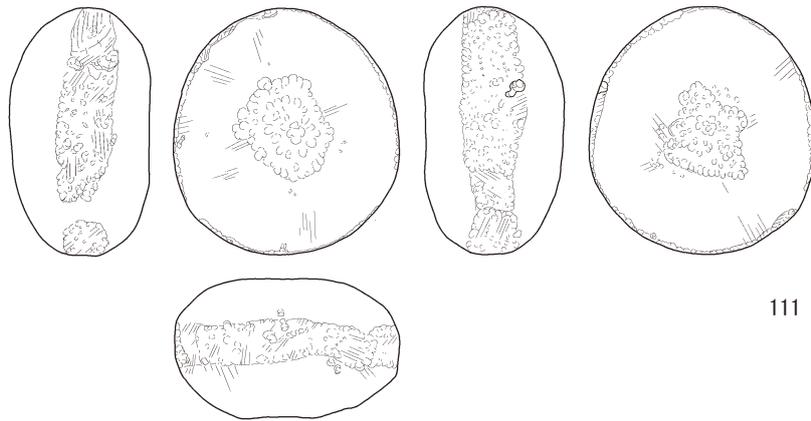
109

0 (1 : 3) 10cm

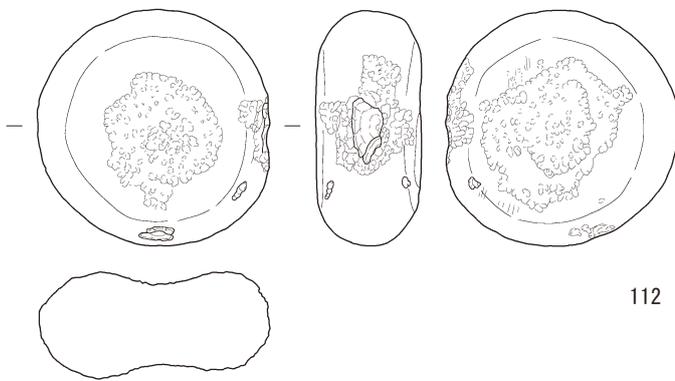
第31図 縄文時代の遺物①



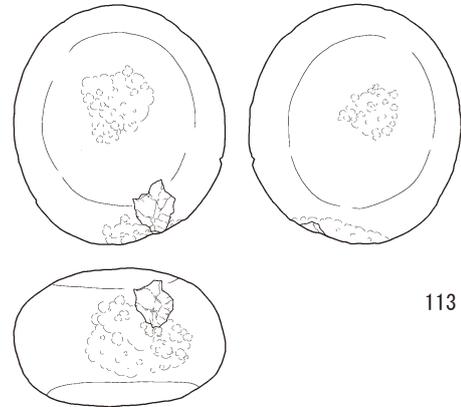
110



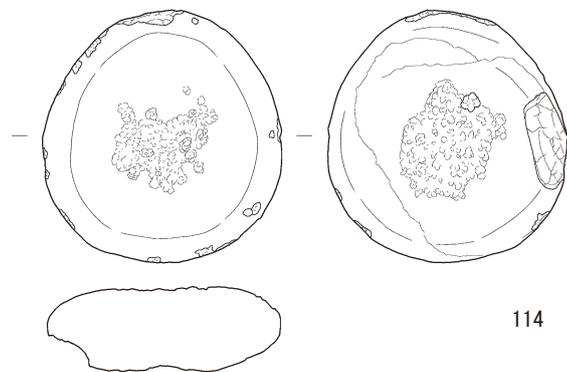
111



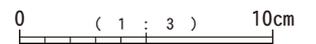
112



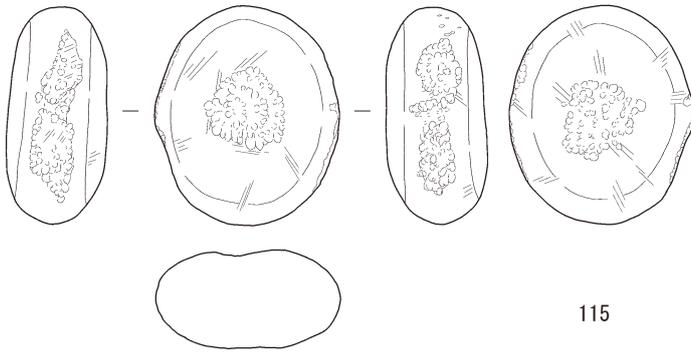
113



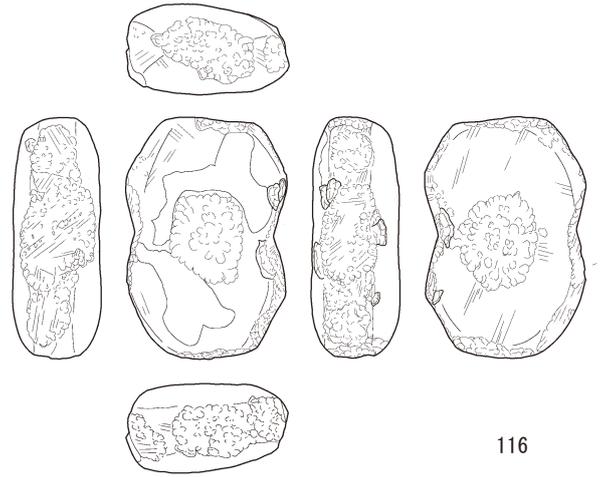
114



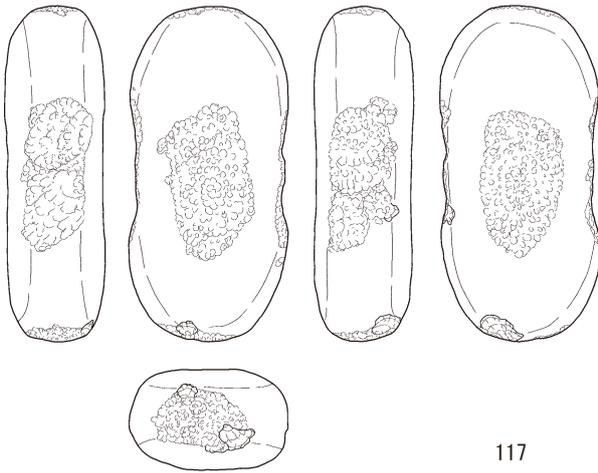
第32図 縄文時代の遺物⑫



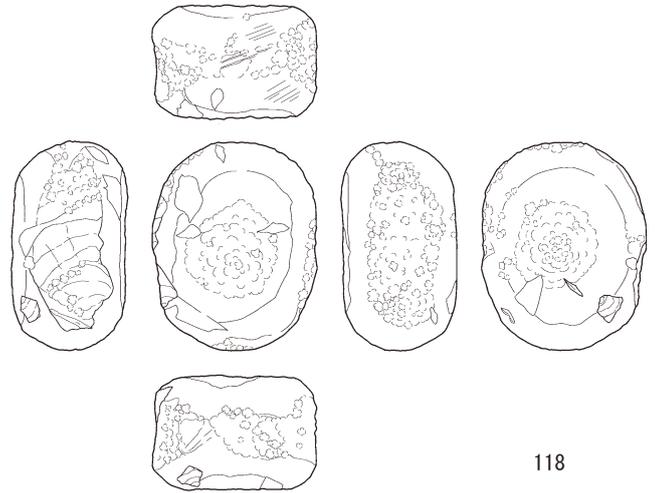
115



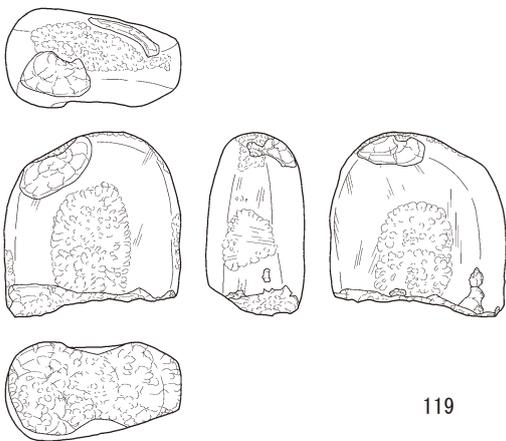
116



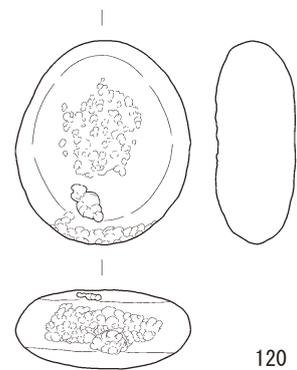
117



118



119



120

0 (1 : 3) 10cm

第33図 縄文時代の遺物⑬

ハンマーのように利用したと考えられる。118は凝灰岩製で、楕円形のやや肉厚の円礫を素材とする。表・裏面中央部は敲打により約8mmと深く凹み、左・右側面は敲打により偏平になるほど使いこまれ、凹みをもち、上・下面は敲打痕がみられるが凹みはなく、擦った痕跡は確認できない。119は上端部2か所が破損し、下半部は欠損しているが、もとは偏平でやや細長い楕円形であったと考えられる。中央部は敲打による顕著な楕円形の凹みが両面にあり、右側面にも摩耗した凹みがみられ、裏面の左半分には磨面が残る。上面には敲打痕、下面は破損した断面を利用して敲石として再利用した敲打痕がある。

IV類 (第33図 120)

IV類は凹みのごく浅いもので、1点を図化した。120は表は灰褐色、裏面は赤褐色で赤味が強く、硬質で偏平な安山岩製の円礫を素材とする。表面の中央部に敲打痕が多くみられるが、表面が擦りとられた程度のごく浅い凹みがある。裏面は敲打痕はなく、下面には敲打痕がみられる。

石皿・台石 (第34図 121～123)

石皿・台石として計4点を図化した。121・122は赤色砂岩製で欠損部のある石皿の破片であるが、形状或使用痕に共通する点がみられる。121は赤味が強く、表・裏両面の中央部に敲打による顕著な凹みがみられ、表面には2か所、裏面は1か所の凹みがある。右側面の下半部や左上半部は丁寧に研磨され、砥石のように滑らかな磨面がみられる。上面・左側面にも局所的だが同様の滑らかな部分がわずかに確認できる。122はにぶい橙色で、121より一回り小さいが同形状で、121と同じく凹みが表面に2か所、裏面に1か所、上面・左側面に滑らかな磨面をもつ点も類似している。表面の凹みは掻き出し口が右側に延びているようだが、欠損しているため断定できない。また裏面の凹み周辺は磨面があり、左側面中央部は敲打痕もみられる。121、122の側面の磨面は、石皿とは異なる用途で使用された可能性もある。123は肉厚の砂岩製で、表・裏両面の中央部に敲打痕によるやや浅い凹みをもち、側面には使用痕はみられない。121～123は円礫ではないが、両面に凹みをもつ凹石の様相をもつ。

砥石 (第34図 124～126)

素材となる礫の平坦面に研磨の痕跡が認められるもので、3点を図化した。石材はすべて砂岩である。124、126は、厚さ1cm程度の偏平な形状で、裏面など大部分が破損しているが、表面や上面に摩耗面が認められる。125は礫の表面に褐色のスジが複数入った砂岩で、表・裏面だけでなく両側面に摩耗面が認められ、表・裏面の中央部には敲打痕もみられる。

軽石製品 (第35図 127・128)

軽石を素材とし、研磨などの加工痕が残るものを軽石製品として、2点を図化した。2点とも表面や断面が淡い黄褐色の軽石である。127は径6cmで、表面・下面・右側面それぞれに平坦な磨面がみられ、裏面は自然面と考えられる。128は径3.5cm、厚さ0.7mmほどの小片で表・裏面に摩耗面がみられる。2点とも加工痕があるが用途は不明である。

その他 (第35図 129)

その他の石器・石製品として1点を図化した。129は赤色砂岩を素材とし、長さ・幅約8cm、厚さ約3cmである。中央部には穿孔がみられ、表面は平坦で、一部破損もあるが全体的に滑らかな磨面になっている。孔は表面から裏面にかけて徐々に径が大きくなり、表面では直径1.5cm、裏面は2.5cmあり、孔の内部面は研磨されている。裏面や側面は破損していると考えられ、全体像や石器の用途は不明である。

ウ 縄文時代以外の遺構内から出土した石器

ここでは、中世から近世の遺構内から出土した石器を紹介する。その多くが中世以降の溝跡（溝状遺構1・2・4・6号）の埋土から出土したもので、土坑やピット出土のものも含む。縄文時代に製作されたと思われる石器、または形状的に縄文時代の石器に類似するものを抽出し、掲載した（※出土遺構については第13表の観察表を参照）。

打製石鏃

打製石鏃の形態的な特徴による分類については、前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）の説明を参照とされたい。

Ⅲ類 (第36図 130)

欠損した石鏃と想定されるもの1点を図化した。130は日東系の黒曜石を素材とし、尖頭部が欠損した石鏃の一部と考えられ、左右の側縁部は細かい調整剥離により加工され、脚部の挟りは非常に浅い。基部表面の中央部がやや盛り上がり、細かな成形剥離がみられるが、裏面は平坦で、主要剥離面をそのまま利用している部分が多い。

磨製石斧 (第36図 131～133)

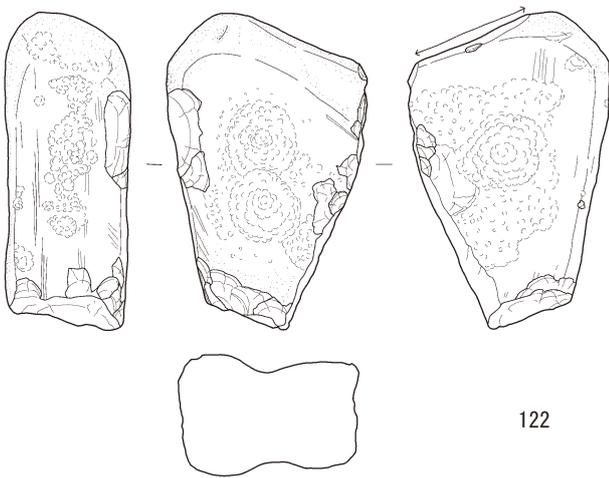
素材となる礫に研磨加工した磨製石斧3点を図化した。131は溝状遺構4号から、132・133は溝状遺構1号の埋土から出土したものである。

131・132はともに細長く偏平な頁岩を、素材としている。

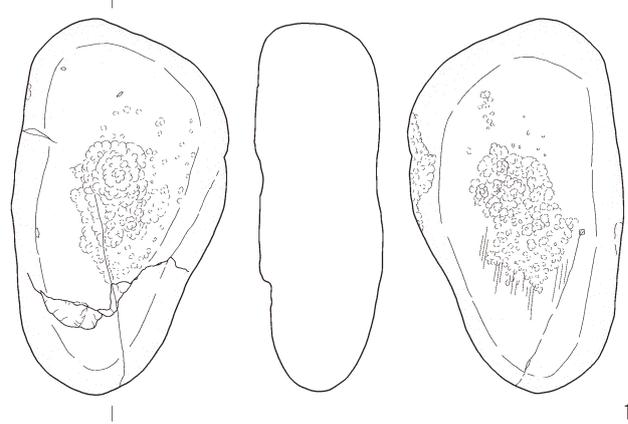
131はほぼ完形で、長さ約9cm、幅約3.5cmと小型の細長い形状で、刃部は胴部幅よりもやや狭く、裏面下端



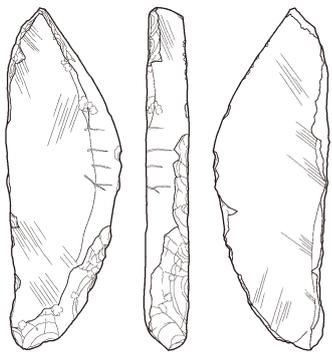
121



122



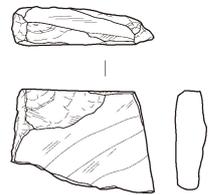
123



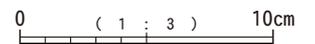
124



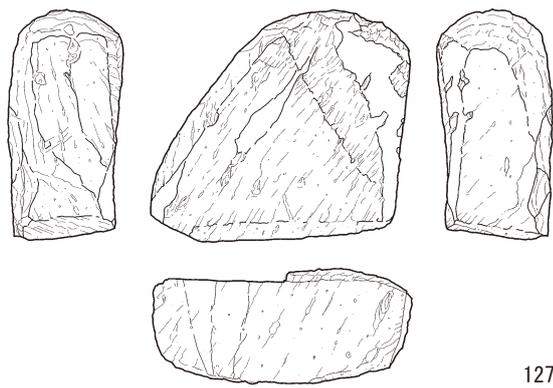
125



126

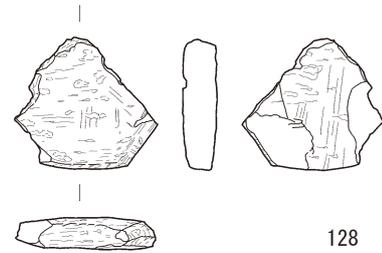


第34図 縄文時代の遺物⑭

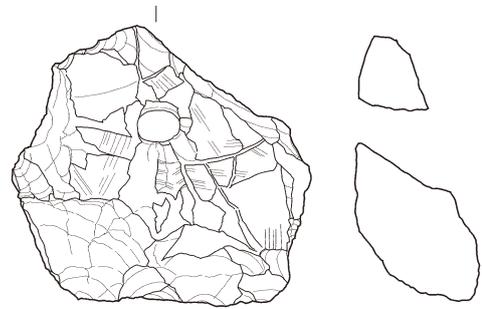


127

0 (1 : 2) 5cm



128



129

第35図 縄文時代の遺物⑮

部だけを研磨加工して刃部を形成した石斧である。132は胴部～刃部だけの破損品で、長さ約8cm、幅4.5cmの短冊形である。刃部周辺は表・裏面から丁寧に研磨され刃部が形成されているが、欠損が複数みられる。133はやや厚みのある細長い砂岩を素材とした、基部～胴部だけの破損品で、刃部が残っていれば、約12～13cmの石斧と想定される。胴部に比べ、基部が非常に細い乳棒形の石斧である。表面は全体的に摩耗し、部分的な剥落も多く、十分な研磨の度合い・状況は確認できない。

打製石斧（第36、37図 134・135）

偏平な礫を素材とし、剥離成形により刃部を作出した土掘具と想定されるものを打製石斧とし、2点を図化した。134は溝状遺構2号から、135は溝状遺構4号から出土している。134は砂岩を素材とした破損品で、側縁部は柄に装着するためと考えられるやや浅い抉りがみられ、鋏のように使用したと想定される。135は頁岩製で、表・裏面を成形加工し、下端部はやや細かく調整を施し、鋭い刃部を形成しており、スクレイパー等の可能性も考えられる。側縁部もやや鋭く加工され、基部は破損している可能性がある。

敲石（叩石）（第37図 136・137）

全面または部分的に敲打痕をもち、磨面は不明瞭な敲石（叩石）2点を図化した。136は溝状遺構1号から、

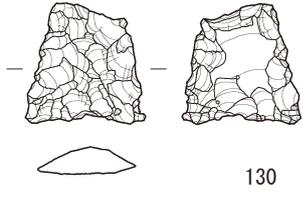
137は掘立柱建物1号のピットから出土し、2点とも細長い形状の多孔質の角閃石安山岩を素材とする。136は細長く偏平な楕円形の礫を素材とし、下面に使用痕がみられる。左右の側面には2か所ずつ敲打または剥離による凹みをもつ。137は上半部が欠損しているが、下面に使用痕があり、叩石として利用されたものと考えられる。

磨石（第37図 138）

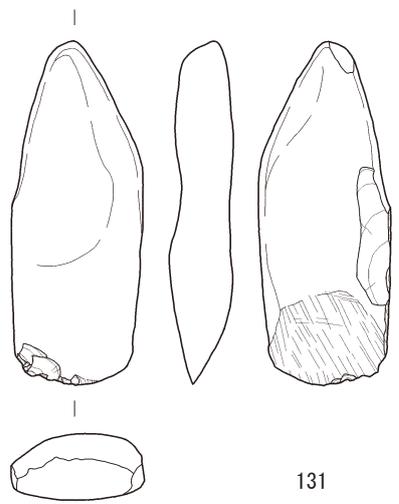
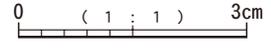
明瞭な磨面を有する磨石1点を図化した。138は溝状遺構6号から出土し、肉厚でやや偏平な安山岩の円礫を素材とする。表・裏面や側面は全体的にわずかに磨面がみられる。

磨敲石（第37図 139～141）

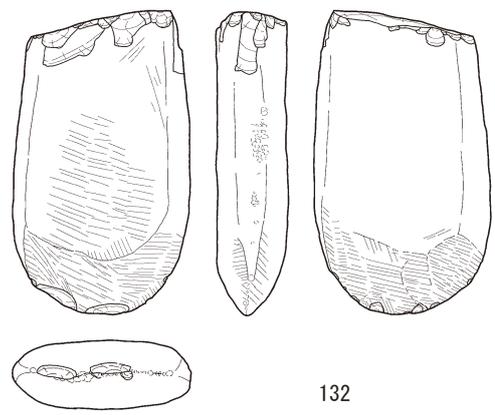
礫を素材とし、明瞭な磨面を有し、平坦面や側面に敲打痕がみられるもの3点を図化した。139は溝状遺構1号、140は溝状遺構5号から、141はピット（SP3264）から出土したもので、安山岩製である。139はやや細長い楕円形の礫を素材とし、両面の中央部付近を除いて、ほぼ全面がわずかな磨面となっており、下面は敲打痕がみられる。140は偏平な円礫を素材とし、表・裏面や側面の多くにわずかな磨面がみられ、右側面のみ敲打痕がみられる。141は細長く肉厚の楕円形の礫を素材とし、全体的によく利用された磨面で形成されている。両面の中央部付近は敲打の繰り返しによる浅い凹みがあり、上面にもわずかに敲打痕が残り、凹石の様相をもつ。



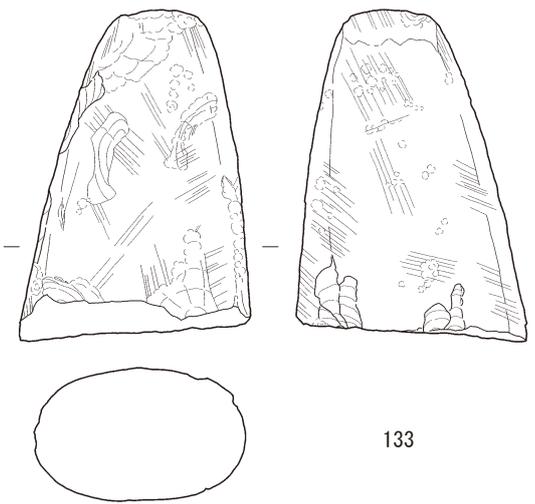
130



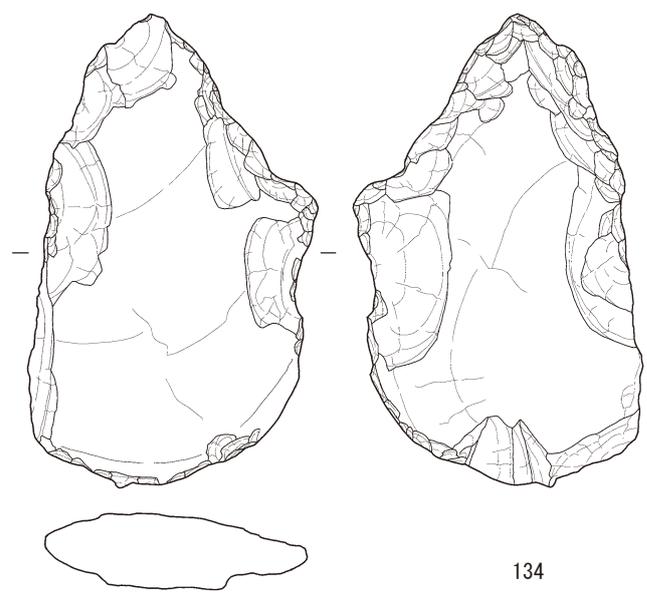
131



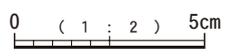
132



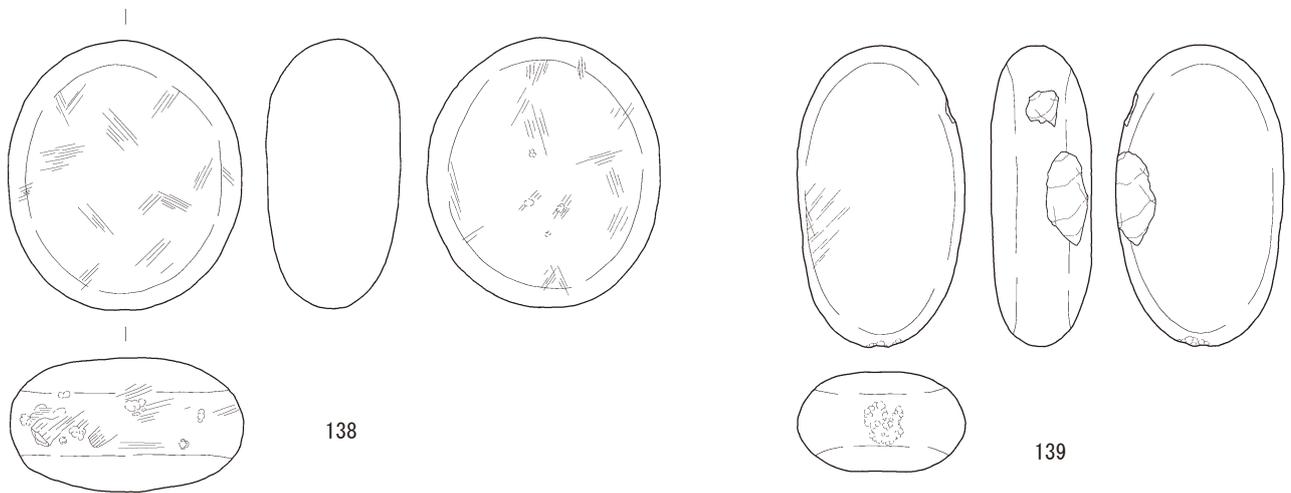
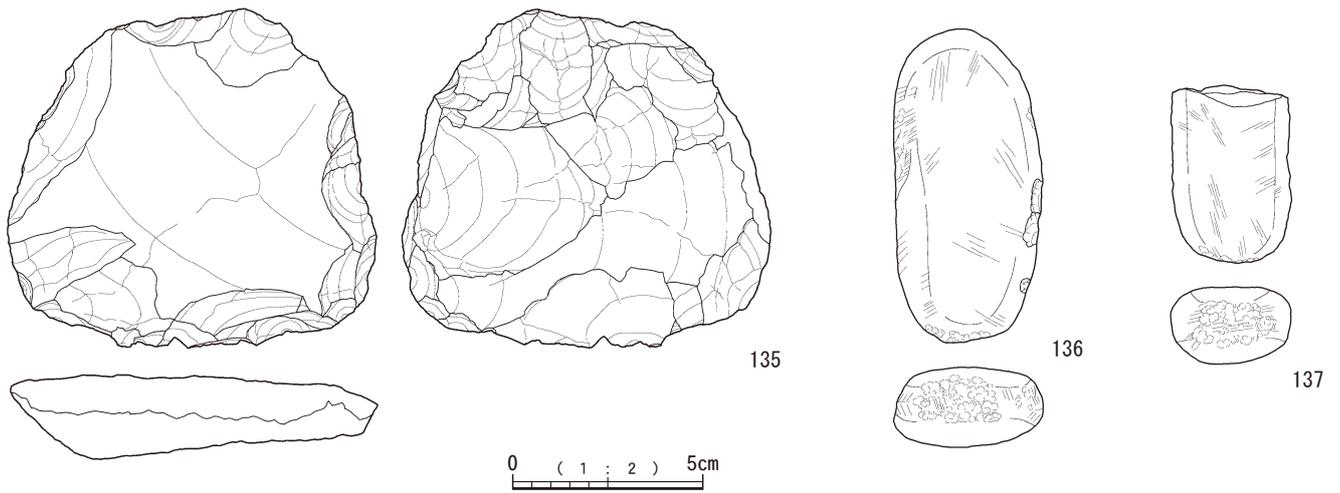
133



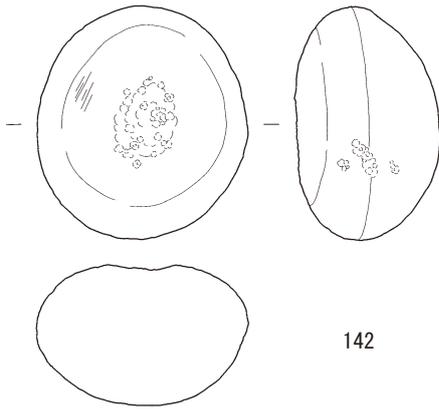
134



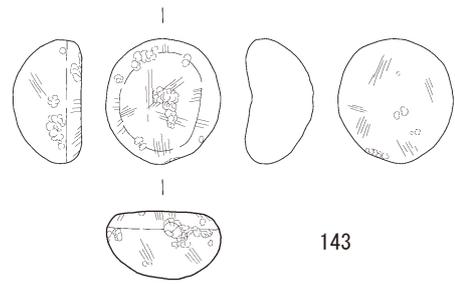
第36図 縄文時代の遺物⑩



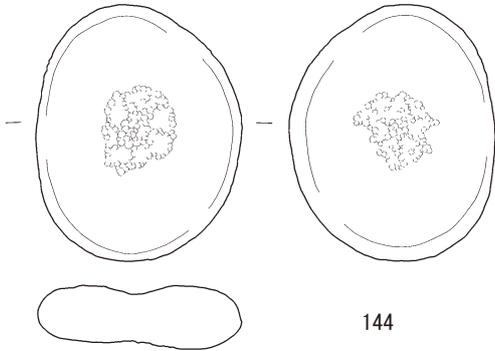
第37図 縄文時代の遺物①



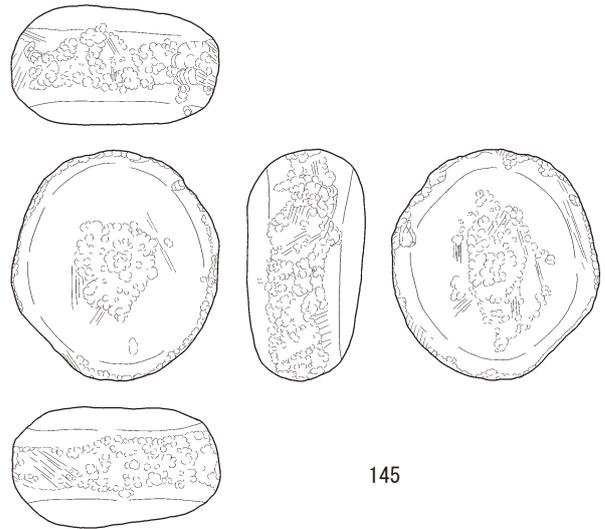
142



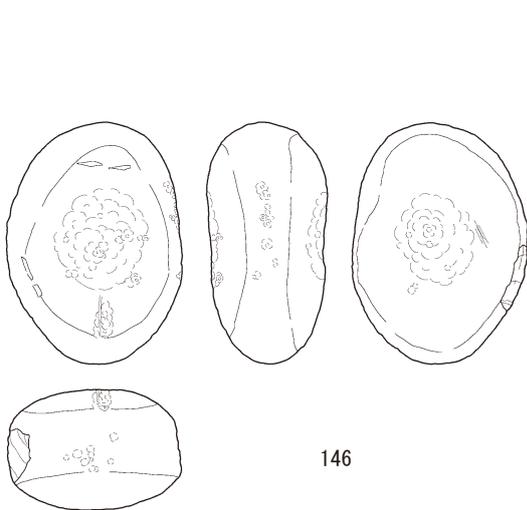
143



144



145



146



147

0 (1 : 3) 10cm

第38図 縄文時代の遺物⑱

凹石

礫の中央部を敲打し、明瞭な凹みをもつもの9点を図化した。凹石の分類については、前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）を参照とされたい。

I類（第38図 142・143）

I類は表面にのみ凹みをもつもので、2点を図化した。142・143はともに多孔質の角閃石安山岩の円礫を素材とし、表面だけが扁平で、その中央に凹みがみられる。142はこぶし大の円礫で肉厚、表面の中央部に約3cmほどの敲打による凹みをもち、裏面は中央部が丸く盛り上がり、使用痕はみられない。143は直径約4.5cmの小さく厚みのある円礫で、表面は全体的に凹んでおり、中央に敲打痕が見えるが、その周辺は磨面になっている。下面にも敲打痕がある。

II類（第38図 144～146）

II類は表・裏両面に凹みをもつもので、3点を図化した。144・145は多孔質な角閃石安山岩製、146は凝灰岩製である。144・146は溝状遺構4号から、145はピット（SP2439）から出土したものである。144は厚さ約2cmの扁平な円礫を素材とし、表・裏面に顕著な敲打痕と凹みをもち、側面には使用痕はみられない。145は厚さ約4.5cmの肉厚な円礫を素材とし、両面に顕著な凹みをもつ以外に、側面全体も敲打により部分的に欠けた結果、変形し、いびつな形状である。146は表面の凹みは深く、右側面も敲打により変形し、やや扁平な面となっている。

III類（第38, 39図 147・148）

表・裏両面に加え、側面も顕著な凹みがみられるもの2点を図化した。147・148はともに溝状遺構1号から出土したものである。147は細長い楕円形でやや肉厚な安山岩を素材とし、表・裏面と両側面は非常に深く凹んでおり、上面・下面も敲打による破損がみられ、各部位を繰り返し使用した痕跡がうかがえる。148は扁平な楕円形のホルンフェルス素材とし、硬い石材のためか、両面の中央部と左右の両側面の凹みはやや浅いが、側面は全体が平坦になるほど使い込まれており、特徴のある凹石である。

IV類（第39図 149・150）

凹みがごく浅いもの2点を図化した。149・150はともに溝状遺構1号から出土したもので、150は埋土1で検出した石列から出土したものである。石材は、2点とも安山岩製である。149はやや厚手の楕円形の礫を素材とし、両面に扁平な面を持ち、その中央部は敲打によるわずかな凹みがみられる。また凹みはないが、左右側面も

多数の敲打痕があり、部分的に欠損部もみられ、敲打痕の周辺は磨面が認められる。150は扁平な直径15cm以上の大型の凹石で、両面の中央部は敲打痕が残り、わずかに凹んでいるが、側面には使用痕はなく、磨面もみられない。

石皿・台石（第39・40図 151～154）

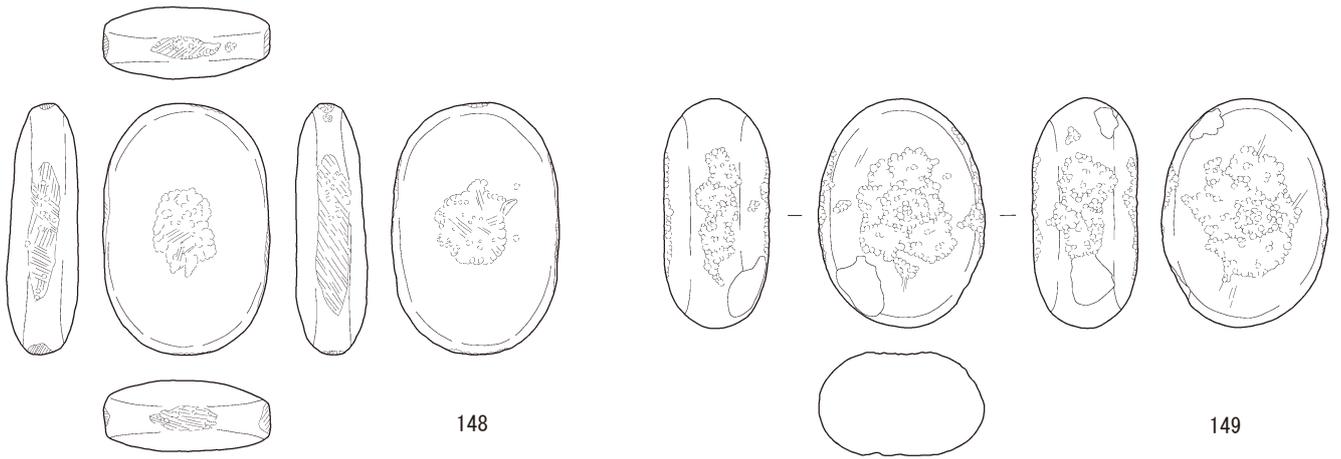
石皿・台石として計4点を図化した。151が土坑4号から、152は溝状遺構1号の石列、153は溝状遺構1号、154はピット（SP2322）内から出土したものである。151は赤色砂岩製で、直方体に近い板状の石皿で、下半部は欠損している。表面は平坦で、ほぼ全面が使用によって滑らかな磨面となっており、中央部は擦り減ったようになだらかに凹んでいる。中央部付近は敲打痕もみられる。裏面はゴツゴツとしているが、左下半部が滑らかな磨面、左側面も敲打痕とやや滑らかな磨面、右側面には敲打痕がみられる。152は、多孔質の安山岩製の石皿の破片で、全体的に摩耗しているものの、表面の右下半部はやや滑らかな磨面が残っており、もとは全面が磨面であったと想定する。153は、板状の砂岩製で下半部が破損した台石と考えられ、表・裏両面の中央部付近に多くの敲打痕をもつ。154は、安山岩製の円礫で、左半部が破損している。径約31cm、厚さ約7.5cm、重さ5kg以上の大型の石皿で、表面上部には楕円形に近い深い凹みをもち、その凹みを中心に広い範囲がなだらかに凹んだ磨面がみられる。裏面はやや反り返るような形状で、自然面であると考えられる。

砥石（第40図 155）

素材となる礫の平坦面に、研磨の痕跡が認められるもの1点を図化した。155は溝状遺構1号から出土し、薄手で板状の赤色砂岩製である。表面と下面の全体が丁寧に研磨され、滑らかな磨面になっている。裏面は平坦だが研磨の痕はなく、下面以外の側面は破損している。

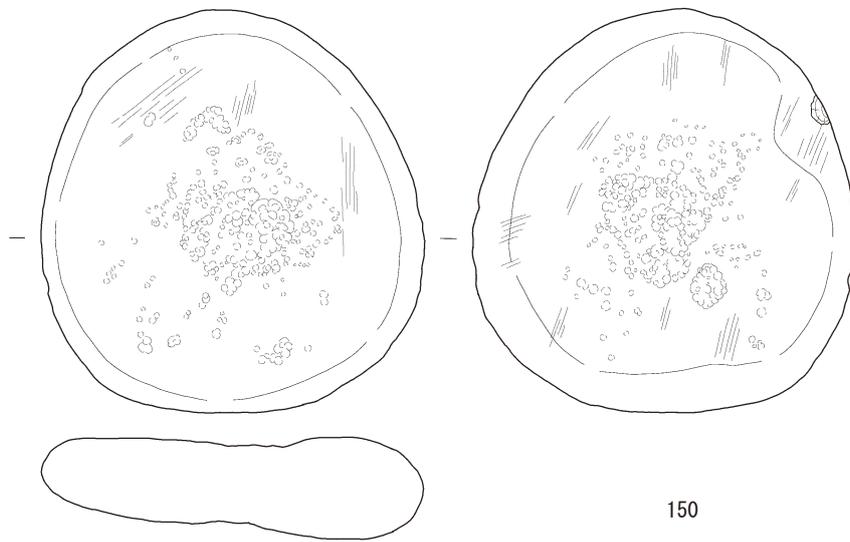
その他の石器（第40図 156）

156は多孔質の溶結凝灰岩製で、円錐台状に加工されたと考えられる。上面、下面は楕円形に近く、長軸はそれぞれ約10cm・13cm・短軸は8cm・10cm、高さは約16cmで、上面の左半部には炭化物が付着している。側面には擦痕や使用痕などは確認できず、用途不明で、その他の石器として掲載した。



148

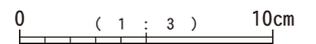
149



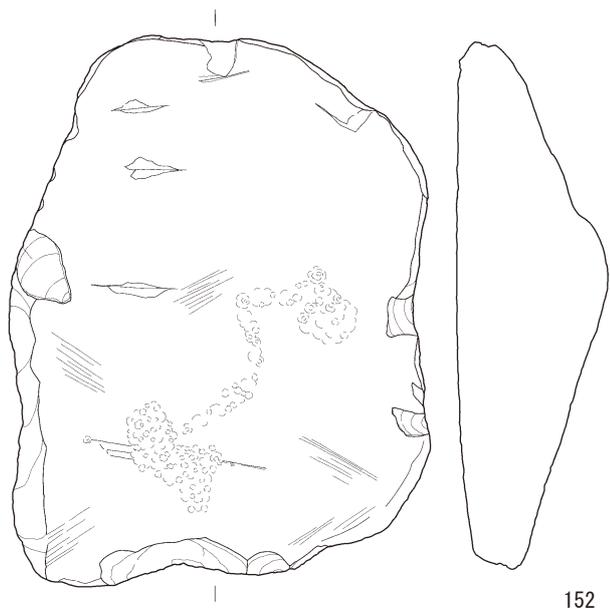
150



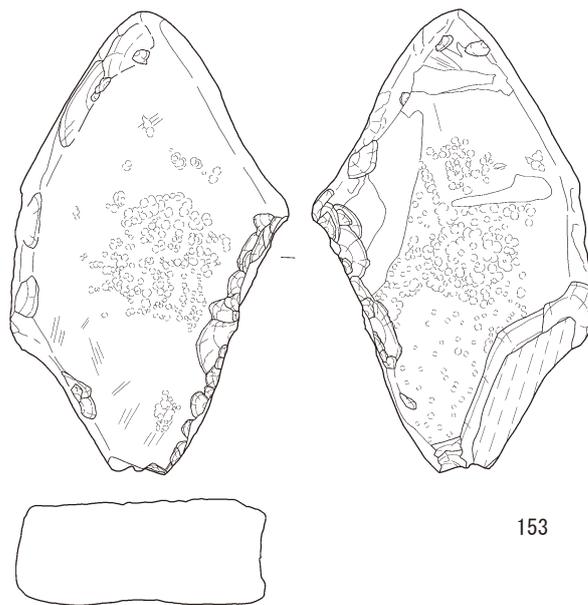
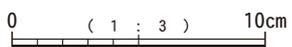
151



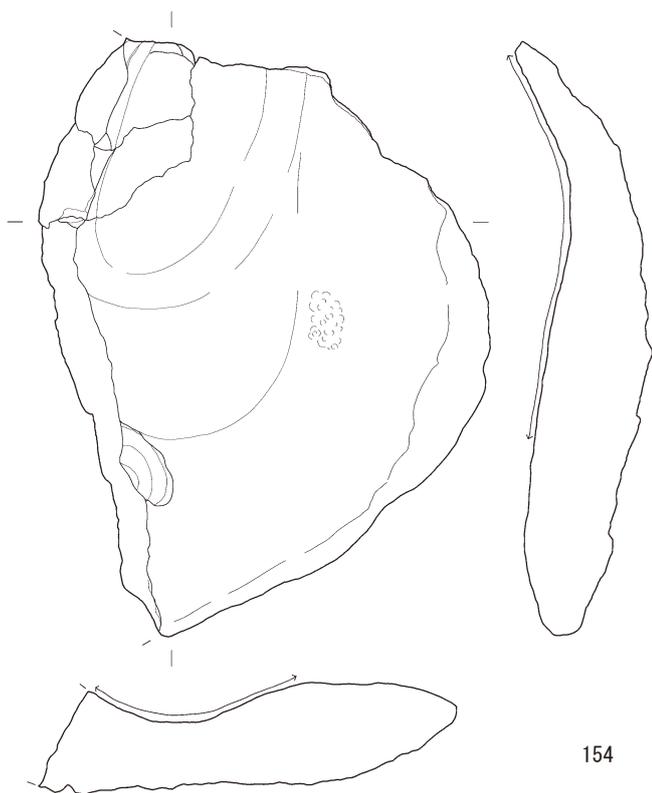
第39図 縄文時代の遺物⑱



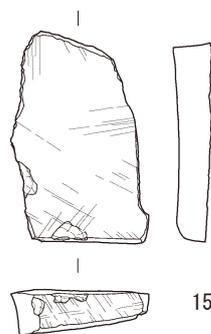
152



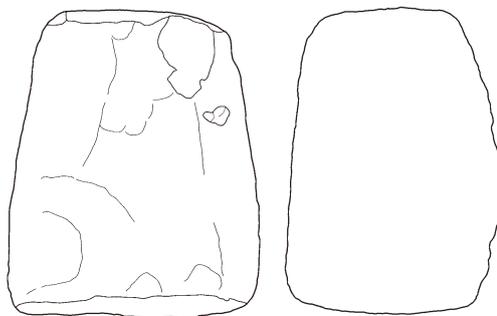
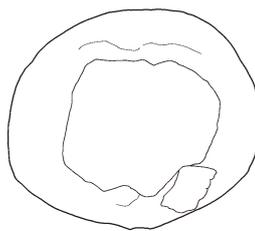
153



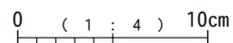
154



155



156



第40図 縄文時代の遺物⑳

	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71
C	Ⅲ・Ⅳ層出土																											
D																												
E					■1	▲2																						
F								凹1																				
G											●1		▲1 ●1 ■1										●1					
H										■1	◎1																	
I																												

	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76
C	I・II層出土																																
D																																	
E			◇1		◇1	◆1																											
F		凹2	◎1													凹1																	
G			◆1																														
H			■1																														
I			◎1																													◆1	

	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76
C	縄文時代以外の遺構内出土																																
D																																	
E																																	
F																																	
G																																	
H																																	
I																																	

※上図はグリッドごとに出土した石器の種類、数量を示す。出土区の記録が複数のグリッドにまたがる場合は、その中間地点、またはアルファベット・数字の小さいグリッドで記載する。

第41図 石器出土状況図

第6表 縄文時代遺構内出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上 番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	蛸石	その他		
13	2	V類	深鉢	H	61	Ⅲ	胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙～にぶい橙	浅黄橙～にぶい橙	○				SS504-5	集石3号内遺物
	3	V類	深鉢	H	61	Ⅵa上	胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙～にぶい橙	浅黄橙～にぶい橙	○				SS504-12	集石4号内遺物
17	5	V類	深鉢	G	61	Ⅳ	口縁-底部	刺突文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐～にぶい橙	にぶい黄褐～にぶい橙	○				SK505-1	土坑1号内遺物

※層位の「マ」は埋土を示す

凡例 胎土の鉱物量：◎多い ○普通

第7表 縄文土器観察表(1)

挿図 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上 番号	備考	
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	蛸石	その他			
21	6	I類	深鉢	I	61	Ⅲ	胴部	貝殻刺突	ケズリ	明褐	明褐	○	○		砂粒多い	4315		
	7	Ⅱ類	深鉢	E	61	Ⅵa上	胴部	貝殻刺突	ナデ	褐灰	灰褐	○	◎	○	白粒	-	SP3328内遺物	
	8	Ⅲ類	深鉢	H	60	Ⅳ	胴部	クサビ・ 貝殻押し	ナデ	明褐	明褐	○	○	○		4431・4429		
	9	Ⅲ類	深鉢	H	60	Ⅲ	胴部	クサビ・ 貝殻押し	ナデ	明褐	明褐		○	○		4430		
	10	Ⅲ類	深鉢	I	60	SD18マ1	胴部	貝殻押し	ナデ	橙	橙	○	○	○		-	溝状遺構1号内遺物	
	11	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅲ	口縁部	貝殻条痕・ 貝殻刺突	ナデ	橙	橙	○	○	○	赤粒・ 砂粒多い	4664		
	12	Ⅳ類	深鉢	G	62	Ⅲ	口縁部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙		○	○		4593		
	13	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅳ	胴部	貝殻条痕	ナデ	明褐	橙	○	◎	○		4716		
	14	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅲ	胴部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙	○	○	○		4576		
	15	Ⅳ類	深鉢	E	65	Ⅱb	胴部	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐～褐	明黄褐	○	○	◎	白粒	3031		
	16	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅳ	胴部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙		○	○	砂粒 多い	4716		
	17	Ⅳ類	深鉢	E	65	Ⅱb	底部	条痕・ガ	ナデ	明赤褐	橙		○	○	白粒	3032		
	22	18	V類	深鉢	I	61	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐～浅黄橙	浅黄橙	○	◎			5010	
		19	V類	深鉢	I	61	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐～浅黄橙	浅黄橙		○	◎		4929	
		20	V類	深鉢	I	61	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐～浅黄橙	浅黄橙	○	○	○		4962	
		21	V類	深鉢	I	61-64	Ⅲ	胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙～にぶい橙	にぶい橙～浅黄橙		○			4658・4931 4932・4950	
		22	Ⅵa類	深鉢	H	60	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	橙	にぶい褐	○	○	○		4138	
23		Ⅵa類	深鉢	F	64	Ⅱb	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙～灰褐	灰褐		○	○		3033		
24		Ⅵa類	深鉢	H	62	Ⅳ	底部	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐		○	○		4260		
25		Ⅵa類	深鉢	H	62	Ⅲ	底部近く	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐		○	○		4693		
26		Ⅵa類	深鉢	H	61	Ⅳ	底部近く	ナデ	ナデ	橙	灰褐	○	○	○		4574・4719		
27		Ⅵa類	深鉢	H・I	59-61	I	底部	ナデ	ナデ	橙	灰褐	○	○	○		-		
28		Ⅵa類	深鉢	G	64	SD13マ1	底部	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐		○	◎	砂粒 多い	4890	溝状遺構4号内遺物	
29		Ⅵa類	深鉢	H	61	Ⅳ	底部	ナデ	ナデ	橙	橙		○			-		
23	30	Ⅵb類	深鉢	H	62	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐	黄橙	○	○	○		4703		
	31	Ⅵb類	深鉢	E	65	Ⅱb	口縁	貝殻刺突	ナデ	褐灰	黄褐		○	○	白粒	3030		
	32	Ⅵb類	深鉢	E	65	Ⅱb	口縁	貝殻刺突・ 条痕	ナデ	褐灰	黄褐		○	○	砂粒 多い	-		
	33	Ⅵb類	深鉢	G	67	SD19マ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○		5052	溝状遺構5号内遺物	
	34	Ⅵb類	深鉢	H	62	SD18マ2	口縁部	貝殻刺突	ナデ	明褐	橙		◎	○	5mm大 の小粒	4556	溝状遺構1号内遺物	
	35	Ⅵc類	深鉢	H	62	Ⅲ	胴部	貝殻条痕・ 貝殻押し	ナデ	明赤褐～灰赤	橙～灰赤		◎	○	5mm大 の小粒	4057・4058・4663		

第8表 縄文土器観察表(2)

挿図 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上 番号	備考	
				外	内			外面	内面	石英	長石	角石	その他					
23	36	Vc類	深鉢	H・I	75	I	口縁部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙	○	○	○	白粒 赤粒	-		
	37	Vla類	深鉢	H	60	IV	口縁部	貝殻刺突	ナデ	灰褐	浅黄橙	○	○	○		4234		
	38	Vla類	深鉢	H	62	IV	口縁部	貝殻刺突	ナデ	灰褐	にぶい褐	○	○	○		4710		
	39	Vlb類	深鉢	D・E	68-69	SD12マ	口縁部	貝殻刺突・ ナデ・ミガキ	ナデ・ ミガキ	橙	黄橙	○	○	◎	白粒	3002	溝状遺構6号内遺物	
24	40	VIII類	深鉢	I	46	IIb	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい橙	橙		◎	○		-		
	41	VIII類	深鉢	-	-	I	頸部	貝殻刺突	ナデ	橙	橙		◎	○	白粒 赤粒	-		
	42	VIII類	深鉢	I	45	SX5マ	胴部	貝殻刺突・細 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白粒 小石	460	土坑19号内遺物	
	43	VIII類	深鉢	H	45	IIb下	胴部	貝殻刺突	ナデ	橙	橙	○	◎	○	白粒 赤粒	381		
	44	VIII類	深鉢	H・I	45	IIb下	胴部	貝殻刺突・細 沈線	ナデ・ ケズリ	橙	にぶい橙	○	◎	◎	白粒 小石	380	土坑19号内遺物	
	45	VIII類	深鉢	I	45	SX5マ	胴部	貝殻刺突・細 沈線	ナデ・ ケズリ	にぶい橙	橙		○	○		-	土坑19号内遺物	
	46	IX類	深鉢	H	54	SD18マ2	底部	ナデ	ナデ	明赤褐	明褐灰	○		○	黒粒	-	溝状遺構1号内遺物	
	47	X類	深鉢	E	72	IIb	胴部	沈線	ナデ	橙	橙	○		○	白粒	-		
	48	X類	深鉢	G	46	SB2-19マ	口縁部	沈線・ナ デ		橙 口縁部	橙		○		白粒	SB2-19	掘立柱建物跡2号 -19c 内遺物	
	49	X類	深鉢	I	52	IIc	把手	摩滅・ナ デ	ナデ	明赤褐	明赤褐				白粒	-		
	50	XI類	深鉢	F	57	IIa	口縁部	ミガキ	沈線・ ミガキ	褐灰～にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○	白粒 赤粒	3042		
	51	XI類	深鉢	E	67-69	III	頸部	刺突・沈線	ナデ	橙	灰褐		○		白粒 小石	-	溝状遺構6号内遺物	
	52	XI類	深鉢	E	45-46	IIb	頸部	刺突・ 沈線・ 縄文	ナデ・ ミガキ	浅黄橙	にぶい橙		◎	○	白粒	-		
	53	XI類	深鉢	H・I	52・53	I	頸部	沈線・刺突	ナデ・ ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	白粒	-		
	54	XI類	深鉢	E・F	56-58	IV	頸部	ナデ・摩滅	ナデ	にぶい橙	褐灰		◎	○		-		
	55	XI類	深鉢	E	51	III	胴部	刺突・沈線	ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○	白粒	3186		
	25	56	XII類	不明	G	58	III	口縁部	沈線	ケズリ	褐灰	褐灰			○	白粒	-	
		57	XII類	不明	E～G	43-45	II	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐	灰褐	◎		○	白粒	-	
58		XII類	不明	H	55	SD18マ2	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙			○		-	溝状遺構1号内遺物	
59		XII類	不明	E	72	SP2353マ	頸部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		-	SP2353内遺物	
60		XII類	不明	H	59	III	頸部	摩滅	ナデ	にぶい橙	黒・にぶい橙				砂粒 多い	4477		
61		XII類	不明	G	56	IV	胴部	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐			○		-		
62		XII類	不明	E	72	IIb	胴部	沈線・ ミガキ	ミガキ	黒褐	褐灰		○	○	白粒 小石	-		
63		XII類	不明	H	62	III	胴部	沈線	ナデ	橙	にぶい橙	○				4684		
64		XII類	不明	G	56	III	胴部	沈線	沈線	にぶい橙	浅黄橙		○	◎		-		
65		底部	不明	G	56	IV	底部	ナ デ	-	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	白粒 赤粒 緑粒	-		
66	底部	不明	E・F	56-58	IV	底部	ナ デ・指 押さえ	-	にぶい橙	浅黄橙		○	◎	白粒 赤粒	-			
67	底部	不明	E	69	IIb～III	底部	ナ デ・指 押さえ	-	橙	浅黄橙	○	○	○	白粒 赤粒	-			
68	底部	不明	G	45	IIb	底部	ナ デ・指 押さえ	-	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白粒	50			

第9表 縄文時代遺構内出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区		層	法量 (cm)				石材	取上 番号	備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)			
13	1	砥石	G	60	IV上	7.0	7.6	1.8	150.5	赤色砂岩	SS501-№7	
14	4	石皿	H	61	マ	11.9	10.7	7.7	1379.0	安山岩	SS502-№103	

第10表 石器観察表(1) (Ⅲ・Ⅳ層出土)

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区		層	法量 (cm)				石材	取上 番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)				
26	69	石鏃	F	57	Ⅲ	3.2	1.2	0.4	1.0	安山岩	3045	石鏃Ⅰa類	帖地型 (大久保型)
	70	石鏃	H	59	Ⅲ	3.5	2.2	0.2	1.3	黒曜石 (針尾系)	4456	石鏃Ⅰb類	
	71	石鏃	E	51	Ⅲ	2.2	1.7	0.4	0.9	安山岩	3157	石鏃Ⅱa類	
	72	石鏃	E	51	Ⅲ	2.5	2.0	0.4	1.2	黒曜石 (日東系)	3115	石鏃Ⅱc類	
	73	石鏃	G	59	Ⅲ	2.6	2.1	0.5	1.3	安山岩	4870	石鏃Ⅱc類	
	74	敲打痕のある剥片	G	59	Ⅲ	2.4	1.6	0.4	1.3	黒曜石 (日東系)	4887		石鏃の可能性あり
	75	剥片 (素材剥片)	H	61	Ⅳ	1.7	1.0	0.3	0.7	黒曜石 (腰岳産)	4057		
	76	石核	H	62	V	2.8	2.7	2.1	7.2	黒曜石 (日東系)	第29トレンチ-2		
27	77	石核	H	61	Ⅳ	2.7	2.2	1.3	8.0	黒曜石 (上牛鼻系)	4340		
	78	磨製石斧	F	56	Ⅲ	12.2	6.8	3.8	443.0	安山岩	3059		
	79	磨製石斧	G	60	Ⅲ	7.8	4.3	2.4	53.9	砂岩	4082		
	80	敲打痕のある剥片	I	61	Ⅳ	8.2	9.6	2.4	186.7	砂岩	4130		
	81	叩石 (ハンマー)	F・G	66-67	Ⅱ~Ⅲ	11.5	4.7	3.8	307.0	安山岩	-		R4年度
	82	敲石	G	56	Ⅳ	7.0	6.1	3.4	210.0	赤色砂岩	-		
28	83	磨石	G	56	Ⅲ	12.5	8.9	4.5	615.0	安山岩	-		
	84	磨石	G	54	Ⅲ	8.0	8.4	5.6	498.9	砂岩	3811		
	85	凹石	G	56	Ⅲ	7.9	6.4	2.9	241.9	安山岩	-	凹石Ⅲ類	
	86	凹石	F	51	Ⅲ	10.8	5.9	3.4	296.8	安山岩	3133	凹石Ⅳ類	
	87	石皿	H・I	51-54	Ⅲ	12.3	10.3	3.7	638.0	安山岩	-		
29	88	石皿	F	59	Ⅲ	17.0	8.7	3.2	910.0	砂岩	-		
	89	石皿	E・F	56-58	Ⅲ	21.6	15.7	3.5	1877.0	砂岩	-		
	90	石皿	I	57	Ⅲ	12.1	9.2	5.7	678.0	砂岩	-		
	91	石皿	G	59	Ⅲ	16.7	11.2	4.5	1118.0	安山岩	4372		
	92	石皿	G	56	Ⅲ	10.5	12.9	6.2	1090.0	安山岩	-		
	93	台石	E	50	Ⅲ	20.1	19.2	7.3	3550.0	砂岩	3107		
	94	砥石	G	56	Ⅳ上	13.4	11.8	3.0	673.0	赤色砂岩	-		
	95	石錘	HI	51-54	Ⅲ	6.0	8.1	1.6	111.9	安山岩	234		

第11表 石器観察表(2) (Ⅰ・Ⅱ層出土)

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区		層	法量 (cm)				石材	取上 番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)				
30	96	石鏃	D	66	Ⅱb	2.6	2.1	0.3	1.3	安山岩	3029	石鏃Ⅱa類	
	97	石鏃	F	60	Ⅱ	2.3	1.7	0.4	1.1	安山岩	3059	石鏃Ⅱa類	
	98	石鏃	D	71	Ⅱb	1.8	1.5	0.4	0.6	黒曜石 (日東系)	2001	石鏃Ⅲ類	
	99	石錐 (ドリル)	H	45	Ⅱb	2.4	1.9	0.3	3.1	チャート	182		
	100	スクレイパー	D・E	49・50	I	4.5	3.4	1.5	19.7	玉髄	-		
	101	二次加工のある剥片	E	72	Ⅱb	2.6	2.1	1.0	3.6	黒曜石 (日東系)	-		
	102	二次加工のある剥片	H	53	I	1.9	2.7	0.6	2.7	黒曜石 (腰岳産)	-		
	103	石核	H・I	47・48	Ⅱb	2.4	2.4	2.8	13.6	黒曜石 (日東系)	-		
	104	磨製石斧	E	70	Ⅱc	12.6	6.0	3.2	330.0	ホルンフェルス	-		
	105	磨製石斧	D	64	Ⅱ	7.1	7.0	3.7	216.7	頁岩	-		
31	106	剥片	H・I	51	I	9.1	6.1	1.5	91.9	頁岩	-		磨面あり
	107	磨石	E	71	Ⅱb	5.4	4.9	4.0	134.0	安山岩	-		
	108	磨敲石	I	46	Ⅱb	9.0	9.6	6.0	976.0	安山岩	421		
	109	磨敲石	F	45	Ⅱb下	8.1	6.1	5.2	390.0	安山岩	432		

第12表 石器観察表(3) (I・II層出土)

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区		層	法量 (cm)				石材	取上 番号	備考	
			最大長	最大幅		最大厚	重量 (g)						
32	110	凹石	F	69	II	10.2	7.2	4.9	458.0	安山岩	-	凹石I類	
	111	凹石	H・I	51-54	I	9.9	9.0	5.6	725.0	砂岩	-	凹石II類	
	112	凹石	F	57	II a	9.4	9.1	4.2	518.0	安山岩	3040	凹石II類	
	113	凹石	G	46	II b	9.5	8.4	6.5	687.0	安山岩	425	凹石II類	
	114	凹石	F	45	II b下	10.1	9.5	3.4	475.1	安山岩	430	凹石II類	
33	115	凹石	H	53	II c	8.7	7.3	4.0	341.3	安山岩	3374	凹石III類	
	116	凹石	F	45	II b下	9.6	6.4	3.5	323.3	安山岩	443	凹石III類	
	117	凹石	G	44	II b	13.4	6.3	4.0	592.0	安山岩	64	凹石III類	
	118	凹石	F-H	71-73	I	8.3	6.5	4.6	333.1	凝灰岩	-	凹石III類	
	119	凹石	H	46	II b	7.4	6.9	3.9	278.0	安山岩	412	凹石III類	
	120	凹石	I	53	II c	8.1	6.9	3.2	240.5	安山岩	3317	凹石IV類	
34	121	台石	H	45	II b	13.2	11.8	7.9	1439.0	赤色砂岩	356		
	122	台石	I	52	II c	12.7	8.0	5.0	727.0	赤色砂岩	3389		
	123	台石	I	52	II c	14.9	8.7	5.6	979.0	砂岩	3392		
	124	砥石	G	45	II b下	13.6	4.6	1.8	149.4	砂岩	234		
	125	砥石	H・I	75	I	4.8	5.0	2.9	128.4	砂岩	-		
	126	砥石	E・F	49-51	I	4.1	5.7	1.6	42.6	砂岩	-		
35	127	軽石製品	E・F	47	II b	6.1	6.8	3.1	26.1	軽石	-		
	128	軽石製品	D・E	46	II b下	3.5	3.7	9.0	3.3	軽石	-		
	129	その他石器・石製品	H・I	56	I	7.4	7.8	3.3	158.6	赤色砂岩	-	用途不明・孔あり	

第13表 石器観察表(4) (縄文時代以外の遺構内出土)

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区		層	法量 (cm)				石材	取上 番号	備考	
			最大長	最大幅		最大厚	重量 (g)						
36	130	打製石鏃	I	59	マ3	1.6	1.6	0.4	1.1	黒曜石 (日東系)	5172	III類	溝状遺構1号内出土
	131	磨製石斧	E・F	63	II	9.2	3.5	1.8	78.7	頁岩	-		溝状遺構4号内出土
	132	磨製石斧	H・I	56-58	マ1	8.1	4.7	1.9	124.4	頁岩	-		溝状遺構1号内出土
	133	磨製石斧	H	53	マ2	8.8	6.1	3.5	261.4	砂岩	-		溝状遺構1号内出土
	134	打製石斧	I	53	-	12.5	7.6	2.3	234.1	砂岩	3592		溝状遺構2号内出土
37	135	打製石斧 (礫器)	F	63	-	9.0	9.6	2.2	234.5	頁岩	-		溝状遺構4号内出土
	136	敲石	H・I	56-58	マ1	12.5	5.9	3.2	375.6	安山岩	-		溝状遺構1号内出土
	137	敲石	F	45	マ	7.1	4.7	30.5	179.8	安山岩	掘立1号-23		堀立柱建物跡1号-23
	138	磨石	E	68	I	10.8	9.3	5.4	808.0	安山岩	SD12		溝状遺構6号内出土
	139	磨敲石	H	57	III	12.1	6.7	4.0	493.7	安山岩	-		溝状遺構1号内出土
	140	磨敲石	G	66	マ	8.3	6.9	4.5	381.7	安山岩	4895		溝状遺構5号内出土
	141	磨敲石	F	64	マ	12.0	6.7	5.0	586.0	安山岩	SP3264-3		SP3264内出土
38	142	凹石	H・I	46	マ	9.3	8.3	5.7	598.0	安山岩	-	凹石I類	土坑19号内出土
	143	凹石	H	64	マ2	4.9	4.5	2.7	89.3	安山岩	4842	凹石I類	溝状遺構4号内出土
	144	凹石	E	62	II	10.2	8.2	2.6	331.5	安山岩	-	凹石II類	溝状遺構4号内出土
	145	凹石	F	74	マ	9.3	8.3	4.8	551.0	安山岩	SP2439	凹石II類	SP2439内出土
	146	凹石	G	64	マ2	9.6	6.9	4.8	425.8	凝灰岩	5016	凹石II類	溝状遺構4号内出土
	147	凹石	H	51-52	マ1	11.5	6.4	4.2	455.4	安山岩	-	凹石III類	溝状遺構1号内出土
39	148	凹石	H・I	56-58	マ1	10.1	6.6	2.9	305.0	ホルンフェルス	-	凹石III類	溝状遺構1号内出土
	149	凹石	H	54	マ2	9.2	6.6	4.2	357.4	安山岩	-	凹石IV類	溝状遺構1号内出土
	150	凹石	I	59	マ1	16.1	15.1	4.1	1525.0	安山岩	SD18 石列23	凹石IV類	溝状遺構1号石列23
	151	石皿	E	44	マ	17.0	11.2	5.4	1825.0	赤色砂岩	-		土坑4号内出土
40	152	石皿	I	59	マ1	21.9	16.5	6.0	3170.0	安山岩	SD18 石列29		溝状遺構1号石列29
	153	台石	H・I	58	マ	18.5	11.1	4.2	1120.0	砂岩	-		溝状遺構1号内出土
	154	石皿	G	72	マ	31.8	23.9	7.6	5340.0	安山岩	SP2322-1		SP2322内出土
	155	砥石	H	55	マ2	8.5	5.5	1.9	103.3	赤色砂岩	-		溝状遺構1号内出土
	156	その他の石器	I	60	マ3	16.4	13.3	11.7	2510.0	溶結凝灰岩	5195		溝状遺構1号内出土

第2節 古墳時代の調査

1 調査の概要

古墳時代に該当する包含層は、Ⅱb～Ⅲ層である。当該時期の遺物は、破片で摩耗の激しいものが多い。

また、古代・中世・近世の遺物と混在した状態で出土している。遺構は確認されていない。出土遺物には、甕・壺・高坏がある。なお、確実に当該時期の石器・石製品類と判断できるものはなかった。

遺物の主な出土地点については、F～I-53～57区とD・E-70～72区周辺であり、この範囲に散在する。古墳時代前期に比定される東原式土器段階を中心として多少時期が前後するものとみられるが、完形の遺物はなく、ほとんどが小片である。

2 出土遺物（第42図 157～166）

遺物は、100点以上の土器片が出土した。在地系の東原式土器段階が主体と考えられる。摩耗した小片が多く、壺の底部や高坏の一部などが確認される。

157は、2条の沈線を斜め方向に交互に施すものである。幅広突帯に類似するが、本資料については壺の胴部に直接施される文様の一部であると考えられる。

158・159は、甕の胴部と脚部との接合部付近と考えられる。ただし、欠損部が多く、摩耗が激しいため全体形は不明である。

160～162は、壺の底部である。160は、平底である。底部から広く立ち上がり、成形時の接合痕が確認できる。全体的に摩耗している。

161は、尖底に近い。接地部分は、わずかに面を有する。

また、底部付近は厚みがある。内外面ともに風化しており、調整は確認できない。

162は、丸底である。摩滅が激しい。胎土に白色や灰色の2mm程度の小石を多く含み、若干の赤色小石も見られる。また、底部外面の中央部には深さ5mm程度の凹みがみられる。この凹みが、当初からのものかは、器面の摩耗が激しいために確認することができないが、意図的なものではなく、胎土の小石などが外れた可能性を考えたい。

163は、甕か壺か明確でない底部である。平底の甕及び底部が広い平底の壺は、本遺跡では他に確認できていないため不明とした。なお、底部の形態から、弥生時代の可能性もあるが、ここでは他の出土資料の状況から古墳時代の可能性が高いものとして扱った。

164～166は、高坏である。164は、高坏の坏部下位である。坏部には明瞭な屈曲部が確認され、屈曲部から口縁部にかけては欠損する。また、脚部は接合部分から外れた状態で欠損しており、坏部と脚部の製作方法が分かる資料である。外面は、ナデ調整が施されている。胎土に灰色の2～5mmの小石を多く含み、数は少ないが、赤色小石もみられる。

165・166は、溝状遺構1号から出土したものである。165は、下方から上方にかけてのケズリ痕が残る。166は、高坏の坏部と脚部の接合部分の破片である。

第14表 古墳時代遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上 番号	備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他			
42	157	壺	D	71	Ⅱb	胴部	沈線	ナデ・ユビオサエ	赤	明赤褐	○	○	○	白色粒・黒色粒	-	
	158	甕	D	72	Ⅱb	底部	ケズリ・ユビオサエ	ケズリ	橙	橙	○	○	○	白色粒・灰色粒	-	
	159	甕	D	70	Ⅱc	底部	ナデ・ユビオサエ	ケズリ	橙	明赤褐	○	○	○	白色粒・黒色粒	2006	
	160	壺	H	61	Ⅳ	底部	ナデ・ユビオサエ	ケズリ	橙	橙	○	○	○	白色粒・黒色粒	-	底径5.6cm
	161	壺	G	59	Ⅳ	底部	磨滅	磨滅	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白色粒・黒色粒	4436	底径1cm
	162	壺	E	70	Ⅱc	底部	磨滅	ケズリ	にぶい橙	橙	○		○	白色粒・赤色粒	2011	底径6cm
	163	不明	H	62	Ⅲ	底部	ナデ・ユビオサエ	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白色粒・赤色粒・黒色粒	4697	底径10.6cm
	164	高坏	F	57	Ⅲ	坏部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○		白色粒・赤色粒	3055	
	165	高坏	H	57	-	脚部	ケズリ・ナデ	ナデ	明黄褐	橙		○	○	白色粒・黒色粒	-	溝状遺構1号出土
	166	高坏	H	53	-	坏部～脚部	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○		○	白色粒・赤色粒	-	溝状遺構1号出土



157



158



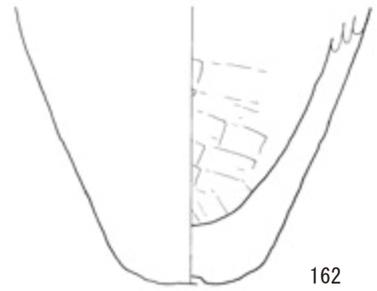
159



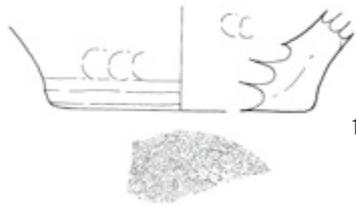
160



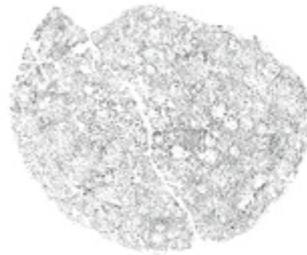
161



162



163



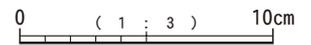
165



164



166



第42図 古墳時代の遺物

第3節 古代の調査

1 調査の概要

古代の遺物は、主にⅡb層・Ⅱc層から出土している。Ⅱb層は、中近世の遺物が混在した状態で、古墳時代から近世までを含む包含層である。遺跡の大部分において中世以降に大規模な土地改良が行われ、古代の生活面も削平を受けている。

以上のことから、慎重に調査を行ったが、古代の遺構は確認できなかった。

北山遺跡周辺は、古代駅である英祢駅（延喜式【延喜5（905）年完成】諸国驛傳馬条記載）の比定地の一つとなっており、以前から古代の土師器や焼塩土器などの遺物が発見されていた。

2 遺構

右表は、古代に該当する土器底部片の分布状況を示した表であるが、集中的に出土している地点があることがうかがえる。古代に該当する遺物の中で、文字資料（墨書・ヘラ書き）や越州窯青磁なども出土していることから、古代に該当する重要な施設が周辺にあったことが想定される。G～I-49～51区、G～I-67～73区は、今後調査が実施される予定であり、包含層の堆積も比較的良好である可能性が想定されている。また『北山遺跡1』で報告した調査区につながる地点であるE～H-44・45区は、集中的に遺物が出土している。削平の影響で遺物が動いている可能性は高いが、古代に該当する遺構が南側や西側に広がっている可能性が想定される。

76								
75								2
74							2	
73								
72			3					
71		1	2					
70		7	9		1			
69		12	12	9				
68		5	2					
67		1	1					
66			11					
65		2		1				
64		1		1				
63				2				
62				3				
61								
60								
59								
58								
57				5	33	1	11	
56				6	12	2	13	
55					2	13	18	
54				1	6	18	17	
53					3	41	39	
52			3		4	34	21	
51			7	24	1	7		
50		10	21	3	3			
49		2	22	6				
48				1				2
47		2	2	1	2	5	2	
46			13	9	14	17	22	
45			21	19	83	84		
44				83	58	19		
	C	D	E	F	G	H	I	

第43図 土師器（高台・ヘラ切り底部）出土状況

3 出土遺物の分類

(1) 器種分類

基本的には、以下のように器種分類を行う。分類にあたっては、大宰府の分類（山本1990）、中村和美氏による分類（中村1994）、岩元康成氏による分類（岩元2012）及び平城京の分類（神野2010）等を参考とした。

用途に関する分類としては、以下のように分類した。

食膳具：碗・坏・高坏・蓋・皿

貯蔵具：壺・鉢・須恵器甕

煮炊具：土師器甕・甑

その他：上記に分類できないもの、器種不明のもの

(2) 遺物分類

遺物は、土師器、黒色土器、須恵器、越州窯系青磁、文字資料及びその他に大別した。その中で、上記(1)に基づいて細分した。

【土師器】

ア 食膳具

碗：高台を有するもので、深さのある器形で、胴部が丸いものと直線的なものがある。高台は、底部周縁から内側に貼り付けられる。そのうち、高台端部が外方へと反るものは、古手の様相を示す。高台は高さが低いものから高いものへと変化することが確認されている。また、ごく少数だが、高台部分のみ色調の異なる胎土で製作されたものがある。

坏：平底を原則とする。口径と比較して、器が高いもので、器高はおおむね3cm以上とした。

高坏：坏に筒状の細長いラップ状に開く脚部がつくものである。古墳時代に多い器種で、古代には減少する。本遺跡では、極めて少量出土している。

蓋：器高は低く皿を上下逆にしたような形状で、端部にかえしがつく場合がある。上方の中央には、擬宝珠形のつまみがつくものがある。

皿：口径に対して、器高が低いものである。器高はおおむね3cm未満とした。高台がつくものもある。

イ 貯蔵具

壺：胴部よりも口縁部が締まったものを指す。本遺跡では、口縁部から胴部のみ資料で全形がわからないものと、粗製の小型壺が確認されている。ここでは貯蔵具に分類したが、調度具であった可能性もある。

鉢：最大径と高さに差が少ないものを指し、器形は様々なものがある。本遺跡では、全形が確認できない。ここでは貯蔵具に分類しているが、調度具であった可能性もある。

ウ 煮炊具

甕：口縁部がラップ状に外反し、胴部はやや縦長の長球状となる。本遺跡では、底部はごく少量しか確認されておらず、全形を確認できるものはない。これは、カマドに装着し、下方から強い火力を受けたことによる可能性がある。ただし、本県では古代のカマドは数例しか確認されておらず、本遺跡でも確認されていない。胴部外面は、ヨコナデもしくは横方向のハケメが施されるものが多い。胴部内面は、ヘラ状工具によりやや斜め上方向のケズリ、ナデやユビオサエによる調整がみられる。

甑：口縁部は、直行するもの、やや外反するもの、波状口縁となるものがみられ、底部は筒状（底抜け）となる。口縁部よりも、底部を丁寧に調整する傾向があり、底部は口縁部にみえることもある。胴部上寄りの部分には把手がつくが、本遺跡のものは基部近くで欠損しており、全形は明らかでない。器面の調整等は土師器甕とはほぼ同様である。

【黒色土器】

基本的に碗のみである。A類（内黒）が多いが、少量ではあるもののB類（内外面黒）も含まれる。一部には、高台部分のみ色調の異なる胎土で製作されているものも含まれる。

【須恵器】

ア 食膳具

碗・坏・高坏・蓋・皿がある。若干の違いはあるが、各特徴は、概ね土師器の同器種と同じである。

イ 貯蔵具

甕・壺がある。いずれも小破片が多いため、全形が確認できない。基本的には、甕は外面には平行・格子目のタタキが、内面には平行・同心円状の当具痕が確認される。壺に関しては、外面は甕と同様であるが、内面はナデしか確認できないものもみられる。また、甕・壺のどちらかは確認できていないが、一部には内面に掌で押圧したとみられる痕跡が残るものもある。

【越州窯系青磁】

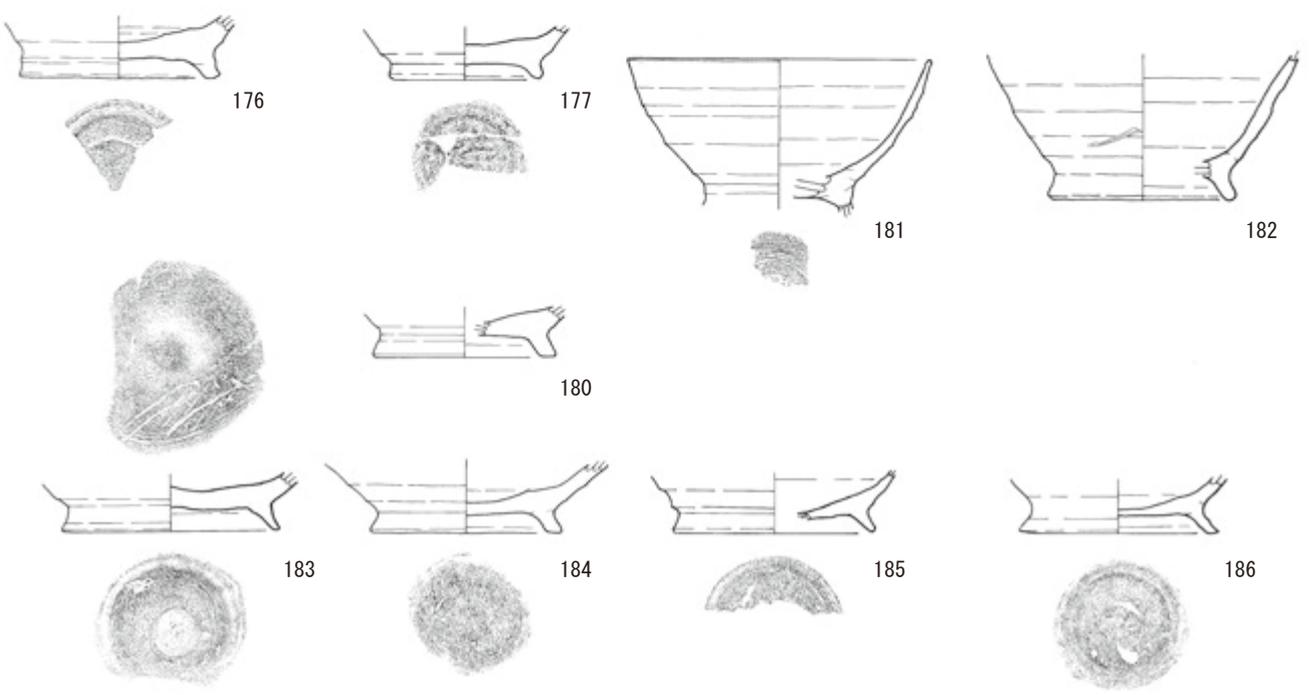
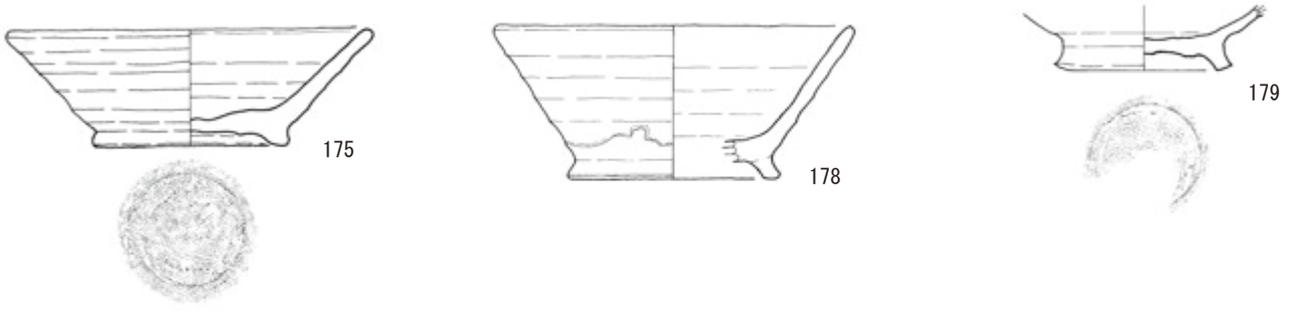
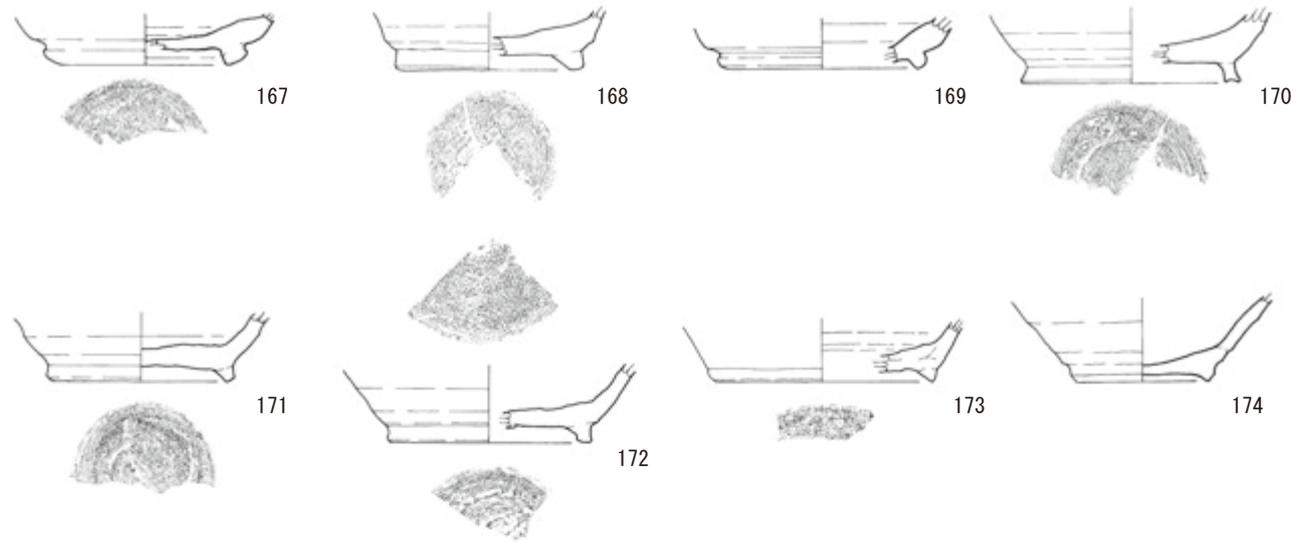
本遺跡では、数量は少ないが、碗と鉢がみられる。中国の越州窯で生産されたものである。

【文字資料】

土器の表面にヘラ状工具、または墨書により、文字またはその可能性があるものが書かれているものを、土師器・須恵器とは別に分類したものである。

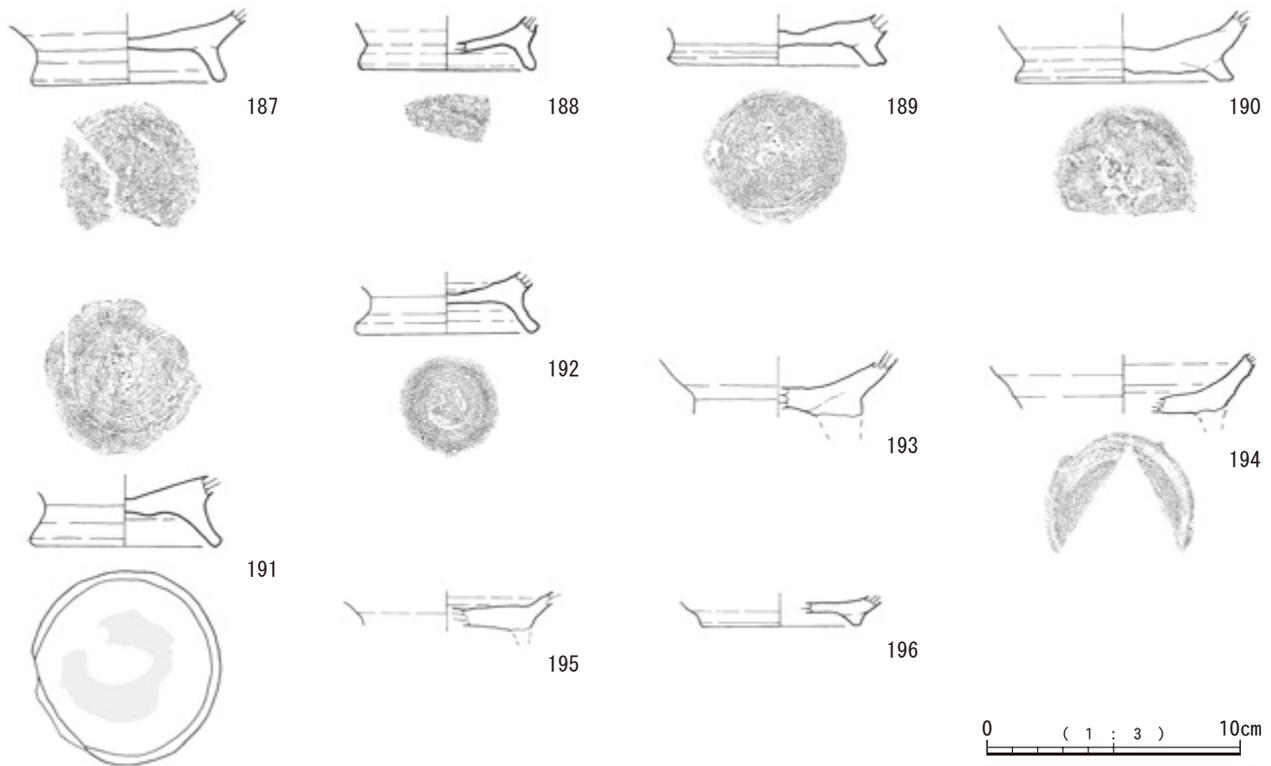
【その他】

土錘、焼塩土器、円盤状製品、紡錘車、土製品をまとめて掲載した。



0 (1 : 3) 10cm

第44図 古代の遺物①



第45図 古代の遺物②

4 出土遺物

(1) 土師器 (第44～51図 167～268)

ア 食膳具

167～233は、比較的小型の食膳具である。

碗 (第44・45図 167～196))

167～177は、比較的低い高台を有するものである。

167～174及び176・177は、底部付近の資料である。高台が外方へと開くもので、古手の様相を呈する。167・168は、周縁より内側から「ハ」字に高台が開くものであり、8世紀前半頃の可能性が考えられる。173・174は、断面三角形状の低い高台がつくもので、胴部は直線的である。175は、口縁～底部で、胴部は直線的である。高台を貼り付ける前段階で、回転台からヘラ切りによって切り離しを行った痕跡が残る。

178～190は、高台脚部の高さが若干高いもので、特に183～190は、やや外方へ開く長めの高台をもつものである。178は、口縁～底部だが、口唇部がわずかに残るのみである。胴部は直線的で、外面には高台を貼り付けた粘土の痕が残る粗雑なつくりである。181・182も口縁から底部の資料であるが、いずれも胴部がやや丸みを帯びる。181は、内外面の広い範囲に製作時に付着した煤が確認でき、高台下面は破損しているが、赤色高台と考えられる。190は、高台部のみ赤色胎土を用いている。赤色高台碗は、黒色土器 (A類・内黒) に多いとされる

が、本資料は黒色ではない。

191・192は、高台脚部が非常に長く、外方へと大きく開くものである。底部のみの資料であるが、胴部は丸みを帯びる器形と考えられる。191は、底部見込みに煤が付着している。

193～195は、高台が外れたものである。194は、高台が坏部との接合部分で外れたものである。

196は、高台部分のみが白色胎土となるものである。

坏 (第46図 197～217)

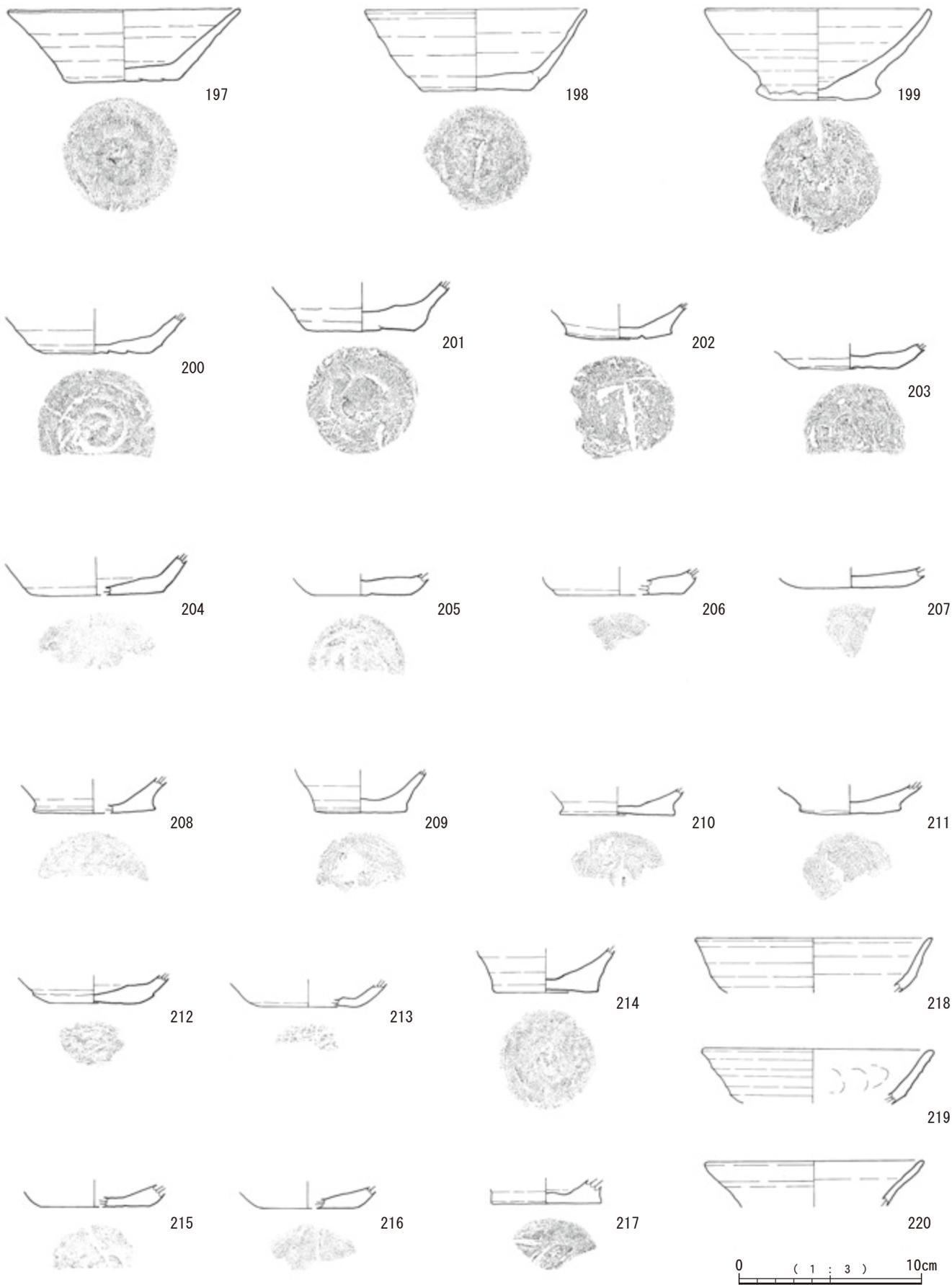
197～217は、いずれも、回転台からヘラ切りによって切り離しを行った痕跡が残る。

197は完形品で、胴部は直線的だが、口縁部付近でわずかに外方へと反るように開く。198は胴部がやや丸みを帯び、内側へわずかに湾曲する。199は、底部外面が若干張り出すもので、柱状 (充実) 高台碗にも類似するものであるが、高台としては低く、明確な碗とは言いがたいため、ここで扱った。

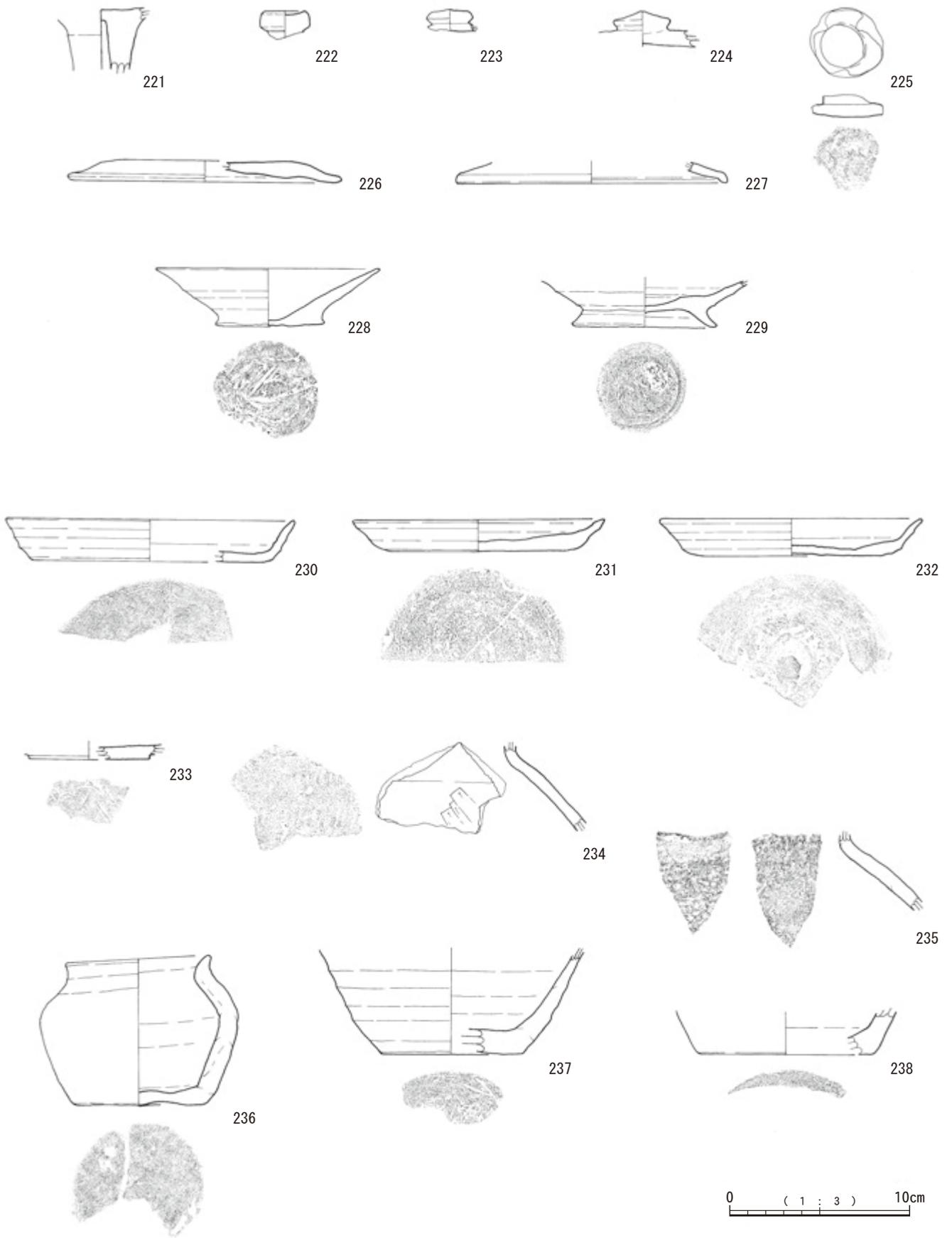
200～217は、底部及び底部付近である。この中で、214は底部周縁付近に厚みがあり、特徴的である。

碗もしくは坏 (第46図 218～220)

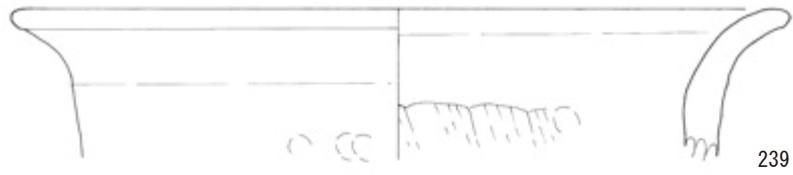
218～220は、口縁部から胴部のみが残存のため、碗もしくは坏の判別に至らなかったものである。胴部の状況から、碗の可能性が想定される。



第46図 古代の遺物③



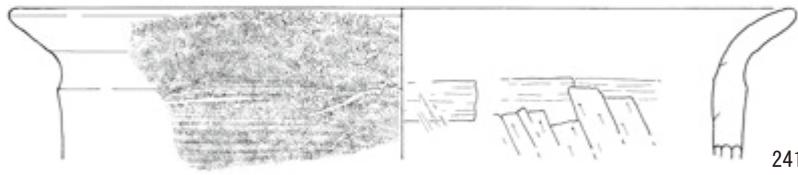
第47図 古代の遺物④



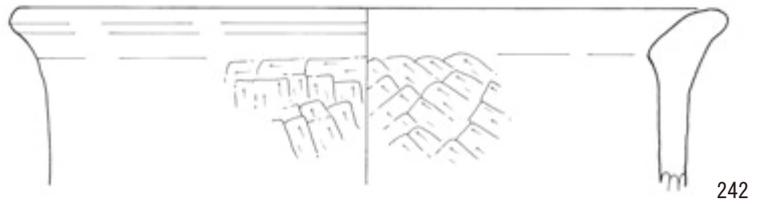
239



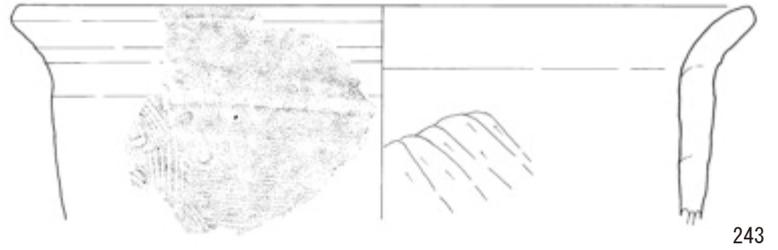
240



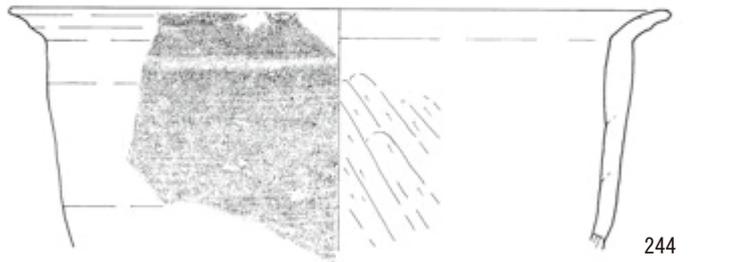
241



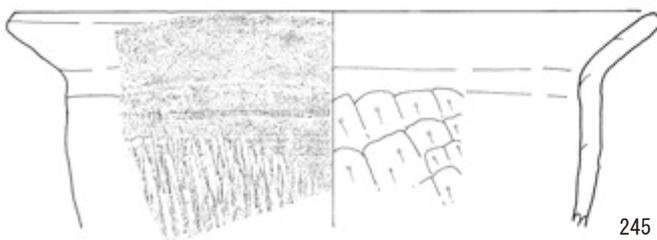
242



243



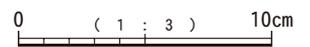
244



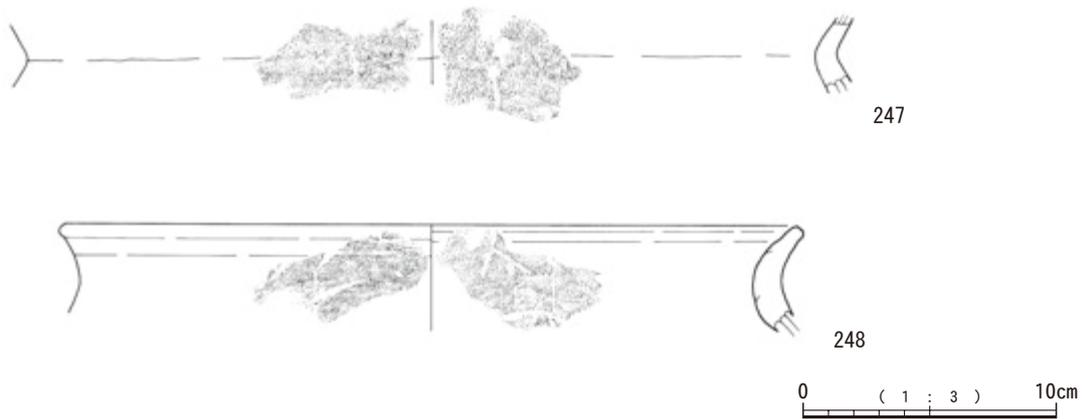
245



246



第48図 古代の遺物⑤



第49図 古代の遺物⑥

220は、胎土が白色で焼成が堅緻なものである。在地産ではない可能性もある。

高坏（第47図 221）

221は、高坏の坏部下端から脚部基部にかけての破片で、脚部は筒状になっている。白色で細かい胎土である。

蓋（第47図 222～227）

222～227は蓋で、222～225は擬宝珠状の蓋のつまみ部である。つまみ部以下はほぼ欠損しているが、大きく広がり蓋の体部につながると考えられる。いずれも摩滅が著しく、全体的に表面が荒れている。225はつまみ部分が基部を残して欠損するものである。226・227はつまみ部分を欠損している体部のみの資料であるが、226は全体形や大きさが想定できる資料である。

皿（第47図 228～232）

228・229は、口縁部幅に比べて高さがなく、体部が直線的に大きく開く器形で、高台を有する皿である。228は、柱状高台に近いもので、内面見込み中央部は窪み、非常に薄手である。229は、「ハ」字状に開くやや高い高台を有する。

230～232は、口縁部幅に比べて高さが低く、偏平な形態のもので、底部は大きく平坦である。231は、底部がやや厚手で、特に浅いつくりである。いずれも、回転台からヘラ切りによって切り離しを行った痕跡が残る。器面は、比較的丁寧にナデが施される。

器種不明の食膳具（第47図 233）

233は底部で、平底であるが器種は不明である。外面には赤色顔料が塗布されている。

イ 貯蔵具

壺（第47図 234～236）

234・235は、破片のため、全形は確認できないが、壺の肩部と考えられる。235は、風化しているが、外面にはタタキ痕が、内面には当具の痕跡がわずかにみられる。

胎土の状況から土師器としたが、焼成不良の須恵器の可能性も残る。

236は小型の壺である。ややいびつな形状で、輪積みの痕跡が明瞭に残る。胎土は白色で、表面の風化が進行している。底部はゆがみのある平底で、胴部下半からややふくらみ、胴部最大径から屈曲して頸部となる。口縁部は短く折り曲げて外反させる。底径と器高には、あまり差はない。本資料は、形態的に類例の少ないものであり、焼成が悪いためか、表面が脆いものである。

鉢（第47図 237・238）

237・238は、鉢の底部付近の破片で、底部は平底である。237は、底部に厚みがあり、やや大きめの個体と考える。

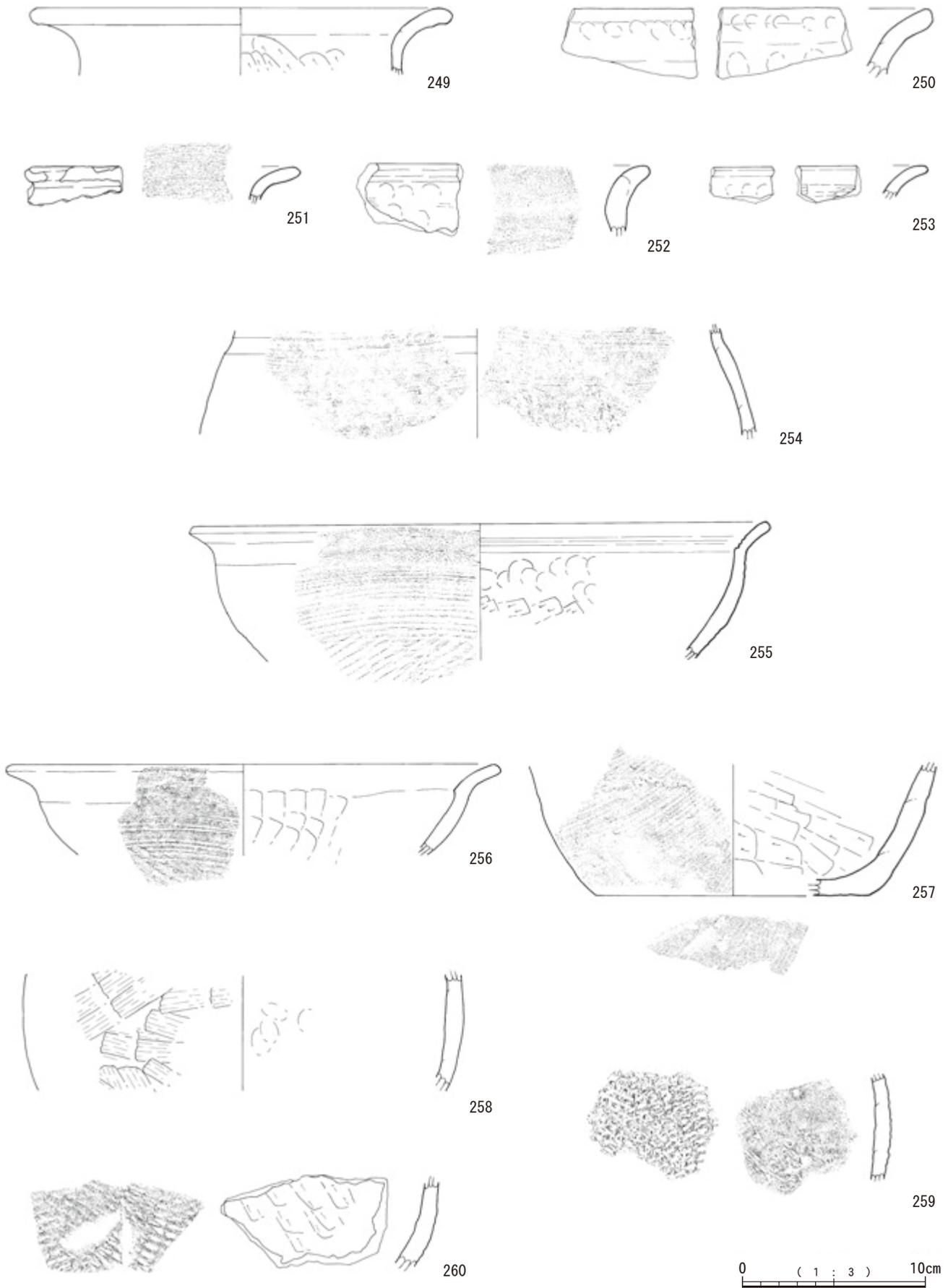
ウ 煮炊具

甕（第48～50図 239～260）

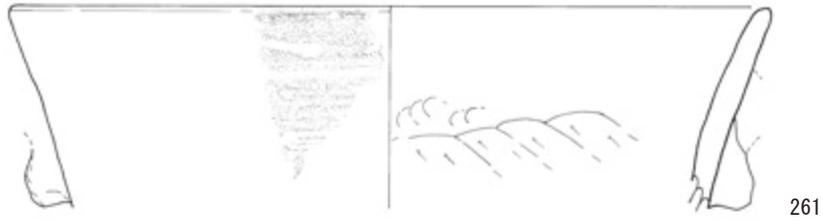
239～246は、ラップ状に開く口縁部の破片で、口唇部を屈曲させた後、ほぼ垂直に下方へ向かうものが多い。246は、胴部に若干膨らみをもつと考えられる。内面屈曲部以下には、下方から上方へと行ったヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。外面については、横方向のナデ、ユビオサエ、ハケ目、ヘラケズリの痕跡、爪痕を残すものがあり、240には頸部に横位の強い沈線が引かれているなど、バリエーションがみられる。すべて底部は残っていないが、丸底であると推測される。

247・248は、口縁から頸部付近の資料で、胴部がやや外方へ向かってふくらむもので、外面には横方向のナデ、内面には横方向のヘラケズリが施される。本来は大型のものであったと考えられるが、頸部以下が残存せず、底部形状も不明である。大型鉢の可能性もあるが、ここでは甕として扱った。

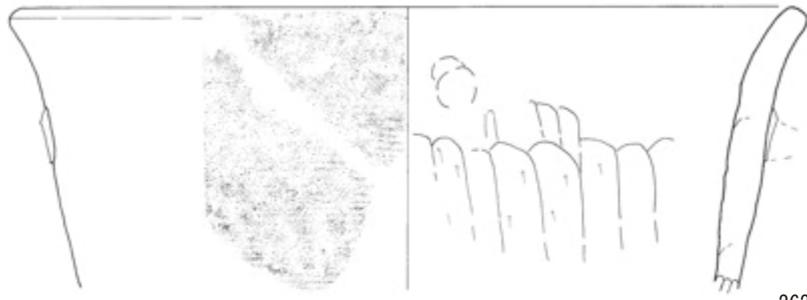
249～253は、小型の甕である。251・253は、他と比べ、器壁が薄く、内面のケズリも不明瞭で特徴的である。



第50図 古代の遺物⑦



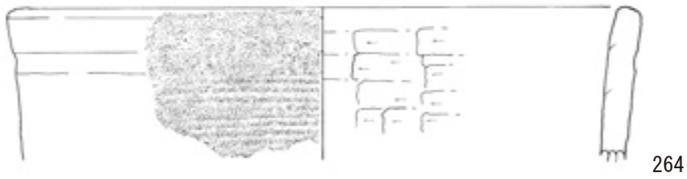
261



262



263



264



265



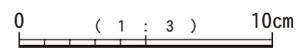
266



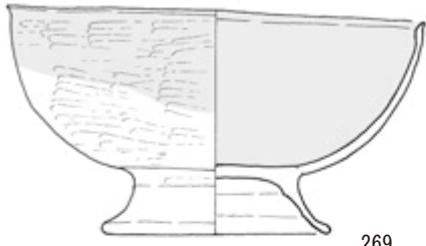
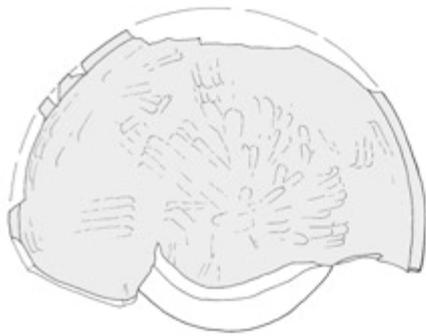
267



268



第51図 古代の遺物⑧



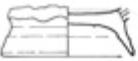
269



274



278



279



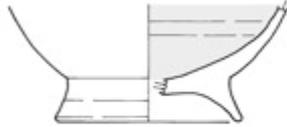
270



271



272



275



276



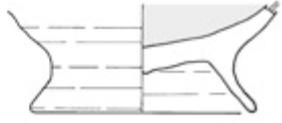
280



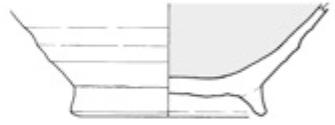
281



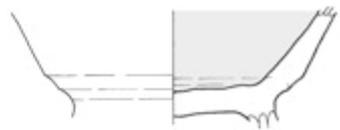
282



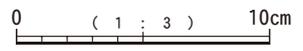
273



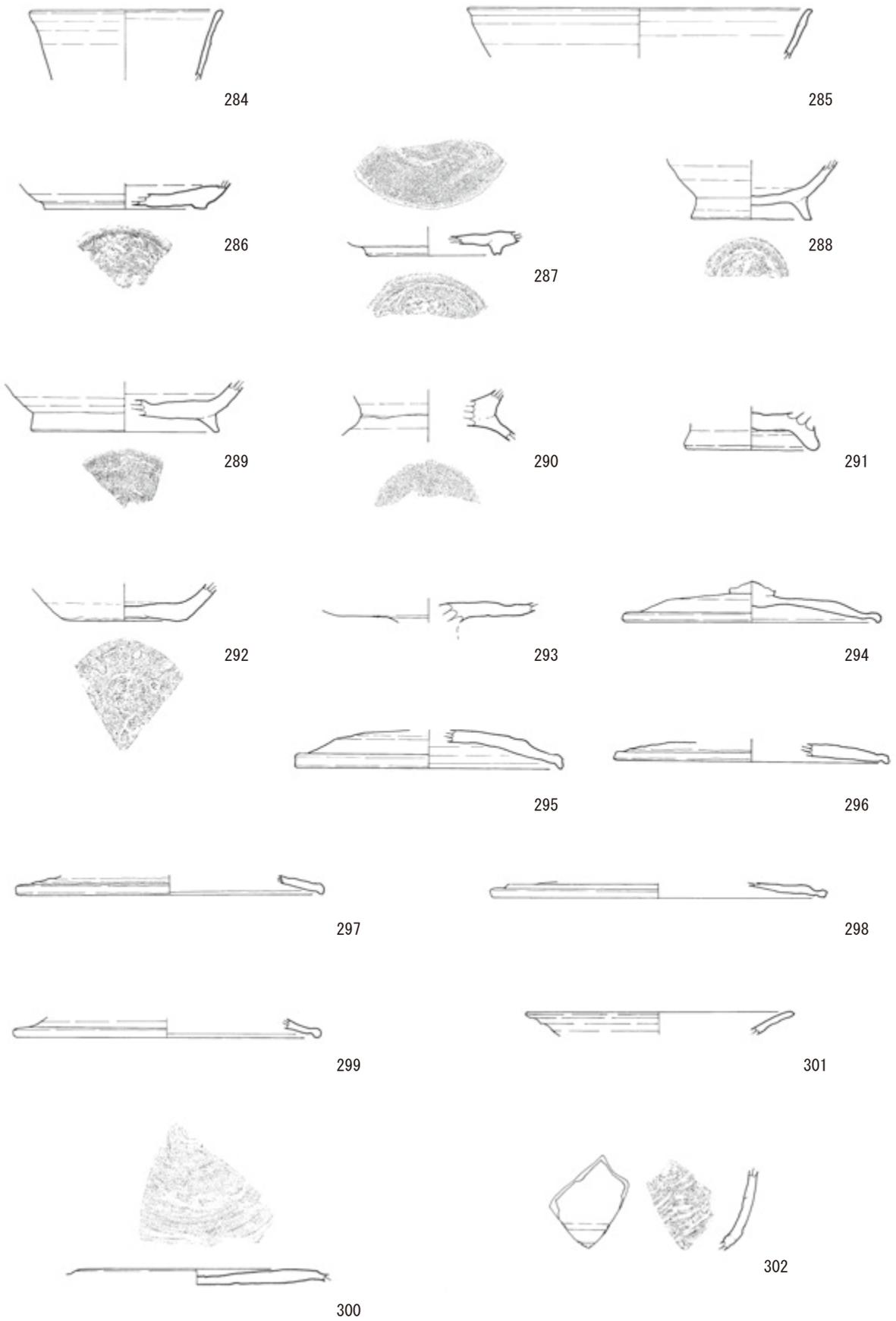
277



283

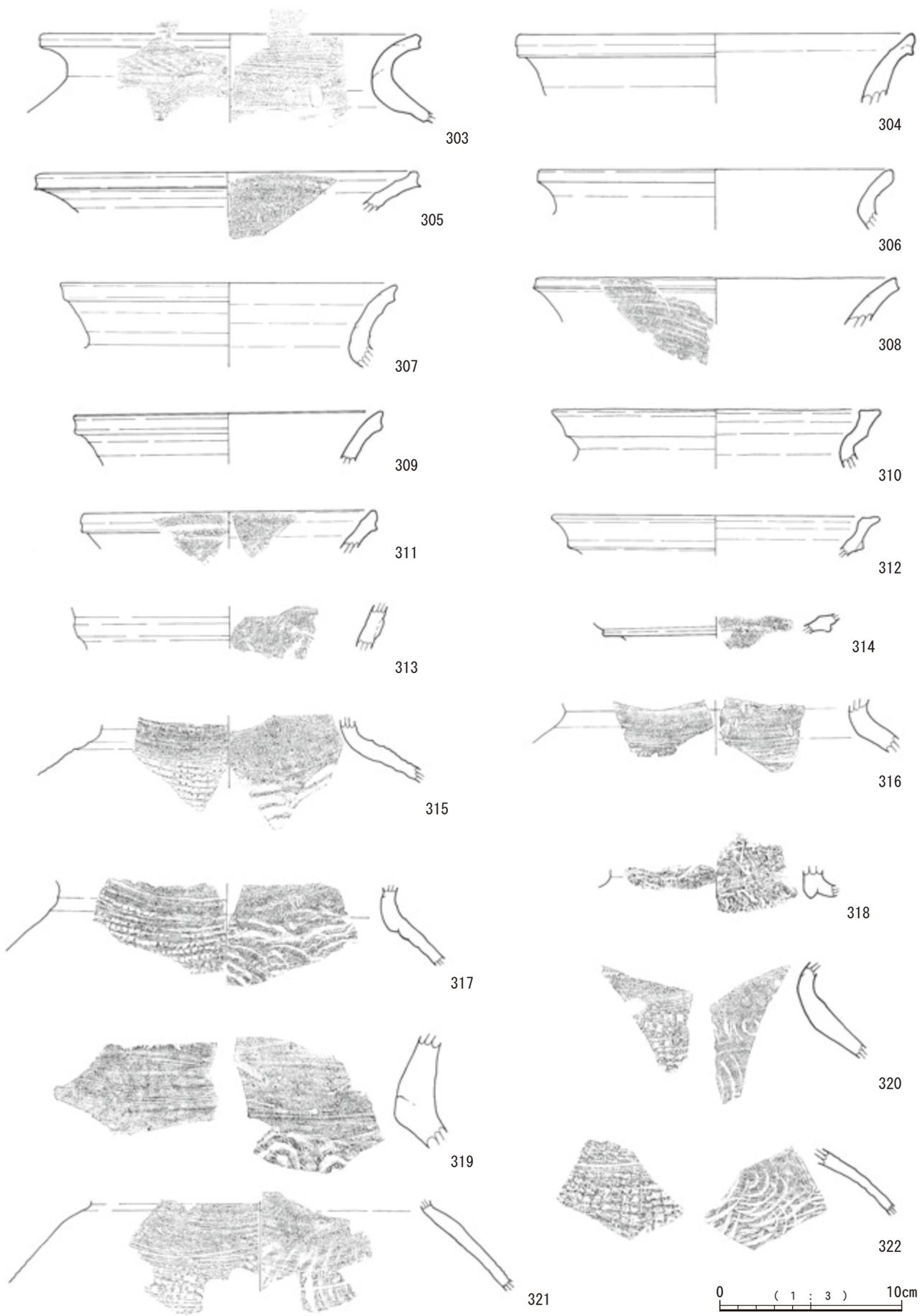


第52図 古代の遺物⑨



0 (1 : 3) 10cm

第53図 古代の遺物⑩



第54図 古代の遺物①



第55図 古代の遺物⑫



第56図 古代の遺物⑬

254は、頸部から胴部である。胴部は球状に膨らむ。
 255・256は、鉢形に近い甕である。口径に対して器高が低く、胴部に丸みがあり中華鍋形に近い。10世紀以降に出現するとされる。
 257は、底部が平底となるが、内面のケズリが明瞭なため甕とした。258は胴部で、外面は細かく丁寧なハケ目、内面はユビオサエで調整された特徴的なものである。259・260は、外面に細かい格子目タタキ、内面はケズリを施すものである。外面調整については須恵器の技法で、内面調整と焼成は土師器の技法であり、折衷的なものである。

甕 (第51図 261～268)

261・262は、把手を有するものである。ただし、把手は基部近くで欠損しているため、全形は明らかではない。263～265は、口縁部が直行するもので、口唇部は丁寧に整えられ、263・264は外面には平行に引かれた明瞭なハケ目が確認できる。

266は口縁部片で、波状口縁とみられるもので、波頂部にはコブ状の膨らみを有する。267は、底部片の資料である。底部は平たく、筒状の器形となるもので、内面にはヘラケズリ・ユビオサエの痕跡が残る。底部内面の下端部にも、横方向のヘラケズリの痕跡がみられる。

268は、把手である。小ぶりなもので、261～267とは別個体であると考えられる。

(2) 黒色土器 (第52図 269～283)

269～283は、いずれも内面が黒色で、内面にはヘラ状工具によるミガキが施される。中には、底部が残存しないものもあるが、基本的には高台がつく壺で、283のみ鉢である。

269は、完形復元が可能なものである。高台は「ハ」字状に開き、約2.5cmの高さがある。胴部は底部から丸みを帯びながら立ち上がり、口縁端部はわずかに反る。全体的に、器壁は薄く丁寧に作られていることから、金属器等を模倣した可能性も考えられる。

270～272は、口縁部から底部付近にかけての破片である。270は、胴部から緩く口縁部に立ち上がり、271は非常に薄手で、口縁から胴部にかけて直線的に立ち上がる。

272は、胴部全体は丸みを帯びる数条の段があり、外面に横位のハケ目がみられる特徴的な調整となっている。

273～278は、底部及び底部付近で、比較的高い高台を有し、特に273は高台部だけで約3cmの高さがある。277・278は、高台の高さは低めである。279・280は、小型の壺で、279は見込みに放射状のミガキが確認され、高台は、約1.5cmの高さがあるが、器壁が薄手である。

281・282は、内面の風化が激しいが、高台部分のみ赤色胎土となるもので、赤色高台壺に該当する。281は高台が若干低めだが、厚手のつくりとなっている。

283は、壺である。口縁部と高台部分が欠損し、胴部は高台脇から腰部で屈曲し、胴部は湾曲しながら口縁に向かって開く器形である。

(3) 須恵器 (第53～60図 284～368)

ア 食膳具

壺・坏 (第53図 284～292)

284・285は、非常に薄手のつくりの壺もしくは坏の口縁部付近で、いずれも直線気味に立ちあがり口唇部付近でわずかに外反する。

286～291は、高台を有するものである。286・287は、断面台形状の低い高台がつく。288～290は、比較的高い高台を有するが、290は高台接地部分が欠損する。291は、高台に厚みがあり、全体的に器壁も厚い。

292は、坏の底部と考えられる。底部はヘラ切り痕が残る平底で、胴部は外方へ開く器形である。

高坏 (第53図 293)

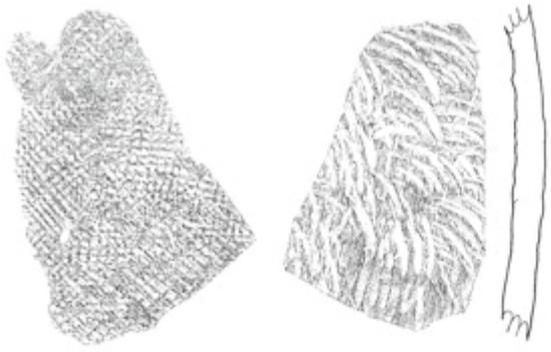
293は、高坏の坏部のみの小片で、外面にはぶい赤褐色を呈するのが特徴的である。古代の高坏は、この1点のみの出土である。

蓋 (第53図 294～300)

294は、つまみ～体部の破片で、上部中央には擬宝珠状のつまみを有する。295～300は、破片資料ではあるが、294と同様の形態と考えられる。端部の断面は玉縁状となっているものが多くみられる。

皿 (第53図 301)

301は、口縁部の小片で、非常に薄手のつくりである。口縁部は外方へ大きく開く。



330



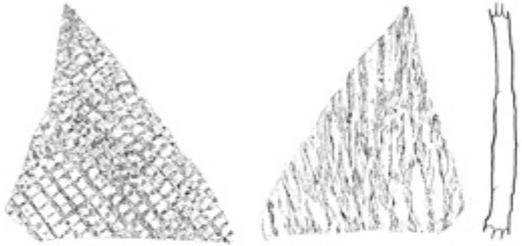
331



332



333



334



335



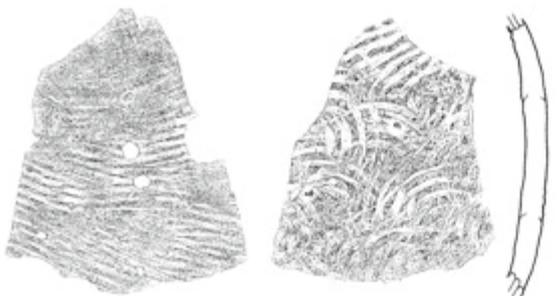
336



337



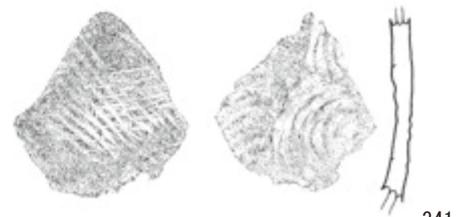
338



339



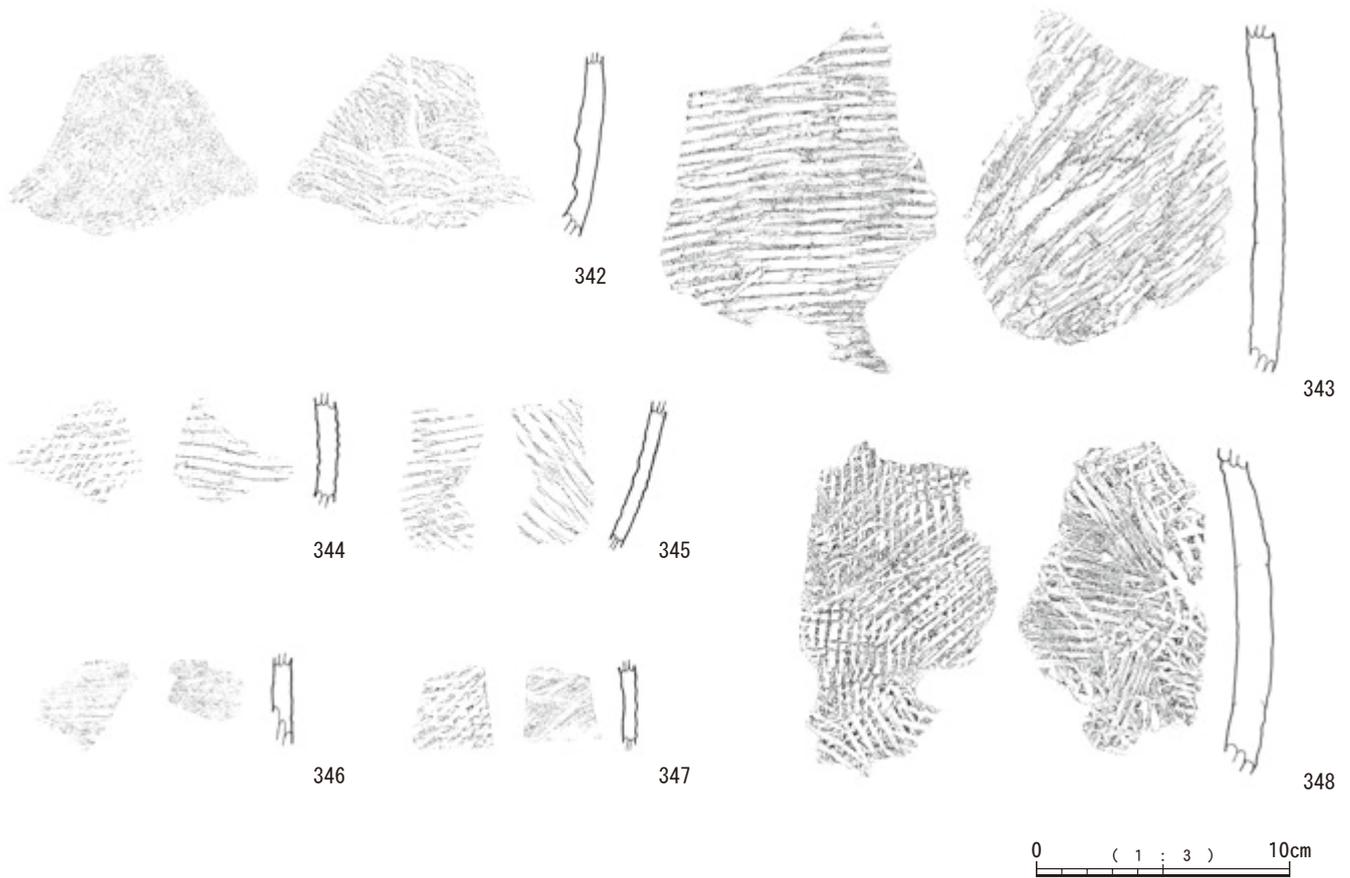
340



341

0 (1 : 3) 10cm

第57図 古代の遺物⑭



第58図 古代の遺物⑮

器種不明の食膳具（第53図 302）

302は、破片のため、器種は不明である。小型の鉢の可能性はある。

イ 貯蔵具

甕・壺（第54～60図 303～368）

303～368は、破片資料で判別が困難なものも多いため、甕・壺としてまとめて記述する。

303～313は、口縁部付近の破片である。口縁部下が突帯状となるものがある。310・312は、口縁部と頸部の間でさらにもう一度屈曲させ、二重口縁状となる。また、口唇部は平坦である。

313・314は、口縁部下の破片である。310等と同様に横方向に突帯状の稜を巡らす。

315～322は、頸部から肩部にかけての破片である。いずれも、内面には同心円状当具痕が確認される。外面については、格子目タタキ痕が残るものが多い。319は、厚みがあり大ぶりで、大型製品であった可能性がある。

323～329は、壺の可能性のあるものである。324～326・328・329は、頸部または肩部上部が締まるため壺としたが、内面に当具痕が確認されるものも多く含まれ、検討を要する。324・325は、口縁部から胴部まで残るもので、

外面には格子目タタキ痕、内面には同心円状当具痕が確認される。328・329は、頸部から肩部まで残存する。

330～348は、胴部の破片である。330～332は、外面が格子目タタキ、内面が同心円状当具痕、333～335は外面が格子目タタキ、内面は平行当具痕の残るものである。九州で生産された須恵器の特徴として、内面の上半～半ばまでは同心円状当具痕、内面の底部近くには平行当具痕が施されるが、これらについても内面の当具痕からおおよその部分を推定した。

336・340は、内外面ともに格子目の痕跡が残るもので、類例が少ない資料である。337・338は、外面には細かい格子目タタキ痕、内面は同心円状当具痕が残る。

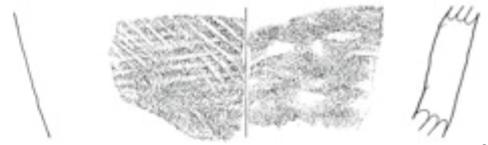
339・341は、外面は平行タタキで内面が同心円状当具痕、342は、外面は不明瞭ではあるが、平行タタキの後、強めのナデが施されたものとみられる。内面には、同心円状当具痕が確認される。343～347は内外面に平行タタキ、平行当具痕、348は外面が格子目タタキ、内面が平行当具痕が不規則に入るものである。

349～360は、体部下半底部付近の破片を集めた。

349～352は、外面には平行タタキ痕、内面にはユビオサエ、351は同心円状当具痕が確認される。



349



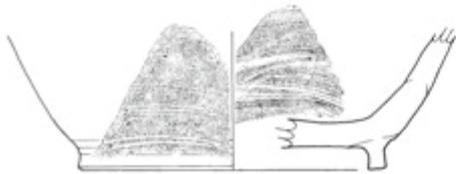
350



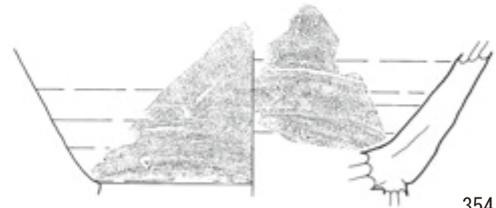
351



352



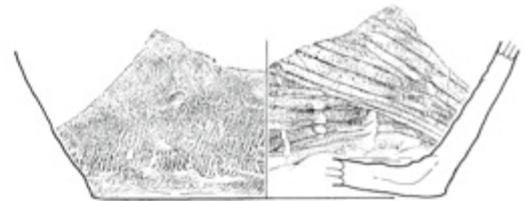
353



354



355



356



357



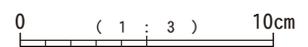
358



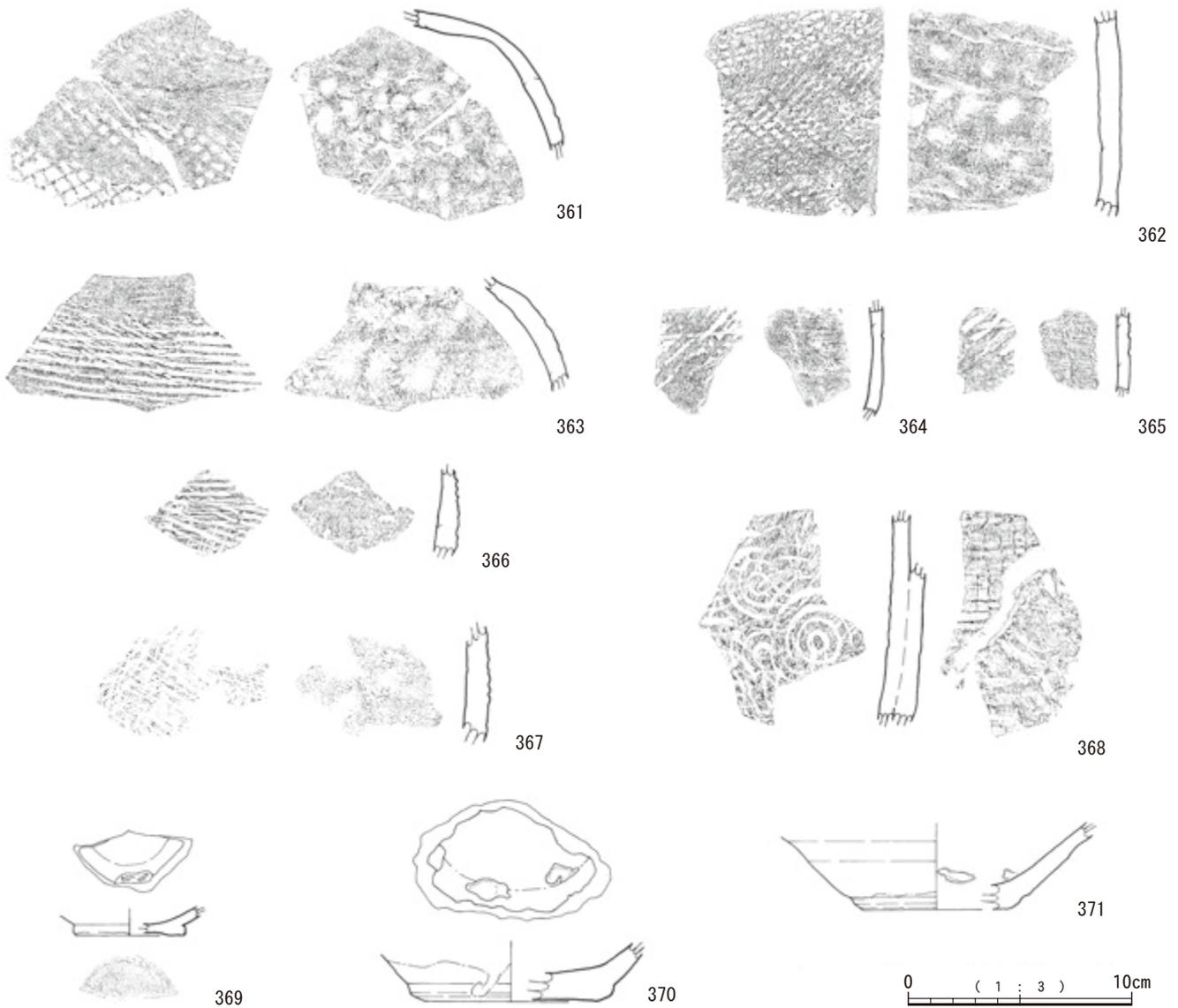
359



360



第59図 古代の遺物⑩



第60図 古代の遺物①

353～355は、高台付きの底部付近である。薬壺形と考えられる。354は、外面底部付近にヘラケズリが施される。その上部については、ユビオサエなどが確認される。

356～360は、平底の底部付近のものである。いずれも、タタキ痕は確認されない。356は、若干上げ底となるもので、小型の壺の可能性はある。

361～363は、内面には斑点状の凹みが確認される。これは、布を巻いた小石による当具痕とされてきたものである。ただし、指頭や掌の可能性も指摘されてきており、ここではユビオサエとした。

364・365は、外面に格子目タタキ痕が、内面には布目及び撚り糸状の圧痕がみられる。

366・367は、焼成不良とみられるもので、土師質に近く、外面に平行タタキ痕がみられる。

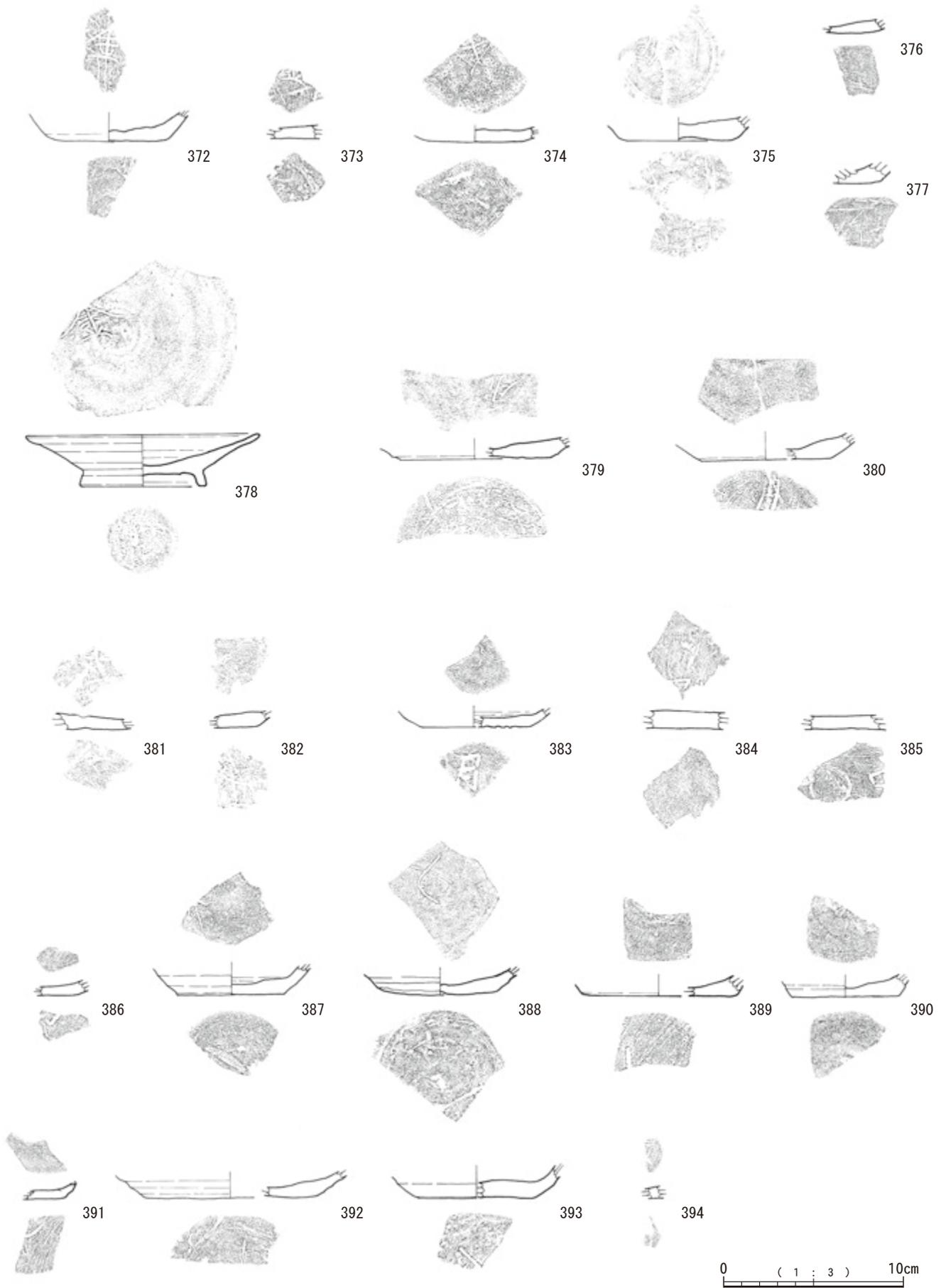
368は、焼成中において、釉着した破片である。このように、破片が釉着して残ったままのものも製品として流通していたことが分かる。

(4) 越州窯系青磁(第60図 369～371)

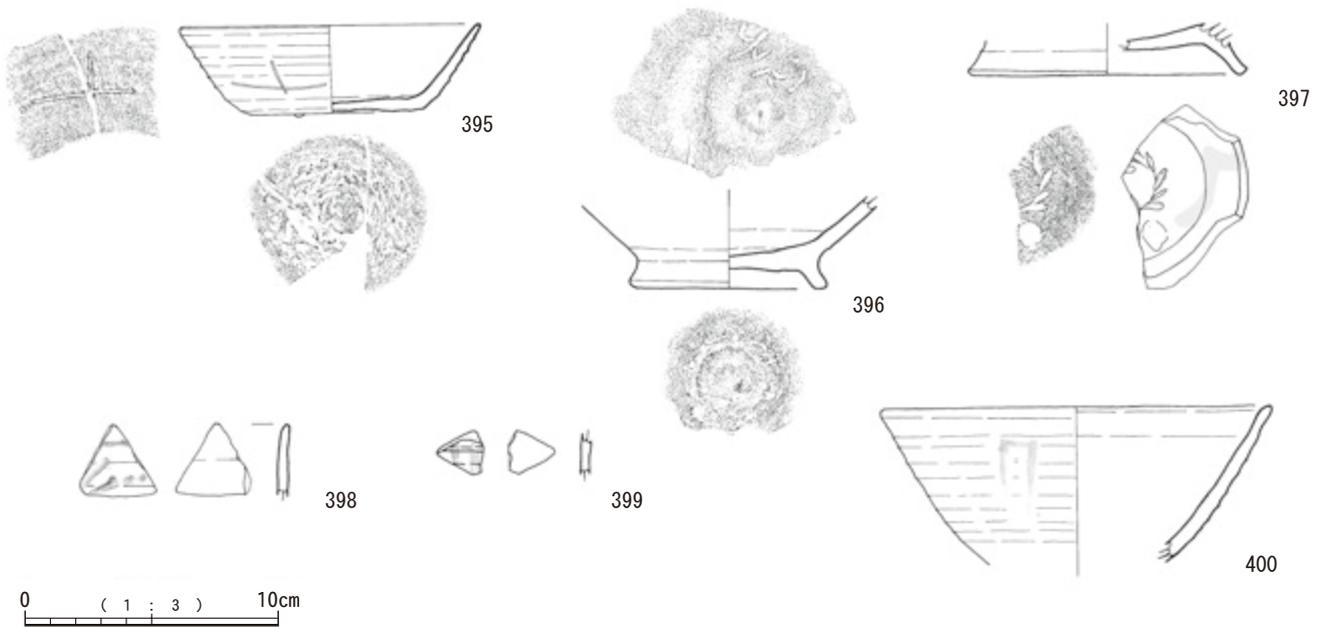
369～371は、いずれも内面見込みに目跡があり、底部外面にも同様のものが観察される。いずれも粗製で、器面の内外の発色が異なり、釉薬にはムラがある。胎土は粗く、黒色の斑点を含む。胴部下半及び底部付近は、ほとんどが無釉である。

369は、小型の碗とみられる。高台はやや上げ底で、円盤を貼り付けたものである。大宰府分類の、越州窯青磁Ⅱ類にあたる。

370は、大碗もしくは鉢で、比較的大型のものである。



第61図 古代の遺物⑩



第62図 古代の遺物⑱

大宰府分類の大椀・鉢Ⅱ類にあたる。371は、大型の碗で、大宰府分類の大椀Ⅰ類にあたる。

(5) 文字資料 (第61～62図 372～400)

372～400は、土器の表面にヘラ書きもしくは墨書による文字等が確認されるもので、他の土師器、須恵器と区別して掲載した。

372～397は、土師器の焼成前にヘラ状工具を用いて文字等が書かれた、刻書土器の一群である。

372～378は「金」、またはその可能性がある文字の一部が書かれているものをまとめた。ただし、375は非常に細く繊細に書かれ、376は小片で「七」のようにも見え、判読が困難である。378は、高台付皿の内面見込みに「金」の文字が明瞭に書かれている。

379～387は「月」、またはその可能性がある文字の一部が書かれている。379・381は「肥」もしくは、「月」の文字とその前にもう一文字が書かれていた可能性が考えられる。384・387は見込み部、385・386は底面にヘラ書きが確認できるが、小片のため判読は困難である。

388は、内面見込みに「七」の文字が、明瞭に書かれている。

389～394は、文字の一部もしくは記号とみられるヘラ書きが確認できるが、判読できない資料である。

395は、完形の土師器坏の胴部外面に「十」または「上」と考えられる文字が、鋭いヘラ状の工具を用いて書かれている。

396・397は、土師器碗に文字等が書かれている。396は、碗の内面見込みに判読できない文字または記号と、「子」

の字が確認される。397は、底部及び高台のみの残存であり、底部見込みに草花文に似た文様が月桂冠のような配置で描かれている。また、文様付近には赤色顔料と思われる物質が付着している。

398～400は、赤外線を用いて観察した結果、墨書が書かれていることが確認された。398・399は、土師器に墨書が書かれる。これらは、「月」の可能性があるものの、小破片のため判読不明である。400は須恵器碗の胴部に、「月」とみられる墨書が確認できる。

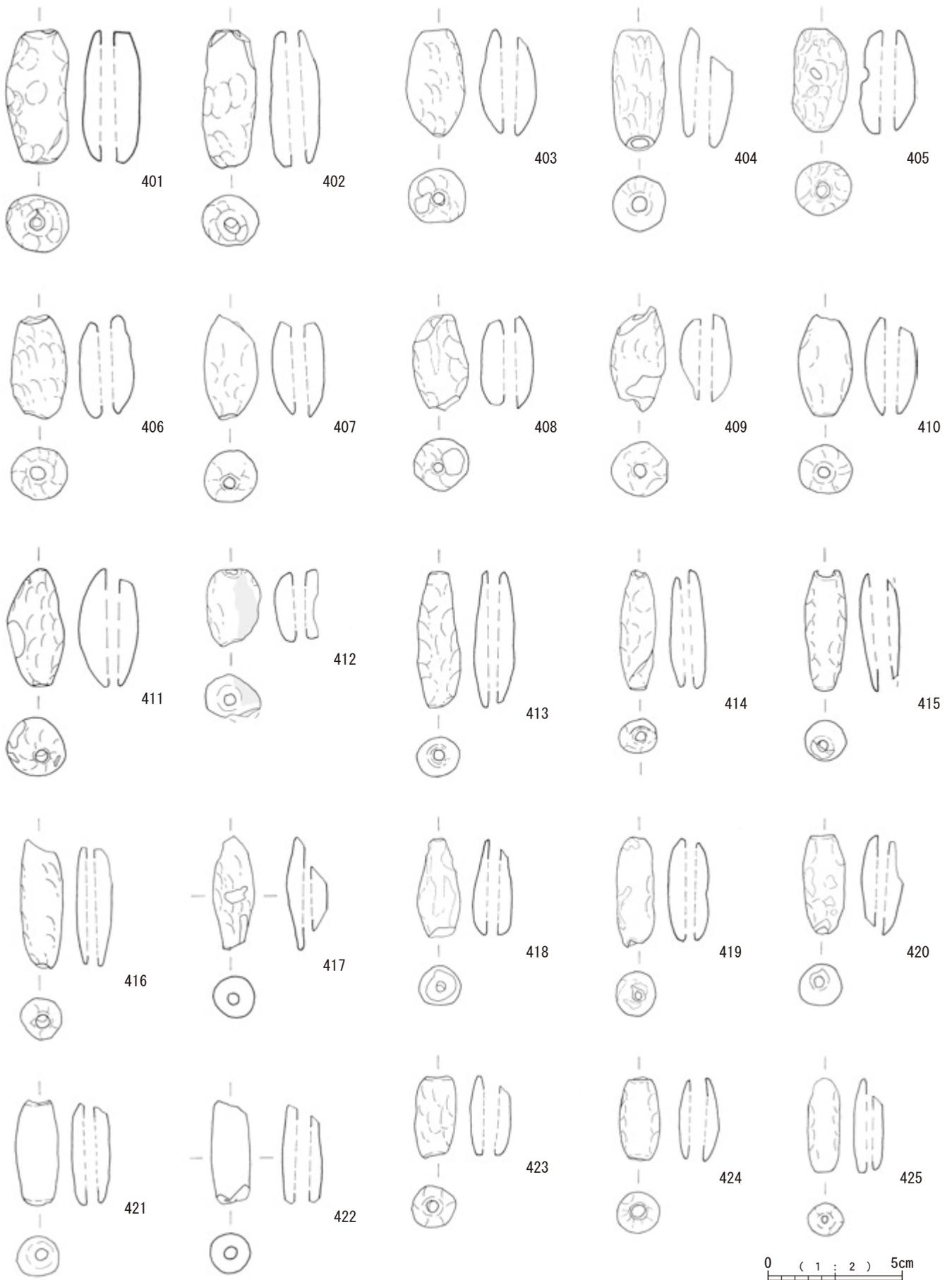
(6) その他 (第63・64図 401～444)

土錘 (第63・64図 401～432)

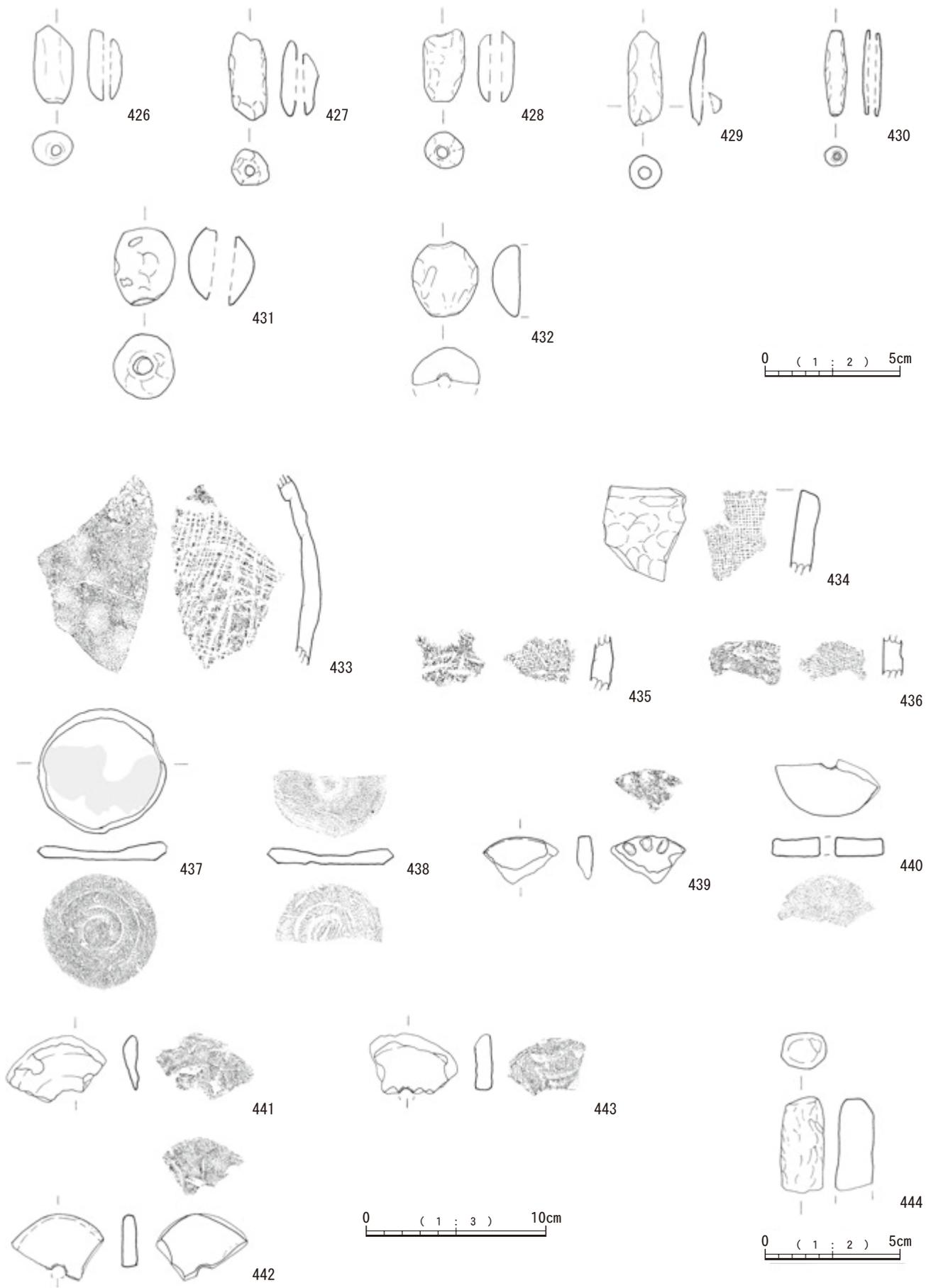
紡錘形(俵型)・水滴形・球形などの形状があり、長軸方向に孔をもち、漁網錘として用いられたと考えられる。長軸の長さ5.2～2.7cm、幅2.7～0.8cmで、重量は、24.4g～1.8gと様々である。

401～404及び411は、長さ4cm以上のやや縦長の紡錘形、405～410は長さが4cm未満で水滴形で、いずれも、幅は2cm程度、孔の直径は約4～6mm程度である。多くは、製作時のユビオサエ痕が残る。404はミガキの痕跡もあり、405は外面にモミ圧痕、405・410は赤色顔料の付着が認められる。

413～430は、幅1.6cm以下のやや細身で縦長のものである。表面は製作時のユビオサエが確認できるものがほとんどであるが、414は粘土を上から重ねた跡が残り、つくりが粗く、415は赤色顔料の付着が確認できる。421・422は表面が摩滅しており、調整痕が確認できない。430は最も小ぶりで、幅8mm、孔の直径はわずか3mmし



第63図 古代の遺物⑳



第64図 古代の遺物②

かない。412及び431・432は、長さ・幅がほぼ同じで球形に近く、いずれもナデが確認できる。

焼塩土器（第64図 433～436）

433～436は、内面に布目圧痕が残る粗雑なつくりの土器で、焼塩土器と考えられる。433の内面は、ナデによってほぼ消されているものの、わずかに布目圧痕が確認できる。また、434の内面で観察される布目は非常に目が粗く、大型の土器と想定される。435・436は、内面の布目がやや細かい。外面についてはユビオサエ・ナデなどで整形されており、円錐形の器形であると想定できる。

円盤状製品（第64図 437～439）

437・438は、土師器坏の底部を再加工した円盤状製品である。側面は、丁寧に面取りされている。

439は、円盤状製品に含めたが、紡錘車の可能性もある。残存部には穿孔は認められない。端部付近に、放射状に短めのユビオサエ状の文様が連続して施される。

紡錘車（第64図 440～443）

440～443は、紡錘車である。440は、専用品としてつくられたもので、本県では転用品が多く、希少である。441～443は、土師器坏底部を利用した転用品である。

棒状土製品（第64図 444）

444は、小指大の棒状土製品である。表面はナデ、ユビオサエが確認でき、孔や空洞部はない。把手等の土器の一部の可能性が考えられるが、形状・用途等は不明である。

【参考文献】

岩元康成2012「鹿児島県の遺構内出土完形遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24 日本中世土器研究会
 神野恵2010「土師器の種類・器種」「須恵器の種類」『図説 平城京事典』終風舎
 中村和美1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について - 土師器の変遷を中心に -」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
 西弘海1982「土器様式の成立とその背景」小林行雄博士古稀記念論文集刊行会編『考古学論考』平凡社
 山本信夫1990「統計上の土器 - 歴史時代土師器の編年研究によせて -」乙益重隆先生古稀記念論文集『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

第15表 古代 土師器・須恵器・青磁観察表(1)

※表中、層位内の「マ」は古代以外の時代の遺構内埋土から出土したものの
 ※接合資料について…取上番号ありの遺物+あり=「複数の出土区」/あり+なし=「アリの出土区他」/なし+なし=最も離れた「2つの出土区（他）」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
44	167	土師器	壺	D-I	44-45	IIb下	底部付近	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄橙	浅黄橙	白粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
	168	土師器	壺	G	45	IIb下	底部付近	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤色小石, 白粒, 長石	240-241	
	169	土師器	壺	-	-	マ	底部付近	-	(8.2)	-	ナデ	ナデ	淡赤橙	褐灰	白粒, 黒粒	3789	
	170	土師器	壺	H・I	52-55	I	底部付近	-	(8.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 長石, 角閃石	-	
	171	土師器	壺	F	45	IIb下	底部付近	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 長石	445	黒色高台, 高台の接地面に煤付着
	172	土師器	壺	F	44	IIb下	底部付近	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 長石	447	
	173	土師器	壺	H	59	I	底部付近	-	(9.0)	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 長石	-	貼り付け高台
	174	土師器	壺	G	59	マ	底部付近	-	(5.6)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 小石	4566	
	175	土師器	壺	G	45	IIb下	口縁～底部	14.4	7.8	4.7	ナデ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄橙	黄橙	赤小石, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	98	
	176	土師器	壺	F	50-53	I	底部付近	-	(8.0)	-	ナデ・回転ヨコナデ	ナデ・回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
	177	土師器	壺	E	70	IIb	底部付近	-	6.0	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	黄橙	赤色小石, 白粒, 長石, 角閃石	-	
	178	土師器	壺	G	45	IIb下	口縁～底部	(14.2)	(8.4)	6.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 精良	385	
	179	土師器	壺	F	68	IIb下	底部付近	-	7.0	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒, 白色小石, 長石	-	
	180	土師器	壺	F	46	マ	底部付近	-	(7.2)	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 小石, 長石	-	SP61内遺物
	181	土師器	壺	G	58	IIc	口縁～底部付近	(12.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤色小石, 白粒, 黒粒, 長石	-	赤色高台・煤付着
	182	土師器	壺	I	52他	III他	口縁～底部	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	白粒, 石英, 長石, 角閃石	3197	
	183	土師器	壺	G	44	IIb下	底部付近	-	(8.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 長石	258	
	184	土師器	壺	D-F	51-53	I	底部付近	-	7.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	浅黄橙	赤粒, 黒粒, 長石	-	
	185	土師器	壺	G	45	IIb下	底部付近	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	摩滅	橙	橙	赤粒, 白粒, 長石, 角閃石	450	
	186	土師器	壺	E	70	IIc	底部付近	-	7.8	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 長石	2009	
45	187	土師器	壺	I	52	IIc	底部付近	-	7.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	灰褐	灰色小石, 赤粒, 白粒, 黒粒, 長石	3325 3342	
	188	土師器	壺	F	45	IIb下	底部付近	-	(7.0)	-	回転ヨコナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石	-	
	189	土師器	壺	H	45	IIb下	底部付近	-	8.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石, 黒粒, 長石	266	
	190	土師器	壺	F	45	IIb下	底部付近	-	8.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙・橙	浅黄橙	珪, 礫, 鈣, 純, 礫, 鈣, 礫, 礫	433	赤色高台
	191	土師器	壺	I	55	IIc	底部付近	-	7.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石	3443	高台見込みに煤付着
	192	土師器	壺	G	53	III	底部付近	-	7.2	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒	3675	
	193	土師器	壺	G・H	44-45	IIb下	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	明赤褐	にぶい赤褐	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英	-	
	194	土師器	壺	F・G	45	IIb下	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 長石, 角閃石	449-173	
	195	土師器	壺	H	61	III	底部付近	-	(6.6)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石, 白粒, 黒粒	4818	
	196	土師器	壺	H	58	マ	底部付近	-	6.3	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 灰粒, 赤色小石	4739	白色胎土

第16表 古代 土師器・須恵器・青磁観察表(2)

※接合資料について…取上番号ありの遺物+あり=「複数の出土区」/あり+なし=「アリの出土区他」/なし+なし=最も離れた「2つの出土区(他)」

挿入番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
46	197	土師器	坏	I 52	IIb下	完形	12.8	6.6	4.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤色小石、長石、角閃石	-	ヘラ切り、(内面に墨書か)	
	198	土師器	坏	G E・F 44-45	IIb下	口縁~底部	12.0	6.1	4.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄褐	浅黄橙	赤粒、白粒、白色小石、長石	257	ヘラ切り	
	199	土師器	坏	I 59	III	口縁~底部	12.4	6.8	5.0	ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	赤粒、白粒、黒粒、石英、角閃石	4977	ヘラ切り	
	200	土師器	坏	G 57	III	底部付近	-	6.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石、白粒、長石	-	ヘラ切り	
	201	土師器	坏	G 45	IIb下	底部付近	-	6.1	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石、白粒、石英、長石、角閃石	169	ヘラ切り	
	202	土師器	坏	G 58	IIc	底部付近	-	5.9	-	ナデ	回転ヨコナデ	明赤褐	橙	赤粒、石英、長石、角閃石	3745	底面に沈線、ヘラ切り	
	203	土師器	坏	G 45	IIb	底部付近	-	5.5	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	赤粒、白粒、長石	2	ヘラ切り	
	204	土師器	坏	I 63	マ	底部付近	-	(7.4)	-	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	白粒、灰粒、小石、長石	4885	ヘラ切り	
	205	土師器	坏	E 69	IIb	底部付近	-	5.8	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、灰粒、長石	-	ヘラ切り	
	206	土師器	坏	D 70	VIa上	底部付近	-	(7.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	赤粒、白粒、黒粒、角閃石	-	ヘラ切り	
	207	土師器	坏	G 45	マ	底部付近	-	(5.6)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、黒粒、灰粒、角閃石	-	ヘラ切り	
	208	土師器	坏	F 45	マ	底部付近	-	6.7	-	ナデ	ナデ	橙	橙	白粒、黒粒、小石、長石	-	ヘラ切り	
	209	土師器	坏	H 57	マ	底部付近	-	5.0	-	ナデ	ナデ	橙	橙	白粒、黒粒、長石	-	ヘラ切り	
	210	土師器	坏	F 69	II	底部付近	-	6.2	-	ナデ	ナデ	黒靨、にぶい褐	にぶい褐	白粒、黒粒、長石	-	ヘラ切り	
	211	土師器	坏	H 55	マ	底部付近	-	5.6	-	ナデ	ナデ	明灰褐	褐灰	白粒、黒粒、長石	-	ヘラ切り	
	212	土師器	坏	I 63	マ	底部付近	-	(4.8)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒、長石、角閃石	4747	ヘラ切り	
	213	土師器	坏	G 64	マ	底部付近	-	(5.4)	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	白粒、黒粒、小石、角閃石	4764	ヘラ切り	
	214	土師器	坏	F 58	マ	底部付近	-	5.6	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒、白粒、黒粒、長石	-	ヘラ切り	
	215	土師器	坏	F 69	IIb	底部付近	-	6.2	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、灰粒	-	ヘラ切り	
	216	土師器	坏	F 69	II	底部付近	-	5.6	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、長石	-	ヘラ切り	
	217	土師器	坏	H 60	III	底部付近	-	6.0	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒、黒粒	4641	底部のヘラ切りナシ	
	218	土師器	塊・坏	G 67	マ	口縁~胴部	(12.9)	-	-	ナデ	ナデ	黒褐	褐灰	白粒、黒粒	5033		
219	土師器	塊・坏	E 52	III	口縁~胴部	(12.7)	-	-	ナデ	ナデ、ユビナギ	にぶい橙	橙	白粒、黒粒、長石	-			
220	土師器	塊・坏	I 54	マ	口縁~胴部	(12.0)	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、黒粒	-	白色胎土、焼成堅緻、(撥入系)		
221	土師器	高坏	G 65	マ	脚部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	-	赤粒、石英	4901	白色胎土		
222	土師器	蓋	H・I 52-55	I	つまみ	28	※つまみ部直径		ナデ	-	浅黄橙	-	赤粒、灰粒、白粒、長石	-			
223	土師器	蓋	E 49	I	つまみ	26	※つまみ部直径		ケズリ・ナデ	-	橙	-	赤粒、白粒、黒粒、石英	-			
224	土師器	蓋	I 52	マ	つまみ	32	※つまみ部直径		ケズリ・ナデ	ナデ	橙	-	赤粒、灰粒	-			
225	土師器	蓋	H 56	マ	つまみ	-	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、灰粒	-			
226	土師器	蓋	I 63	マ	体部	15.2	-	1.2	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙、黒靨	浅黄橙	赤粒、灰粒、角閃石	5014			
227	土師器	蓋	H 51	マ	体部	15.0	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	赤粒、長石	-			
228	土師器	皿	H 60	III	完形	12.4	6.2	3.3	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒、白粒、黒粒	-	高台付皿、内外面に煤附着		
229	土師器	皿	H 56-57	III	底部付近	-	8.0	-	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	赤粒、白粒、長石	-	高台付皿、痘痕状の剥落		
47	230	土師器	皿	E 50	IIb	口縁~底部	(15.9)	(12.8)	2.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒	3171 3172	ヘラ切り	
	231	土師器	皿	G 45	IIb	完形	14.0	9.6	1.8	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石、黒粒、長石	424	ヘラ切り	
	232	土師器	皿	I 59	マ	完形	14.6	10.0	2.1	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、黒粒、長石、角閃石	5183	ヘラ切り	
	233	土師器	不明	F 67	IIb	底部	-	(6.6)	-	ケズリ・ナデ	ナデ	赤褐	灰白	精良、赤粒、白粒、長石	-	赤色顔料塗布、水銀朱ではない	
	234	土師器	壺	F 52	VIa上	頸部	-	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤粒、白粒、黒粒、赤色小石、長石	-		
	235	土師器	壺	G-I 45-46	IIb下	頸部	-	-	-	タタキ	当具痕	浅黄橙	浅黄橙	白粒、灰粒、長石	-	焼成不良の須恵器の可能性あり	
	236	土師器	壺	I 54他	III他	完形	8.1	7.2	8.4	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	精良、赤粒、白粒、長石	-	白色胎土、焼成不良	
	237	土師器	鉢	G 45	IIb下	胴~底部	-	8.2	-	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石、石英、長石、角閃石	121 129	ヘラ切り、底部に赤色顔料附着	
	238	土師器	鉢	F-G	-	IIb	底部	-	9.6	-	ケズリ・回転ヨコナデ	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒、白粒、石英、長石、角閃石	-	
	239	土師器	甕	G 45	IIb下	口縁~胴部	(30.6)	-	-	ナデ、ユビナギ	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒、白粒、小石、石英、長石	448		
48	240	土師器	甕	G 45	IIb下	口縁部	(28.6)	-	-	回転ヨコナデ	ケズリ・回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤粒、白粒、黒粒	26 102		
	241	土師器	甕	G 45	IIb下	口縁~胴部	(31.0)	-	-	回転ヨコナデ、ハケ目	ケズリ・回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒、白粒、黒粒、石英、小石	231		
	242	土師器	甕	E・F 51-52	I	口縁~胴部	(28.0)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	白粒、黒粒、石英、長石、角閃石	-		
	243	土師器	甕	E 69	I	口縁~胴部	(29.2)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒、白粒、黒粒、小石、石英、長石、角閃石	-		
	244	土師器	甕	H 55	IIc	口縁~胴部	(26.0)	-	-	回転ヨコナデ、ハケ目	ケズリ・回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、灰粒、長石	3654		
	245	土師器	甕	D 64	II	口縁~胴部	(25.6)	-	-	ナデ、タタキ・ケズリ	ケズリ・回転ヨコナデ	赤橙	にぶい赤褐	赤粒、白粒、黒粒、小石、石英、長石	-	外面に煤附着	
	246	土師器	甕	G 45	IIb下	口縁~胴部	(23.0)	-	-	回転ヨコナデ、爪痕	ケズリ・回転ヨコナデ	にぶい橙	橙	白粒、黒粒、石英、長石、角閃石	277		
	247	土師器	甕	E・F 46	IIb	頸部	-	-	-	ナデ	ケズリ	橙	にぶい橙	赤粒、白粒、黒粒、石英、長石、角閃石	-		
49	248	土師器	甕	H 45	IIb下	口縁~頸部	-	-	-	回転ヨコナデ	ケズリ・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒、白粒、黒粒、金雲母	-	煤附着	
	249	土師器	甕	G 45	IIb下	口縁~頸部	(23.0)	-	-	ヨコナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、黒粒、小石、石英、長石	2801	小型甕	
	250	土師器	甕	H 61	III	口縁~頸部	-	-	-	ナデ、ユビナギ	ケズリ・ユビナギ	橙	橙	白粒、黒粒、長石、角閃石	4006	小型甕	
	251	土師器	甕	G 45	マ	口縁~頸部	-	-	-	ナデ、ユビナギ	ケズリ・ユビナギ	にぶい橙	にぶい橙	黒粒、赤色小石、石英、角閃石	-	小型甕	
	252	土師器	甕	D 49	VI	口縁部	-	-	-	ナデ、ユビナギ	ケズリ・ユビナギ	橙	明赤褐	白粒、石英、長石、角閃石	-	小型甕	
	253	土師器	甕	H・I 51-55	マ	口縁部	-	-	-	ナデ、ユビナギ	ケズリ・ユビナギ	にぶい橙	にぶい橙	白粒、角閃石	-	小型甕	
	254	土師器	甕	E 69	I	頸部~胴部	-	-	-	ハケ目	ケズリ・ナデ	淡橙	淡橙	白粒、灰粒、角閃石	-		
	255	土師器	甕	E 70	IIb	口縁~胴部	(31.6)	-	-	ハケ目・タタキ	ケズリ・ユビナギ	淡橙	淡橙	白粒、灰粒、角閃石	-	鉢形の甕	
	256	土師器	甕	F 45	IIb下	口縁~胴部	(26.8)	-	-	平行タタキ	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石、赤粒、白粒、黒粒、角閃石	436	外面に煤附着、鉢形の甕	
	257	土師器	甕	D 62-63	III-VI	胴~底部	-	(15.0)	-	ハケ目	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒、石英、長石、角閃石	-		
	258	土師器	甕	G 45他	IIb下	胴部	-	-	-	ハケ目	ケズリ・ユビナギ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒、白粒、黒粒、長石	137		
	259	土師器	甕	G 45	IIb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ケズリ・ナデ	赤灰	にぶい黄橙	純、黒、黒、小石、石英、長石、角閃石	21		
260	土師器	甕	I 59	III	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ケズリ	橙	淡橙	純、白、黒、小石、石英、長石、角閃石	4910	内外面に煤附着		
51	261	土師器	甕	H 52	マ	口縁~胴部	(30.0)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、黒粒、小石	-	外面に把手痕跡	

第17表 古代 土師器・須恵器・青磁観察表(3)

※接合資料について…取上番号ありの遺物+あり = 「複数の出土区」/あり+なし = 「アリの出土区他」/なし+なし = 最も離れた「2つの出土区(他)」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
51	262	土師器	甌	G	45	IIb下 他	口縁～胴部	(31.4)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	橙	橙	白粒, 灰粒, 小石, 石英, 長石	174-175	外面に把手痕跡
	263	土師器	甌	G	45	IIb IIb下	口縁～胴部	(28.0)	-	-	腫ヨコナデ・ハケ目	ケズリ・腫ヨコナデ	浅黄橙, 明褐灰	浅黄橙, 明褐灰	赤粒, 白粒, 黒粒, 小石, 長石	51-242	
	264	土師器	甌	I	54	IIc	口縁～胴部	(25.0)	-	-	腫ヨコナデ・ハケ目	ケズリ・腫ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 灰粒, 小石	-	
	265	土師器	甌	I	63	マ	口縁～胴部	(18.4)	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	灰白	灰白	赤粒, 白粒	4991	
	266	土師器	甌	F	49・50	I	口縁部	-	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 長石, 小石	-	
	267	土師器	甌	G	45 43・45	IIb IIb下	底部付近	-	(15.6)	-	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤色小石, 長石	-	
	268	土師器	甌	F	47	マ	把手	-	-	-	ユビオサエ・ナデ	ユビオサエ・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
52	269	黒色土器	壺	I	52他	IIc 他	完形	16.4	9.0	9.2	ミギキ・腫ヨコナデ	ミギキ	橙	黒	赤粒, 白粒, 黒粒, 長石	3225	黒色土器 (B類の可能性あり)
	270	黒色土器	壺	F	48	マ	口縁～胴部	(19.4)	-	-	回転ヨコナデ	ミギキ	にぶい黄橙	黒	白粒, 灰粒, 長石	-	黒色土器 A
	275	黒色土器	壺	I	63	マ	口縁～胴部	(14.6)	-	-	ナデ	ミギキ	にぶい黄橙	黒褐	白粒	4807	黒色土器 A
	271	黒色土器	壺	H・I I	55	III IIc他	口縁～底部付近	15.2	-	-	回転ヨコナデ	ミギキ	にぶい黄橙	黒褐	赤粒, 白粒, 小石, 長石	3441 3442	黒色土器 A(アバタ状の剥落)
	273	黒色土器	壺	G	56 57	III I	底部付近	-	(9.0)	-	ケズリ・腫ヨコナデ	ミギキ	浅黄橙	黒褐	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英, 長石	-	黒色土器 A, 比較的高い高台
	274	黒色土器	壺	H	53-55	I	底部付近	-	7.9	-	回転ヨコナデ	ミギキ	にぶい橙	黒	赤粒, 白粒, 黒粒, 長石	-	黒色土器 A, 比較的高い高台
	275	黒色土器	壺	G	58	III	底部付近	-	7.4	-	回転ヨコナデ	ミギキ	橙	黒褐	赤粒, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	-	黒色土器 A, 比較的高い高台
	276	黒色土器	壺	H・I	59-61	I	底部付近	-	—	-	ナデ	ミギキ(條紋)	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 黒粒, 赤色小石, 長石	-	黒色土器 A, 高台破損, 比較的高い高台
	277	黒色土器	壺	H・I	51-54	III	胴～底部	-	7.8	-	ケズリ・腫ヨコナデ	ミギキ	にぶい黄橙	黒	白粒, 黒粒, 石英, 長石	-	黒色土器 A
	278	黒色土器	壺	H	45	マ	底部付近	-	7.3	-	回転ヨコナデ	ナデ	橙	黒褐	赤粒, 白粒, 長石	-	黒色土器 A, 小型
	279	黒色土器	壺	F	58	マ	底部付近	-	5.3	-	回転ヨコナデ	ミギキ	にぶい橙	黒	白粒, 黒粒, 小石	6	黒色土器 A
	280	黒色土器	壺	G	56	III	底部付近	-	(5.2)	-	回転ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石	-	黒色土器 A, 小型
	281	黒色土器	壺	E	65	II	底部付近	-	(6.8)	-	ナデ	ナデ	にぶい橙, 赤橙	紅, 靑, 黒, 緑, 灰, 赤, 黄, 白	-	黒色土器 A, 赤色高台	
282	黒色土器	壺	D	72	IIb	底部付近	-	(7.6)	-	回転ケズリ	ミギキ	にぶい黄橙, 赤橙	黒, 明赤褐色	赤粒, 黒粒, 小石, 石英, 長石	-	黒色土器 A, 赤色高台	
283	黒色土器	壺	E・F F	44-45他	IIb IIb下	胴～底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	ミギキ	浅黄橙	黒	白粒, 黒粒, 長石	-	底部下面に刻みあり, 黒色土器 A, 高台付鉢	
53	284	須恵器	壺・坏	F	44-46	IIb下	口縁～胴部	(10.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	黄灰	白粒	-	
	285	須恵器	壺・坏	G	53-55	I	口縁部	(18.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒, 黒粒	-	
	286	須恵器	壺・坏	G	46	IIb	底部付近	-	(8.4)	-	ケズリ・腫ヨコナデ	腫ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒	426	
	287	須恵器	壺・坏	F	45	IIb下	底部付近	-	(7.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒	437	
	288	須恵器	壺・坏	G	45	IIb	底部付近	-	(6.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英	62	
	289	須恵器	壺・坏	G	58	III	底部付近	-	(9.8)	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰赤	黒粒	-	
	290	須恵器	壺・坏	G	58	III	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	ナデ	明赤褐	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英	-	高台欠損
	291	須恵器	壺・坏	H	45	IIb下	底部付近	-	(7.0)	-	回転ヨコナデ	ナデ	灰黄	灰黄	白粒, 黒粒, 小石, 石英, 長石	-	
	292	須恵器	坏	H	51	IIc	底部付近	-	(6.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 石英	3193	焼成不良, ヘラ切り
	293	須恵器	高坏	D・F	44-46	IIb下	底部付近	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰赤	白粒, 黒粒	-	
	294	須恵器	蓋	G	44	IIb	つまみ～体部	庇形 (13.4)	2.2	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	赤粒, 白粒	72	つまみ部は破損
	295	須恵器	蓋	F	46	IIb下	体部	庇形 (14.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	白粒	-	
	296	須恵器	蓋	F	44・45	IIb	体部	庇形 (14.2)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黒褐, 灰黄褐	褐灰	白粒	-	口縁内側に沈線
	297	須恵器	蓋	D	68	II	体部	庇形 (16.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒	-	
	298	須恵器	蓋	F	44・45	IIb下	体部	庇形 (17.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	白粒	-	
	299	須恵器	蓋	H	54	I	体部	庇形 (16.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒	-	
	300	須恵器	蓋	G	56	I	体部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	白粒, 黒粒	-	
	301	須恵器	皿	F	44・45	IIb	口縁部	(14.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄	黄灰	白粒	-	
	302	須恵器	不明	D・E	50	I	胴部	-	-	-	ナデ	胴内状当具痕	にぶい黄橙	にぶい橙	白粒, 黒粒	-	小型の鉢状, 内面自然釉
	54	303	須恵器	甌・壺	H	63	マ	口縁～頸部	(20.9)	-	-	格子目タタキ	胴内状当具痕	にぶい黄橙, 黄灰	にぶい橙, 黄灰	白色小石, 長石	-
304		須恵器	甌・壺	H	53	III上	口縁～胴部	(21.8)	-	-	ナデ	ナデ	黒褐, 褐灰	明褐灰	黒粒, 白色小石	-	
305		須恵器	甌・壺	H	44	IIb	口縁～胴部	(21.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	黄灰	白粒, 黒粒, 石英	194	
306		須恵器	甌・壺	G	44	IIb	口縁～胴部	(19.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒, 長石	73	焼成不良
307		須恵器	甌・壺	I	52-55	I	口縁～胴部	(18.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄	灰黄褐	白粒, 灰粒, 小石, 石英	-	
308		須恵器	甌・壺	E	69	II	口縁～胴部	(20.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	赤粒, 白粒, 黒粒	-	
309		須恵器	甌・壺	F	50-53	I	口縁～胴部	(17.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	暗灰黄	白粒, 灰粒, 石英	-	内面に自然釉付着
310		須恵器	甌・壺	H・I	51-54	III	口縁～胴部	(18.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 小石, 長石	-	焼成不良
311		須恵器	甌・壺	H	52	IIc	口縁～胴部	(16.2)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	褐灰	白粒, 灰粒	3498	口縁部に沈線
312		須恵器	甌・壺	G	45	IIb	口縁～胴部	(18.0)	-	-	ナデ	ナデ	灰赤, 暗赤褐	灰赤	黒粒, 角閃石	-	
313		須恵器	甌・壺	G-I	45	IIb下	口縁部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 石英, 角閃石	-	
314		須恵器	甌・壺	E	51	I	口縁部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	赤粒, 白粒, 黒粒, 小石	-	外面に沈線
315		須恵器	甌・壺	I	51	III	頸～肩部	-	-	-	回転ヨコナデ	腫ヨコナデ	灰	にぶい褐	白粒, 黒粒, 灰粒	-	
316		須恵器	甌・壺	D・E	49-50	I	頸部	-	-	-	回転ヨコナデ	腫ヨコナデ	灰	灰	白粒, 黒粒	-	
317		須恵器	甌・壺	I	52-55	I	頸部	-	-	-	腫ヨコナデ	腫ヨコナデ	黄灰	灰	白粒, 黒粒	-	
318		須恵器	甌・壺	E	50	I	頸部	-	-	-	ナデ・キズ目	ナデ, 胴内状当具痕	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 石英	-	焼成不良
319		須恵器	甌・壺	G	45	IIb下	頸部	-	-	-	回転ヨコナデ	腫ヨコナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白粒, 黒粒, 小石	229	
320		須恵器	甌・壺	H・I	52-53	I	頸部	-	-	-	腫ヨコナデ	腫ヨコナデ	灰	褐	赤粒, 白粒	-	
321		須恵器	甌・壺	I	55他	IIc他	肩部	-	-	-	腫ヨコナデ	腫ヨコナデ	灰褐	灰黄	赤粒, 白粒	3434	
322	須恵器	甌・壺	G	56	III	肩部	-	-	-	腫ヨコナデ	胴内状当具痕	褐灰	にぶい赤褐	白粒, 黒粒, 灰粒	-		
55	323	須恵器	甌・壺	H	59	マ	頸部	-	-	-	ナデ	ナデ, ユビオサエ	灰白	灰白	白粒	4666	壺か
	324	須恵器	甌・壺	G	45 44・45	IIb下 IIb	口縁～胴部	(11.8)	-	-	腫ヨコナデ	胴内状当具痕	橙	橙	白粒, 黒粒	106-114 134	壺か
	325	須恵器	甌・壺	G	45	IIb下	口縁～胴部	(12.0)	-	-	腫ヨコナデ	胴内状当具痕	橙	橙	白粒, 黒粒	116・15 112	壺か
	326	須恵器	甌・壺	F・G G-I	44 45	IIb下	肩部～胴部	-	-	-	格子目タタキ	胴内状当具痕	にぶい橙	にぶい黄橙	赤粒, 黒粒, 小石, 石英, 長石	-	壺か

第18表 古代 土師器・須恵器・青磁観察表(4)

※接合資料について…取上番号ありの遺物+あり = 「複数の出土区」/あり+なし = 「アリの出土区他」/なし+なし = 最も離れた「2つの出土区 (他)」

挿入 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
55	327	須恵器	甕・壺	G H	45他	Ⅱb下他	底部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	橙	橙	赤粒、白粒、黒粒、小石、石英	117-269	壺か
56	328	須恵器	甕・壺	F	45	Ⅱb下	頸～肩部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	オリーフ黒	灰	白粒、黒粒、小石、鉄錆粒	442	
	329	須恵器	甕・壺	G	58	Ⅱc	頸～肩部	-	-	-	カキメ	ナデ・当具痕	明赤褐	にぶい赤褐 灰白	黒粒	3764	荒尾産か
57	330	須恵器	甕・壺	H	52	Ⅱc	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	灰	灰白	赤粒、白粒、灰粒	3213	
	331	須恵器	甕・壺	F	47	マ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	黄灰	灰白	灰粒、長石	-	
	332	須恵器	甕・壺	I	55	Ⅱc	胴部	-	-	-	格子目タタキ、ナデ	同心円状当具痕	明褐灰	橙	赤粒、白粒、黒粒	3431	
	333	須恵器	甕・壺	G	56	Ⅲ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	黄灰	褐灰	白粒、黒粒、灰粒	-	
	334	須恵器	甕・壺	H-I	51-54	Ⅲ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白粒、黒粒、小石、石英	-	
	335	須恵器	甕・壺	G	59	マ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	黒褐	褐灰	白粒、灰粒	4586	
	336	須恵器	甕・壺	F	65	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	格子目当具痕	褐灰	にぶい黄橙	赤粒、白粒、小石	-	
	337	須恵器	甕・壺	F	44	Ⅲ上	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	褐灰	にぶい黄橙	赤粒、白粒	-	
	338	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	黒褐	褐灰	赤粒、白粒、灰粒、小石	286	
	339	須恵器	甕・壺	H	45	Ⅱb下	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	にぶい赤褐	灰黄褐	黒粒、灰粒	-	
	340	須恵器	甕・壺	F	63	Ⅵa上	胴部	-	-	-	格子目タタキ	格子目当具痕	褐灰	にぶい黄橙	赤粒、白粒	-	
	341	須恵器	甕・壺	D・E	46	Ⅱb下	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	灰褐	褐灰	白粒、黒粒、小石	-	
58	342	須恵器	甕・壺	G	45・46	マ	胴部	-	-	-	平行タタキ、ナデ	同心円状当具痕	灰白	灰白	白粒、長石	-	
	343	須恵器	甕・壺	E F	68 69	I II	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	にぶい黄橙	褐灰	白粒、灰粒、小石	-	
	344	須恵器	甕・壺	D	49	VI	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	黒褐、暗赤褐	灰褐	白粒	-	
	345	須恵器	甕・壺	G F	46 44・45	マ Ⅱb	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	赤褐	褐灰	灰粒	-	
	346	須恵器	甕・壺	E	70	Ⅱb	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	灰白	灰白	黒粒	-	
	347	須恵器	甕・壺	D	70	Ⅲ上	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	褐灰	褐灰	黒粒、灰粒	-	
	348	須恵器	甕・壺	E D	71 71	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	灰黄褐	黄灰	白粒、黒粒、石英	-	
	349	須恵器	甕・壺	H	55他	Ⅱc他	底部付近	-	-	-	平行タタキ、ナデ	ナデ・エビオサエ	浅黄	にぶい黄橙	白粒、黒粒、小石	3461	
59	350	須恵器	甕・壺	H	55	Ⅱc他	底部付近	-	-	-	平行タタキ、ナデ	ナデ・エビオサエ	灰白	にぶい黄橙	白粒、灰粒	3462	
351	須恵器	甕・壺	H	53	Ⅱc	底部付近	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、黒粒、灰粒	3347	内面に縦方向に燃糸状の跡あり	
352	須恵器	甕・壺	I	57	Ⅲ	底部付近	-	-	-	平行タタキ	ナデ・エビオサエ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、黒粒、角閃石	-	焼成不良	
353	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb	底部付近	-	(12.2)	-	カキメ	ナズリ・ナデ	にぶい赤褐	褐灰	黒粒、長石、角閃石	-	壺壺形	
354	須恵器	甕・壺	H	45	Ⅱb下	底部付近	-	-	-	ナデ・ナズリ・エビオサエ	ナデ	褐灰	灰	白粒、灰粒	364	葉壺形	
355	須恵器	甕・壺	F	70	Ⅲ	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	ナデ	暗灰黄	灰黄	白粒、黒粒、石英	-	葉壺形	
356	須恵器	甕・壺	H-I	75	I	底部付近	-	(13.8)	-	ナデ・ハク目	ナズリ・ナデ	灰	灰	白粒、黒粒、石英	-		
357	須恵器	甕・壺	H	45	Ⅱb下	底部付近	-	(12.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗赤褐	赤灰	白粒、黒粒	250	壁内空洞あり	
358	須恵器	甕・壺	F G	51・52 52・53	I	底部付近	-	(8.0)	-	ナズリ・ナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒、灰粒、石英	-	焼成不良	
359	須恵器	甕・壺	F	50・53	I	底部付近	-	(7.8)	-	ナデ	ナデ	赤灰	赤灰	白粒	-	壁内空洞あり	
360	須恵器	甕・壺	I	53・54	I	底部付近	-	-	-	ナズリ・ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白粒	-	壁内空洞あり	
60	361	須恵器	甕・壺	G	44 45	Ⅱb Ⅱb下	肩部	-	-	-	格子目タタキ、ナズリ	エビオサエ	にぶい褐	明褐灰	赤粒、白粒、黒粒、石英	94-139	
	362	須恵器	甕・壺	G	56・58	I	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ・エビオサエ	褐灰	にぶい橙	赤粒、白粒、灰粒	-	
	363	須恵器	甕・壺	D-F	44・46	Ⅱb下	肩部	-	-	-	平行タタキ	ナデ・エビオサエ	灰白	灰白	白粒、黒粒、灰粒、小石、長石	-	
	364	須恵器	甕・壺	I	54	Ⅱc	胴部	-	-	-	格子目タタキ、ナデ	布目・ナデ	黒	にぶい褐	黒粒	-	
	365	須恵器	甕・鉢	H-I	52・55	I	胴部	-	-	-	格子目タタキ、ナデ	布目・ナデ	黒褐	褐灰	白粒、黒粒	-	内面に縦方向に燃糸状の跡あり
	366	須恵器	甕・壺	F	44・45	Ⅱb下	胴部	-	-	-	平行タタキ	ナデ	橙	浅黄橙	赤粒、黒粒、灰粒、小石、石英、長石	-	焼成不良
	367	須恵器	甕・壺	F	45	マ	胴部	-	-	-	平行タタキ	ナデ	浅黄橙、黒褐	浅黄橙	赤粒、白粒、赤色小石、石英、角閃石	-	焼成不良
	368	須恵器	甕・壺	I	52・54	Ⅲ	胴部	-	-	-	①同心円状当具痕 ②格子目タタキ	不明 同心円状当具痕	①赤②黒褐	①にぶい赤②黒	①白粒、灰粒、小石②白粒	-	軸着したもの
	369	青磁	碗	H	59	マ	底部付近	-	(5.0)	-	(内外面に目跡あり)	(内外面に目跡あり)	褐灰	明褐灰	黒粒	4579	大宰府分類の越州窯青磁Ⅱ類
	370	青磁	大甕・鉢	H	55	Ⅲ	底部付近	-	(9.0)	-	(内外面に目跡あり)	(内外面に目跡あり)	灰褐、褐灰	灰白	黒粒、石英	-	越州窯系青磁、太宰府分類の大甕・鉢Ⅱ類
	371	青磁	大甕・鉢	H	60	Ⅲ	底部付近	-	(6.5)	-	(内外面に目跡あり)	(内外面に目跡あり)	灰	灰	黒粒、灰粒	4480	越州窯系青磁、太宰府分類の大甕・鉢Ⅰ類
61	372	土師器	坏	G	45	-	底部付近	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒、白粒、石英、角閃石	-	見込みに「金」のヘラ書き、ヘラ切り
	373	土師器	坏	E	72	I	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、石英、角閃石	-	「金」のヘラ書き
	374	土師器	坏	H-I	45・46	Ⅱb	底部	-	(5.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石、石英、長石、角閃石	-	見込みに「金」のヘラ書き、ヘラ切り
	375	土師器	坏	I	53	マ	底部付近	-	(6.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒	3709 3319	見込みヘラ書き(文字不明)あり
	376	土師器	坏	E	72	Ⅱb	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、長石	-	底部外面に「ヒ(七)」のヘラ書き
	377	土師器	坏	G	56・58	I	底部	-	-	-	ナデ	摩滅	浅黄橙	褐灰	赤色小石、白粒	-	底部外面に「金」のヘラ書き、ヘラ切り
	378	土師器	皿	E・F	48	マ	口縁～底部	(13.0)	7.0	2.9	ナズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、石英、長石	-	高台付皿、見込みに「金」のヘラ書き
	379	土師器	坏	E	69	I	底部付近	-	(8.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒、長石	-	見込みに「肥？」のヘラ書き
	380	土師器	坏	I	52	Ⅲ	底部付近	-	(7.0)	-	ナデ	回転ヨコナデ	黄橙	浅黄橙	赤粒、長石	-	底部外面に「月」のヘラ書き
	381	土師器	坏	E	69	Ⅱ・Ⅲ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	明褐灰	黒粒、赤色小石	-	見込みに「肥？」のヘラ書き
	382	土師器	坏	H	55	マ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、長石、角閃石	-	見込みにヘラ書き「月」あり
	383	土師器	坏	H	60	Ⅲ	底部付近	-	(6.0)	-	ナデ	ナデ	褐灰	橙	赤粒、白粒、長石、角閃石	4555	底部外面にヘラ書き「月」か
	384	土師器	坏	G	44	Ⅱb	底部	-	-	-	ナデ	ナズリ・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、長石、角閃石	-	見込みにヘラ書き(文字不明)
	385	土師器	坏	H	52・53	I	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、長石、角閃石	-	見込みにヘラ書き(文字不明)
	386	土師器	坏	H	53・54	I	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒、白粒、長石、角閃石	-	底部外面にヘラ書き(文字不明)
	387	土師器	坏	F	44・45	Ⅱb下	底部付近	-	(5.8)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒、白粒、長石、角閃石	-	見込みに放射状の浅いヘラミダシ、底部外面に浅い沈線
	388	土師器	坏	G	53・55	I	底部付近	-	(6.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄橙	黄橙	白色小石	-	見込みに「七」のヘラ書き、ヘラ切り
	389	土師器	坏	G	45	Ⅱb下	底部付近	-	(8.7)	-	ナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、長石	352	底部外面にヘラ書き(沈線状)
	390	土師器	坏	G	55	Ⅱc	底部付近	-	(6.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、白粒、石英、長石	3647	見込みに細い線刻、ヘラ書き
	391	土師器	坏	E	71	Ⅱb	底部	-	-	-	ナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、黒粒	-	底部外面にヘラ書き(文字不明)、糸切り

第19表 古代 土師器・須恵器・青磁観察表(5)

※接合資料について…取上番号ありの遺物+あり = 「複数の出土区」 / あり+なし = 「アリの出土区他」 / なし+なし = 最も離れた「2つの出土区(他)」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
61	392	土師器	坏	D・E	49・50	I	底部付近	-	(9.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒, 長石	-	底部外面に「一」または「七」のヘラ書き, ヘラ切り
	393	土師器	坏	H	46	IIb下	底部付近	-	(6.2)	-	回転ヨコナデ	ナデ	淡赤橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石	-	底部外面に「一」のヘラ書き
	394	土師器	坏	G	46	マ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石	-	内面にヘラ書き
62	395	土師器	坏	E	72	IIb	完形	11.9	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 長石	2007 2008	胴部外面に「+」または「上」のヘラ書き
	396	土師器	塊	F	69	II	底部付近	-	7.8	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	明赤褐	赤色小石, 白粒, 長石, 角閃石	3001	見込みに判読できない文字と「子」のヘラ書き
	397	土師器	塊	I	54	II	底部	-	11.0	-	回転ヨコナデ	ナデ	橙	黒褐	赤粒, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	3306	内面に月桂冠のような文様・赤色顔料付着の可能性
	398	土師器	坏・塊	F	45	マ	口縁	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 石英, 長石	-	外面に「月?」の墨書
	399	土師器	坏・塊	G	56-58	I	胴部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石	-	外側に「八?」の墨書, 薄手
400	須恵器	塊か	E・F	56-58	III	口縁-胴部	15.4	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄	黄灰	白色小石, 灰色小石	-	須恵器・胴部外面に「月」の墨書	

第20表 古代 土製品観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	法量 (cm, g)				調整	色調	胎土	取上番号	備考	
						長さ	幅	内径	重量						
63	401	土製品	土錘	F	45	IIb下	5.1	2.3	0.5	24.4	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	黒粒, 灰粒, 石英, 角閃石	440	
	402	土製品	土錘	H	59	埋土	5.2	2.0	0.5	18.7	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	白粒, 黒粒, 灰粒, 長石, 角閃石	4619	
	403	土製品	土錘	H	52	埋土	4.0	2.1	0.6	17.3	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	白粒, 黒粒, 灰粒, 角閃石	-	
	404	土製品	土錘	H	46	IIb	4.6	2.0	0.5	14.8	ナデ	にぶい橙	白粒, 黒粒, 灰粒, 長石, 角閃石	-	ミガキ
	405	土製品	土錘	H	46	IIb	3.9	2.0	0.5	14.4	ナデ・ケズリ	橙	赤粒, 黒粒, 灰粒	401	モミ圧痕あり, 赤色顔料のちミガキ
	406	土製品	土錘	I	60	埋土	3.9	2.1	0.5	13.9	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	黒粒, 長石, 角閃石	4370	
	407	土製品	土錘	H	54	埋土	3.9	2.0	0.5	13.5	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	灰粒, 長石	3332	
	408	土製品	土錘	H	56	埋土	3.6	2.0	0.4	12.5	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	白粒, 灰粒, 長石	-	
	409	土製品	土錘	I	46	IIb	4.0	2.0	0.4	13.3	ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 長石, 角閃石	-	
	410	土製品	土錘	H	46	IIb	3.8	2.0	0.4	12.9	ナデ	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 長石	-	赤色顔料塗付の可能性
	411	土製品	土錘	I	54	埋土	4.4	2.2	0.5	16.9	ナデ・エビオサエ	橙	赤粒, 灰粒, 石英, 長石	3700	
	412	土製品	土錘	I	57	III	2.9	2.0	0.4	6.3	ナデ	赤橙	黒粒, 精良	-	赤色顔料塗付の痕跡あり, 外面はほぼ摩耗
	413	土製品	土錘	I	55	IIc	5.1	1.6	0.4	10.6	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	黒粒, 灰粒, 精良	3420	
	414	土製品	土錘	F	49	I	4.5	1.3	0.3	7.5	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒	-	ねじったような跡, 粗い構造
	415	土製品	土錘	E	71	IIb	4.6	1.5	1	7.4	ナデ・エビオサエ	浅黄橙	黒粒, 精良	2002	一部破損
	416	土製品	土錘	H	52	埋土	4.9	1.6	0.3	10.4	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	赤粒, 黒粒	-	
	417	土製品	土錘	E	72	I	4.2	1.5	0.3	6.8	ナデ・エビオサエ	橙	赤粒, 黒粒, 石英	-	
	418	土製品	土錘	E	70	I	3.8	1.6	0.5	7.3	ナデ	橙	赤粒, 白粒, 黒粒	-	
	419	土製品	土錘	D	50	I	4.2	1.4	0.3	10.0	ナデ	明赤褐	赤粒, 黒粒, 石英, 長石	-	
	420	土製品	土錘	G	57	III	3.8	1.6	0.5	8.2	ナデ・エビオサエ	橙	白粒, 黒粒, 灰粒	-	
	421	土製品	土錘	F	44-45	IIb下	4.0	1.5	0.4	8.2	摩滅	にぶい黄橙	赤粒, 黒粒, 灰粒, 長石	-	
	422	土製品	土錘	H	59	III	3.9	1.6	0.4	7.9	摩滅	橙	赤粒, 白粒, 灰粒, 角閃石	4678	
	423	土製品	土錘	H	62	III	3.1	1.6	0.5	7.1	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	黒粒, 灰粒, 長石, 角閃石	-	
	424	土製品	土錘	D	49-51	I	3.2	1.5	0.5	6.0	ナデ・エビオサエ	浅黄橙	白粒, 黒粒, 灰粒	-	
	425	土製品	土錘	I	57	III	3.6	1.1	0.4	4.3	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英, 角閃石	-	
426	土製品	土錘	G	45	IIb下	2.9	1.5	0.3	4.5	ナデ	にぶい赤橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 小石, 石英, 長石, 角閃石	-	表面はやや風化	
427	土製品	土錘	H・I	47-48	IIb	3.3	1.4	0.4	4.5	ナデ・ケズリ	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 石英	-		
428	土製品	土錘	I	46	IIb	2.7	1.6	0.4	4.9	ナデ・ケズリ	明赤褐	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 石英	-		
429	土製品	土錘	D・E	50	I	3.6	1.2	0.5	3.9	ナデ・エビオサエ	にぶい橙	白粒, 黒粒, 灰粒	-		
430	土製品	土錘	E	49	I	3.2	0.8	0.3	1.8	ナデ・エビオサエ	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英, 角閃石	-		
431	土製品	土錘	E	69	II~III	2.9	2.7	0.7	12.7	ナデ・エビオサエ	橙	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 長石, 角閃石	-		
432	土製品	土錘	I	57	III	2.8	2.4	0.4	6.2	ナデ・ハガレ	赤橙	黒粒, 精良	-	半分に破損	

第21表 古代 焼塩土器・紡錘車等観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
64	433	焼塩土器	鉢	H・I	51-54	III	胴部	-	-	-	ナデ・エビオサエ	ナデ・布目圧痕	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 小石, 石英, 長石, 角閃石	-	
	434	焼塩土器	鉢	I	57	III	口縁部	-	-	-	ナデ・エビオサエ	布目(大)	橙	橙	赤粒, 白粒, 白色小石, 長石	-	布目は目が粗い
	435	焼塩土器	鉢	G	57	IIc	胴部	-	-	-	ナデ	布目(細)	橙	橙	赤粒, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	-	布目は目が細かい
	436	焼塩土器	鉢	I	56	III	胴部	-	-	-	ナデ	布目(細)	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 長石	-	布目は目が細かい
	437	土製品	円盤状製品	G	45	IIb下	-	-	6.2	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤色小石, 長石	103	煤・タール付着
	438	土製品	円盤状製品	D・E	62	IV-VI	-	-	6.0	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰褐	黒粒, 小石, 石英	-	
	439	土製品	円盤状製品	F	44-45	IIb下	-	-	-	-	ナデ・放射状押	ナデ	橙	-	赤粒, 白粒, 黒粒	-	紡錘車の可能性あり
	440	土製品	紡錘車	D・E	63	II	-	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	白粒, 黒粒, 長石	-	
	441	土製品	紡錘車	F	46	IIb	-	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 灰粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
	442	土製品	紡錘車	G	54	IIc	-	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	-	赤粒, 白粒, 灰粒	3564	
	443	土製品	紡錘車	H	52-53	I	-	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	-	赤粒, 黒粒, 灰粒	-	
	444	土製品	棒状土製品	E・F	44-45	IIb	-	-	-	-	ナデ・エビオサエ	-	にぶい黄橙	-	赤粒, 白粒, 黒粒, 長石, 角閃石	-	把手の可能性あり

第4節 中世の調査

1 調査の概要

中世の遺物は、主にⅡb・Ⅱc層で確認されている。第3節古代の調査成果でも述べたが、近世の遺物と混在した状態で出土している。遺構検出面はⅢ層上面であるが、場所によっては土地改変における地形の削平による影響で、下位のⅣ～Ⅵ層で遺構を検出している。

遺構は、掘立柱建物跡12棟、竪穴建物跡1基、土坑35基、溝状遺構7条、集積4基、石列3列、ピットを検出した。遺物は、土師器、瓦質土器、中世須恵器、国産陶器、中国が中心となる輸入陶磁器、滑石製品、茶臼、銭貨などが出土した。

2 出土遺物の分類

(1) 器種分類

器種分類にあたっては、大宰府分類（太宰府市教育委員会2000）、中村和美氏による分類（中村1994）及び山本信夫氏・山村信榮氏の分類（山本・山村1997）を参考とした。また、輸入陶磁器については、国立歴史民俗博物館による分類（池谷ほか2021）を基本とし、これに小野正敏氏による分類（1982）、森田勉氏による分類（1982）、中野晴久氏による分類（2013）なども加味して行った。

- ・食膳具：坏・小皿（いずれも土師器）・碗・皿・盤（いずれも輸入磁器）
- ・調理具：播鉢（捏鉢含む：須恵器製・瓦質製・陶器製）
- ・煮炊具：鍋（金属製・瓦質製）・釜（羽釜含む：滑石製・瓦質製）
- ・貯蔵具：壺・甕（いずれも中世須恵器・国産陶器輸入陶器含む）
- ・調度具：火鉢・小壺・合子（いずれも輸入磁器）・蓋
- ・その他：天目・風炉など

上記に含まれないものや器種が特定できないもの。

(2) 遺物分類

遺物は、土師器、瓦質土器、中世須恵器、国産陶器その他に大分類した。以下には、分類について述べる。

ア 土師器

食膳具のみである。

坏：平底を原則とする。皿とは器高が異なり、口径と比較して器が高いものである。器高はおおむね3cm以上となる。底部外面については、回転台から糸を用いて切り離れた痕跡が残る。糸切りは、回転台を回転させた状態で糸を底に入れて切り離すため、一方に極端に偏った渦状の痕跡が残る。

小皿：口径に対して、器高が低いものである。器高は2

cm以下である。底部外面には、坏と同じく糸切り痕が残る。

イ 瓦質土器

基本的には、いぶし瓦と同じような質感をもち、釉薬をかけずに焼成した後、燻化（くんか）と呼ばれる工程を行って表面を黒色化する。良質なものは瓦と同じように表面が黒色化するが、南部九州では、燻しが弱いいためか黒色のものは少ない特徴がある。名称についても、これまで瓦器、瓦器質土器、須恵質土器、土師質陶器などがあるが、ここでは瓦質土器に統一した。生産遺跡は全国的に未発見であり、当遺跡の資料も産地不明である。ただし、一部については在地産の可能性も指摘されている（佐藤2000）。

時期については、羽釜・釜などは中世前期のものがあるものの、多くは中世後期に該当する。

瓦質土器には、調理具と煮炊具、調度具（暖房具）がある

(ア) 調理具

播鉢：口縁部の一か所に注ぎ口を設けるもので、片口鉢ともいう。当遺跡では備前焼を模倣したとみられる瓦質土器の播鉢が多く出土した。内面の底部付近から放射状に一単位につき5～8程度の播目（条線）を入れる点は共通するが、底部見込みと口縁部内面の播目については個体差がある。また、播目がなく、内面に斜位の強いハケ目が入るものもみられる。特に、底部は使用による破損のため、残存することが少ない。時期はおおむね中世後半期である。

(イ) 煮炊具

釜：基本的には、中央部よりやや上に鏝（羽）がついた羽釜である。当遺跡出土のものは在地産ではなく、他地域のものと考えられる。また、厳密には瓦質土器とはいいがたいものも含まれるが、便宜上ここに含めた。時期は中世前半である。

また、湯釜とみられる破片も出土している。厳密には煮炊具ではなく茶道具であるが、数が少なく、破片のみであることからここに含めた。時期は中世後半である。

鍋：口縁部がラッパ状に開くものである。胴部は浅めの球状となるが、当遺跡では明確な胴部が確認されていない。時期は中世前半である。

(ウ) 調度具（暖房具）

火鉢：火舎・火桶とも呼称される。中に炭火を入れた使用が想定される。底面は平底であるが、三か所に脚がつけられ、底面が直接熱を受けないようにしている。厳密には、火窓のついたものは焜炉とされるが、ここに一括する。

(エ) その他

風炉：茶の湯を沸かすために、炭を入れて火をつけて使用するものである。当遺跡では小破片のみ出土している。基本的には中世後半のものと考えられる。

ウ 中世須恵器

外見的には、須恵器に類似するもので、技法も引き継がれる。ただし、焼成、胎土、タタキ目などに特徴があり、区別することができる。当遺跡では焼成の良好でないものが多い。断面観察において胎土には、小石なども含まれており、白色や褐灰色などの色調が縞状もしくはマーブル状となるものも多くみられる。

甕：体部よりも口縁部が締まるもので、口縁部は大きく外方に広げる。胴部はやや縦長の球形をしている。胴部外面には格子目状の叩きが施されるが、山形（矢羽根）条のものも一定量存在する。内面には当て具痕はなく、ハケ目が施される。時期は基本的に中世前半である。ただし、タタキ目の格子が大きいものは、瓦質土器に近い胎土のものがあり、中世後半の可能性もある。

片口鉢：口縁部は肥厚し、底部は平底である。口縁部肥厚部分は、自然釉が付着するか黒色化する。口縁部の一部には、注ぎ口がつく。捏鉢とされてきたが、内面に使用痕がみられる場合が多いため、播目はみられない場合も播鉢として使用されたことが指摘されている。基本的には、東播磨（兵庫県）が産地とされているため、東播系須恵器と呼ばれているが、模倣品とみられるものが存在する。詳細な産地については今後の課題である。

エ 国産陶器

調理具と貯蔵具がある。

(ア) 調理具

播鉢：備前産のものがある。ただし、備前に類似した他産地の可能性のあるものも含む。口縁部に厚みがあるものもないものがあり、底部は平底で、一部には注ぎ口がつく。内面には播目が、底部を基点として放射状に施文される。播目は一条4～12単位である。時期は、基本的に中世後半期のものである。

(イ) 貯蔵具

甕：常滑産、備前産及び瀬戸産のものがある。
(常滑)

釉薬をかけずに焼成するが、自然釉が付着する場合がある。口縁部を折り曲げてつくることによって、断面形を「N」字状とするものがあり、当遺跡出土のものに該当する。肩が張り出して、一部には肩部に押印文を施すものがある。底部はわずかに上げ底となる。時期は中世前半である。
(備前)

釉薬をかけずに焼成するが、自然釉が付着する場合がある。重厚なつくりで、器壁は厚く硬質で、他の産地のやきものと比較して重みがある。口縁を玉縁状にするものが、当遺跡出土のものに該当する。胴部は中央よりもやや上方で最大径とする。底部はわずかに上げ底となる。

壺：瀬戸産のものがある。外面には釉薬がかかる。本遺跡では破片のみの出土であるため、全形は確認できないが、瓶子と考えられる。時期は中世前半期である。

オ 輸入陶磁器

基本的に、磁器（白磁・青磁・青花）は食膳具で、陶器は貯蔵具である。

(ア) 磁器

碗・皿：白磁・青磁と、青花とに分けて記述する。

(白磁・青磁)

碗・皿は、口縁部が直行するもの、端反るもの、外反するもの、玉縁状となるものなどがある。胴部は若干膨らむものと、横に張り出すものがある。底部には高台がつく。文様については多種多様である。このほか、坏・盤などがある。

(青花)

成形した白磁の素地に酸化コバルト顔料を用いて文様を描く。景德鎮窯系と漳州窯系のものがある。景德鎮系が先に流通し、漳州窯系はその模倣である。漳州窯系は、上手と下手があり、上手は景德鎮系に極めて類似性が高い高級品で、下手は文様が暗く発色するなど粗雑な量産品である。また、漳州窯系の製品には、全面施釉のものは少なく、底部付近は無釉で、高台内には靱殻痕がつくことが多い。

(イ) 陶器

中国南部（華南）や東南アジア産のものである。

大型のものは、在地では日常雑器として用いられたものをコンテナ（運搬容器）として利用されたと考えられている（向井2000など）。当遺跡でも大型品が出土しているが、破片のため全形は明らかではない。無釉のものが大部分を占めるが、国産陶器との区別が困難なものがある。厳密には、産地不明なものが多い。時期は、おおむね中世後半である。

カ その他

青白磁の合子・小壺などがあり、これらは調度具にあたる。時期は、おおむね中世前半期である。また、天目や風炉などがあるが、これらは茶道具となる。時期は、おおむね中世後半期である。

上記に含まれないものについても、各自本文中にて説明を行う。

なお、輸入陶磁器の年代分類については、国立歴史民俗博物館（以下「歴博」という。）による分類（池谷ほ

か2021)を基本とし、これに大宰府分類、森田分類や小野分類などを併記した。以下に、歴博による分類を示す。

I 期 (11世紀後半～12世紀中頃)

- a 指標とする主な分類
青磁碗A 0, 白磁碗Ⅱ・Ⅳ, 白磁皿Ⅱ・Ⅳ
・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ

- b 既分類(参考)
大宰府C期

II 期 (12世紀後半～13世紀前半)

- a 指標とする主な分類
青磁碗A 1～6, 青磁同安窯系, 白磁碗V
～Ⅷ, 白磁皿Ⅲ

- b 既分類(参考)
大宰府D・E期

III 期 (13世紀後半～14世紀前半)

- a 指標とする主な分類
青磁碗B 1・0, 青磁折縁皿, 白磁碗ⅢⅨ
白磁碗浦口窯系, 白磁碗ビロースク0・Ⅰ・Ⅱ

- b 既分類(参考)
大宰府F期, 森田A群

IV a 期 (14世紀後半～15世紀初め)

- a 指標とする主な分類
青磁碗B 2・C 1・D 1, 白磁碗枢府系, 白磁碗
ビロースクⅢ

- b 既分類(参考)
大宰府G期, 森田B・C群, 小野A群

IV b 期 (15世紀前半～中葉)

- a 指標とする主な分類
青磁碗B 3・C 2・D 2, 青磁内彎皿, 白磁
皿B, 染付碗B

- b 既分類(参考)
森田D群, 小野B群(碗)

V 期 (15世紀後半～16世紀前半)

- a 指標とする主な分類
青磁碗B 4・C 3・E 1, 青磁端反皿, 青磁
稜花皿, 白磁碗C, 白磁皿C 1・C 2・E,
染付碗C・D, 染付皿B 1・C

- b 既分類(参考)
森田E群, 小野C・D群, 小野B群(皿)の
一部(B 1)

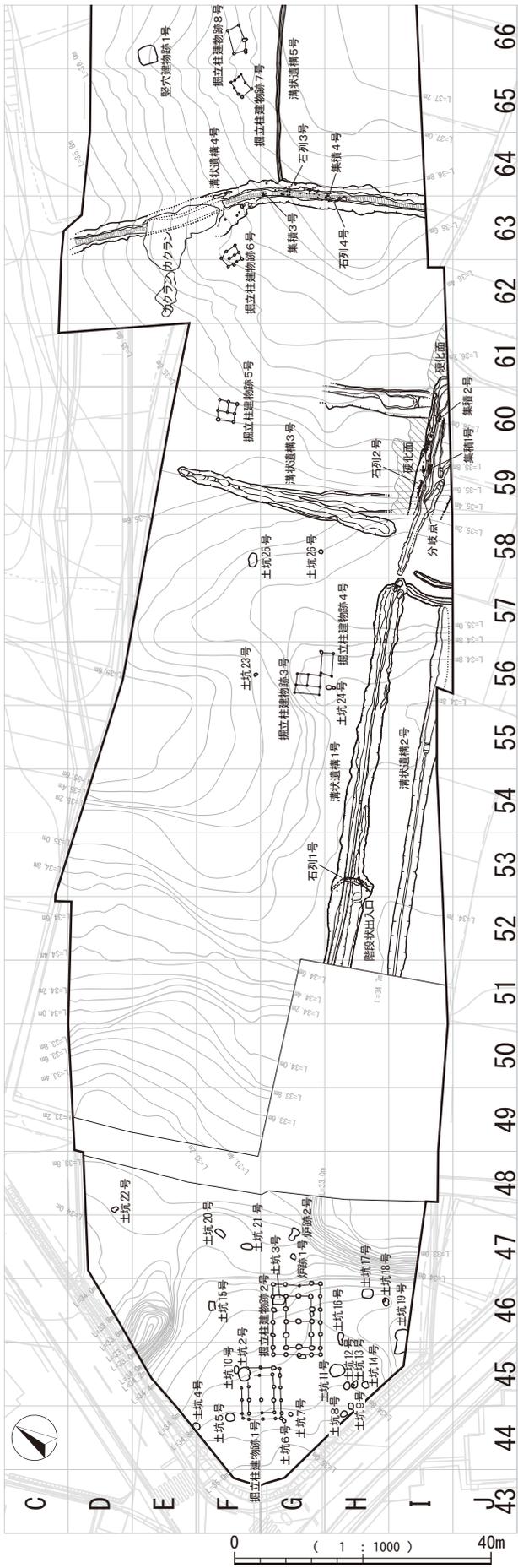
VI 期 (16世紀中葉～末)

- a 指標とする主な分類
青磁碗E 2, 青磁菊皿, 白磁皿D, 染付碗E
F, 染付皿B 2・E・F

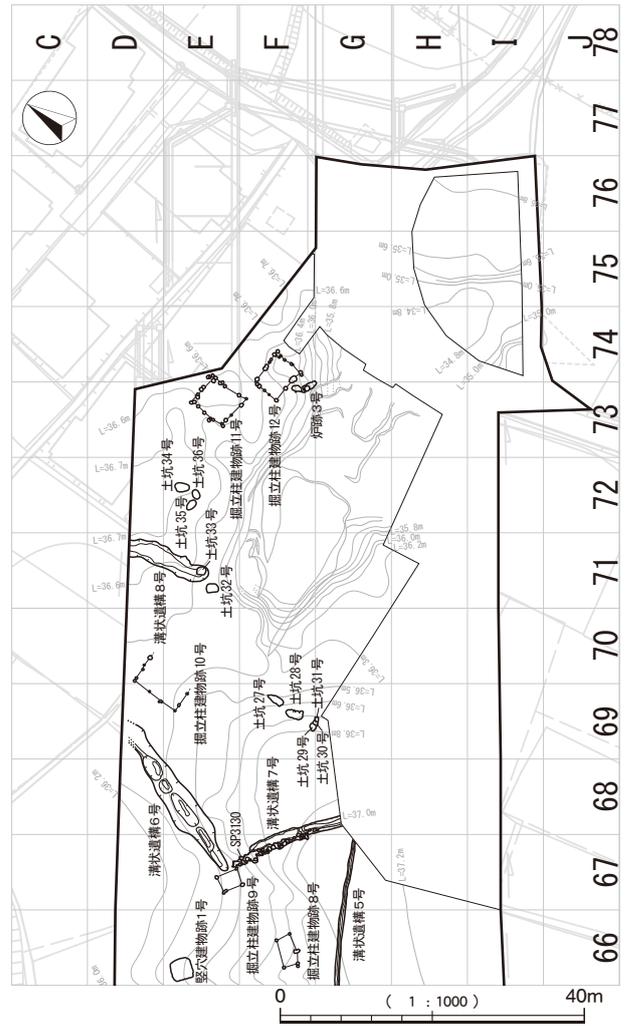
- b 既分類(参考)
森田E群の一部, 小野E・F群, 小野B群
(皿)の一部(B 2)

【参考文献】

- 岩元康成2012「鹿児島県の遺構内出土完形遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24 日本中世土器研究会
- 中村和美1994「鹿児島県(薩摩・大隅国)における平安時代の食器について-土師器の変遷を中心に-」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
- 美濃口雅朗1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
- 山本信夫1990「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」乙益重隆先生古稀記念論文集『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
- 太宰府市教育委員会(山本信夫編)2000「大宰府条坊跡X V-陶磁器分類編一」『太宰府市の文化財』第49集 太宰府市教育委員会
- 池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎2021「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集

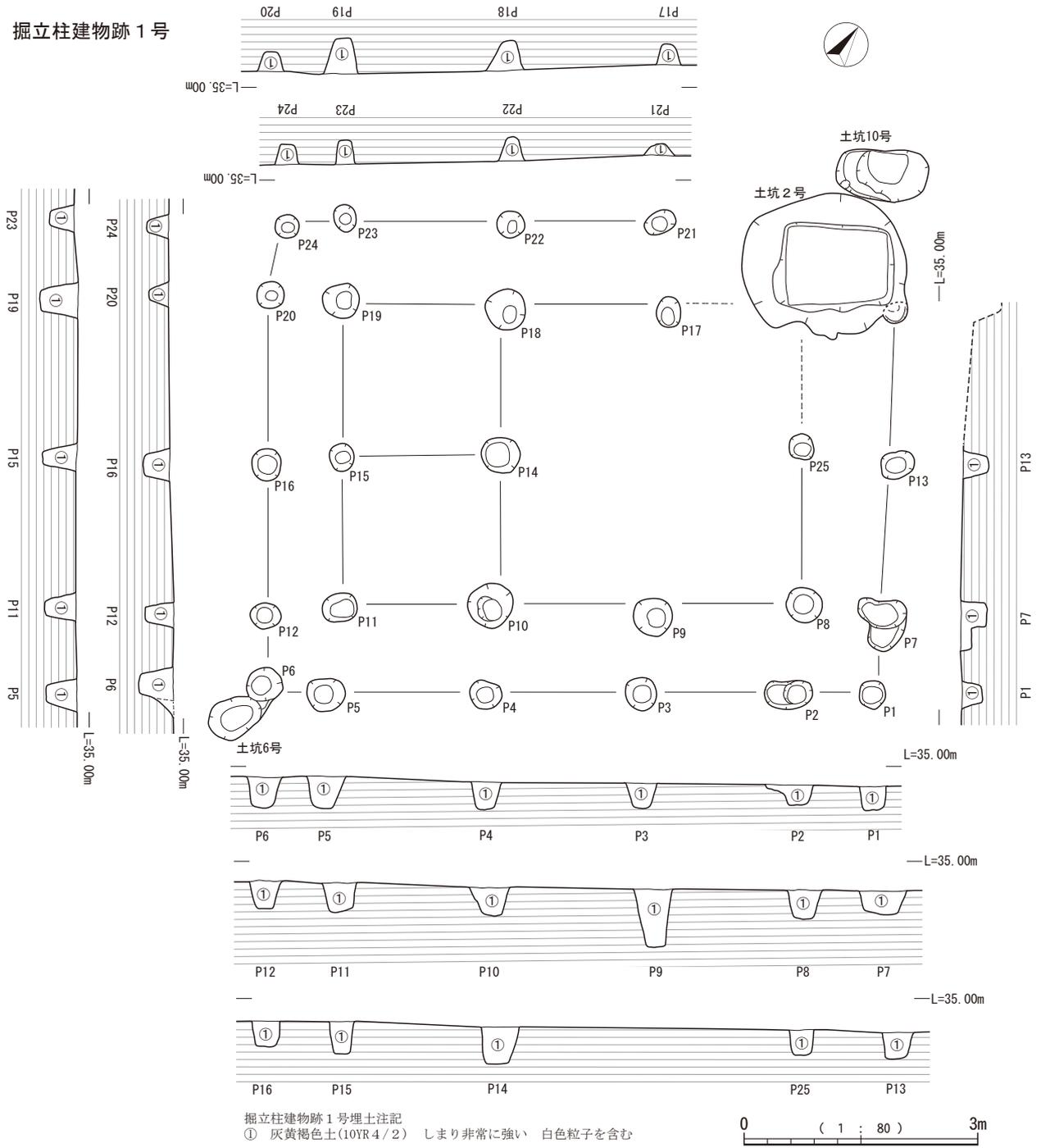


第65図 中世の遺構配置図 (43～66区)



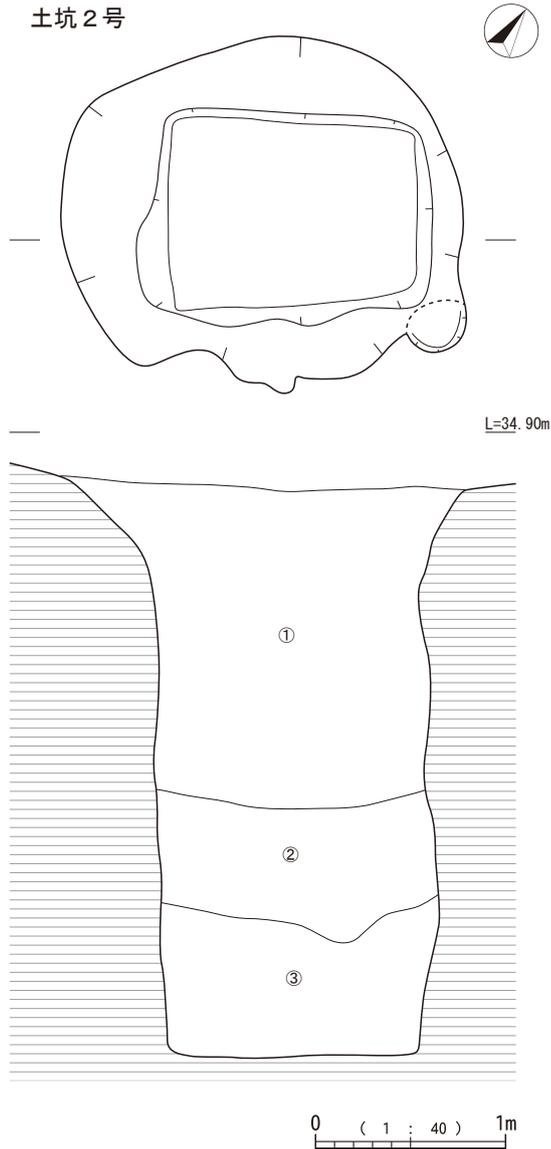
第66図 中世の遺構配置図 (66～78区)

掘立柱建物跡 1号



第67図 掘立柱建物跡 1号

土坑 2 号



土坑 2 号埋土注記

- ① 黒褐色土 しまりやや弱く粘性あり 白・赤色粒子、炭化物を10%含む
- ② 灰黄褐色土 しまり弱く粘性あり 黄→灰→①→黄→灰の順で水平堆積する
- ③ 灰色土 黄→灰→白→灰と水平堆積が見られたり、マーブル状に堆積する

第68図 土坑 2 号

3 遺構

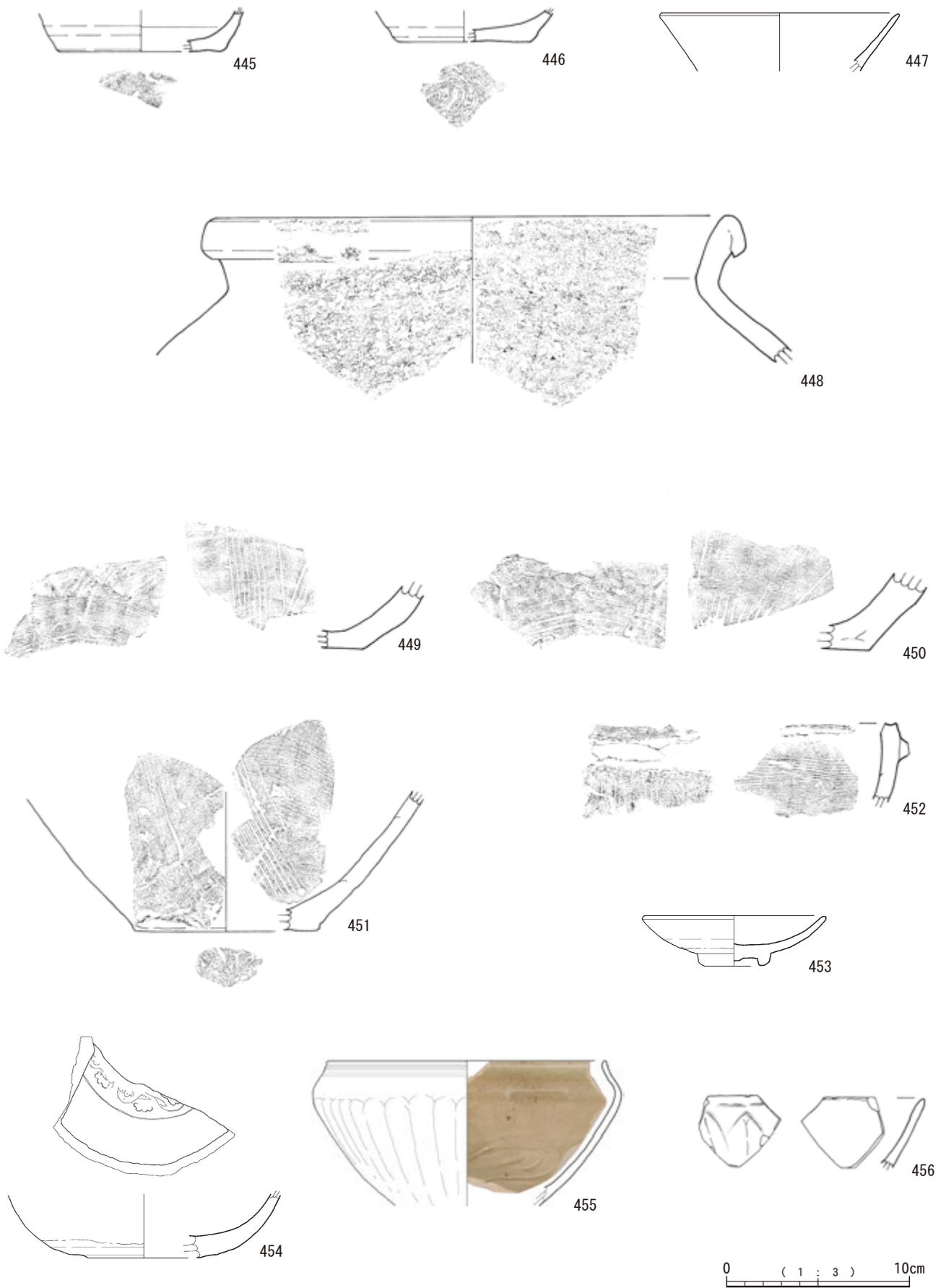
遺構の年代は、出土遺物から判断して、13～16世紀が中心となっている。溝状遺構の一部（溝状遺構 1・4号）は、現代まで道として利用されているものもあったが、構築された時代が中世であるため本節で報告する。また、鍛冶・製鉄に関連すると考えられる D～F-43～52区の炉跡等は、中世末から近世にわたり連続して使用されていたことが想定されたため、「第6節 製鉄関連遺構」で報告する。本節では種類別に遺構の報告を

行い、時期別の変遷については総括に記載する。

(1) 掘立柱建物跡

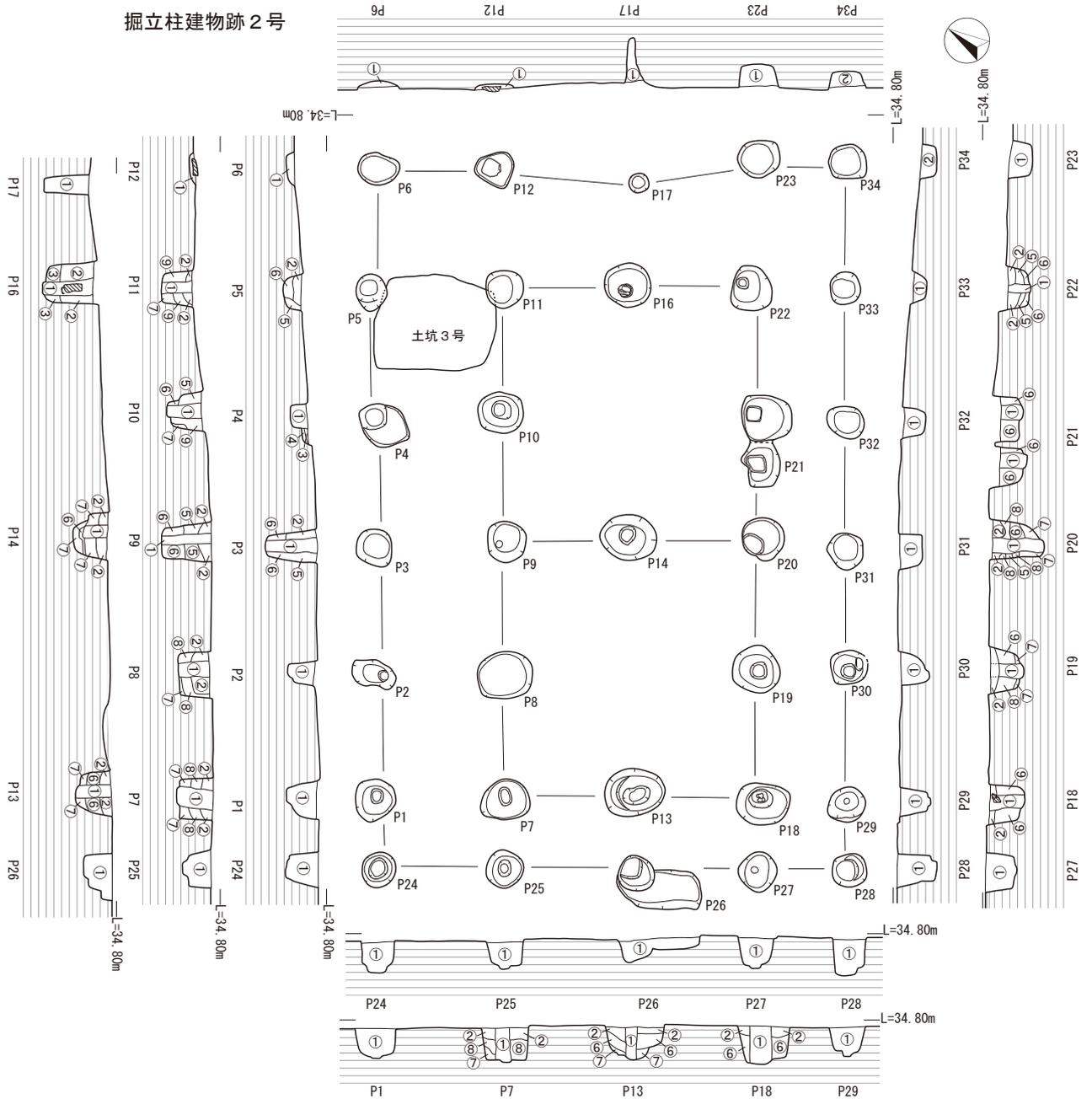
掘立柱建物跡は4つのエリアで検出した。1・2号は F G-44～47区、3・4号は G H-56区、5～9号は E F-60～67区、10～13号は D～F-69～74区に分布している。平面形は長方形か正方形を基本とするが、不規則な並びをしたものもある。検出状況から、方位や周囲の大型の溝状遺構を意識した配置で建てられたことがうかがえる。

掘立柱建物跡 1・2号の北側にはそれぞれ大型の土坑を検出している。いずれも建物跡に関連すると考え、掘立柱建物跡と土坑を併記している。



第69図 中世遺構内の遺物①

掘立柱建物跡 2号

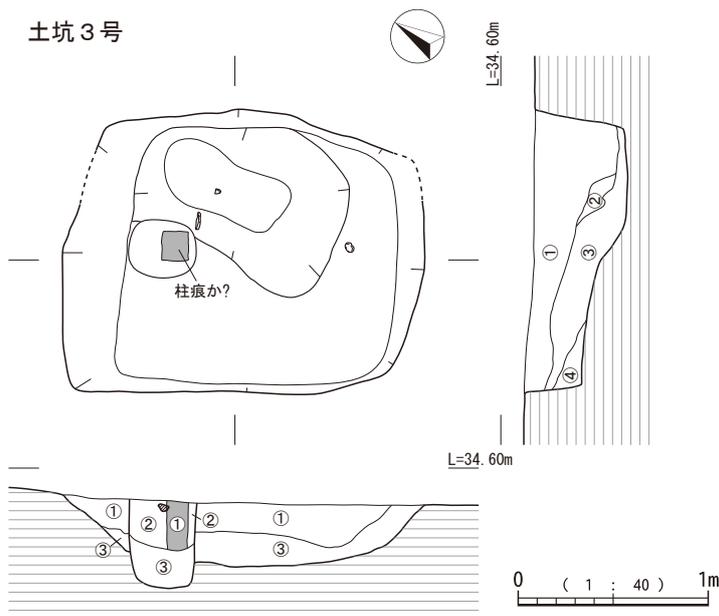


掘立柱建物跡 2号埋土注記

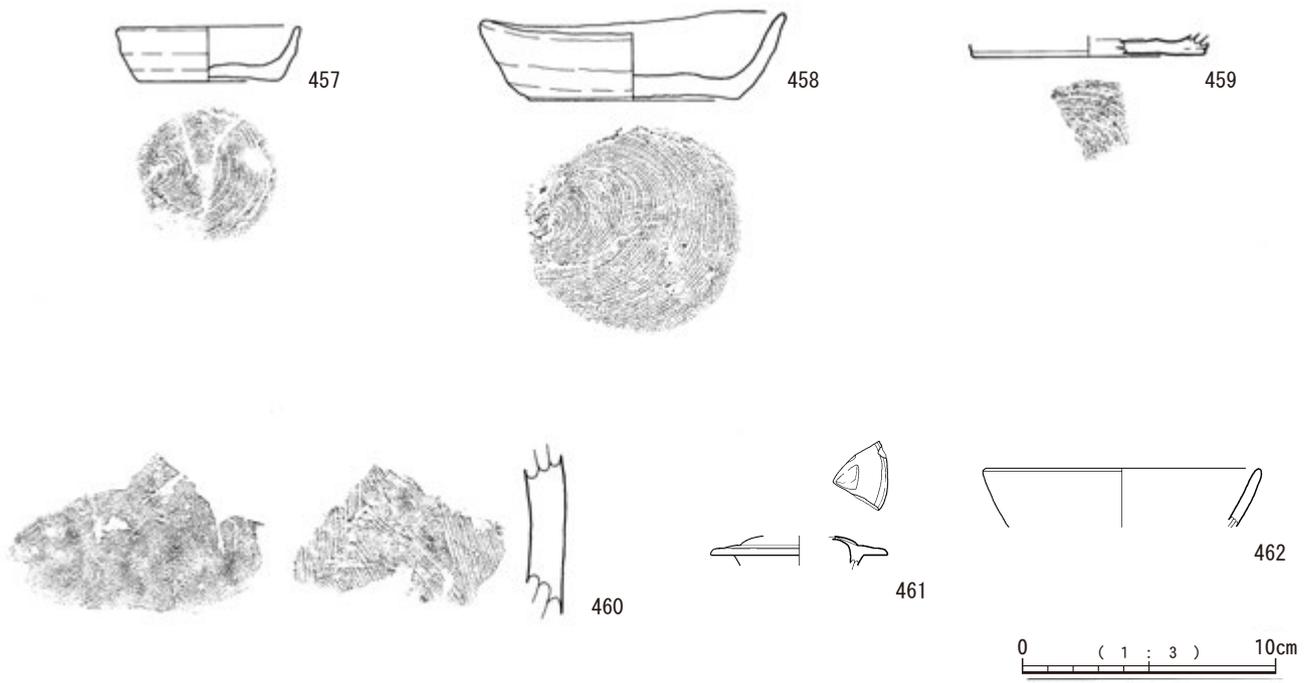
- ① 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまり強く粘性無し II b層由来の土 白・赤色粒子, 炭化物を各10%含む
- ② 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまり非常に強く粘性弱い シラスブロック(2~10cm)40%含む
- ③ 黒色粘質土(10YR 2/1) 粘性あり IV層土が混在している
- ④ にぶい黄褐色粘質土(10YR 6/3) 粘性あり シラス由来の土 帯状に重なる
- ⑤ 灰黄褐色粘質土(10YR 4/2) 粘性あり シラスブロック20%含む
- ⑥ 黒色土(10YR 2/1) ④のブロックを60%以上含む
- ⑦ 灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) しまり弱い シラスブロック 5%含む
- ⑧ ④・⑤の土が帯状に重なる
- ⑨ ③・④の土が混じる

0 (1 : 100) 2m

第70図 掘立柱建物跡 2号

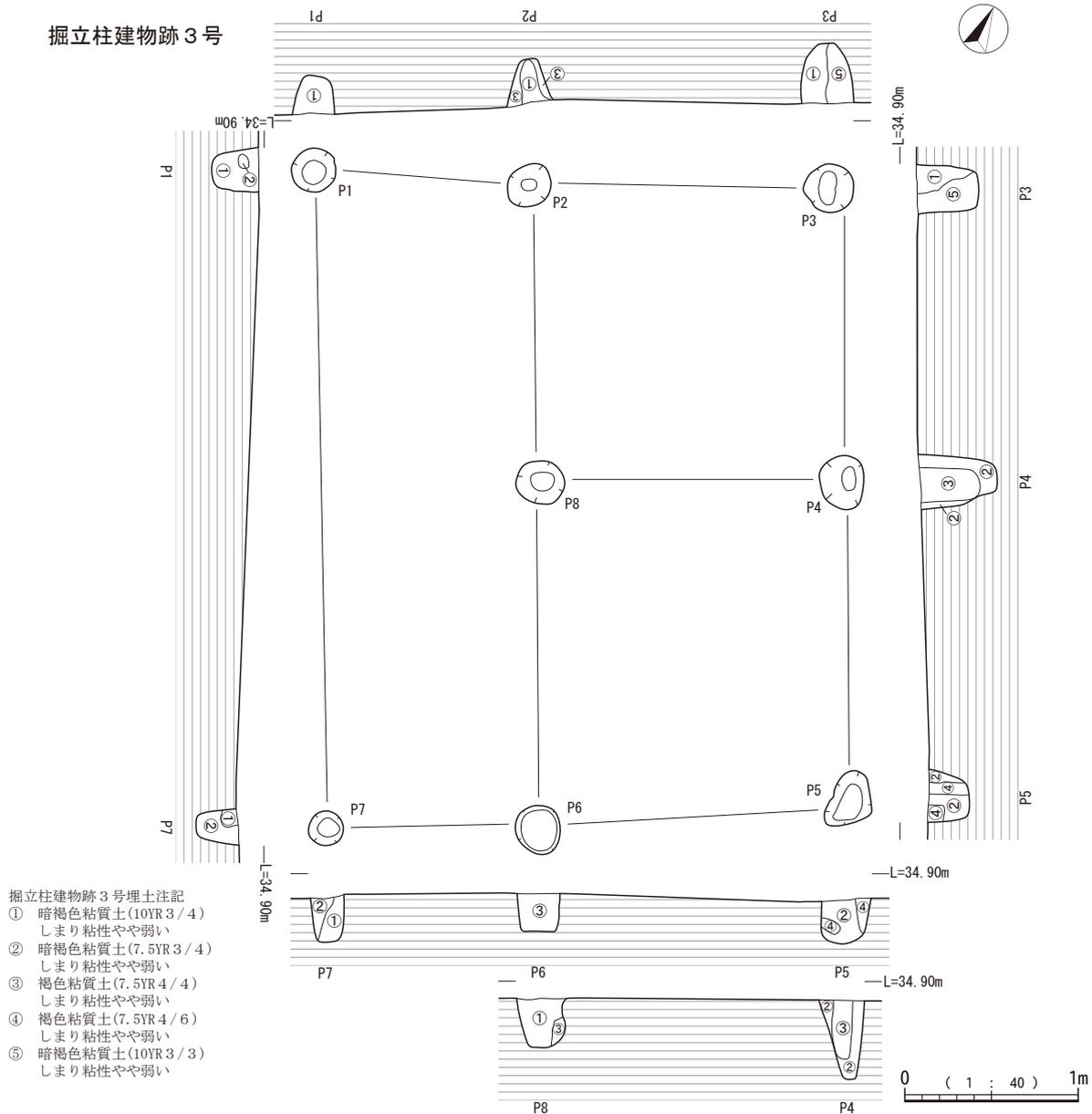


- 土坑3号埋土注記
- ① 黒褐色土(10YR 3/2)
 - ② 黒褐色土(10YR 3/2) 黄褐色ブロック土含むが灰茶が強い
 - ③ にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
 - ④ 灰黄褐色土(10YR 4/2) 粘質が強い



第71図 土坑3号・中世遺構内の遺物②

掘立柱建物跡 3号



第72図 掘立柱建物跡 3号

ア 掘立柱建物跡 1号 (第67図)・土坑 2号 (第68図)

F・G-44・45区のⅢ層上面で検出した。東角の柱穴から2m隣に掘立柱建物跡2号を検出しており、①柱穴の大きさや深さ埋土の状況などの構造が似ている②長軸方向が一致する③遺物も同時期のものが出土していることから2棟の建物は、同時期に建てられていたと考えられる。

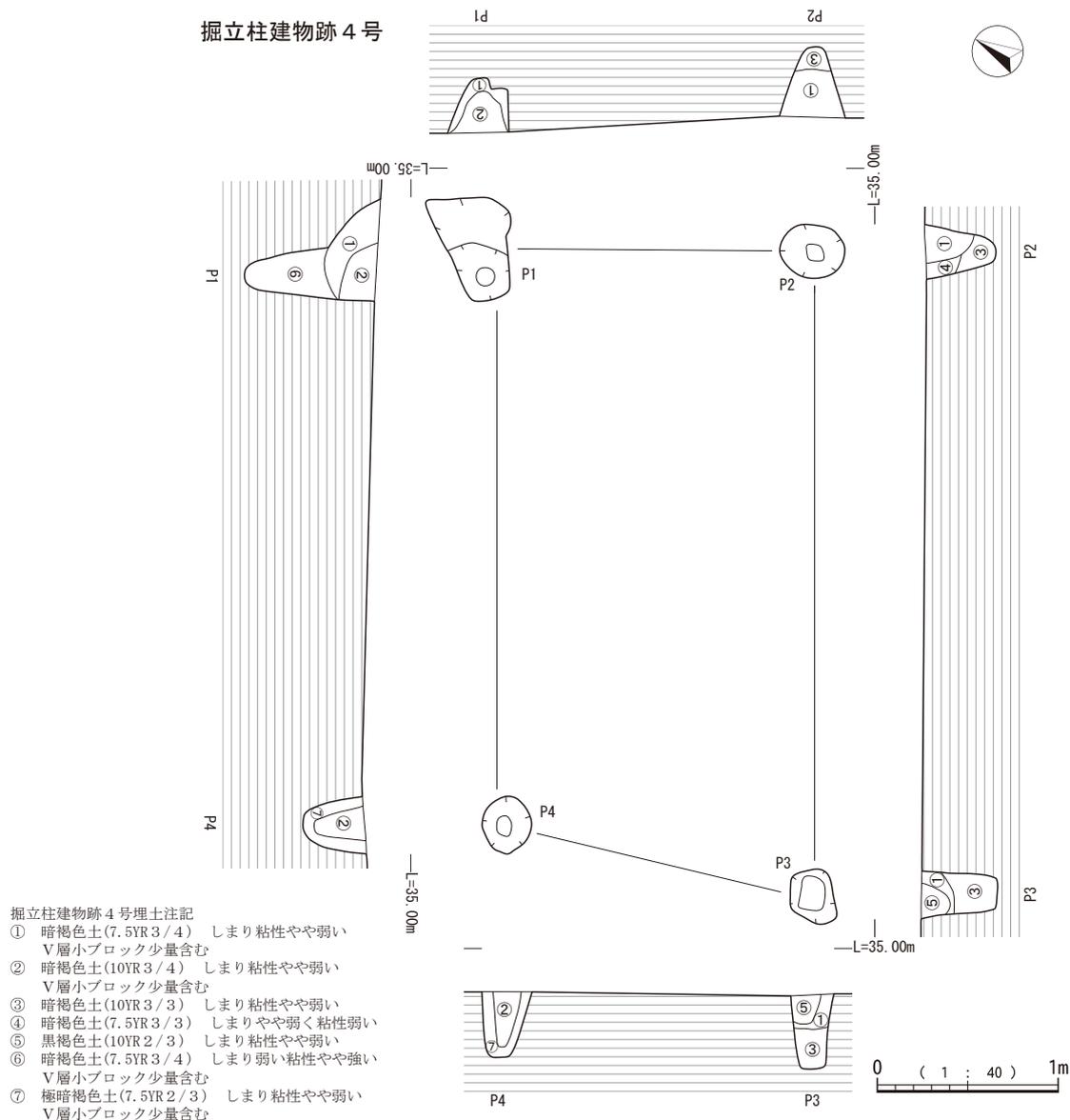
梁行2間×桁行3間の長方形を呈する10本柱の入側柱建物である。また、長方形平面の外側に1間の廂が伸びる四面廂の掘立柱建物跡である。梁行の長さは3.9m、

桁行の長さ5.9mで、総面積約23㎡である。主軸は磁北から東に60°傾いている。

身舎の柱間寸法の平均は梁行1.97m、桁行が2.02mである。柱穴の直径は、身舎、廂ともに0.3～0.5mである。深さは、0.16～0.6mとばらつきがある。P2・6・7は、断面の形状から抜取穴の可能性はある。

また、建物跡の北東側に検出した大型の土坑2号は、検出状況や遺物の出土状況から、掘立柱建物跡1号に付随する土坑と判断した。土坑2号は、長軸2.1×短軸1.9mで、深さは3mと深く掘り込まれている。検出面では円形のプランであったが、底面は方形になる。埋土は概

掘立柱建物跡 4号



第73図 掘立柱建物跡 4号

ね3層に分かれるが、②と③は、徐々に埋められたようにマール状の土層堆積が見られた。用途は不明である。

出土遺物 (第69図 445 ~ 456)

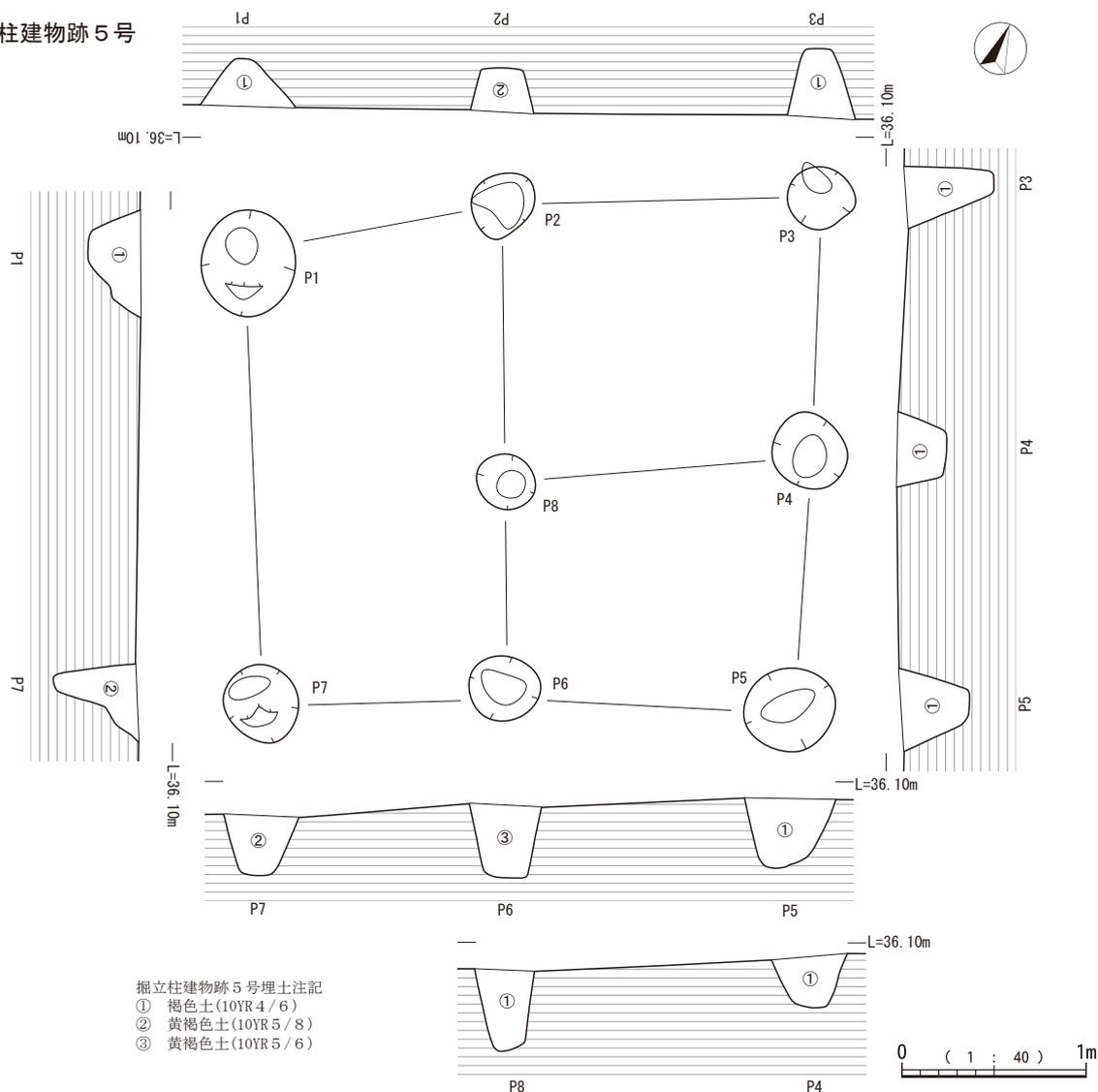
柱穴や土坑から、土師器229点、瓦質土器13点、須恵器15点、国産陶器2点、白磁2点、青磁4点、土器82点、その他3点が出土した。そのうち、土師器3点、瓦質土器5点、白磁2点、青磁2点を図化した。

445・446は、土師器の坏と推測される。445は風化のため底部の糸切り痕は不明瞭である。446は底部には糸切り痕が残る。447は土師器坏の口縁部である。内外面の一部は、黒色化しているが、焼成時のものか使用によ

るものかは明らかでない。形態から古代の可能性はある。

448 ~ 452は、瓦質土器である。448は壺で、口縁部下端が突出している。風化が著しく、調整は不明である。449は播鉢である。内面には10条一単位の播目が施される。外面は、体部と底部の境に横方向のヘラケズリを施す。450は播鉢である。内面は使用により摩耗しており、8条一単位の播目が残る。451は播鉢である。内面は斜位のハケ目が施されたのちに播目を施す。播目は残存部分からみて、一単位が9条以上とみられる。外面には、指オサエ痕が残る。452は羽釜である。外面は鏝の直下から縦方向のハケ目を施す。

掘立柱建物跡 5号



第74図 掘立柱建物跡 5号

453は白磁皿である。内湾気味に口縁部が開く低平な器形である。歴博分類白磁皿B群，森田分類のD類に該当する。15世紀前半である。454は白磁碗である。口縁部と高台は欠損する。厚手で，外面の下半部は無釉である。見込みは平坦で，大きな印花文が押捺される。これらの特徴から，ピロースタイプⅢ類と考えられる。14世紀後半～15世紀前半である。455は青磁の束口碗である。内面には，片切彫りによる劃花文が施される。外面の肩部以下は，細めの蓮弁が施される。器形は，龍泉窯系にもみられるものであるが，胎土・釉の発色などは同安窯（甫田窯）系のものに類似する。類例が確認できないため，今後検討が必要である。456は青磁碗である。外面には，鎬蓮弁文が施される。歴博分類の龍泉窯青磁

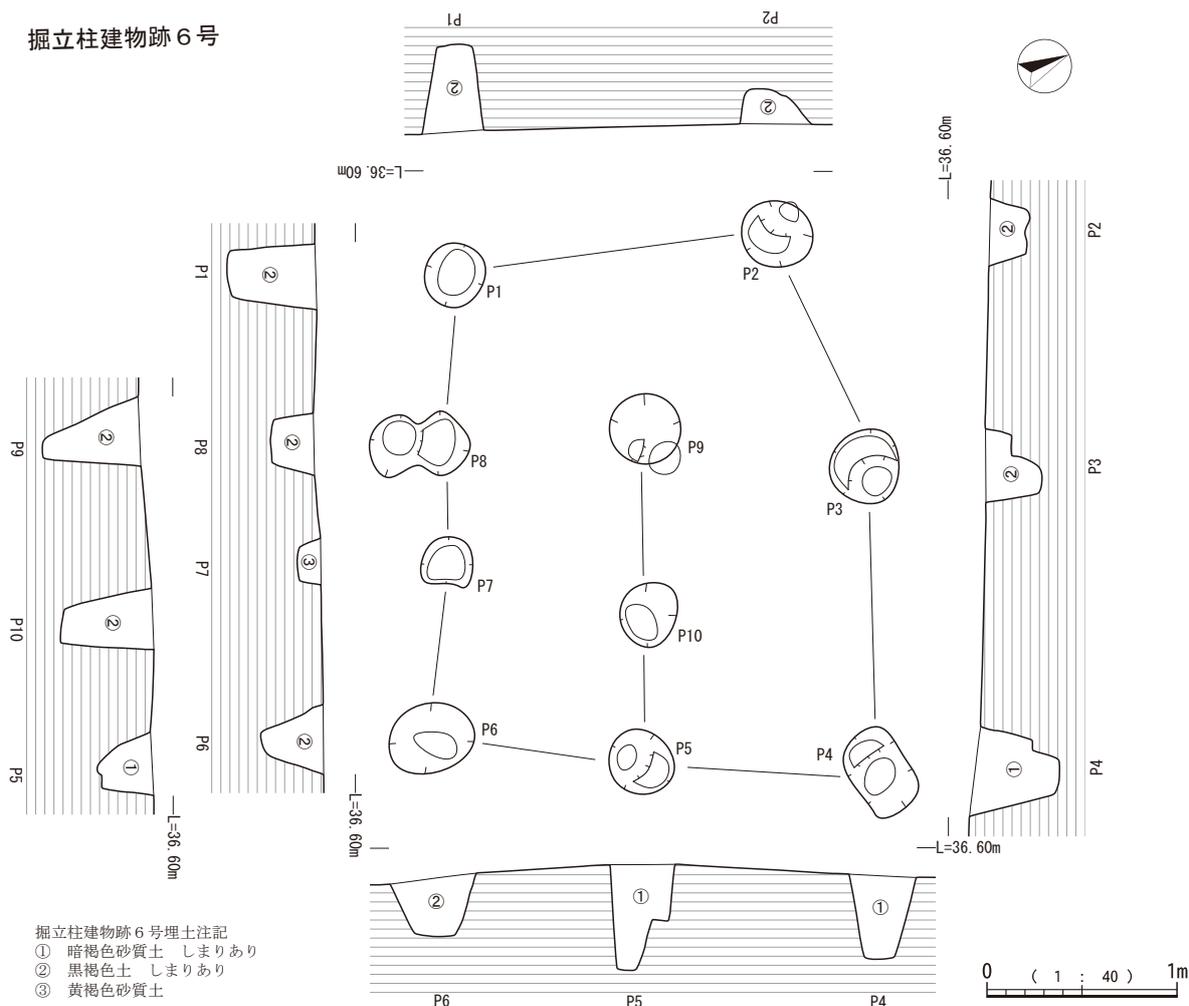
碗B1類，大宰府分類龍泉窯青磁碗Ⅱ類に該当する。13世紀中葉～14世紀前半である。

イ 掘立柱建物跡 2号（第70図）・土坑 3号（第71図）

G-45・46区のⅢ層上面で検出した。本建物跡は，梁行2間×桁行4間の長方形を呈する13本柱の入側柱建物である。また，長方形平面の外側に廂が一間延びる四面廂のついた掘立柱建物跡である。梁行の長さは3.9m，桁行の長さ8mで，総面積約32㎡である。主軸は磁北から東に55°傾いている。

身舎の柱間寸法の平均は梁行1.94m，桁行が2.02mである。柱穴の直径は，身舎が0.6～0.8m，廂が0.3～0.6mで，身舎の柱穴が一回り大きい。深さは，0.1～0.8mとばらつきがある。柱痕跡は身舎で複数確認されている。

掘立柱建物跡 6号



第75図 掘立柱建物跡 6号

また、断面の状況から柱があったことを想定させる柱穴もある。P26は柱抜取穴の可能性がある。P21は、柱の配置状況から北西側が先に作られ北東側は建て替えか補強による追加が行われたことが想定される。

また、掘立柱建物跡 1号と同様北側に大型の土坑 3号を検出した。検出状況や遺物の出土状況から、掘立柱建物跡 2号に付随する土坑と判断した。土坑 3号は、長軸1.9×短軸1.5m、深さ0.3～0.5mの掘り込みをもつ土坑である。山ノ脇遺跡（日置市伊集院町郡）でも掘立柱建物跡内に同規模の土坑を検出している例がある。土坑内に

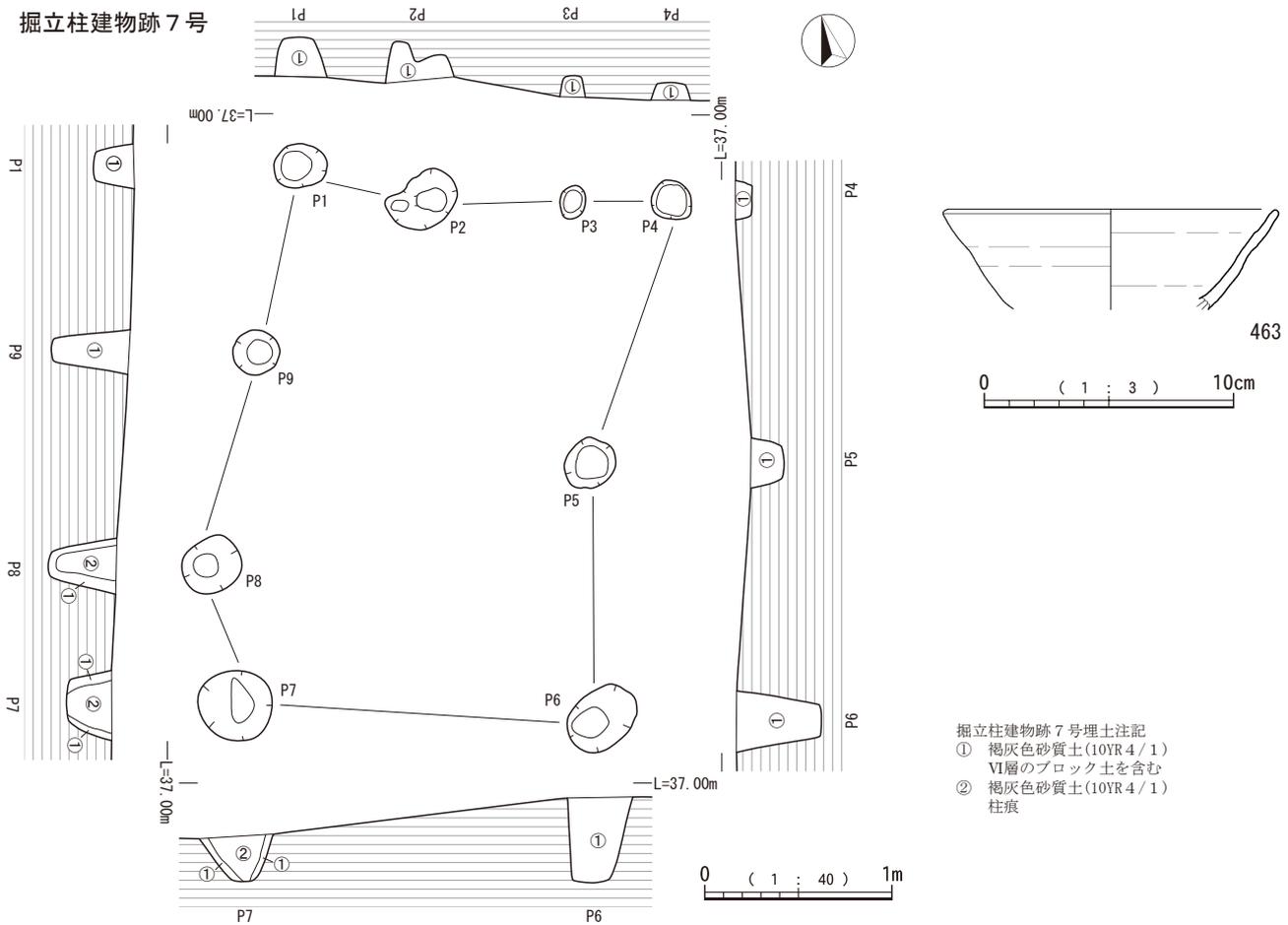
柱穴があるなど類似点が多い。

出土遺物（第71図 457～462）

柱穴や土坑から、土師器186点、瓦質土器 1点、須恵器14点、白磁 1点、青磁 2点、土器53点が出土した。そのうち、土師器 3点、瓦質土器 1点、白磁 1点、青磁 1点を図化した。

457は土師器の坏である。口縁部は若干内湾するもので、わずかに上げ底である。底部には糸切り痕が残る。458は完形の土師器坏である。上面形はやや楕円形であり、口縁部もゆがみが顕著な粗雑なつくりである。底部外面には、糸切り痕が残る。箱形の器形を呈することから、中世後半期のものと考えられ、14世紀後半から15世紀中頃に類例がある。459は土師器の皿である。やや風

掘立柱建物跡 7号



第76図 掘立柱建物跡 7号・中世遺構内の遺物③

化している。底部には糸切り痕が残る。

460は瓦質土器の甕もしくは鉢と考えられる。内面には斜位のハケ目と指頭圧痕が、外面には丁寧なナデが施される。

461は青白磁の小壺の蓋である。内面は露胎で、上面に菊花状の文様を有する。12～13世紀頃と推察される。

462は無文の龍泉窯系青磁碗の口縁部である。小破片であるため、時期判断は困難であるが、15世紀頃の可能性がある。

ウ 掘立柱建物跡 3号 (第72図)

G-56区のⅢ層上面で検出した。梁行1間×桁行2間の長方形を呈する6本柱の側柱建物である。また、長方形平面の南西側に一間の廂が延びる掘立柱建物跡である。梁行の長さは1.8m、桁行の長さ3.7mで、総面積約6.66㎡である。主軸は磁北から西に35°傾いている。

身舎の柱間寸法の平均は梁行1.76m、桁行が1.83mである。柱穴の直径は、身舎が0.25～0.3m、廂が0.2～0.25

mでほぼ同じであった。深さは、0.2～0.45mとばらつきがある。柱痕跡は身舎で5か所、廂で1か所確認されている。掘立柱建物跡1・2号と比べて1/3～1/2の規模であることから、用途に違いがあると考えられる。

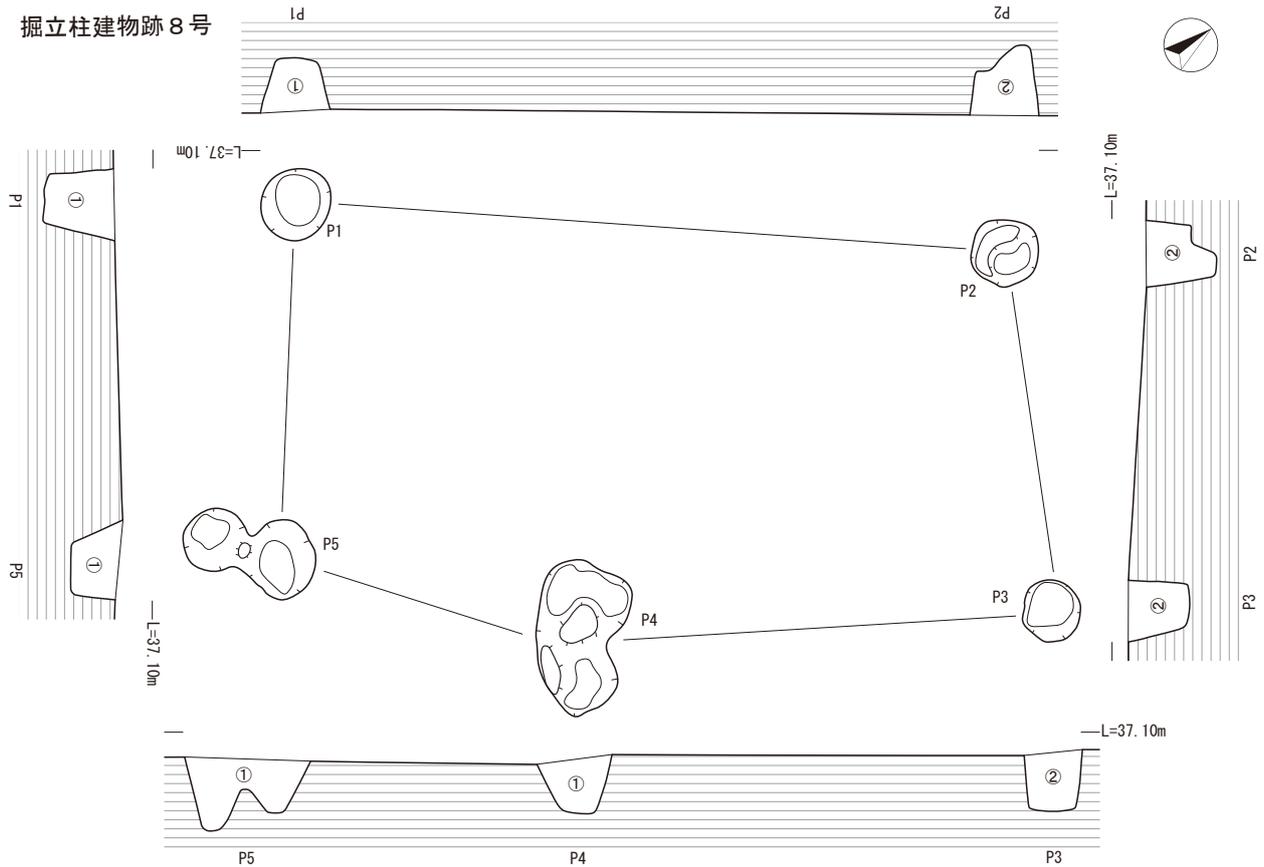
柱穴から、土師器1点、滑石破片1点が出土したが、小片のため図化には至らなかった。

エ 掘立柱建物跡 4号 (第73図)

G・H-56区のⅢ層上面で検出した。梁行1間×桁行1間の台形を呈する4本柱の側柱建物である。梁行の長さは1.75～1.82m、桁行の長さ3.08～3.56mで、総面積約5.81㎡である。主軸は、磁北から東に60°傾いている。

柱間寸法の平均は梁行1.78m、桁行が3.32mである。柱穴の直径は、0.26～0.3mであった。深さは、0.34～0.72mとばらつきがある。柱痕跡は1か所確認されている。掘立柱建物跡3号に隣接しており、同時期もしくは関連する建物と考えられる。土坑24号が規模が小さいことから柱痕の1つと考えると「L」字形の建物となるが、柱

掘立柱建物跡 8号



掘立柱建物跡 8号埋土注記

- ① 褐色粘質土(10YR 4/6) しまり強く粘性ややあり
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ② 暗褐色粘質土(7.5YR 3/3) しまり強く粘性強い
II b層由来の土 白・赤色粒子, シラスを各10%含む

第77図 掘立柱建物跡 8号

痕として積極的に断定できる根拠に乏しいため、別遺構として掲載した。

柱穴から、摩滅した土器1点が出土したが、図化には至らなかった。

オ 掘立柱建物跡 5号 (第74図)

F-60区のVI層上面で検出した。梁行2間×桁行2間の長方形を呈する8本柱の側柱建物である。西側は中心の柱がなく梁行が1間になる。掘立柱建物跡3号ほど梁行の間隔に差がないことから、廂ではないと判断した。梁行の長さは2.8m、桁行の長さは3.1mで、総面積約8.68㎡である。主軸は磁北から東に70°傾いている。

柱間寸法の平均は西側を除いた梁行1.36m、桁行が1.51mである。柱穴の直径は、0.32～0.5mであった。深さは、0.2～0.5mとばらつきがある。溝状遺構3号と溝状遺構4号に挟まれた調査区の2棟のうち西側に位置する1棟である。周辺で柱穴を複数検出しているが、掘立柱建物跡に認定できるものは確認できなかった。柱穴か

ら遺物は出土しなかった。

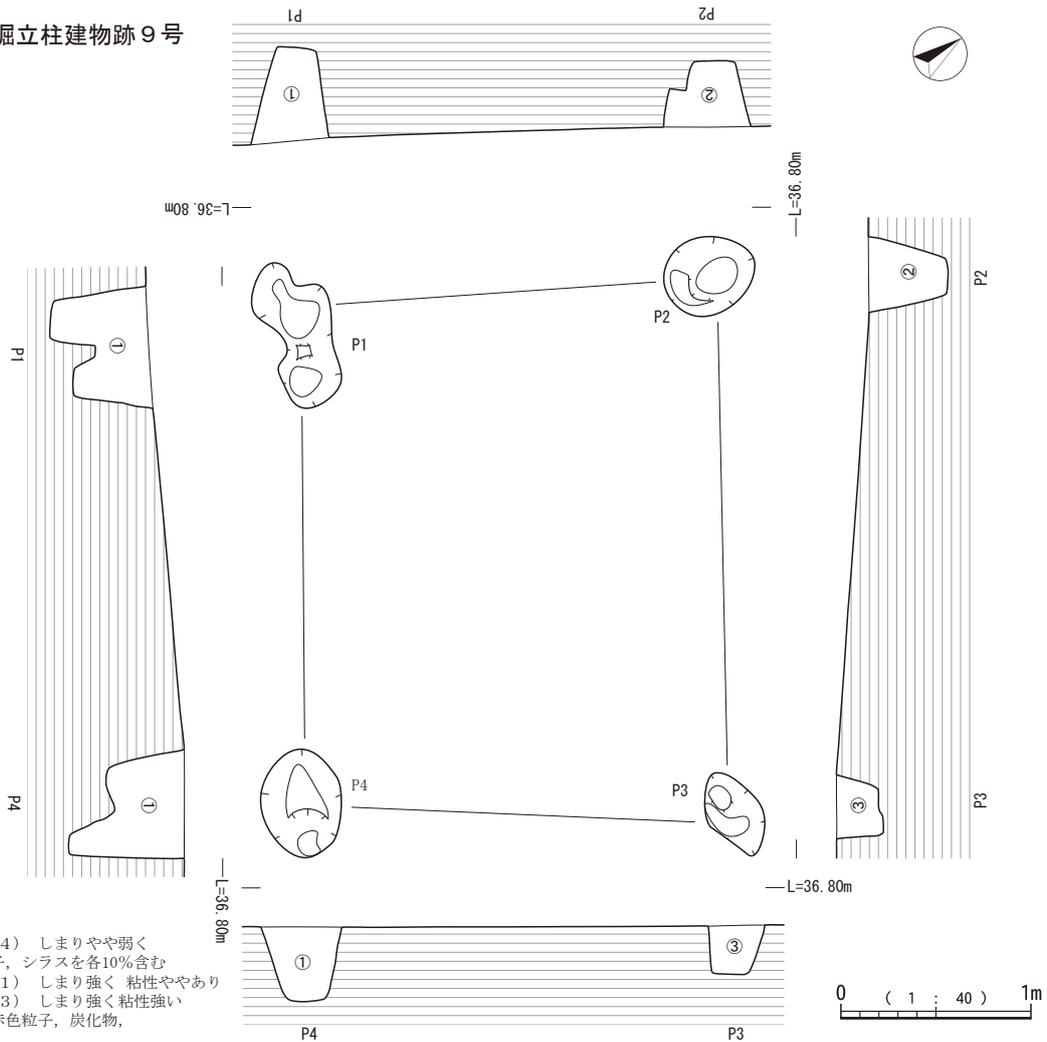
カ 掘立柱建物跡 6号 (第75図)

F-62・63区のVI層上面で検出した。梁行2間×桁行2間の長方形を呈する8本柱の側柱建物である。北東側は中心の柱がなく梁行が1間になる。構造は掘立柱建物跡5号と同じである。梁行の長さは1.6m、桁行の長さ2.4mで、総面積約3.84㎡である。主軸は磁北から東に30°傾いている。

柱間寸法の平均は東側を除いた梁行0.85m、桁行が1.18mである。柱穴の直径は、0.25～0.45mであった。深さは、0.1～0.5mとばらつきがある。

溝状遺構3号と溝状遺構4号に挟まれた調査区の2棟のうち東側に位置する。また、掘立柱建物跡5・6号は、溝状遺構がある方向に面した部分の真ん中の側柱が確認できなかった。溝状遺構の時期も同時期であることから、関連する可能性がある。柱穴から、土師器10点が出土し

掘立柱建物跡 9号



第78図 掘立柱建物跡 9号

ているが、小片のため図化には至らなかった。

キ 掘立柱建物跡 7号 (第76図)

F-65区のVI層上面で検出した。梁行1間ないし3間、桁行2間ないし3間の変則的な柱の数で長方形を呈する9本柱の側柱建物である。梁行の長さは、1.97m、桁行の長さ2.9mで、総面積約5.71㎡である。主軸は磁北から東に20°傾いている。

柱穴の直径は0.15～0.38mで、深さは0.12～0.45mとばらつきがある。柱痕跡は2か所で確認している。

変則的な構造であるが、埋土の状態と形状から掘立柱建物跡と判断した。

出土遺物 (第76図 463)

柱穴から土師器1点が出土し、図化した。

463は壺もしくは坏である。内外面回転ヨコナデを施す。古代の可能性がある。

ク 掘立柱建物跡 8号 (第77図)

F-66区のVI層上面で検出した。本建物跡は、梁行1間、桁行1間ないし2間の変則的な柱の数で長方形を呈する5本柱の側柱建物である。梁行の長さは1.9m、桁行の長さ3.7mで、総面積約7㎡である。主軸は磁北から東に45°傾いている。

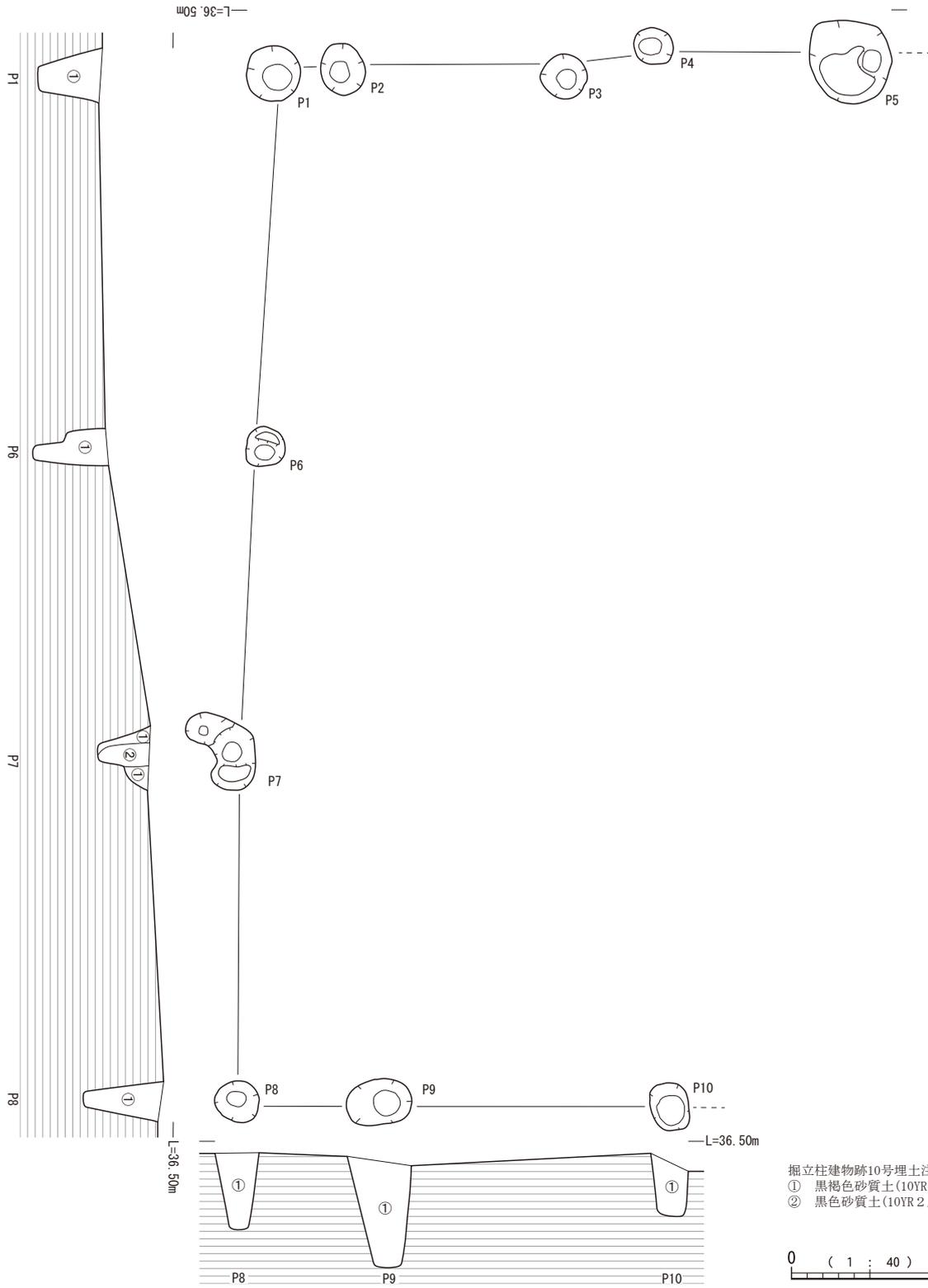
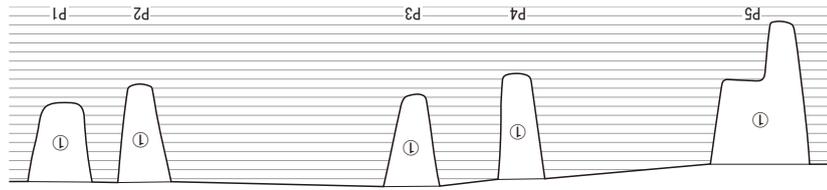
柱穴の直径は、0.3～0.4mで、深さは、0.3～0.4mである。P4と5は、建て替えか補強による追加が想定される。

掘立柱建物跡7号の構造と似ており、埋土の状態と形状で掘立柱建物跡と判断した。柱穴から土師器1点が出土したが、図化には至らなかった。

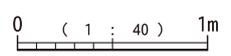
ケ 掘立柱建物跡 9号 (第78図)

E・F-67区のVI層上面で検出した。梁行1間×桁行1間の長方形を呈する4本柱の側柱建物である。梁行の長さは2.2m、桁行の長さ2.8mで、総面積約6.16㎡である。主軸は磁北から西に55°傾いている。

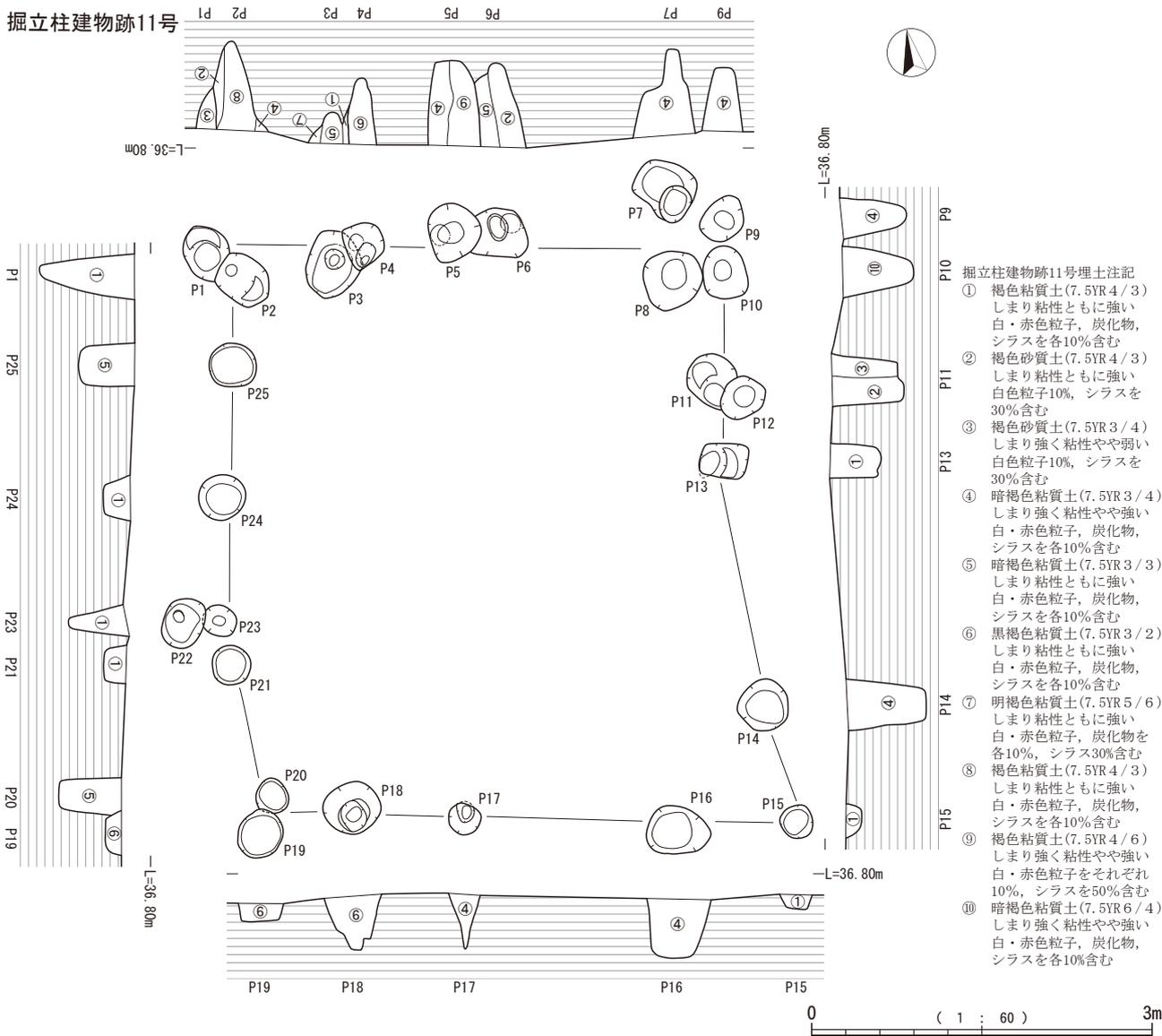
掘立柱建物跡10号



掘立柱建物跡10号埋土注記
 ① 黒褐色砂質土(10YR 3/1)
 ② 黒色砂質土(10YR 2/1) 柱痕



第79図 掘立柱建物跡10号



第80図 掘立柱建物跡11号

柱間寸法の平均は梁行2.22m, 桁行が2.82mである。柱穴の直径は, 0.35 ~ 0.4mで, 深さは, 0.25 ~ 0.6mとばらつきがある。P 1 と 4 は, 建て替えか補強による追加が想定される。

溝状遺構 6号と溝状遺構 7号の合流地点にあり, 2つの溝状遺構に関連する掘立柱建物跡の可能性が有る。柱穴から遺物は出土しなかった。

コ 掘立柱建物跡10号 (第79図)

D・E - 69・70区のVI層上面で検出した。建物東側が削平を受けているため正確な構造は不明であるが, 梁行3間×桁行3間の長方形を呈する側柱建物と推測される。主軸は磁北とほぼ同じである。

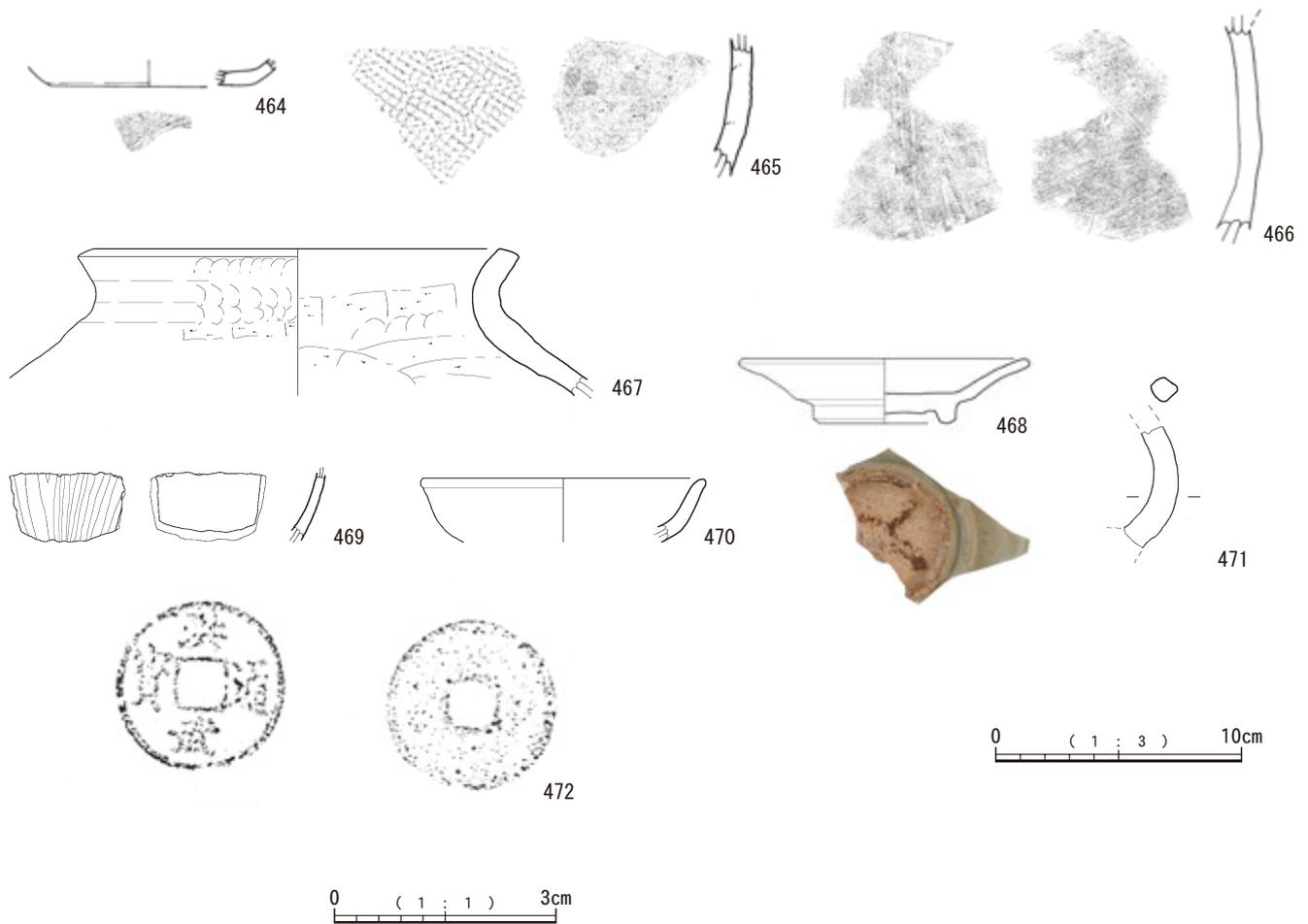
柱間は不規則である。柱穴の直径は, 0.25 ~ 0.55mで

あった。東側に面する部分は, 柱穴が無い。簡易な作りであったと考えられる。

サ 掘立柱建物跡11号 (第80図)

D ~ I - 69 ~ 76区の調査は令和3年度に行われ, この調査地点から多くのピットを検出したが, 調査時には掘立柱建物跡を認定することができなかった。整理作業を行う中で, 埋土や遺構内外の出土遺物, 柱痕の有無, 遺構配置状況等を総合的に判断して, 掘立柱建物跡11・12号の図上復元を行った。

E・F - 73・74区VI層上面で検出した。本建物跡は, 梁行3間ないし4間, 桁行4間で長方形を呈する側柱建物である。梁行の長さは4.5m, 桁行の長さ5mで, 総面積約22.5㎡である。主軸はほぼ磁北と同じである。



第81図 中世遺構内の遺物④

柱間寸法の平均は梁行1m、桁行が1.24mである。柱穴の直径は、0.26～0.5mで、深さは、0.16～0.8mとばらつきがある。P1～6と12は、柱痕が確認できた。また、P2・4・5・7～9・12・20・22・23は、建て替えか補強による追加が想定される。

出土遺物（第81図 464～472）

柱穴から土師器が1点、瓦質土器1点、中世須恵器2点、青磁4点、洪武通宝1点が出土した。そのうち、土師器1点、中世須恵器3点、青磁3点、洪武通宝1点を図化した。

464は土師器の坏と推察される。底部には糸切り痕が残る。内面は黒色化している。

465～467は中世須恵器である。465は甕の胴部で、外面は格子目タタキ、内面はハケ目及びナデを施す。胎土はマール状である。466・467は無文の甕である。466は内外面ナデ調整を施す。467は口縁部がナデ調整で、胴部の内外面にケズリを施す。

468は龍泉窯系青磁の稜花皿である。腰部で折れ、口

縁部が外反する。口縁部内面には2条の沈線が巡る。体部内面の文様は不明である。高台見込みには、にぶい黄褐色の粘土で「十」とみられるものが描かれている。漆などによる記号が想定されたが、蛍光X線分析を試み、有機物ではないことが判明している。16世紀中葉～後半である。

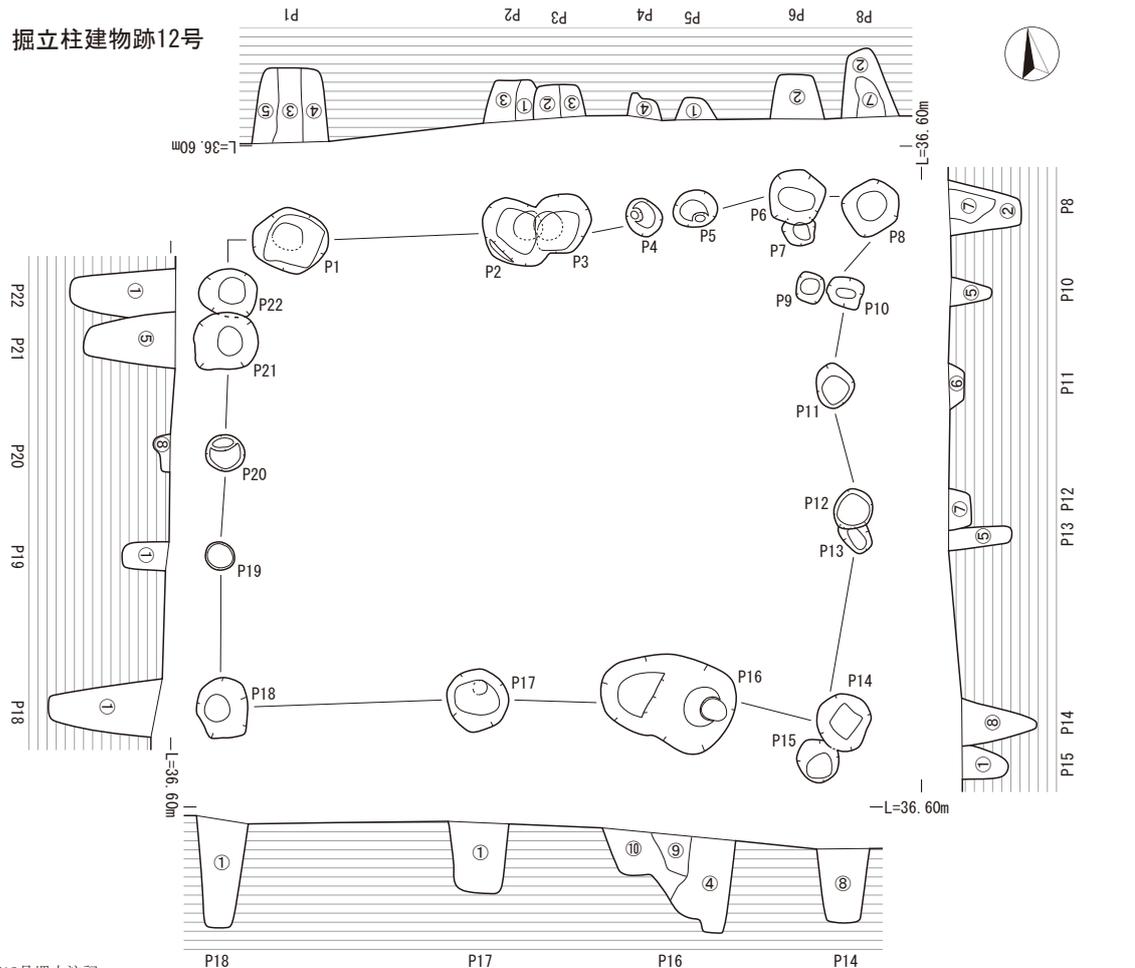
469は龍泉窯系青磁の碗である。蓮弁はヘラ先による線描きである。内面は無文となる。歴博分類青磁碗B4類、上田分類B-IV類に該当すると考えられる。15世紀後半～16世紀前半である。470は青磁の内湾皿である。胴部は丸く張り出す。歴博分類内湾皿に該当する。15世紀中葉である。471は青磁壺の双耳環と推察される。時期は15世紀である。

472は青銅製の錢貨で洪武通寶である。初鑄は明の洪武元（1368）年である。「通」の字に特徴があり、本資料は「マ頭通・単点通」とされるものに該当する。

シ 掘立柱建物跡12号（第82図）

F-73・74区のIV層上面で検出した。梁行3間×桁行

掘立柱建物跡12号



掘立柱建物跡12号埋土注記

- ① 褐色粘質土(7.5YR4/4) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ② 褐色砂質土(7.5YR3/4) しまり強く粘性あり 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ③ 暗褐色粘質土(7.5YR3/4) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ④ 褐色粘質土(7.5YR4/6) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑤ 明褐色粘質土(7.5YR5/6) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑥ 褐色粘質土(7.5YR4/3) しまり粘性ともにやや強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑦ 暗褐色粘質土(7.5YR3/3) しまり強く粘性あり 赤色粒子, 炭化物, シラスを含む
- ⑧ 黒褐色粘質土(7.5YR3/2) しまり粘性あり 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑨ 明褐色粘質土(7.5YR5/8) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑩ 明褐色粘質土(7.5YR5/8) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子, 炭化物を各10%, シラスを50%含む

第82図 掘立柱建物跡12号

3間の長方形を呈する側柱建物である。梁行の長さは3.3m, 桁行の長さ4.3mで, 総面積約14.2㎡である。主軸は, ほぼ東西になる。

柱間寸法の平均は梁行1.1m, 桁行が1.42mである。柱穴の直径は, 0.25～0.6mであった。深さは, 0.15～0.8mとばらつきがある。P1～3・8・16は, 柱痕が確認できた。また, P3・6・12・14・21は, 建て替えか補強による追加が想定される。掘立柱建物跡11・12号も複数の切り合いのあるピットが検出されている。周辺も切り合いのあるピットが多いことから, 建物を建てる場所として使われ続けた状況がうかがえる。

出土遺物(第83図 473～477)

柱穴から瓦質土器3点, 国産陶器1点, 白磁1点が出

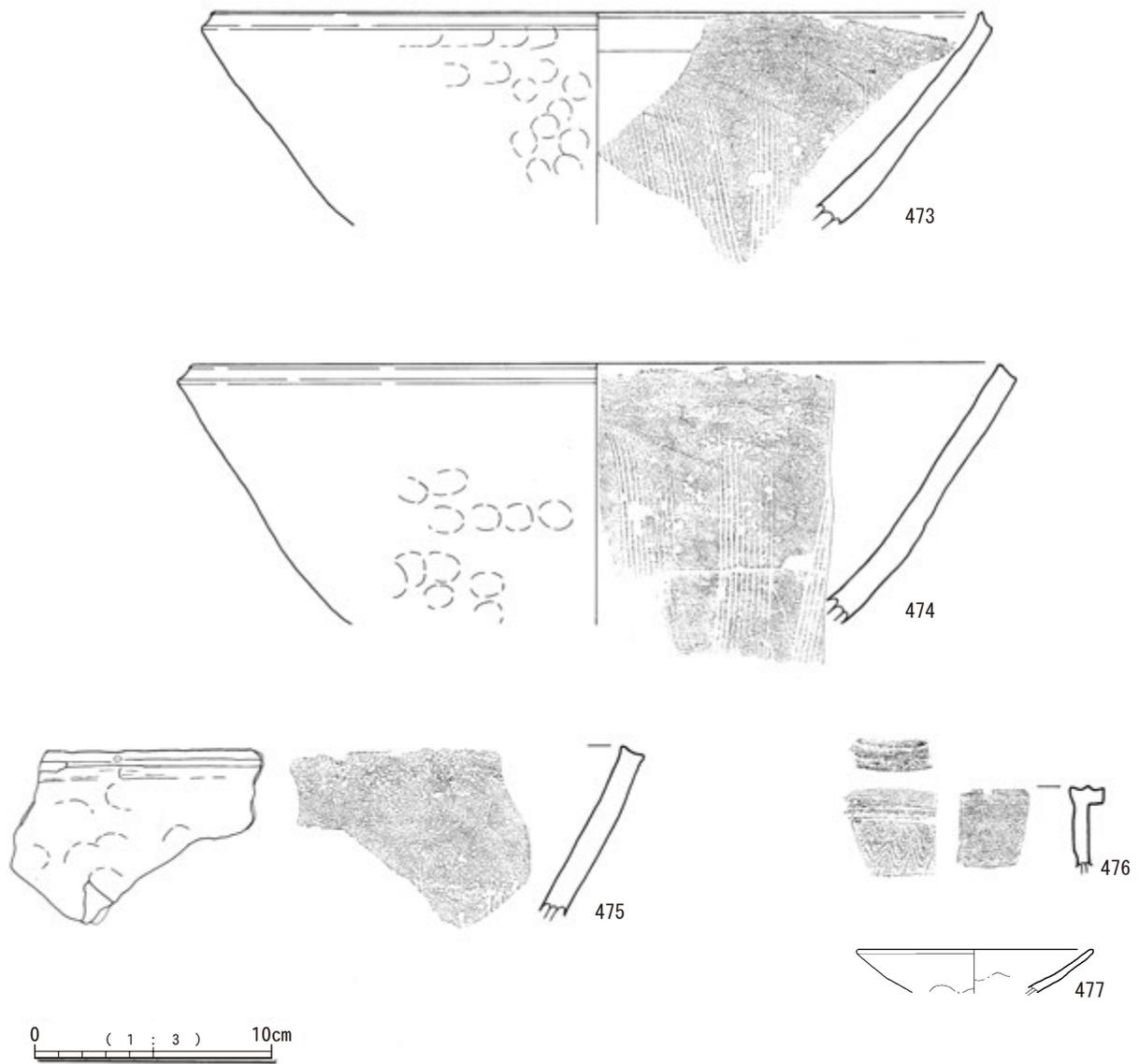
土し, そのすべてを図化した。

473～475は, 瓦質土器の播鉢である。これらは同一個体の可能性がある。口唇部は溝状となっている。外面はナデ, 内面は10条を一単位とする播目が施される。

476は肥前系陶器の香炉と考えられる。口縁部を「L」字屈曲させ, 上面には2条の溝を巡らせる。外面は鉄釉を掛けた後, 6条に東ねた櫛状のもので波状に掻き取っている。17世紀後半である。

477は白磁の皿である。若干内湾気味の口縁である。歴博分類白磁皿B群, 森田分類D群に該当する。15世紀前半である。

(2) 竪穴建物跡



第83図 中世遺構内の遺物⑤

竪穴建物跡 1号 (第84図)

E-66区のⅢ層上面で検出した。遺構の年代は、出土遺物から判断すると13世紀中葉～14世紀前半と考えられる。平面形は2.8m×2.8mの正方形で、深さは0.4～0.5m程度で軟弱な貼床がある。床面中央部に埋土に混ざって複数の焼土塊(焼土2)が貼床を切って積み重なっており、炉が壊された痕跡の可能性がある。また、北側床面にも薄く焼土(焼土1)が広がり、炉跡が2か所あった可能性がある。鍛冶関連の工房の可能性も考え、焼土跡付近で鍛造剥片を探したが見つからなかった。

埋土は5層に分層することができ、しまりが弱い②層が主となる。東西の土層断面から、西側から人為的に埋め戻されたと考えられる。

柱穴は東西に各3基、北側1基の合計7基で北側のも

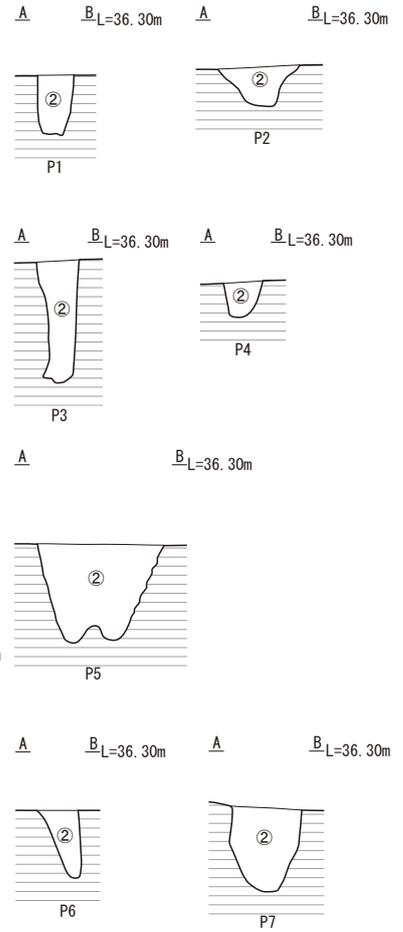
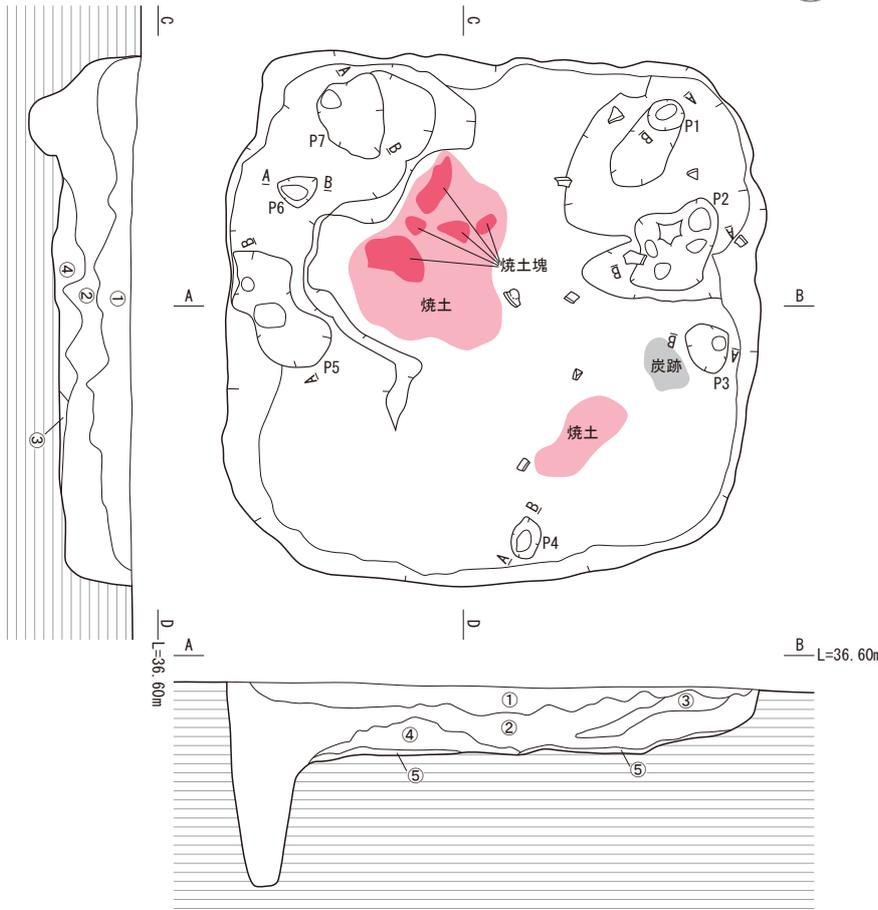
のはごく浅い。南側の柱穴周辺の床面が深くなっており、柱を抜く時に穴が広がってできた柱抜取穴の可能性が

ある。
竪穴建物跡については、「①一辺2～4mの方形を基調とする。②堆積土は人為的な埋め戻しである。③相伴遺物がない(少ない)。④床面が踏み締まっているものが少ない。⑤長期の使用が認められない。」(飯村均1994)という特徴があげられている。竪穴建物1号は①～④の項目についてあてはまり、13世紀以降に見られる中世における竪穴建物の条件を満たしているといえる。

出土遺物 (第84図 478～484)

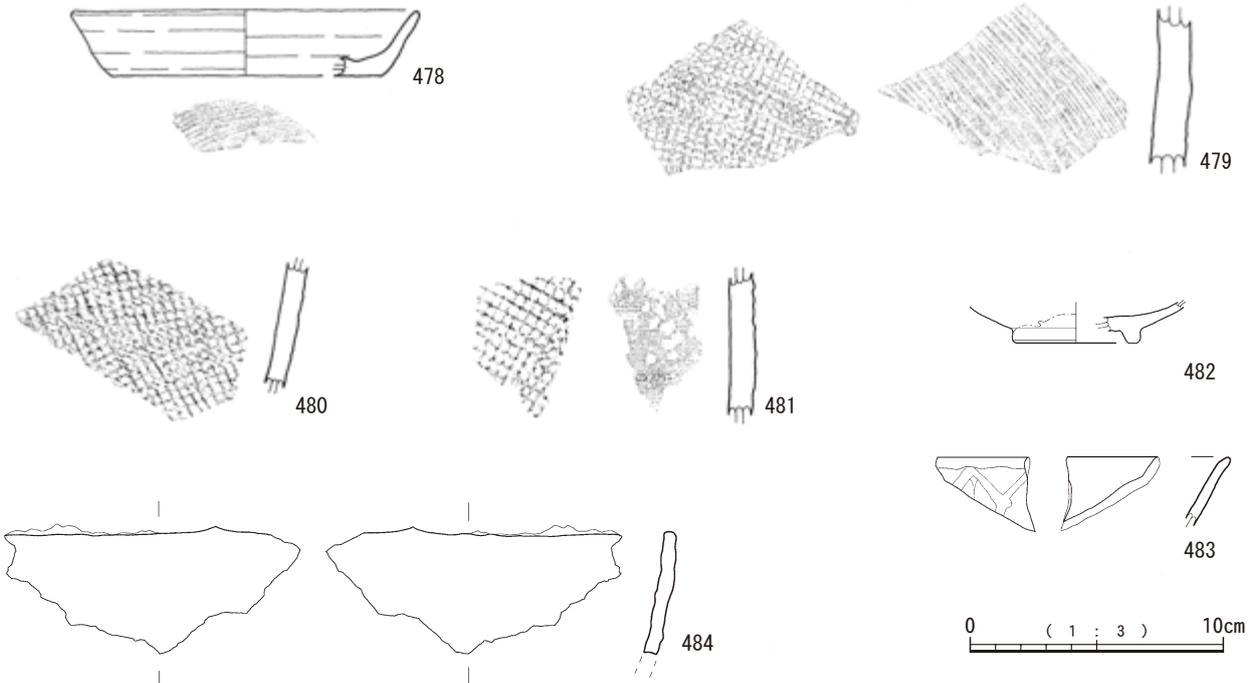
遺物は、土師器3点、須恵器3点、白磁1点、青磁1点、鉄器1点、土器片11点が出土した。そのうち、土師

竖穴建物跡 1号



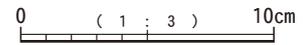
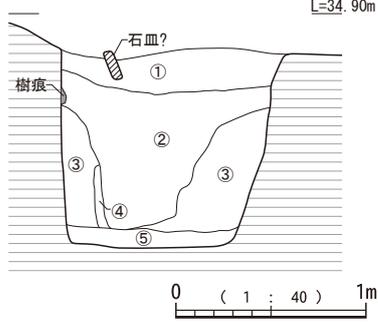
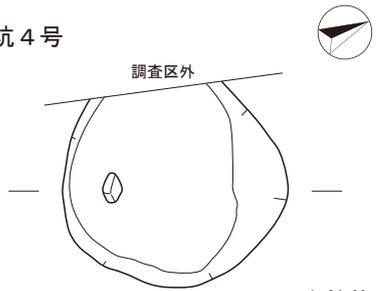
竖穴建物跡 1号埋土注記

- ① 灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) II b層由来の土 硬くしまっており礫片を含む
- ② 灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) しまり弱い IV層ブロック土が入る 炭化物, 焼土を含む
- ③ にぶい黄褐色砂質土(10YR 6/4) IV層由来の土 東側に堆積している
- ④ 灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) 焼土の塊を多く含む
- ⑤ 黒褐色砂質土(10YR 3/1) 柱穴はこの上面から掘られている はり床と考えられるがしまり弱い 炭化物を多く含む



第84図 竖穴建物跡 1号・中世遺構内の遺物⑥

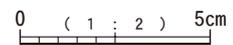
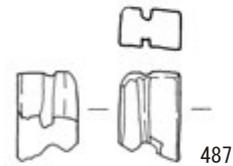
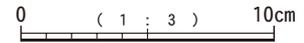
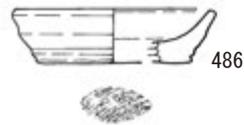
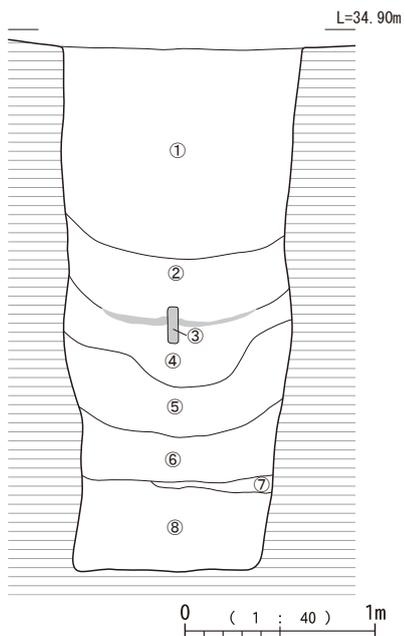
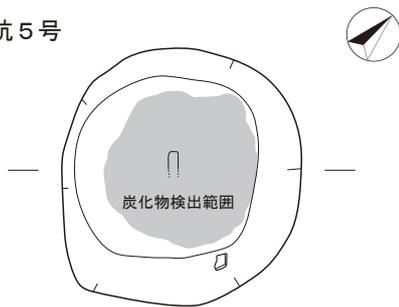
土坑4号



土坑4号埋土注記

- ① 茶褐色土(10YR 4/2) 小粒の炭化物を含む
- ② 茶褐色土(10YR 4/2) 5mm~2cmのシラスブロックを含む
- ③ 茶褐色土(10YR 4/3) 5cm程度のシラスブロックを含む ②よりやわらかい
- ④ 灰黄褐色土 シラスブロックを含む
- ⑤ 黄灰褐色土(2.5YR 4/1) わずかに粘質 ④より粘性がある

土坑5号

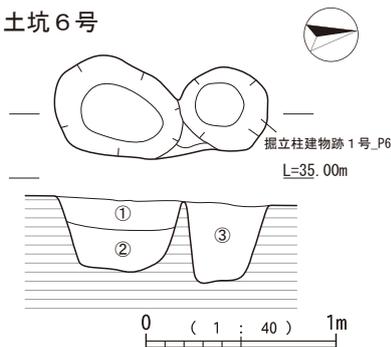


土坑5号埋土注記

- ① 黒褐色土
- ② 黒褐色(10YR 3/2) しまりやや弱い粘性あり
- ③ 黒色土 円形状に炭が残る
- ④ ②にシラスのブロックが入る
- ⑤ 灰黄褐色土 しまりが非常に弱い
- ⑥ 灰色土 粘性あり グライ化している
- ⑦ 黄色土 シラスが帯状に入る
- ⑧ ①・④・⑤・⑥が交互に水平堆積している

第85図 土坑4・5号・中世遺構内の遺物⑦

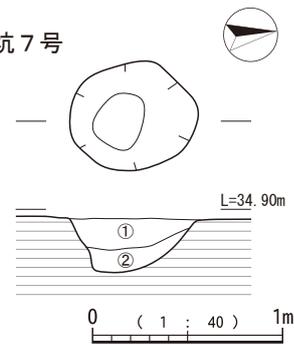
土坑6号



土坑6号埋土注記

- ① 灰黄褐色土(10YR 4/2) しまりやや強く粘性弱い
白色粒子を5%, 赤色粒子・炭化物をわずかに含む
- ② 黒褐色粘質土(10YR 3/2) しまりやや強く粘性やや弱い
黄色バミス・炭化物をわずかに含む
- ③ 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまりやや強く粘性無し
白色粒子5%含む

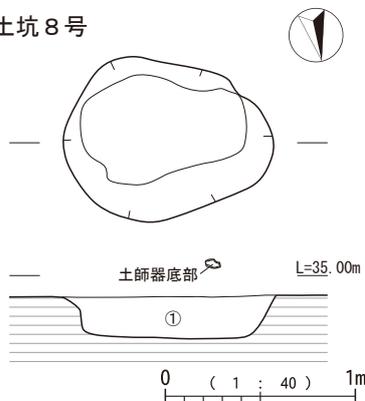
土坑7号



土坑7号埋土注記

- ① 灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) しまりやや強く粘性無し
白色粒子を15%, 炭化物をわずかに含む
- ② 黒褐色粘質土(10YR 3/2) しまりやや弱く粘性やや弱あり

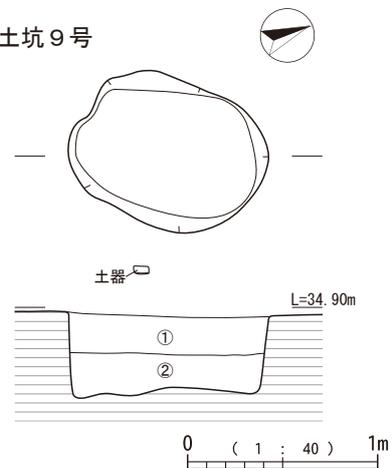
土坑8号



土坑8号埋土注記

- ① 暗褐色土(10YR 3/4) しまりあり粘性ややあり
白色粒子を10%, 赤色粒子をわずかに含む

土坑9号



土坑9号埋土注記

- ① 暗褐色土(10YR 3/4) II b層由来 しまりあり粘性は弱い
白・赤色粒子, 炭化物を含む
- ② 明褐色土(7.5YR 5/8) II b層由来 しまり粘性あり
白色粒子, 炭化物をわずかに含む III層土が混ざる

第86図 土坑6～9号

器1点, 須恵器3点, 白磁1点, 青磁1点, 金属製品1点を図化した。

478は土師器の坏である。底部から直行しながら開くものである。内外面は丁寧なナデ調整が施されている。底部と体部の境にはナデ調整が施される。底部には糸切り痕が残る。13世紀代のもと考えられる。

479～481は中世須恵器の甕である。内面は斜位のハケ目を施す。外面は格子目タタキが施される。胎土は白色土と灰色土のマーブル状となっており, 小石なども含まれる。480は外面が黒色化し, 胎土は灰色である。481は焼成が悪く、赤身を帯びる。

482は白磁碗の底部である。見込みには圈線が巡る。高台は比較的lowく, 断面方形となる。底部付近は無釉である。歴博分類白磁碗Ⅸ類, 大宰府分類白磁碗Ⅸ類に該当する。13世紀中頃～14世紀初頭である。

483は青磁碗の口縁部である。外面には鑄蓮弁文が施される。歴博分類の龍泉窯青磁碗B 1類, 大宰府分類龍泉窯系碗Ⅱ類(D期)に該当する。13世紀中葉～14世紀前半である。

484は鉄鍋の口縁部と考えられる。

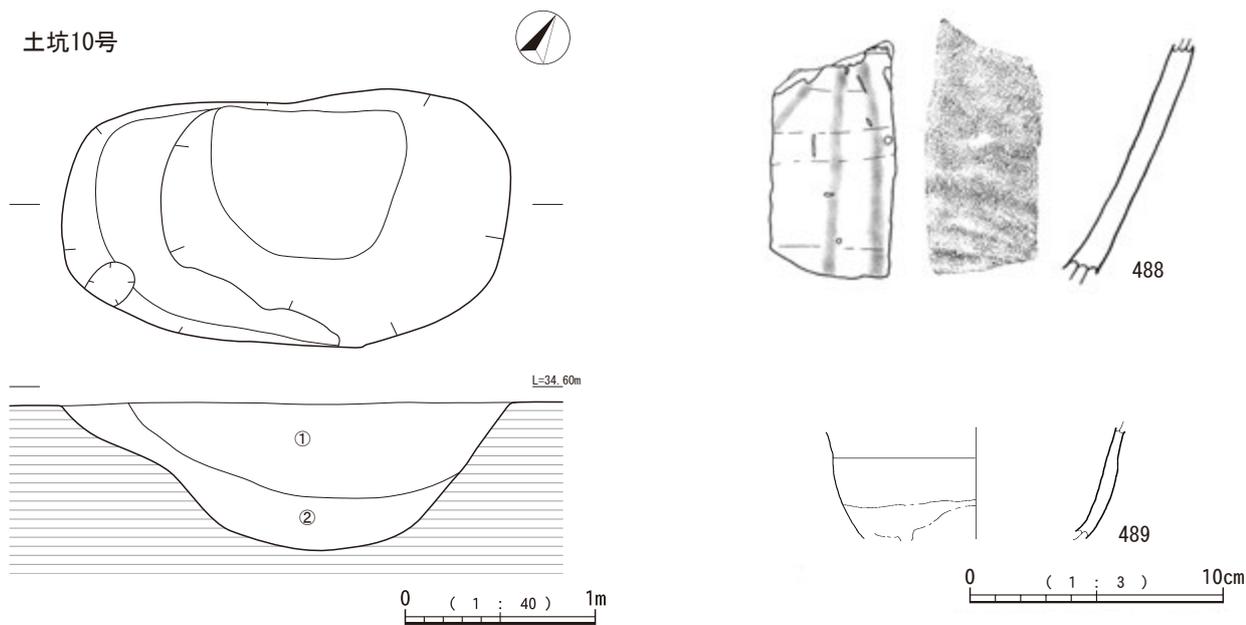
(3) 土坑

中世に該当する土坑は, 総数35基で, 特に44～48区および69～73区で多く検出した。なかでも大型の土坑は44～48区に集中している。

なお, 土坑2号・3号については, 掘立柱建物跡で報告している。

ア 土坑4号(第85図)

E・F-44区のⅢ層で検出した円形と考えられる土坑



土坑10号埋土注記

① 黒褐色砂質土 しまり強く粘性無し II b層由来の土

② 黒色粘砂質土(10YR 2/1) しまりやや強く粘性あり シラスブロックを10%、白・赤色粒子をわずかに含む

第87図 土坑10号・中世遺構内の遺物⑧

である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。短軸は調査区外で切られているが規模は1.2m×1.05mで、検出面からの深さは1.04mである。埋土の状況から徐々に埋まっていったと考えられる。

出土遺物 (第85図 485)

遺物は、土師器59点、須恵器2点、白磁1点、常滑1点が出土している。そのうち、白磁1点を図化した。

485は白磁の口禿碗と考えられる。口縁部がわずかに外反し、内面の釉薬は掻き取られている。歴博分類白磁碗Ⅸ類、大宰府分類の白磁碗Ⅸ類に該当する。13世紀中頃～14世紀初頭である。

イ 土坑5号 (第85図)

F-44区のⅢ層上面で検出した。円形の大型土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、1.36m×1.26mで、検出面からの深さは2.76mの深い土坑である。埋土の状況は下層は、水平堆積を呈しており、徐々に埋まっていった状況であった。形状や規模は、掘立柱建物跡1号内の土坑1号に類似する。

出土遺物 (第85図 486・487)

遺物は、土師器71点、須恵器3点、瓦質土器2点、青磁1点、滑石製品1点、土器片14点が出土している。そのうち、土師器1点、滑石製品1点を図化した。

486は土師器の小皿である。底部は厚く、底に糸切り痕を残す。487は滑石製品で長軸に太めの切り目をもつ

有溝石錘(沈子)と考えられる。

ウ 土坑6号 (第86図)

G-44区のⅢ層上面で検出した楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、0.71m×0.48mで、検出面からの深さは0.45mである。掘立柱建物跡1号を構成する柱穴に隣接しており、建て替えや補強用に使用された土坑の可能性もある。

遺物は、土師器1点が出土したが、図化には至らなかった。

エ 土坑7号 (第86図)

G-44区のⅢ層上面で検出した。円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、0.67m×0.58mで、検出面からの深さは0.29mである。用途は不明であるが、掘立柱建物跡1号に近いところで検出していることから関連する可能性がある。

遺物は、土師器2点、土器1点が出土したが、図化には至らなかった。

オ 土坑8号 (第86図)

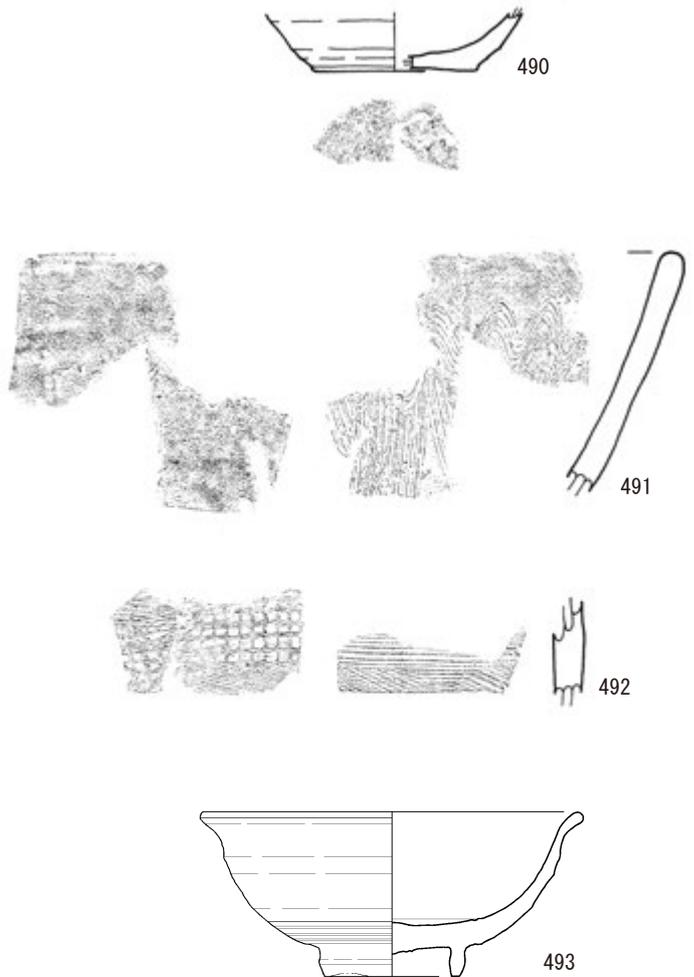
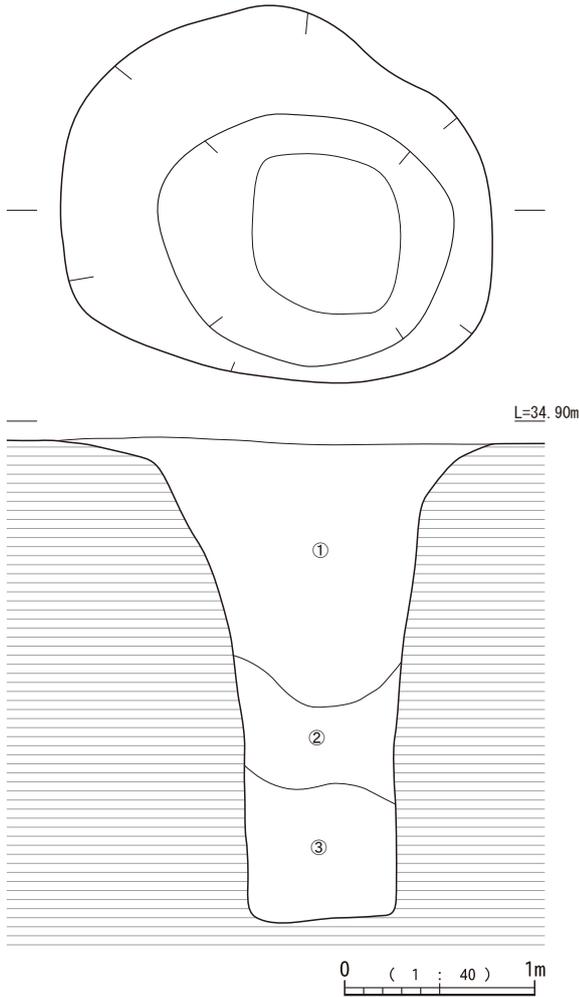
H-44区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、1.11m×0.83mで、検出面からの深さは、0.21mである。

遺物は、出土しなかった。

カ 土坑9号 (第86図)

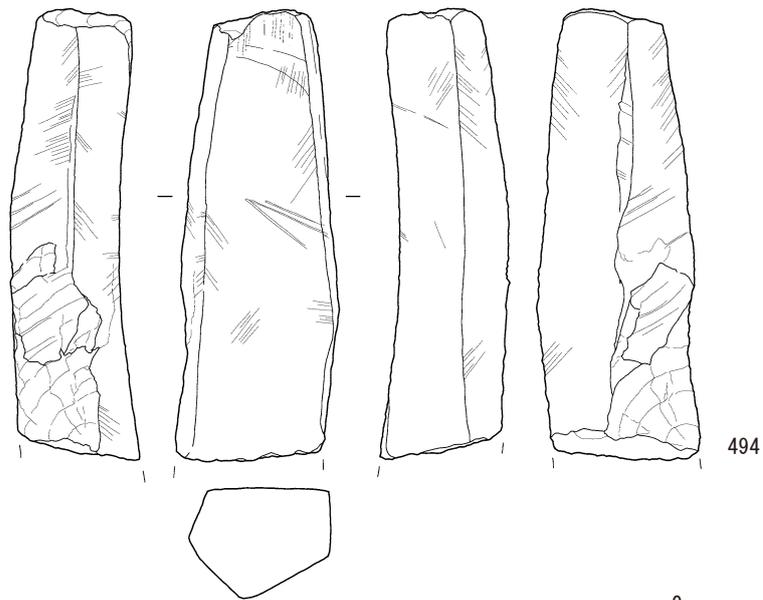
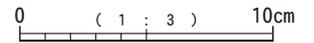
H-44・45区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土している遺物および埋土、周辺の状況から中

土坑11号

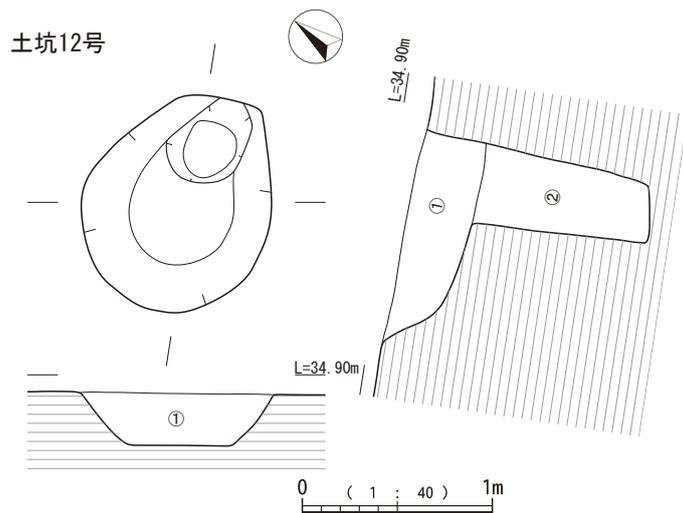


土坑11号埋土注記

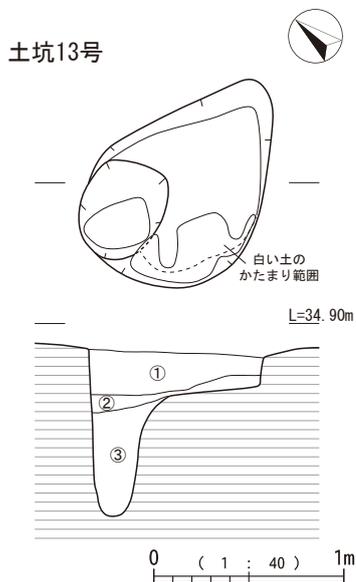
- ① 暗灰黄色土(2.5YR 4/2) しまりややあり粘性無し
- ② オリーブ褐色土(2.5YR 4/4) しまり粘性ややあり III層ブロック土をまばらに含む
- ③ 灰白土(2.5YR 7/1) しまり粘性なし



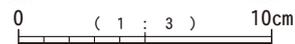
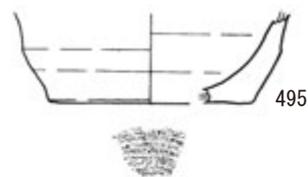
第88図 土坑11号・中世遺構内の遺物⑨



土坑12号埋土注記
 ① 褐色土(7.5YR4/4) しまりあり粘性弱い II b層由来の土 白色粒子, 炭化物をわずかに含む
 ② にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり粘性あり III層ブロック土混じる 白・赤色粒子をわずかに含む



土坑13号埋土注記
 ① 暗褐色土 II b層由来の土
 ② ①に灰のようなものがブロックで混じる
 ③ 褐色土(7.5YR4/6) しまり弱い粘性ややあり II b層由来の土にIII層ブロック30%を含む



第89図 土坑12・13号・中世遺構内の遺物⑩

世の土坑とした。規模は、1.06m×0.83mで、検出面からの深さは0.45mである。

遺物は、土師器14点、青花1点が出土しているが、図化には至らなかった。

キ 土坑10号 (第87図)

F-45区のⅢ層正面で検出した。楕円形の土坑である。出土している遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、2.35m×1.26mで、検出面からの深さは0.77mである。①掘立柱建物跡1号に隣接する②比較的規模が大きい③出土遺物も多いことから、掘立柱建

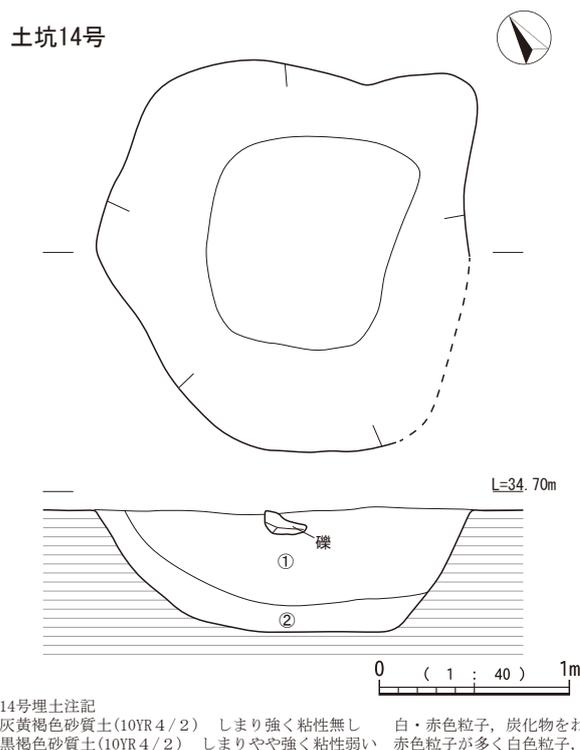
物跡1号に関連する遺構の可能性がある。

出土遺物 (第87図 488・489)

遺物は、土師器15点、須恵器3点、陶器1点、土器3点が出土している。そのうち、須恵器1点、国産陶器1点を図化した。

488は中世須恵器で、東播系の片口鉢と考えられる。外面上端には1条の横沈線が確認でき、その下位には3条の火摺が縦方向に入っている。

489は天目碗である。胴部は一旦すぼまり、そこから外反する口縁(籠口)となる。内面には、全面的に釉が



第90図 土坑14号

かかるが、外面は胴部下半が無釉である。胎土と形態から、瀬戸・美濃産の天目であると考えられる。

ク 土坑11号 (第88図)

H-45区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土している遺物および埋土、周辺状況から中世の土坑とした。規模は、2.26m×1.96mで、検出面からの深さは2.56mの深い土坑である。遺構の形状および埋土の堆積状況が、土坑2号・5号と類似しており同じような用途で使われたと考えられる。

出土遺物 (第88図 490～494)

遺物は、土師器32点、須恵器2点、瓦質土器2点、青磁2点、石器1点が出土した。そのうち、土師器1点、瓦質土器1点、中世須恵器1点、青磁1点、石器1点を図化した。

490は土師器の坏である。体部は丸みを帯びる。風化しているが、底部にはわずかに糸切り痕が確認される。491は瓦質土器の播鉢である。口縁部の内面近くには、6条一単位の波状の播目を施し、さらにその下に11条一単位の播目を施す。外面はナゲ調整で、指頭圧痕が残る。

492は中世須恵器の甕の胴部片である。内面にはハケ目、外面には格子目タタキが施される。493は龍泉窯系の端反青磁碗である。口縁部が比較的シャープなつくりで釉が薄く透明感がある。外面にはロクロ痕が明瞭に残る。また、高台の内外面は無釉である。歴博分類の龍泉

窯青磁碗D 1類、上田分類D-1類に該当する。14世紀後半～15世紀前半である。

494は流紋岩製の砥石(天草砥石)である。側面は全て砥面に利用されている。

ケ 土坑12号 (第89図)

H-45区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、1.13m×1mで、検出面からの深さは0.3m～1.3mになる。土坑東側の0.5m×0.3mが、1mほど下がる。埋土で柱痕を確認することができなかった。

遺物は、須恵器1点、土器1点が出土したが図化には至らなかった。

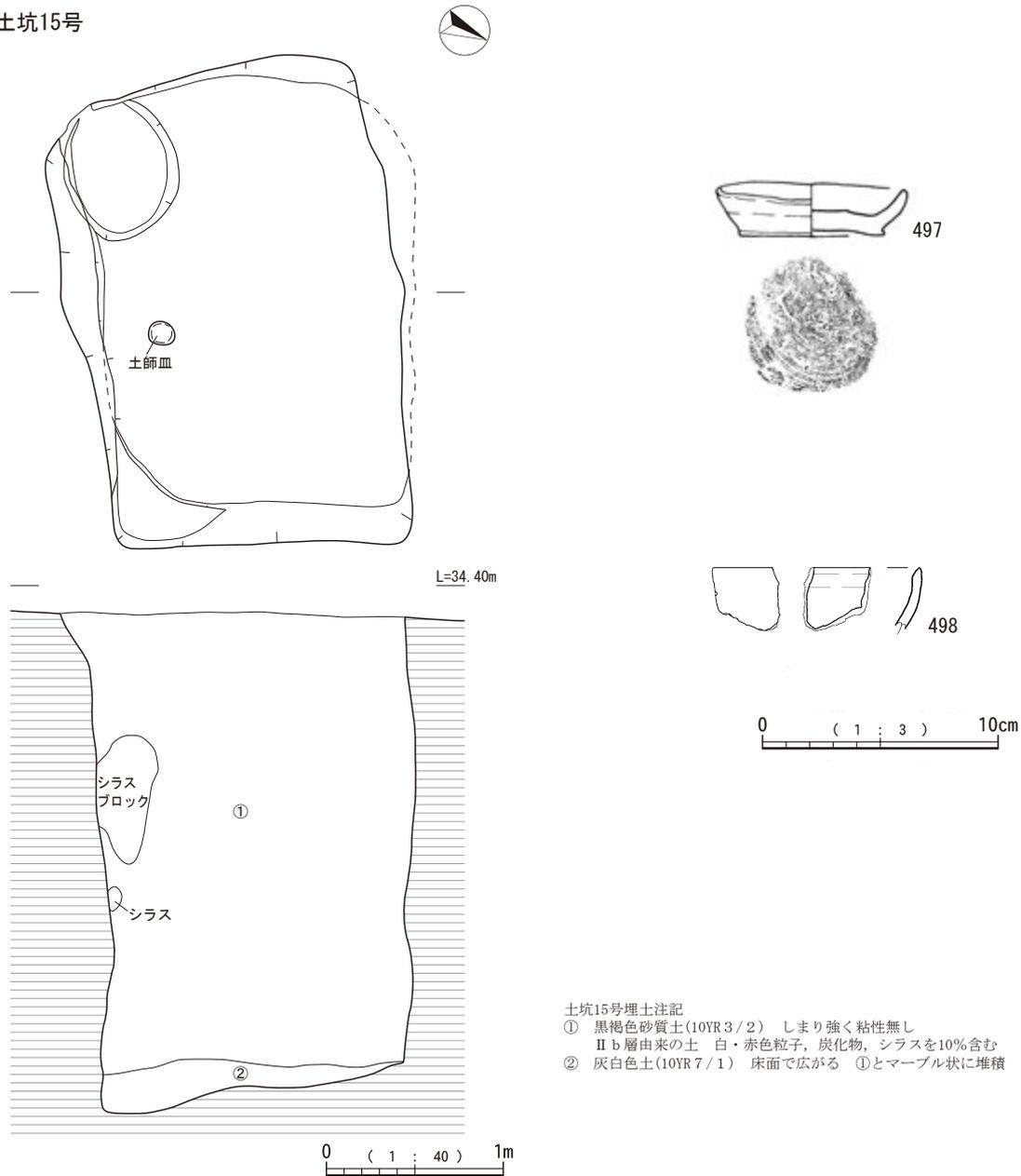
コ 土坑13号 (第89図)

H-45区のⅢ層上面で検出した。楕円形に近い土坑である。出土している遺物および埋土、周辺状況から中世の土坑とした。規模は、1.25m×0.84mで検出面からの深さは0.28m～1.56mになる。土坑西側の0.5m×0.4mが、1.3mほど下がる。似たような形状をしている土坑12号に隣接しており、深くなる部分が向かい合っている状態なので、関連する可能性があるが、用途は不明である。土坑12号同様、柱痕は確認することができなかった。

出土遺物 (第89図 495・496)

遺物は、土師器13点、青磁1点、陶器1点が出土した。そのうち、土師器1点、青磁1点を図化した。

土坑15号



土坑15号埋土注記
 ① 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまり強く粘性無し
 II b層由来の土 白・赤色粒子、炭化物、シラスを10%含む
 ② 灰白色土(10YR 7/1) 床面で広がる ①とマーブル状に堆積

第91図 土坑15号・中世遺構内の遺物①

495は土師器の坏である。底部には糸切り痕が残る。箱形の器形で、比較的器高が高い。中世後半期のものと考えられ、14世紀後半～15世紀半頃に類例がある。

496は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、外面に鎬連弁文が施される。歴博分類の龍泉窯系青磁碗B 1類、大宰府分類龍泉窯系青磁碗II類に該当する。13世紀中葉～14世紀前半である。

サ 土坑14号 (第90図)

H-45区のⅢ層上面で検出した。円形に近い土坑である。出土遺物および埋土、周辺状況から中世の土坑と判断した。規模は、2.05m×1.96mで、検出面からの深

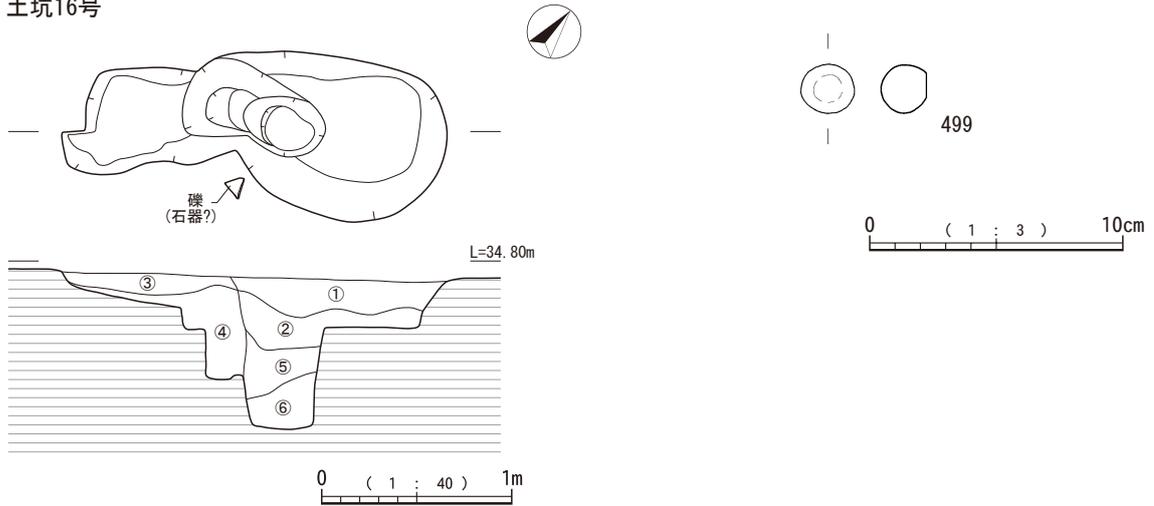
さは0.64mである。土坑13・14号に隣接する状態で検出しているが、形状は異なる。

遺物は、土師器10点が出土しているが、図化には至らなかった。

シ 土坑15号 (第91図)

F-46区のⅢ層上面で検出した。方形の土坑である。出土している遺物および埋土、周辺状況から中世の土坑とした。規模は、1.37m×0.97mで、検出面からの深さは1.36mでやや深い土坑である。形状および埋土の堆積状況が、土坑2・5・11号と類似しており同じような用途で使われたと考えられる。また、床上20cmで完形の土

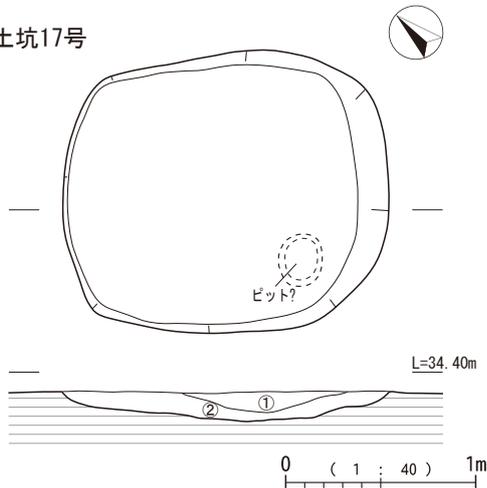
土坑16号



土坑16号埋土注記

- ① 暗褐色土(7.5YR 3/4) しまりあり粘性弱い II b層由来 白色粒子を10%, 赤色粒子をわずかに含む
- ② 褐色土(7.5YR 4/6) しまりあり粘性ややあり ブロック状にIII層由来黄色土が入る 白・赤色粒子をわずかに含む
- ③ 褐色土(7.5YR 4/4) しまりあり粘性弱い III層由来の黄色土が混じる 白色粒子10%, 赤色粒子わずかに含む
- ④ II b層由来の土に茶褐色の粘土質の土が混じる しまりあり粘性ややあり
- ⑤ II b層由来の土に、茶褐色粘土・黄色土が混じる しまりあり粘性弱い
- ⑥ 黄色土と黒色土との混ざり しまり弱く粘性も弱い

土坑17号



土坑17号埋土注記

- ① 黒色砂質土(10YR 2/1) しまり強く粘性弱い II b層由来の土 わずかな白色粒子, 赤色粒子と炭化物を微量含む
- ② 灰黄褐色砂質土(10YR 5/2) しまり強く粘性弱い ①とシラスがマーブル状に堆積

第92図 土坑16・17号・中世遺構内の遺物⑫

師器の皿が出土している。

出土遺物 (第91図 497・498)

遺物は、土師器36点、須恵器6点、青磁1点、陶器3点、土器9点が出土した。そのうち、土師器1点、国産陶器1点を図化した。

497は完形の土師器小皿である。口縁部が歪み粗雑な作りである。見込みが盛り上がり、糸切り痕が底部に残る。

498は口縁が内湾する丸碗である。胎土と形態から、瀬戸・美濃産と考えられる。

ス 土坑16号 (第92図)

H-45・46区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑

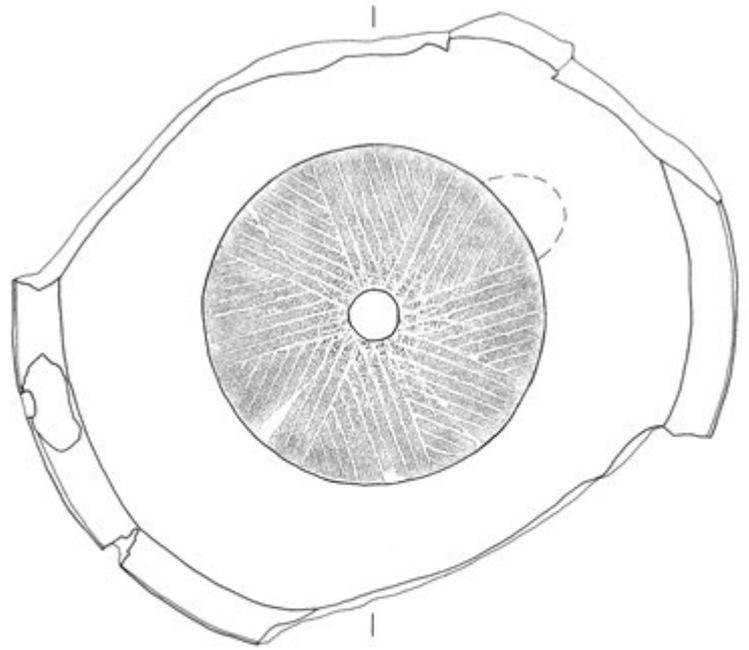
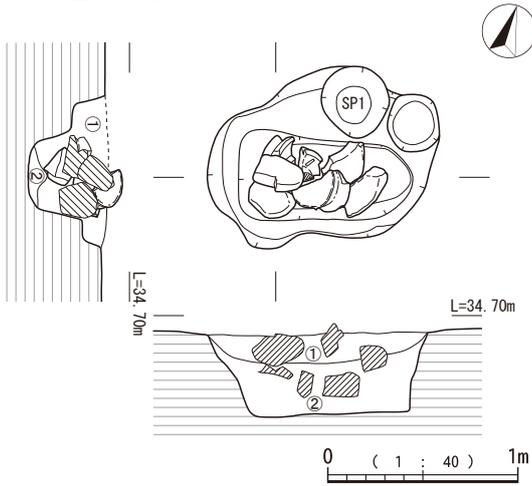
とした。規模は、1.91m×0.55～0.86mで、検出面からの深さは0.17～0.8mである。断面および埋土の状況から、最初にあった土坑を北東側の土坑が切っている。形状から柱の建て替えなどを行っている可能性がある。遺物も多く出土しており、出土炭化物からは、14世紀末～15世紀初頭の年代が結果が出ている。(第V章参照)

出土遺物 (第92図 499)

遺物は、土師器30点、須恵器3点、青磁1点、青花1点、金属製品1点が出土している。そのうち、金属製品1点を図化した。

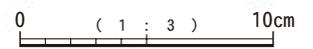
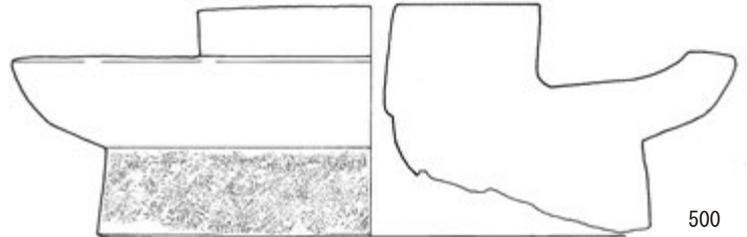
499は直径1.3cmの球形の金属である。理化学分析の結果、鉛の成分が主であったため、鉄砲玉と考えられる。

土坑18号



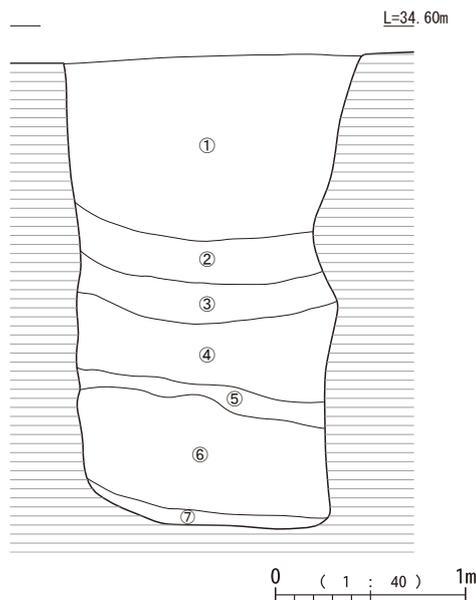
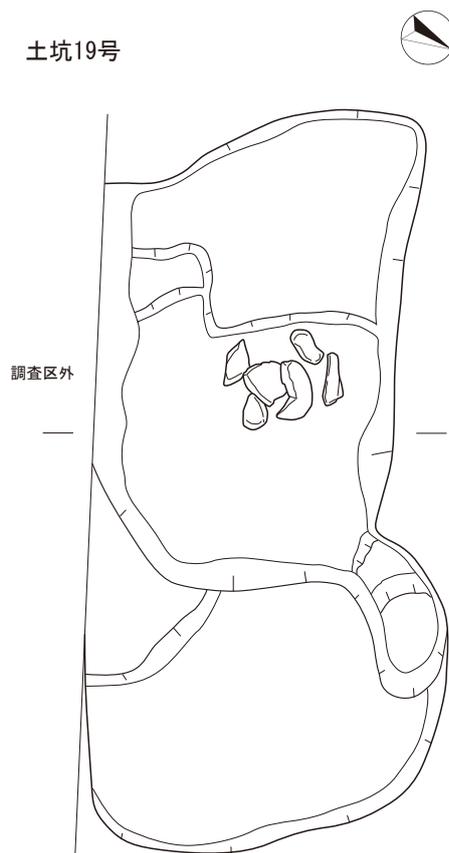
土坑18号埋土注記

- ① 灰黄褐色土(10YR 4/2) しまりやや弱く粘性あり 白色粒子を5%、ブロック状の黄色バミスを10%含む
- ② 黒褐色粘質土(10YR 3/2) しまりやや弱く粘性あり ブロック状の黄色バミスを5%含む



第93図 土坑18号・中世遺構内の遺物⑬

土坑19号



土坑19号埋土注記

- ① 暗灰黄色土(2.5YR 4/2) しまりややあり粘性無し
- ② 黒褐色土(2.5YR 3/2) しまりなし粘性ややあり
- ③ オリーブ褐色土(2.5YR 4/3) しまりなし粘性ややあり
- ④ 暗オリーブ褐色土(2.5YR 3/3) しまりなし粘性あり
- ⑤ ④+橙色(2.5YR 3/3) ブロック土(20~50mm)を含む
- ⑥ オリーブ褐色土(2.5YR 6/6) しまり粘性無し+橙色(2.5YR 3/3)ブロック土(5~10mm)を含む
- ⑦ 灰白土(2.5YR 7/1) しまり粘性無し

第94図 土坑19号

(第V章参照)

セ 土坑17号 (第92図)

H-46区のⅢ層上面で検出した。隅丸方形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、1.72m×1.49mで、検出面からの深さは0.15mである。周辺の土坑と比べて、検出面からの深さが浅く断面は皿状となる土坑である。

遺物は、土師器8点、土器1点が出土したが、図化には至らなかった。

ソ 土坑18号 (第93図)

H-46区のⅢ層上面で検出した。北側に2基のピットをもつ楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、1.16m×0.85mで、深さは0.43mである。被熱をうけ、打ち欠きにより3つに割れた茶臼が、人頭大の礫と重なるように廃棄された状況であった。埋土中から牛と考えられる骨片も出土している。また、出土した炭化物を科学分析にかけ、14世紀との結果を得た。(第V章参照)

出土遺物 (第93図 500)

石臼1点を図化した。500は直径38.2cm、高さ12.3cmの茶臼である。受け皿部分の付いた下臼で、底面は凹んで

おり、ノミ痕の可能性のある痕跡がみられる。目立てが完全に残っており、八分画となっている。目立ては10条が単位となる。焼けており、石材は緻密な凝灰岩と推測される。県外産石材の可能性はある。

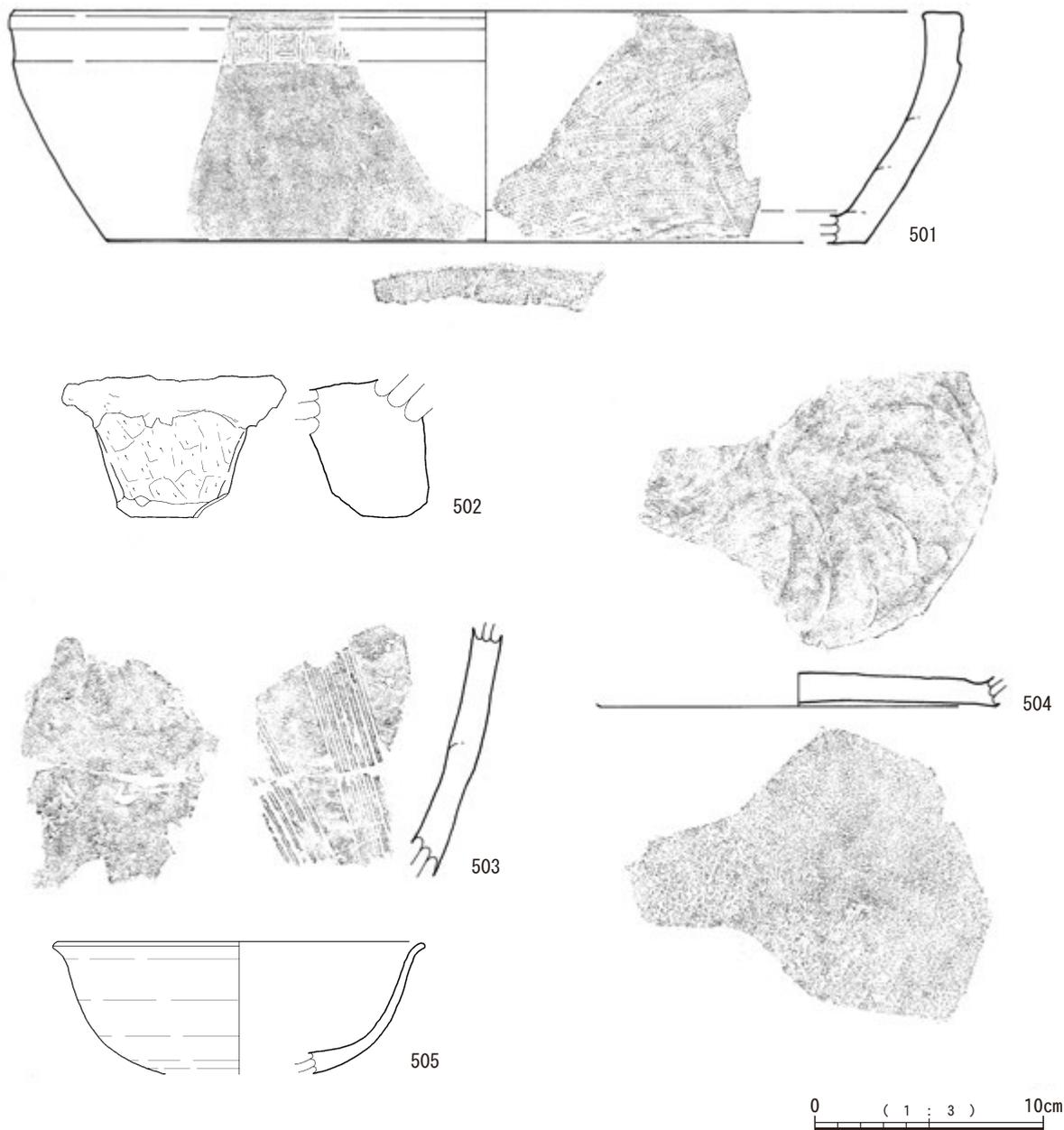
タ 土坑19号 (第94図)

I-45・46区のⅢ層上面で検出した。調査区外に遺構が延びることから、正確な形状は不明である。出土している遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。検出できている規模は、1.91m×0.79mで、遺構中心の深さは1.25mある。底面の中心部に1.5m×1.5m、深さ1.25mの土坑をもつ。北側と南側に降りることができるような階段状の段差がある。本遺跡では階段状の段差を伴う遺構は、溝状遺構1号で1基、製鉄関連遺構で1基の合計3基が確認されている。

出土遺物 (第95図 501~505)

遺物は、土師器32点、須恵器2点、瓦質土器10点(風炉・火鉢含む)、土器8点、青磁4点、国産陶器2点が出土している。そのうち、瓦質土器3点、国産陶器1点、青磁1点を図化した。

501は瓦質土器の火鉢である。内面にはハケ目が施される。口縁部外面には、重画文のスタンプが横方向に連



第95図 中世遺構内の遺物⑭

続して押捺される。外面は黒色化している。502は瓦質土器の風炉の脚である。重厚なつくりのもので、安定感がある。全面にヘラケズリによる調整が施される。503は瓦質土器の播鉢である。内面には、7条一単位の播目が施される。外面にはハケ目と指頭圧痕が残る。504は国産陶器とみられる甕の底部である。内面は円形の当て具を反時計回りに当てて、成形している。胎土に砂粒を多く含む。505は無文の青磁端反碗である。体部外面にはケズリの痕跡が顕著に残り、見込みに圏線を施す。歴博分類の龍泉窯青磁碗D1類、上田分類D-I類に該当

する。14世紀後半～15世紀前半である。

チ 土坑20号 (第96図)

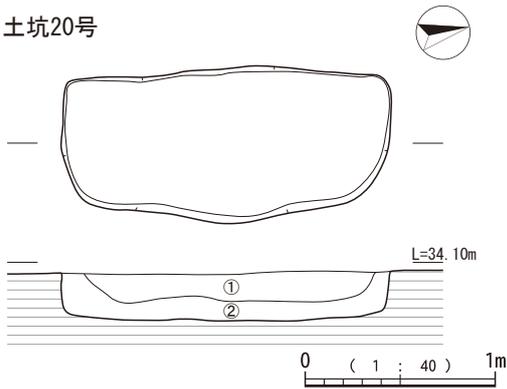
H-45・46区のⅢ層上面で検出した。隅丸長方形の土坑である。埋土および周辺の状態から、中世の土坑と判断した。規模は、1.73m×0.85mで、深さは0.25mである。底面も検出面の形状とほぼ同じであり、垂直に近い角度で掘られている。

遺物は、出土しなかった。

ツ 土坑21号 (第96図)

F-47区のⅥ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。

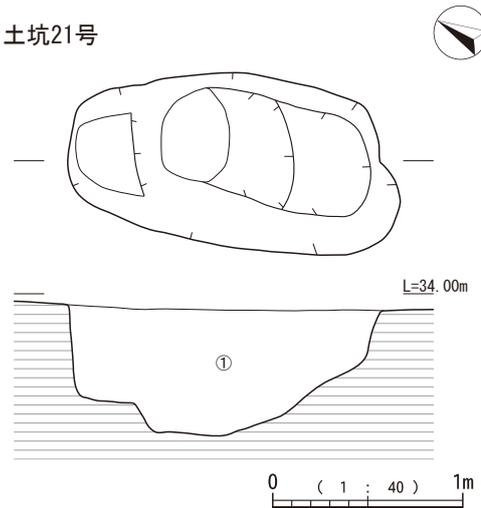
土坑20号



土坑20号埋土注記

- ① 黒褐色土(10YR 2/2) しまり強く粘性あり 軽石を含む
- ② 灰黄褐色土(10YR 5/2) しまり強く粘性あり 軽石を含む
わずかにシラスブロックが混じる

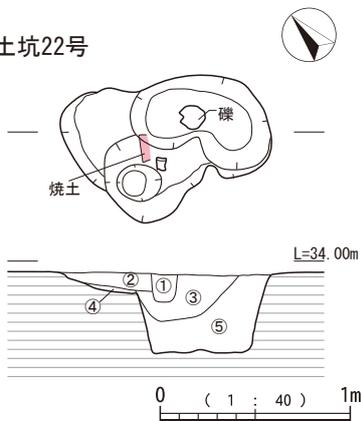
土坑21号



土坑21号

- ① 黒褐色砂質土(10YR 3/1) しまり強く粘性弱無し
シラスの入り方が場所によって異なる

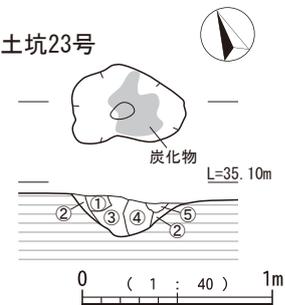
土坑22号



土坑22号埋土注記

- ① 攪乱土
- ② 灰黄褐色土 炭化物集中部 炭化物、焼土が混在する
- ③ 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまり弱い粘性無し シラス20%を含む
- ④ 硬化面
- ⑤ 黒褐色砂質土(10YR 3/1) しまり粘性ともに弱い

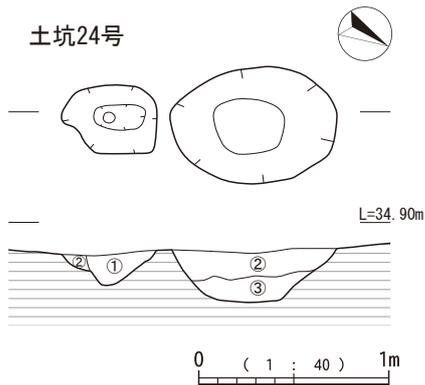
土坑23号



土坑23号埋土注記

- ① 暗褐色土(7.5YR 3/4) 炭化物少量含む
- ② 暗褐色土(10YR 3/4) 炭化物少量含む
- ③ 暗褐色土(7.5YR 3/4) 炭化物多い
- ④ 暗褐色土(10YR 3/3) 炭化物多い
- ⑤ 褐色土(7.5YR 4/4)

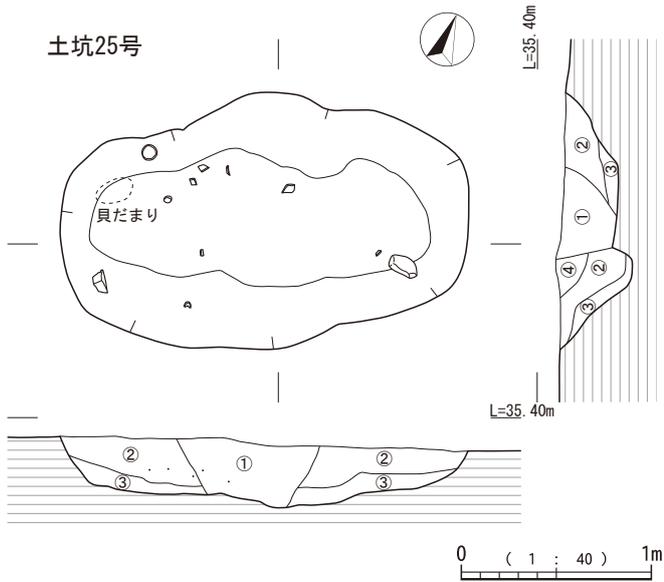
土坑24号



土坑24号埋土注記

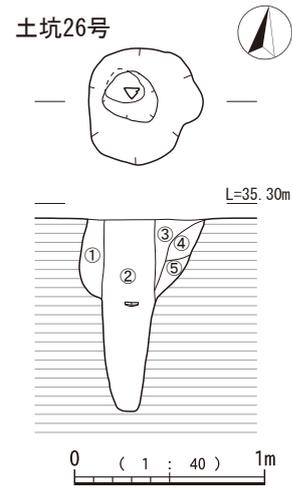
- ① 暗褐色土(10YR 3/4) しまりやや強く粘性やや弱い
- ② 暗褐色土(7.5YR 3/4) しまり粘性やや弱い
- ③ 黒褐色土(10YR 2/3) しまりやや強く粘性やや弱い

第96図 土坑20～24号



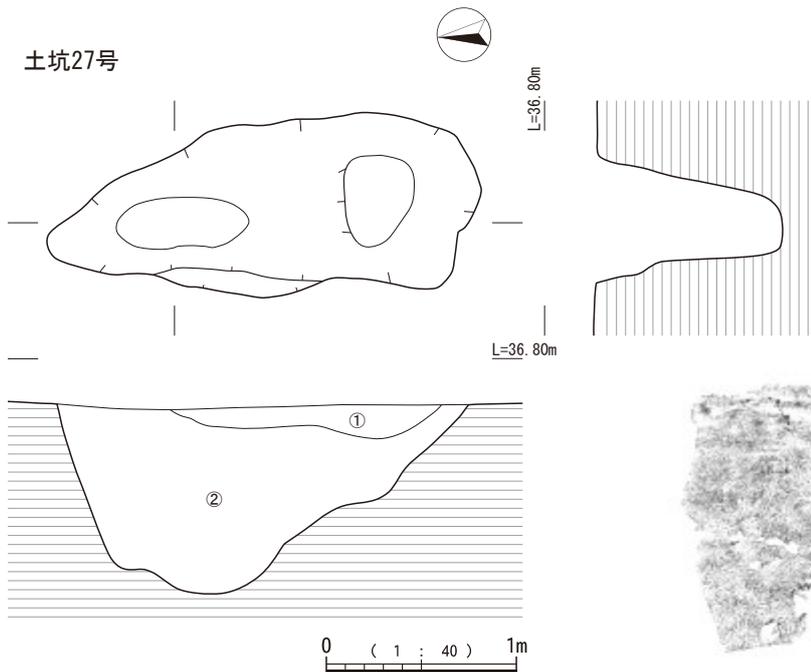
土坑25号埋土注記

- ① 黒褐色粘質土(7.5YR 2/2) しまり粘性やや強い、炭化物を多く含む
- ② 極暗褐色粘質土(7.5YR 2/3) しまり粘性やや強い、炭化物を含む
- ③ 褐色砂質土(7.5YR 4/3) しまり粘性やや弱い、II b層由来の土、赤色粒子を含む
- ④ 黒褐色粘質土(10YR 2/3) しまり粘性やや強い、炭化物を含む



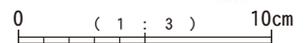
土坑26号埋土注記

- ① 褐色土(7.5YR 4/3) しまりやや強く粘性弱い
- ② 黒褐色土(10YR 2/3) しまり粘性弱い、5mm～3cmのIII層ブロック多く含む
- ③ 黒褐色土(10YR 2/3) しまり粘性弱い、5mmのIII層ブロック少量含む
- ④ 黒褐色土(7.5YR 4/3) しまり粘性弱い
- ⑤ 極暗褐色土(7.5YR 2/3) しまりやや粘性弱い、5mmのIII層ブロック少量含む



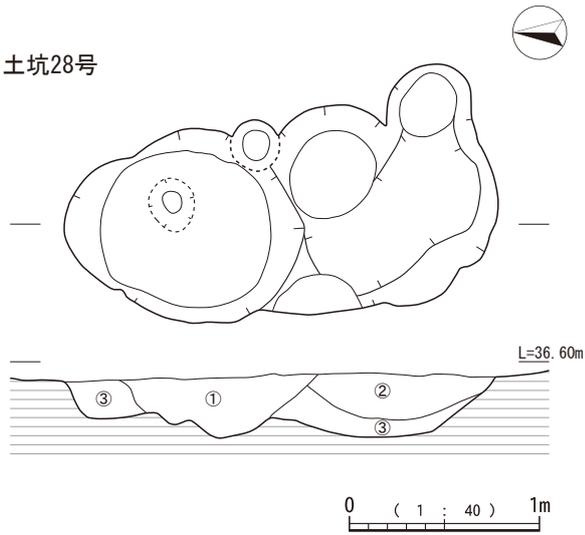
土坑27号埋土注記

- ① 黒褐色砂質土(10YR 3/1) しまりあり、II b層由来の土
- ② II b層とVI層の混じり土、しまりなし



第97図 土坑25～27号・中世遺構内の遺物⑬

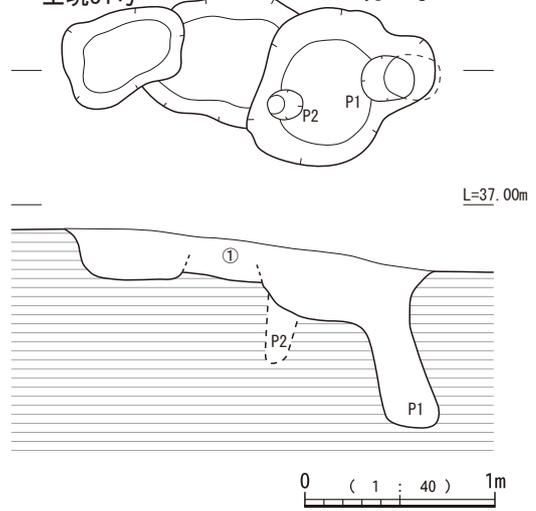
土坑28号



- 土坑28号埋土注記
 ① 黒褐色土(7.5YR3/2) II b層由来の土
 ② 暗褐色土(7.5YR3/3) 赤色粒子を含む
 ③ 暗褐色土(7.5YR3/3) III層ブロック土を含む

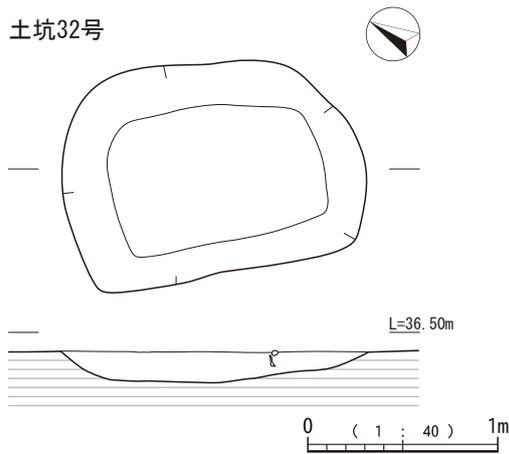


土坑31号 土坑30号 土坑29号



- 土坑29・30・31号埋土注記
 ① 黒色粘質土(10YR2/1) しまりあり粘性あり
 II b層由来の土

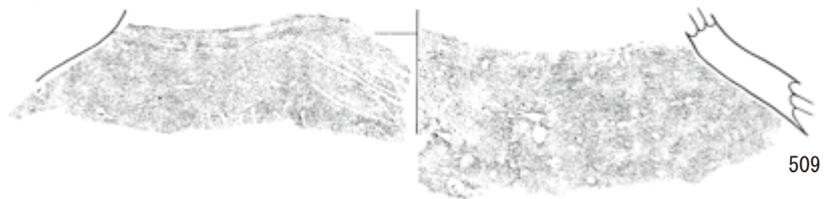
土坑32号



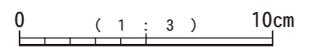
- 土坑32号埋土注記
 ① 暗褐色砂質土(7.5YR3/3) しまり強く粘性やや弱い
 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む



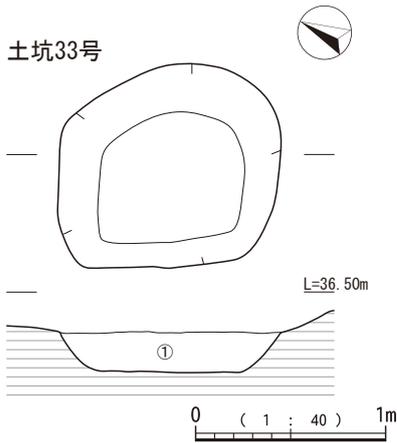
508



509

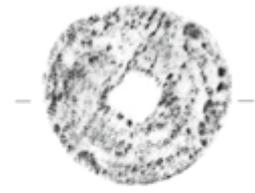
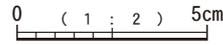
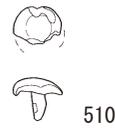


第98図 土坑28 ~ 32号・中世遺構内の遺物⑩

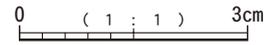


土坑33号埋土注記

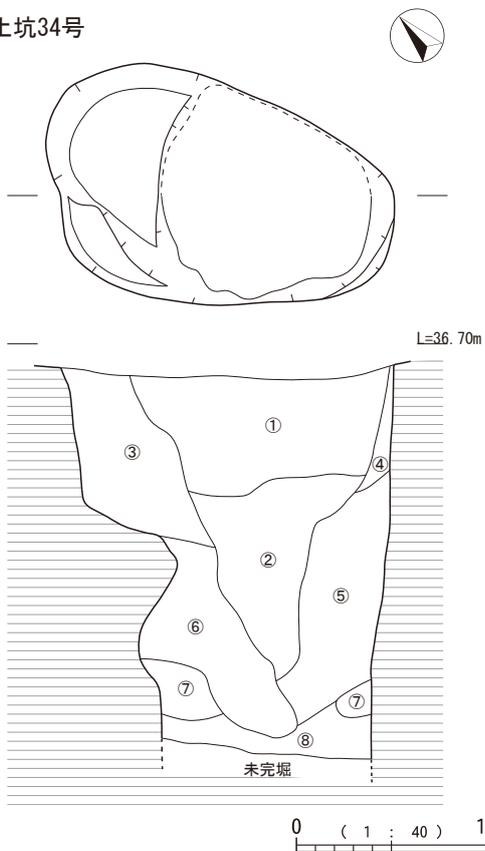
- ① 暗褐色砂質土(7.5YR 3/3) しまり強く粘性やや弱い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む



511

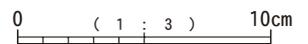


土坑34号



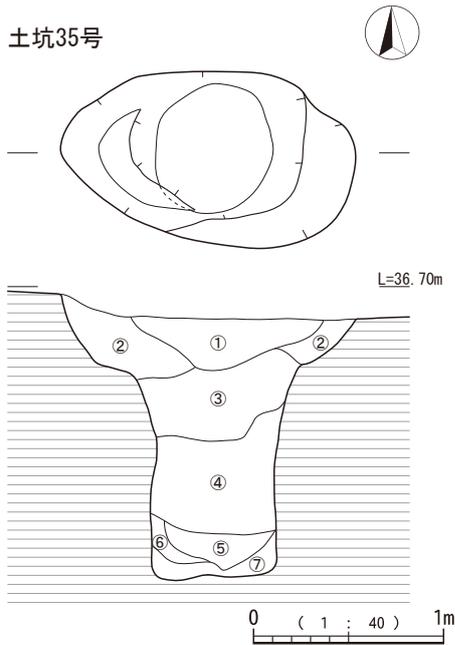
土坑34号埋土注記

- ① 暗褐色粘質土(7.5YR 3/3) しまりやや強く粘性強い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ② 橙色粘質土(7.5YR 6/6) しまり粘性ともに強い
白・赤色粒子, 炭化物を各10%, シラスを80%含む
- ③ 褐色粘質土(7.5YR 4/4) しまり, 粘性ともにやや強い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ④ I層にVIa層が30%含まれる
- ⑤ 褐灰色質土(7.5YR 5/1)砂 しまり弱く粘性やや弱い
シラス(明褐色)と褐灰色が互層となり堆積 白色粒子を30%,
シラスを40%含む
- ⑥ 褐色粘質土(7.5YR 4/4) しまり有あり粘性やや強い
シラスを40%含む, シラスブロック 1cm~5cm程を
全体的にマーブル状に含む
白, 赤色粒子を各10%含む, 特に白色粒子は,
VI層, VII層との接地面にマーブル状に含んでいる
- ⑦ 黄褐色砂質土(7.5YR 8/8) しまり強く粘性弱い
白・赤色粒子, シラスを各10%含む
※白・赤色粒子は2~3cmのブロック状
- ⑧ 暗褐色粘質土(7.5YR 3/4) しまりあり粘性やや強い
暗褐色土と褐灰色, 黄褐色の層が互層となり堆積している
中心部の方がしまりが弱くなる 炭化物, シラスを各30%程含む



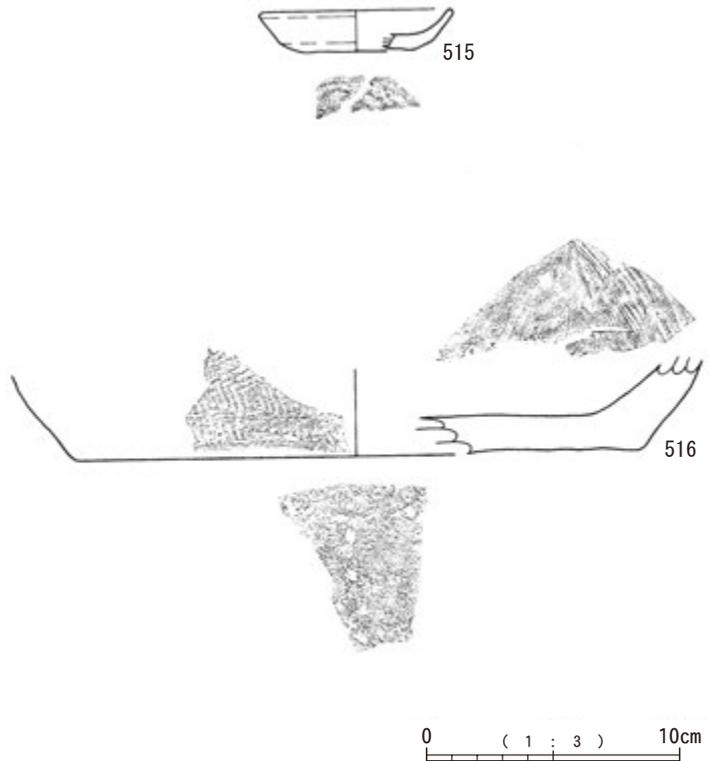
第99図 土坑33・34号・中世遺構内の遺物①⑦

土坑35号



土坑35号

- ① 暗褐色粘質土(7.5YR 3/3) しまりやや強く粘性強い
白色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ② 明褐色粘質土(7.5YR 5/6) しまり粘性ともにやや強い
白色粒子, シラスを各10%含む
- ③ 褐色粘質土(7.5YR 4/4) しまり粘性ともにあり
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ④ 褐色粘質土(7.5YR 4/3) しまり粘性ともにあり
赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑤ 明褐色粘質土(7.5YR 5/6) しまりあり粘質強い
白・赤色粒子を各10%, シラスを30%を含む
- ⑥ 暗褐色粘質土(7.5YR 3/4) しまりあり粘性強い
白・赤色粒子, シラスを各10%含む 3cm程の赤色粒子あり
- ⑦ 褐灰粘質土(7.5YR 4/1) しまりあり粘性強い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
※底部に炭化物を多く含む 5cm程度の白色ブロックを1つ含む



第100図 土坑35号・中世遺構内の遺物⑱

規模は、1.74m×0.93mで、深さは0.67mである。

遺物は、備前焼と考えられる陶器片が1点出土したが、凶化には至らなかった。

テ 土坑22号 (第96図)

D-48区のⅥ層上面で検出した。不定形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、1.1m×0.73mで、深さは0.42mである。検出状況から複数の遺構が重複していると考えられ、周辺の製鉄関連の遺構の一部の可能性が高い。

遺物は、白磁の小片が1点出土したが、凶化には至らなかった。

ト 土坑23号 (第96図)

F-56区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、0.59m×0.37mで、深さ0.18mの小規模の土坑である。壁や床の一部が焼けて赤化している。

遺物は出土しなかったが、炭化物を多く含む埋土が

あった。

ナ 土坑24号 (第96図)

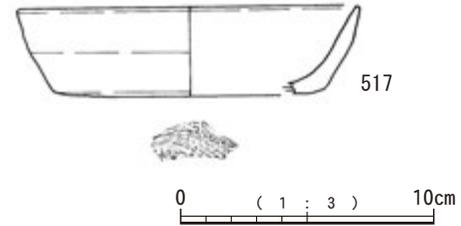
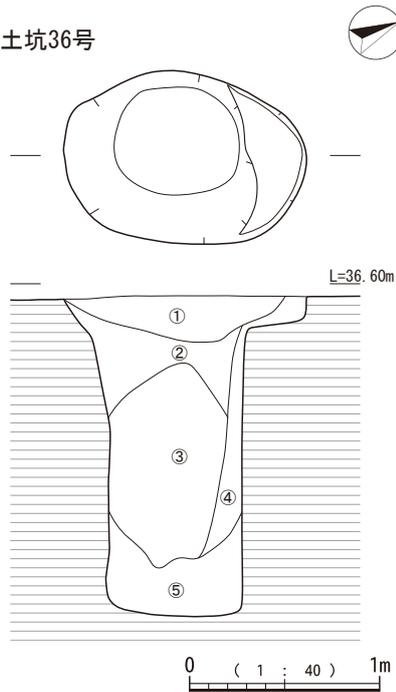
H-56区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、0.5m×0.36mの小土坑と0.87m×0.61mの土坑で、深さは小土坑が0.16m、土坑が0.26mである。形状から連穴土坑を想定して調査を行ったが、それぞれ単体の土坑となった。埋土の状況から小土坑は柱穴の可能性はある。周辺に掘立柱建物跡3・4号があり埋土の状況も似ていることから、これらに伴う土坑の可能性が高い。

遺物は、出土しなかった。

ニ 土坑25号 (第97図)

F-58区のⅢ層で検出した。隅丸方形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から中世の土坑とした。規模は、2.14m×1.36mで、深さは0.3～0.4mである。レンズ状堆積の埋土を中心部の埋土が切っていることから、複数回利用されたことが想定される。炉や貼り床などは確認できなかったが、小規模な竪穴建物であった可

土坑36号



土坑36号埋土注記

- ① 暗褐色粘質土(7.5YR 3/3) しまりあり粘性強い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ② 褐色粘質土(7.5YR 4/4) しまり粘性あり
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
Ⅲ層との境は, ザラザラした手ざわり
- ③ 褐色砂質土(7.5YR 4/3) しまりあり粘性やや弱い
白色粒子, シラスを各10%含む 全体的にスポンジ状にスカスカした状態
- ④ 明褐色粘質土(7.5YR 5/6) しまり粘性ともにやや強い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む Ⅲ層との境は粘性が弱くなる
- ⑤ 灰黄褐色粘質土(10YR 5/2) しまりやや弱く粘性やや強い
シラスを40%程含み, マーブル状に全体的に堆積している
完掘後に3と5の背後より5cm大の炭化物ブロックを含む

第101図 土坑36号・中世遺構内の遺物⑱

能性がある。埋土中から貝殻が出土していることから、最終段階では廃棄用の土坑として利用されたと考えられる。

遺物は、土師器が12点出土している。2点を図化しているが、古代該当の土師器のため古代の調査成果で報告をしている。

又 土坑26号 (第97図)

G-58区のⅢ層上面で検出した。円形の土坑である。規模は、0.62m×0.6mで、深さは0.9mある。形状から柱穴を想定して調査を行ったが、土坑や柱穴は検出されなかった。埋土中から古代の須恵器が出土しているが、柱を抜き取って埋めた際に入り込んだと考えられる。溝状遺構3号に隣接しているため関連する可能性がある。

遺物は、須恵器1点が出土しているが古代該当遺物のため古代の調査成果で報告をしている。

ネ 土坑27号 (第97図)

F-69区のⅢ層上面で検出した。不定形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、2.18m×0.9mで、深さは0.98mでやや深い。埋土の状態から人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物 (第97図 506・507)

遺物は、土師器が1点、須恵器2点、瓦質土器1点、常滑焼1点が出土している。そのうち瓦質土器1点、須恵器1点を図化した。

506は須恵器の播鉢である。口縁部は玉縁状となっている。内面には10条一単位の播目が施される。焼成は非常によく、堅緻である。

507は中世須恵器の甕である。内面は丁寧なナデを施す。外面は山形状のタタキ目を施す。

ノ 土坑28号 (第98図)

F-69区のⅥ層上面で検出した。不定形の土坑である。埋土および周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、2.25m×1.1mで、深さは0.3mである。埋土の状態から複数回にわたっての使用が考えられる。

遺物は、出土しなかった。

ハ 土坑29・30・31号 (第98図)

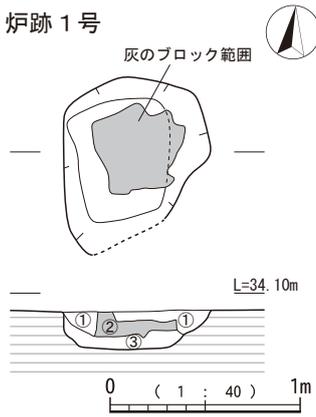
F・G-69区のⅥ層上面で検出した。切り合いのある、不定形な土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、1.95m×0.55mで、深さは0.2～0.3mである。土坑30号から土坑29・31号の順に構築されているが、埋土に共通性があり時間差なく連続して掘られた可能性がある。F-69区に5基の土坑がまとまって検出されているため、関連性があることも考えられる。

遺物は、土師器が12点、須恵器2点が出土している。

ヒ 土坑32号 (第98図)

E-71区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。

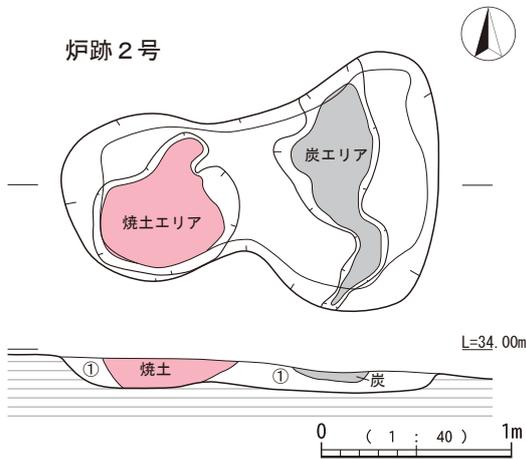
炉跡 1号



炉跡 1号埋土注記

- ① 暗褐色土(7.5YR 3/3) しまりあり粘性弱い
白・赤色粒子をわずかに含む
- ② 黒褐色砂質土 II b層由来の土 しまりあり粘性あり
灰のようなものがブロックで混じる
- ③ 黒褐色砂質土 II b層由来の土 しまりあり粘性弱い
III層土が混じる

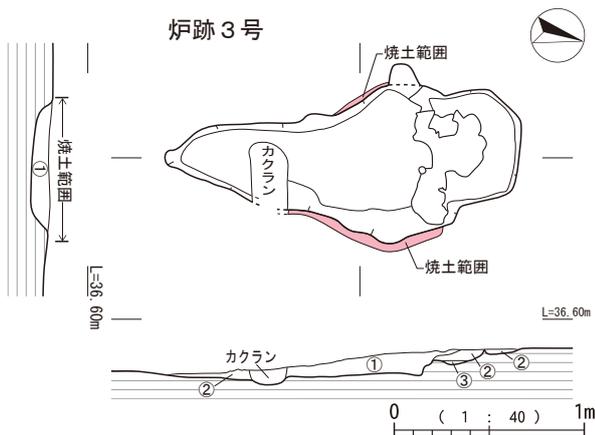
炉跡 2号



炉跡 2号埋土注記

- ① 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまり強く粘性無し
焼土・炭化物を20%含む

炉跡 3号



炉跡 3号埋土注記

- ① 暗褐色砂質土(7.5YR 3/4) しまり強く粘性有り
白・赤色粒子, シラスを各10%含む, 炭化物を30%含む
- ② 褐色砂質土(7.5YR 4/3) しまり粘性ともに弱い
- ③ 暗褐色砂質土(7.5YR 3/4) しまり粘性ともにやや強い
白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む

第102図 炉跡 1～3号

規模は、1.6m×1.1mで、深さは0.16mである。断面形が、皿状の浅い土坑である。

出土遺物（第98図 508・509）

遺物は、須恵器2点が出土している。そのうち須恵器2点を図化した。

508・509は、中世須恵器の甕である。508は内面にナデを施す。外面は風化がはげしく、残りは良好ではないが、頸部以下に格子目タタキが施される。509は内外面ともに風化のため、調整は不明である。胎土中に直径2～5mm程度の小石が多く混入する。

フ 土坑33号（第99図）

E-71区のⅢ層上面で検出した。円形に近い土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、1.15m×1.07mで、深さは0.2mである。洪武通寶が出土しており土坑墓の可能性はある。

出土遺物（第99図 510・511）

遺物は、白磁1点、金属製品1点、洪武通寶1点が出土している。そのうち金属製品1点、洪武通寶1点を図化した。

510は青銅製の傘釘である。傘部は比較的残存状況が良好で丸まったドーム状となる。釘の足部分は欠損している。

511は古銭が5枚積み重なったものである。表面が錆んでいるが、洪武通寶の可能性が高いと考えられる。

ヘ 土坑34号（第99図）

E-72区のⅣ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、1.75m×1.19mである。深さは安全の関係上、2m下げたところで調査を終了した。

出土遺物（第99図 512～514）

遺物は、土師器2点、須恵器2点が出土している。そのうち土師器1点、須恵器2点を図化した。

512は土師器杯の底部である。底部には糸切り痕がみられる。513は中世須恵器の甕である。風化が著しく、外面は格子目タタキ、内面は粗いハケ目を施す。514は中世須恵器の甕である。外面には山形状のタタキが丁寧に施され、内面にはハケ目が施される。

ホ 土坑35号（第100図）

E-72区のⅣ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、1.55m×0.9mで、深さは1.38mである。

出土遺物（第100図 515・516）

遺物は、土師器3点、須恵器2点が出土している。そのうち土師器1点、須恵器1点を図化した。

515は土師器の小皿である。底部は風化しているが、わずかに糸切り痕が残る。色調は橙色で、白色砂粒を含む粗い胎土を使用している。

516は中世須恵器の甕の底部である。内面はハケ目及

びナデを施す。外面は山形状のタタキ痕がみられる。胎土は、白色土と灰色土がマール状となっている。

マ 土坑36号（第101図）

E-72区のⅣ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の土坑とした。規模は、1.27m×0.9mで、深さは1.68mである。

出土遺物（第101図 517）

遺物は、土師器2点が出土している。そのうち土師器1点を図化した。

517は土師器の杯である。体部はやや丸みを帯びた箱形である。底部には糸切り痕が残る。

（4）炉跡

中世に該当する炉跡は、G-47区で2基、F-73区で1基の計3基検出した。

ア 炉跡1号（第102図）

G-47区のⅥ層で検出した。不定形の炉跡である。埋土および周辺の状態から中世の炉跡とした。規模は、0.82m×0.77mで、深さは0.21mである。埋土中に5～14cmの灰のブロックが堆積した層がある。完掘後に床面や壁面の確認を行ったが、赤化している状況は見られなかった。

遺物は、出土しなかった。

イ 炉跡2号（第102図）

G-47区のⅥ層で検出した。不定形の炉跡である。出土遺物および埋土、周辺の状態から中世の炉跡とした。規模は1.99×0.74で、深さは0.14mである。西側に焼土エリア、東側は炭化物の集中部がある炉跡である。

遺物は、土師器1点、瓦質土器1点が出土している。

ウ 炉跡3号（第102図）

F-73区のⅥ層上面で検出した。不定形の炉跡である。削平を受けており、残存状態は良好でなかった。科学分析の結果および埋土、周辺の状態から中世の炉跡とした。規模は、1.85m×0.78mで、深さは0.13mである。焼土塊が残る炉跡である。炭化物の年代測定を行ったところ、14世紀前半の年代が出ている。（第V章参照）

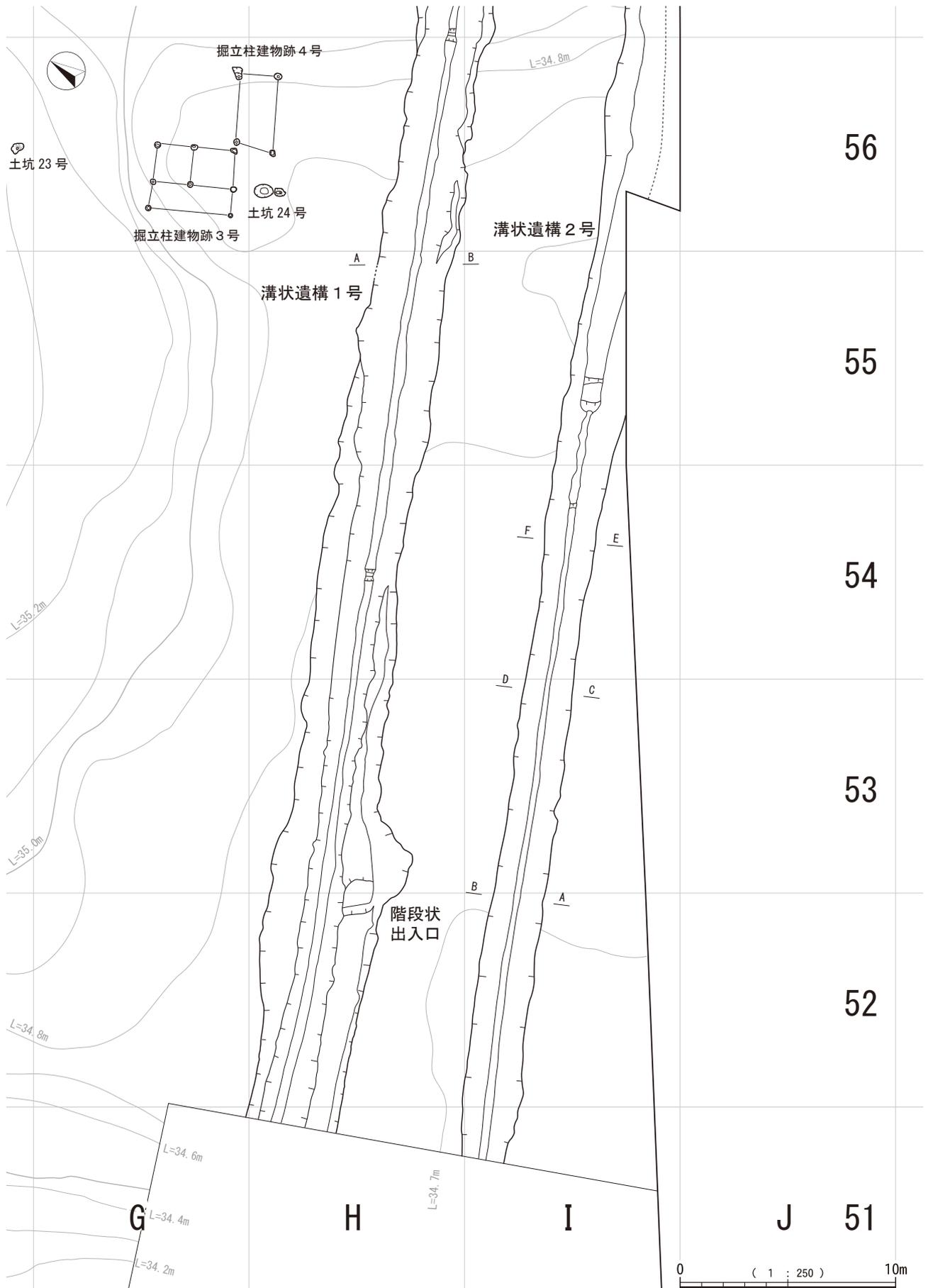
遺物は、出土しなかった。

（5）溝状遺構・石列・集積

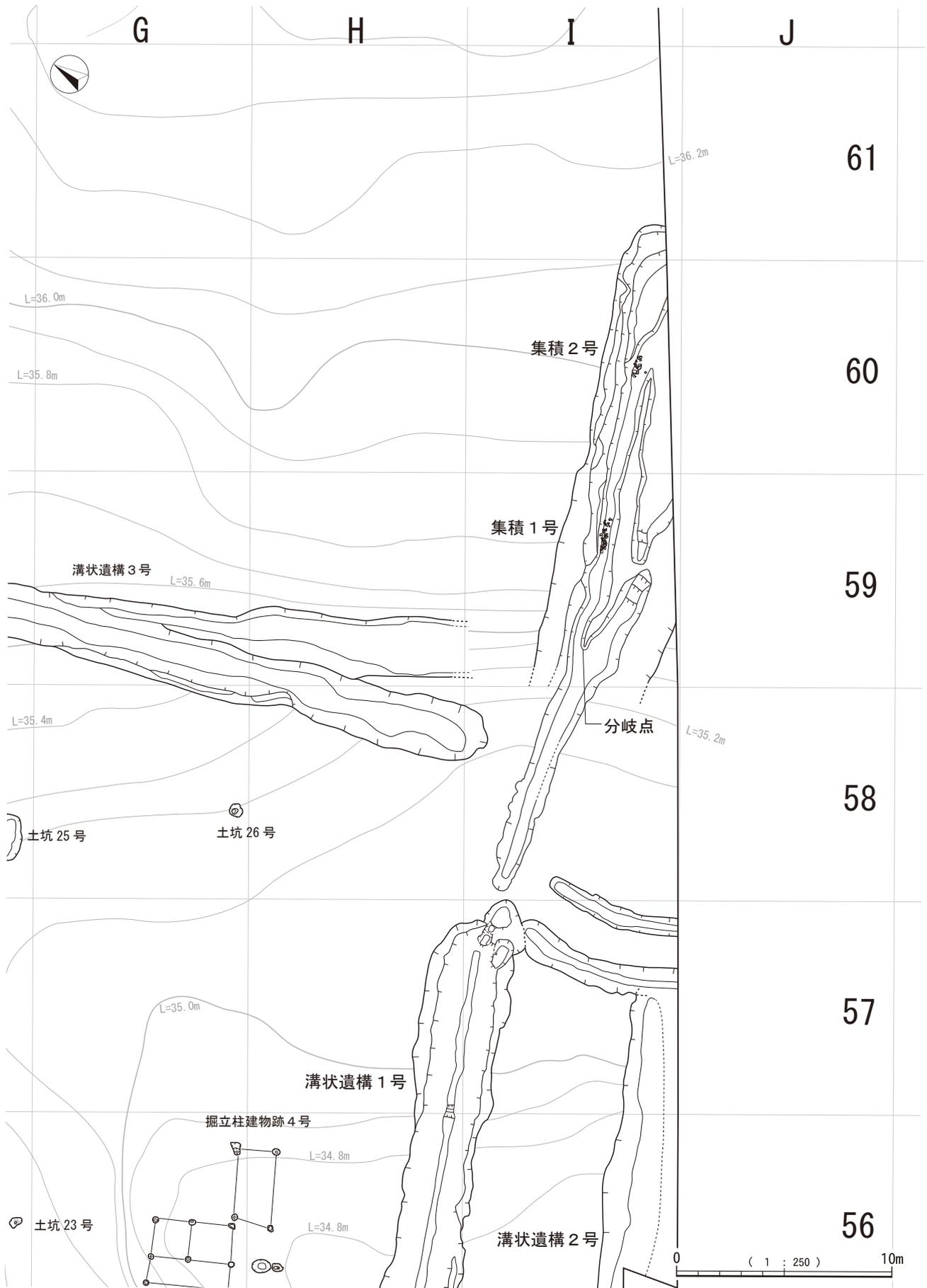
溝状遺構は、7条検出された。発掘調査および整理作業の過程で、中世段階で構築され、一部は道として現代まで利用されていたと判断した。また、遺構内に石列や集積等の遺構も見られる。これらは、溝状遺構と直接関連がある遺構のため、各溝状遺構とあわせて報告を行う。

ア 溝状遺構1号（第103・104図）

H-51区からI-61区のⅢ層上面で検出した。溝状遺構2号に並行する。また、I-58区で溝状遺構3号と直交する。長軸がほぼ東西方向に延びており、主軸はN70°

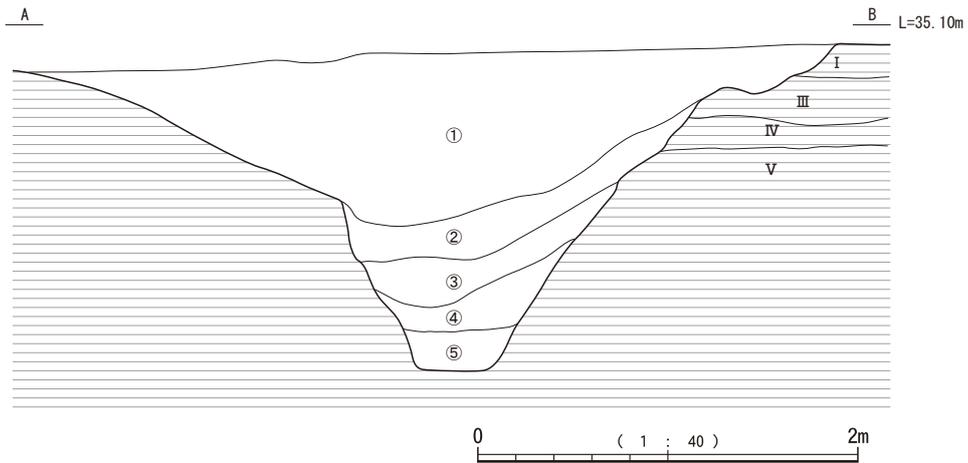


第103図 溝状遺構 1・2号溝 (51 ~ 56区)



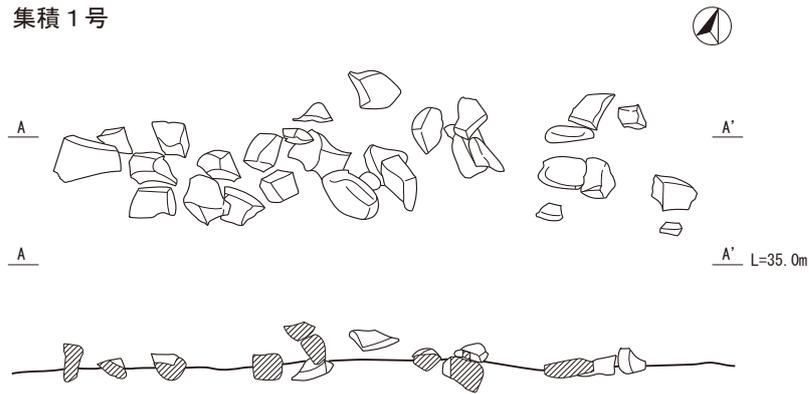
第104図 溝状遺構 1・2号溝 (56 ~ 61区) および集積 1・2号

溝状遺構 1号土層断面

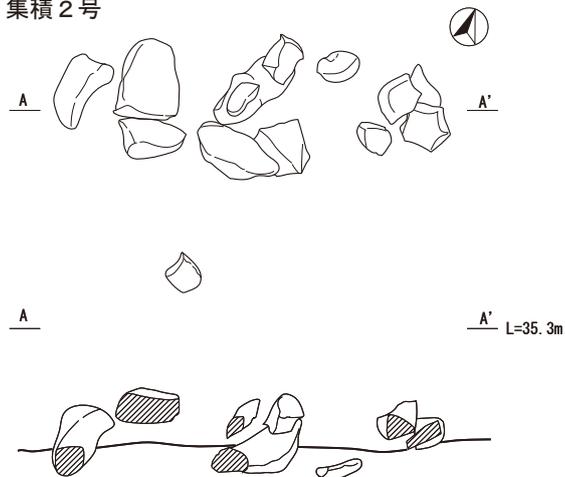


- ① 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまり強く粘性やや弱い 白色粒子を含む
- ② 褐色砂質土(10YR4/4) しまり強く粘性弱い 3cm大のV・VI層ブロック土多く含む
- ③ 暗褐色砂質土(10YR3/4) しまりやや強く粘性弱い IV・V・VI層ブロック土を含む
- ④ 褐色砂質土(10YR4/4) しまりやや強く粘性やや弱い 3cm大のV・VI層ブロック土多く含む
- ⑤ 暗褐色粘質土(10YR3/4) しまりやや弱く粘性やや弱い V・VI層小ブロック少量含む

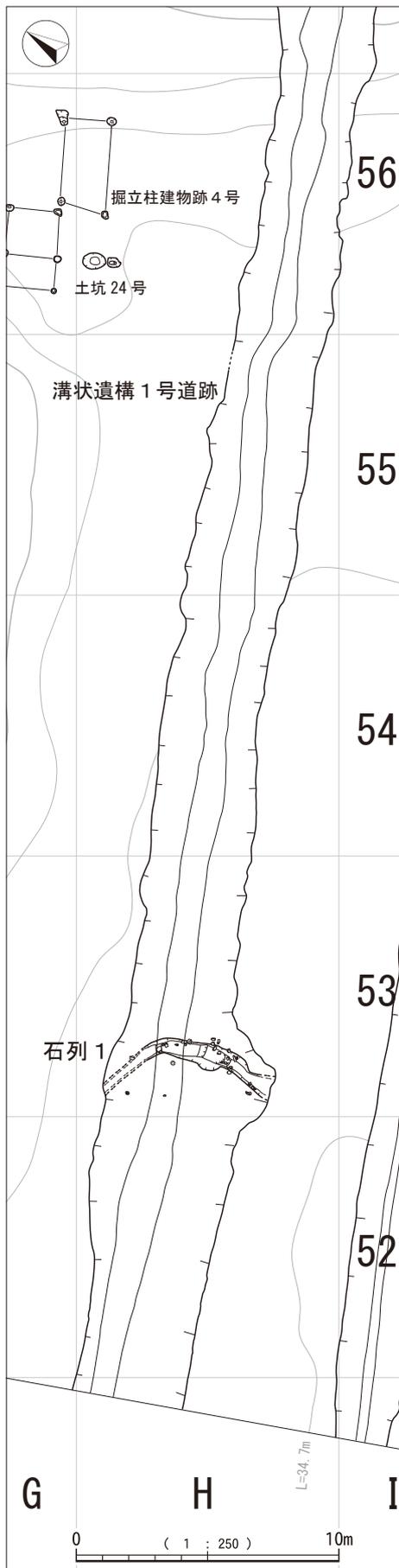
集積 1号



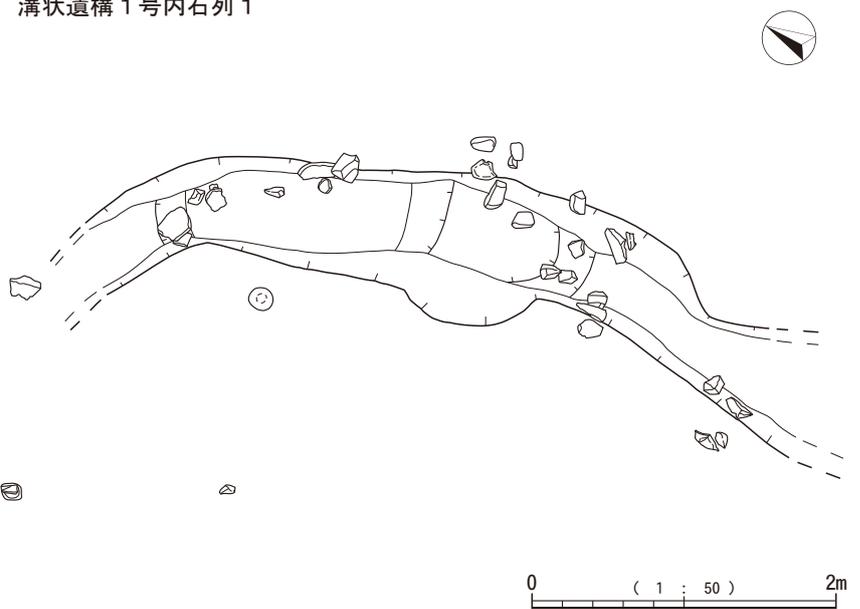
集積 2号



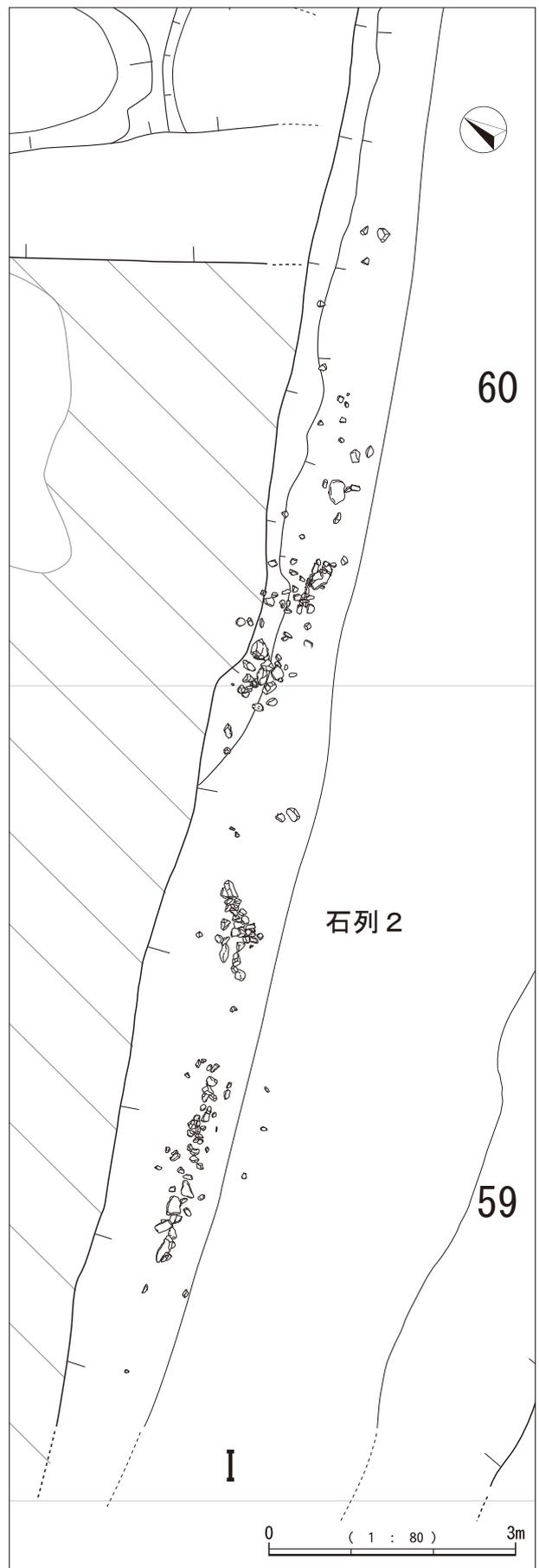
第105図 溝状遺構 1号断面・集積 1・2号



溝状遺構 1号内石列 1



第106図 溝状遺構 1号道跡 (51 ~ 56区) および石列 1



第107図 溝状遺構 1号道跡 (56 ~ 61区) および石列 2

Eを示す。規模は、長さ95m、幅3.5～6mであり、東端と西端はともに調査範囲外に続く。検出面からの深さは1.5mである。断面形は底面がほぼ平坦で、播鉢状を基本とするが、南側の立ち上がりに箱形で二段掘状になる箇所も見られた。埋土は、南側から流れ込んだレンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが、埋土の層によってブロックで入っている土の状況が変わり、3～5枚に分かれていた。溝として機能した後は道として使用され、長い期間にわたって用途を変えながら使用されてきたと考えられる。

溝状遺構1号に関連する遺構として溝内から、集積2基、石列2列、階段状出入口1か所、分岐点1か所を検出した。

(ア) 集積1号 (第104・105図)

I-59区で溝が二つに分岐するが、北側の溝の底面で検出した。長さ約1.7m、幅0.6mの範囲から、29個の礫を検出した。検出状況から、意図的に集中させて配置し

たと考えられる。半数以上の礫に被熱と考えられる赤化が見られたが、周辺の壁が焼けていたり炭化物が出土するといった状況は見られなかった。用途は不明である。

(イ) 集積2号 (第104・105図)

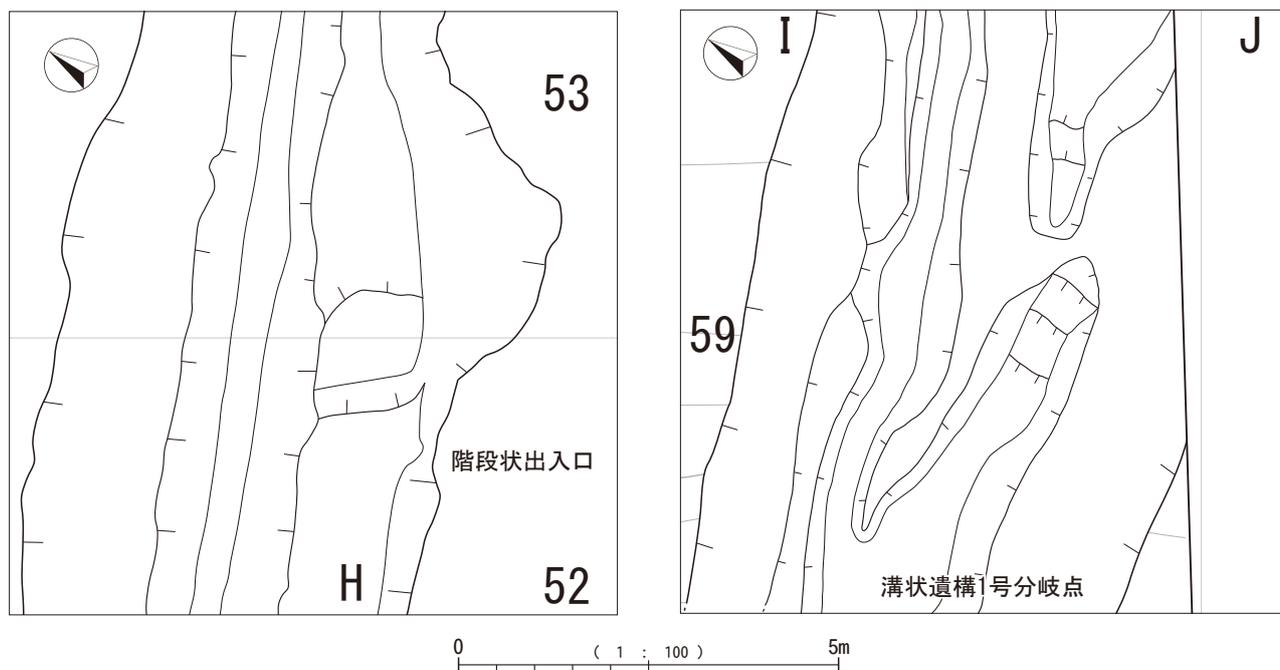
I-60区の北側溝の底面で検出した。長さ約1.1m、幅0.6mの範囲で、14個の礫が出土した。集積1号と同様に集中して配置した状況であった。赤化している礫も見られたが、周辺が焼けている状況等は確認できなかった。用途は不明である。

(ウ) 石列1 (第106図)

H-53区の埋土中で検出した。溝状遺構1号を横断し、石列に伴い道跡も検出された。礫は34個あり、密集しているというよりは、まばらに広がっている状況であった。埋土の状況から、溝の下部が埋まった後に利用されたと考えられる。

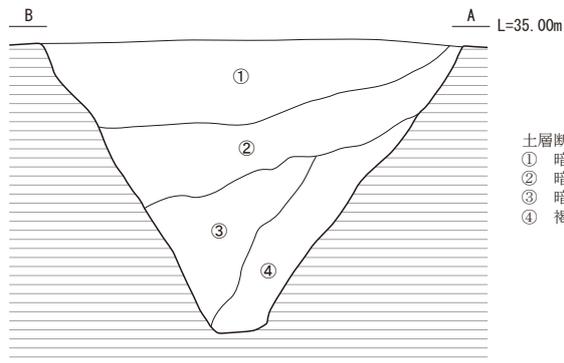
(エ) 石列2 (第107図)

I-59・60区の埋土中で検出した。全長は約14mで大



第108図 溝状遺構1号内階段状出入口および分岐点

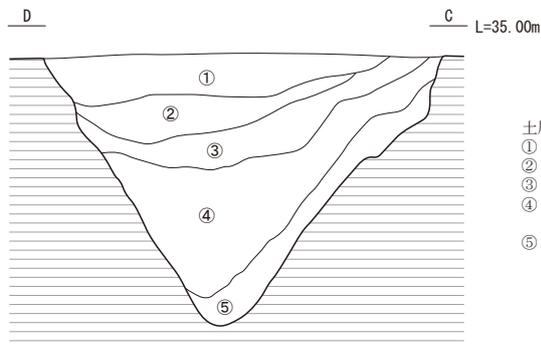
土層断面 1



土層断面 1

- ① 暗褐色砂質土(7.5YR 3/4) しまりやや弱く粘性弱い 3cm大のV・VI層ブロック土多く含む
- ② 暗褐色砂質土(10YR 3/4) しまりやや弱く粘性弱い V・VI層ブロックを含む
- ③ 暗褐色砂質土(10YR 3/4) しまりやや弱く粘性弱い V・VI層小ブロック多く含む
- ④ 褐色粘質土(7.5YR 4/3) しまり弱く粘性やや弱い

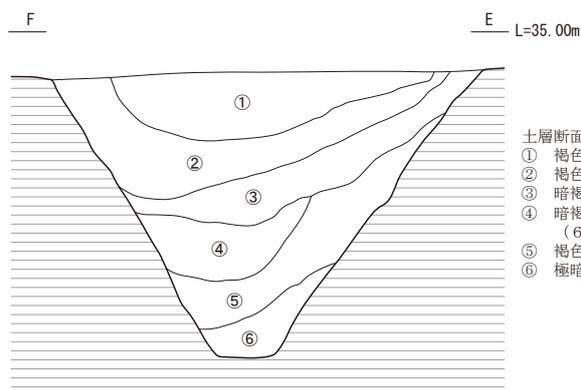
土層断面 2



土層断面 2

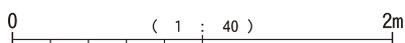
- ① 褐色砂質土(10YR 4/4) しまりやや強く粘性弱い V・VI層ブロックを含む
- ② 褐色砂質土(10YR 4/6) しまりやや弱く粘性弱い 2cm大のV・VI層ブロック多く含む
- ③ 暗褐色粘質土(10YR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い V・VI層ブロックを含む
- ④ 暗褐色粘質土(7.5YR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い V・VI層ブロック(6cm程度のブロックも混じる)を含む
- ⑤ 褐色粘質土(7.5YR 4/3) しまり弱く粘性やや弱い V・VI層小ブロック多く含む

土層断面 3

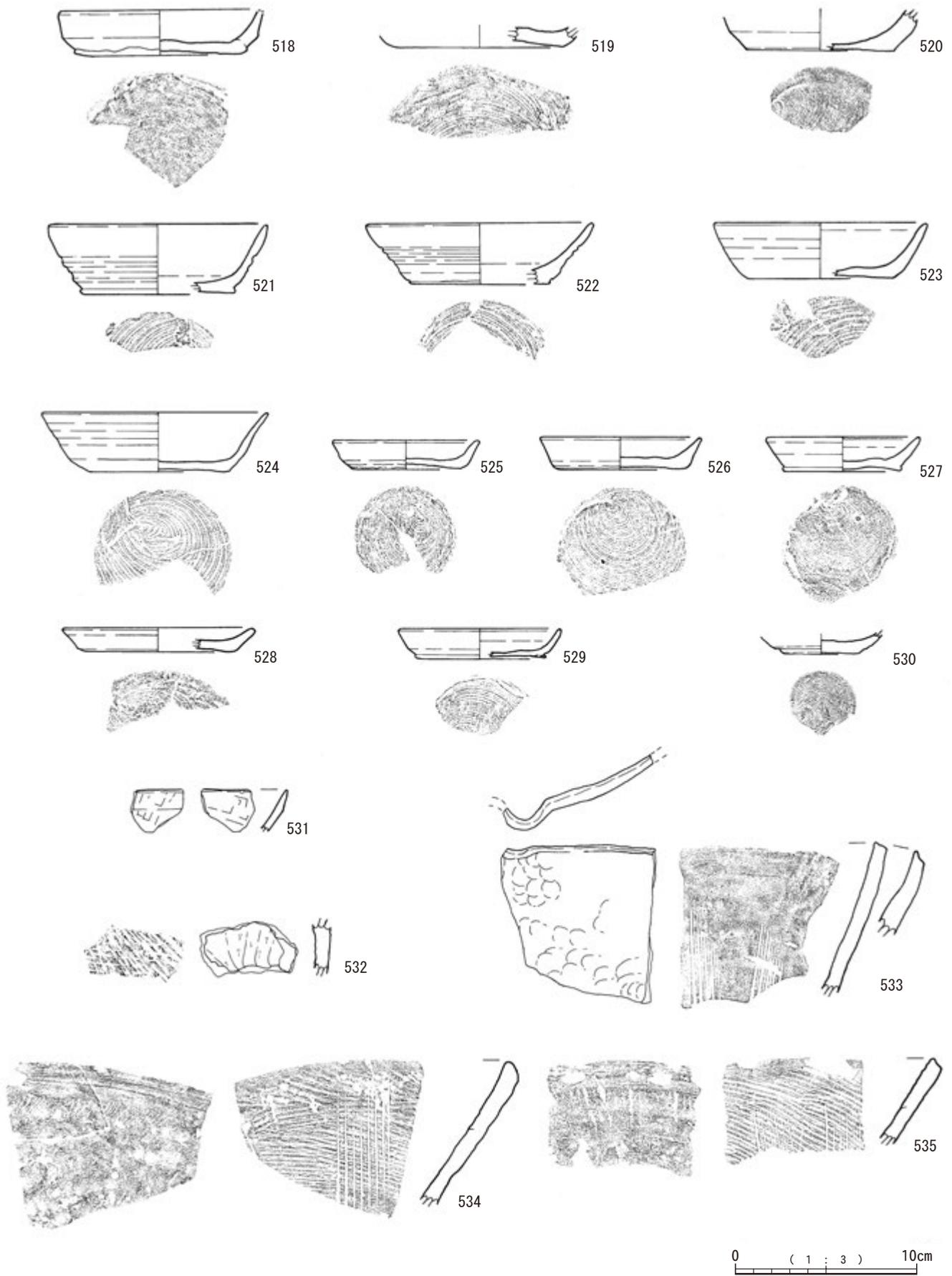


土層断面 3

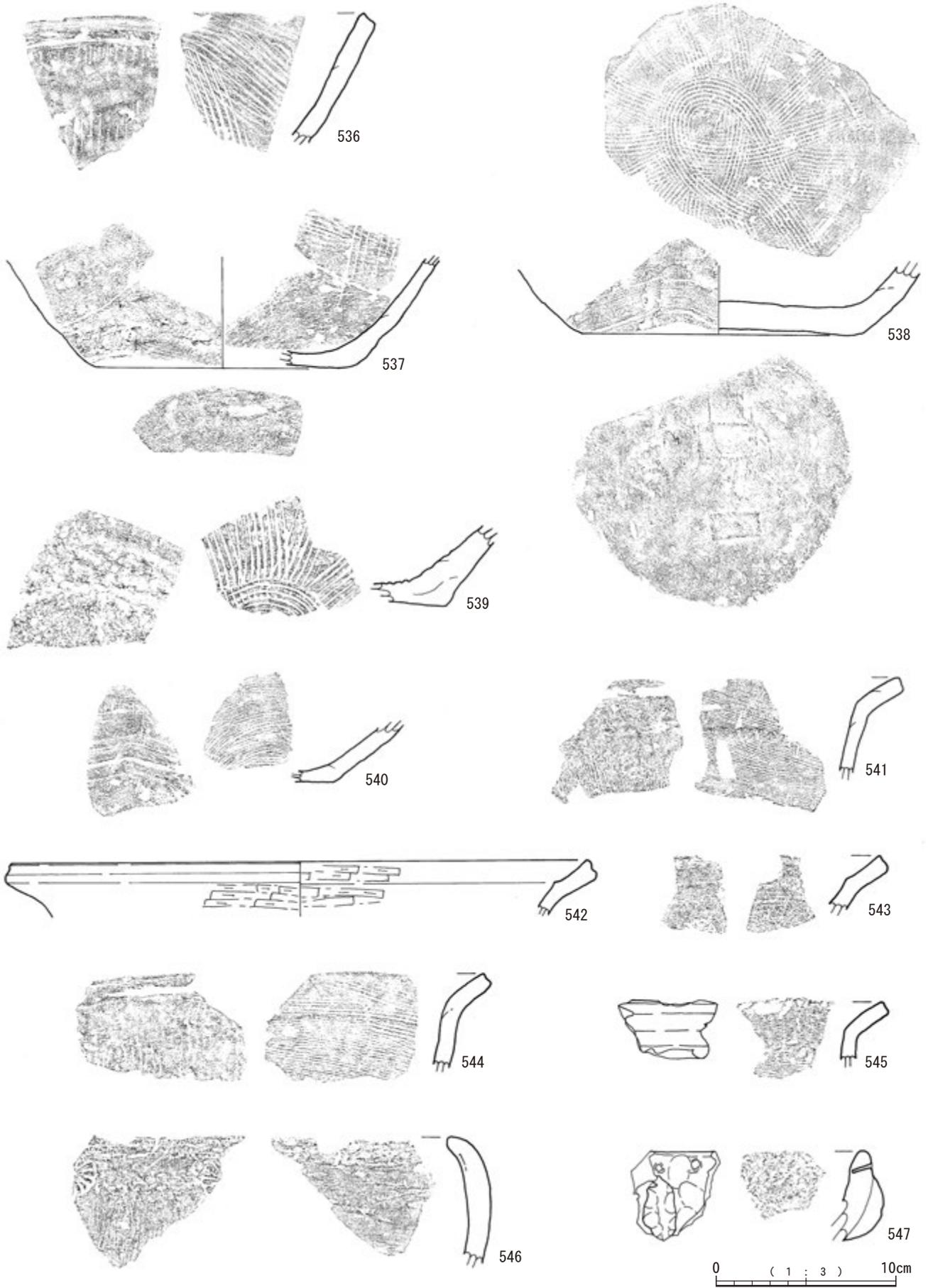
- ① 褐色砂質土(10YR 4/4) しまりやや強く粘性弱い V・VI層ブロックを含む
- ② 褐色砂質土(10YR 4/6) しまりやや弱く粘性弱い V・VI層ブロック多く含む
- ③ 暗褐色粘質土(10YR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い V・VI層ブロックを含む
- ④ 暗褐色粘質土(7.5YR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い V・VI層ブロック(6cm程度のブロックも混じる)を含む
- ⑤ 褐色粘質土(7.5YR 4/3) しまり弱く粘性やや弱い V・VI層小ブロック多く含む
- ⑥ 極暗褐色砂質土(7.5YR 2/3) しまり粘性ともに弱い V・VI層小ブロック少量含む



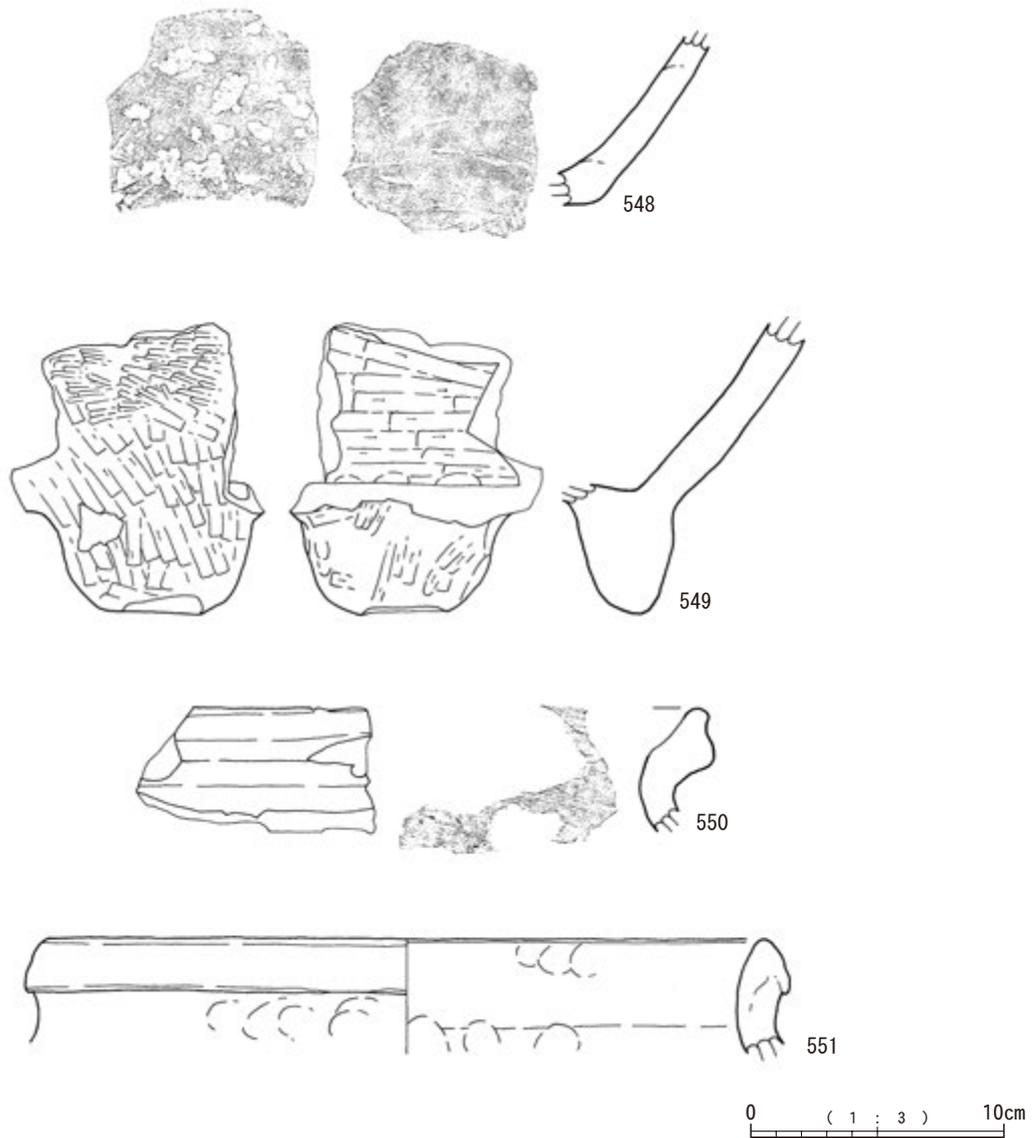
第109図 溝状遺構 2号断面 1～3



第110図 中世遺構内の遺物⑳



第111図 中世遺構内の遺物②



第112図 中世遺構内の遺物②

小235個の礫が出土し、溝に沿う形で広がっていた。埋土の状況から、溝が道として利用されている時期の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

(オ) 階段状出入口 (第108図)

H-52・53区の南側で検出した。溝を構築した段階ですでに造られていたと考えられる。溝の底面は平坦で、人が通れる規模であることから、溝内への上り下りのために設けられたと考えられる。部分的に硬化している面があった。北側に同様の施設は検出していない。

(カ) 分岐点 (第108図)

I-59区で検出した。溝を東から西に向かって進むと北側と南側に分岐するように構築されている。北側はそ

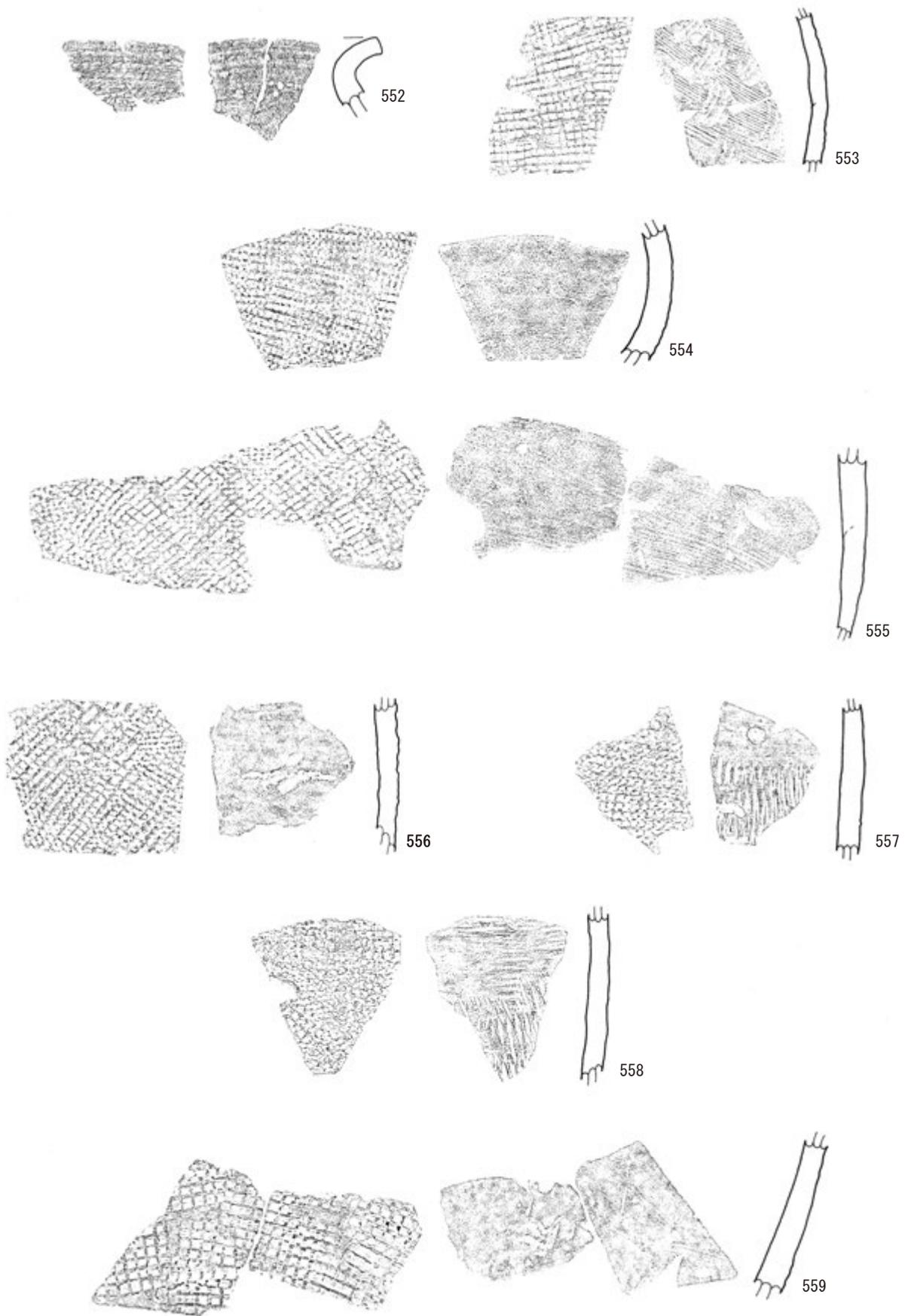
のまま続くが、南側は深さが次第に浅くなって、調査区外へ曲がれるようになっていたと考えられる。(オ)、(カ)の状況から、溝構築当初から通路として使うことも想定し造られた可能性がある。

出土遺物 (第110～117図 518～611)

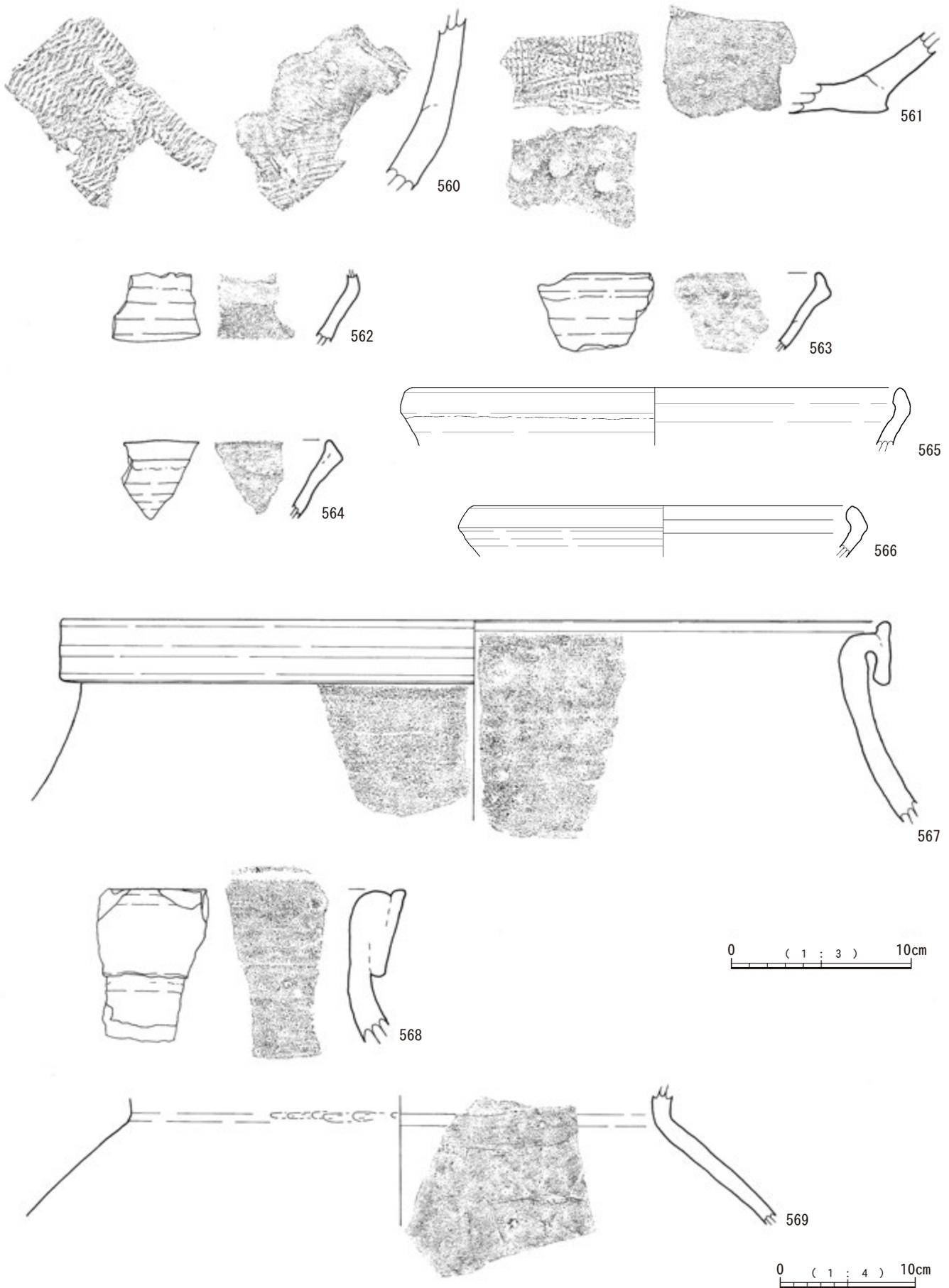
遺物は、土師器618点、瓦質土器74点、須恵器164点、国産陶器53点、白磁49点、青磁58点、青花1点、輸入陶器9点、土器220点、滑石製品5点が出土している。そのうち土師器15点、瓦質土器20点、須恵器17点、国産陶器6点、白磁12点、青磁8点、青花1点、輸入陶器6点、滑石製品5点を図化した。

① 土師器 (第110図)

518～531は土師器の坏・皿で、底部に糸切り痕が残



第113図 中世遺構内の遺物②③



第114図 中世遺構内の遺物②④

る。518～524は坏である。518～520は底径約10cmで、器高は低い。518は見込み中心部が若干盛り上がる。519は底部にモミの圧痕が残る。中世前半期のものと考えられる。

521～524は底径が約7～8cmで、器高は約3cmと高めである。521・522・524は体部にケズリ状の回転ヨコナデを施す。底部の切り離しが粗雑であるため、粘土がはみ出している。

525～530は小皿である。528は底径約8cmで、器高は約1.5cmと低い。外面の一部と内面は黒色化しており、使用による痕跡の可能性がある。中世前半期のものと考えられる。525・526・529は底径約6cm、器高約1.5cmでやや小振りである。腰のあたりにヘラケズリを行うことから、16世紀代の可能性がある。530は小型のものである。底径約4cmで底部は高さの低い柱状高台のようになる。16世紀代以降の可能性がある。531は胎土が白色で、他の土師器と異なるため、他地域から移入された可能性が

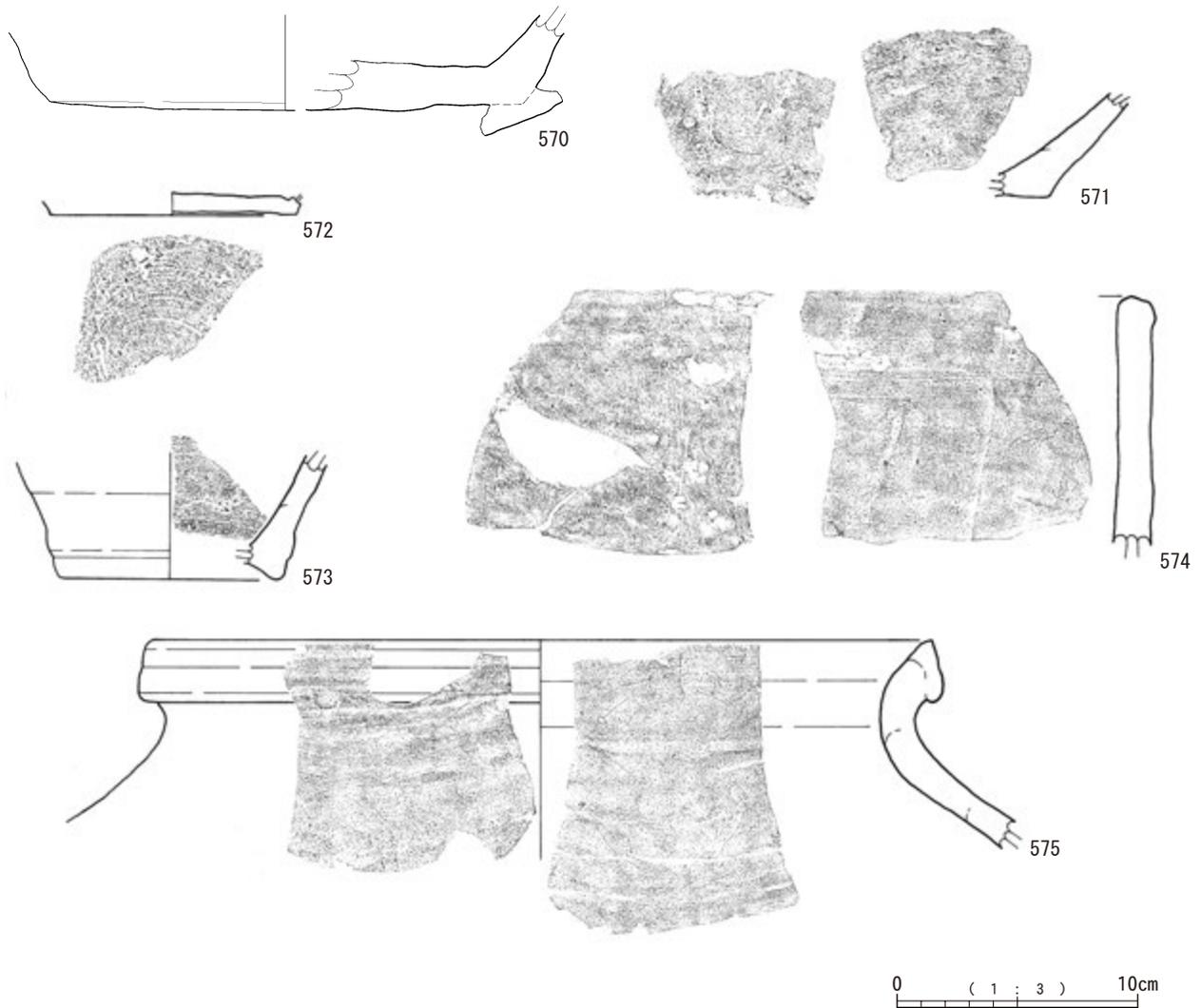
考えられる。摩耗のため調整は不明である。

532は土師器の甕である。外面に平行タタキ、内面にケズリを施す。体部下半の破片で、時期は古代である。

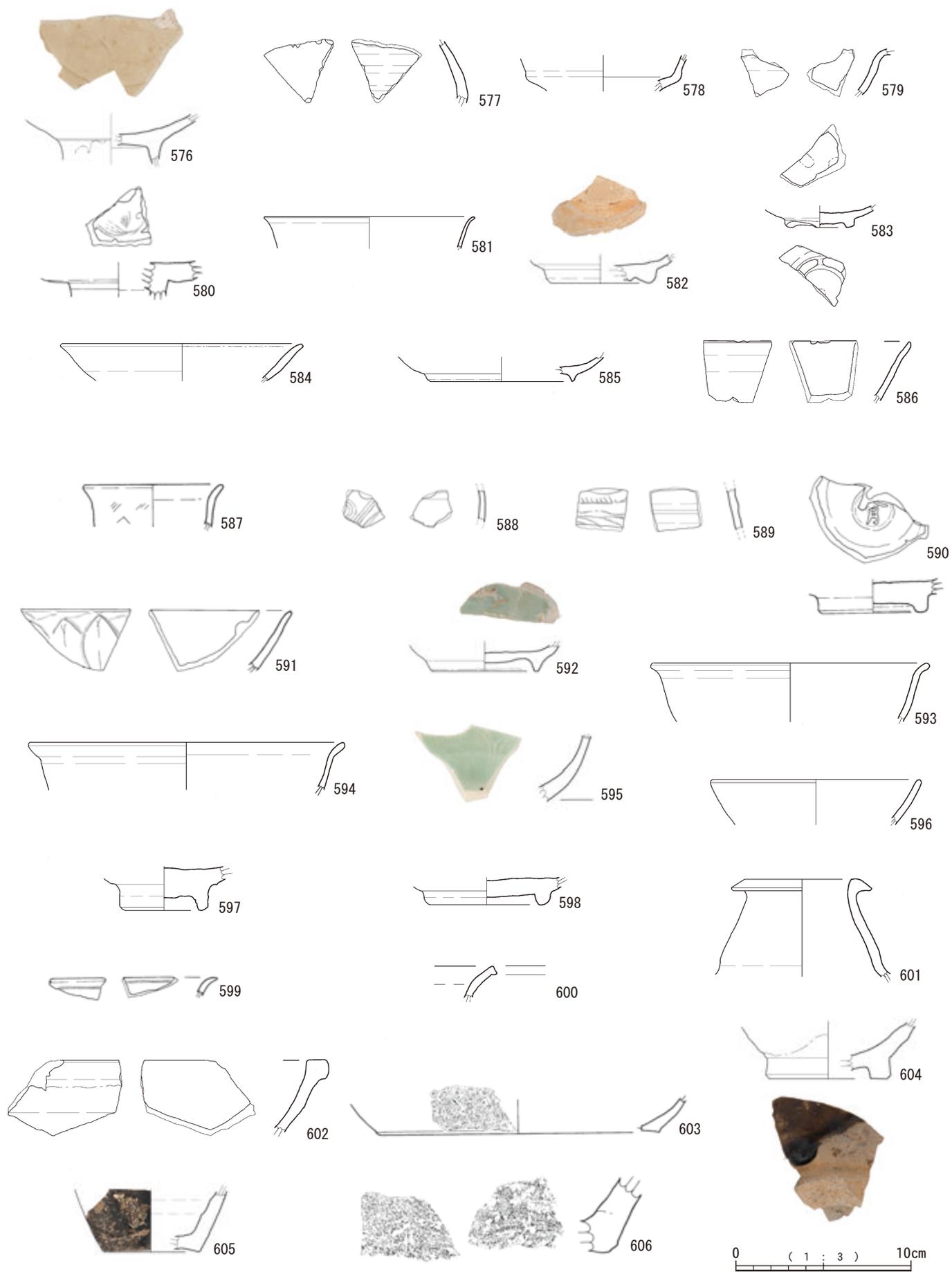
② 瓦質土器 (第110～112図)

533～551は瓦質土器で、533～540は挿鉢である。533は口縁部に注ぎ口が残り、口唇部は溝状に凹む。外面に指頭圧痕が残り、内面には5条一単位の播目が施される。534は口唇部が山形となり、内面は斜位にハケ目を施した後、縦方向の播目を施す。535・536は口唇部が溝状となるものである。535の内面には6条一単位、536には7条一単位の播目が施される。外面は筋状に延びる調整痕をナデ消している。

537～540は底部である。537の内面は使用による磨滅が著しく、わずかに播目が残存する。見込み付近は特に磨滅している。内面の播目は8条一単位とみられる。538は底部をわずかに上げ底としている。外面の底部近くはヘラケズリで調整する。内面には9条一単位の播目



第115図 中世遺構内の遺物②⑤



第116図 中世遺構内の遺物②⑥

が施される。見込みの中央から播目を放射状に施した後、「U」字状や「J」字状の播目を縦横に追加する。539は外面には指頭圧痕などが残るが、風化がはげしい。内面には8条一単位の播目が施される。見込みの中央付近から口縁部にかけて放射状の播目を施した後、見込み部分に同心円状の播目を施す。540の外面底部付近にヘラケズリを施す。内面には、横方向のハケメが施される。残存部分では播目は確認できない。

541～545は鍋である。口縁部がくの字状に開き、中世前半期のものと考えられる。内外面にハケ目・ケズリを施す。542・543は同一個体で、口縁部内面に小さな段をもつ。

547は湯釜の可能性ある。口縁部外面には、約2cmごとの間隔で孔を穿つ。孔は、貫通しておらず、7割程度穿ったところどとまっている。また、外面には把手状の耳が縦方向につけられる。

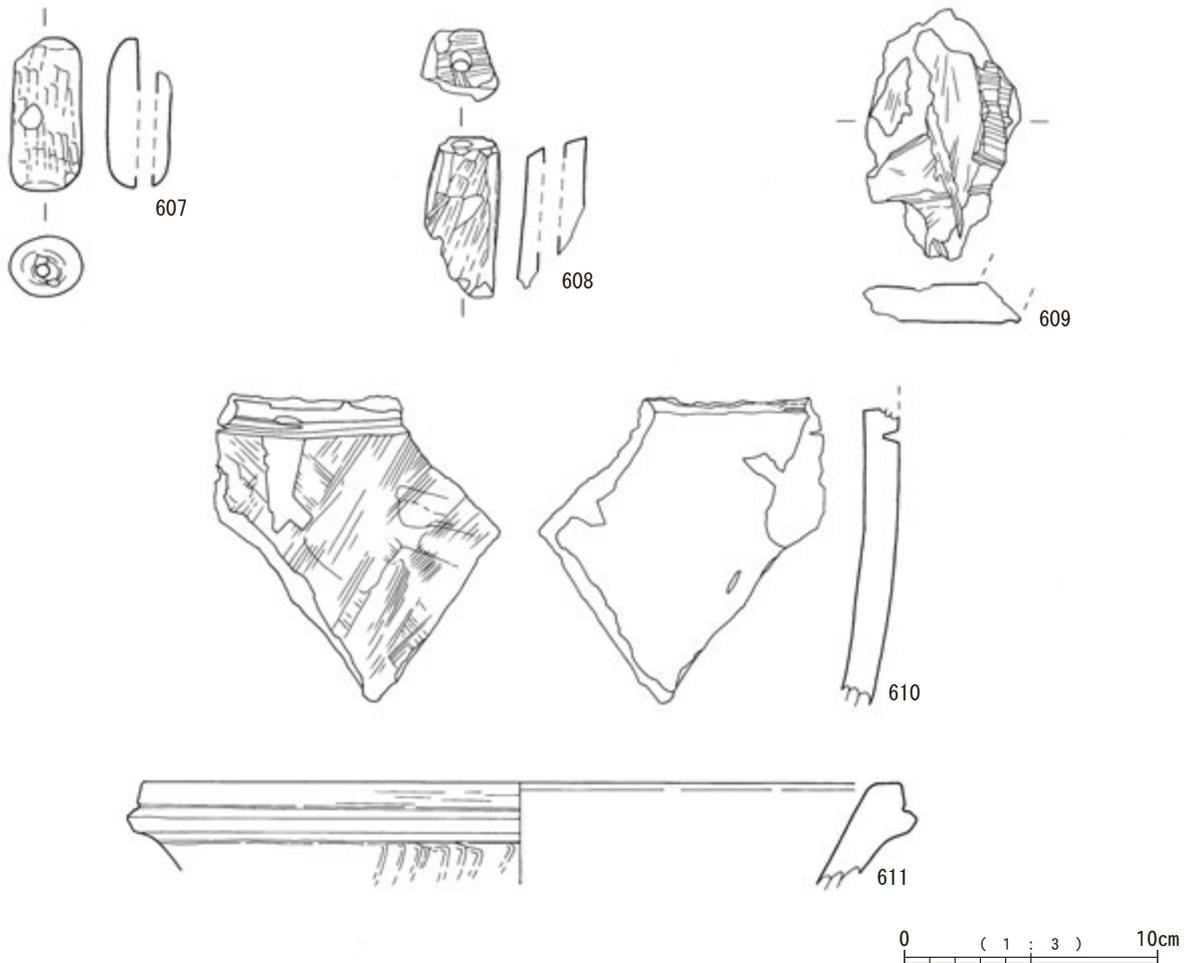
546・548・549は、瓦質土器の火鉢・風炉とみられる。546は口縁部が内湾するもので、風炉と考えられる。口縁部外面には、菊花文のスタンプが押捺される。内面にはハケ目とミガキが施される。548は底部である。内外面とも燻しが均一に施され、黒色を呈する。外面は被熱による影響ではじけた痕跡がみられる。549は脚部が1か所残っている。外面調整は胴部にミガキ、底部にハケ目を施す。内面調整はハケメである。

550・551は風炉もしくは壺と考えられる。550は口縁部が山形に直立する。内外面ナデ調整である。551は口縁が玉縁状に肥厚する。内外面ナデ調整である。

③ 須恵器 (第113・114図)

552～561は中世須恵器の甕である。552は口縁部を外方に向かって屈曲させる。内面に直径約2mmの穴を近接して3か所施す。

553～560は胴部片である。外面に格子目タタキ、内



第117図 中世遺構内の遺物⑦

面にはハケ目・ナデを施す。554の外面には自然釉が掛かる。中世後半期のものと考えられる。557・558は外面に目の細かい格子目タタキを施す。内面にはヨコナデと平行線状の当て具痕を施す。中世前半期のものと考えられる。560は外面に山形状のタタキがやや粗雑に施されており、タタキの重なりやズレが顕著な部分がある。中世前半期と考えられる。

561は底部である。成形が粗いため、体部と底部の境が外方へと突出する。

④ 東播系須恵器 (第114図)

562～566は東播系須恵器の片口鉢である。口縁部を屈曲させ、上方へと突出させるものである。口縁部外面には自然釉が掛かる。13世紀後半頃のものと考えられる。565のみ口縁部外面と内面に自然釉が掛かる。

⑤ 国産陶器 (第114・115図)

567～571は常滑焼の甕である。567は口縁部を折り返して断面「N」字状につくる。外面には自然釉が掛かる。中野編年の8型式(14世紀後半)に該当する。568の口縁部は外面に粘土を被せ、帯状に肥厚している。中野編年の7型式(14世紀前半)に該当する。569は肩部の外面に自然釉がかかる。胴部内面にケズリを施す。570～573は底部である。570は底部に須恵器片が1か所付着している。内面には自然釉がかかる。572は底面には糸切り痕が残る。器種は不明である。

573は東海系の捏鉢である。器壁は厚く、外面には粗いケズリを施す。内面にはわずかに自然釉が掛かる。底部には、高さ約0.5cmの低い高台がつく。

574・575は産地不明の国産陶器である。574は備前焼に類似する陶器である。口縁部が直行することから、大型の鉢と考えられる。備前焼にはこのような器形のもの確認できない。

575は壺で口縁部が玉縁状に膨らむ。常滑焼に類似するが、胎土・器壁の厚さなどに違いがある。また、器壁が厚いという点に関しては、備前焼と共通するものの、備前焼にはない器種である。

⑥ 白磁 (第116図)

576・577・584は中世前半期のものである。576は碗の底部である。高い高台が細く直立する。高台の内面は無釉である。見込みには短い櫛目文様を描く。歴博分類白磁碗V-4類、大宰府分類白磁碗V-4b類に該当する。12世紀中頃～後半である。577は壺の胴部である。内外面に薄く透明な釉が掛かる。584は口縁皿である。口縁部を釉剥ぎするものである。歴博分類白磁皿IX類、大宰府分類白磁皿IX類に該当する。13世紀後半～14世紀初頭である。

578～581・583・585は中世後半期のものである。578は枢府系の坏である。体部途中で大きく屈曲する。屈曲部の外面は、わずかに盛り上がり突帯状となる。歴博分

類の白磁碗枢府系、森田分類B群、大宰府分類白磁坏B群に該当する。14世紀中頃～後半である。579・580はビロースクⅢ類の碗である。580は見込みに印花が押捺される。外面は無釉である。歴博分類白磁碗ビロースクタイプⅢ類に該当する。14世紀後半～15世紀前半である。

582は碗の底部である。高台は断面が三角形となる。外面は無釉であり、内面は蛇目釉剥ぎされる。福建産のものに類似する。時期は不明である。586は朝鮮白磁の碗である。抹茶用で、口縁部がわずかに外反する。

583は挟り高台の皿で、高台接地部分は無釉である。見込みにも目跡が残る。歴博分類白磁皿B群、森田分類D群に該当する。15世紀前半である。

581・585は端反の皿である。581は口縁部で端部が外反する。585は底部である。高台接地部分は、釉剥ぎがなされる。歴博分類白磁皿C1群に該当する。15世紀後半である。

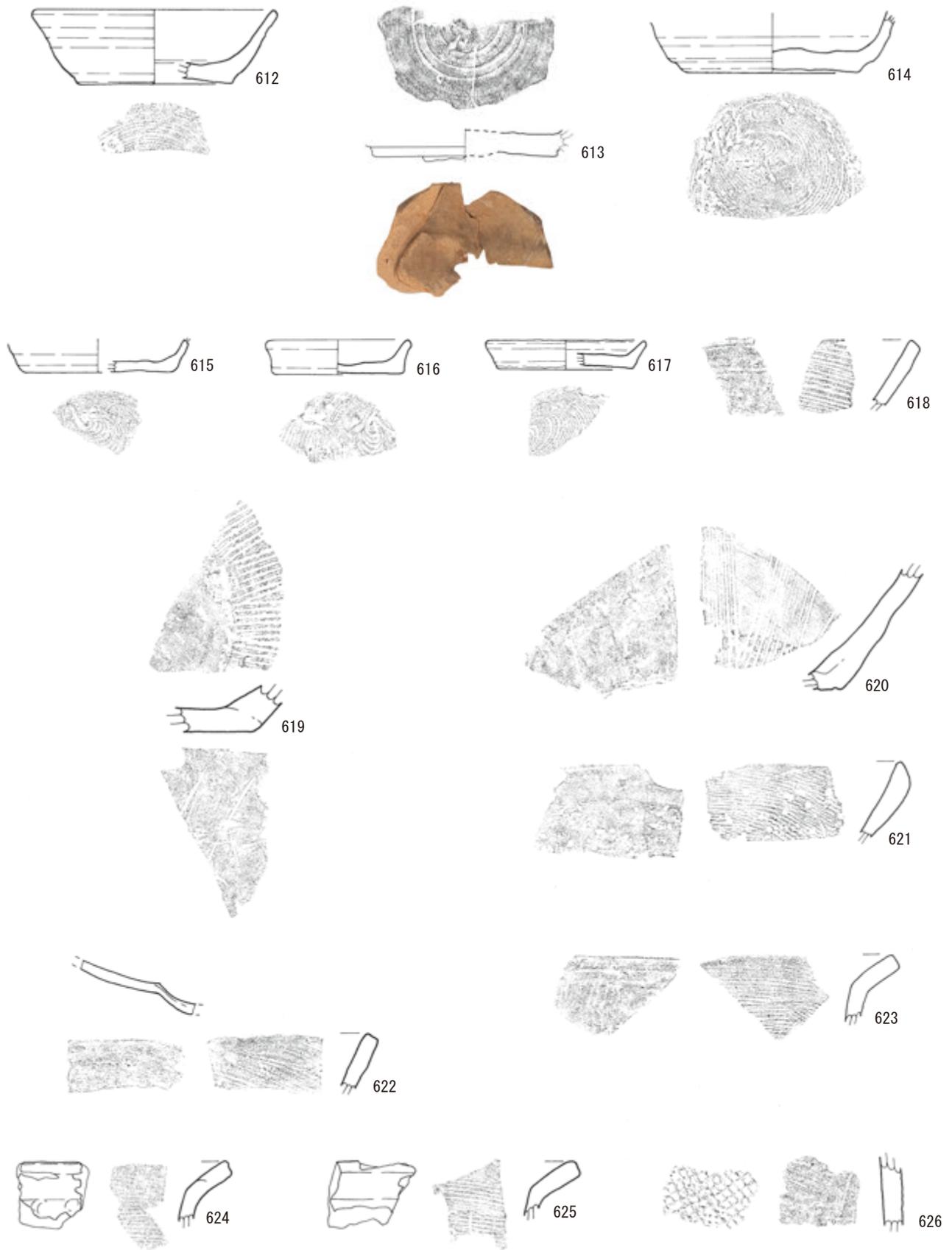
587は青白磁の瓶もしくは坏と考えられる。外面には鋸歯状の浮文が施される。馬上杯の可能性もある。588・589は青白磁の梅瓶と考えられる。588は透明感のあるミントグリーン系の釉薬が外面にかかるもので、数条の沈線と、同心円もしくは渦状の文様が描かれる。内面は無釉である。589は外面に浮文と沈線による文様が入る。時代は中世前半である。

⑦ 青磁 (第116図)

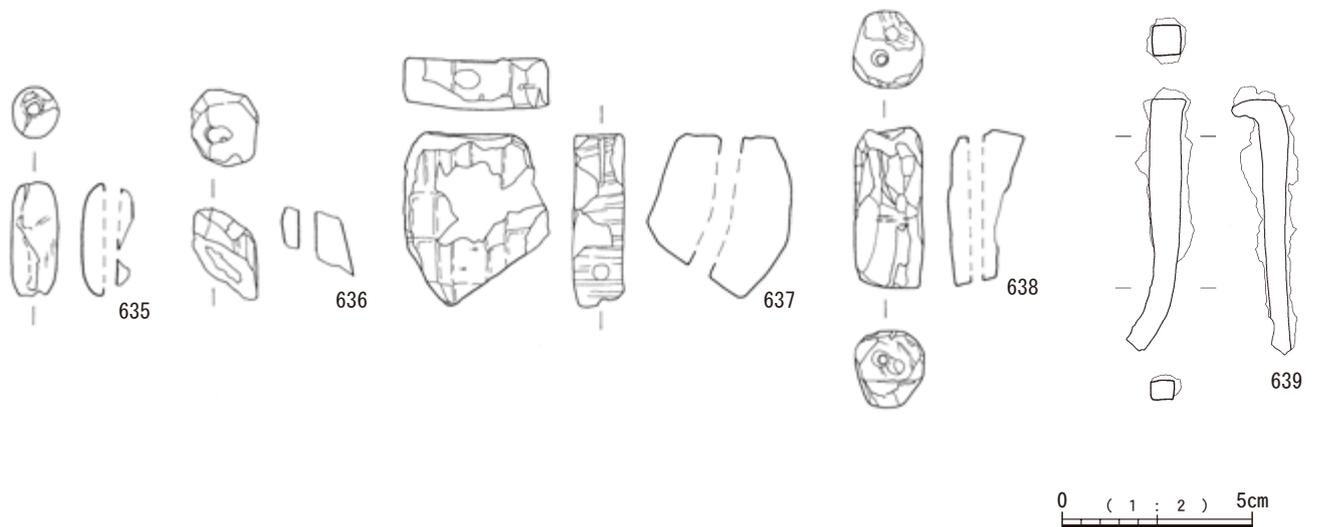
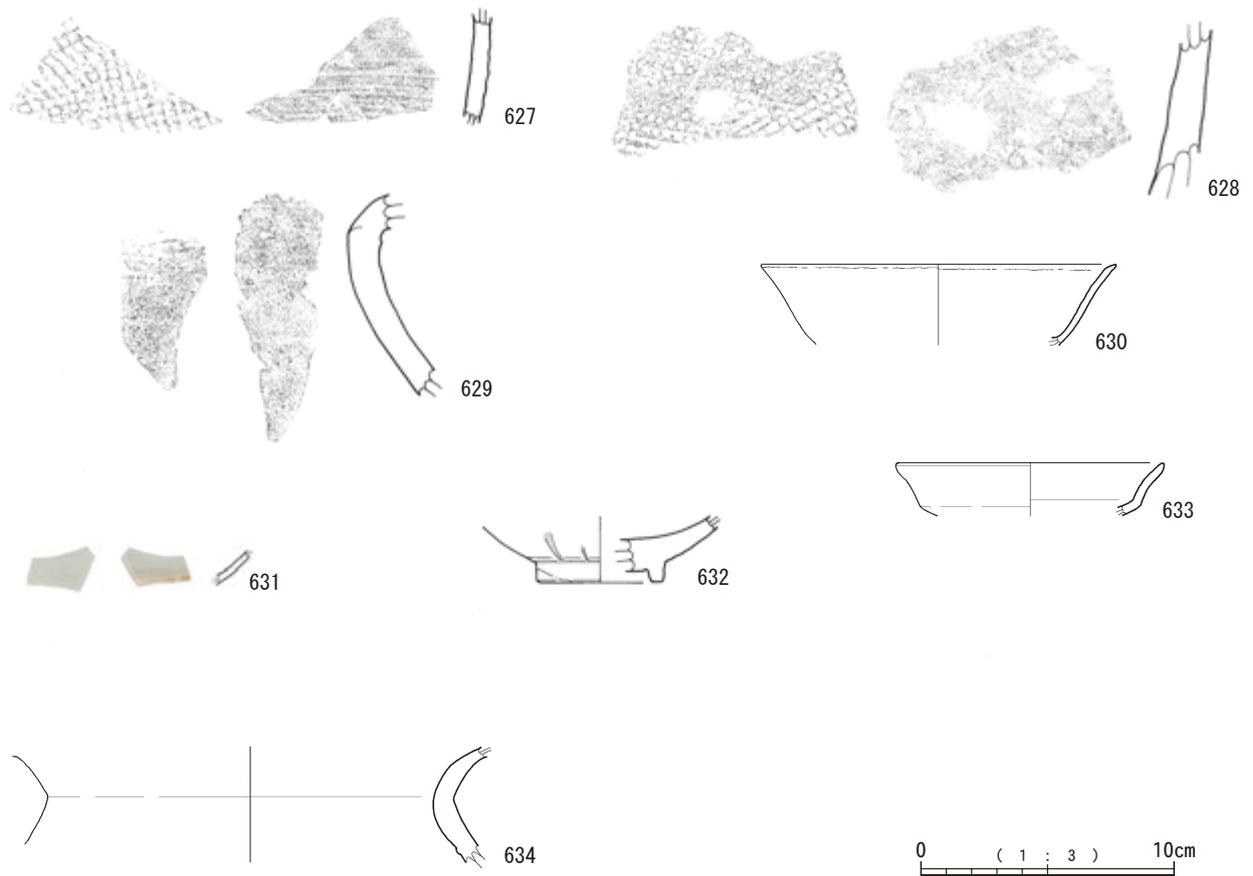
590は碗の底部である。高台は断面四角形で、高台の内外面は無釉である。見込みには「有」もしくは「八月」などの可能性のあるスタンプが押捺される。歴博分類の龍泉窯系青磁碗A類、大宰府分類龍泉窯系碗I類に該当する。12世紀後半～13世紀初頭である。591は鎚蓮弁文碗の口縁部である。口縁はわずかに外反する。歴博分類の龍泉窯系青磁碗B1類、大宰府分類龍泉窯系碗B-1類に該当する。13世紀中頃～14世紀前半である。

592は皿の底部である。高台は細身でシャープなものであるが、釉が厚く掛かるためやや丸みを帯びる。見込みには、型押しによる浮彫りの魚文が施される。胴部上半を欠損するが、歴博分類の折縁皿の見込みに双魚文を施したのものと考えられる。13世紀後半～14世紀前半である。

593・594は碗の口縁部である。口縁部が比較的シャープなつくりで釉は薄く透明感がある。歴博分類の龍泉窯系青磁碗D1類、上田分類D-1類に該当する。14世紀後半～15世紀前半である。595は碗の胴部である。外面は無文である。内面には、「Y」字状の文様の一部が残存する。歴博分類の龍泉窯系青磁碗D2類、上田分類D-2類に該当する。15世紀中頃～後半である。596は歴博分類青磁内彎皿の口縁である。15世紀中頃である。597は碗の底部である。高台端部外面は、斜めに面取りをする。高台内面は無釉である。15世紀後半である。



第118図 中世遺構内の遺物⑳



第119図 中世遺構内の遺物⑳

598は皿の底部である。高台は断面方形で、底部外面の中央は無釉である。所属時期は15世紀と考えられる。

⑧ 青花(第116図)

599は碗もしくは皿の口縁部である。口縁は外反し、内外面に界線が施される。釉の発色は青磁に近いものである。近世の可能性もある。

⑨ 輸入陶器(第116図)

600は器種不明で口縁部が外反し、端部は下方に突出する。ほぼ無釉である。601は金華鉄店窯の壺で、口縁は外側に屈曲する。また、口縁上面は斜めに面取りをする。内外面とも施釉がなされる。602は磁竈窯の盤である。口縁部は屈曲し、「L」字状になる。口縁上面から外面屈曲部にかけて、釉薬を掻き取っている。

603は泉州窯系の黄釉盤である。黄釉が外面は底部近くまで、内面は全体に掛かる。604は器種不明で、底部に角高台をもつ。黒色・飴色の釉薬が、内面と胴部下半まで厚く掛かる。605は壺の底部である。外面には粗い砂粒が付着し、内外面黒色である。606は大型品の甕の底部である。中世前期の褐釉陶器の可能性もある。

⑩ 滑石製品(第117図)

607～611は滑石製石鍋の転用品である。607・608は筒状で中央に穿孔があり、沈子と考えられる。607は円筒状、608は方柱状である。石鍋の鏝部分の破片を再利用したものとみられる。609は底部の破片である。610は胴部の破片である。断面を見ると擦り切り加工によって切り離されている。表面には擦り切り途中の溝が残る。611は石鍋の口縁部の破片で、鏝(横耳)が残っている。

イ 溝状遺構2号(第103・104図)

I-51区からI-57区のⅢ層上面で検出した。溝状遺構1号と並行する。I-57区で一部が溝状遺構1号と直交するように分岐する。長軸がほぼ東西方向に延びており、長軸はN65°Eを示す。規模は、長さ62m、幅2.1～2.3mであり、東端と西端はともに調査範囲外に続く。検出面からの深さは、最深部で1.5mである。底面がほぼ平坦で断面形はすり鉢状になっている部分と、「V」字形に近い形状の部分がある。埋土は、南側から流れ込んだレンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが、埋土の層によってブロックで入っている土の状況が変わり、4～6枚に分かれていた。埋土は、混在土であり、堆積の状況から、溝構築時に掘り上げた土で南側に土塁を造っていた可能性がある。

出土遺物(第118・119図 612～639)

遺物は、土師器309点、瓦質土器16点、須恵器53点、国産陶器5点、白磁6点、青磁11点、輸入陶器1点、土器76点、滑石製品4点、金属製品1点が出土している。そのうち土師器7点、瓦質土器7点、須恵器4点、国産陶器1点、白磁2点、青磁2点、輸入陶器1点、滑石製

品4点、金属製品1点を図化した。

① 土師器(第118図)

612～614は坏で、全て糸切り底である。612は口縁部内面に黒色部分があり、タール状の付着物がみられる。613の底面には粘土塊が付着しており、回転台からの切り離しが粗雑に行われた結果と考えられる。614はの底部切り離しは粗雑である。

615～617は糸切り底の小皿である。

② 瓦質土器(第118図)

618～622は播鉢である。618は内面に斜位の強いハケ目を施す。619は底部である。内面に7条一単位の播目を施す。620は内外面ともに黒色で、燻しが強いものである。播目は8条一単位である。621は口縁部が山形で、内面に斜位のハケ目を施す。622は内面には斜位に強いハケ目が施され、注ぎ口がわずかに残る。他の播鉢よりも焼成が良好で堅緻である。

623～625は鍋である。胴部から外方へと屈曲して口縁が開く。内面には、横方向のハケ目が施される。外面には指頭圧痕などが残る。

③ 須恵器(第118・119図)

626～628は中世須恵器の甕である。内面にはハケ目が施される。外面には格子目タタキがみられる。

629は常滑産の甕である。外面にはわずかに自然釉が付着する。14世紀前半頃のものと考えられる。

④ 白磁(第119図)

630は口禿皿の口縁部である。口縁部は釉剥ぎがなされる。歴博分類白磁皿Ⅸ類、大宰府分類の白磁皿Ⅸ類に該当する。13世紀後半～14世紀初頭である。631は内面には印花が入る。器壁は薄いが、胴部片のため器種は不明である。14世紀代と考えられる。

⑤ 青磁(第119図)

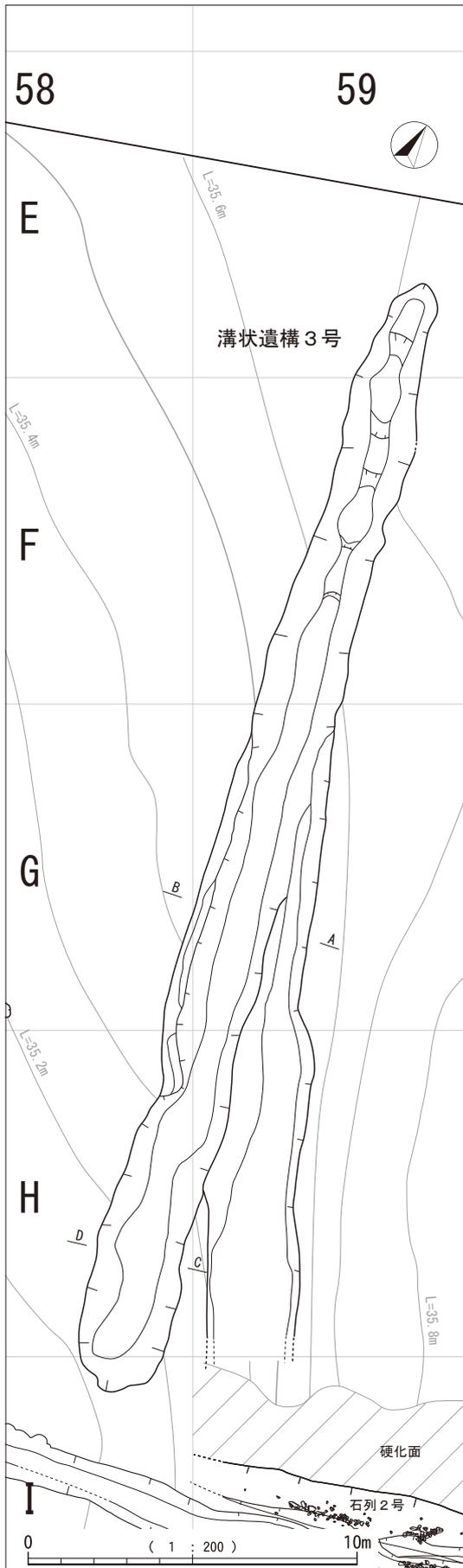
632は鎗蓮弁文の碗の底部である。高台は断面四角形で、高台接地部分及び高台内面は無釉である。歴博分類龍泉窯系青磁碗B1類、大宰府分類青磁碗Ⅱ類に該当する。13世紀中頃～14世紀前半である。633は、同安窯(甫田窯)系の青磁皿である。胴部に屈曲部があり、口縁は外反しながら立ち上がる。見込みにはわずかに櫛描文が残る。歴博分類同安窯系皿、大宰府分類D期に該当する。12世紀後半～13世紀初頭である。

⑥ 陶器(第119図)

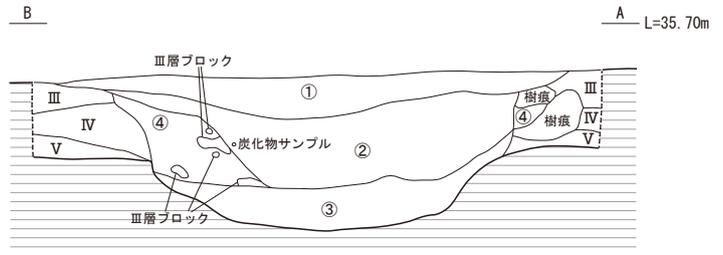
634は輸入陶器の壺である。内外無釉で中世前半期と考えられる。

⑦ 滑石製品・鉄製品(第119図)

635～638は滑石製石鍋を転用した滑石製品である。635～638は筒状で中央に穿孔があることから、沈子と考えられる。636は中心軸に対して斜めに破損している。加工途中で、節理などの影響で破損した可能性がある。638は方柱状で、穿孔は2か所認められる。石鍋の鏝部



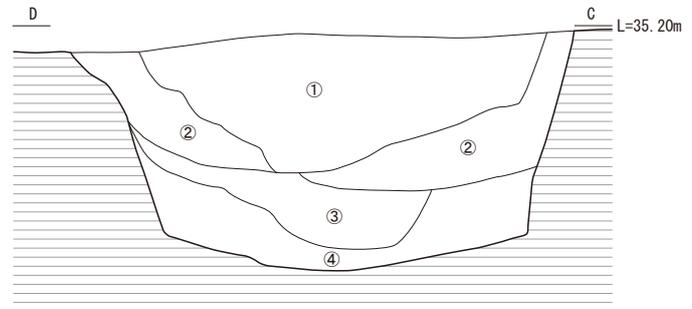
土層断面 1



土層断面 1

- ① 褐色砂質土(10VR 4/4) しまりやや強く粘性やや弱い 白・赤色粒子, 炭化物を少量含む
- ② 暗褐色砂質土(10VR 3/4) しまりやや強く粘性やや弱い 白・赤色粒子, 炭化物を少量含む
- ③ 暗褐色粘質土(10VR 3/4) しまり弱く粘性やや弱い III層ブロックを含む
- ④ 暗褐色粘質土(10VR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い 20cm程度のIII層ブロックを含む

土層断面 2



土層断面 2

- ① 極暗褐色砂質土(7.5YR 2/3) しまりやや強く粘性やや弱い
- ② 暗褐色砂質土(10YR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い III・IV層ブロック多く含む
- ③ 褐色粘質土(10YR 4/6) しまり粘性ともに弱い IV~VI層ブロック多く含む
- ④ 褐色粘質土(10YR 4/4) しまり粘性ともにやや弱い IV・V層の混じり土 VI層ブロックを含む



第120図 溝状遺構 3号および断面 1・2

分の破片を再利用したものとみられるが、穿孔に失敗した可能性が高い。637は台形状となった石鍋の胴部片を再利用したものと考えられる。穿孔が斜めに貫通しており、失敗品と考えられる。

639は方柱状の角釘である。「L」字状に折り曲げて、釘の頭としている。

ウ 溝状遺構3号(第120図)

E～I-58・59区のⅢ～Ⅵ層上面で検出した。I-58区で溝状遺構1号と直交する。長軸がほぼ北北西から南南東方向に延びており、長軸はN17°Wを示す。規模は、長さ35m、幅2.5～3mであり、北側は調査区内で、南側は溝状遺構1号と直交するところで立ち上がる。検出面からの深さは0.8～0.9mである。溝状遺構1・2号と違い断面形は、箱堀に近い形状である。埋土は、レンズ状堆積になっており、一定の方向からの顕著な流入は見られなかった。埋土はⅡ～Ⅵ層の土が混ざった状態で、4～6枚に分かれていた。遺構の最終段階の機能としては、道としての利用が考えられるが、①E F-59区、H-58区で検出した部分は幅が狭く、深い箇所がある。②溝状遺構1号に直行する、といった点から溝状遺構1号に関連し、構築段階では溝としての機能をもっていた可能性がある。

出土遺物(第121図 640～651)

遺物は、土師器18点、須恵器7点、国産陶器7点、白磁3点、青磁3点、輸入陶器2点、土器9点が出土している。そのうち瓦質土器2点、須恵器2点、国産陶器2点、白磁2点、青磁2点、輸入陶器2点を図化した。

640・641は瓦質土器の播鉢である。640は口唇部が浅い溝状となる。内面には横方向に強いハケ目が施される。641は胴部で、内面に斜位の強いハケ目を施した後、縦方向の播目を施す。播目の単位は破損のため確認できない。

642・643は中世須恵器の甕である。中世前半期のものと考えられる。642は器壁が厚い。内面にはハケ目とナデが施される。外面には頸部以下に平行タタキが施される。643はの内面は瓦質化し、部分的にはじけたような痕跡がみられる。外面には、格子目タタキが施される。破片を円盤状に再加工した可能性がある。

644・645は瀬戸焼の壺の胴部片である。内面は無釉で、外面は透明感のある薄い緑色系の釉が施される。644は外面に4条の沈線を横方向に施す。中世前半期のものであり、13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。

646・647は白磁である。646は内湾する皿である。647は白磁の「面取杯」とされるものである。上面からみた形状が八角形で「八角杯」とも呼称される。体部の底部以下は無釉である。いずれも歴博分類白磁皿B群、森田分類D群に該当する。15世紀前半である。

648・649は龍泉窯系青磁である。648は口縁部が内湾

する束口碗である。外面には横方向の沈線(界線)が4条みられる。内面には、劃花文とみられる文様が描かれる。14～15世紀である。649は幅広蓮弁の碗である。歴博分類龍泉窯系青磁碗B2類、上田分類B-II類に該当する。14世紀後半～15世紀中頃である。

650・651は輸入陶器の甕と考えられる。内外面とも施釉される。650は内外面に白色の釉葉が掛かる。651の底面には粗い砂粒が付着する。

エ 溝状遺構4号(第122・123図)

D～I-63・64区のⅢ～Ⅵ層上面で検出した。遺跡の調査範囲を縦断する。D～F区にかけては長軸がほぼ北北西に延びるが、F・G区境辺りから南東方向に延びている。規模は、長さ56m、幅2.5～4mであり、北端と南端はともに調査範囲外に続く。検出面からの深さは0.9～1.4mである。断面形は溝状遺構3号に類似している。部分的に、溝状遺構1号のような段をもつ。埋土は、レンズ状堆積になっており、溝状遺構1・2号ほどではないが、西側から流れ込んでいる傾向が見られた。埋土はⅡ～Ⅵ層の土が混ざった状態で、4～5枚に分かれていた。遺構の機能としては、溝状遺構1・3号と同じような利用が考えられる。

溝状遺構4号に関連する遺構として溝内で、集積1基、石列2列を検出した。

(ア) 集積3号(第124図)

H-63・64区の底面付近で検出した。長さ約1m、幅0.4mの範囲で、6個の礫と瓦質土器4点が出土した。被熱している状況や掘り込みなどはなかった。用途は不明である。

(イ) 石列3(第125図)

G-64区の床面付近で検出した。全長は約7.3mで大小44個の礫と瓦質土器が数点出土した。南北に走る溝の東側壁に沿うように礫が分布している。西側の壁付近には礫は出土していない。用途は不明である。

(ウ) 石列4(第125図)

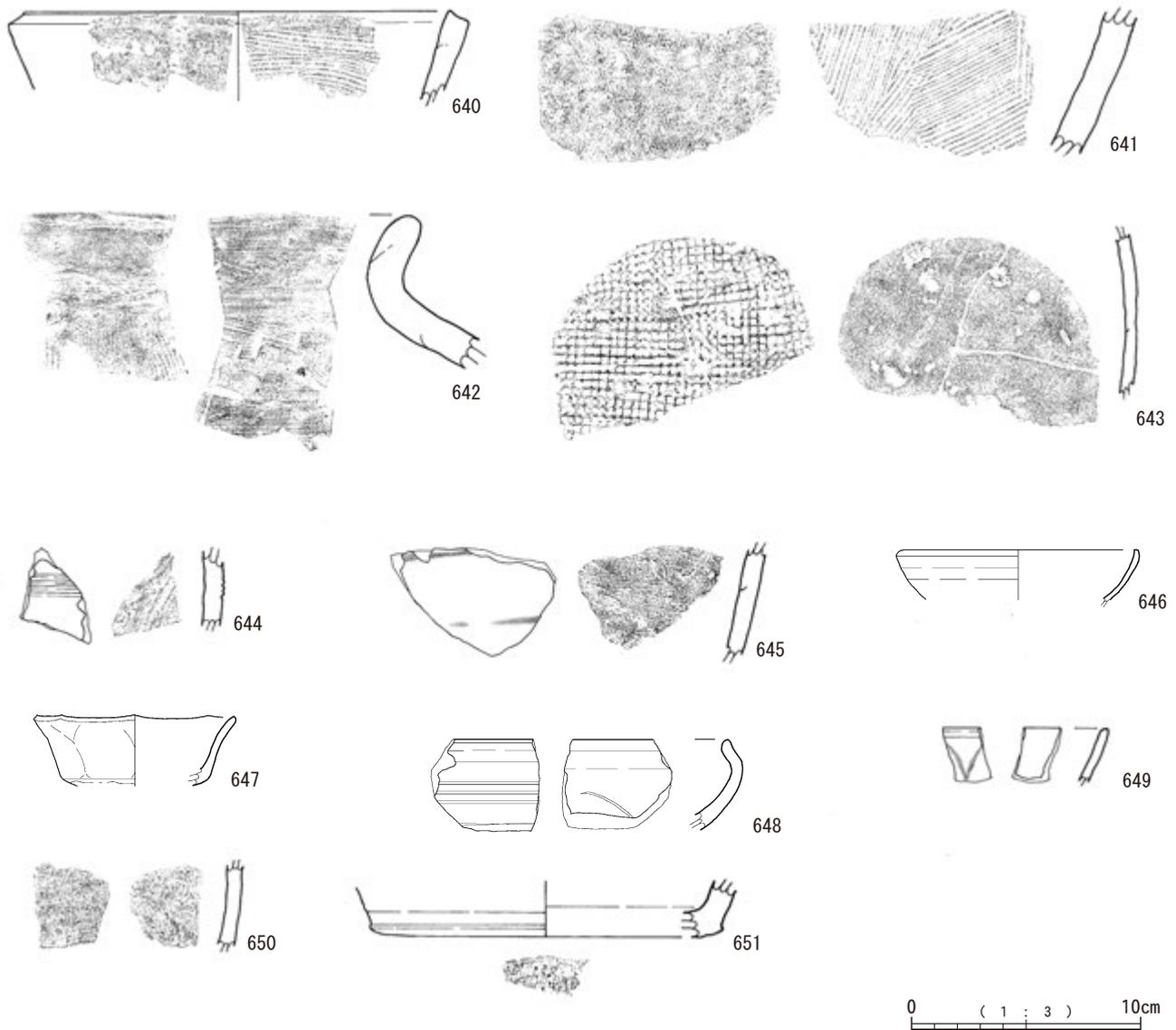
G・H-63区の西壁の段になっている部分で検出した。全長は約3mで大小16個の礫が出土した。石列の南側は底面が高く盛り上がって、溝が浅くなっている部分がある。石列3とは反対に、東壁には礫が出土しなかった。用途は不明である。

出土遺物(第126図 652～691)

遺物は、土師器119点、瓦質土器20点、須恵器24点、国産陶器14点、白磁19点、青磁26点、青花4点、輸入陶器5点、土器19点が出土している。そのうち土師器2点、瓦質土器15点、須恵器6点、国産陶器5点、白磁4点、青磁5点、青花2点、輸入陶器1点を図化した。

① 土師器(第126図)

652・653は土師器小皿である。体部の様相から、中世



第121図 中世遺構内の遺物③

前半期のものと考えられる。底部には糸切り痕が残る。

② 瓦質土器 (第126・127図)

654は器種不明である。上端は内面に小さく突出し、下端は平坦に成形されている。器壁が厚く、内面には、連続した溝状の線刻を施す。酸化焼成のため、色調は赤みを帯びる。655は器種不明である。非常に厚手で、大型品の一部の可能性はある。

656は鉢で、口縁部の一部を薄く作っている。内外面ナデ調整で、外面には指頭圧痕が残る。657は湯釜の体部上半である。外側には、鑲付が貼り付けられている。鑲付の頂部は欠損する。

658は風炉の口縁部付近である。上下に横方向の沈線を施し、その中を斜位の連続した沈線で充填し、施文帯とするものである。659は大型の浅鉢であると考えられ

る。口縁部を外側に屈曲させ、水平の鑿状とする。内面はわずかに突出させる。外面の口縁部下には、菊花文のスタンプを連続して押捺する。内面はハケ目を施す。

660～668は播鉢である。660は口縁部に注ぎ口がつくものである。661は口唇部が浅い溝状となり、胴部内面に6条一単位のハケ目を施す。662は口唇部が山形となり、須恵質で焼成が良い。内面に細かいハケ目を施す。663は口唇部が平坦で、内面に斜位の強いハケ目を施す。664は外面に縦位の粗いハケ目、内面に斜位の強いハケ目を施す。

665～668は播鉢の胴部である。播目は、665が5条一単位、666が9条一単位、667・668は7条一単位である。

③ 須恵器 (第127図)

669～673は中世須恵器の甕である。中世前半期のもの

のと考えられる。669は胴部外面に縦位のハケ目、内面に斜位と横位のハケ目を施す。670は外面に格子目タタキが施される。画質焼成のため、内外面ともに黒色化している。671は全体的に白色で、表面は粉っぽい。外面には大きめの山形状のタタキ、内面にはナデが施される。672・673は外面に山形状のタタキが丁寧に施される。内面には強めのハケ目が残る。

④ 東播系須恵器（第127図）

674は片口鉢である。口縁部は直立して山形となり、注ぎ口が1か所残っている。内面と口縁部外面には自然釉が付着する。

⑤ 国産陶器（第127・128図）

675～678は常滑焼で甕である。675は、口縁部を折り返して帯状に肥厚させている。内面は横ナデを施す。外面には自然釉が付着する。中野編年の7期（14世紀初頭から前半）に該当すると考えられる。676・677は外面には自然釉が掛かる。678は底部外面をヘラケズリによって成形している。底面は未調整で、内面はナデ調整を施す。

679は備前焼の播鉢である。口縁端部に浅い沈線を1条施す。重根編年のⅡA期（12世紀末～13世紀前半）に該当する。

⑥ 白磁（第128図）

680～682・684は皿である。680は口縁が内湾し、外面の体部下半は無釉である。見込みには粗い砂粒が付着する。684も同型式である。681は高台に4か所の抉りが入る。見込みには目跡が残る。全体的に黒色化しているため、二次焼成を受けた可能性がある。680・681・684は、歴博分類白磁皿B群、森田分類D群に該当する。15世紀前半である。682は口縁部が外反する。歴博分類白磁皿C1群、森田分類E群に該当する。15世紀後半である。

⑦ 青磁（第128図）

683は龍泉窯系青磁碗の底部である。見込みには、ヘラ状工具で片切彫りの劃花文が描かれる。歴博分類龍泉窯系青磁碗A類、大宰府分類龍泉窯系青磁碗I類に該当する。12世紀後半～13世紀前半である。685は龍泉窯系鎬蓮弁文の碗である。口縁はわずかに外反する。歴博分類龍泉窯系青磁碗B1類、大宰府分類青磁碗Ⅱ類に該当する。13世紀中頃～14世紀前半である。686は龍泉窯系青磁碗で、外面に線描き蓮弁文を施す。見込みは無釉である。胎土・釉などの特徴から、福建産の可能性が高い。歴博分類龍泉窯系青磁碗B4類に該当する。15世紀後半～16世紀前半である。687は龍泉窯系青磁の無文碗である。歴博分類龍泉窯系青磁碗D1類に該当する。14世紀後半～15世紀前半である。688は短頸壺の口縁部と考えられる。中世前半期とみられる。

⑧ 青花・輸入陶器（第128図）

689は漳州窯系の碗である。口縁部の内外面には、界

線が巡り、外面には花卉文が描かれる。外面の底部以下は無釉である。690は景德鎮系の皿である。口縁部の内外面には、界線が施される。外面には浮草文とみられる文様が描かれる。歴博分類染付皿E群に該当する。16世紀中頃～後半である。

691は輸入陶器の胴部片で、盤もしくは鉢の可能性がある。内外面ナデ調整を施す。中世前半期と考えられる。

オ 溝状遺構5号（第129図）

G-64区からG-67区のⅥ層上面で検出した。長軸がほぼ東西方向に延びており、長軸はN55°Eを示す。規模は、長さ36m、幅0.5～0.6mであり、西側は溝状遺構4号に直交し、東側は本年度調査範囲外に続く。検出面からの深さは最深部で0.3mである。底面がほぼ平坦で断面形はすり鉢状になっている。埋土は、レンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが、2面に分かれていた。他の溝状遺構とは異なり幅が狭く浅い。排水用や区画溝として造られた可能性がある。

出土遺物（第130図 692～694）

遺物は、土師器24点、瓦質土器3点、須恵器2点が出土している。そのうち土師器1点、瓦質土器2点を図化した。

692は完形の土師器坏である。底部には糸切り痕が残る。平面形はややゆがみがあり、口縁部も弱い波状となる。底部には亀裂が入る。内外に煤が付着している。

693・694は瓦質土器の播鉢である。693は口縁部に注ぎ口がみられる。外面はナデ調整を行い指頭圧痕が顕著に残る。内面は斜位のハケ目を施した後、縦方向に播目を施す。播目は9条一単位である。694は外面にナデ調整を施し、内面には斜位のハケ目を施した後、縦方向の播目を施す。播目は9条一単位である。

カ 溝状遺構6号（第131図）

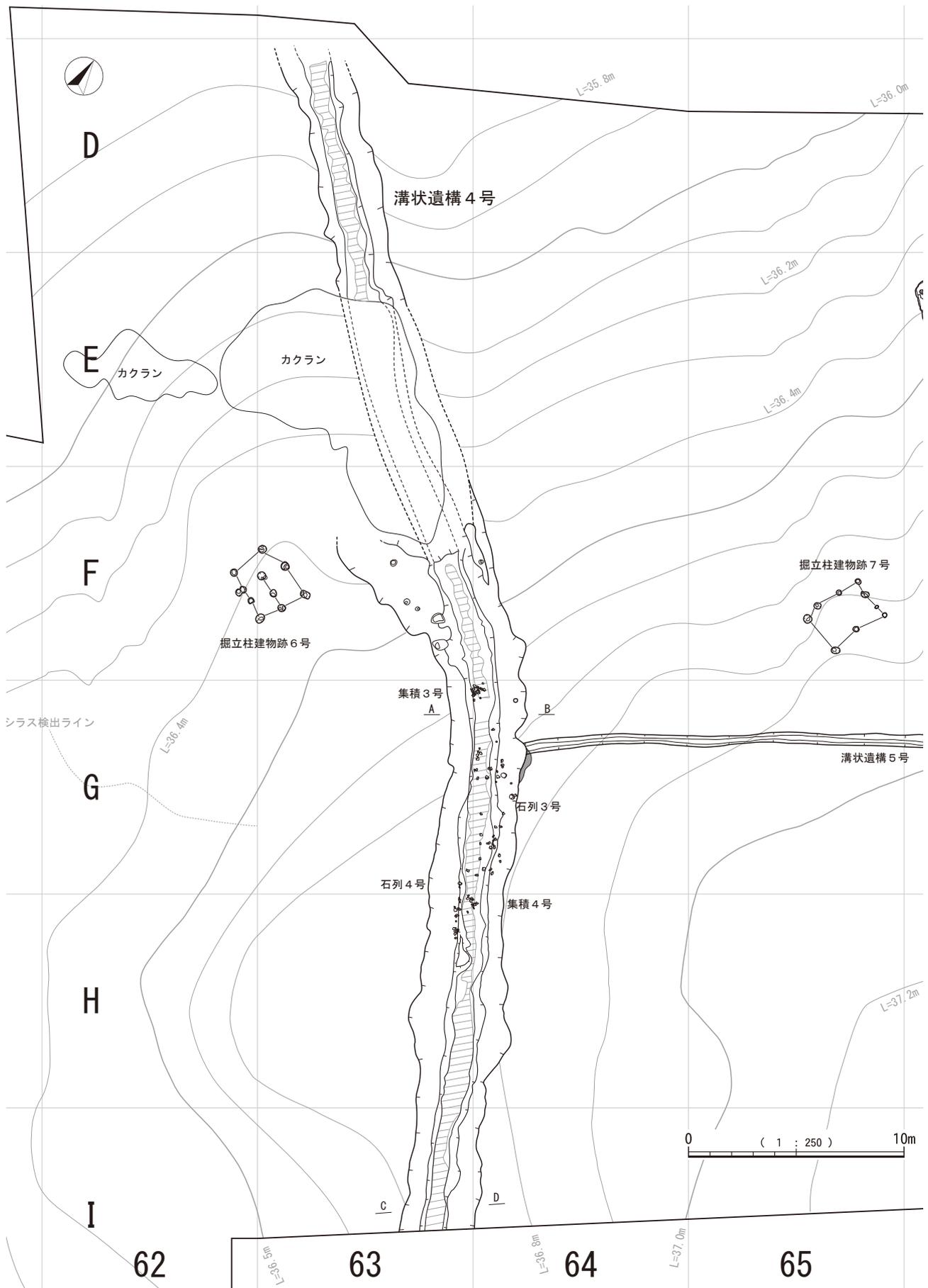
D・E-67～69区のⅥ層上面で検出した。平面形は、長軸が北北東から南南西方向に延びており、主軸はN25°Eを示す。規模は、長さ22m、幅1.4～4mであり、東端は調査範囲外に続く。検出面からの深さは1.3mである。深く掘り込んでいる場所や、底面が安定せず、断面形は凹凸が激しい。埋土は、レンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが、3枚に分かれていた。流路や道跡としての利用ではなく、溝としての使用が考えられる。

出土遺物（第133図 695～715）

遺物は、土師器27点、瓦質土器20点、須恵器22点、国産陶器8点、白磁6点、青磁19点、青花7点、輸入陶器4点、土器15点、金属製品1点が出土している。そのうち瓦質土器4点、須恵器3点、国産陶器5点、青磁1点、輸入陶器1点、金属製品1点を図化した。

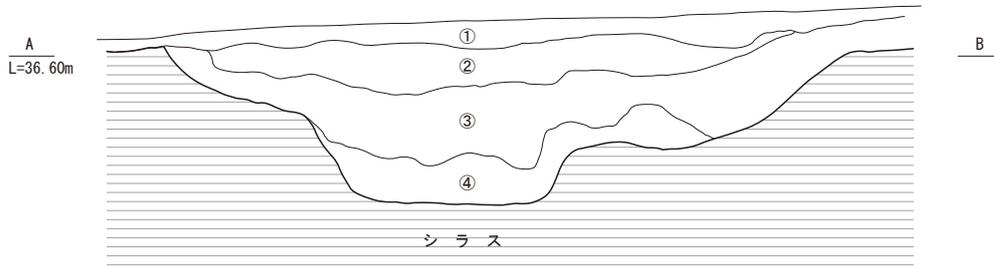
① 瓦質土器（第133・134図）

695～699は播鉢である。695は口縁端部が平坦で、外



第122図 溝状遺構 4号平面図

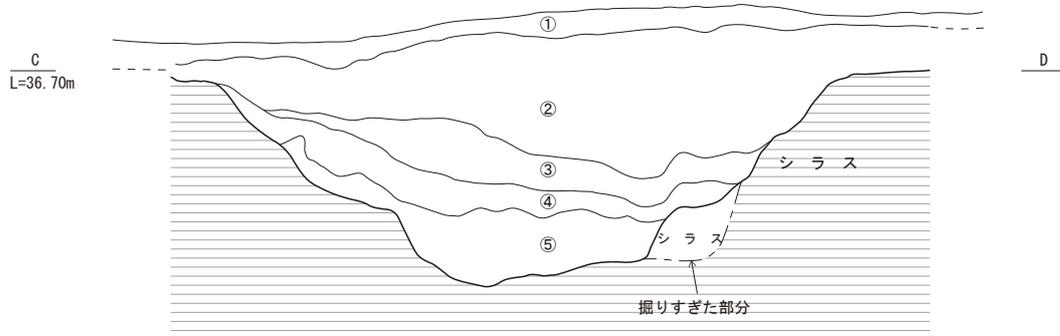
土層断面 1



土層断面 1

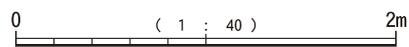
- ① 暗褐色砂質土(7.5YR 3/3) しまりあり粘性弱い 白・赤色粒子を含む
- ② 褐色砂質土(10YR 4/6) しまり強く粘性弱い 白色粒子を多く含む
- ③ 褐色粘質土(10YR 4/6) しまり弱く粘性強い 白・赤色粒子を少量含む
- ④ 褐色粘質土(10YR 4/6) しまり弱く粘性強い V・VI層ブロック多く含む

土層断面 2



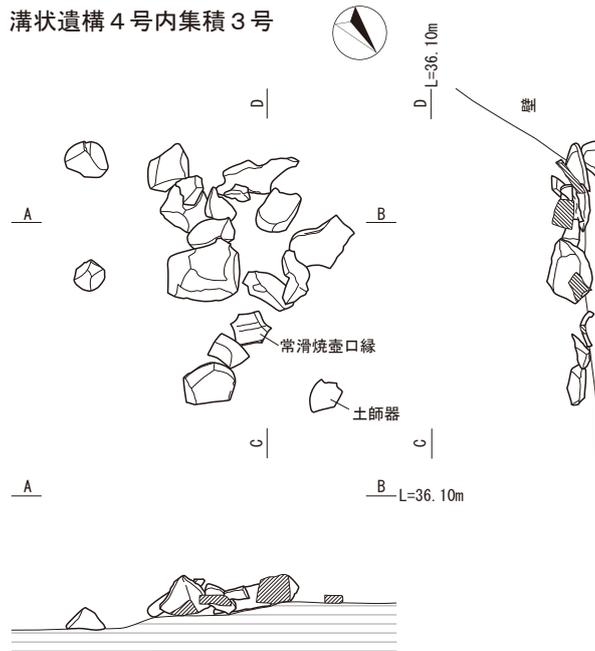
土層断面 2

- ① 暗褐色砂質土(7.5YR 3/3) しまり強く粘性弱い 白・赤色粒子を含む
- ② 褐色砂質土(10YR 4/6) 褐色砂質土(10YR 4/6) しまり強く粘性弱い 白・赤色粒子を多く含む
- ③ 褐色砂質土(10YR 4/6) しまりやや弱く粘性あり 白色粒子を少量含む
- ④ 褐色粘質土(10YR 4/6) しまり弱く粘性強い VI層ブロックを含む
- ⑤ 褐色粘質土(10YR 4/6) しまり弱く粘性強い VI層ブロックを多く含む

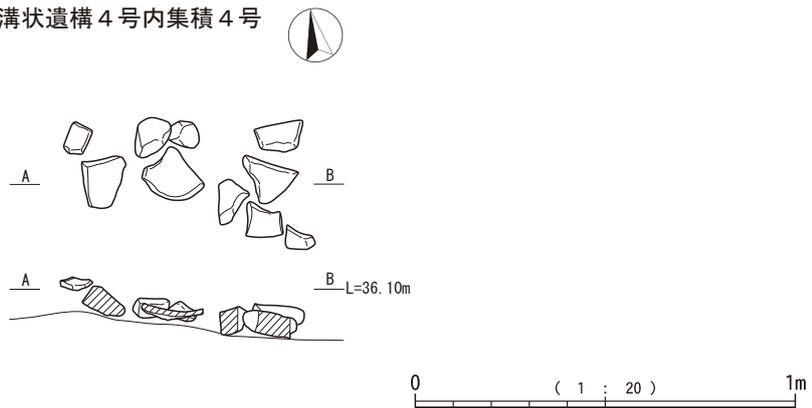


第123図 溝状遺構 4号断面 1・2

溝状遺構 4号内集積 3号



溝状遺構 4号内集積 4号



第124図 溝状遺構 4号内集積 3・4号

面はナデ調整，内面は斜位のハケ目の後，縦方向の播目が施される。播目は9条一単位である。焼成は土師質に近い。697は口縁部断面が山形となる。内外面ナデ調整を施し，内面の播目は9条一単位である。色調は赤褐色で焼成は堅緻である。698は口縁部に注ぎ口があり，内面に10条の播目が残る。

696・699は底部である。外面は指オサエ・ナデのちに底部付近は横方向のヘラケズリがなされる。内面は斜位のハケ目後，縦方向の播目が施される。播目の単位は，696が11条，697が10条である。

700は壺である。口縁部を平坦に拡張し，内外面ナデ調整を施す。701は湯釜である。球状の体部から，口縁部が内傾して直立する。胴部外面には，菊花文が押捺さ

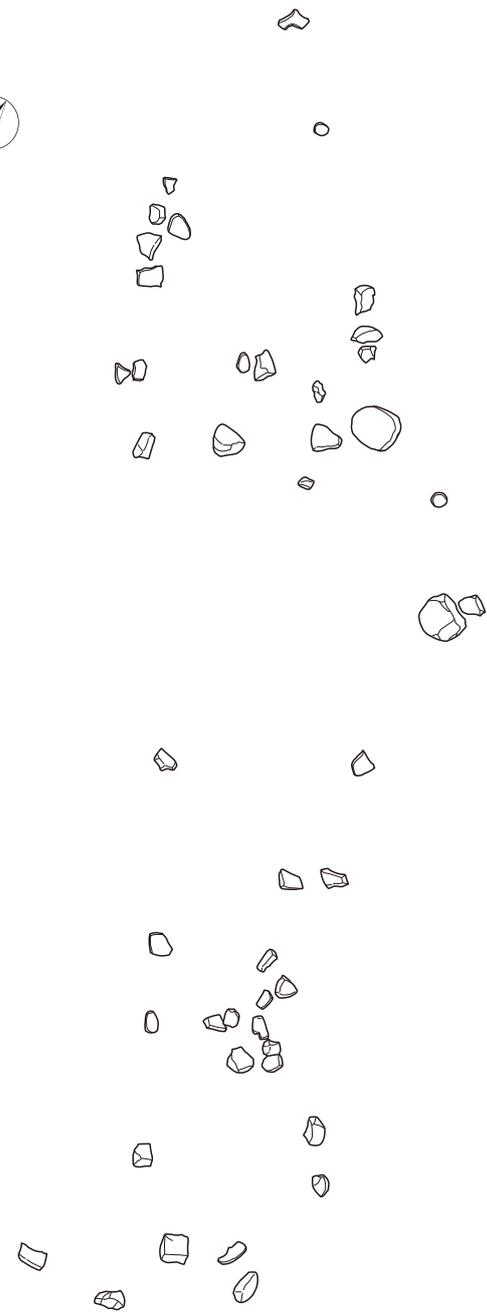
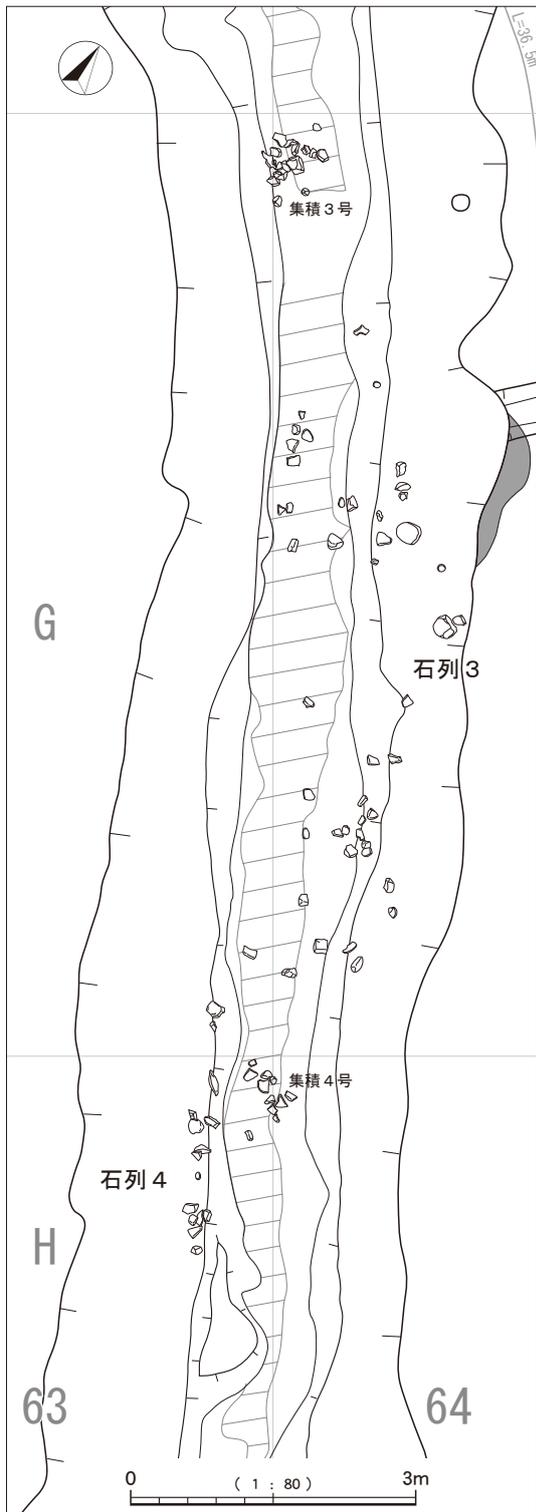
れる。胴部内面はハケ目が施される。705は火鉢もしくは風炉である。菊花文が上下2条の突帯間に巡る。706は大型品の底部である。穿孔が1か所みられる。

② 須恵器 (第133・134図)

702は甕の口縁部が外方へと屈曲する。胎土は白色土と灰色土がマーブル状となる。703は底面のみの破片である。内面にはヘラケズリの痕跡が残る。器種は不明である。704は胴部で，外面には山形状のタタキ，内面は幅広のハケ目が施される。

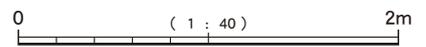
③ 国産陶器・輸入陶器 (第134図)

707は播目が確認できないが，播鉢と推測される。口唇部は平坦で溝状となる。近世のものと考えられる。708は備前焼の播鉢である。709は羽釜の口縁部の可能性

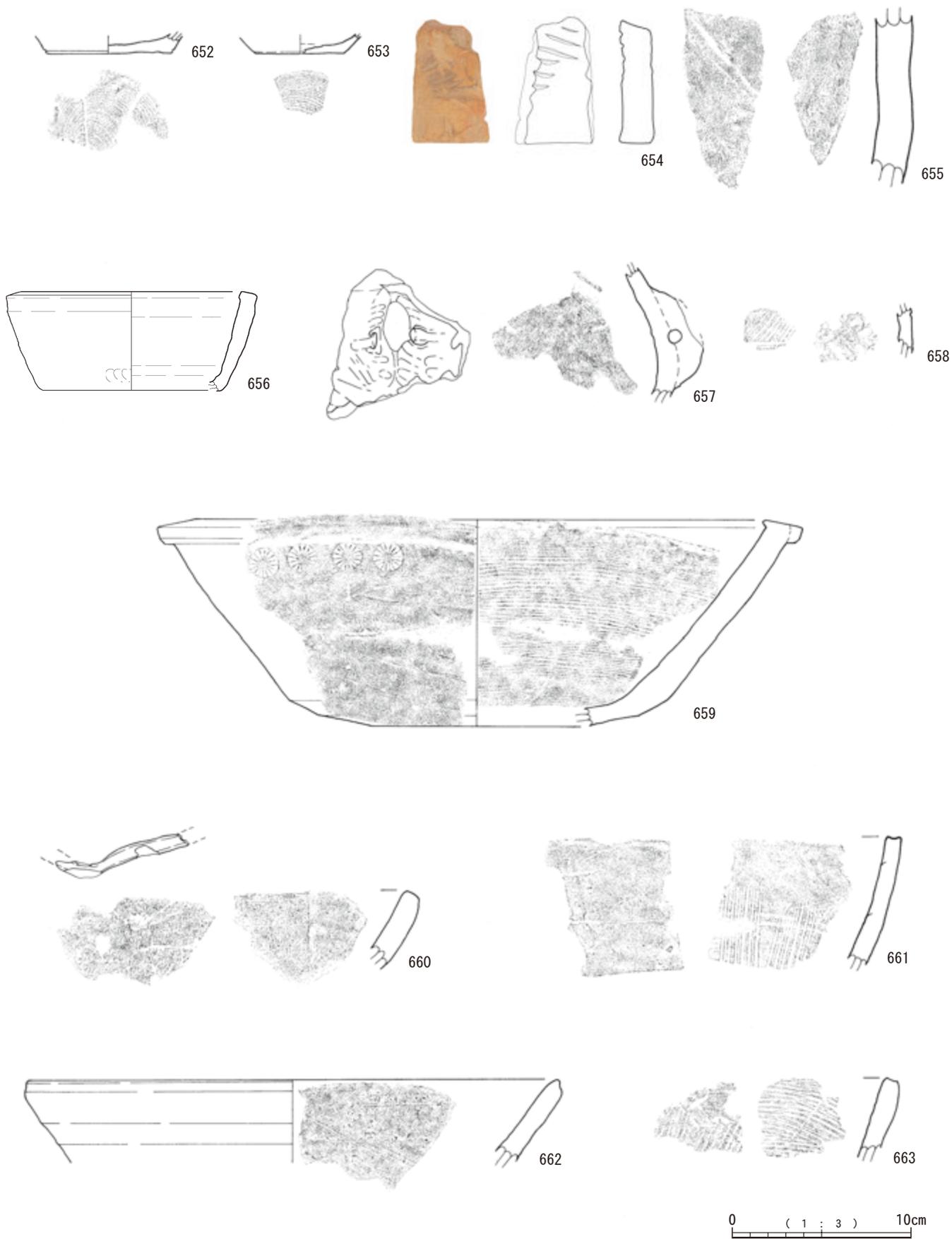


溝状遺構 4号内石列 3

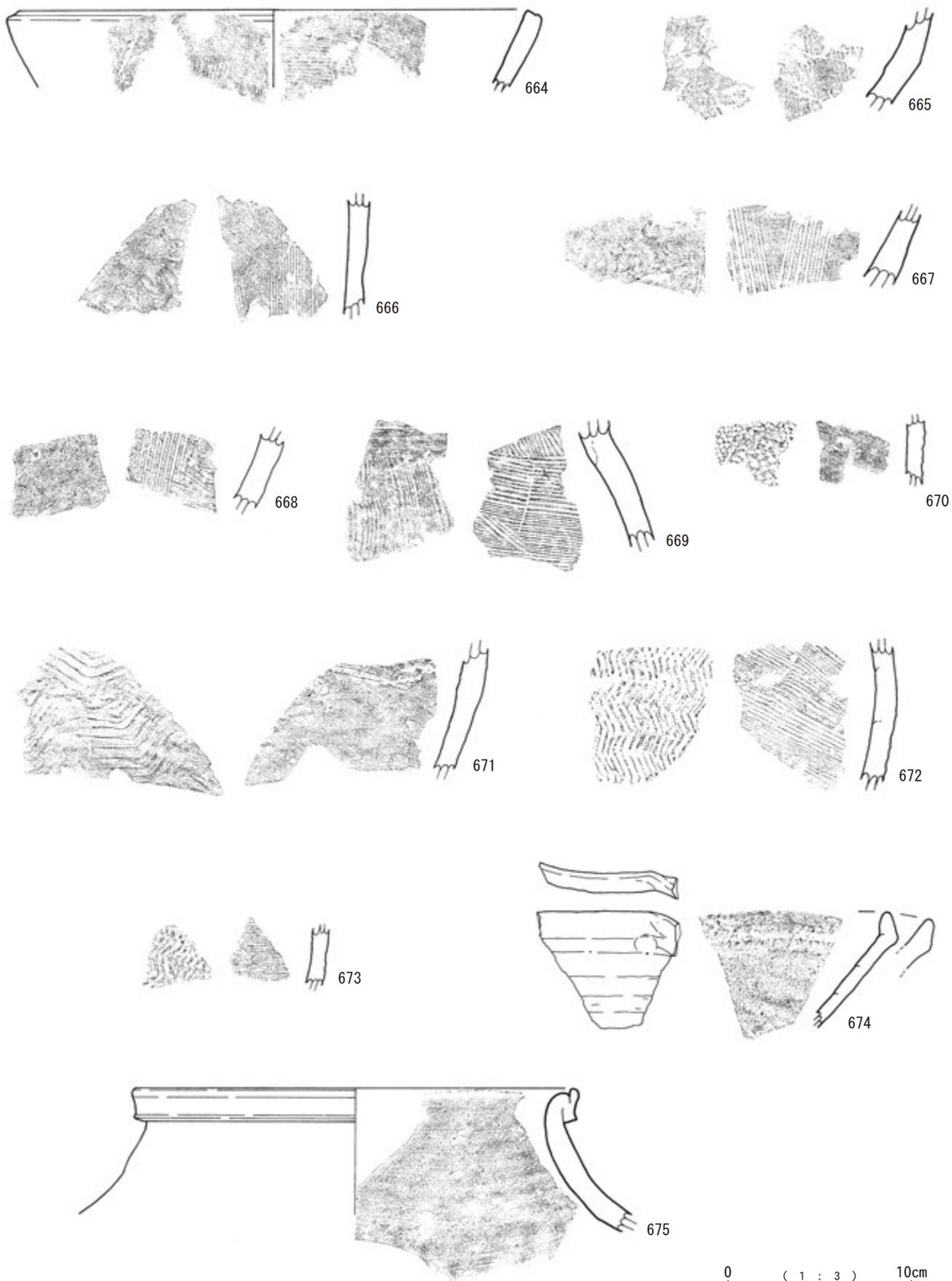
溝状遺構 4号内石列 4



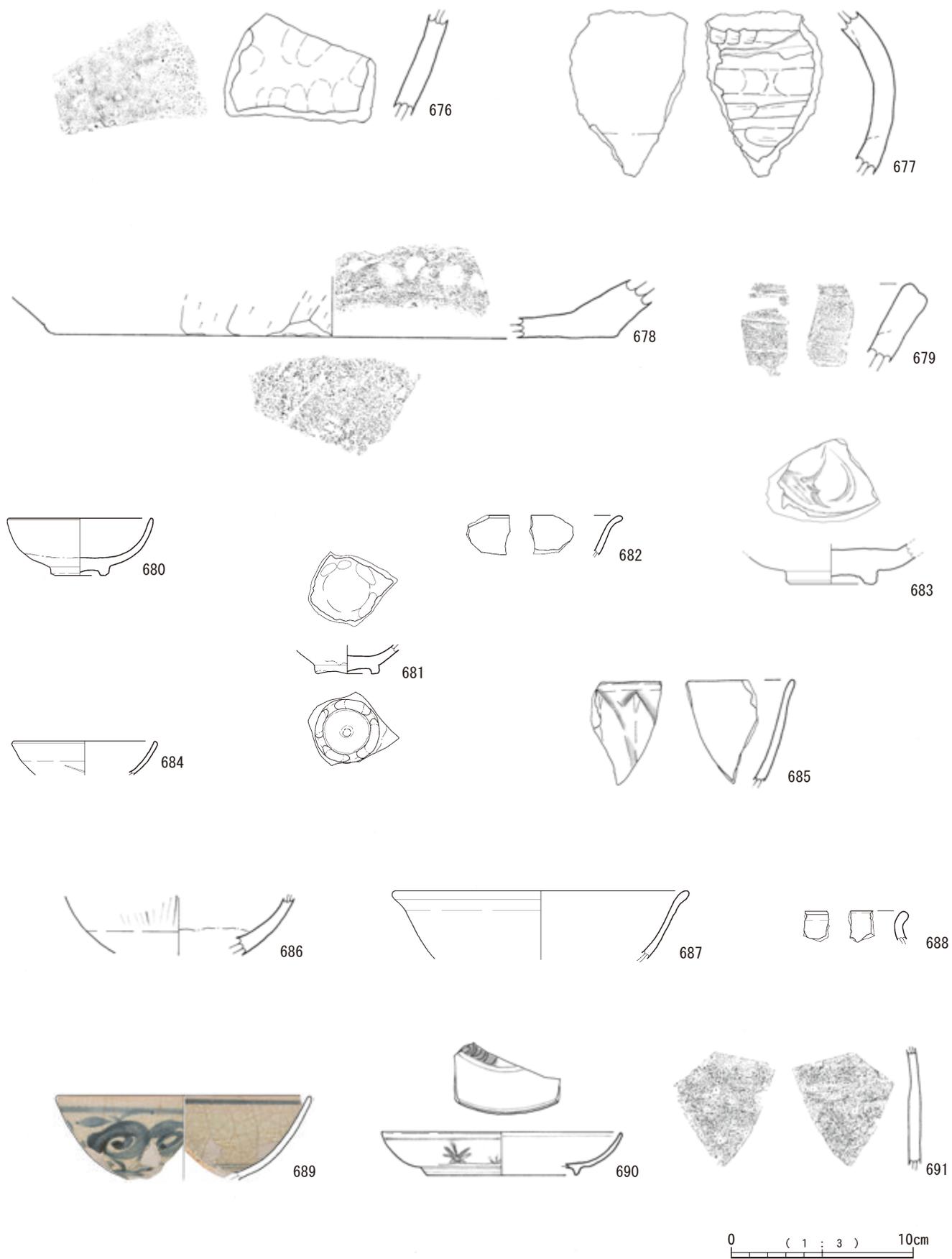
第125図 溝状遺構 4号内石列 3・4



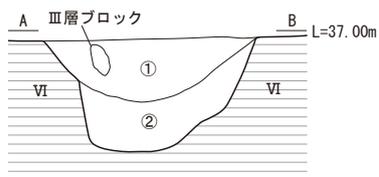
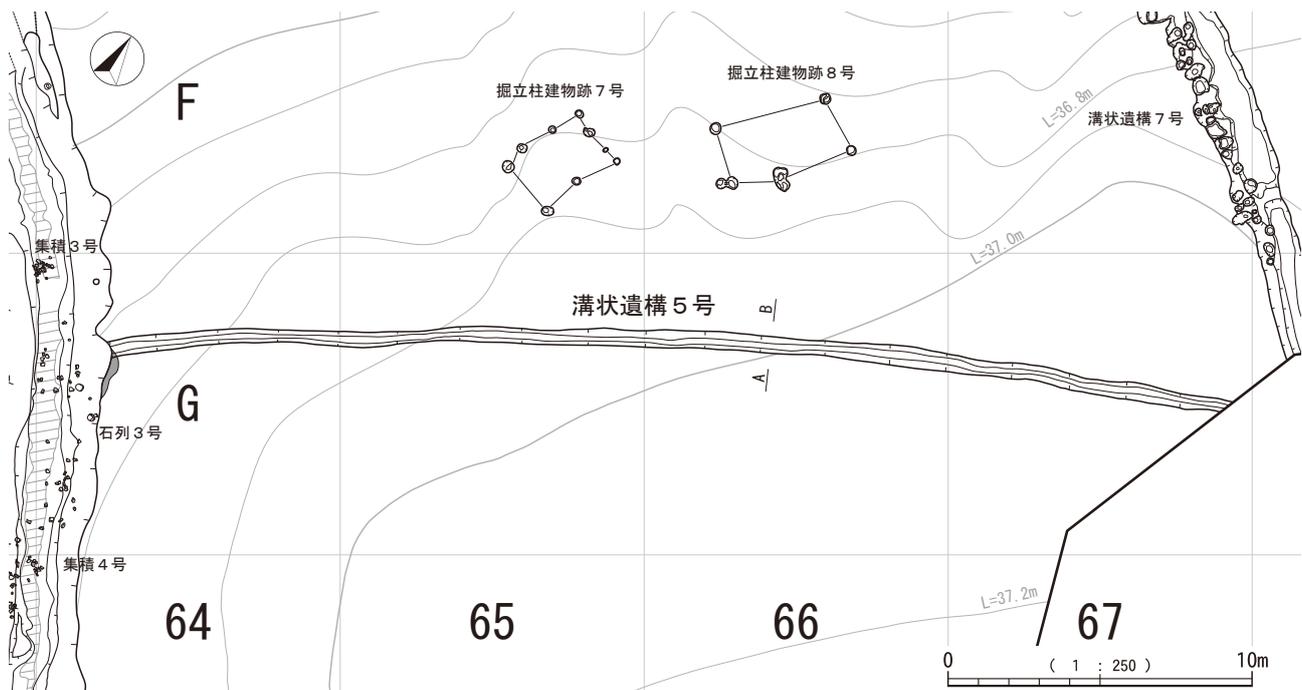
第126図 中世遺構内の遺物③



第127図 中世遺構内の遺物③



第128図 中世遺構内の遺物③



- ① 黒褐色砂質土(10YR 2/3) しまり強く粘性弱い 白・赤色粒子, シラスブロックを含む
- ② 暗褐色粘質土(10YR 3/4) しまり弱く粘性あり 白・赤色粒子を含む

第129図 溝状遺構 5号および断面

がある。口縁端部は玉縁状で、胎土は土師質で浅黄色である。

710は輸入陶器の甕である。胴部内外面に黒褐色の釉が掛かる。器壁は薄く、沖縄分類褐釉陶器V類に類似する。

④ 白磁・青磁・青花 (第134図)

711は白磁の皿である。低く小さな高台が底部の端を巡る。高台端部は露胎となる。時期は16世紀後半以降と考えられる。712は内湾皿とみられる。外面には釉が厚く掛かり不明瞭であるが、蓮弁文が施される。口縁端部はわずかに内側へ突出する。歴博分類青磁内彎皿に該当すると考えられる。15世紀中頃である。

713は青花の蓮子碗である。歴博分類染付碗C群に該当する。15世紀後半～16世紀前半である。714は、陶器の鉢である。産地は不明。

⑤ 金属製品 (第134図)

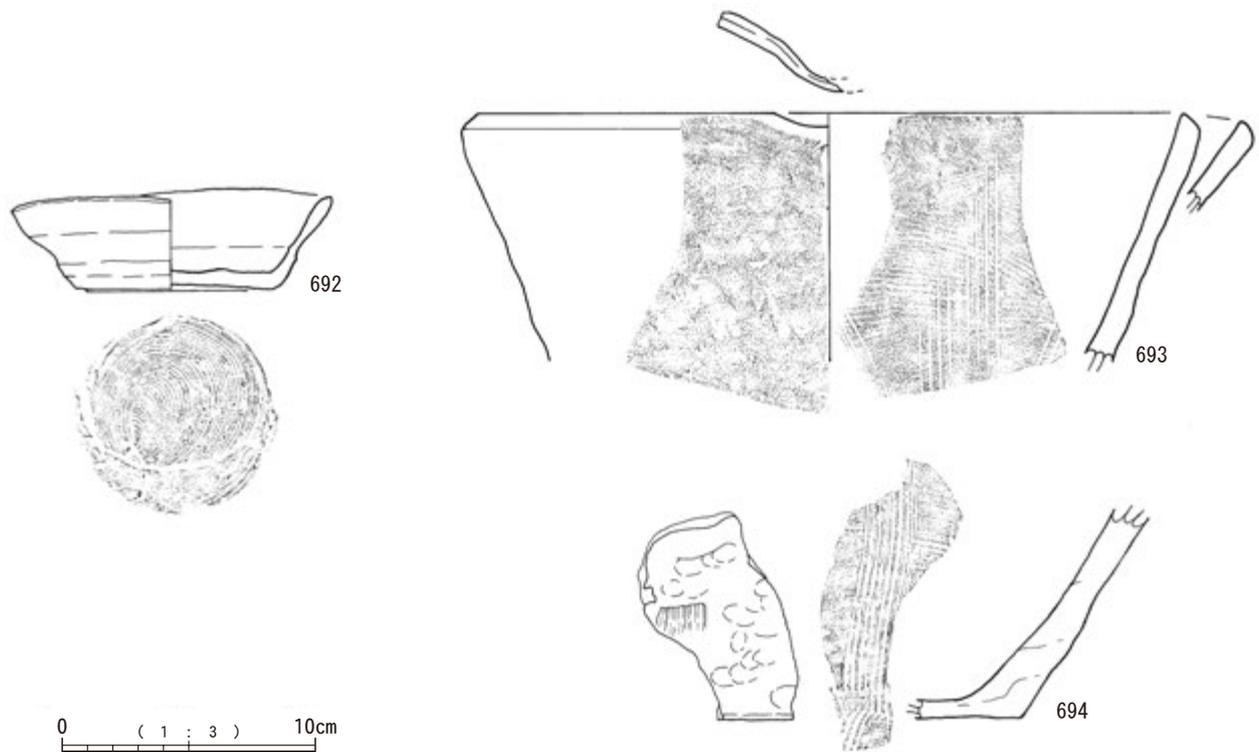
715は青銅製の用途不明品である。平面形が楕円形で、裏面は凹凸があり、未貫通の孔が3か所あいている。厚みがあり、重量感がある。

キ 溝状遺構 7号 (第131図)

E～G-67・68区のⅥ層上面で検出した。長軸が北西から南東方向に延びており、主軸はN57°Wを示す。規模は、長さ15m、幅0.5～2mであり、南東端は調査範囲外に続く。検出面からの深さは最深部で0.3mである。底面がほぼ平坦で断面形は皿状になっている。埋土は、Ⅱb層の土で自然堆積したと考えられる。他の溝状遺構と違い遺構の集中するピットを検出した。

出土遺物 (第135図 716～720)

遺物は、土師器8点、瓦質土器7点、須恵器3点、国産陶器2点、土器3点が出土している。そのうち土師器1点、瓦質土器2点、須恵器1点、国産陶器1点を図化した。



第130図 中世遺構内の遺物③

716は土師器の坏である。底部には糸切り痕が残る。内外面に煤が付着している。717・719は瓦質土器の播鉢である。717の口唇部は平坦で、中央が溝状となる。外面はナデ調整。内面は斜位のハケ目を施した後、縦方向に播目を施す。播目は全体を確認できないが一単位6条以上とみられる。719は底部である。外面はナデ調整、内面は丁寧なナデ調整後、放射状の播目を施す。播目は8条一単位である。

718は備前焼の播鉢と考えられる。口縁部は山形で、口唇部に自然釉が掛かる。内面は縦方向の播目が施される。播目は破損のため、全体を確認できないが一単位6条以上とみられる。重根編年のⅣA期（14世紀前半から15世紀前半）に該当すると考えられる。

720は中世須恵器の甕である。外面には山形状のタタキ、内面にはナデが施される。

ク 溝状遺構 8号（第136図）

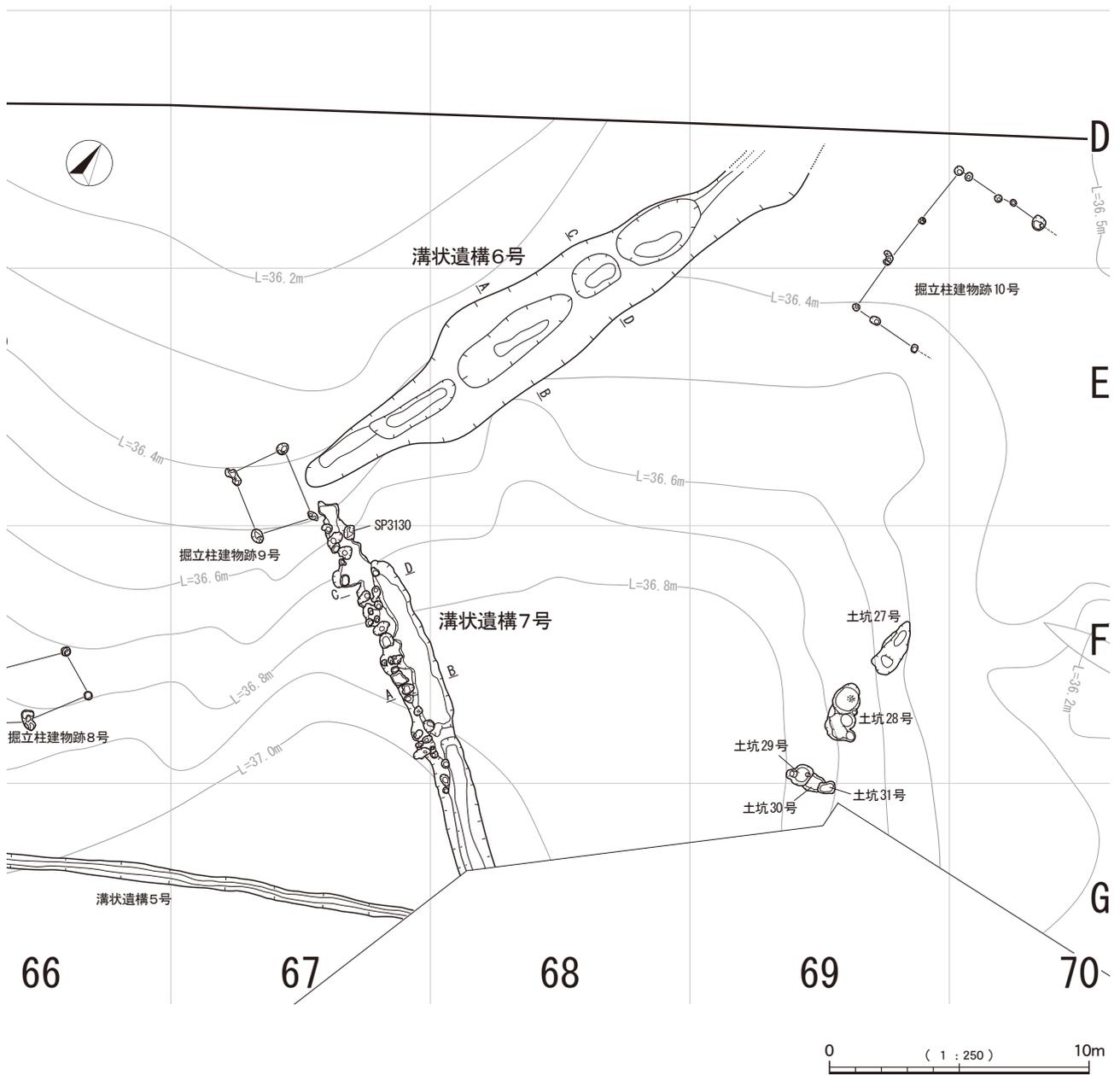
D・E-71区のⅢ層上面で検出した。長軸が南南東から北北西方向に延びており、主軸はN13°Wを示す。規模は、長さ10m、幅2～3mであり、北北西側は調査範囲外に続く。検出面からの深さは0.15mである。底面がほぼ平坦で断面形は皿状になっている。埋土は、Ⅱb・Ⅲ層の土で自然堆積したと考えられる。検出面から浅いのは、削平の影響と考えられる。

出土遺物（第137図 721・722）

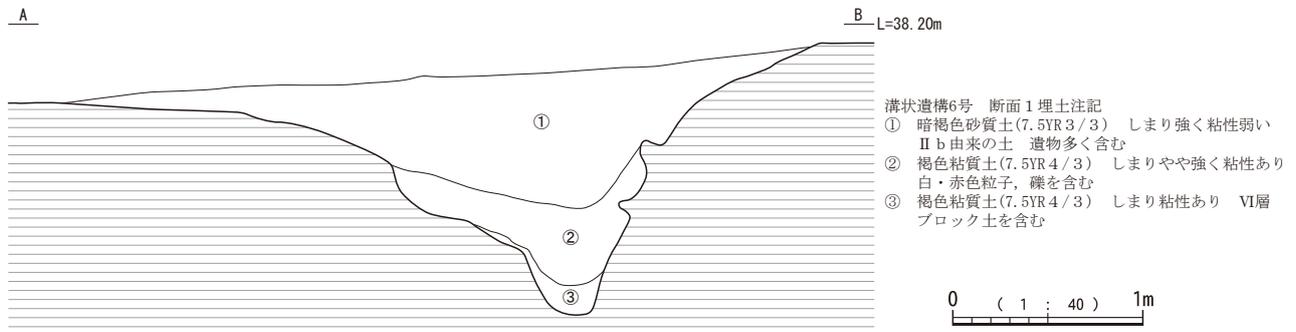
出土遺物は、土師器1点、須瓦質土器2点、恵器1点、土器1点である。そのうち瓦質土器1点、須恵器1点を図化した。

721は瓦質土器の播鉢である。外面は底部付近に横方向のヘラケズリを行う。内面は斜位のハケ目の後、播目が施される。播目は11条一単位である。

722は中世須恵器の甕である。頸部から肩部の破片で、外面には山形状のタタキが施される。内面は、ハケ目・ナデが横方向に施される。

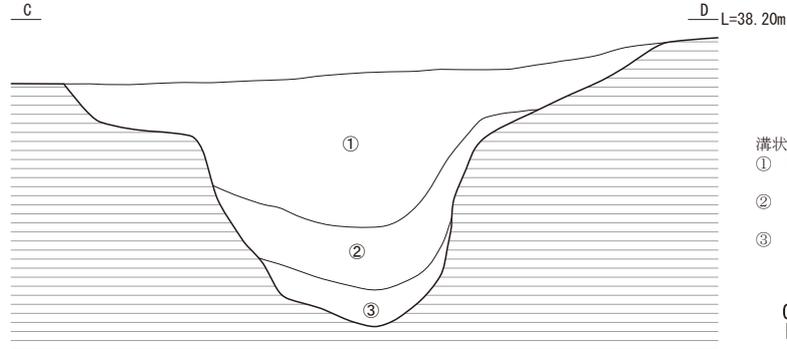


溝状遺構6号土層断面1

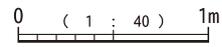


第131図 溝状遺構6・7号および6号断面1

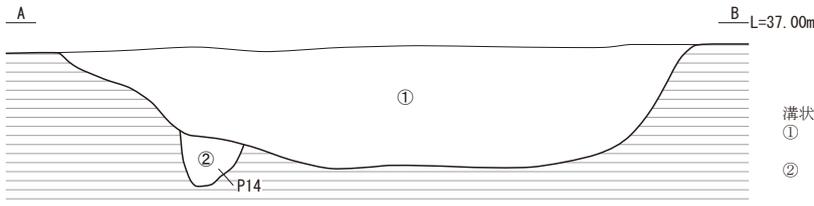
溝状遺構 6号土層断面 2



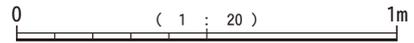
溝状遺構6号_断面2 埋土注記
 ① 暗褐色砂質土(7.5YR 3/3) しまり強く粘性弱い II b由来の土 遺物多く含む
 ② 褐色粘質土(7.5YR 4/3) しまりやや強く粘性あり 白・赤色粒子, 礫を含む
 ③ 褐色粘質土(7.5YR 4/3) しまり粘性あり VI層ブロック土を含む



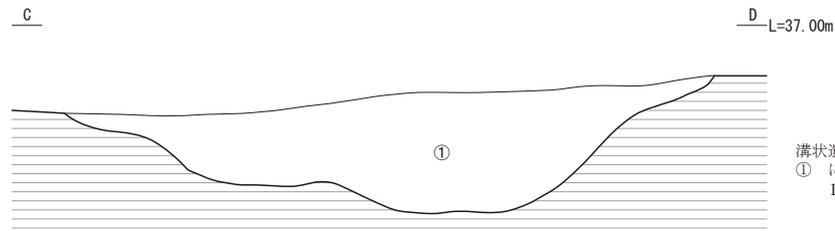
溝状遺構 7号土層断面 1



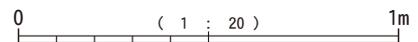
溝状遺構7号_断面1 埋土注記
 ① にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3) しまり強く粘性弱い II b由来の土 白・赤色粒子, 小石を含む
 ② にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3) しまり粘性あり 白色粒子を少量含む



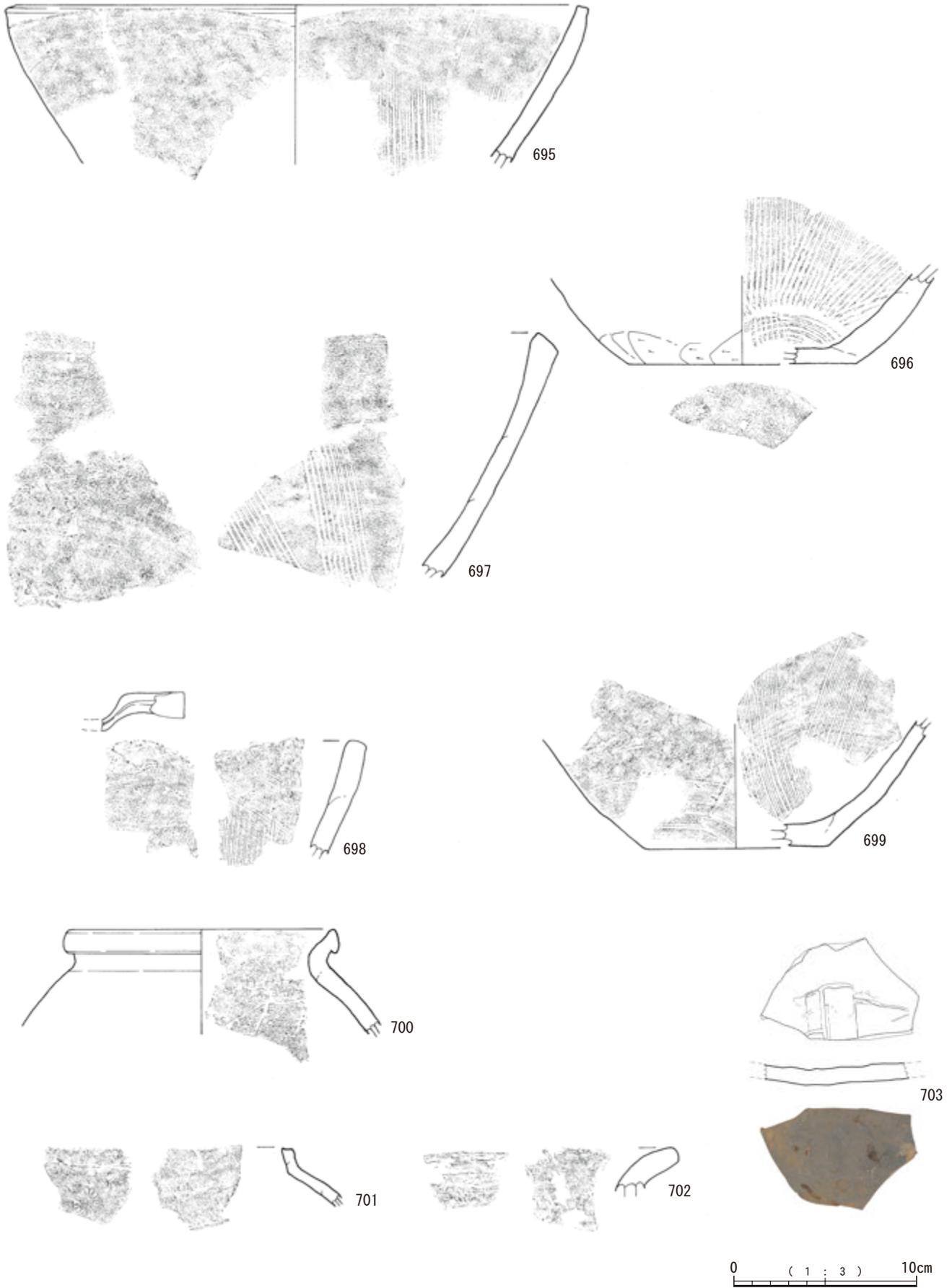
溝状遺構 7号土層断面 2



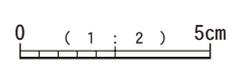
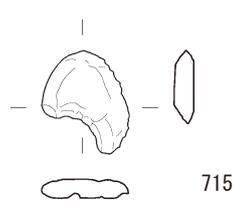
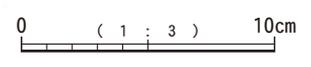
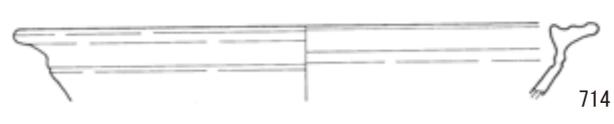
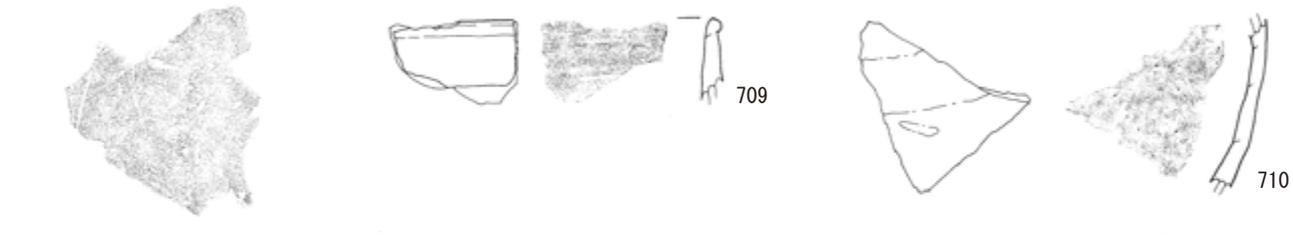
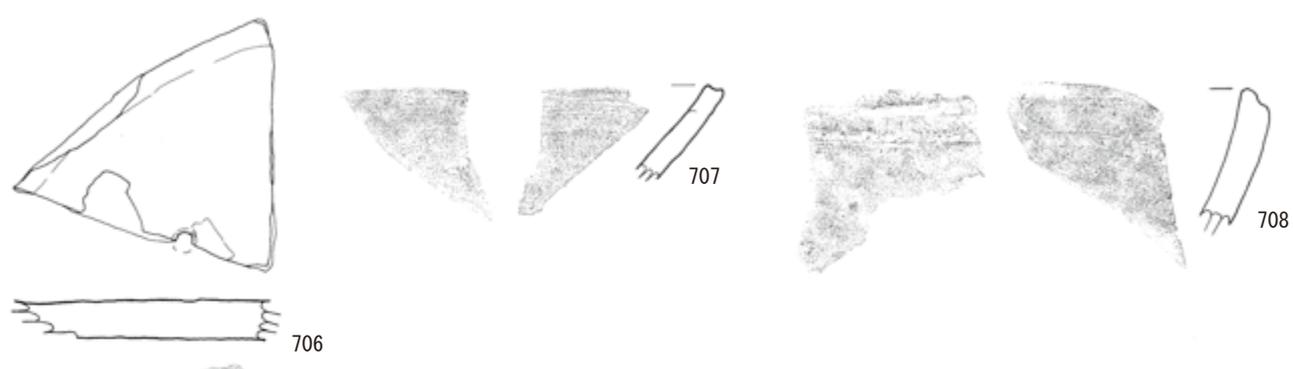
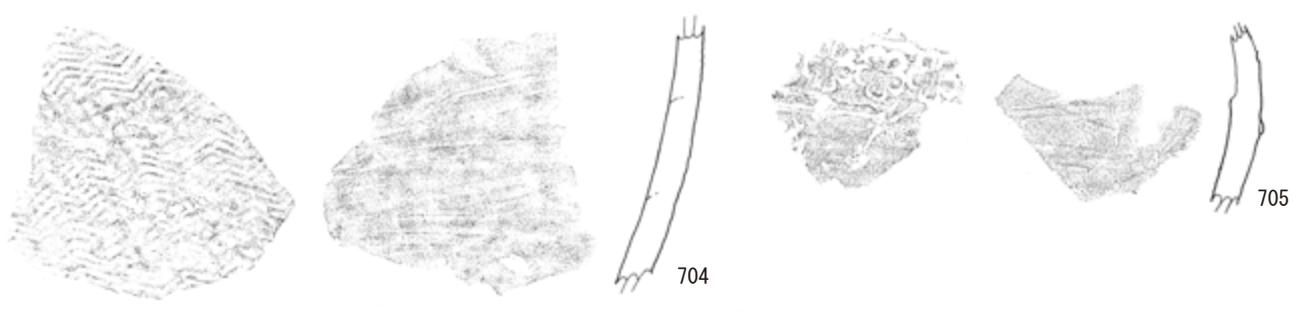
溝状遺構7号_断面2 埋土注記
 ① にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3) しまり強く粘性弱い II b由来の土 白・赤色粒子, 小石を含む



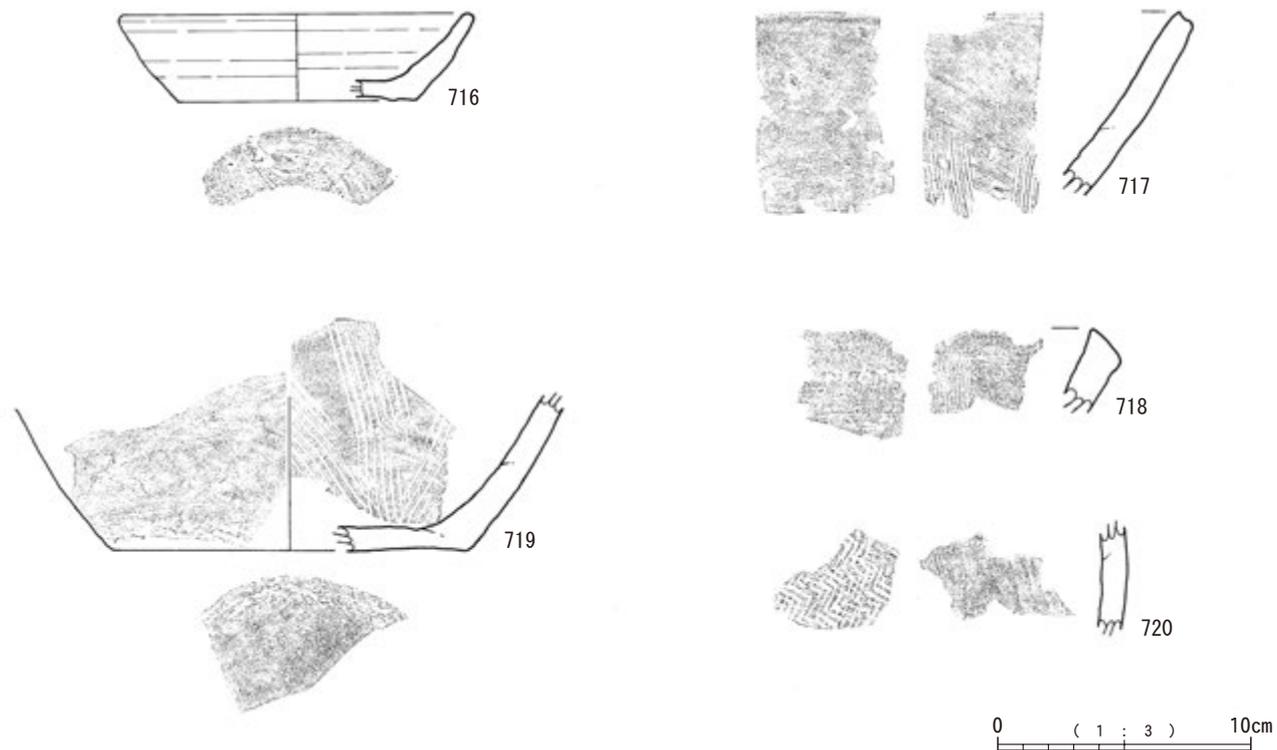
第132図 溝状遺構 6号断面 2 および 7号断面 1・2



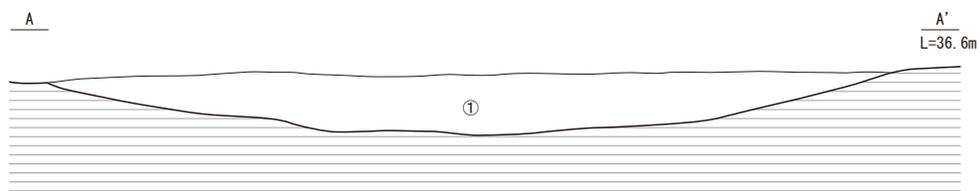
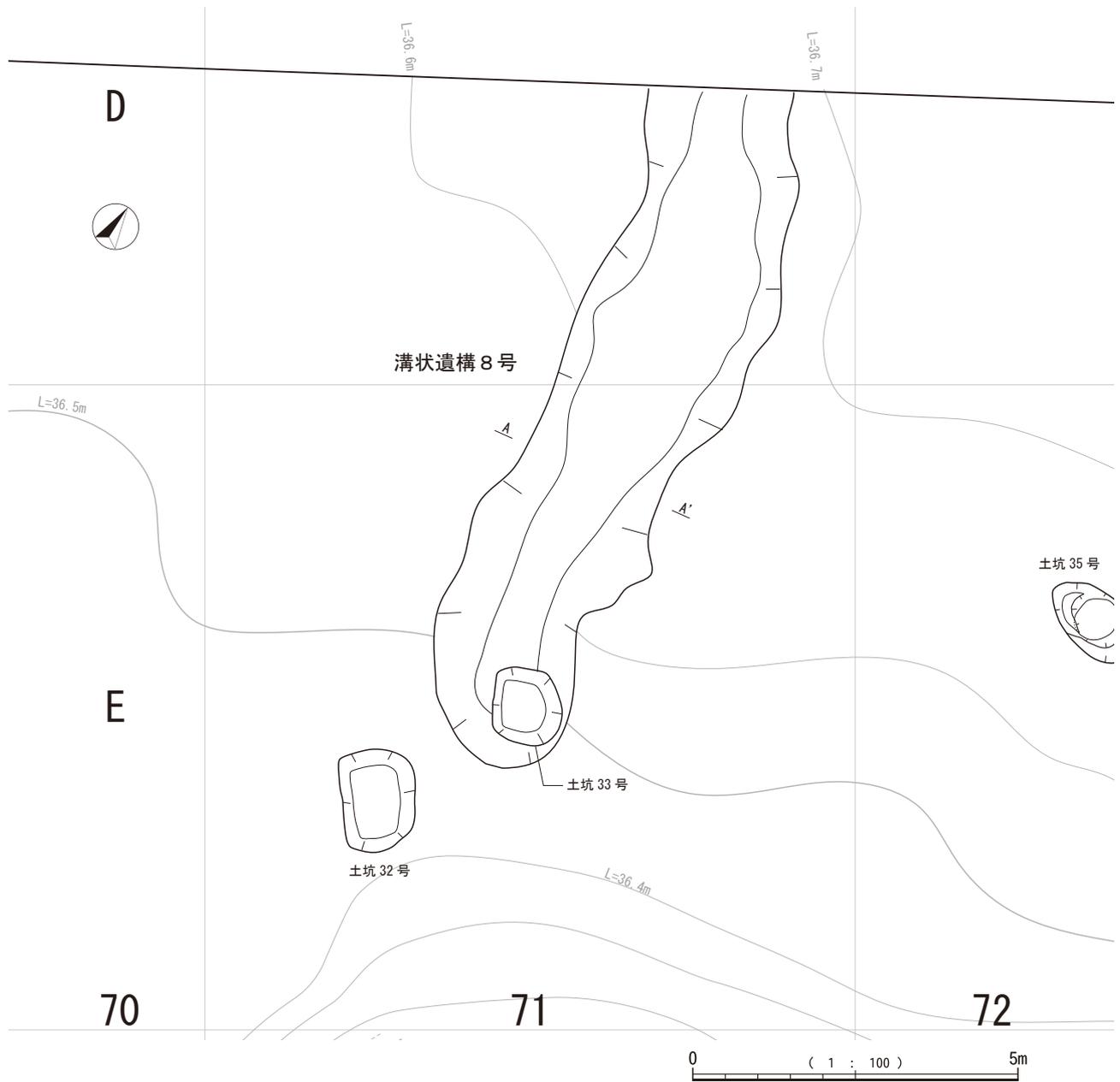
第133図 中世遺構内の遺物③⑤



第134図 中世遺構内の遺物③⑥

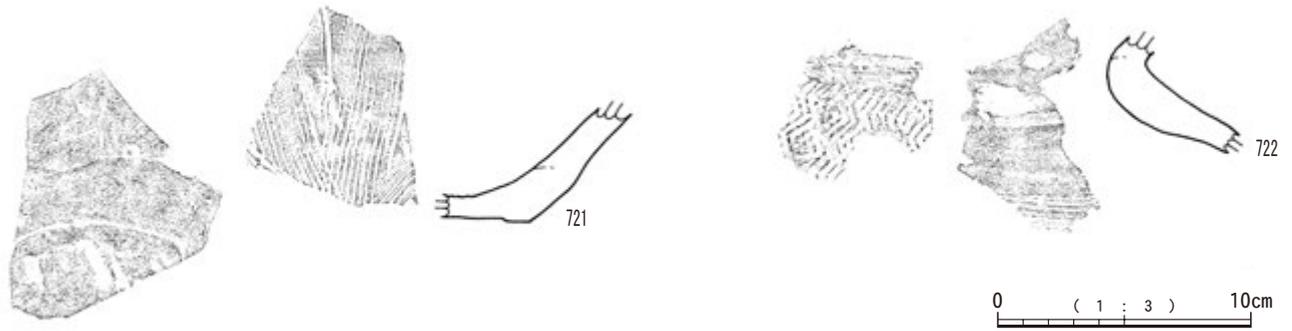


第135図 中世遺構内の遺物③



① 褐色粘質土(7.5YR 4/4) しまり粘性ともにやや強い 白・赤色粒子を各10%、シラスを30%含む
 ※磁器片や須恵器の遺物片が多数出土

第136図 溝状遺構 8号および断面



第137図 中世遺構内の遺物③

第22表 中世遺構内出土遺物観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm) ※重 量は備考欄			文様・器面調整		色調		胎土	歴博 分類	取上 番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
69	445	土坑2号	土師器	坏	F	45	マ1 底部	-	(92)	-	ナデ	ナデ	橙	橙	白粒, 黒粒, 石英 角閃石	-	-	
	446	土坑2号	土師器	坏	F	45	胴~底部	-	(72)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 石英 長石	-	-	
	447	掘立柱建物跡1号	土師器	坏	G	45	マ 口縁部	(130)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 長石	-	P7	
	448	土坑2号	瓦質土器	壺	F	45	マ1 口縁部	(296)	-	-	-	-	灰白	灰白	白粒, 白色小石	-	-	
	449	土坑2号	瓦質土器	播鉢	F	45	マ1 底部	-	-	-	ヘラケズリ ・工具ナデ	ナデ	灰白	灰白	黒粒, 白色小石	-	-	
	450	土坑2号	瓦質土器	播鉢	F	45	マ1 底部	-	-	-	工具ナデ・ケ ズリ・ナデ	ナデ	灰白	灰白	黒粒, 石英	-	-	
	451	掘立柱建物跡1号	瓦質土器	播鉢	G	44	マ 胴~底部	-	(102)	-	ハケナデ・ナデ	ハケナデ	灰白	灰白	白粒, 黒粒, 石英	-	P15	
	452	土坑2号	瓦質土器	羽釜	F	45	マ1 口縁部	-	-	-	ナデ・ハケナデ	ハケ	灰	灰	赤粒, 小石, 石 英 長石, 角閃石	-	-	
	453	土坑2号	白磁	皿	F	45	マ1 口縁~底部	10	3.2	2.7	-	-	浅黄	灰白	-	B	-	15c 前
	454	土坑2号	白磁	碗	F	45	マ1 底部	-	6.2	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	-	14c 後~ 15c 前
455	土坑2号	青磁	碗	F	45	マ1 口縁~胴部	15	-	-	-	-	-	灰白	-	-	-		
456	掘立柱建物跡1号	青磁	碗	F	44	マ 口縁部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	B 1	P24	13c 中~ 14c 前	
71	457	掘立柱建物跡2号	土師器	坏	G	45	マ 口縁~底部	(7.2)	6	2.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	黒粒, 白粒, 灰粒	-	P27	
	458	掘立柱建物跡2号	土師器	坏	G	46	マ1 口縁~底部	12	8.4	3.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 黒粒, 白粒	-	P22	14c 後~ 15c 中
	459	掘立柱建物跡2号	土師器	皿	G	45	マ 底部	-	(92)	-	-	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 黒粒 長石	-	P11	
	460	土坑3号	瓦質土器	甕・鉢	G	46	マ1 胴部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	褐灰	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 石英	-	SX22	
	461	掘立柱建物跡2号	青白磁	蓋	G	46	マ 蓋	※底径 (7.0)	-	-	-	-	透明釉・灰白	明緑灰	-	-	P22	12c ~ 13c
	462	掘立柱建物跡2号	青磁	碗	G	46	マ 口縁~底部	(11.0)	-	-	-	-	浅黄	浅黄	-	-	P24	時期判断は困難で あるが15cの可能性
76	463	掘立柱建物跡7号	土師器	碗・坏	F	65	マ 口縁~胴部	(13.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒 赤色小石	-	P6	
81	464	掘立柱建物跡11号	土師器	坏	E	74	I 底部	-	(8.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	灰黄褐	白粒, 灰粒, 長石	-	P10	
	465	掘立柱建物跡11号	須恵器	甕	E	73	I 胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒, 長石	-	P2	
	466	掘立柱建物跡11号	須恵器	甕	E	73	I 胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	精良	-	P18	
	467	掘立柱建物跡11号	須恵器	甕	E	73	I 口縁部	(18.0)	-	-	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ ・工具ナデ	灰	灰	精良, 石英	-	P18	
	468	掘立柱建物跡11号	青磁	皿	E	73	I 口縁~底部	(11.8)	5.8	2.7	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	-	P18	16c 中葉~後半
	469	掘立柱建物跡11号	青磁	碗	E	74	I 胴部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰	-	B4	P10	15c 後~ 16c 前
	470	掘立柱建物跡11号	青磁	皿	E	74	I 口縁~胴部	(11.6)	-	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	P10	15c 中
	471	掘立柱建物跡11号	青磁	壺	E	73・74	I 双耳環	-	-	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	P8	15c
472	掘立柱建物跡11号	銅銭	洪武 通宝	E	73・74	- 完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P2		
83	473	掘立柱建物跡12号	瓦質土器	播鉢	F	74	I 口縁部	(33.1)	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒, 長石	-	P14	
	474	掘立柱建物跡12号	瓦質土器	播鉢	F	74	I 口縁~胴部	(35.2)	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒, 長石, 角閃石	-	3012	溝状遺構6号内遺物と接合
	475	掘立柱建物跡12号	瓦質土器	播鉢	F	74	I 口縁部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 長石	-	P14	
	476	掘立柱建物跡12号	陶器	香炉	F	73	I 口縁部	-	-	-	-	-	褐灰	明赤褐	-	-	P17	17c 後
	477	掘立柱建物跡12号	白磁	皿	F	74	I 口縁~胴部	(10.0)	-	-	-	-	-	-	-	B	P6	15c 前

第23表 中世遺構内出土遺物観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博 分類	取上 番号	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面					
84	478	竪穴建物跡1号	土師器	坏	E 66	マ1	口縁~底部	(136)	(106)	2.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	黒粒, 灰粒, 石英 長石, 角閃石	-	SI7-6	13c	
	479	竪穴建物跡1号	須恵器	甕	E 66	マ2	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	灰	灰	白粒, 黒粒, 長石	-	-		
	480	竪穴建物跡1号	須恵器	甕	E 66	マ2	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	灰黄	黄灰	白粒, 灰粒, 長石 角閃石	-	SI7-5		
	481	竪穴建物跡1号	須恵器	甕	E 66	マ2	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	橙	橙	白粒, 黒粒, 小石 長石, 角閃石	-	SI7-10	中世	
	482	竪穴建物跡1号	白磁	碗	E 66	II	底部	-	(5.0)	-	-	-	灰白	灰白	-	IX	SI7	13c 中頃~14c 初頭	
	483	竪穴建物跡1号	青磁	碗	E 66	マ2	口縁部	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	B 1	SI7-9	13c 中葉~14c 前半	
	484	竪穴建物跡1号	鉄製品	鍋	E 66	IIb-II	口縁部	(3.5)	(7.8)	0.45	-	-	-	-	-	-	-	※重量19.6 g	
85	485	土坑4号	白磁	碗	E 44	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	IX	-	13c 中頃~14c 初頭	
	486	土坑5号	土師器	皿	F 44	III上	口~底部	(8.0)	(6.2)	2.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 長石	-	-		
	487	土坑5号	滷石製品	-	F 44	III上	-	-	幅 1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	※重量6.6 g	
87	488	土坑10号	須恵器	鉢	F 45	マ	胴部	-	-	-	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	灰白	灰白	白粒, 灰粒, 角閃石	-	-		
	489	土坑10号	陶器	碗	F 45	マ	胴部	-	-	-	-	-	褐	褐	-	-	-		
88	490	土坑11号	土師器	坏	H 45	マ	胴~底部	-	(6.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	白粒, 黒粒, 長石	-	-		
	491	土坑11号	瓦質土器	播鉢	H I 45 46	II b	口縁部	-	-	-	ナデ, ユビ オサエ	ハケメ・ナデ	黄灰	黄灰	白粒, 白色小石	-	-		
	492	土坑11号	須恵器	甕	H H 45 45	マ1	胴部	-	-	-	ハケメ・タタキ	ハケメ	黄灰	灰白	長石, 角閃石	-	-		
	493	土坑11号	青磁	碗	H 45	マ	口縁~底部	(15.1)	5.4	6.5	-	-	-	-	-	D 1	-	14c 後半~15c 前半	
89	494	土坑11号	石製品	砥石	H 45	マ	-	12.0	3.4	2.9	-	-	-	-	-	-	-	※重量209.0 g	
	495	土坑13号	土師器	坏	H 45	マ	胴~底部	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	橙	白粒, 黒粒, 長石	-	-	14c 後~15c 半頃?	
	496	土坑13号	青磁	碗	H 45	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	B 1類	-	13c 中葉~14c 前半	
91	497	土坑15号	土師器	皿	F 46	マ	完形	8	6.2	2.2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	白粒, 灰粒, 小石 長石	-	-		
	498	土坑15号	陶器	碗	F 46	マ	口縁~胴部	-	-	-	-	-	褐	褐	-	-	-		
92	499	土坑16号	金属製品	鉛玉	H 46	マ	完形	1.3	1.4	1.2	-	-	-	-	-	-	-	※重量12.7 g	
93	500	土坑18号	石製品	茶臼	H 46	マ	-	38.2	29	12.3	-	-	-	-	-	-	-	重量15620.1 g	
94	501	土坑19号	瓦質土器	火鉢	I 45	II b	口~底部	(54.0)	(33.3)	10.1	重画文のスタ ンプ	ハケメ	黒褐	黒褐	-	-	SX5-458		
	502	土坑19号	瓦質土器	風炉	I 45	II b	脚部	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	灰	灰白	-	-	SX5-459		
	503	土坑19号	瓦質土器	播鉢	H 45	II b	胴部	-	-	-	ハケメ・指 頭圧痕	ハケメ・ナデ	灰白	灰白	白粒, 黒粒, 灰粒 長石	-	-	326	
	504	土坑19号	陶器	甕	I 45	マ	底部	-	(17.6)	-	-	-	灰黄	灰黄	-	-	-	462	
	505	土坑19号	青磁	碗	I 45	II b 下 マ	口~胴部	(16.2)	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	D 1	SX5-462	14c 後半~15c 前半	
97	506	土坑27号	須恵器	播鉢	E F 68 69	I II	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	褐灰	灰白	白粒, 石英	-	-		
	507	土坑27号	須恵器	甕	F 69	マ	胴部	-	-	-	タタキ	ナデ	灰	灰	白粒, 角閃石	-	-		
98	508	土坑32号	須恵器	甕	E 71	マ	頸部	-	-	-	格目タタキ	ナデ	灰白	灰白	白粒, 灰粒, 長石 角閃石	-	-		
	509	土坑32号	須恵器	甕	E 71	I	頸部	-	-	-	マメツ	マメツ	灰白	灰白	白粒, 石英, 長石	-	-		
99	510	土坑33号	銅製品	傘釘	E 71	I	-	1.15	1.25	0.95	-	-	-	-	-	-	-	SK10043	※重量0.8 g
	511	土坑33号	銅製品	古銭	E 71	I	完形	2.9	2.6	1.1	-	-	-	-	-	-	-	SK10041	※16.4 g
	512	土坑34号	土師器	坏	E 72	マ	底部	-	(8.0)	-	マメツ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 黒粒, 長石	-	-		
	513	土坑34号	須恵器	甕	E 72	I	胴部	-	-	-	格目タタキ	ハケメ	橙	淡赤・橙	石英, 長石, 角閃石	-	-		
100	514	土坑34号	須恵器	甕	E 72	I	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	灰	灰	灰粒, 石英	-	-		
	515	土坑35号	土師器	皿	D 72	II b	口縁~底部	(7.6)	(4.6)	1.6	マメツ	マメツ	橙	橙	白粒, 白色小石 長石	-	-		
	516	土坑35号	須恵器	甕	E 72	マ	胴~底部	-	(22.0)	-	タタキ	ハケメ・ ナデ	灰	灰	白粒, 黒粒	-	-		
101	517	土坑36号	土師器	坏	E 72	II	口縁~底部	(13.4)	(10.6)	3.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 長石	-	-		
110	518	溝状遺構1号	土師器	坏	H 56	マ2	口縁~底部	(11.2)	(9.5)	2.5	ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙, 灰白	浅黄橙, 灰白	白粒, 赤色小石 白色小石, 長石	-	-		
	519	溝状遺構1号	土師器	坏	I 56-58	マ	底部	-	(9.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒, 黒粒, 長石	-	-	中世前半	
	520	溝状遺構1号	土師器	坏	I 59	マ1	胴~底部	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 黒粒, 長石	-	4027		
	521	溝状遺構1号	土師器	坏	H 51-52	マ2	口縁~底部	(12.0)	(8.4)	3.9	回転ヨコナデ	ユビナデ, ヘラナデ	明赤褐	明赤褐	白粒	-	-		
	522	溝状遺構1号	土師器	坏	H 51-52	マ2	口縁~底部	(12.4)	(7.8)	3.3	回転ヨコナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	白粒, 灰粒, 小石	-	-		
	523	溝状遺構1号	土師器	坏	H 51	マ2	口縁~底部	(11.8)	(8.2)	3.1	ヘラナデ	ヘラナデ, ユビオサエ	橙	橙	白粒	-	-		
	524	溝状遺構1号	土師器	坏	H H 51-52 54	マ2	口縁~底部	(12.5)	7.6	3.3	回転ヨコナデ	工具ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒, 石英, 長石 角閃石	-	-		
	525	溝状遺構1号	土師器	皿	H G-H 52-55	マ2	口縁~底部	8.2	6.3	1.6	ケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	白粒, 赤色小石 石英, 長石	-	-	16c 代	
	526	溝状遺構1号	土師器	皿	H 52	マ2	口縁~底部	9	7.4	1.8	ヘラケズリ	ヘラケズリ のち指ナデ	橙	橙	白粒, 灰粒, 長石 角閃石	-	-	16c 代	
	527	溝状遺構1号	土師器	皿	H 56	マ	口縁~底部	(8.4)	6.6	1.8	ヘラケズリ	ヘラケズリ のち指ナデ	橙	橙	黒粒, 長石	-	-	中世前半	
	528	溝状遺構1号	土師器	皿	G-H H 52-55 54	マ2	口縁~底部	(10.6)	(8.2)	1.3	ヘラケズリ	ヘラケズリ	橙	橙	白粒	-	-	中世前半	
	529	溝状遺構1号	土師器	皿	H 54	マ2	口縁~底部	(9.0)	(7.2)	1.7	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒粒, 白色小石	-	-	16c 代	
	530	溝状遺構1号	土師器	皿	I 59	マ3	底部	-	(4.0)	-	ヘラケズリ のち指ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	淡橙	白粒, 白色小石 石英	-	5062	16c 代以降	
531	溝状遺構1号	土師器	坏・皿	H 54	マ2	口縁~胴部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	灰粒, 白色小石	-	-			

第24表 中世遺構内出土遺物観察表(3)

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博分類	取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
110	532	溝状遺構1号	土師器	甕	I	59	胴部	-	-	-	平行タタキ	ヘラケズリ	にぶい橙	淡橙	赤粒, 黒粒, 小石 石英	-	5120	古代
	533	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	I	59	マ3 口縁-胴部	-	-	-	ユビオサエ	スリ目	淡黄	淡黄	-	-	5173	
	534	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	H・I	56-58	マ 口縁部	-	-	-	ハケメ・ナデ	ハケメ・スリ目	黄灰	オリーブ黒	白粒, 石英	-	-	
	535	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	H	51・52	マ2 口縁部	-	-	-	ナデ	スリ目	灰白	灰白	精良, 白粒	-	-	
111	536	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	H	54	マ2 口縁部	-	-	-	ナデ	スリ目	灰	灰白	白粒, 白色小石 角閃石	-	-	
	537	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	H	54	マ2 底部	(14)	-	-	-	スリ目	灰黄	灰黄	白粒, 石英, 長石	-	-	
	538	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	I	59	マ3 底部	-	(15)	-	ヘラケズリ	スリ目	灰	灰	白粒, 黒粒, 小石 石英, 長石	-	5055	
	539	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	H	55	マ2 底部	-	-	-	ユビオサエ	スリ目	灰	灰白	長石	-	-	
	540	溝状遺構1号	瓦質土器	播鉢	H	54	マ2 底部	-	-	-	ヘラケズリ	ハケメ	灰	灰	白粒, 角閃石	-	-	
	541	溝状遺構1号	瓦質土器	鍋	H	51	マ2 口縁部	-	-	-	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ	灰白	灰黄	長石, 角閃石	-	-	中世前半
	542	溝状遺構1号	瓦質土器	鍋	H	52	マ2 口縁部	(32)	-	-	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	にぶい褐	灰褐	白粒, 赤粒 白色小石	-	-	中世前半
	543	溝状遺構1号	瓦質土器	鍋	H	52	マ2 口縁部	-	-	-	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	にぶい黄褐	暗オリーブ	白粒, 赤粒 白色小石	-	-	中世前半
	544	溝状遺構1号	瓦質土器	鍋	H	56	マ2 口縁部	-	-	-	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	黄灰	黄灰	白粒, 白色小石 角閃石	-	-	中世前半
	545	溝状遺構1号	瓦質土器	鍋	H	54	マ2 口縁部	-	-	-	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	灰	灰	白粒, 長石, 角閃石	-	-	中世前半
112	546	溝状遺構1号	瓦質土器	風炉	H	52	マ 口縁部	-	-	-	工具ナデ	ミガキ・ハケメ	灰	灰	白粒, 石英	-	3504	
	547	溝状遺構1号	瓦質土器	湯釜	H	54	マ2 口縁部	-	-	-	ユビオサエ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	白粒, 黒粒	-	-		
	548	溝状遺構1号	瓦質土器	火鉢・風炉	H	55	マ2 胴-底部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	暗灰	暗灰	白粒, 石英	-	-	
	549	溝状遺構1号	瓦質土器	火鉢・風炉	H	55	マ2 胴-脚部	-	-	-	ミガキ・ハケメ	ハケメ	黄灰	黄灰	白粒, 灰粒	-	-	
	550	溝状遺構1号	瓦質土器	風炉・壺	H	51・52	マ2 口縁-頭部	-	-	-	工具ナデ・ユビナデ	工具ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	白粒	-	-	
113	551	溝状遺構1号	瓦質土器	風炉・壺	H	54	マ2 口縁部	28.5	-	(4.5)	ナデ	ナデ	灰	灰	白粒	-	-	
	552	溝状遺構1号	須恵器	甕	H・I	51-53	マ2 口縁部	-	-	-	格子目タタキ のちナデ	ナデ	灰白	灰白	白粒	-	-	
	553	溝状遺構1号	須恵器	壺	H	54	マ2 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ハケメ・ 当て具痕	灰白	灰白	白粒, 角閃石	-	-	
	554	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	55	マ2 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	黄灰	黄灰	白粒, 長石	-	-	中世前半
	555	溝状遺構1号	須恵器	甕	I	55 56-58	II a マ1 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ハケメ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒, 長石, 角閃石	-	-	
	556	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	51・52	マ2 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	黄灰	黄灰	灰粒	-	-	
	557	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	55	マ2 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ヨコナデ・平 行当て具痕	褐灰	褐灰	黒粒, 灰粒	-	-	中世前半
	558	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	55	マ2 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ヨコナデ・平 行当て具痕	黄灰	黄灰	白粒	-	-	中世前半
114	559	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	51-52	マ2 胴部	-	-	-	格子目タタキ	ハケメ・ナデ	灰オリーブ	灰白	精良	-	-	
	560	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	57	マ2 胴部	-	-	-	山形タタキ	ハケメ・ナデ	褐灰	褐灰	灰粒, 角閃石	-	-	中世前半
	561	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	56	マ2 胴-底部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	灰	黄灰	白粒, 灰粒, 角閃石	-	-	
	562	溝状遺構1号	須恵器	鉢	I	51-55	マ1 胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白	灰黄	白粒, 角閃石	-	-	13c 後半
	563	溝状遺構1号	須恵器	鉢	H	55	マ2 口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	白粒, 黒粒, 灰粒 小石	-	-	13c 後半
	564	溝状遺構1号	須恵器	鉢	H	52	マ2 口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	白粒	-	-	13c 後半
	565	溝状遺構1号	須恵器	鉢	H	61	マ1 口縁-胴部	(27)	-	-	ナデ	ナデ	灰白	黒褐色	白粒, 黒粒	-	4363	13c 後半
	566	溝状遺構1号	須恵器	鉢	I	59	マ2 口縁部	(25)	-	-	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	白粒, 灰粒, 長石	-	4419	13c 後半
	567	溝状遺構1号	須恵器	甕	H	55	マ2 口縁-胴部	(45)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14c 後半
	568	溝状遺構1号	国産陶器	甕	I	59	マ3 口縁部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	褐	-	-	5097	14c 前半
115	569	溝状遺構1号	国産陶器	甕	I	59	マ5 頸部	-	-	-	-	-	にぶい褐	にぶい褐	-	-	5192	
	570	溝状遺構1号	国産陶器	甕	I	60	マ3 胴-底部	(19)	-	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	-	-	5181	
	571	溝状遺構1号	国産陶器	甕	H	53	マ2 胴-底部	-	-	-	-	-	にぶい橙	褐灰	-	-	-	
	572	溝状遺構1号	国産陶器	不明	H	53	マ2 底部	-	10.2	-	-	-	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒, 石英	-	-	
	573	溝状遺構1号	国産陶器	こね鉢	H	55	マ2 底部	-	(9.5)	-	-	-	灰白	灰白	白粒, 黒粒	-	-	
	574	溝状遺構1号	国産陶器	鉢	I	59	マ3 口縁部	-	-	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	5123 5124	
	575	溝状遺構1号	国産陶器	壺	I	60	マ3 口縁部	(32)	-	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	5083	
116	576	溝状遺構1号	白磁	碗	H	56	マ2 胴-底部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	V 4	-	12c 中頃-後半
	577	溝状遺構1号	白磁	壺	H	52	マ2 胴部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰白	-	-	-	中世前半
	578	溝状遺構1号	白磁	坏	H	54	マ2 胴部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	14c 中頃-後半
	579	溝状遺構1号	白磁	碗	H	52-53	マ1 胴部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	中世後半
	580	溝状遺構1号	白磁	碗	H	54	マ2 底部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	14c 後半~ 15c 前半
	581	溝状遺構1号	白磁	皿	H・I	53-58	マ1 口縁-胴部	12	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	中世後半期
	582	溝状遺構1号	白磁	碗	-	-	マ 底部	(6)	-	-	-	-	橙	浅黄橙	-	-	3515	
	583	溝状遺構1号	白磁	皿	H・I	56-58	マ1 底部	-	4.0	-	-	-	灰白	灰白	-	B 群	-	15c 前半
	584	溝状遺構1号	白磁	皿	H	51-52	マ 口縁-胴部	13	-	-	-	-	灰白	灰白	-	IX 類	-	13c 後半~ 14c 初
	585	溝状遺構1号	白磁	皿	-	-	マ 底部	(8)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	C 1 群	3521	15c 後半

第25表 中世遺構内出土遺物観察表(4)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博 分類	取上 番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
116	586	溝状遺構1号	白磁	碗	H・I 51-55	マ1	口縁~胴部	-	-	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	-	-	-	
	587	溝状遺構1号	青白磁	瓶・坏	H 53	マ1	口縁~胴部	(8.0)	-	-	鋸歯状の 浮文	鋸歯状の浮 文	灰白	灰白	-	-	-	
	588	溝状遺構1号	青白磁	梅瓶	I 59	マ1	胴部	-	-	-	数条の沈線 または溝状の文様	数条の沈線	明緑灰	浅黄橙	-	-	4036	中世前半
	589	溝状遺構1号	青白磁	梅瓶	H 56	マ2	胴部	-	-	-	沈線・浮文	沈線	灰白	灰白	-	-	-	中世前半
	590	溝状遺構1号	青磁	碗	H 51-55	マ1	底部	-	6.2	-	-	-	灰白	灰白	-	A類	-	12c後半~13c初頭
	591	溝状遺構1号	青磁	碗	H 53	マ2	口縁部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	B I類	-	13c中頃~14c前半
	592	溝状遺構1号	青磁	皿	H 54	マ2	底部	-	6.2	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	13c後半~14c前半
	593	溝状遺構1号	青磁	碗	I 59	マ2	口縁部	(15.8)	-	-	-	-	灰オリーブ	灰白	-	D I類	4195	14c後半~15c前半
	594	溝状遺構1号	青磁	碗	I 50	マ2	口縁部	(18.2)	-	-	-	-	浅黄橙	灰白	-	D I類	4846	14c後半~15c前半
	595	溝状遺構1号	青磁	碗	G・H 52-55	マ	胴部	-	-	-	-	-	灰白	-	-	D II類	-	15c中頃~後半
	596	溝状遺構1号	青磁	皿	H 53	マ1	口縁~胴部	(12.0)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	15c中頃
	597	溝状遺構1号	青磁	碗	H 56	マ2	胴~底部	-	5	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	-	15c後半
	598	溝状遺構1号	青磁	皿	H・I 58	マ	底部	-	7.2	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	-	15c
	599	溝状遺構1号	青花	碗・皿	H 52	マ2	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	近世の可能性あり
	600	溝状遺構1号	輸入陶器	不明	H 56	マ2	口縁部	(22.2)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	
	601	溝状遺構1号	輸入陶器	壺	H 54	マ2	口縁部	(8.0)	-	-	-	-	褐灰	-	-	-	-	
	602	溝状遺構1号	輸入陶器	盤	H 54	マ2	口縁部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	3471	
	603	溝状遺構1号	輸入陶器	盤	H・I 56-58	マ1	胴~底部	-	(16.1)	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	-	
	604	溝状遺構1号	輸入陶器	不明	H 54	マ2	胴~底部	-	7.1	-	-	-	黒褐	オリーブ黒	-	-	-	
605	溝状遺構1号	輸入陶器	壺	H・I 56-58	マ1	底部	-	(5.7)	-	-	-	黒	黒	-	-	-		
606	溝状遺構1号	輸入陶器	甕	H 51	マ2	底部	-	-	-	-	-	にぶい橙、 褐灰	-	石英	-	-	中世前期	
117	607	溝状遺構1号	滑石製品	沈子	H 56	マ3	体部	長さ 4.05	幅 1.9	厚さ 1.6	-	-	-	-	-	-	-	※重量19.1g
	608	溝状遺構1号	滑石製品	沈子	H 53	マ3	体部	4.3	2	1.9	-	-	-	-	-	-	-	※重量16.9g
	609	溝状遺構1号	滑石製品	不明	H 56	マ3	底部	6.7	4.1	1.1	-	-	-	-	-	-	-	※重量35.5g
	610	溝状遺構1号	滑石製品	不明	H 52	マ3	胴部	8.2	7.5	0.9	-	-	-	-	-	-	-	※重量76.1g
	611	溝状遺構1号	滑石製品	石鍋	-	マ	口縁部	2.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	※重量59.8g
118	612	溝状遺構2号	土師器	坏	-	マ	口縁~底部	13.1	8.4	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 黒粒, 石英	-	3724	
	613	溝状遺構2号	土師器	坏	-	マ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 長石	-	3594 3627	
	614	溝状遺構2号	土師器	坏	I 52	マ2	底部	-	9.6	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒 小石, 石英	-	-	
	615	溝状遺構2号	土師器	小皿	-	マ	底部	-	8	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白粒, 黒粒, 灰粒	-	3701	
	616	溝状遺構2号	土師器	小皿	I 54	マ	口縁~底部	-	7	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒	-	3791	
	617	溝状遺構2号	土師器	小皿	I 54	床着	口縁~底部	8.65	7.2	1.55	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 小石 長石	-	-	
	618	溝状遺構2号	瓦質土器	搦鉢	I 54	マ1	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケメ	灰	灰	白粒, 灰粒	-	-	
	619	溝状遺構2号	瓦質土器	搦鉢	-	マ	底部	-	-	-	工具ナデ	スリ目	灰白	灰白	白粒, 石英	-	3582	
	620	溝状遺構2号	瓦質土器	搦鉢	I 54	マ	胴~底部	-	-	-	ナデ・ ユビオサエ	スリ目	灰	灰	白粒, 灰粒, 長石	-	3805	
	621	溝状遺構2号	瓦質土器	搦鉢	I 52	マ1	口縁部	-	-	-	ナデ・ ユビオサエ	ハケメ	灰オリーブ	灰	白色小石	-	-	
	622	溝状遺構2号	瓦質土器	搦鉢	I 52	マ1	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒	-	-	
	623	溝状遺構2号	瓦質土器	鍋	-	マ	口縁部	-	-	-	ハケメ・ナデ	ハケメ	灰	灰	白粒, 角閃石	-	3782	
	624	溝状遺構2号	瓦質土器	鍋	I 55	マ	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒, 長石	-	3417	
	625	溝状遺構2号	瓦質土器	鍋	I 54	マ2	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケメ	灰	灰白	白粒, 角閃石	-	-	
626	溝状遺構2号	須恵器	甕	-	マ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	灰	灰	白粒, 灰粒	-	3702		
627	溝状遺構2号	須恵器	甕	-	マ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒, 灰粒, 角閃石	-	3705		
628	溝状遺構2号	須恵器	甕	I 54	マ2	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	灰白	灰白	白粒, 長石, 角閃石	-	-		
629	溝状遺構2号	須恵器	甕	I 54-55	マ1	肩部	-	-	-	-	ヘラケズリ	灰	灰	-	-	-	14c前半	
630	溝状遺構2号	白磁	皿	-	マ	口縁部	(14.0)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	IX類	3690	13c後半	
631	溝状遺構2号	白磁	不明	I 54	マ1	胴部	-	-	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	14c代	
632	溝状遺構2号	青磁	碗	-	マ	底部	-	(5.0)	-	-	-	灰オリーブ	明灰オリーブ	-	B I類	3713	13c中頃~14c前半	
633	溝状遺構2号	青磁	皿	I 54-55	マ1	口縁~底部	(10.6)	-	-	-	-	灰	灰	-	-	-	12c後半~13c初	
634	溝状遺構2号	輸入陶器	壺	-	マ	頸部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	黒褐	-	-	3736	中世前半	
635	溝状遺構2号	滑石製品	沈子	I 52	マ	体部	3	1.2	1.4	-	-	-	-	-	-	-	3717	※重量7.0g
636	溝状遺構2号	滑石製品	沈子	I 53	マ2	体部	2.45	1.75	2.1	-	-	-	-	-	-	-	3801	※重量6.6g
637	溝状遺構2号	滑石製品	沈子	I 55	マ	体部	4.6	3.8	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	※重量36.6g
638	溝状遺構2号	滑石製品	沈子	I 53	マ2	体部	4.3	1.8	2.1	-	-	-	-	-	-	-	3800	※重量18.8g
639	溝状遺構2号	鉄製品	釘	I 54	マ	-	7.1	1.7	1.2	-	-	-	-	-	-	-	3680	※重量14.1g

第26表 中世遺構内出土遺物観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博 分類	取上 番号	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面					
121	640	溝状遺構 3号	瓦質土器	播鉢	G	59	マ1	口縁部	(20.0)	-	-	-	ハケメ	灰	内面	白粒, 黒粒	-	4324	
	641	溝状遺構 3号	瓦質土器	播鉢	G	59	マ2	胴部	-	-	-	-	スリメ	におい赤褐	褐灰	白粒, 石英 (多量) 小石	-	4568	
	642	溝状遺構 3号	須恵器	甕	E・F	59	マ	口縁部	-	-	-	ナデ・タタキ	ナデ・ハケメ	褐灰	灰	精良, 石英, 長石 角閃石	-	-	中世前半
	643	溝状遺構 3号	須恵器	甕	H	58	マ	胴部	-	-	-	タタキ	ナデ	におい黄橙	暗灰	白色小石, 長石, 角閃石	-	-	中世前半
	644	溝状遺構 3号	国産陶器	壺	G	58	マ1	胴部	-	-	-	-	-	明オリブ	灰白	-	-	4629	13c 後半 ~ 14c 前半
	645	溝状遺構 3号	国産陶器	壺	G・H	58	マ	胴部	-	-	-	-	-	明オリブ	灰白	-	-	-	-
	646	溝状遺構 3号	白磁	皿	H	60	マ3	口縁~胴部	(10.5)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	4636	15c 前半
	647	溝状遺構 3号	白磁	坏	G・H	58	マ	口縁~底 部付近	(8.6)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	B 群	-	15c 前半
	648	溝状遺構 3号	青磁	碗	E・F	59	マ	口縁~胴部	-	-	-	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	-	-	14c ~ 15c
	649	溝状遺構 3号	青磁	碗	H	59	マ2	口縁部	-	-	-	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	B 2類	4504	14c 後半 ~ 15c 中頃
	650	溝状遺構 3号	輸入陶器	甕	G	59	マ2	胴部	-	-	-	-	-	淡黄	浅黄橙	-	-	4751	
651	溝状遺構 3号	輸入陶器	甕	H	59	マ2	底部	-	(15.3)	-	-	-	灰黄褐	黄灰	-	-	4507		
126	652	溝状遺構 4号	土師器	皿	E	62・63	マ	底部	-	7.0	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 角閃石	-	-	中世前半
	653	溝状遺構 4号	土師器	皿	H	63	マ2	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白粒, 白色小石	-	4942	中世前半
	654	溝状遺構 4号	瓦質土器	不明	D・E	62	マ	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	におい橙	におい橙	白粒, 黒粒, 長石 角閃石	-	-	
	655	溝状遺構 4号	瓦質土器	不明	-	-	マ	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒 白色小石, 長石, 石英	-	-	
	656	溝状遺構 4号	瓦質土器	鉢	E・F	63	マ	口縁~底部	(14.0)	(10.2)	5.6	ナデ	ナデ	灰黄褐	におい黄橙	精良	-	-	
	657	溝状遺構 4号	瓦質土器	湯釜	H	64	マ2	胴部	-	-	-	ナデ・ハケメ	ナデ	褐灰	におい黄橙	白粒, 白色小石, 長石 角閃石 (多量)	-	5017-1	
	658	溝状遺構 4号	瓦質土器	風炉	E	62・63	マ	胴部	-	-	-	ハケメ	ナデ	黄灰	におい褐	長石, 角閃石	-	-	
	659	溝状遺構 4号	瓦質土器	鉢	I	63	マ3	口縁~底部	35.9	11.5	-	工具ナデ・ ナデ	ハケメ・ナデ	におい橙	におい橙	赤粒, 灰粒, 長石 角閃石	-	5013 5015	
126	660	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	H	64	マ3	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ナデ, ユビ オサエ	褐灰	灰	白粒, 長石, 角閃石	-	4988	
	661	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	F	63	マ	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 白粒, 小石 長石, 角閃石	-	-	
	662	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	I	63	マ3	口縁~胴部	(30.0)	-	-	ナデ	ハケメ	灰	灰	白粒, 黒粒, 石英	-	4992	
	663	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	G	64	マ2	口縁~胴部	-	-	-	ナデ・ハ ケメ	ハケメ	灰白	灰白	灰粒, 角閃石	-	4814	
	664	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	H G	64 63	マ2	口縁部	(20.0)	-	-	ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	白粒, 長石, 角 閃石	-	4845 4829	
127	665	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	-	-	マ	胴部	-	-	-	ケズリ	ナデ	橙	褐灰	白粒, 灰粒, 石英 長石	-	SD135	
	666	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	E	62	マ	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰黄	黄灰	尻路ロ, 石英, 長石	-	-	
	667	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	G	64	マ2	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	白粒, 石英	-	4827	
	668	溝状遺構 4号	瓦質土器	播鉢	H	63	マ3	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	白粒, 石英, 長石	-	5026	
	669	溝状遺構 4号	須恵器	甕	H	64	マ2	頸部	-	-	-	ハケメ・ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	関絵, 長石	-	4906	中世前半
	670	溝状遺構 4号	須恵器	甕	G	64	マ3	胴部	-	-	-	格子目タタキ	マメツ	褐灰	褐灰	長石	-	5006	中世前半
	671	溝状遺構 4号	須恵器	甕	D・E	63	マ	胴部	-	-	-	山形タタキ	ナデ	灰白	灰白	石英	-	-	中世前半
	672	溝状遺構 4号	須恵器	甕	D	62	マ	胴部	-	-	-	山形タタキ	ハケメ	黄灰	灰黄	白粒, 石英	-	-	中世前半
	673	溝状遺構 4号	須恵器	甕	H	63	マ1	胴部	-	-	-	山形タタキ	ハケメ	褐灰	褐灰	白粒	-	4784	中世前半
	674	溝状遺構 4号	須恵器	鉢	E	62・63	マ	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄灰	灰オリブ	白粒, 灰粒	-	-	
	675	溝状遺構 4号 SS1	国産陶器	甕	F	63	マ	口縁~胴部	(24.0)	-	-	-	-	におい黄褐	褐灰	-	-	SD13- SS1.5	14c 初 ~ 前半
128	676	溝状遺構 4号	国産陶器	甕	H	63	マ3	胴部	-	-	-	-	-	灰オリブ	橙	-	-	4975	
	677	溝状遺構 4号	国産陶器	甕	I	63	マ3	胴部	-	-	-	-	-	暗褐	褐灰	-	-	4971	
	678	溝状遺構 4号 SP1	国産陶器	甕	F	63	マ	底部	-	(31.0)	-	-	-	橙	におい橙	-	-	SD13- SP1	
	679	溝状遺構 4号	国産陶器	播鉢	-	-	マ	口縁部	-	-	-	-	-	におい黄	灰黄	-	-	-	12c 末 ~ 13c 前半
	680	溝状遺構 4号	白磁	皿	E	62・63	マ	口縁~底部	(8.0)	2.4	3.1	-	-	灰白	灰白	-	B 群	-	
	681	溝状遺構 4号	白磁	皿	-	-	マ1	底部	-	3.5	-	-	-	灰白	灰白	-	B 群	-	15c 前半
	682	溝状遺構 4号	白磁	皿	F	63	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	C 1群	-	15c 後半
	683	溝状遺構 4号	青磁	碗	H	64	マ2	底部	-	(5.0)	-	-	-	明オリブ灰	明緑灰	-	A 類	4843	12c 後半 ~ 13c 前半
	684	溝状遺構 4号	白磁	皿	I	63	マ	口縁~胴部	(8.0)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	B 類	4771	15c 中頃
	685	溝状遺構 4号	青磁	碗	G	64	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰オリブ	オリブ黄	-	B 1類	4744	13c 中頃 ~ 14c 前半
	686	溝状遺構 4号	青磁	碗	E・F	63	マ	胴部	-	-	-	-	-	浅黄橙	淡黄	-	B 4類	-	15c 後半 ~ 16c 前半
	687	溝状遺構 4号	青磁	碗	G	64	マ2	口縁~胴部	(16.2)	-	-	-	-	オリブ灰	灰	-	D 1類	4816	14c 後半 ~ 15c 前半
	688	溝状遺構 4号	青磁	壺	-	-	マ	口縁部	-	-	-	-	-	オリブ灰	オリブ灰	-	-	-	中世前半
	689	溝状遺構 4号	青花	碗	F	63	マ	口縁~底部	(14.0)	-	-	-	-	灰白	灰白	-	C 群	-	15c 後半 ~ 16c 前半
128	690	溝状遺構 4号	青花	皿	F	63	マ	口縁~底部	(13.2)	(8.4)	2.4	-	-	灰白	灰白	-	E 群	-	16c 中頃 ~ 16c 前半
128	691	溝状遺構 4号	輸入陶器	盤・鉢	F	63	マ	胴部	-	-	-	-	-	におい黄橙	灰白	-	-	-	中世前半

第27表 中世遺構内出土遺物観察表(6)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博 分類	取上 番号	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面					
130	692	溝状遺構5号	土師器	坏	G	67	マ	完形	12.6	7.8	4.0	-	-	淡橙	淡橙	赤粒, 赤色小石	-	5148	
	693	溝状遺構5号	瓦質土器	搦鉢	G	66	マ	口縁~胴部	(29.2)	-	-	ナデ	ハケメ	灰白	灰白	白粒, 灰粒, 石英 長石	-	4893	
	694	溝状遺構5号	瓦質土器	搦鉢	G	67	マ	胴~底部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	にぶい黄橙	黄灰	白粒, 灰粒, 石英	-	5054	
133	695	溝状遺構6号	瓦質土器	搦鉢	D・E	67-69 他	I 他	口縁~胴部	(31.8)	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰白	赤粒, 白粒, 灰粒 長石	-	3019	
	696	溝状遺構6号	瓦質土器	搦鉢	-	-	マ	底部	(10.0)	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	白粒, 角閃石	-	3024 3025 3022	
	697	溝状遺構6号	瓦質土器	搦鉢	D・E	67-69	マ	口縁~胴部	-	-	-	-	ヘラケズリ	赤	赤	-	-	-	
	698	溝状遺構6号	瓦質土器	搦鉢	E	67	マ	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒, 長石 角閃石	-	-	
	699	溝状遺構6号	瓦質土器	搦鉢	E	69	マ	底部	-	(12.4)	-	ケズリ・ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	白粒, 長石	-	-	
	700	溝状遺構6号	瓦質土器	壺	E	67	マ	口縁部	(15.0)	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい橙	灰褐	白粒, 黒粒	-	-	
	701	溝状遺構6号	瓦質土器	湯釜	E	69	マ	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 長石	-	-	
	702	溝状遺構6号	須恵器	甕	E	69	マ	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	黒粒	-	-	
	703	溝状遺構6号	須恵器	不明	E	67	マ	底部	-	-	-	工具ナデ	ハケメ	黄灰	灰黄	白粒, 石英	-	-	
	704	溝状遺構6号	須恵器	甕・壺	D・E	67-69	マ	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒, 白色小石	-	-	
134	705	溝状遺構6号	瓦質土器	火鉢・風炉	D・E	67-69	マ	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	オリーブ灰	にぶい黄橙	白粒, 黒粒, 長石 角閃石	-	-	
	706	溝状遺構6号	瓦質土器	大型品	D・E	67-69	マ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	黒粒, 灰粒	-	3026	
	707	溝状遺構6号	国産陶器	搦鉢	D・E	67-69	マ	口縁~胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 石英 長石	-	-	
	708	溝状遺構6号	国産陶器	搦鉢	D	68	マ	口縁~胴部	-	-	-	-	-	褐灰	赤褐	-	-	3014	
	709	溝状遺構6号	国産陶器	羽釜	E	68	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	黒粒, 長石	-	-	
	710	溝状遺構6号	輸入陶器	甕	D	69	マ	胴部	-	-	-	-	-	にぶい褐	灰褐	-	-	-	
	711	溝状遺構6号	白磁	皿	E D	69 68	マ	底部	-	(8.1)	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	16c 後半以降
	712	溝状遺構6号	青磁	皿	D・E	67-69	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	15c 中頃
	713	溝状遺構6号	青花	碗	E	69	マ	胴~底部	-	(6.8)	-	-	-	明緑灰	灰白	-	-	C 群	15c 後半~16c 前半
134	714	溝状遺構6号	輸入陶器	-	E	67	マ	口縁部	(23.0)	-	-	-	-	黄灰	-	-	-	-	
	715	溝状遺構6号	金属製品	青銅製品	E	69	マ	-	2.7	2.3	0.5	-	-	-	-	-	-	-	※重量9.1 g
135	716	溝状遺構7号	土師器	坏	F	67	マ	口縁~底部	(14.0)	(9.4)	3.5	回転ココナデ	回転ココナデ	灰	灰黄	白粒, 黒粒, 角閃石	-	P16	
	717	溝状遺構7号	瓦質土器	搦鉢	F・G	67	II b	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ハケメ・スリ目	明黄褐	明黄褐	-	-	-	
	718	溝状遺構7号	国産陶器	搦鉢	F・G	67・68	マ	口縁部	-	-	-	-	-	にぶい褐	にぶい褐	-	-	-	14c 前半~15c 前半
	719	溝状遺構7号	瓦質土器	搦鉢	F	67	II b	胴部~底部	-	(14.0)	-	ナデ	ナデ・スリ目	灰	灰	-	-	-	
	720	溝状遺構7号	須恵器	甕	F・G	67・68	マ	胴部	-	-	-	山形タタキ	ナデ	褐灰	褐灰	黒粒	-	-	
137	721	溝状遺構8号	瓦質土器	搦鉢	E	71	I	胴~底部	-	-	-	ヘラケズリ	ハケメ・スリ目	灰黄	灰黄	白粒	-	SD1001-4	
	722	溝状遺構8号	須恵器	甕	E	71	I	頸部	-	-	-	山形タタキ	ハケメ・ナデ	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒	-	SD1001-1	

3 包含層出土遺物

(1) 土師器 (第138図 723～735)

723～735は、土師器である。底部には、糸切り痕が残る。

723～729は、坏である。723は、完形に復元できるものである。体部は底部から直線的に開き、内外面に回転ヨコナデを施す。また、底部の立ち上がりにはユビオサエがまばらに施されている。724～728は、底部から体部下半までが残存する。724は体部以上は欠損するが、底部がほぼ完全に残っている。色調は明るく、胎土に1～数mm大の赤褐色礫を多く含む、底面には6mm大の赤褐色礫が露出する。726は色調がやや暗く、胎土に細かい角閃石粒や白色粒子を含む。焼成も、やや硬質である。727は、胎土の砂粒が細かく、硬質である。体部中位で屈曲して立ち上がる器形と考えられる。屈曲部の内面は、回転ナデにより凹線状をなしている。728は、底部から体部にかけて外面がシミ状に黒変しており、ススの付着によるものと考えられる。また、外面の回転ナデ痕が明瞭で、細かい凹凸が生じている。729は、体部下半にススが付着する。

730～735は、皿である。730は、口縁部がわずかに欠損するが、ほぼ完形である。底部の器壁は薄く、体部下半には強めのナデ調整が施される。732は体部が口縁部にかけて直口気味に立ち上がるもので、胎土がマーブル状をなす。733は、胎土も含め全体が黒色を呈する。製作方法は他の資料と同様で、回転ナデ成形である。胎土に、微細な石英粒を多く含む。734・735は底部の小片で、734は全体的に摩滅する。735は底部は糸切りであるが、体部の立ち上がりに工具による調整が加えられ、段が生じている。

(2) 瓦質土器 (第139～145図 736～783)

736～783は、瓦質土器である。色調から、土師質のものや須恵質のものに分けられるが、以下では器種や形態別にまとめて報告する。

736～748は、播鉢である。内面には放射状にスリ目が施され、4～12条を1単位とし、バリエーションがある。

736～738は口唇部が丸みを帯びる。736は、外面の底部近くに、ケズりに近いナデ調整が施される。内面のスリ目は、やや粗雑である。胎土には、3mm大の白色礫をまばらに含む。737・738は、口径が比較的小さいものと推定される。737は、上面観が楕円形を呈する。外面のケズリ調整が明瞭で、底部の立ち上がり付近に、横位のケズリが施される。内面には、「の」字状のスリ目が施される。738はやや軟質であるが、内外面は燻しによる黒の発色が強い。

739～745は、口唇を平坦に成形し、その中央をナデにより溝状に凹ませるものである。中でも、742・743は

口唇部下端が外側へ張り出し、745は沈線に近い深い溝が巡る。いずれも外面はケズリ調整の後、ナデ調整が施され、粘土紐の接合部を中心にユビオサエが連続して加えられる。また、741・742・745は口縁部下に強いヨコナデ調整が加えられ、外面が帯状に凹む。744は、注ぎ口が残存する破片である。内面には、スリ目がわずかに残るが、条数は不明である。胴部外面には、連続したユビオサエ調整が施される。745は、胎土に砂粒を多く含む、3mm大の白色礫をまばらに含む。外面は、体部がナデやユビオサエ調整によりやや凹凸があるのに対し、口縁部周辺や体部下位はナデ調整やケズリ調整を加えた丁寧なつくりである。

746～748は、体部下半である。746は、内面及び内底面に密なスリ目が施され、内面にススが付着する。外面は、被熱により器面が剥落しており、淡く赤化している。747はやや上げ底の器形で、内底面まで細かいスリ目が施されている。底部から体部への立ち上がりには、横位のヘラケズリ痕が明瞭に残る。748は、外面にわずかに縦位のハケ目が残る、その後、ナデやユビオサエが施されている。内面にはハケ目が明瞭に残り、その上からスリ目が施されている。スリ目は摩耗しており、高頻度で使用されたと考えられる。

749は、播鉢類と形態は類似するが、スリ目が確認できないため、捏鉢の可能性もある。口縁部は内湾し、口唇部は丸くおさめられている。注ぎ口の基部が、わずかに残る。口縁部周辺は、内外面とも丁寧なヨコナデ調整が施され、内面は口縁部下から斜位のハケ目調整後にヨコナデ調整が加えられる。体部外面は、ユビオサエ及びナデ調整である。

750～752は、口縁部内面に、菊花文のスタンプを押捺するものである。形態は播鉢や捏鉢に類似するが、スリ目は残存しない。750・751は色調や調整が類似しており、同一個体と想定される。750は口縁部で、口唇部がナデ調整により浅く凹む。751は口唇部が欠損するが、注ぎ口がわずかに残存する。752は、750・751と比べて薄手であり、焼成も須恵質で硬質である。内面の菊花文も小さく、上下にずれて押捺されている。

753～755は、羽釜である。素地の色調は明るく、丁寧なつくりである。また、器壁も薄手である。753・754は口唇部が内面側に張り出すもので、753の内面は横方向のハケ目が施される。753の外面の鏝以下は、ススが付着する。754は、口縁部から鏝の基部の破片であり、内外面とも器面のみ黒色を呈する。755は鏝の破片で、内面は斜位のハケ目調整が施される。内面のみ、器面が黒色を呈する。

756は口縁部片で、鍋と考えられる。口縁部下で屈曲し、内面には横位のハケ目調整が施される。また、内面の屈曲下に、斜位の沈線がわずかに残存する。

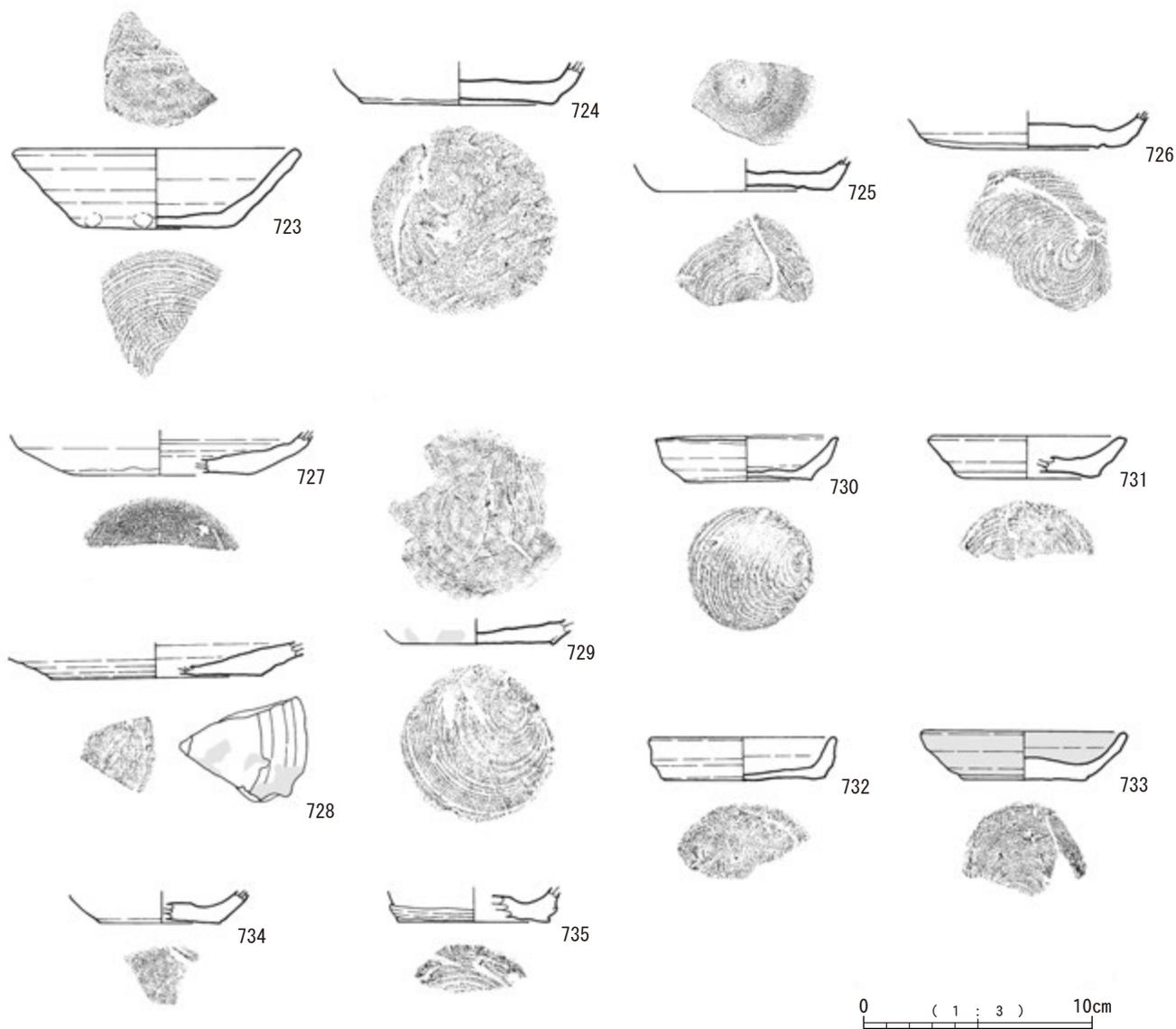
757～760は、破片のため全形が不明であるが、煮炊具と考えられる。757は、厚手で口縁部をわずかに外側に屈曲させる。全体的に摩滅しており残存状況は悪いが、内面に細かい横位のハケ目が残存する。758は薄手で、口縁部が波状となる。小型の鍋や鉢と想定される。外面の胴部の屈曲以下は、幅広のハケ目が残り、口縁部付近はユビナデ調整である。内面は、横位の細かいハケ目調整である。また、外面にはススが付着する。759は、口縁部を断面方形に肥厚し、ナデ調整によりやや内傾する口唇部を作出する。胎土粒子は細かく、土師質である。760は、断面形が隅丸方形を呈する口縁部で、口唇部内面はやや波打つ。

761・762は、焙烙と考えられる。761は、内外面ともススが付着し、底部から緩く立ち上がる。胎土に、1

mm 大の白色及び赤褐色粒を多量に含む。762は把手で、本体との接続部で剥落している。

763・764は大型の甕で、色調や胎土、調整等から同一個体と考えられる。口唇部は欠損し、内外面には粗いハケ目調整が施され、粘土の積み上げ痕を中心にユビオサエが連続する。底面は、全面にハケ目調整が施される。内外面には、石灰質のような白色物質が固着しており、全体的に器面が荒れている。また、胎土に5mm大の白色礫をまばらに含む。

765～780は、火鉢類である。765～771は口縁部で、口縁部を肥厚し、体部に1条の突帯を巡らせる。765～769は、口縁部と突帯の間に菊花文が押捺されるものである。769も、突帯は残存しないが、大ぶりの菊花文が押捺される。いずれも、口唇部にナデ調整を加えて平坦



第138図 中世の遺物①

面を作出しており、わずかに外傾する。770は、口縁部を「く」字状に折り曲げ、屈曲部上面に菊花文を押捺する。771は全体的に摩滅し、突帯も欠損している。外面には、枠囲みした「X」字状の文様が押捺される。

772は、口唇部が欠損し、突帯がつくかは不明瞭である。口縁部が屈曲し、口唇部は平坦面を作出している。内面は剥落し、部分的にしか残存しない。口縁部下に直径約6mmの穿孔が穿たれる。

773～775は、胴部片である。いずれも1条の突帯が巡る。775は胎土が精緻で、焼成も硬質である。776～778は胴部下半から底部にかけての破片である。いずれも、内面にハケ目がみられる。777は、胴部下半に突帯が1条巡る。

779は、脚部と考えられる。摩滅が激しく、形態は不明である。横位に2条の突帯を巡らせ、その間に円形の凹点を施す。上部にはわずかだが、断面「V」字状の縦位の掘りこみが残存する。780は、内面に断面三角形の張り出しがある。外面には、凹線状のヨコナデ痕が1条巡る。

781～783は底部片であり、いずれも色調や胎土が類似していることから、同一個体の可能性がある。底部の端を2又状に成形し、上端に刻みを施す。焼成が良く硬質で、胎土には白色や赤褐色の砂粒を多く含む。形態から、仏具の底部の可能性がある。

(3) 須恵器 (第146～148図 784～811)

784～811は、中世須恵器である。甕を主体とする。784～786は、口縁部である。いずれも、頸部で屈曲し、広く口が開く器形である。また、外面には格子目タタキ、内面にはナデやケズリ調整が施される。786は色調が明るく軟質で、胎土がマーブル状を呈する。787は頸部～肩部で、外面は格子目タタキである。

788～798は、胴部片である。788～791は、外面に格子目タタキ、内面はナデやハケ目調整が確認できる。787は、外面に黒色の自然釉が付着する。791は軟質で、胎土がマーブル状をなす。また、タタキの格子目が大ぶりでやや粗雑な印象である。792は、上半は山形状、下半は格子目タタキとなる。793～797は、山形状のタタキ痕のもので、内面はナデ調整が多いが、793はハケ目調整、795は工具ナデである。796と797は調整や焼成が類似しており、同一個体の可能性が高い。798は、大ぶりの山形状のタタキ痕が重複して施され、内面は細かいハケ目調整である。胎土粒子が細かく焼成も良いが、焼き膨れにより器面に歪みが生じている。

799～804は小片であるが、上記の須恵器類と特徴が異なる一群である。799～801は、色調が明るく、やや軟質なものである。いずれも、焼成は良好である。800は器壁の厚さから、大型甕の口縁部と考えられる。801

は底部片で、内面には明瞭なロクロ痕が残る。

802～804は、胎土の色調に赤みがあり、白色粒を含むものである。小片のため器形や産地は不明であるが、他の資料と異なるものである。

805～811は、東播系須恵器の鉢の口縁部である。805～807は、口縁部外面に自然釉がかかるものである。806・807の口縁部は「く」字状に屈曲する。808は口唇部にナデ調整を加えて平坦面を作出し、上端がやや尖る。胎土に、2・3mm大の褐色礫をまばらに含み、部分的に露出する。809～811は焼成が甘く、色調も瓦質土器に類似するが、器形や調整から本類に含めた。811は、口縁部外面が黒色を呈する。

(4) 国産陶器 (第148～149図 812～824)

812～814は、備前焼である。口唇部は強いナデによって溝状に凹む。いずれも、播鉢と考えられる。812は、注ぎ口の一部分が残存する。814は胴部片で、内面に12条1単位のスリ目がみられる。

815は薄手で、やや焼きが甘い。産地は不明である。スリ目は、5条残存している。

816は、瀬戸焼の瓶子である。胴部上半の破片であり、3条の筋が横位に巡る。ガラス質の緑色釉が外面に施釉されるが、大半が剥落している。

817・818は、常滑焼の甕の破片である。817は、口唇部である。818は胴部片で、下半に格子状のスタンプが押捺される。

819は、外面に櫛状工具で曲線文様が施される。国産陶器の甕と考えられるが、産地は不明である。

820～824は甕である。いずれも、詳細な産地は不明である。820は、薄手の口縁部で口唇部をナデにより外側に張り出させる。硬質で須恵器に似た焼成である。産地は不明である。821～824は、大型の製品である。821は、口縁部を折り曲げて短く外反し、内面はヨコナデ調整により帯状に凹む。備前焼の可能性はある。

822は若干上げ底になる底部で、部分的にユビオサエによる大きな凹みがある。823は、内外面とも茶褐色の釉薬が施釉される。底面には、粘土と思われる付着物がある。824は器壁が厚く、内底面には釉薬が溜まり、ヒビが生じている。外面の釉薬は薄く、底面付近は斑になっている。

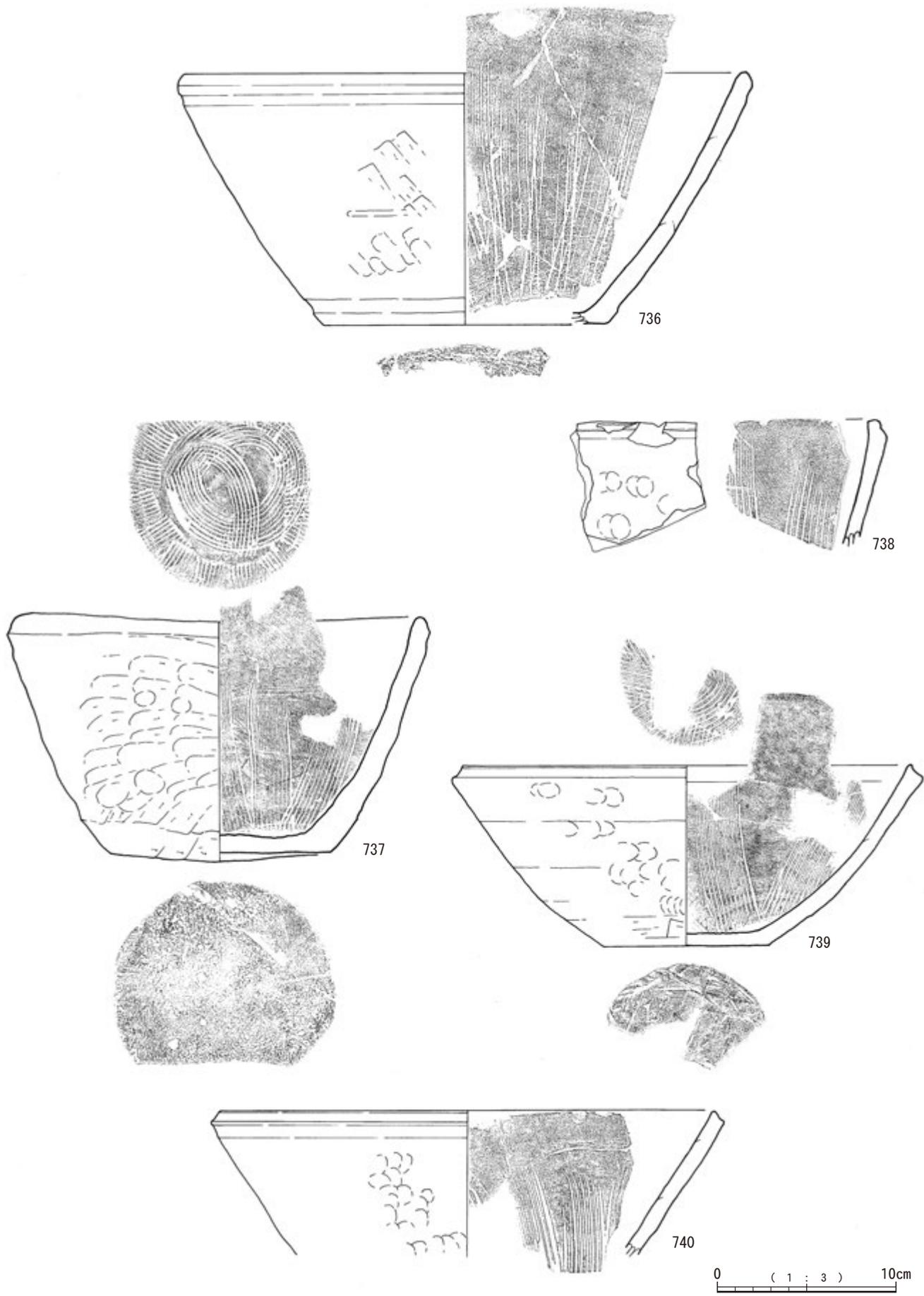
(5) 陶磁器 (第150～161図 825～1040)

白磁 (青白磁含む)、青磁について、中世前半と後半にわけて掲載する。

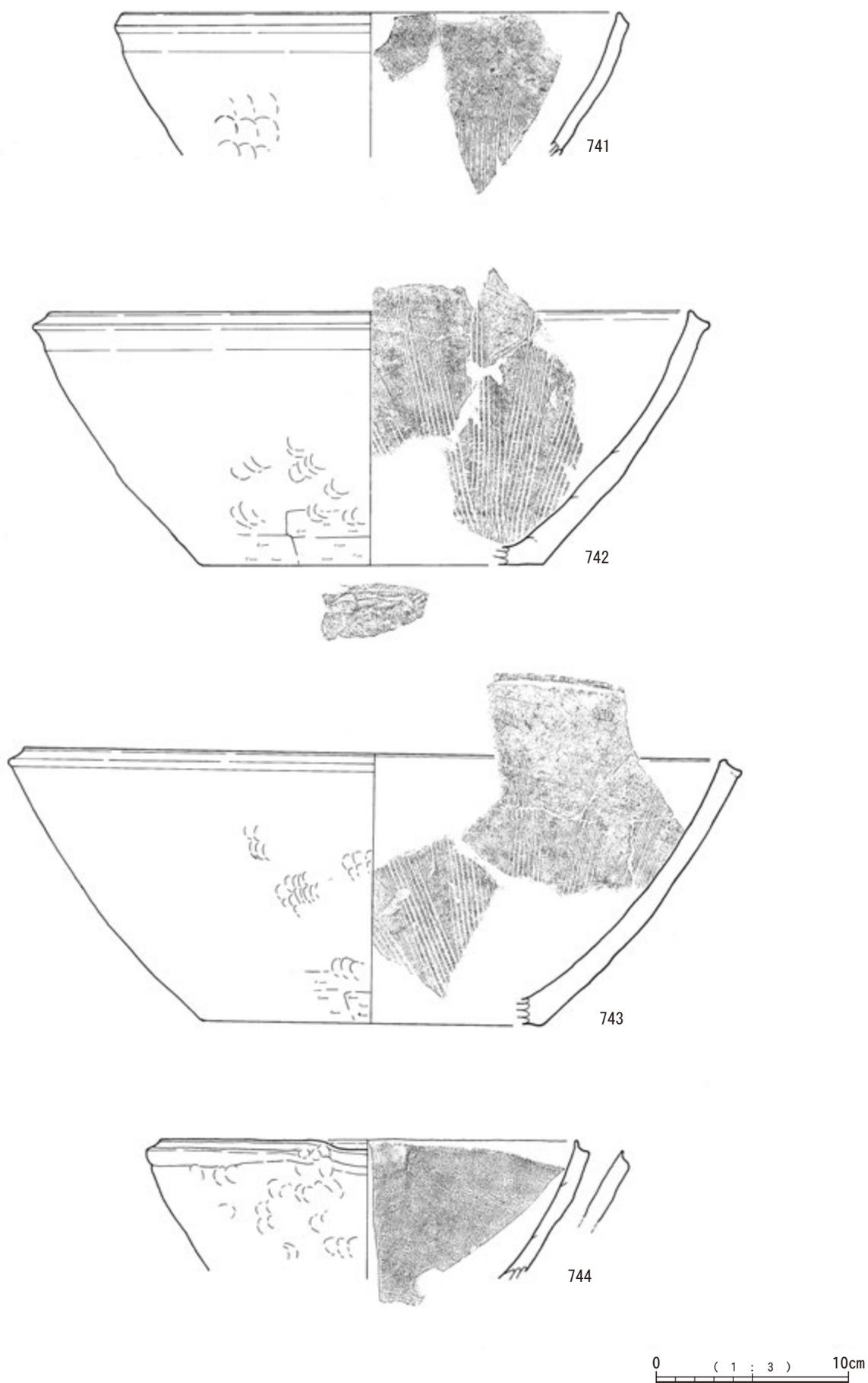
白磁 (第150～152図 825～888)

825～837は、中世前半期の白磁、838は青白磁である。825～828は碗である。

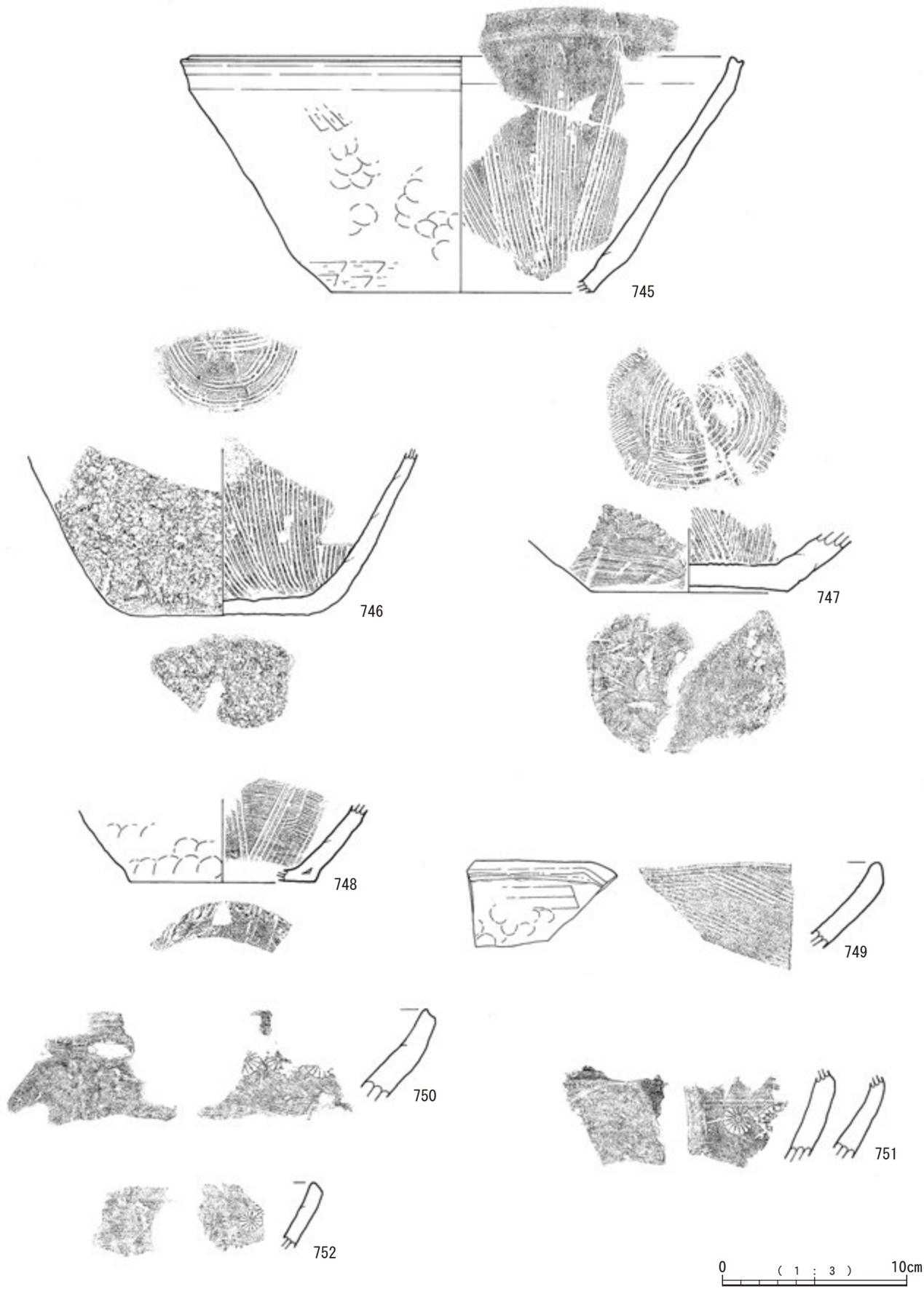
825は、玉縁口縁の碗である。歴博分類白磁碗Ⅳ類 (I



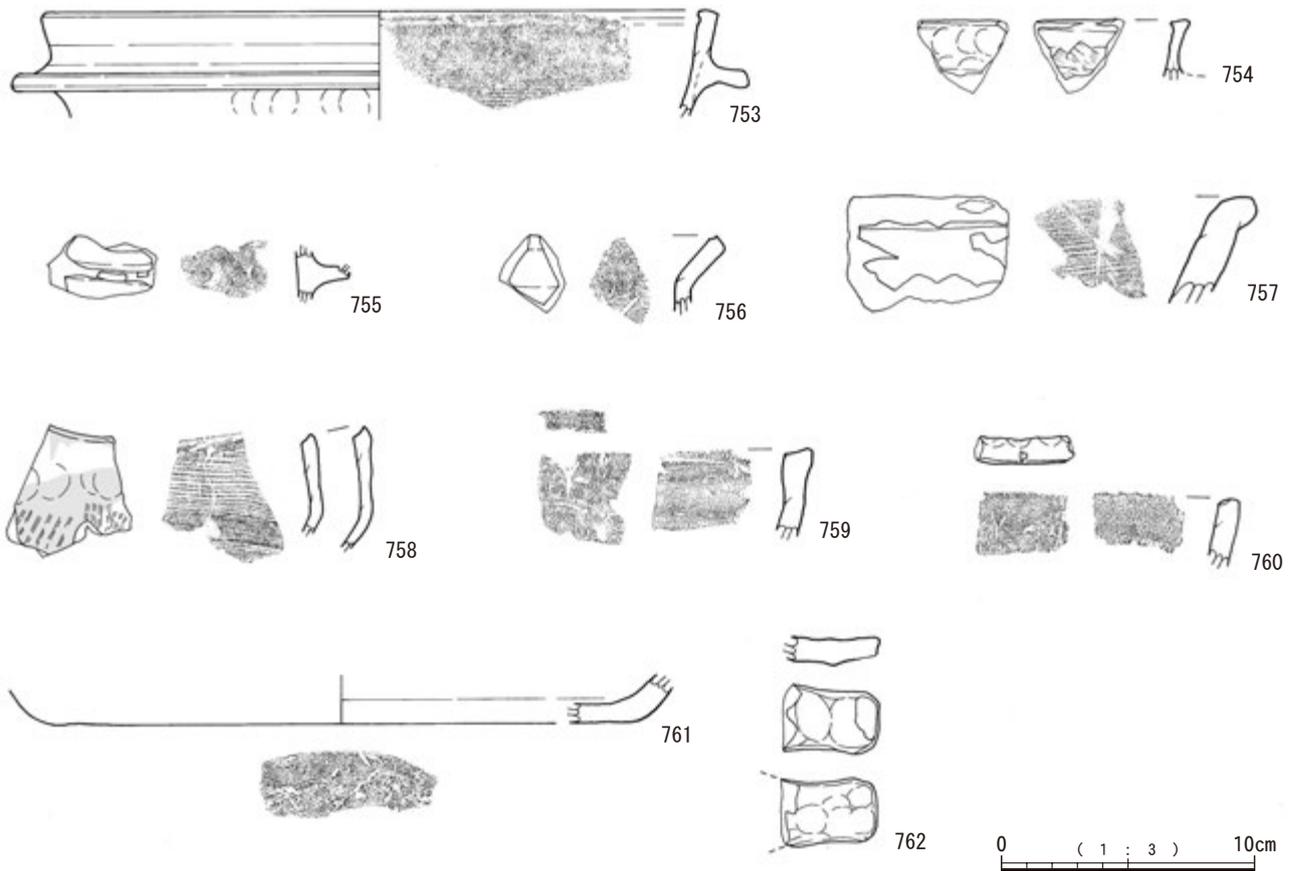
第139図 中世の遺物②



第140図 中世の遺物③



第141図 中世の遺物④



第142図 中世の遺物⑤

期)に該当する。

826は、胴部破片で、内面に櫛目文が見られる。歴博分類白磁碗Ⅵ類（Ⅰ期）と推測される。

827・828は、口唇部を釉剥ぎした口禿碗である。歴博分類白磁碗Ⅸ類（Ⅲ期）に該当する。

829～837は皿である。

829は、高台脇の破片で、見込みに段のある深い圏線を有する。残存部の外面は無釉で、内面の釉色はやや青みを帯びた灰白色を呈し、歴博分類白磁皿Ⅴ類（Ⅰ期）に該当する。

830～837は、口唇部を釉剥ぎした口禿皿である。歴博分類白磁皿Ⅸ類（Ⅲ期）に該当する。

838は、青白磁の合子の蓋である。菊花状の型押し文様が施される。内面は無釉である。

839～888は、中世後半期の白磁である。

839～845は、碗である。

839・840は、口縁部が外反し、器表面にロクロ痕が稜線状に廻っている。歴博分類白磁碗ビロースクタイプⅢ類（Ⅳa期）に該当する。

841～843は、端反りの碗で、歴博分類白磁碗C群（Ⅴ期）に該当する。

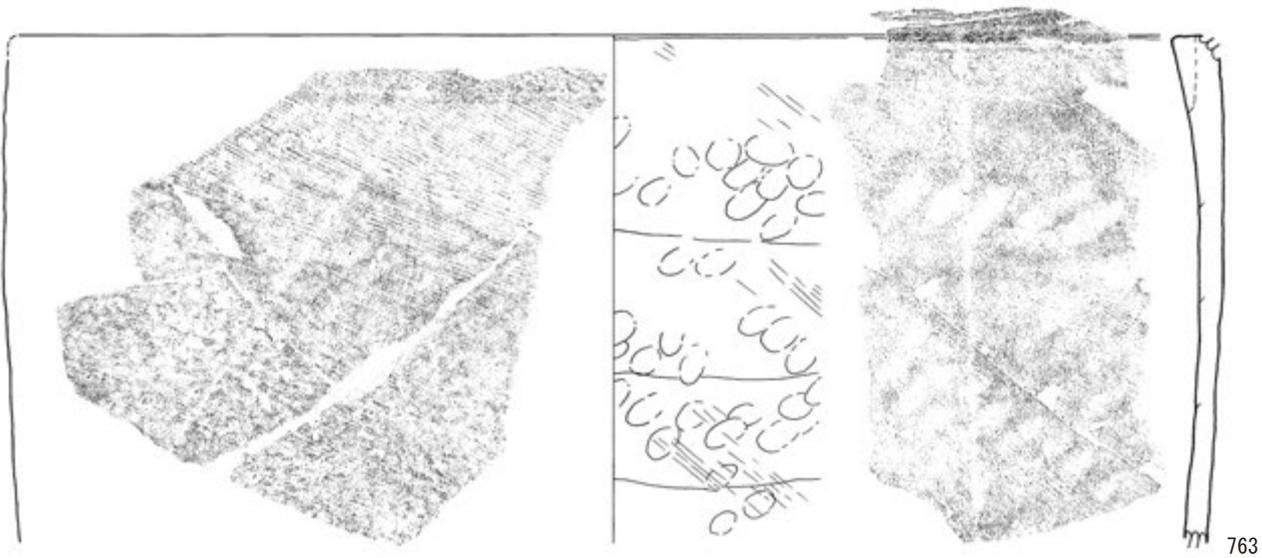
844は、口縁部が若干外反し、釉色は乳白色である。胎土や釉調などから朝鮮白磁（軟質陶磁）と考えられる。片山・森本分類のⅧ類で16世紀初～17世紀初に比定され（片山・森本2000）、歴博編年のⅤ・Ⅵ期に該当する。

845は、直口口縁の小碗で、胴部下位から高台にかけて無釉である。

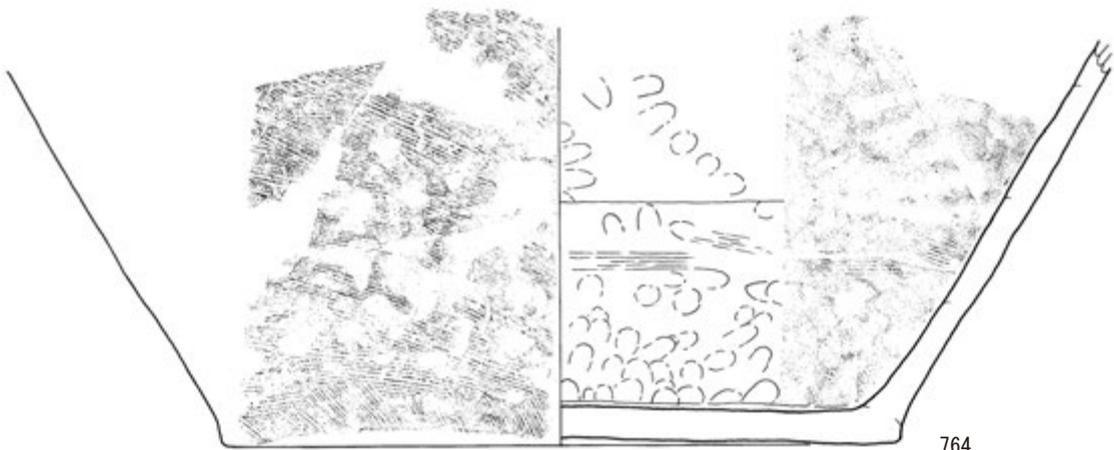
846～877は、皿である。

846～855は、歴博分類白磁皿B群（Ⅳb期）に該当する。846は、器形が腰折れ皿である。847・848は、細かな貫入が入り、外面にロクロ目が見られる。849～852は高台脇まで施釉し、高台脇から高台内面まで無釉である。849～851の釉調は黄色味を帯び、細かな貫入が見られる。852は焼成がよく、灰白色で貫入は見られない。853は高台外面まで施釉し、畳付から高台内面は無釉である。見込みに圏線と不鮮明な印刻が確認できる。焼成がよく灰白色を呈す。854・855は、高台に弧状の挟り込みが見られ、見込みには重ね焼きをした際の目跡が残る。なお、855は、高台見込みに不鮮明な墨書が見られる。

856・857は、高台脇まで施釉し、高台脇から高台内面まで無釉で、見込みを蛇目釉剥ぎする。ともに15世紀中



763



764

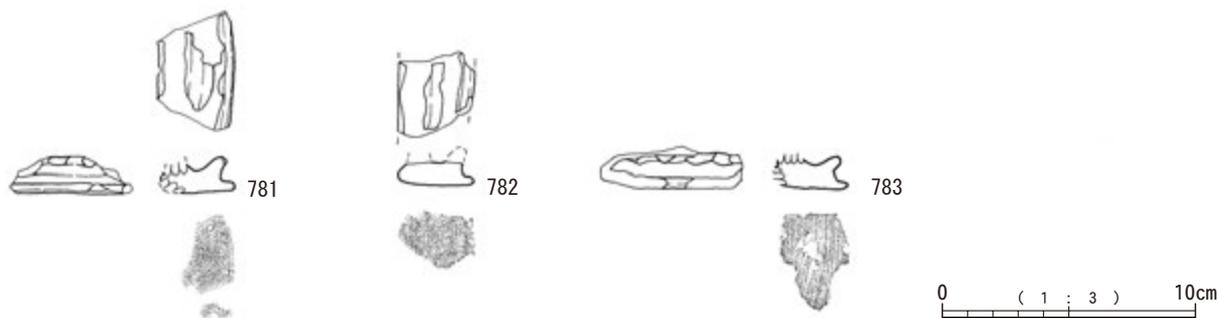


0 (1 : 3) 10cm

第143図 中世の遺物⑥



第144図 中世の遺物⑦



第145図 中世の遺物⑧

葉～後半頃のもので、歴博編年V期に該当する。

858は、高台脇まで施釉し、高台脇から高台内面まで無釉で、見込みも釉剥ぎする。

859は、円盤状の高台をもち、高台径は口径の3分の1程度と小さく、上げ底である。見込みは若干凹み、内面に一重の圈線が廻る。外面の下半は無釉である。類例は少ないものの、首里城二階殿跡（沖縄県）などで出土しており、おおむね15世紀代とされている。

860～868は、端反りの皿で、歴博分類白磁皿C1群（V期）に該当する。861・865は、見込みを釉剥ぎする。860・866～868は、低くやや尖形の高台の畳付のみ釉剥ぎを行い、866～868は畳付に粗い砂目が付着する。866は、高台内面に黒色の直線状の印が見られる。沖縄などで類例が見られる「十」字状の印と関連したものと推測される。

869・870は、歴博分類白磁皿C2群（V期）の端反り皿に該当する。焼成不良で、胎土が赤色を呈す。中国南部の福建省または広東省産の白磁と考えられる。

871～873は、碁笥底の皿で、歴博分類白磁皿E群（V期）に該当する。871・872は底部中央が円錐状に下がり突出する。胴部の下部から底部内面は無釉。871は、見込みを釉剥ぎする。873は、畳付のみ釉剥ぎを行う。見込みに印花が施される。

874～876は、型押しによる菊花文を施した菊皿で、歴博分類白磁皿D群（VI期）に該当する。

877は、稜花皿である。

878は、口縁が玉縁状の碗か坏と考えられる。

879は、大皿で見込みに圈線、その外側に放射状の沈線が施されている。

880～884は、瓶などの袋物と考えられる白磁の胴部片である。880・881は、梅瓶の胴部片と考えられる。881は外面に細かな文様が線描きされる。883は、焼成不良で胎土が赤色を呈す。

885は、瓶の双耳環の一部である。

886・887は、蓋である。887は把手の一部が残り、花文の陽刻が施される。

888は、香炉の脚部の破片と考えられる。

青磁（第153～155図 889～943）

889～906は、中世前半期の青磁である。

889～902は、碗である。

889・890は、内外面が無文の直口碗で、歴博分類青磁龍泉窯系A1類（II期）に該当する。

891は、内面に窠描きの劃花文を施す。歴博分類青磁龍泉窯系A3類（II期）に該当する。

892～901は、鎬蓮弁文の碗で、歴博分類青磁龍泉窯系B1類（III期）に該当する。892～896は、直口口縁で、内面は無文で外面に鎬蓮弁文が施される。898～901は、碗の底部で、高台の断面は方形である。高台外まで施釉され、畳付及び高台内は無釉である。898は、高台内面に胎土目が付着する。

902は、鎬蓮弁文の碗で、高台の断面は細く尖り、全面施釉後畳付の釉を剥ぎ取る。歴博分類青磁龍泉窯系B0類（III期）に該当する。

903～906は、皿である。

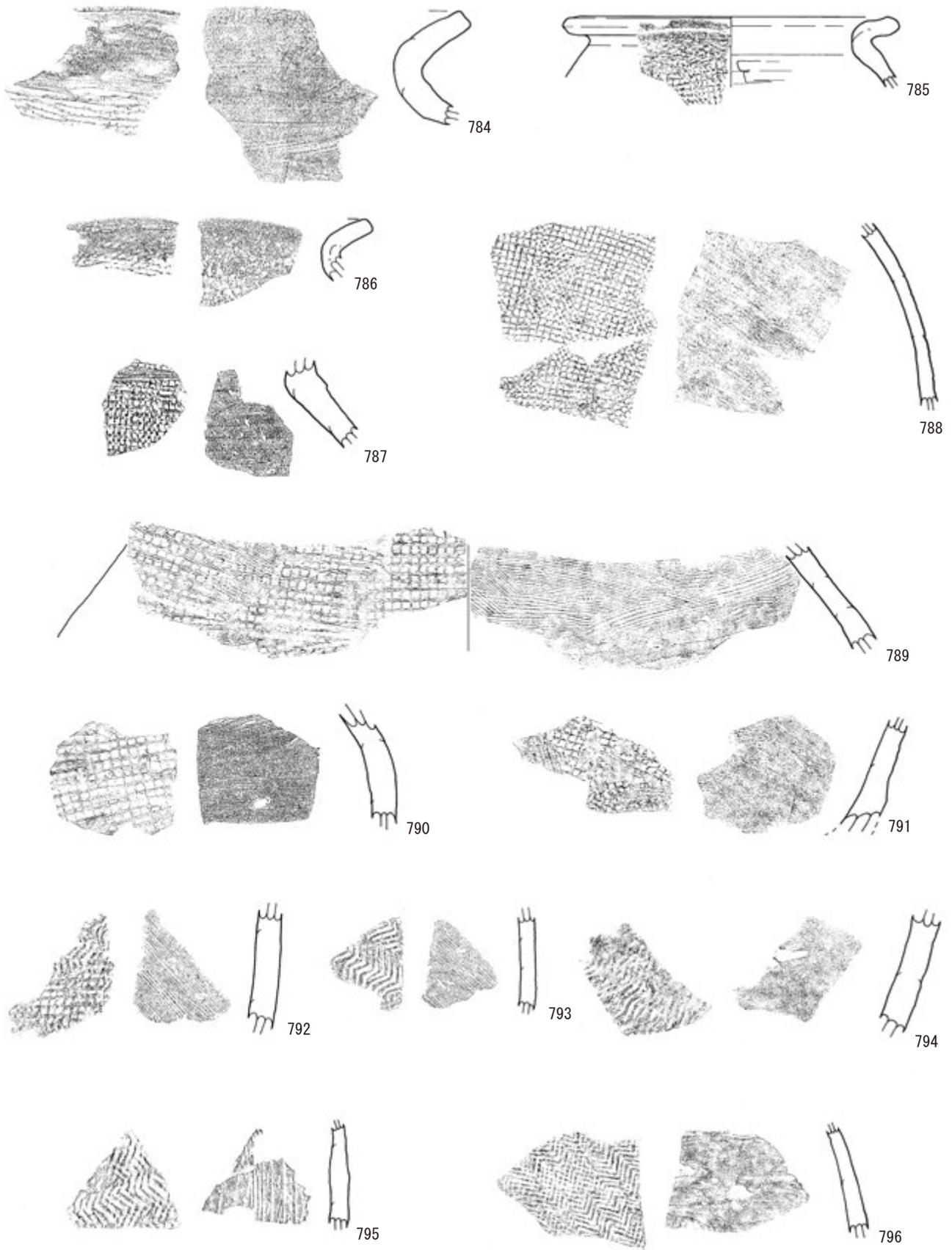
903は、歴博分類青磁同安窯系皿（II期）に該当する。口縁部は薄く尖り気味で、体部中位で外側へ屈曲し、内外面とも無文である。体部外面下半は無釉である。

904・905は、歴博分類青磁折縁皿（III期）に該当する。904は釉が厚い。905は、折縁皿の底部と推測される。高台の断面は細く尖り、全面施釉後、畳付のみ釉を剥ぎ取る。906は、高台の接地面を欠くが、残存部の状況から905と同様の高台の形状、施釉の特徴をもつものと推測される。

907～943は、中世後半期の青磁である。

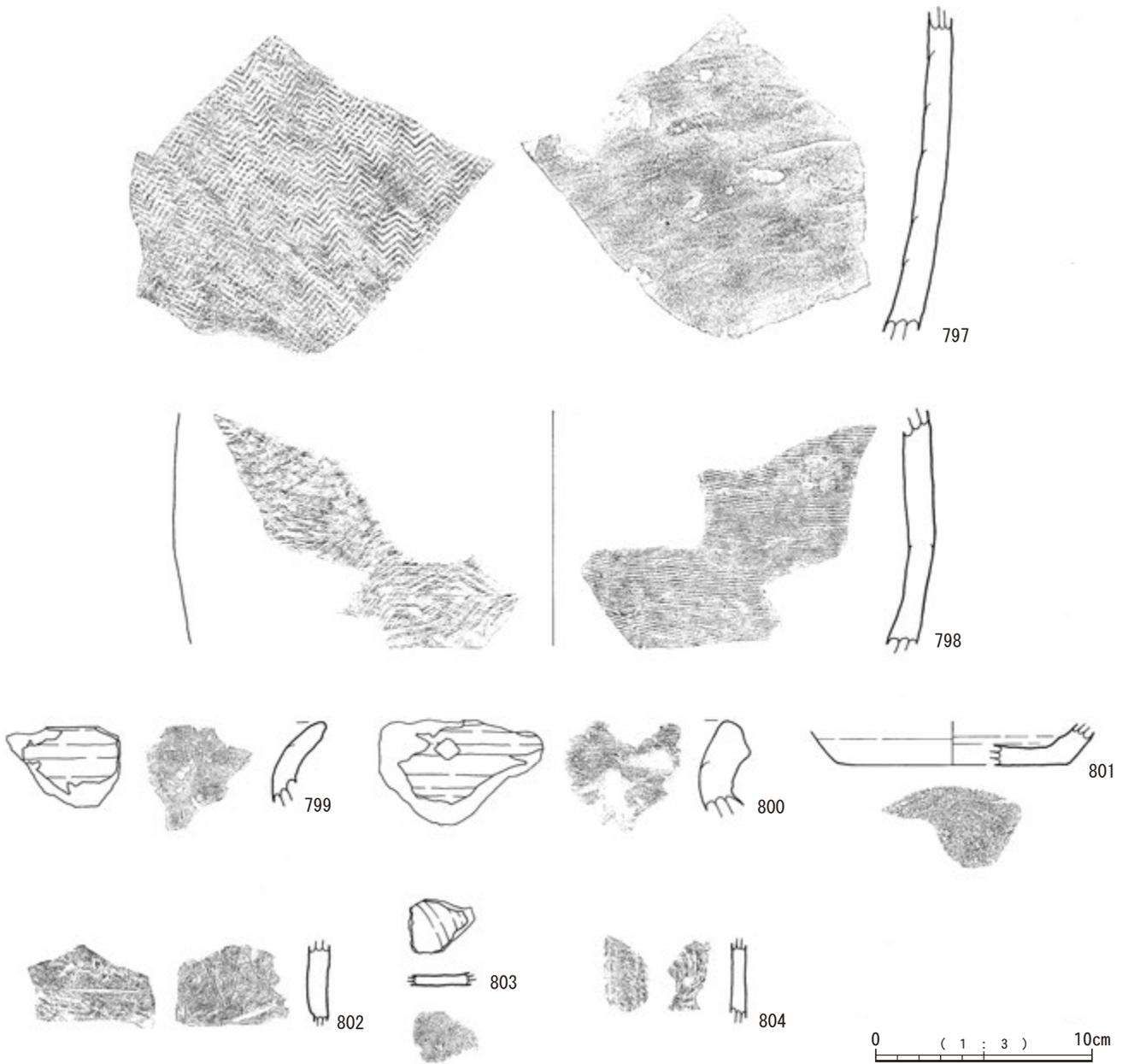
907～931は、碗である。

907～911は、歴博分類青磁龍泉窯系D1類（IVa期）に該当する無文外反碗である。胎土は灰色で釉が薄く、外面にロクロ目が目立つ。911は、胴部外面上部に一条



0 (1 : 3) 10cm

第146図 中世の遺物⑨



第147図 中世の遺物⑩

の弦文をもつ。

912～916は、歴博分類青磁龍泉窯系D 2類（IV b期）に該当する無文外反碗である。912～915は、玉縁口縁である。

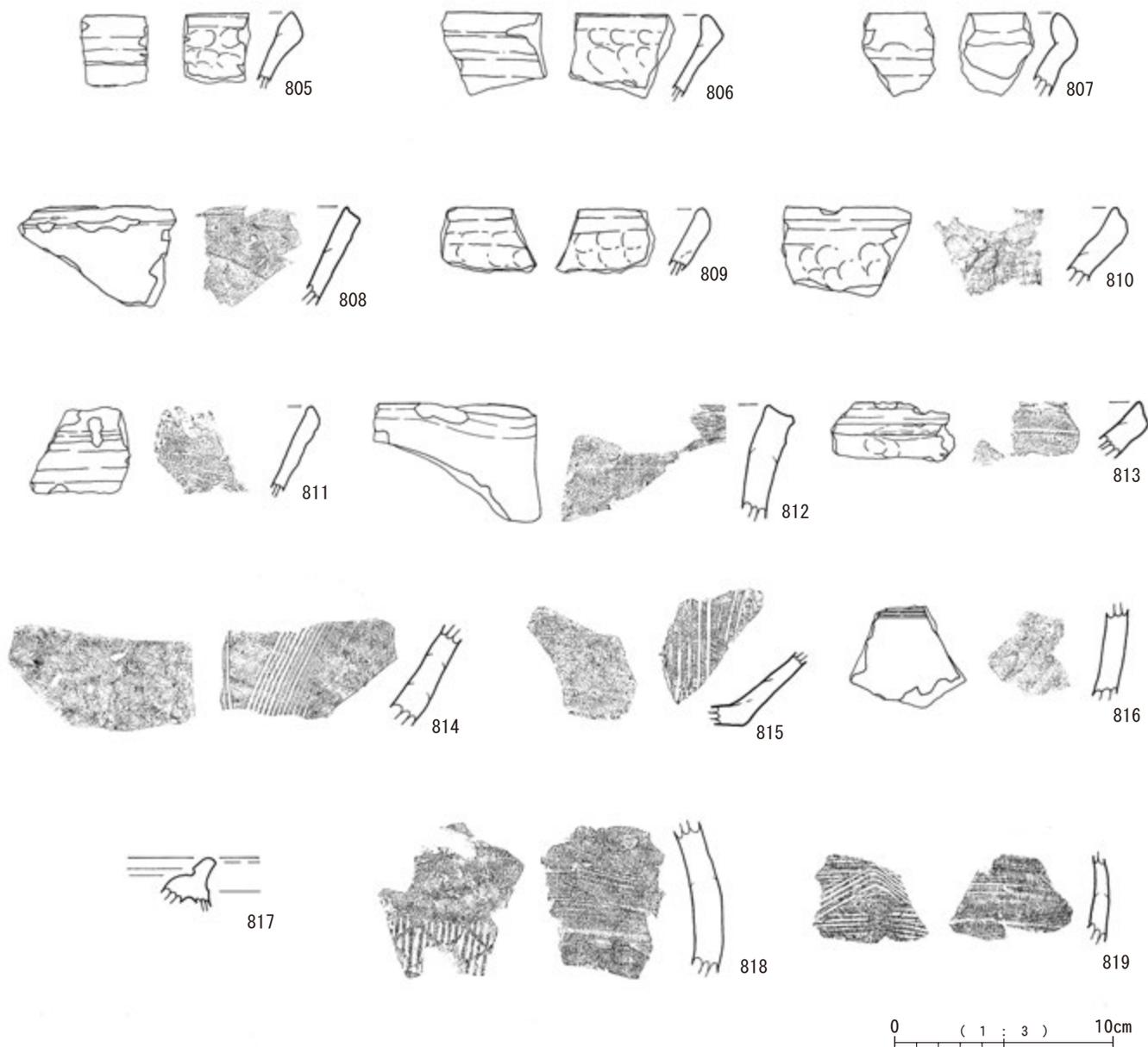
917・918は、甑で外面に蓮弁文、内面に草花文を描く。歴博分類青磁龍泉窯系B 2類（IV a期）に該当する。

919～921は、歴博分類青磁龍泉窯系C 2類（IV b期）に該当する雷文帯碗である。いずれも比較的丁寧に雷文を甑描きする。921は、体部外面下部にラマ蓮弁文、内面に草花文を描く。

922～926は、無文の直口碗で、歴博分類青磁龍泉窯系E 1類（V期）に該当する。922は、見込みに不鮮明な印花文を施す。高台内は蛇目釉剥ぎを行う。923～926は、見込みに印花文を施す。高台内まで施釉し、高台内面は無釉である。926は、底部は厚く小ぶりで、腰高な器形である。

927～931は、弁先の表現が粗雑な細蓮弁文碗で、歴博分類青磁龍泉窯系B 4類（V期）に該当する。931は、浅い器形で、青磁釉の発色も悪い。

932～939は、皿である。



第148図 中世の遺物①

932は、見込みに双魚文を陽刻する。歴博分類青磁折縁皿（Ⅲ期）に該当するものと推測される。高台の断面は方形で、高台内まで施釉し、高台内面は無釉である。

933は、歴博分類青磁腰折皿（Ⅲ期）に該当するものである。高台は低く、高台外まで施釉し、高台内面は無釉である。

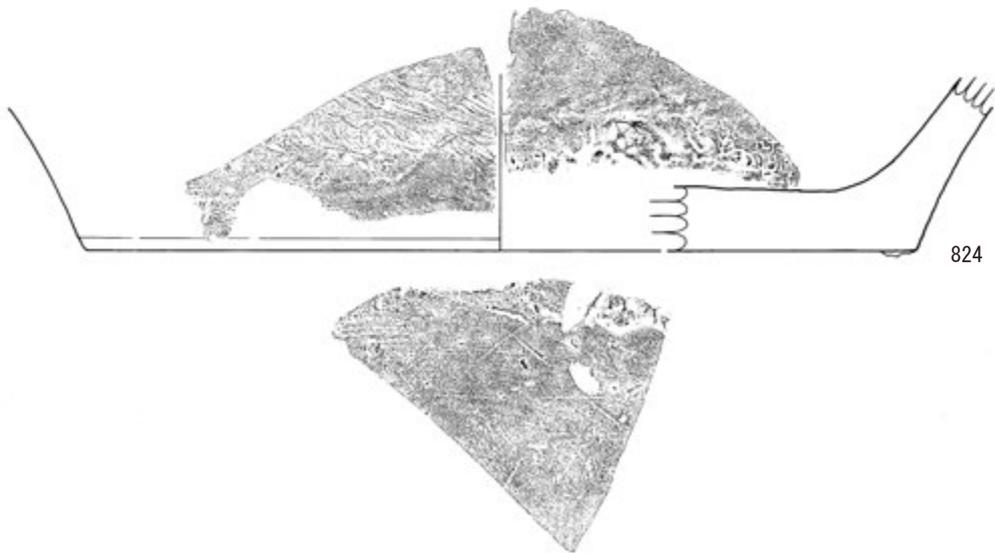
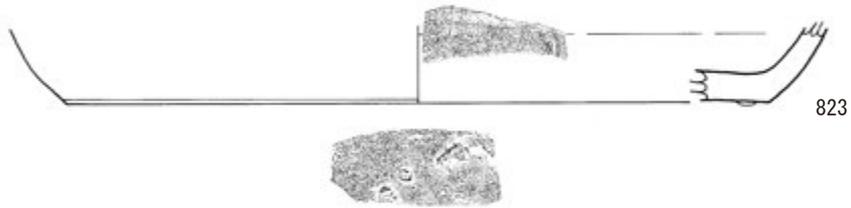
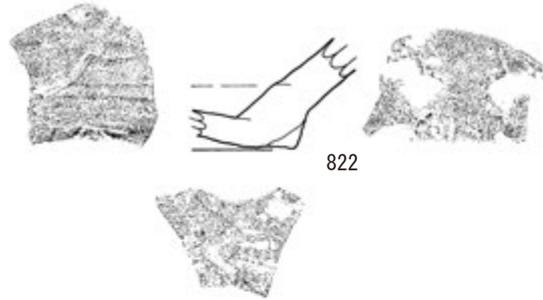
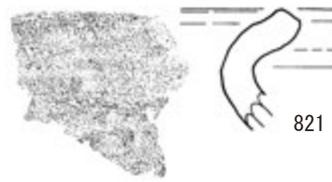
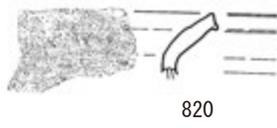
934～937は、歴博分類青磁端反皿（Ⅴ期）に該当する。934は、玉縁口縁の皿である。935は、見込みを釉剥ぎし、外面は高台外まで施釉し、高台内面は無釉である。焼成不良で、胎土の一部が赤色化する。佐敷タイプと呼ばれる見込みを釉剥ぎした玉縁口縁の一群に類似する。

936は、釉が厚い。937は、外面腰部まで施釉し、高台無釉である。また、見込みを蛇目釉剥ぎする。高台内面に「玖口」と見られる文字が墨書される。

938は、歴博分類青磁稜花皿（Ⅴ期）に該当するものと推測される。内面に草花文を施す。

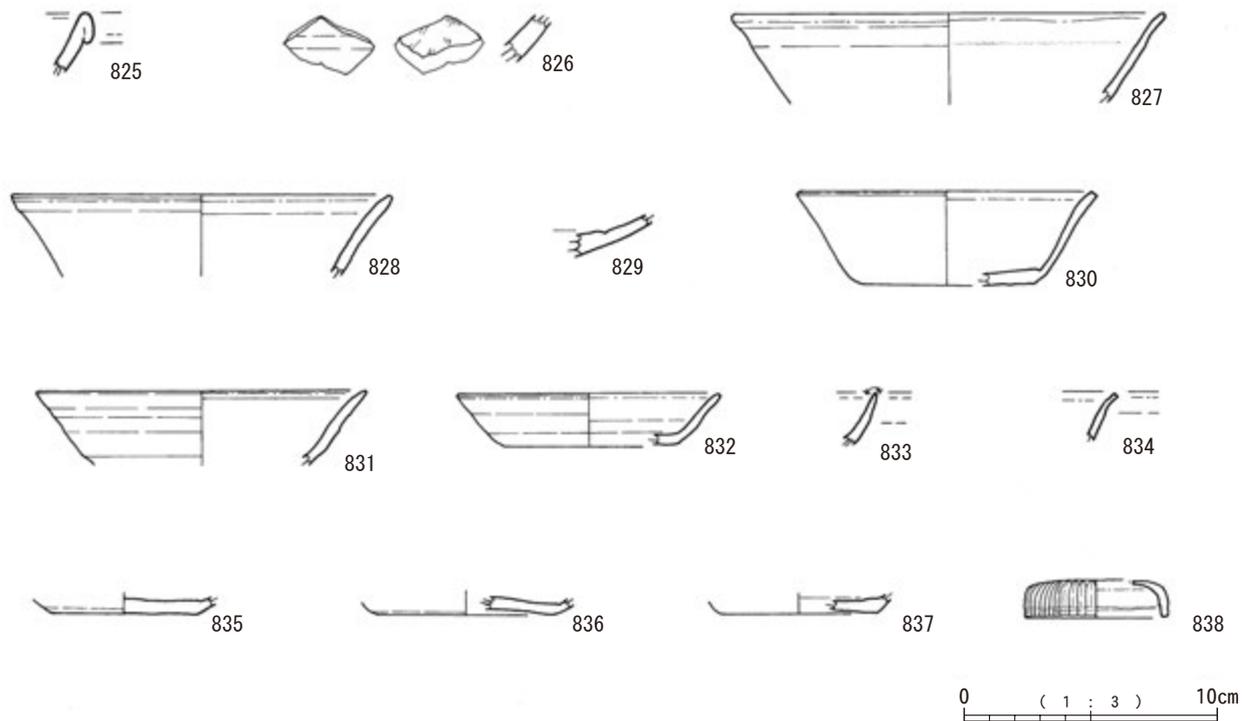
939は、底部に高台が付かないタイプの皿で、内面には縦耳が付くものと推測され、耳の外れた跡が残る。外面は口縁部以外無釉である。

940・941は、盤である。940は、縁折盤で、縁の先端をつまみ上げた形状である。胴部内面には、角陰蓮弁文を施す。15世紀前半頃（歴博編年Ⅳb期）のものと考え



0 (1 : 3) 10cm

第149図 中世の遺物⑫



第150図 中世の遺物⑬

られる。941は、盤の底部で、高台内面まで残存部は全面施釉される。

942は、香炉である。口縁部を内側に折り、内側を玉縁状にする。

943は、壺の胴部で、内外面とも残存部は全面施釉される。外面に草花文が施される。

青花（第156～157図 944～1003）

944～974は、景德鎮窯系の青花である。

944～948は、端反碗で、歴博分類染付碗B群（IV b期）に該当する。944は、外面に牡丹唐草文、内面口縁部端に1条の圈線を描く。945は、外面に人物文、口縁部の内外面にそれぞれ2条の圈線を描く。946は、見込みに捻花文を描き、高台外に2条の圈線が巡る。947は、見込みに2条の圈線、その内側に4つの渦文、高台外に3条の圈線、高台内面に2条の圈線を描く。948は、高台の低い小碗で、豊付のみ釉剥ぎする。高台脇に1条の圈線、見込みに蘇鉄のような針葉の枝葉の文様を描く。

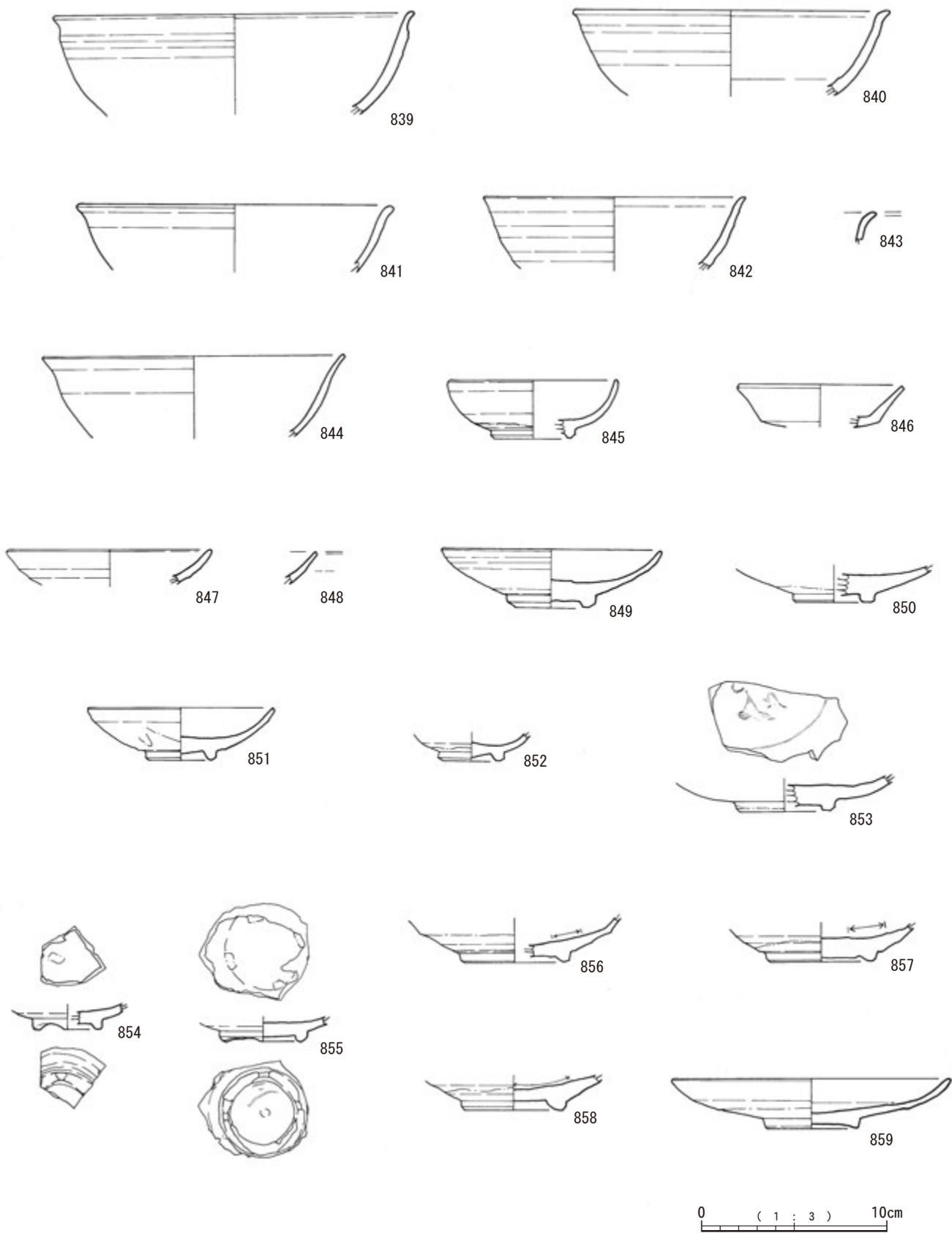
949～957は、高台内が凹む蓮子碗で、歴博分類染付碗C群（V期）に該当する。949は、口縁部外面に1条の圈線、胴部外面に波濤文、腰部に2条の圈線を描く。また、口縁部内面に3条の圈線を描き、1条は1周回らない。950は、口縁部外部に2条の圈線、胴部外面に丸を三つ結合した文様を描く。口縁部から内面上部にかけ

て茶色く変色している。951は、口縁部の内外面にそれぞれ2条の圈線、胴部外面に簡略化された波濤文を描く。952は、口縁部の内外面にそれぞれ2条の圈線、胴部外面に唐草文を描く。953は、口縁部の内外面にそれぞれ2条の圈線、胴部外面に唐草文、見込みに1条の圈線を描く。954は、口縁部外面に2条の圈線、口縁部内面に1条の圈線、胴部外面に宝相華唐草文を描く。955は、口縁部外面に2条の圈線、口縁部内面に1条の圈線、胴部外面に唐草文を描く。956は、口縁部の内面に1条の圈線、口縁部外面に波濤文帯を描く。957は、底部で、豊付のみ釉剥ぎする。胴部外面に草花文、高台脇に1条の圈線、高台外面に2条の圈線、見込みには2条の圈線と草花文を描く。

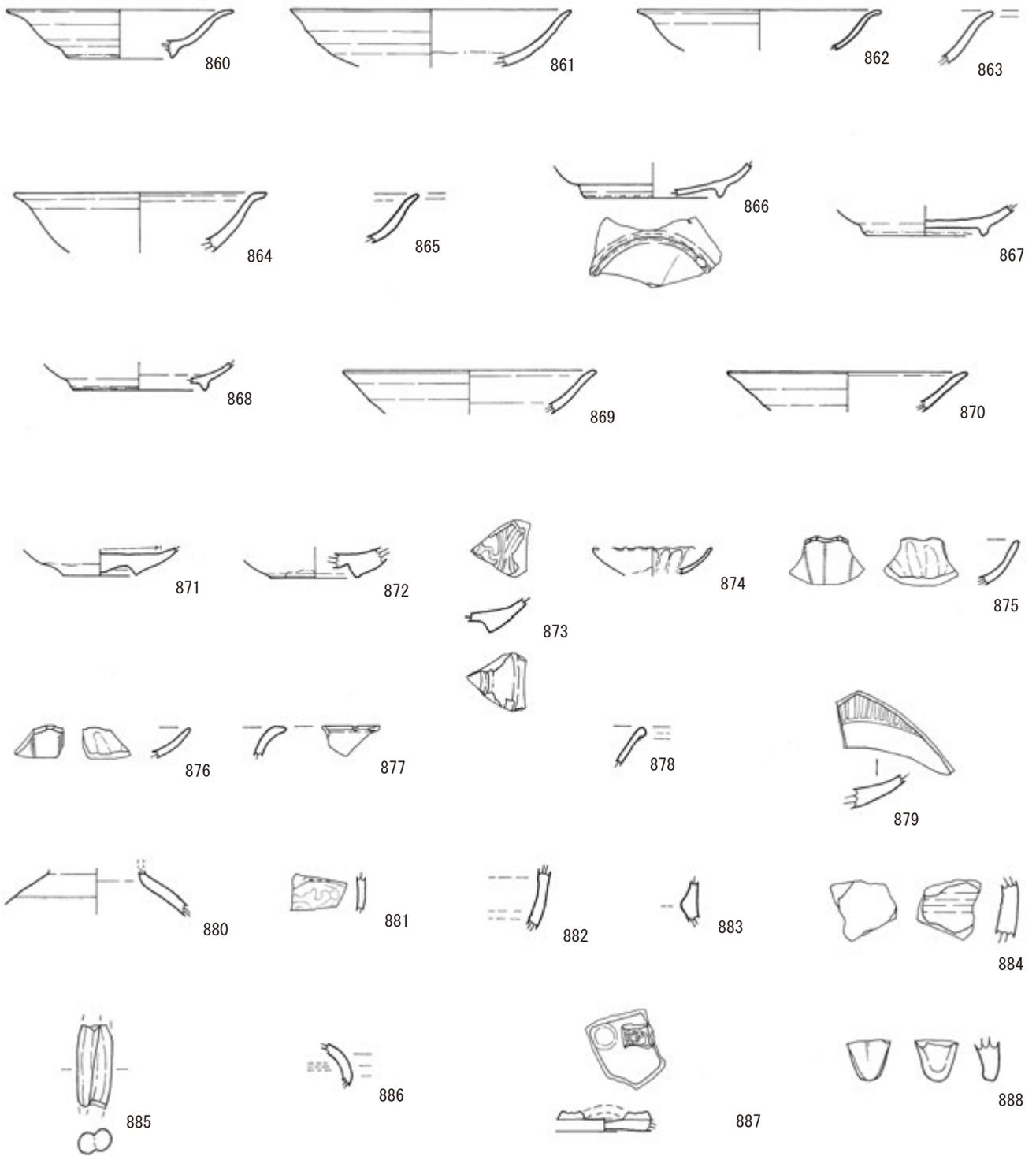
958・959は、歴博分類染付碗D群（V期）に該当する。958は、口縁部外面に波濤文帯、口縁部内面に1条の圈線、胴部外面にアラベスク文を描く。959は、器壁が比較的厚手で施釉に斑があり、呉須の発色も鈍い粗製品である。見込みに2条の圈線と草花文、胴部外面に唐草文を描く。

960は、底部が盛り上がる饅頭心型の碗で、歴博分類染付碗E群（VI期）に該当する。見込みに花文、高台脇に2条の圈線を描き、高台内面に字款がある。

961～972は皿・小坏である。

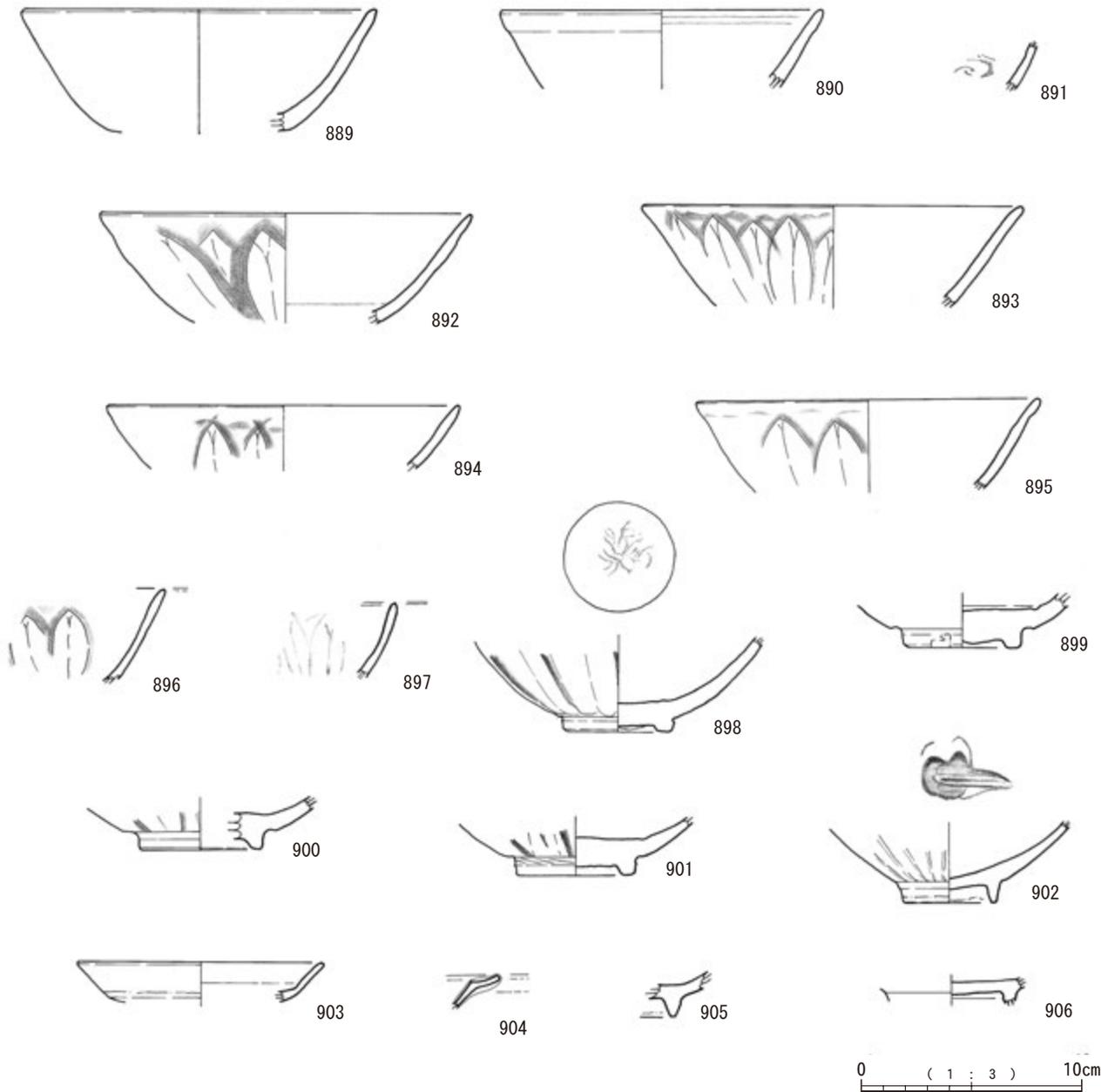


第151図 中世の遺物⑭



0 (1 : 3) 10cm

第152図 中世の遺物⑮



第153図 中世の遺物⑩

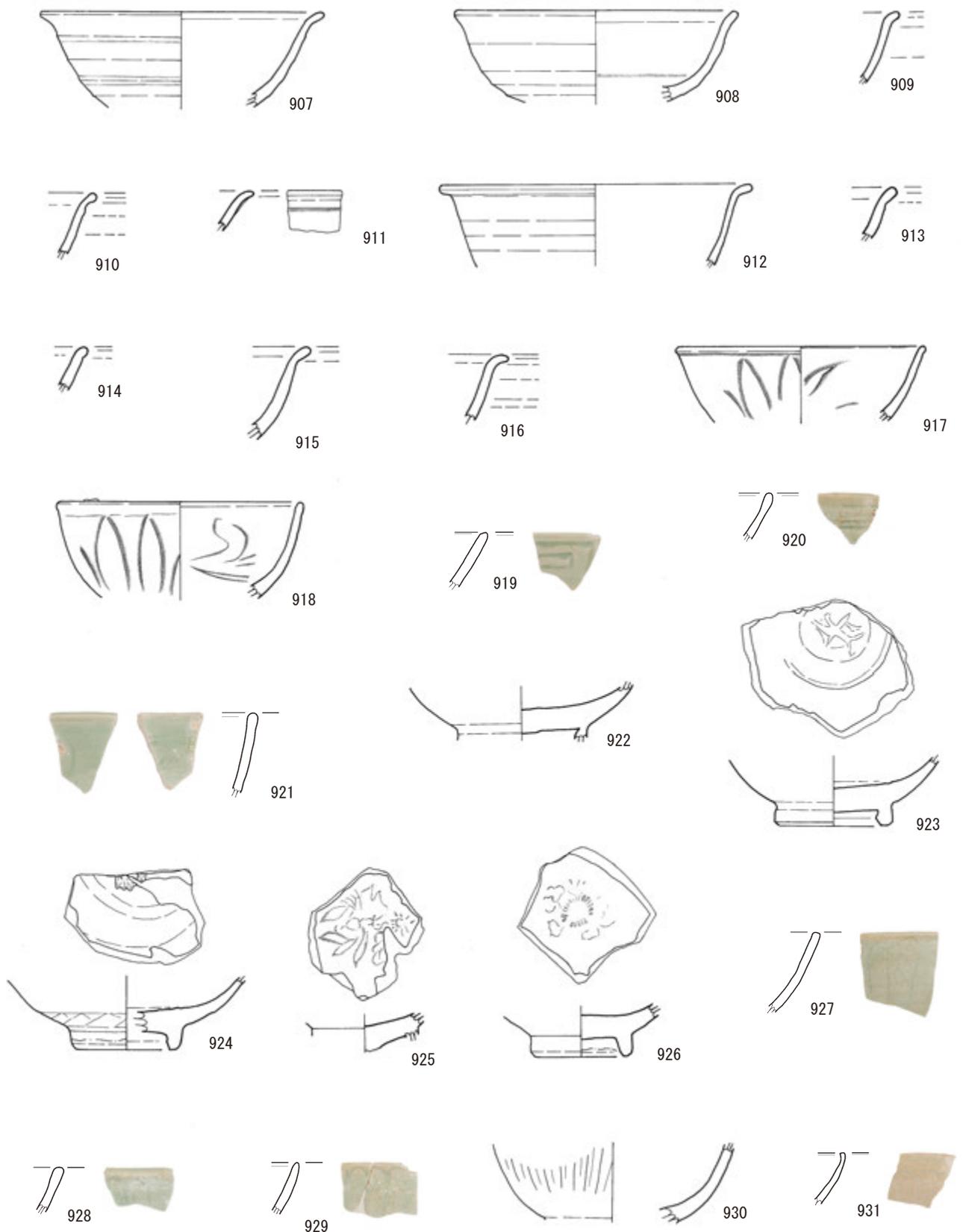
961～965は、古手の端反皿の一群で、歴博分類染付皿B 1群（V期）に該当する。961は、口縁部の内外面に1条の圏線、見込みに2条の圏線、胴部外面に宝相華唐草文を描く。962は、口縁部内面に1条の圏線、口縁部外面に2条の圏線、胴部外面に宝相華唐草文を描く。963は、口縁部内面に四方禳文、口縁部外面に1条の圏線、胴部外面に唐草文を描く。964は、底部で、畳付のみ釉剥ぎされる。高台脇に1条の圏線、見込みに2条の圏線、その内側に十字花文を描く。965は、底部で、畳付を釉剥ぎする。高台内に粗い砂が付着する。見込みに2条の圏線、その内側に玉取獅子、胴部外面に唐草文、

高台脇に2条の圏線を描く。

966は、新手の端反皿の一群で、歴博分類染付皿B 2群（VI期）に該当する。見込みに吉祥の文字を抽象化したと考えられる文様、高台内面に2条の圏線、「富貴長春」の字款を描く。

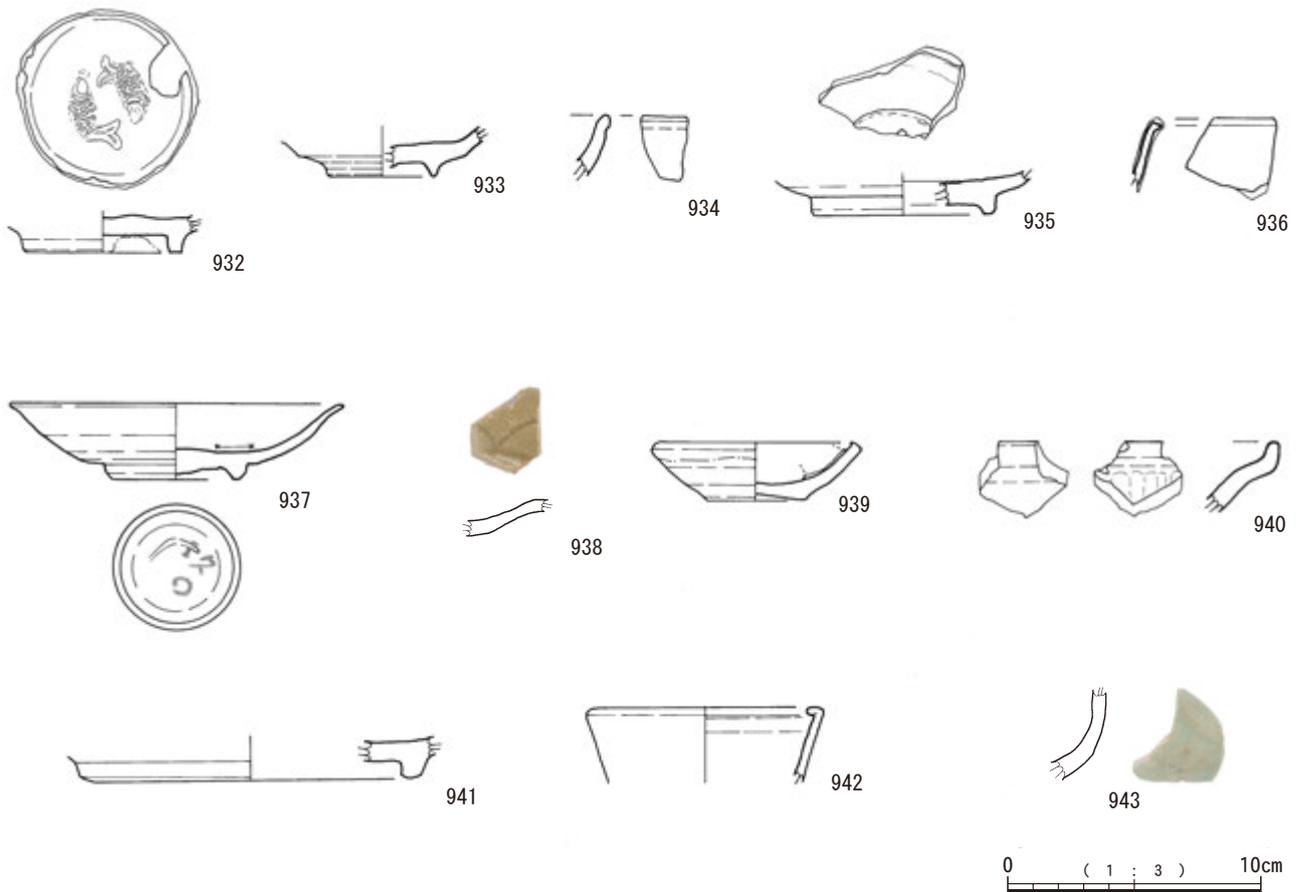
967・968は、歴博分類染付皿B 2群（VI期）に該当する小坏である。967は、口縁部の内外面に1条の圏線、胴部外面に唐草文を描く。968は、口縁部の内外面に1条の圏線、胴部外面に草文を描く。内面に目砂が付着する。

969は、歴博分類染付皿C群（V期）に該当する碁笥



0 (1 : 3) 10cm

第154図 中世の遺物①



第155図 中世の遺物⑩

底の皿である。見込みに2条の圏線，その内側に草花文，腰部に蕉葉文を描く。底部の接地面は釉剥ぎされるが，釉薬の溶着が見られる。

970は，歴博分類染付皿C群（V期）に該当する碁笥底の小坏である。腰部に2条の圏線が描かれる。

971・972は，歴博分類染付皿F群（VI期）に該当する鏝皿である。971は，口縁部の内外面に1条の圏線，胴部外面に草花文を描く。972は，口縁部の内面に波濤文，外面に3条の圏線を描く。

973は，大皿の底部である。内面に点描文と草花文を描く。

974は，内面に唐草文を描いた大皿の底部の再加工品と考えられる。長方形のタイル状に加工され，全面摩耗している。

975～1003は，漳州窯系の青花である。概ね16世紀中葉から17世紀前半頃のもので，歴博編年VI期（16世紀中葉～末）以降に該当する。

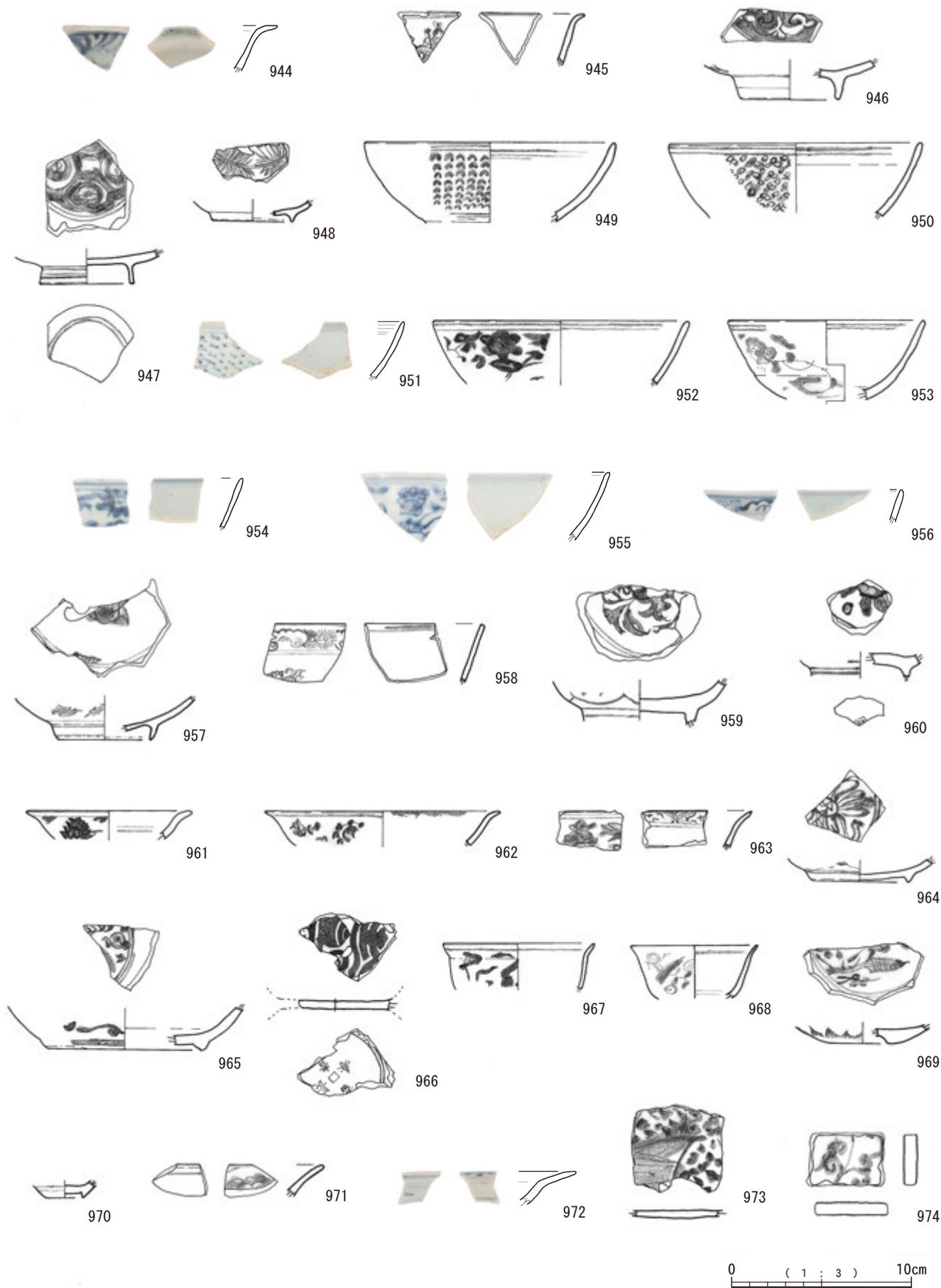
975～994は碗である。

975は，端反碗で，景德鎮窯系の染付碗B群の模倣と考えられる。口縁部の内外面に1条の圏線，胴部内面に

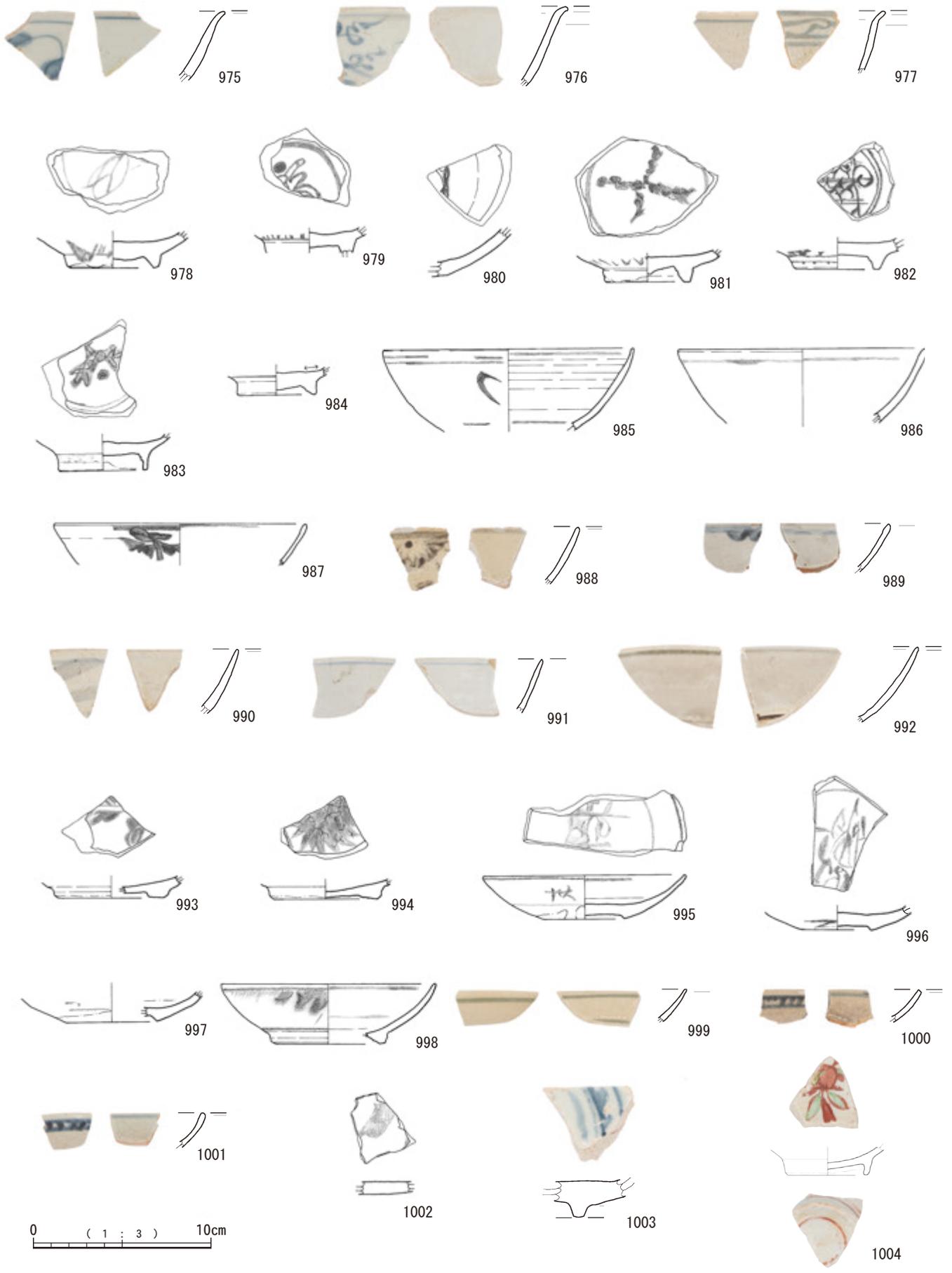
唐草文を描く。

976～979は，景德鎮窯系の染付碗C群の模倣と考えられる。いずれも16世紀半ば頃のものと考えられる。976・977は，口縁部が端反する。976は，口縁部外面に1条の圏線，胴部に唐草文を描く。977は，口縁部の内外面にそれぞれ1条の圏線，胴部内面に簡略化された唐草文を描く。978は底部で，高台外まで施釉し，畳付から高台内面は無釉である。焼成不良で，胎土と露胎部が赤色化する。見込みに1条の圏線と草花文，腰部に蕉葉文を描く。979は底部で，高台外まで施釉し，畳付から高台内面は無釉である。見込みに1条の圏線，その内側に「福」字，腰部に蕉葉文を描く。

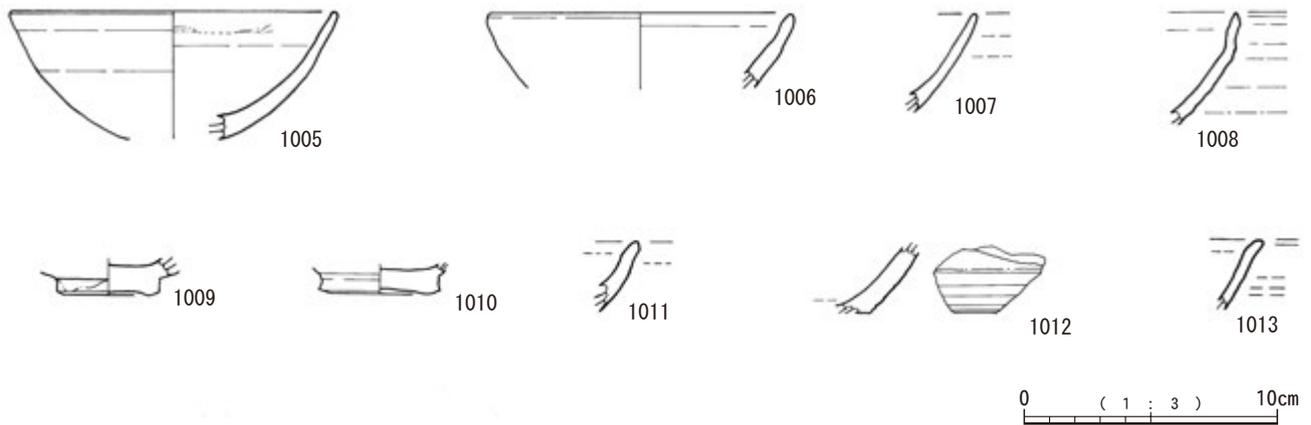
980～984は，景德鎮窯系の染付碗D群の模倣と考えられる。980は，内外面に大きな貫入が入る。見込みに1条の圏線を描く。16世紀末から17世紀前半頃のものと考えられる。981は，高台脇まで施釉し，高台外面から高台内面無釉である。露胎部分が赤色化する。外底の中央部が下方に突出する。畳付から高台内にかけて初殻痕を確認できる。見込みに1条の圏線，その内側に十字文，腰部に簡略化された蕉葉文が描かれる。16世紀半ば頃の



第156図 中世の遺物⑨



第157図 中世の遺物⑳



第158図 中世の遺物①

ものと考えられる。982は、高台外面まで施釉し、畳付から高台内面は無釉である。見込みに2条の圈線、その内側に十字花文、高台外面に2条の圈線を描く。983は、高台外面まで施釉し、畳付から高台内面まで無釉である。見込みに2条の圈線、その内側に草花文、高台外面に2条の圈線を描く。16世紀後半頃のものと考えられる。984は、高台内面にも釉の流れ込みが見られるが、高台外面までの施釉と考えられる。外底の露胎部分は赤色化する。また、見込みを蛇目釉剥ぎする。畳付から高台内面に靱殻痕を確認できる。

985～992は、景德鎮窯系の染付碗E群の模倣と考えられる。985は、口縁部外面に2条の圈線が巡るが、うち1条は線が途中で途切れる。胴部外面に唐草文、腰部に1条の圈線、口縁部内面に1条の圈線を描く。16世紀後半頃のものと考えられる。986は、大きな貫入が入る。口縁部の内外面にそれぞれ1条の圈線を描く。16世紀後半頃のものと考えられる。987は、口縁部の内外面にそれぞれ1条の圈線、胴部外面に唐草文を描く。988は、口縁部の内外面にそれぞれ1条の圈線、胴部外面に花文を描く。16世紀後半頃のものと考えられる。989は、口縁部の内外面にそれぞれ1条の圈線、胴部外面に唐草文を描く。16世紀半ば頃のものと考えられる。990は、口縁部外面に1条の圈線、胴部外面に唐草文を描く。991は、口縁部の内外面にそれぞれ1条の圈線を描き、胴部は無文である。16世紀後半頃のものと考えられる。992は、口縁部の内外面、腰部、見込みにそれぞれ1条の圈線を描く。胴部は無文である。16世紀後半頃のものと考えられる。

993・994は高台が低く幅広い形状の碗である。高台外面まで施釉し、畳付から高台内面まで無釉である。993は、見込みに草花文を描く。994は、見込みに花文を描く。

995～1002は皿である。

995～997は、碁笥底の皿で、景德鎮窯系の染付皿C群の模倣と考えられる。995は、外底のみ無釉である。腰部に靱殻痕が残る。口縁部の内外面及び腰部にそれぞれ1条の圈線、見込みに1条の圈線、その内側に吉祥文字を描く。また、胴部外面にも文字のような文様が描かれるが判然としない。16世紀半ば頃のものと考えられる。996は、腰部まで施釉し、畳付から外底は無釉である。底部の中央は内面・外面ともに少し膨らむ。見込みに1条の圈線、その内側に草花文を描く。16世紀後半頃のものと考えられる。997は、腰部まで施釉し、外底は無釉である。また、見込みを釉剥ぎする。露胎部分は赤色化している。16世紀半ば頃のものと考えられる。

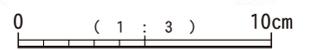
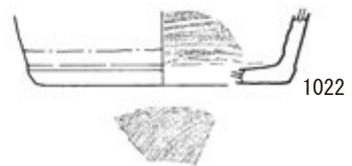
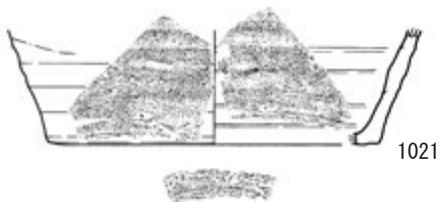
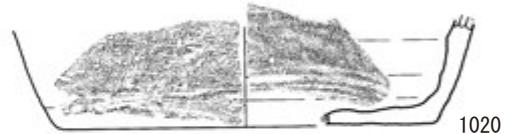
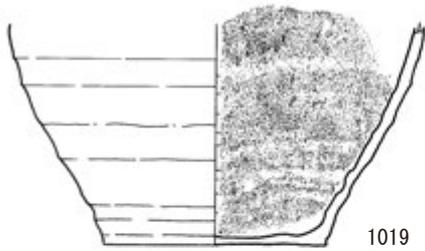
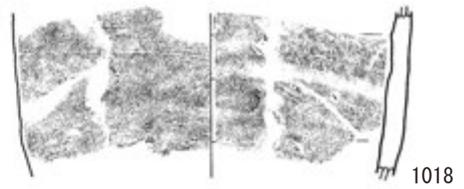
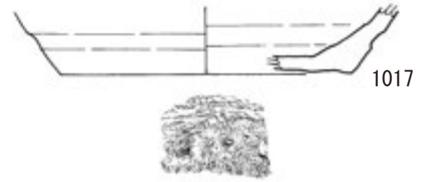
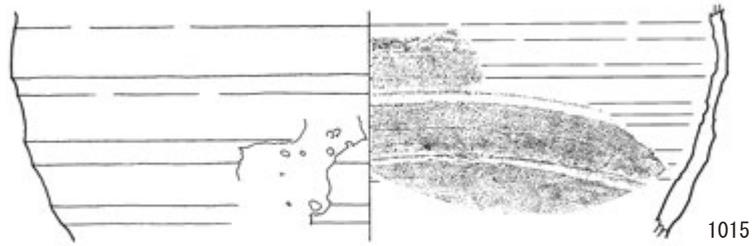
998～1001は景德鎮窯系の染付皿E群の模倣と考えられる。いずれも16世紀半ば頃のものと考えられる。998は、高台外まで施釉し、畳付から高台内面は無釉である。また、見込みを釉剥ぎする。漳州窯系ではあるものの呉須や釉の発色が良好である。内外面に貫入が入る。口縁部の内外面に1条の圈線、胴部に花唐草文、高台脇に1条の圈線を描く。999は、口縁部の内外面及び見込みに1条の圈線を描き、胴部は無文である。1000・1001は、口縁部内面に1条の圈線、口縁部外面に簡略化された波濤文帯を描く。

1002は、皿の底部と考えられる。外底に靱殻痕を確認できる。

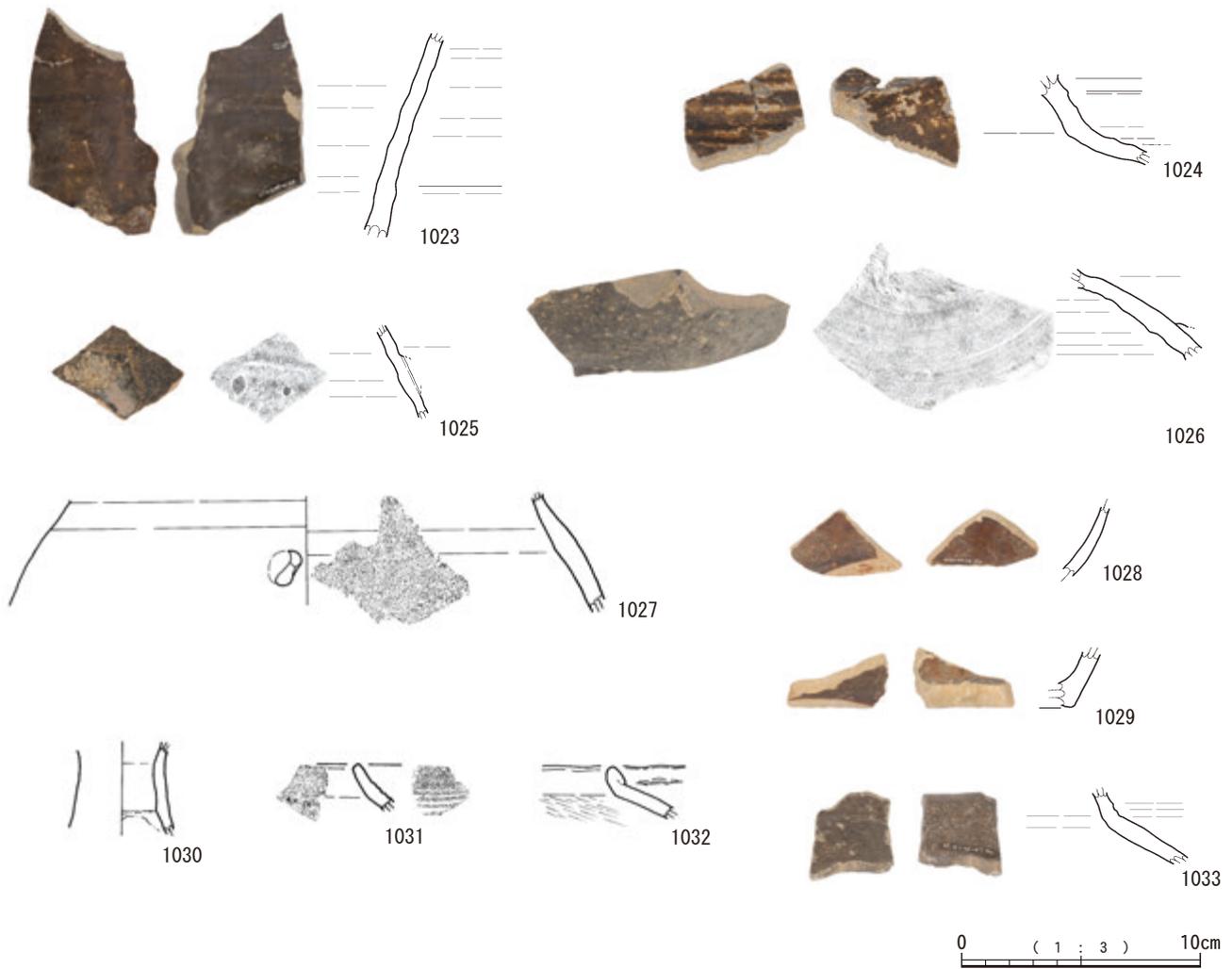
1003は、盤の底部である。畳付のみ釉剥ぎし、外底も施釉する。高台部分に粗い砂が付着する。内面に波濤文が描かれる。16世紀末～17世紀前半頃のものと考えられる。

色絵 (第157図 1004)

1004は、景德鎮窯系の色絵碗の底部である。畳付のみ



第159図 中世の遺物②



第160図 中世の遺物③

釉剥ぎを行う。見込みに赤色と緑色の顔料で花文，高台脇と高台内面にそれぞれ2条の赤色の圈線が描かれる。16世紀前半から中葉のものと考えられる。

天目及び黒褐釉陶器（第158図 1005～1013）

1005～1010は中国産の天目である。南平茶洋窯を含む福建省の諸窯で生産されたものと考えられる。1005～1007は，胴部が内彎しながら伸び，口縁付近で屈曲せずにそのまま伸びる器形で，先端は尖る。胎土は灰色で緻密で硬く焼き締められている。1008は，胴部が真っすぐに伸びるが，口縁付近で軽く角度を変えて立ち上がり，先端が尖る。1009・1010は，天目の底部で，高台削りが比較的浅い。1010は底部外面に小豆大の圧痕が見られる。

1011～1013は，瀬戸・美濃系の国産黒褐釉陶器で，いずれも15世紀以降のものと考えられる。1011・1012は天目で，1013は小碗である。

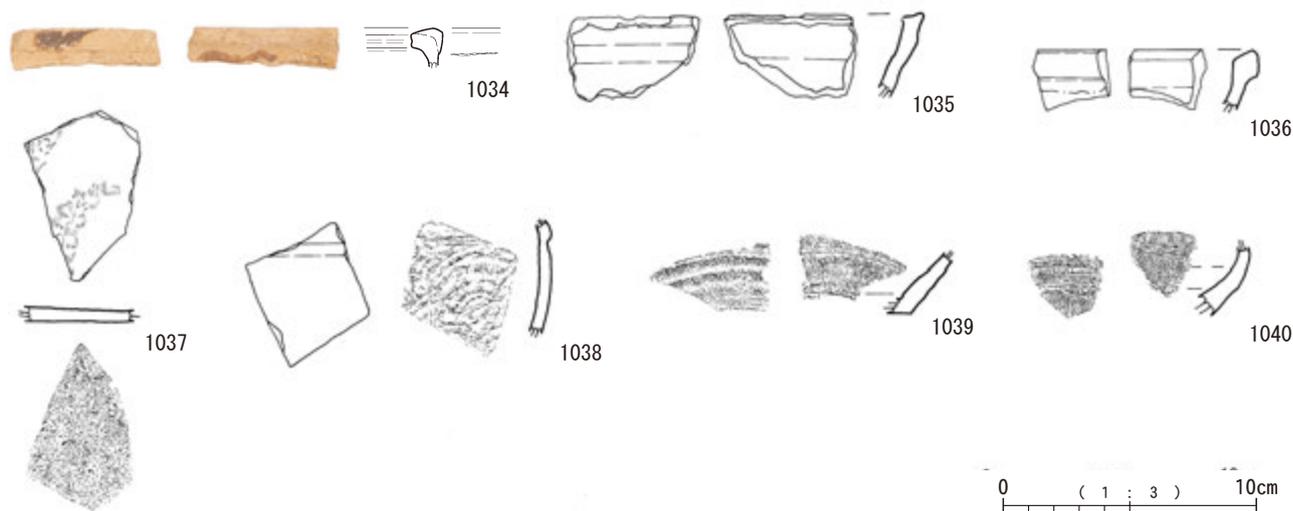
輸入陶器（第159～161図 1014～1040）

1014～1029は，壺である。1014は，口縁部を折り曲げて肥厚し，口唇部を強くナデている。肩部には，ヘラ書きの記号が付されている。肩部には，漆喰様の物質が付着している。また，胎土には白色礫を多量に含む。1015～1017は，胴部から底部にかけての破片で，釉調は1014に類似する。また，1015・1016は外面に漆喰様の物質が付着する。1014～1017は，特徴から中国磁窰系と考えられる。

1018は長胴の壺と考えられ，器壁は薄手で，底部もほぼ水平である。胴下半のみ無釉で，露胎する。胴部中程から上部は，暗茶褐色の釉薬が施釉される。中国産と考えられる。

1019・1020は土師質で胎土がマーブル状を呈するもので，同一個体と考えられる。1020はやや硬質で，焼き締まっている。

1021・1022は，壺の底部で，いずれも中国産と考えられる。1021は外面は上端にわずかに白色釉が残っており，



第161図 中世の遺物⑭

底部付近は露胎する。内面は淡緑色釉が斑状に施釉されている。1022は底部付近は無釉で、胴部以上に茶褐色釉が施釉される。底面には、糸切り痕が残る。

1023～1025は、褐釉が施釉されたもので、沖縄分類褐釉陶器Ⅴ類に該当する。1023は胴部下半、1024は頸部である。1025は、外面に耳の接合痕が残る。また、内面は全面施釉ではなく、釉薬が水滴状に付着する。

1026・1027は壺で、耳の接合部が残存する。1026は外面に暗褐色釉が薄くかかり、内面は無釉である。内面はナデ痕が明瞭であり、わずかに頸部が残存する。1027は、内外面とも無釉である。いずれも、産地は不明である。

1028は小型製品の胴部であり、下半は露胎する。また、1029も小型の壺や瓶などの底部であり、底部付近が露胎する。いずれも、暗茶褐色釉が施釉され、胎土や釉調が類似する。中国産と考えられる。

1030は、壺か瓶の頸部と考えられる。内外面に暗緑褐色釉を施釉し、内面が一部露胎する。

1031・1032は、短頸壺である。1031は、内外面とも茶褐色釉が施釉され、外面には条線が巡る。緩く屈曲させて口縁部を立ち上げ、口唇部は丸く収めている。1032は素地の色調が暗く、内外面に暗茶褐色釉を施釉する。口縁部は外面に折り返し、端部は成形せず歪みがある。

1033は、内外面とも暗褐色釉で施釉された甕又は壺の頸部と考えられる。頸部外面は、ナデ調整が条線状に入り、内面は緩く屈曲する。小片のため器形等は不明であるが、中国産と考えられる。

1034は口縁を肥厚し、内側に突周させるもので、内洪の焼締鉢である。中国華南産と考えられる。1035は鉢又は盤と考えられ、口縁部付近を緩く折り曲げて外傾させ

る。中国産と考えられる。

1036・1037は、中国産の黄釉鉄絵盤である。1036は口縁部で、断面方形で全面に施釉される。外面の下端は、釉薬が剥落している。1037は底部片で、外面は無釉である。内面には、鉄絵が施されている。特徴から、13世紀頃に比定される。

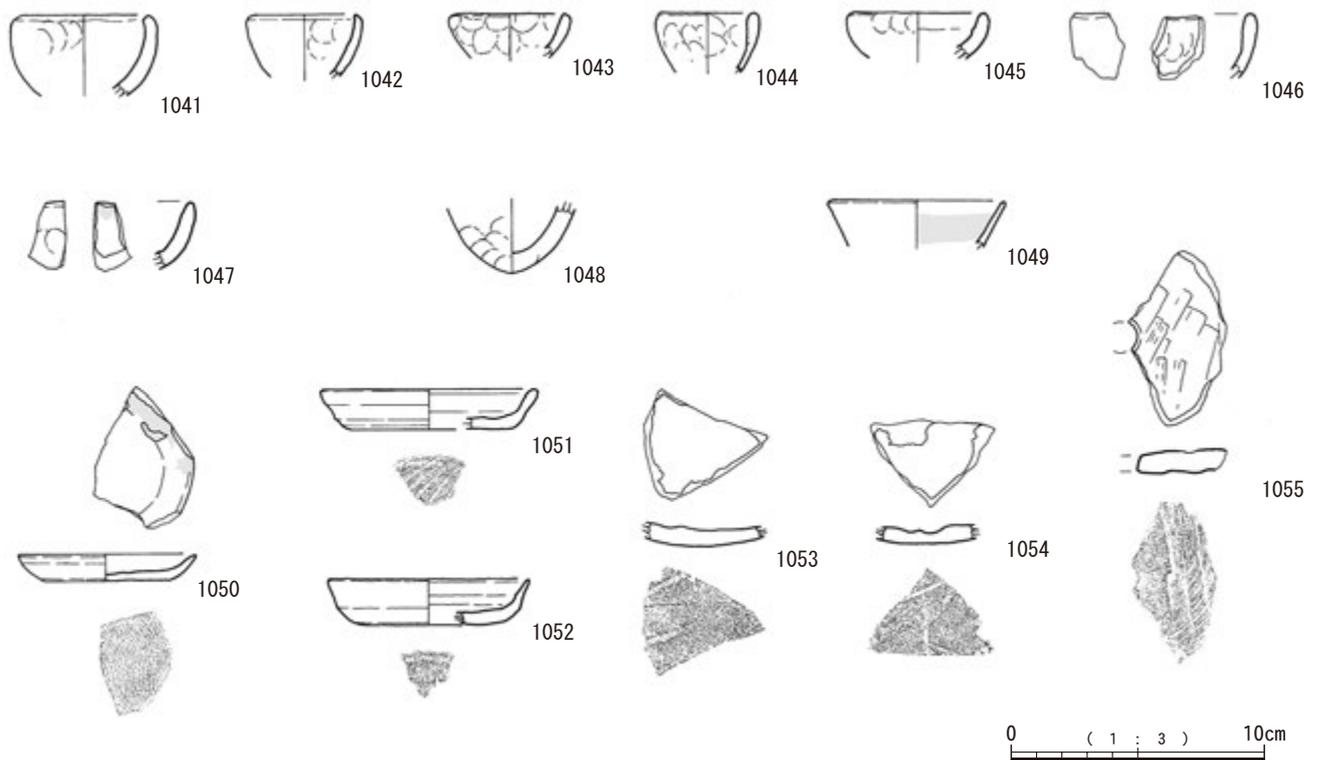
1038は、頸部と考えられる。内外面に凹線状の屈曲部をつくり、やや胴が膨らむ器形である。内面は無釉で、同心円の当て具痕が重複してみられる。外面には、暗茶褐色釉を基調に、灰白色釉が斑に入る。産地が不明であり、国産陶器の可能性も残る。

1039は、小型の甕等の底部と考えられる。内外面とも、無釉である。1040は、碗や小型の壺の可能性ある胴部片で、外面上半に暗褐色釉を施釉し、波状文を施す。外面下半及び内面は、無釉である。1039・1040は中国産と考えられるが、詳細は不明である。

(6) その他 (第162～165図 1041～1072)

1041～1048は、取鍋である。碗形で、手づくねで成形されている。いずれも、復元口径が5cm程度と、小型である。全体的に被熱し、外面を中心に赤変し、内面には溶解した金属が付着する。1041には、水滴状に緑青と思われる金属片が付着している。

1049は薄手の土師質のもので、胎土が精製されている。土師器坏を取鍋に転用した可能性もあるが、本遺跡出土の土師器と比較しても丁寧な作りである。1050～1052は、土師器の小皿であり、内面は上記の取鍋と同様に被熱し、溶解した金属が付着する。土師器皿を転用したものと考えられる。1053・1054は、常滑産とみられる



第162図 中世の遺物⑤

甕の破片である。表面が荒れており、被熱によるものとみられる。金属等の加工に、転用された可能性があるため、ここで取り上げた。

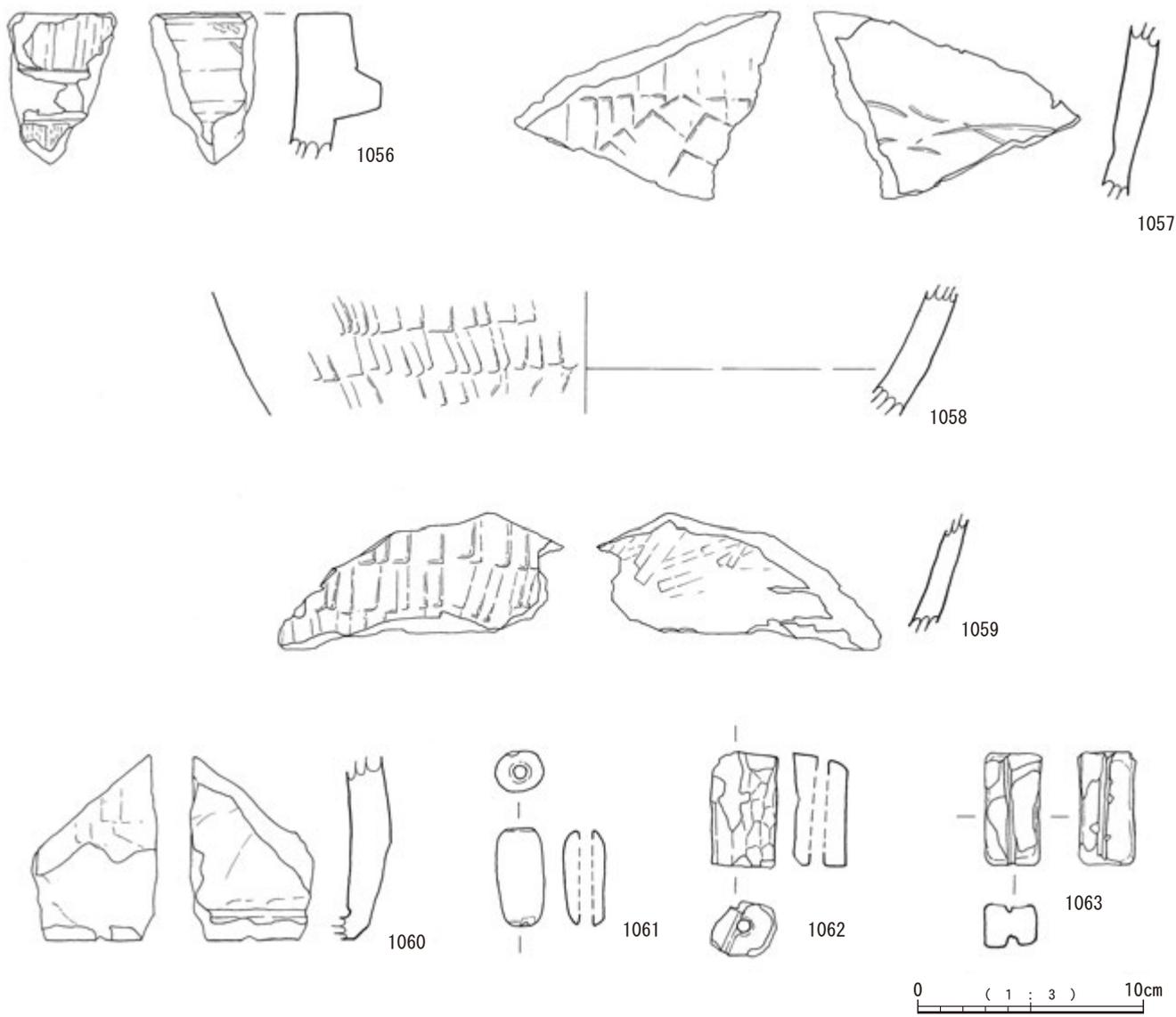
1055は、土師器坏を転用した紡錘車である。下面には、糸切り底が確認できる。

1056～1063は、滑石製品である。1056～1060は、石鍋である。1056は、口縁部から鏝にかけての破片である。内外面に加工痕が残存し、鏝の下部にはススが付着する。1057～1059は胴部片で、連続した縦位のノミ痕が確認できる。1060は、底部片である。外面は下半が欠損するが、底部がわずかに残存しており、平底であったと考えられる。

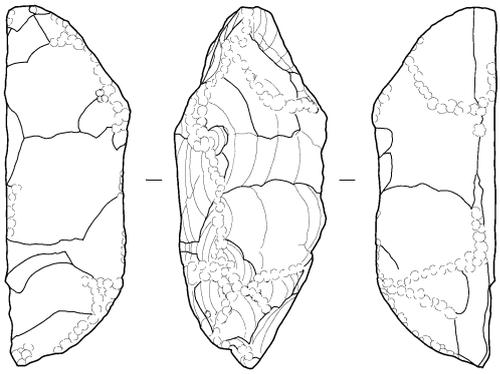
1061～1063は、石鍋の再加工品で漁具等の沈子や、垂飾品と考えられる。1061・1062は断面を円形に加工したもので、1061は丁寧に成形されている。1062は未製品と考えられ、筒状に粗加工したものに穿孔している。素材の形状から、石鍋の鏝部分を利用したと考えられる。1063は、直方体に加工した素材に、長軸に対になる溝を掘り込んでいる。

1064～1072は、火打石と考えられる。1064～1069はチャート、1070・1071は赤色のチャート、1072は石英で

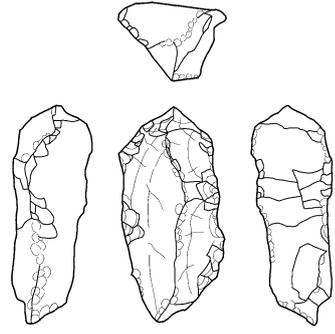
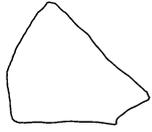
あり、ガラス質の石材を多用している。稜上に連続した敲打がみられ、角が鈍くなっている。



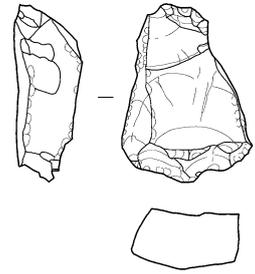
第163図 中世の遺物②⑥



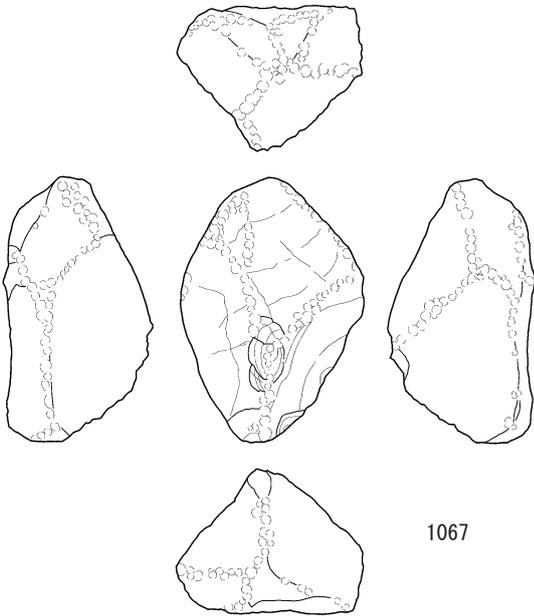
1064



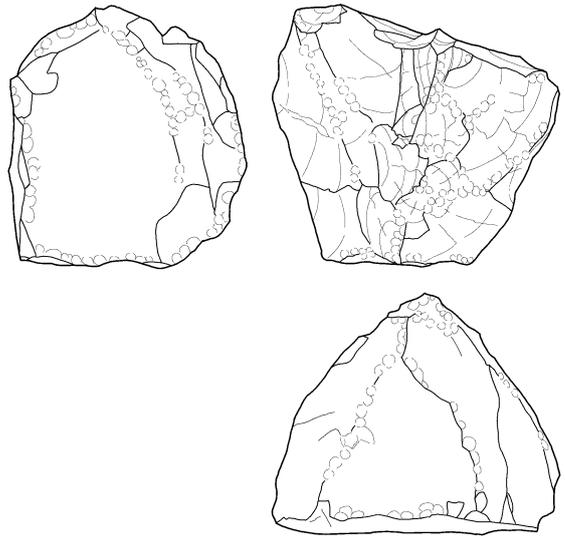
1065



1066

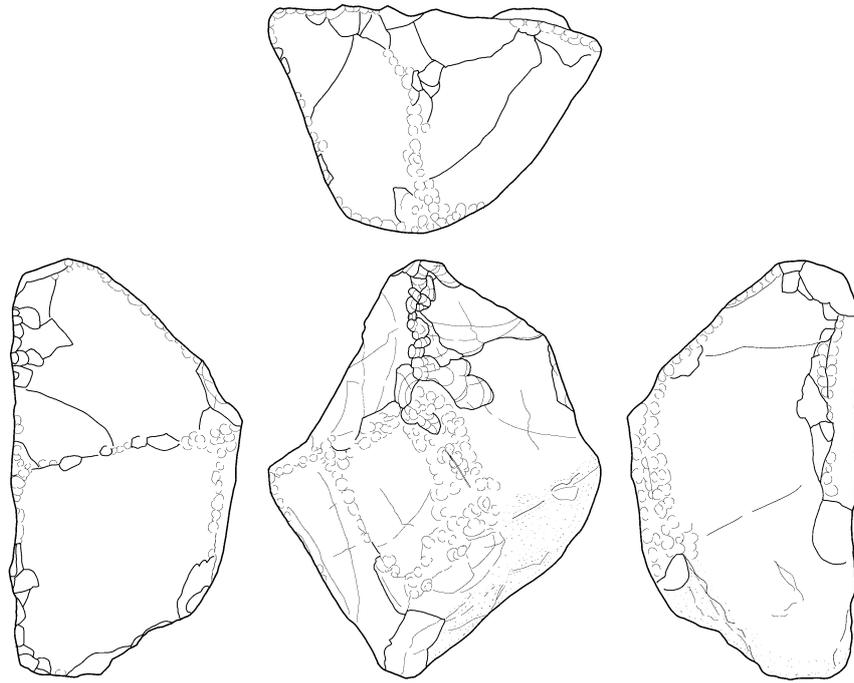


1067

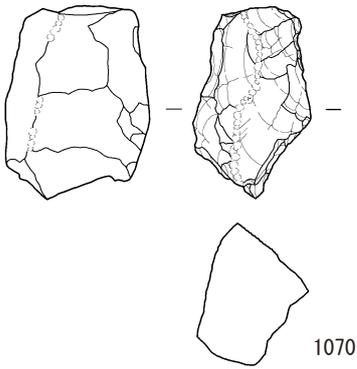


1068

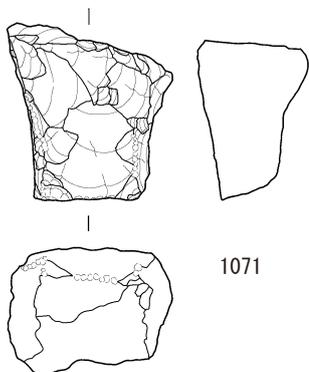
第164図 中世の遺物⑦



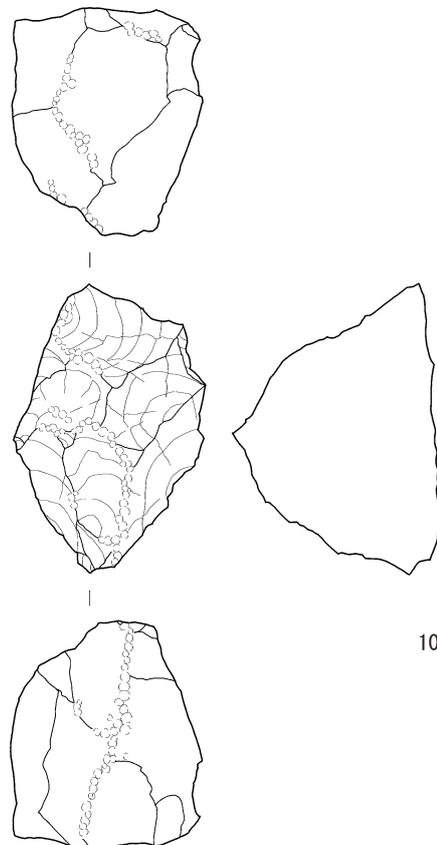
1069



1070



1071



1072

第165図 中世の遺物㉔

第28表 中世 土師器・須恵器・瓦質土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
138	723	土師器	坏	F	44	Ⅱb下	口縁~底部	(12.6)	(6.5)	3.5	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	橙	赤粒, 黒粒, 灰粒, 赤色小石	446	糸切り
	724	土師器	坏	G	56	Ⅲ	胴~底部	-	8.7	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 赤色小石, 長石	-	糸切り, 外面の風化著しい
	725	土師器	坏	H	53-55	I	胴~底部	-	(7.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 小石, 長石	-	糸切り
	726	土師器	坏	H・I	56-57	Ⅲ上	胴~底部	-	(8.8)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 赤色小石, 石英	-	糸切り
	727	土師器	坏	H	59	Ⅲ	胴~底部	-	(7.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 赤色小石, 石英	4448	糸切り
	728	土師器	坏	F	50-53	I	胴~底部	-	6.8	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒, 灰粒 (精良)	-	糸切り, 外面にスス付着
	729	土師器	小皿	I	46	Ⅱb	口縁~底部	8	5.5	1.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡橙	淡橙	赤粒, 黒粒 (精良)	411	糸切り, 外面にスス付着
	730	土師器	小皿	H	52	Ⅱc	口縁~底部	(8.6)	(6.4)	1.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	明赤褐	白粒, 灰粒, 小石	3535	糸切り
	731	土師器	坏	H・I	51	I	胴~底部	-	(9.2)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰粒, 石英	-	糸切り
	732	土師器	小皿	H	45	Ⅱb下	口縁~底部	8.2	7.1	1.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 小石, 長石	272	糸切り
	733	土師器	小皿	E	72	Ⅱb	口縁~底部	9	5.6	2.2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黒褐	黒褐	赤粒, 白粒, 石英, 角閃石	-	糸切り, 内外面黒色, ミガキなし
	734	土師器	小皿	H・I	55	Ⅲ	胴~底部	-	(5.2)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒	-	糸切り
	735	土師器	小皿	G	57	Ⅱc	底部	-	(6.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 石英, 長石	3771	糸切り
139	736	瓦質土器	擂鉢	D・E	46	Ⅱb	口縁~底部	(32.0)	(16.0)	14.2	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰白	灰白	白粒, 黒粒, 角閃石	-	
	737	瓦質土器	擂鉢	E・F	51-52	I	口縁部~胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	暗灰	灰	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
	738	瓦質土器	擂鉢	D-F	51-53	I	口縁~底部	(23.0)	12.2	13.6	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰黄	灰黄	白粒	-	
	739	瓦質土器	擂鉢	I	44-46	Ⅱb・Ⅱ	口縁~底部	(25.2)	9.2	10.1	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰黄	浅黄	黒粒, 白粒, 石英, 長石, 角閃石	418 396	
	740	瓦質土器	擂鉢	H・I	45-46	Ⅱb	口縁部	(28.6)	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	にぶい黄橙	浅黄橙	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
140	741	瓦質土器	擂鉢	H	46	Ⅱb	口縁~胴部	(26.6)	-	-	回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	浅黄橙	浅黄橙	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	406	
	742	瓦質土器	擂鉢	H・I	45-46	Ⅱb	口縁~底部	(35.1)	(18.0)	13.2	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	にぶい黄橙	灰黄	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
	743	瓦質土器	擂鉢	H・I	46	Ⅱb	口縁~底部	(38.0)	(17.7)	14.1	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ケズリ	回転ヨコナデ 磨目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	387	
	744	瓦質土器	擂鉢	I	46	Ⅱb	口縁~胴部	(22.9)	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰黄	浅黄	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	395	注ぎ口
141	745	瓦質土器	擂鉢	I	58	Ⅲ	口縁~底部	(30.4)	(14.2)	12.9	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ケズリ	回転ヨコナデ 磨目	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	-	
	746	瓦質土器	擂鉢	D・E 49・他	49-51 49・他	I	銅~底部	-	10.0	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	浅黄橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 白色小石, 石英, 長石, 角閃石	-	内面にスス付着, 被熱
	747	瓦質土器	擂鉢	I H・I	45 47-48	Ⅱb下 Ⅱc	銅~底部	-	10.6	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	淡黄	灰白	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	383	
	748	瓦質土器	擂鉢	E・F 51-52 52	51-52 52	I Ⅱc	底部	-	(10.0)	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ハケメ	回転ヨコナデ 磨目	灰黄	灰黄	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 長石, 角閃石	3524	
	749	瓦質土器	擂鉢	H	46	Ⅱb	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰	灰	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	404	注ぎ口
	750	瓦質土器	擂鉢	I	47	Ⅱb	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ユビオサエ	回転ヨコナデ 磨目	浅黄	灰黄色	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	-	内面に菊花文
	751	瓦質土器	擂鉢	H・I	46	Ⅱb	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ ユビオサエ	回転ヨコナデ 磨目	黄灰	黄灰	白粒, 黒粒, 石英, 長石, 角閃石	-	内面に菊花文, 注ぎ口
	752	瓦質土器	擂鉢	H・I	46	I	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰黄	淡黄	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 長石, 角閃石	-	内面に菊花文
142	753	瓦質土器	羽釜	I	55	Ⅱc	口縁~胴部	(26.6)	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ハケメ	回転ヨコナデ 磨目	灰白	灰白	白粒, 黒粒	3437	スス付着
	754	瓦質土器	羽釜	H	52	Ⅱc	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ユビオサエ	回転ヨコナデ 磨目	暗灰	暗灰	白粒, 黒粒	3492	
	755	瓦質土器	羽釜	G	45	Ⅱb	胴部	-	-	-	ハケメ 回転ヨコナデ 磨目	ハケメ	褐灰	にぶい黄橙	白粒, 黒粒, 長石, 角閃石	293	
	756	瓦質土器	鍋	H	53-54	I	口縁部	-	-	-	ハケメ 回転ヨコナデ 磨目	ハケメ 回転ヨコナデ 磨目	黄灰	黄灰	白粒, 長石, 角閃石	-	
	757	瓦質土器	鍋	E	62-63	Ⅲ	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	粗いハケメ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒, 白粒, 黒粒, 長石, 角閃石	-	
	758	瓦質土器	焙烙	E	50他	I	口縁~胴部	-	-	-	回転ヨコナデ 粗いハケメ ユビオサエ	回転ヨコナデ 磨目	にぶい褐	灰褐	白粒, 黒粒, 長石, 角閃石	-	
	759	瓦質土器	鍋	I	57	Ⅱa	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	精良, 灰粒, 角閃石	-	
	760	瓦質土器	鍋	H・I	52-53	I	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	白粒, 灰粒, 石英	-	
	761	瓦質土器	焙烙	I	47-48	Ⅱc	底部	-	(33.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい赤褐	褐灰	白粒, 黒粒, 長石	-	内外面スス付着
	762	瓦質土器	焙烙	E	46	Ⅱb	把手	-	-	-	回転ヨコナデ ユビオサエ	回転ヨコナデ 磨目	浅黄橙	浅黄橙	白粒, 黒粒, 赤色小石	-	把手
143	763	瓦質土器	甕	F-H	71-73	I	口縁~胴部	(58.8)	-	-	回転ヨコナデ ユビオサエ	回転ヨコナデ 磨目	浅黄橙	灰白	白粒, 石英, 長石, 角閃石	-	内外面に白色物質付着
	764	瓦質土器	甕	F-H	71-73	I	胴部~底部 付近	-	(36.0)	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ハケメ	ハケメ 回転ヨコナデ 磨目	浅黄橙	灰白	赤粒, 白粒, 小石, 長石, 角閃石	-	内外面に白色物質付着
144	765	瓦質土器	火鉢	H・I	52-55	I	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 ハケメ	回転ヨコナデ 磨目	にぶい橙	にぶい橙	白粒, 黒粒, 赤粒, 長石, 角閃石	-	菊花文, 突帯1条
	766	瓦質土器	火鉢	D	62-63	I	口縁~胴部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黒	褐灰	白粒, 黒粒, 石英	-	菊花文, 突帯1条
	767	瓦質土器	火鉢	H	47	Ⅱc	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	灰	灰	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英	-	菊花文, 突帯1条
	768	瓦質土器	火鉢	E	50	I	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	褐灰	灰黄褐	白粒, 黒粒, 石英, 角閃石	-	菊花文, 突帯1条
	769	瓦質土器	火鉢	H	46	Ⅱb	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒粒, 角閃石	-	菊花文
	770	瓦質土器	火鉢	G	56	Ⅲ	口縁部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	黄灰	浅黄	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 長石, 角閃石	-	内面に菊花文
	771	瓦質土器	火鉢	G	47	Ⅱb	口縁部	-	-	-	摩滅	摩滅	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒, 石英, 角閃石, 白色小石	-	枠囲みX字状文
	772	瓦質土器	火鉢	H	46	Ⅱb	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄灰	にぶい橙	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 長石	451	穿孔
773	瓦質土器	火鉢	G	73	I	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目	回転ヨコナデ 磨目	にぶい橙	にぶい褐	赤粒, 白粒, 黒粒, 灰粒, 石英, 角閃石	-	突帯1条	
774	瓦質土器	火鉢	D・E	48	-	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ 磨目 剥落	回転ヨコナデ 磨目	灰	灰	黒粒, 白粒, 角閃石, 小石	-	突帯1条	

第29表 中世包含層出土 土師器・須恵器・瓦質土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量(cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
144	775	瓦質土器	火鉢	D・E	49・50	I	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄褐	灰黄褐	黒粒, 白粒, 赤粒, 角閃石	-	突帯1条
	776	瓦質土器	火鉢	E・F	51・52	I	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄灰	黄灰	石英, 角閃石	-	
	777	瓦質土器	火鉢	E	45	II b	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰白	黒粒, 白粒, 石英	-	突帯1条
	778	瓦質土器	火鉢	F	70	II c	胴～底部	-	(23.6)	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	灰粒, 黒粒, 小石	-	
	779	瓦質土器	火鉢	D・E	50・51	I	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	白粒, 灰粒	-	凹点, 突帯2条
	780	瓦質土器	七厘 五徳	F	46	II b	胴部	-	-	-	ユビオサエ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	灰白	赤粒, 白粒, 小石	-	内面に張り出し
145	781	瓦質土器	仏具	E	50	I	底部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	赤粒, 白粒, 白色小石	-	
	782	瓦質土器	仏具	E	50	I	底部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒, 白粒, 石英, 角閃石	-	
	783	瓦質土器	仏具	D	49・51	I	底部	-	-	-	回転ヨコナデ	剥落	橙	橙	赤粒, 白粒	-	
146	784	須恵器	甕	H	54	II c	口縁部	-	-	-	格子目タタキ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ハケメ	灰	灰	白粒, 黒粒, 角閃石	3330	
	785	須恵器	壺か	H	45	II b下	口縁部	(18.0)	-	-	格子目タタキ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	白粒, 灰粒, 小石	371	
	786	須恵器	甕	G	57	II c	口縁部	-	-	-	格子目タタキ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 剥落	にぶい橙	にぶい黄橙	黒粒, 白粒, 赤粒, 灰粒, 石英	-	胎土マーブル状
	787	須恵器	壺	G	56	IV	頸～肩部	-	-	-	格子目タタキ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黒	灰	白粒, 石英	-	
	788	須恵器	甕	E	71	II b・II c	胴部	-	-	-	格子目タタキ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	白粒, 長石, 角閃石	-	
	789	須恵器	甕	I	46	II b	胴部	-	-	-	格子目タタキ ハケメ	ハケメ 回転ヨコナデ	灰	灰黄	白粒, 黒粒, 角閃石	394	
	790	須恵器	甕	I	46	II b	胴部	-	-	-	格子目タタキ	-	灰	灰白	白粒, 角閃石	417	
	791	須恵器	甕	H	45	II b	胴～底部付近	-	-	-	格子目タタキ ハケメ	回転ヨコナデ	橙	灰褐	白粒, 黒粒, 長石, 角閃石	201	胎土マーブル状
	792	須恵器	甕	F	56	I	胴部	-	-	-	山形タタキ 格子目タタキ	ハケメ	灰	灰	黒粒, 白粒, 白色小石	-	
	793	須恵器	甕	-	-	I	胴部	-	-	-	山形タタキ	ハケメ	黒	灰	白粒, 黒粒, 石英, 角閃石	-	
	794	須恵器	甕	H・I	52・55	I	胴部	-	-	-	山形タタキ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒, 黒粒, 灰粒	-	
	795	須恵器	搦鉢	E	72	II b	胴部	-	-	-	山形タタキ	平行あて具	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒, 白色小石	-	
	796	須恵器	甕	F	69	II	胴部	-	-	-	山形タタキ	回転ヨコナデ	暗灰黄	黄灰	白粒	-	
147	797	須恵器	甕	F	69	II b	胴部	-	-	-	山形タタキ	回転ヨコナデ ユビオサエ	黄灰	黄灰	黒粒, 灰粒, 角閃石, 小石	-	
	798	須恵器	甕	E	47	II b	胴部	-	-	-	山形タタキ	ハケメ ユビオサエ	黄灰	褐灰	白粒, 石英	-	
	799	須恵器	甕	H・I	56・57	III	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	にぶい黄橙	黒粒, 灰粒, 角閃石	-	
	800	須恵器	甕	H	46	II b	口縁部	-	-	-	ケズリ 回転ヨコナデ	ケズリ 回転ヨコナデ	灰白	灰白	黒粒, 灰粒, 石英, 黒色小 石	405	
	801	須恵器	坏	D・E	49・50	I	底部	-	(10.4)	-	ケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒, 黒粒, 白粒, 灰粒, 石英, 角閃石	-	
	802	須恵器	鉢	I	52	II c	胴部	-	-	-	ケズリ 回転ヨコナデ タタキ	回転ヨコナデ	灰褐	黄灰	赤粒, 白粒	3256	
	803	須恵器	甕?	H・I	56・57	I	底部	-	-	-	ケズリ 回転ヨコナデ	ハケメ 回転ヨコナデ	褐灰	灰	白粒	-	
	804	須恵器	鉢	F	44・45	II b	胴部	-	-	-	同心円状当具 回転ヨコナデ	-	灰	灰	白粒, 黒粒	-	
	148	805	須恵器	鉢	G	46	II b	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ユビオサエ	灰	灰	白粒, 黒粒, 灰粒	-
806		須恵器	鉢	G	56	III	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 指跡	灰	褐灰	白粒, 灰粒, 白色小石	-	東播系須恵器
807		須恵器	鉢	H・I	52・53	I	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	全面自然釉	黒	にぶい黄褐	白粒, 灰粒	-	東播系須恵器
808		須恵器	搦鉢	H・I	75	I	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒, 石英	-	東播系須恵器
809		須恵器	鉢	H	58	III	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ 指跡	灰白	灰白	灰粒, 白色小石, 長石	-	東播系須恵器
810		須恵器	鉢	D	62・63	I	口縁～胴部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒, 黒粒, 長石, 角閃石	-	東播系須恵器
162	1041	-	取鍋	E	50	I	口縁～底部付 近	(5.4)	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ	褐灰, 浅黄橙	褐灰	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英	-	水滴状の金属片付着
	1042	-	取鍋	D・E	49	I	口縁～胴部	(4.6)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄褐	にぶい黄褐色	精良, 白粒	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1043	-	取鍋	D・E	49	I	口縁～胴部	(4.8)	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ 指跡	灰白	にぶい橙	精良, 白粒, 黒粒	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1044	-	取鍋	E	50	I	口縁～胴部	(4.1)	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ 指跡	褐灰	褐灰	精良, 白粒, 石英	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1045	-	取鍋	F	49・50	I	口縁部	(5.6)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 指跡	褐灰	褐灰	白粒, 黒粒, 石英	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1046	-	取鍋	D・E	49	I	口縁部	-	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ	黒褐	褐灰	精良, 白粒, 黒粒, 石英	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1047	-	取鍋	E	51	I	口縁～底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ	黄灰	黄灰	白粒, 黒粒, 灰粒, 石英	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1048	-	取鍋	E	49	I	底部	-	-	-	回転ヨコナデ 指跡	回転ヨコナデ	灰白	灰	白粒, 黒粒, 灰粒, 黒色及び灰色小石	-	外面赤変, 内面に金属付着
	1049	土師器	坏	I	46	II b	口縁～胴部	(7.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	精良, 白粒	-	土師器転用の可能性
	1050	土師器	皿	E	50	I	口縁～底部	7.0	5.0	1.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰	黒粒, 灰粒	-	土師器転用
	1051	土師器	皿	F	65	II	口縁～底部	(8.6)	(6.4)	1.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄灰	にぶい黄橙	白粒, 黒粒, 灰粒	-	土師器転用
1052	土師器	皿	F	65	II	口縁～底部	(8.0)	(6.0)	1.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白, 灰黄	灰褐	白粒, 黒粒, 灰粒	-	土師器転用	
1055	土製品	紡錘車	I	52・53	I	-	-	-	-	糸切り 圧痕(スノコ)	回転ヨコナデ ユビオサエ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	赤粒, 黒粒	-	土師器転用, 糸切り痕	

第30表 中世包含層出土 陶磁器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			色調		歴博 分類	歴博 編年	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面					
148	812	陶器	搦鉢	H	45	II b	口縁~胴部	-	-	-	暗灰黄	褐灰	-	-	219	備前, 注ぎ口
	813	陶器	搦鉢	D	49-51	I	口縁部	-	-	-	暗赤褐	にぶい黄褐	-	-	-	備前
	814	陶器	搦鉢	H・I	75	I	胴部	-	-	-	灰褐	褐灰	-	-	-	備前
	815	陶器	搦鉢	H	57	III上	胴~底部	-	-	-	にぶい赤褐	褐灰	-	-	-	産地不明
	816	陶器	瓶子	G-I	52-53	I	肩部	-	-	-	灰オリーブ	にぶい黄橙	-	-	-	瀬戸
	817	陶器	甕	H	54	II c	口縁部	-	-	-	灰褐	にぶい黄橙	-	-	-	常滑
	818	陶器	甕	H・I	56	I	胴部	-	-	-	灰黄褐	にぶい褐	-	-	-	常滑, 下半に格子状文
	819	陶器	甕	G・H	52-53	I	胴部	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	-	産地不明
	149	820	陶器	甕	E	50	I	口縁部	-	-	-	灰白	明褐灰	-	-	-
821		陶器	甕	F	59	III	口縁部	-	-	-	灰	灰	-	-	-	
822		陶器	甕	F	45	II b下	底部	-	-	-	オリーブ黒	灰	-	-	434	
823		陶器	甕	H・I	75	II a	胴~底部	-	(27.6)	-	にぶい赤褐	赤灰	-	-	-	
824	陶器	甕	G	56	III	底部	-	(32.6)	-	暗赤灰	オリーブ灰	-	-	-		
150	825	白磁	碗	H・I	55	III	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	IV類	I期	-	玉縁口縁
	826	白磁	碗	G-I	73-76	I	胴部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	VI類	I期	-	内面に櫛目文
	827	白磁	碗	H	53-55	I	口縁部	(17.0)	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	IX類	III期	-	口禿碗
	828	白磁	碗	I	54	II c	口縁部	(14.9)	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	IX類	III期	3350	口禿碗
	829	白磁	皿	G	57	II c	胴部	-	-	-	灰白	灰白	V類	I期	-	残存部外面無釉
	830	白磁	皿	H H	52 53	I III	口縁~底部	(11.8)	(6.0)	3.8	灰	明オリーブ灰	IX類	III期	-	口禿皿
	831	白磁	皿	H・I	52-55	I	口縁~胴部	(13.0)	-	-	灰白	灰白	IX類	III期	-	口禿皿
	832	白磁	皿	H・I	51	I	口縁~底部	(10.0)	(7.4)	(2.1)	明緑灰	明緑灰	IX類	III期	-	口禿皿
	833	白磁	皿	H	58	III	口縁~胴部	-	-	-	灰白	灰白	IX類	III期	-	口禿皿
	834	白磁	皿	H	59	III	口縁部	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	IX類	III期	4476	口禿皿
	835	白磁	皿	F	69	II	底部	-	5.8	-	灰白	灰白	IX類	III期	-	口禿皿
	836	白磁	皿	G	57	II c	底部	-	(7.0)	-	灰白	灰白	IX類	III期	-	口禿皿
	837	白磁	皿	H	61	IV	底部	-	(6.2)	-	灰白	灰白	IX類	III期	4199	口禿皿
838	青白磁	合子	H	45	II b	蓋	(5.6)	-	-	浅黄	浅黄橙	-	-	216	菊花状の型押し, 内面無釉	
151	839	白磁	碗	H・I	52-53	I	口縁~胴部	(19.4)	-	-	灰白	灰白	ビロース III類	IVa期	-	器表面にロクロ痕
	840	白磁	碗	H	55	II b	口縁~胴部	(19.0)	-	-	灰黄	灰黄	ビロース III類	IVa期	-	器表面にロクロ痕
	841	白磁	碗	D・E	49-50	I	口縁部	(17.0)	-	-	灰白	灰白	C群	V期	-	端反り
	842	白磁	碗	E	46	II b下	口縁部	(14.0)	-	-	灰白	灰白	C群	V期	-	端反り
	843	白磁	碗	D・E	46	II b	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	C群	V期	-	端反り
	844	白磁	碗	E	72	II b	口縁~胴部	(16.2)	-	-	灰白	灰白	-	V・VI期	-	片山・森本Ⅲ類, 朝鮮白磁(軟質陶磁)
	845	白磁	小碗	H	46	II b	口縁~底部	(9.0)	(4.2)	3.2	灰白	灰白	-	-	-	直口口縁, 胴部下位から高台は無釉
	846	白磁	皿	E	71	I	口縁~胴部	(8.7)	-	-	灰白	灰白	B群	IVb期	-	腰折れ皿
	847	白磁	皿	G I	46 46	II b	口縁~胴部	(11.0)	-	-	灰白	灰白	B群	IVb期	-	細かい貫入, 外面にロクロ目
	848	白磁	皿	I	60	III	口縁部	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	B群	IVb期	4933	細かい貫入, 外面にロクロ目
	849	白磁	皿	H H・I	46 46	II b	口縁~底部	(11.8)	4.8	3.2	灰白	灰白	B群	IVb期	-	高台脇から内面は無釉, 細かい貫入
	850	白磁	皿	D-F	51-53	I	底部	-	(4.4)	-	浅黄	浅黄	B群	IVb期	-	高台脇から内面は無釉, 細かい貫入
	851	白磁	皿	H・I G	45-47 46	II a・II b	口縁~底部	10.0	3.8	2.8	灰白	灰白	B群	IVb期	-	高台脇から内面は無釉, 細かい貫入
	852	白磁	皿	I	46	II b	胴~底部	-	3.6	-	灰白	灰白	B群	IVb期	397	高台脇から内面は無釉, 貫入なし
	853	白磁	皿	I D	46 50	II b III	胴~底部	-	(5.3)	-	灰白	灰白	B群	IVb期	-	畳付から高台内面は無釉 見込みに印刻あり
	854	白磁	皿	F	49-50	I	底部	-	(3.7)	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	B群	IVb期	-	高台に弧状の挟り込み 見込みに重ね焼きの目跡
	855	白磁	皿	G	57	III	底部	-	4.7	-	灰白	灰白	B群	IVb期	-	高台に弧状の挟り込み 見込みに重ね焼きの目跡・墨書あり
	856	白磁	皿	H・I	75	I	底部	-	5.8	-	黄灰・灰白	黄灰・灰白 (蛇の目部)	-	V期	-	高台脇から内面は無釉 見込み蛇目釉剥ぎ
	857	白磁	皿	I	46・47	II b	底部	-	5.8	-	灰白	灰白	-	V期	416・	高台脇から内面は無釉 見込み蛇目釉剥ぎ
	858	白磁	皿	H・I	47・48	II c	底部	-	(5.6)	-	灰白	灰白	-	-	-	高台脇から高台内面は無釉 見込み釉剥ぎ
859	白磁	皿	H・I G-I	46-47 46	II b	口縁~底部	15	5	2.7	灰白	灰白	-	-	390・	15c代, 小さな円盤状高台, 上げ底, 外面下半は無釉	
152	860	白磁	皿	D・E	46	II b下	口縁~底部	(11.3)	(5.8)	2.5	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り, 畳付釉剥ぎ
	861	白磁	皿	H	47-48	II c	口縁~胴部	(14.0)	-	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り, 見込み釉剥ぎ
	862	白磁	皿	E	51	I	口縁部	(12.2)	-	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り
	863	白磁	皿	D	68	II	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り
	864	白磁	皿	E・F	47	II b	口縁~胴部	(12.6)	-	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り
	865	白磁	皿	D・E	50	I	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り, 見込み釉剥ぎ

第31表 中世包含層出土 陶磁器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量(cm)			色調		歴博 分類	歴博 編年	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面					
152	866	白磁	皿	D・E	49	I	底部	(7.0)	-	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り, 畳付のみ釉剥ぎ, 粗い砂目付着, 高台内面に直線上の印あり
	867	白磁	皿	F・G	47・48	-	底部	-	(6.2)	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り, 畳付のみ釉剥ぎ, 粗い砂目付着
	868	白磁	皿	-	-	II	底部	-	(6.8)	-	灰白	灰白	C1群	V期	-	端反り, 畳付のみ釉剥ぎ, 粗い砂目付着
	869	白磁	皿	D	46	-	口縁部	(12.7)	-	-	灰白	灰白	C2群	V期	-	端反り, 焼成不良, 福建省か広東省産
	870	白磁	皿	E・F D	47 46	IIb	口縁~胴部	(12.0)	-	-	灰白	灰白	C2群	V期	-	端反り, 焼成不良, 福建省か広東省産
	871	白磁	皿	H・I	75	I	底部	-	3.6	-	灰白	灰白	E群	V期	-	碁笥底, 胴部下部から底部内面は無釉, 見込み釉剥ぎ
	872	白磁	皿	G	47	IIb	底部	-	(4.4)	-	灰白	浅黄	E群	V期	-	碁笥底, 胴部下部から底部無釉
	873	白磁	皿	G-I	44-46	II	底部	-	-	-	灰白	灰白	E群	V期	-	碁笥底, 畳付のみ釉剥ぎ 見込みに印花あり
	874	白磁	皿	D	50	III	口縁部	(6.0)	-	-	灰白	灰白	D群	VI期	-	菊皿(型押し)の菊花文
	875	白磁	皿	F	50-53	I	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	D群	VI期	-	菊皿(型押し)の菊花文
	876	白磁	皿	E	49	I	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	D群	VI期	-	菊皿(型押し)の菊花文
	877	白磁	皿	D-F	51-53	I	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	稜花皿
	878	白磁	碗・杯	H	46	IIb下	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	玉縁口縁
	879	白磁	大皿	H	58	III	胴部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	見込み外側に放射状の沈線
	880	白磁	梅瓶	I	57	III	胴部	-	-	-	明緑灰	灰白	-	-	-	
	881	白磁	梅瓶	F	47	IIb	胴部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	外面に線描きの細かい文様
	882	白磁	袋物	H・I	45-47	IIa	胴部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	
	883	白磁	袋物	H・I	47-48	IIb	胴部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	焼成不良
	884	白磁	袋物	I	47-48	IIb	胴部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	
	885	白磁	瓶	H・I	56-57	I	双耳環	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	双耳環の一部
886	白磁	蓋	I	52	IIc	肩部	-	-	-	灰	灰黄	-	-	3265		
887	白磁	蓋	D	50	III	天井部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	把手の一部あり, 花文の陽刻	
888	白磁	香炉	I	55	IIb	脚部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-		
153	889	青磁	碗	F	73	IIb	口縁~胴部	(16.0)	-	-	浅黄	浅黄	A1類	II期	-	直口碗
	890	青磁	碗	H	55	IIc	口縁~胴部	(14.6)	-	-	オリーブ黄	灰オリーブ	A1類	II期	3464	直口碗
	891	青磁	碗	I	57	III	胴部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	A3類	II期	-	内面に劃花文(篋描き)
	892	青磁	碗	D	70	IIb	口縁~胴部	(16.8)	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	B1群	III期	-	外面に鎗蓮弁文, 直口口縁
	893	青磁	碗	G	58	IIc	口縁~胴部	(17.2)	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	B1群	III期	3740	外面に鎗蓮弁文, 直口口縁
	894	青磁	碗	G-I	52・53	I	口縁部	(16.0)	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B1群	III期	-	外面に鎗蓮弁文, 直口口縁
	895	青磁	碗	H	55	IIb	口縁~胴部	(15.6)	-	-	灰白	灰白	B1群	III期	-	外面に鎗蓮弁文, 直口口縁
	896	青磁	碗	G-I	73-76	I	口縁~胴部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	B1群	III期	-	外面に鎗蓮弁文, 直口口縁
	897	青磁	碗	I	58	III	口縁~胴部	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B1群	III期	-	鎗蓮弁文
	898	青磁	碗	I	58	III	底部	-	4.8	-	灰オリーブ	灰白	B1群	III期	-	鎗蓮弁文, 畳付及び高台内無釉 高台内面に胎土目付着
	899	青磁	碗	G	47-48	IIb	底部	-	5.0	-	浅黄	灰黄	B1群	III期	-	鎗蓮弁文, 畳付及び高台内無釉
	900	青磁	碗	G	57	IIc	底部	-	(5.7)	-	灰オリーブ	オリーブ黄	B1群	III期	-	鎗蓮弁文, 畳付及び高台内無釉
	901	青磁	碗	H・I	51-54	III	底部	-	5.4	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B1群	III期	-	鎗蓮弁文, 畳付及び高台内無釉
	902	青磁	碗	G・H	52-54	I	底部	-	4.2	-	淡黄	淡黄	B0類	III期	-	鎗蓮弁文, 畳付釉剥ぎ
	903	青磁	皿	-	-	I	口縁~胴部	(11.2)	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	同安	II期	-	外面下半は無釉
	904	青磁	皿	D	69	II	口縁部	-	-	-	灰	灰	折縁	III期	-	厚い釉
905	青磁	皿	I	46	IIb	底部	-	(5.6)	-	明オリーブ灰	明緑灰	折縁	III期	-	畳付釉剥ぎ	
906	青磁	皿	H・I	52-55	I	底部	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	-	高台の接地面欠損	
154	907	青磁	碗	H	45	IIb下 IIb	口縁~胴部	(15.0)	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	D1類	IVa期	271-221	無文外反碗, 薄い釉 外面にロクロ目
	908	青磁	碗	H	46	IIb	口縁~胴部	(15.0)	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	D1類	IVa期	410	無文外反碗, 薄い釉 外面にロクロ目
	909	青磁	碗	E	72	IIb	口縁~胴部	-	-	-	灰	灰白	D1類	IVa期	-	無文外反碗, 薄い釉 外面にロクロ目
	910	青磁	碗	F	65	II	口縁部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	D1類	IVa期	-	無文外反碗, 薄い釉 外面にロクロ目
	911	青磁	碗	-	-	I	口縁部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	D1類	IVa期	-	無文外反碗, 薄い釉, 外面にロクロ目, 胴部外面に弦文
	912	青磁	碗	H F・I	46 46	IIb	口縁~胴部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	D2類	IVb期	407	無文外反碗, 玉縁口縁
	913	青磁	碗	E	69	II	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	D2類	IVb期	-	無文外反碗, 玉縁口縁
	914	青磁	碗	H	45	IIb	口縁部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	D2類	IVb期	311	無文外反碗, 玉縁口縁
	915	青磁	碗	H H・I	47-48 45他	IIb	口縁~胴部	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	D2類	IVb期	-	無文外反碗, 玉縁口縁
	916	青磁	碗	E	70	I	口縁~胴部	-	-	-	緑灰	緑灰	D2類	IVb期	-	無文外反碗
	917	青磁	碗	H	58	III	口縁~胴部	(13.0)	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B2類	IVa期	-	外面に蓮弁文(篋描き), 内面に草花文

第32表 中世包含層出土 陶磁器観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			色調		歴博 分類	歴博 編年	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面					
154	918	青磁	碗	H	58	Ⅲ	口縁～胴部	(13.0)	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B2類	IVa期	-	外面に蓮弁文(鏡描き), 内面に草花文
	919	青磁	碗	H・I	46	Ⅱb下	口縁部	-	-	-	灰白	灰	C2類	IVb期	-	雷文帯(ヘラ書き)
	920	青磁	碗	E	69	Ⅱ	口縁部	-	-	-	灰オリーブ	灰白	C2類	IVb期	-	雷文帯(ヘラ書き)
	921	青磁	碗	G-I	44-46	Ⅱ	口縁～胴部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	C2類	IVb期	-	雷文帯(ヘラ書き), 外面下部に ワタ蓮弁文, 内面に草花文
	922	青磁	碗	I	45-46	Ⅱb	底部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	E1類	V期	-	見込みに印花文, 高台内 まで施釉, 高台内面は無釉
	923	青磁	碗	G・H	52-54	I	胴～底部	-	6.2	-	オリーブ黄	浅黄	E1類	V期	-	見込みに印花文, 高台内 まで施釉, 高台内面は無釉
	924	青磁	碗	I	57	I, Ⅲ	底部	-	5.8	-	灰オリーブ	灰オリーブ	E1類	V期	-	見込みに印花文, 高台内 まで施釉, 高台内面は無釉
	925	青磁	碗	G・H	52-54	I	底部	-	-	-	緑灰	明オリーブ灰	E1類	V期	-	見込みに印花文, 高台内 まで施釉, 高台内面は無釉
	926	青磁	碗	D・E	49-50	I	底部	-	5.4	-	オリーブ灰	オリーブ灰	E1類	V期	-	見込みに印花文, 高台内 まで施釉, 高台内面は無釉
	927	青磁	碗	I	45	Ⅱb	口縁～胴部	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B4類	V期	328	細蓮弁文碗
	928	青磁	碗	H・I	47-48	Ⅱb	口縁部	-	-	-	緑灰	緑灰	B4類	V期	-	細蓮弁文碗
	929	青磁	碗	H	44-45	Ⅱb	口縁部	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	B4類	V期	-218	細蓮弁文碗
930	青磁	碗	H	47	Ⅱc	胴部	-	-	-	灰白	浅黄	B4類	V期	-	細蓮弁文碗	
931	青磁	碗	I	54	Ⅱc	口縁部	(14.0)	-	-	灰白	灰白	B4類	V期	-	細蓮弁文碗, 釉の発色が悪い	
155	932	青磁	皿	I	52-53	I	底部	-	6.2	-	明オリーブ	オリーブ灰	折縁	Ⅲ期	-	折縁皿, 見込みに双魚文 高台内施釉, 高台内面無釉
	933	青磁	皿	D・E	49-50	I	底部	-	4.4	-	灰	灰	腰折	Ⅲ期	-	腰折皿, 高台外まで施釉, 高台内面無 釉
	934	青磁	皿	H・I	44-45	Ⅱb	口縁部	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	端反	V期	-	玉縁口縁
	935	青磁	皿	F-H	71-73	I	底部	-	7.0	-	灰白	灰白	端反	V期	-	玉縁口縁(佐敷タイプ), 見込み釉剥ぎ 焼成不良で一部が赤色化
	936	青磁	皿	H	53	I	口縁部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	端反	V期	-	厚い釉
	937	青磁	皿	E	46	-	口縁～底部	13.2	5	3	灰白	灰白	端反	V期	-	見込み蛇目釉剥ぎ, 高台内面 に「玖口」の墨書
	938	青磁	皿	H	57	Ⅲ上	胴部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	稜花	V期	-	稜花皿, 内面に草花文
	939	青磁	皿	H・I	76	5T	口縁～底部	(8.2)	(3.8)	2.3	明オリーブ灰	明緑灰	-	-	-	内面に縦耳外れの跡 口縁部以外外面無釉
	940	青磁	盤	H	45	Ⅱb	口縁～胴部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	315	15c前半, 縁折盤, 胴部 内面に角陰蓮弁文
	941	青磁	盤	H	54	Ⅱb	底部	-	(13.4)	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	-	-	残存部全面施釉
942	青磁	香炉	D-F	47-48	Ⅱ	口縁～胴部	(9.4)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	口縁内側は玉縁状	
943	青磁	壺	F	47	Ⅱb	胴部	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	-	-	外面に草花文, 残存部全面施釉	
156	944	青花	碗	G・H	52-53	I	口縁部	(13.4)	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	B群	IVb期	-	景德鎮窯系, 端反碗 外面に牡丹唐草文
	945	青花	碗	I	47	Ⅱb	口縁部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	B群	IVb期	-	景德鎮窯系, 端反碗, 外面に人物文
	946	青花	碗	H	47	Ⅱb	底部	-	5.4	-	明緑灰	明緑灰	B群	IVb期	-	景德鎮窯系, 端反碗, 見込みに捻花文
	947	青花	碗	E	47	Ⅱb	底部	-	5.2	-	明緑灰	明緑灰	B群	IVb期	-	景德鎮窯系, 端反碗 見込みに渦文等
	948	青花	碗	G	56-58	I	底部	-	4.6	-	明緑灰	明緑灰	B群	IVb期	-	景德鎮窯系, 端反碗, 畳付釉剥ぎ, 見込みに針葉の枝葉文様
	949	青花	碗	I D・E	51 50-51	I	口縁～胴部	(13.8)	-	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 胴部外面に波濤文等
	950	青花	碗	G・H	52	I	口縁～胴部	(14.0)	-	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 口縁部から内面上部 は茶色く変色, 丸を三つ結合した文様
	951	青花	碗	H・I	58	Ⅲ上	口縁～胴部	(12.0)	-	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 胴部外面に波濤文
	952	青花	碗	F・G	47-48	-	口縁～胴部	(14.2)	-	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 胴部外面に唐草文
	953	青花	碗	D	50	I	口縁～胴部	(11.0)	-	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 胴部外面に唐草文
	954	青花	碗	H・I	47-48	Ⅱb	口縁～胴部	(11.8)	-	-	明緑灰	明オリーブ灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 胴部外面に宝相華唐草文
	955	青花	碗	H	47-48	Ⅱc	口縁～胴部	(16.0)	-	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 胴部外面に唐草文
	956	青花	碗	D・E	49-50	I	口縁部	(12.2)	-	-	灰白	明オリーブ灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 口縁部外面に波濤文帯
	957	青花	碗	G・H	52-53	I	底部	-	5.2	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系, 蓮子碗, 畳付釉剥ぎ, 見込み・胴部外面に草花文
	958	青花	碗	E	49	I	口縁～胴部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	D郡	V期	-	景德鎮窯系, 口縁外面に波濤文帯, 胴部外面にアラベスク文
	959	青花	碗	D・E	46	Ⅱb	底部	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	D郡	V期	-	景德鎮窯系, 見込みに草花文, 胴部外 面に唐草文, 呉須の発色鈍い
	960	青花	碗	E・F	46	Ⅱb	底部	-	-	-	明オリーブ灰	明緑灰	E郡	IV期	-	景德鎮窯系, 饅頭心型, 見込みに花文, 高台内面に字款
	961	青花	皿	D	49-51	I	口縁部	9.2	-	-	明緑灰	明緑灰	B1群	V期	-	景德鎮窯系, 端反皿, 胴部外面に宝相華唐草文
	962	青花	皿	H	52	Ⅱ	口縁部	13.0	-	-	明緑灰	明オリーブ灰	B1群	V期	-	景德鎮窯系, 端反皿, 胴部外面に宝相華唐草文
	963	青花	皿	H	44	Ⅱb	口縁部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	B1群	V期	-	景德鎮窯系, 端反皿, 口縁部内面に四 方樓文, 胴部外面に唐草文
	964	青花	皿	I	47	Ⅱb	底部	-	5.6	-	明緑灰	明緑灰	B1群	V期	-	景德鎮窯系, 端反皿, 畳付釉剥ぎ, 見込みに十字花文
	965	青花	皿	G-I	52-53	I	底部	-	(8.6)	-	明緑灰	明緑灰	B1群	V期	-	景德鎮窯系, 端反皿, 畳付釉剥ぎ, 見込みに玉取獅子, 胴部外面に唐草文
	966	青花	皿	G	47-48	Ⅱb	底部	-	-	-	灰白	灰白	B2類	VI期	-	景德鎮窯系, 端反皿, 高台内面に 「富貴長春」の字款

第33表 中世包含層出土 陶磁器観察表(4)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点		層位	部位	法量(cm)			色調		歴博 分類	歴博 編年	取上 番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面				
								(8.4)	-	-	明緑灰	明緑灰				
156	967	青花	坏	D・E	49	I	口縁～胴部	(8.4)	-	-	明緑灰	明緑灰	B 2類	VI期	-	景德鎮窯系、胴部外面に唐草文
	968	青花	坏	G	47	II b	口縁～胴部	(5.6)	-	-	明緑灰	明緑灰	B 2類	VI期	-	景德鎮窯系、胴部外面に草文、内面に目砂付着
	969	青花	皿	H・I	75	II	底部	-	3.2	-	明緑灰	明緑灰	C群	V期	-	景德鎮窯系、基筒底、見込み草花文、腰部に蕉葉文
	970	青花	坏	F	70	I	底部	-	2.1	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	C群	V期	-	景德鎮窯系、基筒底
	971	青花	皿	F・H	71-73	I	口縁部	-	-	-	灰白	明オリーブ灰	F群	VI期	-	景德鎮窯系、鏽皿、胴部外面に草花文
	972	青花	皿	G	52-53	I	口縁部	(12.0)	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	F群	VI期	-	景德鎮窯系、鏽皿、口縁部内面に波濤文
	973	青花	大皿	G	47	II b	底部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	景德鎮窯系、内面に点描文と草花文
974	青花	大皿	H	52	I	底部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	景德鎮窯系、再加工品、全面摩耗	
157	975	青花	碗	H・I	56-57	III上	口縁～胴部	(18.0)	-	-	明緑灰	明オリーブ灰	-	-	-	端反碗、漳州窯系、染付碗B群模倣、胴部内面に唐草文
	976	青花	碗	F	50-53	I	口縁～胴部	(18.0)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗C群模倣、胴部に唐草文
	977	青花	碗	D	49	I	口縁～胴部	(12.6)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗C群模倣、胴部内面に唐草文
	978	青花	碗	H・I	56-57	III上	底部	-	5.2	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗C群模倣、見込みに草花文、腰部に蕉葉文
	979	青花	碗	D	49-51	I	底部	-	-	-	浅黄	浅黄	-	-	-	漳州窯系、染付碗C群模倣、見込みに「福」、腰部に蕉葉文
	980	青花	碗	H	52-53	I	底部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗D群模倣、内外面に貫入
	981	青花	碗	H	53	I	底部	-	4.8	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	漳州窯系、染付碗D群模倣、畳付～高台内に粉穀痕、見込みに十字文、腰部に蕉葉文
	982	青花	碗	G	45	II b	底部	-	4.6	-	灰白	灰白	-	-	188	漳州窯系、染付碗D群模倣、見込みに十字花文
	983	青花	碗	H H	44 45	II b	底部	-	5.0	-	灰白	灰白	-	-	196-197 214	漳州窯系、染付碗D群模倣、見込みに草花文
	984	青花	碗	D	68	I	底部	-	4.4	-	明オリーブ灰	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗D群模倣、見込みに蛇の目釉剥ぎ、畳付～高台内面に粉穀痕
	985	青花	碗	G・H	52-53	I	口縁～胴部	(14.0)	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部外面に唐草文
	986	青花	碗	D	68	II	口縁～胴部	(14.0)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、大きな貫入
	987	青花	碗	H G・H	52-53 52-53	I	口縁～胴部	(17.2)	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部外面に唐草文
	988	青花	碗	G	46	II b	口縁～胴部	(12.2)	-	-	灰黄	灰黄	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部外面に花文
	989	青花	碗	D・E	46-47	II b	口縁～胴部	(14.0)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部外面に唐草文
	990	青花	碗	F	50-52	I	口縁～胴部	(12.0)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部外面に唐草文
	991	青花	碗	D	47-48	-	口縁～胴部	(10.6)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部は無文
	992	青花	碗	D	46	II b	口縁～胴部	(14.0)	-	-	灰白	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付碗E群模倣、胴部は無文
	993	青花	碗	H	57	III上	底部	-	(6.0)	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	漳州窯系、高台外面まで施釉、畳付から高台内面無釉、見込みに草花文
	994	青花	碗	H・I	46, 48	II b	底部	-	(6.4)	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	漳州窯系、高台外面まで施釉、畳付から高台内面無釉、見込みに花文
	995	青花	皿	F	56	I	口縁～底部	11.4	4.6	2.5	明オリーブ灰	明緑灰	-	-	-	漳州窯系、基筒底、染付皿C群模倣、腰部に粉状痕、見込みに吉祥文字
	996	青花	皿	H・I	47-48	II c	底部	-	(4.2)	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	-	漳州窯系、基筒底、染付皿C群模倣、見込みに草花文
	997	青花	皿	H・I	56	I	底部	-	(5.0)	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	-	漳州窯系、基筒底、染付皿C群模倣、見込み釉剥ぎ
	998	青花	皿	G	50	I	口縁～底部	(12.0)	(6.4)	3.4	明緑灰	明緑灰	-	-	-	漳州窯系、染付皿E群模倣、胴部に花唐草文
	999	青花	皿	H	47-48	II b	口縁部	(11.0)	-	-	浅黄	灰白	-	-	-	漳州窯系、染付皿E群模倣、胴部は無文
	1000	青花	皿	H	45	II b	口縁部	(10.0)	-	-	灰黄	灰黄	-	-	-	漳州窯系、染付皿E群模倣、口縁部外面に波濤文帯
1001	青花	皿	E	46	II b下	口縁部	(9.8)	-	-	灰白	明オリーブ灰	-	-	-	漳州窯系、染付皿E群模倣、口縁部外面に波濤文帯	
1002	青花	皿	I	57	II a	底部	-	-	-	灰黄	灰白	-	-	-	外底に粉穀痕	
1003	青花	盤	G	52-53	I	底部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	内面に波濤文、高台部分に粗い砂付着	
1004	色絵	碗	I	57	III	底部	-	(4.4)	-	灰白	灰白	-	-	-	景德鎮窯系の色絵碗、畳付釉剥ぎ、見込みに花文	
158	1005	黒曜輪陶器	天目	H・I	75	I	口縁～胴部	(12.0)	-	-	黒	黒	-	-	-	中国産、胎土硬質
	1006	黒曜輪陶器	天目	F G・H	51 51-55	III I	口縁～胴部	(12.0)	-	-	褐・黒	灰黄褐・黒	-	-	-	中国産、胎土硬質
	1007	黒曜輪陶器	天目	I	47	II b	口縁～胴部	-	-	-	黒	黒	-	-	-	中国産、胎土硬質
	1008	黒曜輪陶器	天目	G	53-55	I	口縁～胴部	-	-	-	褐	黒	-	-	-	中国産
	1009	黒曜輪陶器	天目	E	71	II b	底部	-	4.0	-	黒	黒	-	-	2017	中国産
	1010	黒曜輪陶器	天目	G	52	I	底部	-	4.8	-	-	褐	-	-	-	中国産、外面に小豆大の圧痕
	1011	黒曜輪陶器	天目	F	47	II b	口縁部	-	-	-	黒	黒	-	-	-	瀬戸・美濃系、15c以降
	1012	黒曜輪陶器	天目	E	46	II b下	胴部	-	-	-	暗褐	黒	-	-	-	瀬戸・美濃系、15c以降
1013	黒曜輪陶器	小碗	D	49-51	I	口縁部	-	-	-	オリーブ褐	暗オリーブ褐	-	-	-	瀬戸・美濃系、15c以降	
159	1014	陶器	壺	E	50	I	口縁～肩部	(13.2)	-	-	にぶい黄褐	橙、にぶい黄褐	-	-	-	磁甎窯系、肩部にヘラ書き漆喰様の物質付着

第34表 中世包含層出土 陶磁器観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			色調		歴博 分類	歴博 編年	取上 番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面					
159	1015	陶器	壺	D・E	49・50	I	胴部	-	-	-	にぶい褐	にぶい褐	-	-	-	磁甕窯系, 外面に漆喰様の物質付着
	1016	陶器	壺	E	50	I	胴～底部	-	(13.6)	-	にぶい褐	にぶい褐	-	-	-	磁甕窯系, 外面に漆喰様の物質付着
	1017	陶器	壺	D・E	49・50	I	胴～底部	-	(11.4)	-	にぶい黄橙	にぶい褐	-	-	-	磁甕窯系
	1018	陶器	壺	F・G D-I	44・45 44・45	II b下	胴部	-	-	-	にぶい黄橙	橙	-	-	-	中国産, 土師質, 胎土がマーブル状
	1019	陶器	壺	E・F	50・52	I	胴～底部	-	(8.8)	-	黄橙	にぶい橙	-	-	-	中国産, 胴下半のみ無釉で露胎
	1020	陶器	壺	G	45	II b下	胴～底部	-	(15.0)	-	橙	橙	-	-	284	中国産, 土師質, 胎土がマーブル状
	1021	陶器	壺	G	52・53	I	胴～底部	-	(13.0)	-	にぶい黄橙	灰オリーブ	-	-	-	中国産, 底部付近は露胎
160	1022	陶器	壺	F	45	II b下	胴～底部	-	(10.0)	-	灰褐	灰褐	-	-	-	中国産, 底部付近は無釉 底面に糸切り痕
	1023	陶器	壺	H・I	47・48	II c	胴部	-	-	-	褐灰	黒褐	-	-	-	中国産, 沖縄分類褐釉陶器V類
	1024	陶器	壺	E	67	II b	頸部	-	-	-	黒褐	黒褐	-	-	-	中国産, 沖縄分類褐釉陶器V類
	1025	陶器	壺	E・F	46	II b	胴部	(8.4)	-	-	オリーブ黒	にぶい橙	-	-	-	中国産, 沖縄分類褐釉陶器V類 内面に釉薬が水滴状に付着, 耳の接合痕
	1026	陶器	壺	F	44・45	II b下	肩～胴部	-	-	-	黄灰	灰	-	-	-	内面無釉, 耳の接合痕
	1027	陶器	壺	I	61	III	肩～胴部	-	-	-	褐灰	にぶい褐	-	-	4960	内外面無釉, 産地不明
	1028	陶器	小型 製品	H・I	47・48	II b	胴部	-	-	-	明褐灰	にぶい赤褐	-	-	-	中国産か, 下半は露胎
	1029	陶器	壺・瓶	I	46	II b	胴～底部	-	(19.3)	-	灰白	灰褐	-	-	-	中国産か, 底部付近が露胎
	1030	陶器	壺・瓶	D・E	46	II b	頸部	-	-	-	オリーブ褐	オリーブ褐	-	-	-	中国産か, 内面一部露胎
	1031	陶器	壺	H	61	III	口縁部	-	-	-	灰黄褐	灰黄褐	-	-	4030	中国産か, 短頸壺, 外面に条線
161	1032	陶器	壺	D-F	51・53	I	口縁～肩部	-	-	-	暗褐	黒褐	-	-	-	中国産か
	1033	陶器	壺・壺	H・I	45・47	II a	頸部	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	-	中国産か, 外面に条線状のナデ
	1034	陶器	鉢	G	45	II b下	口縁部	(26.6)	-	-	にぶい橙	にぶい橙	-	-	340	焼締鉢, 中国華南産
	1035	陶器	鉢・盤	I	47・48	II b	口縁部	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	-	中国産
	1036	陶器	盤	I	54	II c	口縁部	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	-	中国産, 黄釉鉄絵盤
	1037	陶器	盤	H	55	II c	胴部	-	-	-	オリーブ黄	黄褐	-	-	3466	中国産, 黄釉鉄絵盤
	1038	陶器	壺	D・E	49・50	I	頸部	-	-	-	黄褐	橙	-	-	-	内面に当て具痕
162	1039	陶器	甕	F	50・53	I	底部	-	-	-	明褐灰	灰白	-	-	-	中国産か, 内外面無釉
	1040	陶器	甕・壺	G	52・53	I	胴部	-	-	-	橙	にぶい橙	-	-	-	中国産か, 外面上半に波状文
	1053	陶器	甕	D	49・51	I	胴部	-	-	-	灰白地に 灰褐色のまだら	にぶい赤褐色	-	-	-	常滑産, 被熱, 転用品
	1054	陶器	甕	D	50	III	胴部	-	-	-	灰白地に にぶい褐色まだら	暗褐色	-	-	-	常滑産, 被熱, 転用品

第35表 中世包含層出土 石製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm・g)				取上 番号	備考	
							長さ	幅	厚さ	重量			
163	1056	滑石製品	石鍋	H	52・53	I	口縁～鏝	(45)	(32)	-	43.3	-	鏝の下部にスス付着
	1057	滑石製品	石鍋	H・I	56・57	III上	胴部	(5.6)	(7.8)	-	47.5	-	
	1058	滑石製品	石鍋	H・I H・I	46 52・55	II b I	胴部	(37)	-	-	91.2	-	
	1059	滑石製品	石鍋	H I	54 53・54	I	胴部	(41)	(83)	-	36.3 g	-	
	1060	滑石製品	石鍋	G	45	II b	底部	(55)	(37)	-	34.8	14	
	1061	滑石製品	石鍋再加工品	I	54	II c	-	2.9	(09)	(12)	8.4	3303	石鍋の再加工品
	1062	滑石製品	石鍋再加工品	G	53	III	-	(34)	2.0	1.6	18.7	3667	未製品か, 石鍋の再加工品, 鏝部分を利用
164	1063	滑石製品	石鍋再加工品	H・I	45	II b下	-	(35)	(16)	(13)	14.2	-	石鍋の再加工品
	1064	石製品	火打石	I	48	II a・b	-	4.8	2	1.6	17.0	-	チャート
	1065	石製品	火打石	I	47	II b	-	2.9	1.4	1	3.8	-	チャート
	1066	石製品	火打石	I	47	II b	-	2.35	1.7	0.9	3.8	-	チャート
	1067	石製品	火打石	I	46	II b	-	3.5	2.4	1.9	15.1	-	チャート
165	1068	石製品	火打石	G	45	II b	-	3.4	3.8	3.2	43.6	-	チャート
	1069	石製品	火打石	I	55	II b	-	5.5	4.4	3	67.4	-	チャート
	1070	石製品	火打石	E・F	49・51	I	-	2.6	1.6	1.9	7.7	-	赤色チャート
	1071	石製品	火打石	E・F	51・52	I	-	2.4	2.2	1.7	9.1	-	赤色チャート
	1072	石製品	火打石	F	44・45	II b下	-	3.8	2.5	3.1	28.8	-	石英

第5節 近世の調査

1 調査の概要

近世の遺物は、主にⅡa・Ⅱb層で確認されている。Ⅱb層では、古代・中世の遺物と混在した状態で出土している。遺構検出面はⅢ層上面であるが、中世での報告と同様に、削平の影響がある箇所では、ⅣからⅥ層で検出している。

遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑9基を検出・認定した。遺物は、薩摩焼や肥前陶器を中心とした陶磁器類が出土している。一部に中世に属するものも含むが、遺構内遺物として報告する。

2 遺物の分類

陶磁器の分類は、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）の御教示、渡辺芳郎氏（鹿児島大学法文学部教授）の整理指導・助言を得て実施した。また、『九州陶磁の編年』（2000 近世陶磁学会）、『肥前陶器「唐津」の生産について』（2024 近世陶磁研究会）等を参照した。時期区分は『九州陶磁の編年』から引用した下表を基本としつつ、一部については細分あるいは世紀表記とした。

第36表 陶磁器の時期区分

時期区分	磁器	時期区分	陶器
		I -1期	1580～1594年頃
		I -2期	1594～1610年代
Ⅱ -1期	1610～1630年代	Ⅱ期	1610～1650年代
Ⅱ -2期	1630～1650年代		
Ⅲ期	1650～1690年代	Ⅲ期	1650～1690年代
Ⅳ期	1690～1780年代	Ⅳ期	1690～1780年代
Ⅴ期	1780～1860年代	Ⅴ期	1780～1860年代

3 遺構

近世に道として利用されていたと考えられる溝状遺構を検出したが、中世の調査成果で報告しているため説明を省く。土坑9基のうち8基は46区から48区にかけて集中して検出されている。時期認定にあたっては、①出土遺物、②埋土の状況、③周辺の遺構検出状況を基準に近世の遺構と判断した。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡13号（第167図）

D～I-69～76区からは、多くのピットを検出したが、調査時には掘立柱建物跡を認定することができなかった。その後、整理作業を行う中で、埋土や遺構内外の出土遺物、柱痕の有無、遺構配置状況等を総合的に判断して、掘立柱建物跡13号の図上復元を行った。

G-72・73区のⅥ層上面で検出した。梁行2間×桁行3間の長方形を呈する総柱建物である。また、長方形平

面の南側に半間の廂が延びる掘立柱建物跡である。梁行の長さは3m、桁行の長さ6mで、総面積約18㎡である。主軸は、ほぼ真北である。

身舎の柱間寸法の平均は梁行3m、桁行が2mである。柱穴の直径は、身舎が0.4～0.6m、廂は0.5mでほぼ同じであった。深さは、0.3～0.6mとばらつきがある。柱痕跡は身舎で1か所、廂で1か所確認されている。複数のピットがあり、建て替えか補強による追加が行われたと考えられる。

柱穴から遺物は、国産陶器1点、白磁2点が出土している。

出土遺物（第167図 1073～1075）

出土遺物のすべてを図化した。

1073は、肥前の武雄産と考えられる中鉢である。口縁部は、外へ折り曲げて玉縁状とする。白化粧土をかけ、外面は刷毛目を波状に入れ釉掛けをし、内面は横方向の刷毛目を施す。年代は、17世紀後半～18世紀前半に該当すると考えられる。

1074は、端反口縁の白磁碗である。ビロースクⅢ類と考えられ、歴博分類のⅣa期に該当する。年代は、14世紀後半～15世紀初めである。1075は、白磁の口縁部付近から腰部である。外面の腰部以下は、露胎する。歴博分類白磁皿B群（Ⅳb期）、森田分類D群に該当する。年代は15世紀前半～中葉である。

(2) 土坑

近世に該当する土坑は、計9基認定した。46～48区および74区で検出し、8基は46～48区に集中する。

ア 土坑37号（第168図）

I-46区のⅢ層で検出した、楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、1.3m×0.68mで、検出面からの深さは最深部で1.22mである。複数のピットと抜き取り痕が重なり土坑状になったと考えられる。周辺に掘立柱建物跡を構成する柱穴もなかったことから、単独の土坑状の遺構として扱った。

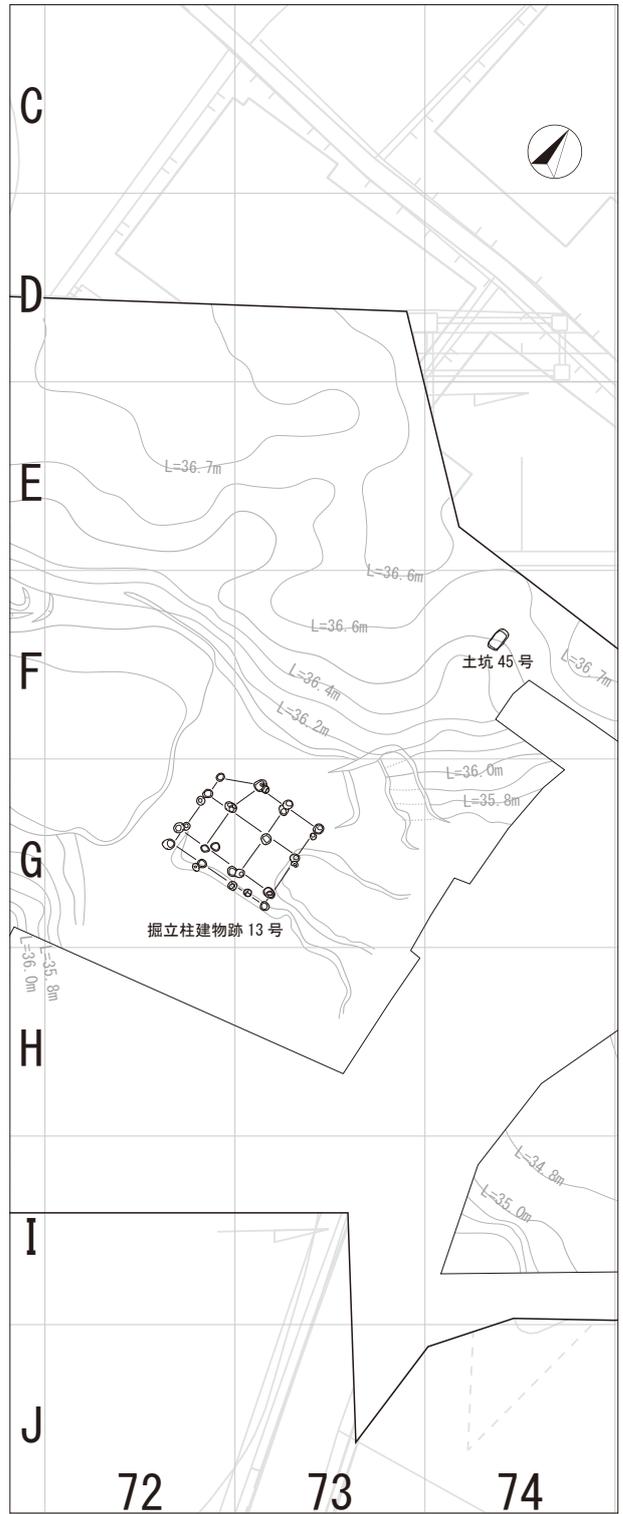
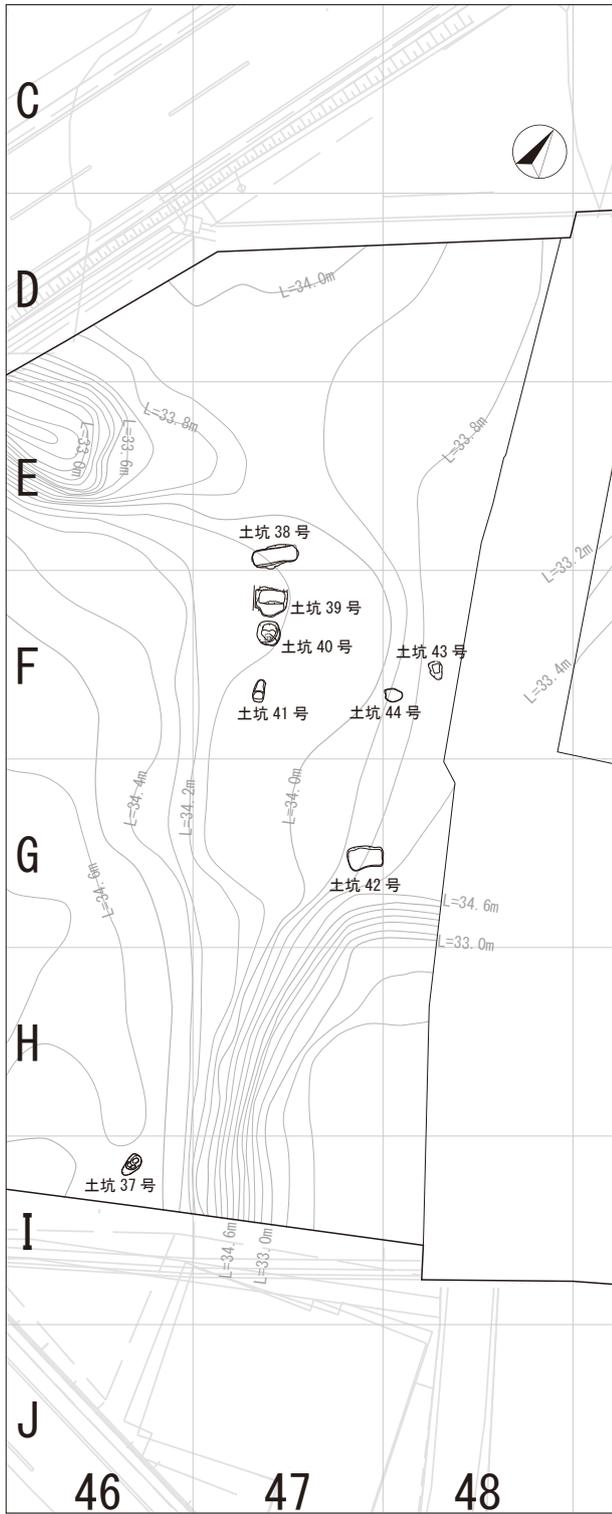
遺物は、土師器12点、瓦質土器1点、須恵器1点、薩摩焼や唐津焼などの国産陶器5点、青磁2点、青花2点が出土している。

出土遺物（第168図 1076～1077）

青花2点を図化した。

1076は、漳州窯系の中皿である。見込みに圏線、中央に「日」の字が描かれる。「日の字鳳凰文皿」と考えられる。碁笥底で、接地部分は釉剥ぎされ、粗い砂粒が付着する。染付皿C群の模倣で、年代は16世紀後半～17世紀である。

1077は、碗である。全体的に貫入が入る。見込みに、花文とみられる文様、外面にはアラベスク文様とみられる



第166图 近世遺構配置図

曲線文様が描かれる。歴博分類のV期もしくはVI期に該当し、年代は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

イ 土坑38号 (第168図)

E-47区のVI層で検出した、隅丸方形の土坑である。埋土および周辺の状況から、近世の土坑とした。規模は、2.45m×1.1mで、検出面からの深さは最深部で0.74mである。上端からほぼ垂直に掘り込み、下端は方形に近い形になる。形状から北側の製鉄関連遺構に関係する可能性があるが、埋土内から遺物等は出土しておらず断定できなかった。

ウ 土坑39号 (第169図)

F-47区のVI層で検出した、略方形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、1.67m×1.53mで、検出面からの深さは最深部で2.18mある。東側は深さ1.6mくらいでテラス状となる。中世で報告した土坑2号のような掘り込みの深い土坑に近い性格をもつと考えるが、詳細は不明である。

遺物は、土師器241点、瓦質土器4点、須恵器20点、薩摩焼や肥前系などの国産陶器5点、白磁3点、青磁2点、染付2点、輸入陶器1点、金属製品1点が出土している。

出土遺物 (第169図 1078～1082)

土師器1点、国産陶器2点、白磁1点、金属製品1点を図化した。

1078は、土師器の坏の胴部～底部である。底部には糸切り痕が残る。器壁が厚く、底部内面がふっくらと盛り上がっている。年代は14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

1079は、肥前系瓶の肩部～腰部である。外面の肩部には黒みの強い呉須で文様が描かれる。内面は露胎する。17世紀代のものと考えられる。1080は、加治木・始良系陶器で丸形の口縁部～胴部である。仏飯器の坏部と考えられ、山元窯産の可能性はある。年代は17世紀後半頃である。

1081は、白磁碗の胴部～高台である。内外面ともに施釉するが、高台見込は露胎する。見込には圈線が施される。高台は断面四角形である。端反碗と考えられ、歴博分類碗Ⅷ類(Ⅱ期)、大宰府分類碗Ⅷ類(D期)に該当する。年代は12世紀後半～13世紀前半である。

1082は、銅製の板状素材を「L」字状に折り曲げ、側面に孔が2か所穿つ。1か所には留め具の一部が残存する。調度品の可能性がある。

エ 土坑40号 (第169図)

F-47区のVI層で検出した円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、1.26m×1.2mで、検出面からの深さは最深部で0.9mである。断面の状況から、土坑37号と同じように、複数回ピットが掘られた結果、土坑状になったと考えられ

る。

遺物は、土師器6点、白磁1点、硯1点が出土している。

出土遺物 (第169図 1083)

硯1点を図化した。

1083は、石製の長方硯である。輝緑凝灰岩を加工したもので、「赤間硯」と考えられ、いわゆる「四二寸」硯である。表面の硯堂から裏面の硯池に貫通した孔がある。裏面は硯縁のほとんどを欠き、落潮～硯池部分に縦位・斜位の擦痕がみられる。裏面側を使用後、破損したため、正面の厚みのある裏面の硯堂側に硯池を再加工し、利用したのと考えられる。

オ 土坑41号 (第170図)

F-47区のVI層で検出した、楕円形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、1.2m×0.57mで、検出面からの深さは最深部で1.08mである。南側の底面は周辺よりも少しくぼみ、扁平な大きい石が礎石のように収まっていた。柱穴の礎石を考えたが、寛永通寶が出土したこと、埋土が一気に埋められている状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。

遺物は、土師器2点、青磁1点、寛永通寶1点が出土している。

出土遺物 (第170図 1084)

寛永通寶1点を図化した。

1084は、全体に緑青が見られ、「寶」字の「貝」の「ハ」が「ス」になっており、「ス貝寶」とよばれる、古寛永に該当すると考えられる。古寛永は、寛永13(1636)年が初鑄である。裏面は無文である。

カ 土坑42号 (第170図)

G-47・48区のVI層で検出した、隅丸方形の土坑である。出土遺物および埋土、周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、1.85m×1.15mで、検出面からの深さは最深部で0.14mである。他の土坑に比べて非常に浅いが、検出面がVI層であることから削平の影響を受けていると考えられる。

遺物は、肥前系と考えられる国産陶器2点、白磁2点が出土している。

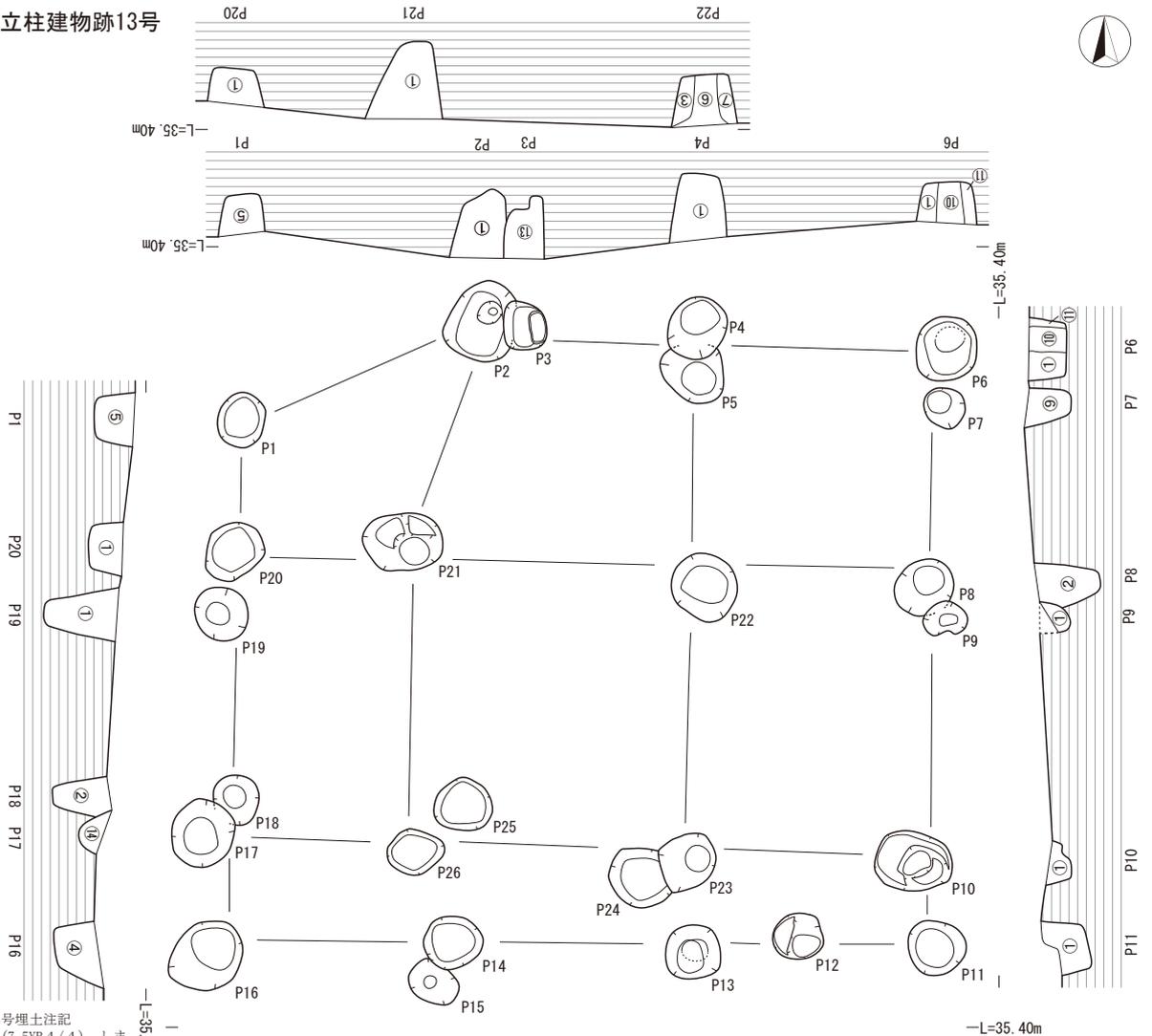
出土遺物 (第170図 1085・1086)

国産陶器1点、白磁1点を図化した。

1085は、内外面に貫入が入る肥前系陶器の碗である。全面施釉で、体部が丸いものである。年代は17世紀前半と考えられる。

1086は、白磁皿の口縁部～胴部である。口縁部は内湾する。全面施釉であるが、体部の腰部は露胎する。歴博分類皿B群(Ⅳb期)、森田分類D群に該当する。年代は15世紀前半～中葉である。

掘立柱建物跡13号



掘立柱建物跡13号埋土注記

- ① 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまりあり粘性弱い 白・赤色粒子,炭化物, シラスを各10%含む
- ② 暗褐色砂質土(7.5YR 3/4) しまり粘性ともにやや弱い 白色粒子, シラスを各10%含む
- ③ 褐色砂質土(7.5YR 4/6) しまり粘性ともにやや弱い 白・赤色粒子, 炭化物を各10%, シラスを40%含む
- ④ にぶい褐色砂質土(7.5YR 5/4) しまり粘性ともにやや弱い 白色粒子, シラスを各10%含む
- ⑤ 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまり粘性ともにやや弱い 白・赤色粒子を各10%, シラスを30%含む
- ⑥ 褐色砂質土(7.5YR 4/6) しまり粘性ともにやや弱い 白・赤色粒子,炭化物, シラスを各10%含む
- ⑦ 明褐色砂質土(7.5YR 5/6) しまりやや弱く粘性あり 炭化物を各10%, シラスを40%含む
- ⑧ 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまりあり粘性やや弱い 白・赤色粒子, シラスを各10%含む
- ⑨ 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまりやや弱く粘性弱い 白色粒子を10%, シラスを40%含む
- ⑩ 暗褐色砂質土(7.5YR 3/4) しまり粘性ともにあり 白色粒子を10%含む
- ⑪ 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまりあり粘性やや弱い 白・赤色粒子, 炭化物を各10%, シラスを70%含む
- ⑫ にぶい褐色砂質土(7.5YR 4/6) しまり粘性やや弱い 白・赤色粒子, 炭化物を各10%, シラスを50%含む
- ⑬ 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまりあり粘性やや弱い 赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑭ 褐色粘質土(7.5YR 4/4) しまり粘性ともにやや強い 白色粒子, シラスを各10%含む



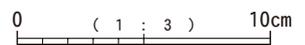
1073



1074

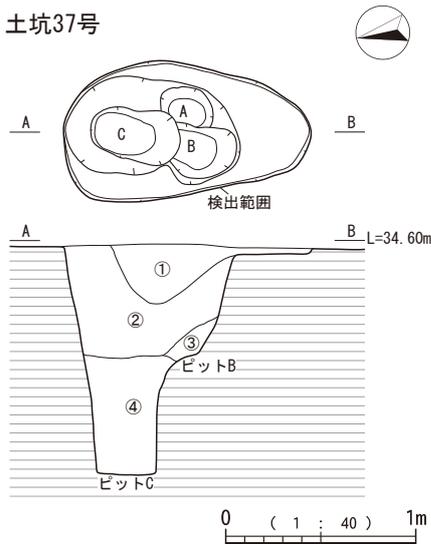


1075



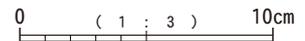
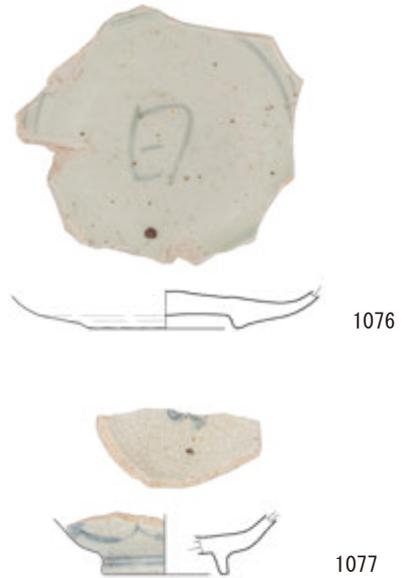
第167図 掘立柱建物跡13号・近世遺構内の遺物①

土坑37号

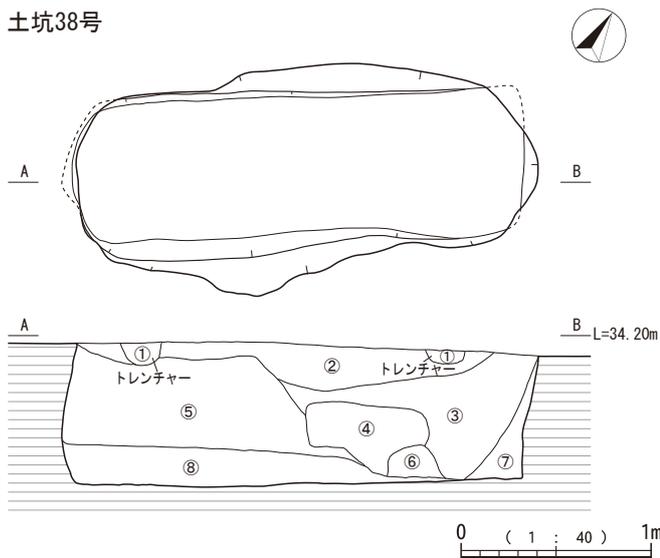


土坑37号埋土注記

- ① 茶褐色土(10YR 4/2) 白色粒子を含む
- ② 茶褐色土(10YR 4/2) 2cm弱の黄褐色ブロック土混じる
- ③ 茶褐色土(10YR 4/3) 5cm程度の黄褐色ブロック土混じる
- ④ 茶褐色土(10YR 4/3) 灰白色の砂質土ブロックを含む



土坑38号



土坑38号埋土注記

- ① トレンチャー
 - ② にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3) 白色粒子5%含む
 - ③ ②と黒色砂質土(10YR 2/1)が混在する
 - ④ 褐灰色粘質土(10YR 4/1) しまり・粘性ともに強い
 - ⑤ 黒色砂質土(10YR 2/1) シラスブロック10%帯状に入る
 - ⑥ 灰黄褐色砂質土(10YR 5/2) しまり強く粘性は無い
 - ⑦ 灰黄褐色砂質土(10YR 5/2) しまり強く粘性はやや弱い シラス5%含む
 - ⑧ 黒色土(10YR 2/1) 上部は厚さ3cm程度の硬化面となっている
しまり粘性ともに弱い
- ※硬化面より下は⑦と⑧がマーブル状に堆積する

第168図 土坑37・38号・近世遺構内の遺物②

キ 土坑43号 (第171図)

F-48区のⅥ層で検出した不定形の土坑である。埋土および周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、1m×0.63mで、検出面からの深さは最深部で1.12mである。小規模だが深い掘り込みをもつ土坑である。埋土は、一気に埋められている。遺物は、出土しなかった。

ク 土坑44号 (第171図)

F-48区のⅥ層で検出した不定形の土坑である。埋土および周辺の状況から近世の土坑とした。規模は、0.88m×0.71m、検出面からの深さは最深部で0.46mである。

上端からほぼ垂直に掘り込み、下端は方形に近い形になる。検出面で多くの炭化物が多く混入していた。形状から北側の製鉄関連遺構に関係する可能性があるが断定できなかった。

遺物は、鉄製品1点が出土している。

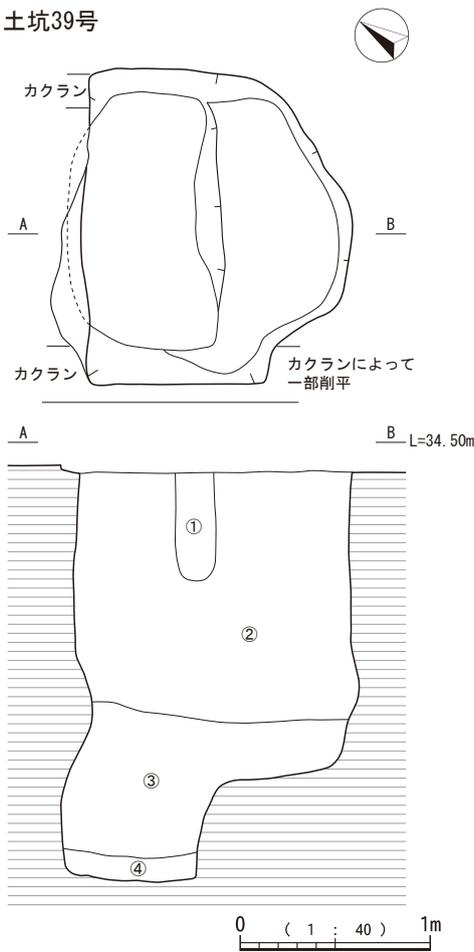
出土遺物 (第171図 1087)

1087は、鉄製品である。断面は方形で、両端のうち一端は欠損する。残存する端部を丸く折り曲げる。

ケ 土坑45号 (第172図)

F-74区のⅥ層で検出した隅丸方形の土坑である。出

土坑39号



土坑39号埋土注記

- ① 近代以降の攪乱
- ② 黒褐色土 II b層由来 しまり強く粘性有り
シラスはわずかに混じる
- ③ 黒褐色(10YR 3/2) しまりが弱く粘性有り
シラスとマーブル状に堆積する
- ④ 大型土坑の底と同じである



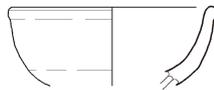
1078



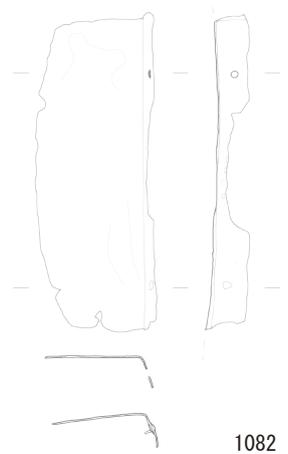
1079



1080



1081

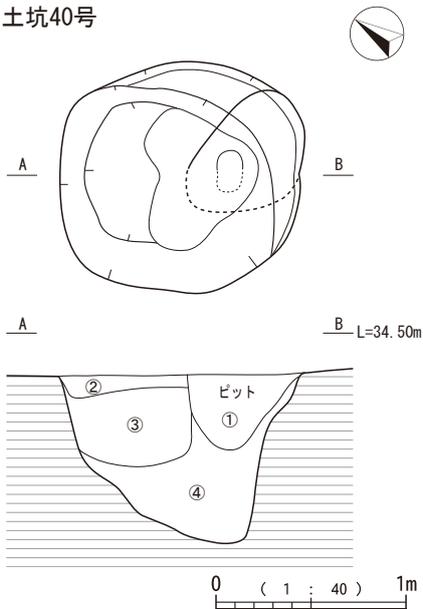


1082

0 (1 : 2) 5cm

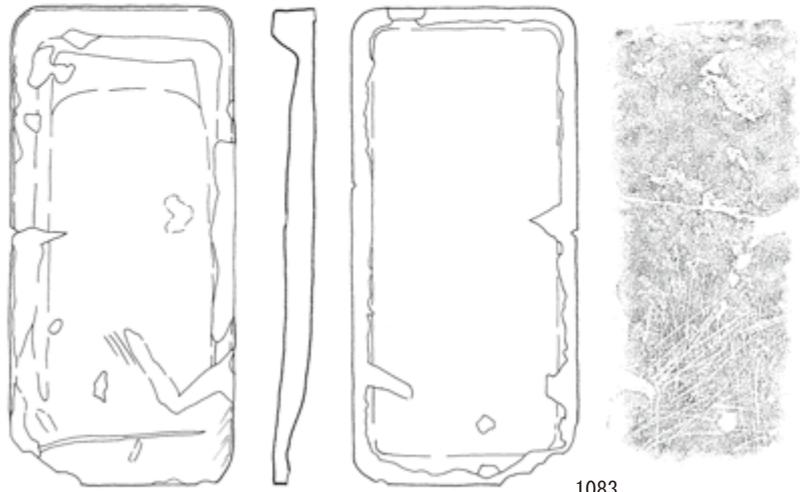
0 (1 : 3) 10cm

土坑40号



土坑40号埋土注記

- ① 灰黄褐色砂質土(10YR 4/2) しまり強く粘性無し
シラスブロックを40%程度含む
- ② 黒褐色砂質土(10YR 3/2) シラスブロックを50%程度、
白色粒子をわずかに含む
- ③ にぶい黄褐色砂質土(10YR 5/3) しまり強く粘性無し
- ④ ①と同じ しまりやや弱く粘性も弱い

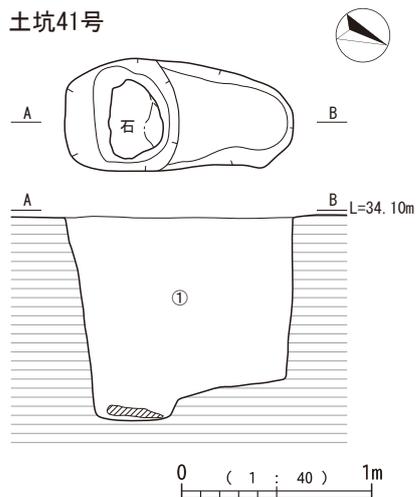


1083

0 (1 : 2) 5cm

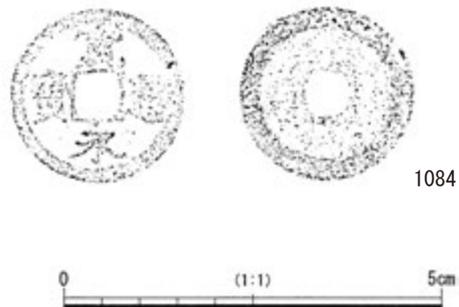
第169図 土坑39・40号・近世遺構内の遺物③

土坑41号

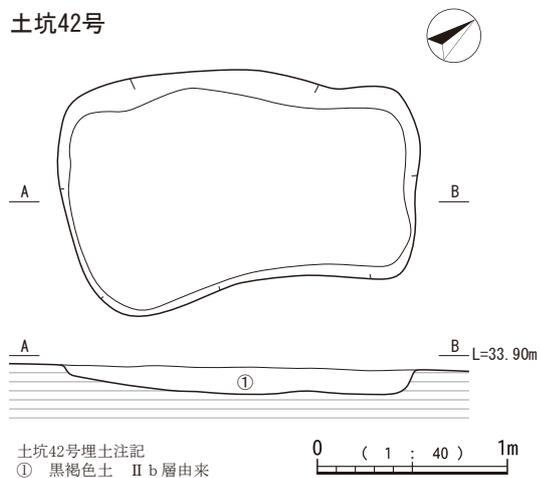


土坑41号埋土注記

- ① 黒褐色砂質土(10YR 3/1) しまり強く粘性弱い
10cm大のシラスブロックを40%程度含む

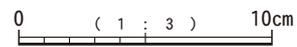
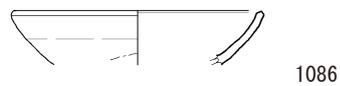
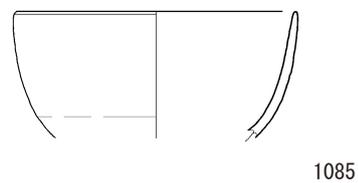


土坑42号

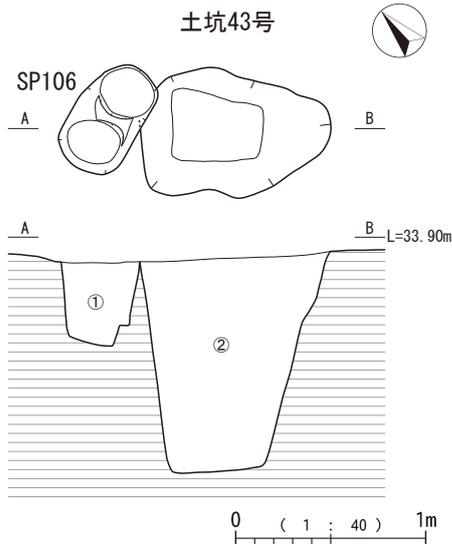


土坑42号埋土注記

- ① 黒褐色土 II b層由来



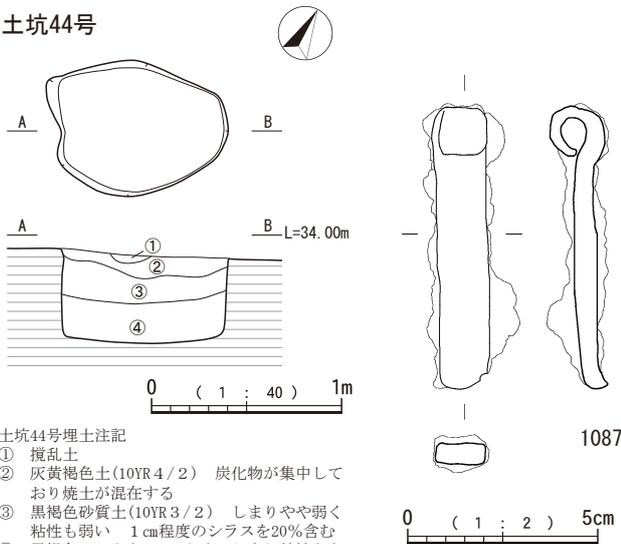
第170図 土坑41・42号・近世遺構内の遺物④



土坑43号埋土注記

- ① 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまり強く粘性無し
白・赤色粒子、炭化物、シラスを各10%程度含む
- ② 灰褐色土(7.5YR 4/2) しまりやや弱く粘性は強い
シラスをブロック状に10%程度含む

土坑44号



土坑44号埋土注記

- ① 攪乱土
- ② 灰黄褐色土(10YR 4/2) 炭化物が集中しており焼土が混在する
- ③ 黒褐色砂質土(10YR 3/2) しまりやや弱く粘性も弱い 1cm程度のシラスを20%含む
- ④ 黒褐色シルト(10YR 3/2) しまり粘性ともに弱い 上面に硬化面をもつ シラスが帯状に入る

第171図 土坑43・44号・近世遺構内の遺物⑤

土遺物および埋土，周辺の状況から近世の土坑とした。規模は，1.23m×0.67mで，検出面からの深さは最深部で0.52mである。小規模ながら遺物が非常に多く出土しており，廃棄土坑として利用されていた可能性がある。

遺物は，瓦質土器1点，須恵器1点，国産陶器9点，白磁1点，青磁1点，染付7点，金属製品4点が出土している。

出土遺物(第172図 1088～1096)

国産陶器5点，白磁1点，青磁1点，金属製品2点を図化した。

1088は，初期伊万里の皿である。見込みには，二重圏線と流水文・水草文が描かれる。全面施釉であるが，畳付は釉剥ぎされ粗い砂粒が付着する。1089は，肥前系染付の蕎麦猪口である。外面には，雨降り文が描かれる。年代は18世紀前半のものと考えられる。1090・1091は，肥前内野山産の銅緑釉碗である。いずれも内面に透明釉，外面に銅緑釉を掛け，腰部以下は露胎する。高台は幅が小さく，直立する。1092は，薩摩焼で，苗代川系堂平窯の播鉢である。口縁部を外側から外側へ折り返してつくる。口唇部は平坦となり貝目が残る。胴部外面には，2条の突帯が巡る。内面の播目は密に入る。年代は17世紀後半～18世紀初前半のものと考えられる。

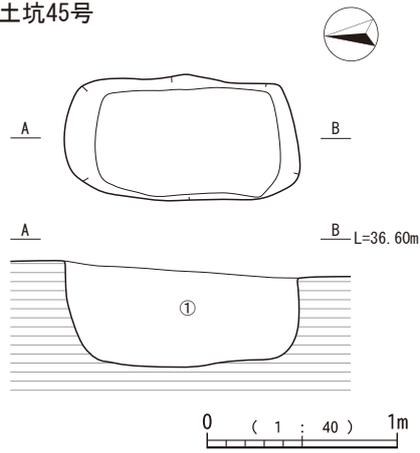
1093は，白磁である。浅形の碗の可能性はある。内外面とも貫入が入る。福建省産で，年代は16世紀半ば～後半にかけてのものと考えられる。

1094は，龍泉窯系の折縁皿である。外面には鎬連弁文を施す。ほぼ水平に開く。内外面とも貫入が入る。歴博分類のⅢ期に該当する。年代は13世紀後半～14世紀前半である。

1095は，銅製煙管の雁首である。皿部の口径は約1.4cmで，首部の湾曲がやや強く，羅宇をつなぐ胴部は長身である。年代は，18世紀後半以降と考えられる。

1096は，銅製の板状素材を折り合わせて内部を中空にし，下端部は圧着して閉じられる。小柄の鞘の可能性はある。

土坑45号



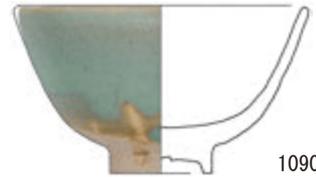
土坑45号埋土注記
 ① 褐色粘質土(7.5YR4/4) しまり粘性ともにやや強い 白・赤色粒子各10%, シラスを30%含む



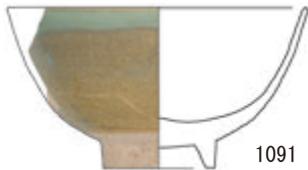
1088



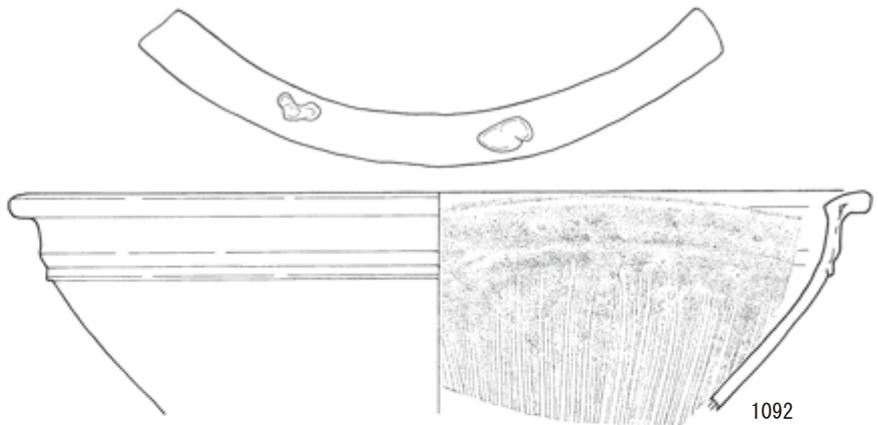
1089



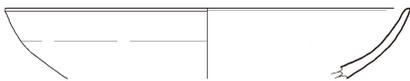
1090



1091



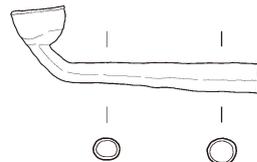
1092



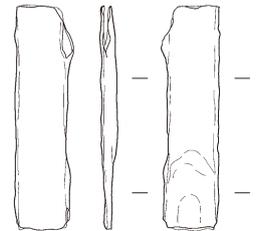
1093



1094



1095



1096

0 (1 : 3) 10cm

0 (1 : 2) 5cm

第172図 土坑45号・近世遺構内の遺物⑥

第37表 近世遺構内出土陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	出土区	出土層	種別	器種①	器種②	器形等	部位	法量 (cm)			絵付・釉薬	外面		内面		胎土の色調	時期	産地	備考	
										口径	底径	器高		施釉部分	無釉部分	施釉部分	無釉部分					
167	1073	掘立柱建物跡1号	G	73	I	肥前陶器	鉢	中鉢	平形	口縁部～胴部	(23.6)	-	-	外面 鉄釉 内面 鉄釉	にぶい黄橙	灰黄	にぶい黄橙	-	灰黄褐	17c 後半～18c 前半	肥前系	武雄産 玉縁状口縁 外面 白化粧土刷毛目波文 内面 白化粧土刷毛目
	1074	掘立柱建物跡1号	G	73	I	白磁	碗	-	端反形	口縁部～胴部	-	-	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	14c 後半～15c 初	福建省	腰部以下露胎
	1075	掘立柱建物跡1号	G	73	I	白磁	碗	-	折縁形	口縁部～高台盤	-	-	-	透明釉	灰白	灰白	-	灰白	15c 前半～中葉	福建省	外面腰部下半露胎	
168	1076	土坑37	I	46	II b	青花	皿	-	-	胴部～底部	-	6.0	-	具須透明釉	明緑灰	にぶい黄橙	明緑灰	-	灰白	16c 後半～17c	漳州産系	底部接地面輪割ぎ、砂付着 見込「日」の字・圏線 「日」の字風風文
	1077	土坑37	I	46	II b	青花	碗	-	-	胴部～高台	-	5.0	-	具須透明釉	明緑灰	灰白	明緑灰	-	灰白	15c 後半～16c 前半	福建省	外面 アラバスク文 高台二重圏線 見込花文 内外面貫入
169	1078	土坑37	F	47	-	土師器	坏	-	-	胴部～底部	-	8.0	-	-	-	橙	-	橙	橙褐灰	14c 後半～15c 前半		糸切り底
	1079	土坑39	F	47	-	染付	瓶	德利?	-	肩部～腰部	-	-	-	具須透明釉	灰白	-	灰白	にぶい黄橙	灰白	17c	肥前系	外面?文 内面露胎
	1080	土坑39	F	47	-	薩摩焼	碗	仏飯器	丸形	口縁部～胴部	(8.0)	-	-	鉛釉	褐	灰白	にぶい黄褐	-	浅黄橙	17c 後半	加治木・始良系	外面胴部下半露胎
	1081	土坑39	F	47	I	白磁	碗	-	端反形	口縁部～高台	-	(4.6)	-	透明釉	灰白	にぶい黄橙	灰白	-	灰白	12c 後半～13c 前半	福建省	高台見込露胎 見込圏線
170	1085	土坑42	G	47	-	肥前陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～胴部	(11.0)	-	-	透明釉	明黄褐	-	明黄褐	-	浅黄橙	17c 以前半?	肥前系	内外面貫入
	1086	土坑42	G	47	-	白磁	皿	小皿	丸形	口縁部～胴部	(10.0)	-	-	透明釉	灰白	明褐灰	灰白	-	灰白	15c 前半～中葉	福建省	外面腰部以下露胎
171	1088	土坑45	F	74	I	肥前磁器	皿	中皿	端反形	口縁部～高台	13.8	5.4	3.9	具須透明釉	明緑灰	浅黄橙	明緑灰	-	灰白	1630～1640年代	肥前系	内側面草文 見込二重圏線流水文・水草文 高台砂付着 内外面貫入
	1089	土坑45	F	74	I	染付	鉢	蕎麦猪口	桶形	口縁部～底部	7.4	-	-	具須透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	18c 前半	肥前系	外面雨降り文・圏線
	1090	土坑45	F	74	I	肥前陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～高台	11.2	4.0	6.7	外面 明緑釉 内面 透明釉	淡緑・にぶい黄緑	灰白	灰黄	-	灰白	17c 後半～18c 前半	肥前系	腰部以下露胎
	1091	土坑45	F	74	I	肥前陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～高台	11.8	4.4	6.4	外面 明緑釉 内面 透明釉	淡緑・にぶい黄緑	灰黄	灰白	-	灰白	17c 後半～18c 前半	肥前系	腰部以下露胎
	1092	土坑45	F	74	I	薩摩焼	鉢	播鉢		口縁部～胴部	(34.0)	-	-	鉄釉	灰オリーブ	にぶい赤褐	灰オリーブ	暗赤灰	にぶい赤褐	17c 後半～18c 前半	苗代川系	堂平塗 外面胴部突帯2条 口縁部貝目
	1093	土坑45	F	74	I	白磁	碗	中碗	丸形	口縁部～腰部	(16.0)	-	-	透明釉	明緑灰	-	明緑灰	-	灰白	16c 後半	福建省	外面鎊連弁文 内外面貫入
	1094	土坑45	F	72	-	青磁	皿	中皿	折縁形	口縁部～腰部	(14.0)	-	-	青磁釉	明緑灰	-	明緑灰	-	灰白	13c 後半～14c 前半	浙江省	内外面貫入

第38表 近世遺構内出土石製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	出土区	出土層	種別	器形等	部位	法量 (cm)			外面色調	内面色調	断面色調	時期	産地	備考	
								長さ	幅	器高							
169	1083	土坑40	F	46 47	I II b下	硯	長方形	-	12.7	5.9	1.1	灰褐	灰褐	灰褐	18c 以降?	赤間系	輝緑凝灰岩 「赤間硯」 四寸硯

第39表 近世遺構内出土金属製品観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土遺構	出土区	出土層	種別	器種	器形等	部位	法量 (cm)				備考	
									長さ	幅	厚	重量		
169	1082	土坑39	F	47	埋土 カタラシ	金属製品	調度品?	-	-	(8.2)	(2.95)	0.9	(8.1)	
171	1087	土坑44	F	48	-	金属製品	?	-	-	(7.6)	(1.3)	(0.6)	(23.3)	
172	1095	土坑45	F	74	I	金属製品	煙管	-	雁首	6.5	1.4	0.8	7.3	
	1096	土坑45	F	74	I	金属製品	小柄鞘?	-	-	(5.9)	1.5	0.5	7.1	

第40表 近世遺構内出土金属製品観察表(2)

挿図番号	掲載番号	出土遺構	出土区	出土層	種別	名称	部位	法量			表面色調	裏面色調	時期	産地	備考	
								口径	底径	厚						
170	1084	土坑41	F	47	-	古銭	寛永通寶	完形	2.4	2.4	0.1	暗青灰	暗青灰	17c 前半以降?		「ス貝寶」古寛永

4 包含層出土遺物

近世の遺物は、Ⅰ層・Ⅱa～Ⅱc層・Ⅲ層から出土した。種別を染付（磁器）、磁器、陶器に大別し、それぞれの器種ごとに記述する。部位、釉薬・胎土の色調、産地等については、観察表参照されたい。

染付

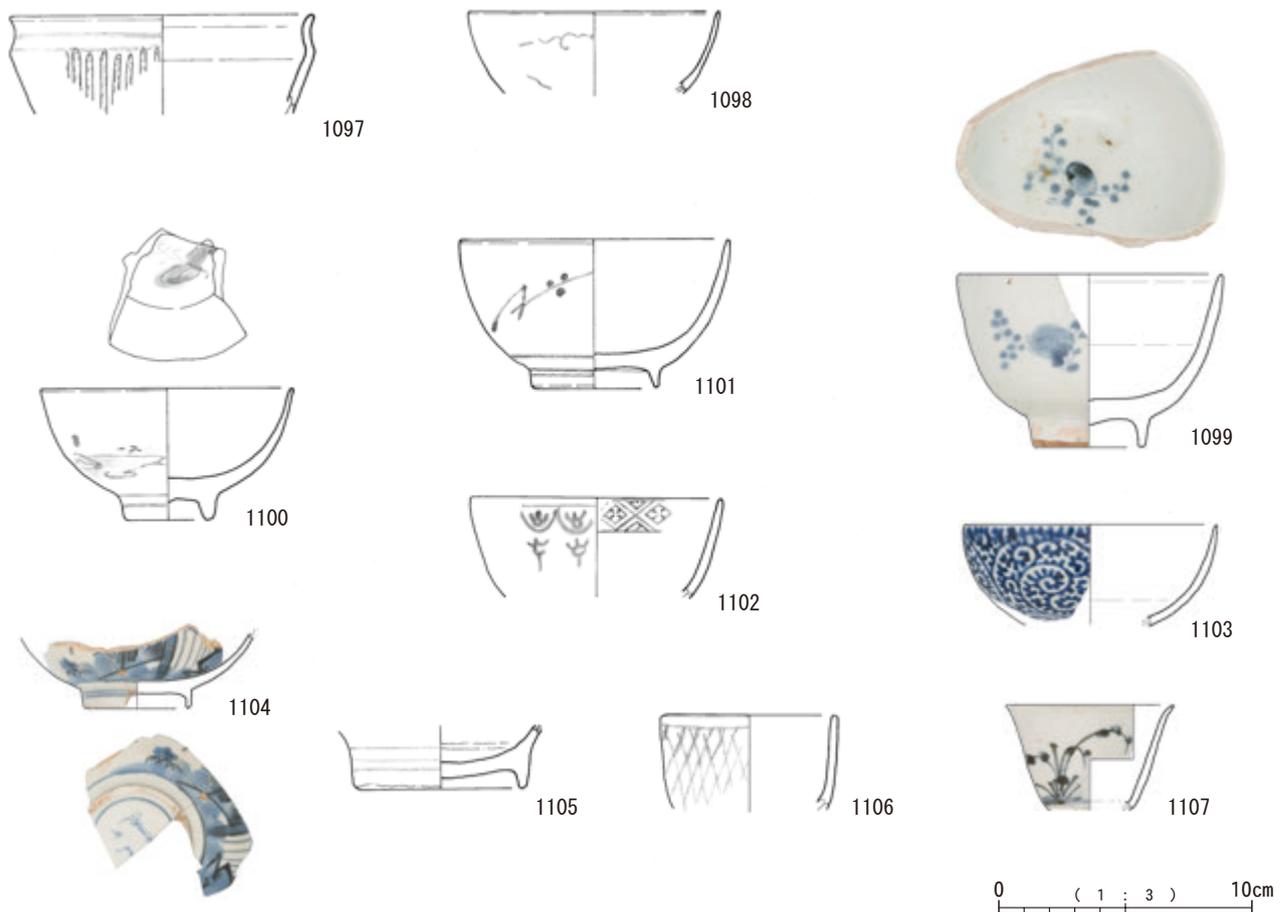
碗・坏（第173図 1097～1107）

1097は、天目形の青磁碗である。胴部にヘラで鏝文を彫り込み、口縁部外面に呉須の二重圏線を描く。1610～1630年代の製作である。1098・1100～1102は丸形、1099は呉器形の中碗である。外面に1098は唐草文、1101は花唐草文、1100は山水青松文と見込みに花文と考えられる文様を描く。1099は、外面と見込みに草花文を描き、高台～高台見込みは露胎する。いずれも17世紀後半以降の製作である。1102は、外面に圏線と瓔珞文、内面に四方嚮文を描く。1750～1790年代の製作である。1103は、半球形の中碗である。薄手の精緻なつくりで、外面に蛸唐草文を描く。1750～1810年代の製作である。1104は、外面に山水家屋文、高台に二重圏線、高台見込みに「大明年製」銘を描く。1105は、広東形中碗で、高台に二重圏線、高台脇に圏線を描く。見込みに輪状の重ね焼き痕が残り砂が付着する。1780～1810年代の製作である。

1106は、腰張形の小碗で外面に圏線と斜格子文を描く。19世紀前半の製作と考えられる。1107は、端反形の小坏で、外面に草花文を描く。17世紀後半～18世紀前半の製作である。

皿（第174図 1108～1122）

1108は、漳州窯産の中皿で、外面と見込みに圏線3条、見込みに青海波文を描く。17世紀以降の所産と考えられる。1109は、折縁形の中皿である。外面に二重圏線、見込みに圏線と花文を描く。1610～1630年代の製作である。1110・1111は、初期伊万里の中皿である。1110は、見込みに圏線と笹文を描く。蛇の目凹形高台で1620～1630年代の製作である。1111は、口縁端部が平坦となり、外面口縁部と見込みに二重圏線を描く。内側面の文様は不詳である。1630～1640年代の製作である。1112は、中皿の底部で、見込みには雲龍文・宝珠が描かれ、砂が付着する。高台見込みに「大明成化年製」銘を描く。1630～1650年代の製作である。1113は、中皿の底部～高台で、見込みに二重圏線と丸文、葉文などを描き、畳付は露胎する。1114は、平形の中皿である。内側面に帆掛船文を描く。1650～1680年代の製作と考えられる。1115は、丸形の中皿で、高台脇・高台・高台見込みに圏線、見込みに圏線と草花文を描く。1650～1690年代の



第173図 近世の遺物①

製作である。1116は、中皿の底部～高台で、高台脇に圏線、高台に二重圏線、高台見込みに圏線と「○徳○製」銘を描き、畳付は露胎する。1650～1680年代の波佐見産である。1117は、中皿で見込みに松文と二重圏線、高台に二重圏線、高台に圏線と「宣○年○」銘を描く。1650～1690年代の製作である。1118は、中皿で見込みに花唐草文、高台見込みに「角福」文を描き、ハリ支え痕が残る。1650～1690年代の製作である。1119は、平形の中皿で、外面に折松葉文と考えられる文様を描く。1660～1680年代の波佐見産である。1120は、丸形の中皿で、高台脇に二重圏線を描く。見込みの文様は不詳で、畳付は露胎する。17世紀後半の製作である。1121は、中皿で腰部に圏線、高台に二重圏線、見込みに二重圏線、高台見込みに「大明年製」銘を描き、畳付は露胎する。1650～1740年代の製作である。1122は、丸形の中皿で、内側面に二重格子文を描く。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、畳付は露胎する。1750～1810年代の製作である。

水滴（第174図 1123）

1123は、水滴である。型押成形で、上面には花文状の陽刻と呉須がみられ、内面は露胎する。

磁器

碗・蓋（第175図 1124～1127）

1124・1125は、丸形の中碗で、1124は内外面にロクロ成形痕が残る。いずれも産地不明である。1126は、朝顔形碗の蓋で、天井部を蛇の目釉剥ぎする。1760～1780年代の製作である。1127は、朝顔形の中碗で、高台脇に2つの弱い段がつき、見込みを蛇目釉剥ぎする。1740～1750年代の製作と考えられる。

坏（第175図 1128～1135）

1128～1135は、小坏である。1128・1132は丸形、1131は杉形、1133は腰張形、1134は端反形、1135は桶形と考えられる。1133は見込みを蛇目釉剥ぎする。1128・1130・1131は釉調に青味があり、薩摩焼の可能性がある。

鉢（第175図 1136～1138）

1136は、鉢として分類した。胴部から口縁部に向けやや外反する。内面には菊花状文を型打ちし、青磁釉を掛ける。製作年代は不明である。1137～1138は、内面に褐色の鉄分状の付着物が認められる。詳細は不明である。

陶器

碗（第176図 1139～1160）

1139は、腰部に稜をもち兜巾高台となる。胴部が斜め上方に延びる天目形と考えられる。長石釉を掛け、高台脇以下は露胎する。見込みに砂目跡が残る。1580～1610

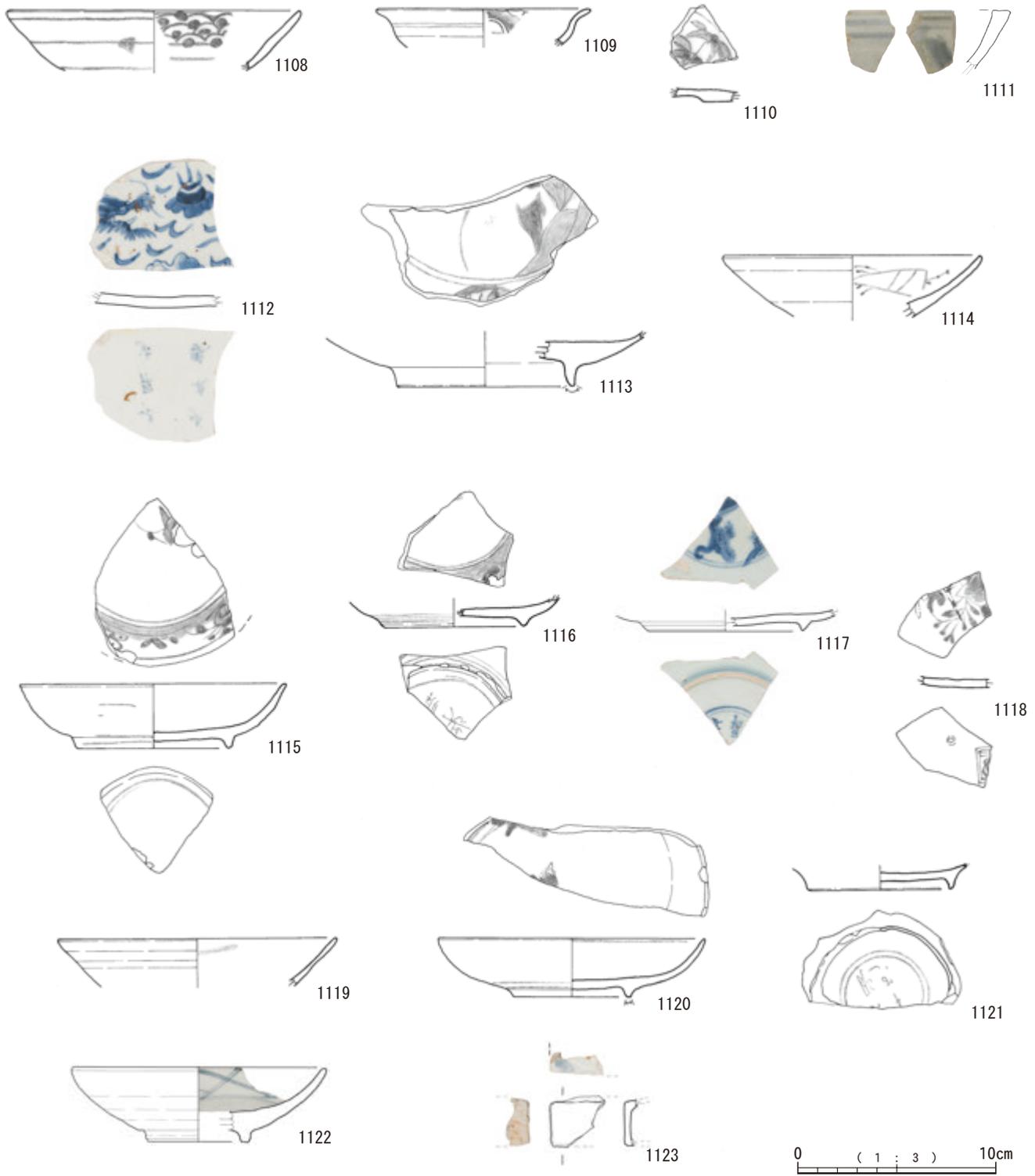
年代の所産である。1140は、高台脇から胴部に幅広に開く器形で、透明釉を掛け、見込みを蛇の目釉剥ぎする。高台脇以下は露胎する。17世紀初めの所産と考えられる。1142は、やや外反する端反碗で高台が高い。鉄釉を掛け、畳付は露胎する。17世紀後半の製作と考えられる。1143～1151は、丸形の中碗である。外面に銅緑釉、内面は、1143・1144・1151が透明釉、1145・1147～1150は銅緑釉、1146は鉄釉を掛ける。高台脇以下は露胎する。1146は、高台畳付に砂が付着する。17世紀後半～18世紀前半の内野山窯産である。1152・1153は、中碗で透明釉を掛け、高台脇以下は露胎する。1154は、外面に灰釉、内面に透明釉を掛ける。外面の釉薬は一部まだら状で、高台の一部を除き施釉する。17世紀後半の製作である。

1157は、京焼の丸形小碗で、透明釉を掛け、高台脇以下は露胎する。18世紀代の所産と考えられる。1155・1156は京焼風の小碗である。透明釉を掛け、高台脇以下は露胎する。17世紀後半の所産である。

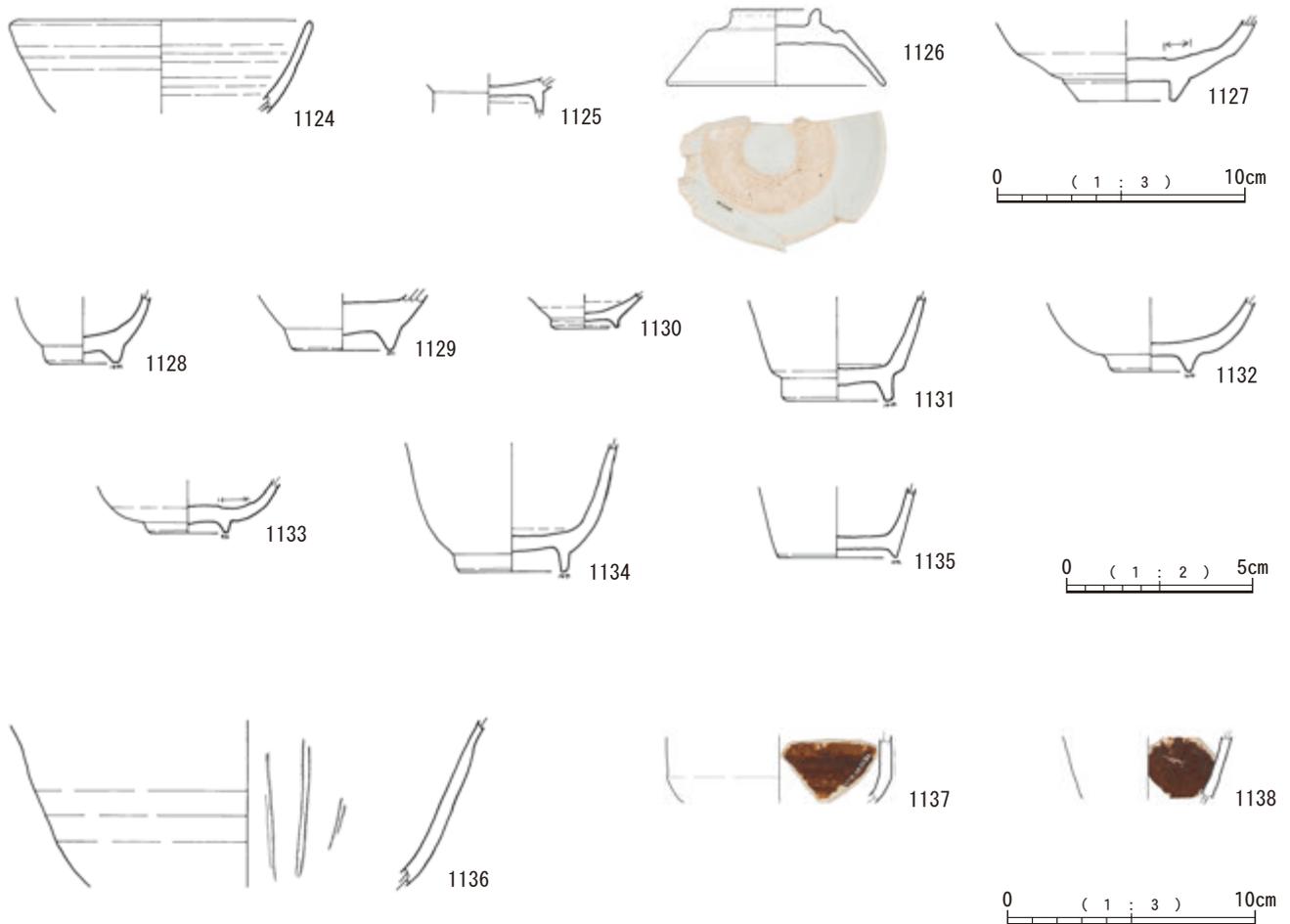
1158・1159は、薩摩焼の中碗である。1158は、白薩摩で器面に細かい貫入が入る。18世紀代の所産と考えられる。1159は、褐釉を掛け、高台脇以下は露胎する。19世紀代の加治木・始良系産である。1160は、露胎で、高台脇に沈線を1条巡らす。産地は不明である。

皿（第177図 1161～1180）

1161～1180は肥前陶器である。1161は、小皿で、見込みに鉄絵の植物文を描く。灰釉を掛け、腰部以下は露胎する。器面全体に貫入が入る。1590～1610年代の製作である。1162・1163は稜花形（なぶり皿）の小皿である。長石釉を掛け、見込みに胎土目が残る。兜巾高台で、1590～1610年代の製作である。1164～1169は溝縁皿で、「く」字状に外反する口縁部に溝を巡らす。1164・1165は見込みと高台見込みに砂目残り、兜巾高台となる。1165は腰部に砂が付着し、1165は全面に施釉する。1164・1165は17世紀初頭～1630年代、1166～1168が1630年代、1169は17世紀前半の製作である。1170は、端反形の皿で、灰釉を掛け、腰部以下は露胎する。17世紀前半の製作である。1171は、中皿で灰釉薬を掛け、見込みに胎土目が残る。胴部下半以下は露胎する。17世紀前半の製作である。1172は、内野山窯産の中皿で、外面は無釉で内面に鉛釉を掛ける。見込みを蛇の目釉剥ぎする。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1173は、丸形の中皿と考えられる。鉄釉を掛け、内面は刷毛目状に釉薬を掻き落とす。17世紀頃の所産である。1174は、三島手の大皿である。見込みに白化粧土で菊花文を象嵌し、鉄釉を掛ける。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1175は、折縁形の大皿で、見込みに白化粧土で印花文を象嵌し、透明釉を掛ける。17世紀後半の製作である。1176は、大皿で見込みに白化粧土で印花文を象嵌し、



第174図 近世の遺物②



第175図 近世の遺物③

鉄釉を掛ける。胎土目が残る。17世紀後半の製作である。1177は、折縁形の大皿で、見込みに白化粧土で圭角連弁文を象嵌し、灰釉を掛ける。18世紀後半の製作である。1178は、玉縁口縁の大皿である。鉄釉を掛け、内面口縁部は横方向、胴部は波状の刷毛目で掻き取る。17世紀後半の製作である。

1179は台付大皿で、高台は弓状の切高台である。見込みに呉須が残り、透明釉を掛け、高台見込みは露胎する。1180は、武雄産の大皿で、内面に白化粧土を掛け、横方向と波状の刷毛目で掻き取り、鉄釉を掛ける。17世紀後半の製作である。

鉢 (第178～180図 1181～1199)

1181～1193は、肥前陶器である。1181・1182は中鉢で、口縁部は「く」の字状に外反する。1181は、外面に透明釉、内面に銅緑釉、1182は、外面に透明釉と口縁部にのみ銅緑釉、内面に透明釉と銅緑釉を掛ける。1183は、外面に銅緑釉、内面に灰釉を掛け、見込みは蛇の目釉剥ぎする。外面の腰部以下は露胎する。1182・1183は、17世紀後半～18世紀前半の内野山窯産である。1184は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、見込みに白象嵌で花唐

草文を描き、褐釉が掛けられる。17世紀後半～17世紀末の武雄産である。1185は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、見込みに白化粧土を掛けて掻き落とし、縞文と刷毛目波文を描く。外面に褐釉・灰釉、内面に褐釉を掛ける。17世紀末～18世紀前半の武雄産である。1186は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、内面に白化粧土を掛けて掻き落とし、縞文を描く。外面に灰釉、内面は緑釉を掛け流す。17世紀後半～18世紀前半の武雄産である。1187は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、白化粧土を掛けて掻き落とし、刷毛目波文を描く。内外面に鉄釉を掛ける。17世紀末～18世紀前半の武雄産である。1188は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、外面の口縁部と内面に鉄釉を掛け、内面に刷毛目波文を描く。17世紀末～18世紀前半の武雄産である。1189は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、褐釉を掛け、内面に刷毛目波文が描かれる。17世紀末～18世紀前半の武雄産である。1190は、口縁部が「く」字状となる大鉢で、鉄釉を掛けた後、口縁部に白化粧土を掛け櫛状工具で波文を描く。17世紀末～18世紀前半の武雄産である。1191は、口縁部が「T」字状となる大鉢で、緑釉を掛け、外面に刷毛目波文が描かれる。17世紀後半の武雄産と考えられる。1192は、口



第176図 近世の遺物④

縁部が「く」字状となる大鉢で、外面に鉄釉を掛けた後、白化粧土を掛け、刷毛目波文を描く。17世紀後半～18世紀前半の武雄産である。1193は、中鉢の底部である。鉄釉を掛け、腰部以下は露胎する。17世紀前半～18世紀前半の製作と考えられる。

1194～1199は、薩摩焼の鉢である。いずれも鉄釉を掛ける。1194は、口縁部から胴部にかけて直口気味に立ち上がる。外面口縁部には2条の沈線が巡り、胴部に把手を貼り付ける。口唇部は平坦で釉薬は掻き取られ、貝目が残る。浅型の甕の可能性もある。1195・1196は、口縁部が直口し、口唇部は平坦となる。外面口縁部に2条の沈線が巡る。1197は、胴部上半から口縁部が内湾し、腰部が最大径となる。口唇部は平坦で釉薬が掻き取られ、貝目が残る。1194～1197は、苗代川産で17世紀後半の製作である。1198は、内外面とも腰部まで施釉し、底面に貝目と考えられる痕跡が残る。18世紀～19世紀の製作である。1199は、口縁部を外側に折り曲げた後、内側に折り返して「T」字状とし、端部は丸くおさめる。胴部には4条の突帯が巡る。口縁部と胴部境は露胎となり、釉薬の発色が不良のため焼き損じ品の可能性がある。

播鉢（第181・182図 1200～1224）

1200～1214は、肥前陶器である。1214を除き、口縁部のみ鉄釉を掛ける。轆轤で成形し、糸切り底となる型式である。1200～1202・1204・1205は1630年代、1203が17世紀前半～中頃、1206～1209は1690年代の所産となる。

1200～1203は、口縁部を外側から内側に折り曲げ、口唇端部は内側に突出する。1200～1209は櫛描き播目は引きっぱなしで先端を撫で揃えないのに対し、1210は櫛描き播目の先端を撫で揃える。1201は、口縁部に注ぎ口（片口）がつく。1211は胴部で、内面に1単位約2.5cm、約2mm幅の深い播目を描きする。1212・1213は底部で、約4mm幅の播目を櫛描きする。1214は、播鉢の注口（片口）部である。内外面とも鉄釉・緑釉の順で施釉され、内面に約1mm幅の播目を櫛描きする。17世紀後半～18世紀前半の製作である。

1215は、関西系の玉縁口縁鉢で、青磁釉を掛ける。19世紀代の所産と考えられ、片口の可能性もある。

1216～1224は、薩摩焼の播鉢である。いずれも鉄釉を掛け、口唇部の釉薬を掻き取る。1216～1218は、苗代川堂平窯産である。1216・1217は、口縁部を外側から内側へ折り返して「く」字状とし、胴部に2～3条の沈線を巡らす。1216は、内面に1単位約1cm幅に約2mm幅の播目を5条櫛描きする。1218は、口縁部を内側から外側に折り返して肥厚させ、胴部に2条の突帯を巡らす。いずれも17世紀後半の製作である。1219・1220は、口縁部を外側へ折り曲げて肥厚させ、1219は「T」字状、

1220・1221は「く」字状とし、胴部に2条の突帯を巡らす。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1222は、口縁部を内側から外側へ折り曲げて逆「L」字状とする。内面の播目は、約3mm幅で縦横方向に櫛描きする。19世紀の製作である。1223・1224は胴部～底部である。1223は、内面に1単位約1.2cmに約2mm幅の播目を櫛描きする。17世紀後半の製作である。1224は、約3mm幅の播目を櫛描きする19世紀の製作である。

香炉（第183図 1225～1235）

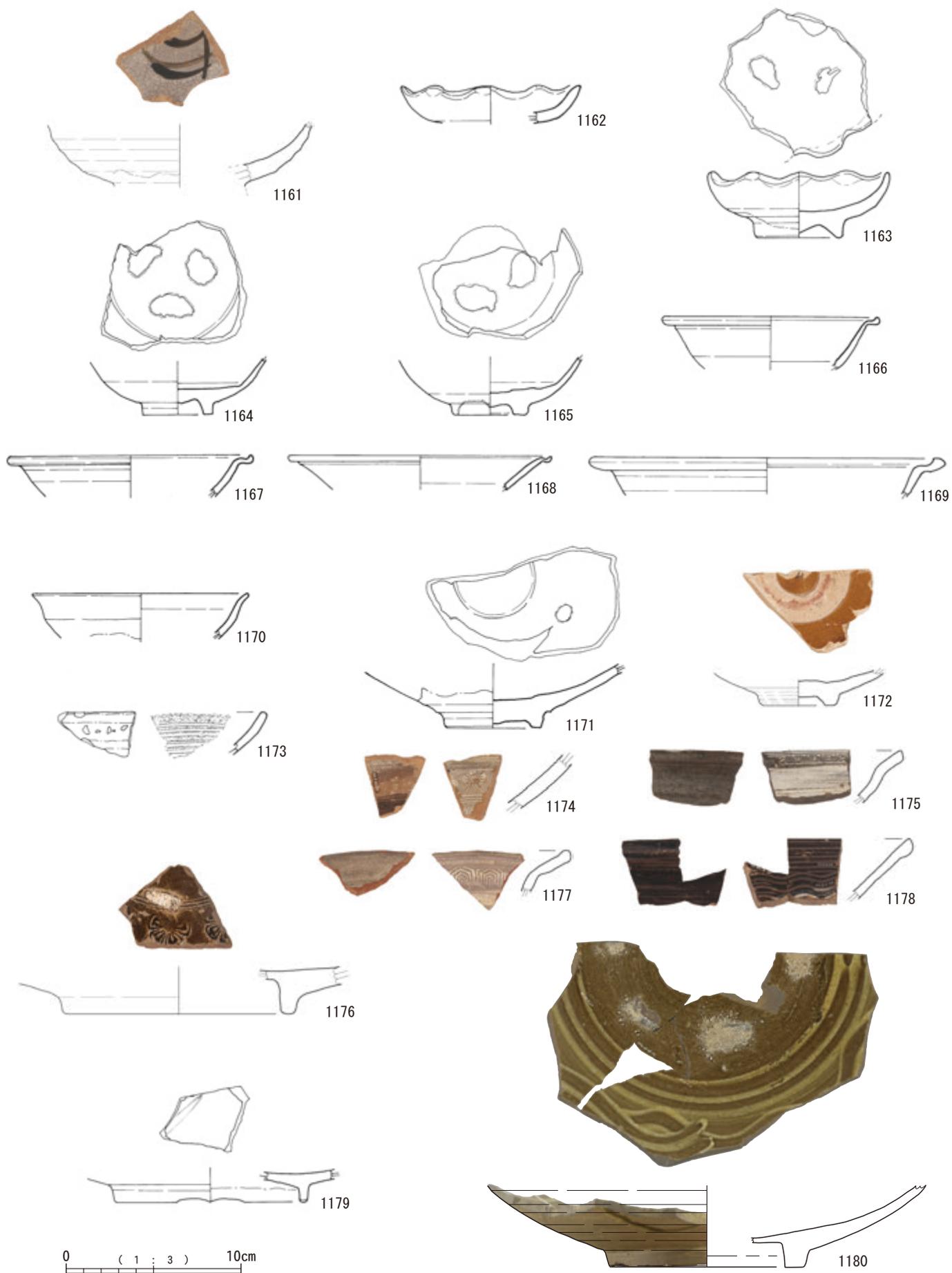
1225～1231は、肥前陶器の香炉である。1225は、鼎形で口縁部は外側へ折り返され外重ねする。内面は口縁部のみ鉄釉、外面は口縁部～胴部に白化粧土の刷毛目波文を施し、鉄釉を掛ける。いわゆる二彩唐津で17世紀後半～18世紀前半の製作である。1226は、半筒形で、外面高台脇まで胴緑釉を掛けるが発色は不良である。内野山窯産で17世紀後半～18世紀前半の所産と考えられる。1227・1228・1230は、半筒形で口縁部を内側へ折り返し、内折れの逆「L」字状とする。外面に銅緑釉を掛け、内面は口縁部以外は露胎する。17世紀後半～18世紀前半の所産と考えられる。1229は、半筒形で口縁部を内側へ折り返し突出させる。外面に青磁釉を掛け、内面は露胎する。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1231は、外面に銅緑釉が掛かり、腰部以下と内面は露胎する。17世紀後半～18世紀前半の所産と考えられる。1232は、薩摩焼で鼎形である。外面に鉛釉を掛けるが、高台脇以下と内面は露胎する。加治木・始良系元立院窯産の可能性もある。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1233は半筒形で、口縁端は内側へ肥厚し丸みをもつ。外面と内面口縁部に鉄釉を掛ける。1234は、外面に鉄釉を掛け、腰部以下と内面は露胎する。九州産とも考えられるが産地不明で、火入れの可能性も残る。1235は、武雄産の香炉で、口縁部は「T」字状、腰部が外側に張り出して稜をなす。外面胴部に白化粧土を掛けた後、刷毛目波文を描き緑釉を掛ける。17世紀後半の製作である。

仏飯器（第183図 1236・1237）

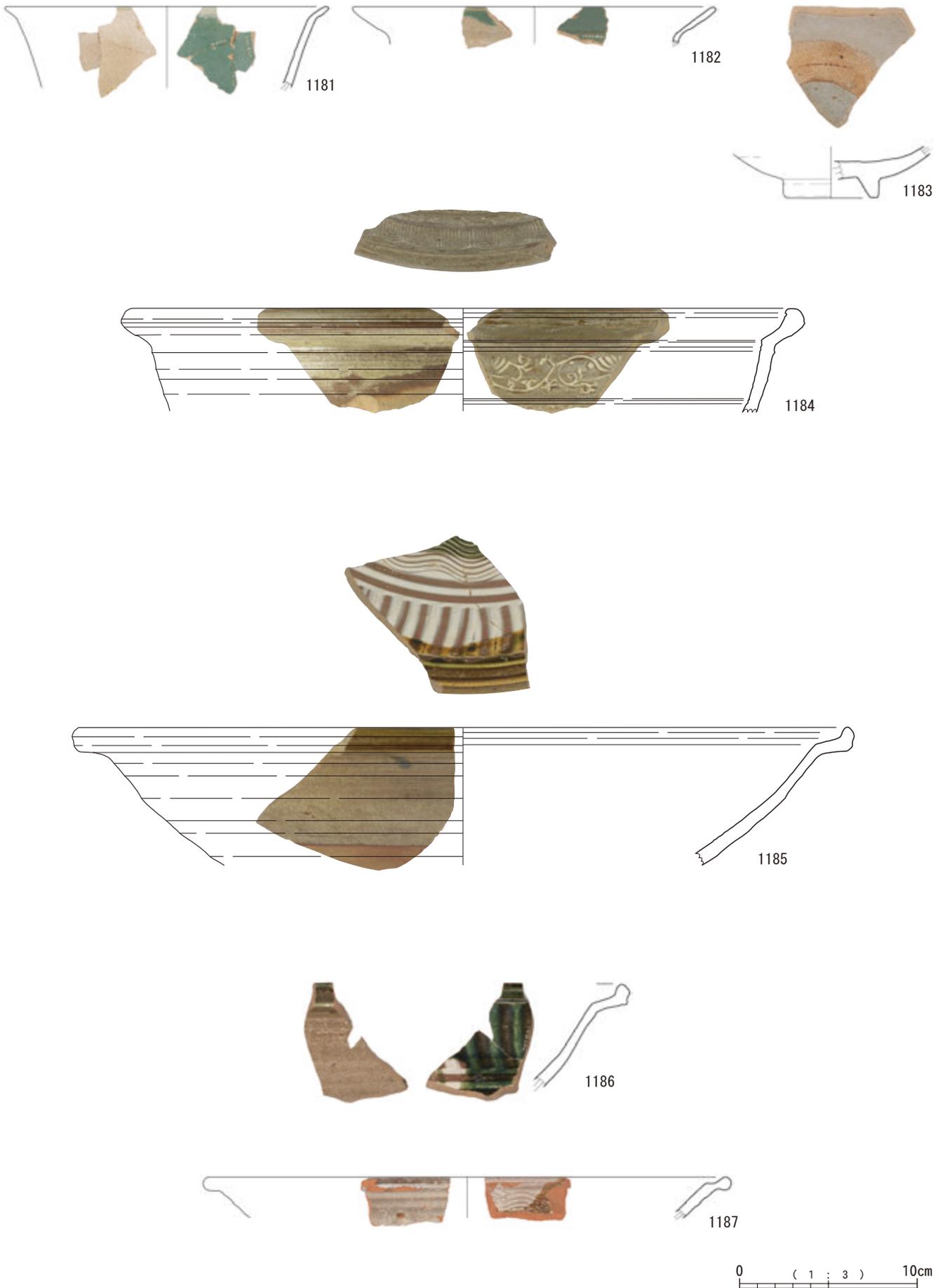
1236・1237は、薩摩焼である。いずれも坏部で、外面のみ鉛釉を掛け、腰部以下は露胎する。17世紀後半～18世紀前半の加治木・始良系と考えられる。

甕（第184・185図 1238～1247）

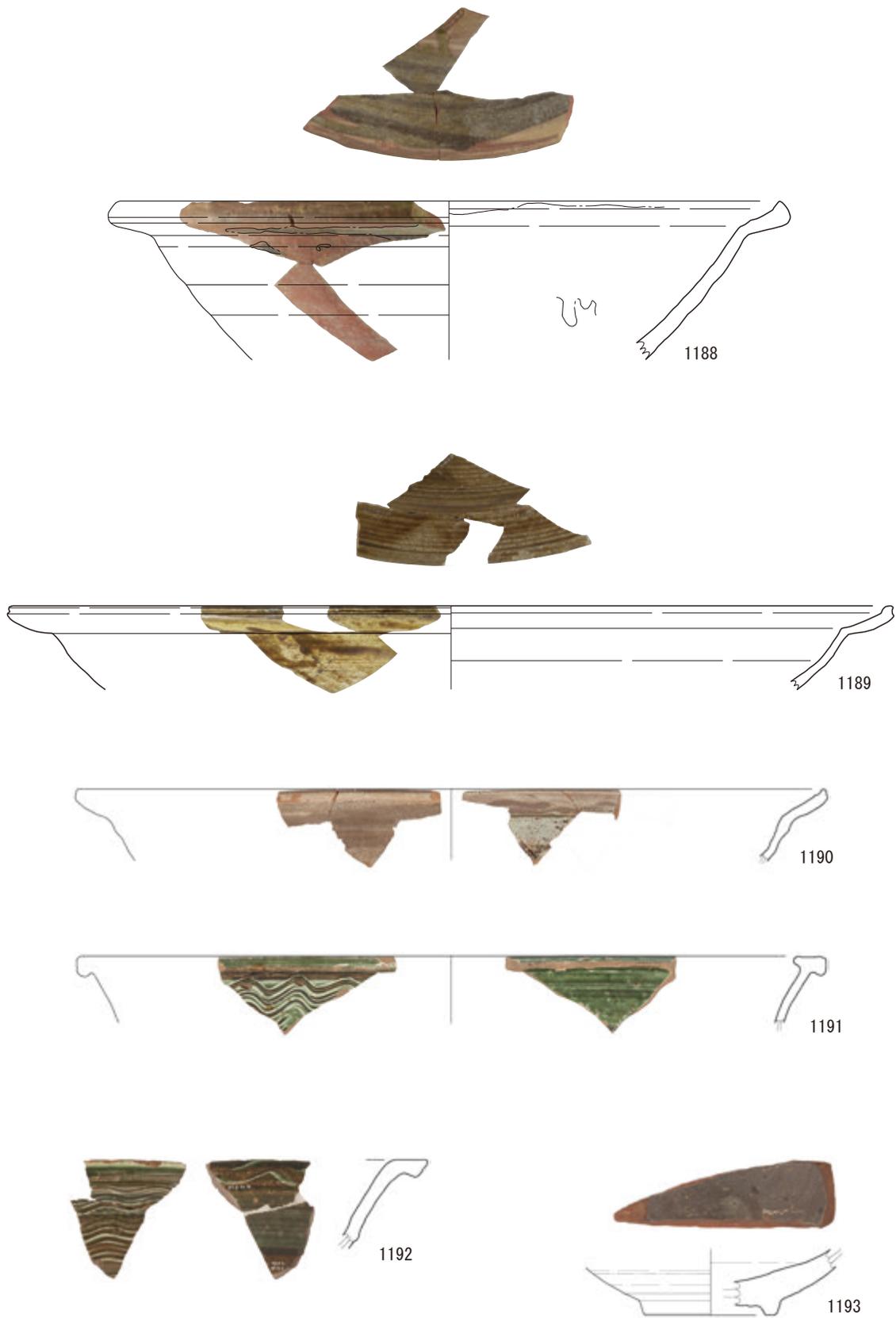
1238～1243は、薩摩焼苗代川産である。いずれも鉄釉を掛ける。1238は肩部突帯の下に縄状突帯が巡ると考えられ、内面に同心円状当て具痕が残る。1239は、肩部に断面三角形突帯と縄状突帯が巡る。内面に同心円状当て具痕が残る。いずれも堂平窯産で1238は17世紀前半、1239が17世紀後半の製作である。1240～1242は、口縁



第177図 近世の遺物⑤

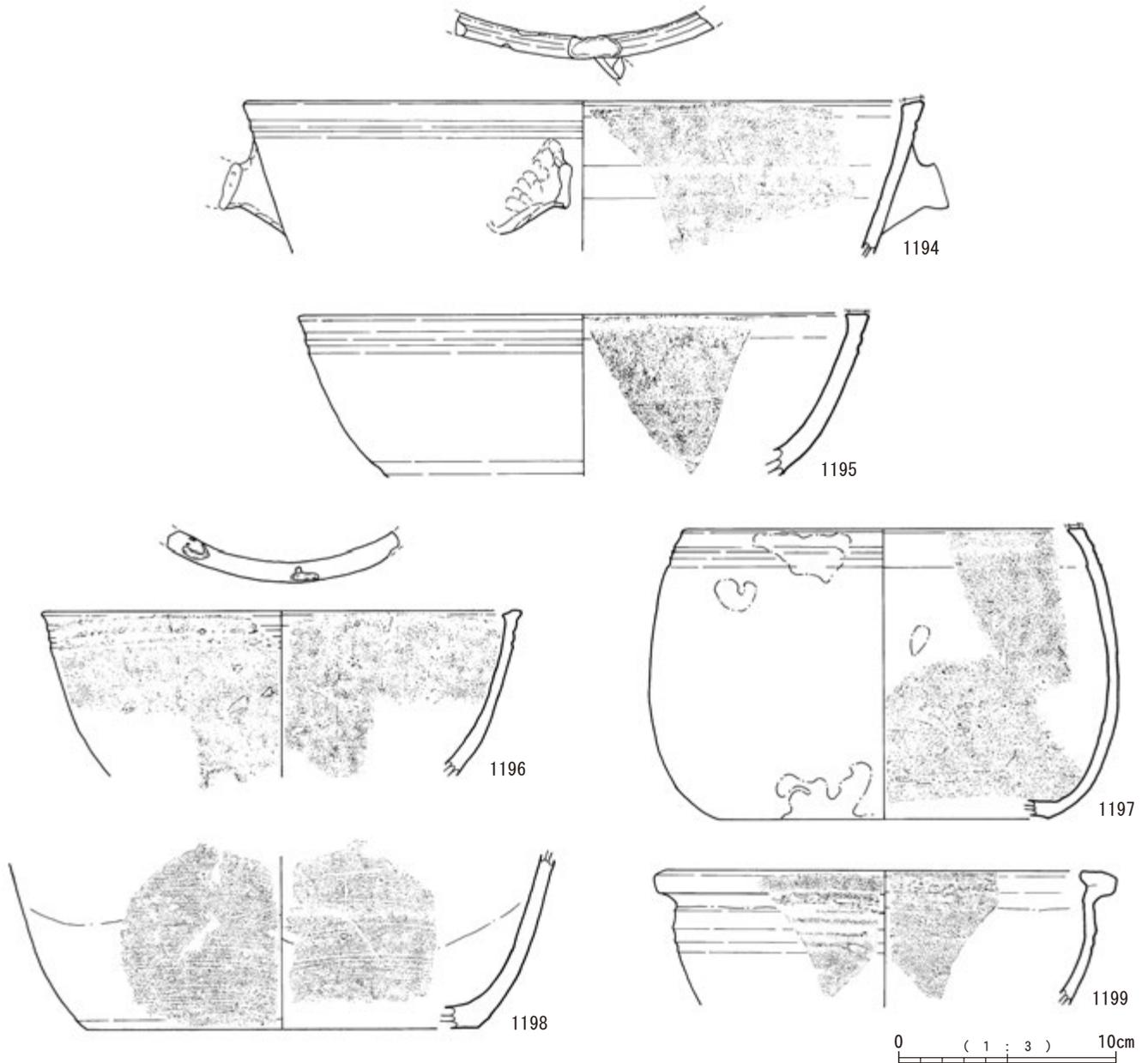


第178図 近世の遺物⑥



0 (1 : 3) 10cm

第179図 近世の遺物⑦



第180図 近世の遺物⑧

部を内側に折り曲げて断面三角形とし、胴部に5条の突帯が巡る。口唇部に貝目が残る。釉薬は掻き取られる。17世紀後半～18世紀前半の製作である。1243は、口縁部を外側に折り曲げて断面「L」字状とする。口縁部には貝目が残る。釉薬は掻き取られる。18世紀後半～19世紀の製作である。

1244は甕の底部と考えられ、底面の釉薬は掻き取られる。1245・1246は、肥前系甕の胴部片と考えられ、内面に格子目当て具痕が残る。1246の格子目は粗い。17世紀前半の可能性はある。1247は、甕の肩部でボタン文を貼りつける。17世紀後半の製作と考えられる。

碗 (第185図 1248)

1248は、玉縁状口縁をもつ半球形の中碗とした。鉄釉を掛け、内外面とも腰部以下は露胎する。17世紀後半の苗代川堂平窯産の可能性もあるが口縁部形状に違いがある。

壺 (第185図 1249)

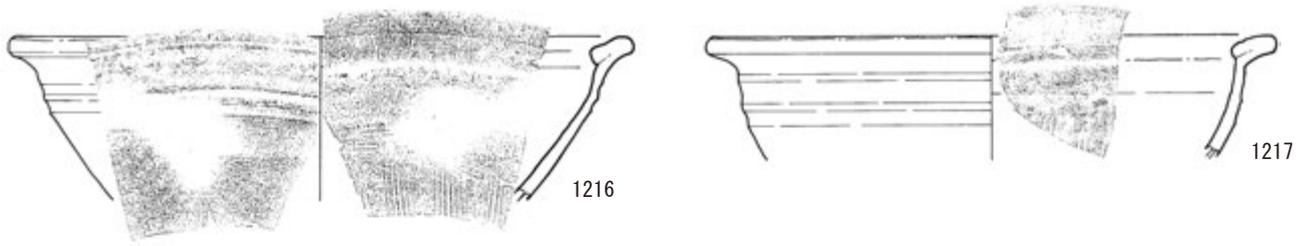
1250は、受け口をもつ胴丸形の小壺である。口縁部を外側に折り、さらに内側に折り返す。外面に鉄釉を掛け、口唇部から胴部の一部、内面は露胎する。堂平窯産に類似し、17世紀代の所産と考えられる。

鍋蓋 (第185図 1250)

1250は、いわゆる山茶家の蓋で、上面のみ鉄釉を掛け



第181図 近世の遺物⑨

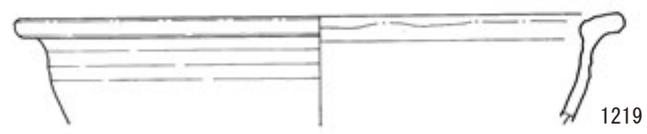


1216

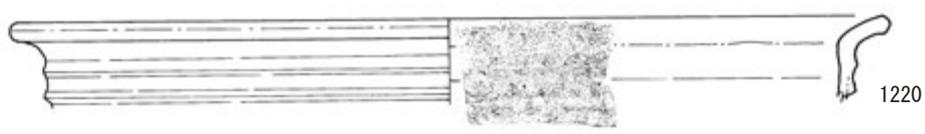
1217



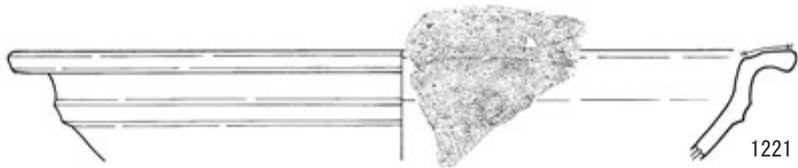
1218



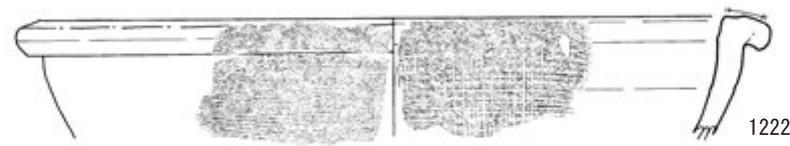
1219



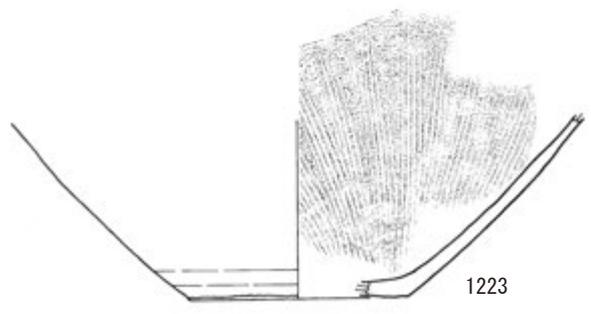
1220



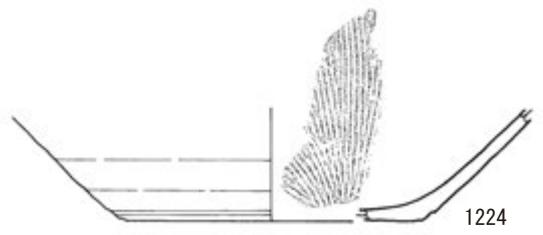
1221



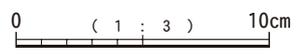
1222



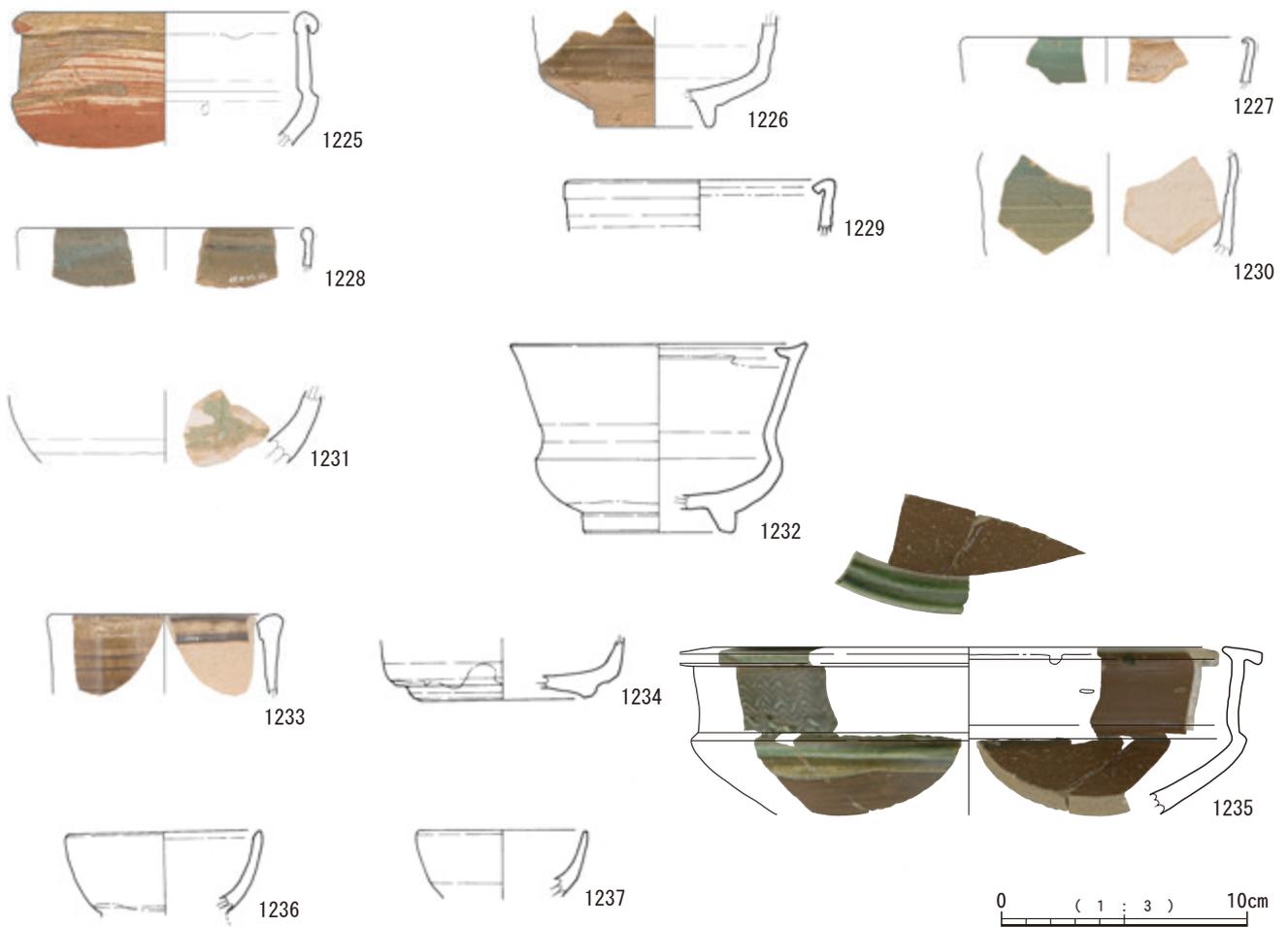
1223



1224



第182図 近世の遺物⑩



第183図 近世の遺物⑪

る。18世紀後半～19世紀の苗代川産である。

鍋 (第185図 1251)

1251は、丸形の土鍋である。外面に鉄釉を掛け、口唇部の釉薬は掻き取り、内面は露胎する。18世紀後半～19世紀の苗代川産である。

瓶 (第185図 1252～1254)

1252～1254は瓶類である。1254は、「鶴首」型の徳利と考えられる。外面に鉄釉を掛け流し、内面の一部にも釉薬が掛かる。1253は底部で、内外面に鉄釉を掛け、底面には砂が付着する。焼き歪んで上げ底状となる。いずれも17世紀後半の苗代川堂平窯産である。1254は、鉄釉を掛け、底部は輪高台となる。17世紀後半～18世紀前半の加治木・始良系産と考えられる。

土瓶蓋 (第185図 1255・1256)

126・125は土瓶蓋で、いずれも上面のみ鉄釉を掛ける。18世紀の苗代川産である。

土瓶・急須 (第185図 1257～1261)

1257・1258は、薩摩焼の土瓶である。1257は丸形で、

内外面に鉄釉を掛ける。口唇部の釉薬は掻き取られ、18世紀～19世紀の豎野窯系産と考えられる。1258は、算盤玉形で、胴部上半と内面に鉄釉を掛ける。底部には煤が付着する。18世紀後半～19世紀の苗代川産である。

1259は、沖繩陶器である。外面は沈線・鋸齒状沈線を刻み、緑釉を掛ける。17世紀後半～18世紀の製作と考えられる。1260は、土瓶の注口で、茶止め孔は3つある。鉄釉を掛け、口唇部は釉剥ぎする。18世紀後半～19世紀の苗代川産である。1261は、急須の注口で、透明釉を掛ける。関西系か瀬戸系の可能性がある。

合子蓋 (第185図 1262)

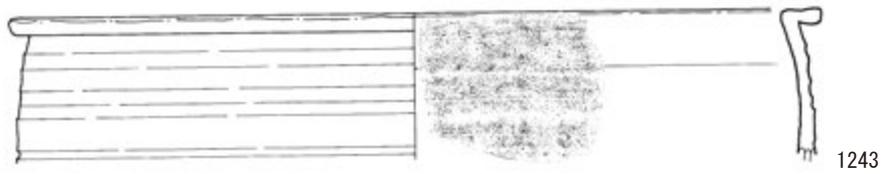
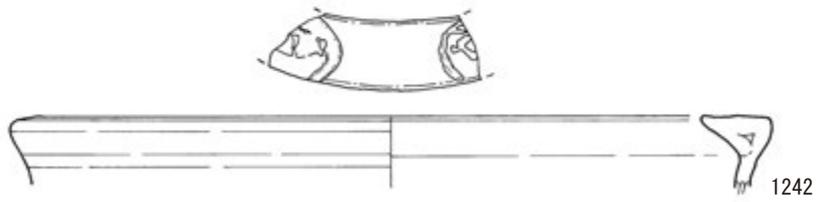
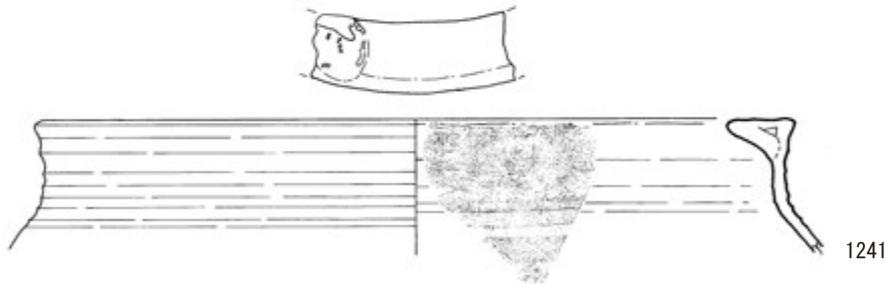
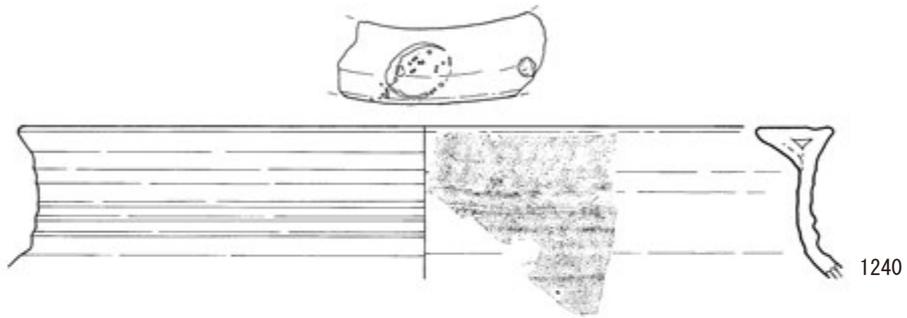
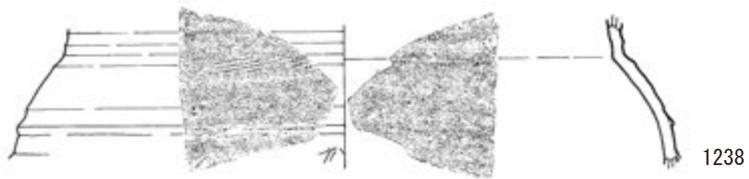
1262は、合子蓋と考えられる。上面に格子目状の文様を型押しし、青磁釉を掛ける。

メンコ (第185図 1263)

1263は、鉄釉を掛けた苗代川産の陶器片を二次加工したメンコである。

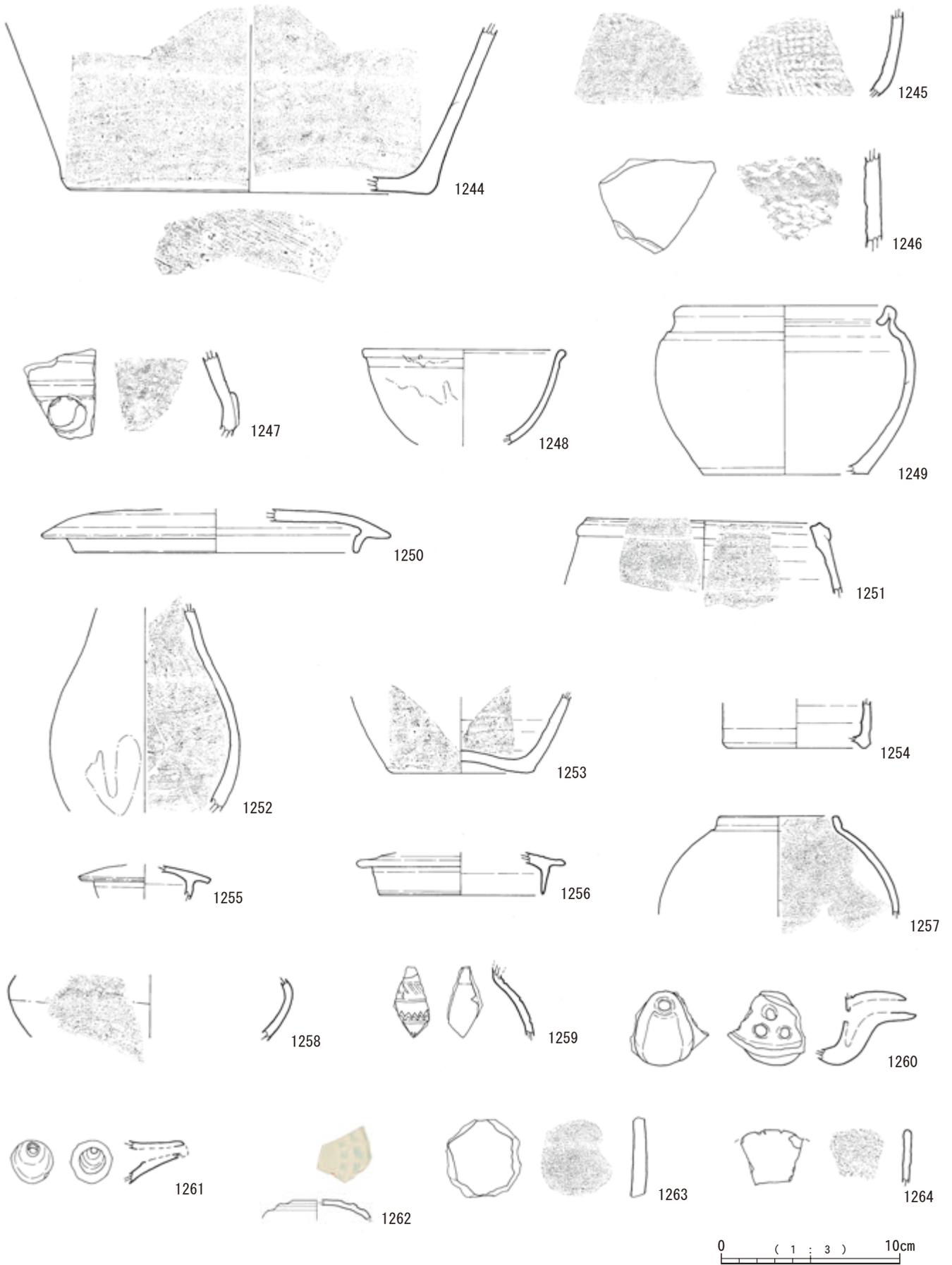
センベイ (第185図 1264)

1264は、窯道具のセンベイ片である。磁器製品とともに持ち込まれた可能性がある。



0 (1 : 3) 10cm

第184図 近世の遺物⑫



第185図 近世の遺物⑬

第41表 近世の遺物(1)

挿図 番号	掲載 番号	出土区	出土層	種別	器種①	器種②	器形等	部位	法量 (cm)			絵付・ 釉薬	外面 施釉部分	外面 無釉部分	内面 施釉部分	内面 無釉部分	胎土の 色調	時期	産地	備考
									口径	底径	器高									
173	1097	H 52-53	I	染付	碗	中碗	天目形	口縁部 ~胴部	(12.0)	-	-	呉須 青磁釉	明緑灰	-	明緑灰	-	灰白	1610 ~ 1630年代	肥前系	外面口縁部二重圏線 胴部銘文
	1098	D・E 50-51	I	染付	碗	中碗	丸形	口縁部 ~腰部	(10.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 後半~	肥前系	外面唐草文 外面貫入
	1099	E 46	IIb 蒔込み	染付	碗	中碗	呉器形	口縁部 ~高台	(10.4)	3.6	5.3	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 後半~	肥前系	外面・見込草花文? 高台~壺付・高台見込露胎
	1100	E 46	IIb 蒔込み	染付	碗	中碗	丸形	口縁部 ~高台	(10.0)	3.6	5.3	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 後半~	肥前系	外面山水青松文? 高台圏線 見込花文?
	1101	E 47	-	染付	碗	中碗	丸形	口縁部 ~高台	11.6	5.0	5.9	呉須 透明釉	淡黄	灰白	淡黄	-	浅黄橙	1750 ~ 1790年代	肥前系	外面腰部・高台圏線 胴部花唐文 内外面貫入
	1102	D 50	III	染付	碗	中碗	丸形	口縁部 ~腰部	(10.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	1750 ~ 1790年代	肥前系	外面圏線・環珞文 内側面 四方襷文
	1103	D・E 46	IIb 蒔込み	染付	碗	中碗	半球形	口縁部 ~高台脇	(10.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	1750 ~ 1810年代	肥前系	外面蛸唐草文
	1104	D 50	I・III	染付	碗	-	-	胴部 ~高台	-	(4.3)	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	1680 ~ 1780年代	肥前系	外面山水家屋文 高台二重圏線 高台見込「大明年製」
	1105	H・I 75	I・IIa	染付	碗	中碗	-	底部 ~高台	-	6.4	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	灰白	灰白	1780 ~ 1810年代	肥前系	高台二重圏線 高台脇圏線 内外面貫入 壺付露胎 見込輪状釉剥ぎ・輪状砂付着
	1106	G 44	IIb	染付	碗	小碗	腰張形	口縁部 ~腰部	(6.5)	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	19c 前半	肥前系	外面圏線・斜格子文
	1107	F 49	I	染付	坏	小坏	端反形	口縁部 ~腰部	(6.6)	-	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	外面草花文
174	1108	E 46	蒔込み上	青花	皿	中皿?	-	口縁部 ~胴部	(14.8)	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	17c 以降	漳州窯	外面圏線3条 見込圏線3条・内側面青海波文
	1109	F 57-58	II	染付	皿	中皿	折縁形	口縁部	(14.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	にふい黄橙	1610 ~ 1630年代	肥前系	外面二重圏線 見込圏線梅花文
	1110	E・F 43-45	II	染付	皿	中皿	-	底部	-	-	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	1620 ~ 1630年代	肥前系	見込圏線・笹文 蛇の目凹形高台
	1111	D・E 49	I	染付	皿	-	-	口縁部	(13.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	1630 ~ 1640年代	肥前系	外面口縁部二重圏線 見込二重圏線?文
	1112	H・I 75	-	染付	皿	中皿	-	底部	-	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	1630 ~ 1650年代	肥前系	見込雲文・宝珠文・砂付着 高台見込「大明成化年製」
	1113	E 51	I	染付	皿	中皿	-	胴部 ~高台	-	(9.0)	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 中頃	肥前系	内外面貫入 壺付露胎 見込二重圏線・丸文・葉文
	1114	D 49-51	I・IIb	染付	皿	中皿	平形	口縁部 ~胴部	(13.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	1650 ~ 1680年代	肥前系	内側面帆掛船文
	1115	D 46	IIb 蒔込み	染付	皿	中皿	丸形	口縁部 ~高台	(13.4)	(7.8)	3.3	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰黄	1650 ~ 1680年代	波佐見系	高台脇圏線 高台見込圏線 ハリ支え痕 高台圏線 見込圏線・草花文 壺付露胎
	1116	E 50	I	染付	皿	中皿	-	腰部 ~高台	-	(7.4)	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	1650 ~ 1690年代	肥前系	高台脇圏線 高台二重圏線 高台見込圏線「〇徳〇製」 壺付露胎
	1117	H・I 75	IIa	染付	皿	中皿	-	腰部 ~高台	-	(7.8)	-	呉須 透明釉	明緑灰	灰白	明緑灰	-	灰白	1650 ~ 1690年代	肥前系	高台二重圏線 高台見込「宣〇年〇」 見込松文・二重圏線 壺付露胎
	1118	E 50	I	染付	皿	中皿	-	底部	-	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	1650 ~ 1690年代	肥前系	見込花唐草文 高台見込「角福」 ハリ支え痕 内外面貫入 見込釉薬の途切れ
	1119	E 51	I	染付	皿	中皿	平形	口縁部	(14.0)	-	-	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	1660 ~ 1680年代	波佐見系	内側面折松葉文?
	1120	D・E 49-50	I	染付	皿	中皿	丸形	口縁部 ~高台	(13.5)	6.0	3.0	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 後半	肥前系	高台脇二重圏線 壺付露胎 見込み?文
	1121	G~I 52-53	I	染付	皿	中皿	-	底部 ~高台	-	(7.4)	-	呉須 透明釉	オリーブ灰	-	オリーブ灰	-	灰白	1650 ~ 1740年代	肥前系	腰部圏線・高台二重圏線 高台見込「大明年製」 見込二重圏線 壺付露胎
1122	H・I 75	I	染付	皿	中皿	丸形	口縁部 ~高台	(12.8)	(5.0)	3.8	呉須 透明釉	灰白	灰白	灰白	灰白	灰白	1750 ~ 1810年代	肥前系	内側面二重斜格子文 見込蛇の目軸剥ぎ 外面貫入 壺付露胎	
1123	E 62-63	-	染付	水注	水滴	-	胴部 ~底部	-	-	-	呉須 透明釉	灰白	-	-	灰白	灰白			型押成形 呉須絵・陽刻 内面露胎	
175	1124	DE 49-51	I	磁器	碗	中碗	丸形	口縁部 ~胴部	(12.2)	-	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	灰黄			内外面 ロク口成形痕
	1125	H・I 46-48	IIb	国産 磁器	碗	中碗	-	底部 ~高台	-	-	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白			
	1126	H・I 75	I	肥前 磁器	蓋	-	朝顔形	摘み部 ~底部	(8.8)	3.6	3.1	透明釉	灰白	灰白	灰白	灰白	灰白	1760年~ 1780年代	肥前系	見込蛇の目軸剥ぎ
	1127	F~H 71-73	I	国産 磁器	碗	中碗	朝顔形	胴部 ~高台	-	(4.0)	-	透明釉	黒サビ灰	-	黒サビ灰	灰白	灰白	1740 ~ 1750年代	肥前系	見込蛇の目軸剥ぎ 壺付露胎
	1128	G 47-48	IIb	磁器	碗	小坏	丸形	腰部 ~高台	-	2.0	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白		薩摩焼?	壺付露胎
1129	D・E 49-50	I	磁器	碗	小坏	-	腰部 ~高台	-	2.8	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白		中国産?	壺付露胎	

第42表 近世の遺物(2)

挿図 番号	掲載 番号	出土区	出土層	種別	器種①	器種②	器形等	部位	法量 (cm)			釉薬	外面 施釉部分	外面 無釉部分	内面 施釉部分	内面 無釉部分	胎土の 色調	時期	産地	備 考
									口径	底径	器高									
175	1130	G・H 46	IIb	磁器	碗	小坏	-	腰部～ 高台	-	1.8	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	薩摩焼?	豊付露胎	
	1131	D 50	I・ III	磁器	碗	小坏	杉形	腰部～ 高台	-	3.0	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	薩摩焼?	豊付露胎	
	1132	H・I 75	I	磁器	碗	小坏	丸形	腰部～ 高台	-	2.2	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	灰白	灰白	中国産?	豊付露胎	
	1133	H 52	I	磁器	碗	小坏	腰張形	腰部～ 高台	-	2.2	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	灰白	灰白	中国産?	見込蛇の目軸剥ぎ 豊付露胎	
	1134	G 47	IIb	磁器	碗	小坏	端反形	腰部～ 高台	-	3.0	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	中国産?	豊付露胎	
	1135	G～J 73～76	I	磁器	碗	小坏	桶形	腰部～ 高台	-	3.2	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白		豊付露胎	
	1136	H・I 47・48	II d	肥前 磁器	鉢	-	-	胴部	-	-	-	青磁釉	明緑灰	-	明緑灰	-	灰白	肥前系	内面菊花文	
	1137	G 47・48	IIb	磁器	-	-	-	胴部	-	-	-	透明釉	灰白	-	-	褐	灰白		内面鉄分付着?	
1138	G 47・48	IIb	磁器	-	-	-	胴部	-	-	-	透明釉	灰白	-	-	褐	灰白		内面鉄分付着?		
176	1139	D・E 49～51	I	肥前 陶器	碗	中碗	天目形?	胴部～ 高台	-	5.9	-	長石釉	灰白	浅黄橙	灰白	-	浅黄	1580～ 1610年代	肥前系	見込砂目・貫入 兜山高台 高台脇～高台見込露胎
	1140	D・E 49・50	I	肥前 陶器	碗	中碗	-	腰部～ 高台	-	(4.2)	-	透明釉	灰白	にぶい橙	灰白	にぶい橙	灰白	17c 初	肥前系	見込蛇の目軸剥ぎ 高台脇～高台見込露胎 内外面貫入
	1141	D・E 49・ 50	I	肥前 陶器	碗	小碗	-	胴部～ 高台	-	(5.8)	-	鉄釉	黒褐	-	-	灰白	浅黄	17c	肥前系	鉄釉 内面露胎 高台砂付着
	1142	D・E 49・50	I	肥前 陶器	碗	中碗	端反形	口縁部～ 高台	(10.8)	4.5	6.5	鉄釉	黒褐	明濁灰	黒褐	-	灰白	17c 後半	肥前系	豊付露胎
	1143	E 50	I	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 高台	(11.0)	4.4	6.65	外 銅緑釉 内 透明釉	青緑	-	灰褐	灰褐	にぶい黄橙	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯 腰部～高台見込露胎
	1144	D・E 49～51	I	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 腰部	(15.0)	-	-	外 銅緑釉 内 透明釉	灰緑	-	灰白	-	浅黄橙	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯 高台脇以下露胎
	1145	G 47	I・IIb	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 腰部	(11.0)	-	-	外 銅緑釉 内 銅緑釉	渋緑	灰白	渋緑	-	にぶい黄橙	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯
	1146	D・E 49・50	I	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 胴部	(11.0)	-	-	外 銅緑釉 内 鉄釉	渋緑	明濁灰	褐	-	明濁灰	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯 高台豊付砂付着 高台脇以下露胎
	1147	-	I	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 胴部	(11.0)	-	-	外 銅緑釉 内 銅緑釉	深黄緑 青緑 渋緑	-	深黄緑	-	灰白	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯
	1148	E 50	I	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 胴部	(11.0)	-	-	外 銅緑釉 内 銅緑釉	渋緑	-	渋緑	-	浅黄橙	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯
	1149	E 46	IIb	肥前 陶器	碗	中碗	丸形	胴部～ 高台	-	(4.0)	-	外 銅緑釉 内 銅緑釉	にぶい黄 にぶい黄	灰白	灰白	灰オリーブ	灰白	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯 内面貫入 高台脇以下露胎
	1150	E 46	IIb 落込み	肥前 陶器	碗	中碗	-	胴部～ 高台	-	-	-	外 銅緑釉 内 銅緑釉	にぶい黄	-	にぶい黄	浅黄	浅黄	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯 高台脇～高台見込露胎
	1151	F～H 71～73	I	肥前 陶器	碗	中碗	-	腰部～ 高台	-	(4.5)	-	外 銅緑釉 内 透明釉	ネリブ灰	-	灰黄	-	浅黄	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内野山窯 外面高台脇～高台一部 施釉
	1152	E 49	I	肥前 陶器	碗	中碗	-	胴部～ 高台	-	4.6	-	透明釉	にぶい黄	浅黄	にぶい黄	-	浅黄	17c 後半	肥前系	豊付～高台見込露胎
	1153	H・I 47・48	II d	肥前 陶器	碗	中碗	-	胴部～ 高台	-	4.3	-	透明釉	灰白	浅黄橙	灰白	-	灰白	17c 後半	肥前系	豊付～高台見込露胎
	1154	D～F 47・48	IIb	肥前 陶器	碗	中碗	-	胴部～ 高台	-	5.4	-	外 灰釉 内 透明釉	灰白	浅黄橙	浅黄	-	浅黄橙	17c 後半	肥前系	外面釉薬まだら状 内面貫入 高台豊付～高台内露胎
	1155	E・F 44・45	IIb	陶器	碗	中碗	丸形	口縁部～ 胴部	(12.8)	-	-	透明釉	浅黄	-	黄緑・ 浅黄	-	浅黄橙	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	内外面赤絵 外面折松葉文
	1156	D 50	I・III	肥前 陶器	碗	小碗	-	胴部～ 高台	-	(4.5)	-	透明釉	浅黄	浅黄橙	浅黄	-	浅黄橙	17c 後半～ 18c 前半	肥前系	高台見込露胎
	1157	D 49～51	I	京焼	碗	小碗	丸形	口縁部～ 高台	-	3.0	-	透明釉	浅黄	浅黄	浅黄	-	灰白	18c	京焼	高台脇～高台見込露胎
	1158	F～H 71～73	I	薩摩 焼	碗	中碗	-	胴部～ 高台	-	(5.5)	-	透明釉	浅黄橙	-	浅黄橙	-	浅黄橙	18c	薩摩焼	白薩摩 内外面微細貫入 豊付露胎
1159	H・I 75	I	薩摩 焼	碗	中碗	-	腰部～ 高台	-	5.2	-	褐釉	黄褐	橙	黄褐	橙	橙	19c	加治木 始良系	高台脇～高台見込露胎 見込蛇の目軸剥ぎ	
1160	F 45	IIb下	陶器	碗	-	-	腰部～ 底部	-	(6.2)	-	無釉	-	橙	-	にぶい橙	橙	不明	高台脇施線1条 内外面露胎		
177	1161	D 62・63	I	肥前 陶器	皿	小皿	-	胴部～ 高台脇	-	-	-	灰釉	褐灰	にぶい黄	褐灰	-	にぶい橙	1590～ 1610年代	肥前系	外面腰部以下露胎 見込鉄絵植物文・貫入
	1162	H・I 47・48	II d	肥前 陶器	皿	小皿	稜花形	口縁部～ 腰部	(10.2)	-	-	長石釉	灰白	にぶい黄橙	灰白	-	にぶい黄橙	1590～ 1610年代	肥前系	口縁部稜花(なぶり口)形 見込胎土目積み痕
	1163	D・E 46	IIb	肥前 陶器	皿	小皿	稜花形	口縁部～ 高台	(10.3)	5.0	3.8	長石釉	灰白	にぶい黄橙	灰白	-	にぶい橙	1590～ 1610年代	肥前系	口縁部稜花(なぶり口)形 見込胎土目積み痕3・内外面貫入
	1164	E 46	IIb 落込み	肥前 陶器	皿	中皿	溝縁皿	胴部～ 高台	-	4.0	-	透明釉	灰白	灰白	灰白	-	灰白	17c 初頭～ 1630年代	肥前系	見込・高台豊付砂目積痕3 腰部砂付着 内外面貫入 高台一部～高台見込露胎
	1165	E 46	IIb 落込み	肥前 陶器	皿	中皿	溝縁皿	胴部～ 高台	-	4.2	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	17c 初頭～ 1630年代	肥前系	見込・高台豊付砂目積痕3 全面施釉
	1166	E 46	IIb 落込み	肥前 陶器	皿	中皿	溝縁皿	口縁部～ 胴部	(12.0)	-	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	灰白	1630年代	肥前系	内外面貫入
	1167	E・F 49～51	I	肥前 陶器	皿	中皿	溝縁皿	口縁部～ 胴部	(14.0)	-	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	浅黄	1630年代	肥前系	内外面口縁部貫入
	1168	D・E 49～51	I	肥前 陶器	皿	中皿	溝縁皿	口縁部～ 胴部	(15.0)	-	-	透明釉	灰白	-	灰白	-	灰黄	1630年代	肥前系	内外面貫入
	1169	I 46	IIb	肥前 陶器	皿	中皿	溝縁皿	口縁部	(20.4)	-	-	灰釉	サテ頂	-	サテ頂	-	灰白	17c 前半	肥前系	内外面貫入
	1170	H 47・48	IIc	肥前 陶器	皿	小皿	端反形	口縁部～ 胴部	(12.4)	-	-	灰釉	灰白	-	灰白	-	浅黄	17c 前半	肥前系	腰部露胎

第43表 近世の遺物(3)

挿図番号	掲載番号	出土区	出土層	種別	器種①	器種②	器形等	部位	法量 (cm)			釉薬	外面 施釉部分	外面 無釉部分	内面 施釉部分	内面 無釉部分	胎土の 色調	時期	産地	備考
									口径	底径	器高									
177	1171	G 46	II b	肥前陶器	皿	中皿	-	胴部～高台	-	(5.6)	-	灰釉	灰黄	にふい黄	灰黄	-	浅黄	17c 前半	肥前系	見込胎土目積痕 胴部下半以下露胎
	1172	D・E 49・50	I	肥前陶器	皿	中皿	-	胴部～高台	-	(4.5)	-	外面 無釉 内面 鉄釉	-	にふい黄	褐	浅黄橙	浅黄橙	17c 後半～18c 前半	肥前系	内野山窯 見込蛇の目釉剥ぎ
	1173	H 47	II c	肥前陶器	皿	中皿	丸形	口縁部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	にふい赤	暗赤褐	にふい赤	にふい橙	17c 頃	肥前系	内面釉薬掻き落とし
	1174	F 46	II b	肥前陶器	皿	大皿	-	胴部	-	-	-	外面 鉄釉 内面 鉄釉	黒褐	にふい黄	灰黄褐	-	にふい黄	17c 後半～18c 前半	肥前系	三手手 外面刷毛目？ 見込白象嵌菊文
	1175	G～J 73～76	I	肥前陶器	皿	大皿	折縁形	口縁部	-	-	-	透明釉	黄灰	-	黄灰・灰白	-	黄灰	17c 後半	肥前系	見込白化粧土白象嵌印花文
	1176	H・I 75	-	肥前陶器	皿	大皿	-	底部～高台	-	(13.3)	-	鉄釉	暗褐	-	暗褐	-	にふい褐色	17c 後半	肥前系	見込印花文・胎土目1
	1177	E・F 49～51	I	肥前陶器	皿	大皿	折縁形	口縁部	-	-	-	灰釉	にふい黄	-	灰黄褐	-	にふい赤褐	18c 後半	肥前系	見込白象眼圭角連弁文
	1178	E 46	II b・ I	肥前陶器	皿	大皿	玉縁口縁	口縁部～胴部	-	-	-	灰釉	黒褐	-	黒褐	灰赤	灰褐	17c 後半	肥前系	内面横方向・刷毛目波文
	1179	D・E 47	-	肥前陶器	皿	大皿	台付皿	腰部～高台	-	(11.0)	-	透明釉	オリーブ黄	灰黄	灰オリーブ	-	灰黄色	17c 後半	肥前系	見込具須絵 切高台 高台見込露胎
	1180	G 47	II b・II c	肥前陶器	皿	大皿	-	胴部～底部	-	(11.1)	-	鉄釉	-	灰黄褐	にふい黄	-	灰褐	17c 後半	肥前系	武雄 内面白化粧土刷毛目波文 見込み砂目4
178	1181	D 50	I	肥前陶器	鉢	中鉢	-	口縁部～胴部	(18.2)	-	-	外面 透明釉 内面 黒緑釉	洪緑	-	洪緑	-	浅黄橙	17c 後半～18c 前半	肥前系	内野山窯
	1182	D・E 49～51	I	肥前陶器	鉢	中鉢	-	口縁部	(20.4)	-	-	外面 黒緑釉・透明釉 内面 黒緑釉	深緑	-	深緑	-	浅黄	17c 後半～18c 前半	肥前系	内野山窯 外面口縁部のみ 緑銅釉施釉
	1183	F～H 71～73	I	肥前陶器	鉢	-	-	腰部～高台	-	(5.2)	-	外面 透明釉 内面 鉄釉	灰オリーブ	明褐色	黄灰	浅黄	にふい黄	17c 後半～18c 前半	肥前系	内野山窯 腰部～高台見込露胎 見込蛇の目釉剥ぎ
	1184	H 47・48	II c	肥前陶器	鉢	大鉢	丸形	口縁部～胴部	(38.6)	-	-	褐釉	灰黄	にふい黄	灰オリーブ	-	にふい黄	17c 後半～末	肥前系	武雄 見込白象嵌花唐草文
	1185	D・E 49・50	I	肥前陶器	鉢	大鉢	浅丸形	口縁部～胴部	(44.0)	-	-	外面 灰釉 内面 鉄釉	黄褐 灰黄褐	にふい黄	明褐色 にふい赤	にふい黄	にふい黄	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 見込白化粧土掻き落とし 刷毛目波文
	1186	D・E 49・50	I	肥前陶器	鉢	大鉢	浅丸形	口縁部～胴部	-	-	-	外面 灰釉 内面 鉄釉	灰オリーブ	にふい黄	オリーブ黒	-	にふい黄	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 見込白化粧土掻き落とし
	1187	H・I 46～48	II b	肥前陶器	鉢	大鉢	-	口縁部	(29.5)	-	-	鉄釉	褐灰	-	浅黄橙	褐	橙	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 外面面白化粧土 刷毛目波文
179	1188	E 51	I	肥前陶器	鉢	大鉢	浅丸形	口縁部～胴部	(34.0)	-	-	鉄釉	灰黄褐	にふい黄	暗褐 灰褐	にふい赤	にふい黄	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 内面刷毛目 外面口縁部施釉
	1189	D 50	I	肥前陶器	鉢	大鉢	浅丸形	口縁部～胴部	(44.0)	-	-	褐釉	灰黄褐	-	にふい黄	-	灰黄褐	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 内面刷毛目
	1190	F 47	II b・ I	肥前陶器	鉢	大鉢	浅丸形	口縁部～胴部	(37.2)	-	-	鉄釉	灰黄褐	-	灰白 灰オリーブ	-	にふい黄	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 口縁部白化粧土柳状工具波紋
	1191	D・E 49～51	I	肥前陶器	鉢	大鉢?	-	口縁部～胴部	(37.2)	-	-	緑釉	深緑	-	深緑	灰褐	にふい黄	17c 後半～18c 前半	肥前系	武雄 外面刷毛目波文
	1192	D 50	I・III	肥前陶器	鉢	大鉢	-	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	灰オリーブ	-	灰オリーブ	-	灰褐	17c 末～18c 前半	肥前系	武雄 外面面白化粧土刷毛目波文
	1193	H・I 47・48	II d	肥前陶器	鉢	中鉢	-	底部	-	(6.4)	-	鉄釉	褐灰	にふい黄	暗黄	-	褐	17c 後半～18c 前半	肥前系	外面腰部～高台内面露胎
180	1194	E 46	落込み 下・II b	薩摩焼	鉢	大鉢	直口口縁	口縁部～胴部	(31.2)	-	-	鉄釉	オリーブ 灰オリーブ	-	オリーブ黄	-	褐	17c 後半	苗代川系	堂平窯 口縁部沈線2条 口唇部貝目・釉薬掻き取り
	1195	H・I 75	I	薩摩焼	鉢	大鉢	直口口縁	口縁部～胴部	(26.1)	-	-	鉄釉	灰褐	-	オリーブ黒	-	灰黄	17c 後半	苗代川系	堂平窯 口縁部沈線2条 口唇部釉薬掻き取り
	1196	D・E 46	II b・ II b下	薩摩焼	鉢	中鉢	直口口縁	口縁部～腰部	(22.0)	-	-	鉄釉	黄灰	-	灰オリーブ	-	灰褐	17c 後半	苗代川系	堂平窯 口縁部沈線2条 口唇部貝目・釉薬掻き取り
	1197	D・E 49	I	薩摩焼	鉢	中鉢	-	口縁部～底部	(18.5)	(15.0)	13.4	鉄釉	黒褐	にふい黄	黒褐	にふい赤	赤灰	17c 後半	苗代川系	堂平窯 口縁部沈線3条 口唇部口唇部釉薬掻き取り 外面内面部分的に露胎
	1198	H・I 75	I	薩摩焼	鉢	-	-	胴部～底部	-	(18.0)	-	鉄釉	灰オリーブ	赤褐	灰オリーブ	にふい赤	にふい赤	18c～19c	苗代川系	底面貝目？ 外内面腰部以下露胎
	1199	D・E 49・50	I	薩摩焼	鉢	中鉢	片口？	口縁部～胴部	(21.6)	-	-	鉄釉	灰	にふい黄	灰	にふい黄	灰白	17c 後半	苗代川系	胴部突帯4条 口唇部釉薬掻き取り 口縁部と胴部境は露胎
181	1200	E 46	II b	肥前陶器	鉢	擂鉢	-	口縁部～胴部	(30.0)	-	-	鉄釉	にふい黄	にふい黄	にふい黄	にふい黄	にふい黄	1630年代	肥前系	外面内面口縁部以下露胎 約2.5mm 幅の飾目
	1201	H・I 47・48	II d	肥前陶器	鉢	擂鉢	-	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	灰褐	にふい黄	にふい黄	灰	1630年代	肥前系	注口 外面内面口縁部以下露胎 約4mm 幅の飾目
	1202	E 50	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	-	口縁部	-	-	-	鉄釉	にふい黄	-	にふい黄	明赤褐	橙	17c 前半～中頃	肥前系	内面口縁部以下露胎
	1203	D・E 50	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	-	口縁部	-	-	-	鉄釉	にふい黄	-	にふい黄	明赤褐	橙	17c 前半～中頃	肥前系	内面口縁部以下露胎
	1204	H・I 75	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	-	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	暗赤褐	-	灰赤	褐灰	1630年代	肥前系	口縁部外面上部と口唇部以外露胎 約3mm 幅の飾目
	1205	I 56	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	-	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	にふい黄	にふい黄	にふい黄	暗赤褐	褐灰	1630年代	肥前系	外面内面口縁部以下露胎 約2mm 幅の飾目
	1206	E 50	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	玉縁口縁	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	灰赤	暗赤褐	灰赤	褐灰	1690年代	肥前系	玉縁口縁 外面内面口縁部以下露胎 約4mm 幅の飾目
	1207	D 50	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	玉縁口縁	口縁部～胴部	(26.2)	-	-	鉄釉	赤黒	にふい黄	赤褐	にふい赤	褐灰	1690年代	肥前系	玉縁口縁 外面内面口縁部以下露胎 約3mm 幅の飾目
	1208	D・E 50	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	玉縁口縁	口縁部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	にふい黄	暗赤褐	にふい赤	にふい赤	1690年代	肥前系	玉縁口縁 外面内面口縁部以下露胎 約3mm 幅の飾目
	1209	D・E 49・50	I	肥前陶器	鉢	擂鉢	玉縁口縁	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐	灰赤	褐灰	1690年代	肥前系	玉縁口縁 口縁～胴部上位端のみ施釉 1単位約2.9cm 幅の飾目 4mm 幅の飾目
1210	G 47	II b	肥前陶器	鉢	擂鉢	玉縁口縁	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	暗赤灰	-	暗赤灰	-	明赤褐	18c	肥前系	約2mm 幅の深い飾目	

第44表 近世の遺物(4)

挿図 番号	掲載 番号	出土区	出土層	種別	器種①	器種②	器形等	部位	法量 (cm)			釉薬	外面 施釉部分	外面 無釉部分	内面 施釉部分	内面 無釉部分	胎土の 色調	時期	産地	備 考	
									口径	底径	器高										
181	1211	-	I	肥前陶器	鉢	播鉢	-	胴部	-	-	-	無釉	-	橙	-	橙	17c 前半~中頃	肥前系	1 単位約25cm、幅2mm 前後の深い脚目 底面糸切底		
	1212	I 74	-	肥前陶器	鉢	播鉢	-	底部	-	(10.0)	-	無釉	-	赤褐	-	橙	17c 前半~中頃	肥前系	内外面露胎 約4mm 幅の脚目 底面糸切底		
	1213	D・E 49・50	I	肥前陶器	鉢	播鉢	-	底部	-	(8.0)	-	鉄釉	-	赤褐	-	赤	明赤褐	17c 前半~中頃	肥前系	玉縁口縁 底面糸切り痕	
	1214	D・F 51~53	I	肥前陶器	鉢	播鉢	-	片口	-	-	-	外面 鉄釉 内面 鉄釉 緑釉	暗赤褐 灰 暗オリーブ 灰	-	灰 暗緑灰	-	にふい橙	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	内面約1mm 幅の脚目	
	1215	H・I 75	I	関西陶器	鉢	片口	玉縁口縁	口縁部	(15.0)	-	-	青磁釉	オリーブ	-	オリーブ	-	にふい黄橙	19c	関西系		
182	1216	E 50	I	薩摩焼	鉢	播鉢	-	口縁部~ 胴部	(24.6)	-	-	鉄釉	灰オリーブ	-	灰オリーブ	赤	赤	17c 後半	苗代川系	堂平窯 1 単位約1cm 約2mm 幅の脚目 内面胴部中位置から脚目 口唇部釉薬掻き取り	
	1217	E 50	I	薩摩焼	鉢	播鉢	-	口縁部~ 胴部	-	-	-	鉄釉	暗灰黄	-	暗 紺緑	オリーブ黒	褐灰	17c 後半	苗代川系	堂平窯 外面胴部沈線2条 口唇部釉薬掻き取り	
	1218	G 45	II b	薩摩焼	鉢	摺鉢	-	口縁部~ 胴部	(28.0)	-	-	鉄釉	暗灰黄	-	黄褐	-	にふい褐	17c 後半	苗代川系	堂平窯 胴部突帯2条 口唇部釉薬掻き取り	
	1219	D・E 49~51	I	薩摩焼	鉢	摺鉢	T字状口縁	口縁部~ 胴部	(24.0)	-	-	鉄釉	オリーブ黒	-	オリーブ黒	-	黄灰	17c 後半~ 18c 前半	苗代川系	胴部突帯2条 口唇部釉薬掻き取り	
	1220	E 46	II b	薩摩焼	鉢	摺鉢	-	口縁部	(34.6)	-	-	鉄釉	オリーブ 灰オリーブ	-	灰オリーブ	-	にふい赤褐	17c 後半~ 18c 前半	苗代川系	胴部突帯2条 口唇部釉薬掻き取り	
	1221	D・E 49・50	I・ II c	薩摩焼	鉢	摺鉢	-	口縁部~ 胴部	(31.0)	-	-	鉄釉	オリーブ黒	-	暗灰黄	-	にふい赤褐	17c 後半~ 18c 前半	苗代川系	胴部突帯2条 口唇部釉薬掻き取り	
	1222	G~J 73~76	I	薩摩焼	鉢	播鉢	逆L字状 口縁	口縁部~ 胴部	(29.6)	-	-	鉄釉	灰オリーブ	-	灰オリーブ	赤褐	明赤褐	19c	苗代川系	口唇部釉薬掻き取り 約3mm 幅の脚目	
	1223	D 51	I	薩摩焼	鉢	播鉢	-	胴部~ 底部	-	(8.4)	-	鉄釉	灰黄	-	灰黄	-	にふい赤褐	17c 後半	苗代川系	1 単位約1.2cm 約2mm 幅の脚目	
	1224	E 50	I	薩摩焼	鉢	播鉢	-	胴部~ 底部	-	(11.8)	-	鉄釉	灰黄褐	-	灰黄褐	-	にふい赤褐	19c	苗代川系	約3mm 幅の脚目	
183	1225	D~F 47・48	II b	肥前陶器	鉢	香炉	鼎形	口縁部~ 腰部	(12.4)	-	-	鉄釉	灰緑	橙	灰緑	橙	橙	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	外面口縁~胴部施釉 内面口縁以下露胎 白化粧土に刷毛目・鉄釉	
	1226	D 50	III	肥前陶器	鉢	香炉	半筒形	胴部~ 高台	-	(4.9)	-	外面 銅緑釉? 内面 銅緑釉	灰オリーブ	にふい黄橙	-	にふい黄橙	にふい黄橙	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	内野山窯 外面高台脇・腰部~高台露胎	
	1227	D・E 49・50	I	肥前陶器	鉢	香炉	半筒形	口縁部	(11.9)	-	-	外面 銅緑釉 内面 銅緑釉	灰オリーブ	-	灰オリーブ	-	浅黄	にふい黄橙	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	内野山窯 内面口縁部以下露胎
	1228	H 45	II b	肥前陶器	鉢	香炉	半筒形	口縁部	(12.0)	-	-	外面 銅緑釉 内面 銅緑釉	灰オリーブ	-	灰オリーブ	-	にふい橙	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	内野山窯 内面口縁部以下露胎	
	1229	F 49・50	I	肥前陶器	鉢	香炉	半筒形	口縁部	(11.0)	-	-	青磁釉	灰白	-	-	にふい橙	灰白	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	内面口縁部以下露胎	
	1230	G 47	II b	肥前陶器	鉢	香炉	半筒形	口縁部~ 胴部	-	-	-	外面 銅緑釉 内面 銅緑釉	緑灰	-	-	灰白	浅黄	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	内野山窯 内面露胎	
	1231	H 44・45	II b	肥前陶器	鉢	香炉	-	胴部	-	-	-	外面 銅緑釉? 内面 無釉	明緑灰	灰白	-	灰白	灰白	17c 後半~ 18c 前半	肥前系	外面腰部以下露胎 内面露胎	
	1232	H 47	II d	薩摩焼	鉢	香炉	鼎形	口縁部~ 高台	(12.0)	(6.2)	7.7	鉛釉	暗褐色	にふい黄橙	-	にふい橙	にふい黄橙	17c 後半~ 18c 前半	加治木 始良系	元立院窯? 高台脇~高台見込・内面露胎 口唇部施釉	
	1233	H・I 75	I	陶器	鉢	香炉?	-	口縁部~ 胴部	(9.6)	-	-	鉄釉	褐	-	黒褐	にふい橙	にふい橙			内面口縁部のみ施釉	
	1234	H・I 75	I	陶器	鉢	香炉・ 火入?	半筒形	腰部~ 高台	-	(6.6)	-	鉄釉	極暗褐	にふい橙	-	にふい橙	にふい橙	17c	九州産?	腰部~高台見込・内面露胎	
	1235	E 50	I	肥前陶器	鉢	香炉	T字状 口縁 腰後形	口縁部~ 腰部	(23.8)	-	-	褐釉 緑釉	洪緑	褐	-	褐	灰褐	17c 後半	肥前系	武雄 外面胴部刷毛目波文	
	1236	G~J 73~76	II a	薩摩焼	碗	仏飯器	丸形	口縁部~ 胴部	(8.0)	-	-	鉛釉	黄褐	にふい黄橙	黄褐	-	浅黄褐	17c 後半~ 18c 前半	加治木 始良系	腰部以下露胎	
	1237	D・E 49・50	I	薩摩焼	碗	仏飯器	丸形	口縁部~ 胴部	(7.0)	-	-	鉛釉	にふい黄橙	-	にふい黄橙	-	浅黄褐	17c 後半~ 18c 前半	加治木 始良系	腰部以下露胎	
184	1238	I 46	II b	薩摩焼	甕	-	-	頸部~ 胴部	-	-	-	鉄釉	暗灰黄	-	にふい黄	-	灰黄	17c 前半	苗代川系	堂平窯 肩部突帯2条 内面当て具痕あり	
	1239	E 50	I	薩摩焼	甕	大甕	-	肩部~ 胴部	-	-	-	鉄釉	灰黄褐	-	暗灰黄	-	にふい橙	17c 後半	苗代川系	堂平窯 肩部突帯2条 下位1条は縄状刻目あり	
	1240	D・E 48	落ち込み -	薩摩焼	甕	中甕	胴部切立形	口縁部~ 肩部	(32.0)	-	-	鉄釉	灰	-	灰黄	-	にふい赤褐	17c 後半~ 18c 前半	苗代川系	胴部突帯5条 口唇部貝目・釉薬掻き取り	
	1241	E 46	II b	薩摩焼	甕	中甕	胴部切立形	口縁部~ 肩部	(30.0)	-	-	鉄釉	灰オリーブ	-	灰オリーブ	-	灰~にふい 赤褐	17c 後半~ 18c 前半	苗代川系	胴部突帯5条 口唇部貝目・釉薬掻き取り	
	1242	F~H 71~73	I	薩摩焼	甕	中甕	胴部切立形	口縁部	(30.0)	-	-	鉄釉	灰オリーブ	-	灰	-	浅黄	17c 後半~ 18c 前半	苗代川系	口唇部貝目・釉薬掻き取り	
	1243	H・I 75	I	薩摩焼	甕	中甕	L字状口縁	口縁部~ 胴部	(32.0)	-	-	鉄釉	オリーブ黒	-	暗赤灰	-	赤褐	18c 後半~ 19c	苗代川系	口唇部貝目・釉薬掻き取り	
185	1244	D・E 49・50	I	薩摩焼	甕	-	-	胴部~ 底部	-	(20.4)	-	鉄釉	褐灰	-	灰黄	-	橙	18c~19c	苗代川系	底部釉薬掻き取り	
	1245	H・I 75	II a	肥前陶器	甕?	-	-	胴部	-	-	-	鉄釉	褐	-	-	灰褐	灰褐	17c 前半~?	肥前系	内面格子目当て具痕・露胎	
	1246	D・E 49・50	I	肥前陶器	甕?	-	-	胴部	-	-	-	鉄釉	褐灰	-	-	にふい黄橙	にふい橙	17c 前半~?	肥前系	内面格子目当て具痕・露胎	

第45表 近世の遺物(5)

挿図 番号	掲載 番号	出土区	出土 層	種別	器種 ①	器種 ②	器形等	部位	法量 (cm)			釉薬	外面 施釉部分	外面 無釉部分	内面 施釉部分	内面 無釉部分	胎土の 色調	時期	産地	備 考
									口径	底径	器高									
185	1247	H 47	II b	肥前 陶器	甕	-	-	肩部	-	-	-	鉄釉	暗赤褐	-	暗赤褐	-	灰褐色	17c 後半	肥前系	肩部ボタン文貼付 内面格子目当て具裏 外内面施釉
	1248	D・E 49・50	I	陶器	碗	中碗	半球形	口縁部～ 腰部	(11.4)	-	-	鉄釉	黒～ 灰オリーブ	に ぶい 黄 橙	黒褐	-	に ぶい 橙	17c 後半?	苗代川系	王縁口縁 腰部以下露胎
	1249	D 50	I	薩摩焼	壺	小壺	胴丸形	口縁部～ 底部	(11.4)	(9.2)	9.5	鉄釉	灰オリーブ	褐	-	灰黄褐	に ぶい 黄 橙	17c	苗代川系	堂平窯 口唇部～胴部の一部・内面露胎
	1250	D・E 49・50	I	薩摩焼	蓋	蓋	鍋蓋	胴部～ 口縁部	(19.4)	(15.9)	-	鉄釉	暗褐	-	-	に ぶい 黄 橙	に ぶい 黄 橙	18c 後半～ 19c	苗代川系	上面施釉 内面露胎
	1251	H・I 75	I	薩摩焼	鍋	土鍋	丸形	口縁部～ 胴部	(13.0)	-	-	鉄釉	オリーブ黒	-	暗オリーブ	に ぶい 橙	に ぶい 橙	18c 後半～ 19c	苗代川系	口唇部釉薬掻き取り 内面露胎
	1252	D・E 49・50	I	薩摩焼	瓶	徳利	-	肩部～ 胴部	-	-	-	鉄釉	灰～ 灰オリーブ	褐	オリーブ黒	灰	灰	17c 後半	苗代川系	堂平窯 外面釉薬掛け流し 内面一部に釉薬
	1253	D・E 49・50	I	薩摩焼	瓶	徳利	-	底部～ 胴部	-	(8.2)	-	鉄釉	暗褐	-	暗褐	-	灰白～褐灰	17c 後半	苗代川系	堂平窯 外内面施釉 底部砂付着
	1254	E 46	II b	薩摩焼	瓶	-	-	底部	-	(7.6)	-	鉄釉	黒褐	-	暗赤褐	-	灰褐	17c 後半～ 18c 前半?	加治木・ 始良系?	輪高台
	1255	D・E 63	IV	薩摩焼	蓋	土瓶 蓋	-	胴部～ 口縁部	(7.6)	-	-	鉄釉	暗オリーブ	-	-	に ぶい 黄 橙	に ぶい 黄 橙	18c	苗代川系	上面施釉
	1256	D・E 49・50	I	薩摩焼	蓋	土瓶 蓋	-	胴部～ 口縁部	(12.2)	(9.0)	-	鉄釉	暗オリーブ	-	-	明赤褐	橙	18c	苗代川系	上面施釉
	1257	H・I 75	I	薩摩焼	瓶	土瓶	丸形	口縁部～ 胴部	(6.6)	-	-	鉄釉	明赤褐	-	灰褐	に ぶい 橙	に ぶい 橙	18c ～ 19c ?	堅野系	口唇部釉薬掻き取り 内面部分的に露胎部分あり
	1258	H・I 75	I	薩摩焼	瓶	土瓶	算盤玉形	胴部～ 底部	(15.8)	-	-	鉄釉	オリーブ黒	に ぶい 黄 橙	灰白	-	に ぶい 黄 橙	18c 後半～ 19c	苗代川系	胴部上半・内面施釉 底部煤付着
	1259	E・F 44・45	II b	沖縄陶器	瓶	土瓶	丸形	口縁部～ 胴部	-	-	-	透明釉 緑釉	灰白	-	灰白	灰白	灰白	17c 後半～ 18c	沖縄系	外面沈線3条・鋸歯状沈線 内面頸部以下露胎
	1260	H・I 75	I	薩摩焼	瓶	土瓶	-	注口	-	-	-	鉄釉	灰褐	-	褐	に ぶい 黄 橙	に ぶい 赤 褐	18c 後半～ 19c	苗代川系	茶止め孔3 口唇部釉剥ぎ
	1261	F 59	III	陶器	瓶	急須	-	注口	-	-	-	透明釉	浅黄	-	-	浅黄	浅黄		関西系・ 瀬戸?	
	1262	E 66	I	陶器	蓋	-	-	胴部	-	-	-	青磁釉	灰・明 緑灰	-	灰・ 明緑灰	-	に ぶい 黄 橙			上面型押し格子目文
	1263	H・I 75	I	薩摩焼	メンコ	-	-	-	4.3	4.1	0.8	鉄釉	灰褐	-	黒褐	-	橙		苗代川	
	1264	G 47	II b	薩摩焼	センベイ	-	-	-	3.5	2.9	4.0	-	-	灰白	-	灰白	灰白			

第6節 製鉄関連遺構

D～F-46～48区で16世紀後半～18世紀前半の製鉄炉4基、土坑12基、竪穴建物1基、炉跡3基、硬化面1か所が検出された。土坑及び竪穴建物跡は、製鉄炉に伴う鞆座や廃棄土坑、作業場と考えられる。製鉄炉が検出された農道西側の調査区を、『製鉄遺構調査区』とする(第186図)。

また、道路を挟んだD・E-49・50区では、炭窯の可能性ある炉跡20基と柱穴約420基を検出した。この調査区を、『炉跡調査区』とする。

この2か所の遺構群は、中世末から近世にかけて連続して構築された製鉄関連遺構群と考えられる。製鉄関連遺構群については、遺構の空間的配置や変遷を一体的に把握するため、本節で調査区別に報告する。

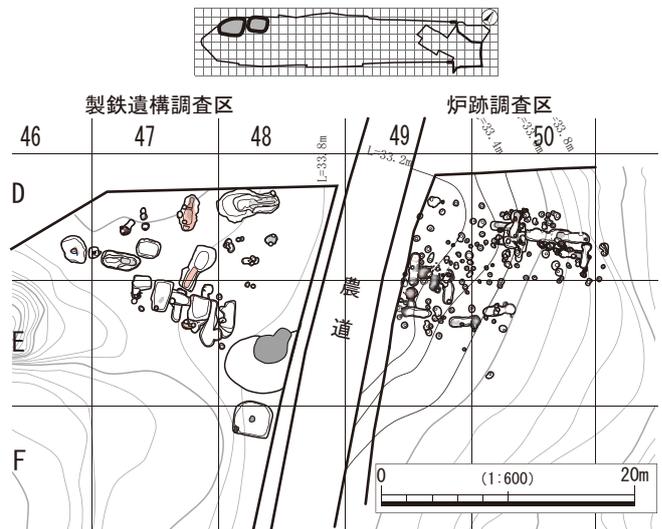
1 製鉄遺構調査区

(1) 製鉄炉

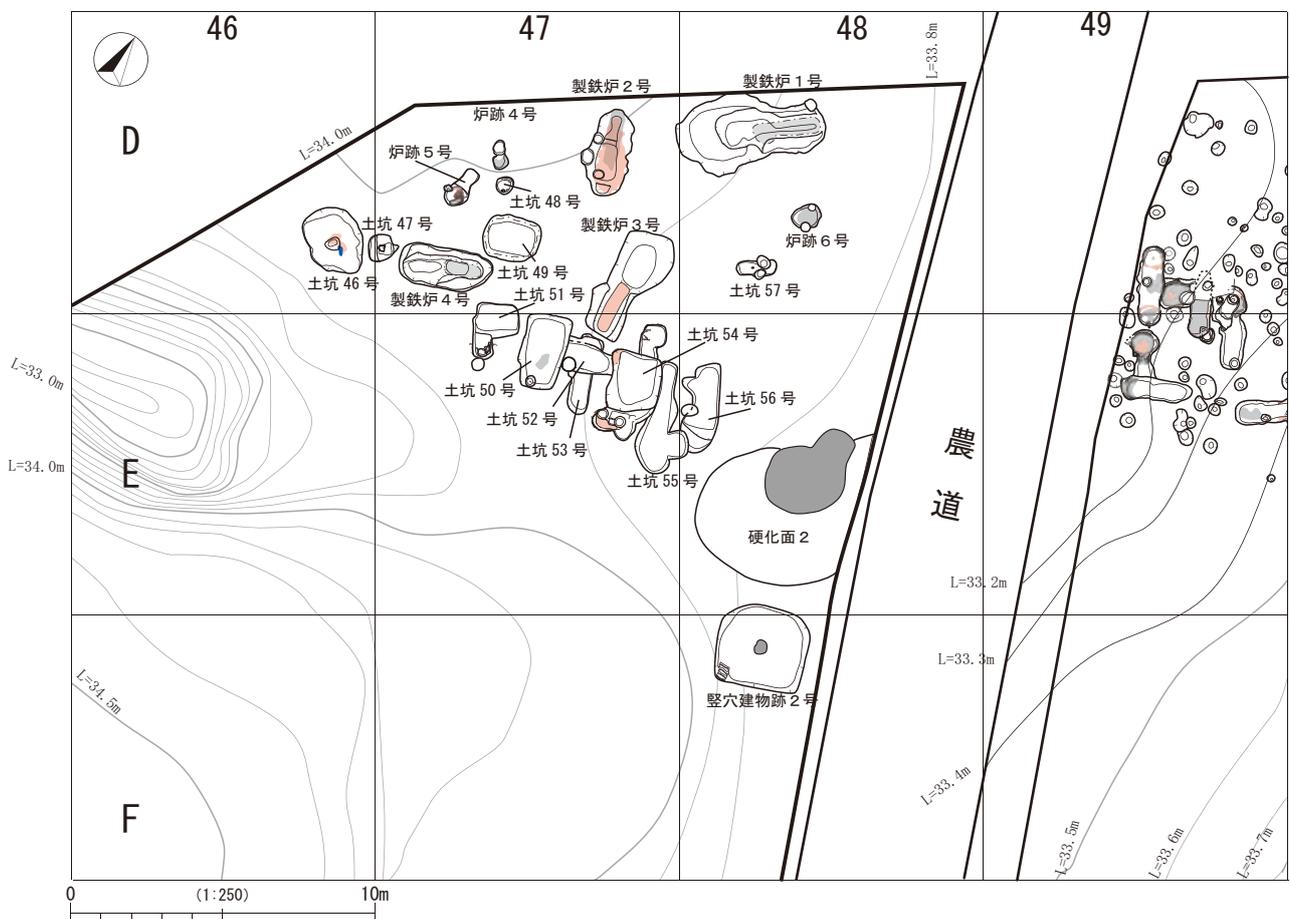
製鉄炉は、調査区北壁近くで4基確認した(第187図)。

長軸方向は不揃いで、配置に規則性は認められない。検出面はVI層上面であるが、鉄滓はVI層上位に堆積しているII a層で出土し始めるので、掘り込み面はII a層中にある。

本調査区では、鉄滓が多数出土したため、製鉄関連遺構の存在が発掘調査段階から想定されていた。しかし、製鉄炉は上部構造が残存しておらず、さらに調査了実際に鉄滓・羽口を含む土坑と混在して検出されたため、調査段階における製鉄炉の特定は困難であった。そのため、整理作業時に愛媛大学村上教授の指導を受け、炉床及び排滓場の有無を基準に製鉄炉を特定した。



第186図 製鉄関連遺構配置図



第187図 製鉄遺構調査区配置図

① 製鉄炉 1号 (第188図)

H-48区で検出した。主軸は東西を向き、全長4.8m、最大幅2.5mで、本遺跡最大の製鉄炉である。平面形は西半分が広がる柄鏡状である。東側は溝状に掘り込まれ、その上位に厚さ45cmの焼締められた地層(埋土⑦・⑩)を確認した。この層は焼土・炭・灰の互層からなり、人為的に形成された造成層と考えられる。造成層は湿気対策のためと考えられ、製鉄炉は造成層上面に構築されたことが想定できる。

西側は東側に比べて一段深くなり、床面直上の④層では、鉄滓が2層に分かれて帯状に出土した。複数回に分けて作業を行っていた状況が確認でき、この層が排滓場と考えられる。なお、⑥層でも鉄滓が帯状に出土しており、この層まで排滓場が機能していた可能性がある。

自然埋没土の②～⑤層には、10～20cm大の鉄滓、20～40cm大の礫、羽口、炭、灰が多量に廃棄され、④層には大型の炉壁も含まれていた。埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代(2σ)は、1520～1587calAD(60.1%)である。

製鉄炉の年代は、放射性炭素年代測定や出土遺物から16世紀後半～17世紀初頭である。

出土遺物(第188図 1265)

1265は漳州窯系の青花である。歴博分類染付碗F群に該当し、体部外面に唐草文を描く。粗い貫入が目立つ粗雑な作りである。年代は、16世紀後半～17世紀初頭である。

② 製鉄炉 2号 (第189図)

D-47区で検出した。主軸は南北を向き、全長2.9m、最大幅1.5mで、平面形は楕円形である。北半分は一段高く平坦で、床面が焼けて赤色化している。焼土は製鉄の熱によって生じたものと考え、この上面に炉床の存在を想定した。南半分は深く落ち込み、排滓場を想定できる。排滓場の床面で鉄滓等は確認できなかった。

埋土は、自然埋没で、①層下部には焼土塊や灰がびっしりと堆積していた。埋土からは、鉄滓や羽口が出土している。製鉄炉の年代は、出土遺物から17世紀中頃～18世紀前半である。

出土遺物(写真参照 1～3)

1は、青花の碗である。年代は、17世紀中頃である。2は、肥前系の磁器碗である。年代は、17世紀後半～18世紀前半頃と推察される。3は、中世後半の播鉢である。

③ 製鉄炉 3号及び関連遺構(鞆座・土坑)

1) 製鉄炉(第190図)

D・E-47区で検出した。製鉄炉3号は、南北方向に主軸をもち、全長3.05m、最大幅1.4mで、平面形は柄鏡状である。南半の床面は一段高く、溝状に掘り込まれ、北に向かって緩やかに傾斜する。溝状部分は、床面が焼けて赤色化している。焼土は製鉄の熱によって生じたものと考え、この上面に炉床の存在を想定した。

北半分は一段深く落ち込み、鉄滓が床面に近い⑥層で出土していることから、排滓場を想定できる。排滓場の層位は⑤・⑥層、自然埋没土は①～⑤層で、④層中には炭がブロック状に堆積している(④-2層)。自然埋没土では、焼けた礫、鉄滓、焼土、炭が確認されている。製鉄炉の年代は、出土遺物から17世紀後半～18世紀前半である。

2) 鞆座(第191図)

製鉄炉3号の南側で、2基1対となる方形土坑を検出した。土坑51は平面が長方形で、全長1.25m、最大幅0.74m、深さ0.18mである。埋土の③層上面では、人が踏みしめた硬化面と鉄分の付着が確認された。これは、製鉄に関わる作業が土坑内で行われていた痕跡と考えられる。なお、南西隅のピットは、土坑と別時期である。土坑51では、15世紀後半～17世紀前半の遺物が出土している(第193図)。また、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代値(2σ)は、1675～1744calAD(26.2%)である。

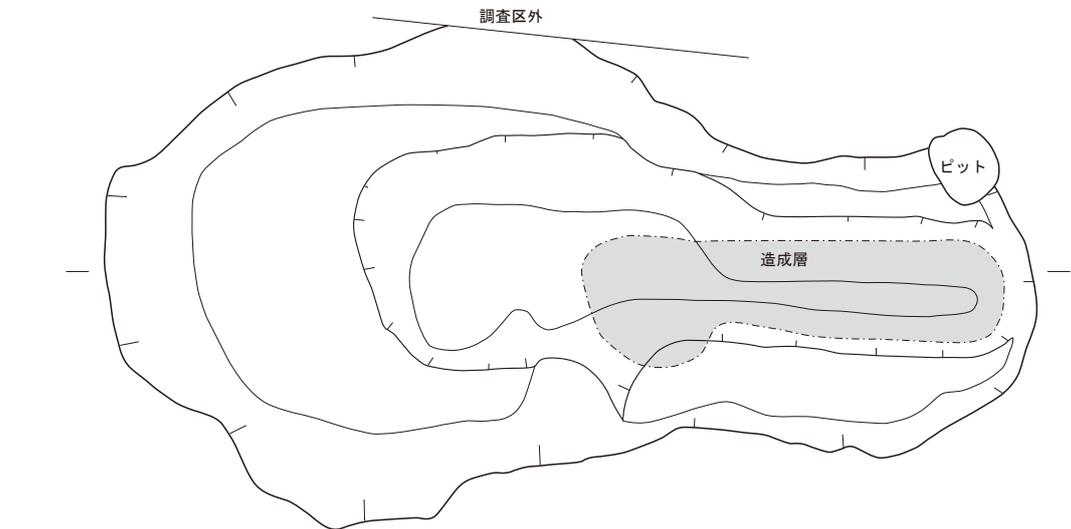
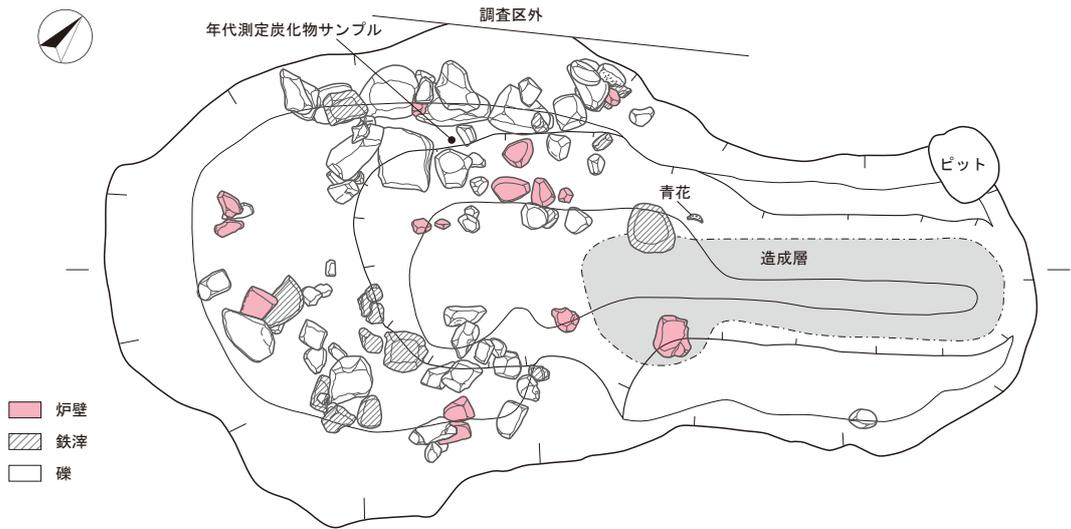
土坑54は、全長0.9m、最大幅0.7m、深さ0.18mで、南北に隣接する不定形な掘り込みを切っている。埋土の②層上面では厚さ2cmの硬化面が形成され、羽口、炉壁が出土した。製鉄に関わる作業が②層上面で行われていたと考えられる。西壁は、南北の隅が焼けている。土坑の北東隅では、陶磁器が重ねられた状態で出土した。土坑では、17～18世紀中頃の遺物が出土している。

土坑54に北接する不定形掘り込みは、床面が階段状になっている。土坑54と重複する部分は、未調査となった。土坑54に南接する掘り込みは、床面が方形土坑より深く、内部に小ピットがある。この2つの掘り込みは、検出時に土坑54より古いと判断したが、壁が土坑と同じように焼けていることから、土坑と同時に機能していた可能性もある。

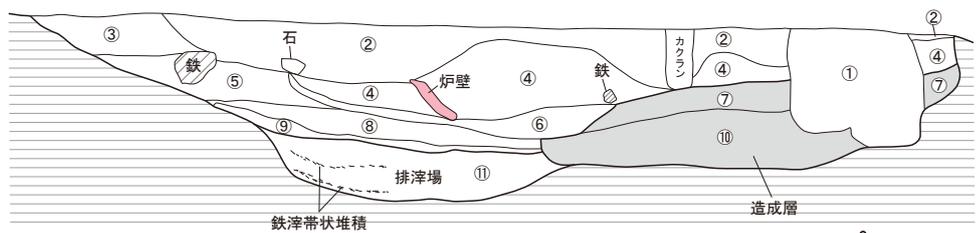
土坑51・54は製鉄作業に関わる遺構であり、製鉄炉想定位置の両側にあることから、3号製鉄炉に伴う鞆座と考えられる。

3) 土坑(第191・192図)

製鉄炉の南側で、4基の土坑を検出した。4基の土坑は規模や形態のほか、埋土に炭化物・焼土を含む点



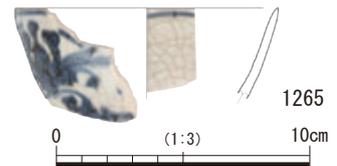
L=34.20m



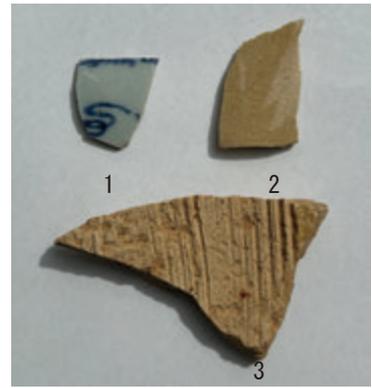
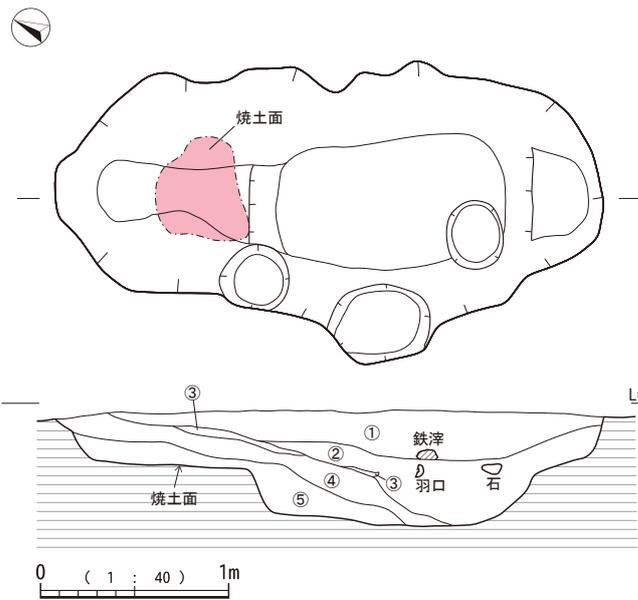
0 (1 : 40) 1m

埋土注記

- ① 黒褐色土 (7.5YR 3/1) ピット状の掘り込み, シラスブロック(1cm大)が10%, 炭(微)5%程度, 焼土や白灰がマーブル状に含まれる。
- ② 黒褐色土 (7.5YR 3/1) しまり強, 細かい炭や焼土粒が20%, シラスブロック(1~5cm大)5%, 焼土, 炭などの影響により, IIb層にたいして黒味を帯びる。
- ③ ②層に5cm大の鉄滓が40%以上含まれる。
- ④ 灰褐色土 (7.5YR 4/2) しまり非強, 焼土層で炉壁が含まれる。10cm大~3cm大のブロック5%炭混ざる。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり非強, 焼土粒(微), 炭(微)が10%
- ⑥ 黒褐色土 (7.5YR 2/2) しまり非強, 帯状に鉄滓が堆積し, ⑦層に向かって境界が曖昧になる。
- ⑦ 灰白土 (7.5YR 8/1) しまり非常に強い, 灰を主とする造成層
- ⑧ ⑤と同じ。
- ⑨ ⑥と同じ。灰も混じる。
- ⑩ 明褐色土 (7.5YR 7/2) 焼土と灰が交互に堆積。造成層
- ⑪ ⑤と同じ。帯状に鉄滓が2ヶ所認められる。複数回に分けて作業が行われている。



第188図 製鉄炉1号及び出土遺物



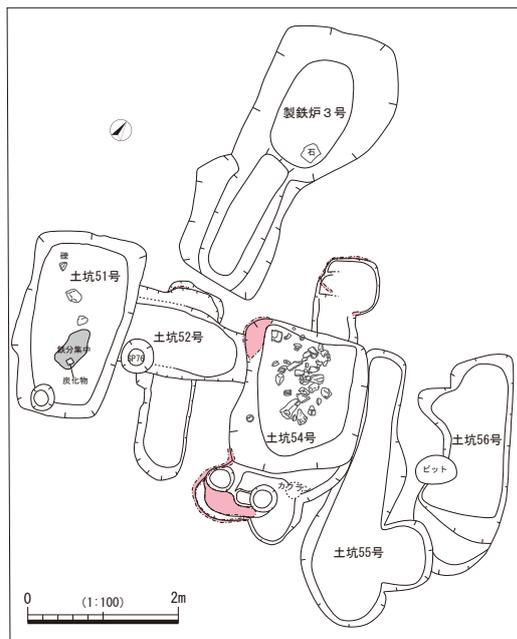
出土遺物写真

L=34.10m

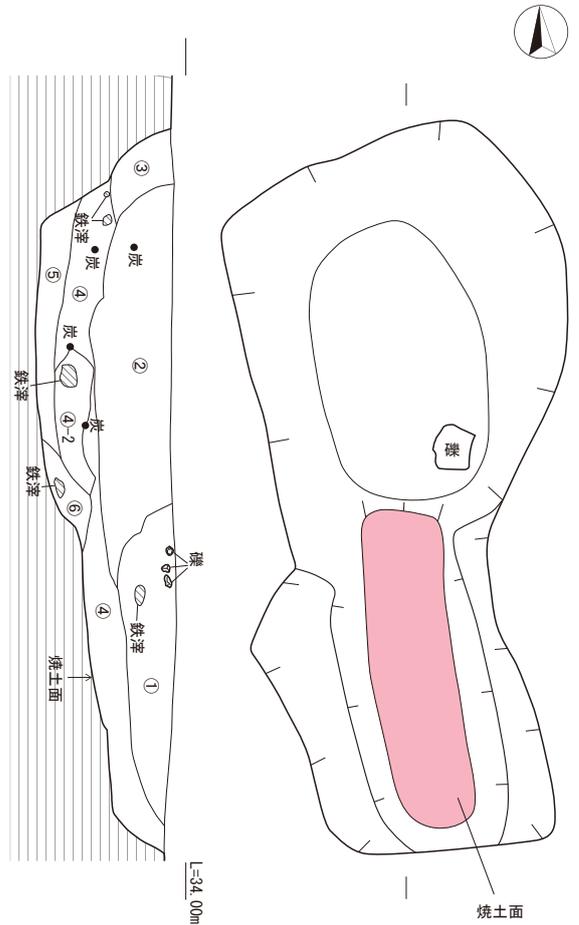
製鉄炉2号 埋土注記

- ① 黒褐色土 3cm程度 IIb白灰が堆積し、下部に焼土塊3~10cmがびっしりつまる。
- ② 黒褐色土 炭がわずかに含まれる。南側がやや多めに感じる。
- ③ 黒色土 鉄分もしくは炭がうすく堆積、石炭化する。
- ④ 灰白土 ③の下に堆積し、北側で見られる。
- ⑤ 灰黄褐色土 しまり強

第189図 製鉄炉2号



製鉄炉3号及び土坑全体配置図



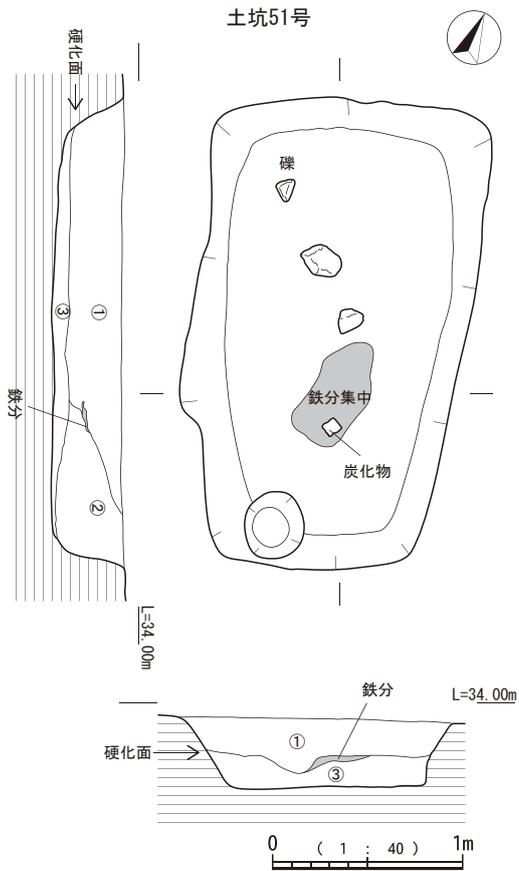
製鉄炉3号 埋土注記

- ① にぶい黄橙土 (10YR 6/4) 焼土, 礫, 軽石含む。
- ② 明黄褐色土 (10YR 6/3) 焼土, 炭含む。
- ③ 褐色土 (10YR 4/6) 炭, シラスを含む。
- ④ 褐色土 (10YR 4/4) 焼土, 礫, 炭含む。特に炭が多い層は④-2
- ⑤ にぶい黄橙土 (10YR 5/4) 焼土, 炭を含む。排滓場。
- ⑥ (10YR 8/3) 浅黄橙 (シラス), 焼土, 炭含む。排滓場。



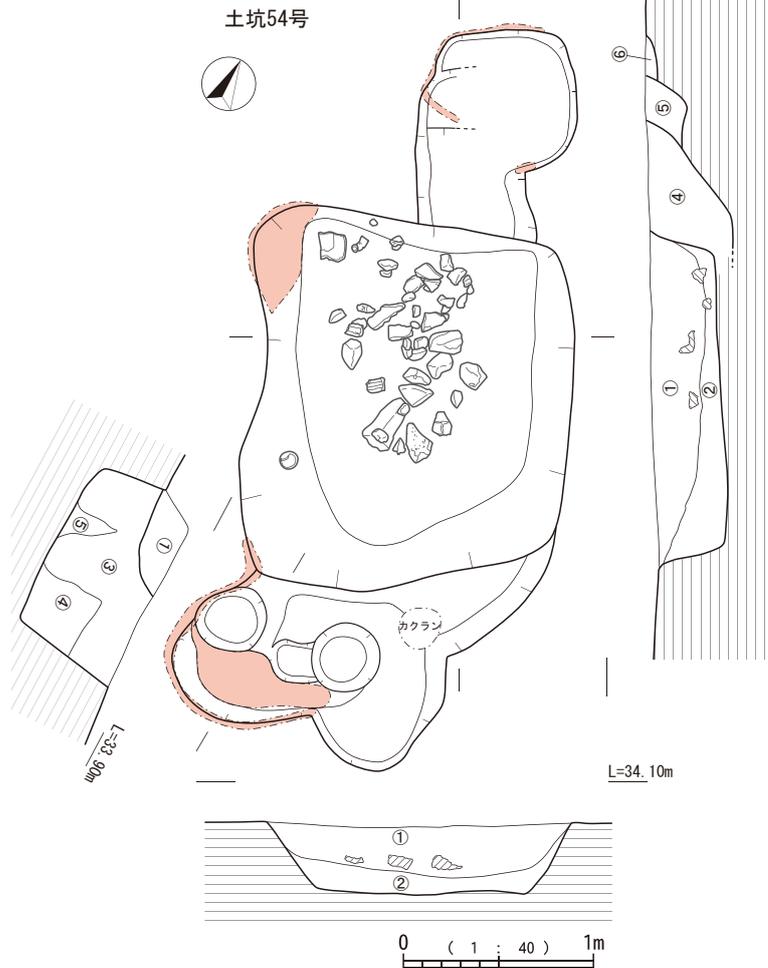
製鉄炉内出土礫

第190図 製鉄炉3号



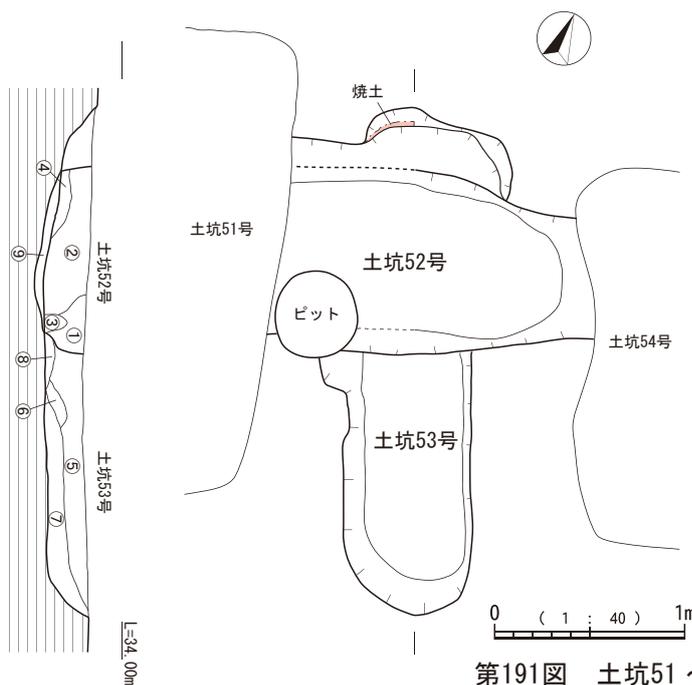
土坑51号 埋土注記

- ① 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強く、粘性弱い。炭、炭化物10%含む。シラス、白粒子わずかに含む。
- ② ①層にシラスが20%含まれる。炭化物がわずかに変わる。
- ③ ①層にシラスブロックが40%になる。焼土、炭化物なし。



土坑54号 埋土注記

- ① 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2) に明黄褐色土(10YR 7/6)のブロック含む。(まばらに中:径10~20mm)
- ② 黄褐色土 (2.5Y 5/3) に明黄褐色土(10YR 6/6)のブロックをわずかに含む。(小:径1~2mm)
- ③ 黄橙色土 (10YR 7/8)
- ④ 黒褐色土 ⑤ 灰黄褐色土 ⑥ 明黄褐色土



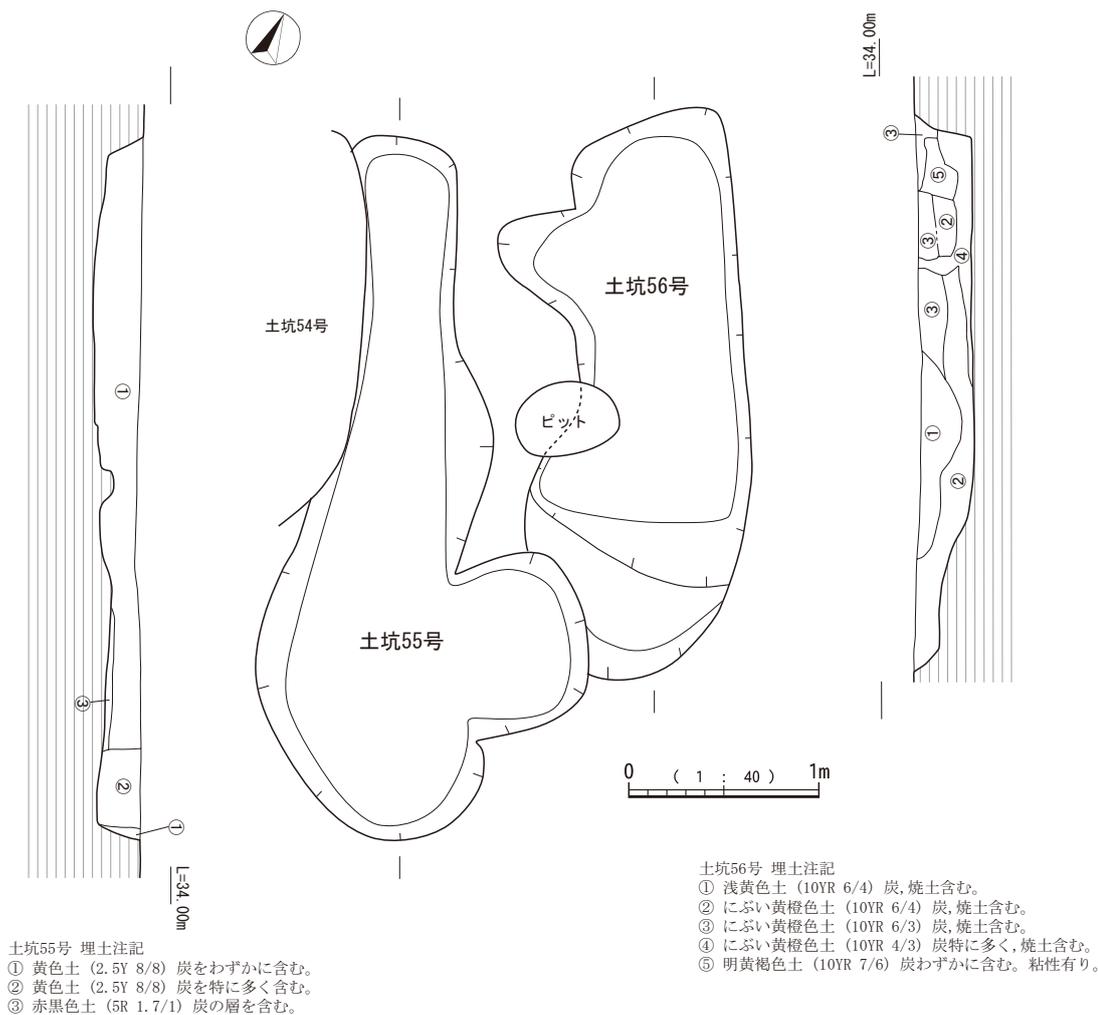
土坑52号 埋土注記

- ① 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強い、炭、白粒わずかに含む。
- ② 灰黄褐色土 (10YR 5/2) 赤色、白色粒、炭化物5%、シラスブロックも5%含む。
- ③ ①に炭が40%以上含まれる。
- ④ 黒褐色土 (10YR 3/1) ⑨の炭化層の影響を受けている。

土坑53号 埋土注記

- ⑤ 黒褐色土 (10YR 3/2) シラス5~10cm大50%含む、白、炭粒わずか、しまり強い。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR 3/1) 炭化物を含む。
- ⑦ ⑤にシラスブロック30%程含む。炭化物5%含む。
- ⑧ 灰黄褐色土 (10YR 5/2) 白い灰が50%以上含まれる。
- ⑨ 灰黄褐色土 (10YR 5/2) 炭化物ブロック50%含まれる。

第191図 土坑51 ~ 54号



第192図 土坑55・56号

が類似している。また、主軸が製鉄炉、鞆座と同じであり、製鉄炉に伴う遺構と考えられる。

土坑52は深さ0.23mの浅い土坑で、炭化物混じりの黄褐色シルトが、土坑全体に広がっている。鞆座を繋ぐ形で確認されている。

土坑53は、土坑52に直交する配置で検出された。長楕円形で、土坑52に切られている。深さは浅く、床面近くの⑧・⑨層には灰・炭化物を含んでいる。北壁の一部が、焼けて赤色化している。

土坑55は南北に長い不定形土坑で、西端の一部を土坑54に切られている。最大長1.85m、最大幅0.87mである。炭の堆積が、南側の床面直上に認められる。

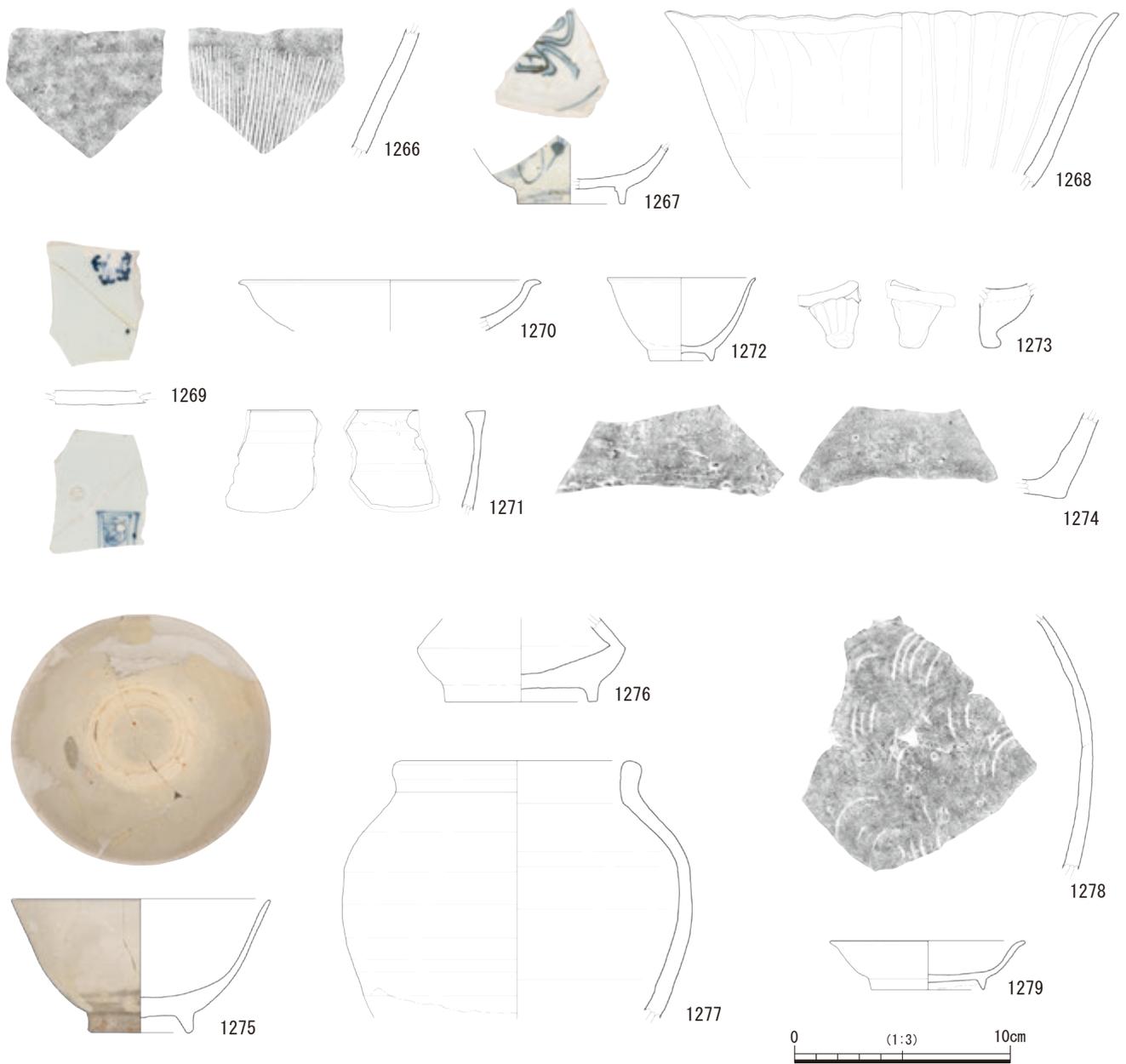
土坑56は南北に長い不定形土坑で、南隅を土坑55に切られている。最大長1.47m、最大幅0.62mで、埋土に炭・焼土を含む。15世紀後半の白磁皿が出土している。

出土遺物 (第193図 1266～1279)

1266は、製鉄炉3号出土の薩摩焼の播鉢である。所属時期は、17世紀後半～18世紀前半である。

1267～1274は、土坑51の出土遺物である。1267は青花の蓮子碗で、歴博分類C群に該当する。年代は、15世紀後半～16世紀前半である。1268は、初期伊万里の青磁鉢である。口縁部に輪花を作り、体部内外面に鎬蓮弁文を施す。口縁部内面には、型打成形時の布目痕が残っている。年代は、1630年～1640年である。

1269は、産地不明の染付皿である。外底面には、焼へたりを防ぐハリ支えの跡が残る。文様は、窓の中に渦福文を描く。1270は、波佐見産の青磁皿である。年代は、17世紀前半頃である。1271は、国産白磁の香炉である。1272は、小坏である。白薩摩の可能性もあるが、断定は難しい。1273は、国産青磁の香炉と推察される。体部内面は、露胎である。1274は、薩摩焼の甕である。

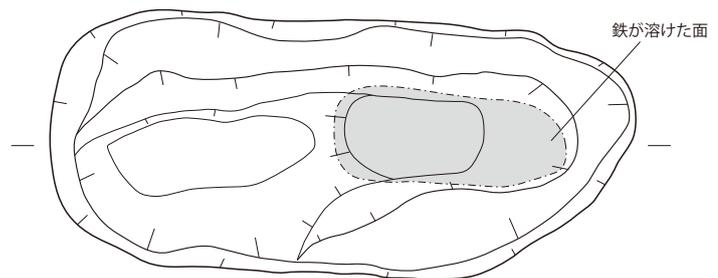
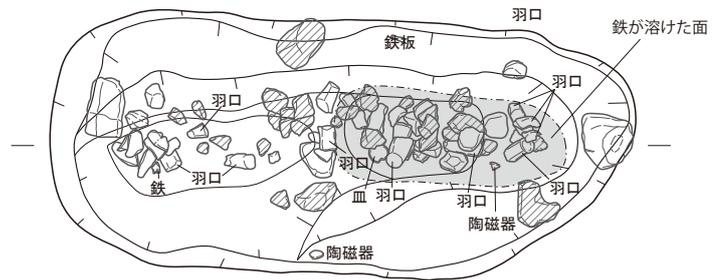


第193図 製鉄炉3号・土坑51・54・56号出土遺物



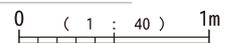
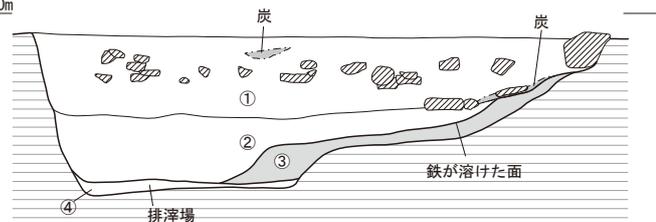
第194図 製鉄炉4号・土坑全体配置図

製鉄炉4号



土層断面写真

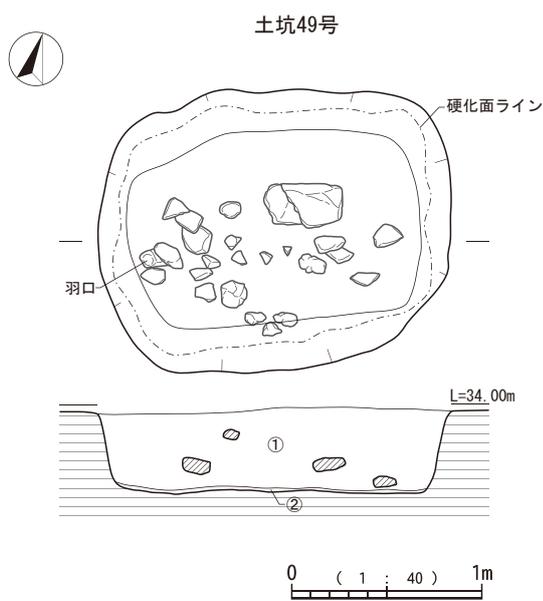
L=34.10m



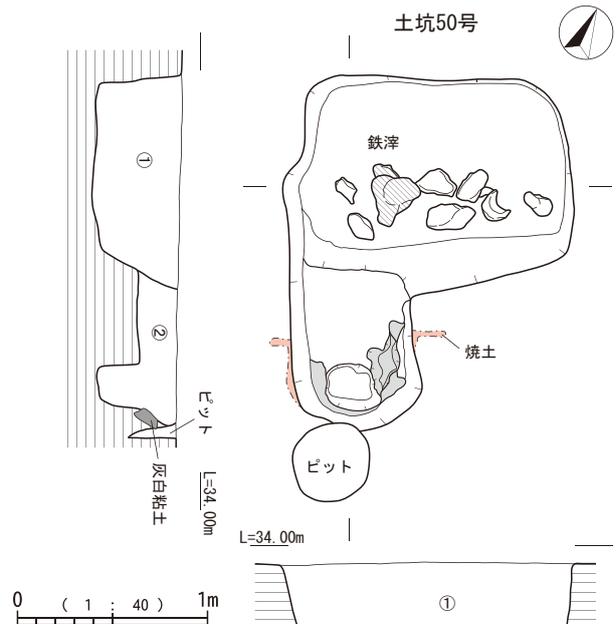
埋土注記

- ① 黒褐色土 (10YR 3/1) 炭10%, シラス, 焼土わずかに含む。
- ② 黒褐色土 (10YR 3/2) 下層に2cm大の炭が多めに堆積する。
シラスブロック2cm, 10%含まれる。
- ③ 灰白色土 上面に薄い鉄が溶けた層が形成 (造成土)。
- ④ 鉄分附着層

第195図 製鉄炉4号



埋土注記
 ①黒褐色土(10YR3/1)粘性弱く、しまり強い。炭化物10%、シラスわずかに含む。
 ②硬化面 SX14の③層と同じ。灰褐色土(10YR6/1) 1~2cm程度含む。



埋土注記
 ① 黒褐色砂質シルト (10YR 3/1) 白・赤色粒子、炭化物合わせて10%含む。しまり強く、粘性弱い。
 ② 黒褐色砂質土 (10YR 3/2) シラスブロック10cm大混入、白・赤色粒子10%含む。シラスとマーブル状に堆積し、下層に炭、焼土がある。

第196図 土坑49・50号

1275～1278は、土坑54の出土遺物である。1275は、薩摩焼の碗である。体部は、白化粧に透明釉をかける。見込みは蛇目釉剥ぎを施し、高台内面は露胎となる。18世紀中頃の龍門司窯産である。1276は、染付の水注と推察される。内外に厚い釉薬がかかり、高台内面に砂が付着している。1277は、国産陶器の壺である。内外面に厚い褐色の釉薬を施す。産地、年代は不明である。1278は、薩摩焼の甕である。薄手で、内面に同心円状の当て具痕が残る。年代は、17世紀である。

1279は、土坑56の出土遺物である。白磁の皿で、歴博分類白磁皿C 1群である。年代は、15世紀後半である。

④ 製鉄炉4号及び鞆座

1) 製鉄炉4号 (第195図)

D-47区で検出した。製鉄炉4号は、東西方向に主軸をもち。全長3.05m、最大幅1.35mで、平面形は楕円形である。北半の床面は一段高く、溝状に掘り込まれ、南に向かって緩やかに傾斜する。その上位に、厚さ8cmの灰層(埋土③)を確認した。この層の上面は、溶けた鉄が薄くのっており、この範囲に炉床を想定できる。よって、③層の灰層は、湿気対策のため、製鉄炉の下に敷いた造成層と考えられる。

東壁には直径20cmの礫が置かれ、その西側には平たい

礫や灰層が検出された。これらの礫は焼けているため、炉の一部に利用されたものと考えられる。

南半分は一段深く落ち込み、床面直上の④層は鉄分が固結した層であることから、この地点に排滓場を想定できる。

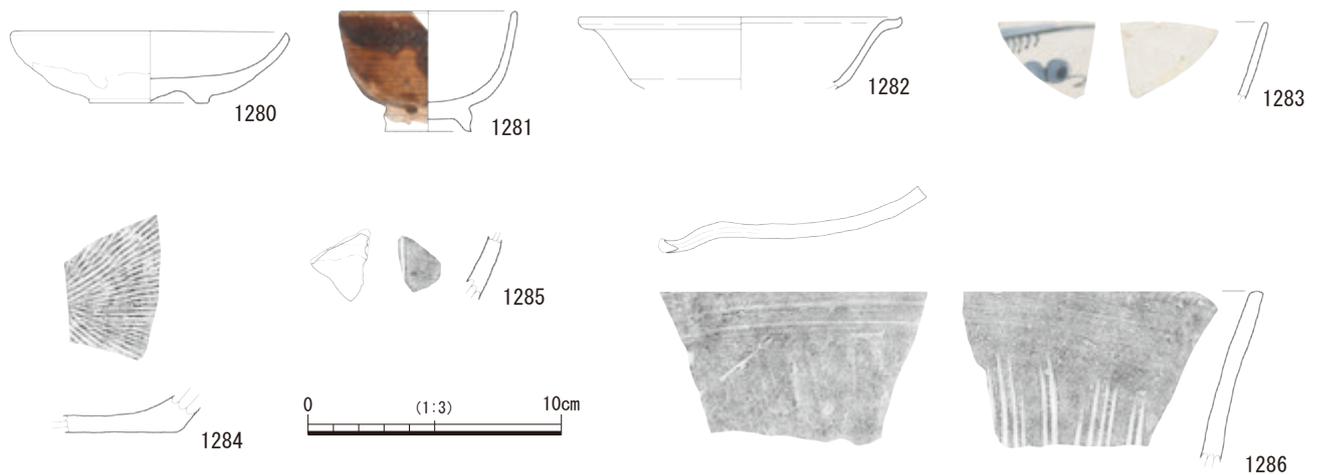
埋没土は①・②層で、①層中では多くの鉄滓、焼礫、羽口が出土した。鉄滓等の出土量は、4基の炉の中で最も多い。

製鉄炉では、16世紀末～17世紀後半の遺物が出土している。また、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代(2σ)は、1495～1602calAD(75.8%)である。

2) 鞆座 (第196図)

製鉄炉4号の西側で、2基1対となる方形土坑を検出した。土坑49は平面が方形で、全長1.85m、最大幅1.46m、深さ0.45mである。埋土の②層は、人が踏みしめた厚さ2cmの硬化面である。その上位で、拳大や人頭大の礫、鉄滓がほぼ同じレベルで出土したため、製鉄に関連する作業が②層上面で行われていたと考えられる。土坑内では、16世紀末～17世紀後半の遺物が出土している。また、炭化物の放射性炭素年代値(2σ)は、1510～1592calAD(73.56%)である。

土坑50は、全長1.5m、最大幅1.1m、深さ0.5mで、南に隣接する小型の土坑を切っている。鉄滓や焼礫が埋土



第197図 製鉄炉4号・土坑50号出土遺物

に含まれるため、製鉄関連遺構と判断した。土坑内では、中世末から近世の遺物が出土している。

土坑50に切られている小型の土坑は、南壁に粘土を貼り付け、その部分が硬くなっている。粘土の中央は、ピットに切られている。壁の一部が焼けており、土坑54が切っている不定形掘り込みに近い特徴をもつ。

土坑49・50は製鉄作業に関わる遺構であり、製鉄炉想定位置の両側にあることから、4号製鉄炉に伴う鞆座と考えられる。

出土遺物（第197図 1280～1286）

1280～1284は、製鉄炉4号の出土遺物である。1280は、唐津焼の皿である。体部外面は、ケズリ調整で灰緑色の釉薬が体部下半までかかる。高台は小さく、外底面が下方へ厚みをもつ。年代は、16世紀末である。1281は、薩摩焼の坏である。褐色の釉薬が体部内外面にかかり、高台は露胎となる。山元窯産で、年代は17世紀後半である。

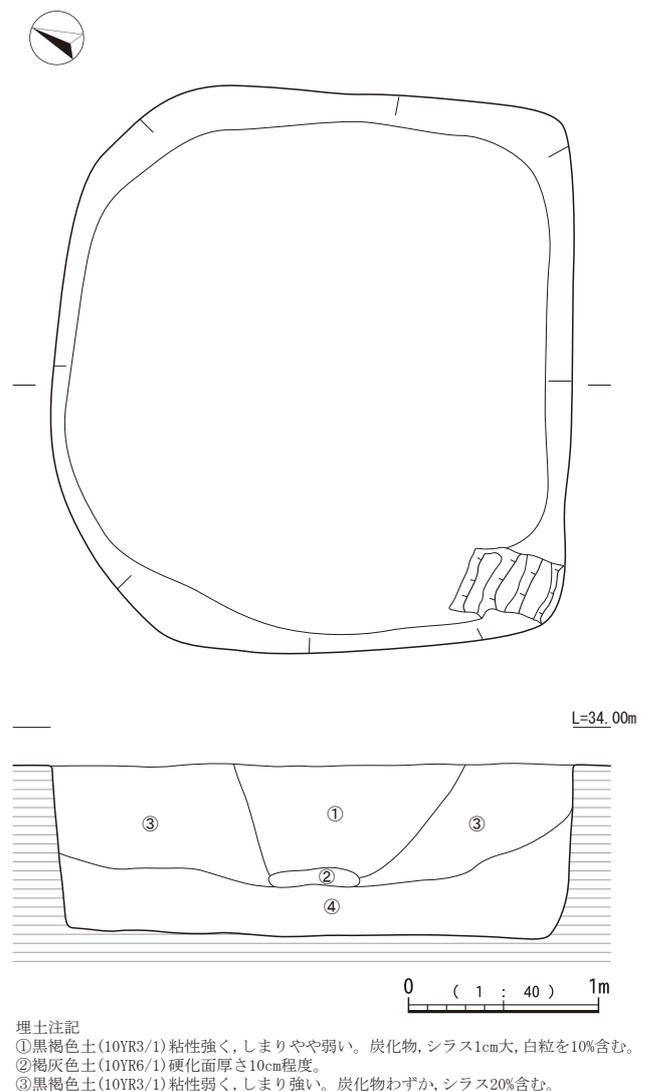
1282は、肥前陶器の皿である。口縁部が小さく立ち上がり、器壁は薄い。年代は、17世紀後半である。1283は、肥前系の染付碗である。1284は、薩摩焼の播鉢である。

1285・1286は土坑50の出土遺物である。1285は、中国産陶器である。器種不明で、外面に鉄釉がかかる。1286は、須恵器の播鉢である。土師質で焼成がよく、内面に煤が付着する。

（2）竪穴建物跡2号（第198図）

F-48区で検出した。南北2.7m、東西2.95mで、平面形は方形である。深さは0.9mあり、床面は平坦である。竪穴の南西隅には、地山を掘り込んで階段を設置している。柱穴は確認されていない。

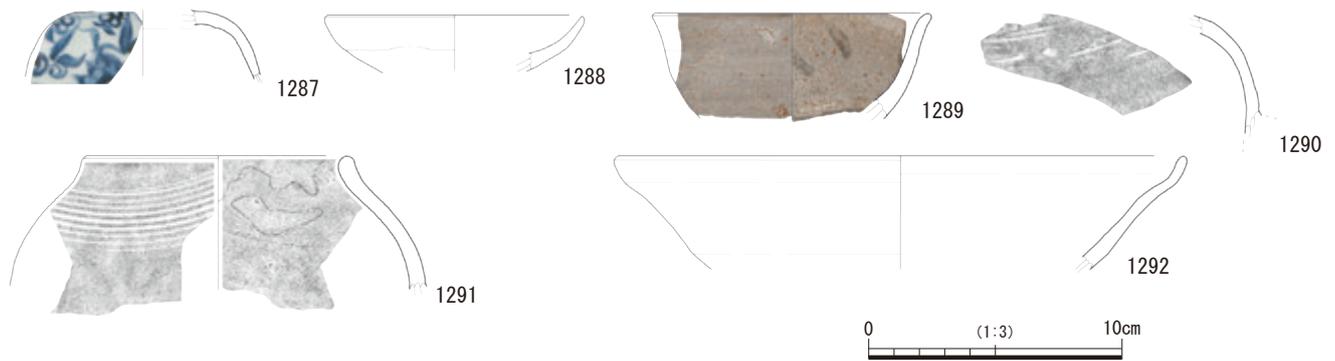
埋土は4層に分かれ、③層堆積後に竪穴中央部を再度掘り込んでいる（①層）。掘り込みの床面は硬化してい



埋土注記

- ①黒褐色土(10YR3/1)粘性強く、しまりやや弱い。炭化物、シラス1cm大、白粒を10%含む。
- ②褐灰色土(10YR6/1)硬化面厚さ10cm程度。
- ③黒褐色土(10YR3/1)粘性弱く、しまり強い。炭化物わずか、シラス20%含む。

第198図 竪穴建物跡2号



第199図 竪穴建物跡2号出土遺物

た。年代は、16世紀末～18世紀中頃であり製鉄炉と同時期である。製鉄に伴う倉庫、作業小屋の可能性がある。

出土遺物(第199図 1287～1292)

1287は、青花の壺である。外面に草花文を描き、胎土に黒色粒子を多く含む。1288は、唐津焼の皿である。灰緑色の釉薬が、口縁部外面から体部内面にかかる。1289は、唐津焼の碗である。墨書のような文様が、内面に残っている。貫入が目立つ。年代は、16世紀末～17世紀である。

1290は、瓦質土器の湯釜である。時期は、中世後半である。1291は、薩摩焼の糸目土瓶である。年代は、18世紀中頃である。1292は青磁の鉢で、産地・年代は不明である。

(3) 土坑(第200図)

① 土坑46

D-46区で検出した。全長2.4m、最大幅1.8mで、平面形は楕円形に近い。深さは0.44mあり、床面はすり鉢状である。埋土①層では、大小の鉄滓が敷き詰められた状態で出土し、その下には人頭大の礫が検出された。人頭大の礫の間には、小礫が詰まっている。床面は、鉄分によって硬化している。

土坑からは、小割の滓や鉄分の付着が多い含鉄鉄滓が多数出土している。内部に鉄が生成している滓もあり、鉄滓や品質の悪い鉄塊を処分した廃棄土坑と考えられる。土坑の年代は、出土遺物から17世紀後半～18世紀初頭である。

出土遺物(第200図 1293～1295)

1293は、国産青磁の皿である。口縁部が小さく外反する。1294は、内野山産の碗である。外面に濃淡のある緑色釉、内面に白色の釉がかかる。年代は、17世紀後半～18世紀初頭である。1295は、肥前陶器の盤である。

② 土坑47

D-47区で検出された。平面形は略方形で、全長0.86m、最大幅0.8mである、床面の一部は硬化しており、

焼けたような痕跡がある。

製鉄炉4号と土坑46の間に位置し、床面近くで鉄滓が出土しているため、製鉄関連遺構と考えられる。埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代(2σ)は、1761-1801calAD(43.92%)である。

③ 土坑48

D-47区で検出された。平面形は円形で、直径0.6mである。土坑の北壁は、焼けて赤色化している。鉄滓、炭化物が出土しており、製鉄関連遺構と考えられる。埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代(2σ)は、1538-1635calAD(65.06%)である。

④ 土坑57

D-48区で検出された。平面形は長方形で、全長1.32m、最大幅0.46mである。2基のピットに切られている。床面は西に向かって傾斜し、炭化物が床面直上で確認できた。鉄滓が出土しており、製鉄関連遺構と考えられる。埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代(2σ)は、1735-1804calAD(57.6%)である。

(4) 炉跡(第201図)

焼土跡、炭化物を伴う土坑を炉跡とした。これらの遺構は、埋土に炭化物、鉄滓を伴うことから製鉄関連遺構と考えられる。

① 炉跡4

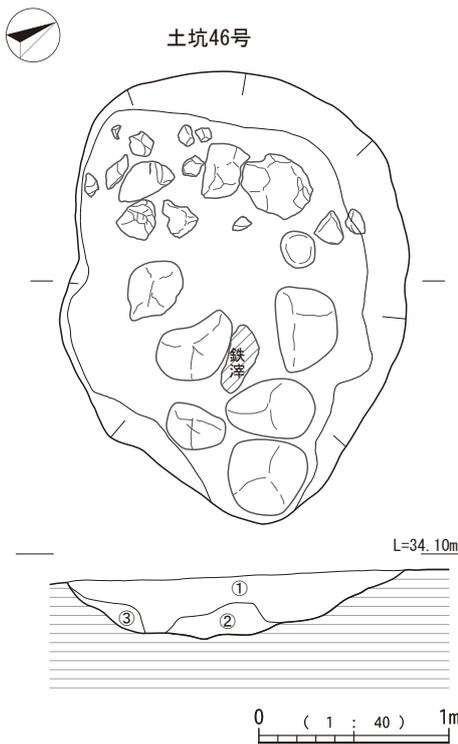
D-47区で検出された。平面形は略円形で、直径0.48m、深さ0.12mである。北側はピットに切られている。埋土は単一で、焼土や炭化物を多く含んでいる。

② 炉跡5

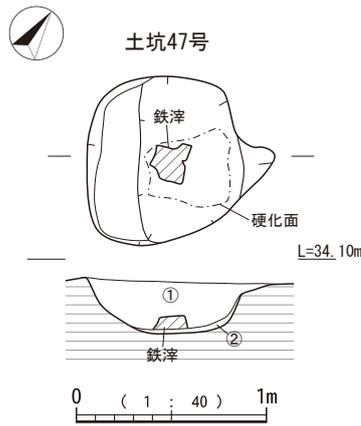
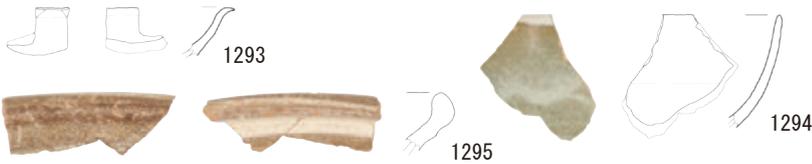
D-47区で検出された。平面形はひょうたん形で、全長1.4m、最大幅1.25mである。燃焼部は南側にあり、その内部には被熱礫、鉄滓のほか炭化物が多く混入している。燃焼部北半の床面は、焼けて赤色化し、一段高くなっている。

③ 炉跡6

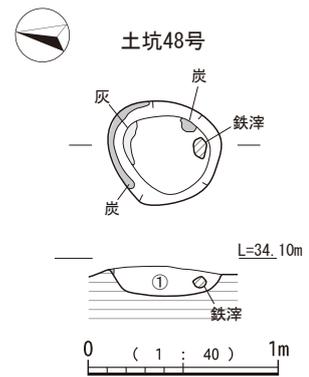
D-48区で検出された。平面形は略円形で、直径0.88m、



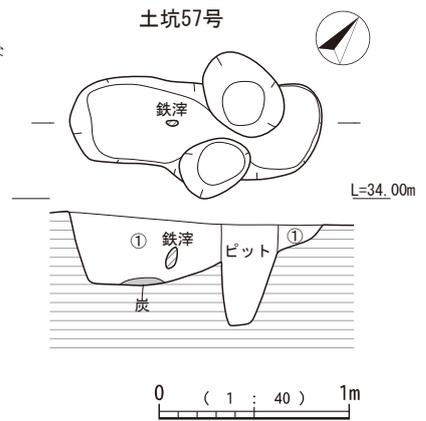
土坑46号 埋土注記
 ① 鉄滓(大小様々), 炭が60%含まれる。しまりは非常に強い。
 ② 礫が集まっている層。
 ③ 黒褐色粘質土 (7.5YR) しまり非常に強く、粘性強い。



土坑47号 埋土注記
 ① 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強く、粘性なし、炭化物10%含む。赤色、白粒子わずかに含む。
 ② 黒色土 (10YR 2/1) 円形状のプランで中央に鉄滓有り、周りは一部硬化する。焼けたような跡有り。

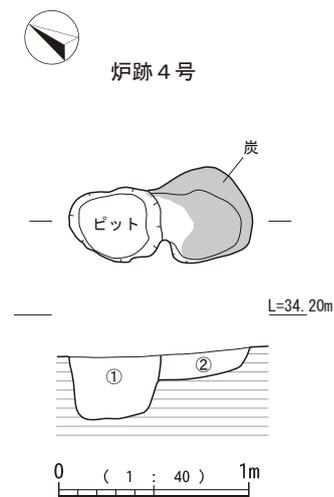


土坑48号 埋土注記
 ① 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり弱く、粘性なし、鉄滓, 炭化物出土。

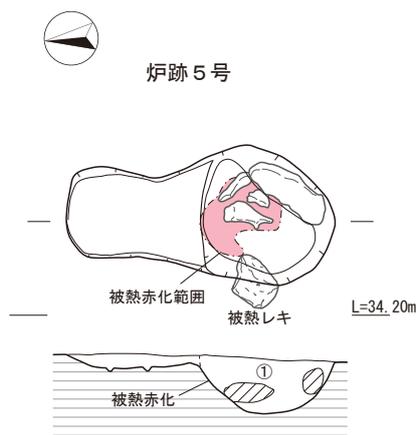


土坑57号 埋土注記
 ① 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり、粘性ともに弱い、1~10cm大のシラスを50%, 炭化物わずかに含む。

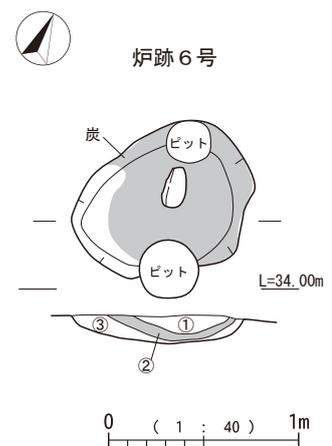
第200図 土坑46 ~ 48・57号及び出土遺物



炉跡4号 埋土注記
 ① 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強、粘性なし。炭化物10%含む。
 ② ①に焼土や炭化物30%含む。
 ③ ①にシラス10%含む。炭なし。



炉跡5号 埋土注記
 ① 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり有り、粘性なし、シラス1~10cm大、炭化物10%含む、ガラス化した鉄滓の下から焼土範囲検出。



炉跡6号 埋土注記
 ① 黒褐色土 シラスブロックが40%, しまり強、炭化物20%含む。
 ② 炭
 ③ 灰白色土

第201図 炉跡4 ~ 6号

深さ0.14mである。2基のピットに切られている。断面は浅い皿形で、炭化物層（②層）の直下で灰混じり層（③層）を検出した。堆積状況が土坑57に類似している。

（5）硬化面 2（第202図）

E-48区で検出された。炭化物が、混じる硬化面と土坑状の掘り込みが重複している。土坑状の掘り込みは硬化面の下位にあり、調査期間の関係上、完掘することができず、一部の土層断面のみ作成した。硬化面 2 は、製鉄炉 3 号と竪穴建物跡の間に位置するため、製鉄作業に伴って形成された痕跡と考えられる。

出土遺物（第203図 1296～1297）

1296は、白磁の小坏である。産地・年代は、不明である。1297は、中世の須恵器の甕である。口縁部の屈曲が強く、胴部外面は格子目タタキ、内面は粗いハケを施し、胴部を薄く仕上げる。

（6）製鉄関連遺物

製鉄関連遺物には、鞆の羽口、鉄滓、炉壁がある。遺構内出土の製鉄関連遺物を中心に、まとめて報告する。

① 鞆の羽口

鞆の羽口は、内径の大きさを基準に2種類に分類した。内径が1cm前後を小型品、2.6～3.6cmを大型品に分類して報告する。出土点数は小型品2点、大型品37点である。

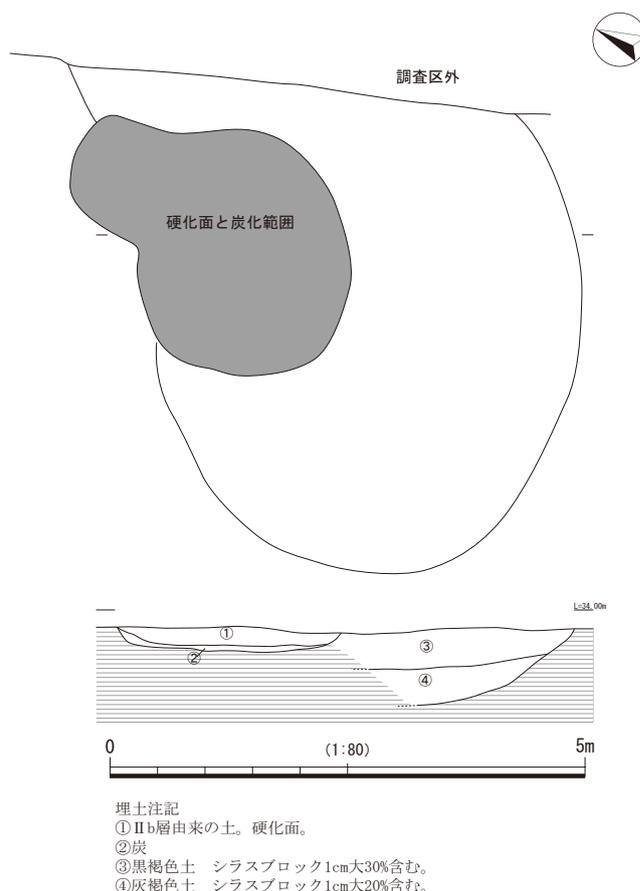
1) 小型品（第204図 1298）

1298は、内径1cmの小型品である。先端に向かって細くなり、砂粒の少ない胎土を使用している。先端の焼け方は弱く、表面にハケ目調整を施す。製鉄遺跡群とは別地点で出土しており、形態・胎土が大型品と異なるため、中世以前の羽口の可能性もある。他に同一個体の可能性が高い破片が、1点出土している。

2) 大型品（第204・205図 1299～1308）

大型品は、羽口先端が高熱のため、溶解しているものが多い。外径が炉壁に残る羽口の径と一致するため、製鉄用と判断できる。大小の小石、粗砂、鉄分を含む粗い胎土を使用している。鉍物には軽石、長石、石英などが含まれている。内径は2.6～3.6cmで、円筒形の羽口である。

1299は、全長13.1cmの完形品である。使用できる限界まで使い込まれたとみられ、炉壁の厚さを窺うことのできる資料である。根元は外側に開き、先端部は鉄滓、若しくは溶けた羽口が詰まっている。炉壁に対して斜め上から挿入されている。挿入角度は、炉壁に対して約30度反時計回りに傾く。1300は、残存長16.9cmでほぼ完形品である。根元は厚みを持ち、外側に開く。先端部は溶けて先細りし、鉄滓が付着している。限界まで使い込まれたとみられ、炉壁の厚さを窺うことのできる資料である。断面接合部の観察から、粘土を巻き付けて製作したこと



第202図 硬化面 2

が推測される。挿入角度は、炉壁に対して約28度反時計回りに傾く。1301は、1300と同一個体である。

1302の先端部は、鉄滓と溶けた羽口で詰まっている。挿入角度は、炉壁に対して約28度反時計回りに傾く。1303は、先端部が溶けて細い筒状になっている。接合部の形態から、羽口は粘土を巻き付けて製作したことが推測される。先端下部には、錆びた滓が付着する。表面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。1304は、残存長21.1cmである。1305は最大径の羽口で、外径が8.8cmある。器壁も厚い。

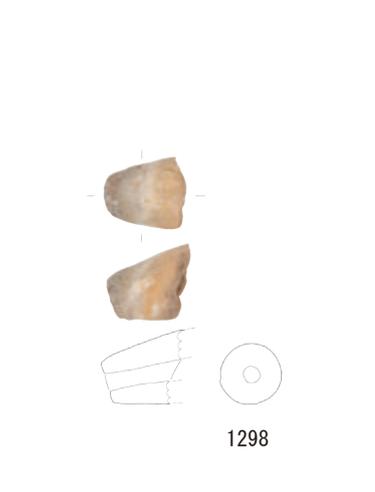
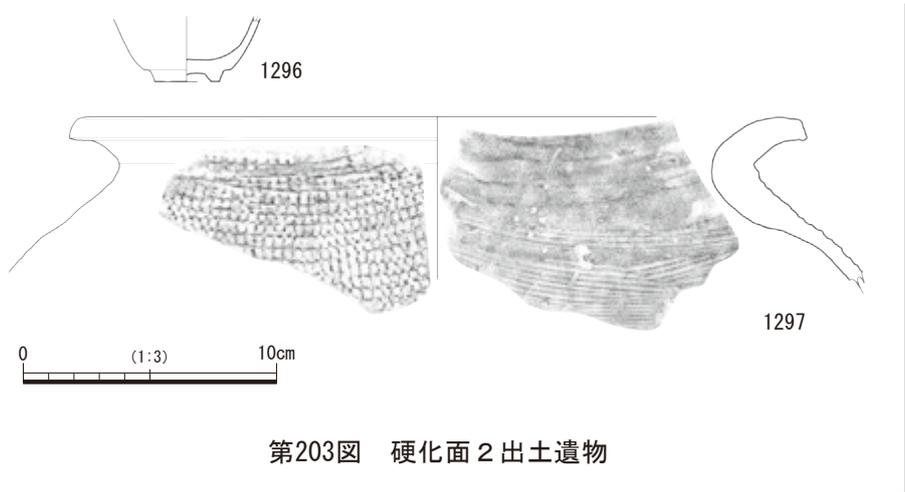
② 炉壁・炉底

炉壁と炉底に分けて報告する。炉底・炉壁は、短く切ったスサや石英、斜長石、小石を多く含む粗い胎土を使用している。

1) 炉壁（第206・207図 1309～1320）

1309は、土坑54号で出土した炉壁で、炉の小口付近である。接合した2つの炉底は、長さ49cm、幅17cm、内壁の残存高13cmである。高温のため炉底が、かなり変形している。炉壁の厚さは3.5cmで、鉄滓に浸食され再結晶化している。炉底は厚さ1.5cmと薄く、磁力の無い赤錆びた鉄滓が付着している。壁面は、黒色で気泡の多い滓と溶解した炉壁が一体化したような状態である。

1310は、土坑54号で出土した炉底近くの壁である。羽



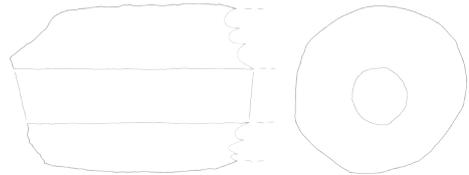
第204図 羽口 1



1304



1305



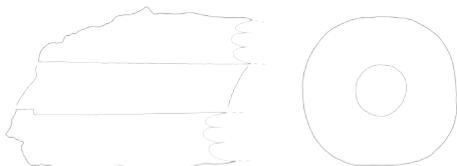
1306



1307



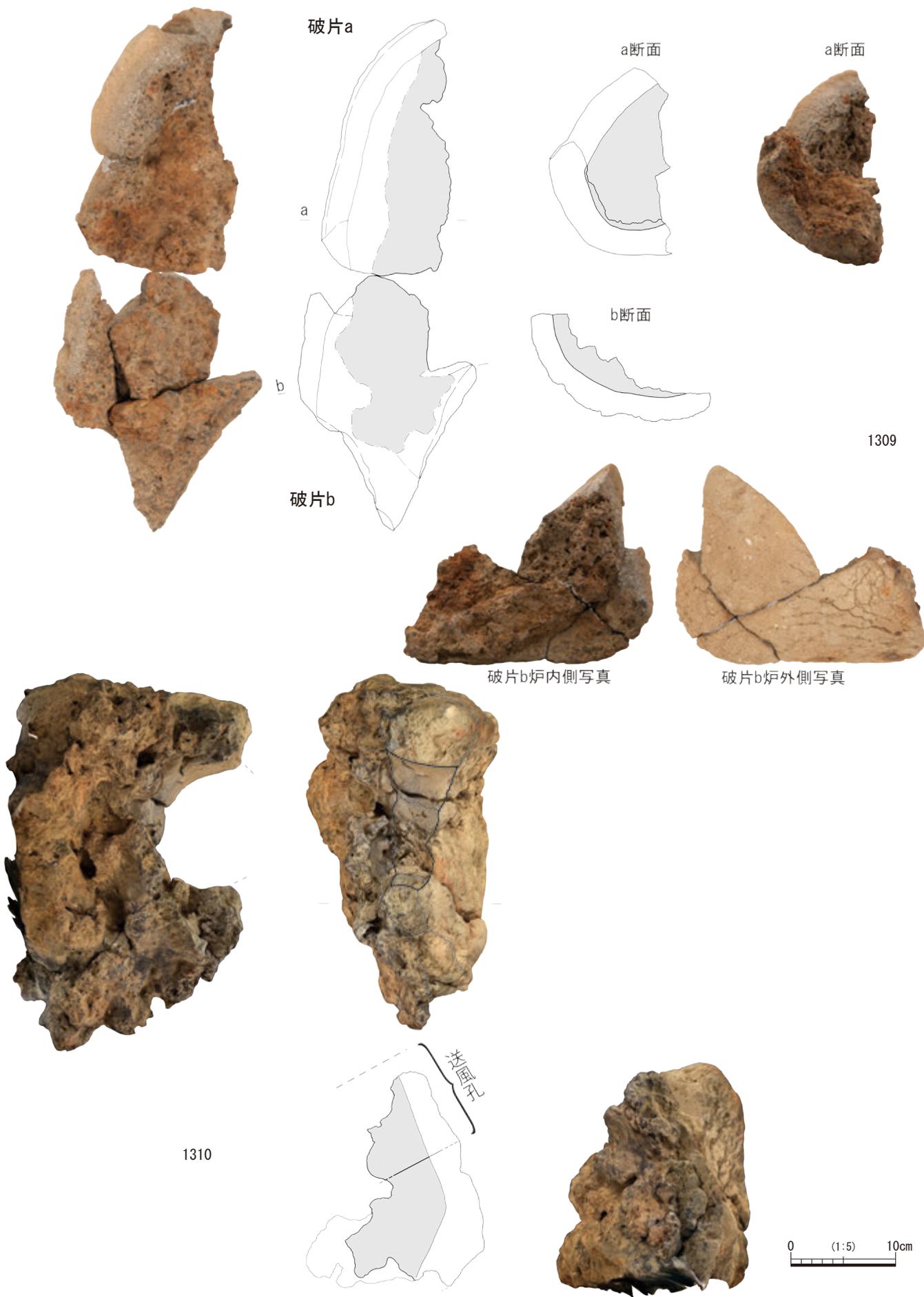
1308



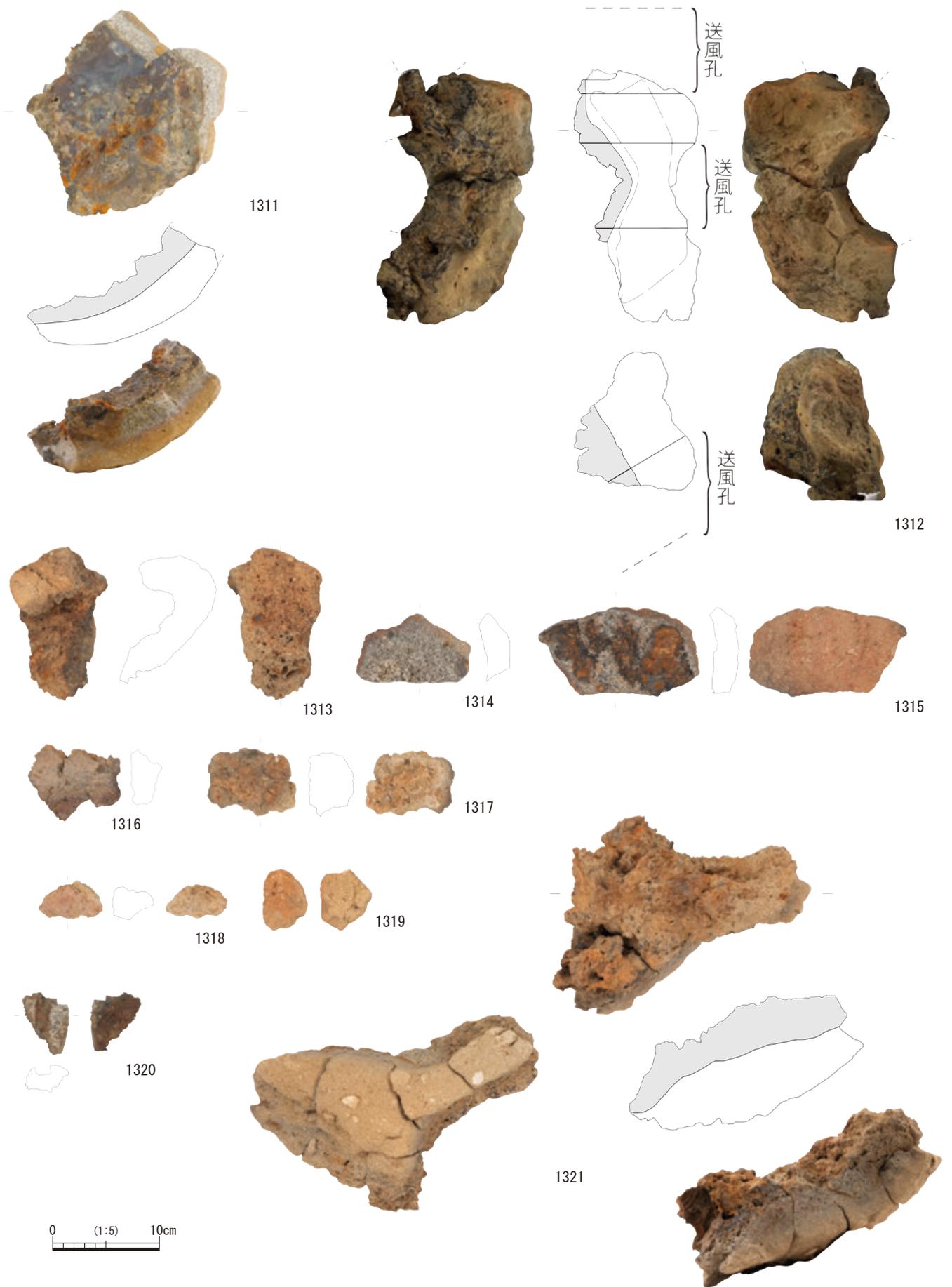
第46表 羽口観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	長さ (cm)	外径 (cm)	内径 (cm)	備考
204	1298	G-52 II c.3531	4.3	3.2	0.9	
	1299	製鉄炉4号	13.1	7.8	2.9	SX21
	1300	土抗54号 + 土抗51号	16.9	推定10	推定3.6	SX14+SX10
	1301	土抗54号	6.3	推定10.2	推定3.6	SX14
	1302	製鉄炉4号	17.5	7.3	3	SX21
	1303	E-46	14.3	6.9	2.8	
205	1304	E-46	14.5	7.3	3	
	1305	製鉄炉4号	13.2	8.9	3	SX21
	1306	製鉄炉4号	21.1	7.8	2.8	SX21
	1307	製鉄炉4号	15.2	7.7	3.2	SX21
	1308	製鉄炉4号	13.5	8	2.7	SX21

第205図 羽口 2



第206图 炉壁 1



第207图 炉壁 2

口の送風孔が1か所残っている。送風口は直径9.5cmで、挿入角度は炉壁に対して約30度反時計回りに傾く。炉壁の厚さは3～4.6cmで、内面には大きな塊の鉄滓が重なるように付着している。鉄滓は大きく2層に分かれ、炉壁近くに黒色味を帯びた板状の鉄滓があり、その上に赤錆びた鉄滓が生成している。

1311は、製鉄炉4号で出土した炉底近くの壁である。炉壁の厚さは3～4cmで、炉壁の断面は熱によって再結晶化している。内面には、凹凸の少ない黒い鉄滓が、1cmの厚さで全面に付着している。

1312は、土坑54号で出土した壁である。鞆の送風孔が、2か所残っている。残りの良い中央の送風孔は、直径8cmで、挿入角度は炉壁に対して約30度反時計回りに傾く。2つの送風口の距離は、約5cmである。内面は炉壁が溶けてガラス化した状態で、黒みを帯びた凹凸の少ない滓が付着している。

1313は、土坑50号で出土した。炉壁表面が熱で曲がり、剥がれ落ちた資料である。表面は黒色にガラス化し、鉄分が付着している。

1314・1315は、炉壁内面が剥落した資料である。鉄滓の付着や炉壁の融解が顕著でないため、鞆の送風孔より上位に位置する炉壁片と推察される。1314は、製鉄炉4号で出土した。表面は高温の熱を受け、再結晶化している。1315は、土坑54号で出土した。表面は、白く再結晶化した範囲と黒くガラス化した範囲が斑状になっている。ガラス化した部分には、薄い鉄分の付着がある。

1316～1319は、炉壁内面が剥落した資料である。表面は熱を受けて赤色化しているものの、熔融化はおきていない。成形時の工具痕も確認でき、高温度に晒されていない最上部付近の炉壁片と推察される。1316は製鉄炉4号、1317は製鉄炉3号1318は製鉄炉1号、1319は製鉄炉2号で出土した。

1320は方形の孔が、炉壁表面から約1cm内部に残っている。孔の幅は1.5cm角で、その両側は結晶化が起き白色化している。方形の孔は、炉の接合部にジョイントとして差し込んだ角材痕跡と推察される。

2) 炉底 (第207図 1321)

1321は、底面に地山の土が付着している。壁近くは厚さ4cm程であるが、床は鉄滓に浸蝕され、炉底がほとんど残っていない。炉底内面は、黒色のガラス化した滓の上に赤錆びた鉄滓が生成している。赤錆びた鉄滓は、一部に弱い磁力を帯び、長さ4cm、幅3cmの木炭痕がみられる。

③ 鉄滓 (第208～216図, 第48表)

遺構・包含層から総重量約150kgの製錬滓が出土した。報告は遺構内出土鉄滓を対象に、炉外滓と炉内滓に分けて行う。炉内滓については形状、内部組織、磁力等から細分を行った。

1) 炉外滓 (第208図 1322～1331)

1322～1325は炉の外部に流れ出した流出滓のうち、細長い形状である。表面は気泡がなく滑らかで、裏面に砂礫の付着があることから、水平方向に流れた流失滓である。1322は断面が楕円形で長さ9.2cm、幅5.2cmの円柱状である。形が直線的で整っているため、流失孔を流れた滓と推測される。内部には空洞がある。1323・1324は細く曲がった滓で、1323は流出滓の先端部にあたる。1325は、数条の流失滓が複数集まっている。表面は瘤状に膨らんでいる。

1326は全面に垂直方向の流動痕跡を残しており、砂礫の付着が少ない。いわゆる「鳥足状鉄滓」である。流動した製錬滓がほぼ垂直におちるような段差が、排滓孔と炉全面との間にあったことを示している。

1327～1329は、板状に広がった流失滓である。裏面に砂礫の付着があることから、水平方向に流れた流出滓で、流動状の滓が排滓場で数条折り重なって形成されたものと推察される。内部には、空洞がある。1327と1328は、表面が滑らかでにぶい光沢がある。質感は、先述した細長い滓と同じである。1329は厚みがなく、表面に瘤状の凹凸がみられ、部分的に鉄分が付着している。表面には極小の気泡があり、多くの砂礫が付着している。

1330・1331は、炉外滓に分類すべきか判断に迷う資料である。流動状で地面を流れた痕跡があることから炉外滓として報告する。1330は、流失滓の先端部で表面が瘤状に膨らみ内部は気泡が発達している。磁力は無く、下面に砂が付着している。1331は、多くの木炭を噛み込んでいるため、凹凸が著しい。流動化した部分は、黒色で光沢をもっている。磁力は無い。

3) 炉内滓 (第209図)

炉内滓は、平面・断面の形状、磁力の有無等から、7種類に細分して報告する。分類に当たっては、いくつかの滓をハンマーで割り、内部組織の情報も参考とした。出土数については第50表に示した。

炉底滓A (第209図 1332～1338)

断面が楕円で、炉底で生成された製錬滓である。内部は空隙がなく緻密で、重量感がある。表面は鉄分を覆われ赤茶けた色調で、弱い磁力をもつ。1332は縦16.9cm、横14cmの滓で裏面には炉底の砂粒が付着している。楕円形滓の上に溶けた鉄塊がのっており、鉄塊は磁力をもっている。両側面の凹みは、羽口による送風のためと推察される。

1333は、黒色で緻密な楕円形滓である。楕円形滓の上面には、鉄分を帯びた赤茶けた滓が薄く付着している。磁力はない。1336も黒色で光沢があり、1333に近い特徴をもつ。上面は木炭痕のため凹凸があり、裏面には砂が付着している。磁力はない。

1334は、楕円形の薄い楕円形滓である。滓の中央が大き

く凹んでいる。微弱な磁力をもつ。1335・1337は1333と同様の滓である。1338は、科学分析で砂鉄製鍊滓と報告されている。

炉底滓B（第210図 1339～1341）

断面が、椀形で厚みのある製鍊滓である。表面は、流動状で多くの木炭痕を噛み込んでいるために凹凸が著しい。色調は黒っぽく、内部は空隙が多く密度が低いため軽い。磁力は弱く、底面は木炭の間を垂下した痕跡が残っている。炉底滓Aとは特徴が異なるが、断面形態から炉底滓に分類した。

1339は、3cm大の鉄塊が1か所生成している。1340は、科学分析で砂鉄製鍊滓に分類されている。

炉内滓C（第211図 1342～1344）

4～9cm大の赤茶けた丸い滓である。内部に空隙があり、錆が表面を覆っているが、磁力はほとんどない。重量感があり、小さな木炭痕を噛み込んでいる。特徴が炉底滓Aの上部に付着している滓に似ており、その一部ではないかと推察される。

炉内滓D（第212図 1345～1347）

4～6cm大の黒味を帯びた楕円形の滓である。表面は小さな凹凸があり、指先に引っ掛かる感触で、一部瘤状に流動化している箇所もある。内部は小さな気泡があり、

磁力はない。大きさは炉内滓Cに近いが、鉄分の付着度、色調が異なるため分類した。炉底滓の一部ではないかと推察される。

炉内滓E（第213図 1348～1353）

4～7cm大の黒色で、内部が緻密な滓である。多面形で重く磁力はない。炉底滓の下部及び炉壁近くに類似の滓が、生成されている。1361は、科学分析で砂鉄製鍊滓に分類されている。

炉内滓F（第214図 1354～1356）

ガラス質の滓である。内面は黒色で光沢があり、軽い。溶けた炉壁の一部と推察される。

炉内滓G（第215図 1357～1364）

科学分析によって含鉄鉄滓と分類された一群である。鉄を含んでいるため重く、磁力が強い。表面には亀裂が入っている。大きさは3～6cmで、平面形は棒状及び円形である。鉄塊と似通っており、表面観察及び磁力の強弱を基準に両者を分類することは困難である。1361・1364は科学分析で砂鉄製鍊滓と推定され、1361は、金属鉄の生成が不十分なまま廃棄されたものと推測されている。

鉄塊（第216図 1365～1369）

表面観察では、含鉄鉄滓との分類が困難であるため、科学分析によって鉄塊（1365・1368）、鉄素材と判断された資料を中心に報告した。平面形は球状及び棒状で、

第47表 遺構内鉄滓出土一覧表

遺構名	炉外滓	炉内滓							鉄塊	重量 (Kg)
		炉底A	炉底B	炉内C	炉内D	炉内E	炉内F	炉内G		
製鉄炉1	2			1	1	1	1	1	1	0.5
製鉄炉2		1	1		1			3	1	1.6
製鉄炉3		1		1			1			1.1
製鉄炉4	28		1	1	1	3	1	2	1	2.2
土坑46	6							1		0.2
土坑49	6	2	1							0.9
土坑51	2					1				0.1
土坑54		2								0.5
計	44	6	3	3	3	5	3	7	3	7.1

第48表 炉壁・炉底観察表

挿図番号	No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
206	1309	土坑54号	24.5	17.0	12.2	1,900.0	SX14
	1309	土坑54号	24.7	12.4	11.5	2,600.0	SX14
	1310	土坑54号	34.1	18.0	17.0	7,400.0	SX14, 送風孔1か所
207	1311	製鉄炉4号	16.4	18.9	7.0	2,380.0	SX21
	1312	土坑54号	23.8	11.5	13.1	2,100.0	SX14, 送風孔2か所
	1313	土坑50号	10.2	8.1	4.0	371.9	SX20
	1314	製鉄炉4号	6.4	10.6	2.9	146.9	SX21
	1315	土坑54号	8.4	14.9	2.8	265.4	SX14
	1316	製鉄炉4号	7.2	8.4	2.9	106.2	SX21
	1317	製鉄炉3号	6.3	7.8	4.2	167.4	SX22
	1318	製鉄炉1号	3.3	5.7	3.8	44.7	SX23
	1319	製鉄炉2号	5.5	3.9	-	72.0	SX19
	1320	土坑46号	5.9	4.5	2.6	64.8	SX6
	1321	土坑54号	19.6	23.3	12.7	2,400.0	SX14



第208图 炉外滓



1332



1333



1334



1336



1335



1337



1338

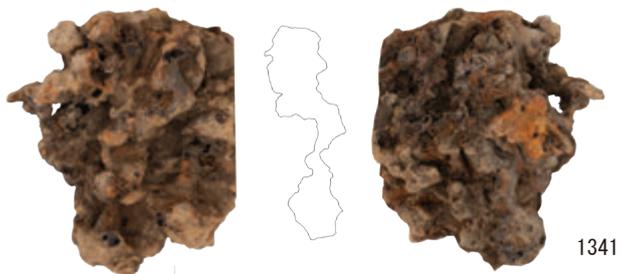


第209图 炉底滓 A



1339

1340



1341

第210图 炉底滓B



1342

1343

1344

第211图 炉内滓C



1345

1346

1347

第212图 炉内滓D



1348

1349

1350



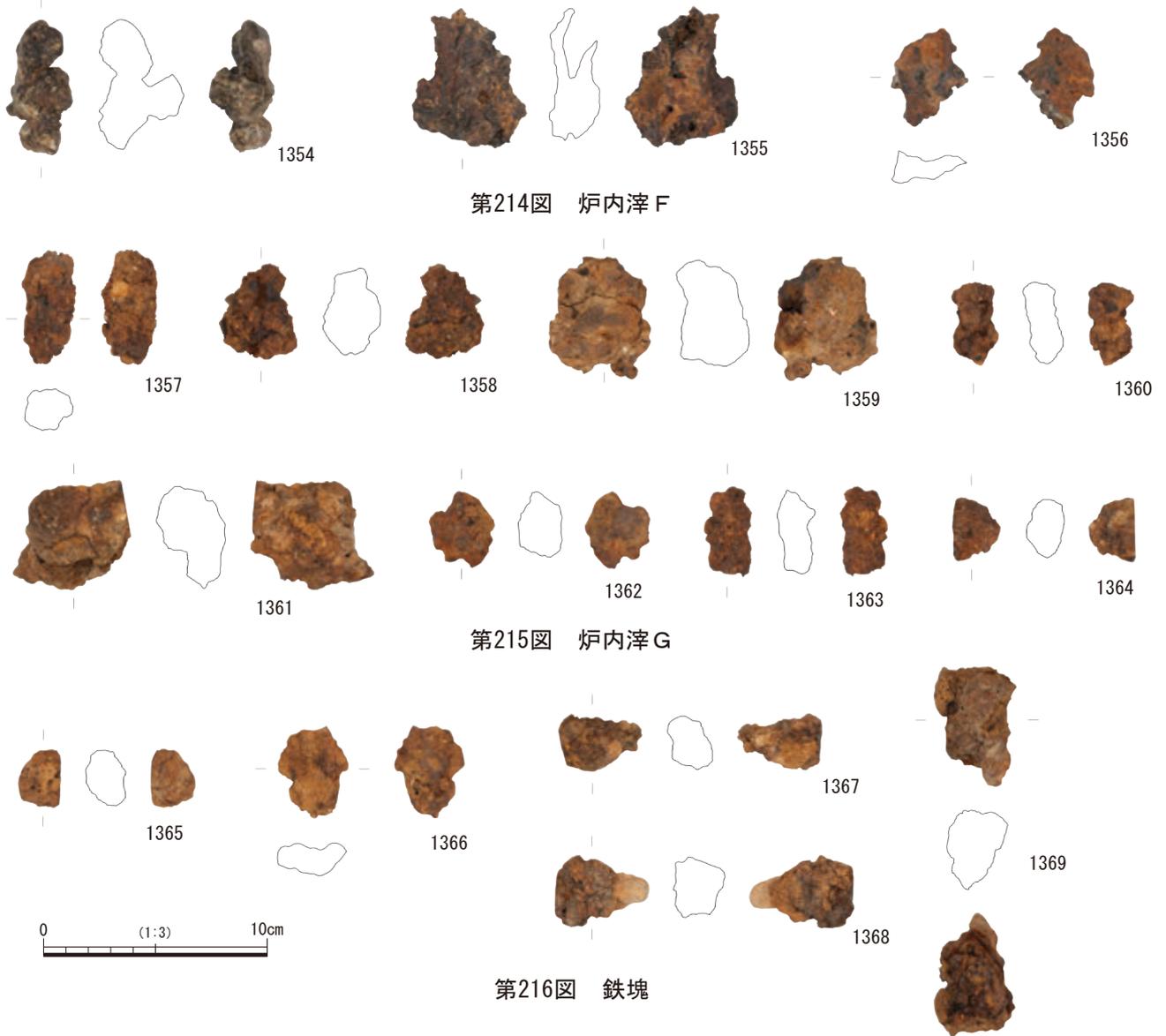
1351

1352

1353

第213图 炉内滓E





第49表 鉄滓観察表

挿図番号	No.	出土地点	分類	重量 (g)	科学分析	挿図番号	No.	出土地点	分類	重量 (g)	科学分析	挿図番号	No.	出土地点	分類	重量 (g)	科学分析
208	1322	製鉄炉1号	炉外滓	236.7		210	1338	溝状遺構4号	炉底滓 A	400.0	製鍊滓	214	1354	製鉄炉4号	炉内滓 F	13.2	
	1323	製鉄炉4号	炉外滓	20.4			1339	製鉄炉2号	炉底滓 B	277.3			1355	製鉄炉3号	炉内滓 F	39.0	
	1324	製鉄炉4号	炉外滓	77.5			1340	製鉄炉4号	炉底滓 B	168.0			1356	製鉄炉1号	炉内滓 F	10.1	
	1325	製鉄炉4号	炉外滓	84.2			1341	土坑49号	炉底滓 B	220.0	製鍊滓		1357	製鉄炉4号	炉内滓 G	31.5	
	1326	製鉄炉4号	炉外滓	75.3			1342	製鉄炉1号	炉内滓 C	35.3			1358	製鉄炉4号	炉内滓 G	46.5	
	1327	製鉄炉1号	炉外滓	105.5			1343	製鉄炉4号	炉内滓 C	54.4			1359	土坑46号	炉内滓 G	90.8	
	1328	製鉄炉4号	炉外滓	230.7			1344	製鉄炉3号	炉内滓 C	173.7			1360	製鉄炉1号	炉内滓 G	15.4	
	1329	製鉄炉4号	炉外滓	219.0			1345	製鉄炉2号	炉内滓 D	49.4			1361	製鉄炉2号	炉内滓 G	108.6	製鍊滓
	1330	製鉄炉4号	炉外滓	56.7			1346	製鉄炉1号	炉内滓 D	58.7			1362	土坑46号	炉内滓 G	17.9	
	1331	製鉄炉4号	炉外滓	99.7			1347	製鉄炉4号	炉内滓 D	80.0			1363	製鉄炉2号	炉内滓 G	13.2	
209	1332	製鉄炉2号	炉底滓 A	1,140.0		211	1348	製鉄炉4号	炉内滓 E	101.3		215	1364	製鉄炉2号	炉内滓 G	15.6	製鍊滓
	1333	製鉄炉3号	炉底滓 A	900.0			1349	製鉄炉4号	炉内滓 E	145.2			1365	製鉄炉1号	鉄塊	15.4	鉄塊
	1334	土坑54号	炉底滓 A	363.0			1350	製鉄炉4号	炉内滓 E	103.5			1366	製鉄炉1号	鉄塊	20.6	
	1335	土坑54号	炉底滓 A	147.2			1351	製鉄炉1号	炉内滓 E	59.0			1367	製鉄炉2号	鉄塊	34.7	鉄素材
	1336	土坑49号	炉底滓 A	205.5			1352	土坑51号	炉内滓 E	71.4	製鍊滓		1368	製鉄炉4号	鉄塊	44.5	鉄塊
	1337	土坑49号	炉底滓 A	155.8			1353	溝状遺構4号	炉内滓 E	53.4	製鍊滓		1369	土坑46号	鉄塊	78.0	

強い磁力をもつ。1367は、科学分析で鍛打成形を行った鉄素材と報告されている。

2 炉跡遺構調査区

炉跡調査区は、製鉄遺構調査区の西側にあり、両調査区は、農道により分断されている。本調査区では、炉跡20基、ピット約420基、土坑11基を検出した。これらの遺構群は、シラスまで地盤を切り下げて構築されているため、炉跡調査区全体が周囲より一段低くなっている。シラスは排水が良く、掘削も容易である。そのため、地盤の切り下げは、炉跡の湿気対策と構築の効率化のため行われたと考えられる。遺物は、17世紀～18世紀中頃の陶磁器が確認されているが、数は少ない。

(1) 炉跡

炉跡は、ピット集中域の南北2か所に分かれて検出した(第217図)。ピット集中域より南側の炉跡群を南部炉跡群、北側を北部炉跡群として報告する。南部炉跡群の放射性炭素年代値は、北部炉跡群の測定値より古い傾向がある。炉跡の主軸は南北方向と東西方向の2つで、床面・壁面ともにVI層のシラス中に構築されている。連続して造られているため、切り合いが顕著である。

ピット集中域は、炉跡がなく、人の活動によって汚染された炭化物混じりの土で覆われているため、作業場と想定される。ピットは、根石と推測される石が入っているため、その多くは柱穴と考えられる。しかし、配置が不規則であり、建物を復元することが難しい。これは、簡易な建物が、重複して建て替えられた結果であると考

える。

また、炉跡の近くでも、ピットが確認されており、簡素な覆屋等の存在が想定できる。ピットの埋土はしまりがなく、柱の多くは抜き取られたものと判断した。

① 南部炉跡群

ピット集中域南部では、8基の炉跡を検出した。

1) 炉跡7号～10号(第218～221図)

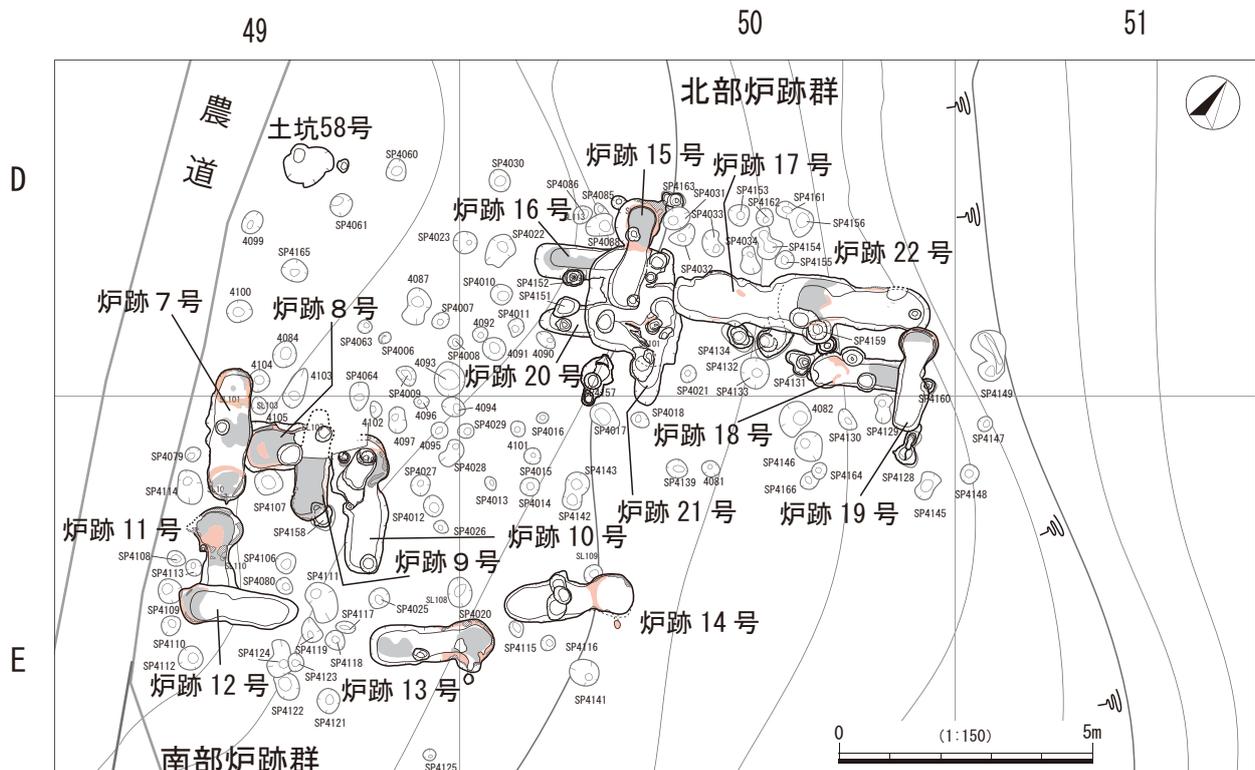
4基の炉跡が重複しながら連続して構築される。東西軸の炉跡8号が最も古く、南北軸の3基は7号→9号→10号の順に西から構築された状況が窺える。切り合い関係は、以下の通りである。

- ・炉跡7号は炉跡8号を切っている。
- ・炉跡9号は炉跡8号を切っている。
- ・炉跡10号は9号を切っている可能性がある。

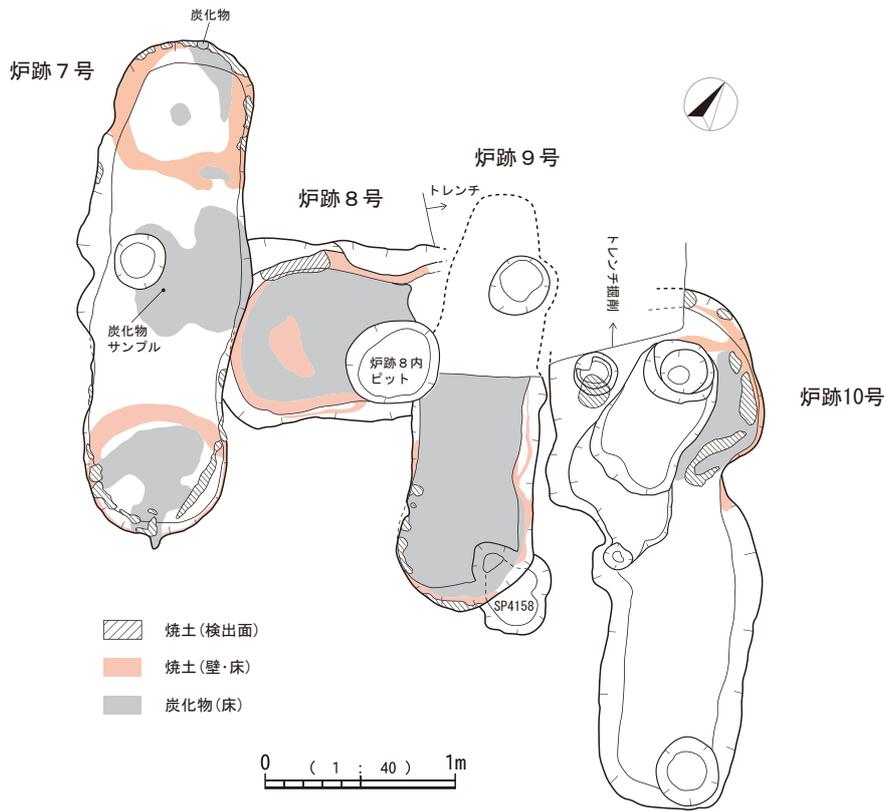
炉跡7号(第219図)

炉跡7号は、VI層で検出した。中央部は後世のピットに切られている。主軸は南北方向で、全長2.62m、最大幅0.94mである。平面形は隅丸長方形で、中央部に作業部があり、その両側に燃焼部がある。燃焼部は円形で、焼土の範囲から直径0.7mと想定され、床面には炭化物の集中が確認された。焼土は検出時に壁際で確認され、床面と壁面は地山が焼けて赤色化し円形に巡る。天井の一部が床面に落ちていた。

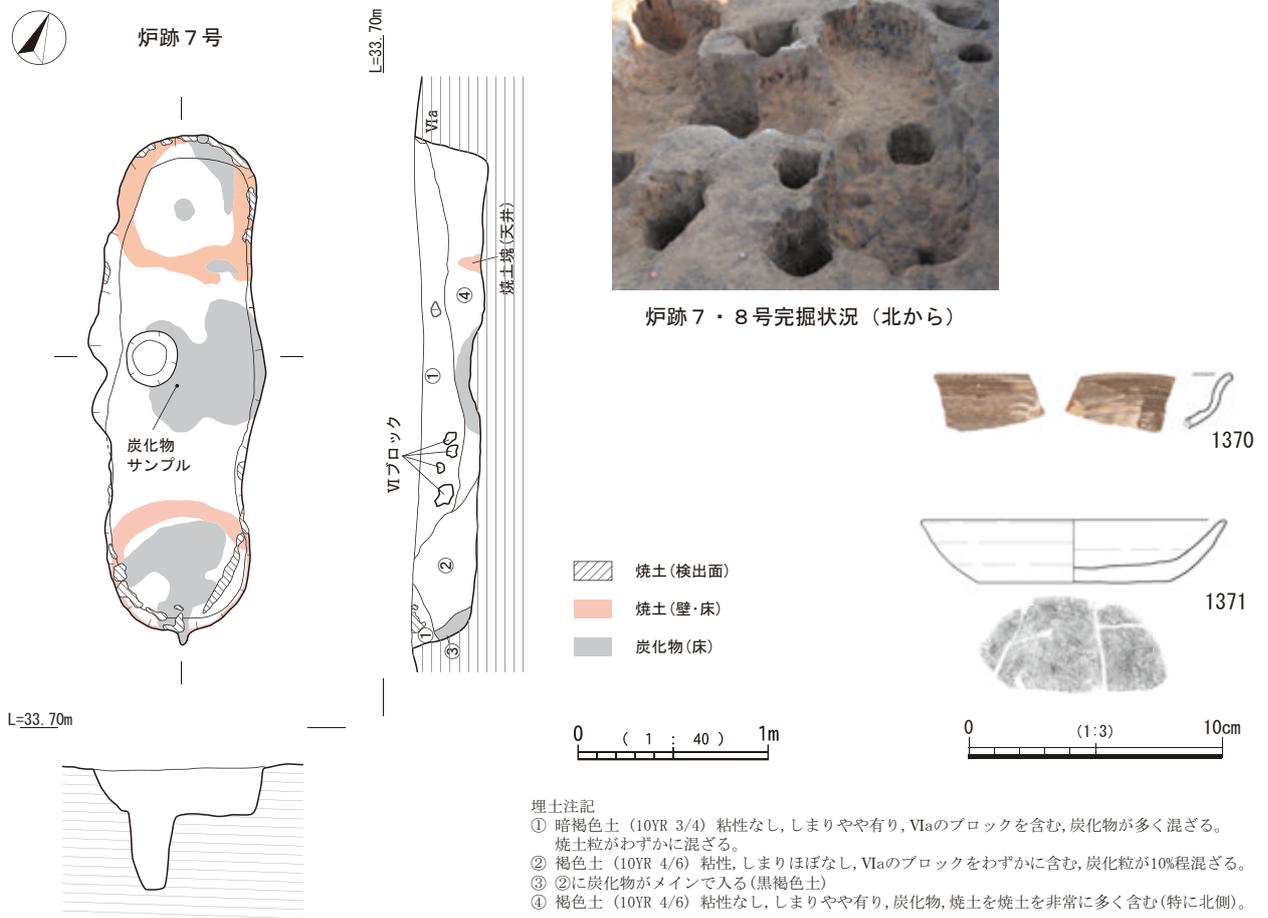
作業部は、燃焼部から掻き出したと推測される炭が堆積しており、炭化物の放射性炭素年代測定(2σ)は1453-1518calAD(72.22%)である。埋土は、埋め戻しの可能性がある。



第217図 炉跡遺構配置図



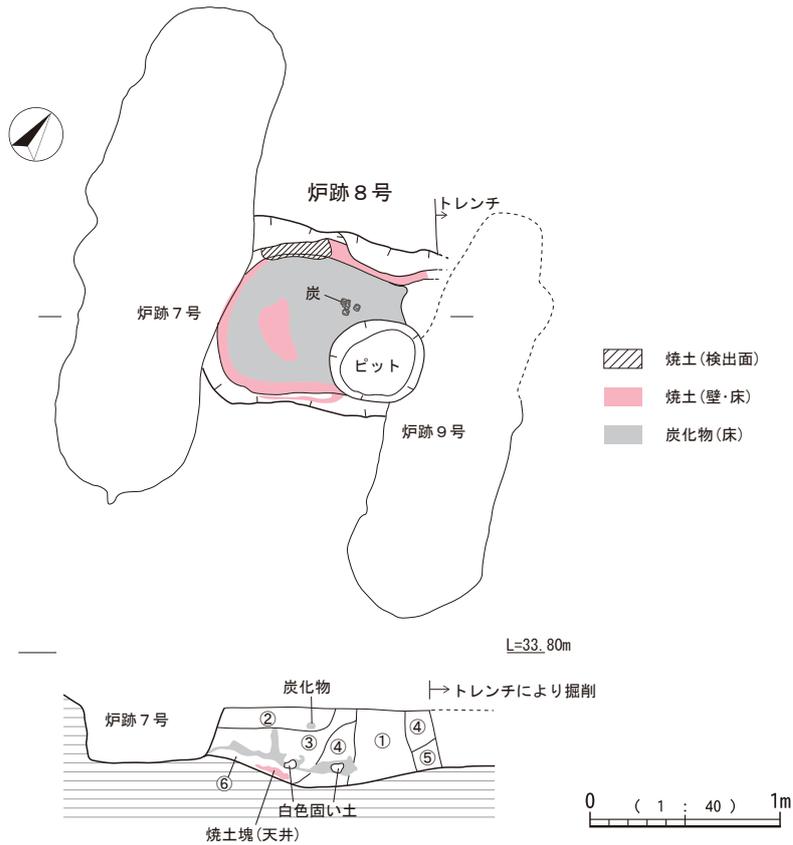
第218図 炉跡7～10号配置図



第219図 炉跡7号・出土遺物

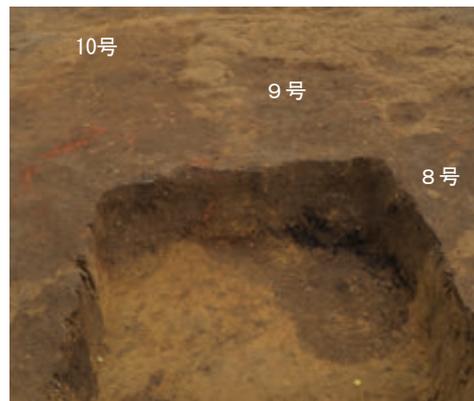
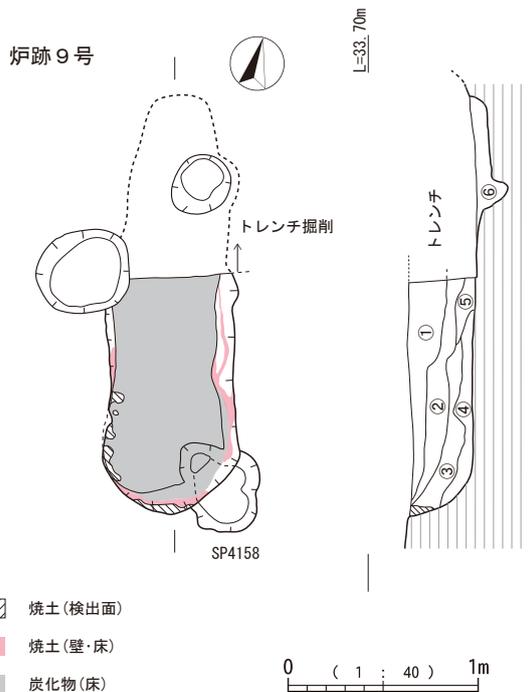
埋土注記

- ① 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性なし, しまりやや有り, VIaのブロックを含む, 炭化物が多く混ざる。焼土粒がわずかに混ざる。
- ② 褐色土 (10YR 4/6) 粘性, しまりほぼなし, VIaのブロックをわずかに含む, 炭化粒が10%程混ざる。
- ③ ②に炭化物がメインで入る(黒褐色土)
- ④ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性なし, しまりやや有り, 炭化物, 焼土を焼土を非常に多く含む(特に北側)。



炉跡8号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/6) しまり, 粘性やや有り。VI層ブロック, 焼土粒(数mm), 炭化物, 白色粒含む。ピットの埋土か。
- ② 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり, 粘性やや有り。VI層ブロック(数mm~数cm)を多く含む。焼土粒(数mm)炭化粒を含む。部分的に大きい炭化物含む。
- ③ 褐色土 (10YR 4/6) しまり強い, 粘性やや有り。VI層ブロック(数cm), 炭化物, 白く固い土を多く含む。焼土粒(数mm)を含む。
- ④ 黄褐色土 (10YR 5/6) しまり, 粘性やや有り部分的に強くしまる土がある。VI層ブロック(1cm程度), 焼土粒(数mm)白色粒を多く含む。
- ③とほぼ同じだがやや色が明るい。
- ⑤ 褐色土 (10YR 4/6) しまり有り, 粘性やや有り, VI層ブロック(1~数cm), 炭化物を多く含む。白色粒含む。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR 2/3) しまり, 粘性弱い。炭化物メインの層, 焼土粒(数mm~1cm)をわずかに含む。

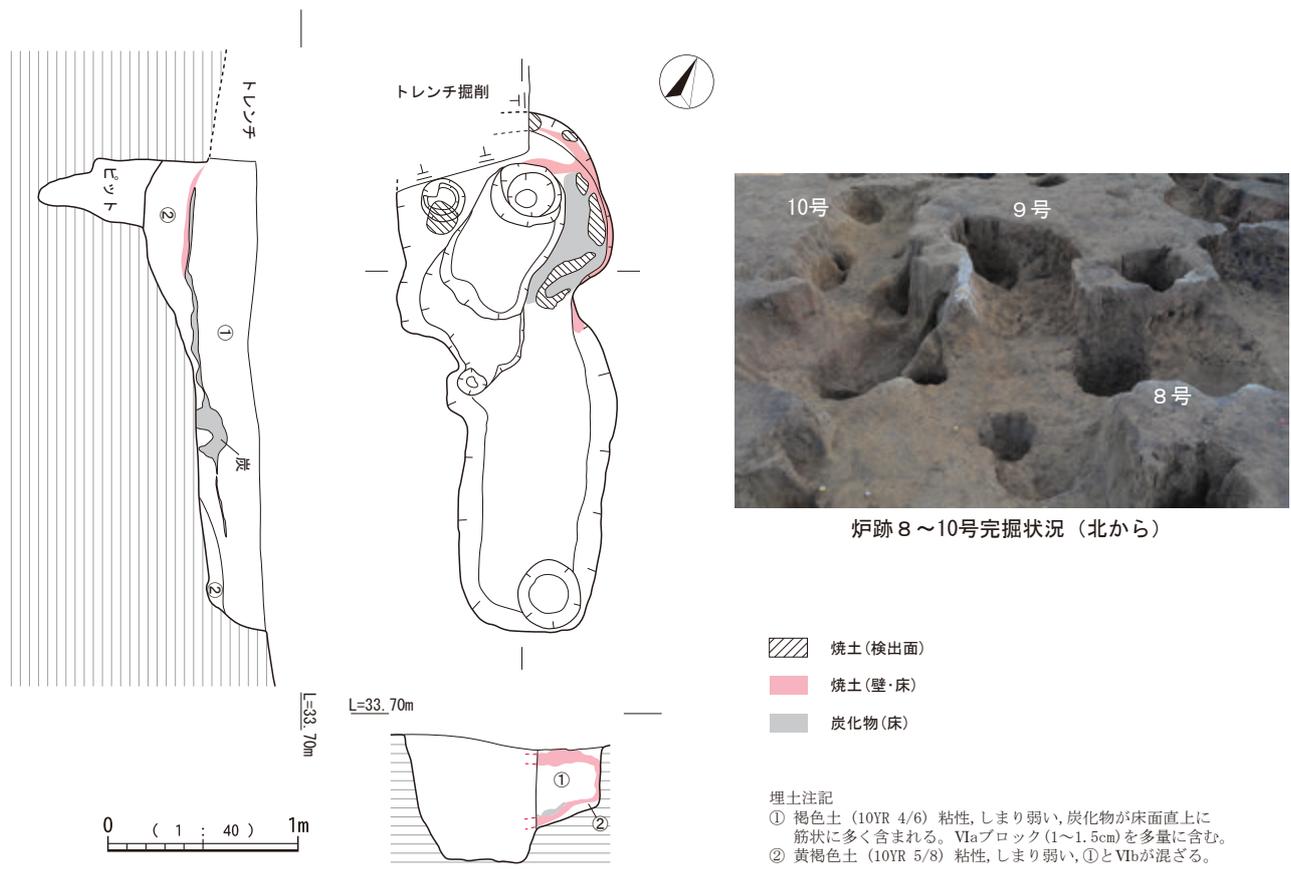


炉跡8~10号検出状況(北から)

炉跡9号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/6) 粘性, しまり弱い。VI層ブロック, 白色粒を多く含む。部分的に固い粘土(褐色土 10YR 4/4 数cm大)を含む(特に北側に多い)。
- ② 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性, しまりやや有り。VI層ブロック(数cm~10cm大)を多く含む。焼土をわずかに含む。
- ③ 褐色土 (7.5YR 4/6) 粘性, しまりやや有り。VI層ブロック, 焼土を多く含む。
- ④ 黒色土 (10YR 1.7/1) 粘性, しまり弱い。炭化物層, 焼土粒(数mm)がやや混ざる。
- ⑤ 褐色土 (10YR 4/4) 粘性やや有り, しまり強い。焼土, 炭化物, VI層ブロックが混在する。
- ⑥ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性, しまり弱い。VI層ブロック, 白色粒, 炭化物(数mm)を含む。

第220図 炉跡8・9号



第221図 炉跡10号

出土遺物 (第219図 1370・1371)

1370は、肥前系陶器の皿である。口縁部が外反し、内外面に白化粧土を施す。年代は、17世紀初頭である。1371は、中世後半の土師器皿である。

炉跡8号 (第220図)

炉跡8号は、VI層で検出した。炉跡7号及び確認トレンチに切られているため、燃焼部のみ残存している。また、燃焼部は埋没後、ピットに切られている。

主軸は、東西方向である。燃焼部の床面と壁面は、地山が焼けて赤色化している。炭化物層は床面直上付近で2層に分かれており、複数回使用された可能性がある。床面の炭化物層には焼土塊、その上位の炭化物層には白色化した硬い土が混入している。埋土はブロック状に堆積し、埋め戻しの可能性がある。炭化物の放射性炭素年代測定(2σ)は、1550-1635calAD(58.9%)である。

炉跡9号 (第220図)

炉跡9号は、VI層で検出した。主軸は南北方向で、燃焼部は南側にある。北半分は確認トレンチに切られているため、床面近くまで削平されている。図面上端については、床面の残存範囲から推定した。また、西壁を新しいピットに切られ、ピット4158を切っている。

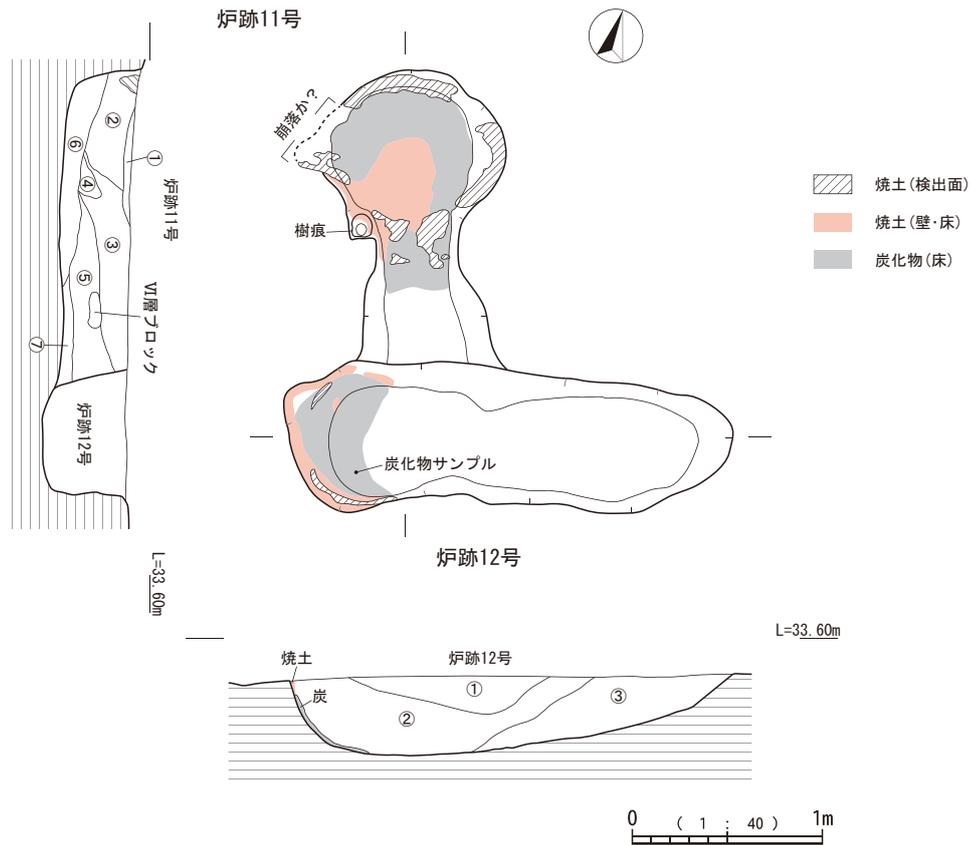
燃焼部は、炭化物層が床面直上に堆積し、床面と壁面

は、地山が焼けて赤色化している。炭化物の放射性炭素年代測定(2σ)は、1499-1521calAD(70.64%)である。作業部のピットは、埋土の状況から炉跡に伴う可能性が高いと判断した。埋土は、埋め戻しの可能性がある。

炉跡10号 (第221図)

炉跡10号は、VI層で検出した。主軸は南北方向で、全長2.74m、最大幅1.1mである。平面形は燃焼部が大きいひょうたん形で、燃焼部は北側にある。西半分を先に完掘したため、燃焼部西半分の焼土及び炭化物の範囲は未実測である。

燃焼部と作業部の間には、アーチ部分が一部残っているため、焼けた壁がドーム状に確認された。底面の焼土は②層上面に形成され、その直上に炭化物層がレンズ状に堆積している。炭化物層の南側は、①層下部に続いていく状況が見られた。焼土の下には、人為的な埋土と考えられる②層が堆積している。そのため、炉跡は床面の補修と埋め戻しを行いながら、複数回使用された可能性が高い。炭化物層の放射性炭素年代測定(2σ)は、1455-1523calAD(58.82%)である。



炉跡12号 埋土注記

- ① 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性、しまり弱い。VI層ブロック、白色土(被熱か)を多く含み、炭化粒(数mm)を中量含む。
- ② 褐色土 (10YR 4/6) 粘性、しまりやや有り。VI層ブロック(数cm)、白色土、炭化粒(数mm~数cm)を多く含む。床面に炭化物が多く付着。
- ③ 黄褐色土 (10YR 5/8) 粘性、しまり弱い。VI層ブロックが大半を占め、他の埋土に比べかなりやわらかい、黒色土の粒を含む。

炉跡11号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR4/6) 粘性やや有り、しまり強い。焼土粒(数mm)を少量含む炭化物を多く含む。
- ② 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性やや有り、しまり強い。VI層ブロック(数mm~1cm)、焼土粒(数mm)、炭化物を含む。10cm程の炭化物の塊の上に、炭由来のシミがのびる。
- ③ 黄褐色土 (10YR 5/8) 粘性、しまり弱い。VI層ブロック(1~数cm)を多く含む。炭化物、焼土粒(数mm)含む。
- ④ にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 粘性、しまり弱い。炭化物メインだが、⑥の炭化物由来のシミと考えられる。VI層ブロックをわずかに含む。
- ⑤ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性弱い、しまりやや有り。VI層ブロックを多く含む。炭化物(数mm)を含む。
- ⑥ 黒色土 (10YR 1.7/1) 粘性、しまり弱い。炭化物層、VI層ブロックを含む。
- ⑦ 黄褐色土 (10YR 5/8) 粘性、しまりやや有り。炭化物、VI層ブロックを多く含む。

第222図 炉跡11・12号

2) 炉跡11号 (第222図)

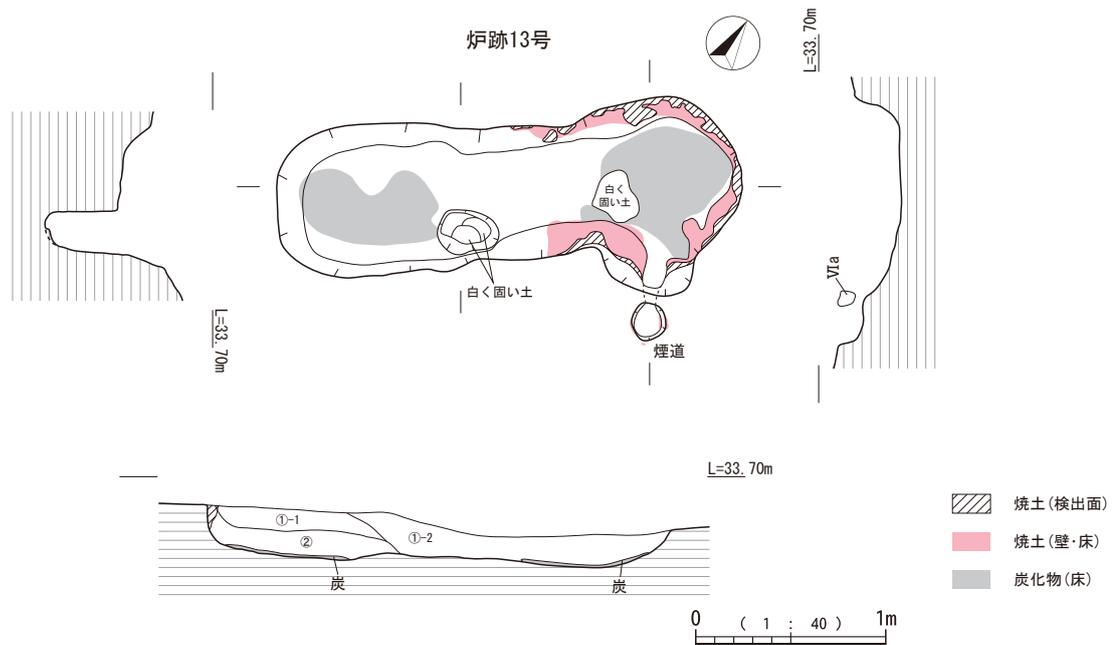
炉跡11号は、VI層で検出した。作業部を炉跡12に切られている。主軸は南北方向で、残存長1.56m、最大幅0.95mである。平面形は燃焼部が大きいひょうたん形で、燃焼部は北側にある。

燃焼部は検出面の焼土範囲から、直径0.8mと想定され、床面直上は焼けて赤色化している。炭化物層(⑥層)が、燃焼部から作業部の床面直上に残っていた。西端の一部は、崩落している。

埋土は10cm大の炭化材を含み、埋め戻しの可能性がある。炭化物層の放射性炭素年代測定(2σ)は、1437-1493calAD(93.92%)である。

3) 炉跡12号 (第222図)

炉跡12号は、VI層で検出した。炉跡11号を切っている。主軸は東西方向で、全長2.3m、最大幅0.7mである。平面形は楕円形で、燃焼部は西側にある。検出面近くの壁は、焼けて赤色化し、その下に炭化物層が残っている。埋土は、埋め戻しの可能性がある。炭化物の放射性炭素年代測定値(2σ)は、1538-1636calAD(63.34%)である。



埋土注記

- ① 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性弱い, しまり有り。VI層ブロックを多く含む。①-1は1cm程度の焼土を多く含み, 炭化粒及び白色粒(軽石)を含む。
- ①-2は炭化物を多く含み, 白色粒(軽石)をわずかに含む。
- ② 黄褐色土 (10YR 5/8) VI層が大きくブロック状に入る。炭化物が多く含まれる。



第223図 炉跡13号・出土遺物

4) 炉跡13号 (第223図)

炉跡13号は, VI層で検出した。主軸は東西方向で, 全長2.44m, 最大幅1.04mである。平面形は隅丸長方形で, 燃焼部は東側にある。検出面近くの壁は, 焼けて赤色化し, 床面直上に炭化物層が堆積している。直径0.18mの煙道が, 南側についている。煙道内部は, 焼けている。

作業部では, 焼成部から掻き出された炭化物を床面直上で確認した。小さなピットが, 東壁近くで検出され, 底面には白く固い土が入っていた。

このピットは, 炉跡に伴うと判断される。埋土は埋め戻しの可能性があり, 炭化物の放射性炭素年代測定値 (2σ) は, 1451 ~ 1523calAD (64.7%) である。

出土遺物 (第223図 1372・1373)

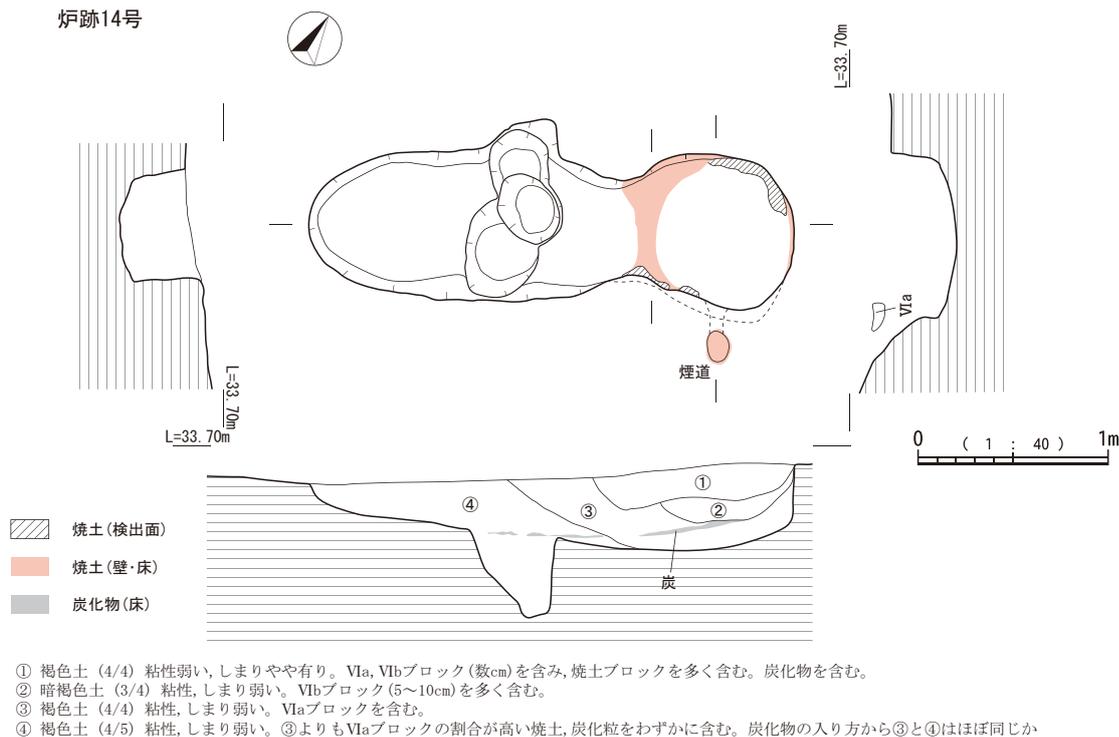
1372は, 瓦器の茶釜である。1373は, 龍泉窯系青磁の碗である。歴博分類B3類に該当する。年代は, 15世紀中頃~後半である。

5) 炉跡14号 (第224図)

炉跡14号はVI層で検出した。主軸は東西方向で, 全長2.56m, 最大幅0.8mである。平面形はひょうたん形で, 燃焼部は東側にある。燃焼部床面は, 被熱により中央が白色・硬化し, 周囲の壁面はドーナツ状に赤色化している。焼土の範囲から, 燃焼部の直径は0.9mと想定できる。直径0.15mの煙道が南側につく。煙道内部は, 焼けて赤色化している。

炭化物は, 燃焼部から作業部にかけてレンズ状に堆積している。床面から浮いているために, 炉跡は, 床面の清掃と埋め戻しを行いながら, 複数回使用された可能性が高い。

作業部で検出されたピットは, 切り合いが認められず, 埋土が同じであることから, 炉跡に伴う遺構と判断した。



第224図 炉跡14号

② 北部炉跡群 (第225図)

ピット集中域北側で、12基の炉跡を検出した。

1) 炉跡15・16・20・21号 (第226図)

4基の炉跡が重複して検出された。最も新しい炉は、15号である。残り3基は燃焼部が同じ方向を向いて重複しているため、新旧関係は明らかでない。炉跡が構築される度、掘り直されたため、3基の燃焼部は、大きな土坑状となっている。埋土は埋め戻しの可能性がある。

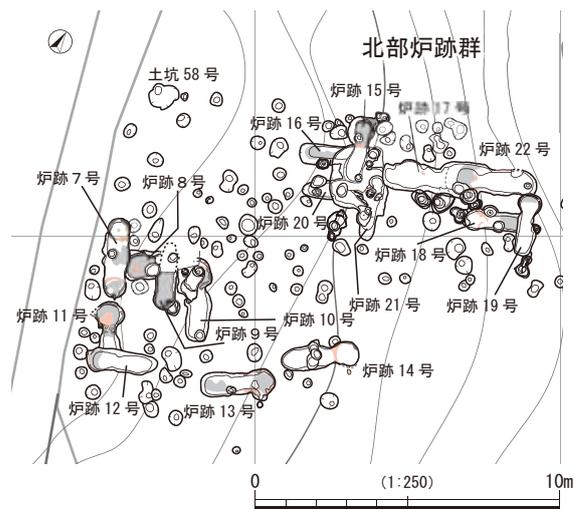
炉跡15 (第226図)

炉跡15号は、VI層で検出した。主軸は南北方向で、全長2.2m、最大幅0.9mである。平面形は隅丸長方形で、燃焼部の床面は被熱により中央が白色・硬化し、その周囲の壁面はドーナツ状に赤色化している。床面には、炭化物層が確認された。炭化物の残りは良好で、木材の形を確認できる炭化材がある。炭化物の放射性炭素年代測定値(2σ)は、1540-1635calAD(58.9%)である。燃焼部内で検出されたピットは、炉跡構築以前と考えられる。

燃焼部に隣接するピット2基のうち、P4163は内部に白く固い土が入っている。また、作業部南西隅にも同規模のピットが確認された。いずれも、炉跡に伴うと考えられる。

出土遺物 (第227図 1374~1379)

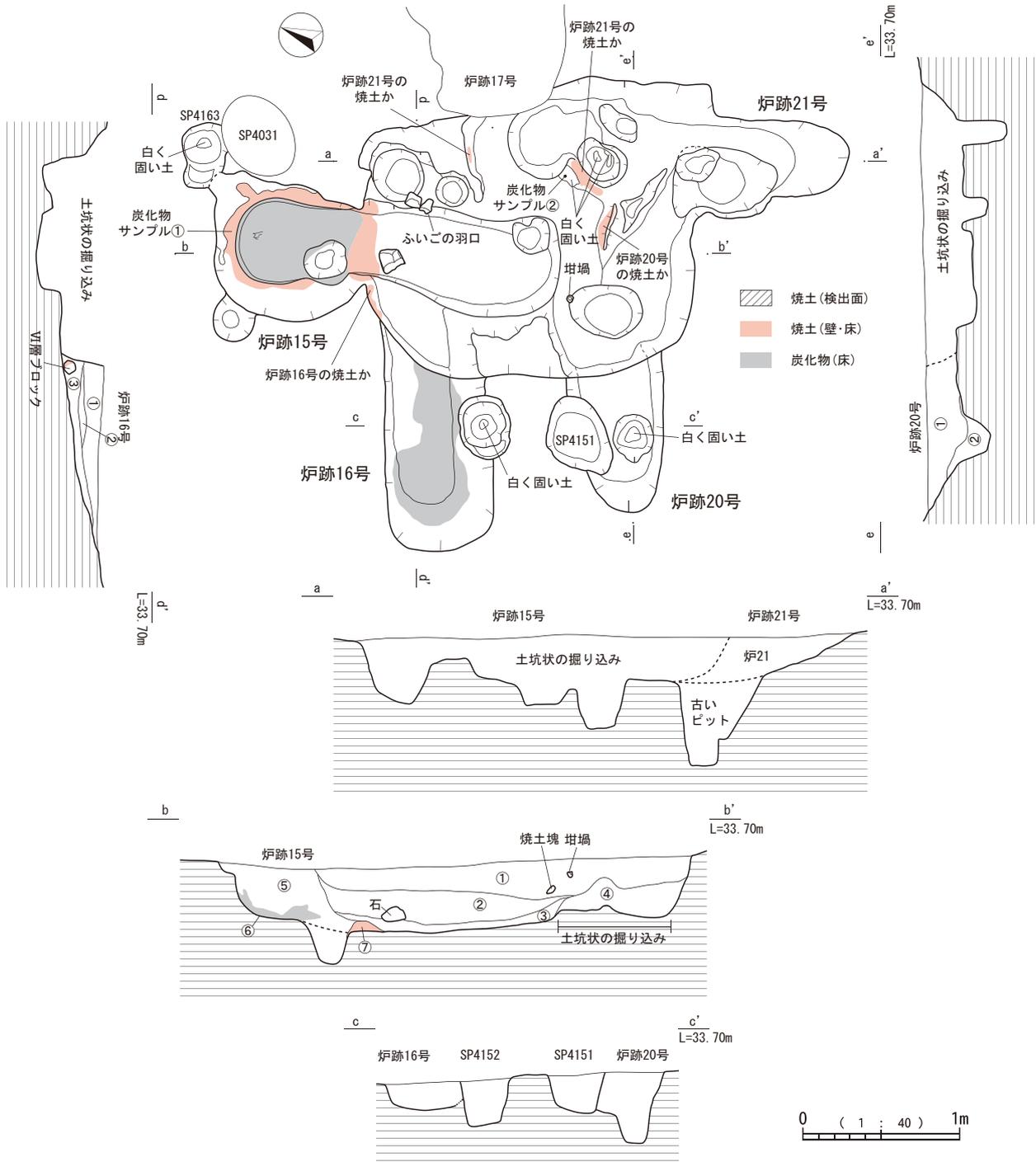
1374は、青花である。歴博分類の染付碗C類に該当する。外面と見込みに渦文と丸文を組み合わせたような文様がある。年代は、15世紀後半~16世紀前半である。



第225図 北部炉跡群の位置

1375は、初期伊万里の青磁鉢である。土坑52号出土の青磁鉢と同一個体である。口縁部には輪花を作り、体部内外面に鎬蓮弁文を施す。口縁部内面には、型打成形時の布目痕が残っている。年代は、1630年~1640年である。

1376は、肥前系陶器の二彩手の鉢である。口縁部は短く直立し、内面には白化粧の上から口縁に鉄釉、体部に銅釉をかけている。体部下半の化粧土は、櫛目によって波状文となる。年代は、17世紀後半~18世紀初頭である。1377は、薩摩焼の播鉢である。苗代川産で年代は、17世紀から18世紀初頭である。1378は、小型の取鍋である。内面に銅が付着している。



炉跡15号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/6) しまりやや有り, 粘性弱い。焼土粒, 炭化粒 (数mm~1cm), VI層ブロック (数cm) を含む。
- ② 黄褐色土 (10YR 5/6) しまり, 粘性やや有り。VI層ブロック (数cm~10cm程) を多く含む。炭化粒 (数mm~数cm) を特に底部付近に多く含む。
- ③ 黒褐色土 (10YR 2/3) しまりやや有り, 粘性弱い。炭化粒 (数mm~1cm) を多く含む。焼土粒, VI層ブロック (1cm~数cm) を含む。
- ④ 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり, 粘性やや有り。VI層ブロック (1cm程) を含み, 埋土③側にかけ焼土粒, 炭化粒が多く含まれる。
- ⑤ 褐色土 (10YR 4/4) しまり, 粘性やや有り。VI層ブロック (数cm), 焼土粒 (数cm), 炭化物を多く含む。炭化粒 (数mm) は⑤の埋土中に点在し, 北側床面に炭化物がまがまがって付着する。
- ⑥ しまり, 粘性弱い焼土と炭化物の層。
- ⑦ しまり, 粘性弱い焼土塊。

炉跡16号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/6) しまりやや有り, 粘性弱い。VI層ブロックを多く含む。
- ② 黄褐色土 (10YR 5/6) しまり強い, 粘性有り。VI層ブロックを多く含む, 炭化物を含む。
- ③ 黒褐色土 (10YR 1.7/1) しまり, 粘性弱い。炭化物層, 焼土粒 (数mm) をわずかに含む。

炉跡20号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/4) しまり, 粘性弱い。VI層ブロック, 炭化物 (1cm程) 焼土粒 (数mm) をわずかに含む。
- ② 黄褐色土 (10YR 5/8) 締めり屋や有り, 粘性弱い。VI層ブロックを多く含む, 炭化物 (数mm) を含む。

第226図 炉跡15・16・20・21号

炉跡16（第226図）

炉跡16号は、VI層で検出した。主軸は東西方向で、作業部のみ残存している。炭化物層が、床面に残っていることから炉跡と判断した。土坑状の掘り込みの壁には、燃焼部の一部と推測される焼土跡が残っている。南壁には、炉跡に伴う小さなピットがあり、白色の固い土が入っている。炭化物の放射性炭素年代測定値（ 2σ ）は、1554-1633calAD（52.92%）である。

出土遺物（第227図 1379）

1379は、白磁皿の口縁部である。歴博分類白磁皿E群に該当する。年代は、16世紀前半である。

炉跡20

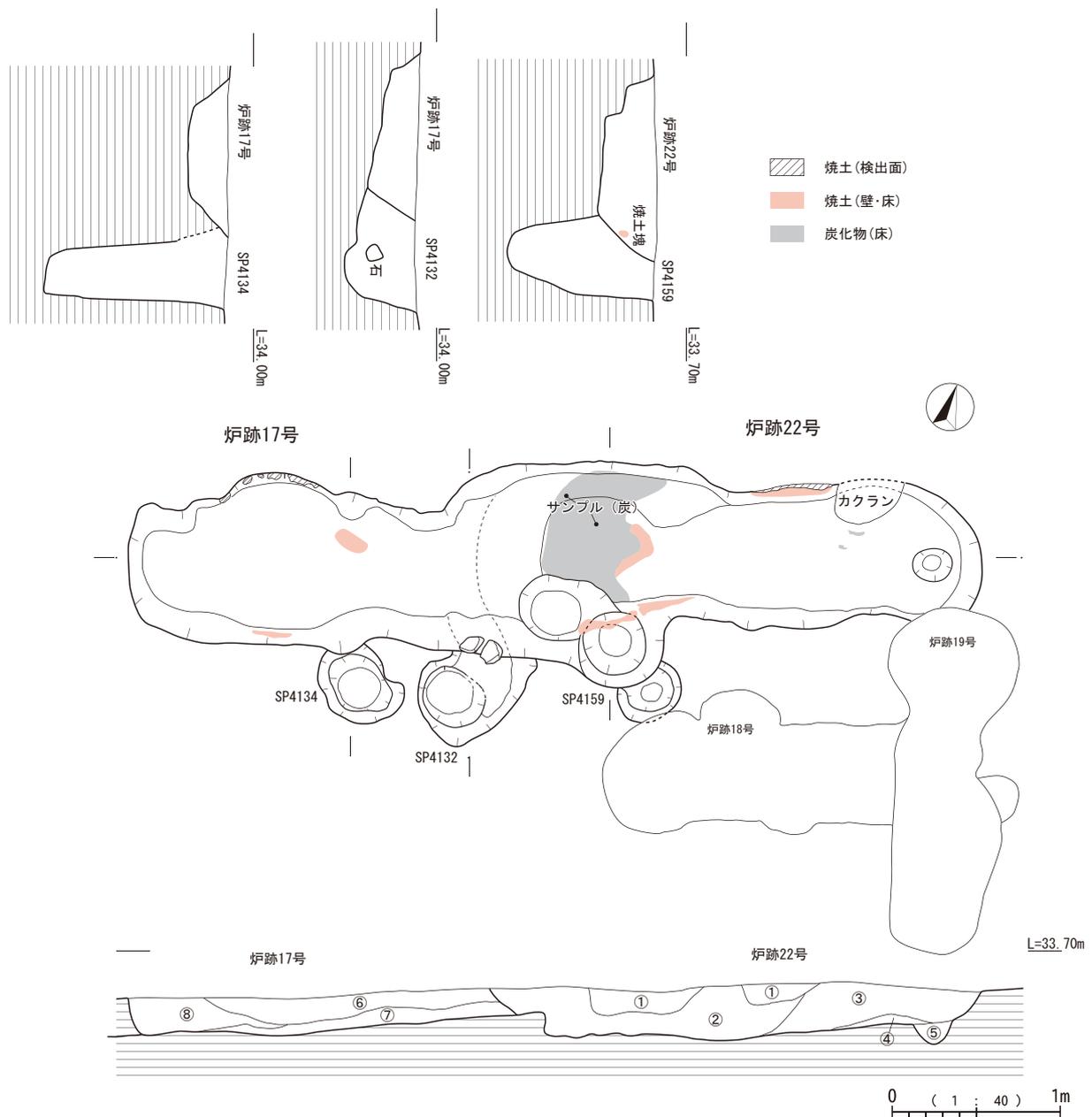
炉跡20号は、VI層で検出した。主軸は東西方向で、16号と同じ方向を向く。形態から炉跡の作業部と判断した。土坑状の掘り込み内部には、燃焼部の一部と推測される焼土跡が残っている。炉跡に伴うピットが2基あり、床面のピットには白色の固い土が入っている。

炉跡21（第226図）

炉跡21号は、VI層で検出した。主軸は南北方向で、形態から炉跡の作業部と判断した。土坑状の掘り込み内部には、燃焼部の一部と推測される焼土跡が残っている。床面のピットは、深く大きいため、炉跡構築以前の可能性がある。



第227図 炉跡15・16号出土遺物



埋土注記

- ① 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性弱い、しまり有り。焼土粒(数mm)、白色粒(数mm)、炭化粒を多く含む。
- ② 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘性弱い、しまり弱い。炭化物を非常に多く含む。焼土粒(1~2cm)、白色粒(数mm)、VIb層ブロックを多く含む。
- ③ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性、しまり弱い。床に近いところは炭化物でやや黒ずむ。VIa層ブロック(1~2cm)、焼土ブロック(数mm~2cm)、炭化粒(数mm~1cm)を多く含む。
- ④ 黄褐色土 (10YR 5/8) 粘性弱い、しまりあり。VIa層ブロックが非常に多く混ざる。炭化粒(1cm程)、白色粒(数mm)を多く含む。
- ⑤ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性弱い、しまり弱い。VIa層ブロックが非常に多く混ざる。炭化粒を少量含む。
- ⑥ 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性弱い、しまり強い。VIa粒、白色粒(数mm)を含む。炭化粒をわずかに含む。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘性やや有り、しまり強い。VIa層ブロック(数cm)が多く入る。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘性弱い、しまりやや有り。焼土粒(数mm)が多く入る。炭化物がわずかに入る。白色粒(数mm)がわずかに入る。

第228図 炉跡17・22号

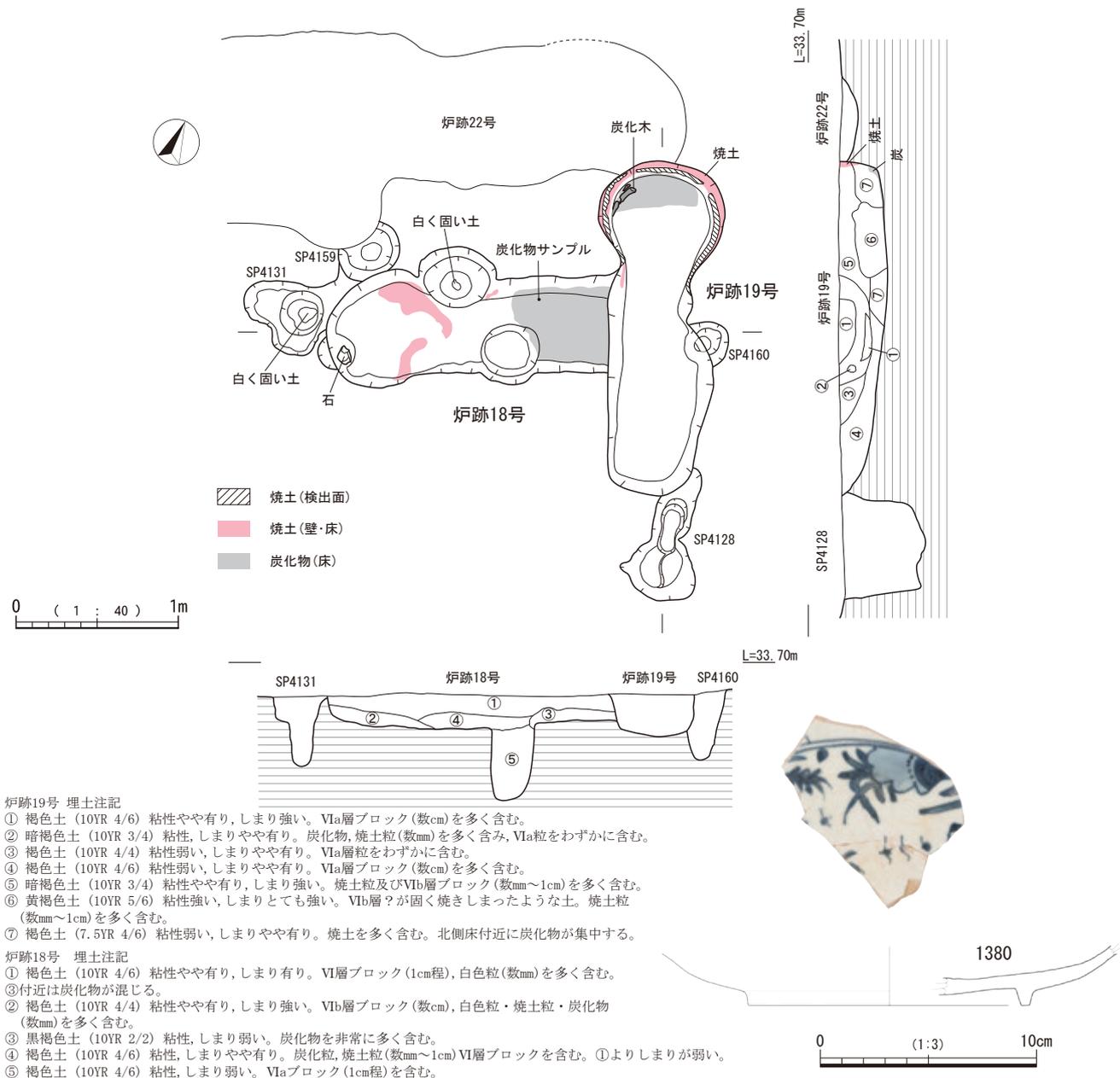
2) 炉跡17・22号 (第228図)

炉跡17・22号は、VI層で検出した。主軸は、東西方向で22号が17号を切っている。両遺構とも削平されているため浅い。炉跡内部及び隣接するピットは、切り合いから炉跡構築以前である。

炉跡22号は、全長2.9m、最大幅1mで、炉跡19号によって切られている。平面形は隅丸長方形で、燃焼部は西側である。燃焼部は、被熱のため床面と壁面が赤色化

し、炭化物が確認された。炭化物の放射性炭素年代測定は、15世紀中頃～17世紀前半である。

炉跡17号は西側に燃焼部をもち、作業部が炉跡19号に切られている。焼土が燃焼部の壁・床でわずかに検出された。焼土の残りが悪いため、使用期間は短い可能性がある。炭化物の放射性炭素年代測定値(2σ)は、1444-1499calAD(90.2%)である。



炉跡19号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/6) 粘性やや有り, しまり強い。VIa層ブロック (数cm) を多く含む。
- ② 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性, しまりやや有り。炭化物, 焼土粒 (数mm) を多く含み, VIa粒をわずかに含む。
- ③ 褐色土 (10YR 4/4) 粘性弱い, しまりやや有り。VIa層粒をわずかに含む。
- ④ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性弱い, しまりやや有り。VIa層ブロック (数cm) を多く含む。
- ⑤ 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性やや有り, しまり強い。焼土粒及びVIb層ブロック (数mm~1cm) を多く含む。
- ⑥ 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性強い, しまりとても強い。VIb層? が固く焼きしまったような土。焼土粒 (数mm~1cm) を多く含む。
- ⑦ 褐色土 (7.5YR 4/6) 粘性弱い, しまりやや有り。焼土を多く含む。北側床付近に炭化物が集中する。

炉跡18号 埋土注記

- ① 褐色土 (10YR 4/6) 粘性やや有り, しまり有り。VI層ブロック (1cm程), 白色粒 (数mm) を多く含む。
- ② 付近は炭化物が混じる。
- ③ 褐色土 (10YR 4/4) 粘性やや有り, しまり強い。VIb層ブロック (数cm), 白色粒・焼土粒・炭化物 (数mm) を多く含む。
- ④ 黒褐色土 (10YR 2/2) 粘性, しまり弱い。炭化物を非常に多く含む。
- ⑤ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性, しまりやや有り。炭化粒, 焼土粒 (数mm~1cm) VI層ブロックを含む。①よりしまりが弱い。
- ⑥ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性, しまり弱い。VIaブロック (1cm程) を含む。

第229図 炉跡18・19号及び出土遺物

3) 炉跡18 (第229図)

炉跡18号は, VI層で検出した。炉跡19に切られている。主軸は東西方向で, 残存長1.74m, 最大幅0.7mである。平面形は隅丸長方形で, 燃焼部は西側にある。燃焼部の床面と壁面は焼けているため赤色化し, 炭化物の堆積が部分的に確認された。作業部床面には, 炭化物層 (③・④層) が堆積している。炭化物の放射性炭素年代測定値 (2σ) は, 1559-1632calAD (48.4%) である。埋土は, 埋め戻しの可能性がある。

白く固い土が入ったピット4131は, 炉跡と同時期の可能性がある。作業部内にあるピット2基は, 焼土がピットに沿う形で検出され, 炭化物がピット内に入り込んでいることから, 炉跡に伴うと判断した。石の入ったピットは, 燃焼部に切られているため, 炉跡構築以前である。

出土遺物 (第229図 1380)

1380は, 青花の皿である。見込みに花卉樹石を描く。外底面から胴部下半に砂が付着し, 畳付以外は全て施釉されている。歴博分類染付碗E類に該当する。年代は, 16世紀中頃~後半である。

4) 炉跡19 (第229図)

炉跡19号は, VI層で検出した。炉跡18・22, ピット4128, 4160を切っている。主軸は南北方向で, 全長2.08m, 最大幅0.78mである。平面形はひょうたん形で, 燃焼部は北側にある。

燃焼部の床面には炭化物層があり, 壁面と床面は, ドーナツ状に赤色化している。炭化物には, 長さ20cm, 幅3cmの炭化材が含まれている。炭化物の放射性炭素年代測定値 (2σ) は, 1550-1634calAD (59.36%) であ

る。埋土は埋め戻しの可能性がある。

③ 土坑（第230図）

土坑58は、Ⅵ層で検出した。大小2つの掘り込みが、トンネル状につながっている。内部に焼けた痕跡はない。未完成で放置された炉跡の可能性はある。

④ ピット（第230図）

炉跡周辺では、約420基の柱穴が出現した。一部のピットは炉跡に伴うと考えられる。これらのピットは作業部内にあり、浅く、内部に白く固い土が入っている事例が多い。

ピットの年代は、出土遺物から17世紀～18世紀前半で、炉跡の年代と一部重なる。炉跡とピットは、調査区内で、構築を繰り返しながら併存している。本節では、代表的なピットと出土遺物を報告する。

1) ピット4157

4157は、Ⅵ層で検出された。南北に長く、2基のピットが重複したような形態である。北側の掘方は外側に広がり、柱を抜取る際に拡張された可能性がある。検出面に近い位置で、鉄滓が鉢（1384）の上に置かれた状態で出土した。鉢の下では、薩摩焼の甕（1385）が出土した。

2) ピット4081

4081は、Ⅵ層で検出した。直径0.7m、深さ0.95mである。ピット中央では、4個の石が重ねられた状態で出土した。

3) ピット4141

4141は、Ⅵ層で検出した。平面形は長軸1.1mの楕円

形で、掘削深度は1.75mとかなり深い。検出面近くで、鉄滓と石がそれぞれ2個出土した。鉄滓の下に石があり、その周囲には焼土塊がみられた。北側には炉跡14があり、炉跡に伴う廃棄土坑の可能性はある。

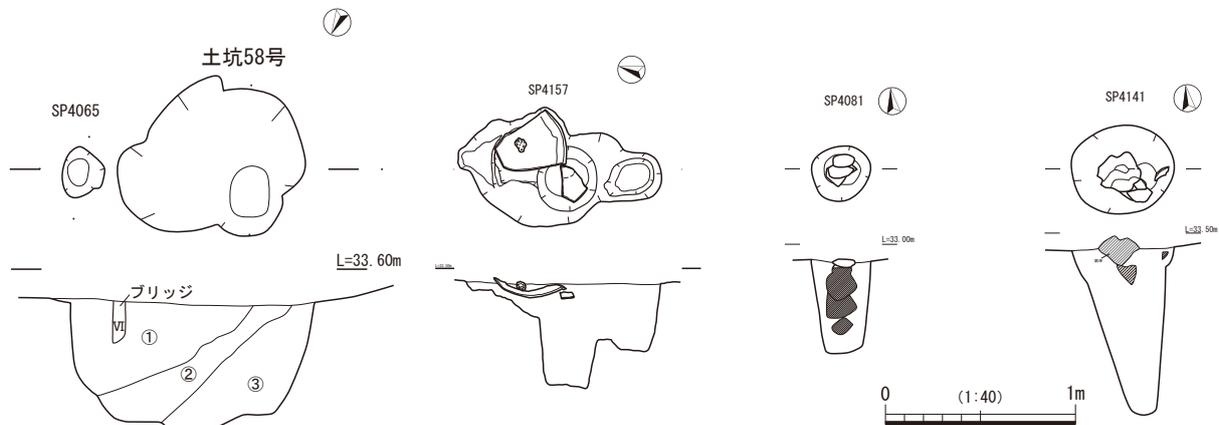
4) 出土遺物（第231・232図 1381～1385）

代表的なピット内出土遺物を報告する。

1381は、ピット4031で出土した青花の碗である。漳州窯産で、年代は17世紀初頭である。1382は、ピット4060で出土した肥前系の磁器皿である。体部内面には草花文を描く。見込みは欠損しているが、コンニャク印判五弁花文を施していたと推測される。年代は、17世紀後半から18世紀中頃である。1383は、SP4128で出土した産地不明の陶器である。外面に黒褐色の釉薬がかかる。時代は、近世と考えられる。

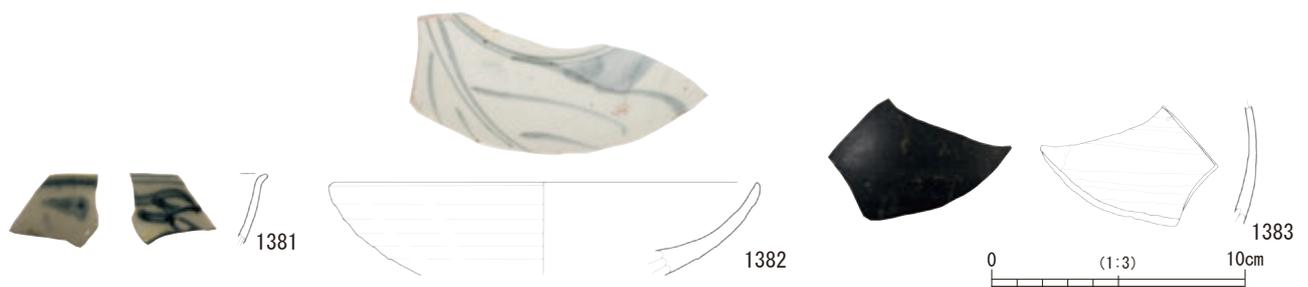
1384・1385は、ピット4157の出土品である。1384は唐津焼（武雄産）の鉢で大型品である。口縁部はL字状に折れ、上胴部は弱く屈曲する。高台の畳付は、露胎となる。口縁部には白化粧土の上から鉄釉をかけ、口縁部上面と口縁下に波状文を施す。胴部内外面及び外底部には、鉄泥を施す。見込みには、砂胎土目が5カ所残る。年代は、17世紀後半である。

1385は、薩摩焼の甕である。胴部外面には白色の付着物がみられ、内外面平行タタキ後ナデ調整を施す。底部は上げ底で、貝目が残る。苗代川の堂平窯産と考えられ、年代は、17世紀後半～18世紀前半である。

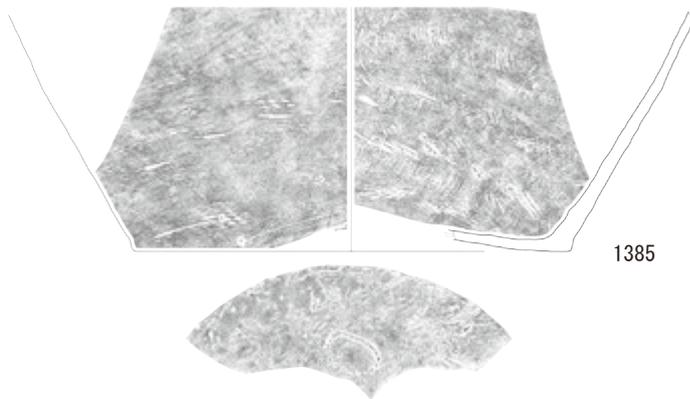


- ① 暗褐色土 (10YR 3/4)
- ② 褐色土 (10YR 4/6)
- ③ ②と同じだが炭化物がやや多い

第230図 土坑58号・ピット実測図



第231図 ピット出土遺物 1



第232図 ピット出土遺物 2

第50表 製鉄関連遺構内土師器・須恵器・瓦質土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上 番号	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
197	1286	土坑50号	須恵器	播鉢	E	47	-	口縁部	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	黄橙	にぶい橙	白粒、石英、角閃石	-	土師質、焼成良好、内面に煤付着
199	1290	竪穴建物跡2号	瓦質土器	湯釜	F	48	-	胴部	10.2	-	-	ナデ	ナデ	灰赤	褐灰	白粒	-	中世後半
203	1297	硬化面2	須恵器	甕	E	48	-	口縁部	28.5	-	-	格子目タタキ	ハナ目(粗い)	灰	灰	黒粒	-	中世後半、胴部は薄手
219	1371	炉跡7号	土師器	皿	-	-	-	口縁~底部	12	7.4	2.5	回転ココナデ	回転ココナデ	にぶい黄橙	灰白	白粒、黒粒、灰粒、長石	SL101-1	中世後半
223	1372	炉跡13号	瓦質土器	茶釜	E	49	-	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	黒粒	-	

第51表 製鉄関連遺構内陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			色調		歴博 分類	取上 番号	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面				
188	1265	製鉄炉1号	青花	碗	D	48	-	口縁部	10.4	-	-	灰白	灰白	F群	-	漳州窯、外面に唐草文、16c後半~17c初頭
193	1266	製鉄炉3号	薩摩焼	播鉢	D・E	47	-	胴部	-	-	-	灰白	灰黄褐	-	-	17c後半~18c前半
	1267	土坑51号	青花	碗	E	47	-	底部	-	5.0	-	灰白	灰白	C群	-	15c後半~16c前半
	1268	土坑51号	青磁	鉢	E	47	-	口縁部	21.0	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	-	初期伊万里、口縁部に輪花内面に布目痕、内外面に鎊蓮弁
	1269	土坑51号	染付	皿	E	47	-	底部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	四角窓の渦福
	1270	土坑51号	青磁	皿	D	46・47	-	口縁~底部	14.0	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	-	17c前半、波佐見産
	1271	土坑51号	白磁	香炉	E	47	-	口縁部	-	-	-	灰白	灰黄褐	-	-	国産、体部内面は炉胎
	1272	土坑51号	陶器	小坏	E	47	-	口縁~底部	6.8	2.9	3.9	灰白	灰白	-	-	白薩摩?
	1273	土坑51号	青磁	香炉	E	47	-	脚部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	国産
	1274	土坑51号	薩摩焼	甕	E	47	-	底部	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	年代不明
	1275	土坑54号	薩摩焼	碗	E	47	-	完形	12.0	4.9	6.3	灰白	灰白	-	-	18c中頃、龍門司産、見込みは蛇目釉剥ぎ
	1276	土坑54号	染付	水注	E	47	-	胴~底部	-	7.0	-	灰白	灰白	-	-	内外面に厚い釉、高台内面に砂付着
	1277	土坑54号	陶器	壺	D・F	47・48	-	口縁~胴部	14.4	-	-	黒褐	暗赤褐	-	-	産地・年代不明、内外面に厚い釉
	1278	土坑54号	薩摩焼	甕	E	47	-	胴部	-	-	-	灰オリブ	灰オリブ	-	-	17c、薄手、内面に同心円状当て具痕
1279	土坑56号	白磁	皿	E	48	-	口縁~底部	9.0	5.2	2.3	灰白	灰白	C1群	-	15c後半	
197	1280	製鉄炉4号	唐津焼	皿	D	47	-	完形	11.0	4.7	2.9	明褐	灰黄	-	-	16c末、体部下半まで施釉、高台小さめ
	1281	製鉄炉4号	薩摩焼	杯	D	47	-	口縁~底部	7.0	3.4	4.8	にぶい黄褐	褐	-	-	17c後半、山元窯産、高台露胎
	1282	製鉄炉4号	肥前焼	皿	D	47	-	口縁~胴部	12.8	-	-	灰白	灰白	-	-	17c後半、器壁薄い
	1283	製鉄炉4号	染付	碗	D	47	-	口縁~胴部	-	-	-	明緑灰	灰白	-	-	肥前系
	1284	製鉄炉4号	薩摩焼	播鉢	D	47	-	底部	-	-	-	灰黄褐	灰黄褐	-	-	
	1285	土坑50号	陶器	不明	E	47	-	胴部	-	-	-	灰黄褐	灰黄褐	-	-	中国産、外面に鉄釉
199	1287	竪穴建物跡2号	青花	壺	F	48	-	胴部	-	-	-	明青灰	明オリブ灰	-	-	外面に草花文、胎土に黒色粒子多
	1288	竪穴建物跡2号	唐津焼	皿	F	48	-	口縁~胴部	10.2	-	-	にぶい赤褐	灰オリブ	-	-	口縁部外面~体部内面に釉
	1289	竪穴建物跡2号	唐津焼	碗	F	48	-	口縁~胴部	11.0	-	-	褐灰	褐灰	-	-	16c末~17c、内面に墨書のような文様
	1291	竪穴建物跡2号	薩摩焼	糸目土瓶	F	48	-	胴部	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	18c中頃
	1292	竪穴建物跡2号	青磁	鉢	F	48	-	口縁~胴部	22.6	-	-	灰白	灰白	-	-	産地・年代不明
200	1293	土坑46号	青磁	皿	D	46	-	口縁~胴部	-	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	-	国産
	1294	土坑46号	陶器	碗	D	46	-	口縁~胴部	-	-	-	オリブ黄	灰白	-	-	17c後半~18c初頭、内野山産
	1295	土坑46号	肥前焼	盤	D・E	46	-	口縁部	-	-	-	にぶい褐	にぶい褐	-	-	
203	1296	硬化面2	白磁	小坏	E	48	-	胴~底部	-	2.5	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	-	産地・年代不明
219	1370	炉跡7号	肥前焼	皿	-	-	-	口縁部	-	-	-	灰褐	灰褐	-	-	17c初頭、内外面に白化粧土
223	1373	炉跡13号	青磁	碗	E	49	白土内	口縁部	-	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	B3	-	龍泉窯、15c中頃~後半
227	1374	炉跡15号	青花	碗	D	50	-	口縁~胴部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	C類	-	15c後半~16c前半、外面・見込みに文様
	1375	炉跡15号	青磁	鉢	-	-	-	口縁部	-	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	初期伊万里
	1376	炉跡15号	肥前焼	鉢	D	50	-	口縁~胴部	44.8	-	-	灰褐	灰褐	-	-	17c後半~18c初頭、二彩手、口縁に鉄釉・胴部に銅釉、帯目の波状文
	1377	炉跡15号	薩摩焼	播鉢	-	-	-	底部	-	-	-	にぶい橙	橙	-	-	17c~18c初頭、苗代川産
	1379	炉跡16号	白磁	皿	-	-	-	口縁部	-	-	-	灰白	灰白	E群	-	16c前半
229	1380	炉跡18号	青花	皿	D	50	II b	底部	-	13.0	-	灰白	灰白	E群	-	見込みに花卉樹石、砂付着、壘付以外施釉
231	1381	SP4031	青花	碗	D	50	VI	口縁~胴部	-	-	-	灰白	灰白	-	-	漳州窯産、17c初頭
	1382	SP4060	磁器	皿	-	-	-	口縁~胴部	17.0	-	-	灰白	灰白	-	-	17c初~18c中頃、肥前系、内面草花文見込みにコシヤ印判五弁花文?
	1383	SP4128	陶器	瓶	E	50	VI	胴部	-	-	-	黒	灰黄	-	-	近世、産地不明、外面に黒褐の釉
232	1384	SP4157	唐津焼	鉢	-	-	I	口縁~底部	44.0	14.8	16.8	暗褐	暗褐	-	SP4157	17c後半、壘付は露胎、口縁部に鉄釉、胴部内外面・外底部に鉄泥
	1385	SK102 SP4157-2	薩摩焼	甕	D	50	VI	胴~底部	-	23.0	-	褐	褐	-	SK102 SP4157	17c後半~18c前半、胴部外面に白色付着物底部は上げ底・貝目、苗代川の堂平窯産

第52表 製鉄関連遺構内土製品観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm・g)				取上 番号	備考	
								長さ	幅	厚さ	重量			
227	1378	炉跡15号	土製品	取鍋	D	50	-	完形	4.2	-	3.3	25.6	SL105-2	内面に銅付着

第7節 その他の時代の調査

1 調査の概要

北山遺跡において、第IV章第1節から第6節のいずれにも該当しない遺構・遺物をその他の時代の調査成果として報告する。遺構は、埋土の状況から近世から近代に該当すると考えられる。

2 遺構

遺構の埋土は、A：II a層が主体となっている、B：II a層からVI層までの混ざり土、C：II bからVI層の混ざり土の3パターンである。A・Bのパターンは、縄文時代から近世に該当する遺物が出土している場合もあるが、埋土の状況から遺構と遺物が同時期とは断定できなかった。またCは、遺物の出土がない、もしくは周辺の状況から時期を確定できないものであった。

(1) 土坑

ア 土坑59号(第233図)

G・H-56区のⅢ層で検出した、円形の土坑である。規模は、0.7m×0.78mで、検出面からの深さは最深部で0.13mである。埋土は、Cパターンである。

イ 土坑60号(第233図)

H-61区のⅣ層で検出した、不定形の土坑である。規模は、1.64m×0.96mで、検出面からの深さは最深部で0.6mである。埋土は、Cパターンである。検出時は、焼土が広がっていた。調査の結果、土坑内から炭化木が出土した。出土した炭化木の自然科学分析を実施した結果、コナラ属アカガシ亜属と同定され、年代は711～774年の測定結果が得られた。土器2点が出土したが、摩滅しており、器種の特定に至らなかった。

また、年代測定の結果は古代に該当するが、この時期に該当する遺構は周辺で検出されず古代の土坑と判断する材料が乏しかったため、ここで報告することとした。

ウ 土坑61号(第233図)

D-70区のⅢ層で検出した、円形の土坑である。規模は、0.93m×0.77mで、検出面からの深さ0.13mと浅い皿状の土坑である。埋土は、Cパターンである。

エ 土坑62号(第233図)

E・D-70区のⅢ層で検出した円形の土坑で、規模は、1.04m×1m、検出面からの深さ0.26mである。埋土は、Cパターンである。

オ 土坑63号(第233図)

G-71区のⅥa層で検出した楕円形の土坑で、規模は、1.75m×0.8mで検出面からの深さは最深部で1mである。埋土は、Bパターンである。

カ 土坑64号(第233図)

G-72区のⅥ層で検出した楕円形の土坑で、SP2323・

2433に切られる。規模は、1.6m×0.58mで、検出面からの深さは0.37mである。埋土は、B・Cパターンである。

キ 土坑65号(第233図)

E-73区のⅥ層で検出した円形の土坑で、SP2251・2252に切られる。規模は、0.8m×0.83mで、検出面からの深さは最深部で0.7mである。

ク 土坑66号(第233図)

F-73区のⅥ層で検出した、円形の土坑である。規模は、1.2m×1.19mで、検出面からの深さは0.12mである。浅い皿状の土坑である。埋土は、Cパターンである。

ケ 土坑67号(第234図)

F-73区のⅥ層で検出した、楕円形の土坑である。規模は、1.29m×0.84mで、検出面からの深さは、深い場所で1.06mである。埋土は、Bパターンである。複数のピットが切り合っており、形状から、柱の抜き取りが行われるなど、複数のピットが重複したことにより、形態が土坑状になったと考えられる。

コ 土坑68号(第234図)

F-73区のⅥ層で検出した、円形の土坑である。規模は、0.85m×0.99mで、検出面からの深さは0.52mである。埋土は、Bパターンである。北側が一段くぼんでおり、柱の抜き取りが行われた結果、土坑状になったと考えられる。埋土は、Bパターンである。

サ 土坑69号(第234図)

G-73区のⅥ層で検出し、攪乱で削平を受けており全体形は不明である。残存する範囲は隅丸方形で、検出できた規模は0.93m×0.57m、検出面からの深さは0.15mである。断面形から、浅い皿状の土坑であると考えられる。埋土は、Cパターンである。

シ 土坑70号(第234図)

F-74区のⅥ層で検出した、楕円形の土坑である。規模は、0.75m×0.67mで、検出面からの深さは0.65mである。上端からはほぼ垂直に掘り込み、下端は隅丸方形に近い形になる。埋土は、Cパターンである。

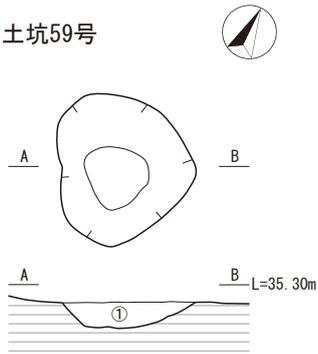
ス 土坑71号(第234図)

F-74区のⅥ層で検出した、円形の土坑である。規模は、0.75m×0.64mで、検出面からの深さは0.77mである。埋土は、Cパターンである。段差が2か所あり、柱の抜き取りが行われた結果と考えられる。遺構内から青花や青磁、肥前系の磁器が出土したが、近代に該当する磁器が出土したことから、ここで報告を行う。

出土遺物(第234図 1386)

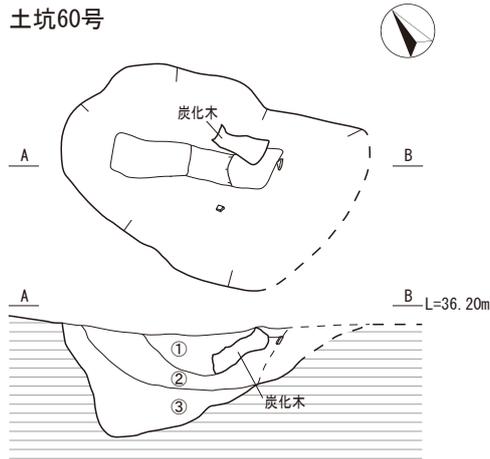
出土資料のうち、磁器1点を図化した。1386は、肥前系の端反の皿である。外面には幅広に数条の圏線がめぐり、その間に波状文を描く。内面は口唇部付近と、腰部の屈曲部に圏線が巡り、口唇部の圏線は淡く不明瞭な発色である。

土坑59号



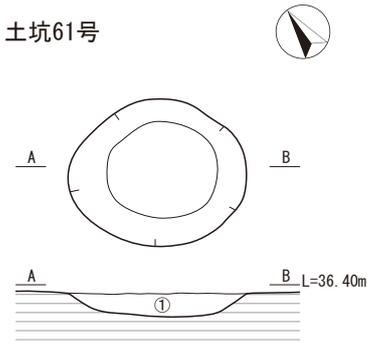
土坑59号埋土注記
 ① 褐色砂質土(7.5YR4/3) しまり強い
 II b層由来の土 赤色粒子, シラスを含む

土坑60号



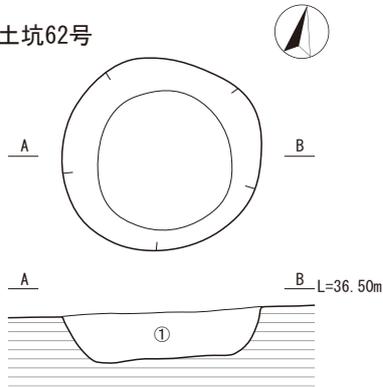
土坑60号埋土注記
 ① 極暗褐色硬質土(7.5YR2/3) 焼土小ブロックを含む
 ② 暗赤褐色土(5YR3/4) 焼土ブロックおよび焼土破片を多く含む
 ③ にぶい赤褐色土(5YR4/4) しまりは弱い

土坑61号



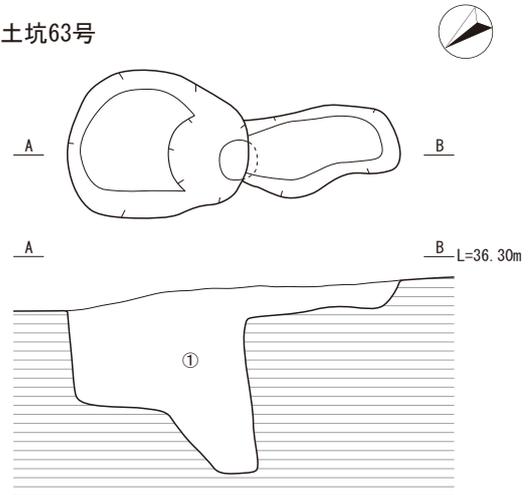
土坑61号埋土注記
 ① 褐色砂質土(7.5YR4/4) しまり強く粘性やや強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む

土坑62号



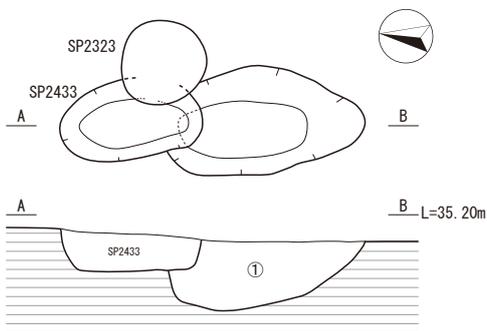
土坑62号埋土注記
 ① 褐色砂質土(7.5YR4/4) しまり強く粘性やや弱い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
 ※シラスは, 1cm程の粒子が断面全体に分布

土坑63号



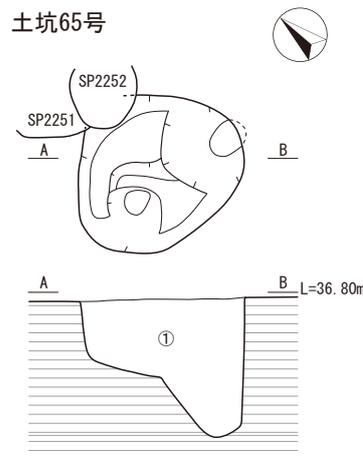
土坑63号埋土注記
 ① 暗褐色粘質土(7.5YR3/2) しまり粘性ともにやや強い 白色粒子を10%, シラスを30%含む

土坑64号



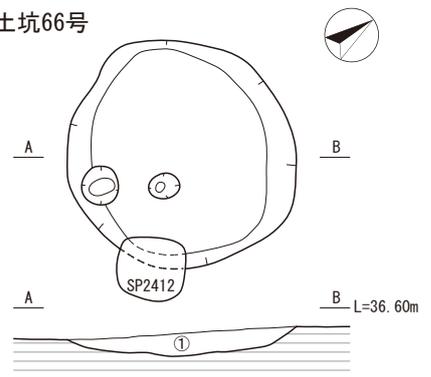
土坑64号埋土注記
 ① 黄褐色砂質土(10YR5/6) しまり粘性ともに有り 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む

土坑65号

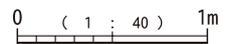


土坑65号埋土注記
 ① 暗褐色粘質土(7.5YR3/3) しまり粘性強い 白・赤色粒子, 炭化物を10%, シラスを30%含む

土坑66号

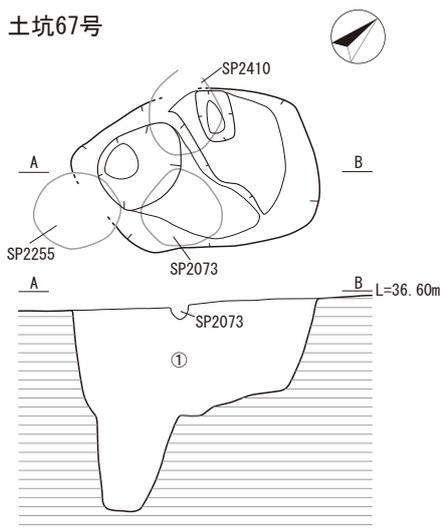


土坑66号埋土注記
 ① 暗褐色粘質土(7.5YR3/3) しまりやや強く粘性強い 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
 ※完掘後に磁器片と貨幣と思われるものを確認



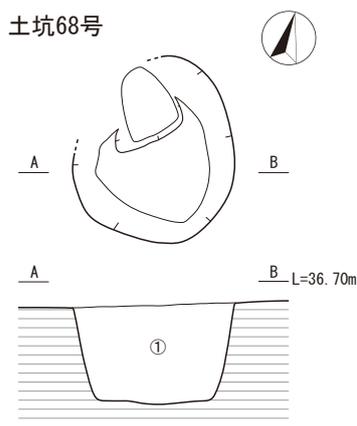
第233図 土坑59～66号

土坑67号



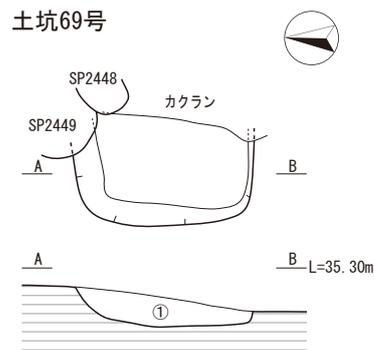
土坑67号埋土注記
 ① 極暗褐色砂質土(7.5YR 2/3) しまり強く粘性やや弱い 白色粒子, シラスを各10%含む

土坑68号



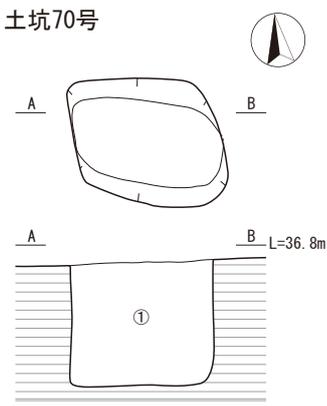
土坑68号埋土注記
 ① 黒褐色粘質土(7.5YR 3/2) しまり強く粘性やや強い 白色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む

土坑69号



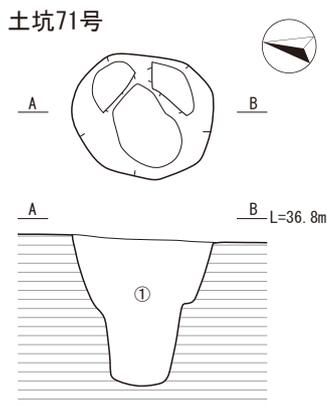
土坑69号埋土注記
 ① にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3) しまりやや強く粘性有り 白・赤色粒子, シラスを各10%含む 底部はピンクシラスであり, 赤い粒子が混じっている

土坑70号



土坑70号埋土注記
 ① 黒褐色粘質土(7.5YR 3/2) しまり強く粘性やや強い 白・赤色粒子, シラスを10%含む 断面上面に赤色粒子のブロックがマール状に広がっている(3cm~5cm大)

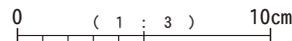
土坑71号



土坑71号埋土注記
 ① 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまり強く粘性やや弱い 白・赤色粒子, 炭化物を各10%シラスを30%含む シラスは5cm~8cm大のブロックを含む



1386



第234図 土坑67~71号・出土遺物

セ 土坑72号 (第235図)

G-74区のVI層で検出した, 不整形の土坑である。規模は, 0.6m×0.48mで, 検出面からの深さは, 深い場所で0.48mである。埋土は, Bパターンである。複数のピット状の遺構が切り合っており, 形状から, 柱の抜き取りが行われるなど, 複数のピットが重複したことにより土坑状になったと考えられる。

ソ 土坑73号 (第235図)

F-75区のVI層で検出した, 楕円形の土坑である。規

模は, 1.01m×0.67m, 検出面からの深さは0.51mである。埋土は, Bパターンである。上端からほぼ垂直に掘り込み, 下端は楕円形に近い形になる。

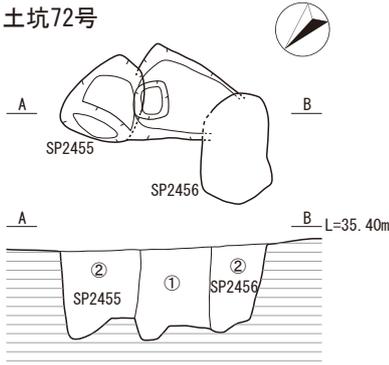
タ 土坑74号 (第235図)

H-74区のVI層で検出した, 円形の土坑である。規模は, 0.45m×0.43m, 検出面からの深さは0.35mである。埋土は, Aパターンである。

チ 土坑75号 (第235図)

I-74区のVI層で検出した, 不定形の土坑である。規

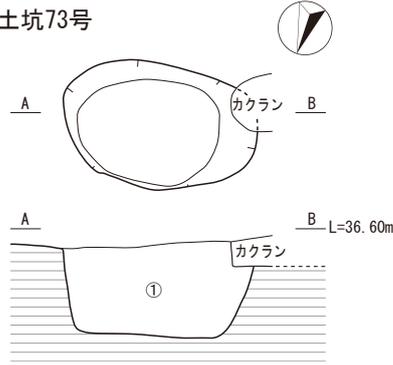
土坑72号



土坑72号埋土注記

- ① 褐色砂質土(10YR 4/6) しまりやや強く粘性やや弱い シラスを80%含み、混ざりはほとんどないが、炭化物、赤色粒子を10%含む
 - ② 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまり粘性やや弱い 白色粒子を10%、シラスを40%含む
- ※底部はピンクシラス

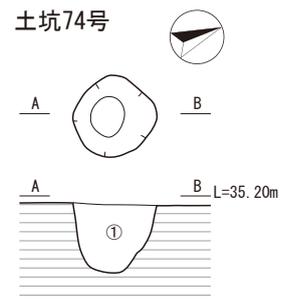
土坑73号



土坑73号埋土注記

- ① にぶい褐色土(7.5YR 5/4) しまりやや強く粘性やや弱い 白色粒子を10%、シラスを60%含む
- ※シラスは底部付近に5cm大のブロックを含む

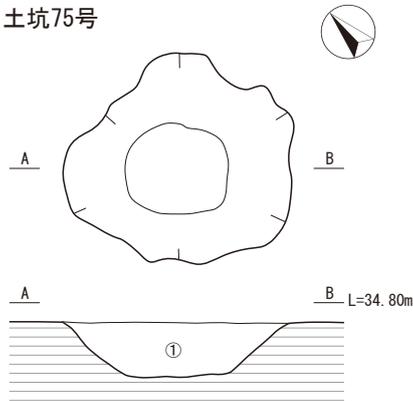
土坑74号



土坑74号埋土注記

- ① にぶい褐色土(7.5YR 5/3) 粘性あり 炭化物を少量含む

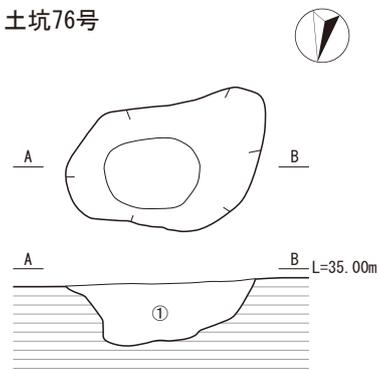
土坑75号



土坑75号埋土注記

- ① にぶい褐色土(7.5YR 5/3) 炭化物、シラスブロックを含む

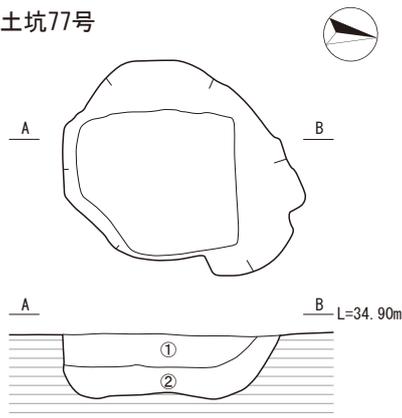
土坑76号



土坑76号埋土注記

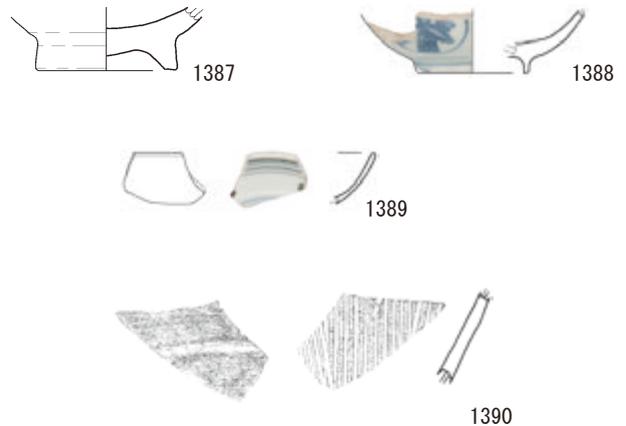
- ① にぶい褐色土(7.5YR 6/3) 炭化物、シラスをわずかに含む

土坑77号



土坑77号埋土注記

- ① 黒褐色土(7.5YR 3/2) しまり粘性あり 白色粒子少量含む
- ② 褐色土(7.5YR 4/3) しまり粘性あり 白色粒子、褐色の小ブロックをわずかに含む



0 (1 : 40) 1m

0 (1 : 3) 10cm

第235図 土坑72～77号・出土遺物

規模は、1.2m×1.1mで、検出面からの深さは0.3mである。埋土は、Bパターンである。

ツ 土坑76号（第235図）

I-74区のVI層で検出した、楕円形の土坑である。検出した規模は、1m×0.6mで、検出面からの深さは最深部で0.34mである。埋土は、Aパターンである。

テ 土坑77号（第235図）

H・I-75区のVI層で検出した、不定形の土坑である。規模は、1.15m×1.05mで、検出面からの深さは最深部で0.33mである。埋土は、Aパターンである。

出土遺物（第235図 1387～1390）

陶磁器類4点を図化した。1387は、白薩摩の碗である。高台から腰部までしか残存しないが、白色磁土に透明釉をかけ、貫入が明瞭である。高台天井部は下方に張り出し、豊付は露胎する。1388は、肥前系の染付碗である。外面は腰部に2～3条の圏線と、胴部の円窓内に杉文のような文様が描かれる。内面は、無文である。1389は、肥前系の皿である。口唇部内面には数条の圏線がめぐり、腰部にわずかに文様が残存する。外面は、無文である。1390は、肥前系の播鉢である。硬質で、器壁が薄い。

（2）炉跡

時期不明の炉跡は、E～G-44～48区で3基、E～G-65～74区で5基の総数8基検出した。これらの炉跡は、中世遺構や製鉄関連遺構と関係する可能性もあるが、断定できる要素がないため、本節で報告する。

ア 炉跡23号（第236図）

F-44区のIII層で検出した、不定形の炉跡である。規模は、1.67m×1.31mで、深さは0.08mである。床や壁は、赤化している状況が見られた。中世の掘立柱建物跡1号に近い場所で検出されているが、関連性は不明である。

イ 炉跡24号（第236図）

G-47区のVI層で検出した、楕円形に近い炉跡である。規模は、1.89m×0.88mで、深さは0.36mである。埋土の床面付近は、焼土混じりの層→炭の層→焼土混じりの層と、互層になるような堆積状況である。周辺の状況や埋土の状況から、製鉄関連遺構と関係があると考えられるが、明確に特定することができなかった。

ウ 炉跡25号（第236図）

G-47・48区のVI層で検出した、細長い楕円形の炉跡である。規模は、2.25m×0.42mで、深さは0.35mである。床上に、炭と焼土の混じった層が15cmほど堆積した層がある。炉跡24号の近くで検出し、埋土の状態も類似しているため、同時期に同じ目的で使われたと考えられる。

エ 炉跡26号（第236図）

H-65区のIV層で検出した、不定形の土坑である。規模は、1.34m×1mで、検出面からの深さは最深部で0.37mである。壁や床面で焼土を確認した。遺物の出土はな

く周辺に遺構の時期を断定できる要素がなかったため、ここで報告することとした。

オ 炉跡27号（第236図）

E-69区のII b層で検出した、隅丸方形の炉跡である。規模は、1.31m×0.78mで、深さは0.24mである。埋土の状況や浅いことから、本来の掘り込み面は削平されていると考えられる。検出状況から近世以降に使われた可能性が高いが、詳細は不明である。遺構内からヘラ書きの土師器が出土したが、当該遺物は遺構の主たる時期ではないと判断し、第IV章第2節で報告した。

カ 炉跡28号（第236図）

G-70区のVI層で検出した、楕円形の炉跡である。規模は、0.86m×0.59mで、深さは0.1mである。

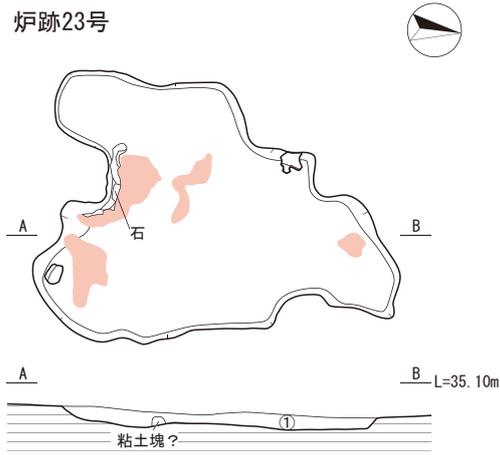
キ 炉跡29号（第237図）

F・G-74区のVI層で検出した、不定形の炉跡である。規模は、最長部で1.3m×0.98m、深さは最深部で0.22mである。中世の炉跡3号の近くで検出しているが、明確に中世と確定することができなかった。

ク 炉跡30号（第237図）

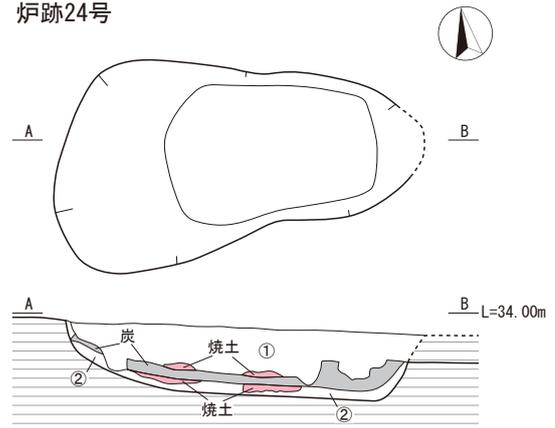
I-75区のVI層で検出した、楕円形の土坑である。規模は、1.7m×0.55mで、検出面からの深さは0.55mである。上端からほぼ垂直に掘り込み、下端は楕円形に近い形になる。炭化物がまとまっている層（埋土④）も確認できた。北東から東にかけて、上端周辺に焼土が見られる。

炉跡23号



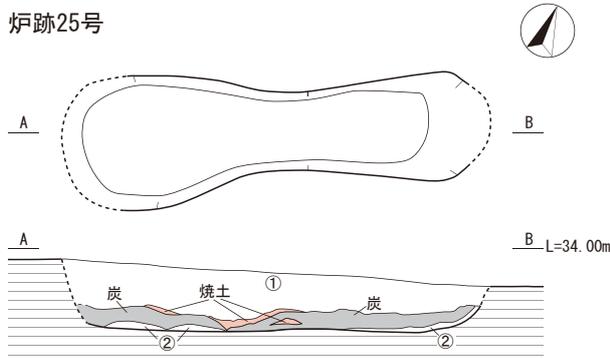
炉跡23号埋土注記
① 焼土塊, 炭化物を含む層 II b層由来の土

炉跡24号



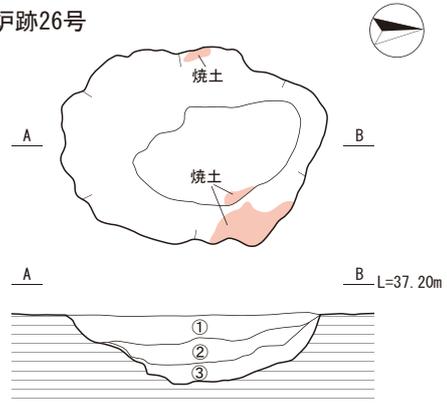
炉跡24号埋土注記
① にぶい黄色土(2.5Y6/3) しまり粘性無し
② 明黄褐色土(2.5Y6/6) しまり粘性あり
※ 炭化物や焼土の塊が, 埋土中に多く見られる

炉跡25号



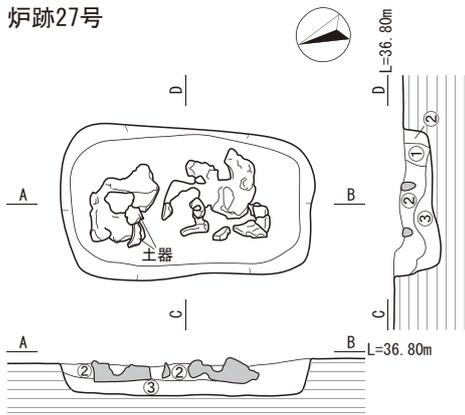
炉跡25号埋土注記
① にぶい黄色土(2.5Y6/3) しまり粘性無し
② 明黄褐色土(2.5Y6/6) しまり粘性あり

炉跡26号



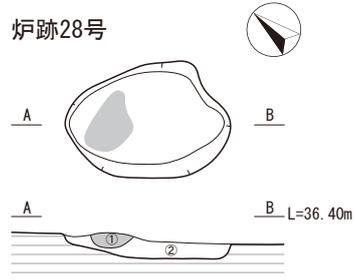
炉跡26号埋土注記
① 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) しまりあり
白・赤色粒子を含む
② 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) しまりややあり
白・赤色粒子をほとんど含まない
③ 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性あり
白・赤色粒子をほとんど含まない

炉跡27号



炉跡27号埋土注記
① にぶい橙砂質土(2.5YR6/4) しまり強く粘性有り
炭化物40%, シラス50%を含む
② にぶい橙砂質土(2.5YR6/4) しまり強く粘性やや弱い
3cm大の赤色粒子を10%含む 白色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
③ にぶい赤褐色粘質土(2.5YR5/4) しまり粘性ともに強い
白・赤色粒子, シラスを各10%, 炭化物を30%含む

炉跡28号

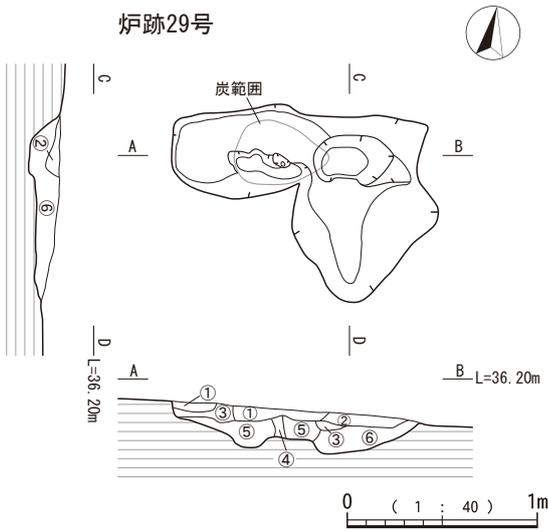


炉跡28号埋土注記
① 極赤褐色粘質土(5YR3/3) しまり粘性
ともにあり 白・赤色粒子
② 褐色粘質土(7.5YR4/4) しまりやや強く
粘性あり 白・赤色粒子



第236図 炉跡23～28号

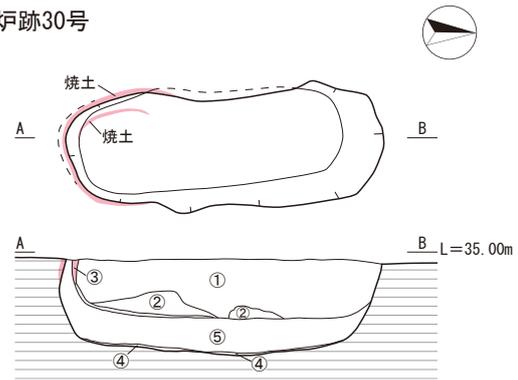
炉跡29号



炉跡29号埋土注記

- ① にぶい褐色砂質土(7.5YR 5/4) しまり粘性ともにやや強い 白・赤色粒子, シラスを各10%, 炭化物を70%含む。
- ② 褐色砂質土(7.5YR 4/4) しまり粘性ともに弱い 赤色粒子, 炭化物を各10%含む。
- ③ 灰褐色粘質土(5YR 5/2) しまり粘性ともに強い
- ④ にぶい褐色砂質土(7.5YR 5/4) しまり粘性ともにやや弱い 白色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑤ 灰褐色砂質土(7.5YR 4/2) しまり粘性あり 白・赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む
- ⑥ 褐色砂質土(7.5YR 4/3) しまり粘性ともに弱い 赤色粒子, 炭化物, シラスを各10%含む

炉跡30号



土坑78号埋土注記

- ① 暗褐色砂質土(10YR 3/3) 炭化物, シラスブロックを含む
- ② にぶい黄褐色砂質土(10YR 4/3) 焼けて赤みをおびている
- ③ 褐色砂質土(7.5YR 4/6) 焼けて赤みをおびている
- ④ 炭化物を多く含む
- ⑤ 暗褐色砂質土(10YR 3/3) ①に似ているが, シラスブロックが少ない



第237図 炉跡29・30号

(2) ピット

本調査区では多数のピットを検出した。ピット内の遺物は中世・近世のものが多く、ピットのほとんどは当該期の遺構と考えられる。しかし、埋土状況からも時期を特定することが難しく、本項で一括して取り扱うこととした。

各ピットの出土遺物は、第54・55表のとおりである。また、ピット内から出土した遺物のうち、代表的なものを以下に報告する。

出土遺物 (第244～247図 1391～1455)

1391～1393は古代の土師器で、いずれも坏である。1391は薄手で、口唇部が若干外反する。1392・1393は、底部にヘラ切り痕が残る。1392は、底部付近の立ち上がりやをヘラで調整する。外面は底部付近を中心に灰白色を呈しており、やや焼成温度が高かった可能性もある。1393は、胎土に5mm大の白色礫が露出する。

1394～1405は、中世の土師器である。1394～1399は、坏である。器面が摩滅し、底部には糸切り痕が残るものが多い。1394は薄手で、体部は緩く丸みを帯びながら立ち上がり、口唇部は舌状をなす。1395は口縁部で、口縁下の内面にケズリ調整が加えられ、わずかに凹んで段をもつ。1396は、胴部が緩く丸みを帯びながら立ち上がる。内面にシミ状の痕跡があるが、墨書等かの断定はできなかった。1397は、胎土がマーブル状をなし、砂粒を多く含む。1398は、底部からの立ち上がりがかびれ、胴部が立ち上がる。色調が赤みを帯び、1～2mm大の赤褐色粒を多く含む。1399は、底部の糸切り痕が明瞭に残り、他に比べて焼成が良く、やや硬質な仕上がりである。

1400～1405は、皿である。1400は、底部から外傾し、直線的に立ち上がる。1401～1405は、残りが悪く、全体的に風化している。1401はわずかであるが、腰部にはケズリ痕が確認できる。1404は胎土粒子が細かく、白色の胎土がマーブル状に混ざる。

1406は、焙烙の把手であり、把手と接続する基部がわずかに残る。断面が略円形の棒状を呈し、裏面を中心にヘラ状工具によるナデ調整が施される。

1407～1415は、瓦質土器の播鉢である。1407～1410は口縁部であり、口唇端部は溝状に凹む。また、口唇部外面は、帯状のヨコナデ調整が施される。1407は、焼成が硬質で、口唇端部の角も明瞭である。内面には、9条一単位の播目がつく。口唇部には木質のようなものが当たった痕跡があり、部分的に角が潰れている。1408は内面に浅い播目が10条1単位で施され、1409・1410は、内面の播目が残存しておらず、単位は不明である。また、薄手であり、捏鉢等の可能性もある。1411～1415は胴部片であり、内面の播目は1411・1412は7条、1415は6条残存するが、1単位であるかは不明である。1412は器壁が厚く、大型製品と考えられる。1413は、内面の播目

が9条1単位、1414は6条1単位で施される。また、縦位の播目に切られて斜位の播目も残存する。

1416～1419は、中世須恵器である。1416は甕の口縁部から肩部で、口縁部を大きく曲げて外反させる。外面には格子目タタキ痕、内面には帯状のケズリ痕が残る。1417は甕の胴部で、外面には浅い鋸歯状のタタキ痕が残り、部分的にナデられている。内面は、ケズリ調整後、ナデ調整が施されている。1418・1419は焼成が弱く軟質で、胎土も砂質で器面が荒れている。また、胎土に1418は甕の肩部から胴部で、外面は風化が激しいが、わずかに大ぶりの格子目タタキ痕が確認できる。内面には、ヘラケズリ痕が残る。1419は、壺もしくは甕の底部である。1418・1419の胎土は類似しており、砂粒や小礫を多く含む。

1420～1423は白磁である。1420は、口禿皿の口縁部である。歴博分類皿IX類(Ⅲ期)・大宰府分類皿IX類(F期)に該当する。1421は、福建省産と考えられる皿で、口縁部付近で緩く内湾する。歴博分類皿B群(Ⅳb期)・森田D群に該当する。1422は、小片のため、器種・器形等は不明である。薄手であり、元末～明初(14世紀頃)の景德鎮産のものに類似する。1423は小型壺の蓋で、釉調はやや青みがある。上面は、型押しにより菊花状の文様となる。内側のかえりは、やや歪みがある。歴博分類のⅠ～Ⅱ期に該当すると考えられる。

1424～1432は、青磁である。1424～1427は、鎗蓮弁文碗である。1424・1425は口縁部片で、いずれも歴博分類B1類(Ⅲ期)・大宰府分類龍泉窯系碗Ⅱ類(E期)に該当する。1426は、口縁～胴部である。歴博分類碗B0類(Ⅲ期)・大宰府分類Ⅲ-2C類(F期)に該当する。1427は歴博分類碗B2類(Ⅳa期)に該当する。1428～1430は、無文の端反り口縁の碗である。いずれも、歴博分類碗D2類(Ⅳb期)・上田分類D-Ⅱ類に該当する。

1431・1432は、稜花皿である。1431は口縁部で、内面には劃花文が施される。歴博編年のⅤ期に該当する。1432は底部で、見込み及び高台見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。歴博編年のⅤ期に該当する。

1433・1434は、青花の碗である。1433は口縁部内外面に2条の圈線が施され、胴部外面には、花の文様を描く。歴博分類碗E群(Ⅵ期)に該当する。1434は、蓮子碗と考えられ、見込みには蓮華とみられる文様が描かれる。歴博分類碗C群(Ⅴ期)に該当する。

1435～1440は、輸入陶器である。1435・1436は、天目碗である。1435は口縁下でわずかに屈曲するもので、歴博分類のⅣa期に該当すると考えられる。1436は、胴部である。内外面に黒褐色の釉が厚くかかり、胴部下半に釉溜まりが生じている。胴部下半は、露胎する。施釉範囲では、焼成によるとみられる微細な穴が表面に多数

みられる。中国の南平茶洋窯産のもので、時期は歴博編年のⅣ a 期に該当すると考えられる。

1437は、鉢である。口縁部は、内側に張り出させた後、外へと折り返して玉縁状に仕上げている。外面には、接合線が明瞭に残る。華南産の焼締鉢で、16世紀頃と考えられる。

1438は、壺の頸部である。内外面に、緑褐色の釉がかかる。歴博編年のⅤ期に該当すると考えられる。1439は、大型の甕の頸部である。内外面とも、強いナデの痕跡が残る。胎土は砂粒が多く、マーブル状をなす。1440は、焼締陶器の壺もしくは甕の胴部である。外面には、自然釉が掛かる。1439・1440は、中世後半のものと考えられる。

1441は、初期伊万里の染付皿である。器高に比して底径が小さく、見込みには草花文を描く。畳付は釉剥ぎされ、粗い砂粒が付着する。1630～1640年代の所産と考えられる。1442は、肥前系の京焼風陶器碗である。浅半球形で器高が低く、見込みに蚊屋吊草文とみられる文様を描く。外面の腰部以下は、露胎する。17世紀後半から18世紀前半頃と考えられる。1443は、陶器皿である。内面には、白化粧土によるハケ目花文が施され、見込み及び高台に目跡が残る。胎土には、砂粒を多く含む。外面の腰部以下は露胎し、高台内面は兜状に張り出す。肥前系で、17世紀後半頃と考えられる。

1444は、陶器皿である。口縁部は、外側へ折り曲げた後、内側へ緩く折り曲げる鰐縁状となる。肥前系で1690～1780年代の所産と考えられる。1445は、陶器大鉢である。口縁部は外側へ折り曲げた後、内側へ折り返し、断面が「T」字状となる。口唇端部を強くなで、口唇部上面の平坦部に溝状の凹線を巡らせる。内外面とも、緑釉が施釉される。肥前系で、17世紀末～18世紀前半の所産と考えられる。

1446は、薩摩焼の甕である。鉄釉を掛け、外面はヘラ状工具で釉薬を掻きとり、笹文を描く。苗代川系で19世紀代の所産と考えられる。

1447は、鉢である。外面は、口縁部から胴部にかけて剥落する。内面には自然釉が掛かる。産地・年代等も判断は難しいが、胎土・製作技法などから九州産と考えられる。

1448は、陶器の筒形香炉である。口縁部端は内側へ巻くように折り返す。外面に銅緑釉を掛け、腰部以下及び内面は露胎する。肥前系内野山窯産で、17世紀後半から18世紀前半頃の製作である。1449は、陶器の香炉あるいは線香立てと考えられる。口縁部を外側へ折り返して玉縁状にし、腰部は外側へ張り出して明瞭な稜をつくる。鉄釉を掛け、口縁部～腰部に斜位または横位の櫛目を施す。腰部以下と内面は露胎する。肥前系で、17世紀後半と考えられる。1450は、陶器の香炉である。口縁部は外

側へ折り曲げて突出させた後、内側に折り返して断面「T」字状とする。銅緑釉をかけ、内面の胴部下半は露胎する。肥前系内野山窯産で、17世紀後半のものである。

1451は、染付小坏である。外面の高台脇に圈線、高台脇には二重圈線を描く。畳付には粗い砂粒が付着し、部分的に露胎する。肥前系で、17世紀後半以降の可能性がある。

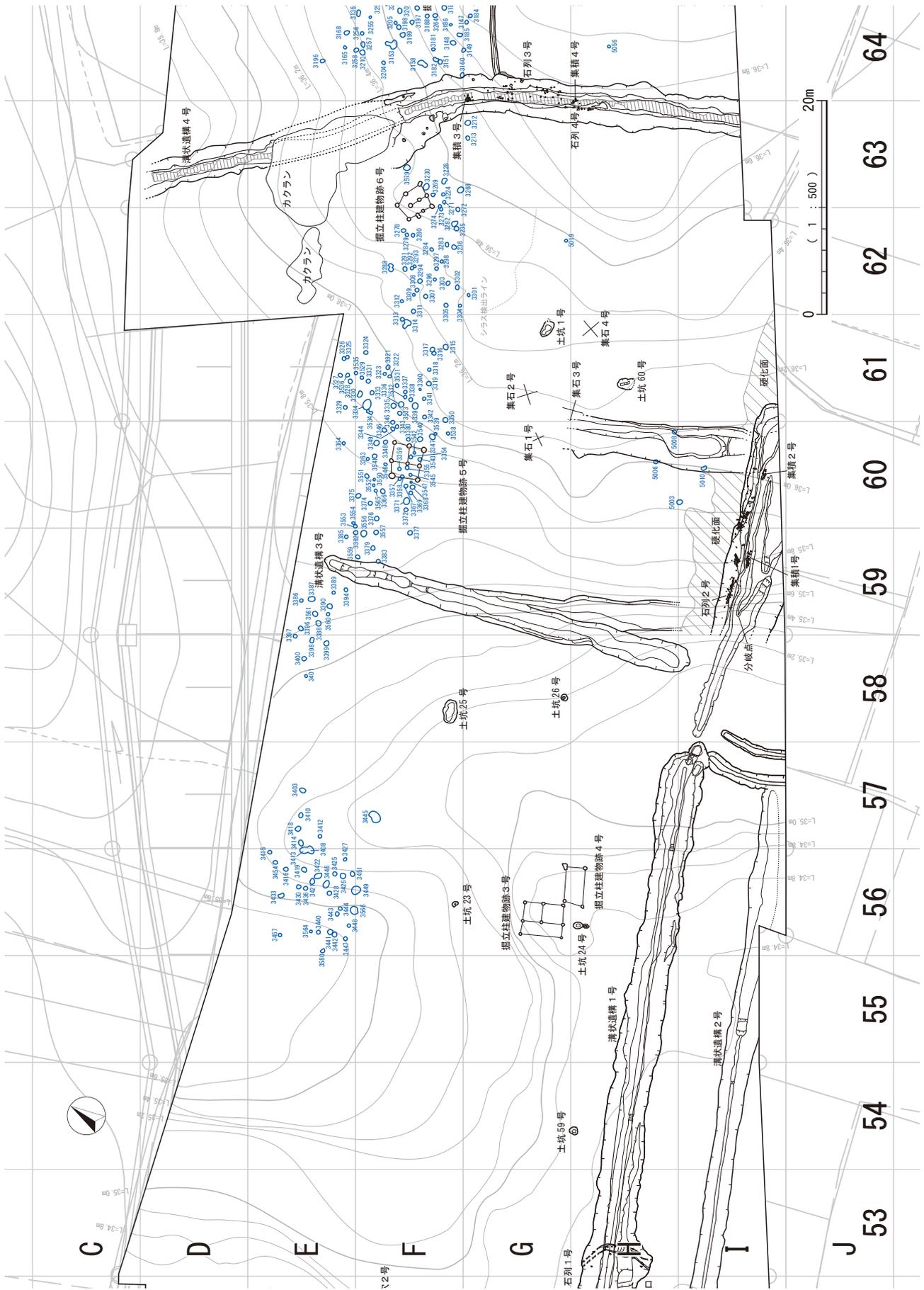
1452～1455は、金属製品等である。1452は、先端を欠損する小型刀子である。刀身と茎なかごの間に、明瞭な区まちを有する。1453は上部に穴が空けられ、先端に向けて細くなる針状の製品である。

1454は、蝶形の青銅製品で、装飾品と考えられる。表面には羽根模様が描かれ、左右並行に2箇所穿孔がある。胴体部分は立体的に作られ、上端は欠損する。裏面は、中央に四角い窓状の穴が空けられ、「U」字状の針金が一部露出する。頭部付近が分離しており、頭部と胴部で異なる部品を差し込むような構造であったと考えられる。

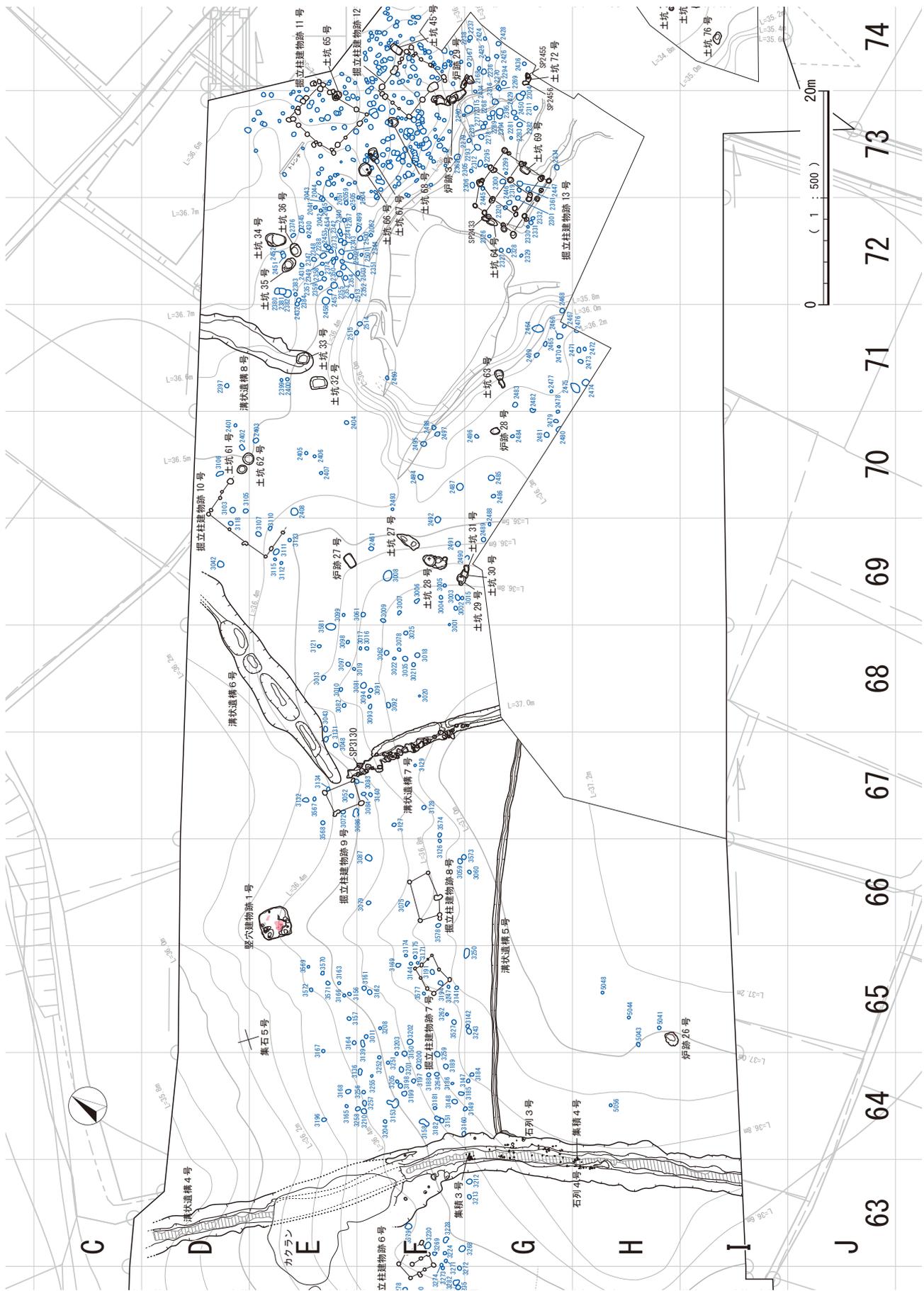
1455は、近世以前の古銭である。表面には文字がなく、無文銭と判断したが、使用や鋳写し等で銭文が消滅した可能性もある。



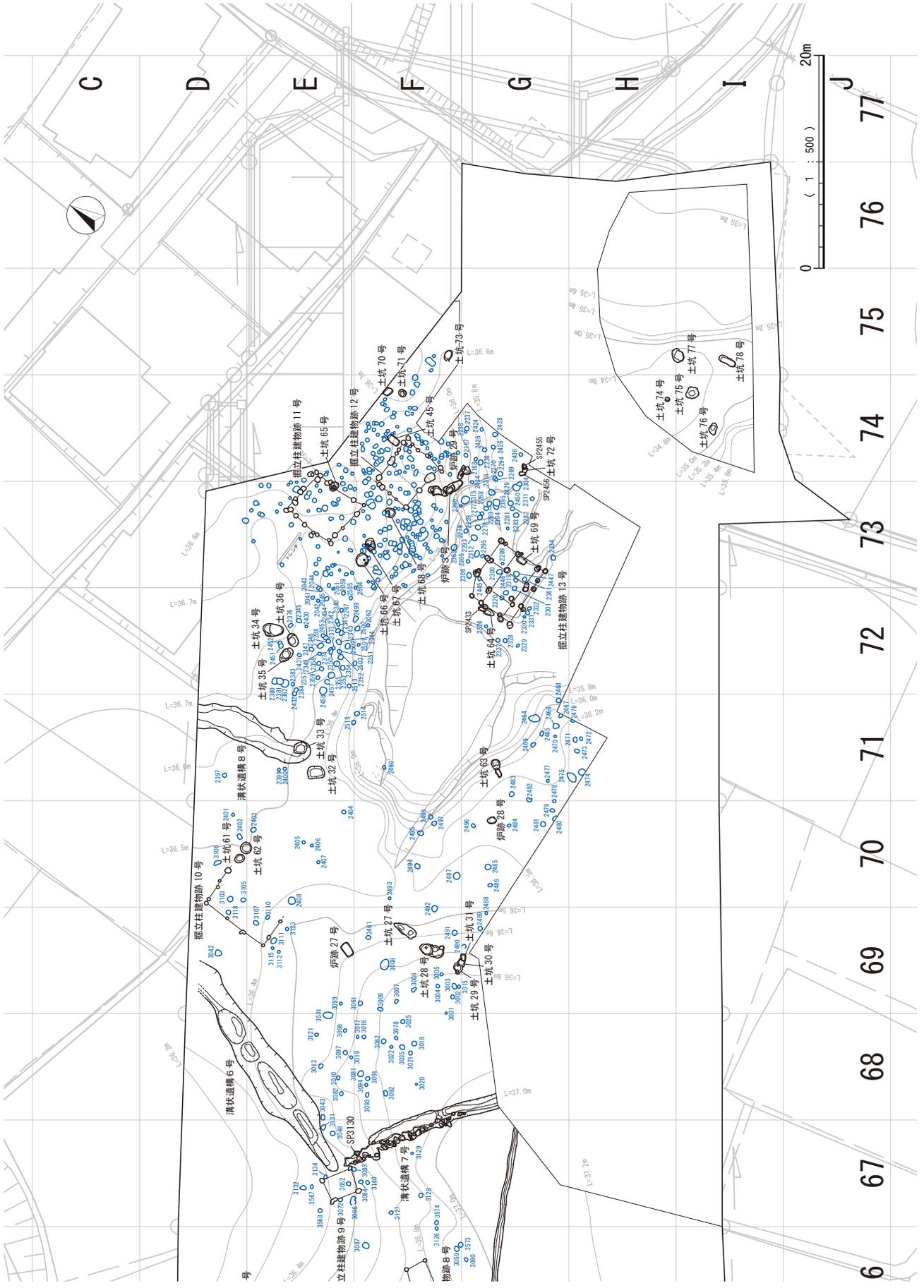
第238図 ピット及び周辺遺構配置図 (43～53区)



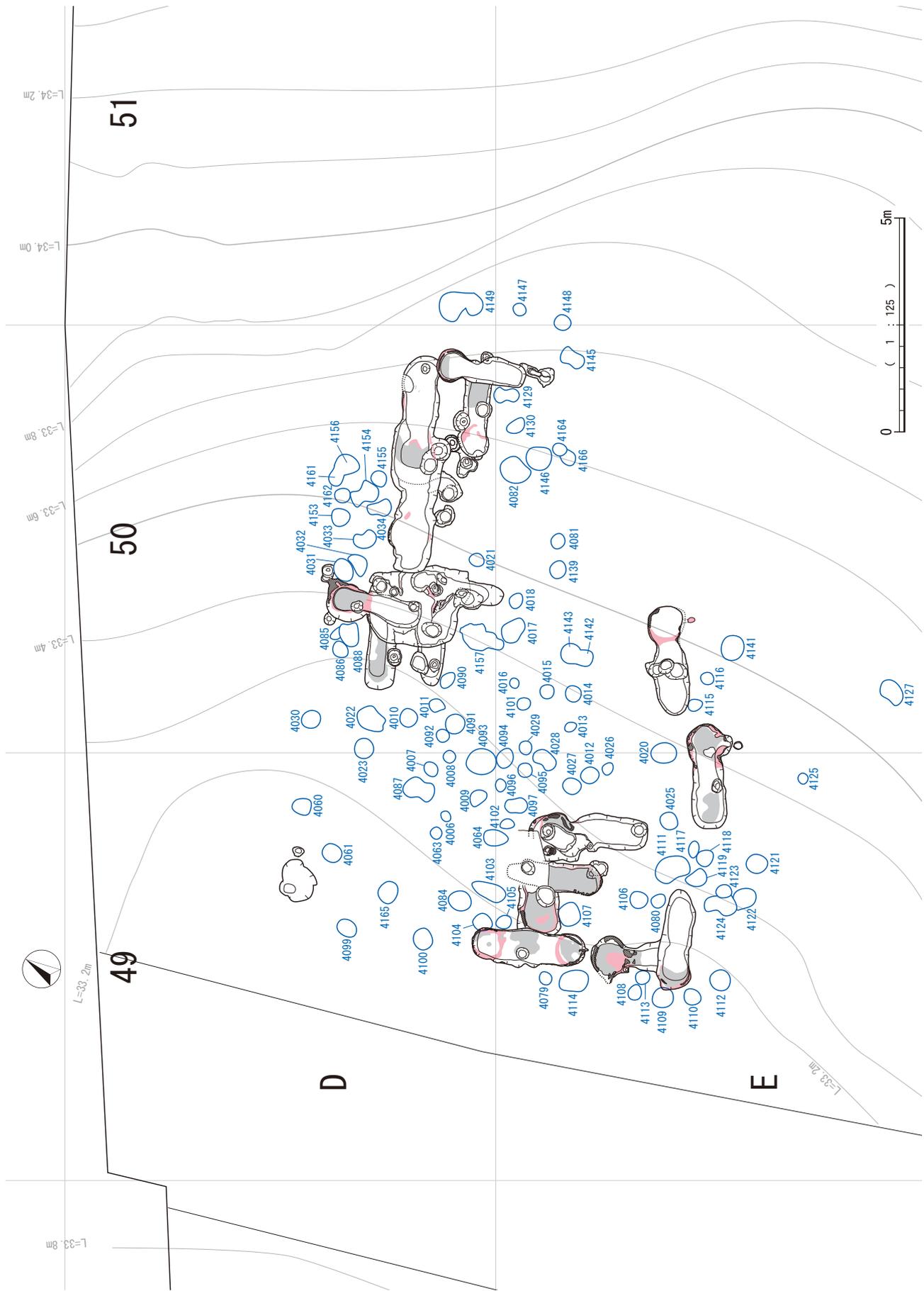
第239図 ピット及び周辺遺構配置図 (53～64区)



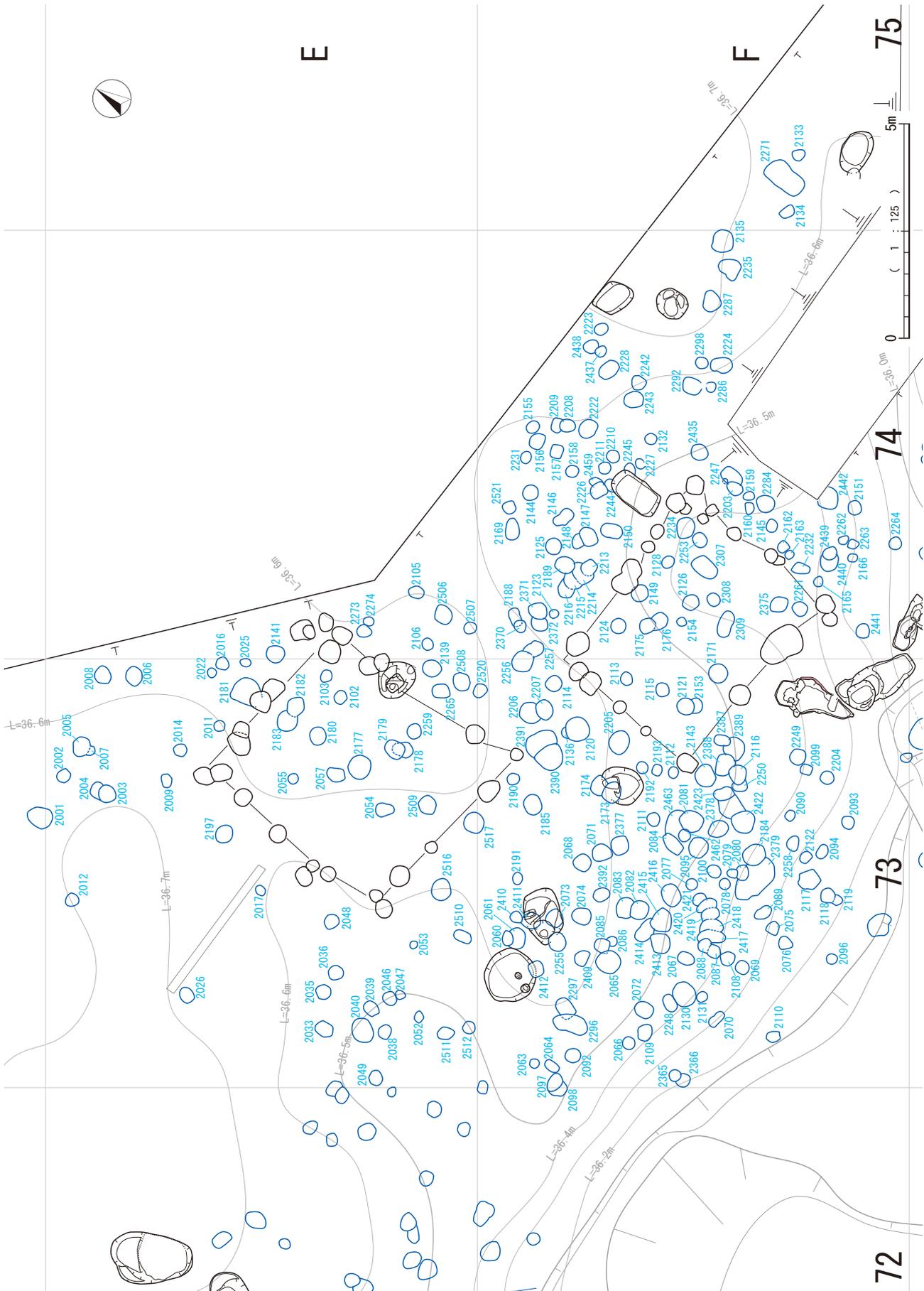
第240図 ピット及び周辺遺構配置図 (63～74区)



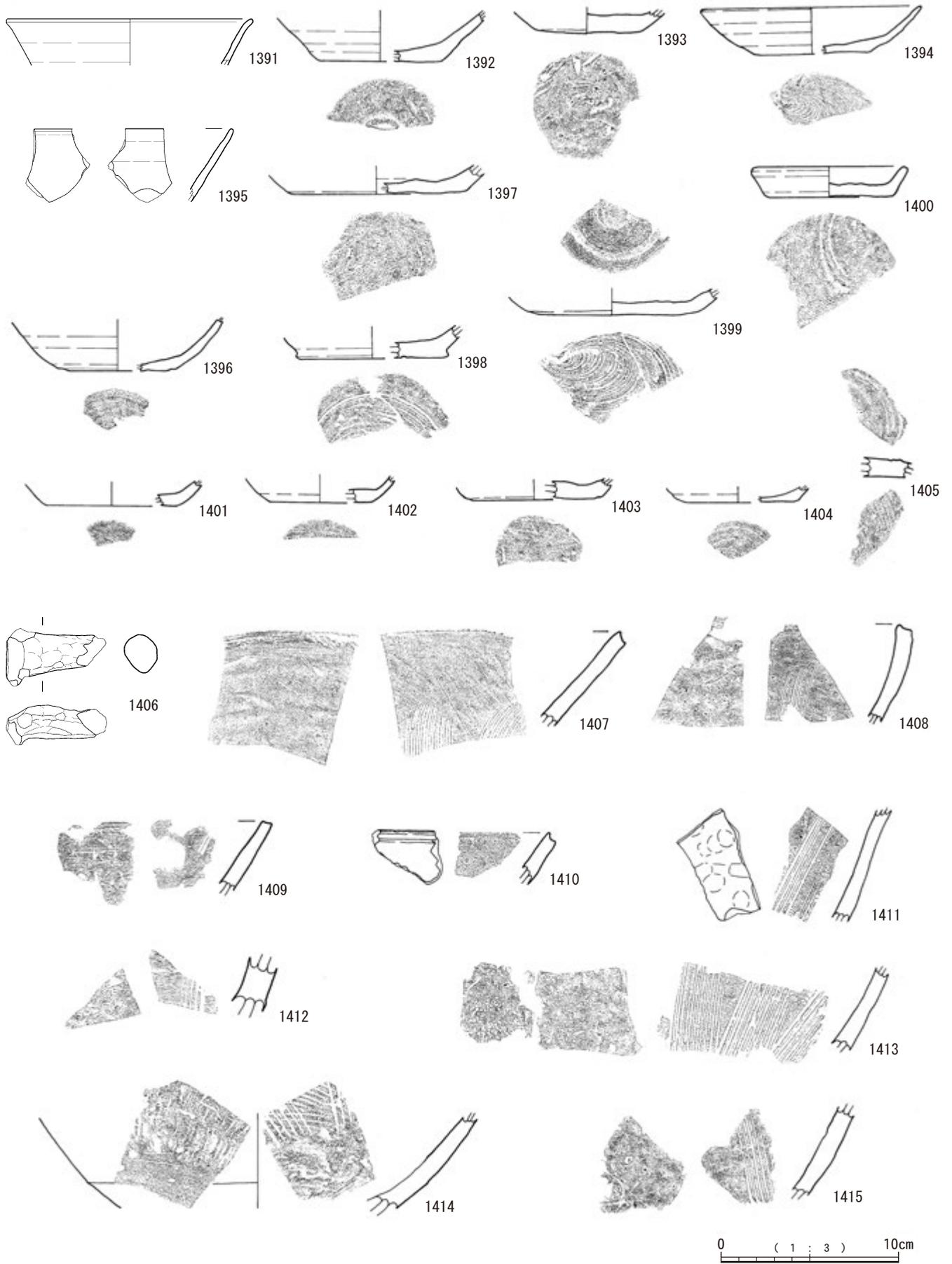
第241図 ピット及び周辺遺構配置図 (67～76区)



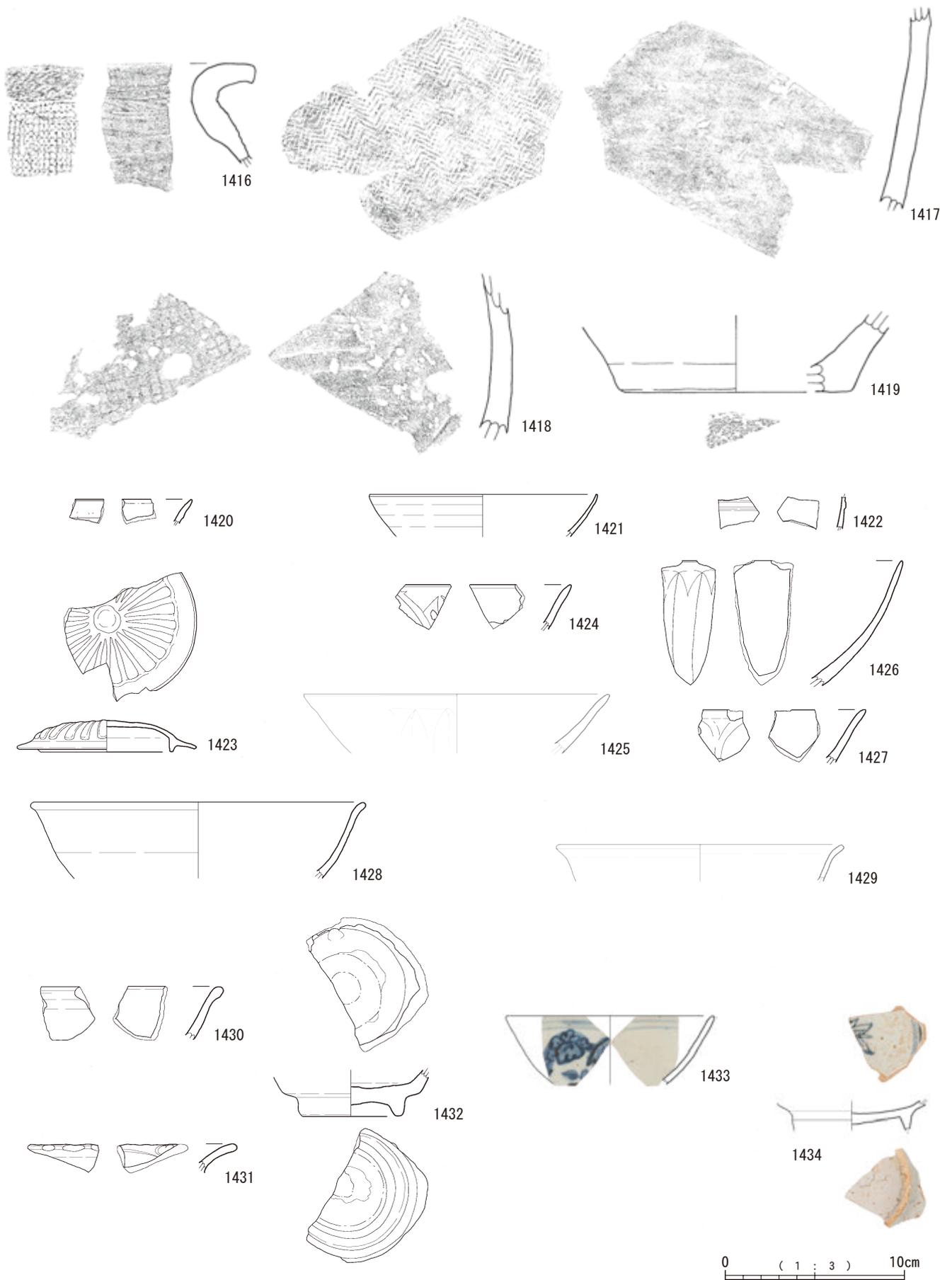
第242図 ピット拡大図① (D・E-49～51区)



第243図 ピット拡大図② (E・F-72～75区)



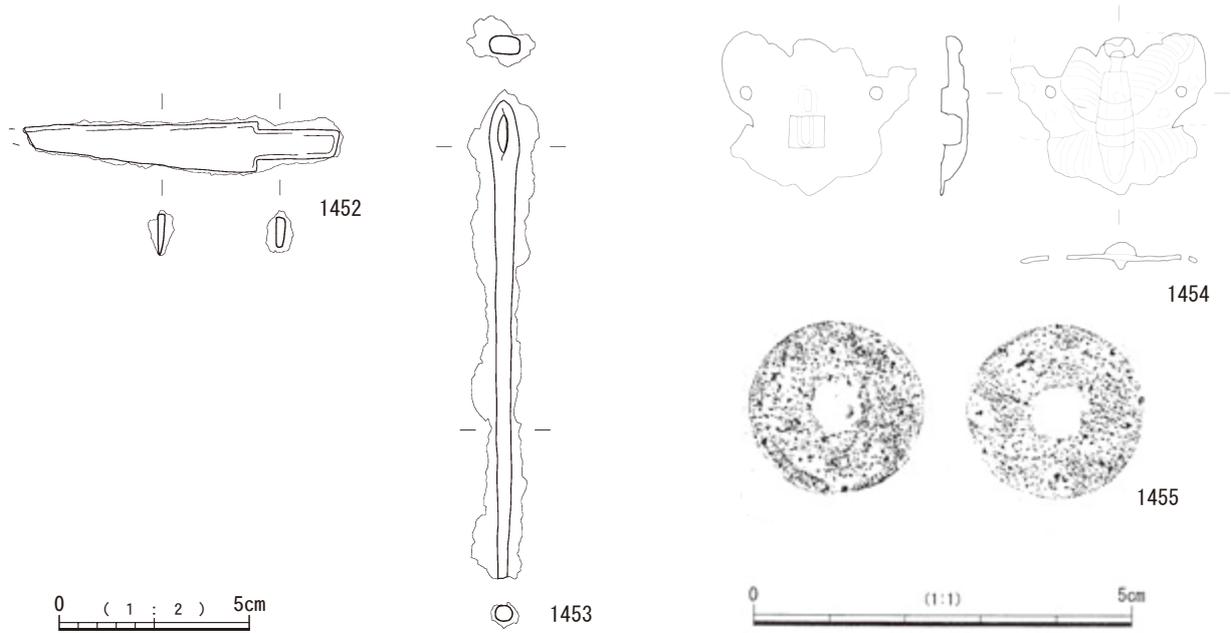
第244図 ピット出土遺物①



第245図 ピット出土遺物②



第246図 ピット出土遺物③



第247図 ピット出土遺物④

第53表 ピット出土遺物一覧(1)

No.	ピット番号	出土遺物	No.	ピット番号	出土遺物
1	SP10	白磁：1	41	SP2112	土師：1
2	SP12	瓦質：1 土器：1	42	SP2122	国陶：1 青磁：1
3	SP14	輪陶：1	43	SP2124	土器：1
4	SP18	土師：3	44	SP2135	青磁：1 青花：1
5	SP33	瓦質：1	45	SP2139	瓦質：1
6	SP34	須恵：1 青花：1	46	SP2141	国陶：1 青花：1
7	SP37	土師：1	47	SP2151	青花：1
8	SP43	土師：1	48	SP2172	輪陶：1
9	SP47	土師：1 土器：1	49	SP2180	瓦質：1
10	SP49	土師：1	50	SP2182	青磁：2
11	SP51	青花：1	51	SP2185	瓦質：3
12	SP55	土師1, 瓦質1, 国陶1	52	SP2187	瓦質：1
13	SP60	瓦質：1 須恵：2 土器：2	53	SP2192	土師：1
14	SP61	土師：1	54	SP2193	瓦質：2 国陶：1
15	SP63	土師：6 須恵：1	55	SP2195	瓦質：2
16	SP64	土師：5	56	SP2205	国陶：1
17	SP65	土師：1	57	SP2222	青磁：1
18	SP68	土師：1	58	SP2226	国陶：1 白磁：1
19	SP72	土師：1	59	SP2228	土師：1 青花：1
20	SP74	土師：1 瓦質：1	60	SP2229	白磁：1
21	SP91	国陶：1	61	SP2237	国陶：1 白磁：1
22	SP94	青花：1	62	SP2239	青磁：1
23	SP95	瓦質：1 白磁：1	63	SP2246	土師：2 青磁：2
24	SP96	土師：2	64	SP2248	瓦質：1
25	SP102	青花：1	65	SP2256	瓦質：1 国陶：1
26	SP103	輪陶：1	66	SP2257	輪陶：1
27	SP106	国陶：1 白磁：1 青花：2	67	SP2260	土師：1 白磁：1
28	SP111	国陶：1	68	SP2272	青磁：1
29	SP115	国陶：1	69	SP2275	須恵：1
30	SP186	輪陶：1	70	SP2289	輪陶：1
31	SP2005	土師：1	71	SP2290	土師：1 青花：1
32	SP2040	土師：1	72	SP2293	国陶：1
33	SP2048	白磁：2	73	SP2295	青磁：1
34	SP2061	瓦質：1 須恵：1	74	SP2296	瓦質：2
35	SP2071	土器：1	75	SP2297	瓦質：1
36	SP2075	瓦質：1	76	SP2304	国陶：1
37	SP2081	輪陶：1	77	SP2311	白磁：1
38	SP2083	輪陶：1	78	SP2315	輪陶：1
39	SP2092	土師：1	79	SP2341	土師：2 青磁：1
40	SP2095	須恵：1	80	SP2343	須恵：1

第54表 ピット出土遺物一覧(2)

No.	ピット番号	出土遺物	No.	ピット番号	出土遺物
81	SP2345	土師：5	118	SP3105	土師：1
82	SP2347	土師：1	119	SP3106	土師：1 須恵：1 国陶：1 土器：1
83	SP2348	青磁：1	120	SP3108	土師：1
84	SP2351	土師：1	121	SP3116	土師：1
85	SP2352	国陶：1	122	SP3118	白磁：1
86	SP2353	土師：4	123	SP3123	土師：3 須恵：1
87	SP2355	土師：3	124	SP3136	土師：2
88	SP2359	須恵：1	125	SP3139	土器：1
89	SP2364	国陶：1 青花：1	126	SP3150	土師：1 土器：1
90	SP2366	土師：1	127	SP3156	青磁：1
91	SP2377	青磁：1	128	SP3173	土師：1
92	SP2378	土師：1	129	SP3199	土器：1
93	SP2384	瓦質：1	130	SP3208	土師：1
94	SP2386	白磁：1	131	SP3224	土師：2 瓦質：1
95	SP2391	青磁：1	132	SP3228	須恵：1
96	SP2396	土師：1 瓦質：2 青磁：1	133	SP3252	土師：2 土器：2
97	SP2403	青磁：1	134	SP3262	土師：2
98	SP2408	土師：1	135	SP3264	土師：1
99	SP2411	土器：1	136	SP3265	土師：1
100	SP2418	青磁：1	137	SP3288	土器：2
101	SP2431	土師：2	138	SP4001	土師：3
102	SP2454	土師：4	139	SP4005	土師：1
103	SP2457	青磁：1	140	SP4031	青花：1
104	SP2459	白磁：1	141	SP4060	土師：1 国陶：1 青花：1
105	SP2462	白磁：1 輪陶：1 土器：1	142	SP4083	土師：1
106	SP2492	土師：1	143	SP4084	須恵：1
107	SP2500	土師：1	144	SP4100	土師：1
108	SP2512	土師：1 土器：1	145	SP4104	土師：1
109	SP2516	土師：2	146	SP4109	土師：1
110	SP3004	土師：2	147	SP4128	輪陶：1
111	SP3005	土師：6	148	SP4139	土師：1
112	SP3006	土師：1	149	SP4146	土師：1
113	SP3008	土師：2	150	SP4153	土師：3
114	SP3061	土師：2	151	SP4154	輪陶：1 流動滓：1
115	SP3071	土師：1	152	SP4156	瓦質：1
116	SP3102	土師：1 須恵：1	153	SP4157	国陶：2 鉄滓：1
117	SP3104	白磁：1			

3 その他の遺物

時期が特定できないものや、近代以降で特に重要なものについて、ここに取り上げる。石器・石製品、金属製品などである。

(1) 石器・石製品

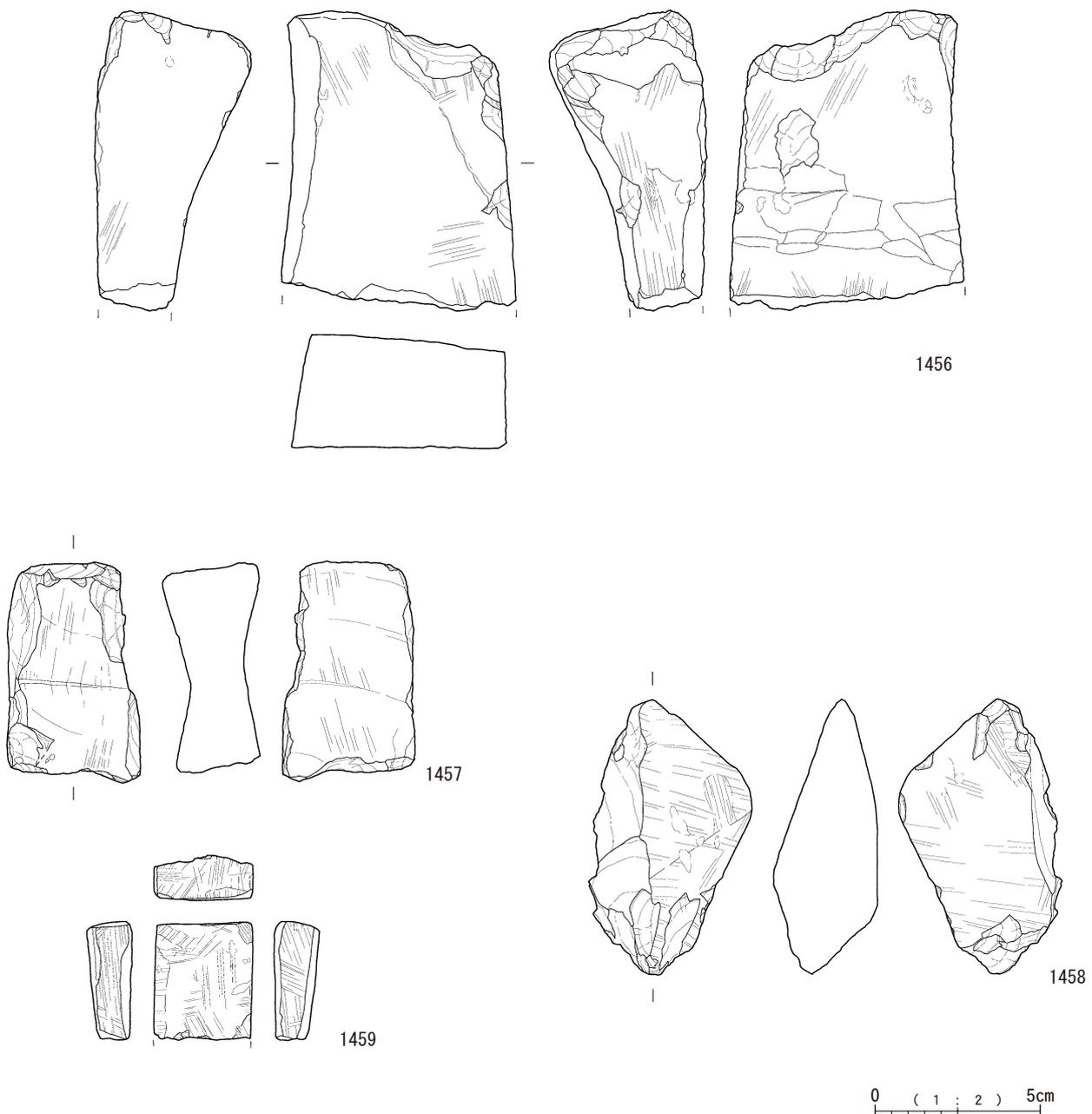
砥石 (第248図 1456 ~ 1459)

1456 ~ 1459は、砥石である。素材は木目状の構造となる変質流紋岩で、いわゆる天草砥石である。面が平滑かつ、各面の稜が明瞭である点から、鉄製品を研磨したものと考えられる。1456は、下半分を欠損する。各面に長軸方向の擦痕が認められ、中央部が薄くなる。また、

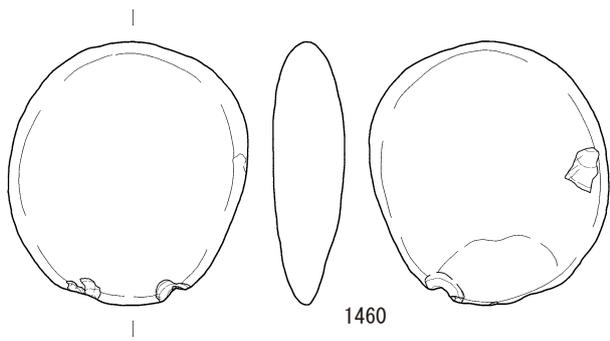
裏面には細かな段状の工具痕がみられる。1457は、一部を欠損するが、おおむね原形に近い。中央の最も薄い部分は、表裏面とも小さな段が生じている。1458は不定形で、半分以上が欠損していると考えられる。右上端は鋭角となり、稜をなす。1459は小型製品の破片であり、本来は長方形に近い形状であったと想定される。表面の右半分は、他よりも凹んでおり、研磨に伴う傷状の擦痕も集中することから、当該部分は使用頻度が高かったと考えられる。

打欠石器 (第249・250図 1460 ~ 1473)

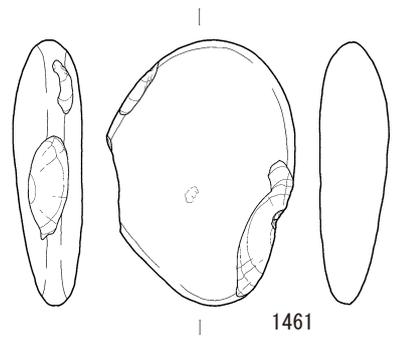
1460・1461は、扁平礫・円礫などの一端もしくは数か



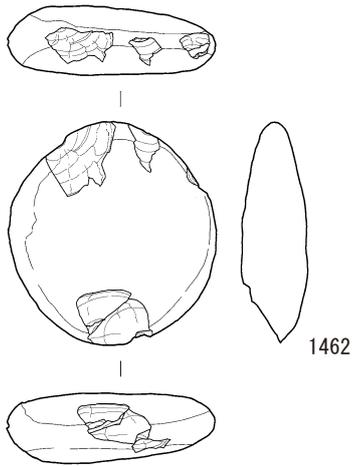
第248図 その他の遺物①



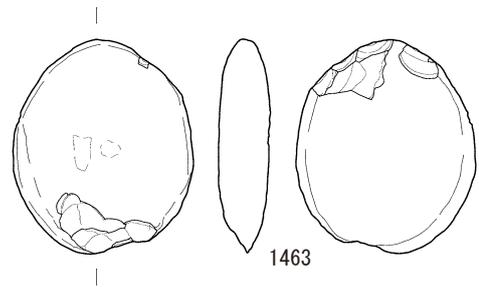
1460



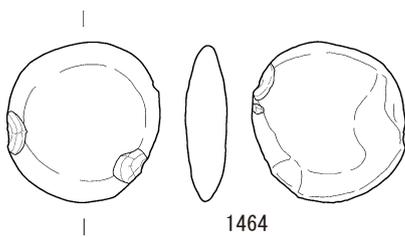
1461



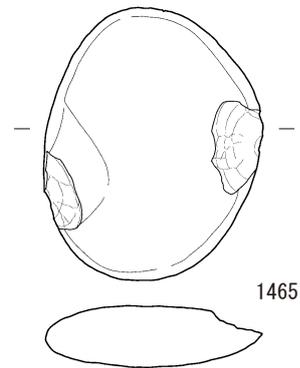
1462



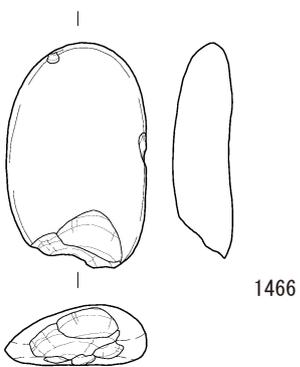
1463



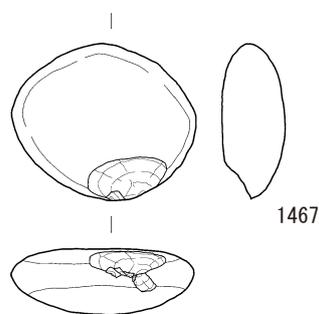
1464



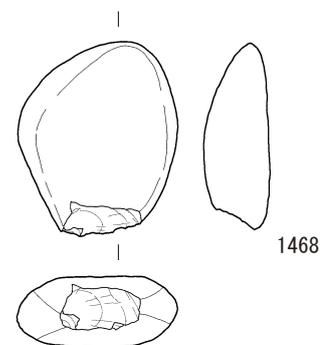
1465



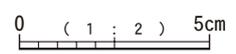
1466



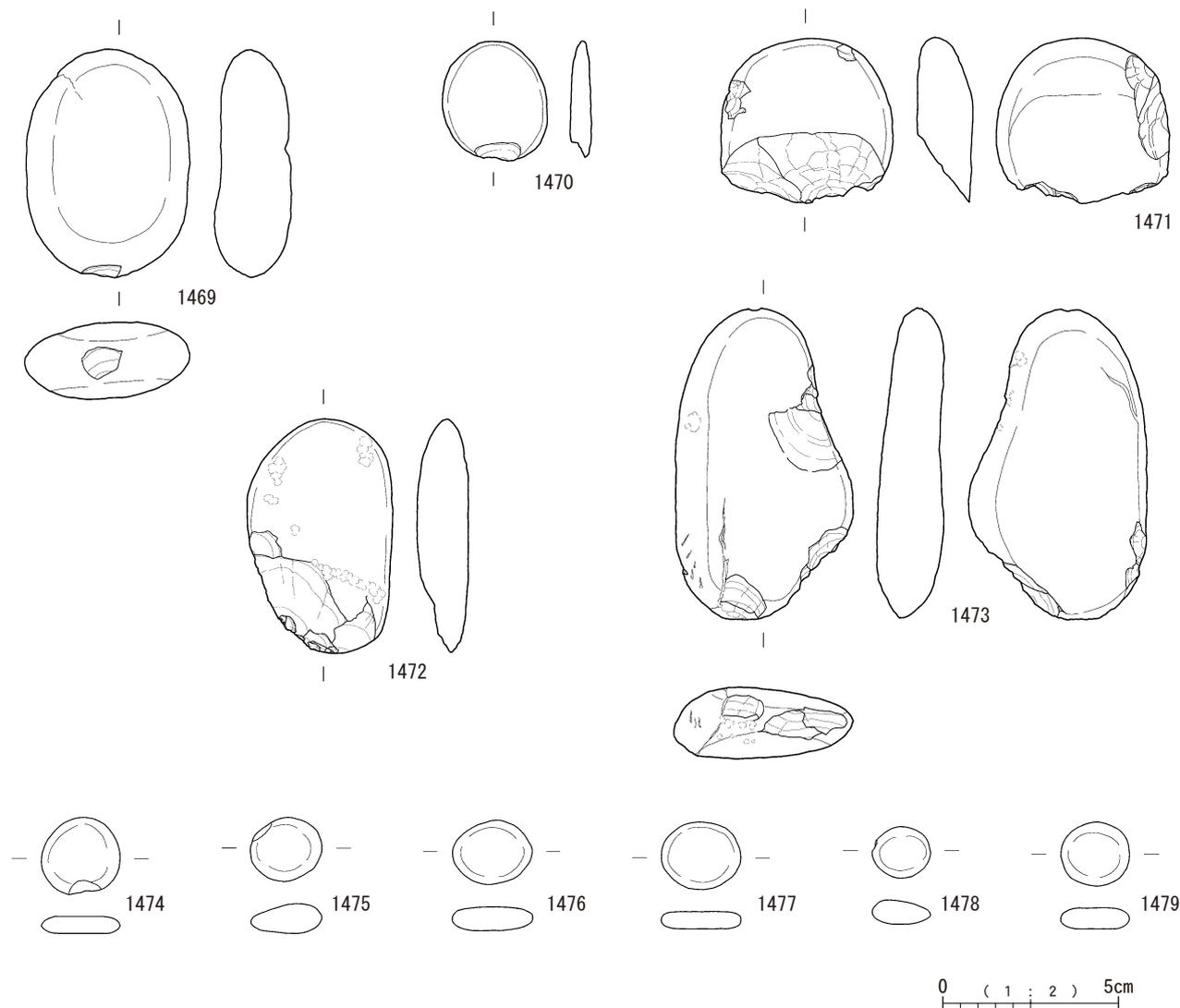
1467



1468



第249図 その他の遺物②



第250図 その他の遺物③

所を打ち欠いた石器である。石材は、ホルンフェルスと頁岩がある。使用に伴う敲打によるものと想定されるが、用途などは不明である。既存調査では中世の遺構で出土しているため、時期は中世の可能性はある。

1460～1465は、2か所以上の敲打を有するものである。敲打痕は、大小のばらつきがあり、規則性は認められない。また、剥離も1回の敲打によるものと、複数回の敲打を連続して行ったものがある。1465は、対で敲打が加えられるが、表面のみの浅い剥離である。1466～1470は、敲打が1か所のものである。1466～1468は、敲打痕が比較的幅広である。一方、1469・1470は、敲打痕が狭く、剥離も浅い。1471は、半分程度を欠損し、側面にも剥離痕が点在する。1472は、広い剥離の後、細かい敲打が加えられる。1473は原礫が不整形であり、下面を中心に敲打が加えられている。

基石（第250図 1474～1479）

1474～1479は、直径約1.5～2.4cmの円盤形の礫で、全面に光沢がある。これらの特徴から、基石と判断した。1479以外は頁岩製で黒色、1479は砂岩製で茶褐色を呈する。1478のみⅡb層出土で中世に該当する可能性があるが、他のものはほとんどが表土から出土したため、時期は不明である。

硯（第251図 1480～1482）

1480～1482は、石製硯である。1480は、墨道（陸）と縁の一部が残る。墨道には、工具によるケズリ痕が連続して加えられている。裏面には複数の線刻が切り合うが、文字等の判別はできなかった。1481は、小型の硯である。わずかに端部が欠損するが、ほぼ完全に残っていた。墨道の中央はわずかに凹んでおり、実際に使用されていたことが分かる。1482は、墨道と縁の一部がわずかに残る。裏面は、剥落している。残存する縁の幅から、

1481と同等の大きさと推定される。

(2) 金属製品

鉄製品 (第251～253図 1483～1503)

1483～1503は、鉄製品である。

1483・1484は刃部があるもので、刀子と考えられる。1483は先端が残存し、鋭利に尖る。1484は、尖る先端部がわずかに残存し、厚みや断面形は、1483と同様である。1485は、先端を方形に納めるもので、小刀・山刀などに類似する。

1486は、厚いサビに覆われているため、詳細な器種は不明であるが、茎と刀身の間には、鍬(はばき)が残存している。先端部は欠損し、上面に折れ曲がった構造がみられる。

1487は下縁が弧状となる製品で、両端は欠損する。形状から火打ち金と考えられ、上部には孔が開けられており、紐をとおしていたと考えられる。

1488～1490は、鎌である。1488は、雁股鎌である。関部分は不明瞭で、確認できなかった。1489は先端が欠損しており、全形は不明である。1490は鎌身が先端に広がっていく方頭鎌である。

1491は、小型の鎌状製品である。茎が2cm程残存し、刀身との境に小さな段状の区がみられる。下端は欠損する。

1492・1493は、板状の製品である。厚みがあり、刃部のような構造もみられない。1492は、上端に方形の孔が開けられている。1493は、下端がすぼまり、ヘラ状になる。1494は、板状の製品を折り曲げて、側面観が逆「U」字形となるものである。1492～1494は、いずれも器種や用途は、不明である。

1495～1497は、棒状の製品である。1495は断面が方形で、若干曲がっている。1496は、先端が尖る釘状の製品で、断面は円形である。1497は断面円形で、緩やかに折れ曲がる。両端は、欠損している。

1498は大型のヘラ状の製品で、基部が茎状に細くなる。先端は方形であるが、中央付近は断面が弧状に膨らむ形状である。用途は不明である。

1499は、側面観が「L」字形の製品である。上部を屈曲させ、上端に平坦面を設けている。下端部が欠損するが、折れ釘であると考えられる。

1500は、上面観が環状になる製品である。薄い板状のものを環状に巻き付けている。1501も同様の製品と考えられるが、残存状況が悪く、巻き付けているかは不明である。

1502・1503は、鉄鍋の一部と考えられる。1502は板状の破片で、厚みがあり、重量もあるため、鍋の胴部と考えられる。1503は、把手部分と考えられる。残存する片方の端部は鉤状を呈し、中央で折れ曲がる。

鉛製品 (第253図 1504)

1504は、鉛玉である。内面は空洞であり、半分近くが欠損している。鉄砲玉の可能性もある。

銅製品 (第253図 1505～1513)

1505・1506は、板状のものを袋状に加工した製品である。器種は、不明である。

1507～1513は、煙管(キセル)である。1507～1511は、雁首である。1507は残存状況が良く、ほぼ完形である。火皿から雁首にかけて、緩やかに傾斜する。1508は1507に比べて小型で、火皿の底面と雁首の胴がほぼ水平である。1509は、雁首が細く、羅宇との接続部の段が明瞭である。1510・1511は、火皿が欠損する。1512・1513は、吸口で、いずれも残りが良い。1512は吸い口の口元が徐々に細くなるが、1513は長さが短く、すぼまって口元が細くなる。

古銭等 (第254図 1514～1524)

1514～1523は古銭、1524は胸章である。いずれも緑青がみられ、銅を多く含む合金と考えられる。

1514は、レントゲン撮影で確認したところ、古銭を9枚重ねた状態のものと判断した。銭文は明瞭に確認ができなかったが、部分的に「洪」と読み取れるものがあり、洪武通寶の可能性はある。

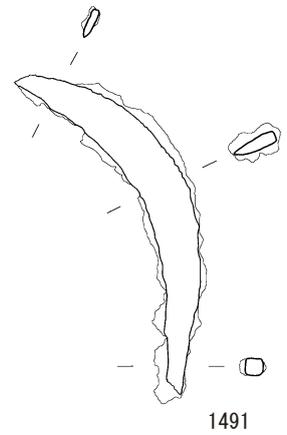
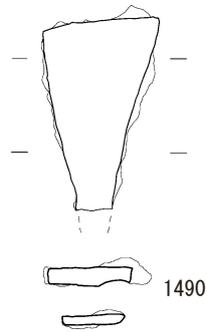
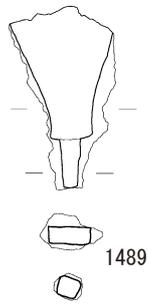
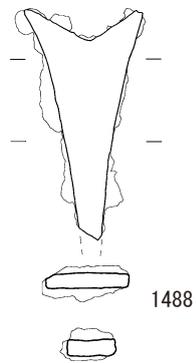
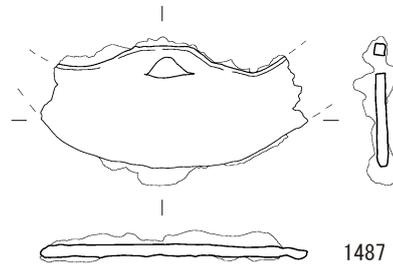
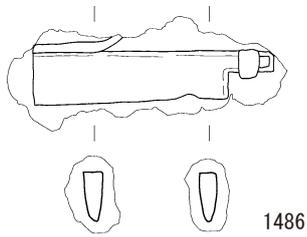
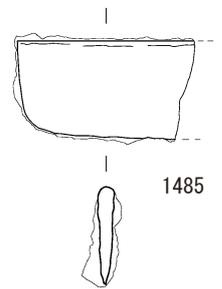
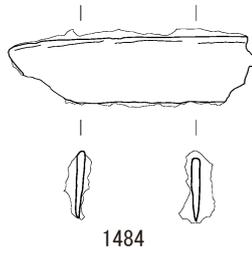
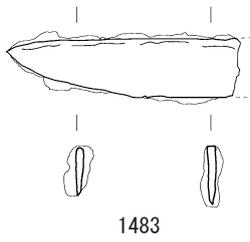
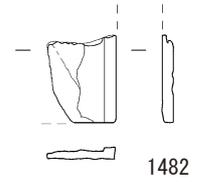
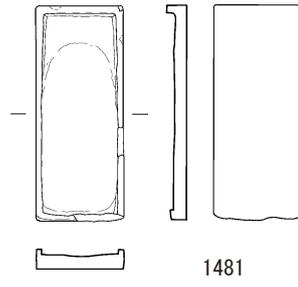
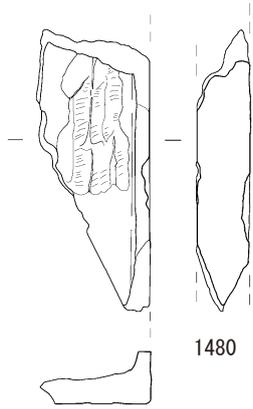
1515～1519は、寛永通寶である。裏面は無文である。1515は「ス寶銭」であるため古寛永、1516～1518は「ハ寶銭」であるため新寛永である。1519は、寛永通寶を磨って菱形に加工したものである。「ハ寶銭」のため、新寛永である。

1520は、錆が激しいため、銭文が不明瞭であるが五銭銅貨の可能性はある。1521は、一銭銅貨である。裏面に、「昭和二」(1927)年の銘がある。1522は、十銭銅貨である。裏面には、「昭和十四」(1939)年の銘が確認できる。1523は、近代の古銭と考えられるが、錆化が激しく、銭文は不明瞭である。また、裏面は錆が厚いため確認できない。

1524は八角形に近い花びら状で、表面に星と碇、花の文様がみられる。特徴から、明治34(1901)年に創立された「愛国婦人会」の会員章と考えられる。裏面は錆により、文字は判別できない。

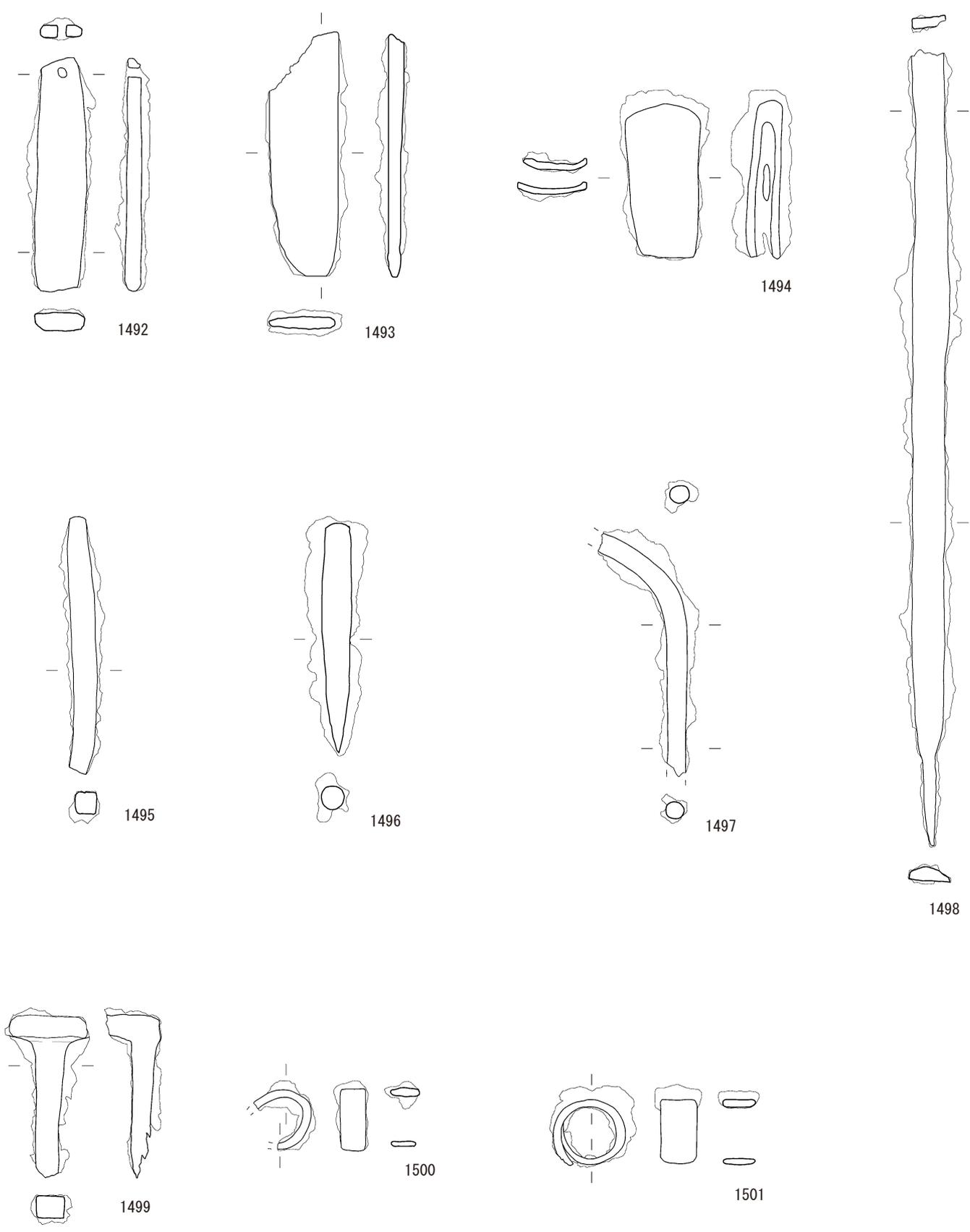
(3) 弥生土器 (第254図 1525)

1525は弥生土器の口縁部で、外面に粘土を貼り付けて張り出させる。口唇部及び内面にススが付着し、胎土には微細な角閃石や石英の粒子を多く含む。



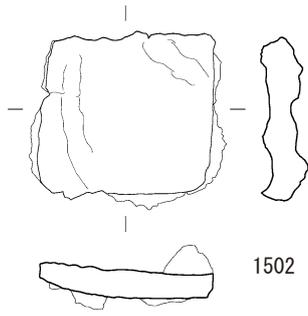
0 (1 : 2) 5cm

第251図 その他の遺物④

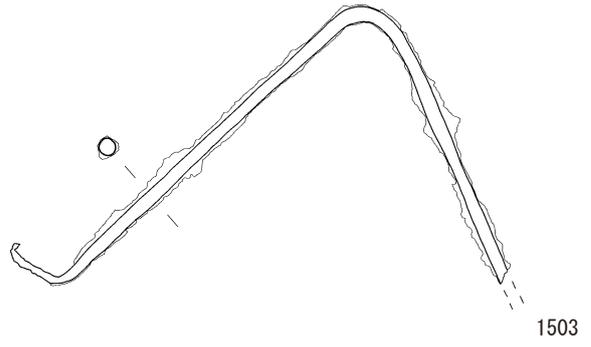


0 (1 : 2) 5cm

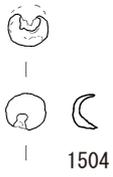
第252図 その他の遺物⑤



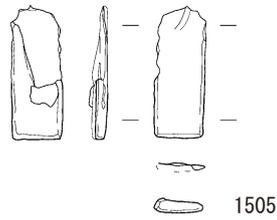
1502



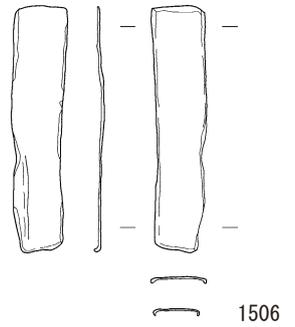
1503



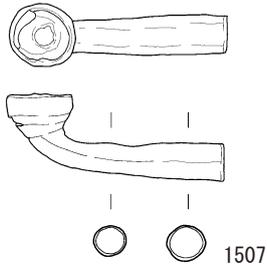
1504



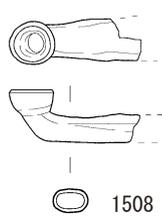
1505



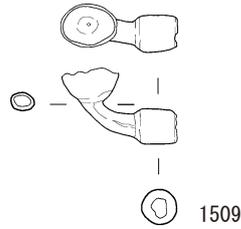
1506



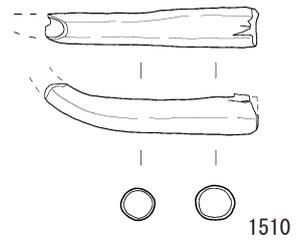
1507



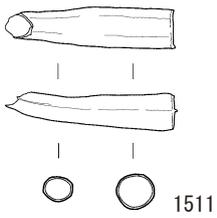
1508



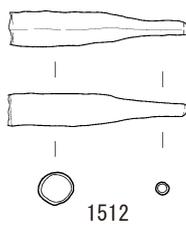
1509



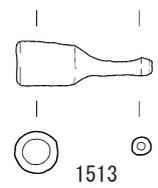
1510



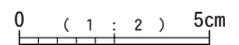
1511



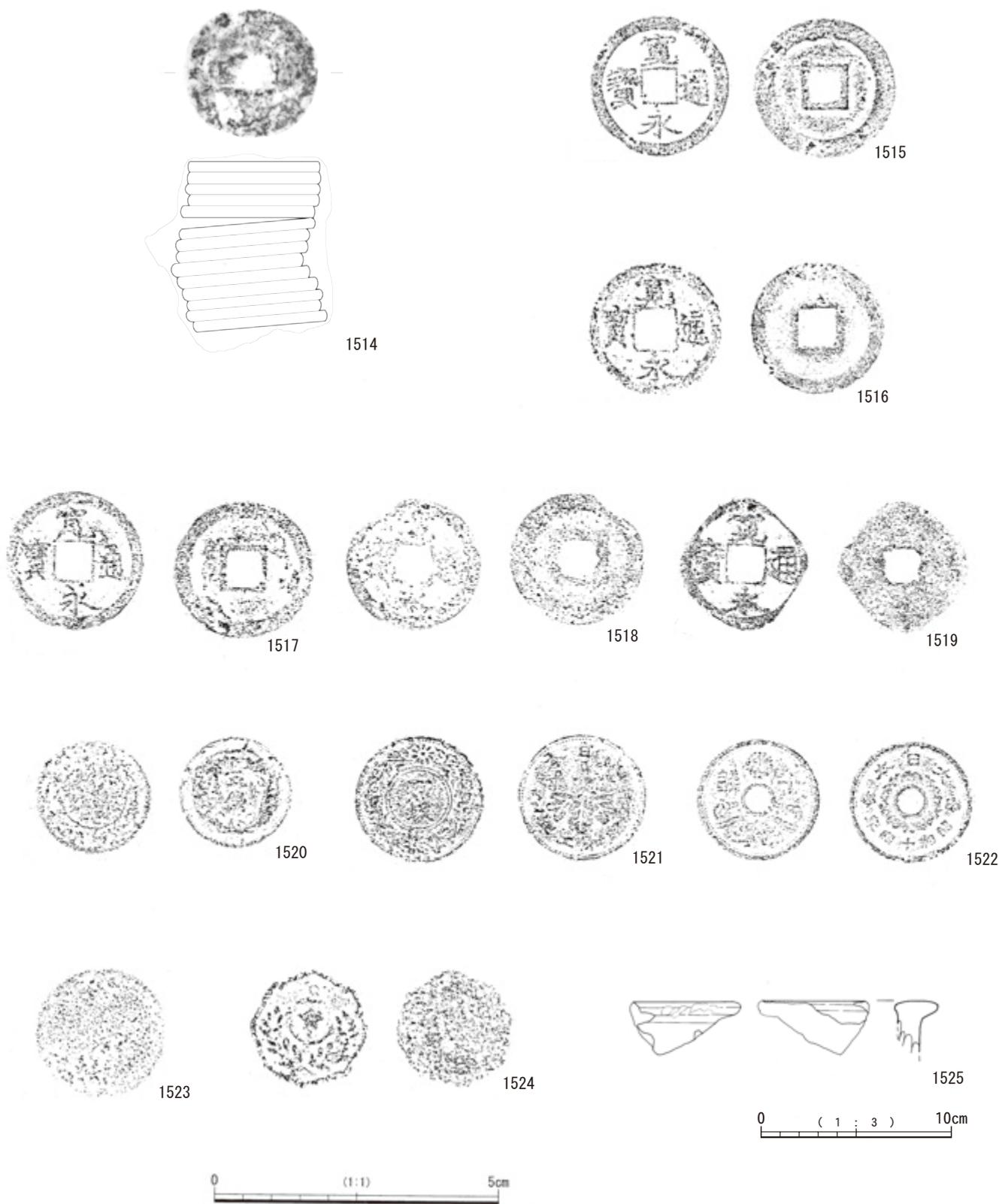
1512



1513



第253図 その他の遺物⑥



第254図 その他の遺物⑦

第55表 その他の遺構内遺物観察表(1)

挿図 番号	掲載 番号	出土 遺構	種別	器種	出土区 出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博 分類	編年	取上 番号	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面						
234	1386	土坑71号	磁器	皿	F・D	74 68	I	口縁部	(10.6)	-	-	-	-	明オリブ灰	明オリブ灰	-	-	-	肥前系、端反	
235	1387	土坑77号	薩摩焼	碗	H・I	75	-	腰部~底部	-	5.6	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	白薩摩、明瞭な貫入 登付は露胎	
	1388	土坑77号	染付	碗	H・I	75	-	底部	-	(4.4)	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	肥前、外面胴部の凹窓内に 杉文、内面無文	
	1389	土坑77号	陶器	皿	H・I	75	-	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-	肥前、内面腰部に文様、外面無文	
	1390	土坑77号	陶器	搦鉢	H・I	75	-	胴部	-	-	-	-	-	橙	橙	-	-	-	肥前、硬質で器壁厚い	
244	1391	SP2345	土師器	坏	E	72	I	口縁部	(138)	-	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	にふい橙	にふい橙	赤粒、白粒、長石	-	-	-	薄手、内面に金属?付着 口唇部がやや外反
	1392	SP2260	土師器	坏	F	73	I	底部	-	(7.0)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、灰粒	-	-	-	底部へラ切り 底部付近をへラで調整
	1393	SP2005	土師器	坏	D	70	II c	底部	-	6.0	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	浅黄橙	浅黄橙	赤粒、黒粒、長石 白色小石	-	-	-	底部へラ切り
	1394	SP2516	土師器	坏	E	73	I	口縁~底部	(124)	(6.4)	2.6	回転ヨコナア	回転ヨコナア	淡橙	淡橙	白粒、灰粒	-	-	-	底部条切り、薄手 口唇部は舌状
	1395	SP3208	土師器	坏	F	65	VI a上	口縁部	-	-	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	にふい橙	にふい橙	白粒、黒粒	-	-	-	底部条切り 口縁下内面はケズリ
	1396	SP2366	土師器	坏	F	73	I	胴~底部	-	(6.4)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	浅黄橙	浅黄橙	灰粒	-	-	-	内面にシミ状の痕跡
	1397	SP2454	土師器	坏	E	72	I	底部	-	(10.0)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	灰白	灰白	赤粒、白粒、黒粒 角閃石、砂粒	-	-	-	底部条切り 胎土はマーブル状
	1398	SP2454	土師器	坏	E	72	I II b	底部	-	(8.4)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	橙	橙	赤粒、赤色小石	-	-	-	底部条切り
	1399	SP72	土師器	坏	G	45		底部	-	(10.0)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	にふい橙	にふい橙	赤粒、白粒、角閃石	-	-	-	底部に明瞭な条切り痕 焼成良く、硬質
	1400	SP2512	土師器	皿	F	73	I	口縁~底部	8.4	7.2	1.8	回転ヨコナア	回転ヨコナア	橙	橙	白粒、白色小石	-	-	-	底部条切り
	1401	SP3116	土師器	皿	D	69	VI a上	底部	-	(8.2)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	浅黄橙	浅黄橙	赤粒	-	-	-	底部条切り
	1402	SP2355	土師器	皿	E	72	I	底部	-	(5.8)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	橙	橙	赤粒、白粒	-	-	-	底部条切り、腰部にケズリ痕
	1403	SP2355	土師器	皿	E	72	I	底部	-	(7.6)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	橙	橙	赤粒、石英、角閃石	-	-	-	底部条切り
	1404	SP2454	土師器	皿	E	72	I	底部	-	(6.8)	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	橙	橙	白粒、黒粒、灰粒	-	-	-	底部条切り 細かい胎土粒子でマーブル状
	1405	SP2431	土師器	皿	E	72	I	底部	-	-	-	回転ヨコナア	回転ヨコナア	橙	橙	赤粒、白粒、黒粒	-	-	-	底部条切り
	1406	SP内	焙烙	把手	F	46		把手	-	-	-	ユビナア ユビオサエ	ナデ	淡橙	淡橙	赤粒、角閃石	-	-	-	
	1407	SP2297	瓦質土器	搦鉢	F	73	I	口縁部	-	-	-	ユビオサエ	ナデ	橙	橙		-	-	-	口唇部は溝状の凹み 硬質、内面に9条1単位の描目
	1408	SP2248	瓦質土器	搦鉢	F	73	I	口縁部	-	-	-	ユビオサエ	ナデ	灰黄	灰黄		-	-	-	口唇部は溝状の凹み 内面に10条1単位の描目
	1409	SP2187	瓦質土器	搦鉢	F	73	I	口縁部	-	-	-	ユビオサエ	ナデ	明黄褐	明黄褐		-	-	-	口唇部は溝状の凹み 薄手、搦鉢の可能性
	1410	SP2193	瓦質土器	搦鉢	F	73	I	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にふい黄橙	にふい黄橙		-	-	-	口唇部は溝状の凹み 薄手、搦鉢の可能性
1411	SP2139	瓦質土器	搦鉢	E	73	I	胴部	-	-	-	ナデ ユビオサエ	ナデ	浅黄	浅黄橙		-	-	-	内面に7条の描目	
1412	SP2075	瓦質土器	搦鉢	F	63	I	胴部	-	-	-	ナデ ユビオサエ	ナデ	褐灰	灰白		-	-	-	内面に7条の描目 厚手の大型製品	
1413	SP2061	瓦質土器	搦鉢	F	73	I	胴部	-	-	-	ナデ ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		-	-	-	内面に9条1単位の描目	
1414	SP3224	瓦質土器	搦鉢	F	63	VI a上	胴部	-	-	-	ハケナア ナデ・ケズリ	ナデ	灰白	灰白		-	-	-	内面に6条1単位の 縦位・斜位の描目	
1415	SP55	瓦質土器	搦鉢	F	47		胴部	-	-	-	ナデ ユビオサエ	ナデ	灰黄	灰黄		-	-	-	内面に6条の描目	
245	1416	SP3102	中世 須恵器	甕	D	69	VI a上	口縁~肩部	-	-	-	格子目タタキ	ケズリ	灰	灰		-	-	-	
	1417	SP2343	中世 須恵器	甕	E	72	II II b	胴部	-	-	-	タタキ・ナデ (鋸歯状)	ナデ	灰	灰		-	-	-	
	1418	SP2384	中世 須恵器	甕	E	72	I	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ヘラケズリ	灰白	灰白	砂粒・小石	-	-	-	焼成不良・軟質
	1419	SP2296	中世 須恵器	壺・甕	F	73	I	底部	-	(13.0)	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	砂粒・小石	-	-	-	焼成不良・軟質
	1420	SP3104	白磁	皿	D	70	VI a上	口縁部	-	-	-	-	-	オリブ黄	オリブ黄		IX類	III期	-	口禿皿
	1421	SP2237	白磁	碗	G	74	I	口縁部	(12.6)	-	-	-	-	灰白	灰白		B群	IV b期	-	中国福建省産
	1422	SP2260	白磁	不明	F・G	73	VI a - VI c	胴部	-	-	-	-	-	灰白	灰白		-	-	-	14c (元~明)の景德鎮産に類似
	1423	SP3118	白磁	壺	D	69	II b	蓋	口径 (10.0)	-	1.8	-	-	明緑灰 灰白	明緑灰 灰白		-	I~ II期	-	合子小壺の蓋、内側に歪み 上面に菊花状の型押し
	1424	SP2341	青磁	碗	E	72	-	口縁部	-	-	-	-	-	灰オリブ	灰オリブ		B1類	III期	-	細い鎚蓮弁、貫入入り
	1425	SP3156	青磁	碗	E	65	-	口縁部	-	-	-	-	-	にふい黄	にふい黄		B1類	III期	-	鎚蓮弁文
	1426	SP2122	青磁	碗	F	73	I	口縁~胴部	-	-	-	-	-	オリブ灰	オリブ灰		B0類	III期	-	鎚蓮弁文
	1427	SP2377	青磁	碗	F	73	I	口縁~胴部	-	-	-	-	-	灰オリブ	灰オリブ		B2類	IV a期	-	鎚蓮弁文
	1428	SP2135	青磁	碗	F	74	I	胴部	(18.6)	-	-	-	-	にふい黄	にふい黄		D2類	IV b期	-	14c 後半~15c 前葉
	1429	SP2348	青磁	碗	E	72	I	口縁部	(16.0)	-	-	-	-	浅黄	浅黄		D2類	IV b期	-	14c 末~15c 中葉
	1430	SP2222	青磁	碗	F	74	I	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白		D2類	IV b期	-	15c 中~後半
	1431	SP2182	青磁	皿	E	73	I	口縁部	-	-	-	-	-	オリブ灰	オリブ灰		-	V期	-	15c 後半~16c 初頭、後花皿
	1432	SP2391	青磁	碗	F	73	I	底部	-	5.6	-	-	-	オリブ灰	オリブ灰		-	V期	-	15c 後半~16c 初頭、中国産
	1433	SP2141	青花	碗	F	93・94	I	口縁部	(11.6)	-	-	-	-	灰白	灰白		E群	VI期	-	

第56表 その他の遺構内遺物観察表(2)

挿図番号	掲載番号	遺構名	種別	器種	出土区	出土地点	層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	歴博分類	編年	取上番号	備考
									口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面					
245	1434	SP2228	青花	碗	F	74	I	底部	-	(6.4)	-	-	-	灰白	灰白	-	C群	V期	-	
	1435	SP2352	陶器	碗	E	72	I	口縁部	(12.0)	-	-	-	-	にぶい黄褐	にぶい黄褐	-	-	IVa期	-	天目碗
246	1436	SP2348	輸入陶器	碗	E	72	I	胴部	-	-	-	-	-	黒褐	黒褐	-	-	IVa期	-	天目碗、内外面に厚い釉、胴部に輪飾り、胴部下半は露胎、焼成によるピンホール多数
	1437	SP2289	輸入陶器	鉢	G	73	I	口縁部	(28.0)	-	-	-	-	黒褐	黒褐	-	-	-	-	16c頃、玉縁状口縁華南産の焼締鉢
	1438	SP2257	輸入陶器	壺	F	74	I	頸部	-	-	-	-	-	にぶい黄	にぶい黄	-	-	V期	-	中世、輸入陶器
	1439	SP2256	輸入陶器	甕	F	73・74	I	頸部	-	-	-	-	-	褐灰	褐灰	-	-	-	-	中世後半、内外面に強いナデ砂粒多くマーブル状の胎土
	1440	SP103	輸入陶器	甕・壺	G	48	-	胴部	-	-	-	-	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	-	-	-	-	中世後半焼締陶器、外面に自然釉
	1441	SP102	染付	皿	F	48	-	口縁～底部	(14.0)	(6.0)	3.2	-	-	明緑灰	明緑灰	-	-	-	-	初期伊万里、1630～40年代見込みに草花文、粗い砂粒付着

第57表 その他の遺構内遺物観察表(3)

挿図番号	掲載番号	出土遺構	出土区	出土層	種別	器種①	器種②	器形等	部位	法量 (cm)			絵付釉薬	外面		内面		胎土の色調	時期	産地	備考
										口径	底径	器高		施釉部分	無釉部分	施釉部分	無釉部分				
246	1442	SP111	E	47 48	肥前陶器	碗	中碗	浅半球形	口縁部～高台	10.2	3.8	4.9	透明釉	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	-	浅黄橙	17c後半～18c前半頃	肥前系	京焼風、見込数屋草文、外面腰部以下露胎
	1443	SP2293	G	73	肥前陶器	皿	中皿	-	胴部～高台	-	4.5	-	透明釉	褐灰	黒褐	褐灰	-	褐灰	17c後半頃	肥前系	外面腰部以下露胎、見込み白化粧土、ハケメ、花文、見込砂目4
	1444	SP2205	F	73	肥前陶器	皿	-	鈔縁状口縁	口縁部～胴部	-	-	-	灰釉	灰白	-	灰白	-	灰黄～橙	1690～1780年代	肥前系	
	1445	SP2122	E	73	肥前陶器	鉢	大鉢?	T字状口縁	口縁部	-	-	-	緑釉	洪緑 暗緑青	-	洪緑	-	にぶい橙	17c末～18c前半	肥前系	口縁部溝状凹線3条
	1446	SP106	F	48	薩摩焼	甕	-	-	胴部	-	-	-	鉄釉	暗赤灰	灰赤	褐灰	-	褐灰	19c代	苗代川系	ヘラ描き落しと笹文
	1447	SP186	D・E	47	陶器	鉢	-	-	口縁部～胴部	-	-	-	鉄釉	赤灰	-	赤灰	にぶい赤褐	にぶい橙	九州産?	内面施釉	
	1448	SP91	D・E	47	肥前陶器	鉢	香炉	半筒形	口縁部～胴部	(10.8)	-	-	銅緑釉	淡青緑	にぶい黄橙	-	浅黄橙	浅黄橙	17c末～18c前半	肥前系	内野山窯、内面露胎
	1449	SP2422	F	73	肥前陶器	鉢	香炉	鼎形	口縁部～高台	(13.2)	-	-	鉄釉	暗赤褐	にぶい褐	-	にぶい赤褐	灰褐	17c後半?	肥前系	口縁部～胴部横位、斜位、脚目、腰部以下、内面露胎
	1450	SP2237	G	74	肥前陶器	鉢	香炉	-	口縁部～胴部	-	-	-	銅緑釉	鮮青緑 にぶい 灰緑 灰緑	-	暗青緑	にぶい橙	にぶい橙	17c後半	肥前系	内野山窯、内面口縁部以下露胎
	1451	SP94	F	47	-	染付	碗	小坏	腰張形	胴部～高台	-	2.4	-	透明釉	灰白	浅黄橙	灰白	-	灰白	17c後半?	肥前系

第58表 その他の遺構内遺物観察表(4)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種別	器種	出土区	層位	法量 (cm, g)				取上番号	備考	
							長さ	幅	厚さ	重量			
247	1452	SP2306	鉄製品	小型刀子	G	73	I	8.4	1.5	0.7	13.2	-	
	1453	SP4060	鉄製品	針状製品	D	49	マ	12.9	1.9	1.3	38.7	-	上部に孔
	1454	SP2338	青銅製品	不明	G	72	I	2.1	2.5	0.3	1.4	-	蝶形
	1455	SP2551	銅製品	古銭	E	73・74	I	2.3	2.3	-	2.9	-	無文銭か。銭文が消滅した可能性あり

第59表 その他の遺物 (石器・石製品) 観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層位	法量 (cm, g)				取上番号	備考	
						長さ	幅	厚さ	重量			
248	1456	石製品	砥石	H・I	75	-	9.1	7.1	4.8	354.8	-	天草砥石
	1457	石製品	砥石	D・E	49-51	I	6.7	4.0	2.9	98.4	-	天草砥石
	1458	石製品	砥石	I	58	III	8.4	5.0	3.2	100	-	天草砥石
	1459	石製品	砥石	H	52	I	3.7	3.0	1.4	22.7	-	天草砥石
249	1460	石器	打欠石	H	55	II c	7.0	6.3	1.9	124.5	3479	頁岩
	1461	石器	打欠石	F	50-53	I	7.1	5.0	1.9	88.5	-	頁岩
	1462	石器	打欠石	F	65	II	5.9	5.5	1.9	80.4	-	頁岩
	1463	石器	打欠石	G・H	52-53	I	5.7	4.7	1.4	54.2	-	頁岩
	1464	石器	打欠石	I	56	II a	4.2	4.1	1.2	29.6	-	頁岩
	1465	石器	打欠石	H・I	75	I	7.3	5.7	1.7	98.3	-	頁岩
	1466	石器	打欠石	G	57	II c	6.0	4.7	1.6	52.8	-	頁岩
	1467	石器	打欠石	F	58	II a	4.2	4.9	1.8	48.9	3037	ホルンフェルス
1468	石器	打欠石	F	58	II a	5.2	4.2	1.9	56.4	3038	ホルンフェルス	
250	1469	石器	打欠石	I	58	III	6.6	4.6	2.2	101.4	-	頁岩
	1470	石器	打欠石	E・F	56-58	III	3.5	3.0	0.6	10.3	-	頁岩
	1471	石器	打欠石	E	69	II	4.7	4.9	1.6	49.7	-	頁岩
	1472	石器	打欠石	G	52	II c	6.7	4.2	1.5	60.9	3529	頁岩
	1473	石器	打欠石	G	52	II c	8.9	5.1	2.1	123.9	3528	頁岩
	1474	石製品	碁石	D-F	51-53	I	2.2	2.2	0.5	3.8	-	

第60表 その他の遺物（金属製品）観察表

※金属製品の法量はサビを含む

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	法量 (cm, g)				取上番号	備考
							長さ	幅	厚さ	重量		
250	1475	石製品	碁石	D・E	50-51	I	1.8	2.0	0.9	4.7	-	
	1476	石製品	碁石	E	68	I	1.8	2.3	0.7	4.5	-	
	1477	石製品	碁石	I	52	I	2.0	2.3	0.5	4.4	-	
	1478	石製品	碁石	D	71	II b	1.5	1.7	0.7	2.4	-	
	1479	石製品	碁石	E	51	I	1.8	1.9	0.6	3.4	-	
251	1480	石製品	碗	G・J	73-76	II a	7.4	3.0	1.4	27.5	-	
	1481	石製品	碗	E	46	-	5.7	2.3	0.5	14.7	-	小型碗
	1482	石製品	碗	D	49-51	I	2.3	1.8	0.3	1.8	-	
	1483	鉄製品	刀子	I	53・54	I	6.1	1.9	0.8	11.2	-	
	1484	鉄製品	刀子	H	54	II c	6.5	2.1	0.9	19.5	-	小刀もしくは山刀に類似
	1485	鉄製品	小刀か	D・E	46・47	II b	4.7	2.7	0.8	13.4	-	
	1486	鉄製品	不明製品	H・I	47-48	II b	7.3	3.1	1.5	29.9	-	
	1487	鉄製品	火打金	D	69	II	3.9	7.0	1.2	23.2	-	
	1488	鉄製品	鎌	E	50	I	6.1	3.4	0.9	19.4	-	
	1489	鉄製品	鎌	D	71	II b	4.9	2.8	1.0	15.7	-	
	1490	鉄製品	鎌	F	65	V	5.4	3.1	0.7	16.8	9	
1491	鉄製品	鎌状製品	E	46	-	8.7	1.8	0.9	20.8	-		
252	1492	鉄製品	短冊形製品	G	64	II b	8.6	2.5	0.8	37.7	-	上端に穿孔あり
	1493	鉄製品	短冊形製品	I	74	-	8.9	3.0	1.3	41.3	-	
	1494	鉄製品	短冊形製品	D・E	46	II b	6.1	3.2	1.8	42.8	-	帯状製品をU字形に曲げたもの
	1495	鉄製品	棒状製品	E	46	II b 下	9.5	1.5	1.2	32.3	-	
	1496	鉄製品	杭状製品	H・I	45	II b	8.8	2.3	1.8	36.4	-	
	1497	鉄製品	棒状製品	I	47-48	II b	9.1	3.6	1.0	21.1	-	
	1498	鉄製品	棒状製品	H	56	II b	29.5	2.4	0.7	95.2	-	
	1499	鉄製品	棒状製品	E	45	II b	5.6	2.6	1.1	22.9	-	
	1500	鉄製品	環状製品	I	47	II b	3.0	3.1	0.4	25.3	-	
	1501	鉄製品	環状製品	E	44・45	II b	2.6	2.2	1.0	5.7	-	
253	1502	鉄製品	板状破片	H・I	47-48	II b	4.7	5.1	1.7	44.9	-	鑄鉄、鍋の一部か
	1503	鉄製品	吊り下げ把手	I	57	-	13.1	1.0	0.6	12.8	-	鍋の一部か
	1504	鉛製品	鉛玉	H	47	II b	1.0	0.7	1.0	2.8	-	鉄砲玉か・半分欠損（失敗品か）
	1505	銅製品	小柄	H・I	75	-	3.5	1.4	0.4	3.8	-	柄のみ残存、刃部は欠損
	1506	銅製品	小柄	D	47	-	6.5	1.4	0.2	10.0	-	柄のみ残存、刃部は欠損
	1507	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	D	47-48	-	5.7	1.0	1.0	8.2	-	雁首
	1508	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	G	47	II b	3.4	1.2	0.7	3.5	-	雁首
	1509	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	D	50	III	3.1	1.1	1.0	4.9	-	雁首
	1510	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	G・H	47-48	II b	5.6	1.0	1.1	6.7	-	雁首、火皿欠損
	1511	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	I	46	II b	4.4	1.0	1.0	6.5	-	雁首、火皿欠損
	1512	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	H・I	75	-	4.7	0.9	0.9	4.3	-	
1513	銅製品	青銅製煙管 (キセル)	D・E	49-51	I	3.5	1.2	1.1	6.1	-	吹口	
254	1514	銅製品	古銭	F・G	47	II a	2.5	3.2	3.5	60.1	-	洪武通寶か・14枚重ね、第14トレンチ内出土
	1515	銅製品	古銭	E	46	II b	2.5	2.5	0.2	4.5	-	寛永通宝（古寛永）
	1516	銅製品	古銭	E	46	II b	2.4	2.4	0.2	3.6	-	寛永通宝（新寛永）
	1517	銅製品	古銭	G	24	II a	2.5	2.4	0.2	2.8	-	寛永通宝（新寛永）
	1518	銅製品	古銭	E	49	I	2.3	2.3	0.1	1.8	-	寛永通宝（新寛永）
	1519	銅製品	古銭	H・I	75	II a	2.4	2.4	0.2	2.1	-	寛永通宝（古寛永）・菱形に加工
	1520	銅製品	古銭	D	47-48	-	2.1	2.1	0.2	4.4	-	五銭か
	1521	銅製品	古銭	H・I	45-47	II a	2.3	2.3	0.2	3.0	-	一銭銅貨、裏面に「昭和二」の銘
	1522	銅製品	古銭	H・I	45-47	II a 上	2.2	2.2	0.2	3.9	-	十銭、裏面に「昭和十四」の銘
	1523	銅製品	古銭	E	68	I	2.4	2.4	0.20	4.6	-	不明
	1524	銅製品	胸章	E	23	II a	2.0	2.0	0.2	3.5	-	「愛国婦人会」会員証

第61表 その他の遺物（土器）観察表

挿図番号	掲載番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
254	1525	弥生土器	甕	E	49	I	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐	○	○	○	白粒・黒粒	-	

第V章 自然科学分析等

第1節 北山遺跡の放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

北山遺跡の測定対象試料は、遺構、遺物包含層から出土した炭化物1点である(表1)。

2 化学処理工程～炭化物の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/? (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、14Cの計数、13C濃度 (13C/12C)、14C濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の13C濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に

対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい (14Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (14Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}C$ 補正を行い、下一桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、試料中の炭素が大気中の二酸化炭素に由来すると考えられる試料に対してIntCal20較正曲線 (Reimer et al. 2020) を、大気中の二酸化炭素とは由来の異なる炭素を含むと考えられる試料に対してMarine20較正曲線 (Heaton et al. 2020) を用い、いずれも0xCalv4.4較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用して較正年代を算出した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。試料1点の14C年代は、430 \pm 20yrBP (試料No. 9) である。暦年較正年代 (1σ) は、No. 9が1438~1460cal ADの範囲で示される。試料の炭素含有率は、炭化物No. 9は60%以上という試料の種類ごとに適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

6 補足

第1節の自然科学分析結果については、令和4年度に刊行した「北山遺跡1」でも報告されており、今回は本書の報告に係る試料 (試料No. 9) のみを抜粋して掲載した。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Heaton, T.J. et al. 2020 Marine20—the marine radiocarbon age calibration curve (0-55,000 cal BP), Radiocarbon 62(4), 779-820

尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
 Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-220574	No.9	区:D~G-47 遺構名:14トレンチ 位置:鉄滓付着炭化物	炭化物	AAA	-33.76 ± 0.21	430 ± 20	94.75 ± 0.26

[IAA登録番号:#B480]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-220574	580 ± 20	93.06 ± 0.25	433 ± 22	1438calAD - 1460calAD (68.3%)	1429calAD - 1479calAD (95.4%)

[参考値]* OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021)にて Marine data from Heaton et al (2020)を使用しmarine100%で較正

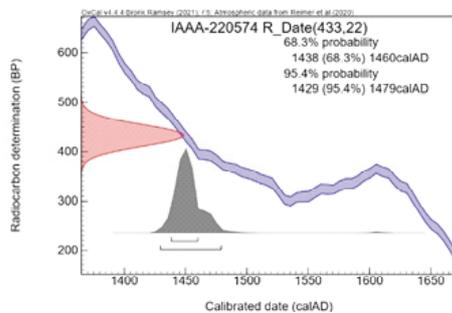


図1 暦年較正年代グラフ



図2 試料写真 (赤枠の部位から採取) 試料No.9

第2節 北山遺跡の放射性炭素年代AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

鹿児島県に所在する北山遺跡の測定対象試料は土坑や炉跡等から出土した炭化物7点である(表1)。北山遺跡の試料6は、鉄滓の表面から炭化物を採取して試料とした。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物、混入物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」, 1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元

し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、14Cの計数、13C濃度 (13C/12C)、14C濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の13C濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正してい

ない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差(±1σ)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値もδ13Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.3%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ13C補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(

Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。なお、暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。北山遺跡出土試料7点の14C年代は、650±20yrBP(試料1)から210±20yrBP(試料3)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料1が1298~1387cal ADの間に2つの範囲、最も新しい試料3が1657~1799cal ADの間に3つの範囲で示される。なお、試料3の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表2下の警告参照)。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P. J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757
 Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果(δ13C補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ13C(‰)(AMS)	δ13C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-221730	1	北山遺跡 F-44区 土坑5号 遺構内③	炭化物	AAA	-30.71 ± 0.22	650 ± 20	92.26 ± 0.25
IAAA-221731	2	北山遺跡 E-50 炉跡13号 床面	炭化物	AAA	-23.67 ± 0.22	380 ± 20	95.39 ± 0.26
IAAA-221732	3	北山遺跡 土坑57号 床直上	炭化物	AAA	-27.65 ± 0.18	210 ± 20	97.45 ± 0.26
IAAA-221733	4	北山遺跡 製鉄炉4号 遺構内①	炭化物	AAA	-25.87 ± 0.25	320 ± 20	96.10 ± 0.25
IAAA-221734	5	北山遺跡 D-47区 製鉄炉1号 埋土中	炭化物	AAA	-29.13 ± 0.25	290 ± 20	96.48 ± 0.25
IAAA-221735	6	北山遺跡 E-46区 包含層 鉄滓付着炭化物	炭化物	AAA	-27.47 ± 0.20	360 ± 20	95.66 ± 0.26
IAAA-221736	7	北山遺跡 E-50区 炉跡15号 炉跡出土炭化物	炭化物	AAA	-27.27 ± 0.25	350 ± 20	95.78 ± 0.26
IAAA-221737	8	新城跡遺跡 G-8区 炉跡25号 埋土層 炉跡出土炭化物	炭化物	AAA	-29.71 ± 0.30	340 ± 20	95.89 ± 0.26

[IAA 登録番号: #B739, B740]

表2 放射性炭素年代測定結果(δ13C未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-221730	740 ± 20	91.19 ± 0.25	646 ± 21	1298calAD - 1315calAD (25.1%) 1361calAD - 1387calAD (43.2%)	1287calAD - 1325calAD (41.4%) 1353calAD - 1394calAD (54.0%)
IAAA-221731	360 ± 20	95.65 ± 0.26	378 ± 21	1459calAD - 1500calAD (51.5%) 1600calAD - 1615calAD (16.8%)	1451calAD - 1523calAD (64.7%) 1575calAD - 1625calAD (30.7%)
IAAA-221732	250 ± 20	96.92 ± 0.26	207 ± 21	1657calAD - 1675calAD (22.6%)* 1743calAD - 1750calAD (5.6%)* 1765calAD - 1799calAD (40.1%)*	1650calAD - 1684calAD (29.8%)* 1735calAD - 1804calAD (57.6%)* 1929calAD - ... (8.1%)*
IAAA-221733	330 ± 20	95.93 ± 0.25	319 ± 21	1520calAD - 1587calAD (56.1%) 1622calAD - 1636calAD (12.1%)	1495calAD - 1602calAD (75.8%) 1611calAD - 1643calAD (19.7%)
IAAA-221734	360 ± 20	95.66 ± 0.24	287 ± 20	1526calAD - 1557calAD (41.8%) 1632calAD - 1650calAD (26.5%)	1520calAD - 1587calAD (60.1%) 1622calAD - 1658calAD (35.4%)
IAAA-221735	400 ± 20	95.17 ± 0.25	356 ± 21	1478calAD - 1520calAD (36.3%) 1586calAD - 1623calAD (32.0%)	1460calAD - 1527calAD (45.2%) 1555calAD - 1633calAD (50.2%)
IAAA-221736	380 ± 20	95.33 ± 0.25	346 ± 21	1490calAD - 1523calAD (26.0%) 1573calAD - 1629calAD (42.2%)	1474calAD - 1529calAD (36.6%) 1540calAD - 1635calAD (58.9%)
IAAA-221737	420 ± 20	94.96 ± 0.25	337 ± 21	1499calAD - 1526calAD (20.7%) 1556calAD - 1600calAD (34.3%) 1615calAD - 1632calAD (13.3%)	1481calAD - 1531calAD (30.7%) 1537calAD - 1636calAD (64.8%)

[参考値] Warning! Date may extend out of range(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので試料の14C年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

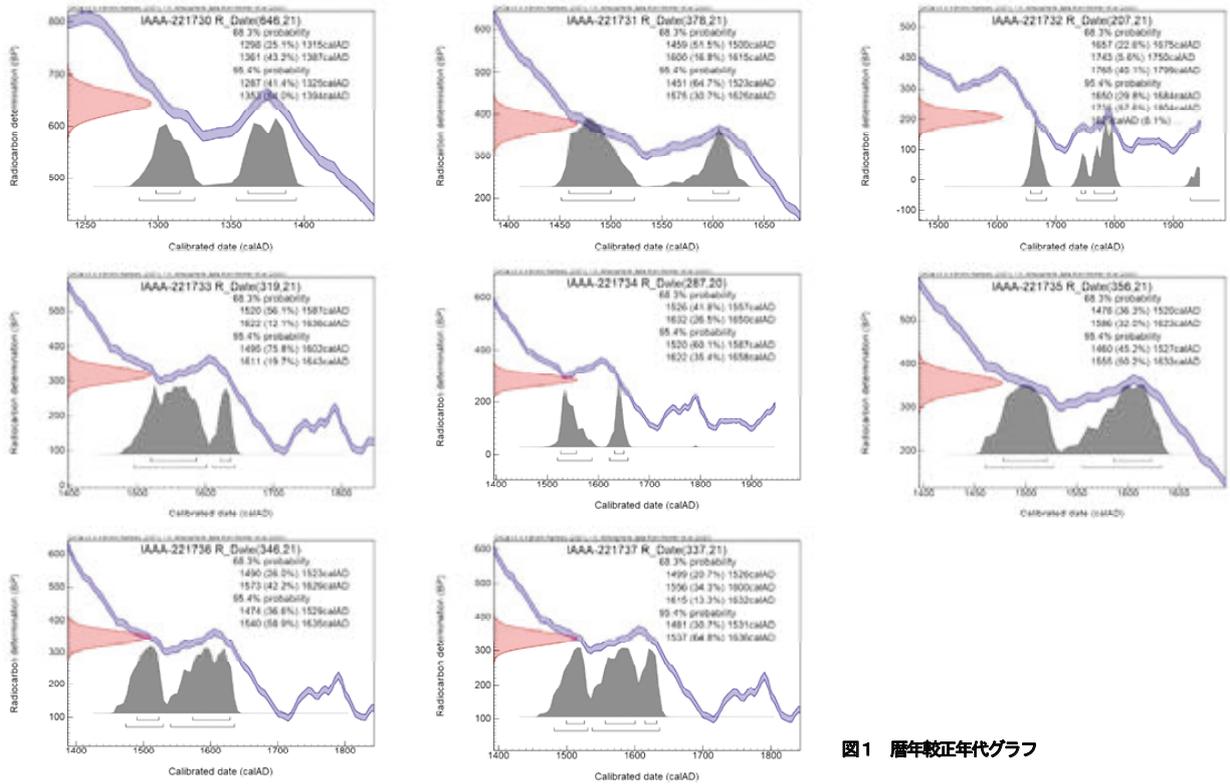


図1 暦年校正年代グラフ



試料1



試料2



試料3



試料4



試料5



試料6



試料7



試料8

図2 試料写真

第3節 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

鹿児島県北山遺跡から出土した炭化材および出土石製品の付着炭化物について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

試料は、北山遺跡の炉跡7号の中央部から出土した炭化材（試料No.1：PLD-50072）、炉跡15号から出土した炭化材が2点（試料No.2：PLD-50073、試料No.3：PLD-50074）、炉跡19号から出土した炭化材（試料No.4：PLD-50075）、炉跡16号から出土した炭化材（試料No.5：PLD-50076）、土坑54号の炉壁内側から出土した炭化材（試料No.6：PLD-50077）、集石5号から出土した炭化材（試料No.7：PLD-50078）、堀立柱建物跡4号から出土した炭化材（試料No.8：PLD-50079）、溝状遺構2号から出土した炭化材（試料No.9：PLD-50080）、竪穴建物1号から出土した炭化材（試料No.10：PLD-50081）、溝状遺構1号から出土した滑石製石鍋の胴部・外面から採取された付着炭化物（試料No.11：PLD-50082）の、計11点である。なお、試料No.1～5（PLD-50072～50076）、試料No.9（PLD-50080）は、最終形成年輪が残っていた。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、図1・2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正には0xCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線

は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果について、14C年代と 2σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して整理する。

炉跡7号の試料No.1（PLD-50072）は、14C年代が380 \pm 15 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1453-1518 cal AD（72.22%）および1590-1620 cal AD（23.23%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは室町時代から江戸時代前期に相当する。

炉跡15号の試料No.2（PLD-50073）は、14C年代が390 \pm 15 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1449-1508 cal AD（80.01%）および1594-1618 cal AD（15.44%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。また、試料No.3（PLD-50074）は、14C年代が350 \pm 15 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1473-1526 cal AD（41.03%）および1553-1633 cal AD（54.42%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。2点とも、室町時代から江戸時代前期に相当する。

炉跡19号の試料No.4（PLD-50075）は、14C年代が345 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1477-1528 cal AD（35.04%）、1541-1545 cal AD（1.05%）、1550-1634 cal AD（59.36%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。

炉跡16号の試料No.5（PLD-50076）は、14C年代が355 \pm 15 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1472-1526 cal AD（42.53%）および1554-1633 cal AD（52.92%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。

土坑54号の炉壁内側の試料No.6（PLD-50077）は、14C年代が370 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1457-1523 cal AD（57.16%）および1574-1629 cal AD（38.29%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。

集石5号の試料No.7（PLD-50078）は、14C年代が235 \pm 15 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1641-1669 cal AD（56.66%）、1780-1797 cal AD（32.94%）、1942-1943 cal AD（0.19%）、1945-1946 cal AD（0.52%）、1948-1953 cal AD（5.14%）で、17世紀中頃～末および20世紀中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～後期および昭和時代に相当する。

堀立柱建物跡4号の試料No.8（PLD-50079）は、14C年代が745 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1232-1240 cal AD（2.27%）および1260-1290 cal AD（93.18%）で、13世紀前半～末頃の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。

溝状遺構2号の試料No.9（PLD-50080）は、14C年代が625 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1299-1328 cal AD（40.09%）、1336-1372 cal AD（31.64%）、1376-1396 cal AD（23.73%）で、13世紀末～14世紀末の暦年代を示した。これは、鎌倉時代から室町時代に相当する。

竪穴建物跡1号の試料No.10（PLD-50081）は、14C年代が770 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が1226-1278 cal AD（95.45%）で、13世紀前半～13世紀後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。

溝状遺構1号出土の滑石製石鍋の胴部外面の付着炭化物である試料No.11（PLD-50082）は、14C年代が690 \pm 20 14C BP、

2σ 暦年代範囲が1278-1303 cal AD (76.24%)および1367-1380 cal AD (19.21%)で、13世紀後半～14世紀後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代から室町時代に相当する。

試料No. 11は、胴部外面の付着炭化物で、燃料材の煤に由来すると考えられる。また、δ 13Cの値は-26.32±0.16‰であった。陸上起源の動植物の場合、δ 13Cの値は-25‰前後かそれよりも低い値を示す。したがって、今回の試料は、主に陸産物に由来する炭化物と考えられる。ただし、δ 13Cの値は、正確には同位体比質量分析計 (IRMS) の測定値で検討する必要がある。今回の試料は、加速器質量分析計 (AMS) の測定値であるため、参考に留めておく必要がある。

また、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料No. 1～5 (PLD-50072～50076) と試料No. 9 (PLD-50080) には最終形成年輪が残っていたため、これらの試料の測定結果は、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代を示すと考えられる。一方、試料No. 6～8 (PLD-50077～50079) は、最終形成年輪が残っていなかった。したがって、試料No. 6～8については、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

表1 測定試料および処理

測定番号	採取データ	試料データ	前処理
PLD-50072	試料No.1 遺構: 炉跡7号 層位: 中央部出土炭化物	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50073	試料No.2 遺構: 炉跡15号	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50074	試料No.3 遺構: 炉跡15号	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50075	試料No.4 遺構: 炉跡19号 層位: 北側床面出土炭化物	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50076	試料No.5 遺構: 炉跡16号	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50077	試料No.6 遺構: 土坑54号 層位: 炉壁内側炭化物 (C側)	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50078	試料No.7 遺構: 集積5号	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50079	遺構: 堀立柱建物跡4号 試料No.8 層位: 床着炭化物	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50080	試料No.9 遺構: 溝状遺構2号 取上No.3544	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50081	試料No.10 遺構: 竪穴建物1号	種類: 炭化材 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-50082	試料No.11 遺構: 溝状遺構1号 器種: 滑石製石鍋	種類: 付着炭化物 採取部位: 胴部・外面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

表2 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年代校正用年代 (yrBP ± 1σ)	14C 年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-50072 試料No.1	-26.12 ± 0.15	382 ± 17	380 ± 15	1457-1495 cal AD (58.10%) 1601-1610 cal AD (10.17%)	1453-1518 cal AD (72.22%) 1590-1620 cal AD (23.23%)
PLD-50073 試料No.2	-26.44 ± 0.18	390 ± 17	390 ± 15	1455-1490 cal AD (65.51%) 1604-1607 cal AD (2.76%)	1449-1508 cal AD (80.01%) 1594-1618 cal AD (15.44%)
PLD-50074 試料No.3	-23.57 ± 0.17	351 ± 17	350 ± 15	1483-1521 cal AD (32.78%) 1579-1585 cal AD (3.94%) 1586-1622 cal AD (31.55%)	1473-1526 cal AD (41.03%) 1553-1633 cal AD (54.42%)
PLD-50075 試料No.4	-27.98 ± 0.20	343 ± 18	345 ± 20	1494-1524 cal AD (25.29%) 1561-1563 cal AD (1.35%) 1572-1602 cal AD (25.16%) 1609-1630 cal AD (16.47%)	1477-1528 cal AD (35.04%) 1541-1545 cal AD (1.05%) 1550-1634 cal AD (59.36%)
PLD-50076 試料No.5	-26.83 ± 0.17	353 ± 17	355 ± 15	1481-1520 cal AD (36.12%) 1588-1621 cal AD (32.15%)	1472-1526 cal AD (42.53%) 1554-1633 cal AD (52.92%)
PLD-50077 試料No.6	-27.03 ± 0.15	368 ± 18	370 ± 20	1472-1509 cal AD (40.70%) 1593-1618 cal AD (27.57%)	1457-1523 cal AD (57.16%) 1574-1629 cal AD (38.29%)

PLD-50078 試料No.7	-29.24 ± 0.17	235 ± 17	235 ± 15	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1649-1664 cal AD (43.49%) 1785-1794 cal AD (24.78%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1641-1669 cal AD (56.66%) 1780-1797 cal AD (32.94%) 1942-1943 cal AD (0.19%) 1945-1946 cal AD (0.52%) 1948-1953 cal AD (5.14%)
PLD-50079 試料No.8	-27.06 ± 0.17	743 ± 18	745 ± 20	1270-1280 cal AD (68.27%)	1232-1240 cal AD (2.27%) 1260-1290 cal AD (93.18%)
PLD-50080 試料No.9 取上No.3544	-26.35 ± 0.18	623 ± 18	625 ± 20	1304-1323 cal AD (33.76%) 1355-1366 cal AD (17.17%) 1381-1392 cal AD (17.34%)	1299-1328 cal AD (40.09%) 1336-1372 cal AD (31.64%) 1376-1396 cal AD (23.73%)
PLD-50081 試料No.10	-28.11 ± 0.16	772 ± 18	770 ± 20	1231-1242 cal AD (18.13%) 1259-1276 cal AD (50.13%)	1226-1278 cal AD (95.45%)
PLD-50082 試料No.11	-26.32 ± 0.16	689 ± 18	690 ± 20	1281-1299 cal AD (66.04%) 1374-1375 cal AD(2.23%)	1278-1303 cal AD (76.24%) 1367-1380 cal AD (19.21%)

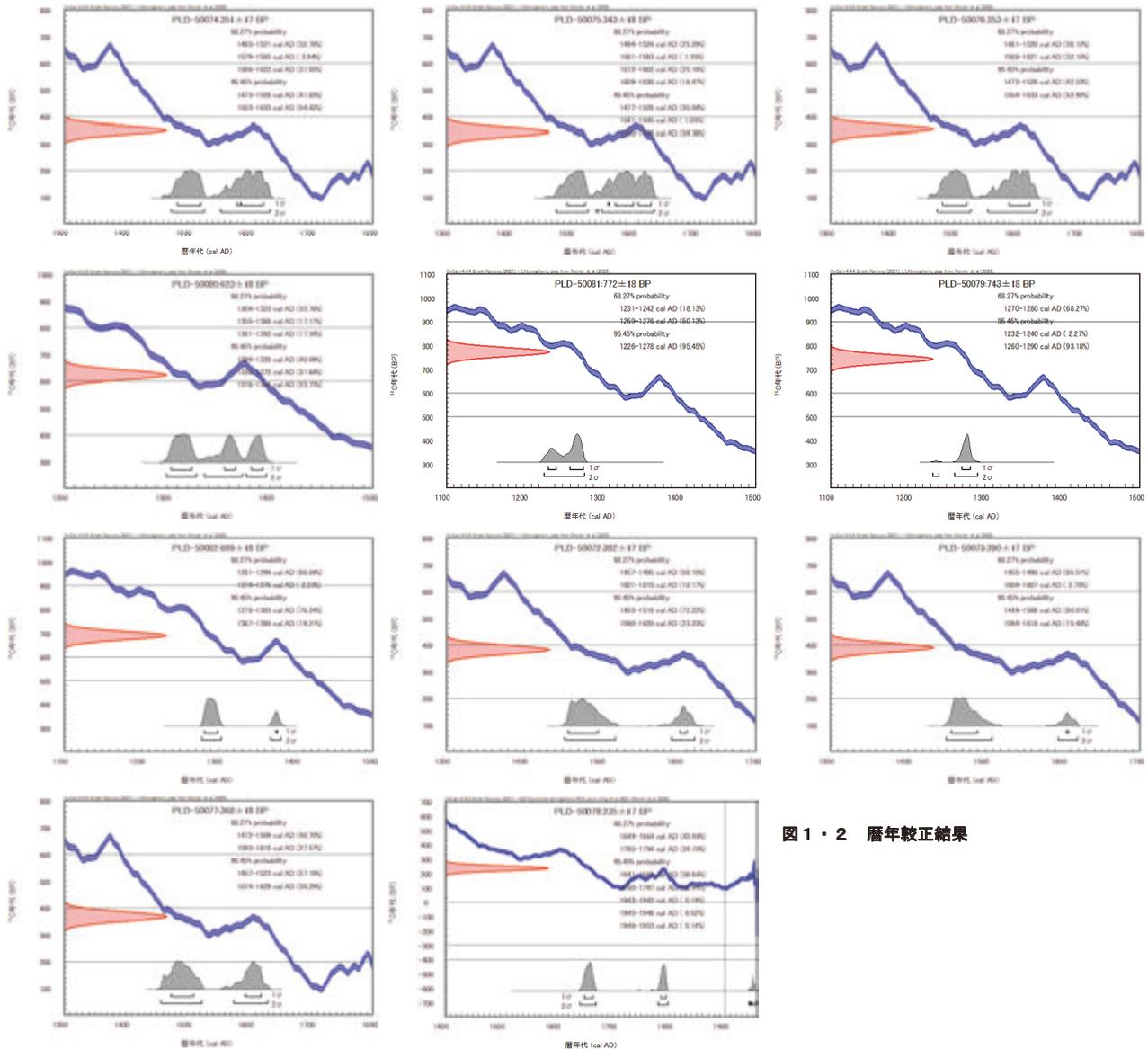


図1・2 暦年較正結果

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編『日本先史時代の14C年代』: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.

W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Böhngen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Kehl, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reini, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
 吉田邦夫 (2012) 古食性分析〈縄文人の食卓〉. 吉田邦夫編「アルケオメトリア: 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る」: 44-55, 東京大学総合博物館

第4節 北山遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

北山遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。また、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、炉跡などから出土した炭化材6点（試料No. 1～4, 6, 8）である。放射性炭素年代測定の結果、試料No. 1～4, 6は室町時代～江戸時代前期、試料No. 8は鎌倉時代の暦年代を示した。樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柀目）について、カミソリと手で切断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-IT200）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のサクラ属とスダジイ、カキノキ属、スノキ属の4分類群と、草本類が1分類群みられた。スノキ属が2点で、サクラ属とツブラジイ、カキノキ属、草本類は各1点であった。同定結果を表1に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) サクラ属（広義） *Prunus s. l.*バラ科

図版1 1a-1c (No. 1)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅となる。広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属はモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(2) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版1 2a-2c (No. 6)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(3) カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 図版1 3a-3c (No. 3)

中型の道管が、単独ないし2～3個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～3列となる。また、放射組織は層階状に配列する。カキノキ属には栽培種のカキノキや野生種のトキワガキなどがあり、日本に自生するトキワガキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の小高木～高木の広葉樹である。材はやや重硬で靱性がある。

(4) スノキ属 *Vaccinium* ツツジ科

図版1 4a-4c (No. 2), 5a-5c (No. 4)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～2列が直立する異性で、幅1～5列となる。大きなものは高さ1mmを超える。単列の放射組織は、レンズ状となる。スノキ属にはスノキやシャシャンボなどがみられ、シャシャンボは関東南部および石川県以西の暖帯に生育する常緑の低木である。現在では材の利用はそれほど行われていない。

(5) 草本類 *Herbaceous plant* 図版1 6a (No. 8)

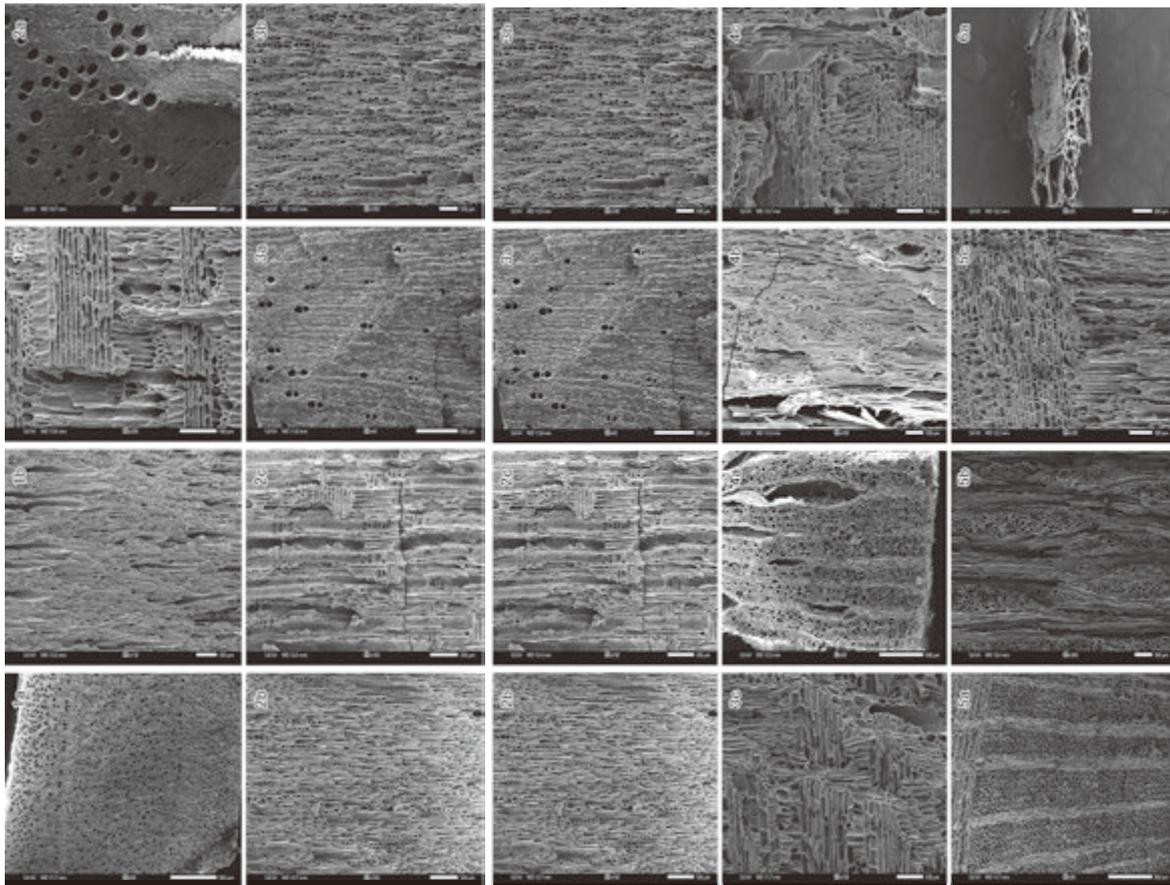
横断面では細胞組織は確認できたが、維管束の配列や形状は確認できなかったため、草本類と判断した。

4. 考察

室町時代～江戸時代前期の暦年代を示した炭化材は、サクラ属とスダジイ、カキノキ属、スノキ属であった。サクラ属とスダジイ、カキノキ属、スノキ属は堅硬な樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか、2011）。また、いずれも遺跡周辺に生育可能な樹種であり（伊東ほか、2011）、遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用されたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌. 238p, 海青社



図版1 北山遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
 1a-1c, サクラ属 (No. 1), 2a-2c, スダジイ (No. 6), 3a-3c, カキノキ属 (No. 3), 4a-4c, スノキ属 (No. 2), 5a-5c, スノ
 キ属 (No. 4), 6a, 草本類 (No. 8)
 a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

第5節 北山遺跡出土試料の自然科学分析（年代測定・樹種同定・種実同定・テフラ分析）

株式会社古環境研究所

1. はじめに

北山遺跡は、鹿児島県阿久根市山下・波留に所在し、愛宕山の麓の台地上に位置する。これまでの発掘調査で、縄文時代、古墳時代、中近世の意向・遺物が確認されている。今回の分析調査では、発掘調査において出土した炭化材と炭化種実を対象として、用材選択や古植生に関する情報を得ること、遺構の年代に関する資料を得ることを目的として、樹種同定、種実同定、放射性炭素年代測定を実施する。また、鎌倉時代とされる溝跡の埋積土中より検出されたパミスについて、その由来を明かにする目的でテフラ分析を実施する。

2. 樹種同定

(1) 試料

試料は、出土した炭化材8点（試料番号1～3, 6～9）である。試料番号4を除く7点は年代測定と同じ炭化材を用いる。試料番号4については、当初は年代測定と同じSP3264の炭化物を用いる予定であったが、年代測定・樹種同定用に用意された試料が炭質物であり、木材組織が観察できないことから、年代測定はSP3264の試料をそのまま用いるが、樹種同定については土坑9号から出土した炭化材（試料番号12）を代替試料として用いる。

(2) 方法

炭化材を自然乾燥させた後、横断面（木口）、放射断面（柀目）、接線断面（板目）の3断面について断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織記列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹1分類群（マツ属複雑管束亜属）と広葉樹5分類群（クスノキ科、ナシ亜科、コナラ属アカガシ亜属、ツツジ属、チシャノキ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

軸方向組織は、観察した範囲では仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・クスノキ科 Lauraceae

散孔材。道管は単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・ナシ亜科 subfam. Maloideae バラ科

散孔材。道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板および階段穿孔板、壁孔は交互状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科
放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科

散孔材。道管が単独または2~3個が複合して散在し、年輪会に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は階段穿孔板、壁孔は対列~階段状となる。放射組織は異性、単列で4~10細胞高前後の組織と、3~5列、20~40細胞高の組織とがある。3~5列の放射組織は、軸方向に揃う傾向がある。

・チシャノキ属 *Ehretia* ムラサキ科

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が1~2列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では小径の道管が単独あるいは塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~40細胞高。

表1 樹種同定結果

番号	遺構	位置など	樹種	備考
1	土坑51号	中央部	マツ属複維管束亜属	
2	土坑2号		コナラ族カガシ亜属	
3	掘立2号		チシャノキ属	
4	SP3264		炭質物	樹種同定不能
5	SP3445		ナシ亜科	
6	炉跡17号		マツ属複維管束亜属	
8	炉跡22号		マツ属複維管束亜属	
9	炉跡18号		ツツジ属	
12	土坑9号	III上層	クスノキ科	樹種同定代替試料

(4) 考察

炭化材には6分類群が認められた。各分類群の材質等についてみると、マツ属複維管束亜属は、二次林や海岸砂丘等に生育する常緑高木であり、木材は強度と保存性が比較的高い。広葉樹のアカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要な構成種となる常緑高木であり、木材は重硬で強度が高い。クスノキ科は常緑または落葉の低木~高木である。含まれる分類群が多く、木材の材質も比較的軽軟な種類からやや重硬な種類まで幅広い。ナシ亜科は、常緑または落葉の小高木~高木であり、木材は重硬で強度が高い。ツツジ属は常緑または落葉の低木~小高木であり、木材は比較的軽硬で強度が高い。チシャノキ属は常緑または落葉の低木~高木であり、木材は比較的軽硬な部類に入る。

年代測定結果をみると、試料番号6 (SP3445) は25290±80yBPであ

り、最終氷期最寒冷期の樹木に由来すると考えられる。炭化材はナシ亜科に同定され、周囲に生育していたことが推定される。遺構内からの出土については、古材の再利用や古い時期の木炭が混入した可能性等が考えられる。

試料番号3 (掘立柱建物跡2号-27) は、補正年代が1330±20Ybpであり、暦年較正結果で7世紀中頃~8世紀代の値が得られている。炭化材は、チシャノキ属に同定され、周囲に生育し、その木材が利用されたことが推定される。なお、伊東・山田 (2012) のデータベースによれば、鹿児島県内では京田遺跡から出土した古代の木製品(用途不明)にチシャノキ属が確認された例がある。

試料番号2 (土坑2号) は、補正年代が760±20yBPであり、暦年較正結果は13世紀代の値が得られている。炭化材はアカガシ亜属に同定された。この結果から、周囲にアカガシ亜属が生育していたこと、その木材を利用したことが推定される。

試料番号7~9 (炉跡17・22・18号) は補正年代が360±20~400±20yBPであり、暦年較正結果は15世紀中頃~17世紀前半の値が得られている。炭化材は、試料番号7, 8がマツ属複維管束亜属、試料番号9がツツジ属に同定された。この結果からマツ属複維管束亜属やツツジ属の生育するアカマツ型二次林が見られた可能性がある。

試料番号1 (土坑5号) の補正年代は、今回の試料の中で最も新しい140±20yBPであり、暦年較正結果では17世紀後半~20世紀中頃までの値が得られている。炭化材はマツ属複維管束亜属に同定され、15世紀中頃~17世紀前半の値が得られた試料から引き続き利用されていたことが推定される。

伊東・山田 (2012) のデータベースによれば、鹿児島県内(島嶼部を除く)におけるマツ属複維管束亜属の利用例は、上焼田遺跡の室町時代とされる炭化材と寿国寺跡の近世とされる木杭や胴木がある。資料数が少ないが、マツ属複維管束亜属の利用が中世以降の資料に見られる点は、今回の結果とも整合する。九州各地で実施された花粉分析でも弥生時代~古墳時代頃からシイ属、アカガシ亜属の衰退とイネ科やマツ属の増加が見られ、人間による自然植生の破壊に起因することが指摘されている(畑中ほか, 1998)。本遺跡周辺でも少なくとも中世以降、マツ属の生育する二次林が見られたこと、そこから得た木材が火を受けるような用途・目的に利用されたことが推定される。

土坑9号は、年代測定を実施していないことから時期は不明である。炭化材はクスノキ科に同定された。クスノキ科には多くの分類群が含まれており、暖温帯性常緑広葉樹林や二次林等に広く分布する。土坑9号の時期の遺跡周辺にもクスノキ科が生育していたことが推定される。

3. 種実同定

(1) 試料と方法

試料は、炭化種実1点(試料番号5)である。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(2) 結果

種実同定結果を表2に示す。炭化種実は、コナラ属アカガシ亜属に同定された。同定根拠となる形態的特徴を記載する。

表2 種実同定結果

分類群 (学名/和名)	部位	個数	備考
樹木			
コナラ属アカガシ亜属	子葉 半形	1	炭化材片(+)
	子葉 破片	20	

(樹木)

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 子葉 (半形・破片) ブナ科

炭化しており黒色で、楕円形を呈する。表面は滑らかで、縦方向に一条の凹線が入る。この分類群は破片のため、亜属レベルの同定までである。子葉半形1個、破片20個が確認された。

(3) 所見

樹木種実のコナラ属アカガシ亜属の堅果内部の子葉が炭化した半形ないし破片であった。通常、火を受けなければ炭化せず、人為によって火を受けたものが廃棄された可能性がある。カシと総称されるが多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。また果実は食用となり、堅果類の中でアク抜きなしに食べられる種類もある。

4. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、出土した炭化材8点 (試料番号1~4, 6~9) と炭化種実1点 (試料番号5) である。

(2) 方法

1) 化学処理

酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AA 処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001 M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

2) 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、標準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。

表3に、試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

(3) 結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。表4にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース (Reimer et al., 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey, 2009) を使用する。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

(4) 所見

北山遺跡で出土した炭化材、炭化種実を対象として加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、土坑51号出土炭化材 (試料1) は、補正 ^{14}C 年代が 140 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1675 cal AD-1744 cal AD (26.2%)、1750 cal AD-1765 cal AD (4.2%)、1798 cal AD-1825 cal AD (10.4%)、1831 cal AD-1895 cal AD (36.0%)、1903 cal AD-1943 cal AD (18.6%)、土坑2号出土炭化材 (試料2) は、補正 ^{14}C 年代が 760 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1229 cal AD-1246 cal AD (12.0%)、1255 cal AD-1284 cal AD (83.4%)、堀立柱建物跡2号-24出土炭化材 (試料3) は、補正 ^{14}C 年代が 1330 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は652 cal AD-690 cal AD (61.6%)、698 cal AD-701 cal AD (0.9%)、741 cal AD-774 cal AD (33.0%)、SP3264出土炭化材 (試料4) は、補正 ^{14}C 年代が 680 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1280 cal AD-1309 cal AD (58.3%)、1362 cal AD-1386 cal AD (37.2%)、SP3019出土炭化種実 (試料5) は、補正 ^{14}C 年代が 810 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1219 cal AD-1268 cal AD (95.4%)、SP3445出土炭化材 (試料6) は、補正 ^{14}C 年代が 25920 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は27928 cal BC-27298 cal BC (95.4%)、炉跡17号出土炭化材 (試料7) は、補正 ^{14}C 年代が 360 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1459 cal AD-1524 cal AD (51.3%)、1571 cal AD-1631 cal AD (44.2%)、炉跡22号出土炭化材 (試料8) は、補正 ^{14}C 年代が 400 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1444 cal AD-1499 cal AD (5.3%)、炉跡18号出土炭化材 (試料9) は、補正 ^{14}C 年代が 360 ± 20 年BP、 2σ の暦年較正值は1465 cal AD-1525 cal AD (47.0%)、1559 cal AD-1632 cal AD (48.4%) であった。

表3 測定試料及び処理

番号	遺構	試料	前処理・調整	測定法
1	土坑51号	炭化材：マツ属複雑管束亜属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
2	土坑2号	炭化材：コナラ属アカガシ亜属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
3	掘立2号	炭化材：チシャノキ属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
4	SP3264	炭質物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
5	SP3019	炭化種実：コナラ属アカガシ亜属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
6	SP3445	炭化材：ナシ亜科	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
7	炉跡17号	炭化材：マツ属複雑管束亜属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
8	炉跡22号	炭化材：マツ属複雑管束亜属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S
9	炉跡18号	炭化材：ツツジ属	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	A M S

※ AM S (AcceleratorMassSpectrometry) は加速器質量分析法

表4 測定結果

試料番号	測定No (IAAA)	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.3% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
1	231349	-26.18 ± 0.18	138 ± 17	140 ± 20	1684 cal AD-1698 cal AD (9.5%) [※] 1722 cal AD-1735 cal AD (7.7%) [※] 1803 cal AD-1814 cal AD (6.5%) [※] 1835 cal AD-1885 cal AD (31.9%) [※] 1910 cal AD-1929 cal AD (12.6%) [※]	1675 cal AD-1744 cal AD (26.2%) [※] 1750 cal AD-1765 cal AD (4.2%) [※] 1798 cal AD-1825 cal AD (10.4%) 1831 cal AD-1895 cal AD (36.0%) [※] 1903 cal AD-1943 cal AD (18.6%)
					1263 cal AD-1280 cal AD (68.3%)	1229 cal AD-1246 cal AD (12.0%) 1255 cal AD-1284 cal AD (83.4%)
2	231350	-28.50 ± 0.17	756 ± 18	760 ± 20	657 cal AD-680 cal AD (51.3%) 748 cal AD-759 cal AD (16.9%)	652 cal AD-690 cal AD (61.6%) 698 cal AD-701 cal AD (0.9%) 741 cal AD-774 cal AD (33.0%)
3	231351	-27.83 ± 0.16	1330 ± 19	1330 ± 20	1286 cal AD-1302 cal AD (47.1%) 1370 cal AD-1378 cal AD (21.2%)	1280 cal AD-1309 cal AD (58.3%) 1362 cal AD-1386 cal AD (37.2%)
4	231352	-26.93 ± 0.16	675 ± 18	680 ± 20	1225 cal AD-1233 cal AD (19.6%) 1239 cal AD-1260 cal AD (48.6%)	1219 cal AD-1268 cal AD (95.4%)
5	231353	-26.41 ± 0.17	808 ± 18	810 ± 20	27781 cal BC-27369 cal BC (68.3%)	27928 cal BC-27298 cal BC (95.4%)
6	231354	-24.92 ± 0.17	25,288 ± 77	25,290 ± 80	1476 cal AD-1515 cal AD (38.4%) 1590 cal AD-1620 cal AD (29.9%)	1459 cal AD-1524 cal AD (51.3%) 1571 cal AD-1631 cal AD (44.2%)
7	231355	-26.88 ± 0.16	361 ± 17	360 ± 20	1451 cal AD-1478 cal AD (68.3%)	1444 cal AD-1499 cal AD (90.2%) 1600 cal AD-1615 cal AD (5.3%)
8	231356	-27.55 ± 0.16	402 ± 17	400 ± 20	1479 cal AD-1516 cal AD (37.2%) 1590 cal AD-1620 cal AD (31.1%)	1465 cal AD-1525 cal AD (47.0%) 1559 cal AD-1632 cal AD (48.4%)
9	231357	-25.38 ± 0.16	358 ± 17	360 ± 20		

BP: Before Physics (Present), BC: 紀元前, AD: 紀元 ※較正プログラムOxCalが発する警告で、試料の14C年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。

5. テフラ分析

(1) 試料

試料は、令和4年度調査区で検出された鎌倉時代とされる溝状遺構1号の埋積土から採取された土塊中に認められた「白色パミス」と「灰色パミス」の2点の碎屑物である。碎屑物はいずれも長径4mm程度の不定形をなし、それぞれ試料名にある色調を呈する。パミス (=軽石) という名前が付けられているが、表面には発泡している状態は認められず、外観ではそれぞれ白色パミスはシルト塊、灰色パミスは岩片である。分析に際しては、土塊から白色パミスと灰色パミスとされる部分のみを抽出した。

(2) 方法

テフラ組成分析は、試料の重鋳物組成と火山ガラス比を求める仕様であるが、今回の試料は分析処理可能な量が極めて微量なため、処理による試料の損失を防ぐために超音波洗浄のみを行い、得られた砂分について実体顕微鏡および偏光顕微鏡による観察を行った。また、砂分中より火山ガラスと斜方輝石をそれぞれ拾い出し、屈折率の測定を行った。屈折率の測定は、古澤 (1995) のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 結果

白色パミスは、超音波洗浄の結果、塊としては残存せずに全て砂分となった。一方、灰色パミスは超音波洗浄後も塊は残存し、固結した岩石片であることが確認された。

分析結果を表5、図2に示す。処理後の白色パミスの砂分には多量のバブル型火山ガラスが認められた。

また、重鋳物斑晶は極めて微量の斜方輝石を認めることができた。灰色パミスについては、残存した岩石片と洗浄により剥落したと考えられる砂分とが得られた。砂分中にはバブル型火山ガラスが比較的多く含まれていたが、重鋳物斑晶は極めて微量の斜方輝石のみであった。

各試料の砂分から抽出した火山ガラスと斜方輝石の屈折率を図3、図4に示す。火山ガラスの屈折率は、2点の試料ともにほぼ同様の値を示し、レンジの下限はn1.497またはn1.498であり、上限はn1.500を示し、n1.499に極めて高い集中度を示す。斜方輝石の屈折率については、白色パミスでは γ 1.705-1.706と γ 1.715-1.716の2つのレンジからなり、灰色パミスでは γ 1.722-1.724のレンジが示された。

(4) 考察

阿久根市に所在する北山遺跡は、鹿児島県北西部を蛇行して流下する高松川下流域左岸に分布する台地上に位置する。この台地を構成する地質は鹿児島県 (1990) により入戸火砕流堆積物に区別されている。したがって北山遺跡の位置する台地は、いわゆるシラス台地に相当する。

白色パミスを構成していた多量のバブル型火山ガラスと灰色パミスから剥落したバブル型火山ガラスは、その形態とn1.499に集中する特徴的な屈折率とから、シラス台地を構成する入戸火砕流堆積物に由来すると考えられる。

白色パミスから抽出した斜方輝石は、その屈折率の値から桜島火山を給源とするテフラに由来する可能性が高いと考えられるが、テフ

ラを特定することは難しい。一方の灰色パミス(実際には火山岩片)試料から抽出した斜方輝石については、 $\gamma 1.720$ を超える比較的高い値が特徴であり、その特徴からは、始良カルデラを給源とするテフラに由来する可能性のあることが示唆される。町田・新井(2003)に記載された始良入戸火砕堆積物の斜方輝石の屈折率の値に比べると若干低いレンジではあるが、おそらく遺跡の立地する台地の構成物から由来したものであろう。

引用文献

Bronk Ramsey, C. 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別地質学雑誌, 101, 123-133.
 畑中健一・野井英明・岩内明子, 1998, 九州地方の植生史「図説日本列島植生史」, 安田喜憲・三好教夫(編), 朝倉書店, 151-161.
 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 44p.
 鹿児島県地質図編集委員会, 1990, 鹿児島県地質図 縮尺10万分の1. 鹿児島県.
 笠原安夫, 1985, 日本雑草図説, 養賢堂, 49p.
 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
 南木勝彦, 1993, 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法 東京大学出版会, 276-283.
 能成修一・佐々木由香・村上由美子・小林和貴, 2013, 立野遺跡出土木材の樹種同定「立野遺跡—近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書—」, 公益財団法人和歌山県文化財センター, 114-125.
 Reimer, P.J. et al. 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757
 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織地球社, 176p.
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977, Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]

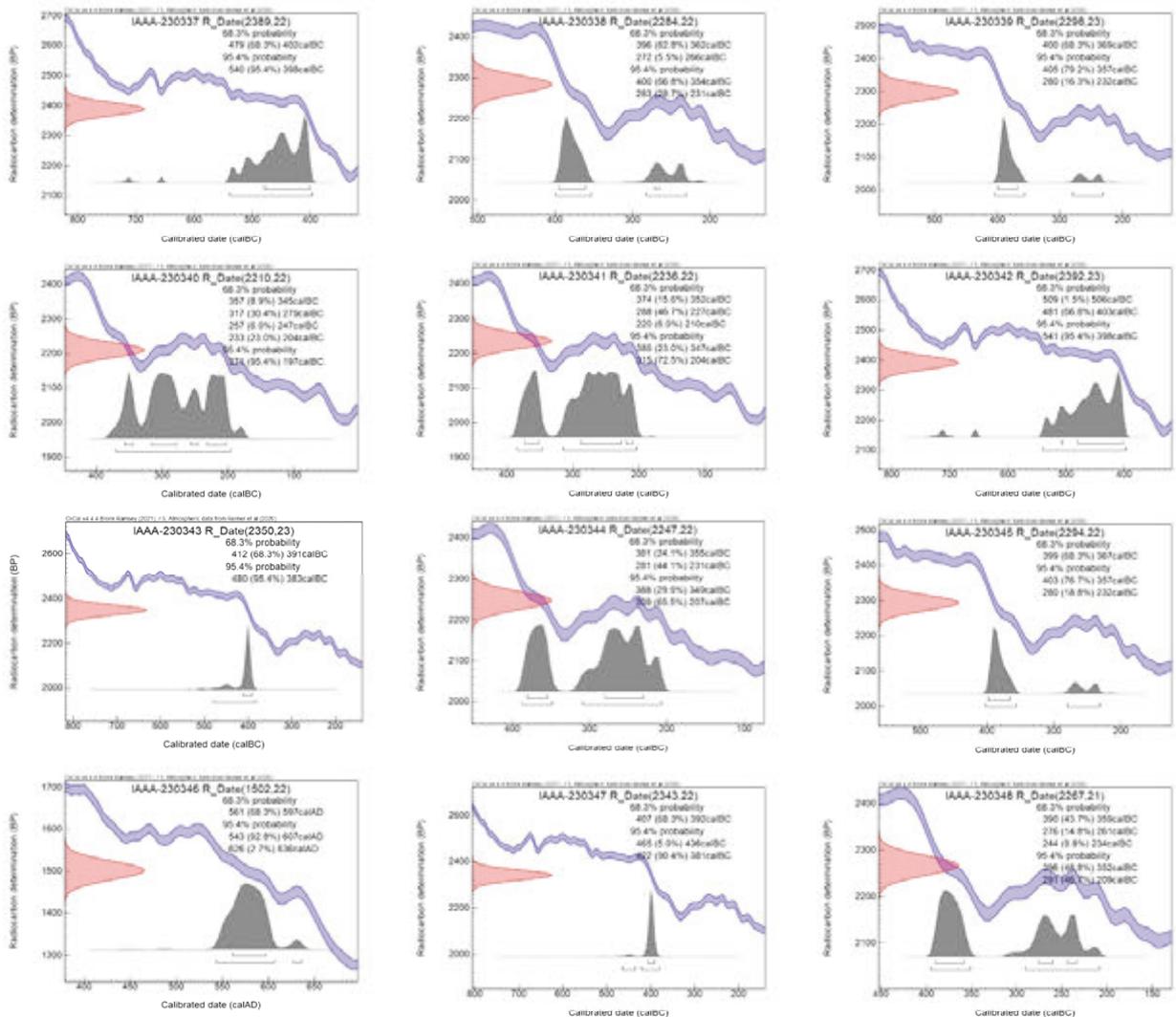


図1-1-2 暦年較正図

表5 テフラ組成分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
溝状遺構1号埋土① テフラ試料①白色パミス		2								2	232	0	0	18	250
溝状遺構1号埋土① テフラ試料②灰色パミス		1								1	17	0	0	41	58

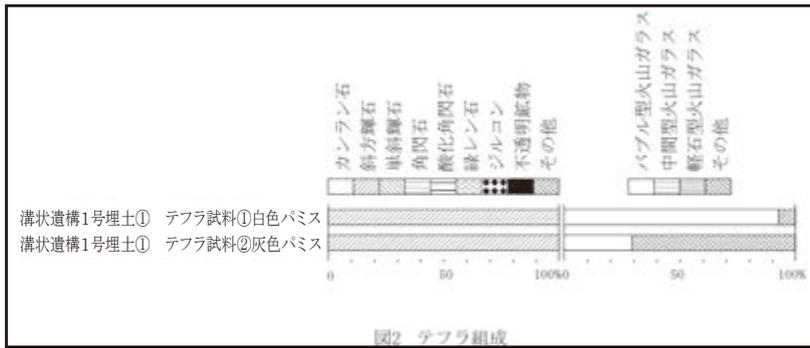
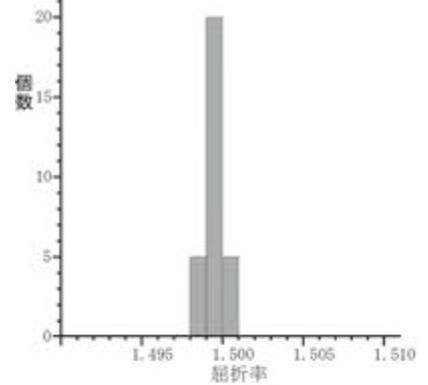


図2 テフラ組成

溝状遺構1号埋土① テフラ試料①白色パミス



溝状遺構1号埋土① テフラ試料②灰色パミス

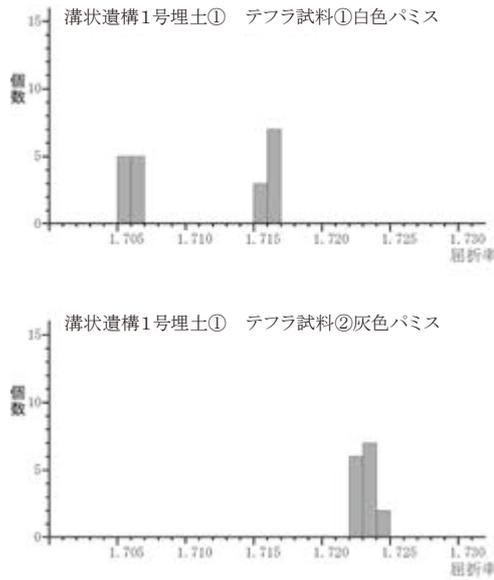


図4 斜方輝石の屈折率

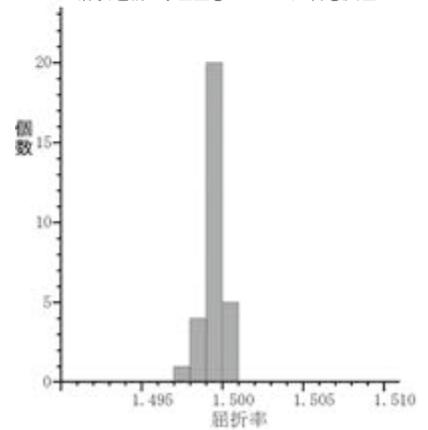
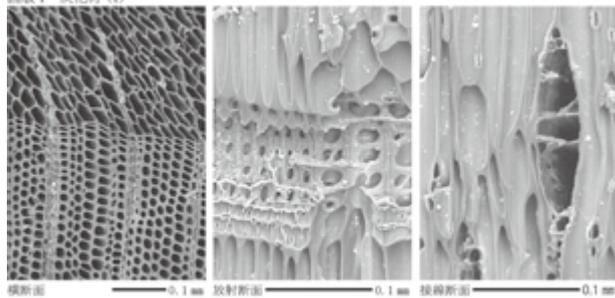
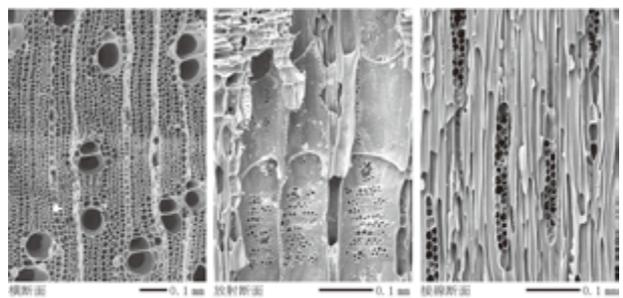


図3 火山ガラスの屈折率

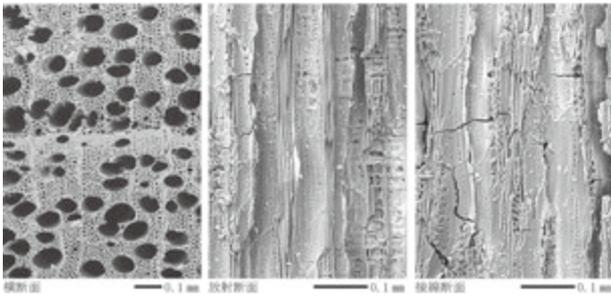
図版1 炭化材(1)



横断面 放射断面 接線断面
マツ属埋土管束炭素 試料番号1



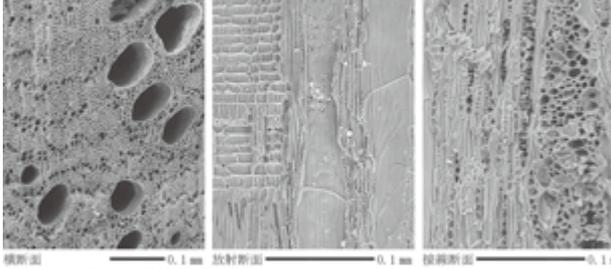
横断面 放射断面 接線断面
クスノキ科 試料番号4



横断面 0.1 mm 放射断面 0.1 mm 斜視断面 0.1 mm

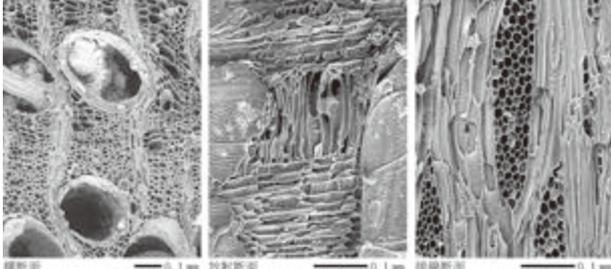
ナンセ科 試料番号6

図版2 炭化材 (2)



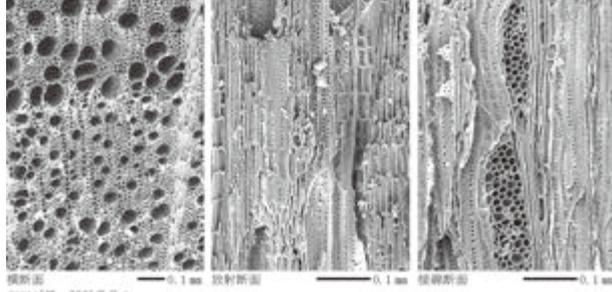
横断面 0.1 mm 放射断面 0.1 mm 斜視断面 0.1 mm

コナラ属アカガシ亜属 試料番号2



横断面 0.1 mm 放射断面 0.1 mm 斜視断面 0.1 mm

クシャノキ属 試料番号2



横断面 0.1 mm 放射断面 0.1 mm 斜視断面 0.1 mm

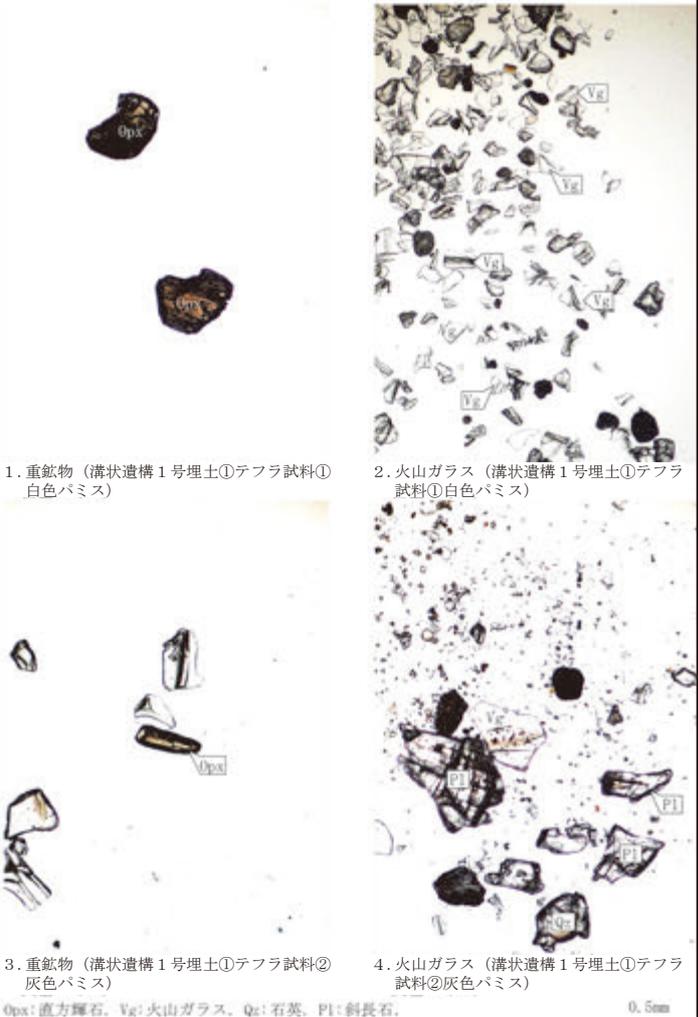
アツジ属 試料番号9

図版3 種実



1 コナラ属アカガシ亜属 1.0mm

図版4 重鉱物・火山ガラス



1. 重鉱物 (溝状遺構1号埋土①テフラ試料②白色バミス)

2. 火山ガラス (溝状遺構1号埋土①テフラ試料①白色バミス)

3. 重鉱物 (溝状遺構1号埋土①テフラ試料②灰色バミス)

4. 火山ガラス (溝状遺構1号埋土①テフラ試料②灰色バミス)

Opx: 直方輝石, Vg: 火山ガラス, Qz: 石英, Pl: 斜長石, 0.5mm

第6節 北山遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

鹿児島県北山遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている（樹種同定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、北山遺跡の遺構から出土した炭化材10点（試料No.1～10：PLD-51365～51374）である。なお、試料No.6とNo.7（PLD-51370, 51371）には、最終形成年輪が残っていた。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図1, 2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果について、 2σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して整理する。

炉跡30号の試料No.1（PLD-51365）は、1674-1676 cal AD（0.35%）、1677-1714 cal AD（14.63%）、1717-1742 cal AD（10.46%）、1751-1765 cal AD（4.10%）、1774-1777 cal AD（0.54%）、1799-1827 cal AD（10.59%）、1829-1900 cal AD（36.02%）、1903-1942 cal AD（17.55%）、1943-1945 cal AD（0.26%）、1947-1948 cal AD（0.24%）、1952-1954 cal AD（0.71%）の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

遺構SP3228の試料No.2（PLD-51366）は、1276-1305 cal AD（75.23%）および1365-1382 cal AD（20.22%）で、13世紀後半～14世紀後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代～室町時代に相当する。

遺構SP3339の試料No.3（PLD-51367）は、28095-27530 cal BC（91.20%）および27479-27376 cal BC（4.25%）の暦年代を示した。これは、旧石器時代に相当する。

遺構SP3379の試料No.4（PLD-51368）は、27914-27274 cal BC（95.45%）の暦年代を示した。これは、旧石器時代に相当する。

炉跡11号の北側から出土した試料No.5（PLD-51369）は、1437-1493 cal AD（93.92%）および1603-1608 cal AD（1.53%）で、15世紀前半～17世紀初頭の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡8号の上部から出土した試料No.6（PLD-51370）は、1457-1524 cal AD（54.80%）、1561-1563 cal AD（0.44%）、1572-1630 cal AD（40.22%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡8号の東側から出土した試料No.7（PLD-51371）は、1470-1528 cal AD（39.79%）、1541-1545 cal AD（0.66%）、1550-1634 cal AD（54.99%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡10号の試料No.8（PLD-51372）は、1455-1523 cal AD（58.82%）および1573-1629 cal AD（36.63%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡9号の試料No.9（PLD-51373）は、1449-1521 cal AD（70.64%）、1580-1584 cal AD（0.71%）、1587-1622 cal AD（24.10%）で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

炉跡12号の試料No.10（PLD-51374）は、1478-1530 cal AD（32.11%）および1538-1636 cal AD（63.34%）で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち、試料No.6とNo.7（PLD-51370, 51371）には最終形成年輪が残っており、測定結果は試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代を示していると考えられる。

また、これら以外の試料（試料No.1～5, 8～9）については、最終形成年輪が残っていなかったため、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の¹⁴C年代編纂委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:3-20, 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahn, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Kihler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal BP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51365	試料No.1 遺構：炉跡30号	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51366	試料No.2 遺構：SP3228	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51367	試料No.3 遺構：SP3339	種類：不明炭化物 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51368	試料No.4 遺構：SP3379	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51369	試料No.5 遺構：炉跡11号北側	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51370	試料No.6 遺構：炉跡8号上部	種類：炭化材（ヒサカキ） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51371	試料No.7 遺構：炉跡8号東側	種類：炭化材（ヒサカキ） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51372	試料No.8 遺構：炉跡10号	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51373	試料No.9 遺構：炉跡9号	種類：炭化材（モチノキ属） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51374	試料No.10 遺構：炉跡12号	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51365 試料No.1	-28.57 \pm 0.13	136 \pm 20	135 \pm 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1684-1699 cal AD (8.91%) 1721-1734 cal AD (7.02%) 1757-1760 cal AD (1.22%) 1803-1814 cal AD (6.35%) 1834-1889 cal AD (32.73%) 1908-1928 cal AD (11.69%) 1953-1954 cal AD (0.36%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1674-1676 cal AD (0.35%) 1677-1714 cal AD (14.63%) 1717-1742 cal AD (10.46%) 1751-1765 cal AD (4.10%) 1774-1777 cal AD (0.54%) 1799-1827 cal AD (10.59%) 1829-1900 cal AD (36.02%) 1903-1942 cal AD (17.55%) 1943-1945 cal AD (0.26%) 1947-1948 cal AD (0.24%) 1952-1954 cal AD (0.71%)
PLD-51366 試料No.2	-29.12 \pm 0.13	692 \pm 21	690 \pm 20	1280-1299 cal AD (66.15%) 1374-1375 cal AD (2.12%)	1276-1305 cal AD (75.23%) 1365-1382 cal AD (20.22%)
PLD-51367 試料No.3	-26.33 \pm 0.13	25492 \pm 93	25490 \pm 90	28054-27787 cal BC (68.27%)	28095-27530 cal BC (91.20%) 27479-27376 cal BC (4.25%)
PLD-51368 試料No.4	-25.33 \pm 0.13	25253 \pm 90	25250 \pm 90	27731-27326 cal BC (68.27%)	27914-27274 cal BC (95.45%)
PLD-51369 試料No.5	-26.29 \pm 0.14	416 \pm 20	415 \pm 20	1447-1471 cal AD (68.27%)	1437-1493 cal AD (93.92%) 1603-1608 cal AD (1.53%)
PLD-51370 試料No.6	-27.88 \pm 0.13	366 \pm 19	365 \pm 20	1473-1511 cal AD (39.55%) 1591-1619 cal AD (28.72%)	1457-1524 cal AD (54.80%) 1561-1563 cal AD (0.44%) 1572-1630 cal AD (40.22%)
PLD-51371 試料No.7	-29.11 \pm 0.13	350 \pm 20	350 \pm 20	1483-1522 cal AD (31.29%) 1576-1622 cal AD (36.98%)	1470-1528 cal AD (39.79%) 1541-1545 cal AD (0.66%) 1550-1634 cal AD (54.99%)
PLD-51372 試料No.8	-27.51 \pm 0.14	371 \pm 20	370 \pm 20	1460-1464 cal AD (3.18%) 1468-1507 cal AD (41.09%) 1594-1618 cal AD (24.00%)	1455-1523 cal AD (58.82%) 1573-1629 cal AD (36.63%)
PLD-51373 試料No.9	-28.04 \pm 0.13	384 \pm 21	385 \pm 20	1456-1496 cal AD (55.19%) 1601-1614 cal AD (13.08%)	1449-1521 cal AD (70.64%) 1580-1584 cal AD (0.71%) 1587-1622 cal AD (24.10%)
PLD-51374 試料No.10	-28.30 \pm 0.16	339 \pm 21	340 \pm 20	1496-1525 cal AD (21.82%) 1558-1601 cal AD (31.44%) 1611-1632 cal AD (15.01%)	1478-1530 cal AD (32.11%) 1538-1636 cal AD (63.34%)

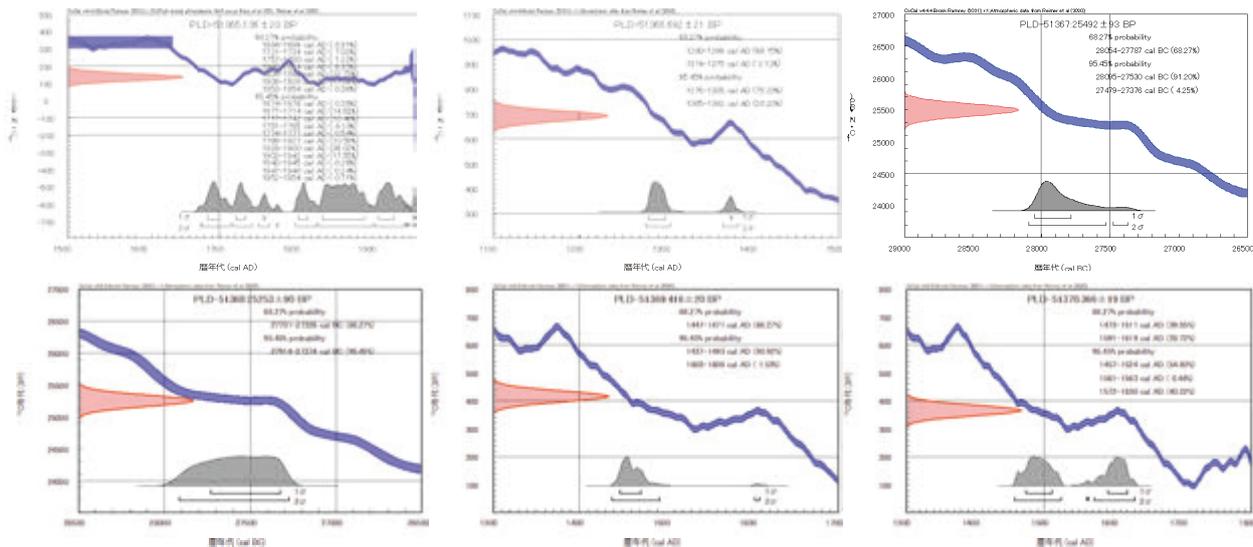


図1 暦年較正結果 (1)

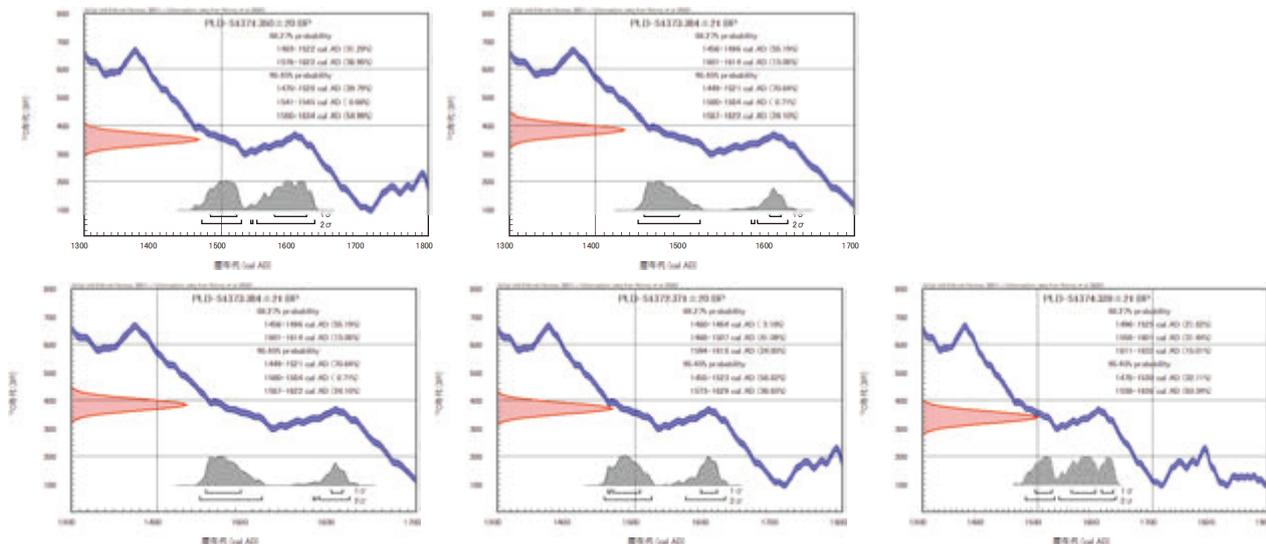


図2 暦年較正結果 (2)

第7節 北山遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

鹿児島県阿久根市の北山遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、土坑である炉跡30号(試料No. 1)、柱穴であるSP3228(試料No. 2)、SP3339(試料No. 3)、炉跡である炉跡8号上部(試料No. 6)、炉跡8号東側(試料No. 7)、炉跡10号(試料No. 8)、炉跡9号(試料No. 9)で各1点出土した、計7点の炭化材である。時期については、放射性炭素年代測定の結果、SP3339(試料No. 3)が旧石器時代、SP3228(試料No. 2)が鎌倉時代～室町時代、炉

跡8号上部(試料No. 6)、炉跡8号東側(試料No. 7)、炉跡10号(試料No. 8)、炉跡9号(試料No. 9)が室町時代～江戸時代前期、炉跡30号(試料No. 1)が江戸時代～昭和時代の暦年代を示した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柁目)について、カミソリと手で切断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製 JS M-IT200)にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属1分類群と、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、ヒサカキ、モチノキ属の3分類群の、計4分類群がみられた。アカガシ亜属とヒサカキが各2点で、マツ属

複維管束亜属とモチノキ属が各1点であった。また、不明炭化物が1点みられた。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1 1a-1c(No. 1)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 2a-2c(No. 2), 3a-3c(No. 8)

ヒサカキは岩手県、秋田県以南の本州、四国、九州などの温帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は強靱、堅硬であるが、サカキよりもやや劣る。

(4) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版1 5a-5c(No. 6)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～5列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

(5) 不明炭化物 *Unknown carbide* 図版1 6a(No. 3)

試料の断面で木材組織や道管は確認できなかったため、不明炭化物とした。

4. 考察

旧石器時代の暦年代を示した、SP3339の炭化物は、不明炭化物であった。試料の用途は不明である。

鎌倉時代～室町時代の暦年代を示した、SP3228の炭化物は、アカガシ亜属であった。試料の用途は不明である。アカガシ亜属は堅硬な樹種であり、薪炭材としても

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外アカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(3) ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. モッコク科 図版1 4a-4c(No. 6)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は40段以上の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～5列が直立する異性で、幅1～5列となる。

普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。

室町時代～江戸時代前期の暦年代を示した、炉跡の炭化材では、アカガシ亜属とヒサカキ、モチノキ属がみられた。試料はいずれも炉跡から出土しており、用途は燃料材の残渣であると考えられる。

ヒサカキとモチノキ属は堅硬な樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。

江戸時代前期～昭和時代の暦年代を示した、炉跡30号の炭化材は、マツ属複維管束亜属であった。材の用途は不明である。マツ属複維管束亜属はまっすぐで加工性が良く、油分が多いため薪炭材にも多く利用される樹種である。（伊東ほか，2011）。

北山遺跡で出土したマツ属複維管束亜属とアカガシ亜属、ヒサカキ、モチノキ属は、いずれも遺跡周辺に生育可能な樹種であり（伊東ほか，2011）、遺跡周辺の森林より伐採利用していたと考えられる。

引用文献

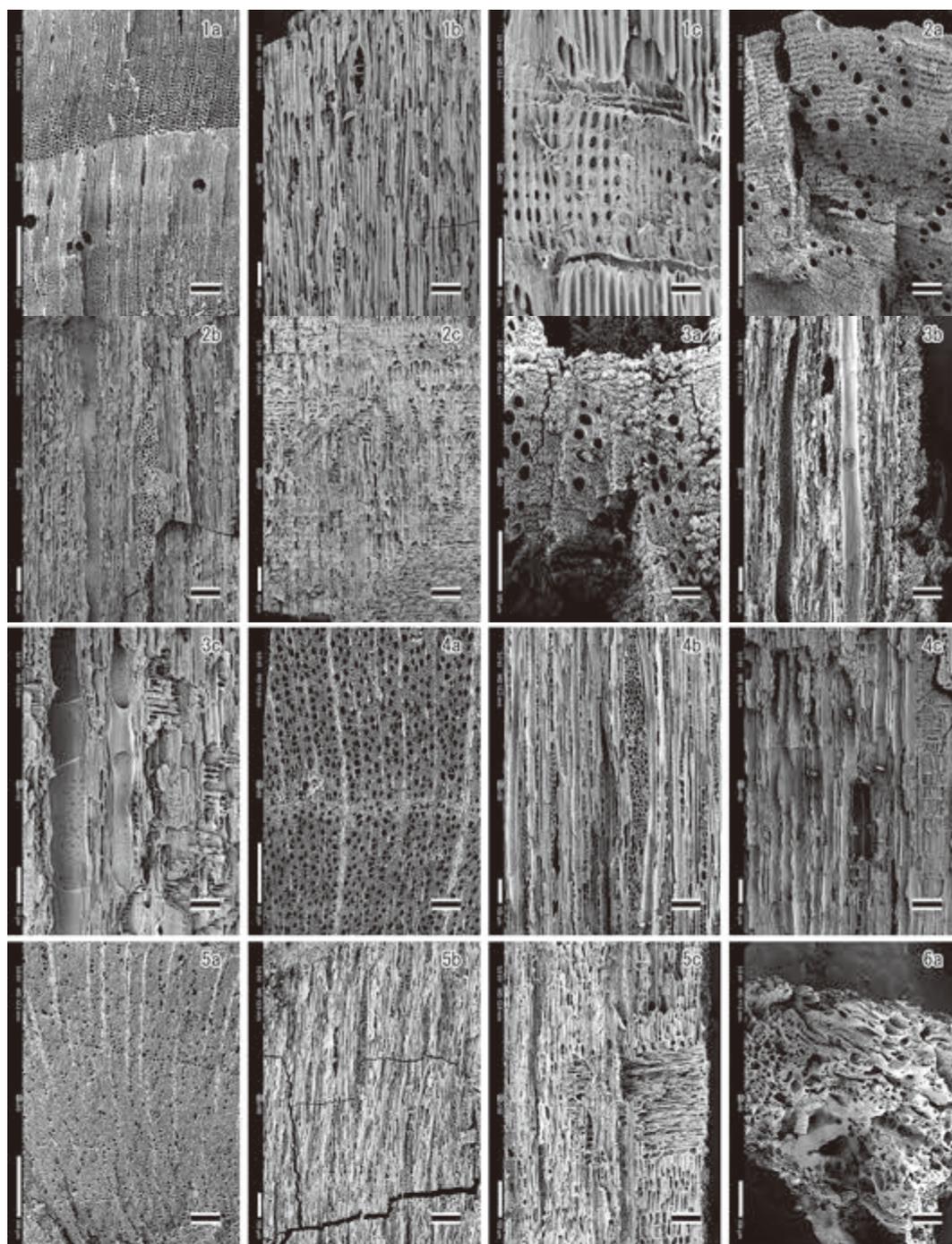
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌。238p、海青社。

表1 北山遺跡出土炭化材の樹種同定結果

	時期	鎌倉時代～		室町時代～				江戸時代前期	合計
	旧石器時代	室町時代		江戸時代前期				～昭和時代	
遺構	SP3339	SP3228		炉跡8号 上部	炉跡8号 東側	炉跡10号	炉跡9号	炉跡30号	
マツ属複維管束亜属								1	1
コナラ属アカガシ亜属			1			1			2
ヒサカキ				1	1				2
モチノキ属							1		1
不明炭化物	1								1
合計	1	1		1	1	1	1	1	7

付表1 北山遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料No.	出土遺構	種類	樹種	年代測定結果による時期	年代測定番号
1	炉跡30号	炭化材	マツ属複維管束亜属	江戸時代前期～昭和時代	PLD-51365
2	SP3228	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	鎌倉時代～室町時代	PLD-51366
3	SP3339	炭化材	不明炭化物	旧石器時代	PLD-51367
6	炉跡8号上部	炭化材	ヒサカキ	室町時代～江戸時代前期	PLD-51370
7	炉跡8号東側	炭化材	ヒサカキ	室町時代～江戸時代前期	PLD-51371
8	炉跡10号	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	室町時代～江戸時代前期	PLD-51372
9	炉跡9号	炭化材	モチノキ属	室町時代～江戸時代前期	PLD-51373



図版1 北山遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No.1), 2a-2c. コナラ属アカガシ亜属 (No.2), 3a-3c. コナラ属アカガシ亜属 (No.8), 4a-4c. ヒサカキ (No.6), 5a-5c. モチノキ属 (No.6), 6a. 不明炭化物 (No.3)

a : 横断面, b : 接線断面, c : 放射断面

第8節 北山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物の調査 日鉄テクノロジー株式会社 九州事業所

1. 調査対象

北山遺跡は鹿児島県阿久根市に所在する。発掘調査地区からは中世末から近世初頭と推定される製鉄関連遺構群が確認された。それに伴い、炉壁や鉄滓などの遺物も多数出土している。そこで遺跡内での生産活動の詳細を検討するため、表1の出土製鉄～鍛冶関連遺物21点を調査した。

2. 調査方法

(1) 外観観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

採取試料の断面をエメリー研磨紙の#150, #320, #600, #1000, およびダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で順を追って研磨して、全体像を撮影した。

(3) 顕微鏡組織

光学顕微鏡を用いて断面観察後、代表的・特徴的な視野を撮影した。また金属鉄部の組織観察には、腐食に3%ナイトル(硝酸アルコール液)を用いた。

(4) EPMA調査

EPMA(日本電子株式会社JXA-8230)を用い、鉄滓や鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧:15kV, 照射電流

(5) 化学組成分析

測定方法・元素は以下の通りである。

全鉄分(Total Fe), 金属鉄(Metallic Fe), 酸化第一鉄(FeO):容量法

炭素(C):燃焼容量法, 硫黄(S):燃焼赤外吸収法
二酸化硅素(SiO_2), 酸化アルミニウム(Al_2O_3), 酸化カルシウム(CaO), 酸化マグネシウム(MgO), 酸化カリウム(K_2O), 酸化ナトリウム(Na_2O), 酸化マンガン(MnO), 二酸化チタン(TiO_2), 酸化クロム(Cr_2O_3), 五酸化リン(P_2O_5), バナジウム(V), 銅(Cu), 二酸化ジルコニウム(ZrO_2): ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer):誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3. 調査結果

KIT-1: 製錬滓(炉内滓)

(1) 外観観察: 全面が破面の製錬滓破片(106.2g)である。色調は暗灰色で着磁性がある。内部に細かい気孔が散在するが緻密で、比較的比重の大きい滓である。

(2) 顕微鏡組織: 図版1①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$), 淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が晶出する。また内部には、微小金属鉄粒も複数点在する。②の金属鉄粒はパーライト(Pearlite)素地でセメントイト(Cementite:

Fe_3C)が析出する。また③の金属鉄粒は白色のフェライト(Ferrite: α 鉄)素地で、少量パーライトが析出する。炭素量の低い軟鉄～高炭素鋼が確認された。

(3) 化学組成分析: 表2に示す。全鉄分(Total Fe)42.10%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.16%, 酸化第一鉄(FeO)が48.56%, 酸化第二鉄(Fe_2O_3)5.997%の割合であった。造滓成分($\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$)24.95%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は5.00%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱^(注1))起源の二酸化チタン(TiO_2)は19.03%, バナジウム(V)が0.35%と高値である。また酸化マンガ(MnO)は0.83%, 五酸化リン(P_2O_5)も0.61%と高値であった。銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の脈石成分(TiO_2 , V)が高値であった。この特徴から砂鉄製錬滓と推定される。

KIT-2: 炉壁

(1) 外観観察: やや小形の製鉄炉の炉壁破片(63.9g)と推定される。熱影響を受けて、内面表層は薄くガラス質化している。炉壁胎土部分は淡橙色で、石英・斜長石などの無色鉱物(砂粒)を多量に混和している。

(2) 顕微鏡組織: 図版1④～⑥に示す。内面表層は強い熱影響を受けてガラス質化している。また⑤⑥灰褐色粒は砂鉄(含チタン鉄鉱)である。内部の微小明白色部は金属鉄で、製鉄炉内で還元されたものと判断される。

(3) 化学組成分析: 表2に示す。強熱減量(Ig loss)は2.911%と低値であった。熱影響を受けて結晶構造水が飛散した状態である。軟化性成分の鉄分(Total Fe)は2.71%であった。北山遺跡出土炉壁のなかでは最も含有割合が低い。また耐火性に有利なアルミナ(Al_2O_3)は16.11%であった。通常の粘土の範囲内(約15～18%程度)といえる。

(4) 耐火度: 1280℃であった。当炉壁は砂鉄(含チタン鉄鉱)製錬に用いられたと推定される。内部には微小金属鉄を含む被熱砂鉄(含チタン鉄鉱)粒子が確認された。

KIT-3: 炉壁

(1) 外観観察: 強い熱影響を受けて内面表層がガラス質化した、製鉄炉の炉壁片(130.6g)と推定される。また内面表層には着磁性の強い箇所があるが金属探知器反応はなく、錆化鉄または着磁性のある被熱砂鉄や鉄滓が部分的に付着すると考えられる。炉壁胎土部分は淡褐色で短く切ったスサや石英・斜長石などの無色鉱物(砂粒)を多量に混和している。

(2) 顕微鏡組織: 図版2①～③に示す。内面表層を観察した。①の明灰色層は錆化鉄である。②はその拡大で、金属組織痕跡は不明瞭であった。また素地の暗灰色部は製錬滓で、③はその拡大である。滓中には白色針状結晶イルメナイト(Ilmenite: $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$), 淡褐色片状結晶シュードブルックイト(Pseudobrookite: $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$)が晶出する。これは高温下で生じた砂鉄製錬滓^(注2)の晶癖である。

(3) 化学組成分析：表2に示す。強熱減量 (Ig loss) は1.8 54%と低値であった。強い熱影響を受けて結晶構造水が飛散した状態である。軟化性成分の鉄分 (Total Fe) は4.55%とやや高めであった。また耐火性に有利なアルミナ (Al_2O_3) 19.24%と高値であった。

当炉壁は内面表層に付着した滓の組成から、砂鉄 (含チタン鉄鉱) の製錬に用いられたと推定される。

KIT-4：炉壁

(1) 外観観察：強い熱影響を受けて内面表層がガラス質化した、製鉄炉の炉壁片 (124.4g) と推定される。内面表層には着磁性の強い箇所があるが金属探知器反応はなく、錆化鉄または着磁性のある被熱砂鉄や鉄滓が部分的に付着すると考えられる。

(2) 顕微鏡組織：図版2④～⑥に示す。④の左上の青灰色部は錆化鉄で⑤⑥はその拡大である。広い範囲で網目状にセメントタイト痕跡が残存しており、高炭素鋼であったと推定される。これに対して、④の右下の暗灰色部は炉壁内面のガラス質滓で、表層に薄く砂鉄製錬滓が確認される。⑥の右下はその拡大で、淡褐色片状結晶シュードブルッカイトが晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。

(3) 化学組成分析：表2に示す。強熱減量 (Ig loss) は0.9 81%と低値であった。強い熱影響を受けて結晶構造水が飛散した状態である。軟化性成分の鉄分 (Total Fe) は3.16%であった。また耐火性に有利なアルミナ (Al_2O_3) は16.84%であった。通常の粘土の範囲内といえる。

(4) 耐火度：1120℃であった。当炉壁は内面表層に付着した滓の組成から、砂鉄 (含チタン鉄鉱) の製錬に用いられたと推定される。

KIT-5：含鉄鉄滓

(1) 外観観察：不定形の含鉄鉄滓 (118.4g) である。表層は黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄で覆われる。部分的に黒色ガラス質滓が付着する。これは製鉄炉内面表層の溶融物と推定される。また素地は暗灰色の鉄滓であるが、全体に強い金属探知器反応がみられる。内部に微細な金属鉄が広範囲に散在している可能性がある。

(2) マクロ組織：図版①に示す。素地の暗灰色部は製錬滓、滓中に多数散在する微小白色部は金属鉄である。

(3) 顕微鏡組織：図版②③に示す。製鉄原料の砂鉄粒子の形状を留めたまま、還元・滓化が進んでいる。不定形明白色部は還元で生じた金属鉄である。ほとんど炭素を含まないフェライト (Ferrite: α 鉄) 単相の組織が確認された。また周囲の滓中には白色針状結晶イルメナイト (Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$)、淡褐色片状結晶シュードブルッカイト (Pseudobrookite: $Fe_2O_3 \cdot TiO_2$) が晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。

(4) EPMA調査：図版3④に滓部および微小金属鉄部の反射電子像 (COMP: 図版3③の拡大) を示す。白色針状結晶の定量分析値は35.6%FeO-5.3%MgO-2.4%MnO-56.4%TiO₂-1.7%V₂O₃ (

分析点1) であった。イルメナイト (Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$) に近い組成で、マグネシア (MgO) などの他の元素を少量固溶する。淡褐色片状結晶の定量分析値は16.9%FeO-4.4%MgO-75.9%TiO₂-3.7%V₂O₃-2.2%Al₂O₃ (分析点2) であった。シュードブルッカイト (Pseudobrookite: $Fe_2O_3 \cdot TiO_2$) と推定される。また素地部分の定量分析値は60.5%SiO₂-16.5%Al₂O₃-5.5%CaO-1.5%MgO-4.9%K₂O-5.8%FeO-2.5TiO₂ (分析点3) であった。非晶質珪酸塩である。

滓部の組成から、当試料は砂鉄製錬滓と推定される。また滓中には還元で生じた微細な金属鉄が広範囲で確認された。まともなまま、滓として廃棄されたものと推測される。

KIT-6：鉄素材

(1) 外観観察：粗い棒状に加工された、小形の鉄素材の破片 (39.8g) と推測される。表層は黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄で覆われる。また1箇所微細な木炭破片が付着する。全体に金属探知器反応が強く重量感があるため、内部にまともな金属鉄部が残存する可能性が高いと考えられる。

(2) マクロ組織：図版4①に示す。横断面が粗く長方形に整えられた鉄素材、または未製品と推測される。また内側の淡褐色部は金属鉄である。上述したようにまともの良い金属鉄部が確認された。

(3) 顕微鏡組織：図版②③に示す。②は表層部の拡大である。摩耗して丸みを帯びた砂鉄 (灰褐色粒: 含チタン鉄鉱) が多数確認された。これら砂鉄粒子には熱影響を受けた痕跡はみられなかった。遺物の廃棄後に付着した可能性が高い。

③は金属鉄部の拡大である。パーライト (Perarlite) 素地に針状・網目状にセメントタイト (Cementite: Fe_3C) が析出する過共析 ($C > 0.77\%$) であった。この組織から1.4%前後の炭素量の高炭素鋼と推定される。また鉄中には黄褐色粒状の硫化鉄 (FeS) やステダイト (Steadite: $Fe-Fe_3C-Fe_3P$) など、硫黄 (S) や燐 (P) の影響が確認された。

(4) EPMA調査：図版4④に鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP: 図版3③の拡大) を示す。特性X線像をみると黄褐色粒と対応して、硫黄 (S) に反応がある。定量分析値は62.1%Fe-36.3%S (分析点4) であった。硫化鉄である。また周囲の共析組織部分は、特性X線像では燐 (P) に強い反応がある。定量分析値は98.5%Fe-1.9nP (分析点2) であった。

さらにもう1視野、表層付着砂鉄の組成を調査した。図版4⑤に反射電子像 (COMP: 図版3②の拡大) を示す。砂鉄粒子の素地部分の定量分析値は79.0%FeO-2.0%MgO-9.0%TiO₂-2.6%Al₂O₃ (分析点6) であった。マグネタイト (Magnetite: $FeO \cdot Fe_2O_3$) とウルボスピネル (Ulvöspinel: $2FeO \cdot TiO_2$) の中間組成のチタン磁鉄鉱 (Titanomagnetite) と推定される。また砂鉄粒内の暗灰色鉱物の定量分析値は54.1%CaO-45.7%P₂O₅-2.2%F-2.0%FeO (分析点7) であった。燐灰石 [Apatite: $Ca_5(PO_4)_3F$] と推測される。

当遺物は高炭素鋼を棒状に粗く鍛打した鉄素材、または未製品と判断される。

KIT-7：含鉄鉄滓

(1) 外観観察：小形の含鉄鉄滓 (27.3g) であった。表層は茶褐色の錆化鉄で覆われる。着磁性は強いが金属探知器反応はなく、金属鉄は残存しないと推定される。

(2) マクロ組織：図版5①に示す。素地部分は製錬滓であった。また滓中には不定形の微細な錆化鉄が多数散在する。さらに粒状黒色部が多数確認される。これは砂鉄が還元されて生じた微小金属鉄粒が腐食した痕跡(穴)と推測される。

(3) 顕微鏡組織：図版5②③に示す。含鉄鉄滓 (KIT-5) と同様、製鉄原料の砂鉄粒子の形状を留めたまま還元・滓化が進んだ状態が確認された。ただし金属鉄は錆化している。さらに砂鉄粒子痕跡の周辺には、淡褐色片状結晶シュードブルカイトが晶出する。

(4) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 35.34% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.27%，酸化第1鉄 (FeO) が9.89%，酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 39.15%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は29.80%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は4.78%である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は12.46%，バナジウム (V) が0.20%と高値であった。酸化マンガン (MnO) は0.68%，五酸化リン (P₂O₅) も0.55%とやや高めである。また銅 (Cu) は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は砂鉄製錬滓であった。滓中には還元・滓化した砂鉄粒子の痕跡が多数確認された。

KIT-8：砂鉄焼結塊

(1) 外観観察：やや小形で偏平な砂鉄焼結塊と推定される (57.8g)。表層には薄く茶褐色の錆化鉄が付着するが、金属探知器反応はみられない。素地は暗灰色で微細な凹凸がある。

(2) マクロ組織：図版5④に示す。素地部分は暗灰色のガラス質滓である。内部には熱影響を受けて還元・滓化しかけた砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子が多数確認された。

(3) 顕微鏡組織：図版5⑤⑥に示す。灰褐色粒は被熱砂鉄である。形状は全体に丸みを帯びており、摩耗の進んだ浜砂鉄を採取した可能性が考えられる。また粒内に格子状・縞状の離溶組織のある含チタン鉄鉱 (Titaniferous iron ore) が多数観察される。さらに還元・滓化が進み、微細な金属鉄が晶出する粒や、外周に微細な淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが晶出する粒も確認された。

(4) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 44.81% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.20%，酸化第1鉄 (FeO) が41.93%，酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 17.18%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は23.82%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は4.35%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は12.65%，バナジウム (V) が0.18%と高値であった。酸化マンガン (MnO) は0.78%，五酸化リン (P₂O₅) も0.61%と高めであった。銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当鉄滓はやや炉材粘土溶融物 (SiO₂主成分) の影響が大きい、砂鉄焼結塊と推定される。素地はガラス質滓で、内部に還元・滓化しかけた状態の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子が多数確認された。

KIT-9：鉄塊系遺物

(1) 外観観察：やや小形の鉄塊系遺物 (59.0g) である。表層全体は淡褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄で覆われる。端部 (図版6外観写真右側) には淡褐色の炉壁破片が付着する。これは錆化に伴う二次的な付着と考えられる。全体に金属探知器反応が強く、重量感がある。このため内部にはままとりのよい金属鉄部が残存すると推測される。

(2) マクロ組織：図版6①に示す。滓部はわずかで、ままとりのよい鉄主体の遺物であった。①の左上の暗灰色部は製錬滓、内側の明白色部は金属鉄である。

(3) 顕微鏡組織：図版②③に示す。②は製錬滓の拡大である。滓中には明灰色片状結晶ルチル (Rutile: TiO₂) が晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖といえる。また③の素地部分は金属鉄である。素地は白色のフェライトで、黒色層状のパーライトが析出する亜共析 (C<0.77%) であった。パーライトの割合から炭素量は0.25%程度の鋼と推測される。

(4) EPMA調査：図版④に滓部の反射電子像 (COMP: 図版6②の拡大) を示す。右上の淡茶褐色結晶の定量分析値は18.3%FeO-15.1%MgO-9.1%MnO-28.2%TiO₂-14.9%Al₂O₃-12.2%V₂O₃-1.7%Cr₂O₃ (分析点8)、右下の暗灰色結晶の定量分析値は4.9%FeO-9.8%MgO-1.5%MnO-75.9%TiO₂-4.1%Al₂O₃-5.4%V₂O₃ (分析点9) であった。ともにチタニア (TiO₂) の割合が高い化合物で、特に後者はルチル (Rutile: TiO₂) に近い組成であった。また左側の暗灰色結晶の定量分析値は21.9%CaO-10.0%MgO-2.4%MnO-12.5%TiO₂-13.5%Al₂O₃-38.4%SiO₂ (分析点10) であった。鉄分をほとんど含まず、ライム (CaO)、マグネシア (MgO)、チタニア (TiO₂)、アルミナ (Al₂O₃)、珪酸 (SiO₂) が主成分の化合物であった。また素地の暗灰色部の定量分析値は50.2%SiO₂-20.6%Al₂O₃-7.1%CaO-3.7%MgO-5.2%K₂O-1.4%FeO-4.5%MnO-5.2%TiO₂ (分析点11) であった。非晶質珪酸塩である。

当試料は滓部の組成から、砂鉄 (含チタン鉄鉱) を高温製錬してつくられた鉄塊と判断される。また金属鉄部は0.25%前後の炭素量の鋼と推測される。

KIT-10：鉄塊系遺物

(1) 外観観察：小形の鉄塊系遺物 (20.8g) である。表層は淡褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄で覆われる。また錆化に伴い、全体に不規則な割れが生じている。付着物により本来の遺物表層の観察は困難であるが、部分的に暗灰色の鉄滓が確認される。その一方、金属探知器反応があるため、内部には金属鉄が残存すると推定される。

(2) マクロ組織：図版7①に示す。表層の特に写真左側の暗灰色部は砂鉄製錬滓であった。これに対して、青灰色～黒灰色部は錆化鉄、明灰色部は金属鉄である。比較的ままとりの

良い小鉄塊といえる。

(3) 顕微鏡組織：図版7②③に示す。②は金属鉄部の拡大である。上側はパーライト素地に針状セメンタイトが析出する過共析 ($C > 0.77\%$) 組織であった。また②の下側は片状黒鉛 (Graphite : C) が析出する、ねずみ鋳鉄組織であった。さらに③の左側は銹化鉄部である。内部には蜂の巣状のレデブライト (Ledeburite) と片状黒鉛が残存する。この俊樹痕跡から、斑鋳鉄であったと判断される。

③の右側は製錬滓である。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルメナイトが晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である

(4) EPMA調査：図版7④に鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。暗灰色の非金属介在物の定量分析値は23.1% SiO_2 - 7.8% Al_2O_3 - 11.2% CaO - 5.4% MgO - 3.1% K_2O - 4.3% FeO - 43.3% TiO_2 (分析点12) であった。チタニア (TiO_2) の割合が非常に高い非晶質珪酸塩と推測される。

もう1視野、製錬滓の組成を調査した。図版7⑤に反射電子像 (COMP：図版7③の拡大) を示す。淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は53.1% FeO - 3.5% MgO - 1.8% MnO - 34.9% TiO_2 - 4.4% Al_2O_3 - 2.5% V_2O_3 (分析点13) であった。ウルボスピネル (Ulvö spinel : $2FeO \cdot TiO_2$) と推定される。白色針状結晶の定量分析値は33.7% FeO - 5.6% MgO - 2.4% MnO - 55.8% TiO_2 - 2.5% V_2O_3 (分析点14) であった。イルメナイト (Ilmenite : $FeO \cdot TiO_2$) と推定される。さらに素地の暗灰色部の定量分析値は49.7% SiO_2 - 12.5% Al_2O_3 - 13.2% CaO - 2.6% MgO - 3.2% K_2O - 9.1% FeO - 7.2% TiO_2 (分析点15) であった。非晶質珪酸塩である。

当試料も滓部の組成から、砂鉄 (含チタン鉄鉱) を比較的高温で製錬してつくられた鉄塊と判断される。金属鉄部は浸炭の進んだ高炭素鋼～鋳鉄組織が確認された。

KIT-11：含鉄鉄滓

(1) 外観観察：ごく小形の含鉄鉄滓 (9.8g) である。表層は淡褐色の土砂や茶褐色の銹化鉄で覆われており、銹化に伴う微細な割れも生じている。付着物により本来の遺物表層の観察は困難であるが、部分的に黒灰色の鉄滓が確認される。また着磁性はあるが、金属探知器反応はなく、内部に金属鉄は残存しないと推定される。

(2) マクロ組織：図版8①に示す。暗灰色部は砂鉄製錬滓、青灰色部は銹化鉄である。

(3) 顕微鏡組織：図版8②③に示す。②は砂鉄製錬滓の拡大である。微細な淡橙色部はチタンナイトライド (Titanium nitride : TiN)、青灰色不定形結晶はペロブスカイト (Perovskite : $CaTiO_3$) と推定される。また③の左上は銹化鉄部の拡大である。部分的に亜共晶組成白鋳鉄 ($C < 4.26\%$) 組織痕跡が残存する。

(4) EPMA調査：図版8④に滓部の反射電子像 (COMP：図版8②の拡大) を示す。淡橙色部の定量分析値は72.9% Ti - 6.2% V - 25.1% N (分析点16) であった。チタンナイトライド (Titanium nitride : TiN) と推定される。また青灰色不定形結晶の

定量分析値は40.3% CaO - 59.9% TiO_2 (分析点17) であった。ペロブスカイト (Perovskite : $CaTiO_3$) と推定される。

もう1視野、滓中の被熱砂鉄の組成を調査した。図版8⑤に反射電子像 (COMP) を示す。砂鉄粒内の微細な暗灰色鉱物の定量分析値は52.8% CaO - 44.0% P_2O_5 - 2.7% F - 3.5% FeO (分析点18) であった。磷灰石 [Apatite : $Ca_5(PO_4)_3F$] と推定される。砂鉄粒内の微小淡褐色部の定量分析値は79.5% FeO - 1.3% MnO - 1.0% MgO - 11.5% TiO_2 - 2.3% Al_2O_3 (分析点19)、素地部分の定量分析値は87.0% FeO - 1.2% MnO - 1.8% MgO - 6.0% TiO_2 (分析点20) であった。ともにチタン磁鉄鉱 (Titanomagnetite) であった。チタニア (TiO_2) の割合の高い箇所が淡褐色を呈する。

当試料の素地部分は砂鉄製錬滓であった。滓中には還元・滓化した砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子が含まれており、砂鉄粒内に磷灰石 [Apatite : $Ca_5(PO_4)_3F$] が確認された。また銹化鉄部には部分的に白鋳鉄組織痕跡が残存していた。

KIT-12：鉄塊系遺物

(1) 外観観察：やや小形で細長い椀状の鉄塊系遺物 (51.2g) である。全体が黄褐色の土砂で厚く覆われる。全体に金属探知器反応が強く、重量感がある。内部にまとまった金属鉄が残存する可能性が高いと考えられる。また下面側は微細な木炭痕による凹凸があり、部分的に暗灰色の鉄滓部分も確認される。

(2) マクロ組織：図版9①に示す。表層に薄く製錬滓が付着するが、まとまりの良い鉄主体の遺物である。

(3) 顕微鏡組織：図版9②③に示す。②は下面表層の製錬滓の拡大である。滓中の微細な淡橙色部はチタンナイトライド、淡褐色片状結晶はルチルと推定される。また③は金属鉄部の拡大である。旧オーステナイト (Austenite : γ 鉄) 粒界に沿って網目状に磷化鉄共晶 ($\alpha + Fe_3P$) が確認される。その周囲の白色部はフェライト、素地部分はパーライトであった。

(4) EPMA調査：図版9④に滓部の反射電子像 (COMP：図版9②の拡大) を示す。淡褐色片状結晶の定量分析値は96.8% TiO_2 - 5.4% MgO - 2.0% Al_2O_3 - 1.2% V_2O_3 (分析点21) であった。チタニア (TiO_2) 主体で、ルチル (Rutile : TiO_2) に近い組成の化合物といえる。また微細な淡橙色部の定量分析値は76.2% Ti - 2.9% V - 28.4% N (分析点22) であった。チタンナイトライド (Titanium nitride : TiN) と推定される。

もう1視野、鉄中非金属介在物の調査を実施した。図版9⑤に反射電子像 (COMP：図版9③の拡大) を示す。粒状黄褐色部の定量分析値は57.2% Fe - 36.3% S (分析点23) であった。硫化鉄 (FeS) である。その周囲の共晶組織部分の定量分析値は87.6% Fe - 10.6% P (分析点24) であった。磷化鉄共晶 ($\alpha + Fe_3P$) である。

当試料も滓部の組成から、砂鉄 (含チタン鉄鉱) を高温製錬してつくられた鉄塊と判断される。また金属鉄部は炭素量が0.6%前後の鋼で、磷 (P) の偏析が顕著であった。

KIT-13：含鉄鉄滓

(1) 外観観察：小形で椀状の含鉄鉄滓 (25.4g) と推定される。表層全体が黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄で覆われる。付着物により本来の遺物表層の観察は困難であるが、部分的に暗灰色の鉄滓が確認される。ただし金属探知器反応もあるため、内部には金属鉄が残存すると推定される。

(2) マクロ組織：図版10①に示す。素地の暗灰色部は砂鉄製錬滓であった。また滓中の明灰色～黒灰色部は金属鉄である。

(3) 顕微鏡組織：図版10②③に示す。②の左上は砂鉄製錬滓である。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルメナイトが晶出する。また②の金属鉄部は白色のフェライト素地に、黒色のパーライトが少量析出する。炭素量は0.2%前後と推定される。また③の金属鉄部はほぼ全面パーライト組織で、粒状に燐化鉄共晶 ($\alpha + \text{Fe}_3\text{P}$) が確認された。

(4) EPMA調査：図版10④に滓中の被熱砂鉄の反射電子像 (COMP) を示す。砂鉄の素地部分の定量分析値は87.9%Fe-6.7%TiO₂-1.1%MgO (分析点25)、砂鉄粒内の微小淡褐色部の定量分析値は64.1%Fe-25.9%TiO₂-4.0%Al₂O₃-1.4%MnO-1.1%MgO-1.0%V₂O₃ (分析点26) であった。素地はチタン磁鉄鉱 (Titanomagnetite) で、淡褐色部はウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) に近い組成であった。また被熱砂鉄の外周部の微小淡茶褐色結晶の定量分析値は56.0%Fe-33.2%TiO₂-4.4%Al₂O₃-2.0%MnO-1.8%MgO-1.4%V₂O₃ (分析点27) であった。ウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) に同定される。また砂鉄粒内の微小淡黄色鉱物の定量分析値は62.0%Fe-25.7%S (分析点28) であった。黄鉄鉱 (Pyrite: FeS₂) と推定される。

当試料の素地部分は砂鉄製錬滓であった。滓中には還元・滓化した砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子が含まれていた。また金属鉄部の炭素量は部位によるばらつきが大きい。0.1%前後の軟鉄の箇所から、0.8%程度の共析鋼の箇所まで確認された。

KIT-14：鑄造鉄器片

(1) 外観観察：厚さ5～7mm程の板状の鑄造鉄器片 (12.3g) である。表層全体が茶褐色の錆化鉄で、不規則な割れが多数生じている。金属探知器反応はなく、全体が完全に腐食 (錆化) していると判断される。

(2) マクロ組織：図版11①に示す。上述したように断面全体が腐食 (錆化) しており、金属鉄は残存していない。

(3) 顕微鏡組織：図版11②～⑤に示す。錆化鉄部の拡大である。断面全体に蜂の巣状のレデブライト痕跡が残存する。この組織痕跡から、本来は共晶組成白鑄鉄であったと判断される。

(4) EPMA調査：図版11⑥に錆化鉄部の反射電子像 (COMP) を示す。中央の暗灰色部の定量分析値は63.3%Fe-30.7%O (分析点29) であった。錆化鉄 (金属鉄が腐食して生じた水酸化鉄) で、燐 (P) の偏析はみられなかった。また微細な黄褐色

粒の定量分析値は63.9%Fe-34.9%S (分析点30) であった。硫化鉄 (FeS) である。

当試料は断面全体に白鑄鉄組織痕跡が残存する。鉄鍋などの鑄造鉄器破片の可能性が高いと考えられる。また燐 (P) の偏析は確認されず、硫黄 (S) の影響も僅かであった。

KIT-15：鉄塊系遺物

(1) 外観観察：小形で椀状の鉄塊系遺物 (22.2g) である。表層は全体が黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄で厚く覆われる。土砂中には微細な木炭破片が複数混在する。付着物により本来の遺物表層の観察は困難であるが、強い金属探知機反応があり、重量感もあるため、内部に金属鉄が残存すると推定される。

(2) マクロ組織：図版12①に示す。表層の暗灰色部は砂鉄製錬滓、内部の明白～明灰色部は金属鉄である。また金属鉄部の左側は低炭素域で、白色のフェライト素地にパーライトが少量析出する。これに対して右側は高炭素域で、パーライト素地に少量フェライトが析出する。

(3) 顕微鏡組織：図版12②③に示す。②は砂鉄製錬滓の拡大である。滓中には白色針状結晶イルメナイト、淡灰色片状結晶シュードブルッカイトが晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。また③は金属鉄部 (高炭素域) の拡大である。上述したように、パーライト素地にフェライトが少量析出する。さらに網目状・粒状に燐化鉄共晶 ($\alpha + \text{Fe}_3\text{P}$) が多数確認された。

(4) EPMA調査：図版12④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。淡褐色片状結晶の内側暗色部の定量分析値は11.9%Fe-44.7%Ti-3.1%V-2.2%Mg-1.4%Al-34.2%O (分析点31)、外側の明色部の定量分析値は26.7%Fe-27.8%Ti-2.5%Mg-1.3%Mn-1.1%Al-34.4%O (分析点32) であった。前者がシュードブルッカイト (Pseudobrookite: Fe₂O₃·TiO₂)、後者がイルメナイト (Ilmenite: FeO·TiO₂) に近い組成の化合物と推測される。

もう1視野、金属鉄部の調査を実施した。図版12⑤に反射電子像 (COMP) を示す。中央の粒状黄褐色部の定量分析値は63.9%Fe-34.9%S (分析点33) であった。硫化鉄 (FeS) である。また周囲の共晶組織部分の定量分析値は86.0%Fe-12.4%P (分析点34) であった。燐化鉄共晶 ($\alpha + \text{Fe}_3\text{P}$) である。

当試料も滓部の組成から、砂鉄 (含チタン鉄鉱) を高温製錬してつくられた鉄塊と判断される。金属鉄部の炭素量は部位によるばらつきが大きい。0.1%前後の軟鉄の箇所から、0.5%程度の鋼の箇所まで確認された。また燐 (P) の偏析が顕著であった。

KIT-16：製錬滓 (炉内滓)

(1) 外観観察：やや大形で不定形の鉄滓 (236.4g) である。滓の地の色調は黒灰色で、着磁性がある。上下面とも長さ2cm前後のやや大形の木炭痕による凹凸が著しい。製錬滓 (炉内滓) の可能性が高いと考えられる。広い範囲で茶褐色の錆化鉄が付着するが、金属探知器反応はなく、まとまった鉄

部はみられない。

(2) 顕微鏡組織：図版13①～③に示す。素地部分は砂鉄製錬滓で、②および③の上側はその拡大である。滓中には発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

また①の不定形青灰色部は錆化鉄である。金属組織痕跡はなく炭素量の推定等は困難な状態である。また①の右下は木炭破片で、③の下側はその拡大である。

(3) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.57% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.26%、酸化第1鉄 (FeO) が29.63%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 31.85%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は16.07%と低めで、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は3.74%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は15.19%、バナジウム (V) が0.32%と高値である。また酸化マンガン (MnO) が0.66%、五酸化リン (P₂O₅) は0.38%であった。銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当鉄滓は砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO₂, V) の高値傾向が顕著であった。砂鉄製錬滓に分類される。

KIT-17：炉壁

(1) 外観観察：大形の炉壁破片 (415.1g) である。内面は強い熱影響を受けて黒色ガラス質滓化している。内面表層には広い範囲で茶褐色の錆化鉄が付着する。着磁性もあるが、金属探知器反応はみられない。また外側の炉壁胎土部分は淡褐色で短く切ったスサや石英・斜長石などの無色鉱物 (砂粒) を混和している。

(2) 顕微鏡組織：図版13④～⑥に示す。内面表層のガラス質滓部分を観察した。滓中には部分的に白色針状結晶イルメナイトが晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。また微小金属鉄 (または錆化鉄) 粒が多数点状存在する。なかには⑤の中央やや右寄りのように白錆鉄組織痕跡が残存する粒もある。さらに⑥の灰褐色～明白色粒は還元・滓化の進んだ砂鉄 (含チタン鉄鉱) の痕跡で、明白色部は還元で生じた金属鉄である。

(3) 化学組成分析：表2に示す。強熱減量 (Ig loss) は0.941%と低値であった。強い熱影響を受けて結晶構造水が飛散した状態である。軟化性成分の鉄分 (Total Fe) は5.20%と高めであった。これは製錬滓などの影響を受けた可能性がある。また耐火性に有利なアルミナ (Al₂O₃) は22.61%と高値であった。

(4) 耐火度：1280℃であった。当炉壁は内面表層に製錬滓や還元・滓化が進んだ砂鉄粒子痕跡、白錆鉄組織の残る鉄粒などが確認された。砂鉄 (含チタン鉄鉱) の製錬に用いられた炉壁と判断される。

KIT-18：製錬滓 (炉内滓)

(1) 外観観察：大形で厚手の鉄滓 (454.5g) である。上面側には茶褐色の土砂や錆化鉄が厚く付着する。この面の着磁性は強いが、金属探知器反応はみられない。また下面側には

長さ2cm前後の大形の木炭痕による凹凸が著しい。滓の色調は黒灰色で着磁性は弱い。製錬滓 (炉内滓) と似た外観で、製錬滓 (炉内滓) の可能性が高いと考えられる。

(2) 顕微鏡組織：図版14①～③に示す。①の左側が素地部分で、発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトに加えて白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite:FeO) が晶出する。一方表層側では、淡褐色片状結晶シュードブルッカイトが部分的に晶出する。②③はその拡大である。

(3) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.96% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.34%、酸化第1鉄 (FeO) が28.64%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 33.40%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は19.05%とやや低めで、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は3.12%である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は11.77%、バナジウム (V) が0.26%と高値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.46%、五酸化リン (P₂O₅) は0.40%であった。銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当鉄滓は砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO₂, V) の割合が、砂鉄焼結塊 (KIT-8, 21) とほぼ同等であった。また鉄酸化物の割合がやや高めで、滓中にウスタイトが確認されることから、やや還元雰囲気のない箇所が生じた製錬滓と推定される。

KIT-19：製錬滓 (炉内滓)

(1) 外観観察：ほぼ全面が破面での鉄滓破片 (97.8g) である。表層にはごく小形の錆化鉄部が点在するが、まとまった鉄部はみられない。滓の色調は黒灰色で着磁性は弱い。気孔は少なく緻密で重量がある。製錬滓 (炉内滓) の可能性が高いと考えられる。

(2) 顕微鏡組織：図版14④～⑥に示す。④の上側は木炭破片である。また下側は製錬滓で⑤⑥はその拡大である。滓中には発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネルが凝集して晶出する。さらに淡灰色結晶ファヤライトも確認される。

(3) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.88% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.08%、酸化第1鉄 (FeO) が50.93%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 8.882%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) の割合は14.94%と低く、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は3.61%である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は23.72%、バナジウム (V) が0.51%と高値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.78%、五酸化リン (P₂O₅) は0.33%であった。銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当鉄滓は砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO₂, V) の高値傾向が顕著であった。砂鉄製錬滓と推定される。

KIT-20：梲形鍛治滓

(1) 外観観察：小形でやや扁平な梲形鍛治滓 (28.9g) である。上面中央に1箇所瘤状に黒色ガラス質滓が確認される。滓中には熱影響を受けた白色の砂粒が含まれている。羽口先端

の粘土溶融物と推定される。また下面側は長さ5mm程の微細な木炭痕による凹凸が著しい。滓の地の色調は黒灰色で、着磁性はほとんどない。気孔は少なく緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織：図版15①～③に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトに加えて微小暗灰色結晶ヘルシナイト (Hercunite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) が晶出する。

(3) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 41.64% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.20%、酸化第1鉄 (FeO) が37.16%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 17.95%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) の割合は40.02%と高いが、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は3.75%である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.62%、バナジウム (V) が0.03%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.22%、五酸化リン (P_2O_5) も0.16%と低めである。銅 (Cu) は<0.01%と低値であった。

当鉄滓中には (鉄) チタン酸化物は確認されず、脈石成分 (TiO_2 , V) の低減傾向も顕著であった。この特徴から、熱間での鍛打加工に伴う鍛錬鍛冶滓と推定される。

KIT-21：砂鉄焼結塊

(1) 外観観察：やや小形の砂鉄焼結塊 (31.8g) である。全体に顆粒状の微細な凹凸がある。色調は暗灰色で着磁性が強い。また表層には木炭痕が複数残る。大きなものは2cm大である。

(2) 顕微鏡組織：図版15④～⑥に示す。内部には多数の被熱砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子が確認された。⑤⑥はその拡大である。内部に微細な暗灰色の燐灰石や、黄鉄鉱などの硫化鉄物を含む粒も複数確認された。また外周部の微小明白色部は、還元で生じた金属鉄である。

(3) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 34.82% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.37%、酸化第1鉄 (FeO) が15.68%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 31.83%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) の割合は34.05%と高いが、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は2.72%と低めである。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は10.39%、バナジウム (V) が0.15%と高値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.47%、五酸化リン (P_2O_5) は0.35%であった。銅 (Cu) は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は炉材粘土溶融物 (SiO_2 主成分) の影響が大きい、砂鉄焼結塊と推定される。内部に還元・滓化しかけた状態の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子が多数確認された。

4. まとめ

今回調査した北山遺跡出土遺物の大半は製鉄関連遺物であった。地域に分布する砂鉄を利用して、主に鉄生産が行われていたと推定される。ただし鍛錬鍛冶滓が1点、確認された。このことから鍛冶作業も一部行われていたと推測される。

(1) 炉壁4点 (KIT-2~4, 17) は、砂鉄 (含チタン鉄鉱) の製錬に用いられたと推定される。内面表層に砂鉄起源の鉄

チタン酸化物を含む製錬滓や、被熱砂鉄の付着が確認された。

(2) 砂鉄が製鉄炉内面の粘土溶融物とともに固まった遺物 (砂鉄焼結塊) が、2点 (KIT-8, 21) 確認された。砂鉄は摩耗して丸みを帯びた粒が多い。海岸に堆積した浜砂鉄を採取した可能性が高いと考えられる。また粒内に格子状や縞状、微細な点状の離溶組織が確認される、含チタン鉄鉱の割合が高い。化学組成をみても、チタニア (TiO_2) を12.46%、10.39%含有する。

鹿児島県内の古代～近世の製鉄遺跡では、地域に分布する火山岩起原の砂鉄 (含チタン鉄鉱) を原料とする事例が多い。出土砂鉄のチタニア (TiO_2) の含有割合は10%前後である。さらに鹿児島県内の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 中には、微細な燐灰石 [Apatite: $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3\text{F}$] を多数含むものが多い。^(注3・4) 北山遺跡出土関連遺物中でも、EPMAを用いた組成調査で微細な燐灰石を含む砂鉄が複数確認 (KIT-6, 11, 13) されている。こうした特徴から、北山遺跡でも、地域に分布する砂鉄を利用していたと推定される。

(3) 鉄滓4点 (KIT-1, 16, 18, 19) は砂鉄製錬滓であった。チタニアの含有割合は11.77~23.72%であった。上述したように、火山岩起原の砂鉄 (含チタン鉄鉱) を利用して鉄が生産されていたと判断される。

(4) 含鉄鉄滓 (KIT-5, 7, 11, 13) ・鉄塊系遺物 (KIT-9, 10, 12, 15) は、いずれも製鉄関連遺物であった。還元で生じた微細な金属鉄粒がまともらずに滓中に散在したことから、高炭素鋼から一部鑄鉄組織を呈するものまで確認された。ただし、全体が鑄鉄組織の鉄塊は確認されなかった。この結果から、鋼が主な生産品であった可能性が考えられる。固相 (γ 鉄) 状態で成長した鋼は、熔融鉄よりも燐の活量係数が大きく、燐を固溶しにくい^(注5)ため、鉄と比較して3分の1程度しか燐を固溶しないとされている^(注5)。主に鉄を生産して鍛冶原料とした場合、生成鉄中の燐の影響は大きくなる。鋼を生産することで、燐の影響を抑制できた推測される。

また一部の鉄塊 (KIT-12, 15) では燐 (P) の偏析が顕著で、燐化鉄共晶 ($\alpha + \text{Fe}_3\text{P}$) が確認された。燐化鉄共晶は融点が低く (1050℃)、固相では硬い。さらに硫化鉄 (FeS) と共存することが多いため、鍛造鉄器加工の際の鍛接不良や、製品の脆化といった悪影響の要因となる可能性がある。

(5) 鉄滓1点 (KIT-20) は鍛錬鍛冶滓と推定される。滓中には (鉄) チタン酸化物は確認されず、脈石成分 (TiO_2 , V) の低減傾向も顕著であった。熱間での鍛打加工に伴う滓で、遺跡内で鍛冶作業も行われたことを示す遺物である。

(6) 鉄素材 (KIT-6) は、棒状に粗く鍛打加工された遺物と推定される。炭素量は1.4%程度の高炭素鋼で、内部に燐 (P)、硫黄 (S) の影響が確認される。遺跡内で生産された鉄 (製錬鉄塊系遺物) を鍛冶原料とした可能性がある。

鑄造鉄器片 (KIT-14) は、断面全体に共晶組成白鑄鉄組織

の痕跡が残存する。また硫化鉄 (FeS) が少量確認されたが、
 燐の偏析はみられなかった。このため、地域で製造された鑄
 造製品ではなく、他の地域から搬入された可能性が考えられ
 る。

(注)

- (1) 木下亀城・小川留太郎1995『岩石鉱物』保育社
 チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略)チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。
 チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略)このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱Titaniferous iron oreという。
- (2) J.B. Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572
 [イルメナイト (Ilmenite : $FeO \cdot TiO_2$) , シュードブルッカイト (Pseudobrookite : $Fe_2O_3 \cdot TiO_2$) の晶出は $FeO-TiO_2$ 二元平衡状態図から高温化操業が推定される。]
- (3) 鈴木瑞穂2007「鹿児島県の高燐 (P) 砂鉄が製鉄技術に及ぼした影響について」『ミュージアム知覧』紀要第11号
- (4) 鈴木瑞穂2009「南九州地域の中世～近世の製鉄技術について」『鉄の歴史—その技術と文化—フォーラム第12回公開研究発表会論文集』(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム
- (5) 新井宏2000「古代日本に間接製錬法があったか」『ふえらむ』Vol. 5No. 10

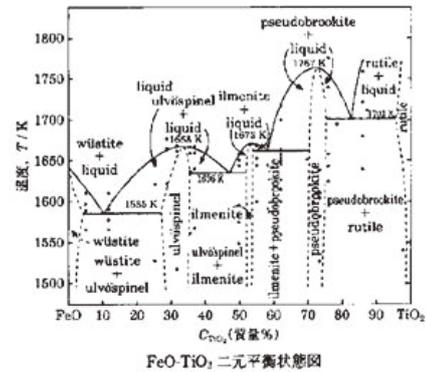


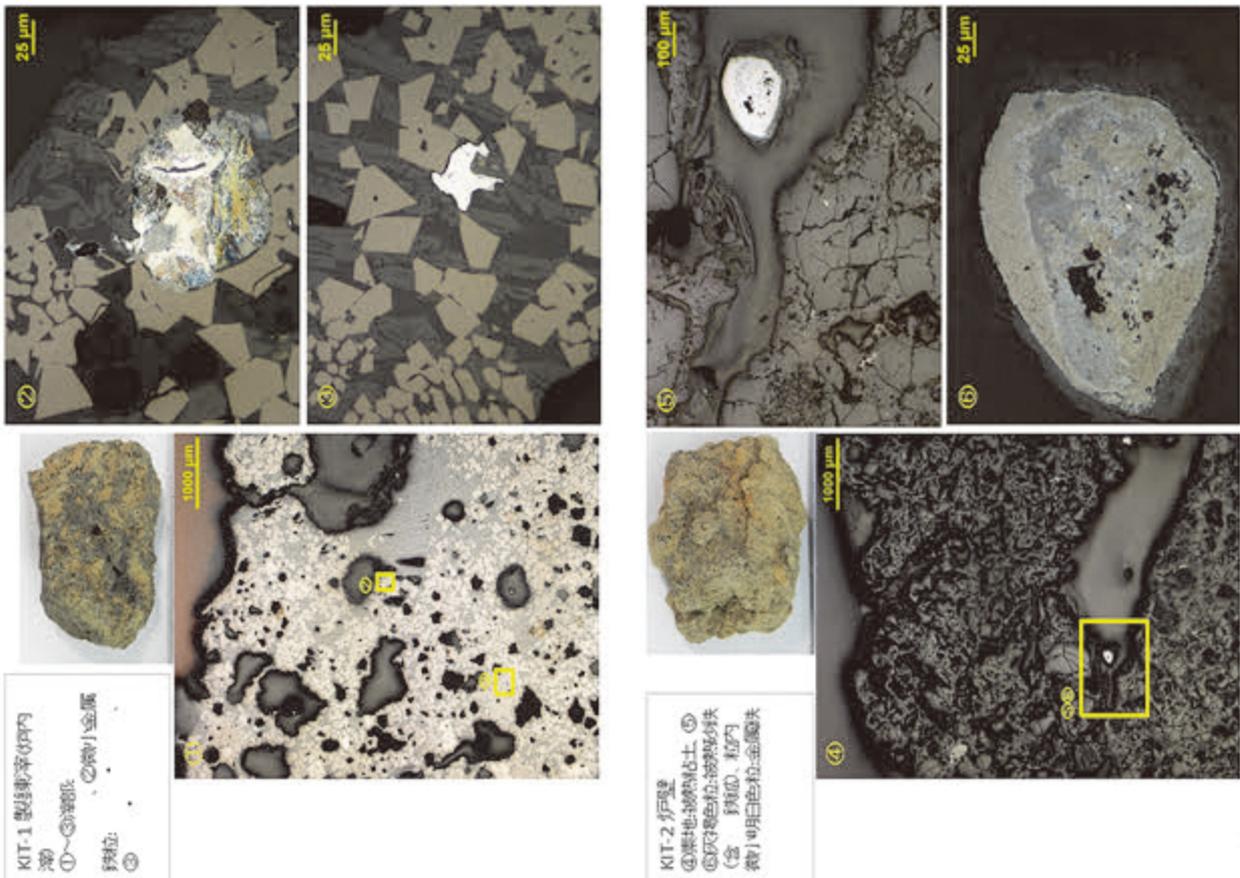
表1 供試材の履歴と調査項目

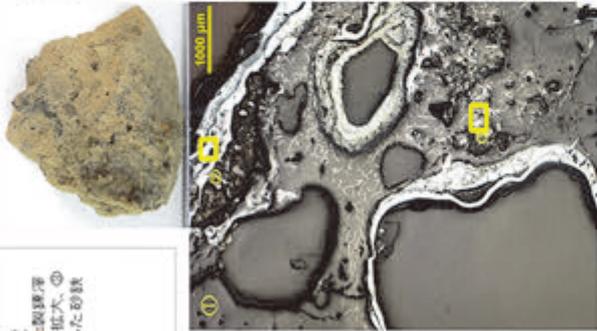
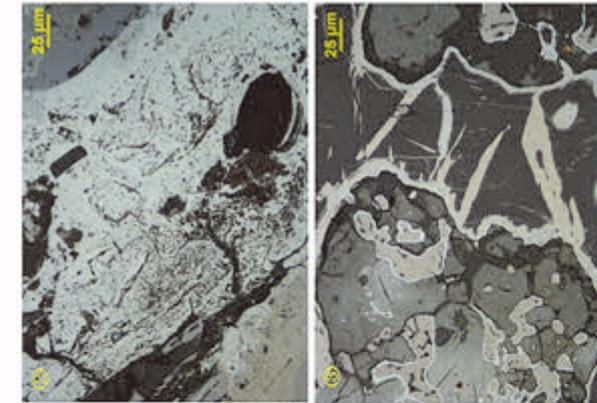
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応	調査項目					備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微組織	EPMA	化学分析	耐火度	
KIT-1	北山	土抗51号	製鍊滓	中世末～近	57×44×32	106.2	なし		○		○	○	
KIT-2			炉壁		55×44×37	63.9	なし		○		○		
KIT-3			炉壁		78×68×38	130.6	なし		○		○		
KIT-4		土抗54号	炉壁		80×62×38	124.4	なし		○		○		
KIT-5		製鉄炉2号	含鉄鉄滓		75×46×28	118.4	L(●)	○	○	○			
KIT-6			鉄素材		49×25×23	39.8	L(●)	○	○	○			
KIT-7			含鉄鉄滓		45×27×30	27.3	錆化(△)	○	○		○		
KIT-8			砂鉄焼結塊		37×37×19	57.8	なし	○	○		○		
KIT-9		製鉄炉4号	鉄塊系遺物		57×32×25	59.0	L(●)	○	○	○			
KIT-10			鉄塊系遺物		26×24×21	20.8	M(◎)	○	○	○			
KIT-11			含鉄鉄滓		29×16×18	9.8	錆化(△)	○	○	○			
KIT-12			鉄塊系遺物		54×29×28	51.2	L(●)	○	○	○			
KIT-13			含鉄鉄滓		33×28×18	25.4	L(●)	○	○	○			
KIT-14			鑄造鉄器片		41×27×8	12.3	錆化(△)	○	○	○			
KIT-15		製鉄炉1号	鉄塊系遺物		30×25×18	22.2	L(●)	○	○	○			
KIT-16		土抗49号	製鍊滓		101×98×44	236.4	なし		○		○		
KIT-17			炉壁		127×90×62	415.1	錆化(△)		○		○	○	
KIT-18		溝状遺構4号	製鍊滓		106×81×66	454.5	なし		○		○		
KIT-19			製鍊滓		59×38×28	97.8	なし		○		○		
KIT-20		溝状遺構3号	鍛冶滓		50×32×20	28.9	なし		○		○		
KIT-21			-		砂鉄焼結塊	40×31×30	31.8	なし		○		○	

表2 供試材の化学組成

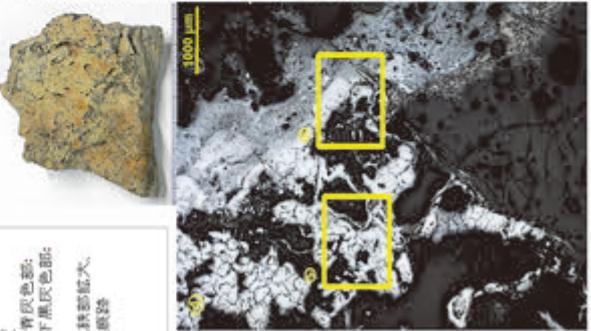
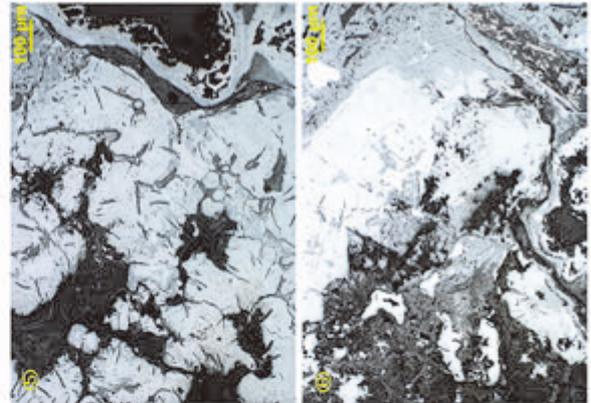
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分	金属鉄	酸化	酸化	二酸化	酸化7%	酸化加	酸化マ	酸化	酸化ト	酸化マン	二酸化	酸化	硫黄	五酸化磷	強熱減量	バナジウム	銅	二酸化	耐火度	
					Total (Fe)	Metallic (Fe)	第1鉄 (FeO)	第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	珪素 (SiO ₂)	ミウム (Al ₂ O ₃)	シウム (CaO)	ネウム (MgO)	カリウム (K ₂ O)	リウム (Na ₂ O)	ガン (MnO)	チタン (TiO ₂)	クロム (Cr ₂ O ₃)	(S)	(P ₂ O ₅)	(lg loss)	(V)	(Cu)	ジルコニウム (ZrO ₂)		造滓成分
KIT-2	北山	土坑51号	炉壁	中世末~	2.71	0.20	0.59	2.933	71.28	16.11	0.62	0.53	2.54	1.27	<0.01	0.50	0.03	0.01	0.06	2.911	<0.01	<0.01	<0.01	92.35	1280
KIT-3		土坑54号	炉壁	近世初頭	4.55	0.07	0.86	5.450	65.71	19.24	1.31	0.69	2.01	1.92	0.10	0.76	0.02	0.01	0.11	1.854	<0.01	<0.01	<0.01	90.88	1120
KIT-4			炉壁		3.16	0.06	0.55	3.821	69.36	16.84	2.13	0.54	2.25	3.30	0.06	0.31	0.02	0.01	0.02	0.981	<0.01	<0.01	<0.01	94.42	1120
KIT-17			炉壁		5.20	0.10	3.00	3.958	63.53	22.61	1.06	0.84	1.38	1.35	0.12	0.95	0.02	<0.01	0.07	0.941	0.01	<0.01	<0.01	90.77	1280

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分	金属鉄	酸化	酸化	二酸化	酸化7%	酸化加	酸化マ	酸化	酸化ト	酸化マン	二酸化	酸化	硫黄	五酸化磷	炭素	バナジウム	銅	二酸化	造滓成分
					Total (Fe)	Metallic (Fe)	第1鉄 (FeO)	第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	珪素 (SiO ₂)	ミウム (Al ₂ O ₃)	シウム (CaO)	ネウム (MgO)	カリウム (K ₂ O)	リウム (Na ₂ O)	ガン (MnO)	チタン (TiO ₂)	クロム (Cr ₂ O ₃)	(S)	(P ₂ O ₅)	(C)	(V)	(Cu)	ジルコニウム (ZrO ₂)	
KIT-1	北山	土坑51号	製錬滓	中世末~	42.10	0.16	48.56	5.997	14.14	4.76	2.30	2.70	0.60	0.45	0.83	19.03	0.06	0.05	0.61	0.05	0.35	<0.01	0.01	24.95
KIT-7		壱穴2号	含鉄鉄滓	近世初頭	35.34	0.27	9.89	39.15	19.71	4.63	1.43	3.35	0.68	0.58	0.68	12.46	0.05	0.05	0.55	0.43	0.20	<0.01	<0.01	29.80
KIT-8			砂鉄焼結塊		44.81	0.20	41.93	17.18	15.59	3.65	1.25	3.10	0.23	0.22	0.78	12.65	0.04	0.05	0.61	0.14	0.18	<0.01	0.03	23.82
KIT-16		土坑49号	製錬滓		45.57	0.26	29.63	31.85	8.03	3.82	1.79	1.95	0.48	0.24	0.66	15.19	0.05	0.03	0.38	0.45	0.32	<0.01	<0.01	16.07
KIT-18		溝状4号	製錬滓		45.96	0.34	28.64	33.40	11.01	4.10	1.32	1.80	0.54	0.28	0.46	11.77	0.05	0.05	0.40	0.78	0.26	<0.01	<0.01	19.05
KIT-19			製錬滓		45.88	0.08	50.93	8.882	6.98	3.90	1.01	2.60	0.26	0.19	0.78	23.72	0.06	0.03	0.33	0.05	0.51	<0.01	<0.01	14.94
KIT-20		溝状3号	鍛冶滓		41.64	0.20	37.16	17.95	25.96	7.92	2.94	0.81	1.57	0.82	0.22	0.62	0.04	0.05	0.16	0.22	0.03	<0.01	<0.01	40.02
KIT-21		-	砂鉄焼結塊		34.82	0.37	15.68	31.83	23.06	7.11	1.07	1.65	0.54	0.62	0.47	10.39	0.05	0.03	0.35	0.64	0.15	<0.01	<0.01	34.05

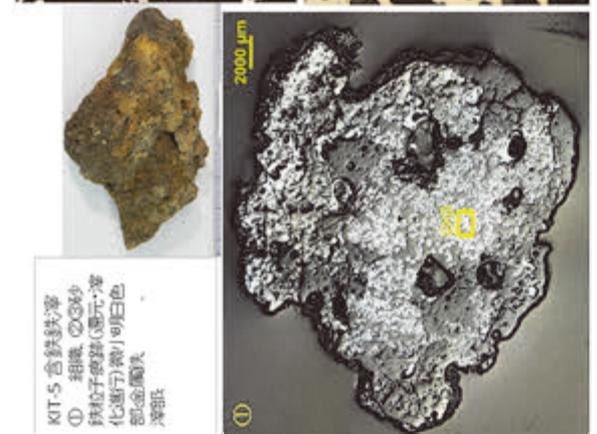
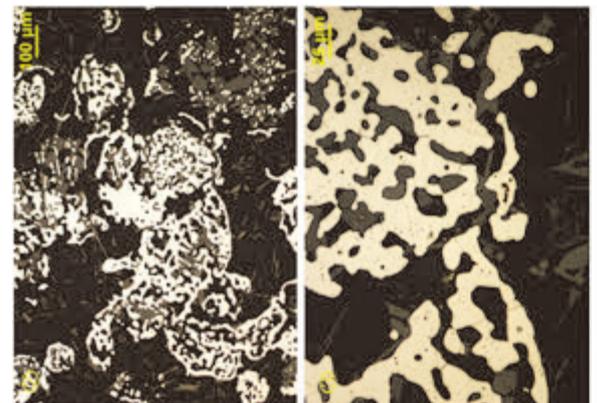




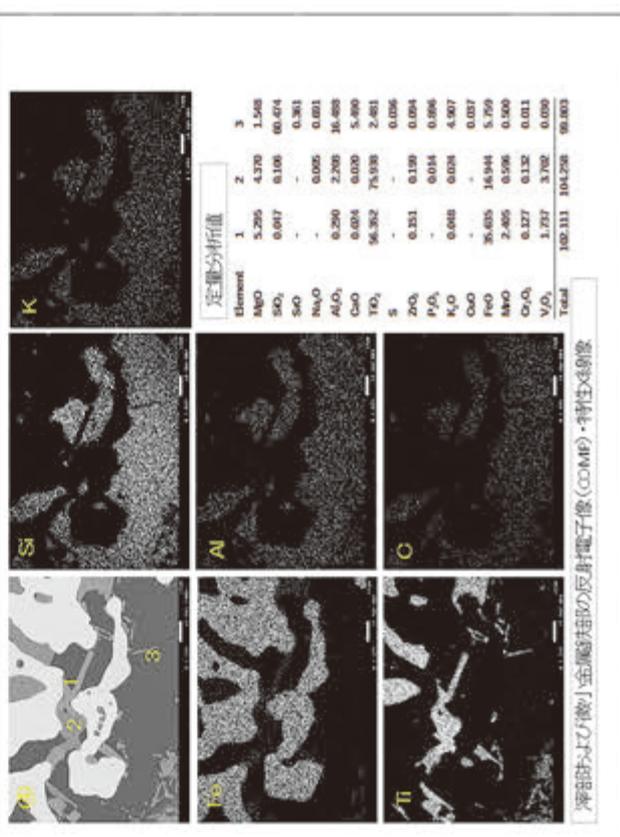
KIT-3 炉壁
 ①内面炭層に隣接する
 ②鉄化鉄部拡大、③
 還元、溶化した砂鉄
 粒子痕跡。



KIT-4 炉壁
 ①内面炭層有灰色部、
 鉄化鉄。右下黒灰色部、
 質薄、②③鉄化鉄部拡大、
 過共析組織痕跡。



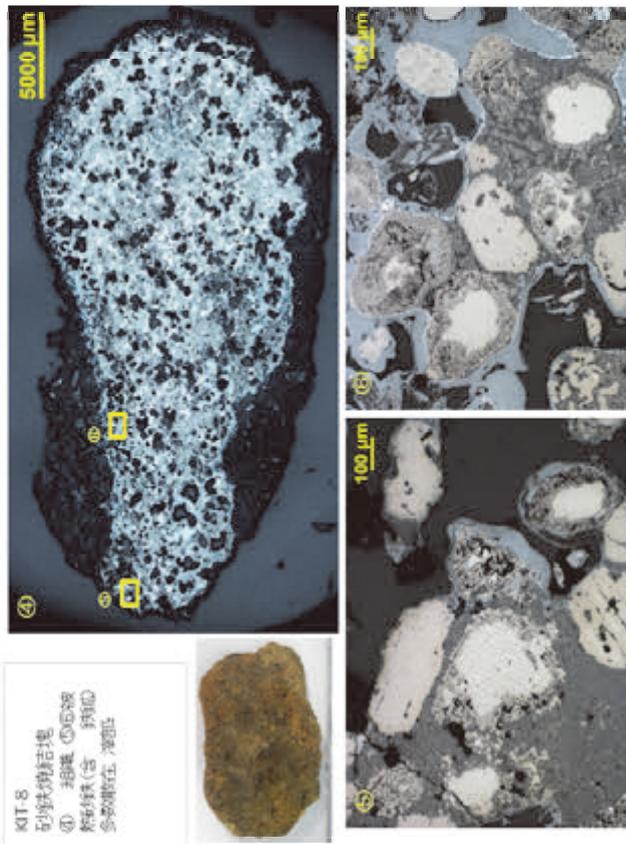
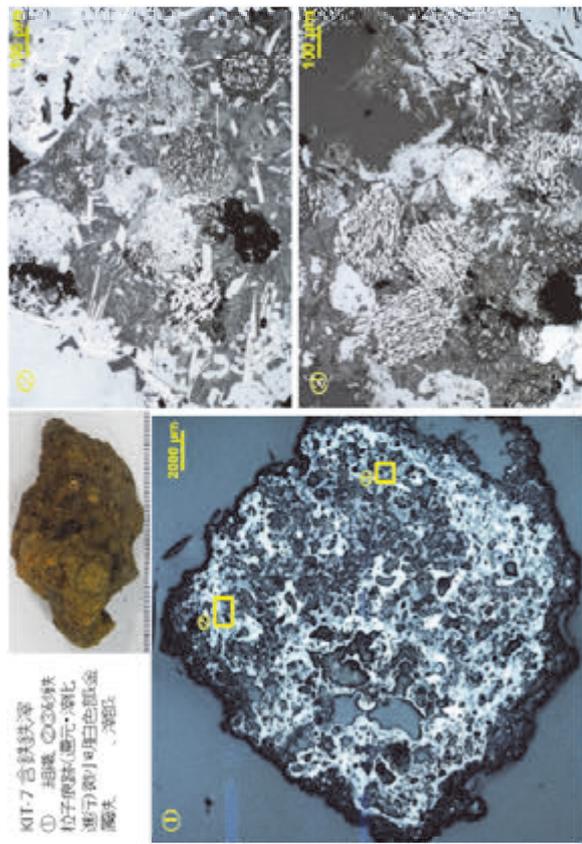
KIT-5 含鉄鉄滓
 ① 組織、②③砂
 鉄粒子痕跡(還元、溶
 化渣)を覆った白色
 部(金属)を
 浮遊



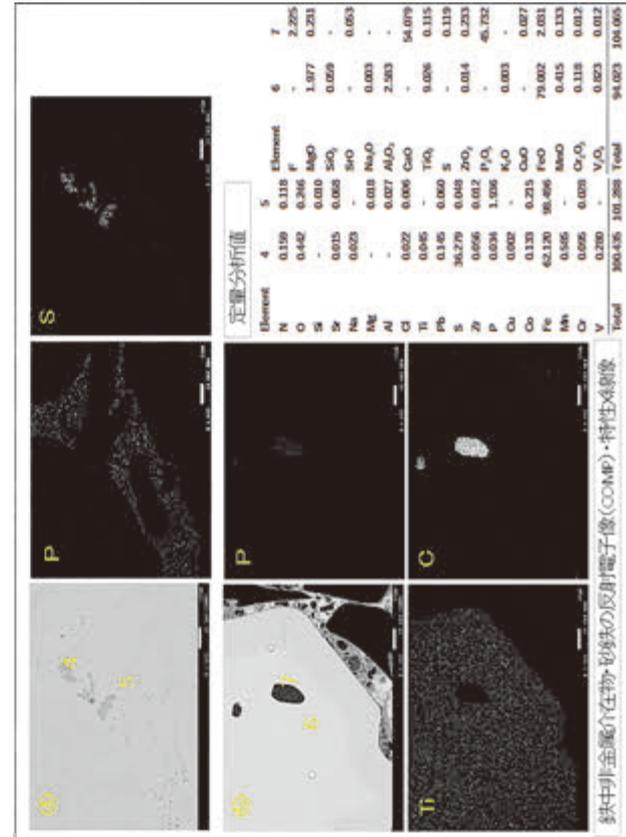
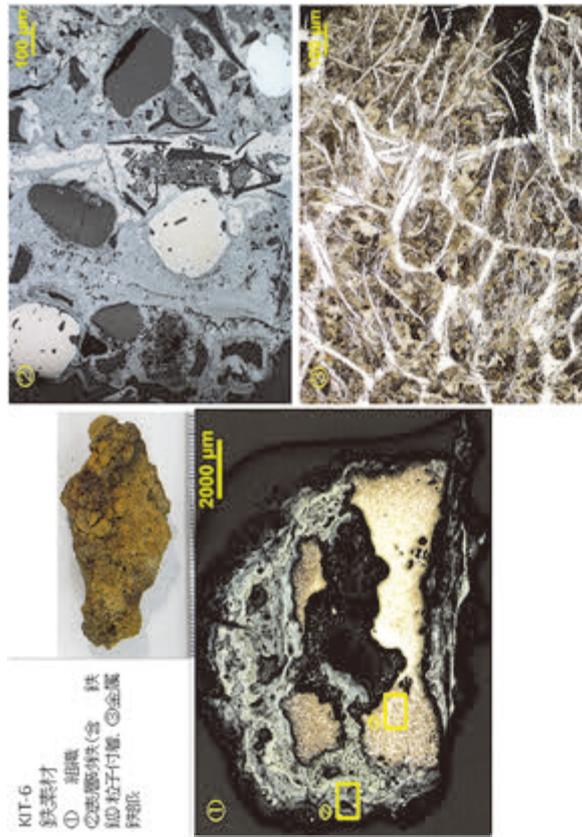
炉部上10μm×1金属渣部の反射電子像(EDS)・特性X線像

図版2 炉壁の顕微鏡写真

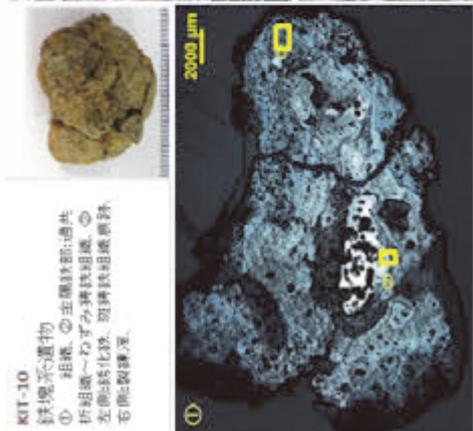
図版3 含鉄鉄滓の顕微鏡写真・EPMA調査



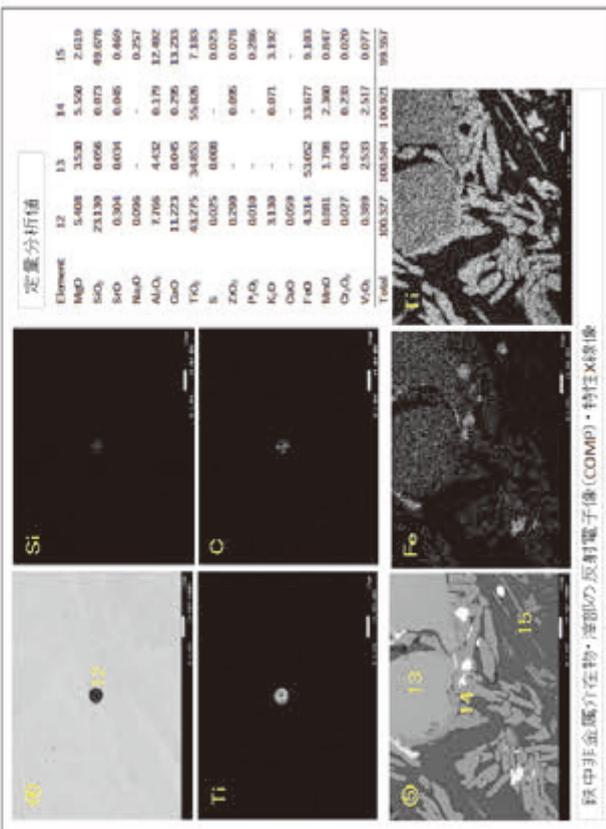
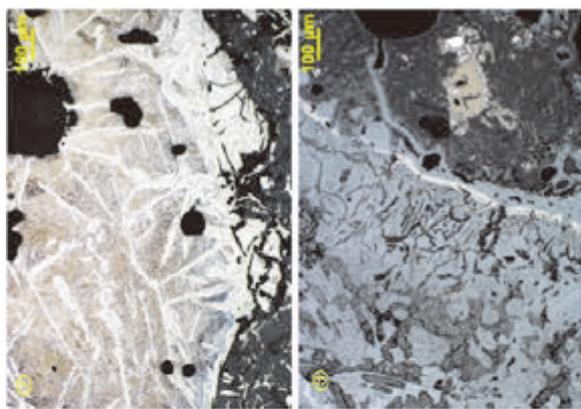
図版5 含鉄鉄滓・砂鉄結核の顕微鏡写真



図版4 鉄素材の顕微鏡写真・EDS測定

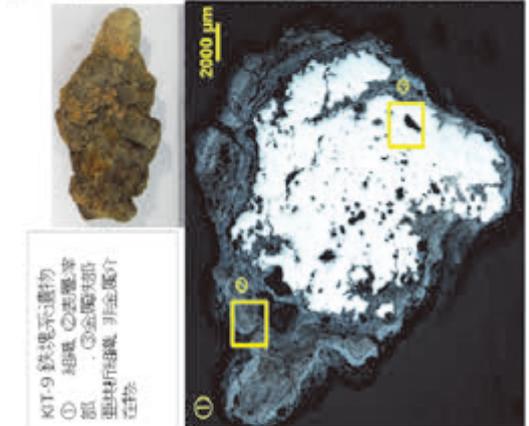


KIT-10
鉄塊系遺物
① 組織、② 主成分部、③ 共析組織、④ 心寸の鋼鉄組織、⑤ 左面に酸化鉄、⑥ 珪酸鉄組織、⑦ 石炭酸残渣。

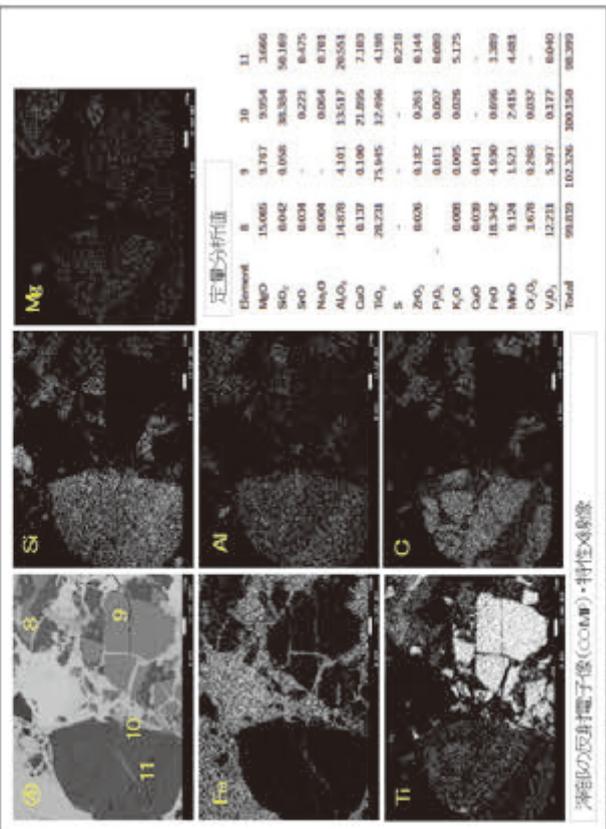
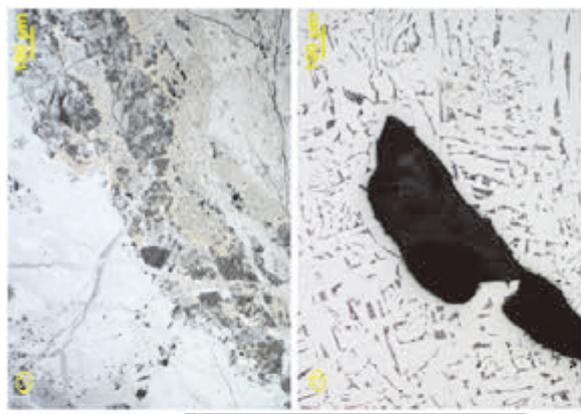


鉄中非金属成分在物、渣部の反射電子像 (COMP)・特性X線像

図版7 鉄塊系遺物の顕微鏡写真・EPMA調査

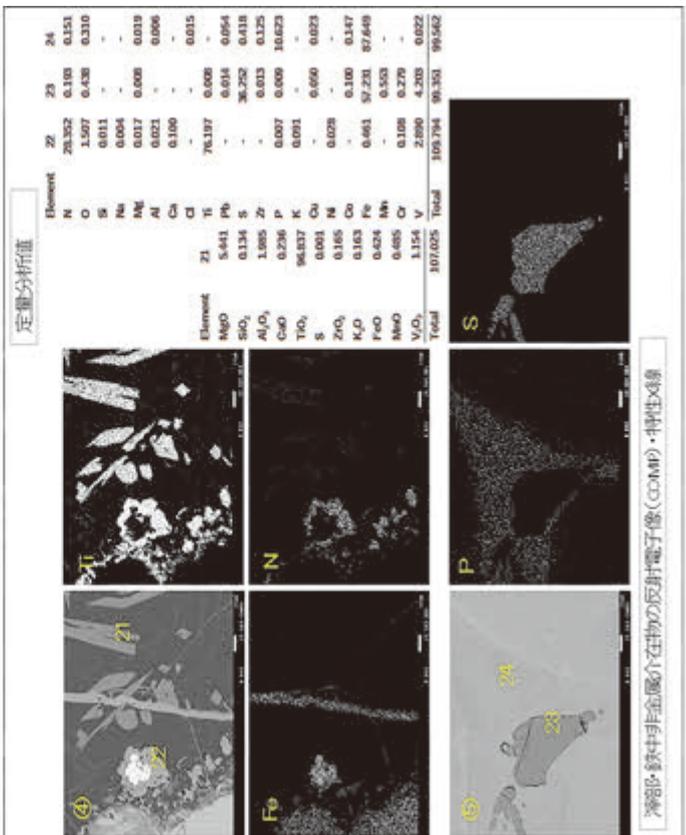
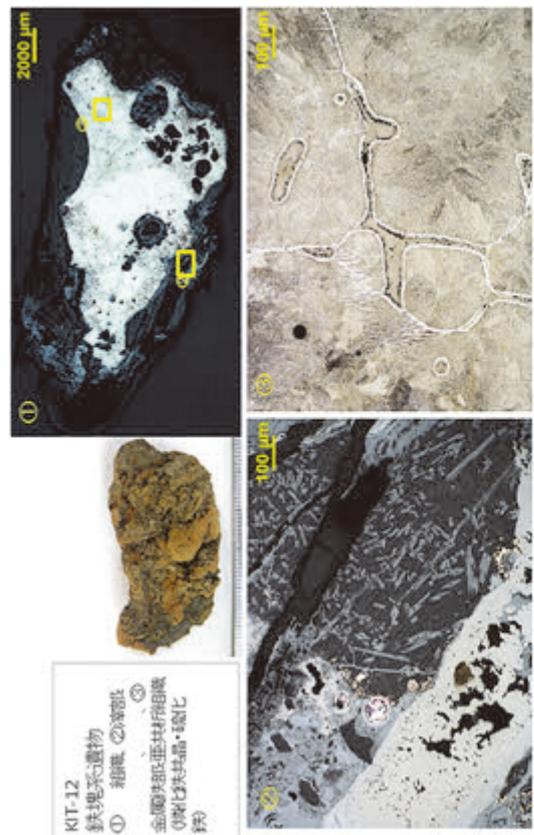


KIT-9 鉄塊系遺物
① 組織、② 主成分部、③ 共析組織、④ 心寸の鋼鉄組織、⑤ 左面に酸化鉄、⑥ 珪酸鉄組織、⑦ 石炭酸残渣。

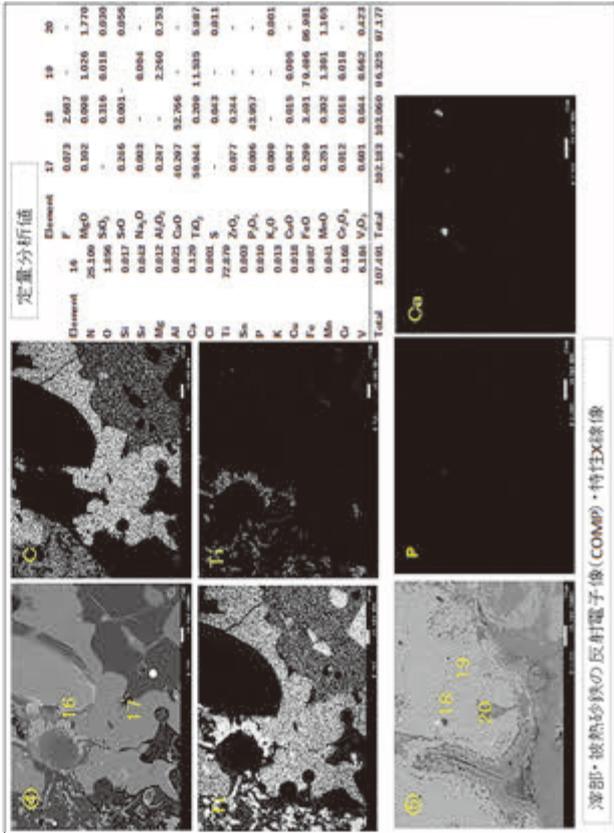
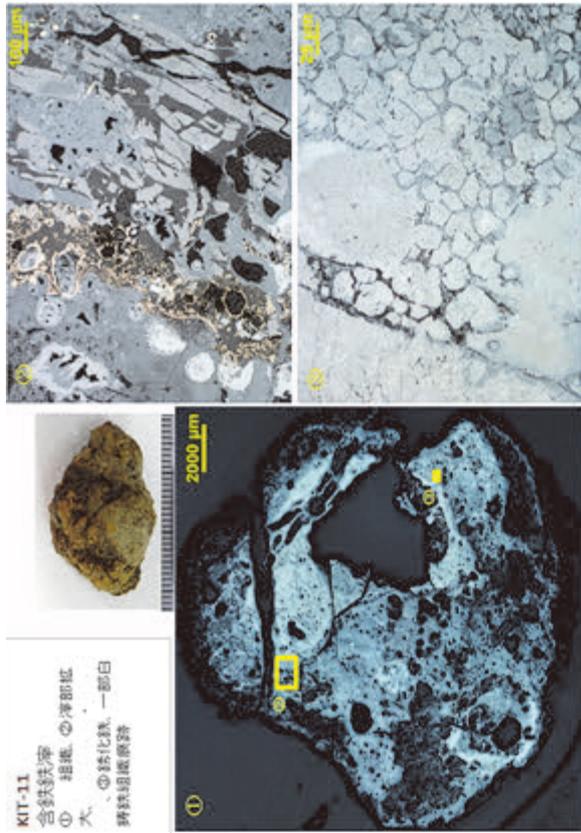


沖部の反射電子像 (COMP)・特性X線像

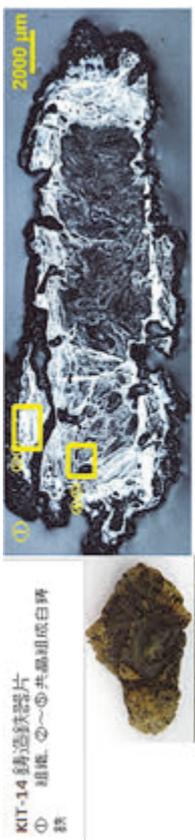
図版8 鉄塊系遺物の顕微鏡写真・EPMA調査



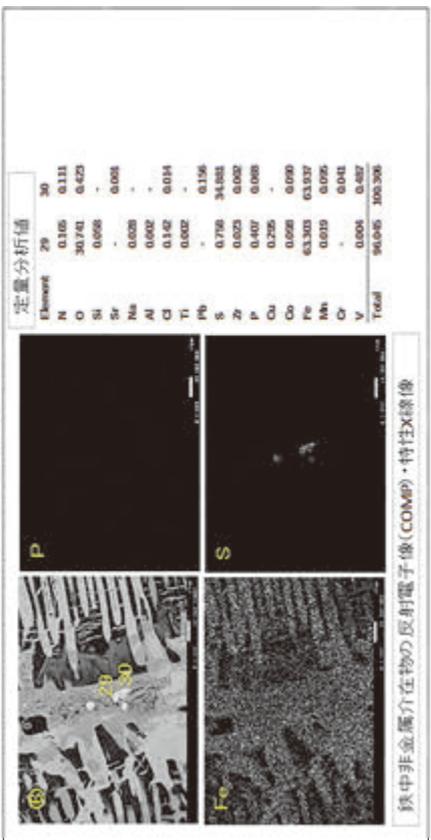
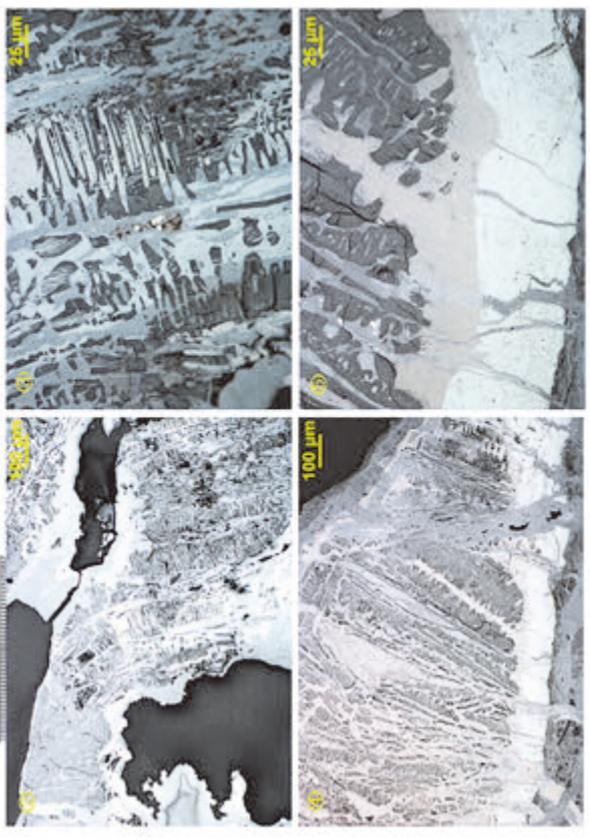
図版5 鉄塊系遺物の反相電子像(EDS)・特性X線



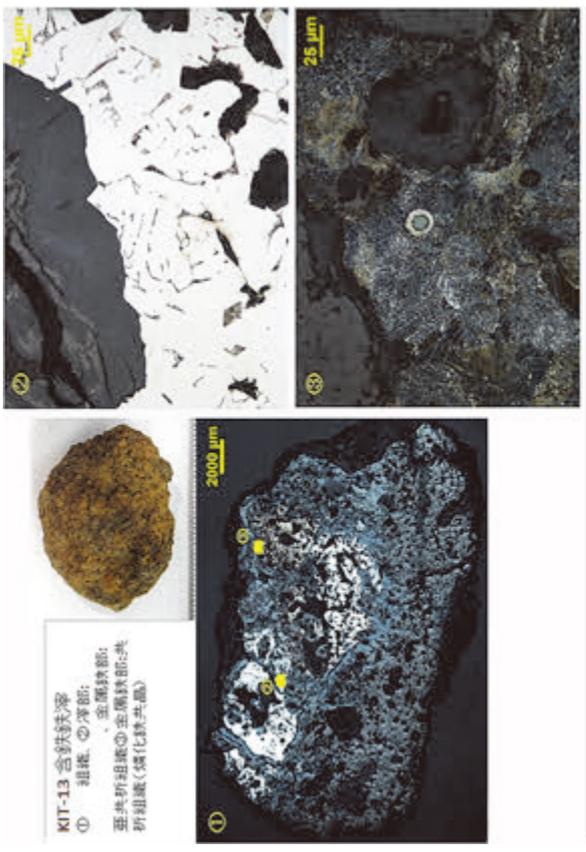
図版8 含鉄鉄滓の顕微鏡写真・EDS測定



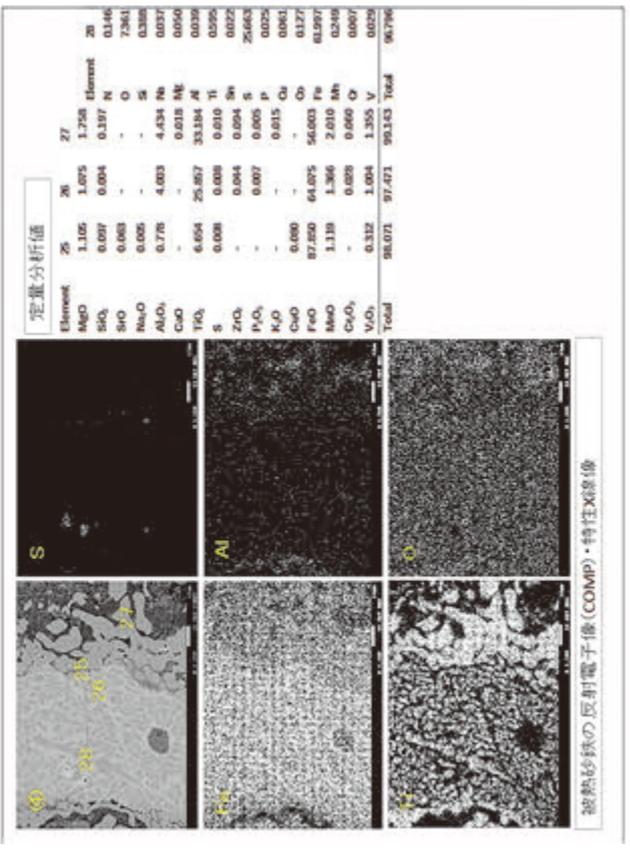
KIT-14 铸造铁器片
① 組織、②~④ 共晶組成白昇鉄



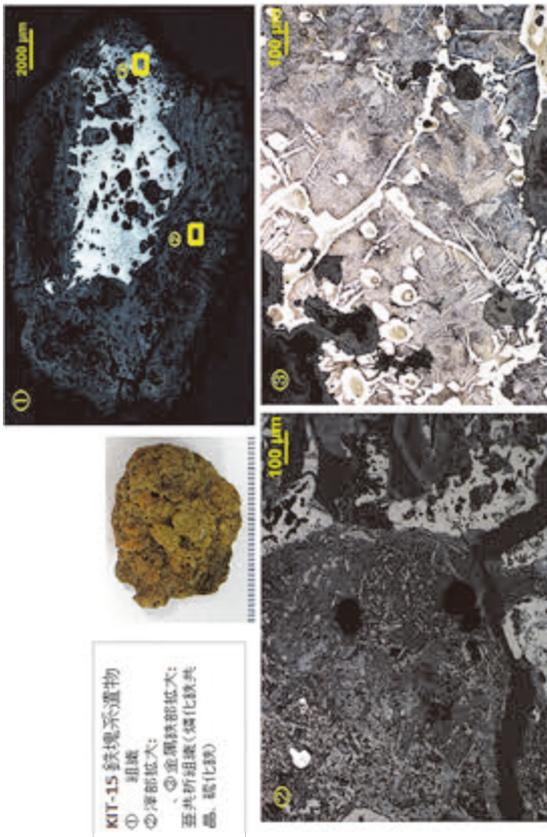
図版11 铸造铁器片の顕微鏡写真・EPMA測定



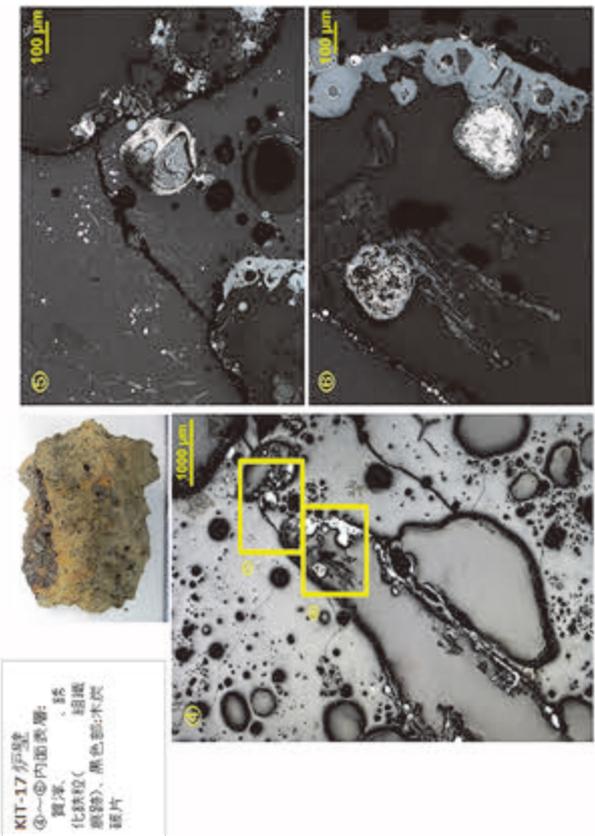
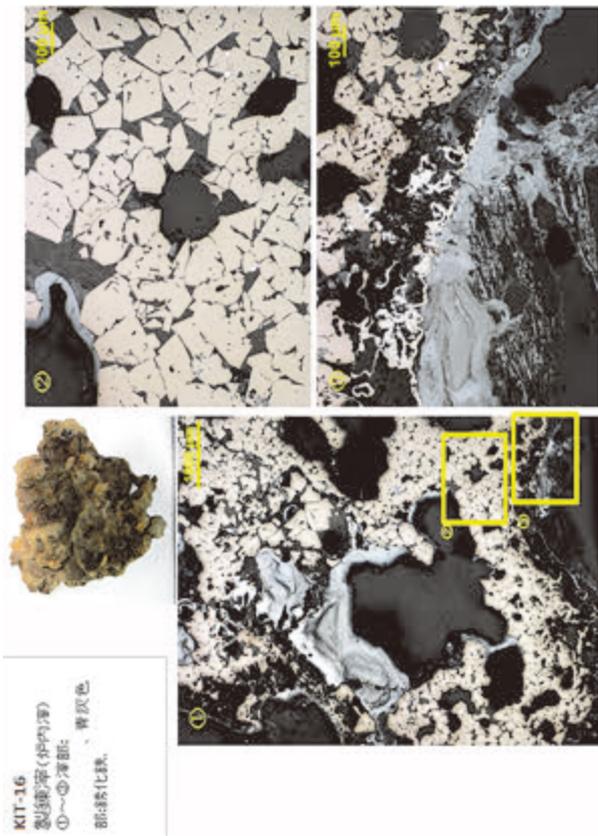
KIT-13 含鉄鉄滓
① 組織、② 浮部、③ 金属鉄部、④ 基体所組織の金属鉄部-共析組織(硫化鉄共晶)



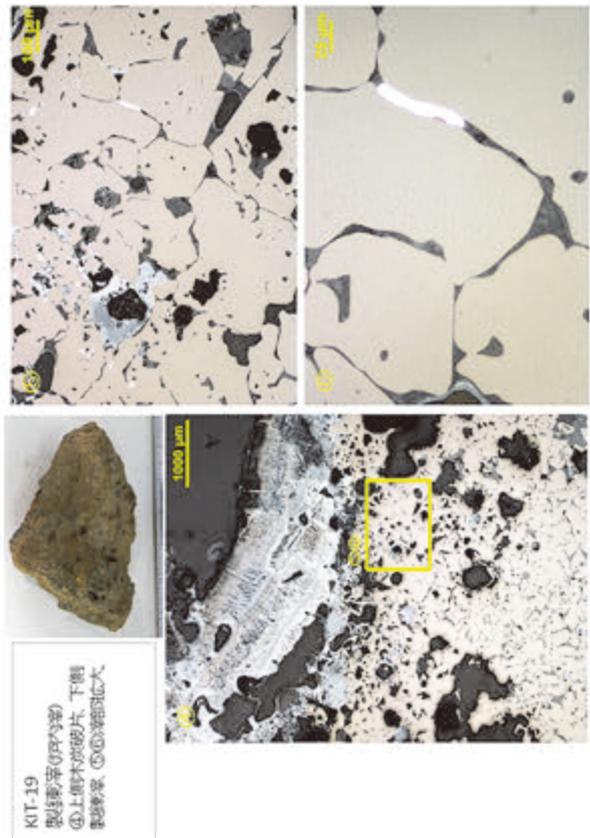
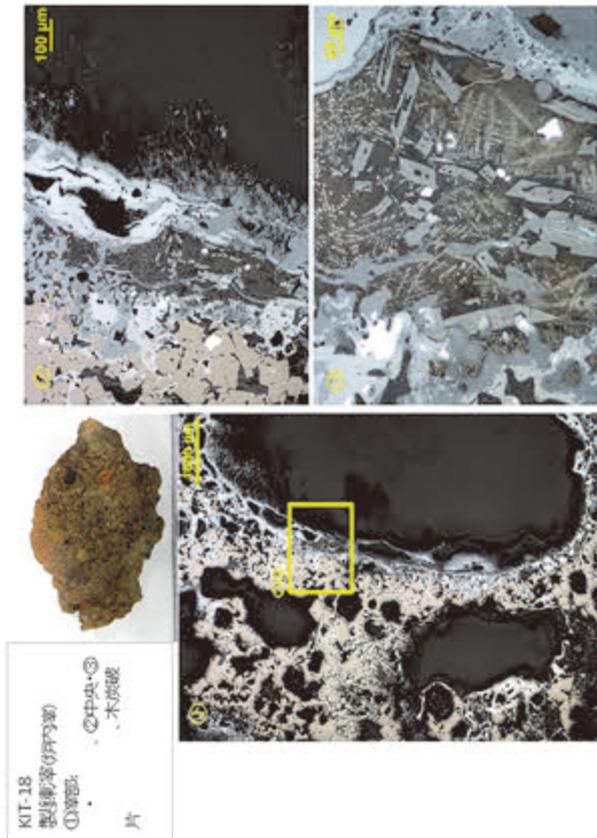
図版10 含鉄鉄滓の顕微鏡写真・EPMA測定



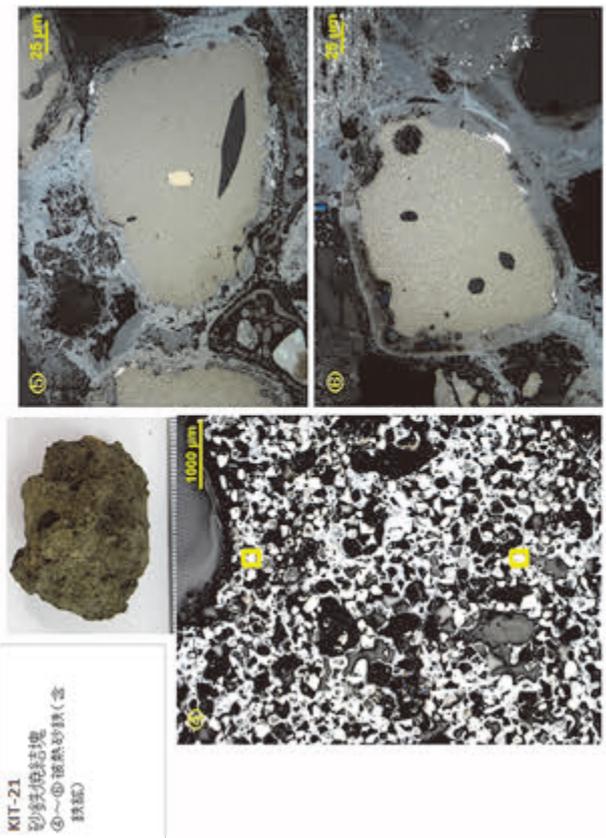
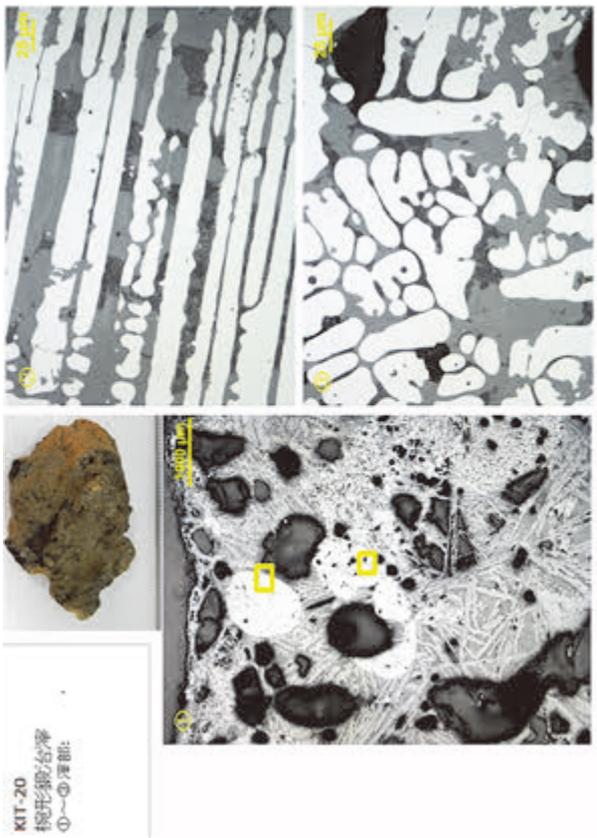
図版12 鉄塊系遺物の顕微鏡写真・EPMA分析



図版13 製錬滓・炉壁の顕微鏡写真



図版14 製法標準の顕微鏡写真



図版15 樹形銅・台澤・砂鉄結塊の顕微鏡写真

第9節 北山遺跡出土試料の自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

I. 自然科学分析の概要

北山遺跡から出土した炭化物（炭化材）について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定および樹種同定である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村，2003）。

2. 試料

試料は、遺構埋土などから採取された計14点の炭化材（試料No. 1～No.14）である。表1に試料の詳細を示し、写真図版に試料の写真を示す。

3. 方法

放射性炭素年代測定は、加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）により、次の手順で行った。1）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を除去、2）試料を燃焼させて二酸化炭素（ CO_2 ）を精製、3）水素で還元してグラファイト化、4）AMS装置で炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）および ^{14}C 濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定。

4. 測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（ ^{14}C ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に各試料の暦年較正結果（較正曲線）、図2に暦年較正年代マルチプロット図を示す。

(1) δ （デルタ） ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 （‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素（ ^{14}C ）年代測定値（BP：Before Physics）

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在（AD 1950年基点）から何年かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差（±）は1 σ （シグマ） σ （68.27%確率）である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値を併記した。

(3) 暦年代（Calendar Years：cal BC/AD, cal：calibratedの略）

放射性炭素年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正した値。暦年代較正には、年代既知の

樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値などから作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。なお、暦年較正結果がAD 1950年以降にのびる試料（No.1, No.2, No.9）については、Post-bomb atmospheric NH2（核実験後の北半球における較正曲線データ）を使用した。

暦年代（較正年代）は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ （68.27%確率）と2 σ （95.45%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

5. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、試料No.1では285±20年BP、No.2では210±20年BP、No.3では305±20年BP、No.4では620±20年BP、No.5では555±20年BP、No.6では335±20年BP、No.7では640±20年BP、No.8では335±200年BP、No.9では250±20年BP、No.10では1280±20年BP、No.11では8930±30年BP、No.12では24650±80年BP、No.13では615±20年BP、No.14では610±20年BPの年代値が得られた。各試料の暦年代の範囲を暦年較正年代マルチプロット図（図2）に示す。

なお、樹木（炭化材）による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」。日本第四紀学会，p.3-20。
中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。同成社，p.301-322。
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), p.337-360。
Hua, Q. et al. (2021) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2019. Radiocarbon, 64(4), p.723-745。
Paula J Reimer et al. (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p.725-757。

III. 炭化材の樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的性質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、放射性炭素年代測定に用いられた炭化材のうち、No.10（土坑60号）の1点である。

3. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。1）試料を洗浄して付着した異物を除去、2）試料を割折して木材の基本的三断面（横断面：

木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）を作成、3）落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定。

4. 結果

樹種同定の結果、No.10の炭化材はコナラ属アカガシ亜属と同定された。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記載し、写真図版に顕微鏡写真を示す。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シ

ラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。

5. 所見

樹種同定の結果、No.10（土坑60号）の炭化材はコナラ属アカガシ亜属と同定された。コナラ属アカガシ亜属（カシ類）は、照葉樹林の主要構成要素であり、強靱で弾力に富むことから建築部材や農耕具などに用いられる。また、火力が強く火持ちが良いことから燃料材（薪炭材）としても優良であり、種実（ドングリ）は食用になる。

文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土木製品用材データベース。海青社、449p.

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.

表1 北山遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. PED-	試料詳細	種類	前処理 測定法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代:年BP (暦年校正用)	暦年代 (較正年代) : cal-	
							1 σ (68.27%確率)	2 σ (95.45%確率)
1	53481	土坑46号	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.20 ±0.19	285±20 (284±19)	AD 1527-1552 (38.61%) AD 1633-1649 (29.66%)	AD 1521-1578 (54.41%) AD 1585-1586 (0.15%) AD 1622-1659 (39.50%) AD 1949-1953 (1.39%)
2	53482	土坑47号 南東	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.22 ±0.18	210±20 (211±19)	AD 1656-1672 (23.03%) AD 1744-1745 (0.39%) AD 1746-1747 (0.33%) AD 1766-1772 (5.24%) AD 1778-1798 (32.21%) AD 1942-1943 (1.35%) AD 1944-1947 (2.44%) AD 1948-1951 (3.29%)	AD 1648-1683 (31.74%) AD 1737-1755 (8.47%) AD 1761-1801 (43.92%) AD 1930-1932 (0.22%) AD 1938-1954 (11.11%)
3	53483	土坑49号	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.92 ±0.21	305±20 (304±18)	AD 1524-1561 (47.61%) AD 1564-1572 (7.87%) AD 1630-1641 (12.78%)	AD 1510-1592 (73.56%) AD 1619-1646 (21.89%)
4	53484	土坑18号 骨周辺	炭化材	AAA処理 AMS法	-21.12 ±0.19	620±20 (621±19)	AD 1304-1324 (32.98%) AD 1354-1366 (17.82%) AD 1381-1393 (17.46%)	AD 1300-1329 (39.23%) AD 1334-1371 (33.16%) AD 1377-1396 (23.07%)
5	53485	土坑16号	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.23 ±0.21	555±20 (553±19)	AD 1329-1335 (10.13%) AD 1396-1420 (58.14%)	AD 1325-1353 (31.20%) AD 1394-1423 (64.25%)
6	53486	土坑42号	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.53 ±0.20	335±20 (334±18)	AD 1504-1526 (18.54%) AD 1554-1597 (36.12%) AD 1617-1633 (13.60%)	AD 1488-1531 (27.72%) AD 1537-1636 (67.73%)
7	53487	土坑39号	炭化材	AAA処理 AMS法	-29.22 ±0.19	640±20 (638±19)	AD 1301-1319 (30.77%) AD 1359-1370 (17.89%) AD 1378-1389 (19.61%)	AD 1292-1326 (40.90%) AD 1353-1394 (54.55%)
8	53488	土坑48号	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.17 ±0.21	335±20 (337±19)	AD 1499-1526 (20.97%) AD 1557-1600 (34.24%) AD 1616-1632 (13.06%)	AD 1481-1530 (30.39%) AD 1538-1635 (65.06%)
9	53489	炉跡5号	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.51 ±0.18	250±20 (251±19)	AD 1642-1661 (60.74%) AD 1788-1792 (7.53%)	AD 1530-1538 (2.26%) AD 1636-1667 (71.28%) AD 1782-1796 (17.35%) AD 1945-1945 (0.13%) AD 1948-1953 (4.43%)
10	53490	土坑60号	炭化材	AAA処理 AMS法	-28.03 ±0.17	1280±20 (1281±19)	AD 679-706 (31.65%) AD 726-749 (23.05%) AD 758-768 (11.19%) AD 771-773 (2.37%)	AD 673-709 (38.67%) AD 711-774 (56.78%)
11	53491	土坑1号 土器内	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.96 ±0.18	8930±30 (8929±29)	BC 8235-8171 (32.52%) BC 8114-8089 (12.81%) BC 8077-8061 (6.71%) BC 8041-8011 (16.22%)	BC 8246-8161 (36.84%) BC 8136-8133 (0.28%) BC 8126-7960 (58.33%)
12	53492	溝状遺構 4号	炭化材	AAA処理 AMS法	-24.57 ±0.20	24650±80 (24647±78)	BC 27062-26839 (68.27%)	BC 27167-26776 (95.45%)
13	53493	溝状遺構 5号	炭化材	AAA処理 AMS法	-27.28 ±0.19	615±20 (613±19)	AD 1305-1327 (30.82%) AD 1348-1364 (21.72%) AD 1384-1395 (15.73%)	AD 1302-1368 (74.66%) AD 1379-1398 (20.79%)
14	53494	炉跡3号	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.72 ±0.19	610±20 (609±19)	AD 1307-1327 (28.89%) AD 1344-1363 (25.67%) AD 1386-1395 (13.71%)	AD 1303-1367 (75.43%) AD 1380-1398 (20.02%)

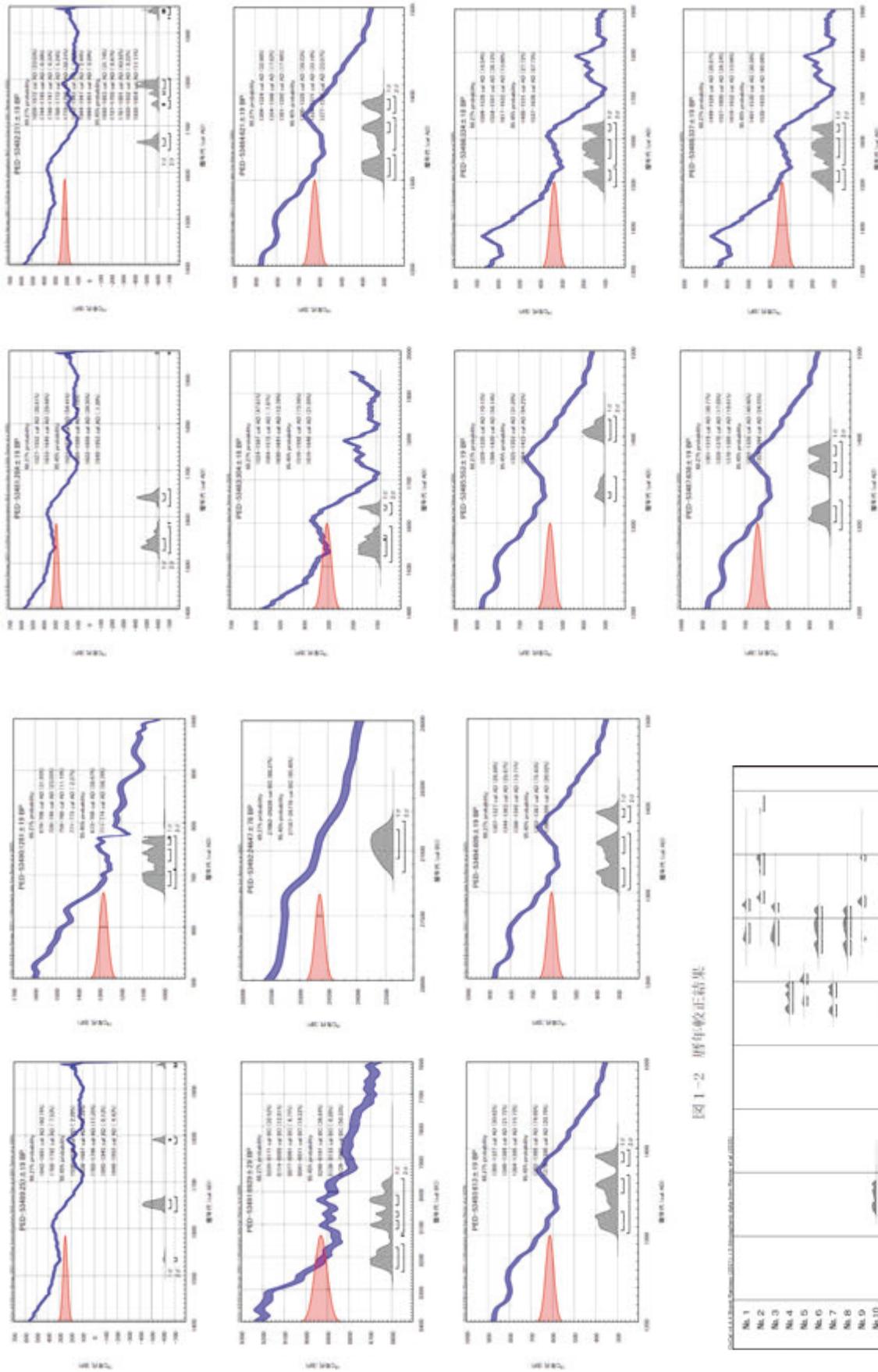
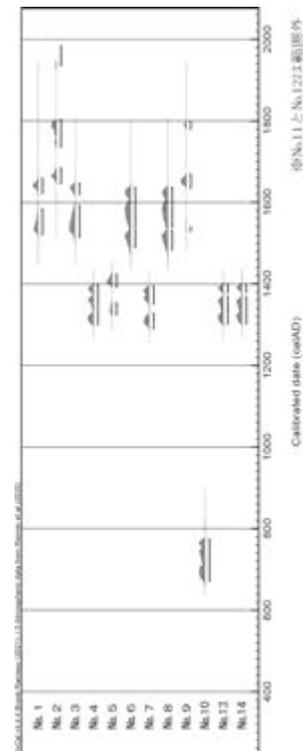


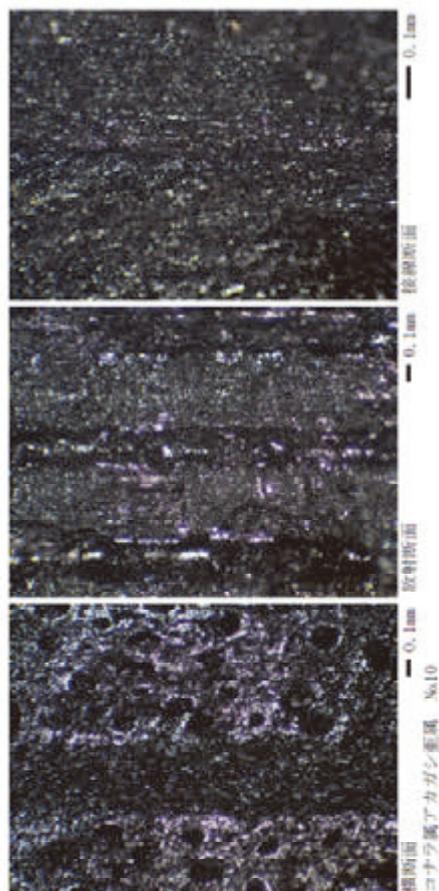
図1-1 暦年較正結果

図1-2 暦年較正結果



※No.11とNo.12は範囲外

図2 暦年較正年代マッピングプロット図



北山遺跡の木材写真



北山遺跡の試料写真

第10節 北山遺跡出土試料の自然科学分析（植物珪酸体分析，リン・カルシウム分析）

株式会社古環境研究所

1. はじめに

北山遺跡は、鹿児島県阿久根市山下字北山に位置し、高松川左岸の標高約33mの台地の北側縁辺に立地する。

今回の分析調査では、溝跡で採取された土壌試料について植物珪酸体分析を実施し、当時の農耕（畑跡）と周辺環境を検討する。また、土坑で採取された土壌試料についてリン・カルシウム分析を実施し、土坑の用途を検討する。

2. 植物珪酸体分析

(1) 試料

試料は、北山遺跡で検出された溝跡SD15の土層断面から採取された土壌4点（上位より溝状遺構3号①～④）である

(2) 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて次の手順で行う。（1）試料を恒温乾燥機（STAC-5100，島津理化）で105℃・24時間乾燥（絶乾）する。（2）電子天秤（Secura，SARTORIUS）で試料約1gに対し直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）する。（3）電気炉（MPN-2N，島津理化）で有機物の燃焼処理（550℃・6時間）を行う。（4）超音波洗浄機（SUS-100，島津理化）で超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）により粒子を分散

する。（5）沈底法により20 μ m以下の微粒子を除去する。（6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。

同定は、おもにイネ科植物の機動細胞由来する植物珪酸体を対象とし、400倍の偏光顕微鏡（OPTIPHOTO-POL，Nikon）下で行う。計数は、プレパラート全面を走査し、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行う。計数結果から、試料1g中の植物珪酸体個数を算出する（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて求める）。主な分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出する。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に捉えることができる（杉山，2000）。

(3) 結果

1) 分類群

産出した植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1，図1に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を図版1に示す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって異なることから、検出密度の評価は分類群によって異なる。そこで、植物珪酸体群集の占有状況を比較するために、植物体生産量（推定）を算出した。

[イネ科]

イネ，ススキ属型，ウシクサ族型，シバ属型

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕

未分類等

〔樹木起源〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、未分類等

2) 植物珪酸体の産出状況

各試料における植物珪酸体の産出状況を以下に記す。

溝状遺構 3号①では、植物珪酸体総数が46,300 個/gと多産する。イネ、ススキ属型、クスノキ科が非常に高い密度であり、次いでウシクサ族型、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）が比較的高い密度である。他にはシバ属型、メダケ節型、ネザサ節型、マンサク科（イスノキ属）が産出するが、やや低い密度である。

溝状遺構 3号②では、ここでも植物珪酸体総数が46,300 個/gと多産する。ススキ属型とクスノキ科が高い密度であり、次いでイネ、ウシクサ族型、シバ属型、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）が比較的高い密度である。他にはメダケ節型、ネザサ節型がやや低い密度である。

溝状遺構 3号③では、植物珪酸体総数が20,000個/g弱とやや少ない。イネ、ススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）が産出する。ブナ科（シイ属）とクスノキ科が比較的高い密度である以外はいずれもやや低い密度であり、優占種は認められない。

溝状遺構 3号④では、植物珪酸体総数が43,300 個/gと多産する。ススキ属型、ウシクサ族型、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）、クスノキ科が比較的高い密度である。他にはイネ、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、マンサク科（イスノキ属）が産出するが、やや低い密度である。

(4) 考察

1) 稲作跡の検討

植物珪酸体分析において稲作跡の探査や検証を行うにあたっては、通常、イネの植物珪酸体が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、当該地点で稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。なお、畑稲作（陸稲栽培）では連作障害や地力の低下を避けるために、輪作や休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000~2,000個/g程度である場合が多い（杉山, 2000）。これらを参考にして、稲作の可能性について検討する。

溝状遺構 3号①では、イネが4,000個/gの高い密度で検出されている。稲作跡の判断基準値である3,000個/gを超過していることから、溝状遺構 3号①が採取された堆積層の時期は、調査地近辺において稲作が営まれていたと判断される。なお、遺跡の立地からみてここでは畑稲作（陸稲栽培）の可能性が想定される。溝状遺構 3号②と溝状遺構 3号③からは、それぞれイネが1,800個/g、1,200個/gとやや低い密度

で検出されている。これらの堆積層の時期も近辺で畑作が営まれていたならば、溝状遺構 3号①と同様にここでも陸稲が栽培されていた可能性がある。溝状遺構 3号④では、イネは900個/gと低い密度である。当該層の時期も調査地近傍で稲作が行われていた可能性はあるものの、密度が低いことから上層あるいは他所からイネの植物珪酸体が混入したことも否定できない。

2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含む）、エノコログサ属型（アワが含む）、キビ属型（キビが含む）、ジュズダマ属（ハトムギが含む）、オヒシバ属（シコクビエが含む）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。本遺跡の試料からはいずれの植物珪酸体も産出しなかったことから、調査地近傍において稲作以外の農耕（畑作）が営まれていた痕跡を認めることはできない。ただし、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

3) 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。そこで、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。また、タケ亜科植物（竹・笹類）のうち、ササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節等）は比較的寒冷な地域に、メダケ属（ネザサ節やメダケ節等）は比較的温暖な地域に分布している（室井, 1960）。これらを参考にして、周辺植生・環境について検討する。

溝状遺構 3号①と溝状遺構 3号②は、密度の違いはあるもののほぼ同様の植物珪酸体組成である。いずれもススキ属型とクスノキ科が優勢であり、ウシクサ族型とミヤコザサ節型がやや多く、他にシバ属型、メダケ節型、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）が伴われる。こうしたことから、両試料が採取された堆積層の時期の調査地は乾いた環境であり、近隣にはススキ属、ウシクサ族などの草本植物が、周辺にはクスノキ科、シイ属などのブナ科、イスノキ属などのマンサク科の照葉樹が繁茂していたと推定される。溝状遺構 3号④では、ススキ属型、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）、クスノキ科が比較的多い。したがって、当該試料採取された層の時期も調査地は乾いた環境であり、近隣にはススキ属やウシクサ族などの草本とミヤコザサ節などのササ類が、周辺にはシイ属などのブナ科、クスノキ科などの照葉樹が生育していたと推定される。溝状遺構 3号③では植物珪酸体の産出量はやや少なく、優占する分類群は認められない。このことから、当該試料が採取された層の時期の調査地は、土壌の堆積速度が速かったか、イネ科草本植物の生育には適さない環境であったと考えられる。なお、主な分類群の推定生産量をみると、各試料ともタケ亜科植物はいずれも少量である。このことから、当時の気候（気温）については言及できない。

3. リン・カルシウム分析

(1) 試料

試料は、北山遺跡で検出された土坑 1号から採取された土壌試料 2

点(土坑1号②, 土坑1号③)である。

(2) 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法, カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法(土壌環境分析法編集委員会, 1997, 土壌標準分析・測定法委員会, 1986)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後, 土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分け。この篩通過試料を風乾細土試料とし, 分析に供する。また, 風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し, 0.5mm篩を全通させ, 粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については, 105℃で4時間乾燥し, 分析試料水分を求める。

2) リン酸, カルシウム含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し, はじめに硝酸(HNO_3)約10mlを加えて加熱分解する。放冷後, 過塩素酸(HClO_4)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後, 水で100mlに定容し, ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し, リン酸発色液を加えて分光光度計(UV-1800型番)によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。別ころ液の一定量を試験管に採取し, 干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計(Z-2000)によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5 mg/g)とカルシウム含量(CaO mg/g)を求める。

(3) 結果

野外土性(ペドロジー学会編, 1997)及び土色, リン酸, カルシウム分析結果を表2に示す。

リン酸含量はNo. 5で0.60mg/gであり, No. 6で1.13mg/gである。カルシウム含量は, No. 5で2.31mg/g, No. 6で2.82mg/gである。リン酸含量, カルシウム含量ともに, No. 6で多く保持される。

(4) 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり, 動植物中に普遍的に含まれる元素であるが, 特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され, 土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では, 非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため, 火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量, いわゆる天然賦存量については, いくつかの報告事例があるが(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991), これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また, 人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか, 1991)という報告例があり, 当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では3.0mg/gを越える場合が多い。一方, カルシウムの天然賦存量は普通1~50mg/g(藤貫, 1979)といわれ, 含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは, リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は, 遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが, 天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後, その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し, その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えら

れるからである。

今回の分析調査では, 両試料で上述したリン酸の天然賦存量である3.0mg/gに満たない試料である。またカルシウム含量においても同様に天然賦存量に満たない試料である。分析試料と比較すると, リン酸含量ではNo. 6でNo. 5の2倍量含有しており, カルシウム含量においても多く保持される。この点から, 遺体埋納などの影響により, 成分が集積した可能性も否定できない。

よって, 今回の分析結果のみでは土坑1号において, 遺体埋納などの人為による影響があったかどうかの検証は, 具体的な言及が難しい。今後, 比較試料を分析することや, 腐植量や窒素量等の分析項目追加や, 他の分析項目の結果と併せて再検証することが望まれる。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 28-36.
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M, 1980, 土壌の化学岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・陽 捷行訳学会出版センター, 309p.
- Bowen, H. J. M., 1983, 環境無機化学元素の循環と生化学, 浅見輝男・茅野充男訳博友社, 297p.
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法博友社, 427p.
- 土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法博友社, 354p.
- 藤貫 正, 1979, カルシウム地質調査所化学分析法, 52, 57-61.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -, 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -, 考古学と自然科学, 17, 73-85.
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新編標準土色帖.
- ペドロジー学会編, 1997, 土壌調査ハンドブック改訂版博友社, 169p.
- 杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史第四紀研究, 38(2) 109-123.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動顕微鏡珪酸体の形態によるタクソ科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -, 考古学と自然科学, 19, 69-84.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志, 1988, 機動顕微鏡珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 - 古代農耕普及のための基礎資料として -, 考古学と自然科学, 20, 81-92.

表1 北山遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料 SD15			
		①	②	③	④
イネ科	Gramineae				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	40	18	12	9
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	63	42	12	27
ウシクサ族型	Andropogoneae type	29	24	6	18
シバ属型	<i>Zoysia</i> type	6	18		
タケ亜科	Bambusoideae				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	11	18	6	18
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6	6		9
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.			6	9
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	23	36	12	27
未分類等	Others	40	42	12	27
その他のイネ科	Others				
未分類等	Others	137	133	84	181
樹木起源	Arboreal				
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	17	12	12	27
クスノキ科	Lauraceae	57	48	18	27
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	11	18	6	9
その他	Others	23	48	12	45
植物珪酸体総数	Total	463	463	198	433

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.18	0.53	0.35	0.26
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.78	0.52	0.15	0.33
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.13	0.21	0.07	0.21
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03	0.03		0.04
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.			0.05	0.07
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.07	0.11	0.04	0.08

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	57	60	46	52
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	13	8		11
チャマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.			30	17
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	31	31	24	20
メダケ率	Medake ratio	69	69	46	63

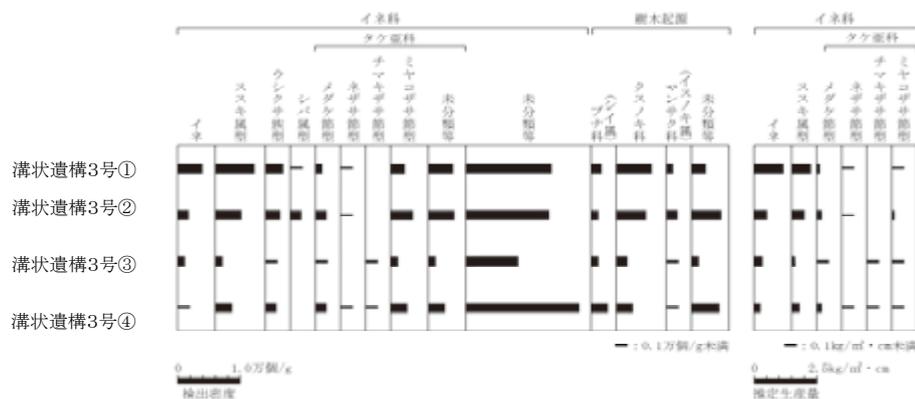


図1 植物珪酸体分析結果

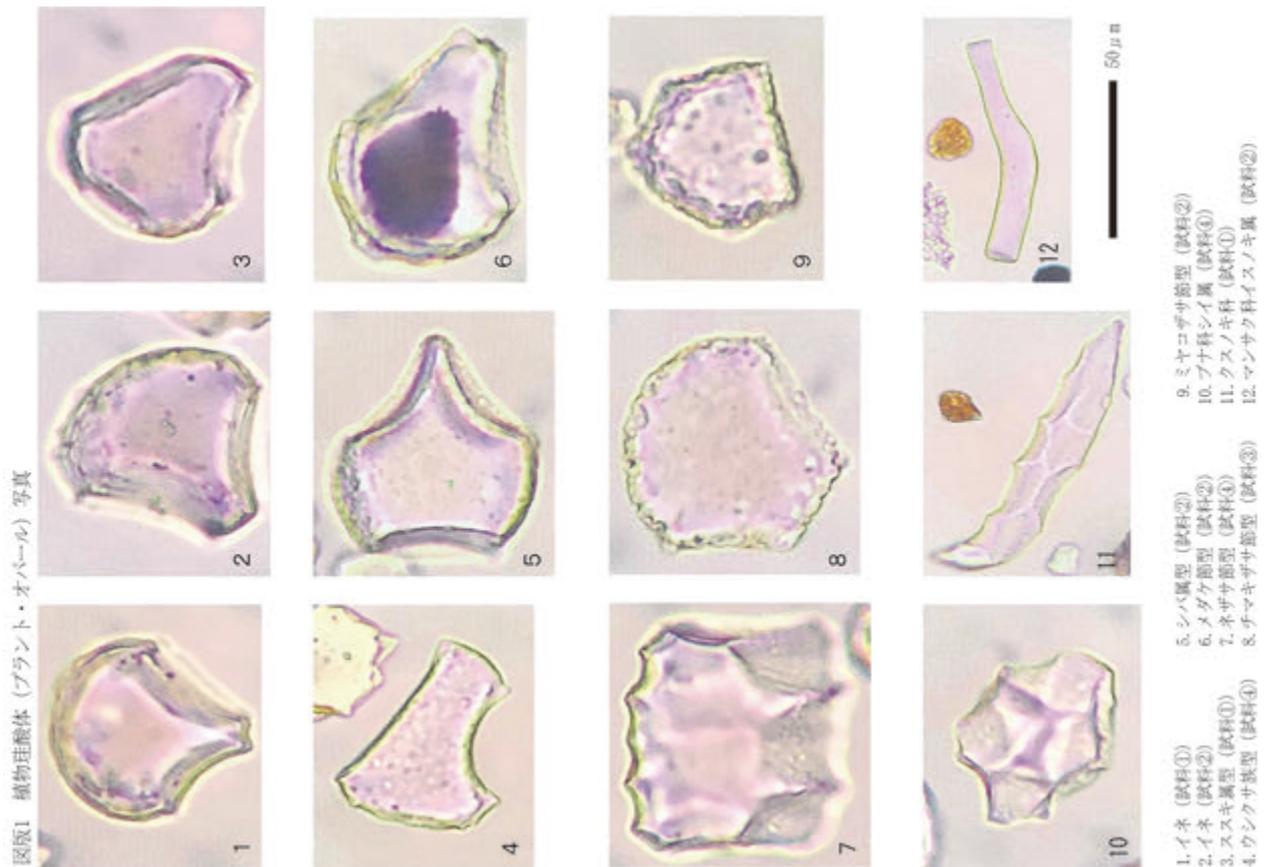
表2 リン酸・カルシウム分析結果

試料名	土色	土性	全リン酸 (mg/g)	全カルシウム (mg/g)
土坑1号②土壌	10YR4/3 にぶい黄褐色	CL	0.60	2.31
土坑1号③土壌	10YR4/4 褐色	CL	1.13	2.82

注. (1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

(2)土性:土壌調査ハンドブック改訂版(日本ペドロジー学会編, 1997)の野外土性による。

CL... 堆積土(粘土15~25%、シルト20~45%、砂30~65%)



第11節 北山遺跡におけるX線回折装置による遺構内 検出白色物質の分析

鹿児島県工業技術センター

1 試料

試料は、H-45区の土坑13号の遺構内埋土2層及び土坑5号遺構内埋土●層から検出された白色物質である。本試料は、中世の土坑中から特徴的なものとして検出されたものである。遺構調査の際にサンプルとして採取し保管していたものである。肉眼観察では、土壌化が進んでいるように見受けられる。

白色の物質として想定されるものには、漆喰・石灰・骨片などがある。本試料は、当遺跡・当遺構の性格を考察するうえで重要なものであるため、理化学分析などを行うことで、遺跡の評価にもつながる可能性があると考えられた。そのため、鹿児島県立埋蔵文化財センターの分析室担当の隈元俊一文化財主事にも御教示をいただきながら、分析方法について検討を進めた。その結果、X線回折分析及び蛍光X線分析が最適であることが確認された。

この分析を行う方法のひとつとして、鹿児島県工業技術センターに設備があるため、同センター職員の協力を得ながら、今回の分析を行うこととなった。

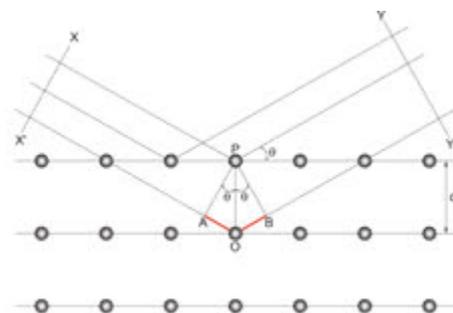
分析は、令和5年11月15日に、工業技術センターへ試料を持ち込んで行った。

2 分析方法

(1) X線回折分析の原理

原子が規則正しく配列している物質に、原子の間隔と同程度の波長(0.5Å~3Å)を持つX線が入射すると、各原子に所属する電子によりX線が散乱される。散乱したX線は干渉し合い、特定の方向で強め合う。これがX線の回折現象である。マックス・フォン・ラウエがX線の回折現象を発見した翌年、1913年にウィリアム・ヘンリー・ブラッグ父子は、いわゆるブラッグの式を発表し、X線回折が起こる条件を理論的に明らかにした。(第1図)。

第1図では、第一格子面で散乱されるX線と、第二格子面で散乱されるX線の行路差は、一般に $2d \sin \theta$ になる。



第1図 ブラッグの法則

ここで d は、格子面間隔、 θ はブラッグ角、 2θ は回折角(入射X線方向と回折X線方向とのなす角度)である。こ

の行路差が、入射X線の波長 (λ :ラムダ) の整数 (n) 倍のとき、山と山が重なり強め合う。即ち、 $2d \sin \theta = n \lambda$ を満たす方向でのみ回折X線が観察される。これをブラッグの式という。この式から理解されるように、既知波長 λ の入射X線を物質に入射し、回折角 2θ とそのX線強度を測定することによって、X線回折パターンを得ることができる。

X線回折法のうち、多結晶体を試料として扱うX線回折法が、粉末X線回折法である。通常固体物質は何らかの結晶性を有しており、完全な非晶質であることはまれである。したがって、粉末X線回折法に限っても、広範な物質が測定対象となる。粉末X線回折法により得られたX線回折パターンは、横軸が回折角度 (2θ)、縦軸が回折強度 (CPS) として表される。回折角度 2θ は、物質の格子面間隔 d に、回折角度は原子や分子の並び具合と原子種に依存する。また、ピークの幅は、結晶粒の大きさや結晶のゆがみなどに依存する、結晶性によって決定する。これらの情報を組み合わせることで、様々な分析を行うことができる。

粉末X線回折分析法の代表的な分析手法である定性分析は、実測した回折パターンを既知物質の回折パターンと比較することにより、結晶相を同定する。X線回折パターンの形状は結晶を構成する原子や分子の配列に依存するため、構造が異なれば回折角度や強度が変化するためである。分析を行う物質と、既知物質のX線回折パターンを比較して、角ピークの位置や強度比が一致するかを確認し、一致すればこれら2つの物質が同じであるとみなす。これを同定という。同定には、回折パターンを集めたデータベースを用いる事が多い。

(2) 粉末X線回折パターンの測定

装置の概略は以下のとおりである。

X線回折装置

型式: Ultima IV

メーカー: (株) リガク

測定条件: (線源) X線管球Cuターゲット,

(検出器) シンチレーションカウンター

分析にあたって、試料から適量 (1 cm角程度) をとり、乳鉢を使って粉碎したものを試料として分析を行った。

(3) 蛍光X線による成分分析

装置の概略は以下のとおりである。

走査型蛍光X線分析装置

型式: ZSX Primus IV

メーカー: (株) リガク

測定条件: SQX分析, 分析径 = $\phi 10$ mm

分析にあたって、試料から適量 (1 cm角程度) をとり、乳鉢を使って粉碎したものを試料として分析を行った。

3 結果

粉末X線回折結果、及び蛍光X線による成分分析の分析結果を第2図に示す。

第2図(a)により、土坑13号からはMuscovite (雲母), Quartz (石英), Anorthoclase (長石) が検出された。また、表1(a)により、SiO₂ (二酸化酸化ケイ素) 54.8%, Al₂O₃ (酸化アルミニウム) 31.8%, Fe₂O₃ (酸化第二鉄) 6.97% 検出された。これは、土壌成分に近いものであり、土壌化が進んでいると考えられる。

第2図(b)により、土坑5号からはQuartz (石英) のみ検出され、 $2\theta = 20^\circ \sim 30^\circ$ 付近に、ゆるやかな盛り上がりが見られた。これは、非晶質成分を表すものである。表1(b)により、SiO₂ 56%, Al₂O₃ 6.26%, Fe₂O₃ 2.87%のほかに、P₂O₅ (五酸化二リン) 14.8%, と CaO (酸化カルシウム・生石灰) 18% 検出された。石英と、二酸化酸化ケイ素, 酸化アルミニウム, 酸化第二鉄は(a)と同様に土壌成分と考えられるが、(b)ではそのほかに非晶質成分と五酸化二リン, 酸化カルシウムほか検出された。

4 考察

(a)土坑13号で採取された白色物質は、土壌化が進んでいることが判明した。そのため、分析結果も判然とはせず、不明である。

(b)土坑5号で採取された白色物質は、カルシウムが多いため、骨であったものが土壌化した可能性があると考えられる。骨が人骨か動物骨であるかは、明らかではない。ただし、土坑18号からは、四肢動物とみられる頭蓋骨が出土しているため、本試料も同類のもの可能性がある。

漆喰の場合は、炭酸カルシウム (CaCO₃) が多く含まれるが、本試料にはそれがみられない。そのため、本試料は漆喰ではない可能性が高い。

現状では可能性の一つにしかすぎないため、今後は脂肪酸分析やDNA分析などを行うことによってより確実性を高める方法もある。ただし、試料の土壌化が進んでいるため、これ以上の分析は困難であることが予想される。

表1 成分分析結果 (分析日: 2023-11-15 試料タイプ: 粉末)

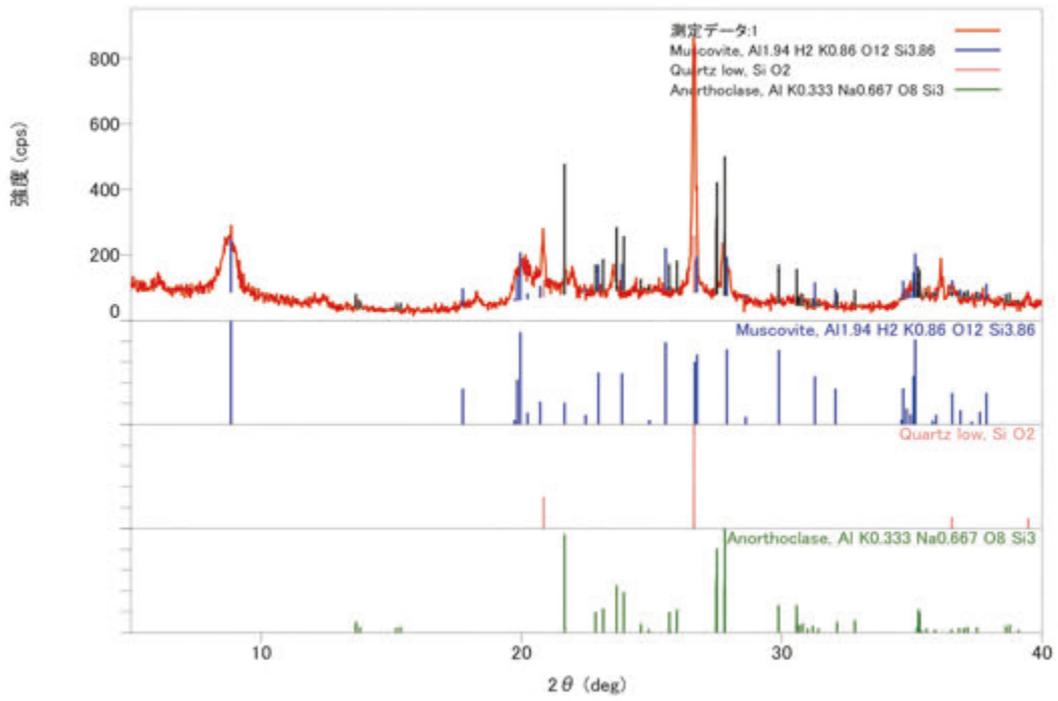
試料(a) 土坑13号

No.	成分名	分析値	単位
1	Na ₂ O	0.744	mass%
2	MgO	0.843	mass%
3	Al ₂ O ₃	31.8	mass%
4	SiO ₂	54.8	mass%
5	P ₂ O ₅	0.235	mass%
6	SO ₃	0.0955	mass%
7	Cl	0.0261	mass%
8	K ₂ O	1.55	mass%
9	CaO	1.55	mass%
10	TiO ₂	1.01	mass%
11	MnO	0.28	mass%
12	Fe ₂ O ₃	6.97	mass%
13	ZnO	0.0182	mass%
14	Rb ₂ O	0.0118	mass%
15	SrO	0.0308	mass%
16	Y ₂ O ₃	0.007	mass%
17	ZrO ₂	0.0294	mass%

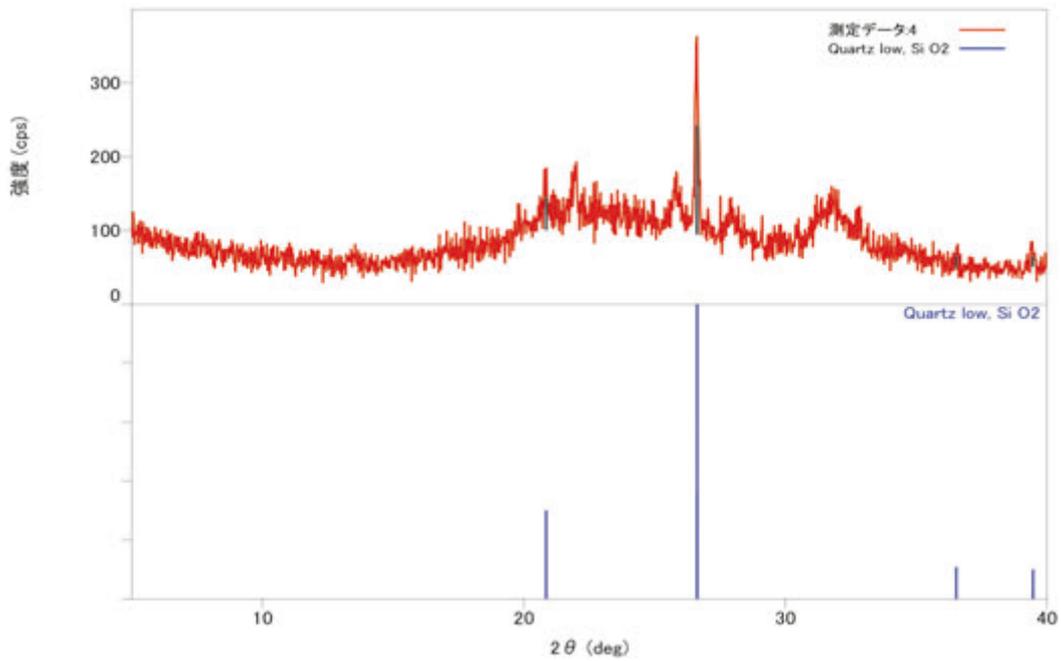
試料(b) 土坑5号

No.	成分名	分析値	単位
1	MgO	0.217	mass%
2	Al ₂ O ₃	6.26	mass%
3	SiO ₂	56	mass%
4	P ₂ O ₅	14.8	mass%
5	SO ₃	0.148	mass%
6	K ₂ O	0.475	mass%
7	CaO	18	mass%
8	MnO	0.438	mass%
9	Fe ₂ O ₃	2.87	mass%
10	CuO	0.117	mass%
11	ZnO	0.506	mass%
12	SrO	0.173	mass%

第2図 X線回折結果



試料(b) 土坑5号



第Ⅵ章 総括

第1節 縄文時代

1 遺構

縄文時代の遺構は、集石5基、土坑1基、落とし穴2基が検出された。そのうち集石1～4号と土坑1号は、G・H-60・61区（以下a地点とする）に位置し、集石・土坑双方からⅤ類土器（政所式土器）が出土し、土坑1号からはほぼ完形に近い大型の土器が埋設されたかのように出土した。土坑1号採取の炭化物は、放射性年代測定の結果、8930±30年BPとⅤ類土器が製作された時期と一致している。さらにa地点からは他の縄文時代早期中葉の土器がⅢ・Ⅳ層から集中して出土した。こうしたことから、a地点の遺構は、当該期の遺構の可能性が非常に高いと考える。

やや離れた場所に位置する集石5号（D-65区、以下b地点とする）についてもa地点の遺構と関連する可能性が考えられる。炭化物の分析では江戸時代中期以降という結果だが、b地点に隣接するE-65区で縄文時代早期中葉の土器が出土し、a地点とb地点の間にあたるD～H-63～64区でも同様の土器が出土した。調査区全体で縄文時代早期中葉の土器が出土したのは、このa～b地点にかけての一带に偏って集中しており、60区よりも西側での出土は1つもない（第20図参照）。a～b地点の間には縄文時代の遺構は確認されなかったが、63・64区は大型の溝状遺構4号が南北に縦断しており、中世以降に大規模な土地改良が行われ、それ以前の遺構は失われている。E-64区（以下、c地点とする）では被熱した破碎礫が散乱して出土し、a～c地点で遺構や破碎礫が確認されたのは標高36.0～36.4mとほぼ同じ等高線にあたる。こうした遺物や地形、土地の状況等から、a地点～b地点（c地点含む）にかけての一带は、縄文時代早期中葉の時代に人々が生活根拠地としていた可能性が考えられる。

2 遺物

遺物の出土区は、土器・石器ともに調査区全体でまんべんなく広がっている。また、調査区内の複数箇所の中世の大型の溝状遺構が検出され、調査区西側では、近世以降の製鉄関連遺構として、現代には耕地として利用されるなど、古くから土地の改変やかく乱が繰り返されてきた地である。調査区北側のC・D区ではⅢ、Ⅳ層が見られず、西側の44～50区では表土の下はⅥ層（シラス）が広がるなど、Ⅲ、Ⅳ層が残存範囲は、限定されていた。このような中で、Ⅲ・Ⅳ層が残存状況がよい南側で、縄文時代早期中葉の土器が集中してみられたのが、前述したa地点からb地点にかけての区域である。この区域で出土した土器は、Ⅲ類土器（吉田式土器）、Ⅳ類

土器（別府原式土器）、Ⅴ類土器（政所式土器）、Ⅵ類土器（中原式土器1～5類）、Ⅶ類土器（その他縄文時代早期の土器）である。Ⅲ～Ⅶ類の土器は、この区域のみに偏って集中し、それ以外の土器はほぼ出土していない（第20図参照）。これらの土器は土地の改変の影響を受けずに、古くから埋蔵していた可能性が高いと考える。

また、土器を観察・分類する中で、県内に多い南九州貝殻文系土器とは系譜が異なる、県外出自の同時期の土器である、政所式、別府原式、中原式土器の割合が高いことが特徴であり、阿久根は古来から九州各地から人やものの行き来がさかんであったことをうかがわせる。特筆すべきは別府原式土器の出土である。宮崎県内で集中して出土している土器型式で、鹿児島県内での出土例は、市ノ原遺跡（いちき申木野市）、宇都上遺跡（志布志市）と著しく限定されている。市ノ原遺跡の出土例から川内川を通じて、内陸ルートで北薩地方に伝わってきた可能性も考えられるが、その確証はまだない。口縁部の貝殻刺突文、胴部に斜位の貝殻条痕文をもつなど、南九州貝殻文系土器の前平式土器との共通点があるが、別府原式土器は条痕がやや細く、底部の形状も異なるが、2つの土器が混同されている可能性も考えられ、前平式土器を再検証することで、鹿児島県出土の別府原式土器（または別府原タイプ）を確認することができると考え、検証していきたい。

縄文時代早期以外の土器では、Ⅷ類土器（塞ノ神B式土器）がH・I-45～46区で5点が出土し、Ⅺ類土器（西平式土器）も複数調査区全体で出土しているが、Ⅰ・Ⅱ層または中世の遺構内出土のものが多く含まれ、他から流れ込んだものとも考える。

また、石器についてはa・b地点のⅢ・Ⅳ層でも、黒曜石の石核や剥片、石斧がわずかに出土した程度で、生活の痕跡といえる状況は確認できなかった。遺跡全体で見ても集中している状況は確認できていない。なお、本遺跡出土の黒曜石の数量、特徴については、以下にまとめて掲載した。

黒曜石について

本遺跡出土の黒曜石を産地別に分類した。県内産以外にも九州各地から集められ、他の地域と交流の様子が伺える。産地・出土数・特徴を整理すると、以下の通りである。なお、第Ⅳ章第1節で紹介した石器以外の破片なども対象とした。

①日東系（鹿児島県大口市産・20点）

不純物を大量に含む、光沢のある黒色で、光を通すもの

②上牛鼻系（鹿児島県串木野東地区産・10点）

不純物を多く含む、光沢の少ない漆黒で、光をほとんど通さないもの

- ③腰岳系（佐賀県腰岳地区産・7点）
不純物が少ない，光沢のある黒色で，光を通すもの。
- ④桑木津留系（鹿児島県大口地区・4点）
不純物がほぼない，鉛色～黒色の半透明で，光をよく通すもの
- ⑤淀姫系（長崎県佐世保地区・2点）
不純物が少ない，青灰色で，光をほとんど通さないもの
- ⑥針尾島系（長崎県佐世保地区・1点）
不純物はほぼない，灰色～黒色で，光を通さないもの
- ⑦姫島系（大分県姫島地区・1点）
不純物がほぼない，灰色の半透明で，光をよく通すもの

第2節 古墳時代

本調査区では，古墳時代前期の東原式土器が少量出土したのみで，遺構は存在しなかった。土器は，畑の耕作でかなり摩耗している。同時期の遺構・遺物は，市道南西側に位置する令和3年度調査区で竪穴建物跡が2軒検出されている（財団セ2023）。また，北山遺跡西側に隣接する諏訪ノ前遺跡では，古墳時代前期の土器がまとめて出土している（財団セ2025）。一連の発掘調査から，古墳時代の遺構・遺物は，北山遺跡南西側を中心に存在することが明らかとなった。

第3節 古代

古代の遺物は，9世紀代の土師器，須恵器，甗，越州窯系青磁，土錘等が出土した。遺構は検出されなかったが，遺物組成をみると煮沸具，食膳具，貯蔵具，漁労具，紡錘車など生活に必要な道具が揃っており，かつ破片も大きいことから，付近に集落跡が存在したものと考えられる。遺物は，調査区の東西に分かれて出土した。これは，調査区中央がシラスまで削平されているため，遺物包含層が残存していなかったことが原因と考える。遺物は，中世以降の削平を免れた標高の低い地点に残存していた。そのため，古代の以降は地形の高い調査区中央に

存在していた可能性もある。

古代の遺構・遺物は，北山遺跡令和3年度調査区（財団セ2023），諏訪ノ前遺跡（財団セ2025）でも確認されている。どちらも9世紀前後の遺物が中心で，遺物組成は，本調査区に類似している。遺構は少なく，北山遺跡で土坑1基，諏訪ノ前遺跡で須恵器の埋甕1基が検出されている。遺構が少ない理由としては，地形の削平による消失のほか，古代の遺構の中心が，調査区より南側に存在していることが想定されている。

遺構から遺跡の性格を判断することは困難であるが，注目される遺物として越州窯系青磁，焼塩土器，刻書土師器がある。希少価値の高い越州窯系青磁や式辞層の存在を示す硯は，令和3年度調査区でも出土していることから，地方官衙に関する遺構が周辺に存在している可能性がある。

本遺跡周辺の波留・山下地区は，英祢駅の有力な比定地であり（池畑1991），西海道や駅家の発見が期待されていた。現在のところ，既存調査を含め英祢駅を証明する遺構は確認されていない。

第4節 中世

1 遺構の変遷

北山遺跡における中世の遺構は，13世紀後半から検出数が増え近世まで続く遺構もある。13～15世紀中頃の居住域（表参照）から，製鉄や畑地などへと変遷する状況がうかがえる。

地形や遺構の検出状況，遺物の出土状況から，大規模な開発が13世紀後半以降に行われていることが想定される。開発を進めていくにあたって最初に行われたと考えられるのが，溝による土地の区画である。今回報告を行った調査区では，大小8条の溝を検出した。溝は，13世紀後半から出現しほぼ同時期に造られている。掘立柱建物跡は，溝出現後の14世紀後半から集中して検出され

表 中世の遺構年代表

種類	遺構名	13c	14c	15c	16c	17c	18c
掘 建	掘立柱建物跡1号						
	掘立柱建物跡2号						
	掘立柱建物跡11号						
	掘立柱建物跡12号						
土 坑 等	竪穴建物1号						
	土坑5号						
	土坑11号						
	土坑13号						
	土坑18号						
	土坑19号						
	炉跡3号						
溝 状 遺 構	溝状遺構1号						
	溝状遺構2号						
	溝状遺構3号						
	溝状遺構4号						
	溝状遺構5号						
	溝状遺構6号						
	溝状遺構7号						
製 鉄	製鉄炉群						
	炉跡群						

ている。このことから、溝で土地区画を行った後、計画的な土地開発を行ったことが想定できる。

北山遺跡1（財団セ2023）で報告された調査区も同様の状況が見られる。この一帯を治めていたと考えられる莫祢（阿久根）氏が、阿久根市山下の台地全体を計画的に開発していたと考えることができる事例である。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、北山遺跡1で報告した掘立柱建物跡より規模が大きく、地形も高い場所にある。これらの違いから、身分の高い者が使用した可能性がある。

掘立柱建物跡1号内にある土坑2号は、深い土坑である。諏訪ノ前遺跡で検出されたトイレ遺構の特徴を列挙すると、

- ① 平面形がほぼ円形である
- ② 周囲の遺構に比べて深い
- ③ ほぼ垂直に掘られている
- ④ 最下部の埋土が粘土質である
- ⑤ 埋土色調が黒色もしくは褐灰色である

となる。土坑2号もこの条件に該当するが、科学分析を行っていないため、トイレ遺構として断定することはできなかった。掘立柱建物跡に伴う可能性がある遺構として、今後類似する遺構を検出した際は、科学分析を行い遺構の特性を把握することができる試料を採取する必要がある。

なお、形状だけ類似した特徴をもつ遺構が、中世で6基（土坑4・5・11・15・34号）、近世で1基（39号）確認されている。

14世紀後半以降に遺跡の状況が変化していくのは、北山遺跡1で報告した調査区と同様であり、この台地全体で大規模な開発を進めたことが想定される。

3 溝状遺構

北山遺跡の中世における土地利用の象徴的な遺構として溝状遺構が挙げられる。北山遺跡の43～76区において検出された溝状遺構は、合計8条である。すべてが同じ規格ではなく、形状等に違いがあることから区画としての機能とは別の機能を併せ持っていた可能性がある。

一つ目が、防御的な機能を併せ持つ溝状遺構である。1号と2号が該当する。1号は溝の底が箱堀の形状を、2号は葉研堀の形状を成している。1号と2号は、①溝の北側に主要な建物跡が見当たらない、②溝の南側に莫祢（阿久根）氏の居館が推定されていることから、南側の主要施設を守る防御施設としての機能をもっていたと考えられる。また、1号には階段状の登り口があり、1・2号ともに溝の端がスロープ状の構造をしている部分があることから、通路としての機能も併せもっていたと考えられる。

二つ目が、道としての機能を併せ持つ溝状遺構である。3号および4号が該当する。断面の形状が逆台形を成し、

そこからの立ち上がりも1・2号に比べて緩やかである。底面はやや広く硬化面がある。また、3号は1号にほぼ直交し、4号も調査範囲外であるため確認はできなかったが、1号にほぼ直交する形で交わると考えられる。

三つ目が、幅・深さともに規模が小さい溝状遺構である。5号が該当する。4号に直交するように造られているが、底面も狭く硬化している状況も見られなかったことから、排水用の溝としての機能をもっていた可能性がある。ただし水が流れたような痕跡は確認できなかったため、「排水路」とは断定できなかった。

6号と7号は、利用方法としては区画としての溝であると考えられるが、ほぼ直角に交わるという特徴を持っている。2つの溝には、他の溝では見られない特徴がある。6号は、土坑状のくぼみが底面に連続するため、道ではないと考える。この凹凸については、貯水用との見解もある。7号は、区画内の杭列に沿って掘られている。6号出土遺物は、東側に約50m離れた掘立柱建物跡12号内の遺物と接合している。このことから6・7号は、居住域を区画する溝と考えられる。

これらの溝は、溝として利用しなくなった後も、後世まで影響を及ぼしたことが推察される。一つは、周辺地割との関係である。溝跡があった場所は、現代の畑境と重なっている。溝による区画を基本とし13世紀以降に成立した方格地割が、現在まで引き継がれているためと考えられる。もう一つは、道として使用され続けた溝である。1号は溝としての機能を終えた後、地域住民への聞き取り等も含め、道として使われ続けたことを調査で把握している。昭和22（1947）年の空中写真でも道跡は確認することができ、国土地理院の地図でも、道としての標記がされている。

これらのことは、中世に行われた大規模な地割が、用途を変えたりしながらも長い年月にわたり引き継がれたことを示している。

4 中世の成果のまとめ

本遺跡は遺構・遺物の検討から、13世紀後半から大規模な開発が行われ始めたと考えられる。特に溝跡出現後の14世紀にピークがある。近隣遺跡として同台地上に位置する新城跡や諏訪ノ前遺跡と比較すると、台地の入口に位置し虎口状の遺構のある新城跡は防御施設として（財団セ2025）、北山遺跡は有力武家の居住域として（財団セ2023・2025）、諏訪ノ前遺跡は小規模な集落に加え信仰対象である神社周辺地域といった役割をそれぞれ担っていたと考えられる。新城跡と諏訪ノ前遺跡に挟まれた台地の中心にある遺跡として、北山遺跡の土地利用の変遷は重要である。

第5節 近世

近世として認定した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑9基である。土坑37号を除き、検出面はⅥ層上面で、中世以降の土地割（造成）の影響を受けているものと考えられる。掘立柱建物跡13号は、埋土に白色粒子を含むことなどから近世と判断した。当時の地表面は上位にあったと考えられ、柱穴（P1）の北側にさらに柱穴が伸びていた可能性は残る。梁行2間×桁行3間に中柱をもつ総柱建物跡であり、倉庫として利用されたと考えられる。柱穴埋土から17世紀後半～18世紀前半の武雄産中鉢が出土し、掘立柱建物跡を検出したG-72区～73区では、17世紀後半～18世紀前半を中心に18世紀代、19世紀代の陶磁器類が出土している。

土坑は、E～G-47～48区に集中する。土坑の用途等については第Ⅳ章第5節で述べたが、ここでは、土坑39号、土坑43号について追記する。土坑39号は、科学分析を行っていないものの、検出規模（平面形・径・深さ）や埋土の特徴が中世遺構の土坑2号（第Ⅴ章第4節）や諏訪ノ前遺跡（阿久根市）で検出したトイレ遺構と類似する。帰属時期に違いはあるが、製鉄関連の作業域（第187図）に隣接して設置されたトイレ遺構の可能性のあることを指摘したい。土坑43号は、土坑41号と同様、人為的に埋められており、土坑墓であった可能性が残る。

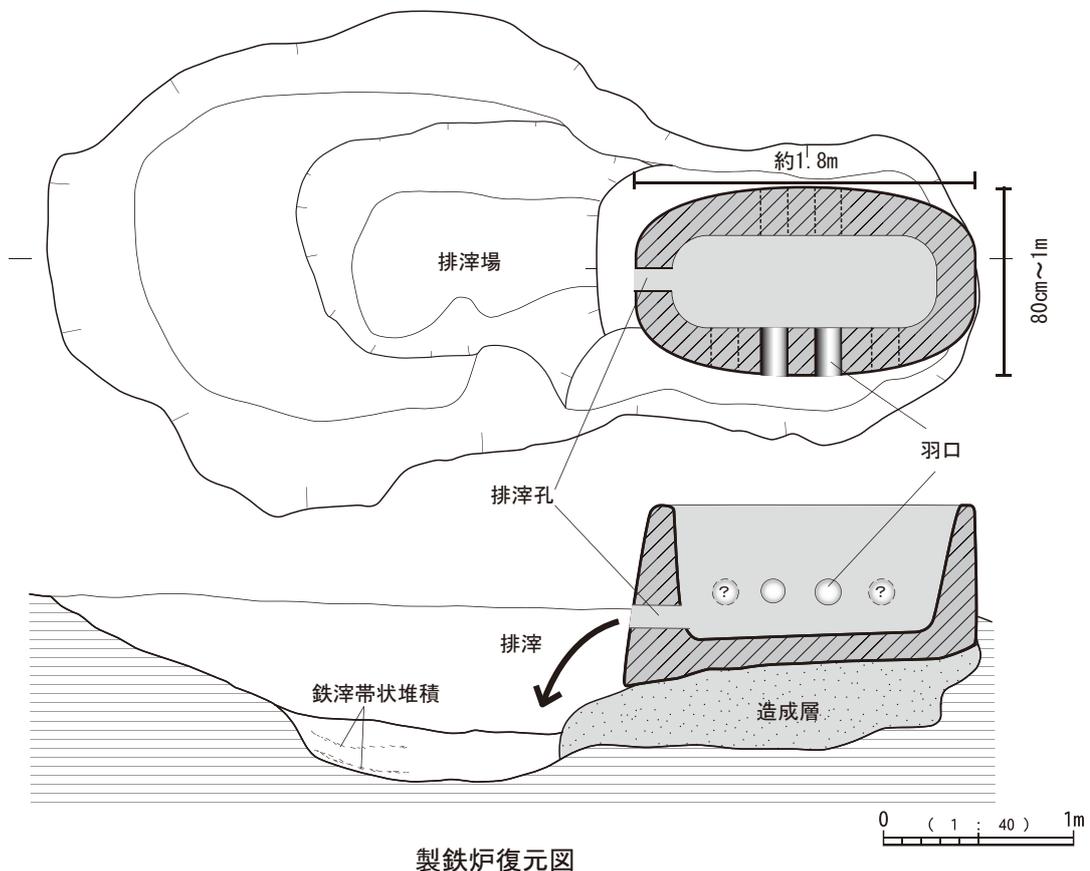
近世の包含層出土とした陶磁器は、時期不詳のものも

あるが、帰属時期は16世紀末（1580～1610年代）以降～19世紀代の年代幅に収まる。近世遺構の検出区に絞り込んだ場合、16世紀末（1590～1610年代）以降～18世紀後半の陶磁器類が出土している。なかでも17世紀後半～18世紀前半の陶磁器が主体を占める傾向があり、在地系陶器に加え、肥前系陶器（武雄産の鉢、肥前系挿鉢、内野山窯産の碗等の出土量が多い特徴が窺える。藩政期の元禄3（1690）年には、すべてとは断定できないものの、山下村の麓の機能が波留村に移されたことされており、陶磁器の出土量のピークが傍証となる可能性がある。

第6節 製鉄関連遺構

製鉄関連遺構は、16世紀後半から18世紀前半の製鉄炉4基、土坑12基、竪穴建物1基、硬化面1か所を確認した。これらの遺構は近接して配置されており、製鉄炉や倉庫、廃棄土坑からなる作業所を検出したと考えられる。最も古い製鉄炉は、1号製鉄炉でその年代は16世紀後半から17世紀初頭である。1号製鉄炉は規模が最も大きく、地面を掘り込んで湿気対策用の造成を行い、その直上に炉跡を構築している。

平面形は焼土面や炉壁の特徴から、長方形箱形炉に近いと想定した。羽口の痕跡は炉壁側面に2か所確認できる。羽口は、炉跡3・4号の鞆座を参考にすると、両側面から2か所以上設置していたと推測される。1号製鉄



炉の規模は、外壁で長さ約1.8、幅0.8mと推測した。(図参照)

2～4号製鉄炉は近世(17～18世紀前半)と考えられ、年代的に最も新しいのは3号製鉄炉である。近世の製鉄炉は、中世の製鉄炉に類似しているものの、1号製鉄炉に比べ小型化し、炉直下の造成層がみられなくなる。そのため、炉は4号製鉄炉を除き、土坑の床面直上に構築されている。また、炉の両側に鞆座を設置し、送風装置の改良を行っている。近世の製鉄炉は、中世後半の1号製鉄炉を地元で改良した形態と考えられる。

製鉄関連遺構の年代

遺構名	年代
1号製鉄炉	16世紀後半～17世紀初頭
2号製鉄炉	17世紀中頃～18世紀前半
3号製鉄炉	17世紀後半～18世紀前半
4号製鉄炉	16世紀末～17世紀後半
炉跡群	15世紀中頃～17世紀前半

原料は科学分析の結果、鹿児島由来の浜砂鉄である。砂鉄は本遺跡に近い西目海岸で採取可能である。調査区周辺には、明治時代まで鍛冶屋が住んでいたと言われており、製鉄炉が廃業した後も、小規模な鉄器生産が継続していたとみられる。

製鉄遺構群に隣接する炉跡調査区では、15世紀中頃～17世紀前半の炉跡を20基検出した。炉跡周辺で生活遺跡の出土がないことから、日常生活用の竈とは考えにくい。炉跡は燃焼部がドーム状で、煙道をもつ。埋土は、人為的に埋め戻されており、内部に炭化材が多数残っていた。炉跡の形態や炭化材が、薪炭材として利用される樹種であることから炭窯の機能を想定した。炉跡と製鉄炉の年代は一部重複するため、炉跡は製鉄及び鍛冶用の炭窯の可能性を指摘しておきたい。

本県で最も古い中近世の製鉄炉は、喜界町崩り遺跡で検出された12世紀代の製鉄炉である。この製鉄炉は、円形の堅形炉とされている(喜界町2018)。南九州本土では、南九州市厚地松山製鉄遺跡(知覧町2000)や都城市尾平野製鉄遺跡(都城市2023)で、18世紀後半～19世紀の石組製鉄炉が確認されている。石組製鉄炉は、山間部の溪谷沿いに位置し、水車動力を用いて送風を行う南九州特有の製鉄炉とされている。本遺跡の製鉄炉は、これまで検出事例のなかった中世後半から近世前半期の調査事例となり、立地や形態がこれまで確認されている製鉄炉とは異なっている。製鉄炉の出自については、今後の検討課題であるが、中世から近世にかけての製鉄技術を検討する上で重要な調査成果である。

参考文献

- 阿久根市1974『阿久根市誌』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『市ノ原遺跡(第1地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(49)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『フミカキ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(74)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(169)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2020『宇都上遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(204)
- (公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2021『山ノ段遺跡』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(36)
- 桑畑光博2021「別府原式土器考」『南九州縄文通信』No.23
- (公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2023『北山遺跡1』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(51)
- 堂込秀人2024「中世南九州の堅穴建物跡と集落構造への考察」『南九州城郭研究』第4号
- 黒川忠広2024「鹿児島県における中・近世出土の挽き白類について」『南九州城郭研究』第4号
- 池畑耕一1991「英祿駅考」『交流の考古学 三島格会長古希記念肥後考古』第8号
- 喜界町教育委員会2018『崩り遺跡1』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書16
- (公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2025『諏訪ノ前遺跡』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(60)
- 知覧町教育委員会2000『厚地松山製鉄遺跡』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書9
- 都城市教育委員会2023『尾平野製鉄遺跡』都城市文化財調査報告書152

写真図版



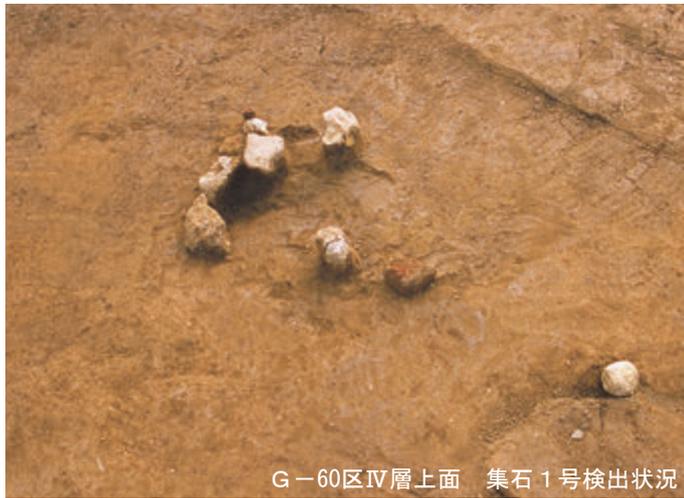
遺跡東側から阿久根港を臨む



遺跡北西側から阿久根城を臨む

遺跡遠景

図版 2



G-60区IV層上面 集石 1号検出状況



G・H-61区IV層上面 集石 2号検出状況



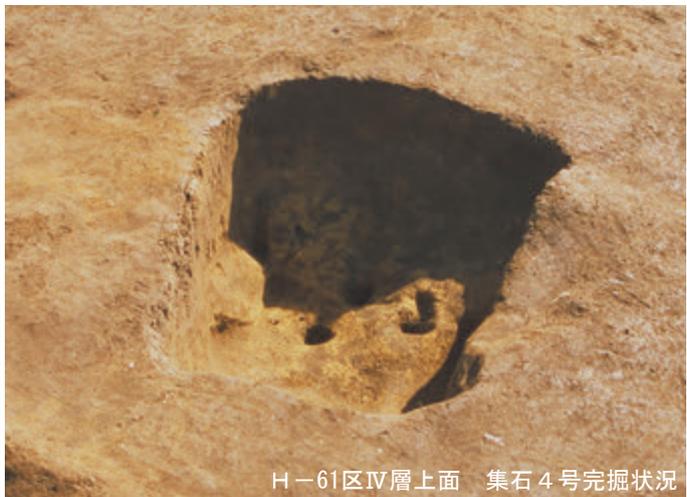
G-61区IV層上面 集石 3号検出状況



H-61区IV層上面 集石 4号検出状況



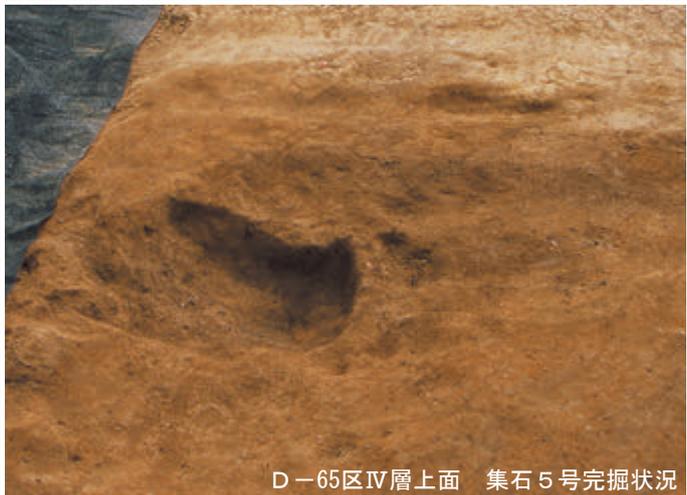
H-61区IV層上面 集石 4号調査状況



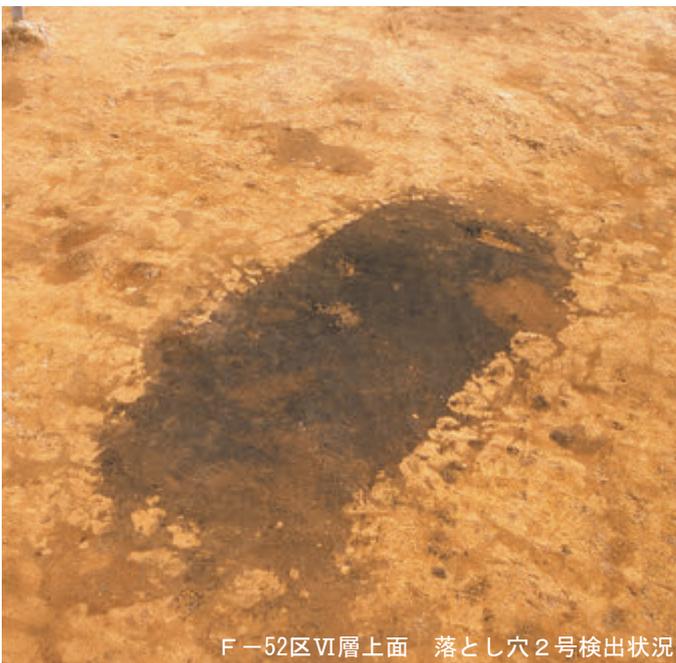
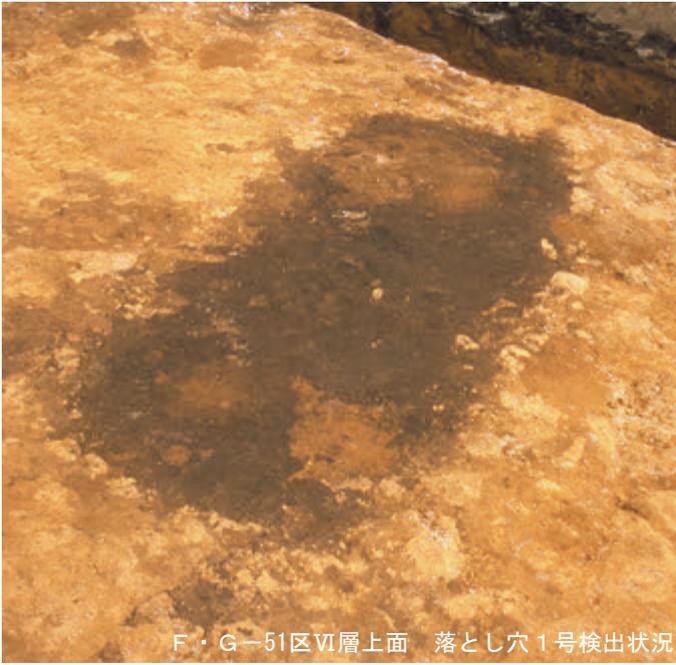
H-61区IV層上面 集石 4号完掘状況



D-65区IV層上面 集石 5号検出状況



D-65区IV層上面 集石 5号完掘状況



図版 4



G-61区IV層上面 土坑1号内土器出土状況



G-61区IV層上面 土坑1号検出状況



G-61区IV層上面 土坑1号断面状況



G-61区IV層上面 土坑1号調査状況



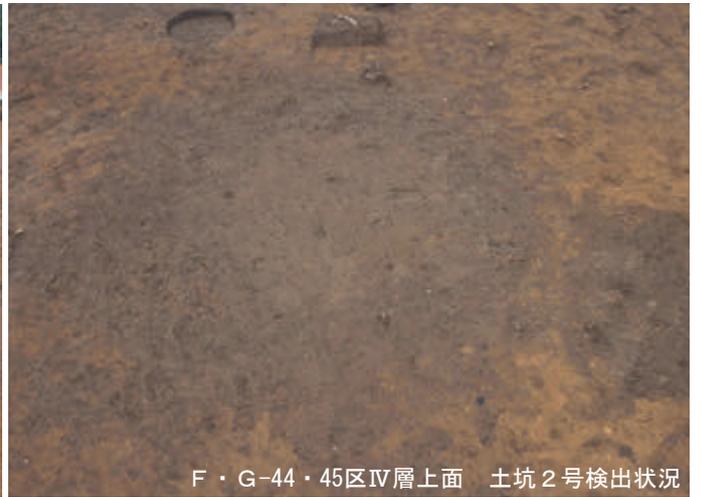
G-61区IV層上面 土坑1号完掘状況



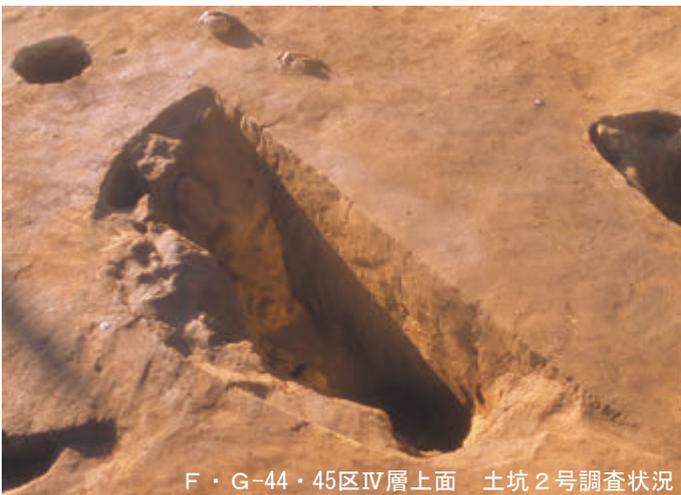
D ~ I-44 ~ 48区 III層上面 遺構検出状況



F・G-44・45区IV層上面 掘立柱建物跡1号検出状況



F・G-44・45区IV層上面 土坑2号検出状況



F・G-44・45区IV層上面 土坑2号調査状況



F・G-44・45区IV層上面 掘立柱建物跡1号完掘状況

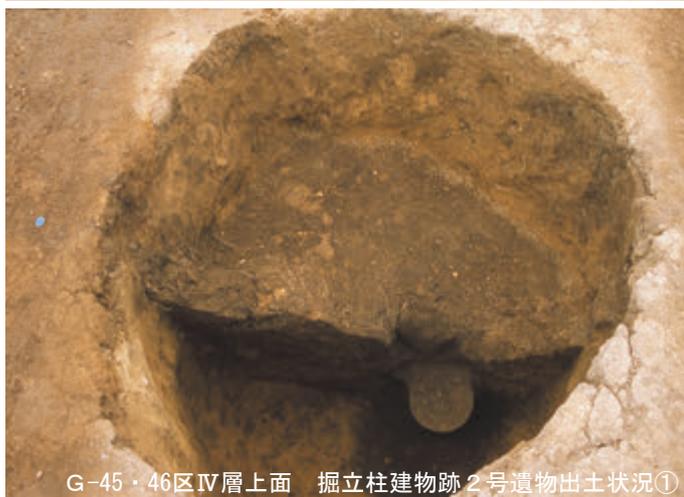
中世の遺構①



G-45・46区IV層上面 掘立柱建物跡2号内土坑3号断面状況



G-45・46区IV層上面 掘立柱建物跡2号内土坑3号完掘状況



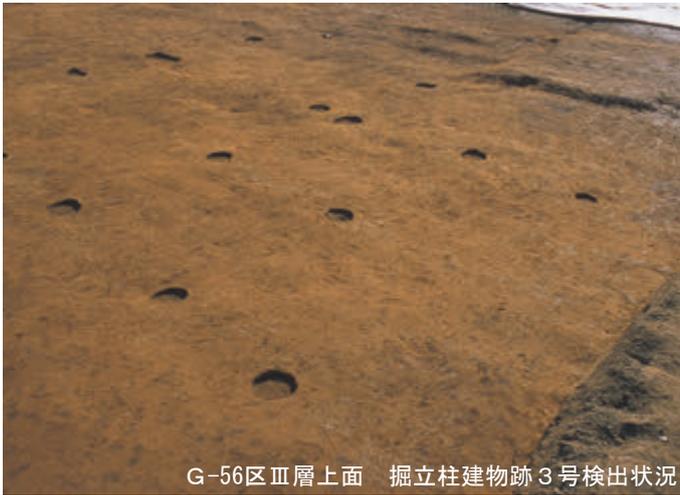
G-45・46区IV層上面 掘立柱建物跡2号遺物出土状況①



G-45・46区IV層上面 掘立柱建物跡2号遺物出土状況②



G-45・46区IV層上面 掘立柱建物跡2号完掘状況



G-56区Ⅲ層上面 掘立柱建物跡3号検出状況



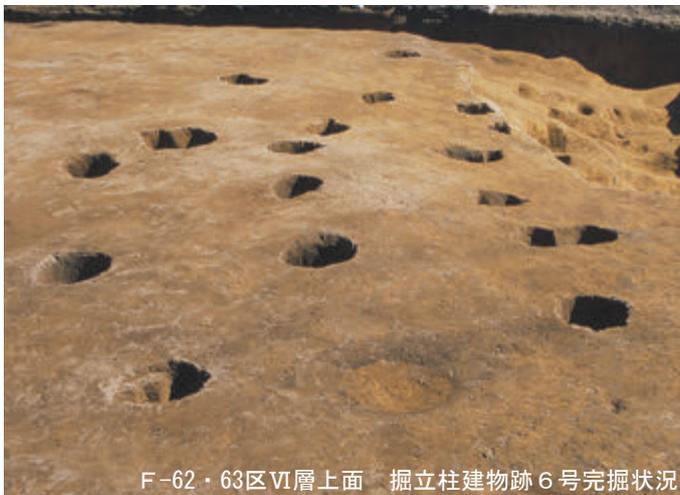
G-56区Ⅲ層上面 掘立柱建物跡3号柱痕検出状況①



G-56区Ⅲ層上面 掘立柱建物跡3号柱痕検出状況②



G-56区Ⅲ層上面 掘立柱建物跡4号検出状況



F-62・63区Ⅵ層上面 掘立柱建物跡6号完掘状況



F-65区Ⅵ層上面 掘立柱建物跡7号検出状況



F-65区Ⅵ層上面 掘立柱建物跡8号完掘状況



D・E-69・70区Ⅵ層上面 掘立柱建物跡10号完掘状況



E-66区Ⅲ層上面 竪穴建物跡 1号検出状況



E-66区Ⅲ層上面 竪穴建物跡 1号遺物出土状況



E-66区Ⅲ層上面 竪穴建物跡 1号断面状況



E-66区Ⅲ層上面 竪穴建物跡 1号完掘状況



E・F-44区Ⅲ層上面 土坑4号完掘状況



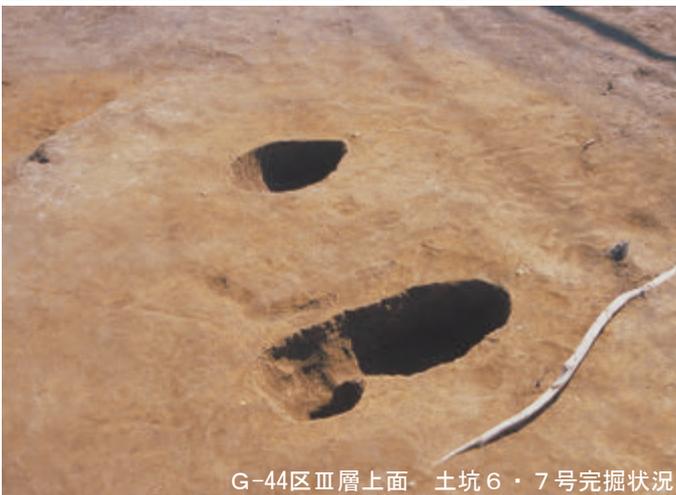
E-44区Ⅲ層上面 土坑5号検出状況



E-44区Ⅲ層上面 土坑5号半掘状況



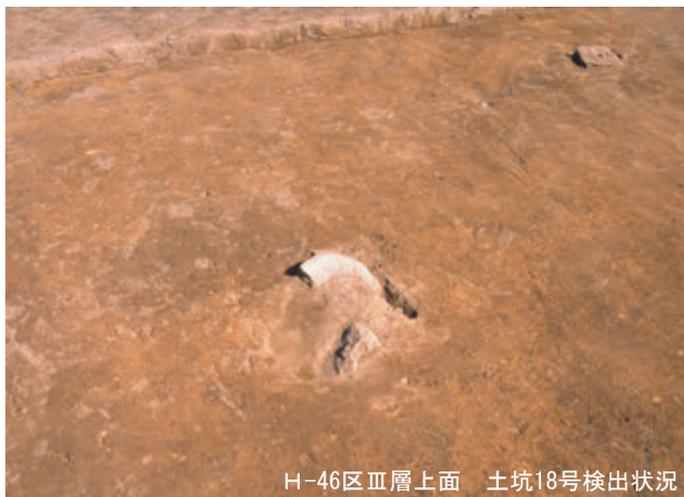
E-44区Ⅲ層上面 土坑5号完掘状況



G-44区Ⅲ層上面 土坑6・7号完掘状況



H-44区Ⅲ層上面 土坑8号完掘状況



H-46区Ⅲ層上面 土坑18号検出状況



H-46区Ⅲ層上面 土坑18号遺物出土状況



H-46区Ⅲ層上面 土坑18号調査状況



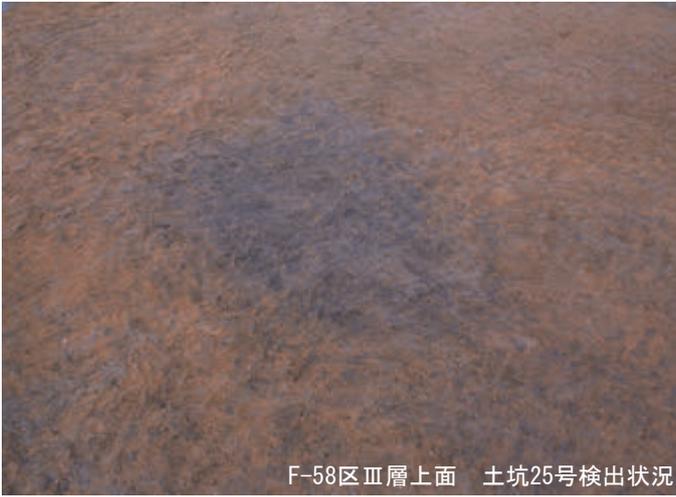
I-45・46区Ⅲ層上面 土坑19号検出状況



I-45・46区Ⅲ層上面 土坑19号断面状況



I-45・46区Ⅲ層上面 土坑19号完掘状況



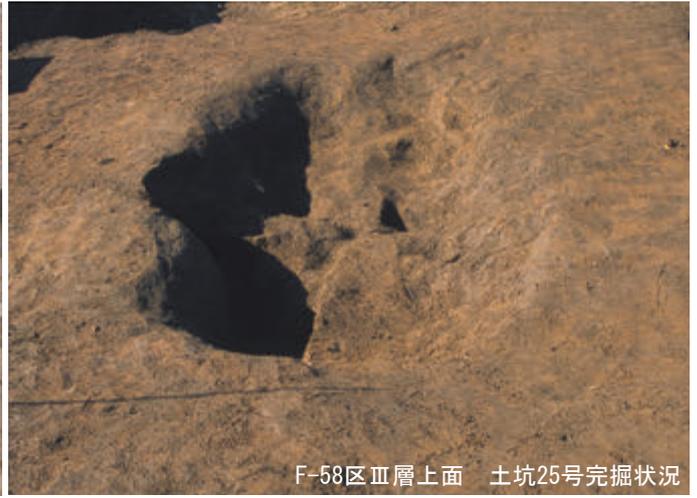
F-58区Ⅲ層上面 土坑25号検出状況



F-58区Ⅲ層上面 土坑25号断面状況（東から）



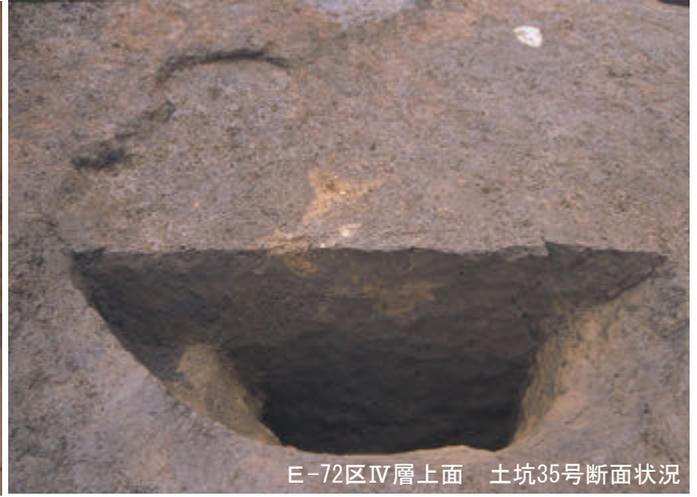
F-58区Ⅲ層上面 土坑25号断面状況（南から）



F-58区Ⅲ層上面 土坑25号完掘状況



E-72区Ⅳ層上面 土坑34号断面状況



E-72区Ⅳ層上面 土坑35号断面状況

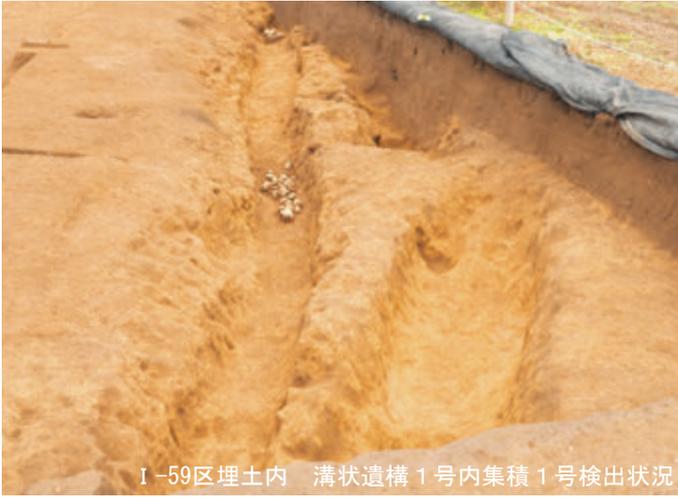


E-72区Ⅳ層上面 土坑36号断面状況（上）

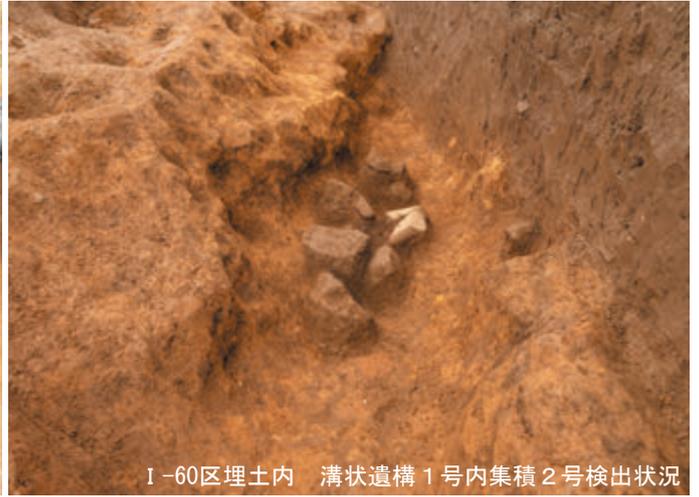


E-72区Ⅳ層上面 土坑36号断面状況（下）





I-59区埋土内 溝状遺構1号内集積1号検出状況



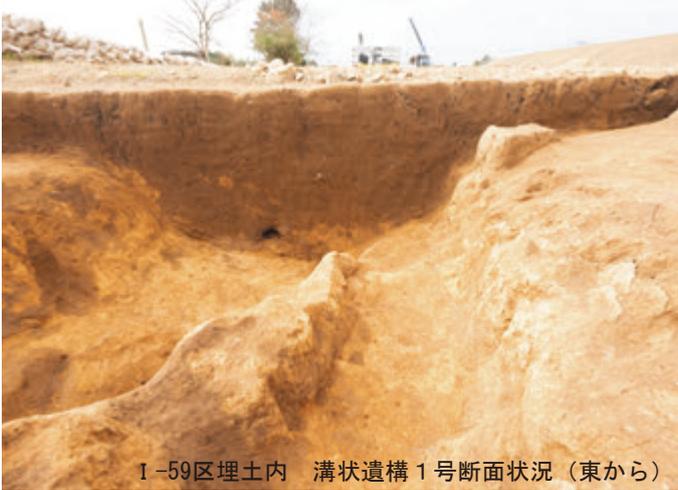
I-60区埋土内 溝状遺構1号内集積2号検出状況



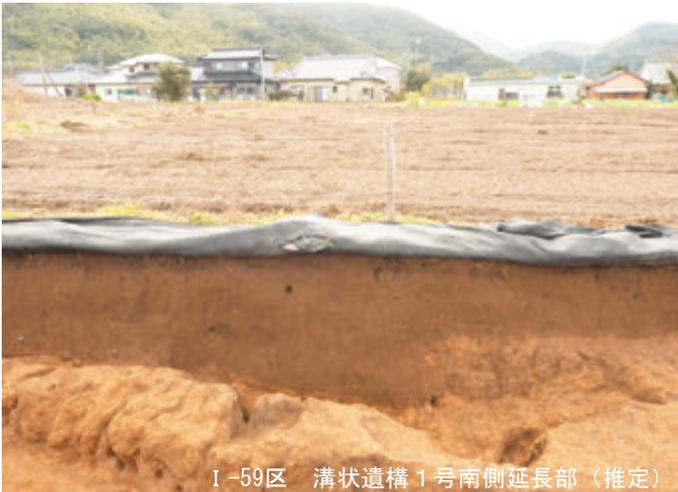
H-53区埋土内 溝状遺構1号内石列1検出状況



I-59・60区埋土内 溝状遺構1号内石列2検出状況



I-59区埋土内 溝状遺構1号断面状況(東から)



I-59区 溝状遺構1号南側延長部(推定)



H・I-51~55区 溝状遺構1号完掘状況



H・I-52~55区Ⅲ層上面 溝状遺構2号検出状況①



H・I-56・57区Ⅲ層上面 溝状遺構2号検出状況②



H・I-52~55区Ⅲ層上面 溝状遺構2号完掘状況①



H・I-56・57区Ⅲ層上面 溝状遺構2号完掘状況②



H・I-51~55区Ⅲ層上面 溝状遺構1・2号完掘状況

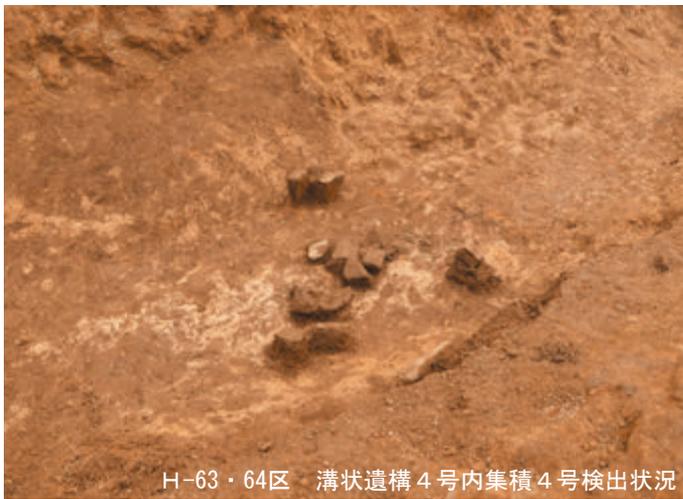
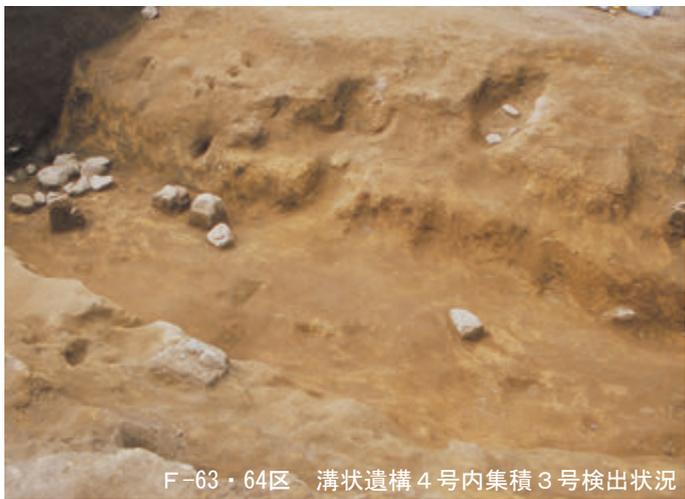


H・I-58・59区Ⅲ層上面 溝状遺構3号検出状況



H・I-58・59区Ⅲ層上面 溝状遺構3号完掘状況

中世の遺構⑩

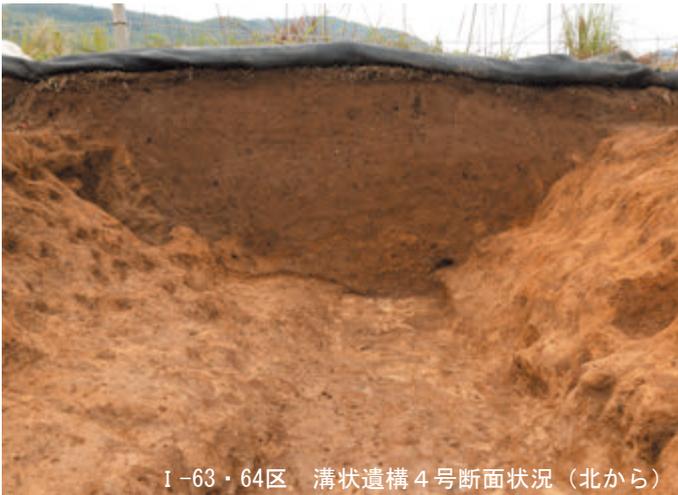




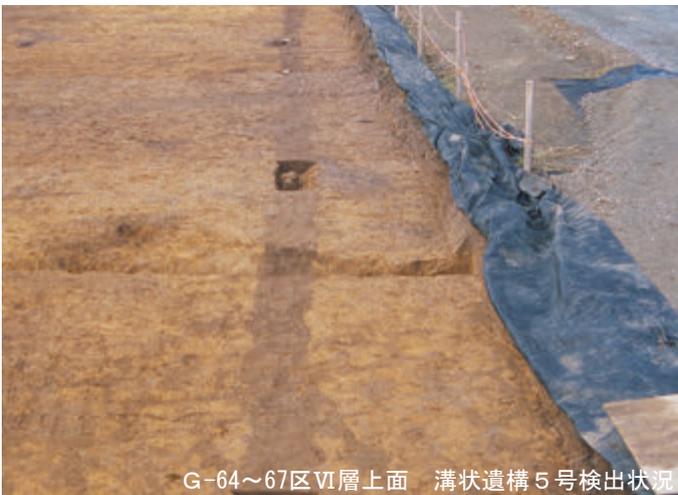
G-63・64区 溝状遺構4号断面状況(南から)



G~I-63・64区 溝状遺構4号完掘状況



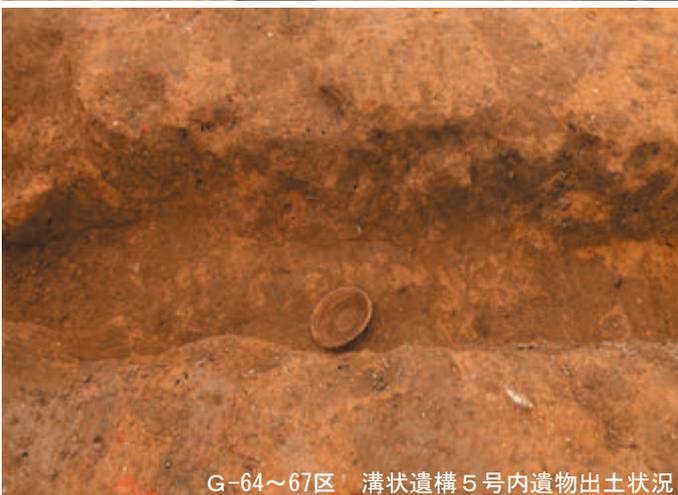
I-63・64区 溝状遺構4号断面状況(北から)



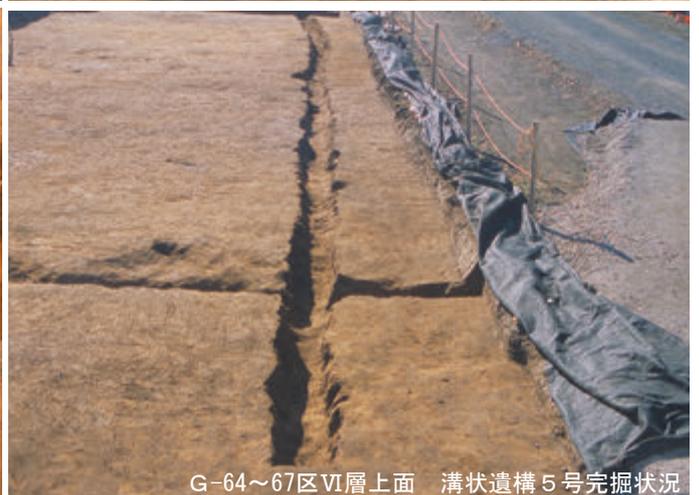
G-64~67区VI層上面 溝状遺構5号検出状況



G-64~67区VI層上面 溝状遺構5号断面状況



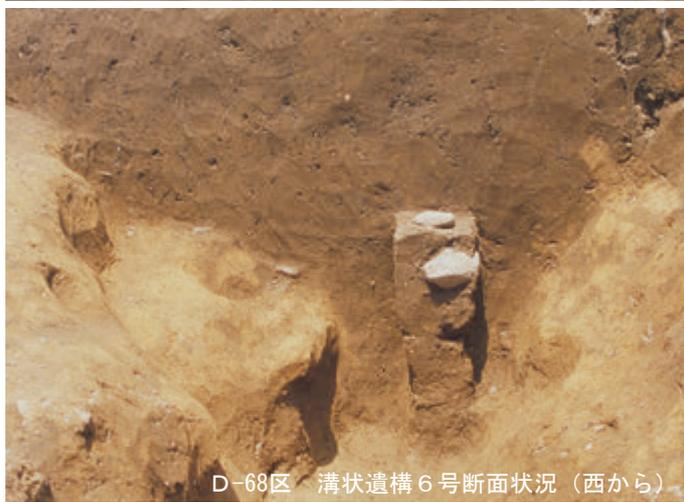
G-64~67区 溝状遺構5号内遺物出土状況



G-64~67区VI層上面 溝状遺構5号完掘状況



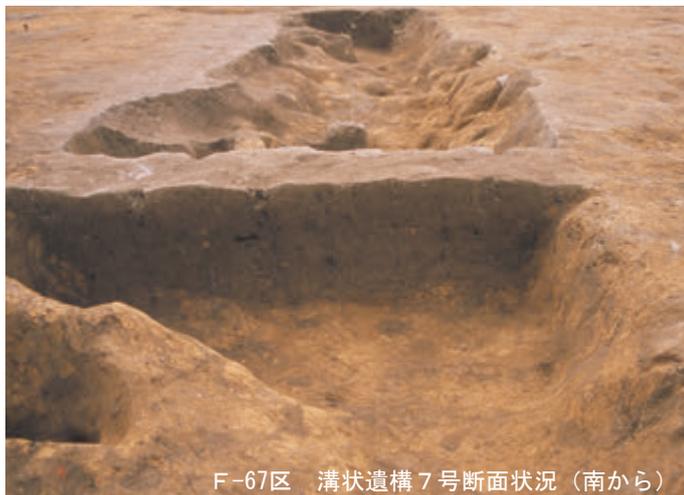
D～F-67～69区VI層上面 溝状遺構6・7号周辺遺構検出状況



D-68区 溝状遺構6号断面状況（西から）



D・E-67～69区VI層上面 溝状遺構6号完掘状況



F-67区 溝状遺構7号断面状況（南から）



E～G-67・68区VI層上面 溝状遺構7号完掘状況



D～F-65～69区VI層上面 ピット完掘状況

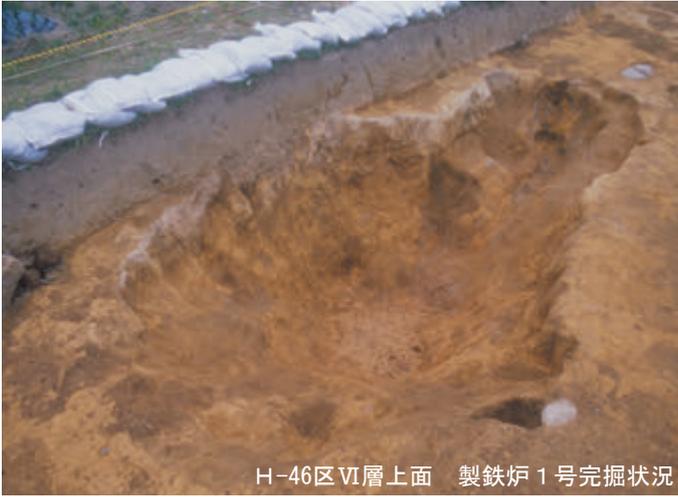


D～H-69～74区 ピット完掘状況

ピット完掘状況



製鉄関連遺構①



H-46区VI層上面 製鉄炉 1号完掘状況



D-47区VI層上面 製鉄炉 2号完掘状況



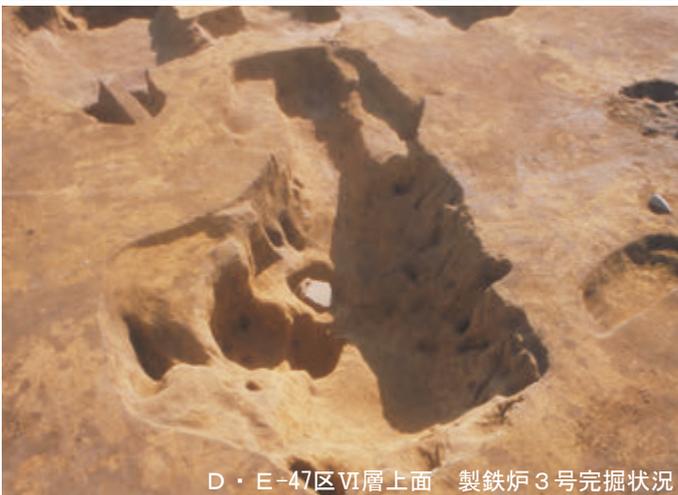
D-47区VI層上面 製鉄炉 2号断面状況



D・E-47区VI層上面 製鉄炉 3号調査状況



D・E-47区VI層上面 製鉄炉 3号断面状況



D・E-47区VI層上面 製鉄炉 3号完掘状況



D-47区VI層上面 製鉄炉 4号完掘状況



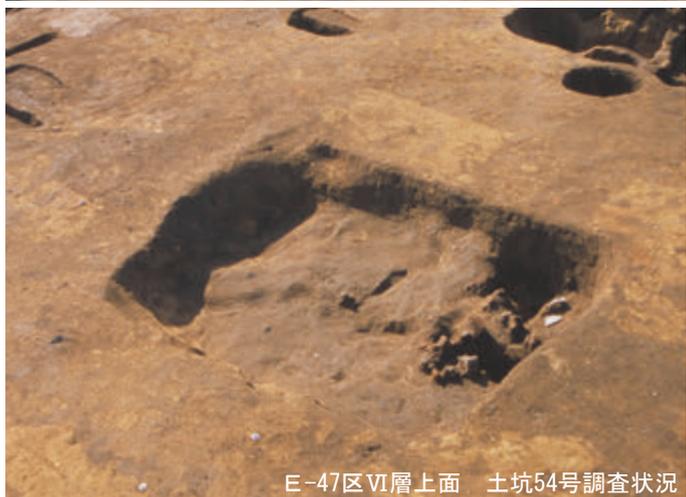
D・E-47区VI層上面 土坑51号断面状况



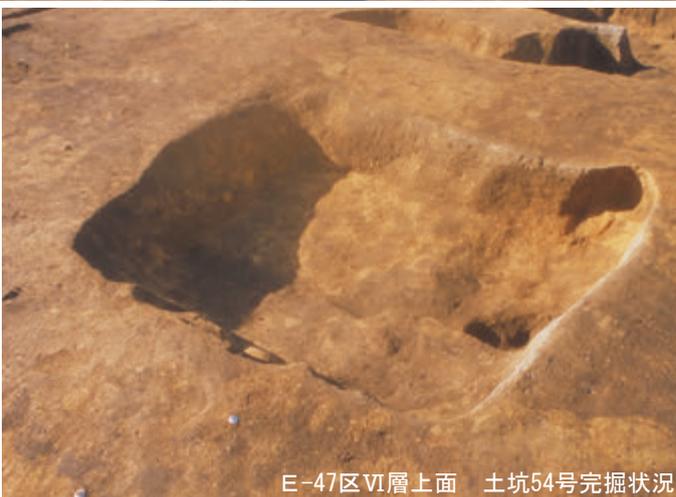
D・E-47区VI層上面 土坑51号完掘状况



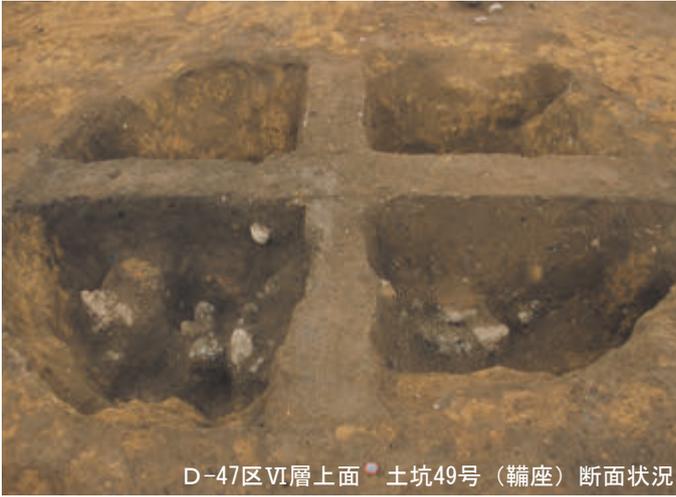
D・E-47区VI層上面 土坑51号および鞆座完掘状况



E-47区VI層上面 土坑54号調査状况



E-47区VI層上面 土坑54号完掘状况



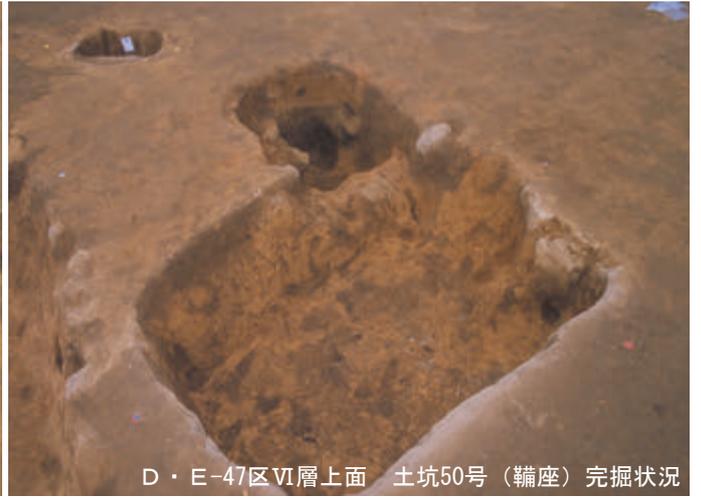
D-47区VI層上面 土坑49号(鞞座)断面状況



D-47区VI層上面 土坑49号(鞞座)完掘状況



D・E-47区VI層上面 土坑50号(鞞座)断面状況



D・E-47区VI層上面 土坑50号(鞞座)完掘状況



D・E-49~51区VI層上面 炉跡・ピット群完掘状況





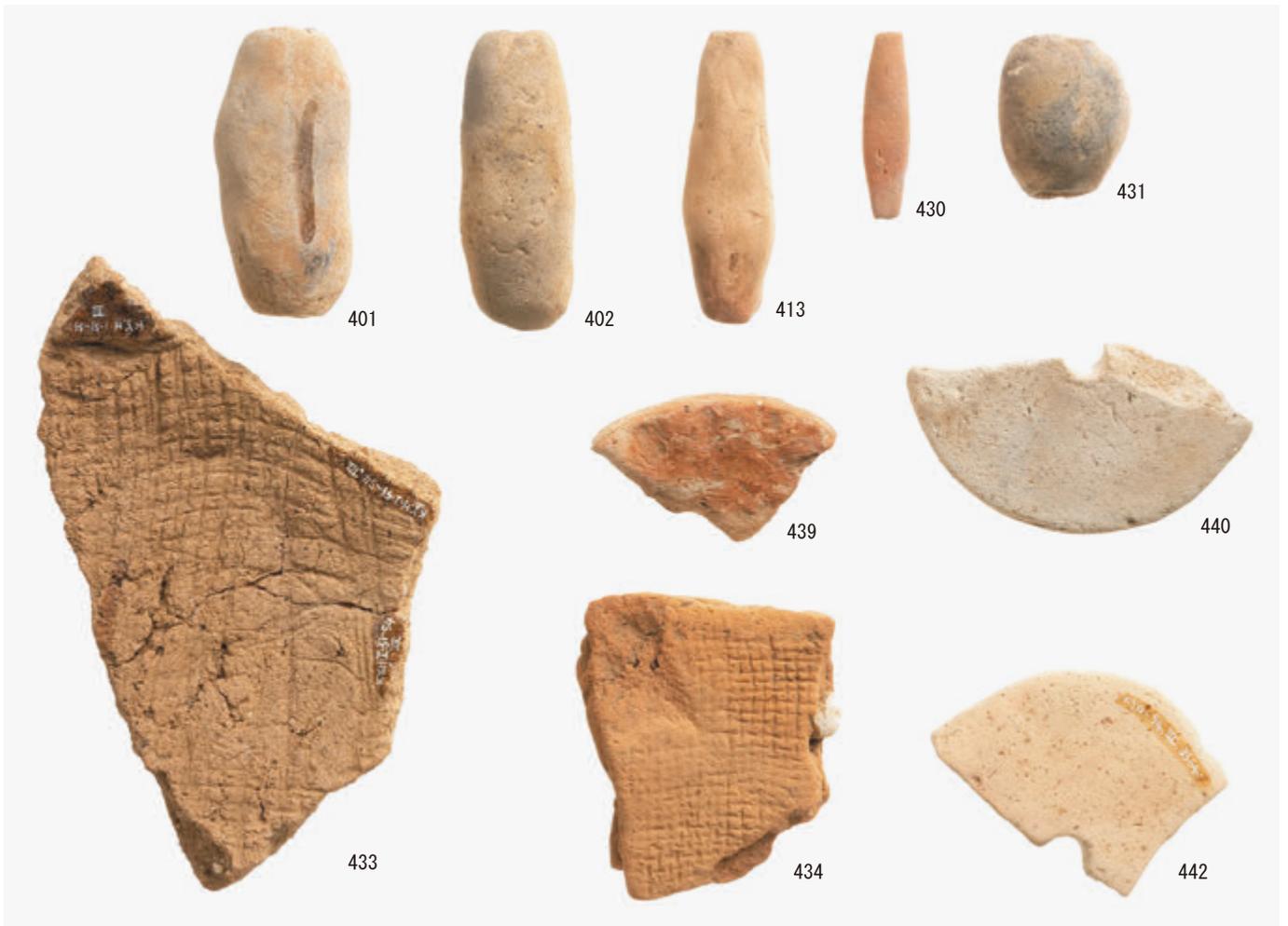
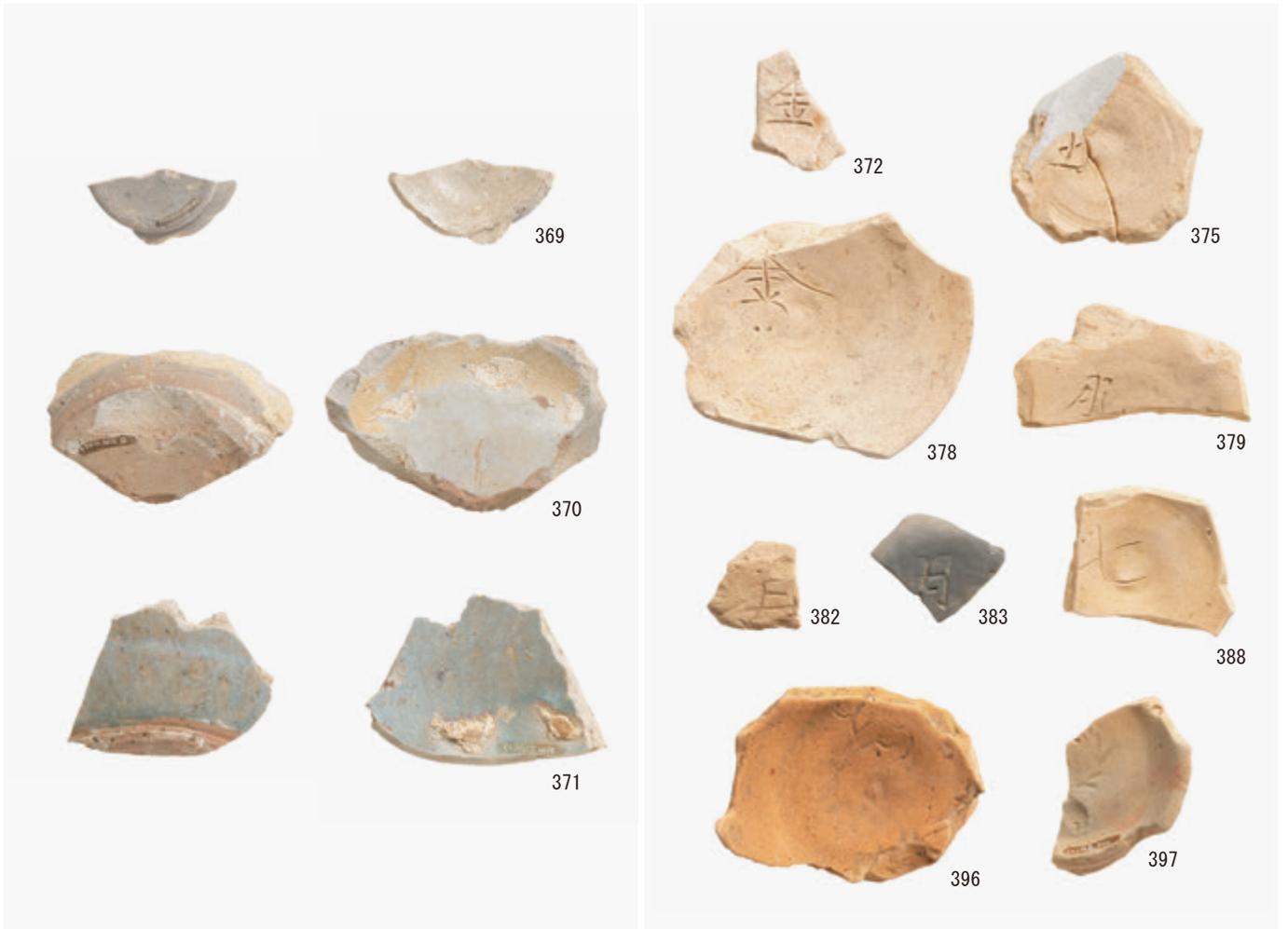
縄文時代の遺物②





縄文時代の遺物④

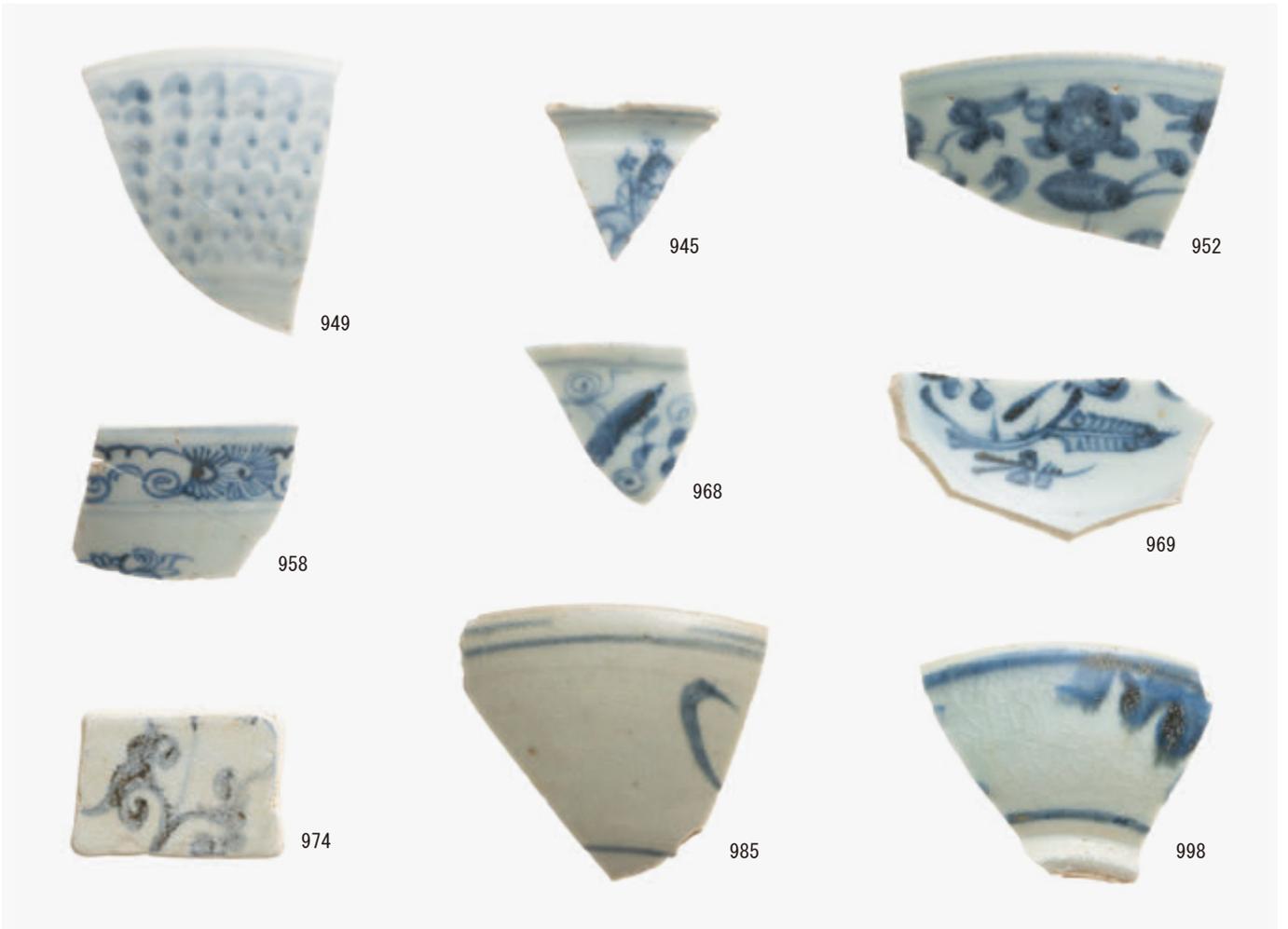


















公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（61）
南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北山遺跡 2

発行年月 2025年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷 株式会社 あすなろ印刷
〒890-0041 鹿児島県鹿児島市城西2-2-36-205
TEL 099-214-3757 FAX 099-214-3758



鹿児島県